

改訂・沖縄県の 絶滅のおそれのある 野生生物 第3版

菌類編・植物編

レッドデータおきなわ



Threatened Wildlife in Okinawa, Third Edition (Fungi and Plants)
— Red Data Okinawa —

🌀 沖縄県

改訂・沖縄県の
絶滅のおそれのある
野生生物 第3版

菌類編・植物編

レッドデータおきなわ

Threatened Wildlife in Okinawa, Third Edition (Fungi and Plants)
- Red Data Okinawa -



沖縄県

発刊にあたって



沖縄県は、亜熱帯海洋性気候の下、美しいサンゴ礁が発達した青い海と多様な野生生物が生息・生育する緑豊かな160の島々から構成されており、他の都道府県とは異なる固有の自然環境を有しています。

この恵み豊かな自然環境を保全し、次世代へ引き継ぐことは、今を生きる私たちに課せられた責務であります。

現在、環境省において、西表石垣国立公園の拡張や、やんばる国立公園の指定と併せ、同地域の世界自然遺産登録に向けた作業を進めており、平成30年夏頃に開催される世界遺産委員会において、登録の可否が決定する見込みです。

一方、沖縄県の自然環境については、以前から、外来生物が生態系にとって脅威となっていたほか、開発等による希少種の絶滅などが懸念されていたことから、これらの保護の必要性を広く県民に知らせることを目的として、平成8年に「沖縄県版レッドデータブック」を策定し、平成17年に第1回目の改訂を行ったところであります。

今回の改訂は、環境省のレッドリスト第4次改訂（平成24年）や、IUCN（国際自然保護連合）レッドリストの改訂（平成29年）など、国内外における近年の動向を踏まえつつ、分子系統学に基づく分類の整理や現地調査の結果など、最新の知見に基づき対象種の選定及びランク付けを行い、これまでの菌類100種を85種に、植物846種を938種にリストアップいたしました。

今後も、沖縄県の自然環境を県民の宝、そして国民の宝として受け継いでいくために、本誌が、国内外の多くの皆様に情報提供を行うものとなり、沖縄県の野生生物を保護し、生物多様性を保全する一助となれば幸甚に存じます。

最後に、本誌の作成に当たっては、沖縄県の野生生物に対して専門的な知見を有する多くの関係者の皆様に慎重な検討と評価を行っていただきました。この場を借りて心から感謝申し上げます。

平成30年 3月

沖縄県知事 翁長 雄志



沖縄島北部やんばるの溪流環境

沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(菌類・植物)

亜熱帯気候かつ160もの島々からなる沖縄県の野生生物(菌類・植物)は、沖縄島北部にのみ分布するオリヅルスミレやオキナワヤスデゴケ、西表島固有のハエヤドリトガリツブタケ、モノドラカンアオイ、魚釣島にのみ分布するセンカクオトギリのように、それぞれの島で独自に進化した固有種(固有変種)や分布域の南限であるウバメガシ、また北限のヤエヤマシタン、地史的に興味深い分布を示すウラジロガシなど、きわめて多様な種が知られています。こうした特長を持つ本県の植物は、本来、生育範囲が小さい種や生育数が極めて少ない種も多く、開発や過度の採取により絶滅の危険性が高まっています。

ここでは、本改訂において、沖縄県で絶滅または絶滅のおそれのある種として選定された野生生物(菌類、植物)の概要を示します。

宮古諸島 144種

(うち絶滅3種)

維管束植物 ミヤコジマハナワラビなど 89種
(うち絶滅3種*)

蕨類 イボエシノブゴケ 1種

藻類 インドオオイシソウなど 54種

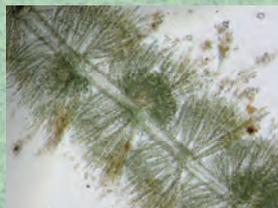
* 本改訂では新たな絶滅種はありません。前回改訂(2006)までに、ソロハギ、トチカガミ、トラノオシダの3種が絶滅種に選定されています。



ミヤココケリンドウ



ミヤコジマハナワラビ



ミナミクロカワモスク



イトシャジクモ

尖閣諸島 43種

維管束植物 センカクオトギリなど 39種

藻類 ヒメカラゴロモなど 4種



センカクオトギリ



南西諸島

鳥島

久米島

東シナ海

硫黄鳥島の諸島区分は、沖縄県史各論編、第1巻自然環境(2015)における自然科学的視点の区分けに準じました。そのため、本県では硫黄鳥島のみ出現する維管束植物3種(マルバニッケイ、カキラン、フユノハナワラビ)は本図の各諸島別集計には加えていません。

疑問とされる分布域は除外しています。

沖縄諸島 681種

(うち絶滅8種 野生絶滅3種)

菌類 テングタケなど 38種

維管束 オキナワセッコクなど 472種

植物 (うち絶滅8種 野生絶滅3種*)

蘚苔類 フチドリコゴケなど 50種

藻類 オキチモズクなど 121種

* 本改訂では新たな絶滅種はありません。前回改訂(2006)までに、ジュンサイ、ソロハギ、ヒメミクリ、ゼンマイ、ヒメウラジロ、トラノオシダ、ウスバシダモドキ、クリハランの8種が絶滅種に、オリヅルスミレ、リュウキュウアセビ、クメジマツツジの3種が野生絶滅種にそれぞれ選定されています。



テングタケ



アラゲウスベニコップタケ



タチミゾカシ



ヒメキセワタ



オキナワテンナンショウ



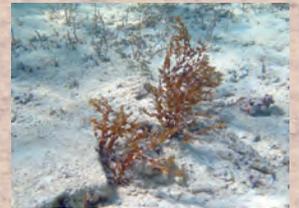
オキナワセッコク



フガゴケ



オキチモズク



ヤバネモク

八重山諸島 621種

(うち絶滅2種)

菌類 キアミズキンタケなど 44種

維管束 イリオモテランなど 433種

植物 (うち絶滅2種*)

蘚苔類 エビスゴケなど 64種

藻類 ヤエヤマカワモズクなど 80種

* 本改訂では新たな絶滅種はありません。前回改訂(2006)までに、ソロハギ、ジンヤクランの2種が絶滅種に選定されています。



イリオモテセミタケ



ヒメツルアダン



マツムラソウ



タイワンエビネ



イリオモテウロコゼニゴケ



チャイロカワモズク

大東諸島 40種

維管束 ヒメタニワタリなど 38種

植物

藻類 ハダシシャジクモなど 2種



ヒメタニワタリ



ダイトウワダン

硫黄島、

伊平屋島

沖縄諸島

伊是名島

伊江島

粟国島

渡名喜島

沖縄島

座間味島

渡嘉敷島

北大東島

南大東島

大東諸島

沖大東島

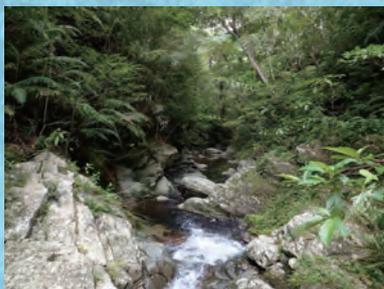
沖縄県の自然環境(陸域～沿岸域)

野生生物はさまざまな自然環境に適応してすみわけて生活しています。森林には多くの野生生物が生息・生育していますが、多くの島嶼からなる本県では沖縄島や宮古島、石垣島、西表島など地域によっても森林を形づくる植生環境やすんでいる野生生物が異なるなどの特徴が見られます。

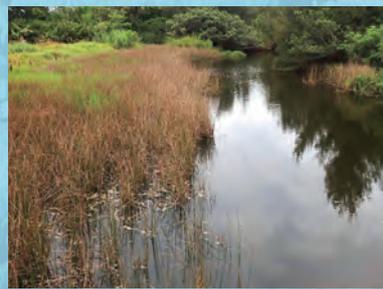
また、山・川・海はそれぞれ密接につながり、川と海を行き来する両側回遊性の生物が多いことも本県の特徴の一つとなっています。河川を通して運ばれた陸域の栄養分は、河口や干潟、沿岸域の自然環境が形成されるために必要なものであり、多様な生物からなる生態系をささえています。

陸 水【河川・沢・湿地・湧水】

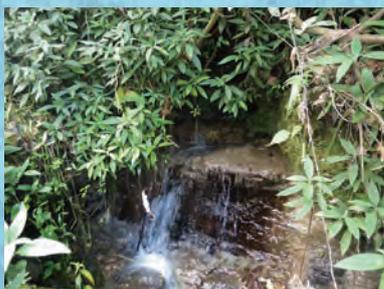
本県の河川の多くは延長がみじかく急勾配となっている。沖縄島北部や石垣島、西表島などの自然度の高い河川や沢では、オキナワイシカワガエルやヨシノボリ類、サワガニ類、植物ではクニガミトンボソウ、カワモズク類などこうした環境を好む多くの生物の生息・生育場所となっている。一方、沖縄島中南部では、人工的な河川が多いものの、自然が残っている地域では、ミナミメダカや台湾キンギョなどが生息している。本県の湿地には、キクザトサワヘビが生息する久米島の溪流・湿地、シギ・チドリ類などの生息地である沖縄島南部や石垣島の湿地・干潟などがあり、その一部はラムサール条約登録されているほか、伊平屋島、池間島、与那国島など各地にも湿地環境が見られ、水鳥をはじめヒメフチトリゲンゴロウ、タヌキアヤメなどの生息・生育地となっている。このほか、沖縄島中南部や宮古島、大東諸島など石灰岩地には洞窟や地下水系の発達が見られ、ウリガーテナガエビなど特有の生物が見られるほか、一部は崖や海岸などで湧出しミヤコサワガニや藻類などの水生生物の生息・生育の場ともなっている。



河川・沢



湿地



湧水



地下水

自然環境の区分は「沖縄県自然環境再生指針」平成27年3月、沖縄県より引用、一部改変
※背景写真は沖縄島北部やんばる地域の森林を撮影

陸 域【森林】

沖縄島北部のやんばる地域や石垣島、西表島の山地の森林には、河川などによる浸食地形が発達し、イタジイ（スダジイ）などの亜熱帯性照葉樹林が広がっており、多様で固有性の高い生態系を形成し多くの野生生物の生育・生息地となっている。高標高地では一部に雲霧林の状態が見られるほか、河川や沢沿いなどの湿潤な場所ではランやシダなどの着生植物や蘚苔類も多く見られる。海岸低地にはアダンやオオハマボウなどが生育するほか、低地から内陸まで広い範囲にアカメガシワ、イジュ、リュウキュウマツなどからなる代償植生が分布する。沖縄島中南部地域や宮古地域においては、昔から農地化や宅地化が進んだことから、主として石灰岩丘陵や石灰岩堤・崖などに森林が残っており、ガジュマル、リュウキュウガキなどの石灰岩地に特有の植生環境が見られる。



沖縄島北部の山地森林



八重山諸島の山地森林



湿潤な森林にみられる着生植物



ガジュマルが生育する石灰岩地の森林

河口・沿岸域【干潟・マングローブ・藻場・サンゴ礁】

砂浜や岩礁、干潟、そして沖合のサンゴ礁に至る環境であり、河川により陸域と繋がっている。河口には、熱帯や亜熱帯に特徴的なマングローブが発達しており、西表島のニッパヤシ、沖縄島のヒルギモドキなど北限種の多いことが特徴である。河口や沿岸に広がる干潟には、多くの渡り鳥がみられるほか、貝類や甲殻類などきわめて多様な底生生物のすみかとなっており重要である。沿岸域は黒潮のため温暖で各地にサンゴ礁の発達がみられる。本県では約 400 種の造礁サンゴが確認されているほか、宮古諸島の八重干瀬や八重山諸島の石西礁湖などでは大規模な離礁も見られる。サンゴ礁は魚類など多くのすみかとなるほか、外洋の高波を和らげる役割もあり、その内側にあるアマモ場などの藻場は幼魚のすみかとなり生態系に重要な役割を果たしている。



干潟



マングローブ



藻場



サンゴ礁

「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（菌類編・植物編）、レッドデータおきなわ」の改訂にあたって

沖縄県は東西 1,000 km（北大東島～与那国島）、南北 400 km（硫黄島～波照間島）の範囲に孤状に点在する 160 余りの島々からなる。沖縄県は面積的には日本全体の 1% に満たないが、亜熱帯海洋性気候・地史・地形・地質・地理的位置など植物相に影響する諸条件が地域ごとに大きく異なるため、多様性・固有性・遺存性の高い植物相を持つことで知られている。

このように特色ある豊富な植物相を持つ沖縄県であるが、近年野生植物の多くの種は絶滅の危機に瀕しており、開発が進んでいる沖縄島や久米島では、既に絶滅した植物種が相当数認められる。小さな島々からなる沖縄県は、わずかな面積の開発でも個々の植物種に深刻な悪影響を与えることが多い。狭い地域で生物多様性が高いと言うことは、個々の種の個体数や生育地の数が少ないことと表裏一体の関係にある。生物多様性を維持しながら、自然と人間が共存してゆくための一助として、本書が作成された。

本書の初版は 1997 年に発行された。改訂版は 2006 年に発行され、環境省版の絶滅危惧種のカテゴリー区分と判定基準を導入した。今回の改訂が 3 版になる。今もなお続々と発見される新種や新記録種を収録しながら、個々の種のランクの見直しを行った。カテゴリー判定により客観性を持たせるため、多くの調査協力者の協力を得ながら数値基準の採用を試みたが、十分には取り入れることができなかった。次回の改訂の重要な課題である。本書は沖縄県全体を対象としているため、地域間での希少性の違いを考慮に入れたランク指定が十分に配慮されているとは言えない。よりきめ細やかな保全対策を策定するためには、島嶼単位あるいは市町村単位のレッドデータブックを作成することも必要だろう。

改訂版から今回の 3 版発行までの間に、本県ではやんばる国立公園と慶良間諸島国立公園が新設され、西表石垣国立公園や沖縄海岸国定公園が拡充されるなど、野生生物の生育地の保全がある程度保証されることになった。沖縄県の一部の島嶼は、その貴重な生物多様性と生態系が評価され、世界自然遺産の候補地にもなっている。候補地以外の島々を含めて、島々の自然環境と生物多様性のより一層の保全が求められている。本書が効果的な自然保護対策に少しでも役立てば幸いである。

沖縄県版レッドデータブック編集委員会 横田 昌嗣（琉球大学理学部教授）

改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版（菌類編・植物編）

目 次

発刊にあたって	
沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（菌類・植物）	1
沖縄県の自然環境（陸域～沿岸域）	3
掲載種図版	5
「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（菌類編・植物編）、レッドデータおきなわ」の改訂にあたって	54
1. 沖縄県の自然とレッドデータブック	
1. 1 沖縄県の自然環境について	55
(1) あらまし	55
(2) 沖縄県における野生動植物とその現状	55
1. 2 改訂・沖縄県版レッドデータブック 第3版について	57
(1) 背景	57
(2) 本県レッドデータブック改訂の目的	58
(3) 改訂第3版の作成基本方針	58
(4) 沖縄県版レッドデータブックの意義	58
(5) 改訂・沖縄県版レッドデータブック第3版 作成体制	59
(6) 沖縄県版レッドデータブックの構成内容	60
(7) 改訂第3版のカテゴリー	60
(8) 今後の課題	66
2. 選定方法	
2. 1 はじめに	67
2. 2 評価対象範囲の設定	67
2. 3 掲載種の選定手順	68
2. 4 菌類編・植物編の作成にあたり	68
3. 選定結果	
3. 1 掲載種数	72
3. 2 掲載種リスト	74
3. 3 菌類	91
3. 4 維管束植物	139
3. 5 蘚苔類	527
3. 6 藻類	568
4. 初版－改訂第3版・カテゴリー対照表	668
5. 本書の作成に協力いただいた方々	689
6. 掲載種索引	691

1. 沖縄県の自然とレッドデータブック

1. 1 沖縄県の自然環境について

(1) あらまし

沖縄県は、日本列島の南西部の南西諸島に位置しており、160（面積 0.01km² 以上）の島々からなる島嶼県である。南西諸島は、北および東は種子島から奄美大島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島を経て南は波照間島、西は与那国島まで連なる琉球列島と、大東諸島および尖閣諸島から構成されており、このうち、沖縄県は琉球列島の南半分を占める沖縄諸島と先島諸島（宮古諸島と八重山諸島が含まれる）、大東諸島および尖閣諸島から成り立っている。沖縄県の総面積は約 2,281 km² であり、このうち沖縄島が県全体の約 53%（1,208 km²）を占めており、西表島、石垣島、宮古島、久米島を加えた 5 島が全体の約 85%を占める。本県の気候は、亜熱帯海洋性気候に属し温暖多湿であり、月平均気温が 20℃を超える月は 8～9 ヶ月に及び年間の気温差も小さいなど、国内の他の地域とは異なる特徴を有している。年間の降水量は約 2,000mm を超えて多いが、梅雨時期から夏季にかけて少雨である年には、しばしば渇水を生じることもある。台風の接近数が多いことも本県に特徴的である。

沖縄県の島々のうち、沖縄島や伊平屋島、久米島、石垣島、西表島などの山地が発達した島々では、イタジイ（スタジイ）やオキナワウラジロガシ、リュウキュウナガエサカキなどの常緑広葉樹林が生育する森林が広がり、沢や河川などの水系も発達している。沖縄県の最高峰は石垣島の於茂登岳の 526m であり、高標高の山岳はみられないものの、標高 400m 前後を超える場所では雲霧林やそれに類した環境も見られる。沖縄島の石灰岩地域では、常緑広葉樹のガジュマルやアマミアラカシ、クスノハカエデが多く見られるなど、地質によっても植生が異なっている。宮古島や波照間島など比較的平坦な島々では、ガジュマルやオオハマボウ、ハスノハギリなどの隆起石灰岩地や海岸沿いに特徴的な森林が見られるほか、南・北大東島ではビロウ（ダイトウビロウ）が優占するなど、地域的にも多様な植生環境が見られる。また、本県では石灰岩地を中心に地下水系が発達しており、600 箇所以上の鍾乳洞の存在することが明らかとなっている。

沿岸域については、外洋に浮かぶ大東諸島や尖閣諸島をのぞいた多くの島々でサンゴ礁やアマモ類など海藻場の発達が見られるほか、河口や内湾が発達する場所では耐塩性のあるオヒルギなどのマングローブ植生や泥地や砂泥地、礫地などさまざまなタイプの干潟環境が形成されている。こうした河口域や沿岸の浅海域では多種のサンゴや海藻類の生育が見られ、魚類や貝類、甲殻類など非常に多種の生物の生活の場となっているなど、世界的に重要な自然環境であることが広く認識されている。

(2) 沖縄県における野生動植物とその現状

沖縄県に多様な野生動植物が生息することは、琉球列島のなりたちも深く関係しており、海洋によって島ごとに隔離された環境や亜熱帯の海洋性気候の影響を受け、それぞれの島々や地域で独自に進化したと考えられる多くの固有種や固有亜種が生息・生育することで多種多様な生物相を創り出している。これらのなかには琉球列島が大陸と陸続きの頃に移動してきたものが、琉球列島の成立の中で島に取り残された遺存種も含まれており、その場合、近縁種に比較してより原始的な形質をもっていたり、由来する大陸ではすでに絶滅しているような種も含まれており、学術的にも非常に貴重である。

しかしながら、人が生活活動を営む上でやむをえず土地の改変等の行為を行う際は、野生動植物の生息・生育地を縮小・分断させたり、減少させるなどの影響を少なからず引き起こしている。また、世界規模での経済交流の活発化にともない、本県でも外来生物の侵入・定着する危険性が增大しており、生態系の攪乱が危惧されていることに加え、一部のマニア等による過度な採取行為も本県の自然環境にとって脅威となっている。このほか、2016 年には石垣島と西表島の間に位置する石西礁湖で海水温上昇による白化現象に起因して 7 割のサンゴが死滅するなど地球規模の環境変化による影響の事例も数多く報告されるようになってきている。島嶼という限られた閉鎖的環境にある本県では、個々の影響要因が野生動植物や生態系に与える

インパクトの程度が大きくなりがちである。こうした点を踏まえ野生動植物の保護および自然生態系の保全を図ることが、ひきつづき喫緊の課題となっている。

前回改訂までに、オリヅルスミレやゼンマイなど 13 種の維管束植物が絶滅種または野生絶滅種に選定された。今回改訂で新たに絶滅種または野生絶滅種に選定された種は無いものの、絶滅危惧 I 類（IA 類や IB 類を含む）などの上位のカテゴリーに判定された種は少なくとも、本県の菌類及び植物の現状は予断を許さない状況が継続していると考えられる。

なお、被子植物系統分類グループ（APG）は、DNA の塩基配列にもとづく分子系統学により、1998 年に新たな被子植物の分類体系を示した。その後、改訂をかさね、近年はこの維管束植物の系統樹が多く支持されるようになってきている。本改訂においては、諸々の制約を考慮したうえで可能なかぎり最新の分類等の知見に基づく検討を行っていただいた。

<参考文献>

- 青木 久・大城逸朗ほか, 2015. 地誌. “沖縄県史 各論編第 1 巻 自然環境”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 139-236.
- 安座間安史・伊澤雅子ほか, 2015. 陸域の動物. “沖縄県史 各論編第 1 巻 自然環境”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 573-701.
- 安溪遊地・池原直樹ほか, 2015. 陸域の植物. “沖縄県史 各論編第 1 巻 自然環境”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 415-572.
- 池原貞雄, 1981. 東洋のガラパゴス. “琉球列島の自然史”, 木崎甲子郎(編), 築地書館, 東京, 86-98.
- 池原貞雄, 1984. 動物. “全国大会記念誌 沖縄の生物”, 沖縄生物教育研究会, 那覇, 33-37.
- 石島 英・伊志嶺安進ほか, 2015. 気象・海象. “沖縄県史 各論編第 1 巻 自然環境”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 61-138.
- 沖縄県環境部自然保護・緑化推進課, 2015. 平成 26 年度沖縄島北部地域生態系保全事業(マングース対策事業)報告書. 沖縄県環境部自然保護・緑化推進課, 那覇, 198pp.
- 沖縄県企画部統計課, 2016. 平成 28 年沖縄県勢要覧. 沖縄県企画部統計課, 那覇, 12pp.
- 環境省自然環境局自然環境計画課, 2017. 西表石垣国立公園 石西礁湖のサンゴ白化現象の調査結果について. 平成 29 年 1 月 10 日報道発表資料, <http://www.env.go.jp/press/103439.html>.【平成 29 年 2 月 20 日閲覧】
- 亀田勇一・平野尚浩, 2016. 奄美群島における陸産貝類の多様化パターンと系統地理. “奄美群島の自然史学”, 水田 拓(編著), 東海大学出版部, 神奈川, 57-76.
- 財団法人日本気象協会沖縄支店(編), 1995. 沖縄の気象暦. 財団法人日本気象協会沖縄支店, 那覇, 134pp.
- 当山昌直, 2015. 総論. “沖縄県史 各論編第 1 巻 自然環境”, 沖縄県教育委員会, 那覇, 1-60.
- 目崎茂和, 1981. 島の地形. “琉球列島の自然史”, 木崎甲子郎(編), 築地書館, 東京, 40-59.
- 安間繁樹, 2001. 陸域列島 生物の多様性と列島のおいたち, 東海大学出版会, 東京, 195pp.
- 琉球大学 21 世紀 COE プログラム編集委員会(編), 2006. 美ら島の自然史 サンゴ礁島嶼系の生物多様性. 東海大学出版会, 神奈川, 435pp.
- 邑田 仁・米倉浩司, 2013. 維管束植物分類表, 北隆館, 東京, 213pp.

1. 2 改訂・沖縄県版レッドデータブック 第3版について

(1) 背景

世界的に地球環境の危機が叫ばれており、現在は1年間で約4万種が絶滅しつつあると推定されている(Myers, 1979)。熱帯林の減少を始め生育・生息地の破壊や改変等、野生生物への配慮を欠いた人間の行動が、この大規模な種の絶滅を引き起こしている。いったん絶滅してしまった種は、もはや人間の手で再生することは不可能である。

種の絶滅の防止は、人類にとって地球の生態系を守るため緊急課題であり、豊かな野生生物相を保護し、生育・生息地を次世代に引き継いでいくことは、私たちに課された重大な責務だと考える。そのことから種の絶滅を防ぐには、まず、絶滅のおそれがある種の現状を的確に把握する必要がある。

IUCN(国際自然保護連合: International Union for Conservation of Nature and Natural Resources)は、世界的な規模で絶滅のおそれのある動植物の種を選定し、その生育・生息状況等を明らかにした資料を1966年に作成した。これがいわゆるレッドデータブックといわれるものである。

このレッドデータブックは、国際的に野生生物の保護を取り決めたワシントン条約や各国の保護政策の基礎資料として広く利用されている。IUCNは絶滅のおそれのある種の見直しを行いレッドリストとして継続的に公表しており、上位カテゴリーには2016年2月時点で動物及び植物それぞれ1万種を超え、合計で23,928種の野生動植物が絶滅危惧種に選定されている。

我が国では、野生生物を人為的に絶滅させないために絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解度を広める必要があることから、環境省では、1986年より「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」を実施し、その結果をレッドデータブック「日本の絶滅のおそれのある野生生物脊椎動物編」、「同無脊椎動物編」として1991年に取りまとめている。しかし、IUCNで採択された新しいカテゴリーの考え方を踏まえ、また、生育・生息状況や生育・生息環境の変化に関する最新の知見等に基づき、レッドデータブックの見直しを行う必要性を生じたことから、環境省では1995年より、分類群ごとに見直しに着手し、まず、分類群ごとに順次レッドリスト(レッドデータブックの基礎となる日本の絶滅のおそれのある野生生物の種リスト)をとりまとめ公表し、その後、爬虫類・両生類から順次分類群ごとにレッドリスト及びレッドデータブック「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」を公表している。現在、レッドリストは2017年の第4次見直しリスト、レッドデータブックは2014年のレッドデータブック2014が公表されている。

各都道府県では、環境省やIUCNの選定状況を参考としながら、地域性の視点で野生生物の絶滅の危険性を検討し、独自の基準を交えながらレッドデータブックの作成を行っている。沖縄県では、1996年に初版のレッドデータブックである「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(レッドデータおきなわ)」を公表した。初版刊行翌年の1997年には、5か年をかけて、未決定種のカテゴリーに選定された動植物の現状の把握などを目的とした現地調査を実施した。その後、環境省やIUCNの改訂に伴い、沖縄県版レッドデータブックも見直しの機運が高まり、沖縄県は2001年から改訂に着手した。環境省や他の都道府県を参考としながら、沖縄県の地域性や独自性を考慮したカテゴリーの見直しを行ったうえで、改訂第2版として2005年に動物編を、2006年に菌類編・植物編を公表した。沖縄県版レッドデータブックは、生息・生育状況に生じた変化や新たな研究等の知見に応じて、継続的に見直しを行うことが求められている。そのことから沖縄県は2013年より再度の見直しに着手し、2017年に改訂第3版として動物編を刊行し、このほど菌類編・植物編の刊行を行うものである。

亜熱帯に位置する本県の自然環境は、その学術的な重要性や希少性のみならず、その価値は国内外を問わず広く認知・評価されているところである。また、本改訂までの間には、石垣島(2007年)や慶良間諸島(2014年)、沖縄島北部やんばる地域(2016年)が新たに国立公園化を達成するなど、本県の自然環境に対する注目度は日々増している状況である。本誌に掲載される絶滅のおそれのある野生生物は本県の生態系の独自性を示す象徴ともいえ、その生存が図れるように留意することは本県の豊かな自然環境や多様な生物多様性を保全するうえで非常に重要となっている。

（２）本県レッドデータブック改訂の目的

沖縄県においては、亜熱帯海洋性気候のもとでイリオモテヤマネコ、ノグチゲラ、ヤンバルクイナなどの数多くの固有種を含む野生生物が生育・生息しており、学術的にも評価の高い地域として国内外から注目されている。一方、各種開発に伴う森林伐採や土地改変等による自然環境の改変や外来動植物による攪乱等もあいまって野生生物の生息・生育状況は深刻になりつつある。

このような状況を踏まえ、沖縄の野生生物相の現状を把握し、代々引き継いできた野生生物およびその生息・生育地を次世代に引き継ぐための保護対策を講ずる基礎資料として、沖縄県版レッドデータブックの作成を行うこととなった。

（３）改訂第3版の作成基本方針

沖縄県に生息・生育する野生生物から「改訂・沖縄県版レッドデータブック第3版」の掲載種の選定を行った。改訂の基本方針として、本改訂では生息・生育状況に生じた変化や新たな研究等の知見に応じた継続的な見直しの必要性を加え、以下の4点を基本とした。

- ① 環境省版レッドデータブック等における概念を踏まえつつ、沖縄県の地域性、独自性にも配慮する。
- ② 環境省版レッドデータブック等にあげられていない沖縄県独自の種もリストアップする。
- ③ 現在の文献・資料ではレッドデータブックに掲載してよいのか判断がつかない種および今後詳細な調査を要する種については、情報不足種としてリストアップする。
- ④ 生息・生育状況に生じた変化や新たな研究等の知見に応じて、継続的に見直しを行う。

今回改訂を行うにあたり、「沖縄県版レッドデータブック改訂委員会」を設置して、初年度(平成25年度)に改訂の基本方針について検討を行った。改訂委員会は沖縄県の自然環境に広く見識を有する識者に加え、各種レッドデータブックの作成に携わった経験のある識者を加え委員長をふくむ12名で構成した。

初年度後半には、分類群別に、動物部門で8分科会、植物部門で4分科会の計12分科会(合計74名委員)からなる「分科会(ワーキンググループ)」の立ち上げを行った。各分科会は、掲載候補種のリストアップや調査を含むデータの収集・整理、検討、掲載種の選定、執筆までおこない、代表委員には分科会内の調整やとりまとめにあたりご尽力いただいた。

同じく初年度後半には、「沖縄県版レッドデータブック編集委員会」を立ち上げ、各分科会の代表委員が編集委員を兼任した上で刊行までの各年度に1回から2回の頻度で全体討議を行い、基本方針のもと、実務上の課題や分科会の進捗状況、各論方針など各種の調整および検討を行った。編集委員会は、各専門分科会(ワーキンググループ)の代表委員からなる14名の編集委員(うち2分科会は2名委員)で構成し、作成は各分科会の責任編集としたことから委員長を置かず、事務局が会議進行を行った。

（４）沖縄県版レッドデータブックの意義

沖縄県版レッドデータブックは、絶滅の危機に瀕する野生生物の保護を行うための基礎資料として以下に示す4点の重要な意義がある。

1) 自然環境保護のための指針として

近年、県内では各種開発に伴う森林伐採や土地改変などにより、自然環境が悪化しつつある。そのことから野生生物およびその生育・生息地を次世代に引継ぐためには、沖縄県版レッドデータブックを踏まえた指針としての役割を果たすものである。

2) 沖縄県の貴重な文化財として

自然および文化のなりたちにはその背景に、各地域における独自の歩みを見ることが出来る。この自然や文化を保護し探求していくことは、地域文化を守り育てるうえで大変有意義である。特に天然記念物の指定を受け保護されている種や学術上貴重で、かつ希少な種の生育・生息の状況を知るうえで重要な資料となる。

3) 遺伝的多様性の保護として（遺伝子資源の重要性）

特に植物の場合であるが、バイオテクノロジーの進歩によって、遺伝子組み替え技術を応用した育種開発が進み、全ての野生種が利用可能な遺伝子資源として重要な価値を持つことになった。

このことから野生種の遺伝的多様性の保全は重要なテーマであり、沖縄県版レッドデータブックはその基礎的な役割を果たすものである。

4) 教育教材および研究資料として

野生生物は、生物学の教育および研究を行う上で欠かすことのできないものであり、野生生物に関する情報を集積した沖縄県版レッドデータブックは、これらの情報・教材として、重要な役割を果たすものである。

(5) 改訂・沖縄県版レッドデータブック第3版 作成体制

1) 改訂委員会（敬称略、五十音順。所属・役職は平成25年度当時）

委員長	東 清二	琉球大学名誉教授
委員	石井 信夫	東京女子大学現代教養学部教授
委員	香村 眞徳	琉球大学名誉教授
委員	佐々木健志	琉球大学資料館(風樹館)技官
委員	諸喜田茂充	琉球大学名誉教授
委員	新城 和治	元琉球大学教育学部教授
委員	千木良芳範	元沖縄県立博物館美術館副館長
委員	寺嶋 芳江	琉球大学熱帯生物圏研究センター教授
委員	当山 昌直	沖縄生物学会会員
委員	戸田 守	琉球大学熱帯生物圏研究センター西原研究施設准教授
委員	成瀬 貫	琉球大学熱帯生物圏研究センター西表研究施設助教
委員	横田 昌嗣	琉球大学理学部海洋自然科学科教授

2) 編集委員会（敬称略。動物編にかかる委員の所属・役職は平成29年度当時）

哺乳類担当	伊澤 雅子	琉球大学理学部教授
鳥類担当	高原 建二	元沖縄県立桜野特別支援学校校長
爬虫類・両生類担当	戸田 守	琉球大学熱帯生物圏研究センター西原研究施設准教授
魚類担当	立原 一憲	琉球大学理学部准教授
甲殻類担当	成瀬 貫	琉球大学熱帯生物圏研究センター西表研究施設准教授
昆虫類担当	小濱 継雄	琉球大学博物館(風樹館)協力研究員
クモ形類・多足類担当	千木良芳範*	宜野湾市立博物館館長
クモ形類・多足類担当	佐々木健志	琉球大学博物館(風樹館)学芸員
貝類担当	久保 弘文	沖縄県水産海洋技術センター研究主幹
菌類担当	寺嶋 芳江	琉球大学熱帯生物圏研究センター教授
維管束植物担当	横田 昌嗣*	琉球大学理学部教授
維管束植物担当	阿部 篤志	一般財団法人 沖縄美ら島財団総合研究センター植物研究室係長
蘚苔類担当	山口富美夫	広島大学大学院理学研究科教授
藻類担当	香村 眞徳	琉球大学名誉教授

*複数名の編集委員による分科会の代表委員を示す

3) 菌類編・植物編 各分類群分科会（敬称略、委員は五十音順）

菌類	会長	寺嶋 芳江	琉球大学熱帯生物圏研究センター教授		
	委員	小松 知普			
		根田 仁	国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所・研究ディレクター（生物機能研究担当）		
		服部 力	国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所・きのこ・森林微生物研究領域 森林病理研究室長		
		盛口 満	沖縄大学人文学部こども文化学科教授		
維管束植物	会長	横田 昌嗣	琉球大学理学部教授		
	委員	阿部 篤志	一般財団法人 沖縄美ら島財団総合研究センター植物研究室係長		
		東 誠一郎	株式会社イーエーシー		
		尾川原 正司	内閣府沖縄総合事務局消費・安全課課長		
		加島 幹男	沖縄森林管理署自然保護管理員		
		國府方 吾郎	国立科学博物館植物研究部研究主幹		
		佐藤 宣子	宮古島市教育委員会生涯学習振興課文化財係市史編さん囑託		
		城間 盛男	元北大東村教育委員会教育長		
		豊見山 元	普天間高校非常勤教諭		
		仲宗根 忠樹	株式会社ツドイカンパニー		
		仲間 正和	元興南高校教頭		
		比嘉 清文	元中学校教諭		
		村松 稔	与那国町教育委員会		
		蘚苔類	会長	山口 富美夫	広島大学大学院理学研究科教授
			藻類	会長	香村 眞徳
委員	岩永 洋志登			株式会社沖縄環境分析センター	
岸本 和雄	沖縄県農林水産部水産課				
	比嘉 敦	株式会社沖縄環境分析センター			

4) 作成事務局

仲座寛泰 上里辰幸 西山桂一 末吉孝太郎 西垣孝治 我如古勤子 大城秀幸 山内大幹 安次嶺要 角田正美 名波辰真
 （以上、株式会社沖縄環境保全研究所）

（6）沖縄県版レッドデータブックの構成内容

沖縄県版レッドデータブックは、動物編および菌類編、植物編で構成され、それぞれ掲載種を選定したうえで種の解説を行った。掲載種はリスト化し、写真を巻頭に示した。巻末には初版以降の沖縄県版レッドデータブック掲載種と環境省版レッドリスト掲載種のカテゴリー対照表を収録した。

（7）改訂第3版のカテゴリー

IUCNによるカテゴリー（IUCN, 1994）や環境省のレッドリストとの整合性の観点から、改訂第2版の作成時においては、沖縄県レッドデータブック検討委員会内にカテゴリー委員会を設置し、半年以上かけて沖縄県のカテゴリー区分や基本概念の案を作成し、2001年の沖縄県レッドデータブック検討委員会において了承され、決定された。改訂第3版においても、カテゴリー区分及びカテゴリー定義についてはこれを踏襲した。

沖縄県の現行カテゴリーの区分は表 1-1 のとおりである。右段は旧カテゴリーを示しているが、それは必ずしも現行カテゴリーと一致するものではなく、ほぼ近似しているという意味である。また、表 1-2(1)～(4)に現行カテゴリーの定義を示した。

表 1-1 沖縄県の現行カテゴリーおよび旧カテゴリー対照表

現行カテゴリー (第2版 2006・第3版 2018)	旧カテゴリー (初版 1996)
絶滅 EX (Extinct)	絶滅種
野生絶滅 EW (Extinct in the Wild)	
絶滅危惧 I 類 (CR+EN) ・絶滅危惧 I A 類 CR (Critically Endangered) ・絶滅危惧 I B 類 EN (Endangered)	絶滅危惧種
絶滅危惧 II 類 VU (Vulnerable)	危急種
準絶滅危惧 NT (Near Threatened)	希少種
情報不足 DD (Data Deficient)	未決定種
絶滅のおそれのある地域個体群 LP (Threatened Local Population)	地域個体群

表 1-2(1) カテゴリー定義 (定性的要件)

沖縄県のカテゴリー定義	
区分および基本概念	定性的要件
絶滅 EX (Extinct) 沖縄県ではすでに絶滅したと考えられる種	①過去に沖縄県に生育・生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、沖縄県ではすでに絶滅したと考えられる種。 ②県内の在来個体群は絶滅しているが、県外から移入された個体群が生存している種。
野生絶滅 EW (Extinct in the Wild) 沖縄県では飼育・栽培下でのみ存続している種	過去に沖縄県に生育・生息したことが確認されており、飼育・栽培下では存続しているが、沖縄県において野生ではすでに絶滅したと考えられる種。 【確実な情報があるもの】 ①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。 ②信頼できる複数の調査によっても、生育・生息が確認できなかった。 【情報量が少ないもの】 ③過去50年間前後の間に、信頼できる生育・生息の情報が得られていない。
絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 沖縄県では絶滅の危機に瀕している種 沖縄県では現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。 絶滅危惧 I A 類 CR (Critically Endangered) 沖縄県では、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。 絶滅危惧 I B 類 EN (Endangered) 沖縄県では I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 ②既知のすべての生育地・生息地で、生育・生息条件が著しく悪化している。 ③既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種又は同種の別個体群が侵入している。 ⑤ほとんどの分布域において、生存を脅かすおそれのある競争種や天敵が侵入している。 【情報量が少ないもの】 ⑥それほど遠くない過去 (30~50年) の生育・生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。
絶滅危惧 II 類 VU (Vulnerable) 沖縄県では絶滅の危機が増大している種 沖縄県では、現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ②大部分の生育地・生息地で生育・生息条件が明らかに悪化しつつある。 ③大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④分布域の相当部分に、交雑のおそれのある別種又は同種の別個体群が侵入している。 ⑤分布域の相当部分に、生存を脅かすおそれのある競争種や天敵が侵入している。

注) 種：動物では種および亜種、植物では種、亜種、変種を示す。

表 1-2(2) カテゴリ定義 (定性的要件)

沖縄県のカテゴリ定義	
区分および基本概念	定性的要件
<p>準絶滅危惧 NT (Near Threatened) 沖縄県では存続基盤が脆弱な種 現時点での絶滅危険度は小さいが、生育・生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。</p>	<p>次に該当する種 生育・生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後更に進行するおそれがあるもの。</p> <ul style="list-style-type: none"> a) 個体群が減少している。 b) 生育・生息条件が悪化している。 c) 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 d) ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種又は同種の別個体群が侵入している。 e) ほとんどの分布域において、生存を脅かすおそれのある競争種や天敵が侵入している。
<p>情報不足 DD (Data Deficient) 沖縄県では評価するだけの情報が不足している種</p>	<p>環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリに移行し得る属性(具体的には次のいずれかの要素)を有しているが、生育・生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていない種</p> <ul style="list-style-type: none"> a) どの生育地・生息地においても生育・生息密度が低く希少である。 b) 生育地・生息地が局限されている。 c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 d) 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。
<p>絶滅のおそれのある地域個体群 LP (Threatened Local Population) 沖縄県で地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれの高いもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する地域個体群</p> <ul style="list-style-type: none"> ①生育・生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生育域・生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合危険が増大していると判断されるもの。 ②地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。

注) 種：動物では種および亜種、植物では種、亜種、変種を示す。

表 1-2(3) カテゴリー定義 (定量的要件)

沖縄県のカテゴリー定義		
区分および基本概念	定量的要件	
絶滅 EX (Extinct) 沖縄県ではすでに絶滅したと考えられる種	—	
野生絶滅 EW (Extinct in the Wild) 沖縄県では飼育・栽培下でのみ存続している種	—	
絶滅危惧 T H R E A T E N E D	絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 沖縄県では絶滅の危機に瀕している種 沖縄県では現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	—
	絶滅危惧 I A 類 CR (Critically Endangered) 沖縄県では、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。	A. 次のいずれかの形で個体数の減少が見られる場合。 1. 最近10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があったと推定される。 2. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があると予測される。 B. 出現範囲あるいは生育地・生息地面積、成熟個体数等に、最近極度の減少がみられるか、今後継続的な減少が予想され、かつ生育地・生息地が以下に限定される場合。 ○生育地・生息地が過度に分断されているか、ただ1ヶ所の地点(水系)に限定されている。 C. 個体群の成熟個体数が250未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。 1. 3年間もしくは1世代のどちらか長い期間に25%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ個体群が構造的に過度の分断を受けるか全ての個体が1つの亜個体群に含まれる状況にある。 D. 成熟個体数が50未満であると推定される場合。 E. 数量解析により、10年間、もしくは3世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が50%以上と予測される場合。
	絶滅危惧 I B 類 EN (Endangered) 沖縄県では I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。	A. 次のいずれかの形で個体数の減少が見られる場合。 1. 最近10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定される。 2. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があると予測される。 B. 出現範囲あるいは生育地・生息地面積、成熟個体数等に、最近極度の減少がみられるか、今後継続的な減少が予想され、かつ生育地・生息地が以下に限定される場合。 ○生育地・生息地が過度に分断されているか、5ヶ所以下の地点(水系)に限定されている。 C. 個体群の成熟個体数が2,500未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。 1. 5年間もしくは2世代のどちらか長い期間に20%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ個体群が構造的に過度の分断を受けるか全ての個体が1つの亜個体群に含まれる状況にある。 D. 成熟個体数が250未満であると推定される場合。 E. 数量解析により、20年間、もしくは5世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が20%以上と予測される場合。

注) 種：動物では種および亜種、植物では種、亜種、変種を示す。

表 1-2(4) カテゴリー定義 (定量的要件)

沖縄県のカテゴリー定義	
区分および基本概念	定量的要件
<p>絶滅危惧Ⅱ類 VU (Vulnerable) 沖縄県では絶滅の危機が増大している種</p> <p>沖縄県では、現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが考えられるもの。</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">絶滅危惧 THREATENED</p>	<p>A. 次のいずれかの形で個体数の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 最近10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、20%以上の減少があったと推定される。 2. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、20%以上の減少があると予測される。 <p>B. 出現範囲あるいは生育地・生息地面積、成熟個体数等に、最近極度の減少がみられるか、今後継続的な減少が予想され、かつ生育地・生息地が以下に限定される場合。</p> <p>○生育地・生息地が過度に分断されているか、10ヶ所以下の地点(水系)に限定されている。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が10,000未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10年間もしくは3世代のどちらか長い期間に10%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ個体群が構造的に過度の分断を受けるか全ての個体が1つの亜個体群に含まれる状況にある。 <p>D. 成熟個体数が1,000未満であると推定される場合。</p> <p>E. 数量解析により、100年間における絶滅の可能性が10%以上と予測される場合。</p>
<p>準絶滅危惧 NT (Near Threatened) 沖縄県では存続基盤が脆弱な種</p> <p>現時点での絶滅危険度は小さいが、生育・生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。</p>	—
<p>情報不足 DD (Data Deficient) 沖縄県では評価するだけの情報が不足している種</p>	—
<p>絶滅のおそれのある地域個体群 LP (Threatened Local Population) 沖縄県で地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれの高いもの</p>	—

注) 種：動物では種および亜種、植物では種、亜種、変種を示す。

(8) 今後の課題

改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版は、沖縄県を研究の場として活動する多くの学識者や研究者の多大な協力のもと作成された。

今後の課題としては、改訂第2版に引きつづき、各分類群の特性に即した定量的な調査手法・解析手法の検討が課題として考えられる。また、情報不足とされた種については、今後も情報収集につとめ、情報不足とされた種以外の掲載種についても、その種を取り巻く自然環境・社会的環境の変化を勘案しつつ、継続的な生息・生育状況の把握が課題として挙げられる。上記の課題については、改訂委員会および編集委員会の場においてモニタリングサイトの設定によるより定量的な調査の検討の必要性をはじめ、継続的な調査研究の場を確保していくことの重要性も指摘された。また、得られた調査成果についてはGIS（地理情報システム）を活用した統一的なデータベース構築の必要性を指摘する意見もあった。

沖縄県のホームページ上にて公開されているレッドデータブックについても、改訂第2版以降に石垣島や慶良間諸島、沖縄島北部やんばる地域が国立公園化を達成したことをはじめ、平成29年2月には「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界遺産登録推薦書がユネスコへ提出されるなど、本県の自然環境保全の重要性についてはより一層の配慮が求められることから、調査研究への活用のしやすさだけでなく、国内外を問わず一般の利用者の活用のしやすさを考慮に入れた公開のありかたについても検討が必要と考えられる。

自然環境及び社会環境の変化による影響を的確にとられるため、また新たな生息・生育の情報や分子系統学をはじめとした最新の学術成果を反映する必要性から、本県のレッドデータブックは、今後とも継続的な見直しを行う必要があると考えられる。そのうえで、これまでのおよそ10年間ごとの発刊にとらわれず、必要に応じて、沖縄県のホームページ等を活用したレッドデータブックの部分改訂を行っていくことも検討の課題と考えられる。

本書が広く普及することで、絶滅のおそれのある野生生物の保全への理解を深めていただくとともに、関係省庁や地方公共団体、民間を含めた各種の事業、それらにともなう環境影響評価等にも活用されることで、本県の環境保全への配慮がより一層促進されることを期待するものである。

2. 選定方法

2. 1 はじめに

改訂・沖縄県版レッドデータブック 第3版の掲載種の選定については、沖縄県版レッドデータブック編集委員会および分科会で検討が行われた。

掲載種は、改訂第2版の沖縄県版レッドデータブックを基本として、対象とする分類群の検討対象種をあらかじめ抽出した上で、本改訂で行った調査の情報も踏まえ、最新の既存知見や専門家の知見を基に選定した。選定された掲載種は、絶滅、野生絶滅、絶滅危惧ⅠA類、絶滅危惧ⅠB類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧、絶滅のおそれのある地域個体群および情報不足の8つのカテゴリーに区分し、それぞれの種について現状での生息・生育状況等を取りまとめた。

本改訂にあたり、カテゴリー定義等の見直しは行わず、基本的には改訂第2版と同様の手法で選定を行った。

改訂・沖縄県版レッドデータブック第3版を作成するにあたっての基本方針は以下に示すとおりである。本改訂にあたり④を追加した。

- ① 環境省版レッドデータブック等における概念を踏まえつつ、沖縄県の地域性、独自性にも配慮する。
- ② 環境省版レッドデータブック等にあげられていない沖縄県独自の種もリストアップする。
- ③ 現在の文献・資料ではレッドデータブックに掲載してよいのか判断がつかない種および今後詳細な調査を要する種については、情報不足種としてリストアップする。
- ④ 生息・生育状況に生じた変化や新たな研究等の知見に応じて、継続的に見直しを行う。

2. 2 評価対象範囲の設定

(1) 評価対象種の範囲

評価対象種は、菌類と維管束植物、蘚苔類、藻類の各分類群を対象とした。評価対象とした群は以下に示す4分類群である。

- ① 菌 類
- ② 維 管 束 植 物
- ③ 蘚 苔 類
- ④ 藻 類

(2) 評価対象地域の範囲

評価対象地域は沖縄県内の全域とし、対象は陸産・淡水産（生活史の一部を陸水域で過ごす生物も含む）および沿岸域に生息・生育する生物も含めた。本改訂では、沿岸域を干潟環境及び関連する周辺の環境の範囲とし、新たに以下のとおり定義した。

- ① 潮間帯に形成される。
- ② 外海から隔絶された河口域を含む内湾的環境に形成される。
- ③ 砂泥、岩礫、サンゴ礫など、流動性のある底質からなる。
- ④ 比較的平坦な地形である。
- ⑤ 干潟に隣接した塩性湿地やマングローブ湿地、海藻藻場である。
- ⑥ 海とのつながりがある汽水性の地下洞窟である。

詳細については、菌類は沖縄県内の陸域およびマングローブが生育している干潟とした。また、植物では陸域、淡水域、汽水域および沿岸域（干潟等）としたうえで、このうち維管束植物は沿岸域として同分類群が生育する範囲と定義した。

2. 3 掲載種の選定手順

(1) レッドデータブック対象種のリストアップ

① 菌類編

現行の沖縄県版レッドデータブックに掲載された菌類（種）を基に、改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物植物Ⅱ（環境庁, 2000）、沖縄県版レッドデータブック区分未決定種調査報告書（沖縄県, 1997, 1998, 1999, 2000）、国内のきのこを形成する菌類を扱った文献、改訂・沖縄県版レッドデータブック編集委員会及び菌類分科会の委員の経験や知見等を総合して、県内において希少性の高い種を選定した。

② 植物編

カテゴリー評価は定性的基準と定量的基準の両方を用いて行うが、データ数が不十分なものについては定性的基準のみで評価した。また、沖縄県での分布が確認できないものや情報が不足していてカテゴリー評価ができないものは、情報不足として各分類群の最後にリストアップした。

(2) 分科会による掲載種の選定とカテゴリー判定

各分類群の分科会においては、現地調査を交えながら、各種の既存資料・文献（沖縄県における環境アセスメントや沖縄県が保有する調査報告書を含む）および生息・生育情報や知見に基づく検討を行い、リストアップした対象種から掲載種として選定すべき種、亜種および変種の抽出を行った。掲載種の選定と並行して、絶滅、野生絶滅、絶滅危惧ⅠA類、絶滅危惧ⅠB類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧および絶滅のおそれのある地域個体群のカテゴリーに区分した。また、資料・情報等が不足しており、現状および生態が不明な種については、情報不足としてリストアップした。

生息状況の地域差により、特定の島嶼や地域において絶滅の危険性がより高まっているなど特記すべき事項がある場合は、種の解説内の特記事項欄にその内容を具体的に示すこととした。

なお、検討にあたっては共通仕様の評価チェックシートを活用して行った。

(3) 沖縄県版レッドデータブック編集委員会

各分類群の分科会における掲載種の素案は、各分類群分科会の代表委員（編集委員を兼ねる）から構成された編集委員会で検討をおこない、そのうえで、各分科会が最終的に掲載種を決定した。

2. 4 菌類編・植物編の作成にあたり

(1) 記載項目

種の解説には表 2-2 及び表 2-3 に示す記載項目および内容を記入した。記載項目および内容は改訂第 2 版を踏襲したが、特筆すべき地域差を表記する場合は、種の解説の特記事項欄にその内容を具体的に示すこととした。また、IUCN（国際自然保護連合：本部スイス）のレッドリストの評価も参考として付記した。なお、情報不足とされた種についてリストに掲載し、一部情報のあるものについては分布や情報不足とした理由などを掲載した。このほかの留意点は次のとおりである。

① 菌類編

採集されることにより著しく減少することが懸念される場合、当該種の分布域、生育環境、生育状況などは、その防止を考慮に入れて記載した。掲載する種の配列はそれぞれのカテゴリー別に、子の菌類を先に担子菌類を後に、種は学名のアルファベット順にまとめて配列した。

② 植物編

植物、盗掘のおそれがある種については分布域、生育環境などの記載内容を考慮した。分類群の配列は、①維管束植物（種子植物・シダ植物）、②蘚苔類、③藻類の順とした。

(2) 本改訂でのおもな留意点

各分類群の巻頭に、改訂第2版からの作成上の変更点などの留意すべき事項を示した。

(3) 本改訂で明らかになったこと

各分類群の巻頭に、改訂第3版の作成で明らかとなった事項を示した。

(4) 種の解説の作成

種の解説は、各分科会の責任編集とした(分科会が指定した執筆協力者による執筆を含む)。

なお、改訂第2版の種の解説を当時の執筆者と異なる執筆者が一部を見直して今回作成した場合は、表2-1に示す基準にてらし執筆者名を適切に表記した。

表2-1 改訂第2版の記述を異なる執筆者が加筆・変更した場合の執筆者名表記の基準

区分	執筆者表記
・第2版解説の過半を変更した場合	・本改訂執筆者の次位に第2版執筆者を示したうえで、第2版執筆者にアスタリスク(*)を付ける。 (表記の仕方) 執筆者名: 本改訂執筆者 ・ 第2版執筆者*
・生息/生育状況の追記など第2版解説の一部を変更した場合 ・過半数に満たないこのほか変更	・第2版執筆者にアスタリスク(*)を付け、本改訂の執筆者を次位に示したうえで(追補)を付記する。 (表記の仕方) 執筆者名: 第2版執筆者* ・ 本改訂執筆者(追補)
・第2版解説に変更がない場合	・第2版執筆者にアスタリスク(*)を付けて示す。 (表記の仕方) 執筆者名: 第2版執筆者*

※菌類編は、前回第2版で初版執筆者を示す同種記号(*)を採用しており、その差別化から本改訂で第2版執筆者を記号(**)で示すこととした。

※IUCN 評価ランク及び条例等の指定状況は、必要に応じて事務局が備考欄に追記した。

(5) 写真の掲載の充実

本改訂では、菌類編・植物編掲載種の多くの種の写真の掲載をめざし、各位の協力を得たうえで、絶滅危惧Ⅱ類以上のカテゴリーランクの種及び代表的な種、既存の図鑑類に図示がない種を中心に約380種の写真を掲載した。

表 2-2 記載項目および記載の内容（菌類編）

	項 目	内 容
1	和 名	一般によく使われている和名を記載する。
2	分 類	科名と目名を記載する。
3	学 名	学名を記載する。
4	カ テ ゴ リ ー	絶滅危惧Ⅰ類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧、絶滅のおそれのある地域個体群及び情報不足に区分する。
5	環 境 省 カ テ コ ー リ ー	環境省のレッドリストカテゴリーを記載する。該当する種がない場合には「該当なし」と記載する。
6	形 態 の 特 徴	菌類の形態は一般にあまり知られてないことを考慮に入れて、種の識別ができるように基本的な形態を含めて記載する。
7	分 布 域	分布している地域名または国名を記載する。
8	県 内 の 分 布	分布している主な島の名称を記載する。島の名称は北から南へ配列する。固有の場合はその旨記載する。
9	生 育 環 境	過度に採集される恐れがある種については環境や自生地が特定できないようにする。島ごとに分けて書いてもよい。
10	生 育 状 況	最近の生育状況（5年以内が望ましい）を記載するが、古い資料しかない場合は、その旨記載する。
11	学 術 的 価 値	分類・形態学的特徴、北限や南限などの分布上の特徴、生態系における重要性など、特記すべきことがあれば記載する。
12	減 少 の 要 因	当該種が減少している（または少ない）要因が明らかでない場合、あるいは推定される場合にはその旨記載する。
13	備 考	上記の項目で記載しなかったことで当該種について特記すべきことがあれば記載する。 「文化財保護法」による特別天然記念物・国指定天然記念物、沖縄県指定天然記念物、市町村指定天然記念物や「絶滅のおそれのある野生生物動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種、市町村条例の保全種等に指定されていれば記載する（平成30年3月1日時点）。 このほか、特筆すべき地域差がある場合は具体的に記載する。 国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストの評価も併記する。同レッドリストは基本的に種を単位としてカテゴリーを評価し、すべての亜種が同じ評価となる。本県改訂では、このうち特定の亜種の現状を指して選定した種が多く含まれており留意が必要である。Date Assessed:2017-3 を最新の評価とする。カテゴリー基準は 2001 Categories & Criteria (version 3.1) に準じる（一部種を除く）。一部、1994 Categories & Criteria (version 2.3) による Lower Risk/near threatened および Lower Risk/least concern の各カテゴリーによる種は、それぞれNT、LCに置き換えて示したものを含む。
14	文 献	有用な文献があれば記載する。文献は原則として、著者名、年号、タイトル、書名、編集者、出版元、出版元住所、巻号頁の順に記載する。
15	執 筆 者 名	執筆者、加筆・追補者を区別して記載する（表 2.1 の基準による）。

表 2-3 記載項目および記載の内容 (植物編)

項 目	内 容
1	和 名 一般によく使われている和名を用い、異名があれば付記する。
2	分 類 維管束植物と蘚苔類については科名を記載、藻類については目名及び科名を記載する。
3	学 名 学名を記載する。
4	英 名 可能なかぎり記載する。
5	方 言 名 可能なかぎり記載し、使用されている地域を明記する。
6	カ テ ゴ リ ー 絶滅、野生絶滅、絶滅危惧Ⅰ類 (維管束植物では、絶滅危惧ⅠA類、絶滅危惧ⅠB類にわけた)、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧、絶滅のおそれのある地域個体群及び情報不足に分類する。
7	環境省カテゴリー 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物のカテゴリーを記載する。なお、該当する種がない場合には「該当なし」と記載する。
8	形 態 の 特 徴 重要な区別点を簡潔に記載する。
9	分布域 (県外) 北から南へと配列し、琉球列島に固有な場合、その地域名を記載する (固有とする地域は最も広い意味でも南西諸島までとする)。なお、不確実な場合には、「?」をつけている。
10	県 内 の 分 布 主な島の名称をできるだけくわしく記載する。島は北から南へ配列する。固有の場合はその旨記載する。なお、不確実な場合には、「?」をつけている。
11	生 育 環 境 盗掘のおそれのある種については環境や自生地が特定できないようにする。島ごとに分けて書いてもよい。
12	生 育 状 況 最近の状況 (できれば5年以内が望ましい) を記載するが、古い資料しかない場合は、その旨書いておく。
13	学 術 的 価 値 その種の分類学的価値、北限や南限などの分布上の価値、生態系における価値など、特記すべきことがあれば記載する。
14	減 少 の 要 因 減少の要因を記載する。要因が複数の場合や詳しい要因がわかる場合はその旨記載する。
15	保 全 対 策 維管束植物について、掲載種の保全対策を記載する。
16	備 考 特記すべきことがあれば記載する。 「文化財保護法」による特別天然記念物・国指定天然記念物、沖縄県指定天然記念物、市町村指定天然記念物や「絶滅のおそれのある野生生物動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種、市町村条例の保全種等に指定されていれば記載する (平成30年3月1日時点)。 このほか、特筆すべき地域差がある場合は具体的に記載する。 国際自然保護連合 (IUCN) のレッドリストの評価も併記する。同レッドリストは基本的に種を単位としてカテゴリーを評価し、すべての亜種が同じ評価となる。本県改訂では、このうち特定の亜種の現状を指して選定した種が多く含まれており留意が必要である。Date Assessed:2017-3 を最新の評価とする。カテゴリー基準は 2001 Categories & Criteria (version 3.1) に準じる (一部種を除く)。一部、1994 Categories & Criteria (version 2.3) による Lower Risk/near threatened および Lower Risk/least concern の各カテゴリーによる種は、それぞれNT、LCに置き換えて示したものを含む。
17	文 献 特に有用な文献があれば記載する。原則として、著者名、年号、報文タイトル、書名、編集者、出版元、出版元住所、巻号頁の順に記載する。
18	執 筆 者 名 執筆者、加筆・追補者を区別して記載する (表 2.1 の基準による)。

3. 選定結果

3. 1 掲載種数

改訂第3版の選定状況を表3-1に示した。

本改訂において、沖縄県において絶滅のおそれがあるとして選定された種は、菌類は85種、植物は938種の合計1,023種となった。

分類群別の内訳は、維管束植物が716種で最も多く全体の約70%を占める。次いで藻類143種、菌類85種、蘚苔類79種の順に多い状況であり、特に藻類で種数の増加が目立つ。

初版および改訂第2版の掲載種数は表3-2及び表3-3に示すとおりであり、初版(1996)では897種を、改訂第2版(2006)では946種を選定している。本改訂では、前回改訂時と比較して77種が増加しており、このなかには新たに評価対象に加えた小分類群があるほか、学術学的進展や評価を可能とする新たな知見の集積により追加された種、近年になり本県から新たに確認された種も含まれていると考えられるが、沖縄県の菌類及び植物の現状としては厳しい状況が継続しているものと考えられる。

なお、本改訂においては、新たに絶滅種に選定された種はなかった。

表3-1 カテゴリー別種数一覧 (改訂第3版2018)

カテゴリー 分類群	絶滅 (EX)	野生 絶滅 (EW)	絶滅危惧I類		絶滅危惧 II類 (VU)	準絶滅 危惧 (NT)	絶滅のおそれ のある地域個 体群 (LP)	情報 不足 (DD)	合 計	
			I A類 (CR)	I B類 (EN)						
菌 類	0		9		9	4	2	61	85	
維管束植物	10	3	375	237	138	194	54	—	80	716
蘚苔類	0		32		28	5	0	14	79	
藻 類	0		30		30	47	0	36	143	
合 計	13		446		261	110	2	191	1,023	

※ 絶滅危惧I類はI A類とI B類の和を示す。また、菌類、蘚苔類、藻類の各分類群は、I A類とI B類に細分せずI類(CR+EN)として表示した。

表 3-2 (参考) カテゴリー別種数一覧 (改訂第 2 版 2006)

カテゴリー 分類群	絶滅 (EX)	野生 絶滅 (EW)	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II類 (VU)	準絶滅 危惧 (NT)	絶滅のおそれ のある地域個 体群 (LP)	情報 不足 (DD)	合 計	
			I A類 (CR)	I B類 (EN)						
菌 類	0		12		9	41	1	37	100	
維管束植物	10	3	349	220	129	187	51	—	85	685
蘚苔類	0	0	35		32	0	—	13	80	
藻 類	0	0	10		14	31	0	26	81	
合 計	13		394		242	123	1	161	946	

※ 絶滅危惧 I 類は I A類と I B類の和を示す。また、菌類、蘚苔類、藻類の各分類群は、I A類と I B類に細分せず I 類 (CR+EN) として表示した。

表 3-3 (参考) カテゴリー別種数一覧 (初版 1996)

カテゴリー 分類群	絶滅種	絶滅危惧種	危急種	希少種	地域個体群	未決定種	合 計
菌 類	0	0	0	24	1	100	125
維管束植物	16	99	347	91	—	138	691
蘚苔類	0	0	0	54	—	15	69
藻 類	1	4	2	5	0	0	12
合 計	17	103	349	174	1	253	897

3. 2 掲載種リスト

レッドデータおきなわ 改訂第3版（菌類編・植物編） 平成30(2018)年3月

< 菌 類 (子のう菌類) >

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

イリオモテクモタケ	<i>Cordyceps cylindrica</i>
ハエヤドリガリツブタケ	<i>Cordyceps iriomoteana</i>
ヒメハルゼミタケ	<i>Cordyceps polycephala</i>
エダウチタンポタケ	<i>Cordyceps ramosistipitata</i>
アカエノツトノミタケ	<i>Cordyceps rubiginosostipitata</i>
サキシマヤドリバエタケ	<i>Cordyceps sakishimensis</i>
シロアリタケ	<i>Cordyceps termitophila</i>

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

イリオモテツブハリタケ	<i>Cordyceps fasciculatostromata</i>
ウスキタンポセミタケ	<i>Cordyceps pleuricapitata</i>
イリオモテセミタケ	<i>Cordyceps pseudolongissima</i>
イリオモテトルビエラクモタケ	<i>Torrubiella minuta</i>
イリオモテコロモクモタケ(イリオモテツブクモタケ)	<i>Torrubiella ryukyensis</i>

情報不足 (DD)

ウスベニコップタケ	<i>Cookeina sulcipes</i>
アラゲウスベニコップタケ	<i>Cookeina tricholoma</i>
エダウチホコリタケモドキ	<i>Dendrosphaera eberhardtii</i>
アミガサタケ	<i>Morchella esculenta</i> var. <i>esculenta</i>
ニクアツベニサラタケ	<i>Phillipsia domingensis</i>
マユハキタケ	<i>Trichocoma paradoxa</i>

< 菌 類 (担子菌類) >

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ヒジリタケ	<i>Lignosus rhinocerotis</i>
キアミズキンタケ	<i>Simblum periphragmoides</i>

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

アラゲカワウソタケ	<i>Inonotus cuticularis</i>
ナンバンオオカワウソタケ	<i>Inonotus patouillardii</i>
ヤエヤマキコブタケ	<i>Inonotus pachyphloeus</i>
ダイダイサルノコシカケ	<i>Pyrofomes albomarginatus</i>

準絶滅危惧 (NT)

オオミダレアミタケ	<i>Lenzites vespacea</i>
スッポンタケ	<i>Phallus impudicus</i>
サンコタケ	<i>Pseudocolus schellenbergiae</i>
モミジタケ	<i>Thelephora palmata</i>

絶滅のおそれのある 地域個体群 (LP)

コンルリキュウバンタケ 〈対象地域： 沖縄島〉	<i>Mycena lazulina</i>
オオシロアリタケ(シロアリシメジ(新称)) 〈対象地域： 沖縄島〉	<i>Termitomyces eurrhizus</i>

情報不足 (DD)

タマゴタケ	<i>Amanita caesareoides</i>
カブラテングタケ	<i>Amanita gymnopus</i>
テングタケ	<i>Amanita pantherina</i>
コテングタケ	<i>Amanita porphyria</i>
フチドリタマゴタケ	<i>Amanita rubromarginata</i>
チャタマゴタケ	<i>Amanita similis</i>
ヘビキノコモドキ	<i>Amanita spissacea</i>
シロオニタケ	<i>Amanita virgineoides</i>
ヌメリアシナガイグチ(アキノアシナガイグチ)	<i>Aureoboletus viscosus</i>
ナガエノウラベニイグチ	<i>Boletus quercinus</i>
アワタケ	<i>Boletus subtomentosus</i>
ヒメウグイスイグチ	<i>Boletus viridis</i>
クロニクイロアナタケ	<i>Chaetoporus hypobrunneus</i>
キアブラシメジ	<i>Cortinarius vibratilis</i>
ムニンヒメチャヒラタケ	<i>Crepidotus uber</i>
アケボノホウロクタケ	<i>Daedalea aurora</i>
ナンバンウチワタケ	<i>Daedalopsis scopulosa</i>

トゲオシロイタケ
 キイボカサタケ
 コンイロイッポンシメジ
 アミヒカリタケ
 オオスルメタケ
 シママンネンタケ
 コゲイロカイガラタケ
 オウギタケ
 ムニンキヤマタケ
 ムジナタケ
 カラハツモドキ
 オガサワラハツタケ
 ツチカブリ
 ケガワタケ
 カエンオチバタケ
 ヒロヒダタケ
 ウスムラサキヒラタケ
 コガネハナガサタケ
 ネットアイヌメリタケ
 カワキタケ
 ヒメヒガサヒトヨタケ
 アナタケモドキ
 オガサワライタチタケ
 ホオベニシロアシイグチ
 サケバタケ
 キアミアシイグチ
 ウスムラサキハツ
 クロハツ
 ヤマブキハツ
 イロガワリベニタケ
 オキナクサハツ
 ニセクロハツ
 アイタケ
 ニワタケ
 ヒメサジタケ
 スミレニガイグチ
 フクロタケ
 ヒメアワタケ

Echinoporia hydnophora
Entoloma murrayi
Entoloma subnitidum
Favolaschia manipularis
Fomitella rhodaphaea
Ganoderma boninense
Gloeophyllum abietinum
Gomphidius roseus
Hygrocybe miniatostrata
Lacrymaria lacrymabunda
Lactarius insulsus
Lactarius ogasawarashimensis
Lactarius piperatus
Lentinus squarrosulus
Marasmius opulentus
Megacollybia clitocyboidea
Melanotus eccentricus
Mycena auricoma
Oudemansiella canarii
Panus conchatus
Parasola plicatilis
Porogramma calceum
Psathyrella boninense
Pseudoaustroboletus valens
Pseudomerulius curtisii
Retiboletus ornatipes
Russula lilacea
Russula nigricans
Russula ochroleuca
Russula rubescens
Russula senecis
Russula subnigricans
Russula virescens
Tapinella atrotomentosa
Trogia stereoides
Tylopilus obscureviolaceus
Volvarellia volvacea var. *volvacea*
Xerocomus parvulus

〈 維 管 束 植 物 (種 子 植 物) 〉

絶滅 (EX)

ジュンサイ
 ソロハギ
 トチカガミ
 ヒメミクリ
 ジンヤクラン

Brasenia schreberii
Flemingia strobilifera
Hydrocharis dubia
Sparganium stenophyllum
Arachnis labrosa

野生絶滅 (EW)

オリヅルスミレ
 リュウキュウアセビ
 クメジマツツジ

Viola stoloniflora
Pieris koidzumiana
Rhododendron amanoi var. *glandulistylum*

絶滅危惧 I A類 (CR)

ニオウヤブマオ
 ランダイミズ
 ヨナクニトキホコリ
 ミズヒキ
 ダイトウサクラタデ
 ヒメハマナデシコ
 カワラナデシコ
 テングノハナ
 アキカラマツ
 オナガサイシン (カツウダケカンアオイ)
 モノドラカンアオイ
 ヒナカンアオイ
 センカクカンアオイ (センカクアオイ)
 センカクオトギリ

Boehmeria gigantea
Elatostema platyphyllum
Elatostema yonakuniense
Antenoron filiforme
Persicaria japonica var. *taitoinsularis*
Dianthus kiusianus
Dianthus superbus var. *longicalycinus*
Illigera luzonensis
Thalictrum mimus var. *hypoleucum*
Asarum leptophyllum
Asarum monodoriflorum
Asarum okinawensis
Asarum senkakuinsulare
Hypericum senkakuinsulare

ジャニンジン	<i>Cardamine impatiens</i>
リュウキュウベンケイ	<i>Kalanchoe integra</i>
オキナワヒメウツギ	<i>Deutzia naseana</i> var. <i>amanoi</i>
キンミズヒキ	<i>Agrimonia pilosa</i>
ガクタヌキマメ	<i>Crotalaria calycina</i>
ヤエヤマタヌキマメ	<i>Crotalaria montana</i>
エダウチタヌキマメ (ダエンタヌキマメ)	<i>Crotalaria uncinella</i> subsp. <i>elliptica</i>
ヌスビトハギ	<i>Desmodium podocarpum</i> subsp. <i>oxyphyllum</i>
ノアズキ (ヒメクズ)	<i>Dunbaria villosa</i>
ホソバツルマメ	<i>Glycine max</i> subsp. <i>formosana</i>
タシロマメ (タイヘイヨウテツボク、シロヨナ)	<i>Intsia bijuga</i>
ハマエンドウ	<i>Lathyrus japonicus</i>
ヤエヤマシタン	<i>Pterocarpus indicus</i> f. <i>echinatus</i>
タデハギ	<i>Tadehagi triquetrum</i>
ホソバフジボグサ	<i>Uraria picta</i>
サクヤアカササゲ	<i>Vigna vexillata</i>
リュウキュウダイゲキ	<i>Euphorbia liukiensis</i>
ハナコミカンボク	<i>Phyllanthus leptoclados</i>
ドナンコバンノキ	<i>Phyllanthus oligospermus</i> subsp. <i>donanensis</i>
タチバナ	<i>Citrus tachibana</i>
リュウキュウヒメハギ	<i>Polygala longifolia</i>
ヌルデ	<i>Rhus javanica</i> var. <i>roxburghii</i>
タイワンアサマツゲ	<i>Buxus microphylla</i> subsp. <i>sinica</i>
クニガミクロウメモドキ	<i>Rhamnus calcicola</i>
ヒメクロウメモドキ	<i>Rhamnus kanagusukii</i>
ハマヤブガラシ	<i>Cayratia maritima</i>
ツタ	<i>Parthenocissus tricuspidata</i>
アツバウオトリギ	<i>Grewia biloba</i>
ラセンソウ	<i>Triumfetta japonica</i>
センカクトロロアオイ	<i>Abelmoschus moschatus</i> var. <i>betulifolius</i>
コショウノキ	<i>Daphne kiusiana</i>
アキグミ	<i>Elaeagnus umbellata</i>
クスドイゲ	<i>Xylosma congestum</i>
アマミスミレ	<i>Viola amamiana</i>
シマヅリスミレ	<i>Viola okinawensis</i>
イシガキスミレ	<i>Viola tashiroi</i> var. <i>tairae</i>
オキナワスミレ	<i>Viola utchinensis</i>
シマバラソウ (ヤンバルミゾハコベ)	<i>Bergia serrata</i>
ゴバンノアシ	<i>Barringtonia asiatica</i>
ヒメノボタン	<i>Osbeckia chinensis</i>
テリハモモタマナ	<i>Terminalia nitens</i>
ナガバアリノトウグサ (ホソバアリノトウグサ)	<i>Haloragis chinensis</i>
ホザキノフサモ (キンギョモ)	<i>Myriophyllum spicatum</i>
ミツバウコギ	<i>Eleutherococcus trifoliatus</i>
ウマノミツバ	<i>Sanicula chinensis</i>
センカクツツジ	<i>Rhododendron simsii</i> var. <i>tawadae</i>
シナマンリョウ (シナヤブコウジ、シナタチバナ)	<i>Ardisia chinensis</i>
ヤブコウジ	<i>Ardisia japonica</i>
イズセンリョウ	<i>Maesa japonica</i>
ツルマンリョウ	<i>Myrsine stolonifera</i>
ホザキザクラ	<i>Stimpsonia chamaedrioides</i>
センカクハマサジ	<i>Limonium senkakuense</i>
タイワンハマサジ	<i>Limonium sinense</i>
トゲイボタ	<i>Ligustrum tamakii</i>
タイワンチトセカズラ	<i>Gardneria shimadae</i>
ミヤコケリンドウ	<i>Gentiana takushii</i>
マメヅタカズラ	<i>Dischidia formosana</i>
スズサイコ	<i>Vincetoxicum pycnostelma</i>
ヨナクニカモメヅル	<i>Vincetoxicum yonakuniense</i>
ヤエヤマハシカグサ	<i>Hedyotis auricularia</i>
ナガバアサガオ	<i>Aniseia martinicensis</i>
トゲミノイヌチシャ	<i>Cordia cumingiana</i>
シマスナビキソウ (タイワンルリソウ)	<i>Cynoglossum lanceolatum</i> var. <i>formosanum</i>
ホウライムラサキ	<i>Callicarpa formosana</i>
ホソバムラサキ	<i>Callicarpa pilosissima</i>
ハマクサギ	<i>Premna microphylla</i>

アワゴケ	<i>Callitriche japonica</i>
キランソウ (テリハキランソウ)	<i>Ajuga decumbens</i>
ヤマトウバナ	<i>Clinopodium multicaule</i>
ケサヤバナ	<i>Coleus scutellarioides</i> var. <i>crispipilus</i>
ヒメキセワタ	<i>Lamium chinense</i> var. <i>tuberiferum</i>
クラルオドリコソウ	<i>Paraphlomis javanica</i>
イラブナスビ	<i>Solanum miyakojimense</i>
ゴマクサ	<i>Centranthera chevalieri</i>
カントラノオ (ハマトラノオ)	<i>Pseudolysimachion sieboldianum</i>
ツルウリクサ	<i>Torenia concolor</i> var. <i>formosana</i>
リュウキュウスズカケ	<i>Veronicastrum liukuense</i>
ミヤコジマソウ (ヒロハサギゴケ)	<i>Hemigraphis reptans</i>
オギノツメ	<i>Hygrophila salicifolia</i>
ナガミカズラ	<i>Aeschynanthus acuminatus</i>
タイワンシシラン	<i>Lysionotus apicidens</i>
ホザキミミカキグサ	<i>Utricularia caerulea</i>
タイワンツクバネウツギ	<i>Abelia chinensis</i> var. <i>ionandra</i>
マルバハタケムシロ	<i>Lobelia loochooensis</i>
マルバミゾカクシ	<i>Lobelia zeylanica</i>
ワタヨモギ	<i>Artemisia gilvescens</i>
イソノギク	<i>Aster asa-grayi</i>
ヨナグニイソノギク	<i>Aster walkeri</i>
タカサゴアザミ	<i>Cirsium japonicum</i> var. <i>australe</i>
ダイトウワダン	<i>Crepidiastrum lanceolatum</i> var. <i>daitoense</i>
サワヒヨドリ	<i>Eupatorium lindleyanum</i>
コケセンボンギク	<i>Lagenophora lanata</i>
サワオグルマ	<i>Senecio pierotii</i>
アオヤギソウ (アオヤギバナ)	<i>Solidago yokusaiana</i>
ウリカワ	<i>Sagittaria pygmaea</i>
ヤナギスブタ	<i>Blyxa japonica</i>
ホソウミヒルモ	<i>Halophila okinawensis</i>
ミズヒキモ	<i>Potamogeton octandrus</i> var. <i>miduhikimo</i>
イトクズモ	<i>Zannichellia palustris</i>
イトトリゲモ	<i>Najas japonica</i>
イシガキソウ	<i>Sciaphila multiflora</i>
オモトソウ	<i>Sciaphila sugimotoi</i>
タカクマソウ	<i>Sciaphila takakumensis</i>
キバナノヒメユリ (キバナスゲユリ)	<i>Lilium callosum</i> var. <i>flaviflorum</i>
ヨナグニノシラン	<i>Ophiopogon reversus</i>
タイワンホトトギス	<i>Tricyrtis formosana</i>
ルゾンヤマノイモ	<i>Dioscorea luzonensis</i>
アケビドコロ	<i>Dioscorea pentaphylla</i>
ヒナノシャクジョウ	<i>Burmannia championii</i>
ミドリシャクジョウ	<i>Burmannia coelestris</i>
ホシザキシャクジョウ	<i>Oxygyne shinzatoi</i>
スズメノヤリ	<i>Luzula capitata</i>
アマノホシクサ	<i>Eriocaulon amanoanum</i>
オキナワホシクサ	<i>Eriocaulon miquelianum</i> var. <i>lutchuense</i>
ビロードメヒシバ	<i>Digitaria mollicoma</i>
アカヒゲガヤ	<i>Heteropogon contortus</i>
ヒメカモノハシ	<i>Ischaemum indicum</i>
コハナカモノハシ	<i>Ischaemum setaceum</i>
アシカキ	<i>Leersia japonica</i>
イネガヤ	<i>Oryzopsis obtusa</i>
オオヌカキビ	<i>Panicum paludosum</i>
アイアシ	<i>Phacelurus latifolius</i>
コモロコシガヤ	<i>Sorghum nitidum</i>
ニッパヤシ	<i>Nypa fruticans</i>
ヤマコンニャク	<i>Amorphophallus hirtus</i> var. <i>kiusianus</i>
オキナワテンナンショウ	<i>Arisaema heterocephalum</i> subsp. <i>okinawense</i>
ユズノハカズラ	<i>Pothos chinensis</i>
サキシマハブカズラ	<i>Rhaphidophora kortharthii</i>
ヒメハブカズラ	<i>Rhaphidophora liukuensis</i>
リュウキュウヒエスゲ	<i>Carex collifera</i>
トックリスゲ	<i>Carex rhynchachaenium</i>
チャガヤツリ	<i>Cyperus amuricus</i>
コウシュンスゲ	<i>Cyperus pedunculatus</i>

カガシラ (ヒメシンジュガヤ)
 カヤツリマツバイ
 マシカクイ
 トモエバテンツキ
 チャイロテンツキ
 ウナズキテンツキ
 イシガキイトテンツキ (ハリテンツキ)
 カギテンツキ
 アンペラ
 ヒンジガヤツリ
 ミクリガヤ
 イヌノハナヒゲ
 イヘヤヒゲクサ
 マネキシングヤ
 タイワンアオイラン
 クスクスラン
 タマザキエビネ (ササバキエビネ)
 カツウダケエビネ
 オオスズムシラン
 タカオオスズムシラン
 アキザキナギラン (オトメナギラン)
 カンラン
 ホウサイラン
 オキナワセッコク
 キバナノセッコク
 コカゲラン
 ジョウロウラン
 カキラン
 オサラン
 ホソフデラン
 タカサゴヤガラ
 ツツガタヤツシロラン
 ナンゴクヤツシロラン
 ヤブミョウガラン
 シュスラン
 ニオイラン
 サキシマスケロクラン
 ヤエヤマスケロクラン
 コバナチケイラン
 ナンバンカゴメラン (ナンバンカモメラン)
 カンダヒメラン
 オキナワヒメラン
 フウラン
 ウズラバムカゴサイシン (新称)
 コカゲトンボ (新称)
 ガンゼキラン
 ヒメカクラン
 クニガミトンボソウ (ソノハラトンボ)
 ナゴラン
 イリオモテラン (ニューメンラン)
 コウトウヒスイラン
 オオキヌラン (センカクキヌラン)
 キヌラン (ホソバラン) (狭義)

Diplacrum caricinum
Eleocharis retroflexa subsp. *chaetaria*
Eleocharis tetraquetra
Fimbristylis fimbristylodes
Fimbristylis leptoclada var. *takamineana*
Fimbristylis nutans
Fimbristylis pauciflora
Fimbristylis schoenoides
Lepironia articulata
Lipocarpha microcephala
Rhynchospora malasica
Rhynchospora rugosa
Schoenus calostachyus
Scleria rugosa var. *glabrescens*
Acanthephippium striatum
Bulbophyllum affine
Calanthe densiflora
Calanthe discolor f. *kanashiroi*
Cryptostylis arachnites
Cryptostylis taiwaniana
Cymbidium javanicum var. *aspidistrifolium*
Cymbidium kanran
Cymbidium sinense
Dendrobium okinawense
Dendrobium tosaense
Didymoplexiella siamensis
Disperis siamensis
Epipactis thunbergii
Eria reptans
Erythrodes formosana
Eulophia taiwanensis
Gastrodia okinawensis
Gastrodia shimizuana
Goodyera fumata
Goodyera velutina
Haraella retrocalla
Lecanorchis flavicans var. *flavicans*
Lecanorchis japonica var. *tubiformis*
Liparis sp. aff. *elegans*
Macodes petola
Malaxis kandae
Malaxis purpurea
Neofinetia falcata
Nervilia sp.
Peristylus elegans
Phaius flavus
Phaius mishmensis
Platanthera sonoharai
Sedirea japonica
Trichoglottis ionosma
Vanda lamellata
Zeuxine nervosa
Zeuxine strateumaticea var. *strateumaticea*

絶滅危惧 I B類 (EN)

ムクノキ
 サキシマエノキ
 アラゲタデ
 オキナワマツバポタン
 インドヒモカズラ
 クロボウモドキ
 イトスナヅル
 リュウキュウヒキノカサ
 ヤエヤマカンアオイ
 クニガミヒサカキ
 トカラアジサイ
 リンボク
 ヤエヤマネムノキ

Aphananthe aspera
Celtis biondii var. *insularis*
Persicaria tomentosa
Portulaca okinawensis var. *okinawensis*
Deeringia polysperma
Polyalthia liukuensis
Cassytha pergracilis
Ranunculus extorris var. *lutchuensis*
Asarum yaeyamensis
Eurya zigzag
Hydrangea kawagoeana
Prunus spinulosa
Albizia retusa

ガランピネムチャ (リュウキュウカワラケツメイ)	<i>Chamaechrista garambiensis</i>
リュウキュウミヤマトベラ (タイワンミヤマトベラ)	<i>Euchresta formosana</i>
ウチワツナギ	<i>Phyllodium pulchellum</i>
エノキフジ	<i>Discocleidion ulmifolium</i>
アカハダコバンノキ	<i>Margaritaria indica</i>
ハナシンボウギ	<i>Glycosmis citrifolia</i>
シマイヌザンショウ	<i>Zanthoxylum schinifolium</i> var. <i>okinawense</i>
シンチクヒメハギ	<i>Polygala chinensis</i>
ヒメミソハギ	<i>Ammannia multiflora</i>
ミズキカシグサ	<i>Rotala leptopetala</i> var. <i>littorea</i>
ヒメウマノミツバ	<i>Sanicula lamelligera</i>
シマイワウチワ (シマイワカガミ、ランダイイワウメ)	<i>Shortia rotundifolia</i>
ケラマツツジ	<i>Rhododendron scabrum</i>
タイワンヤマツツジ (シナヤマツツジ)	<i>Rhododendron simsii</i> var. <i>simsii</i>
カラタチバナ	<i>Ardisia crispa</i>
イソマツ (種内分類群を含む)	<i>Limonium wrightii</i>
ヤワラケガキ	<i>Diospyros eriantha</i>
シマソケイ	<i>Ochrosia oppositifolia</i>
ハシカグサ	<i>Neanotis hirsuta</i>
ヒジハリノキ (シナミサオノキ)	<i>Randia sinensis</i>
カキバチシャノキ	<i>Cordia dichotoma</i>
ナンバンルリソウ	<i>Heliotropium indicum</i>
オオニンジンボク	<i>Vitex quinata</i>
ミズハコベ	<i>Callitriche palustris</i>
ヤエヤマジュウニヒトエ (ヤエヤマキランソウ)	<i>Ajuga taiwanensis</i>
オキナフヒヨドリジョウゴ (ムラサキヒヨドリジョウゴ)	<i>Solanum kayamae</i>
ヒメサギゴケ	<i>Mazus goodenifolius</i>
ミズビワソウ (ヤエヤマイワタバコ)	<i>Cyrtandra yaeyamae</i>
ハマウツボ	<i>Orobanche coerulescens</i>
イヌタヌキモ	<i>Utricularia tenuicaulis</i>
タチミゾカクシ (アブノメミゾカクシ)	<i>Lobelia alsinoides</i>
キクバイズハハコ	<i>Conyza aegyptiaca</i>
ネバリイズハハコ	<i>Conyza leucantha</i>
トゲウミヒルモ	<i>Halophila decipiens</i>
オオウミヒルモ	<i>Halophila major</i>
ヒメウミヒルモ	<i>Halophila minor</i>
リュウノヒゲモ	<i>Potamogeton pectinatus</i>
イトモ	<i>Potamogeton pusillus</i>
カワツルモ	<i>Ruppia maritima</i>
イバラモ	<i>Najas marina</i>
トリゲモ	<i>Najas minor</i>
ホンゴウソウ	<i>Sciaphila japonica</i>
ウエマツソウ	<i>Sciaphila tosaensis</i>
ヒメヤブラン	<i>Liriope minor</i>
アラガタオオサンキライ (アラガタサンキライ)	<i>Smilax bracteata</i> var. <i>verruculosa</i>
シロシャクジョウ	<i>Burmannia cryptopetala</i>
ルリシャクジョウ	<i>Burmannia itoana</i>
イグサ (イ、トウシンソウ)	<i>Juncus effusus</i> var. <i>decipiens</i>
オオホシクサ	<i>Eriocaulon buergerianum</i>
ホシクサ	<i>Eriocaulon cinereum</i>
スイシャホシクサ	<i>Eriocaulon nigrum</i> var. <i>suishaense</i>
ピロードキビ	<i>Brachiaria villosa</i> var. <i>villosa</i>
イゼナガヤ	<i>Eriachne armitti</i>
アオシバ	<i>Garnotia acutigluma</i>
ケナシハイチゴザサ	<i>Isachne lutchuensis</i>
ヒメネズミノオ	<i>Sporobolus hancei</i>
オオハンゲ	<i>Pinellia tripartita</i>
ヒメツルアダン	<i>Freycinetia williamsii</i>
アリサンタマツリスゲ	<i>Carex arisanensis</i>
ホウザンスゲ	<i>Carex hoozanensis</i>
リュウキュウタチスゲ	<i>Carex maculata</i> var. <i>tetsuoi</i>
アオゴウソ	<i>Carex phacota</i>

コウボウシバ	<i>Carex pumila</i>
シオクグ	<i>Carex scabrifolia</i>
オオホウキガヤツリ	<i>Cyperus digitatus</i>
ヒメホウキガヤツリ	<i>Cyperus nutans</i> var. <i>subprolixus</i>
ツクシテンツキ	<i>Fimbristylis dichotoma</i> subsp. <i>podocarpa</i>
ハナシテンツキ	<i>Fimbristylis globulosa</i>
クロタマガヤツリ	<i>Fuirena ciliaris</i>
ノグサ	<i>Schoenus apogon</i>
ホタルイ	<i>Scirpus juncooides</i> var. <i>hotarui</i>
イヌフトイ	<i>Scirpus litoralis</i>
サンカクイ	<i>Scirpus triqueter</i>
ナガボフトイ (ナンゴクフトイ)	<i>Scirpus validus</i>
ホソバシンジュガヤ	<i>Scleria biflora</i>
ケシンジュガヤ	<i>Scleria rugosa</i> var. <i>rugosa</i>
エンレイショウキラン	<i>Acanthephippium pictum</i>
タイワンショウキラン	<i>Acanthephippium sylhetense</i>
キバナシユスラン	<i>Anoectochilus formosanus</i>
オオギミラン (イナバラ)	<i>Anoectochilus inabai</i>
コウシュンシユスラン	<i>Anoectochilus koshunensis</i>
シコウラン	<i>Bulbophyllum macraei</i>
タイワンエビネ	<i>Calanthe formosana</i>
アリサンムヨウラン (アノマラン、ヨシヒサラン)	<i>Cheirostylis takeoi</i>
ナギラン	<i>Cymbidium lancifolium</i>
オオオサラン (ホザキオサラン)	<i>Eria corneri</i>
ツボミヤツシロラン	<i>Gastrodia clausa</i>
クニガミシユスラン	<i>Goodyera sonoharae</i>
ダイサギソウ	<i>Habenaria dentata</i>
テツオサギソウ (ナガバサギソウ)	<i>Habenaria stenopetala</i>
オオカゲロウラン (テリハカゲロウラン)	<i>Hetaeria oblongifolia</i>
クロムヨウラン (ムラサキムヨウラン)	<i>Lecanorchis nigricans</i>
コ克蘭	<i>Liparis nervosa</i>
ササバラ	<i>Liparis paradoxa</i>
ホザキヒメラン	<i>Malaxis latifolia</i>
ムカゴサイシン (ムカゴサイシンモドキを含む)	<i>Nervilia nipponica</i>
クスクスヨウラクラン (アリサンヨウラクラン)	<i>Oberonia arisanensis</i>
カクチョウラン (カ克蘭)	<i>Phaius tankervilleae</i>
イリオモテトンボソウ	<i>Platanthera stenoglossa</i> subsp. <i>iriomotensis</i>
クモラン	<i>Taeniophyllum aphyllum</i>
ヒメトケンラン	<i>Tainia laxiflora</i>
ハガクレナガミラン	<i>Thrixspermum fantasticum</i>
ヤクシマネツタイラン	<i>Tropidia nipponica</i>
ミソボシラン (トミヤマフタオラン)	<i>Vrydagzynea nuda</i>
ジャコウキヌラン (ジャコウシユスラン)	<i>Zeuxine odorata</i>
オキナワハイネズ	<i>Juniperus taxifolia</i> var. <i>lutchuensis</i>
ウバメガシ	<i>Quercus phillyraeoides</i>
ウラジロガシ	<i>Quercus salicina</i>
ヤエヤマラセイタソウ	<i>Boehmeria yaeyamensis</i>
サンショウソウ	<i>Pellionia minima</i>
オオサンショウソウ	<i>Pellionia radicans</i>
ミヤマミズ	<i>Pilea petiolaris</i>
ニンドウバノヤドリギ	<i>Scurrula longicerifolius</i>
キレツチトリモチ	<i>Balanophora wrightii</i>
ハマツメクサ	<i>Sagina maxima</i>
オカヒジキ	<i>Salsola komarovii</i>
ケスナヅル	<i>Cassytha filiformis</i> var. <i>duipraticola</i>
ウマノアシガタ	<i>Ranunculus japonicus</i>
ケナシサダソウ	<i>Peperomia japonica</i> f. <i>okinawensis</i>
コウシュンウマノスズクサ	<i>Aristolochia tubiflora</i>
オオクサアジサイ	<i>Cardiandra alternifolia</i> subsp. <i>mollendorffii</i>
ヤエヤマヒメウツギ	<i>Deutzia yaeyamensis</i>
テンノウメ	<i>Osteomeles anthyllidifolia</i>
タイワンウラジロイチゴ	<i>Rubus swinhoei</i>
オキナワウラジロイチゴ (ホザキイチゴ)	<i>Rubus utchinensis</i>
ナハキハギ	<i>Dendrolobium umbellatum</i>
ボウコツルマメ	<i>Glycine tabacina</i>

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コチョウインゲン	<i>Vigna adenantha</i>
ボロジノニシキソウ	<i>Euphorbia sparrmanni</i>
ダイトウセイシボク	<i>Excoecaria formosana</i> var. <i>daitoinsularis</i>
ヤマアイ	<i>Mercurialis leiocarpa</i>
シラキ	<i>Sapium japonicum</i>
ヒレザンショウ	<i>Zanthoxylum beecheyanum</i>
ササキカズラ	<i>Rysopterys timoriensis</i>
コウシュンカズラ	<i>Tristellateia australasiae</i>
リュウキュウツルマサキ	<i>Euonymus fortunei</i> var. <i>austroliukiensis</i>
オキナワツゲ	<i>Buxus liukiensis</i>
クサミズキ	<i>Nothapodytes foetida</i>
ヤエヤマハマナツメ	<i>Colubrina asiatica</i>
ハテルマカズラ (コンペイトウヅルを含む)	<i>Triumfetta procumbens</i>
ヤクシマスミレ	<i>Viola iwagawai</i>
コウトウシュウカイドウ	<i>Begonia fenicis</i>
コバノミヤマノボタン	<i>Bredia okinawensis</i>
ヒルギモドキ	<i>Lumnitzera racemosa</i>
ケミズキンバイ	<i>Ludwigia adscendens</i>
ウスゲチョウジタデ	<i>Ludwigia epilobioides</i> subsp. <i>greatrexii</i>
アオキ	<i>Aucuba japonica</i>
ヤエヤマヤマボウシ	<i>Cornus hongkongensis</i>
ムニンハマウド	<i>Angelica japonica</i> var. <i>boninensis</i>
モミジチドメ (タカサゴノチドメ)	<i>Hydrocotyle batrachium</i>
サキシマツツジ	<i>Rhododendron amanoi</i> var. <i>amanoi</i>
セイシカ	<i>Rhododendron latoucheae</i>
コバノアカテツ	<i>Planchonella obovata</i> var. <i>dubia</i>
ヤエヤマヒイラギ (イリオモテヒイラギ)	<i>Osmanthus heterophyllus</i> var. <i>iriomotensis</i>
ヤナギバモクセイ	<i>Osmanthus okinawensis</i>
リュウキュウホウライカズラ	<i>Gardneria liukiensis</i>
シマアケボノソウ	<i>Swertia makinoana</i>
ヒメシロアサザ	<i>Nymphoides coreana</i>
ゴムカズラ	<i>Ecdysanthera utilis</i>
キジョラン	<i>Marsdenia tomentosa</i>
ケナシツルモウリンカ	<i>Tylophora tanakae</i> var. <i>glabrescens</i>
ヒロハケニオイグサ	<i>Hydiotis verticillata</i>
ニコゲルリミノキ	<i>Lasianthus bunzanensis</i>
ヤエヤマアオキ	<i>Morinda citrifolia</i>
ヘツカニガキ	<i>Sinoadina racemosa</i>
ハマネナシカズラ	<i>Cuscuta chinensis</i>
マルバアサガオガラクサ	<i>Evolvulus alsinoides</i>
アツバアサガオ	<i>Ipomoea stolonifera</i>
オオバケアサガオ	<i>Lepistemon binectariferum</i> var. <i>trichocarpum</i>
オオバハマアサガオ	<i>Stictocardia tiliifolia</i>
リュウキュウチシャノキ	<i>Ehretia dichotoma</i>
オキナワヤブムラサキ	<i>Callicarpa oshimensis</i> var. <i>okinawensis</i>
ルゾンハマクサギ	<i>Premna nauseosa</i>
ヤエヤマハマゴウ	<i>Vitex bicolor</i>
イヌコウジュ	<i>Mosla punctulata</i>
ユキミソウ (ミゾコウジュ)	<i>Salvia plebeia</i>
コナミキ	<i>Scutellaria guilielmi</i>
ケナシイヌゴマ (リュウキュウイヌゴマ)	<i>Stachys riederi</i> var. <i>japonica</i>
ヤエヤマズコウジュ	<i>Suzukia luchuensis</i>
エナシシソクサ	<i>Limnophila fragrans</i>
スズメノハコベ	<i>Microcarpaea minima</i>
ヒキヨモギ	<i>Siphonostegia chinensis</i>
ツノギリソウ	<i>Hemiboea bicornuta</i>
マツムラソウ	<i>Titanotrichum oldhami</i>
ミカワタヌキモ (イトタヌキモ)	<i>Utricularia exoleta</i>
ハマジンチョウ	<i>Myoporum bontioides</i>
ヒメスイカズラ	<i>Lonicera japonica</i> var. <i>miyagusukiana</i>
ナガバハグマ	<i>Ainsliaea oblonga</i>
オキナワギク	<i>Aster miyagii</i>
タウコギ	<i>Bidens tripartita</i>
モクビヤッコウ	<i>Crossostephium chinense</i>
ヤナギニガナ (アツバニガナ)	<i>Ixeris laevigata</i>
コケタンポポ	<i>Solenogyne mikadoi</i>
マルミスブタ (オオスブタ)	<i>Blyxa aubertii</i>

コスブタ (スブタ)	<i>Blyxa echinosperma</i>
ウミシヨウブ	<i>Enhalus acoroides</i>
オオミズオオバコ (ミズオオバコ)	<i>Ottelia alismoides</i>
マツバウミジグサ	<i>Halodule pinifolia</i>
コアマモ	<i>Zostera japonica</i>
コシヨウジョウバカマ (ヒメシヨウジョウバカマ、シマシヨウジョウバカマ)	<i>Heloniopsis kawanoi</i>
オオシロシヨウジョウバカマ	<i>Heloniopsis leucantha</i>
タヌキアヤメ	<i>Philydrum lanuginosum</i>
タチコウガイゼキシヨウ	<i>Juncus krameri</i>
コウガイゼキシヨウ (ヒラコウガイゼキシヨウ、ヒロハノコモチゼキシヨウ)	<i>Juncus leschenaultii</i>
ツククサ	<i>Commelina communis</i> var. <i>communis</i>
ザルゾコミヨウガ	<i>Pollia secundiflora</i>
ヤマヌカボ	<i>Agrostis clavata</i>
オオマツバシバ	<i>Aristida takeoi</i>
イリオモテガヤ	<i>Chikusichloa brachyanthera</i>
ヒトタバメヒシバ	<i>Digitaria pruriens</i>
ヤエガヤ	<i>Hackelochloa granularis</i>
ハイチゴザサ	<i>Isachne nipponensis</i>
ミヤマササガヤ	<i>Microstegium nudum</i>
トキワスキ	<i>Miscanthus floridulus</i>
オキナワミゾイチゴツナギ	<i>Poa acroleuca</i> var. <i>ryukyuensis</i>
オニシバ	<i>Zoysia macrostachya</i>
コオニシバ	<i>Zoysia sinica</i> var. <i>sinica</i>
シラスゲ	<i>Carex alopecuroides</i>
タイワンカンスゲ	<i>Carex longistipes</i>
サコスゲ	<i>Carex sakanis</i>
オニクグ	<i>Cyperus javanicus</i>
スナハマスゲ	<i>Cyperus stolonifer</i>
オオハリイ	<i>Eleocharis congesta</i> var. <i>congesta</i>
ハリイ	<i>Eleocharis congesta</i> var. <i>japonica</i>
ミスミイ	<i>Eleocharis fistulosa</i>
トクサイ	<i>Eleocharis ochrostachys</i>
ヒメヒラテンツキ	<i>Fimbristylis autumnalis</i>
オオアゼテンツキ	<i>Fimbristylis bisumbellata</i>
アンベライ (ネビキグサ)	<i>Machaerina rubiginosa</i>
トラノハナヒゲ	<i>Rhynchospora brownii</i>
ヒメホタルイ	<i>Scirpus lineolatus</i>
クロミノシンジュガヤ	<i>Scleria sumatrensis</i>
オキナワチドリ	<i>Amitostigma lepidum</i>
タネガシマムヨウラン	<i>Aphyllorchis montana</i>
ナリヤラン	<i>Arundina graminifolia</i>
マメツタラン	<i>Bulbophyllum drymoglossum</i>
レンギョウエビネ	<i>Calanthe lyroglossa</i>
オナガエビネ (オキナワエビネ、リュウキュウエビネ)	<i>Calanthe masuca</i>
ツルラン	<i>Calanthe triplicata</i>
アカバシスラン (タネガシマカイロラン、リュウキュウカイロラン)	<i>Cheirostylis liukuensis</i>
バイケイラン (チクセツラン)	<i>Corymborkis veratrifolia</i>
ユウレイラン	<i>Didymoplexis pallens</i>
タシロラン	<i>Epipogium roseum</i>
リュウキュウセッコク	<i>Eria ovata</i>
エダウチヤガラ	<i>Eulophia graminea</i>
イモネヤガラ	<i>Eulophia zollingeri</i>
タカツラン	<i>Galeola altissima</i>
カシノキラン	<i>Gastrochilus japonicus</i>
コンジキヤガラ	<i>Gastrodia javanica</i>
ハルザキヤツシロラン (ヤンバルヤツシロランを含む)	<i>Gastrodia nipponica</i>
トサカメオトラン	<i>Geodorum densiflorum</i>
ナンバンキンギンソウ	<i>Goodyera grandis</i>
カゴメラン	<i>Goodyera hachijoensis</i> var. <i>matsumurana</i>
ヒゲナガキンギンソウ	<i>Goodyera longibracteata</i>
シマシスラン (オオシスラン)	<i>Goodyera viridiflora</i>
リュウキュウサギソウ (ナメラサギソウ)	<i>Habenaria longidenticulata</i>

ヤクシマアカシスラン
 オキナワムヨウラン
 チケイラン
 ヤエヤマヒトツボクロ (アオイボクロ、ヤエヤマ
 クマガイソウ)
 コウトウシラン
 イリオモテムヨウラン
 アコウネッタイラン
 ヤクシマヒメアリドオシラン
 アオジクキヌラン
 カゲロウラン
 イシガキキヌラン

準絶滅危惧 (NT)

ムクイヌビワ
 クニガミサンショウヅル
 ケイタオミズ (アリサンサンショウソウ)
 リュウキュウツチトリモチ
 ナツノウナギツカミ
 ホソバノウナギツカミ
 マルバニッケイ (コウチニッケイ)
 オキナワヤマコウバシ (オキナワコウバシ)
 ダイトウシロダモ
 オオツツラフジ
 ハンゲショウ
 オモロカンアオイ
 エクボサイシン (エクボカンアオイ)
 サキシマヒサカキ
 アリサンバライチゴ
 コウシュンモダマ
 ミヤコジマツルマメ
 ワニグチモダマ
 ナガバコバンモチ
 イシガキカラスウリ
 ミズガンピ
 マヤブシキ (ハマザクロ)
 コニシハイノキ
 ナタオレノキ
 オオソナレムグラ
 ヒルギダマシ
 アツバクコ
 サイヨウシャジン
 ホソバウミジグサ
 ウミジグサ (ニラウミジグサ)
 シオニラ (ボウバアママ)
 コヤブランモドキ
 ホソバツユクサ
 チャボチヂミザサ
 ヤエヤマヤシ
 オキナワヒメナキリ
 タマハリイ
 タイワンヒデリコ
 イリオモテクマタケラン
 ツユクサシスラン
 タカサゴサギソウ
 ボウラン (タカサゴボウランを含む)

情報不足 (DD)

ホソバノキミズ (オオキミズ)
 オトギリマオ
 コウトウウラジロマオ
 イワガネ
 タイワンヤマモガシ
 アオモジ
 コバノボタンヅル
 ホウライツツラフジ
 ヨツバリマツモ
 イシモチソウ
 スナジマメ

Hetaeria yakusimensis
Lecanorchis triloba
Liparis bootanensis
Nervilia aragoana
Spathoglottis plicata
Stereosandra javanica
Tropidia calcarata
Vexillabium yakushimense
Zeuxine affinis
Zeuxine agyokuana
Zeuxine flava

Ficus irisana
Elatostema suzukii
Pellionia keitaoensis
Balanophora fungosa
Persicaria dichotoma
Persicaria hastato-auriculata
Cinnamomum daphnoides
Lindera communis var. *okinawensis*
Neolitsea sericea var. *argentea*
Sinomenium acutum
Saururus chinensis
Asarum dissitum
Asarum gelasinum
Eurya sakishimensis
Rubus rosaefolius var. *formosanus*
Entada phaseoloides
Glycine koidzumii
Mucuna gigantea
Elaeocarpus multiflorus
Trichosanthes ishigakiensis
Pemphis acidula
Sonneratia alba
Symplocos cochinchinensis subsp. *laurina*
Osmanthus insularis
Hedyotis strigulosa var. *luxurians*
Avicennia marina
Lycium sandwicense
Adenophora triphylla
Halodule tridentata
Halodule uninervis
Syngonium isoetifolium
Liriope muscari var. *stolonifera*
Commelina communis var. *ludens*
Oplismenus undulatifolius var. *microphyllus*
Satakentia liukiensis
Carex sacrosancta var. *tamakii*
Eleocharis geniculata
Fimbristylis miliacea subsp. *koidzumiana*
Alpinia flabellata
Goodyera foliosa
Habenaria formosana
Luisia teres

Elatostema lineolatum var. *majus*
Gonostegia pentandra var. *hypericifolia*
Maoutia setosa
Oreocnide frutescens
Helicia formosana
Litsea cubeba
Clematis pierotii
Pericampylus formosanus
Ceratophyllum demersum var. *quadriscopinum*
Drosera peltata var. *nipponica*
Zornia cantoniensis

フザンショウ	<i>Zanthoxylum armatum</i> var. <i>subtrifoliolatum</i>
ホザキサルノオ (ウスバサルノオ)	<i>Hiptage benghalensis</i>
タイワンフシノキ (タイワンヌルデ)	<i>Rhus javanica</i> var. <i>javanica</i>
イヌソヨゴ	<i>Ilex kusanoi</i>
ハマナツメ	<i>Paliurus ramosissimus</i>
ノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> var. <i>heterophylla</i>
アカミノヤブガラシ	<i>Cayratia yoshimurai</i>
サンカクヅル	<i>Vitis flexuosa</i>
フウセンアカメガシワ	<i>Kleinhovia hospita</i>
ミズマツバ	<i>Rotala pusilla</i>
ホザキカシグサ (マルバキカシグサ)	<i>Rotala rotundifolia</i>
ミヤマハシカンボク	<i>Blastus cochinchinensis</i>
オオバチドメ	<i>Hydrocotyle nepalensis</i>
ホウライアオカズラ	<i>Gymnema sylvestre</i>
タイワンキジョラン (イリオモテキジョラン)	<i>Marsdenia formosana</i>
シソノミグサ	<i>Knoxia corymbosa</i>
ハリザクロ (ハリクチナシ)	<i>Randia spinosa</i>
カワリバアサガオ	<i>Ipomoea polymorpha</i>
マルバノホロシ	<i>Solanum maximowiczii</i>
コフジウツギ (ウラジロフジウツギ)	<i>Buddleja curviflora</i>
ヒメクチバシグサ	<i>Lindernia tenuifolia</i>
ケウリクサ	<i>Lindernia viscosa</i>
オオナンバンギセル	<i>Aeginetia sinensis</i>
ヤブタバコ	<i>Carpesium abrotanoides</i>
ヤマヒヨドリバナ (ヤマヒヨドリ)	<i>Eupatorium variabile</i>
オグルマ	<i>Inula britannica</i> subsp. <i>japonica</i>
タカサゴソウ	<i>Ixeris chinensis</i> subsp. <i>strigosa</i>
ヨメナ	<i>Kalimeris yomena</i>
コメナモミ	<i>Siegesbeckia orientalis</i> subsp. <i>glabrescens</i>
カンサイタンポポ	<i>Taraxacum japonicum</i>
コバノヒルムシロ (トゲミズヒキモ)	<i>Potamogeton cristatus</i>
オオハマオモト	<i>Crinum asiaticum</i> var. <i>asiaticum</i>
キリシマシャクジョウ	<i>Burmannia liukiensis</i>
アオコウガイゼキショウ	<i>Juncus papillosus</i>
クロホシクサ	<i>Eriocaulon parvum</i>
ヌカボ	<i>Agrostis exarata</i> subsp. <i>nukabo</i>
タイワンイヌビエ	<i>Echinochloa glabrescens</i>
ヒメスズメガヤ	<i>Eragrostis pilosissima</i>
ウンヌケモドキ	<i>Eulalia quadrinervis</i>
コバノウシノシッペイ	<i>Hemarthria compressa</i>
コツブチゴザサ	<i>Isachne globosa</i> var. <i>brevispicula</i>
ウスギキンエノコロ	<i>Setaria cinerea</i>
コササキビ	<i>Setaria plicata</i>
ヒメウシノシッペイ	<i>Thaumastochloa cochinchinensis</i>
ヤエヤマクワズイモ	<i>Alocasia atropurpurea</i>
イトハナビテンツキ	<i>Bulbostylis densa</i>
アゼナルコスゲ (アゼナルコ)	<i>Carex dimorpholepis</i>
コウボウムギ	<i>Carex kobomugi</i>
タイワンヒエスゲ	<i>Carex manca</i> subsp. <i>takasagoana</i>
フサスゲ (シラホスゲ)	<i>Carex metallica</i>
ゴウソ	<i>Carex pruinosa</i> subsp. <i>maximowiczii</i>
ビトウクグ	<i>Cyperus compactus</i>
オオガヤツリ (オオハナビガヤツリ)	<i>Cyperus imbricatus</i>
タイトウクグ	<i>Cyperus sesquiflorus</i> var. <i>subtriceps</i>
タカオガヤツリ	<i>Cyperus tuberosus</i>
セイタカハリイ	<i>Eleocharis attenuata</i>
ヤリハリイ	<i>Eleocharis congesta</i> var. <i>subvivipara</i>
シカクイ	<i>Eleocharis wichurai</i> var. <i>wichurai</i>
オキナワイヌシカクイ (リュウキュウハリイ)	<i>Eleocharis wichurai</i> var. <i>liukiensis</i>
チクシテンツキ	<i>Fimbristylis dichotoma</i> var. <i>tikushiensis</i>
ビロードテンツキ	<i>Fimbristylis sericea</i>
オニテンツキ	<i>Fimbristylis thomsonii</i>
ヒロハノカラシ (ダルマエビネ)	<i>Calanthe alismaefolia</i>
キエビネ	<i>Calanthe striata</i>
タコガタサギソウ (ヒュウガトンボ、ヒメトンボ)	<i>Habenaria sumatrana</i> var. <i>triangularis</i>
ヨウラクラン	<i>Oberonia japonica</i>

〈 維 管 束 植 物 (シダ植物) 〉

絶滅 (EX)

ゼンマイ
ヒメウラジロ
トラノオシダ
ウスバシダモドキ
クリハラン

Osmunda japonica
Cheilanthes argentea
Asplenium incisum
Tectaria dissecta
Neocheiropteris ensata

絶滅危惧 I A類 (CR)

ボウカズラ
ヒメヨウラクヒバ
リュウキュウヒモラン
フユノハナワラビ
ミヤコジマハナワラビ
コブラン
ホウライハナワラビ
フサシダ
マルバコケシダ
セイタカイワヒメワラビ (シマイワヒメワラビ)
オオイワヒメワラビ
アイノコホラシノブ
ワラビツナギ
スキヤクジャク
イワガネソウ
シマタキミシダ
アシガタシダ
ヒメタニワタリ
ウスバクジャク
カミガモシダ
イエジマチャセンシダ
トキワトラノオ
ウスイロホウビシダ
オトメシダ
アオガネシダ
オキナワアツイタ
コモチナナバケシダ
ナガバウスバシダ (サキミウスバシダ)
クワレシダ
リュウキュウキンモウワラビ
カザリシダ
タイワンクリハラン
ハカマウラボシ
シナノキシノブ (オオクリハラン)
タイワンアオネカズラ (シマアオネカズラ)
ヒトツバマメヅタ
タイワンビロードシダ

Lycopodium laxum
Lycopodium salvinioides
Lycopodium sieboldii var. *christensenianum*
Botrychium ternatum
Helminthostachys zeylanica
Ophioglossum pendulum
Sceptridium formosanum
Schizaea digitata
Trichomanes bimariginatum
Hypolepis alpina
Hypolepis tenuifolia
Sphenomeris intermedia
Arthropteris palisotii
Adiantum diaphanum
Coniogramme japonica
Antrophyum formosanum
Pteris grevilleana
Asplenium cardiophyllum
Asplenium cheilosorum
Asplenium oligophlebium var. *oligophlebium*
Asplenium oligophlebium var. *iezimense*
Asplenium pekinense
Asplenium subnormale
Asplenium tenerum
Asplenium wilfordii
Elaphoglossum callifolium
Tectaria fauriei
Tectaria kusukusensis
Diplazium esculentum
Hypodematum fordii
Aglanomorpha coronans
Colysis hemionitidea
Drynaria fortunei
Microsorium fortunei
Polypodium formosanum
Pyrrosia adnascens
Pyrrosia linearifolia var. *heterolepis*

絶滅危惧 I B類 (EN)

ミゾシダ
ヨウラクヒバ
イワヒバ
タカサゴキジノオ
カンザシワラビ
キクモバホラゴケ
ナンバンホラゴケ (シャムオニホラゴケ)
ヒメチヂレコケシノブ
ウスバイシカグマ
ヒメホングウシダ (コバノエダウチホングウシダ)
イヌイノモトソウ
マキノシダ
クルマシダ
ツルキジノオ
リュウキュウシダ
タヌキシダ
ムラサキベニシダ
ゲジゲジシダ
オキナワコクモウクジャク

Stegnogramma pozoi subsp. *mollissima*
Lycopodium phlegmaria
Selaginella tamariscina
Plagiogyria adnata
Schizaea dichotoma
Cephalomanes apiifolium
Cephalomanes obscurum var. *siamense*
Hymenophyllum denticulatum
Microlepis substrigosa
Lindsaea cambodgensis
Lindsaea ensifolia
Asplenium loriceum
Asplenium wrightii
Lomariopsis spectabilis
Dryopteris hasseltii
Dryopteris labordei
Dryopteris purpurella
Thelypteris decursive-pinnata
Diplazium virescens var. *okinawense*

絶滅危惧 II類 (VU)

ナンカクラン
オニトウゲシバ

Lycopodium hamiltonii
Lycopodium serratum var. *longipetiolatum*

コケカタヒバ	<i>Selaginella leptophylla</i>
イヌカタヒバ	<i>Selaginella moellendorffii</i>
イヌドクサ	<i>Equisetum ramosissimum</i>
リュウキュウキジノオ	<i>Plagiogyria koidzumii</i>
サキシマホラゴケ	<i>Cephalomanes atrovirens</i>
マメホラゴケ	<i>Crepidomanes kurzii</i>
マツバコケシダ	<i>Crepidomanes latemarginale</i>
ホソバコケシノブ	<i>Hymenophyllum polyanthos</i>
マメゴケシダ	<i>Trichomanes motleyi</i>
コウシュンシダ	<i>Microlepia obtusiloba</i>
ヒメシシラン	<i>Vittaria anguste-elongata</i>
シシラン	<i>Vittaria flexuosa</i>
ミミモチシダ	<i>Acrostichum aureum</i>
マツザカシダ	<i>Pteris nipponica</i>
オオタニワタリ	<i>Asplenium antiquum</i>
ラハオシダ	<i>Asplenium excisum</i>
オオギミシダ	<i>Woodwardia harlandii</i>
コミダケシダ	<i>Ctenitis eatoni</i> var. <i>iriomotensis</i>
カレンコウアミシダ	<i>Tectaria simonsii</i>
ヒメミゾシダ	<i>Stegnogramma gymnocarpa</i> subsp. <i>amabilis</i>
アミシダ	<i>Stegnogramma wilfordii</i>
タイワンハシゴシダ	<i>Thelypteris castanea</i>
ミミガタシダ	<i>Thelypteris subaurita</i>
ヒロハミヤマノコギリシダ (タカサゴノコギリシダ)	<i>Diplazium petri</i>
ハンコクシダ	<i>Diplazium pullingeri</i>
ニセシロヤマシダ	<i>Diplazium taiwanense</i>
ノコギリシダ	<i>Diplazium wichurae</i>
ホコザキノコギリシダ	<i>Diplazium yaoshanense</i>
タカウラボシ (ミズカザリシダ)	<i>Microsorium rubidum</i>
ヒメウラボシ	<i>Grammitis dorsipila</i>
シナムカデシダ	<i>Prosaptia kanashiroi</i>
ツルカタヒバ	<i>Selaginella biformis</i>
ヒメホラゴケ	<i>Crepidomanes humilis</i>
コケハイホラゴケ (ニセアミホラゴケ)	<i>Crepidomanes subclathratum</i>
リュウキュウコケシノブ	<i>Hymenophyllum riukiense</i>
ヤンバルフモトシダ	<i>Microlepia hookeriana</i>
タイワンホウビシダ	<i>Asplenium apogamum</i>
コウザキシダ	<i>Asplenium ritoense</i>
クシノハシダ	<i>Thelypteris jaculosa</i>
イブダケキノボリシダ (ノコギリキノボリシダ)	<i>Diplazium crassiusculum</i>
イワヒトデ	<i>Colysis elliptica</i>
コウラボシ	<i>Lepisorus uchiyamae</i>
ミツデヘラシダ	<i>Microsorium pteropus</i>
アツイタ	<i>Elaphoglossum yoshinagae</i>
ホソバシケチシダ	<i>Cornopteris banajaoensis</i>
デンジソウ	<i>Marsilea quadrifolia</i>

準絶滅危惧 (NT)

情報不足 (DD)

〈 蘚 苔 類 〉

絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i>
クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i>
ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i>
フトスジカタシロゴケ	<i>Calymperes crassinerve</i>
ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i>
フチドリコゴケ	<i>Pachyneuroopsis miyagii</i>
マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i>
タカサゴハイヒモゴケ	<i>Meteoropsis reclinata</i> var. <i>subreclinata</i>
イボミスジャバナゴケ	<i>Clastobryum cuculligerum</i>
ランヨウイボゴケ	<i>Taxithelium kerianum</i>
ヒメハシボソゴケ	<i>Taxithelium lindbergii</i>
シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i>
マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i>
リュウキュウカギホソエゴケ	<i>Radulina borbonica</i>
ミミヒラゴケ	<i>Calyptothecium recurvulum</i>

ハネエビスゴケ	<i>Himantocladium plumula</i>
セイナンヒラゴケ	<i>Neckeropsis calcicola</i>
エビスゴケ	<i>Neckeropsis cyclophylla</i>
マメハネゴケ (ヒメハネゴケ)	<i>Pinnatella ambigua</i>
モミノキゴケ	<i>Taiwanobryum anacamptolepis</i>
ウキゴケ (カズノゴケ)	<i>Riccia fluitans</i>
イチヨウウキゴケ (イチヨウウキクサ、イチヨウモ)	<i>Ricciocarpos natans</i>
イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i>
ヤエヤマシギバゴケ	<i>Neolepidozia mamillosa</i>
テララゴケ	<i>Telaranea neesii</i>
アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i>
トゲバウロコゴケ	<i>Heteroscyphus wettsteinii</i>
サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i>
キララヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea ceratilibula</i>
マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i>
ゴマダラクサリゴケ	<i>Stictolejeunea iwatsukii</i>
オガサワラキブリツノゴケ	<i>Dendroceros tubercularis</i>
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
シラガゴケモドキ	<i>Exostratum blumii</i>
ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolium</i>
イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i>
ジャバホウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i>
コイボホウオウゴケ	<i>Fissidens schwabei</i>
フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i>
キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i>
カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i>
キジノオゴケ	<i>Cyathophorum adiantum</i>
フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwaldii</i>
サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i>
トサノタスキゴケ	<i>Aerobryidium laosense</i>
ヒカゲノカズラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i>
リュウキュウイボゴケ	<i>Taxithelium liukuense</i>
カタナワゴケ	<i>Oedicleadium fragile</i>
ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i>
タガワヤバネゴケ	<i>Cylindrocolea tagawae</i>
ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i>
サケバキハネゴケ	<i>Plagiochila fordiana</i>
キヤスデゴケ	<i>Frullania gaudichaudii</i>
イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i>
アマカワヒメゴヘイゴケ	<i>Archilejeunea amakawana</i>
リュウキュウシゲリゴケ	<i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i>
オオシマヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea inflata</i>
ヤマトケクサリゴケ	<i>Cololejeunea schmidtii</i>
イヌイムシトリゴケ	<i>Colura inuii</i>
ツメクサリゴケ	<i>Stenolejeunea apiculata</i>
ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i>
準絶滅危惧 (NT)	
ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i>
ヒメハゴロモゴケ	<i>Circulifolium exiguum</i>
ホウライハゴロモゴケ	<i>Circulifolium microdendron</i>
トサヒラゴケ	<i>Neckeropsis obtusata</i>
オキナワサイハイゴケ	<i>Asterella wallichiana</i>
情報不足 (DD)	
ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i>
イボイボカタシロゴケ	<i>Calymperes strictifolium</i>
トゲバイバラゴケ	<i>Calypstrochaeta parviretis</i>
ミナミツガゴケ	<i>Distichophyllum montagneanum</i>
クロジクツガゴケ	<i>Distichophyllum nigricaulis</i>
イボエシノブゴケ	<i>Thuidium plumulosum</i>
タイワンケゴケ	<i>Helicodontium formosicum</i>
(和名無し)	<i>Aerobryopsis leptosigmata</i>
アブラハイゴケ	<i>Chaetomitrium papillifolium</i>
ムカシヤバネゴケ	<i>Cephalozia crispa</i>
トガリバクラマゴケモドキ	<i>Porella acutifolia</i> var. <i>acutifolia</i>
オキナワヤスデゴケ	<i>Frullania okinawensis</i>
ユーレンキララゴケ	<i>Cololejeunea yulensis</i>

ヤエヤマサンカクゴケ

Drepanolejeunea spicata

< 藻 類 (淡水藻類) >

— 緑 藻 —

絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

ウムトゥチュラノリ

Ulva limnetica

絶滅危惧 II 類 (VU)

エビヤドリモ
チョウチンミドロ

Cladogonium ogishimae
Dichotomosiphon tuberosus

— 紅 藻 —

絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

オオイシソウモドキ
イバラオオイシソウ
インドオオイシソウ
ミナミホソカワモズク
ヤエヤマカワモズク
ミナミイトカワモズク
イリオモテカワモズク
ミナミクロカワモズク
シマチスジノリ
オキチモズク

Compsopogonopsis japonica
Compsopogon aeruginosus
Compsopogon hookeri
Batrachospermum periplocum
Batrachospermum tortuosum var. *majus*
Kumanoa gracillima
Kumanoa iriomotensis
Kumanoa mahlacensis
Thorea gaudichaudii
Nemalionopsis tortuosa

絶滅危惧 II 類 (VU)

オオイシソウ
アオカワモズク
チャイロカワモズク

Compsopogon caeruleus
Batrachospermum helminthosum
Sheathia arcuata

準絶滅危惧 (NT)

タンスイベニマダラ

Hildenbrandia rivularis

— 車 軸 藻 —

絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

オウシャジクモ
イトシャジクモ
ケナガシャジクモ
コイトシャジクモ
アメリカシャジクモ
ハダシシャジクモ
チャボフラスコモ
トガリフラスコモ
ミルフラスコモ
ジュズフサフラスコモ
チルフラスコモ

Chara corallina var. *corallina*
Chara fibrosa subsp. *gymnopitys*
Chara fibrosa subsp. *benthamii*
Chara fibrosa subsp. *flaccida*
Chara sejuncta
Chara zeylanica
Nitella acuminata var. *capitulifera*
Nitella acuminata var. *subglomerata*
Nitella axilliformis
Nitella comptonii
Nitella microcarpa var. *microcarpa*

絶滅危惧 II 類 (VU)

シャジクモ
クサシャジクモ

Chara braunii
Chara vulgaris var. *vulgaris*

情報不足 (DD)

フシナシシャジクモ
ゲンカイイトシャジクモ
セツカイシャジクモ
チンバシャジクモ
コフラスコモ
アミダネフラスコモ (新称)

Chara corallina var. *kyusyensis*
Chara fibrosa var. *microstephana*
Chara vulgaris subsp. *eu-vulgaris*
Chara vulgaris subsp. *squamosa*
Nitella confervacea
Nitella dictyosperma

< 藻 類 (汽水藻類) >

— 緑 藻 —

準絶滅危惧 (NT)

モツレチョウチン

Boodleopsis pusilla

— 紅 藻 —

準絶滅危惧 (NT)

ヒロハアヤギヌ
アヤギヌ
セイヨウアヤギヌ

Caloglossa adhaerens
Caloglossa continua
Caloglossa leprieurii

ホソアヤギヌ
ヒメアヤギヌ
ササバアヤギヌ
タニコケモドキ

Caloglossa ogasawaraensis
Caloglossa postiae
Caloglossa vieillardii
Bostrychia simpliciuscula

＜ 藻 類 (海 藻 類) ＞

－ 黄 緑 藻 －

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ウミフシナシミドロ
カマクビウミフシナシミドロ (新称)

Vaucheria longicaulis
Vaucheria vipera

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

クビレミドロ

Pseudodichotomosiphon constrictus

－ 緑 藻 －

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ケイワズタ
ケブカフデモ
ホソエガサ

Caulerpa fastigiata
Dasycladus vermicularis
Acetabularia caliculus

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヒメフカミドリシオグサ
ヒナイワズタ
キザミズタ
イチイズタ
テングノハウチワ
オオハゴロモ
ウスガサネ

Pseudocladophora horii
Caulerpa brachypus f. *parvifolia*
Caulerpa subserrata
Caulerpa taxifolia
Avrainvillea riukuensis
Udotea argentea
Cymopolia vanbosseae

準絶滅危惧 (NT)

オオネダシグサ
ヒメミドリゲ
タンボヤリ
マガタマモ
ホソバロニア
アマミノクロキズタ
フササボテングサ
ソリハサボテングサ
ヒロハサボテングサ
コバノサボテングサ
コテングノハウチワ
イトゲノマユハキ
ヒナマユハキモ
スズカケモ
ハネモモドキ
ナガミズタマ
カタミズタマ
カサノリ

Rhizoclonium grande
Cladophoropsis fasciculata
Struvea okamurae
Boergesenia forbesii
Valoniopsis pachynema
Caulerpa scalpelliformis var. *denticulata*
Halimeda borneensis
Halimeda distorta
Halimeda macroloba
Halimeda micronesica
Avrainvillea erecta
Chlorodesmis caespitosa
Chlorodesmis haterumana
Tydemania expeditionis
Pseudobryopsis hainanensis
Bornetella nitida
Bornetella oligospora
Acetabularia ryukyuensis

情報不足 (DD)

ウスバアオノリ
ヤブレグサ
ミナミシオグサ
ダンツウシオグサ
クダネダシグサ
リュウキュウズタ
ツナサボテングサ
モロサボテングサ
ニセハウチワ
ニセヒメイチョウ
ヒメイチョウモドキ
ウスバハゴロモ

Ulva linza
Umbraulva japonica
Cladophora dotyana
Cladophora enomotoi
Siphonocladus tropicus
Caulerpa sp.
Halimeda cuneata
Halimeda fragilis
Rhipilia orientalis
Rhipiliopsis echinocaulos
Rhipiliopsis yaeyamensis
Udotea yamadae

－ 褐 藻 －

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

ウミボッス
ウミトラノオ

Nereia intricata
Sargassum thunbergii

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トゲミモク
ヒジキ

Sargassum denticarpum
Sargassum fusiforme

準絶滅危惧 (NT)	カラクサモク コバモク	<i>Sargassum pinnatifidum</i> <i>Sargassum polycystum</i>
	ヤバネモク ツクシモク マジリモク ナガミモク チュラシマモク キシウモク	<i>Hormophysa cuneiformis</i> <i>Sargassum assimile</i> <i>Sargassum carpophyllum</i> <i>Sargassum longifructum</i> <i>Sargassum ryukyuense</i> <i>Sargassum siliquosum</i>
情報不足 (DD)	ヒメヤハズ リュウキュウウミウチワ モズク カヤモノリ ヤツマタモク	<i>Dictyopteris repens</i> <i>Padina ryukyuana</i> <i>Nemacystus decipiens</i> <i>Scytosiphon lomentaria</i> <i>Sargassum patens</i>
— 紅 藻 —		
絶滅危惧 I 類 (CR+EN)	ハナヤナギ	<i>Chondria armata</i>
絶滅危惧 II 類 (VU)	ケコナハダ ベニモズク アケボノモズク ヌルハダ トゲキリンサイ ベニゴウシ エツキアヤニシキ カラゴロモ ヒメカラゴロモ フクレソゾ タカサゴソゾ	<i>Ganonema farinosum</i> <i>Helminthocladia australis</i> <i>Trichogloea requienii</i> <i>Trichogloeopsis mucosissima</i> <i>Eucheuma serra</i> <i>Haloplegma duperreyi</i> <i>Neomartensia flabelliformis</i> <i>Vanvoorstia coccinea</i> <i>Vanvoorstia pectabilis</i> <i>Laurencia marianensis</i> <i>Palisada robusta</i>
準絶滅危惧 (NT)	カモガシラノリ ジュズフサノリ ハイコナハダ ピリヒバ イソモッカ シオカワモッカ フクロフノリ フイリグサ カタメンキリンサイ ビャクシンキリンサイ キリンサイ モサオゴノリ リュウキュウオゴノリ ツクシハウズキ	<i>Dermonema pulvinatum</i> <i>Scinaia moniliformis</i> <i>Yamadaella caenomyce</i> <i>Corallina pilulifera</i> <i>Catenella caespitosa</i> <i>Catenella impudica</i> <i>Gloiopeltis furcata</i> <i>Halymenia dilatata</i> <i>Betaphycus gelatinus</i> <i>Eucheuma arnoldii</i> <i>Eucheuma denticulatum</i> <i>Gracilaria coronopifolia</i> <i>Gracilaria eucheumatoides</i> <i>Acrocystis nana</i>
情報不足 (DD)	コナハダモドキ ナンバンガラガラモドキ ホソバナガラガラモドキ エツキヒビロード ヨナグニソウ アツバノリ オカムラキリンサイ オオキリンサイ トサカノリ カタオゴノリ ナンカイオゴノリ オゴノリ ベニハウチワ	<i>Akalaphycus liagoroides</i> <i>Akalaphycus setchelliae</i> <i>Stenopeltis gracilis</i> <i>Gibsmithia hawaiiensis</i> <i>Yonagunia tenuifolia</i> <i>Sarcodia ceylanica</i> <i>Eucheuma okamurae</i> <i>Kappaphycus striatus</i> <i>Meristotheca papulosa</i> <i>Gracilaria edulis</i> <i>Gracilaria firma</i> <i>Gracilaria vermiculophylla</i> <i>Zellera tawallina</i>

3. 3 菌類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

〈子のう菌類〉

カテゴリー 分類群	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅のおそれ のある地域個 体群	情報不足	合計
初版 1996	0	0	1	0	3	4
改訂第2版 2006	10	5	7	0	0	22
改訂第3版 2018	7	5	0	0	6	18

〈担子菌類〉

カテゴリー 分類群	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅のおそれ のある地域個 体群	情報不足	合計
初版 1996	0	0	23	1	97	121
改訂第2版 2006	2	4	34	1	37	78
改訂第3版 2018	2	4	4	2	55	67

※初版のカテゴリーのうち、絶滅危惧種は絶滅危惧Ⅰ類、危急種は絶滅危惧Ⅱ類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

掲載種の選定については、改訂・沖縄県版レッドデータブック（沖縄県，2006）に掲載された菌類種を基に、レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）（環境省(編)，2015、以下レッドデータブック 2014)、国内のきのこを扱った文献、第2回改訂・沖縄県版レッドデータブック編集委員会及び菌類分科会の委員の経験と知見等を総合し、県内において希少性の高い種を選定した。

選定種のカテゴリー区分に関しては、レッドデータブック 2014に掲載されたレッドデータブックカテゴリー（環境省，2015）の日本版RDBカテゴリーに準じて、絶滅危惧Ⅰ類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧、絶滅のおそれのある地域個体群、情報不足の五つのカテゴリー（以下、カテゴリー）に区分したが、今回準絶滅危惧に該当する種はなかった。レッドデータブック 2014ではこれらのカテゴリーの他、絶滅と野生絶滅のカテゴリーがあるが、第2回改訂・沖縄県版レッドデータブックの菌類編では、改訂・沖縄県版レッドデータブックに準じ、次の理由でこれらカテゴリー区分をしていない。①子実体形成の頻度によりカテゴリーを区分しているが、調査時に子実体形成が認められない場合でも、菌類の本体である菌糸は植物の枯死体、リター層、あるいは土壌中などに生息していて、その後子実体を形成する場合があること、②菌類の本体である菌糸の直接観察や菌糸のみによる種の識別は困難であること、③県内に生育する菌類の十分な調査がなされてないこと、④沖縄県において過去から現在に至るまで菌類の記載が十分ではないこと、などにより、絶滅(EX)と野生絶滅(EW)のカテゴリーを適用することは適切ではないと判断した。

評価基準に関しては、数値基準による客観的評価が可能な定量的要件を適用することが好ましいが、菌類の場合、減少率等の数値による評価データが得られる種は全くなく、今回の改訂版でも定性的要件を重視した。

(2) 本改訂で明らかになったこと

選定した種の子実体形成の確認頻度が少ないことが、過去から現在に至って減少してきた結果か、あるいは以前から頻度が少ない種であったのかを判断するための過去の調査結果が乏しい。しかし、確認頻度の稀な希少種は、生態系の攪乱により、絶滅の危機に陥ることが懸念される。確認される子実体が少ない原因として、ミクロな開発行為や採集行為に起因する場合、あるいは、マクロの環境要因によるものがある。近年の地球規模の温暖化、その年ごとの気温の変化、降雨量、台風の影響などの気象要素も子実体発生には影響する。今回は、掲載種ごとにこれら要因を踏まえて、できる限り総合的に考察した。

執筆者 寺嶋 芳江（琉球大学熱帯生物圏研究センター・教授）

(3) 掲載種の解説

<子のう菌類>

1) 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

和名 : **イリオモテクモタケ**
 分類 : バッカクキン科 バッカクキン目
 学名 : *Cordyceps cylindrica* Petch
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、地表生トタテグモ類から生じ、地上生、単生、円筒状のタンポ型、地上部の高さ約 35 mm。結実部は柄の上端に生じ、13×3.7~4.0 mm、淡い淡黄褐色。柄は太い円柱形、径 2~3mm、白色で肉質、結実部との境はやや明瞭。子のう殻は埋生、長頸のあるフラスコ形、850~1000×200~225 μm、孔口は微突出する。宿主の表面は白色の菌糸膜で包まれる。不完全型はクモタケ (*Isaria atypicola* Yasuda)。

分布域 : 南西諸島、屋久島、九州~山口、トリニダード・トバゴ、タイ、ブラジル、中国。
 県内の分布 : 西表島。
 生育環境 : 西表島の照葉樹林の林床に生じる。
 生育状況 : イタジイ、ウラジロガシ等の林内に生息する地表生トタテグモ類に寄生し、6~7月に宿主の頭部から子実体を生じるが、観察されるのは稀である。
 学術的価値 : 不完全型であるクモタケは本州において普通に見られるが、完全型である本種の発生は、本州、沖縄双方において希少である。
 減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。
 備考 : 国内では、1971年に西表島ではじめて採集された。

文献 : 小林義雄・清水大典, 1983. イリオモテクモタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 213, pl. 34, fig. 140.
 丸山賢治, 1991. 西表島の冬虫夏草 基礎データ. 冬虫夏草, 11: 74-76.
 清水大典, 1983. 冬虫夏草の窓 82年. 冬虫夏草, 3: 9-10.
 清水大典, 1994. イリオモテクモタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 323-324, pl. 309, fig. 218.
 清水大典, 1997. イリオモテクモタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 211.
 日本冬虫夏草の会編, 2014. イリオモテクモタケ. “冬虫夏草生態図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 224.

執筆者名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

和名 : **ハエヤドリトガリツブタケ**
 分類 : バッカクキン科 バッカクキン目
 学名 : *Cordyceps iriomoteana* Kobayasi et Shimizu
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 子実体はツブタケ型、高さ 3~10 mm、結実部は上端か中央部、または虫の体表に直接生じ、裸生

型。子嚢果は卵形、600~700×370~400 μm。二次胞子は3~4×1 μm。

- 分 布 域 : 沖縄県。
 県内の分布 : 西表島(固有)。
 生育環境 : ハエの胸部背面、尾部に生じ、気生型。
 生育状況 : ハエに寄生し6~7月に葉上で宿主ハエの胸部背面か尾部から有柄の子実体を生じるか、体表面の一部を覆う白色の菌糸膜上に直接子のう果をつけ形成する。発生地は狭い地域に限られ、形成される子実体も極めて少ない。
 学術的価値 : 西表島のみから知られており、地理的分布および生態学上貴重な種である。
 減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。また、近年の採集例も認められていない。
 備 考 : 本種はハエに寄生する冬虫夏草の仲間であり、空中湿度の高い森林内でのみ見つかるまれな菌である。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。本種は分子系統解析による、属名、科の所属が確定していない。

- 文 献 : 佐藤, 2015. ハエヤドリトガリツブタケ. “環境省レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 510.
 小林義雄・清水大典, 1983. ハエヤドリトガリツブタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 204, pl. 31, fig. 125.
 清水大典, 1994. ハエヤドリトガリツブタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 318, pl. 299, fig. 212.
 清水大典, 1997. ハエヤドリトガリツブタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 203.
 Kobayasi, Y, and D. Shimizu, 1982. Cordyceps species from Japan 4. Bull. Nati. Sci. Mus., Tokyo, 8(3): 79-91.

執 筆 者 名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

- 和 名 : **ヒメハルゼミタケ**
 分 類 : バッカクキン科 バッカクキン目
 学 名 : *Cordyceps polycephala* Kobayasi et Shimizu
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

- 形態の特徴 : 子実体は、地中のイワサキヒメハルゼミの幼虫から生じ、地上生、単生、やや不規則なタンポ型、地上部の高さ20~25 mm、柄の上方で2~3分岐する。頭部は柄の上端または上部と側部に集合する裸生の子のう殻からなり、高さ1.2~2.0 mm、径2.2~3.3 mm。柄はやや不規則にゆがんだ円柱形で分岐し、径1~2 mm、平滑、繊維肉質、柄と結実部との境界は明瞭、地中部は暗色を帯び、直根状に宿主の虫体とつながる。子のう殻は卵形、850~880×600~650 μm、淡い桃黄色。子のうは径3.5~4 μm。二次胞子は3~4×1 μm。
 分 布 域 : 沖縄県。
 県内の分布 : 西表島(固有)。
 生育環境 : 亜熱帯照葉樹林の林床。河川近くのイタジイ、ウラジロガシ、フカノキ、モクダチバナ、リュウビソウなどが生育する湿り気のある林床に生じる傾向がある。
 生育状況 : 地中のイワサキヒメハルゼミの幼虫に寄生し、子実体は6~8月に宿主の頭部または口器から生じる。子実体の発生は極めて稀である。
 学術的価値 : 本種は西表島からのみ知られており、地理的分布の上で貴重である。生態学的研究はあまりなされてなく、今後多くの研究課題を残している。また、近年の採集例も知られていない。
 減少の要因 : 発生地における実態調査の記録がないため、本種の観察が稀である要因は不明である。

備考 : 採集の事例は1975年と1989年の2例がある。本種は日本固有と考えられ、初めて発見されたのは西表島シイラ川の湿地であり、再発見は同島の仲間川の上流からである。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。本種は分子系統解析による、属名、科の所属が確定していない。

文献 : 佐藤大樹, 2015. ヒメハルゼミタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 519.
 小林義雄・清水大典, 1983. ヒメハルゼミタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 161, pl. 12, fig. 41.
 清水大典, 1994. ヒメハルゼミタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 184, pl. 38, fig. 24.
 清水大典, 1997. ヒメハルゼミタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 47.

執筆者名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

和名 : **エダウチタンポタケ**

分類 : バッカクキン科 バッカクキン目

学名 : *Cordyceps ramosistipitata* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 子実体は、イラガの繭から生じ、単生、または2~8個を生じ、分枝性のあるタンポ型、地上部の高さ15~35 mm。結実部は柄の先端に生じ子のう殻の集合体、球形か偏球形で高さ2.2~3.5 mm、径2.5~5 mm、淡橙黄色。柄は不規則にゆがんだ円柱形、径1.5~2 mm、平滑で肉質、結実部との境は明瞭である。柄の先端または側枝に頂生する白色不稔の小頭を生じる。子のう殻は裸生、紡錘形、800~830×370~380 μm。子のうは径3~4 μm。二次胞子は3~4×1 μm。

分布域 : 沖縄県。

県内の分布 : 西表島 (固有)。

生育環境 : 亜熱帯照葉樹林の林床。イタジイ、ウラジロガシ、コミノクロツグ、オニヘゴ、リュウビンタイ、オオヘツカシダなどが繁茂する林床に発生する。

生育状況 : 大形のイラガの硬い繭に寄生し、11月~3月の低温期に子実体を形成する。子実体は稀に形成される。

学術的価値 : 西表島に固有の種で地理的分布の上で貴重である。生態学的に不明な点が多く、研究課題を多々残している。また、近年の採集例も知られていない。

減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。

備考 : イラガの硬繭に生じる日本固有の冬虫夏草。1979年、西表島ではじめて採集された。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。ラテン語の活用が間違っていたため、Sung et al. (2007)により、種小名の *ramoso* 部分が *ramosi* に修正された。分子系統解析による、属名、科の所属が確定していない。

文献 : 佐藤, 2015. エダウチタンポタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 520.
 小林義雄・清水大典, 1983. エダウチタンポタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 202, fig. 121.
 清水大典, 1994. エダウチタンポタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 212, pl. 94, fig. 61.
 清水大典, 1997. エダウチタンポタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 84.
 Kobayasi, Y, and D. Shimizu, 1983. *Cordyceps* species from Japan 6. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, 9(1): 1-21.
 Sung, G-H., N. L. Hywel-Jones, J-M. Sung, J. J. Luangsa-ard, B. Shrestha and J. W. Spatafora, 2007. Phylogenetic classification of *Cordyceps* and the clavicipitaceous fungi. Stud. Mycol., 57: 5-59. DOI:

10.3114/sim. 2007.57.01.

執筆者名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

和名 : **アカエノツトノミタケ**

分類 : バツカクキン科 バツカクキン目

学名 : *Cordyceps rubiginosostipitata* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形態の特徴 : 子実体は、甲虫の幼虫から生じ、地上生、単生、ツトの実型、地上部の高さ 36~48 mm。結実部は柄の上部に生じ、やや膨らみのある円筒形、淡いチョコレート色、高さ 6~8 mm、径 1~1.8 mm。柄は円柱形、暗赤色で硬い肉質、径 1 mm、結実部との境は明瞭、先端は結実部の上部から尾状の突起となって伸びる。子のう殻は埋生、洋ナシ形、420~450×170~200 μm、孔口は細点状に密布する。子のうは径 5 μm。二次胞子は 4~5×1.5 μm。

分布域 : 沖縄県。

県内の分布 : 西表島(固有)。

生育環境 : 河川沿いに広がる亜熱帯照葉樹林の平坦な砂質土壌の林床に生じる。

生育状況 : イタジイ、コミノクロツグ、オニヘゴ、リュウビンタイなどが生育する林床で、甲虫の幼虫の胸部から生じる。6~7月に発生するが、極めて稀である。

学術的価値 : 本種は西表島に固有の種で地理的分布の上で貴重である。また、稀に採集されるため、本種の生態については不明な点を多々残している。近年では 2005 年に発生が確認されている。

減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。

備考 : 1980 年に西表島で採集され、1984 年に同島の仲間川上流で再発見された日本固有の冬虫夏草。冬虫夏草の中でもまれな菌である。野外での発見・採集は容易ではない。

文献 : 佐藤, 2015. アカエノツトノミタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 521.
 小林義雄・清水大典, 1983. アカエノツトノミタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 222, pl. 39, fig. 163.
 清水大典, 1994. アカエノツトノミタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 256-257, pl. 182, fig. 122.
 清水大典, 1997. アカエノツトノミタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 135.
 宇梶清一, 2006. 日本冬虫夏草の会 25 周年記念事業 第 28 次西表島調査報告. “冬虫夏草 26 号” 日本冬虫夏草の会. 19-24.

執筆者名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

和名 : **サキシマヤドリバエタケ**

分類 : バツカクキン科 バツカクキン目

学名 : *Cordyceps sakishimensis* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形態の特徴 : 子実体は、葉上のハエに寄生したハエヤドリタケの老成した子実体上に生じ、円柱形、長さ 6~7 mm、白色、柄の先端に不実の球状体を生じるコケシ形、または先が次第に細くなって尖る。子のう殻は裸生、柄の中央部、あるいは全面に密生し、白色、卵形、500×250~260 μm、孔口部は円錐状に突

出している。二次胞子は4~6×1 μm。

- 分 布 域 : 沖縄県。
- 県内の分布 : 西表島（固有）。
- 生 育 環 境 : イタジイ、ウラジログシなどが生育する河川流域の亜熱帯照葉樹林内の葉上で、双翅類の成虫に寄生した菌類に生じる。
- 生 育 状 況 : ハエに寄生したハエヤドリタケ (*Cordyceps dipterigena* 冬虫夏草の一種) の老成した子実体に重複寄生し、7~8月に子実体を生じるが、観察されるのは極めて稀である。
- 学 術 的 価 値 : 西表島に固有の種で、地理的分布の上で貴重である。子実体の発生は僅少のため、観察事例が少なく、生態学的な多くの研究課題を残している。また、近年の採集例も知られていない。
- 減 少 の 要 因 : 本種が少ない要因は不明である。
- 備 考 : ハエヤドリタケ (*Cordyceps dipterigena*) の老成した子実体上に重複寄生的に発生する。1971年に西表島ではじめて採集された。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。分子系統解析による、属名、科の所属が確定していない。
- 文 献 : 佐藤, 2015. サキシマヤドリバエタケ. レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類), 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 523.
小林義雄・清水大典, 1983. サキシマヤドリバエタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 200, p1. 27, fig. 117.
清水大典, 1994. サキシマヤドリバエタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 318, p1. 297, fig. 211.
清水大典, 1997. サキシマヤドリバエタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 201.
- 執 筆 者 名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

和 名 : シロアリタケ

分 類 : バッカクキン科 バッカクキン目

学 名 : *Cordyceps termitophila* Kobayasi et Shimizu

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 子実体は、地中のシロアリから生じ、通常単生、まれに2個生じ、太い針形、地上部は40~130 mm、淡紅紫色をおび、結実部は柄の上半部に生じ、ツトの実型、高さ15~40 mm、径1.2~2 mm。柄は円柱形、径1~1.5 mm、先端は結実部の上に長く伸び、地中部も長い、結実部との境はやや不明瞭。子のう殻は埋生、卵形、250~270×150~160 μm、淡黄白色の地に淡黄褐色の孔口が微突出する。子のうは径8.5~10 μm。子のう胞子は75~93×3~3.5 μm。二次胞子に分裂しない。

分 布 域 : 南西諸島、台湾。

県内の分布 : 西表島。

生 育 環 境 : イタジイ、ウラジログシなどが生育する亜熱帯照葉樹林の林床に発生する。

生 育 状 況 : 地中のシロアリに寄生し胸部背面、頭部、腹部から子実体を生じる。子実体は地上生で6~7月に発生する。発生は極めて稀である。

学 術 的 価 値 : 国内では西表島のみから知られ、地理的分布の上で貴重である。観察事例が僅少で、本種の生態に関しては多くの研究課題を残している。また、近年の採集例も知られていない。

減 少 の 要 因 : 本種が少ない要因は不明である。

備 考 : シロアリに寄生する極めて珍しい昆虫病原菌である。日本と台湾以外では記録されていない。日本では、1971年、西表島ではじめて採集された。冬虫夏草の仲間で、野外での発見・採集は容易ではない。Sung et al. (2007) により、属名は変わらずノムシタケ科に移された。

- 文 献 : 佐藤, 2015. シロアリタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 525.
 小林義雄・清水大典, 1983. シロアリタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 145, pl. 3, fig. 13.
 清水大典, 1994. シロアリタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 314-315, pl. 290, fig. 207.
 清水大典, 1997. シロアリタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 195.
 Sung, G-H., N. L., Hywel-Jones, J-M. Sung, J. J. Luangsa ard, B. Sheresta ha and J. W. Spatafora, 2007. "Phylogenetic classification of Cordyceps and the clavicipitaceous fungi. Stud. Mycol., 57: 5-59.

執 筆 者 名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

2) 絶滅危惧II類(VU)

- 和 名 : **イリオモテツブハリタケ**
 分 類 : バツカクキン科 バツカクキン目
 学 名 : *Cordyceps fasciculatostromata* Kobayasi et Shimizu
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 子実体は、イラガ科の幼虫の繭から生じ、単生、または2~7個生じ、針タケ形、地上部の高さ35~45 mm、径0.6~1 mm、淡い橙黄灰色。結実部は子のう殻が柄の上半分にまばらに直接生じる。柄は繊維状の革質、基部は淡橙黄灰色でわずかに太まり、先端部は灰白色で線形にとがる。子のう殻は裸生、卵形、370~430×250~300 μm、淡橙黄白色。子のうは径3~4 μm。二次胞子は8×1.5 μm。

分 布 域 : 南西諸島。

県 内 の 分 布 : 西表島。

生 育 環 境 : 河川沿岸の亜熱帯照葉樹林。砂質土壌の林床に生じる。

生 育 状 況 : 鱗翅目イラガ科 (Limacodidae) の幼虫に寄生し、11月~3月に大形で硬質の繭に子実体を生じる。子実体は稀に観察される。

学 術 的 価 値 : 西表島に分布し、地理的分布の上で貴重である。また、子実体の発生が稀であるため、学術上の記録が十分なされていない。

減 少 の 要 因 : 本種が少ない要因は不明である。近年の採集例も知られていない。

備 考 : 1979年の冬、西表島ではじめて本種の分布が確認された。

- 文 献 : 清水大典, 1994. イリオモテツブハリタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 218-219, pl. 107.
 清水大典, 1997. イリオモテツブハリタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 96.

執 筆 者 名 : 大嶺哲雄*・寺嶋芳江

- 和 名 : **ウスキタンポセミタケ**
 分 類 : バツカクキン科 バツカクキン目
 学 名 : *Cordyceps pleuricapitata* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴：子実体は、地中のイワサキゼミの幼虫から生じ、地上生、分岐性のタンポ型、淡黄色。地上部の高さ20～50 mm。頭部は円球形または楕円形、先端は円または鈍頭形、高さ4～8 mm、径3～5 mm、淡黄色～レモンイエロー。柄は円柱形、径1.2～2 mm、淡黄白色で、肉質、頭部との境は明瞭、地中部は細根状に分岐、または直根状に宿主の虫体と繋がる。子のう殻は埋生、卵形、550～630×350 μm。二次胞子は4～5×1 μm。

分布域：東京都（八丈島）、京都府、沖縄県など。

県内の分布：西表島、石垣島。

生育環境：河川に近い亜熱帯照葉樹のイタジイ、ウラジロガシ、コミノクロツグ、リュウビンタイなどが生育する林床に生じる。

生育状況：地中のイワサキゼミの幼虫に寄生し、子実体は5～7月に幼虫の頭部、胸部背面、口器から生じる。子実体は稀に観察される。

学術的価値：西表島のウラジロガシ、スダジイ、フカノキ、モクタチバナ、オニヘゴ、リュウビンタイ、コミノクロツグの生育している林内の環境が生育に適しているらしく、本種の保護にはこの環境が重要であると考えられている。証拠標本に乏しいが、宿主の減少と発生環境の悪化が懸念されている。

減少の要因：生育地の森林伐採や地域の開発による宿主の減少が要因と考えられる。

備考：1980年に西表島からはじめて記録された。

文献：細矢 剛, 2015. ウスキタンポセミタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）”, 環境省（編）, ぎょうせい, 東京, 547.
小林義雄・清水大典, 1983. ウスキタンポセミタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 147, pl. 4.
清水大典, 1994. ウスキタンポセミタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 181, pl. 32.
清水大典, 1997. ウスキタンポセミタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 43.
日本冬虫夏草の会編, 2014. ウスキタンポセミタケ. “冬虫夏草生態図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 114.

執筆者名：大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

和名：イリオモテセミタケ

分類：バツカクキン科 バツカクキン目

学名：*Cordyceps pseudolongissima* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：子実体は、単生、または柄の上部で2～3に分岐し、地上部の高さ35～60 mm。頭部は円筒状または紡錘形、先端が円筒か鈍頭、高さ9～16 mm、径2.3～2.4 mm、新鮮なときはバラ紅色、のちに淡い褐色に変化する。柄は円柱形、ややかたい肉質、径2～2.2 mm、淡褐色、結実部との境界はやや明瞭。子のう殻は埋生、長楕円形、470～500×150～180 μm、孔口は細点状に密集する。子のうは径4 μm。二次胞子は8～11×1 μm。

分布域：南西諸島。

県内の分布：西表島。

生育環境：河川近くの亜熱帯照葉樹林。イタジイ、ウラジロガシなどが繁茂する湿り気のある林床に生じる。

生育状況：イワサキゼミ、イワサキヒメハルゼミ、ヤエヤマニイニイなどの幼虫に寄生し、5～10月に頭部から子実体を生じる。本種は発見地が限られている。

学術的価値：本種は、西表島でのみ知られる。

減少の要因：本種が稀である原因は不明である。

備 考 : 本種は1971年に西表島ではじめて採集された。沖縄島、奄美大島、屋久島、九州から知られるアマミセミタケと類似した形態を有しており、今後、精査が必要である。

文 献 : 小林義雄・清水大典, 1983. イリオモテセミタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 194, pl. 23, fig. 106.
 清水大典, 1981. イリオモテセミタケ. “グリーンブックス 51 冬虫夏草”, ニューサイエンス社, 東京, 37-38.
 清水大典, 1994. イリオモテセミタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 172, pl. 14, fig. 11.
 清水大典, 1997. イリオモテセミタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 29.
 日本冬虫夏草の会, 2014. イリオモテセミタケ. “冬虫夏草生態図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 123.

執 筆 者 名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

和 名 : **イリオモテトルビエラクモタケ**

分 類 : バッカクキン科 バッカクキン目

学 名 : *Torrubiella minuta* Kobayasi et Shimizu

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 本菌は、クモに寄生し、成長した白色～灰白色の菌糸が宿主の全面または腹部の一部を膜状に覆う。その菌糸膜（子座）上に直接子のう殻を生じ、柄と結実部が分化する子実体を発達しない。子のう殻は裸生、卵形、300～350×140～200 μm、白色、上部に突起状の孔口部がある。孔口部は広卵形、長さ70～90 μm、平滑、淡紅色～淡橙黄色。子のうは細く径約2 μm。

分 布 域 : 南西諸島。

県 内 の 分 布 : 西表島（固有）。

生 育 環 境 : 河川近くの亜熱帯照葉樹林内に生じる。

生 育 状 況 : 中形のクモ類に寄生し、宿主の体表に子座を生じ、6～7月に裸生の子のう殻を群生するが、発生は稀である。

学 術 的 価 値 : 本種は、西表島からのみ知られており、地理的分布の上で貴重である。採集が稀であるため、学術上の観察と記録が十分されてなく、本種の生態や分布に関する今後の研究が期待される。また、近年の採集例も知られていない。

減 少 の 要 因 : 本種が稀である要因は不明である。

備 考 : 本種は、西表島で1973年にはじめて採集された。

文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. イリオモテトルビエラクモタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄（監）, 山と溪谷社, 東京, 328.
 小林義雄・清水大典, 1983. イリオモテトルビエラクモタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 262, pl. 58, fig. 233.
 清水大典, 1994. イリオモテトルビエラクモタケ. “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 330, pl. 320, fig. 226.
 清水大典, 1997. イリオモテトルビエラクモタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 221.

執 筆 者 名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

和 名 : **イリオモテコロモクモタケ(イリオモテツブクモタケ)**

分 類 : バッカクキン科 バッカクキン目

学 名 : *Torrubiella ryukyuensis* Kobayasi et Shimizu

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 本菌は、葉巻き性のクモに寄生し、白色の菌糸を宿主の体表全面に発達させて膜状に覆う。菌糸の一部は巻きつけている葉の組織を貫き、葉の上面に白色の菌糸マット(子座)を形成し、その上に直接子のう殻を生じ、長い柄と結実部が分化する子実体を発達させない。子のう殻は裸生で群生、被針形～洋ナシ形、570～630×170～250 μm、平滑、淡褐色。子のうは径5 μm、二次胞子は4～6×1 μm。

分布域 : 南西諸島、山口県。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 亜熱帯照葉樹林内のオオバルリミノキ、マルバルリミノキ、ヤマビワソウの葉上に生じる。

生育状況 : 葉の裏側のクモの体表に寄生し、葉の組織を貫き葉の上面に子座を形成し、7～8月その上に子のう殻を生じる。稀に観察される。

学術的価値 : 本菌は稀に採集されるため、学術上の記録が十分になされていない。本種の生態や分布に関する今後の研究が期待される。

減少の要因 : 本種が少ない要因は不明である。

備考 : 小林・清水(1983)はイリオモテツブクモタケの和名を用いている。本種は1971年、西表島の山地林内で初めて採集された。その後、山口県での発生が見つかった。

文献 : 小林義雄・清水大典, 1983. イリオモテツブクモタケ. “冬虫夏草図譜”, 保育社, 大阪, 258, p1. 55, fig. 225.

清水大典, 1981. イリオモテコロモクモタケ. “グリーンブックス51 冬虫夏草”, ニューサイエンス社, 東京, 88.

清水大典, 1994. イリオモテコロモクモタケ(イリオモテツブクモタケ). “原色冬虫夏草図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 336, p1. 336, fig. 237.

清水大典, 1997. イリオモテコロモクモタケ. “冬虫夏草図鑑”, 家の光協会, 東京, 234.

日本冬虫夏草の会, 2014. イリオモテコロモクモタケ. “冬虫夏草生態図鑑”, 誠文堂新光社, 東京, 231.

執筆者名 : 大嶺哲雄*・盛口 満・寺嶋芳江

3) 情報不足(DD)

和 名 : ウスベニコップタケ

分 類 : ベニチャワソウ科 チャワソウ目

学 名 : *Cookeina sulcipes* (Berk.) O. Kuntze

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、小型で短い柄とグラス状の子のう盤からなる。子のう盤は橙黄色、径2～4 cm、深さ7～15 mm、子実層は赤みを帯び、縁には短い白い毛がある。柄は長さ7～24 mm、幅1～3 mm。子のうは基部に尾状の付属糸がある。子のう胞子は楕円形、25～30×13～18 μm、縦に線状の刻紋があり、無色またはほぼ無色である。

分布域 : 南西諸島、中国。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 子実体は、照葉樹林内の沢やその周辺の湿り気の多い場所で、黒色化したまだ硬い腐朽木に形成される。
 生育状況 : 県内では西表島のみ分布が限られている。
 学術的価値 : 本種は熱帯性の子実体で、国内では西表島のみで知られるが、情報は不足している。
 減少の要因 : 本種の子実体は色が鮮やかで形が整っているため観賞用に山地森林の生育地から持ち出されることがある。このようなことが減少の一つの要因になっていると考えられる。
 備考 : 子実体は、橙黄色、グラス状の形で、非常に美しい。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ウスベニコップタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 304.
 大谷吉雄, 1997. 子のう菌類. “キノコの世界 菌界4”, 朝日新聞社, 東京, 116.

執筆者名 : 中村 直**・寺嶋芳江

和名 : **アラゲウスベニコップタケ**
 分類 : ベニチャワソウタケ科 チャワソウタケ目
 学名 : *Cookeina tricholoma* (Mont.) O. Kuntze
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、小型、赤みを帯びた橙黄色の杯状。子のう盤は、やや内側に反る縁を有し、半円をなすように子実層側に反り返る。径7~25 mm、深さ3~10 mm、縁や外側に長い毛がある。毛は、長さ2~3.5 mm、托髄層から出た平行な菌糸が束状に集まって形成される。柄は、長さ5~15 mm、幅2~2.5 mm。子のう胞子は、楕円形~紡錘形、25~34×12~15 μm、1~2滴の油滴を含む。子のう盤の菌組織は、寒天質を含まない。

分布域 : 南西諸島、中国。

県内の分布 : 石垣島、西表島、沖縄島。

生育環境 : 子実体は、広葉樹林内の沢や湿った林床にある倒木や落枝上に形成される。

生育状況 : 県内における観察頻度は少ない。沖縄島では一度観察されただけで、近年は確認されていない。

学術的価値 : 日本では本県のみで見られる亜熱帯性の子実体で、本種は地理的分布の上で重要である。情報が不足している。

減少の要因 : これまでに知られている本種の生育地は少ないが、その要因は不明である。

備考 : 本種の子実体には赤みを帯びた橙黄色型と黄色型がある。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. アラゲウスベニコップタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 304.
 大谷吉雄, 1997. 子のう菌類. “キノコの世界 菌界4”, 朝日新聞社, 東京, 116.

執筆者名 : 島袋守成**・小松知晋・寺嶋芳江

和名 : **エダウチホコリタケモドキ**
 分類 : マユハキタケ科 (エダウチホコリタケモドキ科) ユーロチウム目
 学名 : *Dendrosphaera eberhardtii* Pat.
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

- 形態の特徴** : 子実体は黄褐色、柄の上部で1~数回密に分岐する長さ5~17 cmの樹枝状である。各枝の先に房状の生殖器巣を形成する。子実体の基部は円柱状であるが、上部へ向かって次第に扁平になる。表面は褐色の菌糸で覆われ、浅い条線がある。柄の基部には1~数本の仮根状菌糸束が分化する。生殖器巣は球形~楕円状の不定形、長さ5~10 mm、不規則に裂開し内側は橙黄色から次第に黄土色に変わる。生殖器巣の菌糸組織のなかに球形の子のうがあり、その中に8個の子のう胞子を形成する。子のう胞子は球形、径10~15 μm、黄土色、一個の油滴がある。生殖器巣の菌糸組織は子のう胞子の成熟時に崩壊し、粉状の塊となる。
- 分布域** : 南西諸島、ベトナム、マレー半島、ボルネオ、ニューギニア。
- 県内の分布** : 沖縄島、西表島。
- 生育環境** : スダジイの老木が生育する照葉樹林内で分解・腐朽が進んだ樹木の切株および倒木の腐植、または林床の腐植層に子実体を形成する。
- 生育状況** : どの生息地においても生息密度が低く、稀少である。
- 学術的価値** : ユーロチウム目を構成する多くの種は子実体を形成しない微小菌類であるが、本種は子実体を形成する点で特色があり、独特な形態を備え、ユーロチウム目では分類・形態学的に貴重である。
- 減少の要因** : 本種の確認されている生息地が少ない要因は不明である。情報は不足している。
- 備考** : ユーロチウム目にエダウチホコリタケモドキ科を認め、その中に本種を含める研究者もある。

- 文献** : 細矢 剛, 2015. エダウチホコリタケモドキ. “環境省レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 565.
- 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. エダウチホコリタケモドキ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 290.
- 今関六也・本郷次雄 (編著), 1989. エダウチホコリタケモドキ. “原色日本新菌類図鑑 (II)”, 保育社, 大阪, 244, pl. 140.
- 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. エダウチホコリタケモドキ. “山溪カラー名鑑 日本きのこ”, 山と溪谷社, 東京, 543.

執筆者名 : 中村 直**・小知知普・寺嶋芳江

- 和名** : **アミガサタケ**
- 分類** : アミガサタケ科 チャワソウタケ目
- 学名** : *Morchella esculenta* (L.: Fr.) Pers. var. *esculenta*
- カテゴリー** : 情報不足 (DD) **環境省カテゴリー** : 該当なし

- 形態の特徴** : 子実体は、中~大型、頭部と柄からなり、高さ5~12 cm。頭部は卵形~卵状円錐形、先端は鈍頭または鋭頭、頭部下縁は柄に直生またはわずかに隔生する。頭部の表面には、網目状に隆起したヒダがあり、小区画に分かれ、小区画のくぼみに子実層を生じる。網目状の隆起(肋脈)では縦脈がよく発達し多少平行する傾向があり、横脈はやや少ないため、くぼみは縦長のものが多く、小区画は類多角形か不整形。子実層は灰褐色。柄は、円筒形でほぼ同幅か基部はやや太く、長さは頭部とほぼ同長か短く、白色~帯黄色。頭部も柄も内部は空洞で、内壁は淡褐黄色、白粉状の顆粒がある。子のうは、円筒形、280~320×18~22 μm。子のう胞子は、楕円形、20~24×12~14 μm、平滑。胞子紋は黄色を帯びる。
- 分布域** : 北海道~南西諸島、ヨーロッパ、北・南アメリカ、オーストラリア、アフリカ、中国。
- 県内の分布** : 沖縄島。
- 生育環境** : 子実体は、春に森林内または森林周辺の地上に発生する。
- 生育状況** : 本種は、沖縄島中部域の2箇所の森林で観察されているが、情報は不足している。

- 学 術 的 価 値 : 子実体の形態が担子菌類に類似して頭部と柄部に分かれていることや、子実層が区切られた多くのくぼみからできていることで、本種の子実体は他の子実体の菌類と大きく異なった独特な形態を備えている。
- 減 少 の 要 因 : 本種の分布の中心が温帯～冷温帯域にあり、県内では生育地が元々少ないものと考えられるので、生育地の環境保全は重要である。
- 備 考 : 食用とされている。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. アミガサタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 312.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1987. アミガサタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 562-563.
沖縄生物教育研究会, 2004. アミガサタケ. “フィールドガイド 沖縄の生きものたち”, 沖縄生物教育研究会 (編), 沖縄生物教育研究会, 那覇, 125.
幼菌の会, 2001. アミガサタケ. “きのこ図鑑”, 幼菌の会 (編), 家の光協会, 東京, 292.

執 筆 者 名 : 中村 直**・寺嶋芳江

- 和 名 : ニクアツベニサラタケ
- 分 類 : ベニチャワソタケ科 チャワソタケ目
- 学 名 : *Phillipsia domingensis* (Berk.) Berk.
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 子実体は、小～中型、暗赤色～暗紫紅色、皿状～浅い碗形、径 2～6 cm、無柄のチャワソタケ形である。子実層は肉質。子実層は、乾いた感じでもろく、裏面の中心付近または縁よりの広い部分で腐朽木に着生する。子実層の下面は類白色。子実層は円筒形、300～400×15～18 μm、8個の子実層胞子を内生する。子実層胞子は、等辺楕円体、20～27×10～12 μm、縦に条線があり、1～2個の油滴を含む。
- 分 布 域 : 本州関東以南、中国。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島。
- 生 育 環 境 : 本種は、照葉樹林内の湿った腐朽倒木や落枝上に子実体を生じる。
- 生 育 状 況 : 本種の県内生育地は沖縄島北部山林に限られる。子実体は 2～3 個が散生する。情報が不足している。
- 学 術 的 価 値 : チャワソタケ科の菌類は有柄の子実体を形成するものが多いが、本種は無柄で子実体下側の中心または縁よりの広い部分で腐朽木に着生する。
- 減 少 の 要 因 : 本種が稀である要因は不明である。
- 備 考 : 本種の子実体は生の時には肉質でもろいが、乾燥するとコルク質となり容易に壊れない。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ニクアツベニサラタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 304.
金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001 年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執 筆 者 名 : 中村 直**・寺嶋芳江

- 和 名 : マユハキタケ
- 分 類 : マユハキタケ科 ユーロチウム目

学 名 : *Trichocoma paradoxa* Jungh.

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は小型、高木樹皮を破って生じ、初めは内外2層の被膜におおわれ、ドングリの殻斗様、後に外被膜は破れ、薄い内被膜に包まれた上部の刷毛状の基本体が柱状に伸び、高さ1~2 cm、径6~10 mm。子のうは基本体中に不規則に散らばって形成され、子のう胞子を生じた後、子のう膜は消失する。子のう胞子は、楕円形、5~8×5~6 μm、黄色のち褐色、横の線状隆起がある。

分布域 : 本州以南、北・南アメリカ、ボルネオ、セイロン、スリランカ。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 山地のやや湿度の高い樹林内で、生育している老木の樹幹下部に子実体を形成する。

生育状況 : 本種は、老木の樹幹下部の樹皮に小型の子実体を形成する。生育地は極めて狭い範囲に限られている。情報が不足している。

学術的価値 : ユーロチウム目の主体はカビで、本種を含む少数の種が比較的大きな子のう果を形成し、子実体とみなされる形態的特徴を持つ。

減少の要因 : 本県における本種の生育地は極めて少ない。

文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. マユハキタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 290.

今関六也・本郷次雄(編著), 1989. マユハキタケ. “原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)”, 保育社, 大阪, 243-244, pl. 140.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. マユハキタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 542.

宮城元助, 1958. 琉球産茸類について. 琉球大文理紀要(理学篇), 2: 35-40.

執筆者名 : 島袋守成**・寺嶋芳江

<担子菌類>

1) 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

和 名 : ヒジリタケ

分 類 : タマチョレイタケ科 タマチョレイタケ目

学 名 : *Lignosus rhinocerotis* (Cooke) Ryvarden

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形態の特徴 : 子実体は、中~大型で地上生、傘は円形、肉は薄く強靱な革質、平らに開くが中央部に向かってなだらかにくぼみ、径5~10 cm、表面はビロード状で橙褐色、黄褐色~灰褐色、周辺部は淡色、同心円状に隆起する環紋と放射状の隆起がある。傘の下面は類白色で極めて微細な管孔がある。柄は8~15 cm、円柱状、クリーム色~淡黄褐色。担子胞子は楕円形。子実体は地中に形成された菌核から発達する。

分布域 : 南西諸島、フィリピン、マレー半島、ボルネオ、ニューギニア、オーストラリア。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 照葉樹林の地中に形成された菌核から子実体を生じる。

生育状況 : 石垣島および西表島における本種の生育地は限られている上に、最近では確認される子実体の数も

極めて少ない。

- 学 術 的 価 値 : 国内では八重山諸島が本種分布域の北限と考えられるため、地理的分布の上で貴重である。また、地中に形成された菌核から子実体を生じる本種の性質は、他の菌類にあまり例がなく、特徴的である。
- 減 少 の 要 因 : 森林伐採や道路の敷設などの地域開発による広葉樹原生林の減少、および森林生態系の破壊が要因と考えられる。

- 文 献 : 青島清雄・大宜味朝栄, 1974. 沖縄におけるヒダナシタケ目菌類の分布. 国立科博専報, 7: 85-88.
本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ヒジリタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 241.
環境省(編), 2015. ヒジリタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, ぎょうせい, 東京, 533.

執 筆 者 名 : 中村 直**・寺嶋芳江

和 名 : キアミズキンタケ

科 名 : アカカゴタケ科 スッポントケ目

学 名 : *Simblum periphragmoides* Klotzsch

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 菌蕾は類球形～卵形、白色、成熟し托が伸長すると高さ 5～10 cm、クリーム色～淡い黄色。托の上部には淡い黄色～黄色で網目・カゴ状で類球形の頭部をもつ。グレバは粘液状で頭部に形成され、オリーブ色～褐色。腐った果実臭を発する。

分 布 域 : 北インド洋西部のモーリシャス島で記載された種で、インド、セイロン、ジャワ島、台湾等に分布する。

県 内 の 分 布 : 石垣島。

生 育 環 境 : 夏～秋、ヤシ科植物が優占する湿潤な亜熱帯林に子実体を発生する。

生 育 状 況 : 日本では沖縄県石垣島の亜熱帯林から知られ、現存する生育地は 1 か所のみ。

減 少 の 要 因 : 日本における既存の生育地は石垣島の 1 ヶ所のみであり、すでに開発による悪影響を受けている。現在知られている発生地が今後さらに悪化することによる消滅が懸念される。

文 献 : Hosaka, K., 2010. Preliminary list of Phallales (Phallomycetidae, Basidiomycota) in Taiwan, Mem. Natl. Mus. Natl. Sci., 46, 57-64.

Hosaka, K., 2012. Preliminary list of Phallales (Phallomycetidae, Basidiomycota) in Thailand. Mem. Natl. Mus. Nat. Sci., 48: 81-89.

今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. クロハツ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 358.

本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. クロハツ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 170.

宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

小林義雄, 1938. “大日本植物誌 2 ヒメノガスター亜目及スッポントケ亜目”, 三省堂, 東京, 90pp.

大谷吉雄, 1974. 沖縄石垣島で発見されたキアミズキンタケ. 日菌報, 15: 243-244.

執 筆 者 名 : 小松知普・寺嶋芳江

2) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

和名 : アラゲカワウソタケ

分類 : タバコウロコタケ科 タバコウロコタケ目

学名 : *Inonotus cuticularis* (Bull.) P. Karst

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴 : 子実体は無柄、全体に褐色～黄褐色。傘は半円形、幅3～10 cm、最初表面に短毛をもつが老成すると無毛で粗面になる。傘肉は黄褐色、強靱な繊維質。子実層托は管孔状、孔口面は褐色。傘表面には分岐した剛毛状菌糸をもつ。担子胞子は短楕円形、黄褐色、6～8×4.5～5.5 μm。

分布域 : 北米および東アジア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 広葉樹枯木上に子実体を発生する。

生育状況 : 北米では普通種であるが、国内での発生は稀で数か所の暖温帯老齢林から知られている。

学術的価値 : 沖縄県を含む暖帯林からのみ観察されている。

減少の要因 : 暖温帯林の伐採、開発により生育地が著しく減少している。

備考 : 過去の標本同定に間違いが多かった。国内での発生は数か所のみに限られる。

文献 : 服部 力, 2015. アラゲカワウソタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 557.

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : ナンバンオオカワウソタケ

分類 : タバコウロコタケ科 ヒダナシタケ目

学名 : *Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴 : 子実体は無柄、全体に褐色～暗褐色、傘は半円形、幅20 cmに達する。傘表面ははじめ微毛をもつが後に無毛でひびわれる。傘肉は褐色、強靱な繊維質。子実層托は管孔状、孔口面は褐色。管孔には剛毛状菌糸をもつ。担子胞子は短楕円形、褐色、5～7×3.5～5 μm。

分布域 : 南関東以南の暖温帯～亜熱帯地域

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 広葉樹枯木または生木上に重なって発生する。

生育状況 : 熱帯地域に広く分布するが、国内での発生は稀で、南関東以南の暖温帯～亜熱帯地域数か所から知られている。

学術的価値 : 国内での観察例は少ない。

減少の要因 : 暖温帯林の伐採、開発により生育地が著しく減少している。

備考 : 国内での発生はまれで、南関東以南の暖温帯～亜熱帯地域の数ヶ所(神奈川県、静岡県、鹿児島県、沖縄県等)のみから知られている。

文献 : 服部 力, 2015. ナンバンオオカワウソタケ, “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれの

ある野生生物—9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）”，環境省（編），ぎょうせい，東京，558.

執筆者名：寺嶋芳江

和名：ヤエヤマキコブタケ

分類：タバコウロコタケ科 タバコウロコタケ目

学名：*Inonotus pachyphloeus* (Pat.) T. Wagner & M. Fisch.

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴：子実体は、材上に生じ、無柄～半背着生、しばしば極めて大型で多年生。傘は5～17×8～20 cm、厚さ3～6 cmの半円形で、丸山形～蹄形、表面は黄褐色～灰褐色～暗褐色、ビロード状～無毛、しばしば環紋をあらわして、ひび割れる。傘の肉は黄褐色～暗褐色で木質。孔口は灰褐色～暗褐色で、極めて微細。担子胞子は球形～楕円形。

分布域：南西諸島、アジア、アフリカ、北・南アメリカ等の亜熱帯～熱帯地方、オーストラリア。

県内の分布：石垣島、西表島。

生育環境：照葉樹林内の枯木や倒木上に子実体を形成する。

生育状況：石垣島および西表島の照葉樹林の枯木上に子実体を形成するが、確認される子実体の数は極めて少ない。

学術的価値：本県における分布地は国内における本種分布域の北限で、本種の地理的分布を把握する上で重要である。

減少の要因：森林の伐採や地域開発などによる生育場所である原生林の減少および森林生態系の破壊、また、産地が局限している。

備考：材の白色腐朽を起こす。*Phellinus* 属の熱帯における最大型種である。日本では石垣島および西表島の数ヶ所から報告されているにすぎず、その生育域は極めて狭い。八重山諸島における生育域が本種分布域の北限と考えられている。

文献：青島清雄・大宜味朝栄，1974. 沖縄におけるヒダナシタケ目菌類の分布. 国立科博専報，7: 85-88.
本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. ヤエヤマキコブタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”，本郷次雄（監），山と溪谷社，東京，268.

環境省（編），2015. ヤエヤマキコブタケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）”，ぎょうせい，東京，559.

執筆者名：島袋守成**・寺嶋芳江

和名：ダイダイサルノコシカケ

分類：タマショレイタケ科 タマショレイタケ目

学名：*Pyrofomes albomarginatus* (Zipp. ex Lev.) Ryvardeen

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴：子実体は一年生～多年生で無柄～半背着生。傘は不定形～半円形でオレンジ色がかった茶色、同心円状の溝がある。傘肉はレンガ色。直径は最大20 cm、肉は厚さ2～4 cmに達する。裏面の孔口は微細、白色～薄茶色。

分布域：アジア、アフリカの亜熱帯から熱帯域、宮崎県、沖縄県。

県内の分布：西表島。

生育環境：広葉樹に発生。材の白色腐朽を起こす。

- 生育状況 : 広葉樹の老齢林に発生するが、生育条件の詳細は不明。宮崎県および西表島浦内川流域から 確認されているが、標本数は少ない。
- 学術的価値 : 宮崎県における生育域は本種分布域の北限と考えられ、本種の地理的分布を把握する上で重要である。
- 減少の要因 : 森林の伐採や道路の敷設などの地域開発による老齢林の減少。分布は宮崎県下の 1 地域、および西表島浦内川流域と産地が局限している
- 備考 : 本種は熱帯種であり、アジアおよびアフリカの熱帯域に広く分布する。国内では 1967 年に西表島で採集された標本に基づき、1974 年に日本初産として報告され、その後宮崎県においても発見された。
- 文献 : 服部 力, 2015. ダイダイサルノコシカケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 556.
Ryvarden, L. (1972). A critical checklist of the Polyporaceae in tropical East Africa. *Norwegian Journal of Botany*. 19: 229-238.
青島清雄, 1988. 沖縄のサルノコシカケの種と分布. 日本菌学会第 32 回大会講演要旨集, 4.
青島清雄・大宜味朝栄, 1974. 沖縄におけるヒダナシタケ目菌類の分布, “国立科博専報”, 7:85-88.
- 執筆者名 : 寺嶋芳江

3) 準絶滅危惧 (NT)

- 和名 : **オオミダレアミタケ**
- 分類 : タコウキン科 ヒダナシタケ目
- 学名 : *Lenzites vespacea* (Pers.) Ryvarden
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態の特徴 : 子実体は中・大型で、無柄、側生。傘は半円形で丸山形～蹄形、大きいもので 8×10cm。表面は類白色～淡褐色、細かい棘状の突起に覆われるものからほぼ平滑のもの、また環状の溝をもつものもある。傘の肉は白色で生時はかたくないが、乾燥すると革質～コルク質になる。傘の裏側 (子実層托) は類白色～黄土色、粗いヒダ状～迷路状の管孔まで変化がある。担子胞子は広楕円形。
- 分布域 : 本州中部太平洋岸以南、中国、台湾、タイ、ベトナム。
- 県内の分布 : 沖縄島。
- 生育環境 : 照葉樹林内の湿潤な環境にある立枯れ木、倒木に側生する。
- 生育状況 : 沖縄島北部の森林から記録されているが、その生育場所は限られ、形成される子実体の数も少ない。情報が不足している。
- 学術的価値 : 日本列島では沖縄県が分布の中心になっていると思われる。地理的分布の上で興味のある種である。
- 減少の要因 : これまでに知られている本種の生育場所は限られているが、その要因は不明である。
- 備考 : 熱帯～亜熱域に分布の中心があると考えられるので、今後八重山諸島での詳しい調査が必要である。
- 文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. オオミダレアミタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこと”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 240.
金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001 年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.
- 執筆者名 : 中村 直**・小松知普・寺嶋芳江

和名 : スッポントケ
 分類 : スッポントケ科 スッポントケ目
 学名 : *Phallus impudicus* L.: Pers.
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中 (大) 型で、幼菌は類白色の殻皮に包まれ、径 4~6 cm のほぼ球形で、基部に類白色の太い根状菌糸束を付ける。成熟すると幼菌上部の殻皮が裂開し、傘 (頭部) と柄が伸長し、高さ 9~15 cm になる。傘 (頭部) は円錐状鐘形、表面は白色~淡黄色で網目状の隆起があり、暗緑色の粘液化した悪臭のある基本体 (グレバ) をつけ、頂部は白色盤状で柄の上端と連なる。柄は円筒形、白色、中空で上部は泡沫状の小室が 2 層、下部は 3~4 層からなり、表面に多数の小孔が開く。柄の基部に白色~類白色の袋がある。担子胞子は長楕円形 3~5×2~3 μm。

分布域 : 北海道~南西諸島、ほぼ世界的。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 森林の腐植の多い地上に子実体を生じる。

生育状況 : 国内では広く分布している種であるが、県内では本種が確認されているのは沖縄島北部森林のみで、知られている観察地は限られ、また観察地における子実体の形成も少ない。情報が不足している。

学術的価値 : 本種は胞子が成熟すると基本体が粘液状となり強い臭いを放ち、昆虫 (ハエ等) を誘引し、集まった昆虫の体に胞子を含むグレバを附着させて遠くへ分散させている。これは生態学的に興味ある特異な胞子分散様式である。

減少の要因 : 本種は広域分布種に属するが、県内での本種の観察地は少ない。しかし、県内で本種が少ない要因は明らかでない。

備考 : 傘表面のグレバを洗って取り除いた子実体を湯がいて食用に供している。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. スッポントケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 241.
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1989. スッポントケ. “原色日本新菌類図鑑 (II)”, 保育社, 大阪, 221, pl. 136.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. スッポントケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 520-521.
 沖縄生物教育研究会, 2004. スッポントケ. “フィールドガイド 沖縄の生きものたち”, 沖縄生物教育研究会 (編), 沖縄生物教育研究会, 那覇, 125.

執筆者名 : 中村 直**・寺嶋芳江

和名 : サンコタケ
 分類 : アカカゴタケ科 スッポントケ目
 学名 : *Pseudocolus schellenbergiae* (Sumst.) Johasen
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体の幼菌は類白色の殻皮に包まれ、径 1~2 cm の楕円球形である。成熟すると上部の殻皮が裂開し、通常 3 本 (稀に 4 本) の托枝 (腕) と円柱状の托 (柄) が伸長する。托枝は黄色~橙色~紅色、3 本はそれぞれ外側へ弓形に大きく張り、頂部で結合する。托枝の外側は 4~6 個の泡沫状の小室、内側は大きい管状泡沫の小室となる。基本体 (グレバ) は褐色~黒褐色で托枝の内側に付着し、粘液状、強い悪臭がある。托 (柄部) は淡橙色~白色、中空、常に托枝より短く、基部に殻皮がツボとして残る。ツボは下部に枝分かれした根状菌糸束を付ける。担子胞子は無色、長楕円形、4~7

×2~3 μm。

- 分 布 域 : 北海道~南西諸島、北半球一帯、オーストラリア、ニュージーランド。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島。
- 生 育 環 境 : 梅雨の頃または秋に森林の腐植の多い地上に子実体を生じる。
- 生 育 状 況 : 国内では広く分布している種であるが、県内では本種の子実体が確認されているのは沖縄島北部森林の2箇所のみである。知られている観察地は少なく、形成される子実体の数も少ない。情報は不足している。
- 学 術 的 価 値 : 本種は前記のスッポンタケと同様、胞子が成熟する頃基本体が粘液状となり強い臭いを放ち、昆虫（ハエ等）を誘引し、集まった昆虫の体に胞子を含むグレバを付着させて遠くへ分散させている。これは生態学的に特異な胞子の分散様式である。
- 減 少 の 要 因 : 広域分布種に属するが、県内での本種の観察地は少ない。少ない要因は明らかでない。
- 備 考 : 県内で見られる本種の子実体は托枝が黄色~橙色をしているものが多い。
- 文 献 : 今関六也・本郷次雄（編著），1989. サンコタケ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅱ）”，保育社，大阪，217, pl. 135.
西銘盛光，1995. 大宜味村の担子菌類. “大宜味村の自然 大宜味村動植物調査報告書 大宜味村文化財調査報告書第4集”，大宜味村教育委員会，大宜味村，275-286.
幼菌の会，2001. サンコタケ. “きのこ図鑑”，幼菌の会（編），家の光協会，東京，267.

執 筆 者 名 : 中村 直**・小松知普・寺嶋芳江

- 和 名 : **モミジタケ**
- 分 類 : イボタケ科 ヒダナシタケ目
- 学 名 : *Thelephora palmata* Scop.: Fr.
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 子実体は、中型、基部の短い柄から上の方へ密に枝分かかれしてドーム状、高さ幅とも4~7 cmのホウキタケ形またはサンゴ形である。各枝は、先端近くで平たくなり、スパチュラ状またはへら形、背腹の区別はなく、革質、初め白色、次第に紫褐色~暗褐色。先端部は淡紫褐色~類白色、平滑、縦に細かく分かれて歯牙状になる場合がある。肉はコルク質、褐色、かたくて弾力性がある。担子胞子は広楕円形、8~12×7~9 μm、胞子壁に顕著な突起がある。
- 分 布 域 : 本州以南、ヨーロッパ、中国。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島。
- 生 育 環 境 : 照葉樹林の腐植の多い林床に子実体を単生または2~3個散生する。
- 生 育 状 況 : 沖縄島北部山林の林床から知られているが生育地は狭く限られ、形成される子実体も少ない。情報が不足している。
- 学 術 的 価 値 : 本種は比較的にかたい子実体を形成するが、子実体を構成する菌糸は1菌糸型である点で、形態学的に特異である。
- 減 少 の 要 因 : 県内で知られている本種の生育地は狭く少ないが、その要因は不明である。
- 備 考 : 子実体は生時強い不快臭があるが、乾燥すると消失する。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. モミジタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”，本郷次雄（監），山と溪谷社，東京，221.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. モミジタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，439.
宮城元助，1958. 琉球産茸類について. 琉球大文理紀要（理学篇），2: 35-40.

執筆者名 : 中村 直**・寺嶋芳江

4) 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

和名 : コンルリキュウバンタケ
 分類 : キシメジ科 ハラタケ目
 学名 : *Mycena lazulina* Har. Takah., Taneyama, Terashima & Oba
 カテゴリー : 絶滅のおそれのある地域個体群(沖縄島)(LP) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 傘は径 1-2 mm。最初半球形、後に饅頭形。表面は半透明、乾性、純白色。老成するとくすんだ淡黄色を帯び、放射状に走る明瞭な扇状の溝線を表し、周辺部は平滑またはやや白粉状。肉は極めて薄い膜質(0.1 mm 以下)、白色、特別な味や匂いはない。柄は 3-6 × 0.1-0.5 mm、ほぼ上下同大、根元は球根状にやや膨らみ小型の台状基盤を形成し、中心生。表面は白色、乾性、粉状、根本の台状基盤は径 0.3-0.7 mm、濃青色～紺色、粉状。ヒダは明瞭な襟帯を形成し、疎、白色、縁部は粉状で同色。

分布域 : 沖縄県。

県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 6月～11月、朽ちた竹およびコミノクロツグなどのヤシ科植物に群生する。

生育状況 : 本菌は石垣島、西表島、与那国島でのみ観察されている。

学術的価値 : 発光性を示す点においても、学術的研究材料として貴重である。

減少の要因 : 希少である原因は不明である。

備考 : 菌糸体および子実体が黄緑色に発光する。

文献 : 寺嶋芳江監修・編著／高橋 春樹、種山 裕一編著、2016. シロアリシメジ. “南西日本菌類誌”, 東海大学出版会, 神奈川.

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : オオシロアリタケ(シロアリシメジ(新称))
 分類 : キシメジ科 ハラタケ目
 学名 : *Termitomyces eurrhizus* (Berk.) Heim (*Termitomyces intermedius* Har. Takah. & Taneyama, sp. nov. = ? *Termitomyces albuminosus sensu* Otani (1979). = ? *Termitomyces eurrhizus sensu* Hongo (1987).)
 カテゴリー : 絶滅のおそれのある地域個体群(沖縄島)(LP) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 傘は 50-90(-120) mm、最初幅の狭い円柱形のち丸山形～ほぼ平らに開き、円錐状に突出した中丘(高さ 6-12 mm)を持ち、時に中丘の周囲に小シワ状のくぼみを表し、周縁部に向かって放射状の条線を表し、しばしばヒダに沿って不規則な裂け目を生じる。縁部は最初やや内側に巻く。表面は乾性、光沢を欠き、繊維紋を放射状に表し、灰褐色～赤褐色、周縁部に向かって淡色を呈し、中央部は暗色、被膜を欠く。肉は厚さ 5 mm 以下、類白色、軟質、特別な味や臭いはない。柄は 70-130×9-20 mm、円柱形、地上部の根元に向かってやや太くなり、中心性、中実、縦に沿って条線を表す。表面は平滑または繊維状、成熟するとしばしばささくれを生じ、類白色。偽根は長さ 200 mm に達し、円柱形、下方に向かって細くなり、帯黒色。ヒダは離生、やや密、柄に到達するヒダは 30-50、小ヒダは 0-

1、幅 7 mm 以下、最初白色のち淡黄土色～淡紅色。縁部は全縁、同色。

- 分 布 域 : 沖縄県。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生 育 環 境 : タイワンシロアリの巣の菌床から発生し、しばしば群生。
- 生 育 状 況 : 本菌は石垣・西表島の森林では生育地は広く、子実体の形成もよいが、近年沖縄島では極めて少なくなっている。
- 学 術 的 価 値 : 本県が分布の北限になっていて、日本の他の地域では知られてない。本菌とタイワンシロアリとの間に見られる菌類と昆虫との共生も特異な現象である。また、両者の共生による落葉落枝の分解者としての機能は、亜熱帯林における物質循環を考察する上で重要である。
- 減 少 の 要 因 : 沖縄島南部の森林域で知られているが、開発による森林伐採が生育地を狭めたと考える。美味な子実体といわれているので、乱獲も減少の要因と考えられる。
- 備 考 : 本種に *Termitomyces albuminosus* (Berk.) Heim の学名を用いた文献もある。八重山産の標本 (Otani 1979) はスリランカ産 *T. eurrhizus* と明らかに形態的特徴が異なる。
- 文 献 : 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. オオシロアリタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 84, pl. 18.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. オオシロアリタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 101.
 大谷吉雄, 1979. 沖縄石垣島で採集したオオシロアリタケ. 日菌報, 20: 195-202.
 幼菌の会, 2001. オオシロアリタケ. “きのこ図鑑”, 幼菌の会 (編), 家の光協会, 東京, 267.
 寺嶋芳江監修・編著/高橋 春樹, 種山 裕一編著, 2016. シロアリシメジ. “南西日本菌類誌”, 東海大学出版会, 神奈川.
- 執 筆 者 名 : 中村 直**・寺嶋芳江

5) 情報不足 (DD)

- 和 名 : **タマゴタケ**
- 分 類 : テングタケ科 ハラタケ目
- 学 名 : *Amanita caesareoides* Lj. N. Vassiljeva
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形 態 の 特 徴 : 子実体は、中・大型で、幼時白色の外被膜に覆われ卵形であるが、発達すると上部の外被膜が裂けて柄と傘が伸長する。傘はまんじゅう形から平らに開き、径 5～18 cm、中央部はしばしば丸く盛り上がる。表面は赤色～橙赤色、平滑、多少粘性があり、周辺部には放射状の明瞭な溝線がある。肉は淡黄色。ヒダは淡黄色～黄色、密で離生する。柄は 10～17×0.6～2 cm、橙色～黄色、濃色のだんだら模様があり、上部に橙色の膜質のツバがある。柄の根もとには白色の厚い膜質で袋状のツバがある。担子胞子は広楕円形～類球形、7～10×6～8 μm。
- 分 布 域 : 北海道～南西諸島、中国、ネパール、セイロン、北アメリカ (東部に多い)。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生 育 環 境 : 梅雨の頃、子実体は山地森林の林床に形成される。
- 生 育 状 況 : 分布の中心は温帯～冷温帯域にあり、県内ではその生育地は少なく、沖縄・石垣・西表島からそれぞれ一箇所で見られているのみである。観察例が極めて少ない。
- 学 術 的 価 値 : 子実体は幼時長卵形の袋状の外被膜に包まれて分化するが、柄と傘が発達する際覆っていた外被膜

の上部が裂け、その裂け目を通して柄と傘が伸長するため柄の基部に袋状のツボがそのまま残存する。これはテングタケ属の子実体に見られる基本的な発達様式の一つの型であるが、本種はこの型を示す典型的な例として、形態学的に貴重である。

- 減少の要因 : 沖縄島北部の生育地では最近子実体が全く観察されなくなった。これは山地森林への人間活動の拡大が生育地の森林生態系の攪乱を招き、その結果子実体形成が阻害されているものと考えられる。
- 備考 : テングタケ属の子実体は中毒を引き起こす毒成分を含むものが多いが、食用菌である。

- 文献 : 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. タマゴタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 74.
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. タマゴタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 122, pl. 29.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. タマゴタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 150-151.
 宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について (I). 琉球大文理紀要 (理学篇), 7: 54-70.
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆 者 名 : 中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和 名 : カブラテングタケ

分 類 : テングタケ科 ハラタケ目

学 名 : *Amanita gymnopus* Corner et Bas

カテ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、中・大型で、傘は初めまんじゅう形から平らに開き、径 8~15 cm、後に傘の周辺部は上方に反り中央部がややくぼむ。傘の表面は粘性なく、クリーム色後黄土色を帯び、淡黄~淡褐色で薄い膜質の外被膜の破片が多数付着し、縁部にツバ (内被膜) の残片が付着することがある。肉は黄白色、傷をつけると緩やかに赤褐色に変わる。ヒダは離生、密~やや疎、黄土色、縁部は粉状。柄は 9~13×1.5~2 cm、根もとはカブラ状に著しくふくらみ、径 4~4.5 cm、クリーム色、ツボを全く欠く。ツバは柄の上部につき黄白色、膜質、上面に条線があり、多くは細かく破れ消失する。担子胞子は類球形~広卵形、5.5~7.5×5~6.5 μm。

分 布 域 : 本州関東以南、アジア。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 子実体は、照葉樹林の腐植の多い林床に発生する。

生育状況 : 石垣島と沖縄島北部の照葉樹林の地上に生育することが知られている。

学術的価値 : テングタケ属の子実体は通常、外被膜の破片を柄の基部と傘の表面にとどめている。しかし、本種では、柄の基部の膨大部にその痕跡も認められない。この形質はテングタケ属のなかでは特徴的である。

減少の要因 : 県内では本種の生育地は限られている。

備考 : 子実体には強い臭気がある。

- 文献 : 吹春俊光, 1997. 照葉樹林のきのこ. “南の森の不思議な生きもの—照葉樹林の生態学—”, 千葉県立中央博物館, 千葉, 88-92.
 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. カブラテングタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 328.
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. カブラテングタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 132, pl. 33.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. カブラテングタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，168.

執筆者名：中村 直**・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和名：テンゲタケ

分類：テンゲタケ科 ハラタケ目

学名：*Amanita pantherina* (DC.: Fr.) Krombh.

カテゴリ：情報不足(DD) 環境省カテゴリ：該当なし

形態の特徴：子実体は、中・大型で、傘は平らに開き、径5～25 cm、後に中央部がややくぼむ。傘の表面は多少粘性があり、灰褐色～オリーブ褐色、全面に類白色のツボの破片が多数点在し、周辺部は淡色で放射状の溝線を現す。ヒダは、白色で密、離生する。柄は、5～35×0.6～3 cm、白色～淡黄褐色、膜質のツバを有する。基部は多少ささくれに覆われ、根もととはふくらみ、外被膜のなごりが指輪状となって付着する。担子胞子は、広楕円形、9～12×7～9 μm。

分布域：北海道～南西諸島、ヨーロッパ、アジア、北アメリカ、アフリカ。

県内の分布：沖縄島。

生育環境：春または秋、リュウキュウマツの混じる照葉樹林の林床に子実体を単生、散生、または希に群生する。

生育状況：本種の分布の中心は温帯～冷温帯域にあり、亜熱帯に属する沖縄県ではその生育地は極めて少なく、沖縄島の中部と北部のそれぞれ一箇所の森林で観察されている。

学術的価値：テンゲタケ属の子実体には、袋状の外被膜の中で分化した幼形が柄と傘を発達させる際、覆っていた外被膜が脆く壊れやすく、外被膜の一部が子実体の傘の表面にいぼ状の鱗片として、また他の一部は柄の基部に付着して残存する発達様式を持つ。本種はこの型を示す典型的な例として形態学的に貴重である。

備考：本種の子実体は中毒を引き起こす強い毒成分を含んでいる。

文献：本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. テングタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”，本郷次雄（監），山と溪谷社，東京，71.

今関六也・本郷次雄（編著），1987. テングタケ（一名 ヒョウタケ、ハエトリタケ）. “原色日本新菌類図鑑（I）”，保育社，大阪，119-120, pl. 28.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. テングタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，145.

宮城元助，1964. 沖縄島産マツタケ目について（I）. 琉球大文理紀要（理学篇），7: 54-70.

執筆者名：中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和名：コテングタケ

分類：テンゲタケ科 ハラタケ目

学名：*Amanita porphyria* (Alb. & Schw.: Fr.) Secr.

カテゴリ：情報不足(DD) 環境省カテゴリ：該当なし

形態の特徴：子実体は中型。傘は平らに開き、径3～6 cm、表面は灰褐色からねずみ色、しばしば薄く平らな灰色の外被膜の破片を付着する。肉は薄く、白色。ヒダは上生ないし離生、密、白色。柄は7～9 cm×7～10 mm、上方は細く下方に向かってやや太く、基部は塊茎状に膨らみ、ツバより上部は白色、

下部には灰色の繊維状の斑紋がある。ツバは、膜質、灰色から黒褐色、上面に細かい条線を有する。ツボは白から暗灰色、大部分が柄の基部に癒着し、先端部がわずかに遊離する。担子胞子は球形で、径8~12 μm 。

- 分 布 域 : 北海道~南西諸島、ヨーロッパ、アジア、北アメリカ。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、西表島。
- 生 育 環 境 : 夏~秋、リュウキュウマツが混じるイタジイ林内の有機物の多い林床に子実体を生じる。
- 生 育 状 況 : 沖縄島および西表島の各1箇所から知られているが、子実体は頻度少なく確認される。情報が不足している。
- 学 術 的 価 値 : 幼菌を保護していた袋状の外被膜の内側から傘と柄が伸張発達する際、柄の基部と傘の縁の間で外被膜が切れ、下部の外被膜は柄基部の膨大部に癒合し、その上端部がわずかに遊離して浅いツボを形成する。これはテングタケ属の菌類にみられる発達様式の一例であり、本種はこの発達型を示すよい例である。
- 備 考 : 子実体は、中毒症状を起こす毒成分を含む。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. コテングタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 76.
今関六也・本郷次雄(編著), 1987. コテングタケ. “原色日本新菌類図鑑(I)”, 保育社, 大阪, 126, pl. 31.
宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について(I). 琉球大文理紀要(理学篇), 7: 54-70.
宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執 筆 者 名 : 中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

- 和 名 : フチドリタマゴタケ
- 科 名 : テングタケ科 ハラタケ目
- 学 名 : *Amanita rubromarginata* Har. Takahashi
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 傘は径が40~80 mm、ほぼ平で中央部分がやや突出し、傘の縁から中央に向かって放射線状の条線がある。傘表面は最初帯褐橙色のちに帯赤黄色で、柄は黄色地に橙色の段々模様を表し、上部に薄い膜質の帯赤橙色~帯褐橙色のツバを形成し、根元に袋状のツボがある。傘裏側のヒダは、赤橙色に縁取られる。

- 分 布 域 : 沖縄県。
- 県 内 の 分 布 : 石垣島。
- 生 育 環 境 : スダジイとオキナワウラジロガシを中心とする照葉樹林内に発生。5~9月。
- 生 育 状 況 : 本種は、石垣島の限られた場所でのみ観察されている。
- 減 少 の 要 因 : 希少である原因は不明である。
- 備 考 : 情報が不足している。

- 文 献 : 今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. フチドリタマゴタケ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 594.
保坂健太郎・細矢 剛・服部 力・吹春俊光・高橋春樹・松井英幸・種山裕一・宇野邦彦・寺嶋芳江, 2012. 2012年沖縄県石垣島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告, 59, 35-46.
寺嶋芳江監修・編著/高橋 春樹, 種山 裕一編著, 2016. “南西日本菌類誌”, 東海大学出版会,

神奈川. 6-16.

執筆者名 : 小松知普・寺嶋芳江

和名 : **チャタマゴタケ**

分類 : テングタケ科 ハラタケ目

学名 : *Amanita similis* Boedijn

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は、暗褐色～帯褐オリーブで周辺部は帯紅色、帯黄色、または蜜色、周辺部に条線を有する。ヒダは類白色、縁は黄色、縁部の細胞はこん棒形、楕円形、洋梨形など。柄は、黄色の地に橙色または帯褐色のだんだら模様を有し、基部に類白色の膜質袋状のツボがある。ツバは帯紅橙色～帯褐色。担子胞子は、広楕円形、7～11×5～8 μm。

分布域 : 本州中部以南、ジャワ島、ボルネオ島、マレーシア、シンガポール。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 梅雨と秋季に、主としてリュウキュウマツの混交する照葉樹林の有機物の豊富な地上に子実体を形成する。

生育状況 : 県内では沖縄島北部の照葉樹林内で観察されているが、生育地は少ない。

学術的価値 : 沖縄島が県内唯一の本亜種の分布地であり、地理的分布の上で重要である。菌根性である。

備考 : タマゴタケの亜種とみなされ、外形は基準亜種とほとんど同様であるが、色彩が著しく異なる。これを独立種 *Amanita similis* Boedijn とする研究者もある。

文献 : 今関六也・本郷次雄(編著), 1987. チャタマゴタケ. “原色日本新菌類図鑑(Ⅰ)”, 保育社, 大阪, 122, p1. 29.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. チャタマゴタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 153.

金城一彦・中村直・島袋守成・比嘉享・宮城健, 2002. 2001年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成**・根田仁・小松知普・寺嶋芳江

和名 : **ヘビキノコモドキ**

分類 : テングタケ科 ハラタケ目

学名 : *Amanita spissacea* Imai

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は、平らに開き、径4～13 cm、後に皿形となる。表面は、帯褐灰色～暗灰褐色、多少繊維状、最初は黒褐色粉質の小さいぼ(外被膜)が密集、連続しているが、傘が開くにつれてひび割れ、大小の集団となって散在する。肉は白色。ヒダは離生状に多少垂生し、白色で密。縁部は粉状に縁取られる。柄は5～15 cm×8～15 mm、根元は球根状にふくらみ、径2～3 cm、灰～灰褐色で繊維状細鱗片に被われ、ツバより上はだんだら模様となり、中実。ツバは灰白色、膜質、縁は黒褐色粉状。柄基部の膨大部には、壊れた粉質～綿質のツボが環状に残る。担子胞子は広楕円形～類球形。

分布域 : 北海道～南西諸島、アジア。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、マツ・シイ・カシ林等の地上に子実体を形成する。

- 生育状況 : 沖縄島北部と西表島のイタジイ林から知られているが、子実体の確認頻度は低い。情報が不足している。
- 学術的価値 : テングタケ属の中でツボの外被膜が傘の表面に最も密に付着する形態を有する。
- 備考 : 子実体は胃腸および肝臓に障害をもたらす毒性を有する。

- 文献 : 吹春俊光, 1997. 照葉樹林のきのこ. “南の森の不思議な生きもの—照葉樹林の生態学—”, 千葉県立中央博物館, 千葉, 88-92.
- 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. ヘビキノコモドキ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 78.
- 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. ヘビキノコモドキ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 129, p1. 32.
- 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. ヘビキノコモドキ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 164-165.
- 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (I). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 島袋守成**・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

- 和名 : シロオニタケ
- 分類 : テングタケ科 ハラタケ目
- 学名 : *Amanita virgineoides* Bas
- カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中～大型で、傘は平らに開き、径9～15 cm、縁には白色の外被膜の破片を付着することがある。傘の表面は粘性を欠き、白色、微粉と高さ1～3 mmの錐状のイボが多数付着するが、脱落することもある。ヒダは離生し、やや密、白色のちクリーム色、縁は粉状。柄は12～22 cm×15～22 mm、基部は棍棒状に膨らみ、径3～5 cm、上方に向かって細く、表面は白色、綿質の細かい鱗片におおわれ、上方は綿質または膜質のツバをつける。ツバは上部表面に条線があり、脱落的性。柄基部には三角錐状のイボが不完全な輪を形成する。担子胞子は長楕円形で、8～11×6～8 μm。

- 分布域 : 本州以南、アジア。
- 県内の分布 : 沖縄島、西表島。
- 生育環境 : 夏～秋、イタジイ林内の有機物の豊富な林床に子実体を生じる。
- 生育状況 : 西表島東部と沖縄島北部の山林から知られている。情報が不足している。
- 学術的価値 : 本種はテングタケ属のテングタケに類似した子実体の発達様式を示す。幼時保護していた袋状の外被膜の破片が三角錐状の突起となって、傘の上部に形成される典型的な形質を示す。
- 備考 : 子実体は胃腸系および神経系の中毒症状を起こすと言われている。

- 文献 : 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. シロオニタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 133-134, p1. 34.
- 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. シロオニタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 170-171.
- 宮城元助, 1967. 沖縄島産マツタケ目について (II). 琉球大文理紀要 (理学篇), 10: 38-45.
- 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (I). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ヌメリアシナガイグチ(アキノアシナガイグチ)
 分類 : イグチ科 イグチ目
 学名 : *Aureoboletus viscosus* (C.S. Bi & Loh) G. Wu & Zhu L. Yang
 = *Aureoboletus liquidus* Har. Takah. & Taneyama
 = *Boletellus viscosus* C.S. Bi & Loh
 = *Boletellus longicollis* sensu Hongo
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 子実体は中型。傘は赤褐色で、多くのしわがあり、多量の粘液に覆われる。孔口は淡黄色、後に暗オリーブ色になり、変色性はない。柄は長く、粘液に被われ、傘より淡色で縦に条線がある。ツバは広くて白色、時に柄の中ほどにつく。管孔は上生～湾生し、淡黄色、後に暗オリーブ色、孔口も同色。肉は淡黄色、傘の表皮下は淡紅褐色。

分布域 : 本州中部以南、中国。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、イタジイ林の林床地上に子実体を形成する。

生育状況 : 本種は沖縄・石垣・西表島から知られているが、生育地は狭く限られ、確認される子実体の数も少ない。情報が不足している。

学術的価値 : 傘と柄が粘液に被われ、柄の上部に粘性膜質のツバがあり、形態学的に独特な形質を持つ。

備考 : 1982年に西表島で最初に採集され、後に広島県で採集された標本に基づき、和名に「安芸の(アキノ)」の名が付けられたと言われている。

文献 : 吹春俊光, 1997. 照葉樹林のきのこ. “南の森の不思議な生きもの—照葉樹林の生態学—”, 千葉県立中央博物館, 千葉, 88-92.

本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. アキノアシナガイグチ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 169.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. アキノアシナガイグチ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 354.

Bi ZS, Lu DJ, Zheng GY (1982) Basidiomycetes from Dinghu Mountain of China. II. Some species of Boletaceae (1). Acta Bot Yunnanica 4:55-64.

Wu G, Li Y, Zhu X, Zhao K, Han L, Cui Y, Li F, Xu J, Yang Z-L (2016) One hundred noteworthy boletes from China. Fungal Div. 81:25-188.

<https://doi.org/10.1007/s13225-016-0375-8>

寺嶋芳江監修・編著／高橋 春樹, 種山 裕一編著, 2016. ヌメリアシナガイグチ. “南西日本菌類誌”, 東海大学出版会, 神奈川.

執筆者名 : 島袋守成**・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ナガエノウラベニイグチ

科名 : イグチ科 イグチ目

学名 : *Boletus quercinus* Hongo

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : アワタケ
 分類 : イグチ科 イグチ目
 学名 : *Boletus subtomentosus* L.
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中～大型で、傘はまんじゅう形からほぼ平らに開き、径3～10 cm。表面はビロード状、黄褐色～褐色を帯びるオリーブ色、ひび割れて黄色の肉を露出するものもある。肉は類白色～淡黄色、切断すると青変する場合がある。管孔は緑黄色、傷がつくとやや青色を帯びる。孔口はやや大形で多角形。柄は5～12×0.5～1 cm、表面は淡黄～淡褐色、ほぼ平滑～粉状で、しばしば上部にやや隆起した縦すじがある。担子胞子は楕円状紡錘形 12～14×4～5 μm。胞子紋はオリーブ色。

分布域 : 北海道～南西諸島、北半球一帯。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 梅雨または秋、イタジイ林内の地上に子実体を単生～散生する。

生育状況 : 県内では西表島と沖縄島北部の森林から知られている。情報が不足している。

学術的価値 : イグチ類には傷を付けると変色するものがあるが、本種は黄色の管孔面が著しく青く変色する。子実体の変色性を示す材料となる。

備考 : 食用に供される。

文献 : 今関六也・本郷次雄(編著), 1989. アワタケ. “原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)”, 保育社, 大阪, 17, pl. 75.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. アワタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 310.
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ヒメウグイスイグチ
 科名 : イグチ科 イグチ目
 学名 : *Boletus viridis* (Heinem. & Gooss.) Corner
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : クロニクイロアナタケ
 科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目
 学名 : *Chaetoporus hypobrunneus* (Petch) Aoshima
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : キアブラシメジ
科名 : フウセンタケ科 ハラタケ目
学名 : *Cortinarius vibratilis* (Fr.) Fr.
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. キアブラシメジ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 259.
宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者 : 小松知普

和名 : ムニンヒメチャヒラタケ
科名 : アセタケ科 ハラタケ目
学名 : *Crepidotus uber* (Berk. & Curt.) Sacc.
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : アケボノホウロクタケ
科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目
学名 : *Daedalea aurora* (Ces.) Aoshima
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : ナンバンウチワタケ
科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目
学名 : *Daedaliopsis scopulosa* (Berk.) Aoshima
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : トゲオシロイタケ
科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目
学名 : *Echinoporia hydnophora* (Berk. et Br.) Ryvarde
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : キイボカサタケ

分 類 : イッポンシメジ科 ハラタケ目
 学 名 : *Entoloma murrayi* (Berk. & M. A. Curtis) Sacc.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は小～中型。傘は、円錐形～円錐状鐘形、径 1.5～6 cm、中央に細い円柱状または小さい乳首状の顕著な突起を有し、黄色、湿っているとき周辺部に条線を示す。ヒダは、幅広く、直生～上生、やや疎、黄色、胞子が成熟すると肉色を帯びる。柄は、円筒状、3～10cm×2～4 mm、黄色、表面は繊維状でしばしばねじれがあり、中空。担子胞子は四角形（六面体）、径 10～13 μm。

分 布 域 : 本州以南、東アジア、ボルネオ、北アメリカ東部。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 春、梅雨、または秋季、森林の地上に子実体を単生または散生する。

生育状況 : 観察例は少ない。情報が不足している。

学術的価値 : 子実体の傘中央に円筒状～乳頭状の突起があり、これは他の種では見られない本種独特の形質である。

備 考 : 温帯域では単生～群生すると記載されているが、県内では群生は観察されていない。

文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. キイボガサタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 136.
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. キイボガサタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 260, p1. 67.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. キイボガサタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 279.
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和 名 : **コンイロイッポンシメジ**
 分 類 : イッポンシメジ科 ハラタケ目
 学 名 : *Entoloma subnitidum* S. Imai
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中型で、傘は幼時円錐形からまんじゅう形、成長すると中高の平らになり、径 3～7 cm。表面にはしばしば放射状の浅いしわを生じ、青黒色。ヒダは、上生、湾生、またはほとんど離生、幼時白色、次第に肉色を帯びる。柄は、円柱状で、4～10cm×4～10 mm、基部に向かってわずかに太くなり、表面は傘とほぼ同色、繊維状の条線を有する。担子胞子は五～六角形で、10～12×6～10 μm。

分 布 域 : 本州以南。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、リュウキュウマツの混じった照葉樹林の地上に子実体を生じる。

生育状況 : 西表島南部と沖縄島北部の山林の地上から確認されている。情報が不足している。

学術的価値 : 子実体の胞子は一般に球形、卵形、楕円形であるが、本種を含むイッポンシメジ属の胞子は角形をしている点で、形態的に他の菌群とは異なる独特の形質を持つ。

備 考 : イッポンシメジ属の種には有毒な種もあるが、本種は無毒で食用になると言われている。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. コンイロイッポンシメジ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 139.
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. コンイロイッポンシメジ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 263, pl. 68.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. コンイロイッポンシメジ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 281.
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : **アミヒカリタケ**

分類 : クヌギタケ科 ハラタケ目

学名 : *Favolaschia manipularis* (Berk.) Teng

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は小型で。傘は、初めまんじゅう形、後にやや平らとなり、径1~3 cm。傘の表面は平滑で粘性はなく、幼時は暗灰色、成長するに従って次第に淡色となり、類白色、乾燥するとほとんど白色になる。傘の裏面は管孔から成る。管孔は多少放射状に並び、白色、直生から上生して柄につく。柄は細い円柱状で、1.5~4 cm×1~2 mm、表面は淡灰色から白色、粉状、中空。孢子紋は白色。担子孢子は卵形で、6~9×5~6 μm。

分布域 : 本州中南部以南、インドネシア、ミクロネシア、オーストラリア、アフリカ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 本種は沖縄島ではほぼ1年中、山地の林床にある倒木や枯木の上に子実体を群生または束生する。

生育状況 : 県内では3島から知られているが、各島における本種の生育場所は限られている。倒木から年に数回(1~3ヶ月に1回程度)子実体が発生している。情報が不足している。

学術的価値 : 本菌は顕著な発光性がある点で興味深い。柄部が特に強く発光する。

減少の要因 : 県内における本種の生育場所は少ない。本種が発生する倒木が昆虫採集により破壊される、あるいは倒木等が持ち去られたことが見られた。開発や皆伐等の人為的な攪乱の影響を受けていないか調べる必要がある。

備考 : 本種はクヌギタケ科に属する子実体であるが、子実層はヒダではなくイグチ類の子実体と同様に管孔である。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. アミヒカリタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 66.
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. アミヒカリタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 112, pl. 26.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. アミヒカリタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 137.
 宮城元助, 1960. 発光茸 *Filoboletus manipularis* に関する二, 三の観察. 琉球大文理紀要 (理学篇), 4.
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.
 金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成**・中村 直**・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和名 : オオスルメタケ
 科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目
 学名 : *Fomitella rhodaphaea* (Lév.) Aoshima
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 細矢 剛・根田 仁・服部 力・保坂健太郎・村上康明・吹春俊光・金城一彦・寺嶋芳江, 2011. 西表島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告, 58, 21-28.
 宮城元助, 1958. 琉球産茸類について. 琉球大文理紀要(理学篇), 2: 35-40.

執筆者名 : 小松知普

和名 : シママンネンタケ
 科名 : マンネンタケ科 ヒダナシタケ目
 学名 : *Ganoderma boninense* Pat.
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. シママンネンタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 257.
 今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. シママンネンタケ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 485.
 宮城元助, 1958. 琉球産茸類について. 琉球大文理紀要(理学篇), 2: 35-40.

執筆者名 : 小松知普

和名 : コゲイロカイガラタケ
 科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目
 学名 : *Gloeophyllum abietinum* (Fr.) Karst.
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 寺嶋芳江

和名 : オウギタケ
 分類 : オウギタケ科 イグチ目
 学名 : *Gomphidius roseus* (Fr.) Karst.
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中型で、傘は、幼時類円錐形～丸山形で、成長すると径 3～6 cm の浅いじょうご形になる。表面は、湿っているときゼラチン質で粘性があり、淡紅色、古くなると黒いしみを生じる。ヒダは、やや疎、幼時灰白色、後に緑を帯びた暗灰褐色。柄は 3～6 cm×6～10 mm、基部に向かってやや細くなり、上部に綿毛状の不完全なツバを有する。表面は上部が白色、下部は淡紅色～淡紅褐色。担子胞子は長楕円形～類紡錘形で、15～19×5～6 μm。胞子紋はほぼ黒色。

分 布 域 : 本州以南、アジア、ヨーロッパ。
県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
生 育 環 境 : 夏～秋、リュウキュウマツの混じった照葉樹林の地上に子実体を単生または散生する。
生 育 状 況 : 石垣島オモト岳と沖縄島南部で知られていた。その後、西表島と沖縄島の北部山林でも観察されたが、逆に沖縄島南部では観察されなくなった。情報が不足している。
学 術 的 価 値 : 本種は樹木の根に菌根を形成し、互いに栄養のやり取りを行う共生現象があると言われている。
備 考 : 温帯域では普通の種であるが、本県では子実体の観察例は少ない。食用となる。

文 献 : 今関六也・本郷次雄（編著），1987. オウギタケ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅰ）”，保育社，大阪，271-272, pl. 69.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. オウギタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，294-295.
宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7：33-37.

執 筆 者 名 : 中村 直**・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和 名 : **ムニンキヤマタケ**
科 名 : スメリガサ科 ハラタケ目
学 名 : *Hygrocybe miniatostrata* (S. Ito et Imai) S. Ito
カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 絶滅(EX)

文 献 : 宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7：33-37.

執 筆 者 名 : 小松知普

和 名 : **ムジナタケ**
分 類 : ナヨタケ科 ハラタケ目
学 名 : *Lacrymaria lacrymabunda* (Bull.) Pat.
カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 傘は、小型～中型で径3～6 cm、茶褐色～帯黄褐色、表面は粘性なく繊維状鱗片に覆われ、周辺部に白色の繊維毛がある。ヒダは、暗紫褐色で、ややまだら状、縁は白く縁どられる。柄は3.5～7 cm、褐色の鱗片に覆われる。ツバは、白色、綿毛状、のち胞子の落下によって帯黒色となる。担子胞子、レモン形、9～12×6～8 μm、黒色、いぼで覆われる。

分 布 域 : 北海道～南西諸島、北半球に分布。
県 内 の 分 布 : 沖縄島。
生 育 環 境 : 夏～秋、林内の地上に子実体を形成する。
生 育 状 況 : 沖縄島北部の山地林内の地上に散生または群生することが確認された。情報は少ない。
学 術 的 価 値 : 沖縄島で確認され、地理分布上貴重である。
備 考 : 食用価値は低い。

文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. ムジナタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”，本郷

次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 102.

今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. ムジナタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 174, p1. 45.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. ムジナタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 211.

金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001 年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成**・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和 名 : カラハツモドキ

科 名 : ベニタケ科 ベニタケ目

学 名 : *Lactarius insulsus* (Fr.) Fr.

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文 献 : 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 根田 仁・小松知普

和 名 : オガサワラハツタケ

科 名 : ベニタケ科 ベニタケ目

学 名 : *Lactarius ogasawarashimensis* S. Ito & Imai

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 絶滅(EX)

執筆者名 : 根田 仁

和 名 : ツチカブリ

分 類 : ベニタケ科 ベニタケ目

学 名 : *Lactarius piperatus* (Scop.: Fr.) S. F. Gray

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中～大型。傘は、初めくぼんだまんじゅう形、後に開いてじょうご形となり、径 4～18 cm。表面は粘性が無く乾燥し、多少しわがある。色は白色、後に淡黄色で、しばしば汚黄～汚黄褐色のしみができる。ヒダは多少垂生し、クリーム色、極めて密で幅が狭く、二分枝する。柄は円柱状で、3～9×1～3 cm、通常根元はやや細く、白色、質は堅い。傷つくと白色の乳液を多量に分泌し、味は極めて辛い。担子胞子は広卵円形～類球形で 5～8×5～7 μm、微細ないぼと細い線がある。

分布域 : 北海道～南西諸島、北半球一帯、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、イタジイ等の広葉樹林またはリュウキュウマツの混生する林内の地上に生じる。

生育状況 : 宮城 (1964, 1971) は本種を沖縄島北部と西表島から報告している。その後の調査では両島における本種の観察地は狭く限られている。情報が不足している。

学術的価値 : チチタケ属の子実体はヒダを傷つけると乳液を分泌する性質がある。本種は白色の乳液を多量分泌するので、この特徴をよく表している。

- 備考 : 細かく刻み、よく洗うと食べられると言われる。しかし、本種の乳液は非常に辛味が強く、嘔吐を
起こすこともあるので注意を要する。
- 文献 : 今関六也・本郷次雄（編著），1989. ツチカブリ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅱ）”，保育社，大阪，
62.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. ツチカブリ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山
と溪谷社，東京，378-379.
宮城元助，1964. 沖縄島産マツタケ目について（Ⅰ）. 琉球大文理紀要（理学篇），7: 54-70.
宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7:
33-37.

執筆者名 : 西銘盛光*・中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

- 和名 : ケガワタケ
- 分類 : タマチョレイタケ科 タマチョレイタケ目
- 学名 : *Lentinus squarrosulus* Mont.
- カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中（大）型、傘は中央がくぼんだまんじゅう形～ロート形、径3～8 cm、やや革質、縁は
初め内側に巻くが、後広がり、しばしば不規則に波打つ。傘は、白～クリーム色、初め圧着した繊
維状の鱗片で密に覆われる。鱗片は、灰褐色～黒褐色、傘が開くにつれて周辺部は散在する。肉は
薄く、白色。ヒダは、垂生し、密、白色、後やや黄色、幅は狭く2～5 mm、縁は成熟するにつれて
鋸歯状となる。柄は、3～5×0.5～1.5 cm、中心生～偏心生、白色または基部に向かって褐色となり、
細かい鱗片を散在しているが、古い子実体ではほぼ滑らかとなる。ヒダとの境界付近に白色、繊維
状のツバをもつが、ツバは消失しやすい。担子胞子は、円柱形、6～8×2～3 μm。胞子紋は白色。

分布域 : 九州以南、世界の熱帯から温帯域。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 本種は森林の日の当たる場所にある倒木または切株に子実体を生じる。

生育状況 : 本種の子実体は群生する傾向がある。情報が不足している。

学術的価値 : ハラタケ目の菌類は通常1菌糸型であるが、本種の子実体は2菌糸型である点で分類・形態学上特
異である。

減少の要因 : 熱帯から温帯にかけて広く分布している種であるが、県内では本種の確認は少ない。本種の確認頻
度が少ない原因は不明である。

備考 : 本種に対して *Lentinus tigrinus* (Bull.: Fr.) Fr. の学名を用いている研究者もいる。

- 文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名，1994. ケガワタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”，本郷
次雄（監），山と溪谷社，東京，13.
今関六也・本郷次雄（編著），1987. ケガワタケ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅰ）”，保育社，大阪，
31, pl. 1.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. ケガワタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山
と溪谷社，東京，26.
保坂健太郎・細矢 剛・服部 力・吹春俊光・高橋春樹・松井英幸・種山裕一・宇野邦彦・寺嶋芳
江，2012. 2012年沖縄県石垣島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報
告，59
細矢 剛・根田 仁・服部 力・保坂健太郎・村上康明・吹春俊光・金城一彦・寺嶋芳江，2011.
西表島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告，58.

執筆者名 : 中村 直**・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和 名 : **カエンオチバタケ**

科 名 : ホウライタケ科 ハラタケ目

学 名 : *Marasmius opulentus* Har. Takahashi

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和 名 : **ヒロヒダタケ**

分 類 : ホウライタケ科 ハラタケ目

学 名 : *Megacollybia clitocyboidea* R. H. Petersen, Takehashi & Nagas.

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、中・大型で、傘は開いて平らとなり、径5~15 cm、後に中央がややくぼむ。表面は灰色、灰褐色、黒褐色などで、放射状の繊維紋がある。ヒダは湾生し、幅広く疎、白色。柄は、7~12×1~2 cm、丈夫でかたく、表面は繊維状、根元に白色の菌糸束がある。担子胞子は広楕円形、7~10×5~8 μm。

分布域 : 北海道~南西諸島、北半球暖温帯以北。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 夏~秋、広葉樹林の腐木またはその近くに生じる。

生育状況 : 県内では沖縄島北部山地森林の一箇所のみで観察されている。

学術的価値 : 本種は、県内では沖縄島だけ観察されており、地理的分布の上で重要である。

備考 : 従来食用とされたが、米国で中毒の報告がある。

文 献 : 本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. ヒロヒダタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 57.

今関六也・本郷次雄(編著), 1987. ヒロヒダタケ. “原色日本新菌類図鑑(I)”, 保育社, 大阪, 98-99, p1. 22.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. ヒロヒダタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 117.

金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成**・根田 仁・寺嶋芳江

和 名 : **ウスムラサキヒラタケ**

科 名 : アセタケ科 ハラタケ目

学 名 : *Melanotus eccentricus* (Murr.) Singer

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : コガネハナガサタケ
科名 : クヌギタケ科 ハラタケ目
学名 : *Mycena auricoma* Har. Takahashi
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : ネットアイヌメリタケ
分類 : タマバリタケ科 ; ハラタケ目
学名 : *Oudemansiella canarii* (Jungh.) Höhnelt
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は、小～中型。傘は、平らに開き、径3～7 cm、表面に粘性があり、白色～淡黄白色または淡灰褐色、通常被膜の破片を付着する。肉は白色で柔軟。ヒダは、白色、直生～上生、厚く疎。柄は、3～8 cm×4～9 mm、白～淡灰褐色、ツバを欠き、基部は球根状にふくらむ。担子胞子は、球形～類球形、径18～28 μm、厚膜である。

分布域 : 小笠原、南西諸島、アジア、北・南アメリカ、アフリカの熱帯～亜熱帯。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 本種は、湿り気が多い低地林内の樹木の腐植化が起こった部分や立枯れ木に子実体を形成する。

生育状況 : 本種は、沖縄島、石垣島および西表島の低地林で観察されているが、3島における観察地はそれぞれ1～2箇所と限られている。情報が不足している。

学術的価値 : 本種は熱帯～亜熱帯性の子実体で、国内では南西諸島と小笠原のみで知られ、地理分布上貴重である。

備考 : 本種は食用に供することができる。

文献 : 細矢 剛・根田 仁・服部 力・保坂健太郎・村上康明・吹春俊光・金城一彦・寺嶋芳江, 2011. 西表島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告, 58 : 21-28.
本郷次雄・上田俊徳・伊沢正名, 1994. ネットアイヌメリタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 55.
今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. ネットアイヌメリタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 97, pl. 22.
宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について (I). 琉球大文理紀要 (理学篇), 7: 54-70.
宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直**・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和名 : カワキタケ
分類 : タマチョレイタケ科 タマチョレイタケ目
学名 : *Panus conchatus* (Bull.) Fr.
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は、中・大型、径4~10 cm、うす形~ロート形で、上から見るとほぼ円形~腎臓形、縁は内側に巻き不規則に波打つ。傘の表面は初め微毛を帯びるが、のち平滑、帯紫褐色~黄褐色。ヒダは、垂生し、傘と同色~淡黄褐色。柄は中心性~側生、太く短く、強靱、細軟毛を密生する。担子胞子は、円柱形、6~8×2.5~3 μm。胞子紋は白色。

分布域 : 国内では比較的まれ。アジア、北アメリカ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 夏~秋、山地林内の広葉樹、ときに針葉樹の枯幹や切株上に子実体を形成する。

生育状況 : 沖縄島および石垣島のそれぞれ一箇所の森林の立枯れ木や切株から知られているが、最近では観察されてなく、県内における本種の生育地は稀である。情報が不足している。

学術的価値 : 国内における分布域は狭く、本種の地理的分布を考察する上で重要である。

減少の要因 : 本種の子実体の確認が少ない要因は不明である。

備考 : 材の白色腐朽を起こす。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. カワキタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 14.
 今関六也・本郷次雄(編著), 1987. カワキタケ. “原色日本新菌類図鑑(I)”, 保育社, 大阪, 31-32, pl. 2.
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 島袋守成**・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : **ヒメヒガサヒトヨタケ**

分類 : ナヨタケ科 ハラタケ目

学名 : *Parasola plicatilis* (Curtis) Redhead, Vilgalys & Hopple

カテゴリー : 情報不足(DD) **環境省カテゴリー** : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は小型で、傘は卵形~円柱形からまんじゅう形となり、後に平らに開き、径1.5~2.5 cm、中央部は円盤状にくぼむ。表面は初め黄褐色~栗褐色、後、灰色となり、中央部は黄土色、顕著な放射状の長い溝線を形成し、扇面のヒダ状となる。ヒダは隔生、やや疎、初め類白色から淡褐色、次いで殆ど黒色へと変わる。傘の液化性はあまりない。柄は、円柱状、長さ4~7 cm、淡灰褐色、基部へ向かってわずかに太くなり、色は濃くなる。担子胞子の表面観は広卵形で、側面観は楕円形、12~15×10~12×7~8 μm、黒褐色、発芽孔がある。

分布域 : 北海道~南西諸島、アジア、ヨーロッパ、北アメリカ。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 本種は森林周辺部の地上に子実体を形成する。

生育状況 : 沖縄島北部の草地と中部の森林の林縁部地上でそれぞれ一度子実体が観察された。

学術的価値 : 県内では沖縄島で生育することが確認されている。情報が不足している。

備考 : 温帯域では路傍や芝生にも子実体を生じる普通種である。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ヒメヒガサヒトヨタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 100.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. ヒメヒガサヒトヨタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 208.
 宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について(I). 琉球大文理紀要(理学篇), 7: 54-70.

執筆者名 : 中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : アナタケモドキ

科名 : タコウキン科 ヒダナシタケ目

学名 : *Porogramma calceum* (Sacc.) Lowe

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 寺嶋芳江

和名 : オガサワライタチタケ

科名 : ナヨタケ科 ハラタケ目

学名 : *Psathyrella boninense* (S. Ito & Imai) S.Ito

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 絶滅(EX)

文献 : 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 根田 仁、小松知普

和名 : ホオベニシロアシグチ

分類 : イグチ科 イグチ目

学名 : *Pseudoastroboletus valens* (Corner) Yan C. Li & Zhu L. Yang

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は、中～大型で、5～13 cm、表面は灰褐色、初めやや綿毛状、のちほぼ無毛となり、湿ると多少粘性を帯びる。傘の裏側にある管孔は上生～ほぼ離生し、初め白色のち淡紅色となる。孔口は管孔と同色、傷つくと褐色に変わる。柄は白～帯淡紅色、のち基部付近に黄色のしみを生じ、表面には隆起した粗い網目模様がある。担子胞子は類紡錘形、11～16×4～6 μm。胞子紋は鈍い肉桂色。

分布域 : 本州関東以南、東南アジア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 夏～秋、イタジイ林内の林床に子実体を形成する。

生育状況 : 本県の分布は、沖縄島に限られる。

学術的価値 : 現在、本県では沖縄島が県内唯一の生息地で、地理的分布の上で貴重種である。

減少の要因 : 情報が不足している。

備考 : 傘の裏面管孔部に傷をつけると褐色に変色する。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ホオベニシロアシグチ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 163.

今関六也・本郷次雄 (編著), 1989. ホオベニシロアシグチ. “原色日本新菌類図鑑 (Ⅱ)”, 保育社, 大阪, 39, p1. 80.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. ホオベニシロアシグチ. “山溪カラー名鑑 日本きのこ”, 山と溪谷社, 東京, 337.

金城一彦・中村 直・島袋守成・比嘉 享・宮城 健, 2002. 2001 年度日本菌学会菌類採集会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 43: 74-78.

執筆者名 : 島袋守成**・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

和名 : サケバタケ

分類 : イチョウタケ科 イグチ目

学名 : *Pseudomerulius curtisii* (Berk.) Redhead & Ginns

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は小～中型。傘は、半円形からじん臓形または扇形で、径 2～5 cm、縁は強く内側に巻き、表面はほぼ無毛から多少フェルト状で黄色。傘の肉は淡黄色で、新鮮なときは特有の不快臭がある。ヒダは、やや密に放射状に配列するが、著しく縮れるか、ほぼ規則的に数回分岐し、側面に顕著な縦じわを有し、黄色または橙黄色で、古くなるとややオリーブ色を帯びる。柄は無い。担子胞子は楕円形から円柱形、3～4×1.5～2 μm、しばしば一方にやや湾曲する。胞子紋はオリーブ黄色。

分布域 : 本州中部以南、ソ連極東地方、中国、北アメリカ。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 夏～秋、マツその他の針葉樹の材上に単生または重なり合って子実体を生じる。

生育状況 : 宮城 (1964) は本種を沖縄島北部の山地森林から報告している。その後の調査で西表島東部の山林にも分布していることが報告された。情報が不足している。

学術的価値 : 県内では主としてリュウキュウマツの枯木や倒木を腐朽させる。セルロースを分解し材の褐色腐れを起こす性質を持つので、生理・生態学上興味深い。

備考 : 食用に不適であるといわれている。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. サケバタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 141.

今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. サケバタケ. “原色日本新菌類図鑑 (I)”, 保育社, 大阪, 267, p1. 69.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. サケバタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 289.

宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について (I). 琉球大文理紀要 (理学篇), 7: 54-70.

執筆者名 : 西銘盛光*・中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : キアミアシイグチ

分類 : イグチ科 イグチ目

学名 : *Retiboletus ornatipes* Manfr. Binder & Bresinsky

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 子実体は中型～大型。傘は、まんじゅう形から平らに開き、径 4.5～8 cm、表面には粘性がなく、ややピロッド状、黄褐色から褐オリーブ色。傘の肉は、固くしまり、黄色、空気に触れると徐々に濃黄色になる。傘の裏は管孔、上生か直生、または多少垂生し、黄色、傷つくと濃黄色になる。柄は円柱状、上部と下部はほぼ同幅で 5～11×0.6～3 cm、かたくしまるが折れやすい。表面は傘と同色でやや粉質、多少翼状に隆起した網目模様を有する。基部は白色の菌糸で覆われ、その菌糸に傷をつけると橙黄色に変色する。担子胞子は円柱状～類紡錘形、11～13×3～5 μm。胞子紋はオリー

ブ褐色。

- 分 布 域 : 北海道～南西諸島、中国、ロシア沿海州、北アメリカ東部。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島。
- 生 育 環 境 : 夏から秋、イタジイ林内のリターの多い地上に子実体を生じる。
- 生 育 状 況 : 県内では1971年に石垣島から本種が報告された。以後、沖縄島北部の森林で単生している子実体が観察された。情報が不足している。
- 学 術 的 価 値 : 本種は、柄の表面に顕著な網目状の隆起を有する点で、イグチ類のなかでも形態的に特異な種群の一つである。
- 備 考 : 日本では以前 *Pulveroboletus retipes* (Berk. & Curt.) Sing. の学名で知られていた。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. キアミアシイグチ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 156.
 今関六也・本郷次雄 (編著), 1989. キアミアシイグチ. “原色日本新菌類図鑑 (II)”, 保育社, 大阪, 28, p1. 77.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄 (編著), 1988. キアミアシイグチ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 325.
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.
- 執 筆 者 名 : 西銘盛光*・中村 直**・根田 仁・小松知普・寺嶋芳江

- 和 名 : **ウスムラサキハツ**
- 科 名 : ベニタケ科 ベニタケ目
- 学 名 : *Russula lilacea* Quél.
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ウスムラサキハツ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 178.
 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄, 2011. ウスムラサキハツ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 370.
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.
- 執 筆 者 名 : 根田 仁・小松知普

- 和 名 : **クロハツ**
- 科 名 : ベニタケ科 ベニタケ目
- 学 名 : *Russula nigricans* (Bull.) Fr.
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 文 献 : 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄, 2011. クロハツ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 358.
 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. クロハツ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 170.
- 執 筆 者 名 : 寺嶋芳江

和名 : ヤマブキハツ
 科名 : ベニタケ科 ベニタケ目
 学名 : *Russula ochroleuca* (Pers.) Fr.
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : イロガワリベニタケ
 科名 : ベニタケ科 ベニタケ目
 学名 : *Russula rubescens* Beardslee
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. イロガワリベニタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄 (監), 山と溪谷社, 東京, 174.
 細矢 剛・根田 仁・服部 力・保坂健太郎・村上康明・吹春俊光・金城一彦・寺嶋芳江, 2011. 西表島菌類観察会において鑑定されたきのこ目録. 琉球大学農学部学術報告, 58, 21-28.
 今関六也・大谷吉雄・本郷継雄, 2011. イロガワリベニタケ. “増補改訂版 山溪カラー名鑑日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 360.
 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について (1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 根田 仁・小松知普

和名 : オキナクサハツ
 分類 : ベニタケ科 ベニタケ目
 学名 : *Russula senecis* Imai
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘の径は5~10 cm、中央部はくぼむ。表面は黄土褐色~汚黄土色で著しいしわがあり、周辺部には放射状の溝線がある。ヒダは汚白色、縁部は褐色~黒褐色に縁取られる。肉は多少臭気があり、味は辛い。柄は長さ5~10 cm、汚黄色の地に褐色~黒褐色の細点がある。担子胞子は球形で、径7.5~9 μm、表面に大小のとげと翼状の隆起がある。

分布域 : 北海道~南西諸島、中国、東アジア、ニューギニア。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 夏~秋、広葉樹林やイタジイ林床の地上に子実体を形成する。

生育状況 : 県内では沖縄・石垣・西表の各島から知られているが、それぞれの島における観察例は少ない。情報が不足している。

学術的価値 : 本種の担子胞子は胞子の表面に独特な大小のとげと翼状の隆起をそなえた形態的特徴がある。

備考 : 本種は不快臭と辛味があり、食用に不適。生食すると、中毒症状(嘔吐、腹痛、下痢などの胃腸系の中毒)を起こすと言われている。

文献 : 吹春俊光, 1997. 照葉樹林のきのこ. “南の森の不思議な生きもの-照葉樹林の生態学-”, 千葉県立中央博物館, 千葉, 88-92.

今関六也・本郷次雄（編著），1989. オキナクサハツ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅱ）”，保育社，大阪，50，p1. 83.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. オキナクサハツ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，362.

宮城元助，1964. 沖縄島産マツタケ目について（Ⅰ）. 琉球大文理紀要（理学篇），7：54-70.

宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7：33-37.

執筆者名：島袋守成**・根田 仁・寺嶋芳江

和名：ニセクロハツ

分類：ベニタケ科 ベニタケ目

学名：*Russula subnigricans* Hongo

カテゴリー：情報不足(DD) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：子実体は中～大型。傘は、まんじゅう形から中央のくぼんだ平らとなり、径5～11.5 cm、後にじょうご形となる。表面は乾燥し、ややビロード状、灰褐色～黒褐色で、周辺部はやや淡色。表皮ははぎ取りにくく、肉は厚くて堅くしまり、白色、切断し空気に触れると赤変する。ヒダは幅6～9 mm、直生またはやや垂生し、厚くて疎、クリーム色、傷をつけると赤変する。柄は円柱状で、長さ3～6 cm、幅1～2.5 cm、上下同径または下方に細まり、傘より淡色、不明瞭な縦のしわがあり、中実。担子胞子は類球形～球状卵形、7～9×6～7 μm、表面に微細ないぼと細かい網目がある。

分布域：本州中部以南、中国。

県内の分布：西表島。

生育環境：夏～秋、イタジイ等の常緑広葉樹林内の地上に子実体を生じる。

生育状況：本種は西表島南部の山地森林一箇所から知られている。情報が不足している。

学術的価値：西表島は本種の県内唯一の生育地である。本種の地理的分布の上で貴重である。

備考：本種の子実体を食べると、死に至る強い中毒を起こすと言われている。

文献：今関六也・本郷次雄（編著），1989. ニセクロハツ. “原色日本新菌類図鑑（Ⅱ）”，保育社，大阪，47-48，p1. 82.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄（編著），1988. ニセクロハツ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”，山と溪谷社，東京，359.

宮城元助，1971. 西表島，石垣島産マツタケ目 Agaricales について（1）. 沖縄生物学会誌，7：33-37.

執筆者名：西銘盛光*・中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和名：アイタケ

分類：ベニタケ科 ベニタケ目

学名：*Russula virescens* (Schaeff.) Fr.

カテゴリー：情報不足(DD) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：子実体は中・大型。傘は、まんじゅう形から平らに開き、径6～12 cm、後にじょうご型になる。表面は灰緑色～灰青緑色、または淡黄緑色、不規則な多角形にひび割れしてかすり状の模様になる。肉は白色で、幼時はかたい。ヒダは白色のちややクリーム色を帯びる。柄は円柱状、5～10×2～3 cm、

かたくて中実、表面は白色で、多少しわ状の縦線がある。担子胞子は卵状類球形、7~8×6~6.5 μm、壁に小突起と細い隆起した連絡糸がある。

- 分 布 域 : 北海道~南西諸島、ヨーロッパ、中国、北アメリカ。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、西表島。
- 生 育 環 境 : 春~初夏に、広葉樹林の地上に発生する。
- 生 育 状 況 : 県内では沖縄島南部と北部および西表島東部から知られている。沖縄島南部の生育地は最近環境が悪化し、本種の子実体形成は観察されなくなった。情報が不足している。
- 学 術 的 価 値 : 子実体が緑色または青色を帯びる種類は少ないので、色調の点では数少ない特異な種である。
- 備 考 : 本種は食用となる。
- 文 献 : 今関六也・本郷次雄(編著), 1989. アイタケ. “原色日本新菌類図鑑(Ⅱ)”, 保育社, 大阪, 54, pl. 85.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. アイタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 369.
宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について(Ⅰ). 琉球大文理紀要(理学篇), 7: 54-70.
宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執 筆 者 名 : 中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

- 和 名 : ニワタケ
- 分 類 : イチョウタケ科 イグチ目
- 学 名 : *Tapinella atrotomentosa* (Batsch) Šutara
- カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 子実体は中~大型。傘は、平らに開いて径5~15 cm、後に中央部で浅くくぼみ、縁は初め内側に強く巻いている。表面は初めビロード様の微細な毛で密に覆われるが、成熟すると次第に無毛、さび色~暗褐色。肉は厚く、白~暗褐色。ヒダは密で垂生し、しばしば柄付近で分岐または互いに連結して網目状、クリーム色~黄褐色。柄は太く、3~12×1~3 cm、強じん、偏心生~側生、表面には黒褐色の粗い毛を密生する。担子胞子は広楕円形~卵形で、4~6×3~4 μm。胞子紋は淡黄土色。
- 分 布 域 : 本州以南、北半球一帯。
- 県 内 の 分 布 : 西表島。樹木上に子実体を生じる。
- 生 育 状 況 : 宮城(1971)は本種を西表島東部から報告しているが、県内ではこれが唯一の生育地である。情報は不足している。
- 学 術 的 価 値 : 子実体の柄が偏心生、強じん太く、よく発達する本種の形質は、ハラタケ目のなかでは独特なものである。
- 備 考 : かなり大きくなる子実体であるが、食用には不適のようである。
- 文 献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. ニワタケ. “山溪フィールドブックス⑩ きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 140.
今関六也・本郷次雄(編著), 1987. ニワタケ. “原色日本新菌類図鑑(Ⅰ)”, 保育社, 大阪, 267, pl. 68.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. ニワタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 288.
宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 中村 直**・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ヒメサジタケ

科名 : ホウライタケ科 ハラタケ目

学名 : *Trogia stereoides* Corner

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

執筆者名 : 根田 仁

和名 : スミレニガイグチ

科名 : イグチ科 イグチ目

学名 : *Tylopilus obscureviolaceus* Har. Takahashi

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は径 70-100 mm、最初半球形、のち饅頭形〜ほぼ平開し、縁部は最初内側に巻く。傘全体が一様に暗青紫色を呈する。柄は 80-100×20-30 mm、基部が球根状に膨らみ、傘より淡色または褐色を帯び、根元に向かって暗色になる。上部または頂部に淡青紫色の繊細な網目模様を表す。傘の裏側は、小型の管孔である。

分布域 : 沖縄県。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : スダジイとオキナワウラジログシを中心とする照葉樹林内地上に単生または散生。5〜6月。

生育状況 : 本種は、西表島の限られた場所でのみ観察されている。

減少の要因 : 希少である原因は不明である。

備考 : 情報が不足している。

文献 : 寺嶋芳江監修・編著／高橋 春樹, 種山 裕一編著, 2016. 南西日本菌類誌. 東海大学出版会, 神奈川. 336-346.

執筆者名 : 根田 仁・小松知普

和名 : フクロタケ

分類 : ウラベニガサ科 ハラタケ目

学名 : *Volvariella volvacea* (Bull.: Fr.) Sing. var. *volvacea*

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 傘は径 4〜10 cm、まんじゅう形から中高の平らに開き、表面は繊維状、灰褐色で粘性はない。ヒダは離生し、白色のち肉色となる。柄は、長さ 3〜9 cm、白色、ほとんど平滑、基部には塊茎状にふくらみ黒褐色膜質のツボを有する。担子胞子は、卵形〜楕円形、7〜9.5×5〜7 μm。

分布域 : 南西日本、熱帯〜亜熱帯を中心に世界的に分布。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 夏季、林内の腐植の多い地上、サトウキビの搾りかす等に子実体を形成する。

生育状況 : 1960年8月、大里村(現南城市)の林内リター上に単生していることが報告された。その後、サトウキビの搾りかすを積み上げた上に発生を確認した。情報は不足している。

学術的価値 : これまでの調査・報告では沖縄島が県内唯一の生育地で、地理分布上貴重である。

備考 : 中国南部や東南アジアでは大量に人工栽培されている食用菌である。

文献 : 本郷次雄・上田俊穂・伊沢正名, 1994. フクロタケ. “山溪フィールドブックス⑩きのこ”, 本郷次雄(監), 山と溪谷社, 東京, 83.

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄(編著), 1988. フクロタケ. “山溪カラー名鑑 日本のきのこ”, 山と溪谷社, 東京, 174-175.

宮城元助, 1964. 沖縄島産マツタケ目について(I). 琉球大文理紀要(理学篇), 7: 54-70.

執筆者名 : 島袋守成**・根田 仁・寺嶋芳江

和名 : ヒメアワタケ

科名 : イグチ科 イグチ目

学名 : *Xerocomus parvulus* Hongo

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

文献 : 宮城元助, 1971. 西表島, 石垣島産マツタケ目 Agaricales について(1). 沖縄生物学会誌, 7: 33-37.

執筆者名 : 根田 仁・小松知普

3. 4 維管束植物

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

〈種子植物〉

カテゴリー 分類群	絶滅	野生 絶滅	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II類	準絶滅 危惧	絶滅のおそれ のある地域個 体群	情報 不足	合 計	
			IA類	IB類						
初版 1996	7		71		317	61	—	135	591	
改訂第2版 2006	5	3	294	185	109	156	39	—	80	577
改訂第3版 2018	5	3	319	200	119	161	42	—	77	607

〈シダ植物〉

カテゴリー 分類群	絶滅	野生 絶滅	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II類	準絶滅 危惧	絶滅のおそれ のある地域個 体群	情報 不足	合 計	
			IA類	IB類						
初版 1996	9		28		30	30	—	3	100	
改訂第2版 2006	5	0	55	35	20	31	12	—	5	108
改訂第3版 2018	5	0	56	37	19	33	12	—	3	109

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧 I 類、危急種は絶滅危惧 II 類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

維管束植物は、対象となる種数が多いので、特に個体数や自生地数が少ない種を中心に現地調査を行った。また情報不足の種については、国内外の大学や研究機関の植物標本室に収蔵されている沖縄県産の標本を探索し、同定と採集情報の確認を行った。

分子系統分類学の急速な発展により、維管束植物の科名や属名などの見直しが進み、大きく変更されつつある。それらの変更点をすべて反映したリストの改訂は、それだけで多くの労力を必要とすることから、今回は種子植物は従来のエングラ方式の科名に APGIV (Angiosperm Phylogeny Group IV) の科名を併記するに留めた。シダ植物は従来の科名に PPGI (Pteridophyte Phylogeny Group I) の科名を併記した。今後これらの新しい分類システムが一般に浸透するようになれば、科名ばかりでなく属名や種小名までを対象とした全面的な改訂が必要である。

環境省版レッドデータブック (2016) では、単純な雑種は対象としていないが、沖縄県版レッドデータブックでは、雑種起源とされる種 (例：アイノコホラシノブ) や、種子や根茎で繁殖し、種のように振る舞っているもの (例：オキナワウラジロイチゴ、ホコザキノコギリシダ)、まだ雑種と断定されていないもの (例：マヤイチゴ、クニガミクロウメモドキなど) については対象に含めた。

(2) 本改訂で明らかになったこと

今回の改訂で個々の種の生育状況に新しい情報を加え、評価の見直しを行った。ランクを変更した種は 12 種 (例：コモロシガヤ、シラスゲ、オサラン、コウトウヒスイランなど)、リストから外した種は 1 種 (オオアオガネシダ)、新たにリストに加えた種は 32 種 (例：ミツバウコギ、ハマヤブガラシ、ホソバムラサキ、トックリスゲ、カギテンツキ、コカゲラン、ニオイラン、ツツザキヤツシロラン、ツボミヤツシロラン、フサシダなど)、和名や学名を変更した種は 5 種 (例：トカラアジサイ、オキナワヒヨドリジョウゴ、トゲウミヒルモ、タイワンカンズゲなど) である。

前回の改定の後、やんばる国立公園、慶良間諸島国立公園が新設され、西表石垣国立公園や沖縄海岸国定公園が拡充

され、維管束植物の生育地の保全がある程度保証されることになったが、採集や小規模な開発により絶滅の可能性が高まった種も数多く確認された。増殖した野生化ヤギによる植生の破壊が生態系に深刻な影響を与えているものと危惧される尖閣諸島では、多数の種の絶滅が危惧されるが、1991年以降は上陸調査が行われておらず、現状を反映させることができなかった。

これまでの調査で全く発見されておらず、絶滅が危惧されていたヒメヨウラクヒバ、ホソバフジボグサ、コケセンボンギクなどが現地調査で再発見されたり、存在が不明だった西表島のソノハラトンボの自生が標本調査で確認されるなどの成果も得られた。今回の調査で実際に足を踏み入れることができなかった島嶼がまだ多く残っている。無人島や小島嶼を対象とした調査は、今後の課題である。新たにリストに追加された日本新記録種も多いことから、掲載種だけを対象とした調査でなく、基礎的な植物相全体を対象とした調査は今後も必要であると思われる。

執筆者 横田昌嗣（琉球大学・教授）

(3) 掲載種の解説

1) 種子植物

和名 : オキナワハイネズ
分類 : ヒノキ科
学名 : *Juniperus taxifolia* Hook. et Arn. var. *lutchuensis* (Koidz.) Satake
方言名 : ヒッチャン、フィチェシ (沖縄島: 首里)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 雌雄異株の常緑低木。幹は匍匐性で、多数分枝し、2~4 m の範囲に広がる。針葉は3個輪生し、長さ約1 cm、下面に2条の白線がある。球果は径7~9 mm、紫褐色に熟する。
分布域(県外) : 本州(伊豆半島、伊豆七島)、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。
県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、屋我地島、渡嘉敷島、阿嘉島、座間味島。
生育環境 : 海岸や海岸に近い日当たりの良い原野や崖に生える。
生育状況 : 各地の海岸に点在しているが、海岸線の開発や護岸工事により、多くの自生地が失われた。庭木や盆栽用に盗掘され、足場の良い所では消失してしまった。
学術的価値 : 分布域の南限である。沖縄島は、基準産地である。
減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。
保全対策 : 緑化樹に苗木増殖した株を用いることにより採集を防止する。
備考 : 本種が自生する沖縄島北部地域の海岸線の多くの部分は、やんばる国立公園の指定地であるが、種の保存のための規制はほとんどない。IUCN カテゴリー: Near Threatened (NT)。
文献 : 新納義馬・島袋 曠, 1974. 沖縄島北部(国頭村)東海岸の植生. “沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 17-35.
宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物. “沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告書, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄県, 143-168.
執筆者名 : 新里孝和*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウバメガシ
分類 : ブナ科 (APG 科名: ブナ科)
学名 : *Quercus phillyraeoides* A. Gray
方言名 : ウフゲーラー (伊平屋島)
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の高木だが、通常は低木状で高さ2~5 m のものが多い。葉は硬い革質、倒卵形で長さ2~6 cm。堅果は楕円形、長さ2~2.5 cm で褐色。
分布域(県外) : 本州(関東以西)、九州、四国、中国中部。
県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島。
生育環境 : 山地の頂上部から中腹、海岸に近い風衝地に群落を形成する。
生育状況 : 伊平屋島、伊是名島ではトベラーウバメガシ群落を形成するが、近年、造園用、盆栽用に盗掘され、

個体数が減少している。沖縄島では北部の1ヶ所に生育が限られる。

- 学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。
- 減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。
- 保 全 対 策 : 緑化樹には苗木増殖した株を用いることにより採集を防止する。
- 備 考 : 自生地の一部は、県指定天然記念物（伊是名城島のアカラ御嶽のウバメガシ及びリュウキュウマツ等の植物群落）、名護市指定天然記念物（許田のウバメガシ）として保護されている。沖縄県指定天然記念物（アカラ御嶽のウバメガシ及びリュウキュウマツ等の植物群落）（1977年）、名護市指定天然記念物（許田のウバメガシ）（1973年）。
- 文 献 : 新納義馬, 1980. 伊是名城跡の植生. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 伊是名城跡・大浦川のマングローブ林・億首川のマングローブ林”, 沖縄自然研究会（編）, 沖縄県, 17-40. 新納義馬・新城和治, 1959. 伊平屋・伊是名諸島の植物. 琉球大学文理学部紀要（理学編）, (3) : 81-105.
- 執 筆 者 名 : 新里孝和*

- 和 名 : **ウラジロガシ**
- 分 類 : ブナ科 (APG 科名: ブナ科)
- 学 名 : *Quercus salicina* Blume
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑性の高木で高さ20 mくらいに達するものがある。1年枝は灰白色で皮目が目立ち、淡褐色の軟網を密生するがやがて無毛となる。葉は互生、披針形～長楕円状披針形、時として楕円状長楕円形、長さ5～12 cm、幅1.5～4.5 cm、鋭尖頭または長鋭尖頭、鋭脚またはやや円脚、鋭尖鋸齒縁で先端は多少内曲し側脈は7～13対、上面は無毛、下面は粉白色となる。葉柄は長さ1～2.5 cmで無毛。雌雄同株。雄花序は1年枝の下部付近から出て下垂し、線状長楕円形、長さ3.5～4 cm、柄は長さ1～1.5 cmくらいで開出褐毛を密布する。苞は広卵状三角形で鋭頭、長さ1.5 mmくらいの雌花2～5個を総状につける。各雌花には1枚の苞と2枚の小苞がある。花柱は3個、柱頭は幅広くて反曲する。堅果は2年目の10～12月に熟し、殻斗は皿形で約7層の環状鱗片からなり、淡灰緑色、淡灰褐色の微毛を密布し、辺縁には鋸齒状の欠刻がある。堅果は広卵状楕円形、長さ1.5～2 cm、幅10～13 mm内外で濃褐色である。

- 分布域 (県外) : 本州 (関東以南西)、四国、九州、種子島、屋久島、奄美大島、徳之島、南朝鮮、台湾。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、与那国島。
- 生 育 環 境 : 山地の尾根部や斜面に生えるが、群生はしない。
- 生 育 状 況 : 沖縄島北部では数ヶ所に産するが、個体数は少ない。与那国島では、1ヶ所のごく狭い範囲に生え、個体数は極めて少ない。
- 学 術 的 価 値 : 東アジアの照葉樹林を代表するブナ科樹種の一つであるが、沖縄県では沖縄島北部と与那国島の非石灰岩酸性土壌地帯に分布し、アジア大陸及び九州と中琉球、南琉球、台湾をつなぐ陸橋等の存在について、植物地理学的に考察する上で重要である（初島・金井, 1974）。
- 減 少 の 要 因 : 山地開発。森林伐採。
- 保 全 対 策 : 生育地や個体数が少なく、山地開発等による生育環境の劣化の影響が危惧される。個体群だけでなく生育地の森林を保全する必要がある。

文 献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.

執 筆 者 名 : 新里孝和*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

和名 : ムクノキ
分類 : ニレ科 (APG 科名: アサ科)
学名 : *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch.
方言名 : ウフバーブング (沖縄島: 田港)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉性の高木。幹の下部はときとして板根が発達する。葉は卵状楕円形、長さ 5~9 cm、エノキ属のように歪状のくさび脚で 3 行脈をもつ。核果は球形で径 8 mm。
分布域 (県外) : 本州、四国、九州、種子島、屋久島、朝鮮、中国。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 低山地斜面の自然林に、イスノキ、ガジュマル、クスノハカエデなどと共に生える。
生育状況 : 大宜味村田港、名護市仲尾次、名護城跡にごくまれにみられる。
学術的価値 : 分布域の南限である。
減少の要因 : もともと個体数が少ない。
保全対策 : 生育地を地域保全する。
備考 : 本種の自生地の一つは国指定天然記念物 (大宜味村田港御願の植物群落) にされている。

文献 : 新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・西銘盛光・日越国昭・佐久本敏, 1995. 大宜味村の植生. “大宜味村文化財調査報告書第 4 集 大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”, 大宜味村教育委員会, 17-196.
新城和治・新納義馬・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・日越国昭・佐久本敏, 1995. 大宜味村の植物相. “大宜味村文化財調査報告書第 4 集 大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”, 大宜味村教育委員会, 197-252.
新里孝和・澤岬安喜, 1979. 名護市の御嶽林. “名護市天然記念物調査報告 2”, 名護市教育委員会, 179pp.

執筆者名 : 新里孝和*

和名 : サキシマエノキ
分類 : ニレ科 (APG 科名: アサ科)
学名 : *Celtis biondii* Pamp. var. *insularis* Hatusima
方言名 : ビンギ (沖縄島: 首里/クワノハエノキも含む)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 2~5 m の小高木。小枝は皮目が多い。葉は卵形、長さ 5~7 cm、尾状鋭尖頭、3 行脈をもち、上面は多少ざらつく。コバノチョウセンエノキに似るが、葉の毛の量が少ない。
分布域 (県外) : セレベス、ニューギニア。
県内の分布 : 宮古島、伊良部島。
生育環境 : 低地の石灰岩地に生え、ときに小群落をなす。
生育状況 : 生育地は 4 ヶ所 (宮古島 3 ヶ所、伊良部島 1 ヶ所) が知られているだけで、個体数も少ない。
学術的価値 : コバノチョウセンエノキの変種と見なされていたが、永らく裸名のままであった。2016 年に正式に記載された (Umemoto *et al.*, 2016)。分布域の北限で、国内唯一の産地である。セレベスやニューギニアに隔離分布するとされるが、同じ変種であるかどうかについては今後詳細な研究が必要とさ

れている (Umamoto *et al.*, 2016 ; 横田ら, 2016)。なお、本変種は裸名のままであったため、基準標本が指定されていなかったが、Umamoto *et al.* (2016)によって選定基準標本が指定された。選定基準標本は、宮古島の自生地のものである。

- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。宮古島と伊良部島の自生地の一部は公園として整備されており、公園整備の過程で誤って伐採されたことが確認されている。
- 保全対策 : 生育地の保全。苗木増殖。
- 備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。

- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告 (宮古群島)”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 31-70.
- Umamoto, H., C.-H. Park, C.-X. Fu, T. Ito, M. Yokota & G. Kokubugata, 2016. Taxonomic reconsideration of *Celtis biondii* var. *insularis* in the Miyako Island Group of the Ryukyus based on morphological and molecular data. *Journal of Phytogeography and Taxonomy*, 63(2): 67-75.
- 横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (20): 121-128.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新里孝和*・洲鎌栄徳*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・國府方吾郎(追補)

- 和名 : **ムクイヌビワ**
- 分類 : クワ科 (APG 科名: クワ科)
- 学名 : *Ficus irisana* Elmer
- 方言名 : ウフバームク (沖縄島: 田港)
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の高木。葉は短柄があり、卵状楕円形、長さ8~12 cm、3行脈をもち、表面はざらつく。無花果は腋生し、球形、径8~10 mmで、黄紅色に熟する。

分布域(県外) : 台湾、フィリピン、セレベス。

県内の分布 : 沖縄島、北大東島、南大東島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 主として低山地の石灰岩地帯の自然林内に生える。

生育状況 : 御嶽林など、保存状態の比較的良好な森林に点在するが、沖縄島と北大東島、西表島では個体数が少なく、開発により消失する恐れがある。石垣島北部では個体数が多いが、開発に伴って減少している。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 自生地の開発。森林伐採。

保全対策 : 県・市町村天然記念物指定による生育地の保全。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

- 文献 : 新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・西銘盛光・日越国昭・佐久本敏, 1995. 大宜味村の植生. “大宜味村文化財調査報告書第4集, 大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”, 大宜味村教育委員会, 17-196.
- 新城和治・新納義馬・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・日越国昭・佐久本敏, 1995. 大宜味村の植物相. “大宜味村文化財調査報告書第4集, 大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”, 大宜味村教育委員会, 197-252.

執筆者名 : 新里孝和*

和名 : ニオウヤブマオ

分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)

学名 : *Boehmeria gigantea* Satake

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1~1.5 m に達する多年草。茎は太く単立し、径 5~10 mm。葉は対生、葉身は卵円形またはやや円形、長さ 15~26 cm、短鋭尖頭、基部は円形または浅心形、縁に粗くて大きい鋸歯があり、上面は粗毛がありざらざらする。雌花の集団は葉腋に長さ 10~15 cm の円錐花序をなす。

分布域 (県外) : 本州 (山口県)、九州、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 粟国島。

生育環境 : 海崖上のテラス状になった窪地に土壌の堆積したところや、ソテツ群落中に生える。

生育状況 : 1996 年 6 月の調査で粟国島から初めて発見された。粟国島の海岸のごく限られた所に生育し、個体数は少ない。2015 年の調査で、これまで知られていた自生地 1 ヶ所で生育が再確認されると共に、新たな自生地 1 ヶ所が確認されている (阿部ら, 2016)。

学術的価値 : 沖縄県唯一の産地で、分布域の南限地でもある。

減少の要因 : 自生地の開発。

保全対策 : 本種の生育地は海崖上の狭い範囲で、一帯はヤマコンニャク (絶滅危惧 I A 類 (CR)) の生育が既に知られている (天野, 1981)。生育地全体の保全が必要である。

文献 : 天野鉄夫, 1981. 粟国島植物目録. 粟国村教育委員会, 39pp.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ヤエヤマラセイタソウ

分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)

学名 : *Boehmeria yaeyamensis* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 低木状の常緑多年草。茎は単立、または束生して群生状になる。葉は対生し、2~8 cm の葉柄を持ち、葉身は卵状円形、長さ 4~10 cm、下面に粗毛を密生する。

県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 海岸や低地の主に石灰岩地の岩隙や、日当りのよい原野に生える。

生育状況 : 石垣島と与那国島では数ヶ所に産し、小規模な群落をつくるが、自生地は限られる。西表島では現状不明。

学術的価値 : 八重山諸島の固有種である。

減少の要因 : 自生地の開発。ヤギ・ウシ・ウマなどの放牧による食害。

備考 : 竹富町希少野生動物植物種 (2017 年)。

文献 : Hatusima, S., 1979. A new species of *Boehmeria* from the Ryukyus. J. Phytogeogr. Taxon., 27(1): 34.

初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.

前津栄信・松島昭司, 1999. 安良の植物. “石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”, 石垣市

総務部市史編集室（編），石垣市，129-226.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名：ランダイミズ

分類：イラクサ科（APG 科名：イラクサ科）

学名：*Elatostema platyphyllum* Wedd.

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I B 類（EN）

形態の特徴：常緑の多年草。茎は長さ 50～100 cm になり、粗毛がある。葉は互生し、ゆがんだ倒披針状長楕円形、長さ 10～22 cm。雌雄異株で、雄の集散花序は頭状で、径 1～2.5 cm、多花をつけ、花被片は長さ 2 mm、雌花序は小形。瘦果は広卵形。

分布域（県外）：台湾、中国南部、ヒマラヤ。

県内の分布：西表島。

生育環境：川沿いの水の滴り落ちる崖や、湿った林床に群落をつくる。

生育状況：自生地は 1ヶ所知られるだけである。国立公園内であり、島の中央部であるため開発や採集の恐れはないが、ごく狭い範囲に産し、個体数は限られている。

学術的価値：分布域の北限で、国内唯一の産地である。

減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。

備考：雌雄異株で、現在までのところ、西表島では雌株しか見つかっていない。無性生殖や無配生殖を行っているとすれば、遺伝的多様性に乏しく環境変動に対して脆弱である可能性がある。本種をヒロハノキミズ *E. edile* C. B. Robinson とする見解（初島，1999）が発表されている。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文献：Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.

初島住彦，1999. 琉球植物新報. 沖縄生物学会誌，(37)：107-108.

執筆者名：横田昌嗣

和名：クニガミサンショウヅル

分類：イラクサ科（APG 科名：イラクサ科）

学名：*Elatostema suzukii* Yamazaki

カテゴリー：準絶滅危惧（NT） 環境省カテゴリー：準絶滅危惧（NT）

形態の特徴：常緑の多年草。茎は斜上し、長さ 6～12 cm、基部は匍匐して根を出す。葉は 2 列に互生し、短柄があり、くさび状長楕円形、長さ 3～3.5 mm、上面は青緑色でやや光沢があり、下面は淡白色。花は小形で緑白色、雌雄異花で雄花は頭状花序をなし、雌花は集散花序をなす。

県内の分布：沖縄島北部。

生育環境：山地の上流の水辺近くの岩上など、湿気の多い所に生える。

生育状況：金武町・恩納村以北（本部半島を除く）の溪流部に限って生育している。ダム建設によりいくつかの生育地が消失した。

学術的価値：沖縄島の固有種である。

減少の要因：森林伐採。ダム建設による自生地の水没。

- 備 考 : 本種には著しい染色体数変異 ($2n=16, 26, 38, 39, 52$) が知られており (Yamashiro *et al.*, 2000)、低数性二倍体 ($2n=16$) は外部形態では通常の二倍体 ($2n=26$) と区別がつかないが、生物学的には独立種である可能性がある。なお、本種の三倍体は沖縄島北部で複数回起源したことが明らかになっており (Tamaki *et al.*, 2001)、倍数体の多起源が証明されたまれな例である。
- 文 献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-13.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成 7 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成 8 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-12.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-17.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.
Tamaki, K., T. Denda & M. Yokota, 2001. Origin of triploids of *Elatostema suzukii* (Urticaceae) on Okinawa Island, the Ryukyus. *J. Pl. Res.* 114: 377-380.
Yamashiro, T., T. Kanemoto, T. Denda & M. Yokota, 2000. Chromosome number variation in *Elatostema suzukii* (Urticaceae), a species endemic to Okinawa Island, the Ryukyus. *Acta Phytotax. Geobot.*, 51: 21-29.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヨナクニトキホコリ

分 類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)

学 名 : *Elatostema yonakuniense* Hatusima

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。茎は高さ 15~18 cm、基部は匍匐し、上部は直立、8~10 枚の葉を互生する。葉は長さ 2~4 cm、上半分に 2~4 個の鋸歯がある。雌雄同株または異株で、雄の集散花序は腋生し、4~8 花をつけ、雌の集散花序は頭状で、径 2~3 mm。

県 内 の 分 布 : 石垣島、与那国島。

生 育 環 境 : 低地の主に石灰岩地の陰湿な林内の岩上に生える。

生 育 状 況 : 与那国島では、これまで 2 ヶ所の自生地が知られている。基準産地であった 1 ヶ所は開発により消失したと思われていたが、2005 年に幼個体が 1 個体残存していることが確認された。他の 1 ヶ所はごく狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。近くまで開発が進んでおり、赤土砂の堆積で生育環境が悪化し、シマミズなどの類似の環境に生える種との競争により減少しており、状況は更に悪化している。石垣島では、今回の調査で新たに発見され、3 ヶ所で確認されているが、個体数と自生地は、いずれの場所でも限られている。

学 術 的 価 値 : 与那国島と石垣島の固有種である。なお、台湾に産する *Elatostema microcephalanthum* タマザキウワバミソウと同種とする意見がある (Tseng & Hu, 2015)。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。河川への赤土砂の流入と堆積。
 保全対策 : 自生地の保全と人工増殖。与那国島ではかなり危機的な状況にあり、人工増殖を検討する必要がある。
 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017年)。

文献 : Hatusima, S., 1965. New or noteworthy urticaceous plants from Japan and Formosa II. J. Geobot., 12: 34-38.
 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
 Tseng, Y.-H. & Hu, J.-M., 2015. Taxonomic revision of *Elatostema* J. R. Forst. & G. Forst. (Urticaceae) in Taiwan. *Taiwania* 60(1): 23-32.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ケイタオミズ (アリサンサンショウソウ)
 分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
 学名 : *Pellionia keitaoensis* Yamamoto
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小型の多年草。茎はやや匍匐し、先は斜上し、高さ 30 cm になる。若い茎には粗毛が散生する。葉は互生し、ゆがんだ長楕円形から卵状長楕円形、長さ 6~8 cm、幅 1.5~2.8 cm、鋭尖頭、鈍脚、下面は無毛または有毛、鋸歯は 5~8 対。花は雌雄異株または同株で、雄花序は腋生する集散花序で、径 1~1.5 cm、花梗は長さ 1~1.5 cm、花は径 4 mm、雌花序は腋生する球状の集散花序で、径 3~5 mm。

分布域(県外) : 台湾。
 県内の分布 : 西表島。
 生育環境 : 空中湿度の高い常緑樹林の陰湿な林床に生える。
 生育状況 : 西表島の数ヶ所に点々と産するが、個体数は少ない。
 学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。主要な自生地の幾つかは、観光客が通る歩道や登山道となっており、踏みつけの影響が危惧される。
 備考 : 初島 (1975) によると、キミズとオオサンショウソウの雑種起源の種と考えられており、形態変異が大きいことが指摘されている。本種については、分類学的な再検討が必要である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Hatusima, S., 1956. New or noteworthy plants from the Ryukyu Islands and Formosa. *Sci. Bull. Agric. Home Econ. Div., Univ. Ryukyus, Okinawa*, (3): 19-33.
 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 875.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : サンショウソウ
 分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
 学名 : *Pellionia minima* Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は斜上し、高さ約 15 cm、葉は 2 列に配列し、歪状楕円形、オオサンショウソウ *P. radicans* に比べて小さく、長さ 1 cm、上面は青緑色、中肋にそって淡緑色を帯びる。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、種子島、屋久島、奄美大島。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 常緑広葉樹林の腐植質の豊富な林床に生える。
- 生育状況 : 国頭村普久川などの数河川の上流部に限って生育し、生育地、個体数とも少ない。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。
- 減少の要因 : 森林伐採。ダム建設による水没。

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **オオサンショウソウ**
- 分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
- 学名 : *Pellionia radicans* (Sieb. et Zucc.) Wedd.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、長さ 30~50 cm。葉は 2 列に配列し、歪状楕円形、長さ 2~6 cm、上面は深緑色、時に斑紋が入り、下面は淡白色。雌雄異株または同株で、花序は腋生し、雄花序は集散花序、径 1~1.5 cm、雌花序は球状の集散花序、径 3~5 mm。瘦果は楕円形、長さ 0.8 mm 位。
- 分布域 (県外) : 本州 (近畿以西)、四国、九州、薩摩黒島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、台湾、中国。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
- 生育環境 : 山地の林下の湿潤地に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では北部 3 村では確認されておらず、名護市や恩納村の限られた場所に少数個体が出現するだけで、極めてまれである。西表島から報告されたものは、ケイタオミズの可能性があり、現状不明。
- 減少の要因 : 自生地の開発。森林伐採。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **ミヤマミズ**
- 分類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
- 学名 : *Pilea petiolaris* (Sieb. et Zucc.) Blume
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は長さ 40~80 cm、無毛。葉は対生し、狭卵形~長楕円形、長さ 6~15 cm、低い鋸歯があり、鈍脚~楔脚、3 脈がある。雌雄同株で、雄花序と雌花序をつけ、花序は密な集散状、長さ 1~4 cm。雌花の花被は広卵形、3 中裂する。瘦果は広卵形、長さ 1.3~1.5 mm。
- 分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、屋久島、台湾、中国中~南部。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
- 生育環境 : 山地の自然林の陰湿な林床に生える。沖縄島では石灰岩地に、西表島では非石灰岩地に産する。
- 生育状況 : 沖縄島の 1 ヶ所、西表島の 2 ヶ所からごく最近 (山崎, 1995) 報告されたが、現状は不明である。

学 術 的 価 値 : 琉球列島では産地に限られる。
 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
 備 考 : 普通種のシママミズ *P. brevicornuta* によく似ており、これまで混同されていた。

文 献 : 山崎 敬, 1995. ミヤマミズ琉球に分布. 植物研究雑誌, 70: 177.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : ニンドウバノヤドリギ
 分 類 : ヤドリギ科 (APG 科名: オオバヤドリギ科)
 学 名 : *Scurrula longicerifolius* (Hayata) Danser
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 樹上に寄生する常緑低木。オオバヤドリギ *S. yadoriki* (Sieb. ex Maxim.) Danser に類似するが、それより花被は短く長さ 2~2.5 cm。葉は対生し、鈍頭、円脚、革質で厚く、下面は灰褐色~赤褐色。

分 布 域 (県 外) : 台湾。

県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 低地から山地のイタジイやエゴノキなどの樹上に寄生する。

生 育 状 況 : 石垣島の屋良部半島で発見されている (立石ら, 2004) ほか、最近於茂登岳周辺でも確認されている。西表島では島内に広く点々と分布するが、個体数は少ない。以前確認された個体が枯死したり、伐採されたりして、確認できる個体数は減少している。

学 術 的 価 値 : 台湾との共通種で、日本では産地に限られる。

減 少 の 要 因 : もともと個体数が少ない。

備 考 : 本種をシナヤドリギモドキ *Taxillus pseudochinensis* (Yamamoto) Danser とする見解 (初島, 1999) が近年発表されている。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", University of the Ryukyus, Naha, 1: 37-45.
 初島住彦, 1999. 琉球植物新報. 沖縄生物学会誌, (37) : 107-108.
 立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

和 名 : リュウキュウツチトリモチ
 分 類 : ツチトリモチ科 (APG 科名: ツチトリモチ科)
 学 名 : *Balanophora fungosa* J. R. et G. Forst. (= *B. kuroiwai* Makino)
 方 言 名 : アカバンカー (沖縄島: 知念)、ヒーシクヅ、ボーラーグサ (久高島)、ミミキリボーズ (伊計島)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 多年生の寄生植物。根茎には皮目がなく、地上に露出して多数の大きな根茎支に分岐する。雌雄同株。12月中旬~1月、根茎支から高さ 8~15 cm の花茎を 1~8 個出す。鱗片葉はオレンジ色で、はじめは花茎に密着しているが、さかりをすぎると次第に反り返って開出する。花穂は球形から短楕

円形で雌花を密につけ、帯紅色、まれに赤味がかったピンクを呈し、下縁部に雄花が密集する。雄花は柄が長く伸び、通常数個の繊細な苞があり、花被は4裂して楕円形の花被片となり、やがて外側に反り返る。雄ずい群はほぼ球状、花糸は1個に合着して太く短く、葯は4個で、不規則に裂開して白色の花粉を出す。雌花は無数、小棍体の間に埋もれているので外側からは見えない。子房は大きくて紡錘形、オレンジ色、花柱は花のさかりになると伸びて小棍体より細毛状に伸びる。柱頭ははじめオレンジ色だが、受粉後は茶褐色になり、やがては黒化する。

- 分布域 (県外)** : 台湾南部、フィリピン、ミクロネシア、セレベス、ニューギニア、オーストラリア北東部、メラネシア。
- 県内の分布** : 沖縄島、伊計島、久高島、宮古島、石垣島、竹富島、西表島、与那国島、尖閣諸島（魚釣島、久場島）。
- 生育環境** : 海岸～低地の自然林の林床で、クロヨナ、リュウキュウガキ、オオバギなどの根に寄生する。
- 生育状況** : 保存状態の良い御嶽林を中心に各地に点在する。その存在は、阿久沢（1976）による調査、1977～1982年に行われた沖縄県内の御嶽林調査（川上・天野，1979；宮城，1979；日越，1980；川上・日越，1981；新島，1981）、およびその後の調査（伊波，1988；前津・松島，1999；立石・新城，1999）で継続的に確認されている。石垣島の低地ではやや普通に見られ、白花品も観察される。
- 学術的価値** : 分布域の北限である。
- 減少の要因** : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考** : 従来は琉球列島の固有種 *B. kuroiwai* とみなされ、本データブックの旧版でもその意見を採用していたが、最近では上記したような広い分布域を持つ *B. fungosa* subsp. *fungosa* に合一するのが定説である（Hansen, 1972, 1982; Murata, 1988）。亜種 subsp. *indica* が、フィリピン（ルソン島）、中国南部、インドシナ、タイ、ミャンマー、インド、スリランカ、マレーシア半島部、スマトラ、ジャワなど種の分布域の西側から知られており、東側に広がるリュウキュウツチトリモチと分布域を2分する（Hansen, 1972, 1982; Murata, 1988）。こちらは雌雄異株で、1個の雄花に対応して1個の大型の苞があり、花被片は長楕円形で雄ずい群が楕円形であることなどが異なる（Murata, 1988）。宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献** : 阿久沢栄太郎，1976. ヤッコソウ科ツチトリモチ科植物発生地現況一覧. ヤッコソウとツチトリモチを保護する会本部，東京都，236pp.
 阿久沢栄太郎，1982. キイレツチトリモチとその人工増殖. ヤッコソウとツチトリモチを保護する会本部，東京都，124pp.
 天野鉄夫，1982. 斎場御嶽及びその周辺の植物. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告，知花グスク・斎場御嶽とその周辺地域”，沖縄県，77-90.
 Hansen, B., 1972. The genus *Balanophora*, a taxonomic monograph. Dansk Bot. Arkiv, 28: 1-188.
 Hansen, B., 1982. The Balanophoraceae of the Pacific. Acta Phytotax. Geobot. 33: 92-102.
 日越国昭，1981. 知念村の主な御願所の植生. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第20集，沖縄県社寺・御嶽林調査報告”，沖縄県教育委員会（編），沖縄県教育委員会，那覇，165-186.
 Huang, S. F. & T. C. Huang, 1996. Balanophoraceae. “Flora of Taiwan, 2nd ed.”, T. C. Huang *et al.* (eds.), Editorial Committee of the Flora of Taiwan Second Edition, Taipei, Vol. 2: 287-291.
 伊波善勇，1988. 与勝の植物. 沖縄県立与勝高等学校，勝連町，260pp.
 川上 勲・天野鉄夫，1979. 狩俣御嶽及びその周辺の植物相の特徴. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告，東平安名岬・狩俣御嶽”，沖縄県，63-76.
 川上 勲・日越国昭，1981. 城辺町の主な御願所の植生. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第21集，沖縄県社寺・御嶽林調査報告”，沖縄県教育委員会（編），沖縄県教育委員会，那覇，67-91.
 Kawakita, A. and M. Kato, 2002. Floral biology and unique pollination system of root holoparasites, *Balanophora kuroiwai* and *B. tobiracola* (Balanophoraceae). Amer. J. Bot., 89: 1164-1170.
 前津栄信・松島昭司，1999. 安良の植物. “石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”，石垣市総務部市史編集室（編），石垣市，129-226.
 宮城康一，1979. 与那城村・勝連村の御願所の植生. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第18集，沖縄県社寺・御嶽林調査報告”，沖縄県教育委員会（編），沖縄県教育委員会，那覇，15-26.

Murata, J., 1988. Morphology and distribution of *Balanophora fungosa* J. R. et G. Forst. (Balanophoraceae). J. Jpn. Bot., 63: 201-210.

新島義龍, 1981. 竹富町竹富島の主な御願所林の植生. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第21集 沖縄県社寺・御嶽林調査報告”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 195-204.

玉城松栄, 1966. *Balanophora fungosa* var. *kuroiwai* Makino (リュウキュウツチトリモチ) の新産地. 沖縄生物学会誌, 3 (5) : 45-46.

立石庸一・新城和治, 1999. 斎場御嶽の植物. “国指定史跡斎場御嶽整備事業報告書 (発掘調査・資料編)”, 知念村教育委員会 (編), 知念村教育委員会, 43-84.

立石庸一・佐藤寛之・齊藤由紀子・天野正晴・杉山已次・中村元紀・宮城愛・田場美沙基・富永篤, 2016. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実Ⅷ: うるま市伊計島の植物相. 琉球大学教育学部紀要, (88) : 283-305.

執筆者名 : 立石庸一*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)

和名 : キイレツチトリモチ

分類 : ツチトリモチ科 (APG科名: ツチトリモチ科)

学名 : *Balanophora wrightii* Makino (= *B. tobiracola* Makino)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年生の寄生植物。根茎は皮目がなく、1個の根茎から3~10個の花茎が出る。雌雄同株。11月頃、根茎から伸びてきた高さ3~11cmの花茎に雄花と雌花が一緒につく。花穂は長卵形で先端が細く尖り、黄色。雄花は花穂の表面に散生しているのが見えるが、雌花は花穂を被っている小棍体の間に埋もれていて外からは見えない。雄花は短柄があり、花被が3裂して、柄のない3個の葯を現わして白色の花粉を出し、花後は茶褐色やがて黒色に変色する。雌花は花被がなく、子房は紡錘形で大きくオレンジ色、小棍体の間から花柱を伸ばして柱頭を現わし、受粉する。

分布域(県外) : 九州(長崎・熊本・宮崎・鹿児島県)、種子島、屋久島、トカラ列島(宝島)、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、台湾。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、伊江島、久米島、多良間島?、石垣島、竹富島、西表島。

生育環境 : 海岸~低地の自然林の林床で、トベラ、シャリンバイ、ネズミモチ、ハマヒサカキなどの根に寄生する。

生育状況 : 保存状態の良好な御嶽林などに点在し、沖縄島と石垣島、西表島では最近も2~数ヶ所の生育地が確認されている。

学術的価値 : 琉球列島から九州南部を経て、九州西部地域に分布し、九州東部には分布しない「九州西廻り分布植物」の一つに挙げられる(中西, 1996)。琉球列島の植物相の成立史を解明するために重要な例である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 阿久沢栄太郎, 1976. ヤッコソウ科ツチトリモチ科植物発生地現況一覧. ヤッコソウとツチトリモチを保護する会本部, 東京都, 236pp.

阿久沢栄太郎, 1982. キイレツチトリモチとその人工増殖. ヤッコソウとツチトリモチを保護する会本部, 東京都, 124pp.

Hansen, B., 1972. The genus *Balanophora*, a taxonomic monograph. Dansk Bot. Arkiv, 28: 1-188.

Huang, S. F. & T.C. Huang, 1996. Balanophoraceae. “Flora of Taiwan, 2nd ed.”, T.C. Huang *et al.* (eds.), Editorial Committee of the Flora of Taiwan Second Edition, Taipei, Vol. 2: 287-291.

中西弘樹, 1996. 九州西廻り分布植物: 定義、構成、起源. 植物分類・地理, 47: 113-124.

新納義馬・宮城朝章・佐久本敏, 1974. 伊江島の植生. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告”,

沖縄自然研究会（編），沖縄県，那覇，7-120.

Ying, S. S., 1990. Miscellaneous notes on the Flora of Taiwan (XIII). Mem. Coll. Agric. Natl. Taiwan Univ., 30(2): 53-72.

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミズヒキ

分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)

学名 : *Antenoron filiforme* (Thunb.) Roberty et Vautier

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全株粗毛を有する多年草。茎は単一あるいは少し分枝し、高さ 30~90 cm、節部は肥厚する。葉は楕円形で、長さ 6~15 cm、托葉は鞘状。茎頂や葉腋に生じた総状花序は細く、長さ 20~40 cm、赤色の小花をまばらに多数つける。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、奄美大島、中国、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 低地から山地の日当りのよいやや湿気のある所や、陰湿な谷の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では北部から中部にかけて 4 ヶ所に知られ、そのうち北部の 1 ヶ所では 2016 年に生育が確認されている。石垣島の現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発。

文献 : 伊波善勇・伊礼洋我・池原直樹・兼城洋邦・渡嘉敷玲子, 1986. 山内谷の植物. “沖縄市自然調査報告書 (1)”, 沖縄市教育委員会, 52pp.

新城和治・新納義馬・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・大嶺 徹・日越国昭・佐久本敏, 1995. 大宜味村の植物相. “大宜味村文化財調査報告書第 4 集, 大宜味村の自然・大宜味村動植物調査報告書”, 大宜味村教育委員会, 197-252.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : ナツノウナギツカミ

分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)

学名 : *Persicaria dichotoma* (Blume) Masam.

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎は斜上し長さ 20~50 cm、断面は四角形、稜に逆刺があり、下部は匍匐して根を出す。葉は長楕円状倒披針形、長さ 5~10 cm、縁に剛毛がある。花は淡紅色。

分布域(県外) : 種子島、中之島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、インド、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄諸島、八重山諸島。

生育環境 : 主として山間の湿地や放棄水田に生える。

生育状況 : 局所的に多くの個体を産する場所もあるが、全体としては生育地の開発で減少している。

減少の要因 : 自生地の開発(農地造成、湿地の埋立など)。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ホソバノウナギツカミ**
 分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)
 学名 : *Persicaria hastato-auriculata* (Makino) Nakai
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎は小逆刺があり、斜上し、高さ 30～80 cm に達し、下部は匍匐し、節から根を出す。葉は膜質、披針形、長さ 4～11 cm、縁に微細剛毛がある。花は淡紅白色。
 分布域(県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国、ヒマラヤ、フィリピン、スリランカ。
 県内の分布 : 沖縄諸島、西表島、与那国島?。
 生育環境 : 湿地または浅水中に生える。
 生育状況 : 土地造成(農地改良事業など)、除草剤散布などにより減少しつつある。最近、西表島からも報告されている(赤井, 2017)。
 減少の要因 : 自生地の開発。農薬散布。
 備考 : 与那国島に産するとの報告があるが、同定については再検討が必要とされる(赤井, 2015)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
 文献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島). “事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.
 赤井賢成, 2017. 西表島植物誌編纂事業. “事業年報(平成28年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 43-45.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ダイトウサクラタデ**
 分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)
 学名 : *Persicaria japonica* (Meisn.) Nakai ex Ohki var. *taitoinsularis* (Masam.) Masam.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は斜上し、高さ 60cm に達する。葉は披針形、長さ 5～11cm、幅 7～22mm、上面は葉縁を除いて無毛、下面の中肋上に短毛があり、葉鞘の縁は有毛。花序は長さ 3.5～7cm、花は白色、花被片は 5 個、長さ 2～3mm、雄蕊は 6 個、柱頭は 2 個。瘦果は凸レンズ状。
 分布域(県外) : ミクロネシア。
 県内の分布 : 北大東島、南大東島。
 生育環境 : 湿地に生える。
 生育状況 : 北大東島では 3 ヶ所、南大東島では 2 ヶ所で確認されているが、湿地の埋立、外来種(ボタンウキクサ、ホテイアオイ)の繁茂、除草剤の散布により個体数は減少している。いずれの自生地でも個体数は少なく、絶滅の恐れがある。
 学術的価値 : 大東諸島が基準産地で、日本では唯一の産地である。ミクロネシア系の種で、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : 自生地の開発。外来種との競合。もともと自生地が限られている。除草剤の使用。
 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2017年)

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : アラゲタデ
分類 : タデ科 (APG 科名: タデ科)
学名 : *Persicaria tomentosa* Willd.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は斜上し、高さ 60~100 cm に達する。葉は披針形、長さ 5~10 cm、両面に白色の絹毛を密布する。花は白色。
分布域 (県外) : 台湾、熱帯アジア、アフリカ。
県内の分布 : 北大東島、南大東島。
生育環境 : 湿地に生える。
生育状況 : 北大東島では 3 ヶ所に産するが、1 ヶ所は湿地の埋め立てにより自生地の大半が失われた。南大東島では小規模な群落が 4 ヶ所に認められるが、湿地の埋立、外来種 (ボタンウキクサ、ホテイアオイ) の繁茂、除草剤の散布により個体数は減少している。いずれの自生地でも個体数は少なく、絶滅の恐れがある。
学術的価値 : 分布域の北限地で、日本では唯一の産地である。
減少の要因 : 自生地の開発。外来種との競合。もともと自生地が限られている。除草剤の使用。
備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Persicaria attenuata* として評価。
文献 : 西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—。南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : オキナワマツバボタン
分類 : スベリヒユ科 (APG 科名: スベリヒユ科)
学名 : *Portulaca okinawensis* Walker et Tawada var. *okinawensis*
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 多肉質の常緑の多年草。茎は高さ 5~10 cm。葉は長楕円形、鈍頭、長さ 3~5 mm。花は頂生し、径約 11 mm、花弁は 5 枚、黄~橙黄色。
分布域 (県外) : 奄美大島、加計呂麻島、請島、徳之島。
県内の分布 : 沖縄島、久米島、渡名喜島、屋嘉比島、阿嘉島、慶留間島、粟国島。
生育環境 : 海岸のサンゴ礁岩上に小群状に張りつくように生える。
生育状況 : 生育地や個体数は限られる。沖縄島の主要な自生地 2 ヶ所は、観光地になっており、観光客による踏みつけで悪影響を受けている。久米島では 2 ヶ所、渡名喜島では 1 ヶ所、慶留間諸島では数ヶ所で確認されている。粟国島の現状は不明。
学術的価値 : オキナワマツバボタンはこれまで奄美諸島 (奄美大島、加計呂麻島、徳之島) と沖縄諸島に分布する固有種とされていたが (Walker & Tawada, 1951)、諸島間で形態および遺伝的に分化が進んでいることが判り、奄美諸島のものは変種 var. *amamiensis* として区別されたため (Kokubugata et al., 2013, 2016)、変種としては沖縄諸島固有である。
減少の要因 : 自生地の開発。人間の踏みつけ。もともと自生地が限られている。
文献 : 石川 敦・石田 仁, 1988. 琉球列島植物分布資料 5. 沖縄生物学会誌, (26) : 31-34.

Kokubugata, G., K. Nakamura, Y. Hirayama & M. Yokota, 2013. Taxonomic reexamination of *Portulaca okinawensis* (Portulacaceae) in the Ryukyu Archipelago of Japan based on molecular and morphological data. *Phytotaxa*, 117(1): 11-22.

Kokubugata, G., T. Ito & M. Yokota, 2016. Confirmation of the Occurrence of *Portulaca okinawensis* var. *amamiensis* (Portulacaceae) in Kakeroma Island of the Ryukyus Archipelago, Japan using Morphological and Molecular Data. *Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B*, 42(2): 67-71.

新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭, 1985. 恩納村文化財調査報告書第6集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会, 64pp.

Walker, E. H. & Tawada, S., 1951. A new species of *Portulaca* from Okinawa. *Journal of the Washington Academy of Sciences* 41: 138.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ (粟国島・渡名喜島). *日本植物園協会誌*, (51): 80-85.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ヒメハマナデシコ
 分類 : ナデシコ科 (APG 科名: ナデシコ科)
 学名 : *Dianthus kiusianus* Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。茎は直立し、高さ 20~40 cm。葉は狭長楕円形~倒披針形、長さ 1~40 cm、上面は緑色で光沢がある。花は紅紫色で集散花序につく。

分布域(県外) : 本州(和歌山県)、八丈島、四国(愛媛県)、九州、種子島、トカラ列島、喜界島、奄美大島、加計呂麻島、請島、徳之島。

県内の分布 : 伊江島、西表島。

生育環境 : 海岸の日当りのよい岩場や原野に生える。

生育状況 : 伊江島ではごく狭い範囲に数個体を産するに過ぎない。西表島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の南限地である。

減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 生育地の保全と増殖による復元。現状では危機的な状況にあるため、人工増殖を検討する必要がある。

文献 : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.

新里孝和・嵩原建二, 2002. 伊江島の植物図鑑. 伊江村教育委員会, 201pp.

島袋 曠・日越国昭・宮城康一, 1981. 伊江村の主な御願所の植生. “沖縄県天然記念物シリーズ第21集, 沖縄県社寺・御嶽林調査報告Ⅳ”, 沖縄県教育委員会, 1-10.

執筆者名 : 新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : カワラナデシコ
 分類 : ナデシコ科 (APG 科名: ナデシコ科)
 学名 : *Dianthus superbus* L. var. *longicalycinus* (Maxim.) Williams
 方言名 : ウチングワ、ナディシク (沖縄島: 首里)
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 多年草。茎は高さ 30~60 cm。葉は線状披針形、長さ 4~7 cm、粉白色を帯びる。花は径約 4 cm、淡紅色または白色。
- 分布域(県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、中国、台湾。
- 県内の分布 : 久米島、渡名喜島。
- 生育環境 : 海浜の砂浜や山地の草原に生える。
- 生育状況 : 久米島では以前知られた生育地では確認されない。渡名喜島では数ヶ所に産するが、個体数は少ない。
- 減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。生育環境が競合する移入種の増加。
- 保全対策 : 本種の存続には草原の維持が必要であるが、渡名喜島ではギンネムが侵入しており、ギンネムの駆除が必要である。
- 備考 : 久米島町指定天然記念物(カワラナデシコ)(1972年)。

- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.
- 初島住彦, 1994. 渡名喜島の植物. 鹿児島県の植物(鹿児島植物同好会誌), (13): 21-41.
- 宮脇 昭・仲田栄二, 2001. 外来植生の在来植生に対する影響と対策の検討. “渡名喜島伝統集落周辺域における自然的歴史的景観の保存活用調査”, (財)日本ナショナルトラスト, 東京, 37-46, 77-93.
- 阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ(粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

-
- 和名 : **ハマツメクサ**
- 分類 : ナデシコ科 (APG 科名: ナデシコ科)
- 学名 : *Sagina maxima* A. Gray
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 一年草。茎は高さ 10~25 cm。根葉は束生し、多肉質、針形、長さ 2~5 cm、茎葉は線形、長さ 5~10 mm。花は白色で葉腋に単生する。
- 分布域(県外) : 樺太、北海道、本州、四国、九州、奄美諸島、喜界島、朝鮮、台湾、中国。
- 県内の分布 : 沖縄島。
- 生育環境 : 海浜の砂地に小群状に生える。
- 生育状況 : 東アジアに広く分布するが、琉球列島での生育地は狭く、個体数も限られている。
- 減少の要因 : 自生地の開発(海岸砂防堤などの造成)。
- 備考 : 竹富町希少野生動物種(2017年)。

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **オカヒジキ**
- 分類 : アカザ科 (APG 科名: ヒユ科)
- 学名 : *Salsola komarovii* Iljin
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 一年草で茎は匍匐する。葉は多肉質で線状円柱形、長さ1~2 cm、径2 cmくらいで刺端。花は腋生、単立する。花被片は5個で披針形、白色に淡黄色の線がある。
- 分布域(県外) : 千島、樺太、北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島。
- 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、屋我地島、与那国島。
- 生育環境 : 台風や大潮時に冠水する海岸の砂泥地に生える。
- 生育状況 : 沖縄島の本部町では1994年に小群落が、屋我地島では1993年に1個体が見られた。伊是名島では2004年に小群落が確認された。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。
- 減少の要因 : 自生地の開発(採砂・護岸工事)。

執筆者名 : 新城和治*・仲田栄二*

- 和名 : **インドヒモカズラ**
- 分類 : ヒユ科 (APG科名: ヒユ科)
- 学名 : *Deeringia polysperma* (Roxb.) Miq.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 長さ5 mになる常緑のつる性亜低木。葉は互生し、卵状披針形~披針形、長さ5~13 cm。花序は腋生し、花冠は緑白色、径約4 mm。液果は白色、球形、径4 mm、種子は黒色、径1 mm。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア。
- 県内の分布 : 宮古島、大神島、来間島、石垣島、西表島、小浜島、波照間島。
- 生育環境 : 低地の石灰岩地に生える。
- 生育状況 : 石垣島の3ヶ所で少数個体が確認されているが、そのうちの1ヶ所は開発で失われた。今回の調査で宮古島では3ヶ所で、来間島では2ヶ所で、西表島では1ヶ所で確認されている。来間島の1ヶ所は開発が進んでおり、絶滅が危惧される。ごく最近になって小浜島の1ヶ所で新たに確認された。大神島と波照間島の現状は不明。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。沖縄県産のものは、国外のものと形態的にやや異なる可能性が指摘(初島, 1975)されており、研究が必要である。
- 減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町特別希少野生動植物種(2017)。
- 文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌(追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 259-260.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・川上 勲*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)・加島幹男(追補)

- 和名 : **クロボウモドキ**
- 分類 : バンレイシ科 (APG科名: バンレイシ科)
- 学名 : *Polyalthia liukuensis* Hatusima
- 方言名 : アカンギ(波照間島)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の高木。幹は直立し、黒褐色。葉は革質、葉身は長楕円形、長さ15~25 cm、上面は光沢があ

る。花は夏～秋に咲き、花被片は黄緑色、長さ 10 cm、果実は赤色を経て、冬～春に黒色に熟し、種子は枕形、長さ 2～3 cm。

- 分布域（県外）：台湾（蘭嶼）。
- 県内の分布：西表島、波照間島。
- 生育環境：低地の琉球石灰岩地の自然林内に生える。
- 生育状況：ごく限られた場所に分布する。波照間島では 1 ヶ所に小群状に生え、かつては保存状況は良好であったが、近年の台風による風害で生育地の環境が悪化している。西表島では 3 ヶ所で確認されており、そのうち 1 ヶ所では十数個体が開花結実しており、他の 1 ヶ所では数個体の開花結実個体が確認されている。西表島の 3 ヶ所の自生地では、ダム建設や農地造成が進んでおり、生育環境が悪化しており、既に多くの個体が失われた可能性がある。
- 学術的価値：熱帯系のバンレイシ科のアジアでの北限自生地である。本種は *Polyalthia* 属の種として記載され（Hatusima, 1979）、以後近年まで *Polyalthia* 属の種として取り扱われていたが、近年の分子系統学的な研究によって、*Polyalthia* 属を複数の属に細分する見解が提出され、本種をインドからオーストラリア北部にかけて分布する *Monoon* 属に移す分類学的見解が発表されている（Xu *et al.*, 2012）。その場合、本種の学名は *Monoon liukiuiense* (Hatus.) B. Xue *et* R. M. K. Saunders となる。*Monoon* 属としても、本種は属の分布域の北限に位置し、生物地理学上貴重である。
- 減少の要因：自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策：本種の自生地は天然記念物に指定するなどして、保護する必要がある。
- 備考：竹富町特別希少野生動物植物種（2017）。
- 文献：Hatusima, S., 1979. A new species of *Polyalthia* (Annonaceae) from the Ryukyus. *J. Geobot.*, 26(4): 86-87.
 Xue, B., Y. C. F. Su, D. C. Thomas & R. M. K. Saunders., 2012. Pruning the polyphyletic genus *Polyalthia* (Annonaceae) and resurrecting the genus *Monoon*. *Taxon*, 61(5): 1021-1039.
 宮城康一・新城和治, 1986. 琉球列島植物分布資料 3. 沖縄生物学会誌, (24) : 73-74.
 新納義馬, 1981. 竹富町波照間島の御嶽林. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第 21 集, 沖縄県社社・御嶽林調査報告”, 沖縄県教育委員会, 247-267.
- 執筆者名：新里孝和*・安田恵子*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

- 和名：ケスナヅル
- 分類：クスノキ科（APG 科名：クスノキ科）
- 学名：*Cassytha filiflormis* L. var. *duipraticola* Hatusima
- 方言名：ホーダイグサ（伊是名島）、ニーナシカンジヤ（沖縄島／スナヅル・イトスナヅルを含む）
- カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

- 形態の特徴：つる性の寄生植物。茎はスナヅルより細く径 1 mm 以下で、匍匐し、全株褐毛が多く、黄緑色。花序は長さ約 1 cm、花は 2～5 個。果実は球形で小さく、径約 5 mm。
- 県内の分布：伊平屋島、伊是名島、沖縄島。
- 生育環境：やや乾燥した日当りのよい草地や低木林の林縁に生え、オオマツバシバやシバニッケイなどに寄生する。
- 生育状況：沖縄島では北部から中部に数ヶ所の自生が知られるが、個体数は少ない。伊是名島では数ヶ所に産し、やや個体数は多い。伊平屋島では、数ヶ所に産する。いずれの場所でも個体数は限られており、開発（ゴルフ場、道路建設、公共施設建設など）で生育地が減少しつつある。
- 学術的価値：かつては沖縄諸島とオーストラリアに隔離分布する植物地理学上の貴重種とされていたが、近年の分子系統学的な研究によってオーストラリア産のものは異なり、スナヅルに近いことが判明している（Kokubugata *et al.*, 2012）。スナヅルと異なり、海岸よりはやや内陸に入った乾燥した低木林

の低木に寄生し、茎はスナヅルより細く、毛が多いことで区別される。分布域が沖縄諸島に限られ、固有変種であることから、スナヅルと明確に区別できるものであるのか、今後の詳細な研究が必要である。

減少の要因 : 自生地の開発 (ゴルフ場、農林道など)。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。

文献 : Hatusima, S., 1976. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (3). *J. Geobot.*, 24(2): 35-38.
 Kokubugata, G., K. Nakamura, P. I. Forster, G. W. Wilson, A. E. Holland, Y. Hirayama & M. Yokota, 2012. *Cassytha pubescens* and *C. glabella* (Lauraceae) are not disjunctly distributed between Australia and the Ryukyu Archipelago of Japan. evidence from morphological and molecular data. *Australian Systematic Botany*, 25: 364-373.
 仲田栄二 (編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会, 119pp.
 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)

和名 : イトスナヅル

分類 : クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)

学名 : *Cassytha pergracilis* Hatusima

方言名 : ニーナシカンジャ (沖縄島/スナヅル・ケスナヅルを含む)

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : つる性の寄生植物。茎はケスナヅルより細く、径 0.3~0.5 mm、無毛、帯赤褐色。穂状花序は 2~3 花をつけ、長さ約 1 cm。花は乳白色、長さ 1 mm。核果は広楕円形、長さ約 3.5 mm、黒熟する。

県内の分布 : 伊是名島、渡嘉敷島、久米島。

生育環境 : リュウキュウマツ林域の乾燥した、日当たりの良いやせた土地に生え、オオマツバシバやイガクサに限って寄生する (Kokubugata & Yokota, 2012)。スナヅルやケスナヅルと異なり、植物体にアントシアン系の色素を持ち (Murai *et al.*, 2008)、通常は赤褐色を呈する。

生育状況 : 伊是名島ではケスナヅルとほぼ同所的に生える場所があるが、生育地がより限られ、個体数はさらに少ない。久米島の現状は不明で、絶滅した可能性が高い。今回の調査で渡嘉敷島で初めて生育が確認されたが、1ヶ所で確認されただけで、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : かつては沖縄諸島とオーストラリアに隔離分布する種と見なされていたが、近年の分子系統学的な研究によりオーストラリア固有の *C. glabella* R. Br. とは別種で、沖縄島の固有種であることが判っている (Kokubugata *et al.*, 2012)。近縁種はオーストラリアからインドにかけて点々と分布する *C. capillaris* Meisn. で、当初考えられていたオーストラリア要素の種ではないにしても、*C. capillaris* の分布域からはずれた著しい隔離分布を示し、植物地理学上の貴重種と考えられる。

減少の要因 : 自生地の開発 (原野開発、森林伐採、土砂の採取)。もともと自生地と個体数が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。

備考 : 伊是名島の自生地の一つは沖縄県指定の天然記念物として保護されている。

文献 : Hatusima, S., 1971. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (2). *J. Geobot.*, 19(1-2): 25-28.
 Hatusima, S., 1976. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (3). *J. Geobot.*, 24(2): 35-38.
 初島住彦, 1978. 日本新分布植物. 北陸の植物, 26 (3) : 70-71.
 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

Kokubugata, G., K. Nakamura, P.I. Forster, G.W. Wilson, A. E. Holland, Y. Hirayama & M. Yokota, 2012. *Cassytha pubescens* and *C. glabella* (Lauraceae) are not disjunctly distributed between Australia and the Ryukyu Archipelago of Japan. evidence from morphological and molecular data. *Australian Systematic Botany*, 25: 364-373.

Kokubugata, G. & M. Yokota, 2012. Host specificity of *Cassytha filiformis* and *C. pergracilis* (Lauraceae) in the Ryukyu Archipelago. *Bull. Natl. Mus. Sci., Bot., Ser. B*, 38(2): 47-53.

Murai, Y., G. Kokubugata, M. Yokota, J. Kitajima & T. Iwashina, 2008. Flavonoids and anthocyanins from six *Cassytha* taxa (Lauraceae) as taxonomic markers. *Biochemical Systematics and Ecology* 36(9): 745-748.

仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英 (編), 41-107.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)

和名 : マルバニッケイ (コウチニッケイ)

分類 : クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)

学名 : *Cinnamomum daphnoides* Sieb. et Zucc.

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑小高木。若枝は 4 稜形で細毛を密生する。葉は対生または互生し、倒卵形または長楕円形で長さ 3~6 cm、幅 1.2~3 cm。花序は長梗を有する。果実は楕円形、黒紫色に熟する。

分布域 (県外) : 九州、薩南諸島、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島。

県内の分布 : 硫黄鳥島。

生育環境 : 海岸林と山頂部の低木林中に生える。

生育状況 : 硫黄鳥島では生育地はごく限られるが、群落を形成し、個体数はやや多い。硫黄鳥島は、1967 年以降は火山活動のため無人島となっており、自生地が開発される恐れはない。

学術的価値 : 沖縄県での唯一の産地で、分布域の南限である。また、琉球列島から九州南部を経て、九州西部地域に分布し、九州東部には分布しない「九州西廻り分布植物」の一つに挙げられる (中西, 1996)。琉球列島の植物相の成立史を解明するために重要な例である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地は活火山の火口周辺の斜面に限られ、活火山は活動を続けているため、今後大規模な噴火などが起これば自生地が消失する恐れがある。

保全対策 : 生育地の保全。

文献 : 中西弘樹, 1996. 九州西廻り分布植物: 定義、構成、起源. *植物分類・地理*, 47: 113-124.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄鳥島の植物相とその構成種の散布様式. *沖縄生物学会誌*, (39) : 49-76.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄鳥島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. *沖縄生物学会誌*, (39) : 77-92.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄鳥島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄鳥島”, 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名 : オキナワヤマコウバシ (オキナワコウバシ)

分類 : クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)

- 学 名 : *Lindera communis* Hemsl. var. *okinawensis* Hatusima
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 常緑の小高木。若枝ははじめ伏毛があるが後に無毛となる。葉は倒披針状長楕円形、長さ 4~8 cm、上面は無毛、下面は灰白色。傘形花序をつけ、総花梗は長さ 2~3 cm、小花梗は長さ 2 mm。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 沖縄島では中部と南部の主として石灰岩地の低地の林縁や林内に生える。石垣島と西表島では非石灰岩地に生えるが、自生地、個体数ともきわめて少ない。西表島では 1980 年代に 1 度だけ確認されているが、近年は見つかっていない。
- 生育状況 : 生育地が限られ、個体数も少ない。ゴルフ場や道路の建設で、自生地の消滅が進んでいる。
- 学術的価値 : 沖縄島の固有変種である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策 : 生育地の保全と増殖。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : Hatusima, S., 1971. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (2). J. Geobot., 19(1-2): 25-28.

執筆者名 : 新里孝和*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : **ダイトウシロダモ**
- 分 類 : クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)
- 学 名 : *Neolitsea sericea* (Blume) Koidz. var. *argentea* Hatusima
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
- 形態の特徴 : 常緑の中高木。幹は直立し、高さ 10 m に達する。葉は小枝の先に束生し、葉身は長楕円形、長さ 7~15 cm、下面は白色を帯び、葉柄は長さ 2~4 cm、果実は倒卵形で赤熟し、シロダモより大きく、長さ 1.5~1.8 cm。
- 県内の分布 : 北大東島、南大東島。
- 生育環境 : 石灰岩地の常緑樹林内に生える。
- 生育状況 : 幕や神社の森などにわずかに残っているだけで、島の開拓に伴う森林の減少で個体数はごく少ない。
- 学術的価値 : 北大東島、南大東島の固有変種。
- 減少の要因 : 自生地の開発。森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策 : 生育地の保存指定。島全体の森林面積を増やす必要がある。

文 献 : Hatusima, S., 1976. On some species of the Lauraceae from Japan and Taiwan (3). J. Geobot., 24(2): 35-38.
 西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—。南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 新里孝和*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・城間盛男(追補)

- 和 名 : **テングノハナ**
- 分 類 : ハスノハギリ科 (APG 科名: ハスノハギリ科)
- 学 名 : *Illigera luzonensis* (Presl) Merr.
- カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形態の特徴** : 常緑のつる性植物。茎の下部は地上を這って根や枝を頻繁に出し、上部は他物にからまり、高さ 10 m に達する。葉は長い葉柄をもつ 3 出複葉で、小葉は卵形から円形、長さ 5~10 cm、頂端は微突形から鋭劣形、基部は円形または心形、葉枕がある。散房花序は腋生し、花は春と秋に咲き、午前中に開き午後には閉じ、帯紫赤色、長さ 8~10 mm、両性花。果実は側方に翼が発達し、長さ 2~3 cm、幅 4~5 cm。
- 分布域（県外）** : 台湾、フィリピン。
- 県内の分布** : 石垣島。
- 生育環境** : 海岸林に生える。
- 生育状況** : 生育地は 3 ヶ所しか知られておらず、個体数も少なかったが、自生地多くは開発により消失し、現在確認される個体群は、1 ヶ所の 2 個体に過ぎない（早川ら、2015）。
- 学術的価値** : 分布域の北限地である。石垣島の集団は葉の両面に粘性のある毛を密生することから、フィリピンの集団とは形態的に差異があり、異なる分類群である可能性がある。また、分子系統学的な研究で石垣島とフィリピンの個体群は、遺伝的に異なる可能性が示唆されている（早川ら、2015）。
- 減少の要因** : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
- 保全対策** : 海岸林の保全。個体数は危機的な状況にあるので、人工増殖を計る必要がある。
- 備考** : 石垣市自然環境保全条例保全種（2015 年）。

- 文献** : 大井次三郎、1937. テングノハナ石垣島に出づ. 植物分類地理, 6(1) : 56.
早川宗志・楠本良延・西田智子・前津栄信、2015. 石垣島産テングノハナ（ハスノハギリ科）の花
期と系統的背景. 分類, 15(2) : 147-157.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名** : リュウキュウヒキノカサ
- 分類** : キンポウゲ科 (APG 科名: キンポウゲ科)
- 学名** : *Ranunculus extorris* Hance var. *lutchuensis* (Nakai) Tamura
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴** : 高さ 15~30 cm の多年草。ひげ状にのびる根のほか数本の紡錘形に肥大した根がある。根出葉は分裂しないか 3~5 浅~深裂し、葉柄は長さ 2~5 cm。花茎は 1~5 本でて、その先端に直径 12~17 mm の黄色花をつける。花弁は 5 枚あり、倒卵形、長さ 6~7 mm、光沢があり、基部に蜜腺がある。集合果は広楕円形、長さ 4~7 mm、一つ一つの瘦果は円形で長さ 1.2 mm、少し曲がった花柱を残す。
- 分布域（県外）** : 喜界島、徳之島、沖永良部島。
- 県内の分布** : 沖縄島北部、伊江島、瀬底島。
- 生育環境** : 海岸や低地の原野の湿ったところや、畑の畦の草地に生える。
- 生育状況** : 沖縄島本部半島と伊江島に限定され、個体数も少ない。伊江島では、ゆりの丘に群生地があったが、1993~5 年にこの一帯が「テッポウユリの公園（リリーフィールド公園）」をつくるために開発され、全滅してしまった。現在は米軍演習地の中に細々と残っているにすぎない。本部半島では 2 ヶ所に生育が確認されているが、畑の畦の草地に生え、個体数はきわめて少ない。しばしば除草剤が散布され、個体数が減少している。瀬底島からも記録があるが（高良、2004）、現状不明。沖縄島の本部町からは、八重咲きの固有品種が記載されている（高良、2004）。
- 学術的価値** : 琉球列島の固有変種で、県内では希産種である。
- 減少の要因** : 自生地の開発。農業の使用。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考** : 本州（関東以西）から九州の日当りの良い草地に生え、中国、台湾、朝鮮に分布するヒキノカサ *R. extorris* の変種で、これに比べ全体が大きく、根出葉は分裂しないものが多い。

文 献 : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.
 新里孝和・嵩原建二, 2002. 伊江島の植物図鑑. 伊江村教育委員会, 201pp.
 高良拓夫, 2004. リュウキュウヒキノカサの一品種ヤエリュウキュウヒキノカサ (新称). 植物地理分類研究, 52 : 89.

執筆者名 : 立石庸一*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **ウマノアシガタ**
 分 類 : キンポウゲ科 (APG 科名: キンポウゲ科)
 学 名 : *Ranunculus japonicus* Thunb.
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 30~60 cm の多年草。全体に開出した長毛があり、根茎は短い。根出葉は数個、長柄があり、葉身は円心形、長さ 2.5~7 cm、掌状に 3~5 中~深裂し、裂片はさらに 2~3 裂する。花は枝分かれした長い花柄の先につき、直径約 2 cm、5 枚の花弁は黄色、広倒卵形で舟形、長さ 10~12 mm、光沢がある。集合果は球形で、一つ一つの瘦果は倒卵形、長さ 2.5 mm、周囲に縁取りがあり、先端に残る花柱はごく短く、先は曲がらない。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、瀬底島、伊江島。

生育環境 : 日当りのよい原野や露岩地、集落周辺の草地に生える。

生育状況 : 本部半島と伊江島に生育地が限定され、個体数もきわめて少ない。伊江島ではゆりの丘(リリーフィールド公園)にわずかに見られたが、開発のため、前記リュウキュウヒキノカサとともに消失してしまった。個体数が少ないので、採集や、開発などによって消失する恐れがある。瀬底島では近年は確認されない。

学術的価値 : 琉球列島では隔離分布し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

保全対策 : 自生地の保全のためには、草地の維持が必要で、適切な時期に刈取などを行う必要がある。

文 献 : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **アキカラマツ**
 分 類 : キンポウゲ科 (APG 科名: キンポウゲ科)
 学 名 : *Thalictrum minus* L. var. *hypoleucum* (Sieb. et Zucc.) Miq.
 カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は高さ 15~30 cm。葉は 1~2 回三出複葉で、小葉は広卵形~円形、長さ 1 cm。円錐花序は頂生し、数花をつける。花は淡黄緑色で、萼片は長楕円形、長さ 2 mm。瘦果は 2~6 個つき、狭倒卵形。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、トカラ列島（臥蛇島）、朝鮮、中国東北部。
県内の分布：沖縄島北部。
生育環境：山地の自然林内の滝の崖面に生える。
生育状況：自生地は1ヶ所のみ知られる。自生地は開発の恐れはないが、極めて個体数は少なく、十数個体しか確認されていない。採集されれば、容易に絶滅する。
学術的価値：本来温帯系の植物で、琉球列島では希産種である。奄美大島と沖永良部島の報告は疑問視されており、琉球列島での確実な産地は上記の1ヶ所だけだが、そこは他県における生育環境とは全く異なる。また、植物体の各部分が小形で、形態について詳しい調査が必要である。
減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。

文献：横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名：横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名：オオツツラフジ
分類：ツツラフジ科 (APG 科名: ツツラフジ科)
学名：*Sinomenium acutum* (Thunb.) Rehd. et Wilson
カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：落葉性の藤本。葉は互生し、長い葉柄をもち、葉身は5~7脈があり、卵円形または円形で長さ6~15 cm、裏面は通常無毛。夏時に白色の小花をつけた円錐花序をつける。
分布域（県外）：本州（関東南部以西）、四国、九州、薩摩黒島、屋久島、種子島、奄美大島、喜界島、台湾、中国。
県内の分布：沖縄島、宮古島。
生育環境：沖縄島では、北部、本部半島、南部の石灰岩地帯の林内や林縁にまれに見られる。宮古島でも自生地と個体数は極めて限られる。
生育状況：自生地、個体数とも少ない。
減少の要因：自生地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名：新城和治*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)

和名：ジュンサイ
分類：スイレン科 (APG 科名: ジュンサイ科)
学名：*Brasenia schreberii* J. F. Gmelin
カテゴリー：絶滅 (EX) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：浮葉性の多年生水草。葉身中部に葉柄がつく盾形で、楕円形、長さ5~12 mm、水面に浮かび、葉裏は紫色。茎や葉の裏面、若芽などが透明な粘質物に覆われている。花は1~1.6 cmで紫色。
分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、種子島、東南アジア、熱帯アフリカ、オーストラリア、北アメリカ、キューバ。
県内の分布：沖縄島中部（御殿敷）。
生育環境：池や沼に生える。
生育状況：唯一の自生地は軍用地で、生育状況は現在不明であるが、絶滅した可能性が高い。
学術的価値：県内唯一の産地である。

減少の要因 : 生育地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*

和名 : ハンゲシヨウ

分類 : ドクダミ科 (APG 科名: ドクダミ科)

学名 : *Saururus chinensis* (Lour.) Baill.

方言名 : ヒーラーグサ (沖縄島)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 50 cm 内外の多年草。全株に独特の臭気がある。葉は互生し、卵状心形、長さ 9~15 cm、夏頃には一部が黄白色になる。穂状花序は腋生し、小花を多数つける。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美諸島、朝鮮、台湾、中国、インドシナ半島、インド、フィリピン。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、久米島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、小浜島。

生育環境 : 海岸近くの水辺、湿地、廃田などに生える。

生育状況 : 沖縄島では北部から中部にかけて数ヶ所で確認されている。久米島では自生地は 1ヶ所に限られるが、個体数は多い。宮古島では、数ヶ所で確認されている。西表島では、数ヶ所で確認されている。局所的に多くの個体が生育する場所もあるが、全体としては湿地の開発に伴って生育環境が減少している。

減少の要因 : 自生地の開発。

備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

仲田栄二 (編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会, 119pp.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)

和名 : ケナシサダソウ

分類 : コショウ科 (APG 科名: コショウ科)

学名 : *Peperomia japonica* Makino f. *okinawensis* (Yamazaki) Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多肉質の多年草。サダソウに比べ全株無毛またはほとんど無毛で葉の表面には光沢がある。

分布域 (県外) : 九州南部、徳之島、沖永良部島。

県内の分布 : 伊江島、沖縄島北部、北大東島、南大東島。

生育環境 : 石灰岩地の岩上に生える。

生育状況 : 有毛型のサダソウは沖縄県内の各地に普通に見られるが、無毛型のケナシサダソウは自生地、個体数とも極めて少ない。伊江島、北大東島、南大東島ではケナシサダソウだけが個体群を形成するが、沖縄島北部ではサダソウとケナシサダソウがごく接近して生えている場所がある。

学術的価値 : 分布域の南限で、基準産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 本品種を独立種オキナワスナゴシヨウ *P. okinawensis* とする意見がある (Yamazaki, 1992)。

文 献 : Yamazaki, T., 1992. A new species of *Peperomia* from the Ryukyus. J. Jpn. Bot., 67: 15-18.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和 名 : コウシュンウマノズクサ

分 類 : ウマノズクサ科 (APG 科名: ウマノズクサ科)

学 名 : *Aristolochia tubiflora* Dunn

方 言 名 : ゴッコゴギー (宮古島)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 全株無毛のつる性多年草。葉身は卵形で長さ6~12 cm、上面は光沢があり下面は淡白色。花は筒形、基部は丸くふくれ、径4 mm程度、黄褐色、先端は唇状になり、卵状長楕円形、長さ30 mm程度、茶褐色。室果は倒卵状広楕円形、長さ3~4 cm、幅2 cm程度。

分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部、フィリピン、マレーシア、インド。

県 内 の 分 布 : 宮古島、池間島、大神島、伊良部島、来間島、魚釣島。

生 育 環 境 : 海岸や低地の明るい林縁部に生える。

生 育 状 況 : 宮古諸島では、点々と広く分布するが、個体数は限られる。魚釣島の現状は不明。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。

備 考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。

文 献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県自然公園候補地学術調査報告 (宮古群島), 沖縄県, 31-70.

執 筆 者 名 : 新城和治*・新島義龍*・洲鎌栄徳*・横田昌嗣(追補)

和 名 : オモロカンアオイ

分 類 : ウマノズクサ科 (APG 科名: ウマノズクサ科)

学 名 : *Asarum dissitum* F. Maek. ex Hatusima

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。葉身は卵心形で長さ6~11 cm、上面は無毛で、淡緑の小斑が散在し、下面は脈上に毛がある。萼筒は楕円形で長さは1 cm内外、先から1/3くらいのところで軽くくびれて、中細身になる。雄蕊は6個、雌蕊は3個。

県 内 の 分 布 : 石垣島。

生 育 環 境 : 高地の自然林の林床に生える。

生 育 状 況 : 自生地は限られる。かつては自生地内では、至る所で見られたが、最近では歩道沿いなどの目につくところでは採集により個体数は著しく減少している。

学 術 的 価 値 : 石垣島の固有種である。琉球列島における隔離による種分化の顕著な例として、学術上貴重である。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。採集により個体数は減少しているが、人跡未踏の場所にはまだかなりの個体数が残されているので、NTと判定する。

文 献 : Hatusima, S. & E. Yamahata, 1988. Illegitimately published taxa of *Asarum* from Japan. J. Phytogeogr. Taxon., 36: 1-8.

執 筆 者 名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **エクボサイシン (エクボカンアオイ)**

分 類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学 名 : *Asarum gelasinum* (F. Maek.) Hatusima

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。葉身は卵心形で長さ 10 cm 内外、裏面は帯紫色。萼筒は短く 1 cm 内外で、口輪がなく広く開口する。雄蕊は 6 個、雌蕊は 3~4 個。

県 内 の 分 布 : 西表島。

生 育 環 境 : 山地の自然林の林床に生える。

生 育 状 況 : 島内に広く分布するが、歩道沿いなどの人通りが多くて目につきやすい場所では、個体数は急減しており、場所によってはほとんど見るができなくなった自生地もある。

学 術 的 価 値 : 西表島の固有種である。琉球列島における隔離による種分化の顕著な例として、学術上貴重である。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。採集により個体数は減少しているが、人跡未踏の場所にはまだかなりの個体数が残されているので、NT と判定する。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : Hatusima, S. & E. Yamahata, 1988. Illegitimately published taxa of *Asarum* from Japan. J. Phytogeogr. Taxon., 36: 1-8.

執 筆 者 名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **オナガサイシン (カツウダケカンアオイ)**

分 類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学 名 : *Asarum leptophyllum* Hayata

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。株全体に毛が多い。葉身は卵状楕円形、まれに三角形で長さ 7~18 cm、先は鋭頭。萼片 3 枚が寄りそろって萼筒をつくり、先が尾状になり外側には白毛が密生する。雄蕊は 9~10 個、雌蕊は 6 個。

分 布 域 (県 外) : 台湾。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部。

生 育 環 境 : 石灰岩地の林床や石灰岩の岩隙に生える。

生 育 状 況 : 自生地はごく狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限であり、著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

備 考 : 自生地は沖縄県指定の天然保護区域として保護されているが、最近歩道建設が無秩序に進んでおり、歩道周辺を中心に採集が進んでいる。特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (オナガサイシン) (2017 年)。

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : モノドラカンアオイ

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum monodoriflorum* Hatusima et Yamahata

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉身は卵心形、裏面は帯紫色で、脈上に短毛がある。萼片が萼筒よりも大きく、萼片の内側に密毛がある。雄蕊は12個、雌蕊は6個。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : ごく限られた地域の山地の林床に生える。

生育状況 : 自生地は1ヶ所のごく狭い範囲に限られるうえ、採集により個体数は激減している。以前は点々と個体が確認されたが、最近ほとんど見かけることがなくなった。

学術的価値 : 西表島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2018年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

文献 : Hatusima, S. & E. Yamahata, 1989. Illegitimately published taxa of *Asarum* from Japan (II). J. Phytogeogr. Taxon., 37: 71-73.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒナカンアオイ

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum okinawensis* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。沖縄県産の種では最も小形の種類。葉の表面は深緑色で毛がなく、卵心形で長さ5~6 cm くらい。萼筒は長さ7 mm くらいで上部にくびれがない。雄蕊は12個、雌蕊は6個。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の石灰岩地帯の林床や石灰岩の岩隙に生える。自生地は1ヶ所のみで、個体数は極めて少ない。

生育状況 : 個体数は激減し、現在のごく少数の個体が確認されているだけである。消失したもののうち数個体は、自生する岩と共に割り取られ持ち去られたものである。

学術的価値 : 沖縄島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 自生地は沖縄県指定の天然保護区域として保護されているが、最近歩道建設が無秩序に進んでおり、歩道周辺を中心に採集が進んでいる。特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2017年)。IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

文献 : Hatusima, S., 1968. Five new species of *Asarum* from southern Kyushu and the Ryukyus. J. Jpn. Bot., 43: 429-434.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : センカクカンアオイ (センカクアオイ)

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum senkakuinsulare* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉身は卵心形、長さ 10~17 cm 内外。暗緑色で両面ともに毛がなく表面に光沢がある。雄蕊は 12 個、雌蕊は 6 個。

県内の分布 : 魚釣島。

生育環境 : 山地の林床に生える。

生育状況 : もともと極めて狭い範囲に産し、個体数は極めて少ない。1991 年と 1999 年の調査では、自生地を訪れてはいないものの、野生化ヤギの増殖により魚釣島の海岸から山頂まで至るところで林床の攪乱が確認されたことから (横畑・横田・太田, 2009)、本種の絶滅が危惧される。

学術的価値 : 魚釣島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られる。野生化ヤギによる踏みつけと森林の破壊。

保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献 : Hatusima, S., 1976. A new species of *Asarum* from the Ryukyus. J. Geobot., 24: 39-40.

横畑泰志・横田昌嗣・太田英利, 2009. 尖閣諸島魚釣島の生物相と野生化ヤギ問題. “IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No. 42 (松尾雅嗣教授退職記念論文集)”, 広島大学平和科学研究センター, 広島市, 307-326.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤエヤマカンアオイ

分類 : ウマノスズクサ科 (APG 科名: ウマノスズクサ科)

学名 : *Asarum yaeyamensis* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。沖縄県産の種の中では最も大形になる種類。葉身は卵心形、長さ 15 cm、全体に毛がなく革質で、上面に光沢がある。花は大形で、赤褐色、雄蕊は 12 個、雌蕊は 6 個。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の林床や溪流沿いの崖に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみで、ごく狭い範囲に少数個体が生える。他の 1 ヶ所に産するという記述がある文献 (水谷ら, 2004) が見つかったが、2016 年にその場所を踏査したものの、カンアオイ属の種は全く確認することができなかった。

学術的価値 : 西表島の固有種である。ただし最近、台湾に本種が産するという報告 (Lu *et al.*, 2009) がある。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地に限られる。

備考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2018 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Hatusima, S., 1968. Five new species of *Asarum* from southern Kyushu and the Ryukyus. J. Jpn. Bot., 43: 429-

434.

Lu, C.-T., C.-W. Chen & J.-C. Wang, 2009. *Asarum yaeyamense* Hatusima (Aristolochiaceae) newly found in northern Taiwan. *Taiwan J. For. Sci.* 24(3): 149-57.

水谷高幸・松羽研・田中孝幸, 2004. 琉球列島に自生するアオイボクロ *Nervilia aragoana* の保護を目的とした生態学的研究. 九州東海大学農学部紀要, 23: 51-60.

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : **サキシマヒサカキ**

分類 : ツバキ科 (APG 科名: サカキ科)

学名 : *Eurya sakishimensis* Hatusima

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 4~5 m になる常緑の小高木。小枝は多少有毛で、不規則な縦条がある。葉は互生し、うすい革質、長楕円状楕円形か卵状披針形で微鋸歯があり、上面は無毛で光沢がある。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の常緑樹林に生える。

生育状況 : 自生地は点在するが、個体数は限られる。

学術的価値 : 石垣島、西表島の固有種である。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。

備考 : ハマヒサカキと区別が微妙な個体があり、今後詳細な研究が必要である。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Hatusima, S., 1960. Taxonomic study of the genus *Eurya* from the Ryukyu Archipelago. *Mem. Fac. Agr. Kyushu Univ.*, 14: 21-26.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : **クニガミヒサカキ**

分類 : ツバキ科 (APG 科名: サカキ科)

学名 : *Eurya zigzag* Masam.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の小高木。全株無毛で、小枝は緑色で稜があり、ジグザグに屈曲する。葉は互生し、硬い革質、楕円形~長楕円状披針形、長さ 4~7 cm、微鋸歯があり、葉柄は赤色を帯びる。花は小型、白色または淡紅色。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の明るい林床や、川沿いの崖に生える。

生育状況 : 現在は国頭村・東村・大宜味村に数ヶ所に知られるが、個体数は極めて少ない。恩納村の 1ヶ所からも採集されているが、米軍の射爆場であるため調査することができず、現状不明。

学術的価値 : 沖縄島の固有種である。

減少の要因 : 森林の伐採。ダム建設による自生地の水没。

備考 : 本種を石垣島、西表島に産するヤエヤマヒサカキ *E. yaeyamensis* と同種とする見解があるが、葉や花の形態は全く異なっており、両者は明らかに別種である。IUCN カテゴリー: Critically

Endangered (CR)。

- 文 献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : センカクオトギリ

分 類 : オトギリソウ科 (APG 科名 : オトギリソウ科)

学 名 : *Hypericum senkakuinsulare* Hatusima

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 高さ 60 cm になる常緑の低木。枝を多く分け、樹皮は赤褐色。葉は対生し、長さ 2.3~3.5 cm、楕円形~長楕円形で上面に多数の明点がある。花は黄色で径 4 cm 内外。

県 内 の 分 布 : 魚釣島。

生 育 環 境 : 山頂の断崖の風衝地に生える。

生 育 状 況 : 自生地はごく狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。1991 年の調査では、自生地の周辺で野生化ヤギが確認されており、食害が危惧される。

学 術 的 価 値 : 魚釣島の固有種である。国内に産するオトギリソウ属の種では、唯一木本となる種である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られる。野生化ヤギによる食害。園芸用の採集。

保 全 対 策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

- 文 献 : 新納義馬・玉城松栄・新城和治・宮城康一, 1971. 尖閣列島の植物. “尖閣列島学術調査報告”, 琉球大学, 37-84.

Hatusima, S., 1987. New or noteworthy plants from Japan. *J. Phytogeogr. Taxon.*, 35(2): 63-68.

Hatusima, S., 1993. A new woody *Hypericum* from the Ryukyus. *J. Geobot.*, 21: 2-3.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ジャニンジン

分 類 : アブラナ科 (APG 科名: アブラナ科)

学 名 : *Cardamine impatiens* L.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 一年草。茎は細く、直立して高さ 10~80 cm になる。葉は互生して、質の薄い奇数羽状複葉、2~9 対の側小葉はさらに切れ込み、葉柄の基部に小さな耳片がある。花は茎頂や葉腋の総状花序につき、花弁は 4 個で緑白色、長楕円形へら形で、長さ 2~3.5 mm。果実は長さ 15~25 mm で線形の長角果になり、2 室に多数の種子を入れる。

分 布 域 (県 外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、ユーラシアの温帯~亜熱帯。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、沖縄島。

- 生育環境 : 木陰や水湿地に生える。
生育状況 : 沖縄島からは、1887年に本部半島、1938年に名護市で記録されており、伊平屋島からは1924年に採集された標本があるが、以後は全く見られていなかった。ところが、2005年1月に沖縄島南部で比較的多くの個体が見出された。
学術的価値 : 沖縄島北部と沖縄島周辺の離島に共通する数少ない大陸要素植物の一つとして貴重である。
減少の要因 : 生育地の開発。

執筆者名 : 立石庸一*・高良拓夫*

-
- 和名 : リュウキュウベンケイ
分類 : ベンケイソウ科 (APG科名: ベンケイソウ科)
学名 : *Kalanchoe integra* (Medik.) O. Ktze.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 野生絶滅 (EW)

- 形態の特徴 : 高さ30~100 cmになる多肉の多年草。葉は有柄、へら状長楕円形で、しばしば3裂し、鈍鋸歯縁、長さ5~20 cm。散房花序に黄色の花を多数つける。花冠はつぼ形で上向き、先で4裂する。
分布域(県外) : 沖永良部島、与論島、台湾、中国南部、インドシナ、マレーシア、インド。
県内の分布 : 沖縄島、伊江島、宮古島、多良間島。
生育環境 : 近年全く確認されていないので、生育環境は判らないが、おそらく日当たりの良い低地に生える。台湾や東南アジアでは、海岸から内陸部の山地まで、蘚苔類が生えた湿った崖に生育することを見ることが多い。
生育状況 : 伊良部島の1ヶ所で確認されている(宇座・下地, 2003)が、生育状況の記述から判断すると栽培品が逸出した可能性が高い。その他では近年はまったく確認されておらず現状不明、沖縄県では既に絶滅した可能性がある。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。
備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。
文献 : 宇座 正・下地俊充, 2003. リュウキュウベンケイの現状と課題. 熱帯植物調査研究年報 (海洋博覧会記念公園管理財団), 24: 59-66.

執筆者名 : 新城和治*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : オオクサアジサイ
分類 : ユキノシタ科 (APG科名: アジサイ科)
学名 : *Cardiandra alternifolia* Sieb. et Zucc. subsp. *mollendorffii* (Hance) Hara et H. Ohba
カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II類 (VU)

- 形態の特徴 : 多年草。茎は高さ30~60 cm、多少溝があり、上部に微毛を散生する。葉は長楕円状披針形~長卵状楕円形、長さ10~18 cmで先はとがる。無毛または粗毛が散生する。頂生の円錐花序には淡紅色の花をつける。中性花には花弁状の2個の萼片がある。
分布域(県外) : 台湾、中国中部。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 陰湿な樹林内の湿った崖に生える。
生育状況 : 自生地は2河川の流域に点在するが、個体数は少ない。

- 学 術 的 価 値 : 西表島は国内唯一の産地である。東アジアの温帯系の種で植物地理学上貴重である。奄美大島に産するアマミクサアジサイ *C. amamioshimensis* と同種とする見解があるが、アマミクサアジサイは花弁状の萼片がある中性花を欠くので、本種とは明瞭に異なる。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。
- 備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : オキナワヒメウツギ
- 分 類 : ユキノシタ科 (APG 科名: アジサイ科)
- 学 名 : *Deutzia naseana* Nakai var. *amanoi* (Hatusima) Hatusima ex H. Ohba
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形 態 の 特 徴 : 落葉性の低木。基本変種のオオシマウツギと比べて、葉は卵円形で長さ 2~3 cm と小さく、総状花序は 3~7 花をつけ少ない。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島南部。
- 生 育 環 境 : 日当たりの良い石灰岩地の岩壁に生える。
- 生 育 状 況 : 自生地が数ヶ所に限られ、個体数も少ない。
- 学 術 的 価 値 : 沖縄島の固有変種。
- 減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。
- 備 考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2018 年)。南城市指定天然記念物 (オキナワヒメウツギ群落) (1993 年)。

文 献 : Ohba, H. & S. Akiyama, 1992. A taxonomic revision of *Deutzia* (Saxifragaceae, s.l.) in the Ryukyu Islands, S. Japan. J. Jpn. Bot., 67: 154-165.
平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. "佐敷町史, 三自然", 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町, 93-196.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : ヤエヤマヒメウツギ
- 分 類 : ユキノシタ科 (APG 科名: アジサイ科)
- 学 名 : *Deutzia yaeyamensis* Ohwi
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形 態 の 特 徴 : 高さ 1~2 m になる落葉性低木。枝条は褐色で無毛。葉は楕円形~卵形で、長さ 5~13 cm、膜質、星状毛が下面にやや密生する。円錐花序は頂生し、白色の 5~10 花をつける。
- 県 内 の 分 布 : 西表島。
- 生 育 環 境 : 川沿いなどの陽当たりの良い崖に生える。
- 生 育 状 況 : 自生地は西表島の各地に点在するが、個体数は少ない。
- 学 術 的 価 値 : 西表島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Endangered (EN)。

文献 : Ohba, H. & S. Akiyama, 1992. A taxonomic revision of *Deutzia* (Saxifragaceae, s.l.) in the Ryukyu Islands, S. Japan. J. Jpn. Bot., 67: 154-165.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : トカラアジサイ
分類 : ユキノシタ科 (APG 科名: アジサイ科)
学名 : *Hydrangea kawagoeana* Koidz.
方言名 : イビキ (伊平屋島)
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1~2 m の落葉性常緑低木。葉は対生し、膜状洋紙質で長楕円状披針形~長楕円形、長さ 5~12 cm で両面は光滑があり、粗に鋸歯がある。5~6 月頃、枝の先に偽散形状に花をつける。結実しない花 (無性花) は白色の花弁状萼 4 枚が目立ち、結実する花は小さく多い。

分布域 (県外) : 屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島。

県内の分布 : 伊平屋島。

生育環境 : 山地の樹下に生える。

生育状況 : 県内では自生地が限られ、個体数が少ない。主要な自生地の一つは、ダム建設により消失した。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。ダム建設による自生地の水没。

備考 : 北琉球と中琉球に産するトカラアジサイと、石垣島と西表島に産するヤエヤマコンテリギ *H. yaeyamensis* は、台湾と中国大陸に産するカラコンテリギ *H. chinensis* と共に同種とされることもあるが、これらはいずれも外部形態や染色体数が異なり (Akiyama, 1989)、それぞれ独立種と考えられる。竹富町希少野生動植物種(カラコンテリギ) (2017 年)。

文献 : Akiyama, S., 1989. Chromosome numbers of the species in *Hydrangea chinensis*-complex in the Ryukyu Islands. J. Jpn. Bot., 64: 353-360.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新島義龍*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : キンミズヒキ
分類 : バラ科 (APG 科名: バラ科)
学名 : *Agrimonia pilosa* Ledeb.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全体に毛の多い多年草。根茎は肥厚、茎は分岐し、高さ 30~80 cm になる。葉は 3~9 個の小葉からなる奇数羽状複葉で裏面に腺点があり、頂小葉は菱状長楕円形~菱状倒卵形で、多くは先が尖り、葉柄の基部には半卵形で先が尖った大型の托葉がある。花は黄色で、枝先の総状花序に多数つき、直径 6~11 mm、花弁は 5 枚、倒卵形~狭倒卵形で大きく、長さ 2.5~6 mm。雄しべは 8~15 本。果時の萼筒は倒円錐形で、短毛があり、上縁に長さ 3 mm の上向きに展開したかぎ状の刺があり、これで動物の体毛や衣服にくっついて散布される。

分布域（県外）：シベリア、ヨーロッパ、北海道、本州、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、朝鮮、中国、オーストラリア。
 県内の分布：沖縄島、久米島、宮古島、石垣島。
 生育環境：山地の林床に生える。
 生育状況：1887年4月に沖縄島で田代安定により採集され（Ito & Matsumura, 1899; Koidzumi, 1913）、1930年代までは時折採集されているが、近年は確認されていない。
 減少の要因：生育地の開発。もともと自生地が限られている。
 備考：奄美諸島では高地にやや普通に生える。

文献：Koidzumi, G., 1913. *Conspectus Rosacearum Japonicarum*. J. Coll. Sci. Tokyo Imp. Univ., 34(2): 1-312.
 Ito, T. & J. Matsumura, 1899. *Tentamen Florae Lutchuensis. Sectio prima. Plantae Dicotyledoneae polypetalae*. J. Coll. Sci. Univ. Tokyo, 12: 263-541.

執筆者名：立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名：テンノウメ
 分類：バラ科（APG科名：バラ科）
 学名：*Osteomeles anthyllidifolia* (Smith) Lindl.
 方言名：イソボーギー、イソボーギー（宮古島）
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

形態の特徴：つる状の小低木。小枝には毛がある。葉は羽状複葉で長さ10 cm以下。数個の花を枝先の散房花序につける。花は径1 cm、白色。果実は黒紫色に熟す。
 分布域（県外）：小笠原、屋久島、奄美諸島、台湾（蘭嶼）、中国西南部、ハワイ、ポリネシア。
 県内の分布：沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。
 生育環境：海岸の隆起石灰岩上に生える。
 生育状況：もともとは各地にやや普通に見られたが、近年は採集により個体数が減少している。
 減少の要因：盆栽用の乱獲。
 保全対策：苗木増殖した株を普及することにより園芸用の採集を防止する。
 備考：宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文献：阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣，2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ（粟国島・渡名喜島）。日本植物園協会誌，(51)：80-85.

執筆者名：新里孝和*・新島義龍*・洲鎌栄徳*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名：リンボク
 分類：バラ科（APG科名：バラ科）
 学名：*Prunus spinulosa* Sieb. et Zucc.
 方言名：ヤマザクラ（沖縄島：世富慶、久志）
 カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN） 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の高木。葉は互生し、長楕円形～卵状楕円形で長さ6～10 cm、うすい革質で光沢がある。幼木の葉は刺状鋸歯縁であるが、老木では全縁。葉身の基部には蜜腺2個がある。白色の小花を総状花序につける。
- 分布域(県外) : 本州(西南部)、四国、九州、台湾、中国南部。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の林内に生える。
- 生育状況 : 自生地は限られ、個体数は極めて少ない。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと個体数が少ない。
- 保全対策 : 生育地の保全。

文献 : 比嘉 寿・新里孝和, 2003. 名護市の植生と植物相, 名護市の植物目録, “名護市天然記念物調査シリーズ第5集, 名護市の自然”, 名護市教育委員会, 49-139.

執筆者名 : 新里孝和*・新島義龍*

和名 : **アリサンバライチゴ**

分類 : バラ科 (APG 科名: バラ科)

学名 : *Rubus rosaefolius* Smith var. *formosanus* Cardot

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の小低木。株全体に柔らかい毛と腺毛を密生。葉は互生し、奇数羽状複葉。径3 cm内外の白色花を多数つけ、果実は赤熟。リュウキュウバライチゴ *R. rosaefolius* subsp. *maximowiczii* に比べ小葉は卵状楕円形で幅広く、葉の両面に毛が多い。
- 分布域(県外) : 台湾。
- 県内の分布 : 与那国島。
- 生育環境 : 人為的な影響の強い二次林の林縁、耕作地や牧場の端に生える。
- 生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 県内で唯一の産地である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
- 保全対策 : 自生地の維持のためには、人為的な管理が必要である。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
与那国町教育委員会, 1995. 与那国島の植物. 与那国町教育委員会, 336pp.

執筆者名 : 新里孝和*・新島義龍*

和名 : **タイワンウラジロイチゴ**

分類 : バラ科 (APG 科名: バラ科)

学名 : *Rubus swinhoei* Hance

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑のつる性低木。つるには刺が散生し、地面を這うように伸びる。葉は互生し、洋紙質で卵状～卵状披針形で不斉鋸歯縁があり、先の方は次第にとがる。花は白色で、枝先にできる散房花序に3～

5花を付け、果実は黒紫色に熟す。

- 分布域（県外）：台湾、中国南部。
 県内の分布：石垣島。
 生育環境：高地の日当りのよい林縁に生える。
 生育状況：自生地は限られ、個体数が少ない。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。
 保全対策：生育地の保全。
 備考：沖縄島北部には、変種のクワノハイチゴ var. *nesiotus* (Focke) Kitam. が分布する。

執筆者名：新里孝和*・新島義龍*

- 和名：オキナワウラジロイチゴ（ホザキイチゴ）
 分類：バラ科（APG科名：バラ科）
 学名：*Rubus utchinensis* Koidz.
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：半つる性の低木。全株に褐色の毛が密生する。葉は革質で卵形～卵円形、長さ4.5～8 cmくらい。花は白色で、枝先の総状花序に多数集まって咲く。
 県内の分布：沖縄島北部。
 生育環境：日当りのよい山地の林縁や風衝地に生える。
 生育状況：沖縄島北部（本部半島を含む）の数ヶ所に自生が知られるが、個体数は少ない。自生地の一つは県指定の天然保護区域であるが、歩道沿いの個体は踏みつけや刈り取りの影響を受けている。
 学術的価値：沖縄島の固有種である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。
 保全対策：生育地の保全。マント群落の刈り払いを軽減する。
 備考：ハウロクイチゴ *R. sieboldii* とクワノハイチゴ *R. swinhoei* var. *nesiotus* の雑種起源とみなされているが、本部半島では種子により繁殖している可能性がある。

執筆者名：新里孝和*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

- 和名：ヤエヤマネムノキ
 分類：マメ科（APG科名：マメ科）
 学名：*Albizia retusa* Benth.
 方言名：ハマクワ、バマクワ（石垣島、西表島）
 カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN） 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN）

- 形態の特徴：高さ15 mに達する落葉高木。葉は2回偶数羽状複葉で、4～6対の羽片が対生し、その各々に4～8対の小葉が対生してつく。小葉は無毛で卵状楕円形または倒卵形、先端が円く、長さ2～4 cm、幅1～2 cmあり、裏面は緑白色を帯びる。花は柄の先に15個ほど頭状に集まってつき、5～8月に開花する。花はピンクで小さく、柄があり、5枚の花弁が合着して筒状の花冠になり、多数の長い糸状の雄蕊と1本の雌蕊とが花冠から飛び出す。
 分布域（県外）：台湾、タイ、マレーシア、ミクロネシア、カロリン、ニューヘブリデス、オーストラリア北部。

- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、内離島、嘉弥真島、小浜島、西表島。
- 生育環境 : 東南アジアでは低山の降雨林や二次林の中に見られるが、沖縄では海岸林内あるいは海岸に近い明るい二次林内や林縁に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では許田の海岸付近に数本生えているのみであり、八重山でもまれである。海岸付近に生えることが多いので、護岸工事や道路敷設工事などによって伐採される危険がある。特に沖縄島許田のものは民有地の中にあり、名護市の天然記念物に指定されてはいるが、保護のための適切な処置が必要である。
- 学術的価値 : 沖縄県が分布域の北限で、また数も少ないので貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地が限られる。自生地の開発。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*

-
- 和名 : ガランピネムチャ (リュウキュウカワラケツメイ)
- 分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
- 学名 : *Chamaechrista garambiensis* (Hosokawa) Ohashi, Tateishi et Nemoto (= *Cassia mimosoides* L. var. *pacifica* (Ohwi) Tawada)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴 : 小形の多年草。茎は斜上し、高さ 10~20 cm になる。葉は互生し、狭長楕円形で長さ 3~6 cm になる偶数羽状複葉、15~40 対の小葉は線形で長さ 3~8 mm、葉柄の上側に皿状の蜜腺が 1 個ある。花は黄色で、葉腋に 1~3 個つき、径 15~25 mm、花弁は 5 個、雄蕊は 9 本。豆果は線形で扁平、長さ 2.5~4.5 cm。
- 分布域(県外) : 台湾南部。
- 県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 海岸の断崖上や原野の風衝地など、風が強く、高茎の植物の生育が押さえられるようなところに散生する。
- 生育状況 : 宮古島では 2017 年に 1 ヶ所で少数個体が確認されている。西表島では 1950 年代末に採集されているが、最近では観察されていない。最も豊富に生育していた石垣島でも、最近ではごく限られた地域にしか見られなくなってしまった。
- 学術的価値 : 台湾南部と先島諸島のごく限られた地域に生育が限られる。台湾南部と琉球の風衝地には共通あるいは各々に独特の固有種が多く、ガランピネムチャもその一種である。これらの種は台湾や琉球における植物の種分化や植物相の成立を考察する上で特に重要である。
- 減少の要因 : 公園や農耕地、放牧地などへの開発。もともと自生地が限られる。外来種との競合。
- 備考 : 世界の熱帯~亜熱帯に広く分布するカワラケツメイ (*Chamaechrista mimosoides* (L.) Greene, = *Cassia mimosoides* L.) のシノニムとされたり (初島・天野, 1958 ; 初島, 1971)、その変種とされたりもした (多和田, 1964) が、ガランピネムチャは植物体が小形で、花が大きく、雄蕊が 9 本 (*C. mimosoides* は 10 本) などの特徴があり、独立種とすべきである。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Chamaecrista pratensis* として評価。
- 文献 : 初島住彦, 1971. 琉球植物誌. 沖縄生物教育研究会, 那覇, 940pp. 初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192pp. 多和田真淳, 1964. 琉球植物見聞録. 沖縄生物学会誌, 1 (2) : 76-79.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)

和名 : **ガクタヌキマメ**

分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学名 : *Crotalaria calycina* Schrank

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 30~90 cm に達する一年草。全株に絹毛が生える。葉は 1 小葉で長さ 4~9 cm、線形~披針形。総状花序は頂生し、2~12 花をつける。萼は褐色の絹毛を密生し、長さ 2~3 cm、花冠は淡黄色で萼より短い。豆果は線状長楕円形で長さ約 1.5 cm、無毛、20~30 種子を入れる。

分布域(県外) : 台湾、中国、東南アジア、西アジア、アフリカ、オーストラリア北部。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 原野に生える。

生育状況 : 石垣島では 1970 年代まで、西表島では 1910 年代に採集の記録があるが、最近は全く観察されておらず、現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : **ヤエヤマタヌキマメ**

分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学名 : *Crotalaria montana* B. Heyne ex Roth (= *C. linifolia* auct. non L. f.)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 20 cm~1 m に達する直立の一年草。葉は単葉でほとんど柄がなく、線形~狭倒卵状楕円形、長さ 2~3 cm、幅は 3~7 mm。花は長さ 5~7 mm の蝶形花で、茎頂の長さ 2~10 cm の総状花序に多数がしかし疎らにつく。花弁は鮮黄色で、萼より短い。豆果は楕円形の袋状で黒く熟し、長さ 5~6 mm、萼と同長ないし萼よりやや長く、無毛、黒色の光沢のある種子を多数含む。

分布域(県外) : 台湾、中国、インドシナ、インド、マレーシア、インドネシア、ニューギニア、オーストラリア北部。

県内の分布 : 久米島、石垣島、西表島。

生育環境 : 草原や道端、牧場や耕作地の周辺などの、やや二次的な環境に生える。

生育状況 : 1980 年代の初めまでは折々見られ、標本の記録もあるが、最近はまれになった。西表島では 2ヶ所で 2017 年に確認されている。久米島と石垣島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限に当たる。

減少の要因 : 生育地の開発。遷移の進行。除草剤の使用。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

執筆 者 名 : 立石庸一*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : エダウチタヌキマメ (ダエンタヌキマメ)

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Crotalaria uncinella* Lam. subsp. *elliptica* (Roxb.) Polhill (= *C. uncinella* auct. non Lam. ; = *C. elliptica* Roxb.)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 20~60 cm の多年草、または茎下部が木化して亜低木状になり、枝の上部はしばしば横臥する。葉は 3 小葉で、1~1.5 cm の柄があり、小葉は狭楕円形から倒卵形、頂小葉は長さ 1.5~2.5 cm。花は枝の先や葉腋にできる総状花序に数~10 個ほどつき、長さ 5~7 mm の黄色の蝶形花で、花弁は萼より長い。豆果は楕円形で長さ 5~6 mm、幅約 4 mm、短毛で覆われ、2 種子を含む。

分布域(県外) : 台湾南部、中国東南部(広東、海南、広西)、ベトナム、タイ。

県内の分布 : 伊是名島。

生育環境 : 海崖上または斜面上部の風衝地。

生育状況 : 島内のごく限られた地域に自生し、個体数は極めて少ない。現在確認されている自生地は 4 ヶ所だけである。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、国内では唯一の自生地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

備 考 : 大東諸島、沖縄島、宮古島も分布地に挙げられているが、伊是名島も含め 4 島とも帰化による分布とされた(島袋, 1990, 1997)。しかし、伊是名島の生育地の状況を台湾以南での自生地の状況に照らすと、伊是名島での分布は元来の自生と判断するのが適切である(立石ら, 2004)。一方、他の 3 島からの記録は標本等による確かな裏付けができない。そもそも記録そのものに誤りがあるのかも知れない(立石ら, 2004)。基本亜種(subsp. *uncinella*)は熱帯東アフリカからマダガスカル、マスカレン諸島に分布する。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Crotalaria uncinella* として評価。

文 献 : 島袋敬一, 1990. 琉球列島維管束植物集覧. ひるぎ社, 那覇, 794pp.

島袋敬一, 1997. 琉球列島維管束植物集覧 [改訂版]. 九州大学出版会, 福岡, 855pp.

立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査(伊是名島・久米島). “事業年報(平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆 者 名 : 立石庸一*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : ナハキハギ

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Dendrolobium umbellatum* (L.) Benth.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 3~6 m の低木または小高木。葉は 3 小葉からなる。小葉は若時には両面とも伏した白毛があるが、のち脱落して裏面の脈上に残るのみになり、中肋と側脈が目立つ。花は白色の蝶形花で、散形花序に 10 個内外つき、6~7 月を中心に開花する。果実はやや木質の節果、長さ 2~4 cm 程になり、節で折れて 3~5 個の小節果がばらばらになって落ち、小節果ごとに 1 個含まれる種子が散布される。

- 分布域（県外）：台湾、中国、東南アジア、インド、太平洋諸島、オーストラリア、アフリカの沿海地。
- 県内の分布：沖縄島、石垣島、小浜島、内離島、西表島。
- 生育環境：海岸あるいは海岸付近の岩が多い斜面に生える。
- 生育状況：沖縄島では那覇市漫湖一帯の数ヶ所と今帰仁村に比較的大きな個体群があり、その各々の生育は良好である。八重山でも分布は局所的である。海岸付近に生えるため、護岸工事や道路拡張工事等による生育地の破壊の危険に常にさらされている。那覇市漫湖一帯の個体群では、埋立等によって生育地がせばめられてきた可能性がある。周囲がすっかり埋め立てられてしまったガーナー森の個体群では芽生えが少なく、今後の個体群の維持に不安がある。小浜島では、2014年に少数個体が確認されている。
- 学術的価値：分布域の北限である。
- 減少の要因：もともと自生地が限られている。自生地の埋立。護岸工事。
- 備考：那覇市ガーナー森の個体群は、1974年に那覇市の天然記念物に指定されている。今帰仁村指定天然記念物（仲宗根垣畑原のナハキハギ群落）（2003年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献：知念美香，1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究，(11)：75-105.
 長嶺晴美・金城あや子・親盛啓介・中村博幸，1983. ナハキハギの調査と観察. 沖生教研会誌，16：15-16.
 Ohashi, H., 1998. *Dendrolobium* (Leguminosae-Papilionoideae: Desmodieae) in the Philippines. J. Jpn. Bot., 92: 248-258.
- 執筆者名：立石庸一*・新城和治*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名：ヌスビトハギ
- 分類：マメ科 (APG 科名: マメ科)
- 学名：*Desmodium podocarpum* DC. subsp. *oxyphyllum* (DC.) Ohashi (= *D. oxyphyllum* DC.)
- カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー：該当なし
- 形態の特徴：多年草。茎は高さ30～120 cmになる。葉は3小葉からなり、頂小葉は卵形で先端が次第に尖る。7～9月、茎の先端および上部の葉腋に総状あるいは円錐状の花序を出し、紅紫色を帯びた小さな蝶形花をつける。果実は節果で2種子を含む。各々1種子を入れた小節果は下側の縫合腺が種子の前後で深くくびれて半月形になる。小節果の表面には鉤毛があり、この鉤毛で小節果ごとに動物の体毛や衣服などに付着して散布される。
- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、薩南諸島、種子島、屋久島、奄美諸島、朝鮮、中国、台湾、ヒマラヤ、ミャンマー。
- 県内の分布：沖縄島（本部半島）。
- 生育環境：平地から山地の獣道や山道など、動物や人の歩行する道に沿った明るい林縁や道端、草地等に生える。生育地は人的な影響をよく受け、不安定なところである。
- 生育状況：かつては山原にまれではなかったようだが、現在はほとんど見られなくなった。確実な産地は本部半島の1ヶ所だけと思われる。
- 学術的価値：日本本土、特に本州以南ではごく普通の植物だが、沖縄県では少ない。日華区系要素の一つと考えられており、日華区系や琉球列島の植物相の成立を考える上で興味深い。
- 減少の要因：開発などによる生育地の破壊。
- 保全対策：自生地は観光地であるので、歩道沿いの個体は刈り取りにより減少する可能性があり、除草には配慮が必要である。
- 備考：自生地は県指定の天然保護区域である。

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : ノアズキ (ヒメクズ)

分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学名 : *Dunbaria villosa* (Thunb.) Makino (= *D. podocarpa* auct. non Kurz)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : つる性の多年草で、全体にピロード状の毛と赤褐色の腺点がある。葉は互生して3小葉からなる。小葉は広卵状菱形で先は伸びるが鈍頭に終わり、長さ幅ともに1~3 cm。花は葉腋の総状花序に1~数個つく。5枚の花弁は黄色、最も外側にある旗弁は大型でやや歪んだ円形、左右非相称、幅15~18 mm、内面基部に1対の耳形の突起がある。最も内側にある1対の竜骨弁は伸長して反転するが、上下の縁同士が接着して筒状になり、10本の雄蕊と1本の雌蕊を包む。果実は扁平な広線形で、長さ4.5~5.5 cm、短毛を密生し、5~8個の種子を入れる。

分布域(県外) : 本州(宮城県南部以西)、四国、九州、奄美大島、朝鮮、中国、台湾、ベトナム、タイ、ビルマ、インド、インドネシア、フィリピン。

県内の分布 : 伊江島、沖縄島中部。

生育環境 : 日当たりのよいやや湿った野原や林縁に生える。

生育状況 : 伊江島からは1951年に城山で、1974年5月に灯台付近で、また沖縄島からは沖縄市知花で1936年8月に採集されているが、以後は全く記録がない。伊江島では1994年以降、重点的に調査を行っているが全く見出されていない。絶滅している可能性もある。

学術的価値 : 沖縄島北部と沖縄島周辺の離島に共通する数少ない大陸要素植物の一つとして貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 伊江島から1974年5月に発見され、当初はノアズキ(ヒメクズ)として琉球新産の報告がされた(初島・宮城, 1974)。ノアズキはさらにそれ以前にも伊江島のほか沖縄島中部でも採集されていることが分ったが、これら沖縄諸島産は初島(1975)により、中国南部から東南アジアに分布するカイナンノアズキ *Dunbaria podocarpa* に訂正された。それ以来、琉球の植物目録類では常にカイナンノアズキとされ、本レッドデータブックでもそう扱ってきた。しかし、伊江島産の花を解剖したところ、カイナンノアズキとは明らかに異なり、ノアズキとよく一致していることが分った。

文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌(追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 881.

初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄自然研究会, 那覇, 57-76.

Maesen, L. J. G. van der, 1998. Revision of the genus *Dunbaria* Wight & Arn. (Leguminosae-Papilionoideae). Wageningen Agric. Univ. Papers, Backhuys Publishers, Leiden, 98(1): 1-109.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : コウシュンモダマ

分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学名 : *Entada phaseoloides* (L.) Merr. (= *Entada koshunensis* Hayata et Kanehira)

方言名 : ウジルカンダ、スバガーニー(沖縄島: 伊部)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 極めて大形の常緑つる性木本。全株全く無毛。葉は2回偶数羽状複葉で、葉軸の先端は2分岐する巻ひげで終わる。羽片は2対あり、そのそれぞれに3または4対の小葉が対生してつく。小葉はや

や歪んだ長楕円形または倒卵形、革質で光沢がある。5～7月頃、林冠の若枝の葉腋に長さ12～25 cmの穂状花序を出し、黄緑色の小さな放射相称花を密につける。豆果は木質で線形、長さ80～120 cm、幅7～12 cmにおよぶ。種子は茶褐色で非常に硬く、円形から広楕円形で、中央が山形に膨らみ、長さ3～5 cm、幅3～4.5 cmである。子葉の間に空隙によって海水に浮き、海流によって漂流し海岸に漂着しているものを時折見かける。

- 分布域（県外）：台湾南部。
- 県内の分布：沖縄島、石垣島、小浜島、西表島、与那国島。
- 生育環境：山地や低地の溪流に面した陰湿な斜面に生え、他の高木にからみついて林冠におよぶ。
- 生育状況：沖縄島では現在、北部の1ヶ所だけしか見られないが、石垣島や西表島では比較的多い。
- 学術的価値：琉球のものは台湾の個体と共にモダマとは異なる形質を持つ。モダマとの関係を明らかにするためには現在の個体群は貴重である。
- 減少の要因：自生地の開発。ダム建設や河川改修。装飾用に行われる果実や茎の採集。
- 備考：琉球列島のものは近年、モダマ *E. phaseoloides* (L.) Merr. に統一されていたが、小葉数や種子の形態および分子マーカーを用いた解析の結果、モダマは日本では屋久島と奄美大島に限られ、沖縄島と八重山諸島のものはこれとは異なり、コウシュンモダマであることが明らかになった（脇田ら、2005）。モダマは、1羽片につき小葉が1～2対であり、種子も大型で長さ5～6.5 cm、幅4～6 cm、偏平で中央が山形に膨らまないなどの特徴でコウシュンモダマとは異なる。分子系統学的な研究の結果、コウシュンモダマの学名を *E. phaseoloides* (L.) Merr. に、モダマの学名を *E. tonkinensis* Gagnep. とすべきであることが報告された（Wakita *et al.*, 2008, Tateishi *et al.*, 2008）。
- 文献：立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.
脇田悟寿・與座（仲本）優子・来間和菜・傳田哲郎・立石庸一, 2005. 琉球列島のモダマ類. 分類, 5 (1) : 9-20.
Wakita, N., Y. Tateishi, T. Ohi-Toma, J. Murata & T. Kajita, 2008. Two species of *Entada* in Japan as evidenced by cpDNA phylogeny. *Acta Phytotax. Geobot.* 59(3): 183-193.
Tateishi, Y., N. Wakita & T. Kajita, 2008. Taxonomic revision of the genus *Entada* (Leguminosae) in the Ryukyu Islands, Japan. *Acta Phytotax. Geobot.* 59(3): 194-210.

執筆者名：立石庸一*・松村俊一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名：リュウキュウミヤマトベラ（台湾ミヤマトベラ）

分類：マメ科（APG科名：マメ科）

学名：*Euchresta formosana* (Hayata) Ohwi

カテゴリー：絶滅危惧 I B類（EN） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR）

形態の特徴：常緑の低木。茎は高さ1～2 mになり、時に分枝する。葉は奇数羽状複葉で、小葉は3～5対、長さ8～11 cm、長楕円形～披針状長楕円形。総状花序は頂生し、多数の花を密につける。花弁は長さ1.5 cm、白色、萼筒は長さ7 mm。豆果は楕円形で、長さ1.5～2 cm、黒紫色に熟し、果皮は薄く1個の種子を含む。

分布域（県外）：台湾、フィリピン、ジャワ。

県内の分布：沖縄島北部（国頭村、大宜味村、本部半島）、西表島。

生育環境：自然林内の陰湿な斜面に生える。

生育状況：沖縄島では3ヶ所、西表島では数ヶ所の自生が知られるが、いずれもごく狭い範囲に限られ、個体数は少ない。西表島の自生地の多くは国立公園内にあるが、牧場から逃げ出したウシによる食害で大きな被害を受けた自生地がある。その後、ウシは駆除されたが、個体数は回復していない。沖縄島の1ヶ所ではすぐ横を通る林道により、乾燥化が進み、生育環境が悪化している。沖縄島の他の

2ヶ所の現状は不明。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、琉球列島では希産種である。

減 少 の 要 因 : 自然林の伐採。林道建設。野生化したウシによる食害。もともと自生地と個体数が限られている。

備 考 : 竹富町特別希少野生動植物種 (2017)。

文 献 : 新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設 40 周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.

横田昌嗣・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料 7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ソロハギ

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Flemingia strobilifera* (L.) R. Br. ex Aiton

カ テ ゴ リ ー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形 態 の 特 徴 : 高さ 1.5 m に達する小低木。葉は 1 小葉からなり、小葉は卵形または楕円形で先端は尖り、葉脈が目立ち、裏面には多くの腺点がある。枝の先および葉腋に集散花序を出す。これは 3~5 花からなり、これがさらに総状について大形の複合花序になる。各々の集散花序の基部には大形で広腎臓形をした葉状の苞があり、集散花序を覆っている。花は淡黄色の蝶形花で旗弁に赤色の脈が目立つ。

分布域 (県外) : 台湾、中国、東南アジア、インド、ヒマラヤ、西インド諸島。

県 内 の 分 布 : 伊江島、宮古島、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 原野や林縁に生える。

生 育 状 況 : 伊江島で 1994~1995 年にかけて行った調査では全く発見できなかった。その他の島でも最近の記録はない。絶滅したと考えられる。生育地である原野の農耕地や放牧地等への開発が進んだことによると考えられる。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 立石庸一*

和 名 : ミヤコジマツルマメ

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Glycine koidzumii* Ohwi

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形 態 の 特 徴 : やや小型の匍匐するつる性多年草。葉は互生し、長い柄があり、3 個の小葉からなる羽状複葉で、小葉は狭楕円形ないし楕円形、円形または倒卵状楕円形で、長さ 1.2~2 cm、裏面に伏毛が生える。9 月、葉腋の長さ 3~8 cm 程の総状花序に数~10 個の花をつける。花は発達した 5 枚の花弁を持った蝶形花で、青紫色、長さ 8 mm ほど。この通常の花 (開放花) の他に閉鎖花もつける。これは葉腋に 1 個だけつくことが多いが、総状花序の下部に 2~数个ずつつくこともある。閉鎖花の花弁はあまり発達せず、萼の外に出ることはない。雄蕊も非常に小さく、もともと 10 本あるうちの 1~3 本ほどしか発達せず、わずかに発達した雄蕊の葯の中で花粉が発芽して、花粉管を隣接する雌蕊の柱頭に

伸ばす。つまり閉じた花の中で自家受粉が行われる。したがって、ミヤコジマツルマメの豆果には開放花由来のものと同鎖花由来のものがあることになる。どちらも線形で扁平なよく似た莢になるが、開放花由来の方は基部に残る萼が幅広いので区別できる。さらに開放花由来の方がやや大きくて種子の数も多く、長さ1.8~2.6 cm、種子数で3~6個、これに対し閉鎖花由来の豆果は長さ1.5~2.4 cm、種子数2~5個である。

- 県内の分布** : 宮古島、来間島、伊良部島、下地島、石垣島（平久保）、黒島。
- 生育環境** : 海岸の海蝕崖肩状部のテラス状の岩場の堆積土壌が薄い風衝地で、高茎の草本や木本の発達の悪いところに生える。
- 生育状況** : 展望台などの設置により、海蝕崖上のもとの生育地は減少しているが、海岸段丘面や海崖上部の公園化によって敷かれた芝生に入り込んで旺盛に広がっているところもある。例えば宮古島の東平安名岬では、1978年頃は岬の先端に通じる車道の周辺には全く見られなかった（新納・川上, 1979）が、車道沿いに芝生が張られてからはそこに入り込んだものが豊富に見られるようになった（立石・新城, 1994）。本種は地面に這いつくように匍匐しているため芝刈りから免れられるからだろう（立石・新城, 1994）。黒島では、2014年に1ヶ所で少数個体が新たに確認された。
- 学術的価値** : 先島諸島の固有種だが、ボウコツルマメ *G. tabacina* などの近縁種との関係を考慮すると、かつてはアジア東南部に広く分布したものが、海崖の風衝地に遭存的に残ったものである可能性も考えられる（立石, 1995）。琉球列島の植物相の成立史を解明する手がかりとなる貴重な植物の一つである。
- 減少の要因** : 公園や展望台などの敷設工事、護岸工事。もともと自生地が限られている。
- 備考** : ミヤコジマツルマメはボウコツルマメによく似ており、これに合一されることがしばしばあった（Hatusima, 1974）。しかし、ボウコツルマメでは多くは線形ないし披針形の小葉だが、楕円形ないし狭楕円形の小葉も混ざり、大雑把に言って2形の小葉が混ざっているように見えるのに対し、ミヤコジマツルマメでは狭楕円形ないし楕円形、円形または倒卵状楕円形で一個体群の中であまり変異がない。これは、ボウコツルマメでは成長とともに展開してくる葉の形が異なることによる。さらに、ミヤコジマツルマメは果実が小さく胚珠も少なく、花卉の色や萼の形態も異なる（立石・新城, 1994；立石, 1995）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献** : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
 新納義馬・川上 勲, 1979. 宮古島東平安名岬の植生. "沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告東平安名岬・狩俣御嶽", 沖縄県, 17-43.
 立石庸一, 1995. 琉球マメ科植物相の再検討—まずはボウコツルマメ・ミヤコジマツルマメ群から. 植物分類・地理, 46: 216-218.
 立石庸一・新城和治, 1994. ミヤコジマツルマメの現況調査と収集. "農林水産ジーンバンク事業の希少生物等の遺伝資源調査収集委託事業成果報告書", 農林水産技術情報協会, 東京, 1-25.
 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相 (Flora). 鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.
- 執筆者名** : 洲鎌栄徳*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名** : **ホソバツルマメ**
- 分類** : マメ科 (APG 科名: マメ科)
- 学名** : *Glycine max* (L.) Merr. subsp. *formosana* (Hosokawa) Tateishi et Ohashi
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴** : つる性の一年草。茎は直径0.5~2 mmと細く、他物に巻きついたり、地面を匍匐したりする。葉は3小葉、小葉は線形~披針形~狭卵形、両面に開出毛があり、頂小葉は長さ2~6 cm、幅0.3~1.5 cm。総状花序は葉腋に出て、長さ1~2 cm、5~12花をつける。花は淡紫色で長さ5 mmほどの蝶形

花。ときに閉鎖花も1又は2~3個が葉腋につく。豆果は線形で種子と種子の間が少しくびれ、開放花由来のものも閉鎖花由来のものも長さ1.4~2 cm、幅3.5~5 mm、褐色の長毛を密生し、熟して乾くと2片に裂開し、2~3個の種子を飛ばす。種子は暗褐色または黒色、楕円形で長さ2.3~4 mm、幅1.8~2.5 mm、厚さ1.2~2.2 mm。

分布域（県外）：台湾北・中部。

県内の分布：沖縄島南部。

生育環境：日当たりのよい野原や道端に生える。

生育状況：沖縄島南部の数ヶ所で1950年代から80年代にかけて散見されていたが、それ以後は確認されていない。

学術的価値：ダイズはツルマメのような野生形から栽培化されたものとされている。ダイズの起源をより明確にするために、ホソバツルマメやツルマメの野生株の変異を明らかにすることは極めて重要である。また、品種改良のための遺伝子の給源とする有用遺伝資源としても重要である。

減少の要因：生育地の開発。もともと自生地が限られている。

備考：ダイズ *Glycine max* (L.) Merr. の野生形の一つで、ダイズの亜種とされる。沖縄島南部のものは従来、やはりダイズの亜種で日本列島から朝鮮、中国、ロシア極東部に分布する野生形のツルマメ subsp. *soja* (Sieb. & Zucc.) Ohashi とされ、本土産が帰化したものと考えられていた(初島・天野, 1994)。しかし、沖縄島南部産は全体に小型で、ツルマメより小葉が小さく幅狭く、花や豆果もやや小さく、台湾北部産のホソバツルマメ *G. max* subsp. *formosana* によく一致する。本土産のツルマメも沖縄島に帰化しているのがまれに見られるが、こちらは全体に大きくて小葉は卵形~狭卵形になり、沖縄島南部産のものとは明らかに異なる。ダイズ・ツルマメ類はミヤコジマツルマメ *G. koidzumii* やボウコツルマメ *G. tabacina* とともにダイズ属に含まれる。しかし、この2種とは異なる亜属 subgenus *Soja* に分類される。また、沖縄島南部から報告され、本レッドデータブック(初版)では未決定種としていたウスバハギカズラ *Galactia tenuiflora* (Klein ex Willd.) Wight & Arn. (= (Walker, 1976) *G. formosana* Matsum.) は、本種の同定違いである。

文献：初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 90.

Tateishi, Y. and H. Ohashi, 1992. Taxonomic studies on *Glycine* of Taiwan. J. Jpn. Bot., 67(3): 127-147.

Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名：立石庸一*・洲鎌栄徳*

和名：ボウコツルマメ

分類：マメ科 (APG 科名: マメ科)

学名：*Glycine tabacina* (Labill.) Benth.

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴：やや小形の匍匐するつる性多年草。葉は3個の小葉からなる羽状複葉で、互生し、長い柄があり、小葉は長楕円状披針形~卵形、広楕円形または線形、茎下部のものは広倒卵形、長さ1~4 cm、幅4~10 mm、脈は明瞭。9月頃、葉腋に出る総状花序は直立し、4~12個の花をつける。花は青紫色~紅紫色の蝶形花で、長さ6~7 mm。さらに、総状花序の柄の基部や葉腋に花卉の退化した小さな閉鎖花を1個ずつつける。普通の花(開放花)が受精してできたものも閉鎖花に由来するものも、豆果はどちらも線形~長楕円形、扁平でよく似ているが、開放花由来の方は基部に残る萼が幅広いので区別できる。さらに開放花由来の方がやや大きくて種子の数も多く、長さ2~3 cm、5~8種子を含む。これに対し閉鎖花由来の豆果は長さ1.2~2.5 cm、種子数4~6個である。

分布域（県外）：沖永良部島、台湾(澎湖諸島)、フィリピン、太平洋諸島、オーストラリア。

県内の分布：伊江島、屋那覇島。

- 生育環境 : 海岸の断崖上の風衝草原および琉球石灰岩上に生える。
- 生育状況 : 伊江島では上記のような環境に点々と生育地が知られるが、このような生育地は展望台や公園などの工事のためにしばしば破壊されている。その一方で、公園や展望台にはられた芝生の中に入りこみ旺盛な繁殖をしているところ（伊江島：湧出、リリーフィールド公園）がしばしばあるのは皮肉である。2016年に屋那覇島の原野にわずかに生育していることが新たに確認された。
- 学術的価値 : オーストラリアから太平洋諸島、台湾（澎湖諸島）そして琉球列島では伊江島、沖永良部島と島伝いに跳び跳びに分布しており、琉球列島の植物相の成因を考察する上で貴重な例である。
- 減少の要因 : 公園や展望台などの敷設工事、護岸工事。
- 備考 : 成長とともに展開してくる葉の形が異なることにより、小葉の形の変異が大きくなり、そのため近縁種との区別が難しく、しばしば混同されることになった（Tateishi & Ohashi, 1992；立石, 1995）。琉球や台湾ではボウコツルマメは近縁のミヤコジマツルマメ *G. koidzumii* Ohwi とともに、いわゆる低島と呼ばれる比較的平坦な島か、山のあるいわゆる高島でも岬などの海崖の上縁の風の吹き抜ける岩場か風衝草原状のところに生えている。このようなところは土壌が薄く、強風が吹くため高茎の草本や木本の生育が押さえられ、匍匐性のボウコツルマメやミヤコジマツルマメの生存が可能であったのだろう。この2種の琉球や台湾における分布は遺存的なものと考えられる（立石, 1995）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)*。**Glycine latifolia*として評価。
- 文献 : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.
Tateishi, Y. and H. Ohashi, 1992. Taxonomic studies on *Glycine* of Taiwan. *J. Jpn. Bot.*, 67(3): 127-147.
立石庸一, 1995. 琉球マメ科植物相の再検討—まずはボウコツルマメ・ミヤコジマツルマメ群から. *植物分類・地理*, 46: 216-218.
新里孝和・高原建二, 2002. 伊江島の植物図鑑. 伊江村教育委員会, 201pp.

執筆 者 名 : 立石庸一*・洲鎌栄徳*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : タシロマメ (タイヘイヨウテツボク、シロヨナ)

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Intsia bijuga* (Colebr.) O. Ktze.

方 言 名 : ビヌツフカバ、フィヌキウカバ、ヤイヤマシタン (石垣島)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 20 m 以上に達する常緑高木。葉は 1~2 対まれに 3 対の小葉からなる偶数羽状複葉で、小葉は広楕円形または楕円形、円頭または凹頭、長さ 7~15 cm、幅 4~9 cm、革質で厚く、光沢がある。5~6 月、枝先に円錐状の花序が頂生し、白色または淡紅色の花をつける。花弁は元々 5 枚だが、1 枚だけが大きく発達し、他の花弁は退化してしまう。豆果は長さ 10~25 cm になり、長楕円形または広線形、扁平で黒褐色に熟し、3~6 個の平たい種子を入れる。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、東南アジア、インド、ポリネシア、オーストラリア、マダガスカル。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 海岸や河口近くの岩が多い斜面に生える。波打ち際近くの砂質の平地や、ときにマングローブ林内にも生える。

生育状況 : 石垣島では 2ヶ所にそれぞれ数十個体と数個体が、西表島では 1ヶ所にわずかな個体が見られるに過ぎない。材が堅く、またシロアリの害に強いいため、建築材や家具材として有用である。そのため古くから伐採・利用され、明治初期までには激減してしまった。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。建築材用の採集。

備 考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Vulnerable (VU)。

執 筆 者 名 : 立石庸一*・前津栄信*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ハマエンドウ

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Lathyrus japonicus* Willd.

方 言 名 : ハマインドー (久米島)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全体に粉白色を帯びる多年草。長い地下茎がある。地上茎の下部は長く地表を這い、上部は斜上し、長さ 1 m に達する。葉は 8~12 個の小葉からなる偶数羽状複葉で、葉軸の先端は巻ひげとなり、小葉は卵形~長楕円形、長さ 1.5~4 cm、托葉は大形で三角状卵形。葉腋に長い柄のある総状花序を出し、3~6 花をつける。花はやや大形の蝶形花で、長さ 2.5~3 cm、紅紫色から後に青紫色に変わる。豆果は長楕円形で長さ 5 cm 前後、黒褐色に熟す。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、与論島、北半球の暖帯~亜寒帯、チリ。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、久米島、与那国島。

生育環境 : 海岸の砂浜あるいは砂地の草原などに生える。

生育状況 : 沖縄島では 1ヶ所で少数個体が確認されているが、その他の島の状況は不明。沖縄県で現在も確実に自生が確認されている唯一の自生地は、現在は良好な状態にあるが、今後活発になることが予想される軍事演習により消失する可能性がある。

学 術 的 価 値 : 北半球では分布域の南限になる。北方系の植物が琉球列島を点々と南下している例として植物地理学的に貴重である。

減少の要因 : 護岸工事や開発など。もともと自生地が少ない。

文 献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : ワニグチモダマ

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Mucuna gigantea* (Willd.) DC.

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : つる性の常緑木本。葉は 3 小葉からなる。小葉は質厚く、頂小葉は卵状長楕円形または卵形、長さ 6~18 cm、先端は急に鋭く尖り、3~5 対の側脈がある。葉腋から長い柄のある散房花序を下垂し、9~30 個の花をつける。花は 1~3 月に開き、淡黄緑色または緑白色で、長さ 3~4 cm。豆果は長楕円形で扁平、長さ 8~14 cm、幅 3.5~5.5 cm、縫合線に沿ってこれを狭むように翼が発達する。種子は 1~5 個含まれるが、扁平で円形、径 2~3 cm、臍は非常に長く、外周の 3/4 に達する。

分布域 (県外) : 奄美大島、徳之島、沖永良部島、小笠原、台湾南部、中国南部 (海南島)、東南アジア、太平洋諸島、

インド、オーストラリア北部。

- 県内の分布 : 沖縄島南部、宮古島、石垣島、小浜島、新城島（上地島）、西表島。
 生育環境 : 海岸林の中の高木に巻きつく。種子が海水に浮いて漂流し、散布される。
 生育状況 : 石垣島や西表島の海岸に比較的多かったが、護岸工事や海岸道路の敷設のため海岸林が伐採され、生育地が減少している。沖縄島南部では、わずかに確認されていた個体は、道路拡張工事で消失し、絶滅したと思われる。宮古島では、数ヶ所で確認されている。
 減少の要因 : 海岸林の開発。送粉者であるオオコウモリの行動を抑制することによる送粉の欠如。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種（2017年）。

- 文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
 Ohashi, H. & Y. Tateishi, 1976. *Mucuna macrocarpa* and *M. gigantea* (Leguminosae) in Japan and Formosa. J. Jpn. Bot., 51: 161-168.
 Tateishi, Y. & H. Ohashi, 1981. Eastern Asiatic species of *Mucuna* (Leguminosae). Bot. Mag. Tokyo, 94: 91-105.
 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相（Flora）. 鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)

- 和名 : **ウチワツナギ**
 分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
 学名 : *Phyllodium pulchellum* (L.) Desv.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴 : 高さ 0.5~2.5 m になる常緑低木。葉は 3 小葉からなる奇数羽状複葉で、頂小葉は卵状楕円形、長さ 6~9 cm、側小葉は小さく、頂小葉の半分の長さにすぎず、有毛の脈が両面ともに目立つ。偽総状花序は各節に 5~6 花を束生し、その基部に葉状の苞がある。苞は長柄の先に 2 個の側小葉と針状に退化した頂小葉をつける。花は白色または淡紫色の蝶形花で、長さ 6~7 mm。果実は節果で、2 小節果からなり、長さ 7~8 mm。
 分布域(県外) : 台湾、中国、東南アジア、インド、スリランカ、ヒマラヤ、オーストラリア北部。
 県内の分布 : 沖縄島、伊江島。
 生育環境 : 山野の草原や林縁に生える。
 生育状況 : 自生地の農耕地や放牧地等へへの開発が進み、沖縄島南部ではまれになった。伊江島からは最近(1994~1995年)の調査ではまったく発見できなかった。
 学術的価値 : 沖縄諸島に跳び離れて分布し、分布域の北限であることから、植物地理学的に重要である。
 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
 備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文献 : 平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. "佐敷町史, 三 自然", 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町, 93-196.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : ヤエヤマシタン
分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
学名 : *Pterocarpus indicus* Willd. f. *echinatus* (Pers.) Rojo (= *Pterocarpus vidalianus* Rolfe)
方言名 : シタン (石垣島)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR) (シタンとして)

形態の特徴 : 高さ 25 m にも達する落葉高木。葉は 5~9 (~11) 枚の奇数または偶数の小葉からなる羽状複葉で、小葉は互生し、広卵形~卵形、卵状楕円形または長楕円形、先端は尖り、長さ 6~15 cm、無毛で光沢がある。4~5 月、総状または円錐状の花序を出し、黄色の蝶形花を多数つける。豆果はほぼ円形で扁平、径 4~5.5 cm、周囲に幅 1~2 cm の薄い紙質の翼を持ち、中央部には長い刺があり、裂開せず、中に含まれる 1 (~2) 個の種子は豆果に包まれたまま発芽する。

分布域 (県外) : フィリピン、インドネシア (セレベス、小スンダ列島、アンボン)。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸から山地の林内に生える。

生育状況 : かつては石垣島に豊富に生育していたらしいが、伐採・利用され、明治初期には僅かになってしまった (立石, 1994)。現在では、胸高直径 10 cm を越え開花・結実能を持った自生個体は、平久保に 4 本、川平に 1 本 (平久保から移植されたものという説もある)、川原に 1 本残っているのが知られていたが、2005 年に野底で 1 本発見され、7 本が確認されている。平久保や川原、野底では豆果がよく着き、実生が多数見られる。最近、石垣島ではシタンヒメヨコバイが大量発生して、自生株はじめ島内に植えられている植栽株の葉から樹液を吸い、そのため葉が黄変、落葉して衰弱しているもの多くなってきた。平久保の個体は、近年樹勢が急激に衰えているので、枯死する恐れがあり、保全対策が必要である。

学術的価値 : 石垣島は約 20 種あるシタン属の分布域の北限である。またヤエヤマシタンは母種のインドシタン *P. indicus* の分布域の中で特異な分布をしており、生物地理学的に、石垣島の自生個体は極めて重要である。

減少の要因 : 心材は暗紫紅色で光沢があつて美しく、赤木、黄木あるいは紅木とよばれ、いわゆる紫檀の 1 種として家具や細工物、楽器などに利用された。この心材を採るために大径木が盛んに伐採された (立石, 1994)。

備考 : ヤエヤマシタンは従来、中国から東南アジアに分布するインドシタン *P. indicus* と同種と考えられてきた。しかし、インドシタンの豆果には刺がなく、花の形態もやや異なるので、ヤエヤマシタンをインドシタンの品種とする説 (Rojo, 1972) を採用した。研究の進展によっては、さらに高次のカテゴリーに位置づける必要が出てくるかもしれない。石垣島平久保の 2 本は国の天然記念物に指定されている。国指定天然記念物 (平久保のヤエヤマシタン) (1972 年)、石垣市指定天然記念物 (野底のヤエヤマシタン自生地) (2006 年)。

保全対策 : 自生個体の探索を進め、自生個体を生育地ぐるみで保護するとともに、島内で植栽されている個体の由来・系統を調べ、その上で島内に生育している個体間の交雑を進め、遺伝子の多様性を高める。

文献 : 新本光孝・新里孝和・仲里長浩・石垣長健, 1999. 亜熱帯沖縄における天然林の資源植物学的研究 (IV) 平久保のヤエヤマシタンについて. 琉球大学農学部学術報告, 46: 169-181.

Rojo, J. P., 1972. *Pterocarpus* (Leguminosae-Papilionaceae) revised for the world. Phaerog. Monograph. 5, Verlag von J. Cramer, Lehre., 119 pp, 14figs.

立石庸一, 1994. ヤエヤマシタンの現況. 沖縄生物学会通信, 54: 3-4.

石垣市教育委員会文化課 (編), 2006. 平久保のヤエヤマシタン—天然記念物保護増殖事業報告書—. 石垣市教育委員会, 105pp.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・前津栄信*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : タデハギ
 分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
 学名 : *Tadehagi triquetrum* (L.) Ohashi
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 高さ 2 m に達する常緑低木または半低木。互生する葉は 1 小葉からなり、葉柄は長さ 1~4 cm あって両側に幅 1~6 mm の翼が発達し、その縁に白い軟毛が疎らに生える。小葉は長楕円形または狭卵形、先端は尖り、長さ 6~20 cm。枝端あるいは葉腋に長さ 15~30 cm の偽総状花序を出し、多数の花をつける。花は紅紫色の蝶形花で、長さ 6~7 mm。果実は長さ 2.5~3.5 cm の節果で、5~8 個の小節果に分かれ、全体が長い軟毛で密におおわれる。
- 分布域(県外) : 台湾、中国、東南アジア、インド、イラン。
 県内の分布 : 石垣島。
 生育環境 : 原野や林縁や疎林の明るい林床に生える。
 生育状況 : 1954 年に石垣島北部の牧場で発見され、琉球新産として報告された(初島・天野, 1958)。もともと多いものではないが、最近の記録はない。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。生育地の開発。
 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Tadehagi rodgeri* として評価。
- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192pp.
- 執筆者名 : 立石庸一*

- 和名 : ホソバフジボグサ
 分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
 学名 : *Uraria picta* (Jacq.) Desv. ex DC.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 多年草または半低木。高さ 1 m に達し、茎や花序などに鉤毛がある。葉は 5~7 (~9) 小葉からなる奇数羽状複葉で、小葉は線形~線状狭卵形(茎下部の葉では頂小葉が楕円形~広卵形など幅の広いものも混ざる)、長さ 7~15 cm、幅 7~15 mm。花は蝶形で青紫色、直立した茎の上部に密集して長さ 15~25 cm ほどの穂状の偽総状花序をつくり、開花前は密生した苞でおおわれる。苞は卵形または狭卵形で長さ 10~15 cm、各々に 2 花を抱くが開花とともに落下する。果実は 3~5 個の小節果で、節のところでジグザグに折れ曲がり、小節果の長さはほぼ 3 mm、幅 2.5 mm。
- 分布域(県外) : 台湾、中国、東南アジア。
 県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島、小浜島。
 生育環境 : 日当たりのよい原野に生える。
 生育状況 : もともとまれなものだったが、最近では西表島 1 ヶ所で確認されたが、その後は西表島では確認されていない。ごく最近になって宮古島の 1 ヶ所で 1 個体の生育が確認されており(佐藤, 2012)、この個体が国内で現在確認される唯一の個体である。自生地はリュウキュウマツを主体とした二次林の林床で、遷移の進行で林床が暗くなり、生育環境が悪化している。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。
 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。石垣市自然環境保全条例保全種

(2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文 献 : 佐藤宣子, 2012. 宮古島で確認されたホソバフジボグサについて. 宮古島市総合博物館紀要, (16): 53-56.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・川上 勲*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : コチョウインゲン

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Vigna adenantha* (G. F. Meyer) Marechal, Mascherpa et Stainier

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : つる性の多年草。葉は互生し、3小葉からなる奇数羽状複葉で長い柄がある。花は11~2月頃、葉腋の長い柄のある総状花序の上部に数個ずつ淡紫色で大形の蝶形花、旗弁は径3~3.5 cmもあり、2枚の竜骨弁は縁同士でくっついて筒状になり、これが長く伸びて更に螺旋に3回転する。果実は線形で扁平の豆果になり、種子は子葉の間にある空隙によって海水に浮く。

分 布 域 (県 外) : 世界の熱帯・亜熱帯地域。

県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島、小浜島。

生 育 環 境 : 低地または海岸の低木林内、ときに山地の林縁に生える。

生 育 状 況 : 石垣島のごく限られた場所では知られていなかったが、最近分布が広がっている。西表島の野原崎付近でも発見された(立石, 1988)。このものは海流によって漂着した種子がもともとも知れない。現在はよく定着している。石垣島でも西表島でも、生育は比較的良好だが、個体群は平地の道端にあるので、道路舗装工事や拡張工事などによって、生育地が破壊されてしまうことがある。2014年に小浜島に大きな個体群があることが判った。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限であり、琉球列島の植物相の成立を考える上で貴重な種である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : Tateishi, Y., 1984. Contribution to the genus *Vigna* (Leguminosae) in Taiwan I. Sci. Rep. Tohoku Univ. ser. 4 (Biology), 38: 335-350.

立石庸一, 1988. コチョウインゲンの台湾と琉球における分布とその要因. 植物研究雑誌, 63: 313-318.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : サクヤアカササゲ

分 類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)

学 名 : *Vigna vexillata* (L.) A. Rich.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形 態 の 特 徴 : つる性の多年草。葉は3小葉からなる奇数羽状複葉。小葉は楕円形で両面に長毛がやや密にはえる。托葉は底着だが基部の両端は耳状にやや伸びる。4~10月、葉腋から長い柄のある総状花序を出し上部に1~2個の大形の蝶形花をつける。花は淡赤紫色で、直径が2~3 cm、2枚の竜骨弁は縁同士が合着して筒状になり、先端はやや長く伸びてくちばし状になって、やや捻れ、右側の竜骨弁に低い距がある。豆果は線形で、長さ6~8 cm、長い毛が密生し、20前後の種子を入れる。

- 分布域（県外）：世界の熱帯・亜熱帯地域。
- 県内の分布：沖縄島北部。
- 生育環境：他の地域では平地から山地の川岸の草地、林縁や道端などかなり幅が広いが、沖縄島では海岸の断崖上部の平坦な風衝草地や、これよりやや内陸側の土壌がよく堆積したところの草地に生える。
- 生育状況：ごく狭い範囲に僅かに見られる。自生地は1ヶ所だけで、数個体が確認されるだけである。観光客や写真撮影者による過度の踏みつけで、生育環境が悪化している。
- 学術的価値：沖縄島の生育地は日本で唯一の産地であり、さらにその個体は典型的な *Vigna vexillata* と比べて、花や豆果、種子が小さいなど、形態もやや異なり、その分類学的取り扱いには検討の余地があることから、極めて重要な個体群である。
- 減少の要因：もともと自生地が限られている。観光客の踏みつけによる自生地の環境変化。
- 備考：自生地は県指定の天然記念物で、景勝地である。この種は分布が広く、また地域的な変異も大きい。そのため、変種として認識されている地域個体群も多い。アカササゲ var. *tsushimensis* Matsum. もその一つで、これは九州から朝鮮半島、中国、台湾に分布する。サクヤアカササゲに比べて、花や果実、種子が大きく、小葉も狭卵形で形が異なる（中島，1968）。
- 備考：国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物（2017年）。
- 文献：中島邦雄，1968. サクヤアカササゲについて. 植物研究雑誌，43: 247-248.
新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭，1985. 恩納村文化財調査報告書第6集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会，64pp.
- 執筆者名：立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲間正和(追補)

- 和名：エノキフジ
- 分類：トウダイグサ科 (APG科名: トウダイグサ科)
- 学名：*Discocleidion ulmifolium* (Mull.-Arg.) Pax et Hoffmann
- カテゴリー：絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴：雌雄異株の常緑の高木または小高木。葉は卵状長楕円形、長さ6.5～10 cm。雄花は葉より長い円錐花序、雌花のつく総状花序は葉より短い。
- 分布域（県外）：奄美大島、徳之島、台湾。
- 県内の分布：伊平屋島、伊是名島、久米島、宮古島、石垣島、西表島。
- 生育環境：伊是名島では、山地のモクタチバナヤブニッケイ林の林縁にショウロウクサギやアカメガシワなどと混生する。しばしば伐採跡地の二次林を構成し、遷移が進行すると衰退し、消失する可能性がある。
- 生育状況：伊是名島では1ヶ所のごく狭い範囲に50個体以下を産する。伊平屋島の自生地はダム建設で消失したと思われていたが、最近道路の拡張による攪乱でかなり回復している。宮古島では2ヶ所で少数個体が確認されているが、史跡や観光地の中にあり、定期的な草刈りでしばしば伐採されている。公園整備や開発により消失する恐れがある。他の島の現状は不明。
- 学術的価値：奄美大島が分布域の北限である。
- 減少の要因：自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。遷移の進行。
- 備考：伊是名村保護植物（1995）。宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献：仲田栄二（編），1995. ふるさとの草木，伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会，119pp.
阿部篤志・仲宗根忠樹，2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査（伊是名島・久米島）. “事

業年報（平成 26 年度）”，沖縄美ら島財団総合研究センター，27-34.

執筆者名： 新城和治*・仲田栄二*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名： リュウキュウダイゲキ

分類： トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)

学名： *Euphorbia liukuensis* Hayata

カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴： 無毛の多年草。茎はよく分枝して枝は地を這うように伸びる。根は太く直根状で長い。葉は対生して小さく、長さ 0.5~1 cm、卵状楕円形。多数の雄花と 1 個の雌花が小さな杯状花序をつくり、これが葉 5~1 腋に集散状につく。

分布域(県外)： 沖永良部島。

県内の分布： 宮古島、伊良部島、与那国島。

生育環境： 原野または乾いた隆起石灰岩上に生える。

生育状況： 与那国島では島内の各地に産し、比較的個体数が多いが、一部の個体は自衛隊基地建設で失われた可能性がある。2005 年に伊良部島で少数個体が確認されているが、最近を観察されない。宮古島では絶滅した恐れがある。

学術的価値： 分布域の北限である。

減少の要因： 自生地の開発。もともと個体数と自生地が少ない。

備考： 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。

執筆者名： 横田昌嗣*・伊波善勇*・川上 勲*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名： ボロジノニシキソウ

分類： トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)

学名： *Euphorbia sparrmanni* Boiss.

カテゴリー： 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴： 常緑の多年草。茎はよく分枝して地上を這い、高さ 10~25 cm になり、全株無毛で粉白色を帯び、傷つけると白い乳液を出す。葉は対生し、卵状楕円形、長さ 1.5 cm 内外、短い葉柄があり、密生する。雄花と雌花が杯状花序をつくり、これが集散状に腋生または頂生する。

分布域(県外)： マリアナ群島、オーストラリア。

県内の分布： 北大東島、南大東島。

生育環境： 日当りの強い海岸の石灰岩の岩場に生える。

生育状況： 南大東島では数ヶ所に多数の個体が生育しているが、北大東島では 2ヶ所に数個体が生育しているだけである。北大東島で現在建設中の道路が建設されると、北大東島の個体群は絶滅する可能性が極めて高い。

学術的価値： ミクロネシア系の植物で、隔離分布し、植物地理学上貴重である。海外のものと形態的に異なることが指摘されており、詳細な研究が必要である。

減少の要因： 海岸の開発。もともと自生地と個体数が少ない。

備考： 南大東島の自生地の一つは、国指定の天然記念物として保護されている。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。

文 献 : 西銘盛光・横田昌嗣, 1996. 南大東島海岸植物群落内における観察所建設の影響調査報告書. 沖縄県教育庁文化課紀要, (12) : 47-62.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : **ダイトウセイシボク**
分 類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)
学 名 : *Excoecaria formosana* (Hayata) Hayata var. *daitoinsularis* (Hatusima) Hatusima
方 言 名 : ハブギ、カブレギ (北大東島)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 高さ 1~2 m の常緑低木。葉は花序付近をのぞき互生、長さ 10 cm 内外、薄い革質で、倒披針形または倒披針状楕円形、托葉は三角形。穂状花序は腋生し、上方に雄花を、下部に 2~3 個の雌花をつける。樹液は有毒。
県 内 の 分 布 : 北大東島、南大東島。
生 育 環 境 : 自然林と二次林の林内に自生する。
生 育 状 況 : 大東諸島の森林は伐採が進み、自生地となる場所はごく限られ、個体数は少ない。
学 術 的 価 値 : 大東諸島の固有変種で、基本変種は台湾とインドシナに産し、植物地理学上貴重である。
減 少 の 要 因 : 森林の開発 (道路の新設・拡張や農地整備・開墾など)。もともと自生地と個体数が少ない。
保 全 対 策 : 島の森林面積を増やし、生育可能な場所を増やす。

文 献 : Hatusima, S., 1956. New or noteworthy plants from the Ryukyu Islands and Formosa. Sci. Bull. Agric. Home Econ. Div., Univ. Ryukyus, Okinawa, (3): 19-33.
横田昌嗣・宮城康一, 1992. 大東諸島の植物相. “ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”, 沖縄県教育委員会, 17-42.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **ヤマアイ**
分 類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)
学 名 : *Mercurialis leiocarpa* Sieb. et Zucc.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 高さ 30~90 cm に達する多年草。根茎は横走し、茎は直立単生する。葉は下部の 2~3 節にはなく、上部に数対が対生し、卵状楕円形で長さ 10 cm 前後、縁に鋸歯がある。雌雄異株。葉腋に長い穂状花序を出し、小さな雄花または雌花をつける。
分 布 域 (県 外) : 本州、四国、九州、種子島、宝島、奄美大島、徳之島、台湾、朝鮮、中国、インドシナ。
県 内 の 分 布 : 伊平屋島、沖縄島北部、西表島。
生 育 環 境 : 山地林内の多湿な半日陰な場所に散発的にみられる。
生 育 状 況 : 沖縄島北部では起伏の険しい古生層石灰岩地の林床に自生するが、個体数は少ない。伊平屋島では 1ヶ所に少数個体を産する。西表島の現状は不明。
減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

執筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : **アカハダコバンノキ**

分 類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)

学 名 : *Margaritaria indica* (Dalzell) Airy Shaw

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 10 m に達する落葉性の小高木。樹皮は赤色を帯び、小枝に皮目が目立つ。葉は 2 列に互生し、長楕円形～楕円状卵形、長さ 4～15 cm、側脈は 6～9 対、葉柄は長さ 6～8 mm、托葉は披針形、長さ 3 mm、やや鋸歯縁。雄花は葉腋または小枝上に生じ、緑色、径 2 mm、小花梗は長さ 4～10 mm。雌花はやや大形、萼片は 4 個。果実は偏球形、鈍三角形、径 8 mm、褐色。

分布域(県外) : 徳之島、台湾、中国南部、インド、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島(北部～中部)、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に自生することが知られるが、まれである。大宜味村大保川と名護市羽地大川の自生地の大半はダム建設により失われたが、移植が試みられている。西表島では今回の調査で 1ヶ所で 1 個体が確認された。石垣島では 1ヶ所で 2005 年に数個体が確認されているが、林道建設による森林の破壊で自生地の環境が損なわれている可能性がある。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限に近い集団である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。ダム建設による水没。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.

新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設 40 周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.

執筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : **ハナコミカンボク**

分 類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)

学 名 : *Phyllanthus leptoclados* Benth. (= *P. liukuensis* Matsum. ex Hayata)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 20～40 cm の無毛の小低木。枝は分枝多く、小枝は有稜で径 1 mm、茎頂に多く、側方の落下枝は長さ 7～10 cm、径 0.5 mm。葉は卵状楕円形、長さ 7～13 mm、幅 4～6 mm。室果は球形、径 3 mm。

分布域(県外) : 中国南部(香港)。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 海岸の石灰岩地の岩隙や林床に生える。

生育状況 : 自生地は 1ヶ所だけに限られている。自生地は保護されているにもかかわらず、開発によって個体数は減少している。今回、沖縄島南部にも生育するとの情報が得られたが、自生地が私有地のため

立入が認められず、確認することができなかった。

- 学 術 的 価 値 : 自生地は沖縄県の天然記念物に指定されている。中国南部にあり台湾にはなく、沖縄に隔離分布し、植物地理学上重要である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備 考 : 香港の *P. leptoclados* から区別して、独立種 *P. liukiensis* とする意見もある (Kurosawa, 2001)。
- 文 献 : Kurosawa, T., 2001. Taxonomy and distribution of Japanese *Phyllanthus* (Euphorbiaceae). *Acta Phytotax. Geobot.*, 52: 11-33.
新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭, 1985. 恩納村文化財調査報告書第 6 集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会, 64pp.
- 執 筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和 名 : ドナンコバンノキ
- 分 類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)
- 学 名 : *Phyllanthus oligospermus* Hayata subsp. *donanensis* T. Kuros.
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 高さ 1.5~2 m の落葉低木。葉は互生、無毛で、小枝に 10~18 個つき、葉身は楕円形、長さ 2~5 cm、幅 1.3~2.7 cm。雌雄同株で、9 月~1 月、葉腋に数~10 花を束生する。雄花は葉腋に 5~7 個つき、萼片は 4~5、楕円形、長さ 1.8~2 mm、黄緑色、雄蕊は (2~) 3~4 本。雌花は葉腋に 1~3 個、萼片は 4~5 個で早落性、楕円形、長さ 1.4~2 mm。果実は球形の液果で、直径 7~8 mm、暗赤色に熟し、小果柄は長さ 2~4 mm で先に行くにしたがって太くなる。種子は 6 個、半月三稜形で長さ約 3 mm、褐色。

- 県 内 の 分 布 : 与那国島 (固有)。
- 生 育 環 境 : 標高 50~100 m の常緑樹林の林縁に生える。
- 生 育 状 況 : 5 ヶ所でそれぞれ僅かな個体が生育するのみである。1970 年代から何回か採集されてはいるが、命名者が 1 ヶ所の生育地で行った 1999 年 11 月の調査では、僅か 7 開花個体を確認したのみであったという (Kurosawa, 2001)。最も個体数が多かった 1 ヶ所では、道路拡幅工事のため、個体数が激減している。他の 2 ヶ所では、近年は確認できない。

- 学 術 的 価 値 : 与那国島に固有で、しかも限られた地点にのみ見られる、個体数も非常に少ないと推定される。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。
- 備 考 : 2001 年に記載された与那国島固有の亜種である。台湾に分布する母亜種 subsp. *oligospermus* は、雄蕊の数が 3~5 個、雌花の萼片が 5~6 個、種子数 4~5 個と異なる。また、日本列島のコバンノキ *P. blexuosus* とは、雄花の萼片が黄緑色で数が多く (4~5 個)、雄蕊の数も多い (コバンノキは雄花の萼片は暗赤色で 4 個、雄蕊が 2 (~3) 個) などで簡単に区別できる (Kurosawa, 2001)。

- 文 献 : Kurosawa, T., 2001. Taxonomy and distribution of Japanese *Phyllanthus* (Euphorbiaceae). *Acta Phytotax. Geobot.*, 52: 11-33.
- 執 筆 者 名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和 名 : シラキ
- 分 類 : トウダイグサ科 (APG 科名: トウダイグサ科)
- 学 名 : *Sapium japonicum* (Sieb. et Zucc.) Pax et Hoffmann

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 4~5 m の落葉小高木。樹皮は灰白色。葉は互生し、広卵形、長さ 5~15 cm、幅 4~10 cm、有柄、上面鮮緑色、下面は帯粉白色。室果は三角状球形、長さ 1 cm くらい。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国中部。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 高地林内に生え、まれである。

生育状況 : 沖縄島北部では数ヶ所で確認されているが、林道建設や森林伐採により自生地が失われている。奄美諸島と比べ、生育不良である。伊平屋島と西表島では極めてまれで、近年は確認されていない。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。

備考 : 奄美諸島と沖縄県のシラキを日本本土のものと区別して、シラキ *S. japonicum* var. *ryukyuense* と呼び、本土産をアツバシラキ *S. japonicum* var. *japonicum* とする意見がある (山崎, 2000)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
山崎 敬, 2000. 琉球のシラキについて. 植物研究雑誌, 75 : 67.

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : タチバナ

分類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)

学名 : *Citrus tachibana* (Makino) T. Tanaka

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 高さ 4 m 内外の小高木。枝条は密生し、腋生する小刺があり、小枝は緑色である。葉柄に狭翼がある。花は腋生または頂生で、単出または双出。果実は扇球形で径 2~2.5 cm、黄熟する。

分布域 (県外) : 本州 (中部以西)、四国、九州、薩摩黒島、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、済州島、台湾 (海拔 100 m 以上)。

県内の分布 : 沖縄島、北大東島、南大東島、石垣島、魚釣島。

生育環境 : 海に近い常緑樹林内に自生する。

生育状況 : 北大東島では数ヶ所、南大東島では数ヶ所にそれぞれ少数個体が知られるだけである。沖縄島、石垣島、魚釣島の現状は不明。魚釣島では野生化したヤギによる食害が心配される。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。野生化ヤギによる食害 (魚釣島)。

保全対策 : 自生地の保全。人工増殖。魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 城間盛男, 2011. 北大東島の植物図鑑. 北大東村教育委員会, 101pp.

西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : ハナシンボウギ
- 分類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)
- 学名 : *Glycosmis citrifolia* (Willd.) Lindl.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 高さ 1~5 m に達する小高木。葉は奇数羽状複葉で変化にとむ。液果は球形、帯紅色または帯赤色、径 1 cm くらい、中に 5 mm の種子 1 個を有する。
- 分布域 (県外) : 台湾、中国南部、東南アジア。
- 県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、黒島、波照間島。
- 生育環境 : 低地林内の石灰岩地に生え、しばしば牧場で見られる。
- 生育状況 : それぞれの島で数ヶ所に少数個体を産するだけである。石垣島では空港建設で一部の自生地が失われたが、移植が試みられている。
- 学術的価値 : 沖縄島が分布域の北限である。
- 減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策 : 生育地の保全。
- 備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城 (上地・下地) 島・黒島の植物相 (Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.
- 執筆者名 : 新里孝和*・伊波善勇*・川上 勲*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名 : ヒレザンショウ
- 分類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)
- 学名 : *Zanthoxylum beecheyanum* K. Koch
- 方言名 : センスルギー (沖縄島: 首里)
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑低木。高さ 1~2 m。小枝の節部と葉柄基部に長さ 1~2 mm の 1 対の刺がある。葉は奇数羽状複葉、葉柄と羽軸に翼がある。室果はやや球形、径 3 mm、種子は黒色で光沢がある。
- 分布域 (県外) : 小笠原 (父島)。
- 県内の分布 : 沖縄諸島、北大東島、南大東島、宮古諸島、八重山諸島。
- 生育環境 : サンゴ礁石灰岩地域の岩上に生える。
- 生育状況 : 大きく成長したものは盗掘され、小さなものが散発的にみられる。
- 学術的価値 : 小笠原、大東諸島、沖縄諸島に隔離分布し、植物地理学上重要である。
- 減少の要因 : 庭木・盆栽用の盗掘。生育地の開発。
- 保全対策 : 生育地の保全。増殖による園芸利用。
- 備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 宮脇 昭・仲田栄二, 2001. 外来植生の在来植生に対する影響と対策の検討. “渡名喜島伝統集落周辺域における自然的歴史的景観の保存活用調査”, (財)日本ナショナルトラスト, 東京, 37-46, 77-

93.

新里孝和・嵩原建二，2002. 伊江島の植物図鑑. 伊江村教育委員会，201pp.

執筆者名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和名 : シマイヌザンショウ
分類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)
学名 : *Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc. var. *okinawense* (Nakai) Hatusima
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 高さ 2~4 m に達する落葉低木。小枝には長さ 3~12 mm の刺がある。葉は長さ 8~20 cm、6~11 対の小葉からなり、小葉は披針形、長さ 1~4 cm。雌雄異株で、枝先に散房花序をつけ、多数の花を集める。花弁は白色、雄花のものは長さ約 1.5 mm、雌花では 2 mm。
分布域(県外) : 奄美大島、徳之島。
県内の分布 : 沖縄島。
生育環境 : 低地の林縁部に生える。
生育状況 : 1ヶ所で確認されているが、極めてまれである。
学術的価値 : 琉球列島の固有変種。
減少の要因 : 低地林の伐採・開発。もともと自生地が限られている。
保全対策 : 里山林の維持。

執筆者名 : 新里孝和*・伊波善勇*

和名 : ササキカズラ
分類 : キントラノオ科 (APG 科名: キントラノオ科)
学名 : *Ryssopterys timoriensis* (DC.) Blume ex Juss.
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年生のつる植物。茎は径 2.5 mm くらい。葉は対生し、卵円形、長さ 10~15 cm、心脚、全縁、葉柄は長さ 3 cm、上部に 2 個の腺体がある。花は散房花序に 15 個ほどつき、径 1.5~2.5 mm、黄色。翼果は半倒卵形、長さ 3 cm、幅 1.5 cm、はじめ絹毛を有す。
分布域(県外) : 台湾(蘭嶼)、フィリピン、マレーシア、カロリン群島(パラオ)。
県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、新城島(下地島)、与那国島、波照間島。
生育環境 : 海岸から山地の林縁に生える。とくに、マングローブ林の構成種となり、河口付近の林縁に生える。
生育状況 : 沖縄島では近年確認されていない。石垣島では 3ヶ所で確認されているが、その内 1ヶ所は開発で消失し、他の 1ヶ所は絶滅寸前である。今回の調査で新城島の 1ヶ所で数個体生育することが初めて確認された。他の島の現状は不明。
学術的価値 : 沖縄島が分布域の北限である。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2017年)。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文 献 : 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城(上地・下地)島・黒島の植物相(Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : コウシュンカズラ

分 類 : キントラノオ科 (APG 科名: キントラノオ科)

学 名 : *Tristellateia australasiae* A.Rich.

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧類 (NT)

形態の特徴 : 常緑のつる性木本。葉は対生し、長楕円状卵形、長さ5~14cm、葉柄の基部に1~2個の蜜腺がある。総状花序は頂生し、長さ5~15cm、花は黄色、径2cm、萼片は5個、花弁は長楕円形~長楕円状卵形、5個、短い距がある。雄蕊は10個、長さ3~4mm、心皮は3個、果実は星状、直径12mm。

分布域(県外) : 台湾、マレーシア、オーストラリア北部、太平洋諸島の熱帯。

県内の分布 : 沖縄島北部、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、小浜島、与那国島。

生育環境 : マングローブの林縁や海岸林に生える。

生育状況 : 宮古島では2ヶ所、石垣島では2ヶ所、西表島では数ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。2014年に小浜島でも確認された。沖縄島、伊良部島、与那国島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。マレーシア要素の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られる。園芸用の採集。

備考 : 海外産の栽培種がしばしば植栽されているが、遺伝的汚染を伴う交雑が起こる可能性があるため、自生地周辺での栽培や植栽には注意が必要である。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : シンチクヒメハギ

分 類 : ヒメハギ科 (APG 科名: ヒメハギ科)

学 名 : *Polygala chinensis* L.

カテゴリー : 絶滅危惧I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧I A類 (CR)

形態の特徴 : 高さ10~20 cmに達する多年草。茎はわずかに粗毛があり、下部で多少分枝する。葉は短い葉柄があり、葉身は楕円形で厚質、全縁。花は葉腋に葉に隠れるようにつき、ほとんど無柄、長さ約2.5 mm、青色または淡紫色。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島、台湾、中国、フィリピン、インドネシア、カロリン群島(パラオ島)。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、久米島、座間味島、沖縄島、石垣島、西表島、小浜島。

生育環境 : 原野やリュウキュウマツの低木林の開けた日当りのよい場所に生える。

生育状況 : 各地とも遷移が進行して草丈の高い草本におおわれ、発育不良である。伊平屋島では2012年に1ヶ所で確認されたが、その後ダム建設工事で絶滅した。伊是名島では数ヶ所に産する。沖縄島では2012年と2017年に2ヶ所で確認されている。石垣島の現状は不明。西表島では数ヶ所で記録されており、そのうち1ヶ所では2005年に生育が確認されているが、他の1ヶ所は、開発により失われた。その他の生育地では、近年は確認されない。2014年に小浜島の1ヶ所で少数個体が確認されている。座間味島では、2015年に1ヶ所で確認されている。

学術的価値 : 奄美大島が分布域の北限である。

- 減少の要因 : 原野の開発。道路工事。もともと自生地が限られている。遷移の進行。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.
Abe, A., T. Nakasone & G. Kokubugata, 2016. Noteworthy collection records of *Lipocarpa microcephala* (Cyperaceae) and *Polygala chinensis* (Polygalaceae) from Kume Island of the Ryukyus, Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B, 42(2): 73-76.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名 : リュウキュウヒメハギ
- 分類 : ヒメハギ科 (APG 科名: ヒメハギ科)
- 学名 : *Polygala longifolia* Poir.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴 : 一年草または二年草。全株無臭。茎はときに疎らに分枝し、高さ 25~40 cm。葉は線形で、長さ 15~20 mm、柄は短い。総状花序は枝に頂生し、長さ 20 cm に達する。花は 2.5~3 mm、2 個の萼片は帯緑白色、3 個の花弁は淡紫紅色で、中央の 1 個は先が 2 裂する。
- 分布域 (県外) : 中国南部、インドシナ、インド、マレーシア。
- 県内の分布 : 久米島。
- 生育環境 : 低木林の明るい林床や原野に生える。
- 生育状況 : 1960 年代以降長らく現状が不明であったが、2005 年頃に 3 ヶ所で少数個体が生育していることが確認された。その後、その内の 2 ヶ所では遷移が進行し、樹木や草本が繁茂して、確認できなくなった。現在も確認できるのは 1 ヶ所だけであるが、やはり遷移の進行により生育環境は悪化し、衰退傾向にある。
- 学術的価値 : 東南アジアに分布し、台湾に分布しておらず、植物地理学上貴重である。久米島は分布域の北限で、国内唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。遷移の進行。コバナヒメハギなどの外来種との競合。
- 保全対策 : 個体数は危機的な状況にあり、人工増殖を検討する必要がある。自生地の遷移の進行を止めるための人為的な管理が必要である。
- 備考 : 久米島で最近確認された自生地では、いずれもハイゴケ *Hypnum plumaeforme* Wils. (山口富美夫博士同定) と混生することが確認されている。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。

- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.
阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名 : ヌルデ
- 分類 : ウルシ科 (APG 科名: ウルシ科)

- 学 名 : *Rhus javanica* L. var. *roxburghii* (DC.) Rehd. et Wilson
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 該当なし
- 形態の特徴 : タイワンフシノキ *R. javanica* の変種で、葉軸に顕著な翼をもつことで異なる。
 分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、満州、中国、台湾、インドネシア、ヒマラヤ。
 県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島。
 生育環境 : 低地や産地の林縁に生える。遷移の進行により、他の樹木に被覆されれば、衰退する。
 生育状況 : 久米島では 2005 年に低地の林縁で数個体が確認され、2016 年の調査でも一部の個体は確認されているが、道路沿いの草刈りで個体の一部が刈り取られていた。沖縄島では 1 ヶ所で少数個体が確認されているだけで、極めてまれである。石垣島では山林のすそ野や海岸近くの平野にまれに生えるが、生育不良で枯死寸前である。
 学術的価値 : 日華区系要素の種で、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : 山地開発、道路工事、伐採。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。
 備考 : 奄美大島ではやや普通に生える。
- 執筆者名 : 立石庸一*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和 名 : リュウキュウツルマサキ
 分類 : ニシキギ科 (APG 科名: ニシキギ科)
 学 名 : *Euonymus fortunei* (Turcz.) Hand.-Mazz. var. *austroliukiensis* (Hatusima) Hatusima
 カテゴリ : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 II 類 (VU)
- 形態の特徴 : 地表を這うか気根で樹幹や岩上によじ登る常緑のつる性低木。枝は緑色で、一・二年枝には細かい凸点がある。葉は対生するが、ときに互生、3 輪生あるいは枝頂に集まる。葉は革質で楕円形ないし長楕円形、長さ 1.5~6 cm、縁に低い鋸歯があり、長さ 0.3~1 cm の葉柄には微細な粒状の突起がある。花は葉腋の集散花序に 7~15 花つき、淡緑色、花弁は 4 個、雄蕊も 4 個、果実は球形の蒴果、直径 5~6 mm。
 分布域 (県外) : 奄美大島、徳之島、朝鮮、中国。
 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 限られた高地の林内に生える。
 生育状況 : 自生地の多くは国立公園または史跡名勝に指定されており、大規模な開発の恐れはなく、特に個体数が減少しているわけではないが、もともと自生地は限られ、個体数が少ない。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
 保全対策 : 生育地の保全を図る必要がある。
 備考 : 基本種ツルマサキと区別しない意見がある。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 執筆者名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : オキナワツゲ
 分類 : ツゲ科 (APG 科名: ツゲ科)
 学 名 : *Buxus liukiensis* (Makino) Makino
 方言名 : ウコールギー (沖縄島: 首里/ Тайワンアサマツゲを含む)

カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴： 常緑の小高木で樹皮は灰白色。1年枝は四角形。葉は対生し、革質、卵状長楕円形、長さ3~6 cm、若葉は緑褐色。雌雄同株。短い総状花序は腋生し、下部に雄花を頂端に雌花をつけ、花弁はなく、萼片が雄花に4個、雌花に6個ある。室果は球形、長さ6 mmほどで光沢がない。

分布域(県外)： 喜界島、沖永良部島、与論島、台湾。

県内の分布： 沖縄島、屋嘉比島、渡名喜島、北大東島、南大東島、宮古島、石垣島、西表島?、与那国島。

生育環境： 大東諸島では石灰岩地の林内に生えるが、石垣島では高地の非石灰岩地の林内に生える。

生育状況： 石垣島では極所的に群生する所があるが、自生地は数ヶ所に限られる。与那国島では1ヶ所に群生し、生育状態は良好であることが2005年に確認されている。大東諸島ではまれである。宮古島では2016年に野生状態で生育することが確認されている(横田ら, 2016)。西表島では石灰岩地1ヶ所で少数個体が確認されているが、野生かどうか不明。他の島の現状は不明。しばしば植栽されるので、本来の自生かどうか判断が難しい場合がある。

減少の要因： 庭木として利用されるための採集。森林の伐採。

備考： 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献： 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7): 115-120.
横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名： 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)・加島幹男(追補)

和名： タイワンアサマツゲ

分類： ツゲ科 (APG科名: ツゲ科)

学名： *Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. subsp. *sinica* (Rehd. et Wils.) Hatusima

方言名： ウコールギー (沖縄島: 首里/オキナワツゲを含む)

カテゴリー： 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴： 高さ6 mに達する常緑の小高木。樹皮は灰白色、小枝は四角形で微毛がある。葉は対生し、全縁で革質、卵状楕円形、長さ1.5~3 cm、幅0.7~1.7 cm、若葉は緑色。雌雄同株。花は淡黄色で、腋生または頂生する花序の下部に雄花が、頂端に雌花がつく。花弁がなく、萼片が雄花に4個、雌花に6個ある。室果はやや球形で長さ約1 cm、光沢がある。

分布域(県外)： 台湾、中国。

県内の分布： 沖縄島北部、魚釣島。

生育環境： 山地の林内に生える。

生育状況： 沖縄島では極めてまれで、数ヶ所で記録されているが個体数は少ない。現在確認されている確実な自生地は2ヶ所のみであるが、その一部は米軍演習地の拡大により伐採された可能性がある。魚釣島の現状は不明。

学術的価値： 隔離分布し、県内の自生地は極限されている。

減少の要因： もともと自生地と個体数が限られている。山地の開発。庭木としての盗掘。野生化ヤギによる食害(魚釣島)。軍事演習による自然林荒廃。

保全対策： 生育地の保全。盗掘防止の啓蒙。魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

備考： 基本亜種のヒメツゲは小形で高さはふつつ1 m以下、枝も細く、葉も小さく、長さ1.5~2 cm。その変種のツゲ(アサマツゲ) *B. microphylla* var. *japonica* (Mull.-Arg. ex Miq.) Rehd. et Wilson はやや大きく、高さ2~3 m、ときに4 m、小枝は太く、葉は長さ1~3 cmで大きく厚い。タイワンアサマツゲはツゲとともに庭木やくしなどの用材として古くから利用されている。

- 文献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.
 新城和治・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・翁長丈子・兼本 正, 1992. 沖縄島北部脊梁山地東側地域における林齢による植生の比較研究. “特殊鳥類等生息環境調査”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 1-122.
 新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設 40 周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.

執筆 者 名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **クサミズキ**

分 類 : クロタキカズラ科 (APG 科名: クロタキカズラ科)

学 名 : *Nothapodytes foetida* (Wight) Sleumer

方 言 名 : ハタブラーキ (石垣島: 川平)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 5 m に達する常緑小高木。枝は灰白色で中空、皮目は著しい。葉は互生、4 cm 内外の葉柄があり、葉身は洋紙質、倒卵状楕円形～楕円形、全縁、長さ 10～17 cm、幅 6～9 cm。頂生の円錐花序に小形の両性花を多数つける。花は淡緑色で直径 3～4 mm。果実は楕円形で長さ 1～2 cm、紫黒色に熟す。

分布域(県外) : 台湾(蘭嶼、緑島)、カンボジア、スリランカ、インド。

県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 海岸林の林内に生える。

生育状況 : 海岸林と低地林に生え、石灰岩地でも非石灰岩地でも見られる。自生地の多くは開発が進んでおり、自生地が減少している。石垣島では数ヶ所、西表島では 4 ヶ所、与那国島では 1 ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。

学術的価値 : フィリピンと台湾本土に分布せず、インド、カンボジアから蘭嶼、緑島、八重山と跳び跳びに分布し、植物地理学的に興味深い種である。分布域の北限。制癌作用のあるカンプトテシンを含むため、原料として利用されている。奄美大島のは最近新種ワダツミノキ *N. amamianus* として区別された (Nagamasu & Kato, 2004)。

減少の要因 : もともと個体数と自生地が限られている。自生地の開発。薬用の採集。

保全対策 : 生育地の保全。御嶽林など可能な限り保存する。増殖による利用の啓発。

備考 : 竹富町特別希少野生動植物種 (2017)。

- 文献 : Nagamasu, H. & M. Kato, 2004. *Nothapodytes amamianus* (Icacinaceae), a new species from the Ryukyu Islands. *Acta Phytotax. Geobot.*, 55: 75-78.

執筆 者 名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **ヤエヤマハマナツメ**

分 類 : クロウメモドキ科 (APG 科名: クロウメモドキ科)

学 名 : *Colubrina asiatica* (L.) Brongn.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

- 形態の特徴** : 常緑のつる性または斜上する低木。葉は互生し、卵形、3行脈があり、長さ5~9 cm、幅2~6 cm、葉柄は長さ8~12 mm。集散花序は腋生し、長さ1 cm、花は黄緑色を帯び、径4 mm、萼は5裂し、花弁は5個、三角形、雄蕊は5個。室果は球形、径7~9 mm。
- 分布域(県外)** : 沖永良部島、台湾、中国南部、インド、インドネシア、フィリピン、ポリネシア、オーストラリア、アフリカ。
- 県内の分布** : 宮古島、伊良部島、石垣島、小浜島、西表島、黒島、竹富島。
- 生育環境** : 海岸林の林縁に生える。
- 生育状況** : 宮古島では数ヶ所で、伊良部島では2015年に1ヶ所で確認されている。石垣島と西表島ではそれぞれ数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少ない。黒島では狭い範囲であるが、多くの個体がある。竹富島では1ヶ所で、小浜島では1ヶ所で少数個体が確認された。自生地は海岸であるので、開発により容易に消失する恐れがある。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。
- 備考** : 宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献** : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.
山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城(上地・下地)島・黒島の植物相(Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.
- 執筆者名** : 横田昌嗣*・小林史郎*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和名** : **クニガミクロウメモドキ**
- 分類** : クロウメモドキ科 (APG科名: クロウメモドキ科)
- 学名** : *Rhamnus calcicola* Hatusima
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 高さ1.5 mの落葉低木。1年枝はやや対生、帯褐色で多少稜があり、先端に刺がある。葉は対生、長さ3~5 cm、幅1.5~2 cm。果実は倒卵形、長さ5 mmくらい。
- 県内の分布** : 沖縄島北部。
- 生育環境** : 海岸に面した琉球石灰岩地に生える。
- 生育状況** : 生育地は1ヶ所だけで、近年は確認されておらず、ほとんど絶滅状態と思われる。
- 学術的価値** : ヒメクロウメモドキ *R. kanagusukii* Makino とリュウキュウクロウメモドキ *R. liukuensis* (Wilson) Koidz. の雑種起源と考えられている。沖縄島の固有種である。
- 減少の要因** : 盆栽用の盗掘。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考** : 自生地は県指定の天然記念物である。
- 文献** : Hatusima, S., 1956. New or noteworthy plants from the Ryukyu Islands and Formosa. Sci. Bull. Agric. Home Econ. Div., Univ. Ryukyus, Okinawa, (3): 19-33.
新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭, 1985. 恩納村文化財調査報告書第6集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会, 64pp.
- 執筆者名** : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名** : **ヒメクロウメモドキ**
- 分類** : クロウメモドキ科 (APG科名: クロウメモドキ科)

- 学 名 : *Rhamnus kanagusukii* Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 高さ 3 m に達する落葉小低木。小枝は灰紫色で長枝の先端は刺となる。葉は対生し、長楕円形、長さ 1~4 cm、幅 0.3~1.2 cm、ほぼ全縁、側脈は 2~3 対。雌雄異株。花は葉腋に単生し、淡緑白色、花梗は長さ 5 mm くらい、萼片は 4 個、長さ 1.5 mm。果実は広倒卵形、長さ 3 mm で暗赤色に熟す。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 海岸近くの石灰岩の崖に生える。
- 生育状況 : 自生地は 1ヶ所だけで、個体数は極めて少ない。2011 年と 2014 年にそれぞれ別の場所で複数個体が確認されている。
- 学術的価値 : 沖縄島の固有種である。本種が台湾にも産するという意見があるが (Liu *et al.*, 1993)、台湾のものとは別種とする意見もあり、分子系統学的な研究が待たれる。
- 減少の要因 : 盆栽用の盗掘。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 自生地は県指定の天然記念物である。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。
- 文献 : 新納義馬・新城和治・宮城康一・日越国昭, 1985. 恩納村文化財調査報告書第 6 集 沖縄県指定天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告. 恩納村教育委員会, 64pp.
 Liu, Y.-C., F.-Y. Lu, C.-H. Ou & C.-M. Wang, 1993. Rhamnaceae. "Flora of Taiwan, ed. 2, Vol. 3", Editorial Committee of the Flora of Taiwan, National Taiwan University, Taipei, 680-695.
- 執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・比嘉清文(追補)

- 和 名 : ハマヤブガラシ
 分類 : ブドウ科 (APG 科名 : ブドウ科)
 学 名 : *Cayratia maritima* B.R.Jackes
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 長さ数 m になる常緑のつる性草本。巻きひげは 2~3 裂し、無毛。葉は 3 小葉からなり、頂小葉は卵形~菱形、長さ 2~5cm、幅 1.5~2.5cm、側小葉は斜形、上面は無毛、下面は脈上を除いて無毛、小円鋸歯縁~鋸歯縁、葉柄は長さ 2~4cm、托葉は 2 個。集散花序は腋生し、3~5 個に分枝する。花は淡黄色、果実は偏球形、黒熟する。
- 分布域(県外) : 台湾(緑島)、インドネシア、ニューギニア、オーストラリア。
- 県内の分布 : 新城島(上地島)。
- 生育環境 : 海岸林の林縁や疎林内に生え、樹上に這い上がる。
- 生育状況 : 自生地は 1ヶ所のみで、局所的には旺盛に繁茂しているが、個体数は極めて少ない。
- 学術的価値 : 比較的最近記載された種で (Jackes, 1987)、分布域の北限であり、国内で唯一の自生地である。本種の分布域は、南半球に集中しており、北半球では台湾と新城島だけに産し、著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。放牧されたウシやヤギによる食害。
- 備考 : 山崎ら (2016) では、本種を外来種としているが、これは誤りであり、野生種と考えられる。
- 文献 : Hsu, T.-W., C.-S. Kuoh, 1999. *Cayratia maritima* B.R.Jackes (Vitaceae), a new addition to the flora of Taiwan. Bot. Bull. Acad. Sin. 40: 329-332.
 Jackes, B.R., 1987. Revision of the Australia Vitaceae, 2. *Cayratia* Juss. *Austrobaileya*, 2(4): 365-379.
 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城(上地・下

地) 島・黒島の植物相 (Flora) . 鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

執筆 者 名 : 横田昌嗣・仲宗根忠樹

和 名 : ツタ

分 類 : ブドウ科 (APG 科名: ブドウ科)

学 名 : *Parthenocissus tricuspidata* (Sieb. et Zucc.) Planch.

カテ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 落葉性のつる性木本。葉の反対側からでる巻きひげは枝分れして先端に吸盤がある。葉は長い柄があつて互生し、3つに深く切れこみ、短枝のものでは3裂、長さ、幅とも6~10 cm。短枝の先に散房花序をだし小形の黄緑色の花を多数つける。液果は球形で紫黒色に熟す。

分 布 域 (県 外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、朝鮮、中国。

県 内 の 分 布 : 魚釣島。

生 育 環 境 : 山地の崖に生える。

生 育 状 況 : 魚釣島では野生化したヤギが多く、食害が進んでいるものと思われる。

学 術 的 価 値 : 北海道から九州まで分布するものが、琉球列島では魚釣島のみ分布する点で植物地理学的に興味深い。

減 少 の 要 因 : 野生化ヤギによる食害。もともと自生地と個体数が限られている。

保 全 対 策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

文 献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島島の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.

執筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ナガバコバンモチ

分 類 : ホルトノキ科 (APG 科名: ホルトノキ科)

学 名 : *Elaeocarpus multiflorus* (Trucz.) F. Villar

カテ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 常緑高木。葉は枝先に集まってつき、葉柄は長さ2~4 cm、葉身は倒卵状楕円形、長さ7~12 cm、幅3~6 cm。葉腋から長さ5~9 cmの総状花序を出す。核果は楕円形で長さ1.5 cm、碧色に熟する。

分 布 域 (県 外) : 台湾 (蘭嶼)、フィリピン。

県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 山地の陰湿な常緑広葉樹林に生える。

生 育 状 況 : 西表島では各地に点在するが、個体数は少ない。石垣島ではまれである。いずれも成熟個体は少なく、確認の多くは幼木である。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の産地である。

減 少 の 要 因 : 森林の伐採。ゴルフ場建設。もともと個体数が少ない。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和名 : アツバウオトリギ
 分類 : シナノキ科 (APG 科名: アオイ科)
 学名 : *Grewia biloba* G. Don
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1 m 未満の小低木で、ときに匍匐する。葉は鋸歯があり、菱状倒卵形から卵形ときに円形、長さ 1.5~15 cm、幅 1~7 cm、星状軟毛がある。葉腋に散形花序を出し、数個の花をつける。萼片は 5 枚、長さ 4~8 mm、花弁は 5 枚で目立たない。雄蕊は多数。果実は 4 つの分果にわかれるが、そのうちの 1~3 個は熟さないことがある。分果は扁球であり、熟すると暗褐色。

分布域 (県外) : 台湾、中国、朝鮮。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸近くの風衝地に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみで、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 国内で唯一の生育地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

保全対策 : 本種の自生地は観光地であり、遊歩道の脇に自生しているため、公園として整備・管理する場合、刈り取られることの無いよう配慮が必要である。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。ヒシバウオトリギ *G. rhombifolia* Kanehira et Sasaki とする意見もある (山崎, 1986, 1989)。石垣島では、これら 2 種は雌雄異株の可能性があり、今後分類学的に詳しく調査する必要がある。国内希少野生動植物 (2018 年)。

文献 : Hatusima, S., 1987. New or noteworthy plants from Japan. *J. Phytogeogr. Taxon.*, 35(2): 63-68.
 山崎 敬, 1986. 高等植物分布資料 (117), ヒシバウオトリギ. 植物研究雑誌, 61 : 73.
 山崎 敬, 1989. ウオトリギ属. “日本の野生植物木本”, 佐竹義輔他 (編), 平凡社, 東京, 67.

執筆者名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ラセンソウ
 分類 : シナノキ科 (APG 科名: アオイ科)
 学名 : *Triumfetta japonica* Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 60~120 cm になる一年草。葉は長さ 4~13 cm、幅 1.5~6 cm、先は長くとがり、基部は円心形、質薄くて、表裏脈上に粗い毛があり、1~4 cm の柄がある。花は葉腋に数個ずつつき、黄色で直径約 5 mm。萼片は 5 個、長披針形で先端に突起がある。花弁は 5 個、倒卵状長楕円形で萼片より短い。雄蕊は 10 個。果実は球形で直径 6~7 mm、かぎ状になった刺毛が密生し、動物や衣服などにくっついて散布される。

分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、朝鮮、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 道端や畑地に生える。

生育状況 : 沖縄島北部で 1939 年 10 月に採集された (Sonohara *et al.*, 1952 ; Walker, 1976) のが唯一の記録で、現状は全くわからない。

文 献 : Sonohara, S., S. Tawada, T. Amano and E. H. Walker, 1952. Flora of Okinawa. US Civil Administration of the Ryukyu Islands, Naha, 237pp.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執 筆 者 名 : 立石庸一*

和 名 : ハテルマカズラ (コンペイトウヅルを含む)

分 類 : シナノキ科 (APG 科名: アオイ科)

学 名 : *Triumfetta procumbens* G. Forst.

カ テ ゴ リ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 地を這って広がる常緑低木。茎全体に星状毛が密生する。葉は互生、葉柄は長さ1~3.5 cm、葉身は広卵形または卵円形、ときに浅く3裂し、長さ1~3 cm、幅1~4 cm、上面は星状毛を散生し、下面は星状毛を密生する。葉腋またはその反対側から長さ1~2 cmの花序を伸ばし、1~3花をつける。花弁は黄色で5枚、倒長卵形、長さ8~10.2 mm。果実は球形、径1.0~1.2 cm、有毛の刺が全面に多数ある。葉の下面と果実の刺の毛の少ないものは、変種コンペイトウヅル (ケナシハテルマカズラ) var. *repens* (Blume) Hatusimaとして区別される。

分 布 域 (県 外) : 硫黄島、フィリピン、ポリネシア、マイクロネシア、メラネシア、インド洋、マレーシア、オーストラリア、ココス島、セイシェル諸島。

県 内 の 分 布 : 慶良間諸島 (慶伊瀬島)、宮古島、多良間島、水納島、石垣島、黒島、新城島 (上地島)、西表島、与那国島、波照間島。変種コンペイトウヅルは伊良部島、多良間島から記録されている。

生 育 環 境 : 海岸の砂浜に生え、ときに隆起サンゴ礁の岩上に生えることがある。

生 育 状 況 : 慶伊瀬島では1894年 (明治26年) に確認されているものの (Makino, 1896; Hatusima, 1987)、その後100年以上確認されていなかったが、2016年の調査で多数の個体が生育していることが確認された。宮古島では2008年に1ヶ所で、多良間島1ヶ所と水納島1ヶ所では2009年、新城島 (上地島) 1ヶ所では2013年、波照間島1ヶ所では2015年に確認されている。石垣島では2ヶ所で記録されているが、今回の調査では発見できなかった。黒島、西表島、与那国島の現状は不明である。ケナシハテルマカズラは、2009年に多良間島の1ヶ所で確認されたが、伊良部島では発見できなかった。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。マレーシアやマイクロネシアに関わりのある種であり、植物地理学上貴重である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自然海岸 (砂浜) の減少。

備 考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。竹富町希少野生動物植物種 (2017年)。

文 献 : Makino, T., 1896. Mr. Hisashi Kuroiwa's collection of Liukiu plants. Bot. Mag. Tokyo, 10(114): 55-60.

Hatusima, S., 1987. New or noteworthy plants from Japan. J. Phytogeogr. Taxon., 35(2): 63-68.

初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告 (宮古群島)”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 31-70.

知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城 (上地・下地) 島・黒島の植物相 (Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29) : 121-128.

執筆者名 : 新城和治*・立石庸一*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・佐藤宣子(追補)

和名 : センカクトロロアオイ

分類 : アオイ科 (APG 科名: アオイ科)

学名 : *Abelmoschus moschatus* (L.) Medik. var. *betulifolius* (Mast.) Hochr.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 1.5 m になる直立する一年草。葉は互生して長柄があり卵状円形～卵形、長さは 6～15 cm、様々な程度に 3～5 (～多) 裂する。花は大形で直径 10 cm くらい、花弁は 5 個、黄色で基部内面は紫色。果実は長楕円状卵形、長さ 5～7 cm、剛毛が密生する。

分布域(県外) : インドシナ、マレーシア。

県内の分布 : 魚釣島、西表島?。

生育環境 : 海岸の低木林内に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみで、もともと個体数は少ない上、魚釣島では野生化したヤギが多く、食害が進んでいるものと思われ、絶滅が危惧される。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 野生化ヤギによる食害。もともと個体数が少ない。

保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

備考 : リュウキュウトロロアオイの変種で、葉や茎に毛が少なく、果実に剛毛が多く、中央が太くふくらんでいる点で基本変種と区別されるが、分類学的な再検討が必要である。よく似たものは、最近西表島でも確認されている。基本変種は台湾、インドシナ、インド、マレーシア、太平洋諸島に広く分布する。

文献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.

新納義馬・新城和治, 1980. 植物調査. “尖閣諸島調査報告書, 学術調査編”, 沖縄開発庁, 155-244.

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

和名 : コショウノキ

分類 : ジンチョウゲ科 (APG 科名: ジンチョウゲ科)

学名 : *Daphne kiusiana* Miq.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1 m に達する常緑小低木で、かさ状の樹冠をつくる。樹皮は暗褐色。葉は互生し、柔らかい革質で光沢があり、倒披針形、長さ 4～16 cm、幅 1.5～4 cm。雌雄異株で、頭状花序は前年枝の先端につき、10 花ほどをつける。花は白色、萼筒は外面に細毛があり、長さ 8～10 mm、先は 5 裂する。液果は球状楕円形、橙赤色に熟し、径 1 cm、かむと辛い。

分布域(県外) : 本州 (関東南部および京都府以西)、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 伊平屋島、魚釣島。

生育環境 : 山頂部の明るい林床に生える。

生育状況 : 伊平屋島ではこれまで 1 ヶ所でのみ確認されていたが、2017 年に新たに 1 ヶ所で確認された。いずれの自生地でも個体数は少ない。魚釣島の現状は不明で、魚釣島では野生化したヤギによる食害が進んでいる可能性が高い。

学 術 的 価 値 : 琉球列島では隔離分布し、植物地理学上貴重である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。野生化ヤギによる食害（魚釣島）。

保 全 対 策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

文 献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物（鹿児島植物同好会誌）, (11) : 62-66.

執 筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : **アキグミ（マルバアキグミ）**

分 類 : グミ科（APG 科名：グミ科）

学 名 : *Elaeagnus umbellata* Thunb.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー： 該当なし

形 態 の 特 徴 : 4～5 m に達する落葉低木。若木の枝に刺がある。葉は楕円形、長さ 3～7 cm、全縁、下面に銀色の鱗片を密布する。花は葉腋に単生または数個束生し、淡黄色で長さ 1.2 cm。果実はやや球形、長さ 6～8 mm で赤熟する。

分布域（県外） : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国。

県 内 の 分 布 : 栗国島。

生 育 環 境 : 風衝地の低木林内に生える。

生 育 状 況 : ごく限られた地域に生え、個体数は少ない。

学 術 的 価 値 : 県内では栗国島だけに分布する希産種である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。生育地の遷移の進行による環境の変化。

保 全 対 策 : 自生地の保全。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種（2017 年）。

文 献 : 天野鉄夫, 1981. 栗国島植物目録. 栗国村教育委員会, 39pp.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ（栗国島・渡名喜島）. 日本植物園協会誌, (51) : 80-85.

執 筆 者 名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : **クスドイゲ**

分 類 : イイギリ科（APG 科名：ヤナギ科）

学 名 : *Xylosma congestum* (Lour.) Merr.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー： 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑の小高木。若木では小枝が鋭い刺に変化する。樹皮は暗褐色で鱗片状に剥離する。葉は長さ 4～8 cm、幅 3～5 cm、卵形～長楕円状卵形、葉柄は長さ 2～5 mm。雌雄異株で、雌花、雄花とも黄緑色で小さく、花弁を欠く。液果は球形、径 5 mm。

分布域（県外） : 本州（近畿以西）、四国、九州、台湾、朝鮮、中国、フィリピン、インドシナ。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島、魚釣島。

生 育 環 境 : 海岸や山地の常緑広葉樹林に生える。

生 育 状 況 : 石垣島の標本（初島住彦 No. 33365 ; 池田豪憲 No. 5109）が琉球大学理学部の標本庫（RYU）に、魚

釣島の標本（多和田眞淳 No. 17）が国立科学博物館（TNS）に所蔵されているが、近年は確認されておらず、現状は不明。他の島の現状は不明である。

- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。野生化ヤギによる食害（魚釣島）。
 備考 : 上記の標本では、本種の特徴である棘が発達しておらず、また花や果実もつけていないことから、同定に疑問が残る。今後状態の良い標本を用いて、再検討する必要がある。

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : アマミスミレ
 分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)
 学名 : *Viola amamiana* Hatusima
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : ごく小型の常緑多年草で、地下茎は長く地中を横走して分枝し、地上茎は長さ 2~8mm、5 葉程度をロゼット状につける。葉は卵形~卵状楕円形、長さ 5~7mm、幅 4~5mm、無毛、葉柄は長さ 1cm。花は乳白色、下側の花弁 3 枚の中央には紫色の条が入る。

- 分布域 (県外) : 奄美大島。
 県内の分布 : 沖縄島北部。
 生育環境 : 常緑樹林内の水がしたたり落ちる陰湿な崖に生える。
 生育状況 : 自生地は 1ヶ所のごく狭い範囲に限られている。園芸目的の採集により、発見当時と比べると個体数が半減している。
 学術的価値 : 沖縄島は分布域の南限である。奄美大島の個体群とは、葉の上面が無毛であることで明瞭に異なっている。本種はヤクシマスミレ類に近縁と考えられていたが (浜, 1975)、分子系統学的な研究によりツクシマスミレ類に最も近縁であることが明らかになっている (Nakamura *et al.*, 2015)。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。
 備考 : IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

- 文献 : 浜栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社.
 Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, C.-J. Huang, C.-I. Peng & M. Yokota, 2015. Phylogeny and biogeography of the *Viola iwagawae-tashiroi* species complex (Violaceae, section *Plagiostigma*) endemic to the Ryukyu Archipelago, Japan. *Pl. Syst. Evol.*, 301: 337-351.

執筆者名 : 横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文

- 和名 : ヤクシマスミレ
 分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)
 学名 : *Viola iwagawai* Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小型の常緑多年草で、地下茎は短く、地中を浅く横走する細くて長い根を多数出し、その所々から新個体を生ずる。葉は根生し、長い柄があり、葉身は長さ幅とも 0.4~1.4 cm、三角形から心臓形まで変化にとみ、基部は心形。花は白く、淡紫色の条が入る。

- 分布域 (県外) : 屋久島、奄美大島、徳之島。
 県内の分布 : 沖縄島北部。

- 生育環境 : 屋久島や奄美諸島では山地のコケの多い陰湿な林床に見られるが、沖縄島では山地の溪流沿いの岩上に群生する。
- 生育状況 : 沖縄島北部(国頭村、東村、大宜味村)の6河川にだけ生育し、そのうち1河川ではダム建設により絶滅した。他の地域でもダム建設により自生地が多くが水没し、残されている個体数は極めて少ない。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。琉球列島でのヤクシマスミレ類とヤエヤマスミレ類の分子系統地理学的な研究(Nakamura *et al.*, 2015)により、島嶼間の分岐年代や進化の過程がかなり明らかになっており、沖縄島北部のものは、屋久島や奄美諸島のものと遺伝的にやや異なることが判っている。
- 減少の要因 : ダムの建設。森林伐採。もともと自生地と個体数が限られる。
- 備考 : ヤエヤマスミレ、イリオモテスミレ、イシガキスミレはよく似ており、連続した変異が有り区別しにくい場合がある。

- 文献 : 浜 栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
- 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
- Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, C.-J. Huang, C.-I. Peng & M. Yokota, 2015. Phylogeny and biogeography of the *Viola iwagawae-tashiroi* species complex (Violaceae, section *Plagiostigma*) endemic to the Ryukyu Archipelago, Japan. *Pl. Syst. Evol.*, 301: 337-351.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : シマジリスミレ
- 分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)
- 学名 : *Viola okinawensis* Nakajima et Hama
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。有茎で、葉は長さ1~2.5 cm、幅1~2 cm、光沢が有り卵形心臟形~円状心臟形、基部は心脚で側辺部が重なって巻き込んでいるものが多い。花色は淡紫色から白色。柱頭は円柱形で、先端は有毛。
- 県内の分布 : 沖縄島南部。
- 生育環境 : 内陸の切り立った石灰岩のやや日陰の壁の窪や割れ目に生える。
- 生育状況 : 限定された2ヶ所に分布するが、1ヶ所では生育が確認されたものの、他の1ヶ所は立入をすることができず、現状不明。近隣に運動公園や神社ができており、また新たに自衛隊施設の拡張計画もあり、生育環境が悪化している。
- 学術的価値 : 沖縄島の固有種である。近縁種は日本の中部以北に分布するエゾノタチツボスミレやアイヌタチツボスミレである。
- 減少の要因 : 地域の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 本種は正式には記載されておらず、裸名のままである。
- 文献 : 浜 栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社, 東京, 280pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オリヅルスミレ**

分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)

学名 : *Viola stoloniflora* Yokota et Higa

カテゴリー : 野生絶滅 (EW) 環境省カテゴリー: 野生絶滅 (EW)

形態の特徴 : 小形の常緑多年草で、数個の葉を根際から出す。葉柄は長さ 1 cm ほどで微毛を密生し、葉身は円心形で長さ 1 cm 内外になり、裏面の脈上に細毛がある。花は白色で 2 月から 4 月に開く。長いストロンを出し、新個体や花をつける。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 溪流沿いの土手のコケに混じって生える。辺野喜川の自生地ではヤクシマスミレに比べ水の流れに浸ることなくやや高いところに位置していた。

生育状況 : 基準産地の辺野喜川では絶滅。1994 年に新たな自生地 (約 20 個体) が沖縄島北部より発見されていたが、その後は個体を全く確認することができない。自然災害により崖崩れで消失したか、盗掘にあった可能性がある。

学術的価値 : 日本のスミレの中で特殊な形態をもつ東南アジア系のウラジロスミレ亜節の種。沖縄島の固有種である。

減少の要因 : ダムの建設。もともと個体数は極めて少なく、山地の湿った夏でも涼しい環境でしか生育できない。

備考 : 1994 年に発見された個体群は、葉や花序が無毛で、典型品とは明らかに異なる。

文献 : Yokota, M., S. Higa, H. Yoshioka & K. Shimabuku, 1988. *Viola stoloniflora* (Violaceae), a new species from the Ryukyus. Bot. Mag. Tokyo, 101: 1-8.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **イシガキスミレ**

分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)

学名 : *Viola tashiroi* Makino var. *tairae* Nakajima

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : ヤエヤマスミレによく似るが、葉は三角状で基部が切形で、葉縁はほとんど無毛である点で異なる。花はヤエヤマスミレより小型で、ヤクシマスミレにやや近い。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 溪流の岩上に生える。

生育状況 : 基準産地の 1 河川のごく限られた地域だけで生育が確認されており、個体数は少ない。盗掘品が販売されており、絶滅が危惧される。

学術的価値 : 石垣島の 1 河川の固有変種。石垣島の他の河川にはヤエヤマスミレが自生する。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。

備考 : ヤエヤマスミレとは、葉の形態以外に柱頭の形態でも異なる。遺伝的にはヤエヤマスミレと区別することができ、沖縄島のヤクシマスミレとヤエヤマスミレの中間的な位置にあることが判っている (Nakamura *et al.*, 2015)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

文献 : 浜 栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社, 東京, 280pp.

中島邦雄, 1970. 琉球植物覚書 (三). 北陸の植物, 18 (1) : 7-14.

Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, C.-J. Huang, C.-I. Peng & M. Yokota, 2015. Phylogeny and biogeography of the *Viola iwagawae-tashiroi* species complex (Violaceae, section *Plagiostigma*) endemic to the Ryukyu Archipelago, Japan. *Pl. Syst. Evol.*, 301: 337-351.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : オキナワスマレ

分類 : スミレ科 (APG 科名: スミレ科)

学名 : *Viola utchinensis* Koidz.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。有茎種で、葉は厚く光沢があり、よく似たシマジリスミレに比べ、葉面は平滑で基部の側片は重ならないことが多い。花色は淡青紫色が多いが、白色に近い個体もある。柱頭は3角形で、無毛。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 海岸の波打ち際から崖の上までの直射光のあたる石灰岩の割れ目や窪みに生える。

生育状況 : 極めて限定された地域にのみ分布し、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 沖縄島の固有種である。国内産ではオリヅルスミレと共にウラジロスミレ亜節に属し、数少ない東南アジア系の種である。

減少の要因 : 採集による。もともと自生地が限られている。

備考 : 自生地は県指定の天然記念物である。IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

文献 : 浜 栄助, 1975. 原色日本のスミレ. 誠文堂新光社, 東京, 280pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*

和名 : シマバラソウ (ヤンバルミゾハコベ)

分類 : ミゾハコベ科 (APG 科名: ミゾハコベ科)

学名 : *Bergia serrata* Blanco

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎は直立し、高さ 10~30 cm に達する。葉は線形または披針形で、長さ 1~2 cm、鋭頭、漸尖脚、無柄である。花は葉腋に輪生状に束生する。

分布域 (県外) : 九州、与論島、台湾、熱帯アジア、オーストラリア、アフリカ。

県内の分布 : 伊是名島、沖縄島。

生育環境 : 水田に生える。

生育状況 : 伊是名島の稲作田 (湿田、乾田) に群生しているのが 1992 年に観察された後、永らく確認されていなかったが、2016 年に再確認された (赤井, 2017)。沖縄島の現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発 (農地の基盤整備で、水田がサトウキビ畑に転化されている)。

文献 : 赤井賢成, 2017. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 II. “事業年報 (平成 28 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 40-42.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : コウトウシュウカイドウ

分類 : シュウカイドウ科 (APG 科名: シュウカイドウ科)

学名 : *Begonia fenicis* Merr.

方言名 : スン (西表島)、パッパ (与那国島)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這い、マルヤマシュウカイドウ *B. formosana* のように立ち上がらない。葉は腎形で、葉緑に細かい鋸歯があり、大きな欠刻がない。花は淡桃色～白色。

分布域(県外) : 台湾(蘭嶼、緑島)、フィリピン。

県内の分布 : 石垣島?、西表島、与那国島。

生育環境 : マルヤマシュウカイドウに比べ低地に分布し、やや乾いた砂岩や琉球石灰岩の岩上に生える。与那国島では直射光の当たる風の強い崖にも生える。

生育状況 : 自生地は疎らに点在し、小群落を形成する。西表島ではやや多く、すぐに絶滅する恐れはないが、与那国島では数ヶ所で確認されている。石垣島に産することは既に知られているが(初島・天野, 1994)、石垣島での生育は確認されないままであった。今回の調査で石垣島の1ヶ所に生育すること確認されたが、人家の近くで植栽または逸出の可能性がある。

学術的価値 : 分布域の北限である。この種の分布域全体で遺伝的多様性を調べた結果、西表島と与那国島の遺伝的多様性が最も高いことが判っており、熱帯系の植物の最終氷期のレフュジアとして南琉球が重要な役割を持っていたことが指摘されている(Nakamura *et al.*, 2014)。

減少の要因 : もともと自生地は少ない。園芸用の採集。自生地の開発。

備考 : 西表島と与那国島では食用に供されていた。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 136.

Nakamura, K., G. Kokubugata, R. Rubite, C.-J. Huang, Y. Kono, H.-A. Yang, A. Feliciano, M. Labuguen, M. Yokota & C.-I Peng, 2014. In situ glacial survival at the northern limit of tropical insular Asia by a lowland herb *Begonia fenicis* (Begoniaceae). Bot. J. Linn. Soc., 174(3): 305-325.

赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島). 事業年報(平成27年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : イシガキカラスウリ

分類 : ウリ科 (APG 科名: ウリ科)

学名 : *Trichosanthes ishigakiensis* Walker

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 全株無毛の常緑のつる性多年草。茎は径5~10 mm、やや白色を帯び暗褐色の皮目がある。葉は幼植物では浅く3裂、成葉は五角状広卵形、膜質、長さ3~10 cm、幅2~9 cm、心脚、両面にわずかに微毛が散生し、掌状脈は両面に凸出する。果実は楕円形、長さ10 cm内外で、黄色に熟する。

県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島。

生育環境 : やや開けた林縁や陰湿な自然林内に生える。

生育状況 : 宮古島では1ヶ所のごく狭い範囲に生育する。石垣島では数ヶ所で知られているが、最近では減少している。西表島では、高地を中心に数ヶ所に産するが、開花・結実する個体はまれである。

- 学 術 的 価 値 : 先島諸島の固有種である。
- 減 少 の 要 因 : 山地の開発。もともと自生地が限られている。
- 備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告 (宮古群島)”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 31-70.
- 執 筆 者 名 : 新城和治*・川上 勲*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

-
- 和 名 : ヒメミソハギ
- 分 類 : ミソハギ科 (APG 科名: ミソハギ科)
- 学 名 : *Ammannia multiflora* Roxb.
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 全株無毛の一年草。茎は四角形、多数分枝し高さ 20~30 cm になる。葉は対生し、葉身は披針状長楕円形、長さ 2~5 cm、幅 10 mm 内外、基部の両側は耳状に張り出し茎を抱く。葉腋に小さな岐散花序をつけ、花は径 1.5 cm 内外、室果は球形で光沢があり、紫紅色を帯びる。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、アジア、アフリカ、オーストラリア。
- 県 内 の 分 布 : 伊是名島、沖縄島、石垣島。
- 生 育 環 境 : 水田や水湿地に生える。
- 生 育 状 況 : 水田や湿地の減少にともない、個体数も減少している。沖縄島では 2 ヶ所に現存するが、個体数は少ない。最近見かけるものは、外来種のホソバヒメミソハギ *Ammannia coccinea* Rottb. が多くなっている。最近、石垣島からも報告されている (赤井, 2017)。
- 減 少 の 要 因 : 湿地・池沼・河川の開発・埋立。もともと自生地が限られている。農薬散布。外来種ホソバヒメミソハギとの競合。
- 備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文 献 : 赤井賢成, 2017. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 II. “事業年報 (平成 28 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 40-42.
- 執 筆 者 名 : 立石庸一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

-
- 和 名 : ミズガンピ
- 分 類 : ミソハギ科 (APG 科名: ミソハギ科)
- 学 名 : *Pemphis acidula* J. R. et G. Forst.
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 高さ 1 m くらいの常緑性低木。枝はよく分岐して岩上を這うように伸び、枝や花序に灰白色の短毛を密布する。葉は対生、無柄、厚い肉質、長楕円形、長さ 1.5~2.5 cm、幅 0.5~1 cm、1 脈があり、鈍頭、鋭脚、全縁。花は腋生で、単生し、花梗は長さ 6~10 mm。萼筒は鐘形で先端は浅裂し、花冠は白色または紅色で径 1 cm くらい、花弁は 6 個で卵形、雄蕊は 12 個。室果は稜角を有する倒卵形、革質、長さ 6 mm くらい。
- 分布域 (県外) : 奄美諸島、台湾、東南アジア、オーストラリア、ポリネシア、アフリカ。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄諸島、大東諸島、宮古諸島、八重山諸島。
- 生 育 環 境 : 海岸の隆起サンゴ礁の飛沫帯の岩上に群生する。

- 生育状況 : かつては海岸岩場によくみられたが、庭木その他園芸用に盗掘によって個体数が減り、生育環境も損なわれている。久米島の1ヶ所では、埋立により大きな群落が消滅している。西表島の1ヶ所では、河川上流から流入した土砂の堆積で内湾部の陸化が進み、ミズガンピ群落が衰退している。鳩間島では、野生化しているヤギにより食害を受けており、2017年時点でほぼ絶滅状態になっている。
- 学術的価値 : 熱帯要素の樹種で、琉球列島は分布の北限となっており、熱帯域の沿岸植生の重要な構成種である。
- 減少の要因 : 沿岸域の開発。園芸用の盗掘。
- 備考 : 宮古島市天指定天然記念物（水納島パナリのみズガンピ）（1974年）。宮古島市自然環境保全条例保全種（2005年）。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動物植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern（LC）。
- 保全対策 : ミズガンピその他植物地理学上の重要種、及び多種の熱帯性樹種からなる沿岸域植生を保全する。
- 文献 : 西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ミズキカシグサ**

分類 : ミソハギ科 (APG 科名: ミソハギ科)

学名 : *Rotala leptopetala* (Blume) Koehne var. *littorea* (Miq.) Koehne

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 無毛の一年草。茎は軟弱でやや円く、下部は倒伏して節から根を出し、上部は直立して分枝し、高さ 20 ~ 30 cm、葉は対生し、披針状長楕円形~広線形、長さ 1~2 cm、円脚。花は腋生し、無柄、長さ 0.7 mm、萼裂片は 4 個、花弁は倒披針形。室果は球形、径 2 mm。
- 分布域(県外) : 本州(中南部)、四国、九州、薩摩黒島、宝島、奄美大島、徳之島、朝鮮。
- 県内の分布 : 沖縄島、座間味島、与那国島。
- 生育環境 : 水田、湿地、水溜りの周辺に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では 1951 年以降は記録されていなかったが、1999 年に大宜味村のイグサの水田で確認された。座間味島では 1970 年代に採集された標本があるが、現状は不明。
- 減少の要因 : 生育環境の改変(湿地の減少)。もともと個体数が少ない。
- 備考 : 竹富町希少野生動物植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Rotala rosea* として評価。

執筆者名 : 立石庸一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : **マヤプシキ (ハマザクロ)**

分類 : ハマザクロ科 (APG 科名: ミソハギ科)

学名 : *Sonneratia alba* J. Smith

方言名 : マザプス、マヤプシキ (西表島)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 全株無毛の常緑小高木で、県内では高さ 13 m になる。木質の気根を泥中から多数林立させる。小枝は中空で対生、節は肥大する。葉は卵形~卵状円形、対生し、長さ 5~8 cm、中肋は両面にやや凸出する。花は小枝の先に単生し、夕方に開く。花弁を欠き、径 4~5 cm で白色、雄蕊は多数で萼裂片の間につく。

- 分布域（県外）： 熱帯アジア、ミクロネシア、オーストラリア、東アフリカ。
県内の分布： 石垣島、西表島、小浜島。
生育環境： マングローブ林内に生える。
生育状況： 石垣島では2ヶ所、小浜島では1ヶ所の自生地が知られる。石垣島では1ヶ所で絶滅したが、他の1ヶ所では少数個体が生育している。西表島では2ヶ所に産し、個体数はやや多い。小浜島では1ヶ所に産し、個体数は少ない。
学術的価値： 分布域の北限である。
減少の要因： 河口域の開発。もともと自生地が限られている。
備考： 竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。

- 文献： 西平守孝, 1975. 八重山の潮間帯—1975. 琉大海洋保全研究会, 190pp.
西平守孝, 1978. 西表の潮間帯—1978. 沖縄県自然保護課, 158pp.

- 執筆者名： 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

-
- 和名： **ゴバンノアシ**
分類： サガリバナ科 (APG 科名: サガリバナ科)
学名： *Barringtonia asiatica* (L.) Kurz
カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴： 材質の柔らかい常緑の高木で高さ8~15 mになる。葉は倒卵形~倒卵状長楕円形、長さ30 cm内外、表面は光沢があり、両面無毛。短い総状花序に少数の花をつける。花卉は4個で白色、長楕円形で長さ7~8 cm、早落性。雄蕊は細長くてきわめて多数、長さ10~12 cm、下部は白色で上方に行くに従い紫色を帯びる。果実は四角形で4~5稜があり長さ8~14 cm、幅8~12 cm、基盤の脚に似る。

- 分布域（県外）： 台湾、スリランカ、マレーシア、ミクロネシア、ポリネシア、オーストラリア。
県内の分布： 石垣島、西表島、新城島（下地島）、黒島、小浜島、波照間島、与那国島。
生育環境： 海岸林内に生える。
生育状況： 自生地は数ヶ所知られるが、多くは果実が漂着した直後の幼個体であり、開花結実する個体は極めて少ない。今回の調査で黒島で1個体、新城島（下地島）で1個体、小浜島の2ヶ所で各1個体新たに確認された。黒島、新城島、小浜島の各1個体は成熟個体と考えられる。多良間村水納島では、樹高1m程度の幼木が数年間にわたって確認されていたが（横田ら, 2016）、この個体は枯死して定着しなかった。
学術的価値： 分布域の北限である。
減少の要因： 鑑賞用の採集。海岸の開発。もともと自生地・個体数が限られている。
備考： 石垣島では植栽された1個体が石垣市の名木として登録されていたが、最近枯死した。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー: Lower Risk/least concern (LC)。

- 文献： 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相 (Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.
横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

- 執筆者名： 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・佐藤宣子(追補)・加

島幹男(追補)

- 和名 : コバノミヤマノボタン
- 分類 : ノボタン科 (APG 科名: ノボタン科)
- 学名 : *Bredia okinawensis* (Matsum.) H. L. Li
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 高さ 0.5~1 m の低木。葉は対生し、うすい革質、長楕円形、長さ 4~9 cm、3 行脈が目立つ。集散花序は頂生し、3~7 花をつける。花弁は 4 枚で美しい桃紅色。室果は洋梨形で径 5~6 mm。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の明るい林床、林道沿いの斜面、川沿いの崖などに生える。
- 生育状況 : 北部地域 (国頭村から恩納村まで) の非石灰岩山地に分布する。
- 学術的価値 : 沖縄島北部の固有種である。コバノミヤマノボタンは、ヤエヤマノボタン *B. yaeyamensis* と共に、ヤエヤマノボタン属 *Tashiroea* としてハシカンボク属 *Bredia* から独立させる意見があり (Ito & Matsumura, 1899)、ハシカンボク属では特異な種群として知られる。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。ダム建設による水没。
- 保全対策 : 生育地の保全。
- 文献 : Ito, T. & J. Matsumura, 1899. Tentamen Florae Lutchuensis. Sectio Prima: Plantae Dicotyledoneae Polypetalae. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 12(4): 263-541.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-113.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成 7 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成 8 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-12.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.
- 執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(補遺)

- 和名 : ヒメノボタン
- 分類 : ノボタン科 (APG 科名: ノボタン科)
- 学名 : *Osbeckia chinensis* L.

- カテゴリー： 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 II類 (VU)
- 形態の特徴： 高さ 30~50 cm の多年草。茎はわずかに分枝し直立、4 稜形。葉は対生、狭長楕円形、長さ 3~6 cm、3~5 行脈があり、両面に剛毛を密布する。花は枝先に 2~5 個集まって咲き、紫紅色で、直径約 4 cm。
- 分布域 (県外)： 本州、四国、九州、種子島、屋久島、口之永良部島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア。
- 県内の分布： 伊平屋島、沖縄島、久米島、石垣島、西表島。
- 生育環境： 低地の山すその日当りのよい原野、水田の畦、牧場などに生える。
- 生育状況： 沖縄島では国頭村の 1ヶ所で確認されており、西表島では 1980 年代前半に牧場で少数個体が確認されているが、今回の調査ではいずれも確認できなかった。他の島の現状は不明で、絶滅した可能性がある。
- 学術的価値： 熱帯地域を中心として分布し、琉球列島では希産種である。
- 減少の要因： 自生地の開発 (原野、畑地、道路など、開発し易い所に自生地がある)。園芸用の採集。遷移の進行。外来種との競合。
- 保全対策： 生育地の保全。
- 備考： 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 執筆者名： 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名： ヒルギモドキ
- 分類： シクンシ科 (APG 科名: シクンシ科)
- 学名： *Lumnitzera racemosa* Willd.
- カテゴリー： 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴： 常緑の小高木。葉は互生して、枝先に束生し、長さ 2.5~7 cm、肉質で狭卵形、漸尖脚、円頭または凹頭で、葉柄は 2 cm くらい。総状花序は腋生し、長さ 2~6 cm。花弁は 5 個、白色で長楕円形、長さ約 4 mm。果実は緑色で長楕円形、長さ約 1.5 cm で、頂端に萼歯が残る。
- 分布域 (県外)： 台湾、フィリピン、中国南部、インド、スリランカ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア北部、ニューカレドニア。
- 県内の分布： 沖縄島、久米島、石垣島、小浜島、西表島、与那国島。
- 生育環境： 河口や入江の汽水域の砂泥地に生えるマングローブ植物で、最も陸側の環境に生える。
- 生育状況： 沖縄島では数ヶ所に産し、非常に少ない。久米島、小浜島、与那国島の現状は不明。石垣島と西表島では以前はやや多かったが、道路拡幅工事などで自生地が大規模に消失しており、見かけることは少なくなっている。
- 学術的価値： 分布域の北限である。
- 減少の要因： マングローブ湿地の埋立。
- 備考： 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー： Least Concern (LC)。
- 文献： 天野鉄夫・新納義馬, 1980. 億首川の紅樹林及びその周辺の植物. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 伊是名城跡・大浦川のマングローブ林・億首川のマングローブ林”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 79-100.
- 国吉真隆, 1983. 沖縄島におけるヒルギモドキの新産地. 沖縄生物学会誌, (21) : 73-74.
- 西平守孝, 1974. 沖縄の潮間帯-1974, 琉大海洋保全研究会, 262pp.
- 西平守孝, 1975. 八重山の潮間帯-1975. 琉大海洋保全研究会, 190pp.

西平守孝, 1978. 西表の潮間帯—1978. 沖縄県自然保護課, 158pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : テリハモモタマナ

分類 : シクンシ科 (APG 科名: シクンシ科)

学名 : *Terminalia nitens* Presl

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 15 m に達する高木。樹皮は厚く、帯黄色で平滑、小枝は灰色で上方に曲り無毛。葉は小枝の先端に束生し、倒卵形～倒卵状披針形で、長さ 10～15 cm、幅 4～5 cm、葉柄は 1～1.5 cm である。

分布域(県外) : フィリピン。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 海岸林に生える。

生育状況 : 西表島で 1960 年代に 2 回採集された記録があるだけで、近年は全く確認されていない。その標本は、鹿児島大学総合博物館 (KAG) に収蔵されている。本種の西表島での採集者に採集時の状況を聞き、その情報を元に採集地周辺を踏査したが、見つけることはできなかった。現在も残存している可能性もあるが、自生地は開拓による森林伐採で失われた可能性がある。

学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Vulnerable (VU)。

文献 : 初島住彦, 1964. テリハモモタマナ (新称) 琉球に産す。北陸の植物, 13: 26-27.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

和名 : ケミズキンバイ

分類 : アカバナ科 (APG 科名: アカバナ科)

学名 : *Ludwigia adscendens* (L.) Hara

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 水中に生える多年草。茎は水上を這い、長さ 30～60 cm になる。葉は狭長楕円形～倒卵状楕円形、上面は無毛で光沢がある。花は葉腋に 1 個ずつつき、径 2～3 cm、白色で中心部は黄色を帯びる。果実は円柱状で長さ 3～5 cm、明瞭な縦稜がある。

分布域(県外) : 台湾、熱帯アジア。

県内の分布 : 沖縄島、北大東島、南大東島、池間島、宮古島、来間島、石垣島。

生育環境 : 沼沢地に生える。

生育状況 : 南・北大東島ではそれぞれ数ヶ所の自生地が知られているが、湿地の埋立により自生地が消失している。宮古島には数ヶ所に産するが、自生地と個体数が減少している。池間島では、2017 年に 1 ヶ所で確認されている。石垣島では極めてまれで 1 ヶ所のみで確認されているが、現状は不明。沖縄島の現状は不明。

減少の要因 : 湿地・池沼・河川の開発。もともと自生地が少ない。

文 献 : 横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・佐藤宣子(追補)・城間盛男(追補)

和 名 : **ウスゲチョウジタデ**

分 類 : アカバナ科 (APG 科名: アカバナ科)

学 名 : *Ludwigia epilobioides* Maxim. subsp. *greatrexxii* (Hara) Raven

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 一年草。茎は直立して多くの枝を分け、葉とともに細毛が多い。葉は披針形～長楕円状披針形で長さ7～8 cm。花は葉腋に1個ずつつき、花弁はふつつき5個あって、倒卵形、長さ約4 mm。

分 布 域 (県 外) : 本州 (関東以西)、九州、奄美大島、与論島。

県 内 の 分 布 : 宮古島、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 水田や湿地に生える。

生 育 状 況 : 水田の減少で自生地は減っている。個体数は少ない。西表島では、本種の生育環境の一部に外来種のヒレタゴボウ (アメリカミズキンバイ) が侵入しており (赤井, 2017)、本種やキダチキンバイとの競合や交雑が危惧される。2016年に宮古島の1ヶ所で確認されているが、除草剤の散布や湿地の埋立で、絶滅寸前である。

減 少 の 要 因 : 土地改変による湿地や水田の減少。外来種との競合。

備 考 : 基本亜種のチョウジタデに比べ、若枝に毛が多く、花はやや大きく、葉は秋期に紅葉しない。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : 横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

赤井賢成, 2017. 西表島植物誌編纂事業. “事業年報 (平成28年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 43-45.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)

和 名 : **ナガバアリノトウグサ (ホソバアリノトウグサ)**

分 類 : アリノトウグサ科 (APG 科名: アリノトウグサ科)

学 名 : *Haloragis chinensis* (Lour.) Merr.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 小形の常緑の多年草。茎は直立して分枝し、高さ10～25 cmになる。葉は対生し、上方のものは時に互生し、披針状長楕円形～披針形、長さ1～2 cm、両側に4～5対の鋸歯があり、表面に圧毛を散生し、鋭頭、円脚、やや無柄。花序は頂生または上部の葉腋から生じ、花は長さ2 mm、無柄、萼筒は鐘状、裂片は狭三角形、長さ0.5 mm、花弁は長さ1 mm。果実は半球形、長さ13 mm、8肋がある。

分 布 域 (県 外) : 中国南部、インド、インドシナ。

県 内 の 分 布 : 伊是名島、沖縄島。

生 育 環 境 : 日当たりがよく土壌の少ない草地に生える。沖縄県では、オオマツバシバと混生して出現する。

生 育 状 況 : 伊是名島では、自生地に観光道路が建設されて減少した。2017年にも確認されたが、ごく狭い範囲に少数個体が残されるだけである。沖縄島では名護市と恩納村の各1ヶ所で1930年代に記録された

後見つかっていなかったが、2004年に恩納村の3ヶ所で発見されている。その内の2ヶ所は道路建設により2005年に消失した。名護市の1ヶ所でも確認されたが、米軍基地建設のため大部分の自生地が消失した。

- 学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。遷移の進行。
- 備 考 : 種子島(馬毛島)には和名が同じで本種とは別種のタネガシマアリノトウグサ(別名ナガバアリノトウグサ、ホソバアリノトウグサ) *H. walkeri* が分布する。
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・國府方吾郎(追補)

- 和 名 : **ホザキノフサモ (キンギョモ)**
- 分 類 : アリノトウグサ科 (APG 科名: アリノトウグサ科)
- 学 名 : *Myriophyllum spicatum* L.
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 常緑の沈水性多年草。茎は所々で分枝し、流水中では長さ1~2 mになる。葉は細裂した羽状複葉で各節に4個輪生し、長さ1.5~3 cmになる。雌雄同株。花序は穂状で水面からとび出して直立し、長さ3~10 cm。水上部の各節の葉はごく小さな苞に退化することが他種と異なる。
- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、台湾、ユーラシア。
- 県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 湧水池や水路などの水中に生える。
- 生育状況 : 現状は不明。
- 学 術 的 価 値 : 湿地・池沼・河川の開発。もともと自生地が少ない。
- 備 考 : 近年、北アメリカに帰化し、各地で異常繁茂し、駆除されている。竹富町希少野生動物植物種(2017年)。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。
- 執 筆 者 名 : 立石庸一*・豊見山元*

- 和 名 : **ミツバウコギ**
- 分 類 : ウコギ科 (APG 科名: ウコギ科)
- 学 名 : *Eleutherococcus trifoliatus* (L.) S.Y.Hu
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 長さ数 m に達する常緑のつる性木本。長枝は長く這い、短枝は側生し、少数の葉をつけ、枝と葉柄に反曲する棘がある。葉は互生し、3出葉、頂小葉は楕円状倒卵形~楕円状披針形、長さ4~8cm、幅2.5cm、側小葉はやや斜形、小鋸歯縁、葉柄は長さ2~6cm。複集散花序は頂生し、3~10個の集散花序からなり、各集散花序は多数の花をつけ、花梗は長さ2~7cm。花は単黄緑色、花弁は三角状、長さ2mm、雄蕊は5個、果実は偏球形。
- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン、中国南部、ネパール。
- 県内の分布 : 宮古島。
- 生育環境 : 低地の自然度の高い御嶽林内に生育し、常緑広葉樹林内の林床や樹上を這い、林冠で開花・結実する。
- 生育状況 : 自生地は1ヶ所のみで、ごく狭い範囲に少数個体を産するだけである。
- 学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、国内では唯一の自生地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

文献 : 佐藤宣子・阿部篤志・横田昌嗣, 2016. ミツバウコギ. “琉球の樹木”, 大川智史・林将之 (編著), p. 446. 文一総合出版, 東京.

執筆者名 : 横田昌嗣・佐藤宣子・阿部篤志

和名 : **アオキ**

分類 : ミズキ科 (APG 科名: アオキ科)

学名 : *Aucuba japonica* Thunb.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 3~4 m の低木、全株無毛。葉身は厚く光沢があり、楕円状卵形、長さ 8~20 cm、疎鋸歯縁、葉柄は長さ 1~5 cm。雌雄異株。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 奄美諸島では非石灰岩地にやや普通に生えるが、沖縄県では山地の古生層石灰岩地帯の自然林に生える。

生育状況 : 大宜味村と本部半島の山地の一部に限定され、個体数も少ない。

学術的価値 : 分布域の南限である。琉球列島と南九州のものは二倍体で (Kurosawa, 1971)、遺伝的にも区別できる (Ohi *et al.*, 2003) ことから、固有変種のナンゴクアオキ *A. japonica* Thunb. var. *australis* H. Hara et S. Kurosawa として、四倍体のアオキと区別されることが多い。ナンゴクアオキに、ヒゴアオキの学名 *A. japonica* Thunb. var. *ovoidea* Koidzumi が用いられることがある。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。

備考 : 本部半島の自生地の大半は、沖縄県指定の天然保護区域である。

文献 : Kurosawa, S., 1971. Cytotaxonomical studies on the genus *Aucuba*. J. Jpn. Bot., 46: 231-238.

Ohi, T., Kajita, T. & J. Murata., 2003. Distinct geographic structure as evidenced by chloroplast DNA haplotypes and ploidy level in Japanese *Aucuba* (Aucubaceae). Amer. J. Bot., 90(11): 1645-1652.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ヤエヤマヤマボウシ**

分類 : ミズキ科 (APG 科名: ミズキ科)

学名 : *Cornus hongkongensis* Hemsl.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 落葉高木。幹は直立あるいは斜上する。葉は枝先に対生し、葉身は楕円形、長さ 5~12 cm、やや全縁、葉柄は長さ約 1 cm。短枝の先に長い柄を伸ばし頭状花序をつける。花序の基部にある総苞は大形で総苞片は 4 枚、へら形で長さ約 2 cm、花卉のように見える。頭状花序は径約 1 cm、緑黄色の小さな花を密集する。果実は黄熟し、萼筒は肥厚して互いに合着し、球形の集合果となる。

分布域 (県外) : 中国南部。

県内の分布 : 石垣島、西表島

生育環境 : 低地から高地までの自然林に生える。
 生育状況 : 石垣島では限られた地域に点在し、個体数は少ない。西表島では数ヶ所に産するが、やはり個体数は少ない。
 学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。
 減少の要因 : もともと自生地が限られている。道路建設。森林伐採。
 保全対策 : 生育地の保全。
 備考 : 中国のものとは形態が異なり、独立種 *C. yaeyamensis* Hatusima とする意見 (初島・天野, 1994)、台湾と中国に分布する *Benthamidia sinensis* (Nakai) Yamazaki とする意見 (山崎, 2000)、中国や台湾に産するヤマボウシの亜種 *C. kousa* Buerger ex Hance subsp. *chinensis* (Osborn) Q. Y. Xiang とする意見 (Xiang & Boufford, 2005) 等様々な取扱が提唱されており、今後詳細な研究が必要である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 160.
 小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
 山崎 敬, 2000. ヤエヤマヤマボウシについて. 植物研究雑誌, 75 (6) : 373-374.
 Xiang, Q. Y. & D. E. Boufford, 2005. Comaceae. Flora of China, 14: 206-221.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

和名 : ムニンハマウド
 分類 : セリ科 (APG 科名: セリ科)
 学名 : *Angelica japonica* A. Gray var. *boninensis* (Tuyama) Yamazaki
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 多年草。茎は高さ 1~1.5 m くらい、上部で枝を分ける。葉は 1~2 回 3 出羽状複葉で光沢があり、小葉は卵形で鋸歯がある。頂生する大形の複散形花序に多数の花をつける。花は小さく、白色。果実は広楕円形で両端がへこみ、両翼は広い。
 分布域(県外) : 小笠原。
 県内の分布 : 北大東島、南大東島。
 生育環境 : 海岸のサンゴ石灰岩の岩場に生える。
 生育状況 : 海岸に点々と分布するが、個体数は少ない。
 学術的価値 : 隔離分布し、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。
 備考 : 基本変種のハマウド *A. japonica* var. *japonica* に比べてやや小さく、茎の下部の葉の鋸歯が鈍いなどの点で異なる。基本変種は本州 (関東以西) ~奄美諸島、台湾、朝鮮南部に分布する。大東諸島を除く沖縄島以南の琉球列島と台湾北部には別の変種のナンゴクハマウド var. *hirsutiflora* (Liu, Chao et Chuang) Yamazaki が分布する。これは葉が大きく、小葉が三角状広卵形、果実がやや小形で、翼がやや厚いなどの特徴がある (山崎, 1990)。大東諸島の個体群は、ムニンハマウドではなく、ハマウドに形態的にも遺伝的にも近いとする研究がある (Seo *et al.*, 2005)。

文献 : Seo, A., F. Nobushima & N. Murakami, 2005. Genetic status of *Angelica japonica* var. *boninensis* (Umbelliferae) distributed in the Bonin and the Daito Island. Acta Phytotax. Geobot., 56(2): 173-182.
 山崎 敬, 1990. ハマウド・ムニンハマウド・ナンゴクハマウドについて. 植物研究雑誌, 65: 220-224.
 西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

和名 : モミジチドメ (タカサゴノチドメ)

分類 : セリ科 (APG 科名: セリ科)

学名 : *Hydrocotyle batrachium* Hance

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は細く、長く匍匐し、地表を這うか他の植物にからまって斜上する。葉は円状腎形、長さ1~2.5 cm、幅1~3 cm、3~5深裂し、下面は有毛。散形花序は単生し、約10花をつけ、花梗は長さ5~10 mm、花は小さく、白色、花弁は5個、卵形。果実はやや円形、径1.5 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国中部~南部、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島南部、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地、放棄水田、水田の畦道、湿った原野などに生える。

生育状況 : 沖縄島の現状は不明。石垣島では2ヶ所、西表島では3ヶ所、与那国島では2ヶ所の自生地が知られているが、いずれの自生地でも個体数は少ない。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・安田恵子*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウマノミツバ

分類 : セリ科 (APG 科名: セリ科)

学名 : *Sanicula chinensis* Bunge

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年生草。茎は直立し、枝を叉状に分枝し、高さ30~100 cmになる。葉は2形、根生葉はやや円形、径2~10 cm、3 (~5) 裂し、葉柄は葉身より長い。茎葉は通常3裂し、下方のものは長柄があるが、上方のものは短柄。枝の先に小さな散形花序を出し、両性花と雄花を混生する。花は白色で小さい。果実は卵形で表面は鉤刺で被われる。

分布域(県外) : ウスリー、千島、樺太、北海道、本州、四国、九州、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地林下に生える。

生育状況 : 沖縄県では極めてまれで、近年は全く確認されていない。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメウマノミツバ
 分類 : セリ科 (APG 科名: セリ科)
 学名 : *Sanicula lamelligera* Hance
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小形の多年草。茎は高さ 5~30 cm。葉は 2 形あり、根生葉は多数あって細長い柄を有し、葉身は円心形、径 0.5~5 cm で 3 全裂し、頂小葉は有柄で倒卵状くさび形、茎葉は数個あって、下方のものは 3 裂するが、上方に行くに従い小さくなり、分裂せず、線状披針形になる。花は白色または淡紅色で、枝先の小さな複散形花序に 4~7 個つく。果実は長楕円形、長さ 2.5 mm 内外、表面には刺毛を密生する。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国南部。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の谷間の水辺や、高地のリュウキュウチク林の林床などやや湿り気のある所に生える。

生育状況 : 沖縄島では 4 ヶ所、石垣島では 1 ヶ所、西表島では 2 ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 紀伊半島には、変種のキウマノミツバが分布する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

横田昌嗣・宮城康一, 1988. 琉球列島植物分布資料 6. 沖縄生物学会誌, (26) : 35-37.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和名 : シマイワウチワ (シマイワカガミ、ランダイイワウメ)
 分類 : イワウメ科 (APG 科名: イワウメ科)
 学名 : *Shortia rotundifolia* (Maxim.) Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 小形の常緑多年生草。根茎は径 2~4 mm、地中を短く横走する。葉は長さ 3~7 cm の柄を有して根生状に出て、葉身は円形~卵円形、薄い革質、両面無毛で表面は光沢がある。花冠は白色~淡紅色、鐘形で 5 裂し、仮雄蕊がない。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の崖地に生える。

生育状況 : 沖縄島北部(国頭村、東村、大宜味村)では数ヶ所、西表島では点々と数ヶ所の自生地があるが、個体数は少ない。

学術的価値 : 台湾では高地に生える。分布域の北限であり、東アジアの温帯系の種で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 森林伐採。ダム建設による水没。園芸用の採集。

備考 : 奄美大島には品種のアマイワウチワ *S. rotundifolia* (Maxim.) Makino f. *amamiana* (Ohwi) T. Yamazaki を産する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-12.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : リュウキュウアセビ

分類 : ツツジ科 (APG 科名: ツツジ科)

学名 : *Pieris koidzumiana* Ohwi

カテゴリー : 野生絶滅 (EW) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 1.5~3 m の常緑低木。葉身は倒披針形で革質、長さ 4~8 cm、上部から 1/3 までに少数の鈍鋸歯があり、表面は濃い緑色で光沢があり、基部は 3~6 mm の葉柄に翼状に流れる。枝先に円錐花序を垂らし、多数の花をつける。花冠は白色で、筒状つぼ形で、長さ約 1 cm、先は浅く 5 裂し、雄蕊は 10 本、葯の背面に刺状突起がある。果実は扁球形の朔果で径 5 mm。

分布域 (県外) : 奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の溪谷の岩地に生える。

生育状況 : 沖縄島北部の 1ヶ所にのみ産し、自生地は国指定天然記念物として保護されてきたが、1983 年に幼体が 1 株確認されたのを最後に絶滅した。

学術的価値 : 琉球列島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 奄美大島産のものは、沖縄県産のものとともにリュウキュウアセビと呼ばれていたが、遺伝的に異なることが判り、現在は別種のアマミアセビ *Pieris amamioshimensis* Setoguchi et Y. Maeda と呼ばれることがある (Setoguchi & Maeda, 2010)。奄美大島産のものが沖縄県にも導入されており、人工増殖をはかる場合、自生地の明らかな株を基に増殖する必要がある。

備考 : 園芸植物として普及している。奄美大島でも盗掘によりほぼ絶滅状態だという。

文献 : Setoguchi, H. & Y. Maeda, 2010. A new species of *Pieris* (Ericaceae) from Amamioshima, Ryukyu Islands, Japan. *Acta Phytotax. Geobot.* 60(3): 159-162.

執筆者名 : 新里孝和*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

和名 : サキシマツツジ

分類 : ツツジ科 (APG 科名: ツツジ科)

学名 : *Rhododendron amanoi* Ohwi var. *amanoi*

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 4 m くらいの常緑性の低木。枝は灰褐色を呈し、小枝はよく分岐し剛毛を密生する。葉は互生、葉身は卵状楕円形または長楕円形~広披針形、長さ 7~10 cm、幅 2.5~6 cm、全縁で毛縁、鋭頭、鋭脚または鈍脚、両面には圧剛毛を散生し、下面は脈上に剛毛を布き、側脈は 4~5 対で細脈とともに下面に少し突出する。葉柄は長さ通常 5~12 mm で腺毛を密生する。花芽の芽鱗は外方のものは背面に長い圧粗毛があり、内方のものは大きく長さ 2 cm くらいで背面と辺縁に腺状微毛をふき粘る。花は小枝の先端に 1~2 個つき、有梗、小梗は長さ 1~1.5 cm で開出した腺質粗毛を密布する。萼は基部まで 5 裂し、裂片は線状披針形~披針形、長さ 7~8 mm、背面と辺縁に開出腺毛を有する。花冠は赤色で径 4~5 cm、裂片は広卵形で円頭、雄蕊は 10 個で長さ 4 cm くらいとなり、下面には微毛があり、葯は暗紫色で長さ 2 mm くらい、花柱は雄蕊より長く、長さ 4.5 cm くらいで花冠よりや

や超出し、子房は直立した淡黄金色の腺状粗毛を密布する。室果は狭卵形で長さ1 cm くらい。

- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 低地から山地の溪岸に生える。
 生育状況 : 西表島では限られた河川の流域に産するが、自生地と個体数は限られている。石垣島では極めてまれで、1 河川の流域で確認されている。
 学術的価値 : 石垣島、西表島の固有種である。
 減少の要因 : もともと自生地が限られ、個体数が少ない。園芸用の採集。
 保全対策 : 自生地と個体群の保全。園芸等の観賞用としては挿し木や実生繁殖のよるものを用いるよう啓蒙する。
 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
 執筆者名 : 新里孝和*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **クメジマツツジ**
 分類 : ツツジ科 (APG 科名: ツツジ科)
 学名 : *Rhododendron amanoi* Ohwi var. *glandulistylum* Hatusima
 カテゴリー : 野生絶滅 (EW) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 高さ3 m くらいの常緑性の低木で、基本変種のサキシマツツジに比べて花柱の下部に腺毛があることで異なる。
 県内の分布 : 久米島。
 生育環境 : 低地から山地の溪岸。
 生育状況 : 久米島の1 河川の溪岸に少数個体が生育していたようであるが、園芸用に盗掘され、現在は生存個体を確認することができない。
 学術的価値 : 久米島の固有変種としてまた植物地理学上も重要である。
 減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
 保全対策 : 久米島で栽培されている本種の株を増殖し、それを植え戻して自生地の復元を図ることが重要であるが、その際に株の由来をきちんと確認する必要がある。
 備考 : 本変種をサキシマツツジの異名とする意見がある。

- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

- 執筆者名 : 新里孝和*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **セイシカ**
 分類 : ツツジ科 (APG 科名: ツツジ科)
 学名 : *Rhododendron latoucheae* Franch.
 方言名 : ミキ、ミーキ (西表島)
 カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 高さ2~6 m の常緑小高木。葉は枝先に接近して互生し、葉身は長楕円形で無毛、長さ5~11 cm、幅2~5 cm、表面は光沢がある。花は枝先に2~4 個つき、花冠は淡紫紅色で上部内面に紅紫色の斑点があり、筒状鐘形、径4~5 cm、5 中裂し、雄蕊は10 本。

- 分布域（県外）：台湾、中国南部。
県内の分布：石垣島、西表島。
生育環境：岩が多い山地林内に生える。
生育状況：石垣島では数ヶ所に産し、個体数は少ない。西表島では島内に広く分布し、自生地の大半は国立公園内にあるため開発の恐れは少なく、すぐに絶滅する恐れはないが、自生地は点在し、個体数は少ない。
減少の要因：園芸用の採集。森林の伐採（石垣島）。
保全対策：増殖による園芸利用の啓発。生育地の保全。
備考：奄美大島に産するものは花柱に毛があるため、変種アマミセイシカ *R. latoucheae* Franch. var. *amamiense* Ohwi として区別されている。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
執筆者名：新里孝和*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)
-

- 和名：ケラマツツジ
分類：ツツジ科（APG科名：ツツジ科）
学名：*Rhododendron scabrum* G. Don
方言名：キラマチチジ（沖縄島：首里）
カテゴリー：絶滅危惧 I B 類（EN） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 II 類（VU）

- 形態の特徴：高さ1～2 mの常緑低木。若枝は扁平な褐色剛毛が密に生える。葉は互生し、長楕円形で、長さ3～12 cm、幅2～5 cm、表面は濃い緑色で両面に剛毛がある。枝先に2～4個の花をつける。花冠は赤朱色、上側内面に濃い斑点があり、径4.5～6 cm、5中裂し、雄蕊は10本。萼片は楕円形または卵形で、縁辺に長毛と短い腺毛を混生する。
分布域（県外）：奄美大島、加計呂麻島、沖永良部島。
県内の分布：沖縄島、渡嘉敷島、座間味島。
生育環境：海岸の風衝草原や山地の溪谷に生える。
生育状況：かつては普通に見られる種であったが、近年は園芸用に採集され、個体数が激減している。
学術的価値：琉球列島の固有種である。
減少の要因：園芸用の採集。森林伐採。自生地の開発。ダム建設による水没。もともと自生地と個体数が限られる。
保全対策：増殖による園芸利用の啓発。
執筆者名：新里孝和*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)
-

- 和名：タイワンヤマツツジ（シナヤマツツジ）
分類：ツツジ科（APG科名：ツツジ科）
学名：*Rhododendron simsii* Planch. var. *simsii*
方言名：キカヅ、キガヅ（西表島）
カテゴリー：絶滅危惧 I B 類（EN） 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：高さ1～2 mの常緑低木。若枝には伏した扁平の短剛毛が密生する。葉は小さく倒広披針形～長楕円形～倒卵形、長さ1.5～4.5 cm、幅0.7～2.5 cmで両面に伏した堅い毛がある。枝先の1個の花芽から2～3個の花が開く。花冠は朱色または紅紫色、上側の内面に濃い色の斑点があり、漏斗形で径3

～4 cm、5中裂し、雄蕊は10本。

- 分布域（県外）：奄美大島、加計呂麻島、徳之島、台湾、中国南部。
 県内の分布：伊平屋島、伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島。
 生育環境：低地から山地の疎林や風衝地に生える。
 生育状況：かつてはやや普通に見られたが、園芸用に採集され、自生地が減少している。
 減少の要因：園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が限られる。
 保全対策：生育地の保全。増殖による園芸利用の啓発。
 備考：石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名：新里孝和*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名：センカクツツジ
 分類：ツツジ科（APG科名：ツツジ科）
 学名：*Rhododendron simsii* Planch. var. *tawadae* (Ohwi) Hatusima
 カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（CR）

形態の特徴：高さ1mに達する常緑低木。若枝は扁平な剛毛が密生する。葉は倒卵形で、長さ2～2.8cm、幅0.9～1.5cm、両面に長い毛がある。花は枝先に2個つき、3～5月に咲き、淡紫紅色で上側内面に濃色の斑点があり、径2～3cm、5中裂する。

- 県内の分布：魚釣島。
 生育環境：山頂付近の風衝地の岩場に生える。
 生育状況：1991年に少数個体の生育が確認されているが、その後は現地調査がなされていない。急増している野生化ヤギにより直接食害をうけたり、植生全体が衰退して生育環境が悪化している可能性が高い。
 学術的価値：魚釣島の固有変種である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。野生化ヤギによる食害と自生地の破壊。
 保全対策：野生化ヤギの駆除が急務である。

文献：初島住彦，1991．魚釣島の植物地理．鹿児島島の植物（鹿児島植物同好会誌），（11）：62-66．

執筆者名：新城和治*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名：シナマンリョウ（シナヤブコウジ、シナタチバナ）
 分類：ヤブコウジ科（APG科名：サクラソウ科）
 学名：*Ardisia chinensis* Benth.
 カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

形態の特徴：常緑の小低木。地下茎は地中を横走し、傾上する地上茎を出す。地上茎は高さ30～20cmで分岐しない。葉は互生し、やや革質、倒卵形～狭倒卵形、長さ2～10cm、幅1.5～4cm。散房花序は腋生または頂生し、少数花をつけ、花梗は長さ2～3cm、萼片は3角状披針形、長さ1mm、花冠は白色、5深裂し、裂片は卵形、長さ3～4mm、雄蕊は5個、子房は球形。果実は球形、径4～5mm。

- 分布域（県外）：徳之島、台湾、中国南部。
 県内の分布：西表島。
 生育環境：高地の陰湿な林床に生える。

- 生育状況 : 自生地は1ヶ所知られるだけで、ごく狭い範囲に限られ、個体数はきわめて少ない。
学術的価値 : 著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。
保全対策 : 本種の自生地は国立公園の特別保護区域にあり、改変される恐れはない。

文献 : 小林史郎, 1999. 八重山諸島新産のウエマツソウとシナヤブコウジ. 植物分類・地理, 50: 248-250.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : **カラタチバナ**
分類 : ヤブコウジ科 (APG 科名: サクラソウ科)
学名 : *Ardisia crispa* (Thunb.) DC.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑小低木。茎は直立して高さ 20~100 cm、粒状の毛がある。葉は互生し、披針形または披針状楕円形で、長さ 7~21 cm、幅 2~4 cm、鋭頭、縁に波状の鋸歯があり、鋸歯と鋸歯の間に内腺点がある。葉腋または早落性の鱗片葉の腋に散形花序を出し、花序の柄は長さ 4~7 cm、粒状の褐色微毛があり、先に 10 個ほどの花をつける。花は白色で、径 7~8 mm、花冠は 5 裂する。果実は球形で径 6~7 mm、赤く熟す。

分布域(県外) : 本州(関東南部以西)、四国、九州、薩南諸島、屋久島、口之永良部島、トカラ列島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林に生える。

生育状況 : 沖縄島と石垣島にそれぞれ 1ヶ所の自生地が知られ、今回の調査でも確認されたが、自生地は狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 琉球列島では北琉球に点々と分布するが、中琉球と南琉球では沖縄県にだけ希産する。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岬安喜*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **ヤブコウジ**
分類 : ヤブコウジ科 (APG 科名: サクラソウ科)
学名 : *Ardisia japonica* (Hornsted) Blume
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑小低木。茎の下部は匍匐し、上部は斜上して高さ 10~30 cm になる。茎と葉柄に粒状の毛がある。葉は互生し長楕円形で長さ 4~13 cm、幅 2~5 cm、縁は細鋸歯がある。花序は散形状、葉または鱗片葉の腋に出て、2~5 花をつける。花は白色で径 6~8 cm、下垂する。果実は球形で径 5~6 cm、赤く熟す。

分布域(県外) : 北海道(奥尻島)、本州、四国、九州、薩摩黒島、屋久島、種子島、トカラ列島、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 魚釣島。

- 生育環境 : 自然林内に生える。
 生育状況 : 1991年の最後の調査でも確認されていない。急増している野生化ヤギの食害をうけ、絶滅した可能性がある。
 学術的価値 : 琉球列島では北琉球に点々と分布するが、中琉球と南琉球では魚釣島にだけ希産する。魚釣島が台湾や中国大陸と陸続きであったときに渡来したと思われ、北琉球以北の分布域とは大きく離れていることから、由来が異なる可能性があり、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。野生化ヤギによる食害。
 保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.

執筆者名 : 新城和治*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **イズセンリョウ**
 分類 : ヤブコウジ科 (APG 科名: サクラソウ科)
 学名 : *Maesa japonica* (Thunb.) Moritzi ex Zoll.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の低木。茎下部はしばしば地を這い、節から根を出す。普通に見られるシマイズセンリョウ *M. montana* とは、葉緑に粗鋸歯が疎らにあるかまたは全緑であり、花冠は浅く5裂し、裂片は小さく、筒部が長い点で異なる。
 分布域(県外) : 本州 (関東南部以西)、四国、九州、薩摩黒島、種子島、悪石島、台湾、中国、インドシナ。
 県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部。
 生育環境 : 高地の林床に生える。
 生育状況 : 沖縄島では極めてまれで、これまで2ヶ所に知られているが、個体数は非常に少ない。1ヶ所は森林伐採で消失した恐れがある。伊平屋島の現状は不明。
 学術的価値 : 琉球列島では北琉球に点々と分布するが、中琉球と南琉球では沖縄県にだけ希産し、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : 森林開発。もともと自生地と個体数が限られる。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ツルマンリョウ**
 分類 : ヤブコウジ科 (APG 科名: サクラソウ科)
 学名 : *Myrsine stolonifera* (Koidz.) Walker
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 常緑の匍匐するつる性低木。地上茎は長さ1 m、匍匐枝は分枝し、全株無毛。葉は互生し、やや革質、長楕円形～狭倒卵形、長さ3～8 cm、幅1～3 cm、葉柄は長さ5～10 mm。花は葉腋に数個束生し、萼裂片は長さ1 mm、花冠の裂片は長さ2.5 mm。果実は球形、径5 mm、赤色。
 分布域(県外) : 本州 (奈良県、広島県、山口県)、屋久島、台湾、中国。

- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 雲霧帯の常緑広葉樹林内の林床に生える。
- 生育状況 : 国頭村の1ヶ所で1度採集されただけである。発見時は1坪ほどの面積に群生していた(小林, 1983)という。自生地は国指定の天然保護区域として保護されており、開発の恐れはない。本種が沖縄島に産することが報告されて以降、本種の探索がずっと続いているが、今回の調査でも発見することはできなかった。
- 学術的価値 : 隔離分布を示す種で、琉球列島では数少ない自生地であり、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 小林(1983)によって引用されている証拠標本の一部は、琉球大学理学部植物標本室(RYU)に所蔵されている。本州の自生地の多くでは、国または県指定の天然記念物として自生地が保護されている。
- 文献 : 小林元男, 1983. ツルマンリョウー琉球の新産地. レポート日本の植物, 20: 184.
- 執筆者名 : 横田昌嗣

-
- 和名 : **ホザキザクラ**
- 分類 : サクラソウ科 (APG科名: サクラソウ科)
- 学名 : *Stimpsonia chamaedrioides* C. Wright ex A. Gray
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 高さ3~15 cmの一年草。全体に腺毛を密生する。根生葉は卵形~楕円形、長さ1~2 cm、縁に不ぞろいの鋸歯がある。ロゼット状に展開した根生葉の間から1~2本の花茎を伸ばすが、これにも葉をつける。茎葉は互生し、下部のものは柄があって楕円形または卵形、上部のものでは柄がなく卵円形で小さくなる。花は上部の葉腋に1個ずつつくが、葉が上部に行くほど小さくなりやがて苞に移行してしまうので、全体として総状花序状になる。花冠は白色で径約5 mm、上部は5中裂し、裂片の先はへこむ。
- 分布域(県外) : 本州(山口県)、屋久島、奄美大島、台湾、中国南部。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の日当たりの良い原野に生える。
- 生育状況 : 極めてまれで、1ヶ所に産することが知られていただけだったが、近年はその自生地では遷移が進んで環境が変化し、永らく確認されていなかった。以前確認されていた場所の樹木を伐採して明るい環境にしたところ、最近出現するようになった。奄美大島でも、同様に遷移の進行で衰退しつつある。
- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。遷移の進行。
- 保全対策 : 生育環境の維持のため、定期的な除草などの管理が必要である。

執筆者名 : 立石庸一*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和名 : **センカクハマサジ**
- 分類 : イソマツ科 (APG科名: イソマツ科)
- 学名 : *Limonium senkakuense* Yamazaki
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 多年草。根生葉は倒卵状披針形で毛がなく、質厚く革質、長さ5~10 cm、幅1.8~3.6 cm、先は円形もしくは短突起があり、縁は全縁。根生葉の間から伸びた花茎は25~50 cmになり、上部はよく枝分かれて小穂を多数つける。萼は筒状で、わずかに5裂するとされる。
- 県内の分布 : 魚釣島。
- 生育環境 : 海岸の岩上に生える。
- 生育状況 : 自生地は狭い範囲の1ヶ所に限られる。本種が確認されたのは、1979年の1度だけであり(新納・新城, 1980)、その後は確認されていない。近年急増している野生化ヤギによる食害で絶滅した可能性が高い。
- 学術的価値 : 魚釣島の固有種である。台湾ハマサジに極めて近縁なもので、分類学的な再検討が必要である。
- 減少の要因 : 野生化ヤギによる食害。もともと自生地と個体数が限られている。
- 保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

- 文献 : 新納義馬・新城和治, 1980. 植物調査. “尖閣諸島調査報告書(学術調査編)”, 沖縄開発庁, 155-244.
Yamazaki, T., 1991. A new species of *Limonium* from Ryukyu. J. Jpn. Bot., 66: 131-133.

執筆者名 : 新城和治*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **台湾ハマサジ**
- 分類 : イソマツ科 (APG科名: イソマツ科)
- 学名 : *Limonium sinense* (Girard) O. Ktze.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 多年草。根生葉は倒卵状披針形で毛がなく、革質、全縁でしばしば波打ち、先は短突起があり、長さ2~23 cm、幅0.4~5 cm。根生葉の間から、高さ6~75 cmの花茎を1~数本のぼす。花茎はよく分枝して多数の小穂を集散状につける。イソマツと比べ、花茎が斜上する傾向が強く、より先端に小穂が集密する。花卉は黄色。萼筒は白色、高杯型で、縦方向に5本の肋が発達し、花後も花序上に宿存して種子を包む。果実は果皮が薄く、長さ3 mm。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部。
- 県内の分布 : 西表島(仲御神島)。
- 生育環境 : 海岸の岩上に生える。
- 生育状況 : 1994年に生育が確認されている。自生地は国の天然記念物に指定されており、許可なく上陸することは認められていないので開発や採集の恐れはないが、不安定な立地に生え、個体数も少ないので環境変化により絶滅する恐れがある。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 新城和治*・松村俊一*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

- 和名 : **イソマツ(種内分類群を含む)**
- 分類 : イソマツ科 (APG科名: イソマツ科)
- 学名 : *Limonium wrightii* (Hance) O. Ktze.
- 方言名 : ウミマーチ(沖縄島、伊平屋島、久米島)、ガラスヌパン(石垣島)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II類 (VU)

- 形態の特徴** : 小低木状の常緑多年草。茎の長さは長いもので 30 cm におよぶ。葉は茎の上部に集まってつき、毛がなく、革質、全縁、倒卵状披針形で長さ 1~10 cm、幅 2~13 mm、先は円形もしくは短突起がある。葉の間から高さ 1.5~33 cm の多数に分枝した花茎を 1~数本伸ばし、多数の小穂をつける。花冠は基部から 5 裂する。萼筒は筒状もしくは高杯型で、縦方向に 5 本の肋が発達し、花後も花序上に宿存して種子を包む。
- 分布域(県外)** : 伊豆七島、小笠原、火山列島、屋久島、トカラ列島、奄美諸島、台湾、フィリピン (バタン諸島)。
- 県内の分布** : 沖縄諸島、大東諸島、宮古諸島、八重山諸島。
- 生育環境** : 海岸の岩場に生える。
- 生育状況** : 海岸の隆起石灰岩上に群落が見られたが、大規模な薬用の採集で減少しつつある。
- 減少の要因** : 薬用の採集。海岸の開発。
- 備考** : 花の色には変異があり (Matsumura *et al.*, 2006)、基本変種の黄花のウコンイソマツ var. *wrightii* は奄美諸島南部と沖縄諸島に分布し、var. *arbusculum* (Maxim.) Hara イソマツ (狭義) は淡紅紫色の花であり、奄美諸島北部や宮古諸島、八重山諸島に分布する。また、淡黄色品のウスジロイソマツ f. *albo-lutescens* Hatusima が大東諸島に産する。いずれも採集により減少している。本種の基準産地は沖縄県で、日本と台湾の固有種と考えられていたが、最近フィリピンにも狭義のイソマツが分布することが報告されている (Nakamura *et al.*, 2013)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献** : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
宮城康一, 1992. 沖大東島の植物相と現存植生. 沖縄生物学会誌, (30) : 65-70.
Matsumura, S. I., J. Yokoyama, Y. Tateishi. & M. Maki, 2006. Intraspecific variation of flower colour and its distribution within a sea lavender, *Limonium wrightii* (Plumbaginaceae), in the northwestern Pacific Islands. J. Pl. Res., 119: 625-632.
Nakamura, K., R. R. Rubite, G. Kokubugata, Y. Kono, M. Yokota & C.-I Peng, 2013. First record of the genus *Limonium* (Plumbaginaceae) from the Malesian region. Phytotaxa, 152 (1): 56-58.
赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.
- 執筆者名** : 新城和治*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名** : コバノアカテツ
- 分類** : アカテツ科 (APG 科名: アカテツ科)
- 学名** : *Planchonella obovata* (R. Br.) Pierre var. *dubia* (Koidz. ex Nakai) Hatusima
- カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴** : 常緑の低木ないし高木。小枝や花序に褐色の短伏毛を密生する。葉は互生し、狭倒卵形または狭長楕円形で、裏面は小枝と同様の毛を密布し、革質。花は葉腋または葉痕の腋に束生し、径 5~6 mm、灰白色。液果は長楕円形で長さ 1.2 mm 前後、黒藍色に熟す。
- 分布域(県外)** : 小笠原。
- 県内の分布** : 北大東島、南大東島。
- 生育環境** : 石灰岩地の崖や林内に生える。
- 生育状況** : 自生地は狭い面積が残るだけで、個体数は極めて少ない。
- 学術的価値** : 大東諸島と小笠原諸島に隔離分布し、植物地理学上の貴重種である。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。

備考 : 基本変種のアカテツに比べて葉が小さく細い。アカテツはトカラ列島から琉球、小笠原、中国、熱帯アジア、太平洋諸島に分布する。大東諸島では、基本種のアカテツと区別が難しい個体があり、変異は連続しているようで、小笠原諸島から記載されたコバノアカテツと同一のものであるのか、詳細な研究が必要である。

文献 : 初島住彦, 1973. 大東島の植物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 9-42.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 新城和治*・澤岷安喜*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤワラケガキ

分類 : カキノキ科 (APG 科名: カキノキ科)

学名 : *Diospyros eriantha* Champ. ex Benth.

方言名 : ダマキダ (与那国島)

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 3~6 m の常緑小高木。分枝が多く、1 年枝は細くて有毛。葉は互生し、やや薄い革質、披針状長楕円形で長さ 7~10 cm、幅 1.5~3 cm、裏面の脈上に毛がある。花は葉腋に単生し、淡黄白色、4 数性。果実は卵状楕円形で密に毛があり、長さ 1.5~2 cm、黒く熟す。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、スマトラ、ボルネオ。

県内の分布 : 西表島、与那国島。

生育環境 : 山地のやや乾いた常緑樹林内に生える。

生育状況 : 与那国島の自生地 of 1ヶ所は県指定の天然記念物として保護されている。島内の数ヶ所に点在するが、個体数は少ない。本種はこれまで国内では与那国島にのみ産することが知られていたが、2007 年に西表島にも産することが判った。ごく狭い範囲の 1ヶ所に数個体を産するだけである。

学術的価値 : 分布域の東限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 自生地が限られている。森林伐採。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
与那国町教育委員会, 1995. 与那国島の植物. 与那国町教育委員会, 336pp.

執筆者名 : 新城和治*・澤岷安喜*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : コニシハイノキ

分類 : ハイノキ科 (APG 科名: ハイノキ科)

学名 : *Symplocos cochinchinensis* (Lour.) S. Moore subsp. *laurina* (Retz.) Nooteboom

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑高木。葉は広倒披針形~長楕円状倒披針形、長さ 18~22 cm、幅 5~7 cm。腋生の穂状花序は有毛、花冠は乳白色。果実は球形で径 4~5 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、インドシナ。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の川沿いの岩の多い自然林に生える。

- 生育状況 : 西表島の川沿いの自然林に点々と産する。自生地のお大半は国立公園内にあり、開発の恐れはないが、群落を作ることはなく、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

- 文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.," Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
- Nagamasu, H., 1993. The Symplocaceae of Japan. Contributions from the Biological Laboratory, Kyoto University, 28: 173-260.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和名 : トゲイボタ
- 分類 : モクセイ科 (APG 科名: モクセイ科)
- 学名 : *Ligustrum tamakii* Hatusima
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 分枝の多い匍匐性の常緑低木。高さ 15~25 cm、小枝は淡褐色、先端はしばしば針状となる。葉は対生し、倒卵状楕円形~楕円形、長さ 1~1.5 cm。枝頂に穂状花序を出し、3~4 段、各段に 5~6 花ずつつける。花冠は鐘形で白色、先は 4 裂し、筒部は長さ 2 mm、裂片の長さ 2 mm。

県内の分布 : 渡名喜島、伊良部島、与那国島。

生育環境 : 海岸または山地の風衝地の岩場に生える。

生育状況 : 与那国島では 2 ヶ所のごく狭い範囲に群生するが、そのうち 1 ヶ所一部は放牧された馬に踏みあらされている。伊良部島では 2002 年に 1 ヶ所でごく少数個体が見つかっている。渡名喜島は 2 ヶ所に産することが知られていたが、2005 年の時点で 1 ヶ所は遷移の進行により消失したことが確認され、他の 1 ヶ所では良好な生育状況の個体群が確認されている。

学術的価値 : 沖縄県の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。牛馬による踏みつけ。遷移の進行。

- 文献 : Hatusima, S., 1977. A new species of *Ligustrum* from the Ryukyus. J. Geobot., 24(3): 54-56.
- 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岬安喜*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : ヤエヤマヒイラギ (イリオモテヒイラギ)
- 分類 : モクセイ科 (APG 科名: モクセイ科)
- 学名 : *Osmanthus heterophyllus* (G. Don) P. S. +Green var. *iriomotensis* Hatusima
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 2~3 m の常緑小高木。葉は対生し、幼木の葉は披針形で全縁、ときに縁に鋭い刺を持ち、成木では倒卵形ないし楕円形、長さ 2~5 cm、幅 1~2.5 cm、縁に鋸歯がない。基本変種のヒイラギに比べて全体に小さく、葉は縁にふつう刺状の突起がない。雌雄異株。花は白色で小さく 12 月に葉腋に束生する。花冠は 4 裂して径 5 mm 前後。

- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 高地の自然林に生える。
- 生育状況 : 3ヶ所の自生地が知られ、いずれの自生地も国立公園内にあり開発の恐れはないが、自生地は限られ、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 西表島の固有変種。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 基本変種は本州（関東以西）～屋久島、台湾に分布する。本種を独立種 *O. iriomotensis* Yamazaki とする意見がある（山崎，1994）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献 : 山崎 敬，1994. 琉球からのヒイラギ属の1新種と1新変種. 植物研究雑誌, 69: 222-225.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岷安喜*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ナタオレノキ**
- 分類 : モクセイ科 (APG 科名: モクセイ科)
- 学名 : *Osmanthus insularis* Koidz.
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑小高木。葉は対生し、葉身は長楕円形あるいは長楕円状楕円形で、両端は鋭尖形、長さ 5～11 cm、幅 1.5～2 cm、全縁である。花は葉腋に束生し白花で10月に咲く。
- 分布域(県外) : 本州（福井県以西）、八丈島、小笠原、四国、九州、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、朝鮮（巨文島）。
- 県内の分布 : 渡名喜島、石垣島、西表島、与那国島、魚釣島。
- 生育環境 : 山地や時に海岸の自然林に生える。
- 生育状況 : 渡名喜島では、今回の調査で初めて確認された（阿部ら，2016）。石垣島では海岸から山地まで、点々と産することが確認されている。西表島ではまれで、個体数は少ないが、2017年にも確認されている。与那国島の現状は不明。魚釣島では、急増している野生化ヤギの影響で、食害を受けたり、自生地が悪影響を受けている可能性があるが、現状不明。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと個体数が少ない。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献 : 山崎 敬，1994. 琉球からのヒイラギ属の1新種と1新変種. 植物研究雑誌, 69: 222-225.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣，2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査II（栗国島・渡名喜島）. 日本植物園協会誌, (51): 80-85.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岷安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和名 : **ヤナギバモクセイ**
- 分類 : モクセイ科 (APG 科名: モクセイ科)
- 学名 : *Osmanthus okinawensis* Hatusima
- 方言名 : ウヌハカギー（沖縄島: 与那）
- カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 高さ3～5 mの常緑小高木。小枝は灰白色で皮目を散生する。葉は硬い革質で倒披針形～長楕円状倒

披針形、長さ5~7.5 cm、幅1~2.5 cm。花は10月に咲き、白色、葉腋に数個がまとまってつき、花冠は4裂する。

- 県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地の稜線部の風衝地や明るい林内に生える。
生育状況 : 国頭村、東村、大宜味村の数ヶ所に点在して自生するが、個体数は少ない。
学術的価値 : 沖縄島の固有種。
減少の要因 : 森林伐採。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。
備考 : 本種をナタオレノキの変種 *Osmanthus insularis* Koidz. var. *okinawensis* (Hatusima) Yamazaki とする意見がある (山崎, 1994)。
文献 : 山崎 敬, 1994. 琉球からのヒイラギ属の1新種と1新変種. 植物研究雑誌, 69: 222-225.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岬安喜*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : リュウキュウホウライカズラ

分類 : マチン科 (APG 科名: マチン科)

学名 : *Gardneria liukuensis* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の藤本。葉は対生で革質、若木の葉は線状長楕円形~線状披針形で先が尖る。花枝の葉は卵形~卵状披針形、長さ5~7 cm、幅3~4 cm。花序は腋生で、2~3花をつける。花冠は白色、5深裂し、裂片は反り返り、内面に短毛が密生する。果実は球形の液果で径約1 cm、赤く熟する。

分布域(県外) : 喜界島、沖永良部島。

県内の分布 : 沖縄島北部、渡名喜島。

生育環境 : 山地の岩上や樹上に生える。

生育状況 : 沖縄島北部(国頭村、本部半島)には数ヶ所の自生地が限られるが、個体数は少ない。渡名喜島では、2015年に1ヶ所で少数個体が確認されている(阿部ら, 2016)。

学術的価値 : 琉球列島の固有種。本種をホウライカズラ *Gardneria nutans* Sieb. et Zucc. と同種とする意見がある。

減少の要因 : 山地の開発。自生地と個体数が限られている。

文献 : Hatusima, S., 1977. Japanese species of *Gardneria*. J. Geobot., 24(4): 76-78.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ(粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : タイワンチトセカズラ

分類 : マチン科 (APG 科名: マチン科)

学名 : *Gardneria shimadae* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の藤本。葉は長楕円形~長楕円状披針形、長さ8~11 cm、幅2.5~3.5 cm、乾くと黒変する。

- 分布域（県外）：台湾。
- 県内の分布：宮古島、伊良部島、来間島？。
- 生育環境：山頂部の林内に生える。
- 生育状況：宮古島では2ヶ所、伊良部島では1ヶ所の自生地が知られる。自生地は限られ、個体数は少ない。宮古島と伊良部島の各1ヶ所は、自生地が公園として整備されており、刈り取りにより個体数が減少している。宮古島の他の1ヶ所は、今回の調査で新たに発見されたが、開発により失われる可能性がある。来間島にも産するという情報が得られたが、今回の調査では確認することができなかった。
- 学術的価値：分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因：山地の開発。自生地と個体数が限られている。

- 文献：初島住彦・天野鉄夫・宮城康一，1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告（宮古群島）”，沖縄自然研究会（編），沖縄県，31-70.
Hatusima, S., 1977. Japanese species of *Gardneria*. J. Geobot., 24(4): 76-78.

執筆者名：横田昌嗣*・澤岨安喜*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)

- 和名：ミヤココケリンドウ
- 分類：リンドウ科 (APG 科名: リンドウ科)
- 学名：*Gentiana takushii* Yamazaki
- カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴：ごく小型の二年草。茎は単一または分枝し、乳頭状突起があり、高さ3~5 cm、ロゼット葉を欠く。葉は対生し、無柄、卵形、長さ3~10 mm、幅2~5 mm、葉先は尖らない。花は各々の茎頂に単生し、萼は長さ4~6 mm、筒形、花冠は青色、筒形、長さ6 mm、5裂し、裂片の間に小裂片があり、小裂片の先は浅く2裂する。雄蕊は5個、長さ3 mm。室果は長さ10 mm。
- 県内の分布：宮古島、伊良部島、下地島。
- 生育環境：大潮の満潮時には海水に浸かるような海岸の砂が溜まった隆起サンゴ礁の岩上に生える。
- 生育状況：宮古島では2ヶ所にごく少数の個体が確認されるだけである。周辺にはゴルフ場やホテルの建設が進んでおり、生育可能な環境は減少している。伊良部島では1ヶ所、下地島では4ヶ所で確認されているが、確認できる個体数は非常に少ない。
- 学術的価値：最近になって (Yamazaki, 2000) 記載された宮古諸島の固有種である。リンドウ属は東アジアでは温帯域に産する種がほとんどであり、琉球列島の植物相を特徴づける種として貴重である。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。
- 保全対策：自生地の保全。
- 備考：近縁なリュウキュウコケリンドウ *G. squarrosa* Ledeb. var. *liukuensis* Hatusima は、屋久島、宝島、喜界島、徳之島、沖永良部島に分布する。

- 文献：Yamazaki, T., 2000. A new species of *Gentiana* from the Ryukyus. J. Jpn. Bot., 75: 280-281.
横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子，2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名：横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)・佐藤宣子(追補)

- 和名：シマアケボノソウ

分類 : リンドウ科 (APG 科名: リンドウ科)
学名 : *Swertia makinoana* F. Maek.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根生葉は6~8個、倒卵状楕円形~広卵形、長さ7~20 cm、幅3~8 cm、葉柄は長さ1~3 cm。茎葉は2~4対、長さ20 cm、幅6.5 cmになる。円錐花序は頂生し、長さ10~45 cm。花は半開し、萼は鐘形、5深裂し、長さ4~13 mm、幅3~4.5 mm、花冠は白色、上面に密に黒紫褐色の斑点がはいり、5深裂し、裂片は長さ20~32 mm、幅10~15 mm、蜜腺点は裂片の基部にある。雄蕊は5個、長さ13~20 mm、葯は長さ5~6 mm、雌蕊は長さ15~20 mm。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 海岸から山地まで幅広い環境に生育し、崖の壁面や明るい林床に生える。

生育状況 : 石垣島では3ヶ所、西表島では数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少ない。

学術的価値 : 八重山諸島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。森林伐採。

備考 : 九州南部から沖縄諸島にかけて分布するヘツカリンドウ *S. tashiroi* (Maxim.) Makino と混同され、しばしば同種として扱われてきたが、花冠裂片の大きさと色、花冠裂片の蜜腺点の位置などで明瞭に異なる別種である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Maekawa, F., 1936. *Swertia tashiroi* Makino and its allies. J. Jpn. Bot., 12: 156-161.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヒメシロアサザ

分類 : ミツガシワ科 (APG 科名: ミツガシワ科)

学名 : *Nymphoides coreana* (Lev.) Hara

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 水生の多年草。葉柄は1~10 cm、葉身は水面に浮かび、円形或いは卵形で深裂し、縁は全縁、径2~5 cm くらいで、下面は淡い赤紫色である。花は夏期に咲き、花冠は白色で径約8 mm、5深裂し、裂片の縁に短毛がある。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、種子島、朝鮮、中国。

県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島、嘉弥真島、与那国島。

生育環境 : 池や水田などの水中に生える。

生育状況 : 宮古島の現状は不明。石垣島は数ヶ所、西表島は1ヶ所、与那国島は3ヶ所で生育が確認されているが、個体数は少ない。嘉弥真島でも個体数は少ない。

減少の要因 : 水田や池の埋立。除草剤の散布。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島). “事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 立石庸一*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ゴムカズラ
 分類 : キョウチクトウ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
 学名 : *Ecdysanthera utilis* Hayata et Kawakami
 方言名 : ギチギチカツア (西表島)
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の藤本。小枝は褐色で、灰白色の皮目がある。葉は対生し、長楕円形～卵形、長さ 5～9 cm、幅 2.5～3.5 cm。花序は枝の先端について 3 分岐し、小さな花を疎らにつける。花冠は黄白色で 5 裂し、径約 2.5 cm。果実は 2 個の袋果が対をなして約 180 度を開出し、各々の分果は線状円柱形で長さ 15～19 cm。
 分布域 (県外) : 台湾、中国南部 (広東省、海南島)、インドシナ、インド。
 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 山地の林内に生え、高木に這い上がり、葉や花実が高木の梢の方でつける。
 生育状況 : 西表島では数ヶ所で自生が確認されているが、個体数は少ない。西表島の自生地の大半は国立公園内にあり、開発の恐れは少ない。石垣島の現状は不明。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : 低地林の開発。もともと自生地が限られ個体数が少ない。
 備考 : 樹液を固めるとゴムの代用となるが、品質が劣るので現在は利用されない。ゴムとしての利用が絶滅の要因になっているかどうかは不明。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

和名 : シマソケイ
 分類 : キョウチクトウ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
 学名 : *Ochrosia oppositifolia* (Lam.) K. Schum.
 方言名 : ヤマフクン (石垣島)
 カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の小高木。葉は 3～6 枚輪生し、広倒披針状へら形～へら状倒卵形、長さ 7～20 cm、幅 4～8 cm。枝先に複集散花序を出し多数の花をつける。花冠は白色で長さ約 1 cm、多肉質、5 裂して裂片は平開する。果実は 2 分果が対生し、その各々は長楕円形、長さ約 6 cm、幅約 3 cm、橙黄色に熟する。材は有用。
 分布域 (県外) : スリランカ、アンダマン諸島、マレーシア、ミクロネシア。
 県内の分布 : 宮古島、伊良部島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 海岸近くや低地の林内に生える。
 生育状況 : 自生地は少なく個体数も少ない。宮古島では 1 ヶ所に数個体を産することが確認されている。西表島では 2 ヶ所で生育が確認されているが、1 ヶ所は自生地のすぐ近くまで開発されて生育環境が悪化し、以前確認されていた成熟個体は枯死してしまい、稚樹だけが残っている。石垣島では 1973 年に確認された後、永らく現状が不明であったが、2017 年に 1 ヶ所で数個体の成熟個体が確認された。ただし、一部の個体は道路工事で伐採された。伊良部島では生育は確認できなかった。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : 低地林の伐採。材木の採取。自生地と個体数が限られている。
 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和名 : マメツタカズラ

分類 : ガガイモ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)

学名 : *Dischidia formosana* Maxim.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 樹上に着生する繊細な匍匐性の着生多年草。全株無毛、茎は細く、直径 1 mm 内外、節から出る着生根で樹幹にはりつく。葉は互生し多肉質で粉白色を帯び、広卵形～円形で先端はくぼみ、長さ 1 cm くらい。葉腋に出した花序に 4～5 花をつける。花は乳白色で長さ約 4 mm、花冠は壺形では 5 裂、裂片の内面に密毛がある。

分布域 (県外) : 台湾。

県内の分布 : 魚釣島。

生育環境 : 山頂付近の雲霧帯の樹上や岩上にへばりつくように着生する。

生育状況 : ごく狭い範囲に数個体があるだけである。魚釣島では野生化ヤギの増殖により、森林生態系が大きく悪影響を受けており (横畑・横田, 2000 ; Yokohata *et al.*, 2003 ; 横畑ら, 2009)、本種を初め魚釣島に産する種の生育環境の悪化と絶滅が危惧される。

学術的価値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の産地であり、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。野生化ヤギの食害による森林の荒廃。

保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.

初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.

横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5(1-2): 1-12.

Yokohata, Y., Y. Ikeda, M. Yokota & H. Ishizaki, 2003. Effects of introduced goats on the ecosystem of Uotsurijima in the Senkaku Islands, Japan, as assessed by remote-sensing techniques. Bios. Conserv. 5(1): 39-46.

横畑泰志・横田昌嗣・太田英利, 2009. 尖閣諸島魚釣島の生物相と野生化ヤギ問題. "IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No. 42 (松尾雅嗣教授退職記念論文集)", 広島大学平和科学研究センター, 広島市, 307-326.

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名 : キジョラン

分類 : ガガイモ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)

学名 : *Marsdenia tomentosa* Morren et Decne.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の藤本で小枝は灰緑色で初めは圧毛があるが、後には無毛となる。葉は円心形で厚質、長さ 6～11 cm、全縁、上面は無毛で緑色、下面は淡緑色で圧毛がある。花は葉腋の集散花序につくが、その柄は長さ 1～2.5 cm、花冠は鐘状で 5 中裂し、径 4 mm ほど、花筒の喉部は密に毛が生える。

分布域 (県外) : 本州 (関東以南西南)、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、朝鮮南部。

県内の分布 : 沖縄島北～中部、伊江島。

生育環境 : 山地の林内に木にからみついて生える。

- 生育状況 : 沖縄島では、非石灰岩地にも生育するが、主として石灰岩地に生育し、自生地は限られ個体数は少ない。伊江島でも発見されている（立石ら，2004）。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。

- 文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ（陸域・海域）. 沖縄建設弘済会，3-14，117-135，277-286，349-373.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，3-9，99-12.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，5-13，151-168.
 立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治，2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌，(42) : 61-67.

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ケナシツルモウリンカ**
- 分類 : ガガイモ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
- 学名 : *Tylophora tanakae* Maxim. var. *glabrescens* Hatusima ex Yamazaki
- カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : つる性の多年草。全株ほとんど無毛で、茎は長さ 30~100 cm に達する。葉は対生し、卵状楕円形~楕円形、長さ 2~7.5 cm。葉腋に散形状の集散花序を出し、やや疎らに花をつける。花は淡黄色で直径約 5 mm、5 深裂する。
- 分布域(県外) : 宇治群島、トカラ列島 (平島)。
- 県内の分布 : 北大東島、南大東島、宮古島、与那国島。
- 生育環境 : 海岸の草原から山地部の林縁まで、幅広い環境に生える。
- 生育状況 : 自生地は少なく、個体数も少ない。南・北大東島ではそれぞれ数ヶ所で少数個体が確認されている。与那国島では、2011 年に 1 ヶ所で少数個体が確認されている。宮古島の現状は不明。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。
- 備考 : 伊豆七島、九州から琉球に分布する基本変種ツルモウリンカの無毛形である。基準産地は、北大東島である。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。
- 文献 : 横田昌嗣・宮城康一，1992. 大東諸島の植物相。“ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”，沖縄県教育委員会，17-42.
 西浜良修，2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—。南大東村教育委員会，77pp.

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **スズサイコ**
- 分類 : ガガイモ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
- 学名 : *Vincetoxicum pycnostelma* Kitag. (= *Cynanchum paniculatum* (Bunge) Kitag.)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 高さ 50 cm になる多年草。茎は直立し無毛。葉は洋紙質、狭披針形~線形で両端がとがり、長さ 6

～12 cm、幅4～15 mm、辺縁に毛があり、ざらつく。集散花序は枝の上方の葉腋に疎らにつく。花冠は黄褐色で5深裂し、裂片は開出する。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、馬毛島、徳之島、朝鮮、中国。
県内の分布：久米島。
生育環境：低地の日当たりのよい草地に生える。
生育状況：県内では久米島のみから記録されており、証拠標本は鹿児島大学総合研究博物館（KAG）に収蔵されているが、近年は全く確認されていない。草地や原野の多くが、土地改良やダム建設で失われており、絶滅した可能性がある。
減少の要因：低地の開発。土地改良。もともと自生地と個体数が少ない。

文献：初島住彦・天野鉄夫，1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”，沖縄県，1-39.

執筆者名：立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名：ヨナクニカモメヅル

分類：ガガイモ科（APG科名：キョウチクトウ科）

学名：*Vincetoxicum yonakuniense* (Hatusima) Yamashiro et Tateishi

カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR）

形態の特徴：葉柄上部を除き、全株無毛の藤本。葉は対生、卵状楕円形、側脈は2～3対あり下面に突出。腋生の集散花序に4～5花をつけ、花冠は乳白色、径2 cmくらい、5深裂し、裂片は三角状披針形。

県内の分布：与那国島、魚釣島。

生育環境：低地の林縁に生える。

生育状況：与那国島の3ヶ所で確認されているが、個体数は極めて少ない。1979年に採集された標本を元に魚釣島からも報告されているが（Yamashiro *et al.*, 2003）、魚釣島の現状は不明で、野生化ヤギの増殖による森林生態系の荒廃と食害により絶滅している可能性がある。

学術的価値：沖縄県の固有種である。

減少の要因：低地林の伐採。道路工事。もともと個体数が極めて少ない。野生化したヤギの食害による森林の荒廃（魚釣島）。

保全対策：与那国島では、林道の拡幅工事によって一部の個体や自生地が失われている。魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

文献：初島住彦・金井弘夫，1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報，(7)：115-120.

Hatusima, S., 1977. A new species of *Cynanchum* from the Ryukyus. *J. Geobot.*, 25(2): 26-27.

Yamashiro, T., Y. Tateishi & M. Maki, 2003. *Vincetoxicum yonakuniense*, a new combination of Asclepiadaceae and its new distribution record on Senkaku Islands, Ryukyu. Archipelago. *Acta Phytotax. Geobot.*, 54(1): 31-36.

執筆者名：立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名：ヤエヤマハシカグサ

分類：アカネ科（APG科名：アカネ科）

学名：*Hedyotis auricularia* L.

カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類（CR）

- 形態の特徴 : 多年草。高さ 30~50 cm、小枝は白い粗毛が密生する。葉は対生し、葉身は長楕円状披針形で長さ 3~8 cm、表面は無毛、裏面は粉末状の短毛がある。花は葉腋に多数束生し、花冠は白色。果実は球形。
- 分布域(県外) : 中国南部、ヒマラヤ、インド、ジャワ、オーストラリア。
- 県内の分布 : 与那国島。
- 生育環境 : 山裾の草地に生える。
- 生育状況 : 1970年代に数回採集されているが、その後確認されいない。今回の調査でも数回にわたって、かつて採集された場所をかなり綿密に踏査したが、見つけることはできなかつた。絶滅した可能性がある。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、日本での唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。遷移の進行。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
- 文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **オオソナレムグラ**
- 分類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
- 学名 : *Hedyotis strigulosa* Bartl. var. *luxurians* (Hatusima) Yamazaki
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。ソナレムグラ *H. strigulosa* Bartl. に似るが、根茎は太く、径 5 mm になり、茎は匍匐するかやや直立し、長さ 20~40 cm になり、節間は長さ 2.5~4 cm。葉は対生し、革質、長さ 3~4.5 cm。花は頭状にやや密集することで異なる。
- 県内の分布 : 北大東島、南大東島、沖大東島。
- 生育環境 : 海岸の隆起石灰岩の岩上に生える。
- 生育状況 : もともとはやや普通に生える種であるが、近年は港や公園、臨海道路などの建設が進み、自生地と個体数が減少している。南大東島の自生地の一つは、国指定の天然記念物として保護されている。
- 学術的価値 : 大東諸島の固有変種。
- 減少の要因 : 自生地の開発。道路建設。
- 文献 : 初島住彦, 1961. 日本及び台湾産フタバムグラ属数種について. 植物研究雑誌, 36: 296-298.
宮城康一, 1992. 沖大東島の植物相と現存植生. 沖縄生物学会誌, (30): 65-70.
西銘盛光・横田昌嗣, 1996. 南大東島海岸植物群落内における観察所建設の影響調査報告書. 沖縄県教育庁文化課紀要, (12): 47-62.
山崎 敬, 1983. フタバムグラ、シマフタバムグラとその近縁種について. 植物研究雑誌, 58: 281-286.
西浜良修, 2004. “隆起環礁の島—南大東島の植物—”, 南大東村教育委員会, 77pp.

- 執筆者名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ヒロハケニオイグサ**

- 分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
- 学 名 : *Hydiotis verticillata* (L.) Lam.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。全体に粗毛を密生し、葉は披針形～楕円状披針形で、長さ 2～6 cm、幅 4～8 mm。花は白色、蒴果は卵円形で毛がある。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア。
- 県内の分布 : 久米島、慶良間諸島(座間味島)、西表島。
- 生育環境 : 常緑樹林の明るい林床、道路の法面やわだちの中、湿った林縁などのやや明るい環境に生える。
- 生育状況 : 産地・個体数とも少ない。久米島では、島内各地の数ヶ所で確認されている。西表島では、2ヶ所で確認されているが、個体数は極めて少ない。座間味島では 1972 年に標本が採集されてるが、現状は不明。
- 減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。除草剤の使用。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和 名 : ニコゲルリミノキ
- 分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
- 学 名 : *Lasianthus bunzanensis* H. Shimizu
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)
- 形態の特徴 : 常緑低木。葉は楕円形～倒楕円形、長さ 7～10 cm、幅 3～5 cm、鋭尖頭、表面は黄緑色である。花は葉腋に数個つき、白色、萼裂片は三角形で小さい。
- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
- 生育環境 : 山地の陰湿な林内に生える。
- 生育状況 : 沖縄島北部では 4 河川の流域に産するが、極めてまれである。西表島では島内に広く分布するが、個体数は少ない。
- 減少の要因 : 森林の伐採(沖縄島)。もともと個体数が少ない。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 亀島 修, 1991. ニコゲルリミノキ西表島に産す. 沖縄生物学会誌, (29) : 53-54.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
横田昌嗣・豊見山元, 1993. 琉球列島植物分布資料 11. 沖縄生物学会誌, (31) : 67-69.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヤエヤマアオキ

分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
 学 名 : *Morinda citrifolia* L.
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 3~10 m に達する常緑性の小高木、小枝は太く 4 稜形。葉は対生、革質、楕円形~長楕円形、長さ 12 ~25 cm、鋭尖頭から鋭頭または鈍頭、全縁、表面は光沢がある。葉柄は長さ 1 cm 以下、托葉は大きく広楕円形~半円形、鋭頭、全裂または 2~3 裂する。頭状花序は 1 対の葉と 1 つおきに葉と対生してつき、花梗は長さ 1~3 cm、密花をつけ、卵円形または円形、径 1~1.5 cm、萼筒は切頭、花冠は白色、長さとは径は 1 cm くらい、裂片は 5 個、葯は一部抽出する。液質の集合果は卵円形、白色または帯緑白色に熟し、径 3~6 cm、潮流によって散布される。

分布域(県外) : 小笠原、台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア、ポリネシア。

県内の分布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。

生育環境 : 海岸の主に砂地の比較的照度の低い林内に生育し、林分の低木層を形成する。

生育状況 : 生育地と個体数とも沖縄諸島では少なく、八重山諸島では広く分布する。以前は海岸に普通に見られたが、近年は盗掘により激減している。

学術的価値 : 熱帯要素の樹種で、沖縄諸島は北限地となっており、多種の熱帯性樹種からなる海岸植生の重要な構成種である。

減少の要因 : 沿岸域の護岸工事やその他の開発により、また近年、本種は薬用及び染料植物資源として注目され、盗掘で急速に個体数が減少している。

保全対策 : 挿し木や種子繁殖が可能なので、盗掘を防止するためには、薬用作物として畑地で増殖、栽培し、自然の生育地及び個体群を保護する必要がある。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 新里孝和*・前津栄信*

和 名 : ハシカグサ

分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)

学 名 : *Neanotis hirsuta* (L. f.) W. H. Lewis

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。茎は分枝して広がり、長さ 40 cm くらいに達し、無毛またはわずかに毛がある。葉は対生し、葉身は狭卵形~卵形で長さ 1.5~6 cm、幅 5~20 mm、先は鋭頭、基部は鋭尖形、表面はわずかに毛があり、裏面は無毛または粗毛を散生する。花は葉腋に 1~2 個つき、白色、花冠は長さ 3~4 mm。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、トカラ列島、中国、ヒマラヤ、東南アジア。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 山地の川の中州の中や、川辺の斜面に生える。

生育状況 : 沖縄島では 1 ヶ所で記録されているが、今回の調査では確認できなかった。西表島では 2 ヶ所に産することが知られており、その内の 1 ヶ所では 2005 年に少数個体が確認されている。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岬安喜*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒジハリノキ (シナミサオノキ)

分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)

学 名 : *Randia sinensis* (Lour.) Romer et Schult.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 1~4 m の常緑低木。枝に小枝の変形した 1 対の開出した太い刺がある。葉は対生、長楕円形~楕円形、長さ 3~10 cm、幅 1~4 cm。集散花序は頂生し、多数の花を密につける。花冠は白色、筒部は細く、長さ 15~20 mm、内面に軟毛が生え、先は 5 裂または 4 裂する。花は夜間にクチナシのような芳香を放つ。果実は球形の液果で径約 8 mm、黒く熟す。

分布域(県外) : 台湾、中国南部。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 低地林内の石灰岩地域に生える。

生育状況 : 自生地は近接した 3ヶ所のみ知られ、個体数は少ない。その内 1ヶ所は空港建設により失われたが、近隣の場所に移植が試みられている。最も大きな自生地は、国指定史跡に指定されているが、史跡管理のための過度の植生の伐採には注意する必要がある。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 低地林の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岬安喜*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヘツカニガキ

分 類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)

学 名 : *Sinoadina racemosa* (Sieb. et Zucc.) Ridsdale

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 20 m に達する落葉高木。若枝には微毛があるが、のち無毛となる。葉は対生、葉身は卵形から卵状長楕円形、長さ 5~10 cm、幅 4~7 cm、急鋭尖頭、円脚~切脚または浅心脚、全縁、うすい革質、両面にはじめ微毛があるが上面は後に無毛となり光沢がある。葉柄は長さ 3~6 cm で無毛。托葉は合生し、早落性。頭状花序は数個集まって長さ 5~6 cm の総状花序となり、頭状花序は径 1.5 cm くらい、褐色毛がある。萼裂片は 4~6 個、棍棒状、長さ 1 mm、褐色毛がある。花冠は淡黄白色、筒状漏斗形、長さ 7 mm くらい、外面に短毛を密生し、裂片は 5 個、卵形、長さ 0.5 mm くらい。朔果はくさび形、長さ 3 mm くらい。

分布域(県外) : 四国、九州南部、種子島、屋久島、徳之島、台湾、中国(中部~南部)。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島北~中部、久米島。

生育環境 : 低地から山地の森林に点在するが、林縁など明るいところにも生育する。

生育状況 : 最近、沖縄島北部と中部の数ヶ所では 2004 年に、伊平屋島と伊是名島では 2005 年に確認されているが、いずれの生育地でも個体数は少ない。久米島では、2016 年に 1ヶ所で数個体が確認されている。

学術的価値 : 常緑樹の多い琉球列島産アカネ科では数少ない落葉樹で、南日本、琉球から台湾、中国にわたって分布する樹種として希少である。

減少の要因 : 生育地の開発、伐採、碎石。石灰岩地によく生育し、碎石産業によって個体数が減少するとともに生育環境の変化、消失が危惧される。

保全対策 : 生育地の保全。

文 献 : 新里孝和・澤岬安喜, 1979. 名護市の御嶽林. “名護市天然記念物調査報告 2”, 名護市教育委員会, 179pp.

執筆者名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ナガバアサガオ

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学名 : *Aniseia martinicensis* (Jacq.) Choisy

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑のつる性多年草で、全株無毛。葉は長楕円形で長さ 5~7 cm、幅 1.3~1.5 cm、先は通常凹入し、基部はくさび形。花は葉腋に 1 個つき、花冠は鐘形で白色、直径 2.5 cm くらい。

分布域(県外) : フィリピン、インド、マレーシア、ポリネシア、熱帯アフリカ。

県内の分布 : 北大東島、南大東島?。

生育環境 : 島の中央部の湿地帯に生える。

生育状況 : 北大東島の自生地は 4 ヶ所のみで個体数は極めて少ない。自生地は埋立により面積が急減している。今回の調査で南大東島の 1 ヶ所でも確認された。ただし、南大東島へは、北大東島産の種子を蒔いたという情報もあり、本来の野生かどうか疑問が残る。

学術的価値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 湿地・池沼の開発と埋立。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章, 1997. 北大東島の池・湿地帯の植生. “特殊鳥類等生息環境調査, 伊平屋島・久米島・南大東島・北大東島湿地編”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 153-161.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・松村俊一・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ハマネナシカズラ

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学名 : *Cuscuta chinensis* Lam.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : つる性寄生植物。茎は糸状で無毛。鱗片葉は三角状卵形。花は短い柄の先に数個密集する。花冠は白色で、長さ約 2.5 mm、中程まで 5 裂し、花柱は 2 個、マメダオシによく似るが、果実が花冠より短く、熟すと花冠の基部をやぶってふくれるので区別がつく。

分布域(県外) : 本州中部、四国、九州、朝鮮、台湾、中国、東南アジア、オーストラリア、アフリカ。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島。

生育環境 : 海浜の半安定帯から安定帯にかけて生育し、ハマゴウなどに寄生する。

生育状況 : 現在確認されるものは、ほとんどは外来種のアメリカナシカズラ *C. campestris* Yuncker で、本種は近年は全く確認されていない。

減少の要因 : 生育地の開発。もともと個体数が極めて少ない。外来種との競合。

執筆者名 : 立石庸一*・新納義馬*・横田昌嗣(追補)

和名 : マルバアサガオガラクサ

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学 名 : *Evolvulus alsinoides* (L.) L.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 多年草。茎は匍匐または斜上し、長さ 20~80 cm、葉とともに銀色の長毛を密生する。葉は広卵形~広卵状披針形。花冠は淡青色、車輪状で 5 浅裂し、径 6~8 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、マレーシア、インド、東南アジア。

県内の分布 : 石垣島、与那国島。

生育環境 : 海岸近くの原野や牧場に生える。

生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。

減少の要因 : 海岸近くの低地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 変種のアサガオガラクサ var. *decumbens* (R.Br.) Ooststr. は、伊是名島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島に分布し、台湾、中国南部、東南アジアに産する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 与那国町教育委員会, 1995. 与那国島の植物. 与那国町教育委員会, 336pp.

執筆者名 : 新城和治*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **アツバアサガオ**

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学 名 : *Ipomoea stolonifera* (Cyrillo) J. F. Gmelin

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 匍匐性の多年草。全株無毛。葉は厚く、卵状長楕円形~長楕円形、全縁または 3~5 裂し、長さ 1.5~3.5 cm、幅 6~20 mm。花は長さ 2.5 cm くらいの柄の先に 1~3 個つく。花冠は漏斗形、白色で基部は黄色、長さ 4~5 cm。

分布域(県外) : 九州南部、種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、台湾、熱帯アジア。

県内の分布 : 伊平屋島、野甫島、沖縄島、伊江島、座間味島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 自然度の高い海岸の砂浜に生える。

生育状況 : 砂浜の減少と人や車による踏みつけにより個体数は減少している。沖縄島、伊平屋島、野甫島、伊江島、石垣島、西表島ではそれぞれ 1 ヶ所で確認されているが、西表島は自生地の改変で絶滅した可能性がある。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 海岸の開発。砂の採取。人や車による踏みつけ。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 新城和治*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **オオバケアサガオ**

分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)

学 名 : *Lepistemon binectariferum* (Wall.) O. Ktze. var. *trichocarpum* (Gagnep.) Ooststr.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : つる性の多年草。茎は葉柄とともに開出する長毛がある。葉は卵形~卵円形、長さ 5~12 cm、両面に長い軟毛がある。集散花序は腋生し、多数または少数の花を密につける。花は小さく、花冠は淡

黄色、壺形、長さ1~1.5 cm。

- 分布域（県外）：台湾（蘭嶼）、フィリピン、マレーシア。
 県内の分布：石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境：低地の原野、耕作地、二次林の林縁部に生え、やや攪乱された環境を好む。
 生育状況：与那国島では人里近くの林縁や草地に点々とはえ、数ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。石垣島からの報告（立石ら，2004）は、他種の誤認であることが判ったが、2005年に新たに見つかった。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：低地の開発。もともと自生地が限られている。

文献：立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治，2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌，(42)：61-67.

執筆者名：新城和治*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名：オオバハマアサガオ
 分類：ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)
 学名：*Stictocardia tiliifolia* (Desr.) Hallier f.
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：大形のつる性多年草。葉は卵形または円形、長さ6~15 cm。花は葉腋に単生し、花冠は広い漏斗形、径5~6 cm、紅紫色。果実は花後伸長した萼に完全に包まれる。
 分布域（県外）：小笠原、台湾、熱帯アジア、マレーシア。
 県内の分布：宮古島、石垣島、西表島。
 生育環境：低地や海岸の低木林の林縁に生える。
 生育状況：石垣島北部の海岸の数ヶ所と西表島の1ヶ所で確認されている。宮古島については、1973年に採集された標本があるが、現状は不明。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
 備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文献：知念美香，1993. 石西礁湖小島嶼の植物相。沖縄島嶼研究，(11)：75-105。
 前津栄信・松島昭司，1999. 安良の植物。“石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”，石垣市総務部市史編集室（編），石垣市，129-226.

執筆者名：新城和治*・北原 孝*・前津栄信*・横田昌嗣(追補)

- 和名：トゲミノイヌチシャ
 分類：ムラサキ科 (APG 科名: ムラサキ科)
 学名：*Cordia cumingiana* Vidal
 カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴：約7 mに達する落葉性の小高木。葉は卵状披針形~楕円形、頂端は鋭形から鋭先形、基部は鈍形、

長さ9~15 cm、幅2.5~8 cm両面に粗毛が生える。枝先に集散花序をつけ多数の花を密につける。花冠は白色、筒状で先は5裂する。萼筒は縦方向に10本の肋があり、長さ約4 mmで、花筒部を包む。核果は白色半透明の液果、楕円形で長さ13 mm、幅8 mm。種子は1 (~2) 個、斜楕円形で、斜めの大きな針状突起が数個ある。

- 分布域 (県外) : 台湾、フィリピン。
県内の分布 : 石垣島、西表島、魚釣島。
生育環境 : 低地部の森林に生えるが、群生することはない。
生育状況 : 石垣島では2005年に1個体が確認されたが、その後道路拡張工事で伐採されて消失し、その後新たな個体は見つかっていない。今回の調査で西表島では3ヶ所で確認されており、その内の1ヶ所では複数個体が確認されている。魚釣島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。台湾と琉球列島の集団は、フィリピンから記載された *C. cumingiana* とは異なる種 *C. aspera* G. Forst. subsp. *kanehirae* (Hayata) H. Y. Liu とする見解 (Liu, 1998) もあり、分類学的再検討が必要である。
減少の要因 : 自生地と個体数が限られている。野生化ヤギによる食害と植生の破壊 (魚釣島)。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
文献 : Liu, H.-Y., 1998. An enumeration of Taiwan Boraginaceae. *Taiwania*, 43(2): 123-131.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

和名 : カキバチシャノキ
分類 : ムラサキ科 (APG科名: ムラサキ科)
学名 : *Cordia dichotoma* G. Forst.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 落葉性の中高木。葉は互生、卵形~円心形、長さ9~12cm、幅4.5cm、葉柄は長さ3~4cm。集散花序は頂生または腋生し、花は淡黄色、花冠は径7mm、5裂し、雄蕊は5個、子房は卵形、核果は球形、径1.2cm、黒熟する。
分布域 (県外) : 奄美大島、喜界島、与論島、台湾、インド、タイ、中国南部、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島、小浜島。
生育環境 : 海岸林や低地 (特に石灰岩地) の常緑樹広葉樹林に生える。
生育状況 : 西表島では数ヶ所に点々と産するが、群落を作ることはなく個体数は少ない。小浜島では1個体が確認されている。沖縄島北部では数回確認されているが、近年は確認されていない。石垣島の現状は不明。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。低地に生えるため、自生地が開発で失われている。

執筆者名 : 横田昌嗣・加島幹男・阿部篤志

和名 : シマスナビキソウ (タイワンルリソウ)
分類 : ムラサキ科 (APG科名: ムラサキ科)
学名 : *Cynoglossum lanceolatum* Forssk. var. *formosanum* (Nakai) Hara
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴** : 一～二年草。茎は高さ 30～50 cm、全株に短い圧毛が密に生えて灰白色を呈し、ざらつく。根生葉は倒披針形、長さ 10～14 cm、茎葉は披針状長楕円形～披針形。花序は総状で花を密につけ、長さ 10～20 cm。花は淡青色で花冠は径約 3 mm、先は 5 裂。果実は 4 分果からなり、全面にかぎ状の刺がある。
- 分布域（県外）** : 九州、奄美大島、徳之島、与論島、台湾、中国南部、インド、アラビア、アフリカ。
- 県内の分布** : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、慶良間諸島、西表島。
- 生育環境** : 海岸や低地の草原や林縁に生える。崖崩れの跡地や崩壊地で見られることもあり、やや攪乱された環境を好むようで、遷移が進んで樹木に覆われると衰退する。
- 生育状況** : 沖縄島で 1938 年に、伊平屋島で 1958 年に、伊是名島で 1973 年に、慶良間諸島で 1960 年にそれぞれ採集されているが、その後は確認されておらず、現状は不明。2002 年に西表島で採集された標本があるが、その場所では現在は見られない。道路脇であるため、工事用の資材と共に持ち込まれた可能性がある。
- 減少の要因** : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。遷移の進行。
- 備考** : 竹富町希少野生動植物種（2017 年）。

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

- 和名** : リュウキュウチシャノキ
- 分類** : ムラサキ科 (APG 科名: ムラサキ科)
- 学名** : *Ehretia dichotoma* Blume
- カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形態の特徴** : 常緑高木。葉は卵状長楕円形でほぼ全縁、長さ 10～12 cm、幅 4～5.5 cm。集散花序は頂生し、花は白色、花冠は漏斗形、径約 3 mm、5 裂して裂片は反りかえる。果実は球形で径約 4 mm、赤褐色に熟する。
- 分布域（県外）** : 台湾（蘭嶼）、フィリピン、マレーシア、オーストラリア。
- 県内の分布** : 宮古島、石垣島、西表島、竹富島、波照間島、鳩間島、小浜島。
- 生育環境** : 低地や海岸の主として石灰岩地の常緑樹林に生える。
- 生育状況** : 石垣島と西表島では数ヶ所で確認されているが、道路脇に生える個体はしばしば伐採されている。石垣島の自生地の一つは県指定の天然記念物として保護されていたが、枯死した。今回の調査で宮古島からも成熟個体が発見されたが、道路脇に生育するため、2017 年に大半が伐採された。竹富島では、2017 年に 2 ヶ所で十数個体が確認された。鳩間島では 2017 年に 1 ヶ所で 2 個体が確認された。波照間島では 2015 年に確認された。小浜島の現状は不明。いずれの島でも個体数は少ない。
- 学術的価値** : 分布域の北限である。
- 減少の要因** : 低地林の開発。道路工事。自生地と個体数が限られている。
- 保全対策** : 自生地の保全。
- 備考** : 沖縄県指定天然記念物（宮島御嶽のリュウキュウチシャノキ）（1959 年）、沖縄県指定天然記念物（小浜御嶽のリュウキュウチシャノキ）（1959 年）。竹富町特別希少野生動植物種（2017）。

- 文献** : Shinjo, K., 1977. Flora of Hatoma Island, the Yaeyama Islands. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 3: 29-40.
横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・小林史郎*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)・佐藤宣子(追補)

和名 : ナンバンルリソウ

分類 : ムラサキ科 (APG 科名: ムラサキ科)

学名 : *Heliotropium indicum* L.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 15~50 cm に達する一年草。茎は直立し分枝して粗毛がある。葉は対生または互生、卵形~卵状楕円形で上面は縮れ、縁は波状。渦巻状の穂状花序は頂生または葉と対生し、花は花序の片側につき下方から開花する。花冠は淡青色、管状で上部は浅く 5 裂し、外側に毛がある。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 日当たりのよい低地部に生える。

生育状況 : 与那国島で 1984 年に、宮古島で 1973 年に確認されているが、現状は不明。他の島についても現状は不明。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 天野鉄夫・新納義馬, 1980. 億首川の紅樹林及びその周辺の植物. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 伊是名城跡・大浦川のマングローブ林・億首川のマングローブ林”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 79-100.

池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 8 巻. 新星図書出版, 166.

執筆者名 : 立石庸一*・新納義馬*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒルギダマシ

分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: キツネノマゴ科)

学名 : *Avicennia marina* (Forssk.) Vierh.

方言名 : カネプシ (西表島)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の小高木。根は泥地内を水平に走り、多数の呼吸根を泥土上に直立させる。小枝はまるく 4 縦稜があり無毛、若枝には鱗片状の毛が密生して灰白色になる。葉は対生し、革質、倒卵状長楕円形で全縁、長さ 4~8 cm、表面は無毛で光沢があるが裏面は粒状毛が密生して灰白色を呈する。雌雄異株。花序は葉腋または枝先につき、数個の花を頭状につける。花冠は黄色で筒部は長さ 1 mm、先は 4 裂して径 4~5 mm。果実は卵円形、長さ 1.5~2.5 cm、灰白色に熟す。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、東南アジア、太平洋諸島、オーストラリア、東アフリカ。

県内の分布 : 宮古島、石垣島、小浜島、西表島。

生育環境 : マングローブ林の前面部に生える。

生育状況 : 西表島東南部と石垣島西部ではやや多く、石垣島についてはラムサール条約登録湿地に指定され保全されているため、絶滅の恐れは少ないが、宮古島と小浜島では個体数が限られる、開発により消失する恐れがある。沖縄島の 2ヶ所では、人為的に植えられたものが繁殖し、広がっている。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 道路工事。埋め立て。上流域からの土砂流出による陸化。

備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

保全対策 : 生育地の保全。本来の自生地では保全対策が必要であるが、分布しない島嶼に新たに導入することは、避けるべきである。

文献 : 西平守孝, 1975. 八重山の潮間帯—1975. 琉大海洋保全研究会, 190pp.
 西平守孝, 1976. 宮古の潮間帯—1976, 琉大海洋保全研究会, 162pp.
 西平守孝, 1978. 西表の潮間帯—1978. 沖縄県自然保護課, 158pp.
 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

執筆者名 : 新里孝和*・新納義馬*・洲鎌栄徳*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ホウライムラサキ**

分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: シソ科)

学名 : *Callicarpa formosana* Rolfe

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 高さ 3~5 m に達する落葉低木。小枝には淡黄褐色の軟毛がある。葉は対生し、卵状長楕円形~楕円形、長さ 5~17 cm、幅 3~9 cm、8~9 対の側脈があり、表面は毛が散生してざらつき、裏面は黄褐色の星状毛と腺点がある。集散花序は腋生し、長くて細い柄があり密に多花をつける、花冠は紅紫色で 4 裂し径 1.5 mm くらい。果実は球形、径 2~3 mm、紫紅色に熟する。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 低地の明るい林内や林縁に生える。

生育状況 : 自生地は 1ヶ所のみで、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 低地の開発。ダム建設による水没。公園整備での過度の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。個体数が極めて少ないので、人工増殖を検討する必要がある。自生地の一部は、城趾公園や多目的広場として整備されており、公園管理の過程で林縁にある本種が伐採される事例が 2017 年に確認されている。公園の管理者に管理方法を周知する必要がある。

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **オキナワヤブムラサキ**

分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: シソ科)

学名 : *Callicarpa oshimensis* Hayata var. *okinawensis* (Nakai) Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 2~3 m の落葉低木。小枝は灰白色で星状毛がある。葉は対生し、菱形状卵形、長さ 2.5~7 cm、幅 1.5~4 cm。花冠は筒状で、淡紅紫色、長さ約 3 mm。果実は球形で紫色に熟し、径約 2.5 mm。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の尾根部や斜面の明るい林内に生える。

生育状況 : 国頭村、東村、大宜味村の特に高海拔地に点在し、個体数は少ない。

学術的価値 : 沖縄島の固有変種で、基本種オオシマムラサキ、オキナワヤブムラサキおよびイリオモテムラサキは、琉球列島の島嶼間で分化しており、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

保全対策 : 生育地の保全。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-113.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ(陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-12.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.

執筆者名 : 新里孝和*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ホソバムラサキ**

分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: シソ科)

学名 : *Callicarpa pilosissima* Maxim.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 3~5m になる常緑の低木、茎は生長しながら花と果実をつける。小枝と葉には密に淡黄褐色の軟毛が生える。葉は対生し、柔らかく、狭披針形、長さ 10~18cm、幅 2~3cm、葉柄は長さ 1cm 以下。集散花序は葉腋に生じ、径 2~3cm、総花梗は長さ 1~4cm、密に多花をつける。花は淡紅紫色~桃色、花冠は長さ 2mm、雄蕊は長さ 5~8mm、果実は球形、径 4mm、淡紅紫色。

分布域(県外) : 台湾、中国南部。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の日当たりの良い常緑樹林の林縁に生える。

生育状況 : 1ヶ所に 1 個体を産するだけである。この個体は良く開花・結実するが、周囲には幼植物は見られない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内では唯一の産地である。西表島と台湾との植物相の共通性を示しており、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 島袋ときわ・加島幹男・阿部篤志・横田昌嗣・大川智史, 2016. ホソバムラサキ. “琉球の樹木”, 大川智史・林将之(編著), p. 406. 文一総合出版, 東京.

執筆者名 : 横田昌嗣・加島幹男・阿部篤志

和名 : **ハマクサギ**

分類 : クマツヅラ科 (APG 科名: シソ科)

学名 : *Premna microphylla* Turcz.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉小高木。葉は対生し、卵状楕円形~広卵形、長さ 6~13 cm、幅 3~8 cm、全縁だが若木のものには数個の大きな鋸歯があり、もむと臭気がある。円錐花序は頂生し、小形の花を疎らにつける。花

冠は淡黄色、筒状で上部は4裂し、長さ5~10 mm。果実は球形で径約4 mm、黒紫色に熟す。

- 分布域（県外）： 本州（近畿以西）、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国。
 県内の分布： 魚釣島。
 生育環境： 低地や海岸林の林内に生える。
 生育状況： 奄美大島では場所によってはやや普通であるが、魚釣島の現状は不明で、急増している野生化ヤギによる食害や森林生態系への悪影響で絶滅している恐れがある。
 減少の要因： もともと自生地と個体数が限られている。野生化ヤギによる食害。
 保全対策： 野生化ヤギの駆除が急務である。
 備考： 竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文献： 初島住彦，1991．魚釣島の植物地理．鹿児島島の植物（鹿児島植物同好会誌），（11）：62-66．

執筆者名： 新城和治*・横田昌嗣(追補)

- 和名： **ルゾンハマクサギ**
 分類： クマツヅラ科（APG科名：シソ科）
 学名： *Premna nauseosa* Blanco
 カテゴリー： 絶滅危惧II類（VU） 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴： 常緑の小高木。小枝は扁平形で圧毛がある。葉は対生し、楕円形~卵状長楕円形、長さ6~13 cm、もめば悪臭があり、膜質で乾けば暗褐色となる。枝先にてた花序は散房状で上が平らになり、淡褐色の毛が密生し、多数の花をつける。花冠は淡緑色、鐘状で基部は細い筒となり、長さ約3 mm。果実は球形で、径4~5 mm、暗紫色に熟す。

- 分布域（県外）： 台湾、フィリピン。
 県内の分布： 石垣島、西表島。
 生育環境： 海岸林や低地林に生える。
 生育状況： 石垣島と西表島にそれぞれ数ヶ所の自生地が点在し、個体数は少ない。道路沿いに生える個体は、伐採される恐れがある。
 学術的価値： 分布域の北限である。
 減少の要因： 森林伐採。道路工事。もともと個体数が少ない。
 備考： 竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名： 新城和治*・新納義馬*・横田昌嗣(追補)

- 和名： **ヤエヤマハマゴウ**
 分類： クマツヅラ科（APG科名：シソ科）
 学名： *Vitex bicolor* Willd.
 方言名： ホガギー（沖縄島：首里／ミツバハマゴウも含む）
 カテゴリー： 絶滅危惧II類（VU） 環境省カテゴリー： 絶滅危惧IA類（CR）

形態の特徴： 高さ2~5 mに達する低木。葉は通常5小葉、まれに3小葉。小葉は披針状楕円形で小葉柄がある。円錐花序は頂生し、花冠は漏斗状で淡紅紫色、長さ5~10 mm。果実は球形で径約5 mm。

- 分布域（県外）： マレーシア、ミクロネシア、ポリネシア。

- 県内の分布 : 沖縄島北部?、石垣島、西表島、内離島、竹富島。
- 生育環境 : 海岸部の低地に生える。
- 生育状況 : 初島・天野 (1994) は沖縄島の名護市から記録しているが、現状は不明。石垣島は1ヶ所、西表島は4ヶ所の自生地があり、その内1ヶ所は県指定の天然記念物となっている。西表島の1ヶ所は道路工事による伐採で消失した。今回の調査で、竹富島の1ヶ所に成熟個体があることが新たに確認された。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、マレーシア系の種で、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 沖縄県指定天然記念物 (船浮のヤエヤマハマゴウ) (1959年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 186.
宮城康一・新城和治, 1986. 琉球列島植物分布資料3. 沖縄生物学会誌, (24) : 73-74.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
- 執筆者名 : 新城和治*・横田昌嗣(追補)・松島昭司(追補)

-
- 和名 : **オオニンジンボク**
- 分類 : クマツヅラ科 (APG科名: シソ科)
- 学名 : *Vitex quinata* (Lour.) F. N. Williams
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 樹高13 mに達する常緑の高木。葉は掌状複葉で、5小葉からなり、小葉は有柄で、卵状長楕円形、長さ9~11 cm。円錐花序は頂生し、長さ約10 cm、多数の花をつける。萼は鐘形、花冠は円筒形で、淡黄色、5裂し、外面に密毛がある。雄蕊は4個。果実は球形、径約6 mm、黒色に熟する。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、インドシナ、フィリピン、マレーシア。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地から低地の陰湿な自然林内に生える。
- 生育状況 : これまで西表島の島内各地に10ヶ所以上、石垣島で3ヶ所の自生地が点々と知られるが、各地とも個体数は極めて少ない。県内では小形の未成熟個体が多い。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。
- 文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

-
- 和名 : **アワゴケ**
- 分類 : アワゴケ科 (APG科名: オオバコ科)
- 学名 : *Callitriche japonica* Englemann ex Hegelm.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 繊弱な無毛の一年草。茎は下部で分枝して斜上し、長さ1~4 cm、所々で根を出す。葉は対生、倒卵形、全縁、長さ2~5 mm、やわらかくて3行脈がある。雌雄同株。葉腋ごとに雄花か雌花のいずれか、あるいは両方1個ずつつく。雄花も雌花も黄緑色で小さい。花柱は斜開するか緩やかに下に曲がる。果実はほとんど柄がなく、円状心形で先端がへこんで軍配形を呈し、縁に翼状の稜が4本ある。
- 分布域(県外)** : 北海道南部、本州、四国、九州、種子島、屋久島?、中之島、宝島?、奄美大島?、朝鮮南部、台湾北部。
- 県内の分布** : 伊平屋島、沖縄島、久米島、石垣島、与那国島。
- 生育環境** : 流れの辺や水田の畦などの湿ったところに生える。
- 生育状況** : 田代安定により沖縄島と石垣島で1887年に初めて見出され(Ito & Matsumura, 1899)、坂口(1924)やSonohara *et al.* (1952)では「普通」とされている。しかし、1960年代後半から70年代前半に久米島(初島・天野, 1974)と伊平屋島(山田, 1972; 仲田, 1974)、与那国島(藤本, 1972)で採集された記録があるが、最近は確認されていない。
- 減少の要因** : 水田の耕地整理やサトウキビ畑等への転換による生育地の消失。もともと自生地が少ない。

- 文献** : 藤本義昭, 1972. 与那国島の生物(1). 甲南出版, 神戸, 108pp.
 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会編, 沖縄県, 11-39.
 Ito, T. and J. Matsumura, 1899. Tentamen Florae Lutchuensis 1. J. Coll. Sci. Univ. Tokyo, 12: 263-541.
 仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英(編), 41-107.
 坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.
 Sonohara, S., S. Tawada, T. Amano and E. H. Walker, 1952. Flora of Okinawa. US Civil Administration of the Ryukyu Islands, Naha, 237pp.
 山田哲夫, 1972. 伊平屋・伊是名島(沖縄)採集植物目録. 北陸の植物, 20(3): 70-81.

執筆者名 : 立石庸一*・新納義馬*

- 和名** : ミズハコベ
- 分類** : アワゴケ科 (APG 科名: オオバコ科)
- 学名** : *Callitriche palustris* L.
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I B類 (EN) **環境省カテゴリー**: 該当なし

- 形態の特徴** : 水中性の繊細な一年草。茎は細く、分枝をくり返して伸長し、葉を疎らに対生し、水中葉と水上葉の2形がある。水中葉は線形で長さ7~15 mm、1脈があり、水上葉はへら形または倒卵状長楕円形で長さ6~12 mm、3脈がある。雌雄同株、葉腋ごとに雄花か雌花のどちらか1花をつけ、どちらも淡黄緑色で小さい。果実はほとんど柄がなく、楕円形または倒卵状楕円形で先はわずかにへこんで軍配形を呈し、4稜があり、長さ1~1.4 mm。
- 分布域(県外)** : カムチャッカ、千島、樺太、北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、口永良部島、トカラ列島(口之島、中之島)、喜界島、沖永良部島、朝鮮、中国、および北半球の温帯域。
- 県内の分布** : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。
- 生育環境** : 水田や湿地の浅水中に生える。
- 生育状況** : 琉球の植物誌や目録類では、琉球列島の各島に分布するとされているが、沖縄県では久米島で1967年に採られた標本以外は、それを裏付けるものがなかった。しかし、2005年1月に、沖縄島北・中部のイネやタイモ、イグサの水田でそれぞれ比較的多くの個体が発見された。
- 減少の要因** : 水田の耕地整理やサトウキビ畑等への転換による生育地の消失。改良による遊水池や湧水地などの消失。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執 筆 者 名 : 立石庸一*・新納義馬*・北原 孝*

和 名 : キランソウ (テリハキランソウ)

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Ajuga decumbens* Thunb.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 小型の多年草。茎の下部は地を這い、節から根を出し、上部は斜上し、高さ 3~5 cm、粗毛を密生し、根生葉は広倒披針形、葉柄との区別がなく、縁に鈍い波状の鋸歯があり、時に紫色を帯びる。花は葉腋につき、花冠は紫色、長さ 12 mm くらい、上唇は 2 裂、下唇は 3 裂する。

分 布 域 (県 外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、朝鮮、中国。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部。

生 育 環 境 : 低地から山地の草地に生える。

生 育 状 況 : 最近沖縄島の 1 ヶ所で少数個体が確認されている。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと極めてまれである。

備 考 : 奄美大島でも少ない。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新納義馬*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヤエヤマジュウニヒトエ (ヤエヤマキランソウ)

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Ajuga taiwanensis* Nakai ex Murata

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 多年草。茎は基部から 1~数本の枝を斜にだし、高さ 5~15 cm。葉は対生し、倒卵状長楕円形~倒披針状、長さ葉柄とともに 5~15 cm、幅 1.5~3 cm、縁に波状の鋸歯がある。花は対生する葉の腋に 1~数個ずつつくので、輪生状に見える。花冠は淡紅色またはやや白色。

分 布 域 (県 外) : トカラ列島 (中之島)、沖永良部島、台湾、中国南部、フィリピン。

県 内 の 分 布 : 久米島、石垣島、西表島、与那国島。

生 育 環 境 : 低地のやや明るい林床に生える。

生 育 状 況 : 自生地は点在し、個体数は少ない。久米島では 4 ヶ所、石垣島では 5 ヶ所、西表島では 2 ヶ所で確認されているが、西表島の 1 ヶ所は道路工事で消失した。久米島では、公園や城跡に生育している場合があり、過度の草刈りで一部の個体が消失している。与那国島の現状は不明。

減 少 の 要 因 : 低地の開発。もともと生育地が限られている。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)・加島幹男(追補)

和 名 : ヤマトウバナ

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

- 学 名 : *Clinopodium multicaule* (Maxim.) O. Ktze.
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリ: 該当なし
- 形態の特徴 : 多年草。茎は束生し、高さ10~30 cm。葉は対生し、長楕円形~卵形、長さ2~5 cm、幅1~2 cm、裏面に腺点が疎らにある。花序は短く普通は茎の先に1個だけつく。花冠は上下2唇に分かれ、白色で長さ8~9 mm、萼は長さ約6 mm、疎らに短毛が生え、上唇の裂片は鈍頭。
- 分布域(県外) : 本州(神奈川県以西)、四国、九州、屋久島、韓国。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の木陰に生える。
- 生育状況 : 1964年に沖縄島北部の山地で発見された(山崎, 1992)。自生地は限られており、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。
- 文 献 : 山崎 敬, 1992. ヤマトウバナ琉球に分布. 植物研究雑誌, 67 (4) : 243.

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*

- 和 名 : ケサヤバナ
- 分 類 : シソ科 (APG科名: シソ科)
- 学 名 : *Coleus scutellarioides* (L.) Benth. var. *crispipilus* (Merr.) Keng
- カテゴリ : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 高さ30~50 cmの多年草。葉は多肉質、卵円形~菱形状卵形、長さ4~6 cm、両面に白い短毛を密生する。花序は頂生して穂状になり、多数の花をつける。花冠は紅紫色、下部は筒状、上部は2唇に分かれ、下唇は3裂する。
- 分布域(県外) : 台湾(蘭嶼、緑島)、フィリピン、マレーシア。
- 県内の分布 : 与那国島。
- 生育環境 : 海岸の隆起サンゴ礁上やアダン林の林縁に生える。
- 生育状況 : 自生地は3ヶ所知られるが、面積はごく限られており、個体数は極めて少ない。一部の自生地は道路脇にあり、除草などで刈り取られる恐れがある。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因 : 海岸部の開発。もともと自生地と個体数が少ない。道路工事。公園の草刈り。
- 保全対策 : 自生地の保全。公園や道路の除草の際、注意する必要がある。
- 文 献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第8巻. 新星図書出版, 185.
 与那国町教育委員会, 1995. 与那国島の植物. 与那国町教育委員会, 336pp.
- 執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・村松 稔(追補)

- 和 名 : ヒメキセワタ
- 分 類 : シソ科 (APG科名: シソ科)
- 学 名 : *Lamium chinense* Benth. var. *tuberiferum* (Makino) Murata

カテゴリー： 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴： 高さ10～25 cmの短命な多年草。地下に球茎があり、糸状の地下茎を出してその先にまた球茎をつくる。葉は対生し、三角状円形～長楕円形、長さ1～3 cm、幅1～2 cm。花は茎上部の葉腋に1～3個ずつつき、長さ15～20 mm、萼は等しく5中裂し、10脈がある。花冠は淡紅色で長さ1.5～2 cm、2唇形で、下唇は大きく開出して長さ約1 cm。

分布域(県外)： 九州南部、種子島、宝島、奄美大島、台湾。

県内の分布： 久米島。

生育環境： 低地の明るい林床や林縁の草地に生える。

生育状況： 久米島では1960年代に確認された後、永らく見つかっていなかったが、2014年に1ヶ所で再発見され、2015年にもう1ヶ所で、2017年に更に別の1ヶ所で発見された。いずれの自生地も定期的に除草がされている場所で、除草がされなくなると、遷移が進行して衰退する恐れがある。その一方で、過度の除草は開花結実に大きな影響を与えることが考えられることから、除草の時期や方法については、地域の住民と相談して適切に管理する必要がある。

減少の要因： 草地の開発。もともと自生地が限られている。遷移の進行。外来種との競合。

文献： 初島住彦・天野鉄夫，1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”，沖縄県，1-39.

阿部篤志・仲宗根忠樹，2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査(伊是名島・久米島). “事業年報(平成26年度)”，沖縄美ら島財団総合研究センター，27-34.

執筆者名： 横田昌嗣*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名： イヌコウジュ

分類： シソ科 (APG科名: シソ科)

学名： *Mosla punctulata* (S. G. Gmelin) Nakai

カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴： 一年草。茎は四角で、直立して高さ20～60 cmになり、紅紫色を帯びることが多い。葉は対生、葉身は1～2 cmの柄があり、狭卵形～卵形で、長さ2～4 cm、6～13個の低い鋸歯があり、表面は短い毛がありややざらつき、下面に腺点を密生する。総状花序は頂生し、円筒形。小花柄は2～4 mm、苞はこれより短い。花冠は淡紅紫色で長さ3～4 mm。

分布域(県外)： 北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布： 沖縄島、石垣島、西表島、小浜島、嘉弥真島、与那国島。

生育環境： 低地の原野や、二次林の明るい林床に生える。

生育状況： 西表島では2ヶ所で、与那国島では1ヶ所で少数の個体が確認された。小浜島と嘉弥真島でも標本の記録がある。他の島の現状は不明。

減少の要因： 草地の開発。もともと個体数が少ない。

備考： 竹富町希少野生動物種(2017年)。

文献： 知念美香，1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究，(11)：75-105.

執筆者名： 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名 : クラルオドリコソウ
 分類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)
 学名 : *Paraphlomis javanica* (Blume) Prain
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 1~1.5 m になる多年草。茎は丈夫で、断面が 4 角形、下部にいくにしたがい葉をつけない。葉は対生、最長 8 cm にもなる長い葉柄があり、葉身は楕円形または倒卵形、大きさは通常長さ 7~15 cm、幅 3~8 cm だが、ときに長さ 30 cm、幅 14 cm に及ぶものがあり、鋭~鋭尖頭、基部は次第に細くなるか切形、縁は粗い鋸歯がある。花はほとんど柄がなく、葉腋に多数集まってつき、直径 3 cm ほどの団散状花序をなす。萼は狭鐘形で先は 5 裂、花冠は黄色または淡黄色で長さ 1.5~2 cm、2 唇形で上唇は直立、下唇は水平に広がり 3 裂、外面に長毛が生える。果実は 4 分果からなり、分果は倒卵形で長さ約 6 mm。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、ヒマラヤ、フィリピン、マレーシア。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 不明。

生育状況 : 1935 年に石垣島で採集されているほかは、八重山諸島からの確実な確認情報はない。

学術的価値 : 分布域の北限に当たる。

備考 : Masamune (1955) により西表島および石垣島が分布地として、ただし後者は疑問符つきで報告された。以後、沖縄の植物目録・植物誌では、これに典拠を置いてクラルオドリコソウを所載してきた。1935 年に石垣島で正宗自身によって採られた標本が台湾大学 (TAI) にあるが、これには花や実が欠けておらず、同定に若干の不安が残る (Walker, 1976)。

文献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.
 Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣*

和名 : ユキミソウ (ミゾコウジュ)
 分類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)
 学名 : *Salvia plebeia* R. Br.
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 一年草。茎は直立し、高さ 30~70 cm。葉は長楕円形で根生葉は長い柄があり、花時には枯れ、茎葉は短い柄があり、葉身は長さ 3~6 cm、幅 1~2 cm。花序は頂生して円錐状になり、長さ 8~10 cm になる。花冠は淡紫色、長さ 4~5 mm。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、種子島、奄美大島、加計呂麻島、朝鮮、台湾、マレーシア、インド。

県内の分布 : 沖縄島南部、宮古島、石垣島、竹富島、小浜島、西表島、与那国島。

生育環境 : 湿った草地、耕作地の畦に生える。

生育状況 : 小浜島と与那国島ではそれぞれ 1 ヶ所で少数個体が、西表島と石垣島ではそれぞれ数ヶ所で確認されている。今回の調査で宮古島と竹富島のそれぞれ 1 ヶ所で初めて確認された。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 湿地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・北原 孝*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志 (追補)・佐藤宣子(追補)

和 名 : コナミキ

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Scutellaria guilielmi* A. Gray

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 多年草。茎は基部で分枝し、細く直立し、高さ 20~30 cm、地下に細長い走出枝を伸ばす。葉は対生して開出毛があり、茎の下部のものは円心形で径 1~2 cm、上方の葉は卵円形~卵形、長さ 1~1.5 cm。花は葉腋に単生し、白色~帯紫淡紅色、長さ 7~8 mm。

分 布 域 (県 外) : 本州 (千葉県以西)、四国、九州、種子島、屋久島、宝島、奄美大島、徳之島、沖永良部島。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島。

生 育 環 境 : 低地の草地に生える。

生 育 状 況 : 沖縄島では本部半島の 2 ヶ所で 1997 年と 2004 年に確認されており、その内の 1 ヶ所では 2016 年にも確認されている。今回の調査で伊平屋島では 1 ヶ所で、伊是名島では 1 ヶ所で確認されている。

学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。

減 少 の 要 因 : 草地の開発。もともと自生地が限られている。

執 筆 者 名 : 立石庸一*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : ケナシヌゴマ (リュウキュウイヌゴマ)

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Stachys riederi* Chamisso var. *japonica* (Miq.) Hara (= *S. tashiroi* Hayata)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 細長い地下茎をひく多年草。茎は直立し、4稜があり、高さ 40~70 cm。葉は三角状披針形、長さ 4~8 cm、幅 1~2.5 cm、ごく短い柄がある。萼は長さ 6~8 mm、5裂して裂片の先は刺状にとがり開出する。花冠は淡紅色、長さ 12~15 mm、下唇は 3 裂して紅色の細点がある。分果は長さ約 1.7 mm。

分 布 域 (県 外) : 九州、朝鮮、中国、ウスリー。

県 内 の 分 布 : 沖縄島。

生 育 環 境 : やや湿った畑地に生える。

生 育 状 況 : 沖縄島中部で散見されており、宜野湾市で 1984 年に採集された標本がある。池原 (1989) には、沖縄島で 1982 年に撮影された写真が掲載されている。沖縄島南部の 1 ヶ所で 2015 年に数十個体が確認されている。そこは墓地の周辺のため定期的な除草がされており、そのことで本種が維持されていると思われる、除草がなされなくなると遷移の進行で衰退する可能性が高い。伊江島からも目録の記録がある (初島・宮城, 1974) が、近年は確認されていない。

学 術 的 価 値 : 種の分布域の南限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。遷移の進行。外来種との競合。

備 考 : 古い時代に侵入した帰化植物の可能性が指摘されている (初島, 1971; 初島・天野, 1994)。1887 年に田代安定によって沖縄島で採集された標本がある。これは現在のところ本種の異名となってい

る *S. tashiroi* Hayata リュウキュウイヌゴマのタイプ標本である (Hayata, 1919)。 *Stachys riederi* は種としてはシベリアからカムチャッカ、千島、樺太、中国、朝鮮、日本と、極東に広く分布するが、茎や葉および萼に生える粗い刺状の剛毛の量に地理的な変異がある。北海道～九州に分布するイヌゴマ var. *intermedia* (Kudo) Kitamura は、茎の稜や葉の裏面および萼に、短い下向きの粗い刺状の剛毛があつて、ざらざらする。エゾイヌゴマ var. *villosa* (Kudo) Hara は、開出する粗い剛毛が多いもので、北海道から千島、樺太、朝鮮に分布する。一方、ケナシイヌゴマ var. *japonica* は、この毛のほとんどない無毛形で、種の分布域の最南部を占めている。

- 文 献 : 初島住彦, 1971. 琉球植物誌. 沖縄生物教育研究会, 那覇, 940pp.
 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 393pp.
 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄自然研究会, 那覇, 57-76.
 Hayata, B., 1919. Icones Plantarum Formosanarum, vol. 8. 164pp.
 池原直樹, 1989. イヌゴマ. “沖縄植物野外活用図鑑”, 新星図書出版, 那覇, 8 : 199.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヤエヤマズコウジュ

分 類 : シソ科 (APG 科名: シソ科)

学 名 : *Suzukia luchuensis* Kudo

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 匍匐性の常緑多年草。葉は対生し、やや多肉質で卵円形～円形、円鋸歯があり、長さ 1～3 cm、両面に白い長毛がある。花は頂生もしくは上方の葉腋に単生し、花冠は紅色、長さ 10～13 mm、筒部は長さ 8 mm 程で裂片は大形、上唇は倒卵形で多少かぶと形になり、下唇は 3 裂する。

分 布 域 (県 外) : 台湾 (緑島)

県 内 の 分 布 : 沖縄島、伊計島、久米島、黒島、新城島 (上地島、下地島)、与那国島。

生 育 環 境 : 海岸の隆起石灰岩上もしくは海岸近くの原野に生える。

生 育 状 況 : 沖縄島では 2 ヶ所に産する。沖縄島南部でも確認されている (平田, 1989) が、現在は生育が確認されない。伊計島では 1 ヶ所に少数個体がある。久米島では数ヶ所に小規模な群落が現存するが、1 ヶ所では道路建設により生育環境が攪乱され、個体数は激減している。黒島では 2 ヶ所で、新城島では少数ヶ所で確認されている (山崎ら, 2016)。与那国島では島内の各地に産し、すぐに絶滅する恐れはないが、自生地は空港建設や海岸の開発で徐々に減少している。

学 術 的 価 値 : 沖縄県と台湾 (緑島) の固有種である。シキクンソウ属 *Suzukia* は、台湾と琉球の範囲に分布する 2 種からなる固有属であり、植物地理学上重要である。

減 少 の 要 因 : 海岸低地の開発。もともと自生地が限られている。

備 考 : 本種が台湾に産することは、最近になって報告された (Hsieh, 2000)。台湾には他に、近縁なシキクンソウ *S. shikikunensis* Kudo を産する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

- 文 献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.
 平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. “佐敷町史, 三自然”, 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町, 93-196.
 Hsieh, T.-H., 2000. *Suzukia* Kudo (Lamiaceae) in Taiwan. *Taiwania*, 45: 217-225.
 Maki, M., T. Yamashiro & S. Matsumura, 2003. High levels of genetic diversity in island populations of the island endemic *Suzukia luchuensis* (Labiatae). *Heredity*, 91(3): 300-306.
 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事

業年報（平成 26 年度）”，沖縄美ら島財団総合研究センター，27-34.

山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男，2016. 鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相（Flora）. “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”，沖縄県立博物館・美術館，13-68.

立石庸一・佐藤寛之・齊藤由紀子・天野正晴・杉山巳次・中村元紀・宮城愛・田場美沙基・富永篤，2016. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実Ⅷ：うるま市伊計島の植物相. 琉球大学教育学部紀要，(88)：283-305.

執筆者名：横田昌嗣*・松村俊一*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名：アツバクコ

分類：ナス科 (APG 科名: ナス科)

学名：*Lycium sandwicense* A. Gray

カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：やや匍匐する全株無毛の常緑低木。枝は密に分枝し、小枝は小形のこぶ状突起を有し灰白色。葉は互生する、多くはごく短い短枝に数個束生し、へら形、多肉質、長さ 1.2~2 cm、幅 4 mm くらい。花は短枝の先に 1 個つき白色~淡紫色、漏斗形で長さ約 6 mm、先は 4~5 裂する。果実は球形の液果で径 8 mm 程、赤く熟す。

分布域(県外)：小笠原、ハワイ。

県内の分布：北大東島、南大東島。

生育環境：海岸の岩場に生える。

生育状況：特殊な立地に限って生え、個体数は多くない。すぐに絶滅する恐れはないが、海岸の開発で生育地は減少しつつある。

学術的価値：著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因：海岸の開発。薬用・園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

備考：南大東島の自生地の 1ヶ所は国指定の天然記念物である。

文献：西銘盛光・横田昌嗣，1996. 南大東島海岸植物群落内における観察所建設の影響調査報告書. 沖縄県教育庁文化課紀要，(12)：47-62.

西浜良修，2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—。南大東村教育委員会，77pp.

執筆者名：横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名：オキナワヒヨドリジョウゴ (ムラサキヒヨドリジョウゴ)

分類：ナス科 (APG 科名: ナス科)

学名：*Solanum kayamae* Yamazaki

カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：つる性の多年草。全株に長軟毛を密生する。葉は卵形~狭卵形、長さ 2~8 cm、下部の葉は 3~5 浅~中裂する。花は頂生の三叉状に分岐する散房花序につき、花冠は紫色で 5 裂し、径約 1 cm。果実は球形の液果で径 7~8 mm、赤く熟す。

分布域(県外)：奄美大島、沖永良部島。

県内の分布：伊平屋島、沖縄島(中部~南部)、伊計島、伊江島、久米島。

- 生育環境 : 海岸の林縁や林内に生える。
- 生育状況 : 沖縄島と伊平屋島では極めてまれである。伊江島と久米島の現状は不明。伊計島でも確認されている(立石ら, 2016)。
- 学術的価値 : 沖縄県は基準産地で、中琉球の固有種である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 最近までヒヨドリジョウゴと見なされていたが、1993年に沖縄島の固有種として記載された(山崎, 1993)。伊平屋島、伊江島、久米島、および奄美諸島の分布については、ヒヨドリジョウゴの可能性も残されており、標本に基づく詳細な研究が必要である。
- 文献 : 山崎 敬, 1993. 沖縄からナス属の1新種オキナワヒヨドリジョウゴ. 植物研究雑誌, 68: 339-341.
立石庸一・佐藤寛之・齊藤由紀子・天野正晴・杉山巳次・中村元紀・宮城愛・田場美沙基・富永篤, 2016. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実Ⅷ: うるま市伊計島の植物相. 琉球大学教育学部紀要, (88): 283-305.

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **イラブナスビ**
- 分類 : ナス科 (APG 科名: ナス科)
- 学名 : *Solanum miyakojimense* Yamazaki et Takushi
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 常緑の小低木。茎はやや匍匐し、高さ 30 cm になり、円柱形の棘が多い。葉は広卵形、長さ 1.5~4 cm、質厚く両面に星状毛を密布し、脈上に棘がある。花序は短く、1~2 花をつけ、萼は長さ 3 mm、浅裂して裂片は小さい。花冠は長さ 4 mm、帯紫白色、液果は球形、径 8~10 mm、橙赤色に熟する。
- 県内の分布 : 宮古島、伊良部島、来間島。
- 生育環境 : 海岸のモンパノキやクサトベラが優占する低木林の林縁の岩場に生える。
- 生育状況 : 宮古島では 1ヶ所で記録されているが、近年は確認されていない。伊良部島では狭い範囲の 2ヶ所で確認されているが、個体数はごく少ない。今回の調査では、来間島では確認することができなかった。
- 県外の分布 : 台湾。
- 学術的価値 : 宮古諸島は基準産地で、分布域の北限である。八重山諸島からは記録されておらず、植物地理学上重要である。
- 減少の要因 : 生育環境が特殊で、もともと自生地と個体数が少ない。宮古島は遊歩道の整備で絶滅した可能性がある。
- 備考 : 熱帯アジアに広く分布するテンジクナスビ *S. indicum* とされて来たが(初島・天野, 1967; 初島ら, 1975)、異論(多和田, 1975)もあり、葉や刺、萼の形態や花冠の色などから、独立種として区別されている(Yamazaki & Takushi, 1991)。台湾からは、最近になって報告された(Hsu *et al.*, 2007)。宮古島市指定天然記念物(イラブナスビ)(1994年)。
- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1967. 改訂沖縄植物目録. 沖縄生物教育研究会. 那覇市. 218pp.
初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告(宮古群島)”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄県, 31-70.
多和田真淳, 1975. 琉球植物見聞録(八). 北陸の植物, 22: 54-57.
宇座 正・下地俊充, 2003. イラブナスビの生育調査について. 熱帯植物調査研究年報(海洋博覧会記念公園管理財団), 24: 67-72.
Yamazaki, T. & A. Takushi, 1991. A new species of *Solanum* from Ryukyus. J. Jpn. Bot., 66: 46-48.

Hsu, T.-W., C.-I. Peng, J.-J. Peng & T.-Y. Chiang, 2007. Confirmation of the distribution of *Solanum miyakojimense* Yamazaki & Takushi (Solanaceae) in Taiwan. *Taiwania*, 52(2): 190-193.

執筆 者 名 : 立石庸一*・洲鎌栄徳*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : **ゴマクサ**

分 類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: ハマウツボ科)

学 名 : *Centranthera chevalieri* Bonati

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 半寄生の一年草。茎は直立して高さ 20~50 cm。葉は茎の下部では対生、上部では互生し、質厚く、披針形または広線形、長さ 2~5 cm、両面に剛毛が生える。花は葉腋に単生し、茎上部になると葉が小さくなり、苞に移行するので茎上部は総状花序となる。花冠は黄色、筒形で先は唇形となり、上唇は 2 裂、下唇は 3 裂する。

分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、種子島、屋久島、口之永良部島、徳之島、朝鮮、台湾、中国、インドシナ。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 湿り気のある原野に生える。

生育状況 : 沖縄島では以前は点々と数ヶ所に自生することが記録されているが、最近では恩納村と金武町の各 1ヶ所で少数個体が確認されているだけである。金武町の自生地はダム建設で絶滅した可能性が高い。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 湿地の埋立。ダム建設による自生地の消失。もともと生育地が限られている。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **エナシシソクサ**

分 類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: オオバコ科)

学 名 : *Limnophila fragrans* (G. Forst.) Seem.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 芳香がある常緑の多年草。茎は匍匐または斜上し、長さ約 20 cm。葉は対生し、長楕円形で、長さ 1~2 cm、幅 4~5 cm、裏面に腺点が密生する。花は葉腋に単生し無柄。花冠は白色で、時にわずかに紫紅色を帯び、筒状で先は唇形となる。果実は卵円形で長さ 3 mm 程。

分布域(県外) : マレーシア、ポリネシア、オーストラリア。

県内の分布 : 西表島、石垣島、小浜島、与那国島?

生育環境 : 日当たりのよい湿地や水田の水路に生える。

生育状況 : 自生地は西表島では 4ヶ所、石垣島では 2ヶ所に知られるだけで、個体数は極めて少ない。数ヶ所の水田では、除草剤の散布で絶滅した。今回の調査で小浜島にもわずかに生育することが確認された。京都大学理学部の標本庫 (KYO) には、与那国島の標本があるが、近年の調査では与那国島では本種は確認されていない。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。マレーシア系の植物で、著しい隔離分布を示し、植物

地理学上貴重である。

- 減少の要因 : もともと自生地が限られている。湿地の埋立。除草剤の散布。
 保全対策 : 水田では過度の除草剤の使用を避ける。湿地の保全。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・北原 孝*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヒメサギゴケ

分類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: ハエドクソウ科)

学名 : *Mazus goodenifolius* (Hornem.) Pennell

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の短命な多年草。茎は直立して高さ 5~15 cm。葉はほとんど根生で倒卵状長楕円形、縁は大きく切れこんだ鋸歯があり、長さ 2~5 cm、幅 1~2 cm。花茎の先に総状花序を出し、少数の花を疎らにつける。花冠は淡青色~黄白色、長さ 7~10 mm、上唇は卵形で、下唇の約半分では 2 浅裂し、下唇は大きく、3 裂する。

分布域(県外) : 九州南部(宮崎県)、屋久島、奄美大島、台湾、中国西部、ヒマラヤ、ニューギニア。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の溪流沿いの岩上に生える。

生育状況 : 大宜味村 1ヶ所、名護市に 4ヶ所、宜野座村に 2ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。その内宜野座村と名護市の各 1ヶ所はダム建設で自生地の大部分が水没した。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。ダム建設による自生地の水没。

備考 : 屋久島では約 50 年間生育が確認されず絶滅が危惧されていたが、最近再発見されている(梅本ら, 2016)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-113.

横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査(最終報告). 事業年報(平成 25 年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

梅本巴菜・横田昌嗣・國府方吾郎, 2016. 屋久島におけるヒメサギゴケ(ハエドクソウ科)の再発見. 沖縄生物学会誌, (54) : 33-37.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・國府方吾郎(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : スズメノハコベ

分類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: ハマウツボ科)

学名 : *Microcarpaea minima* (Koenig) Merr.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 匍匐する一年草。茎は四角形、よく分枝し、節部から根を出す。葉は対生し柄がなく、線状披針形

または狭長楕円形、長さ2~5 mm。花は葉腋に1個ずつつき、花冠は白色~淡紅色で長さ2 mm、筒形で5脈があり、先端は上方1/2まで2唇に分裂し、上唇は舌状で裂けず、下唇は3裂する。

- 分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、種子島、屋久島、徳之島、沖永良部島、朝鮮、台湾、中国、東南アジア、インド、マレーシア、オーストラリア。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 水田や水路などの水湿地に生える。
- 生育状況 : 沖縄島ではまれ。八重山諸島ではやや多いが、水田の減少、除草剤の使用などで減少している。
- 減少の要因 : 湿地開発。もともと個体数が少ない。除草剤の散布。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

-
- 和名 : **カントラノオ(ハマトラノオ)**
- 分類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: オオバコ科)
- 学名 : *Pseudolysimachion sieboldianum* (Miq.) Yamazaki
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は斜上して長さ20~40 cmになる。葉は対生し、柄がなく基部は茎を抱き、やや肉質、長楕円形~倒卵状楕円形、長さ4~9 cm、幅1.5~4.5 cm。総状花序は茎の先に頂生し、多くの花を密につける。花冠は青紫色で長さ6 mm、下部は筒状、上部は4深裂して、裂片は広く開いて杯状になる。
- 分布域(県外) : 九州南西部、薩摩黒島、臥蛇島、奄美大島、徳之島。
- 県内の分布 : 座間味島。
- 生育環境 : 海岸の岩場や崩壊地、草地に生える。
- 生育状況 : 座間味島では、1923年に採集された記録があるが、2004年の調査では全く確認することができず、現状は不明。
- 減少の要因 : 海岸低地の開発。もともと自生地が限られている。
- 備考 : 奄美諸島でも自生地は局所的である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*

-
- 和名 : **ヒキヨモギ**
- 分類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: ハマウツボ科)
- 学名 : *Siphonostegia chinensis* Benth.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 半寄生の一年草。茎は直立し、上部は分枝し剛強で高さ30~70 cm、短毛が密生する。葉は対生し、卵形、長さ1.5~5 cm、3片ほどの広線形の裂片に深く裂け、下方の裂片はさらに裂ける。花は枝の上部の葉腋に単生し、花冠は黄色で筒状、長さ2.5~2.8 cm、上部は2唇形で上唇の先は細くなり、先端は2裂する。
- 分布域(県外) : 南千島、北海道、本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国、インドシナ。
- 県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 日当りのよい原野に生える。
- 生育状況 : 現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。
備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*

和 名 : ツルウリクサ
分 類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: アゼナ科)
学 名 : *Torenia concolor* Lindl. var. *formosana* Yamazaki
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 匍匐性の短命な多年草。葉は対生で卵形、長さ 1.5~2.2 cm、花は茎上部の葉腋に単生し、花冠は紫色で長さ 2.5 cm くらい、筒状で先は唇形となり、上唇は直立して 2 裂し、下唇は大きく 3 片に裂ける。
分布域 (県外) : 奄美大島、請島、台湾。
県内の分布 : 沖縄島北部、宮古島。
生育環境 : 低地の林縁、湿った草原、道路の法面などのやや明るい環境に生える。
生育状況 : 沖縄島の 1ヶ所では絶滅、他の 1ヶ所は現状不明。宮古島の現状は不明で、絶滅した可能性が高い。
減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。
備 考 : 台湾や奄美大島では山地の明るい林床や林道沿いの草地などに生える。

文 献 : 池原直樹, 1979. 沖縄植物野外活用図鑑 第 5 巻. 新星図書出版, 151.

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和 名 : リュウキュウスズカケ
分 類 : ゴマノハグサ科 (APG 科名: オオバコ科)
学 名 : *Veronicastrum liukiense* (Ohwi) Yamazaki
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は基部から分枝して地上を這い、長さ 30~100 cm に達する。葉は互生し、卵形~卵状披針形、長さ 4~12 cm、幅 2~5.5 cm。穂状花序は腋生または頂生し、長さ 4~6 cm、多数の花を密につける。花冠は紅紫色で長さ 7 mm ほど、下部は長さ 3.5 mm ほどの花筒となり、上部は 4 裂する。
分布域 (県外) : 奄美大島、喜界島。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 沖縄島の生育環境は不明。奄美諸島では山地の陰湿な林床や、海岸近くの湿った草地に生える。
生育状況 : 沖縄島の 1ヶ所が基準産地である (Ohwi, 1934) が、基準標本の採集後全く見つかっていなかった。2015 年に東村で 1 個体が発見されたが、栽培植物が多く植えられた人家の周辺に生育しており、移入の可能性が高い。沖縄県では、絶滅した可能性がある。
学術的価値 : 琉球列島の固有種である。
減少の要因 : 森林の開発。もともと個体数と生育地が限られている。

文 献 : Ohwi, J., 1934. *Plantae novae Japonicae*. Fedde's Repert. Sp. Nov., 36: 39-58.

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : ミヤコジマソウ (ヒロハサギゴケ)

分 類 : キツネノマゴ科 (APG 科名: キツネノマゴ科)

学 名 : *Hemigraphis reptans* (Forst.) T. Anders

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、節から根を出す。葉は対生し、卵状広楕円形～円形、長さ 1～2 cm、両面に軟毛がある。穂状花序は 2～3 花をつけ、花は径 1 cm、紫色を帯びた白色、雄蕊は 4 個。果実は線状長楕円形。

分布域(県外) : 台湾(蘭嶼)、フィリピン、インドネシア、ニューギニア、ポリネシア。

県内の分布 : 宮古島、大神島。

生育環境 : 海岸林の林床や石灰岩上に生える。

生育状況 : 自生地は宮古島では数ヶ所、大神島では 1 ヶ所しかなく、それぞれごく狭い範囲に限られた個体が生育するだけである。宮古島の自生地の 2 ヶ所は港の近くであり、開発により減少しており、絶滅する恐れがある。大神島に産することは、安谷屋ら(1982)で報告されているが、2012 年に再確認された。

学術的価値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の産地である。ポリネシア系の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

備 考 : 宮古諸島では近年各地で栽培されており、本来の自生かどうか判断が難しい場合がある。宮古島市指定天然記念物(ミヤコジマソウ)(2012 年)。

文 献 : 安谷屋昭・久貝勝盛・川上 勲, 1982. 平良市の天然記念物—調査報告集—. 平良市教育委員会(編), 平良市教育委員会, 62 pp.

初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告(宮古群島)”, 沖縄自然研究会(編), 沖縄県, 31-70.

横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・川上 勲*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)

和 名 : オギノツメ

分 類 : キツネノマゴ科 (APG 科名: キツネノマゴ科)

学 名 : *Hygrophila salicifolia* (Vahl) Nees

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。根茎は地中を這い、節から地上茎を出す。地上茎は高さ 30～50 cm、鈍い 4 稜がある。葉は対生し、線状披針形、長さ 4～10 cm、幅 5～15 mm。花は柄がなく葉腋に数個束生する。花冠は淡紫色、長さ 10～13 mm、外面に軟毛があり、下部は筒形、上部は唇形、上唇は浅く 2 裂し、下唇はやや深く 3 裂する。

分布域(県外) : 本州(静岡県以西)、四国、九州、種子島、中之島、奄美大島、徳之島、東南アジア、インド。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、西表島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 西表島の1ヶ所で2017年に数個体が確認されている。その他の島の現状は不明。
 減少の要因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ナガミカズラ
 分類 : イワタバコ科 (APG科名: イワタバコ科)
 学名 : *Aeschynanthus acuminatus* Wall. ex DC.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 多年生藤本。葉は対生し、多肉質、楕円形で全縁、鋭尖頭である。花は腋生の散房花序をつくり、花冠は黄白色、鐘形で上部は2唇に分かれ、上唇はさらに2裂、下唇は3裂する。果実は長さ15cm程の細長い先の尖った円筒形の蒴果で2片に裂開し、長い毛束を両端につけた小さな種子を多数とばす。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、インドシナ。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 高地の樹幹や岩上に生える。

生育状況 : 1973年に約1 m²の広がり1個体が発見されたが、その後は確認されていなかった。2004年に最初の個体とは異なる場所で新たな個体が発見された(小林・國府方, 2005)が、自生地では開花・結実は観察されていない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内では唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が極めて少ない。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。台湾では、低地から山地の常緑樹林内にやや普通に生える。国内希少野生動植物 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
 小林史郎・國府方吾郎, 2005. 日本産ナガミカズラ属の再発見. 分類, 4 (2) : 43-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミズビワソウ (ヤエヤマイワタバコ)
 分類 : イワタバコ科 (APG科名: イワタバコ科)
 学名 : *Cyrtandra yaeyamae* Ohwi
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ2~3mになる常緑の低木、茎は径2~3cm。葉は対生または互生し、茎の上部に集まってつき、倒卵状長楕円形、長さ25cm、幅10~18cm、葉柄は長さ4~5cm。集散花序は腋生し、5~8花をつけ、総包は卵状披針形、長さ3~3.5cm、花冠は乳白色、長さ2.5cm、液果は長楕円形、長さ1.2~1.5cm。

県内の分布 : 西表島(固有)。

生育環境 : 溪谷の陰湿な林内に生える。

生育状況 : 西表島の数河川の流域で確認されているが、個体数は限られている。

- 学 術 的 価 値 : 西表島の固有種である。ミズビワソウ属は太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布し (Clark *et al.*, 2009)、中国大陸には産しない。西表島とマレーシアやマイクロネシアとのつながりを示す種として、植物地理学上貴重である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の大半は国立公園内にあるが、遊歩道の建設や園芸用の採集により減少している。
- 備 考 : フィリピン (バタン島) に産する *Cyrtandra cumingii* C. B. Clarke の変種 var. *yaeyamae* (Ohwi) Hatusima とする意見があるが、この学名は裸名のままである。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 國府方吾郎・D.A. Madulid, 2000. バタン島産及び西表島産ミズビワソウ (イワタバコ科) の染色体学的比較研究. 沖縄生物学会誌, (38): 27-31.
Clark, J.R., W.L. Wagner & E.H. Roalson, 2009. Patterns of diversification and ancestral range reconstruction in the southeast Asian-Pacific angiosperm lineage *Cyrtandra* (Gesneriaceae). *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 53: 982-994.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣

-
- 和 名 : ツノギリソウ
- 分 類 : イワタバコ科 (APG 科名: イワタバコ科)
- 学 名 : *Hemiboea bicornuta* (Hayata) Ohwi
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 高さ 30~100cm になる柔らかい常緑の多年生草本、全株無毛。葉は対生し、鎌状の長楕円状倒披針形、長さ 10~20cm、幅 2.5~4cm、葉柄は長さ 2~4cm。通常 2 花をつけ、花梗は長さ 1.5~2.5cm、萼は 5 深裂し、萼裂片は長楕円形、長さ 8mm、花冠は白色、円筒状鐘形、長さ 2~4cm、内面に赤色の細点が入る。室果は円筒形、長さ 2cm、幅 4mm、種子は多数で微小。
- 分 布 域 (県 外) : 台湾。
- 県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島、与那国島。
- 生 育 環 境 : 山地の水がしたたり落ちるような陰湿な崖や岩場に生える。
- 生 育 状 況 : 西表島では数ヶ所で確認されているが、自生地と個体数は限られている。石垣島では数ヶ所で確認されているが、もっとも大きな個体群は県立公園の建設で失われた。与那国島の現状は不明。
- 学 術 的 価 値 : ツノギリソウ属は沖縄県、台湾、中国南部に分布するが、沖縄県は分布域の北限で、中国大陸とのつながりを示す種として植物地理学上注目される。
- 減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られる。
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣

-
- 和 名 : タイワンシシンラン
- 分 類 : イワタバコ科 (APG 科名: イワタバコ科)
- 学 名 : *Lysionotus apicidens* (Hance) Yamazaki
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形 態 の 特 徴 : 樹幹や岩上に着生する常緑の小低木。茎は幹や岩に着生するコケの中を這い、疎らに枝を出す。葉は対生、または 3~4 枚が輪生し、長楕円形倒披針形~楕円形で、縁は鋭い鋸歯が目立ち、表面の主脈の部分はへこむ。枝の上部の葉腋に白色の花をつけ、花は筒状で上部が唇形になり、上唇が 2 裂、下唇が 3 裂する。

- 分布域（県外）：台湾。
- 県内の分布：沖縄島北部。
- 生育環境：山地の岩上にコケとともに生える。
- 生育状況：県内では極めてまれで、1994年に初めて報告された（山崎，1994）。これまで狭い範囲に3ヶ所の自生地が知られているだけである。その内の2ヶ所は登山道沿いにあり、踏みつけや採集により個体数が減少している。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が極めて少ない。
- 備考：台湾では花は淡紅色であるが、沖縄島のもは3ヶ所ともすべての個体の花色はわずかに紫色を帯びた白色である。分子系統学的な研究では、日本本土のシシンラン *L. pauciflorus* Maxim. と沖縄・台湾のタイワンシシンランは遺伝的に多少分化しているものの、中国大陸産のシシンランの形態のおよび遺伝的変異が大きく（Kokubugata *et al.*, 2011）、シシンランとタイワンシシンランは一つの種にまとめるべきだという。
- 文献：伊波善勇，1996. 本部町における特筆される植物。“本部町動植物総合調査報告書，植物相”，本部町立博物館（編），本部町教育委員会，153-243。
山崎 敬，1994. タイワンシシンラン琉球に分布. 植物研究雑誌，69: 114-115。
Kokubugata, G., Y. Hirayama, C.-I Peng, M. Yokota & M. Moller, 2011. Phylogeographic aspects of *Lysionotus pauciflorus sensu lato* (Gesneriaceae) in the China, Japan and Taiwan region: phylogenetic and morphological relationships and taxonomic consequences. *Pl. Syst. Evol.*, 292(3-4): 177-188.
- 執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

- 和名：マツムラソウ
- 分類：イワタバコ科（APG 科名：イワタバコ科）
- 学名：*Titanotrichum oldhami* (Hemsl.) Soler.
- カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（CR）
- 形態の特徴：常緑の多年草。全株に柔らかい粗毛があり、茎は長さ15～30 cmになる。葉は対生し、卵状長楕円形、長さ5～22 cm、葉柄は長さ0.5～3 cm。総状花序を頂生し、多花をつける一方、花を欠き、多数の無性芽をつけた穂状花序をしばしば葉腋から下垂させることがある。花は黄色で、花冠の内面には赤い斑紋があり、萼は5深裂し、長さ7～13 mm、花冠は漏斗状で、長さ3.5 cm。室果は長さ8 mm。
- 分布域（県外）：台湾、中国南部。
- 県内の分布：西表島、石垣島。
- 生育環境：常緑広葉樹林内の川沿いの水のしたたり落ちる湿った崖面に着生する。
- 生育状況：西表島では数河川の流域に点々と産することが知られるが、各地とも個体数は極めて少ない。石垣島では1ヶ所に数個体を産するだけである。
- 学術的価値：単型属をなす特異な種である。分布域の東限であり、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因：園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考：西表島には、遺伝的に台湾北部中央のものに類似した個体群と、台湾中南部産に類似した個体群があり、遺伝的に多様であることが報告されている（Wang *et al.*, 2004）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献：Wang, C.-N., M. Moeller & Q. C. B. Cronk, 2004. Population genetic structure of *Titanotrichum oldhami* (Gesneriaceae), a subtropical bulbiferous plant with mixed sexual and asexual reproduction. *Annals of Botany*, 93: 201-209.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ハマウツボ

分類 : ハマウツボ科 (APG 科名: ハマウツボ科)

学名 : *Orobanche coerulescens* Stephan ex Willd.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 主としてカワラヨモギの根に寄生する一年草。茎は単一で太く、花穂とともに高さ 10~35 cm になる。葉は鱗片状で小さく、疎らに着き、茎・葉とも黄褐色を呈する。花序は穂状または総状、萼は 4 裂、花冠の裂片は 2 唇形。室果は 2 室、多数の球形の微細種子を有する。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、宝島、奄美大島、喜界島、朝鮮、台湾、中国、東南アジア。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、久米島。

生育環境 : 海岸の砂地に生える。

生育状況 : 久米島で 1981 年に確認されているが、以後の現状は不明。伊平屋島では 2008 年に 1 ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。伊是名島と沖縄島の現状は不明。

減少の要因 : 海浜の護岸工事などによる環境の変容。もともと自生地が少ない。

文献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 8 巻. 新星図書出版, 230-231.

執筆者名 : 立石庸一*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホザキミミカキグサ

分類 : タヌキモ科 (APG 科名: タヌキモ科)

学名 : *Utricularia caerulea* L.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年生の小さな食虫植物。地下茎は糸状で地中を這い、その所々から地上葉と直立する花茎を出す。地上葉はへら形で長さ 2~3.5 mm、やや束になってつく。花茎の基部に葉の変形したひげ根のような仮根を束生し、それに少数の捕虫袋をつける。花茎は高さ 10~30 cm、淡紫色のほとんど柄のない花を 4~10 個つける。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、馬毛島、台湾、中国南部、東南アジア、オーストラリア。

県内の分布 : 伊是名島。

生育環境 : 陽当たりの良い湿地、水田の畦に生える。

生育状況 : 懸命に探索を行ったが、見つけることはできなかった。現状は不明で、絶滅した恐れがある。

減少の要因 : 水田、湿地の埋立。もともと自生地が少ない。

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ミカワタヌキモ (イトタヌキモ)

分類 : タヌキモ科 (APG 科名: タヌキモ科)

学名 : *Utricularia exoleta* R. Br.

- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 多年生の食虫植物。茎は糸状で水面すれすれの泥土上を這うか、または水中を漂い、先端は渦巻状に巻く。水中葉は疎らに生じ、小形で1~2回2分裂し、細い裂片に捕虫袋を疎らにつける。花は黄色で小さく、高さ5~8 cmの花茎に1~3個つく。
- 分布域(県外) : 本州(東海以西)、九州、屋久島、徳之島、台湾、中国南部、ヒマラヤ、アフリカ、オーストラリア。
- 県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 湿地、池沼、水田に生える。
- 生育状況 : 西表島では2ヶ所に、石垣島では2ヶ所に産する。伊是名島の現状は不明。沖縄島では数ヶ所に産するが、多くの自生地は水田の埋立や湿地の開発で失われている。沖縄島中部では、北アメリカ原産のオオバナイトタヌキモ *U. gibba* L. とと思われるものが逸出しており、本種と交雑したり競合する恐れがある。
- 減少の要因 : 湿地や水田の埋立。もともと自生地が少ない。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)*。**Utricularia gibba* として評価。
- 保全対策 : 湿地、池沼、水田の保全。帰化種の駆除。
- 文献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島). “事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **イヌタヌキモ**
- 分類 : タヌキモ科 (APG科名: タヌキモ科)
- 学名 : *Utricularia tenuicaulis* Miki
- カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)
- 形態の特徴 : 水中に浮遊する多年生の食虫植物。茎の中心に気道はなく、呼吸枝もない。水中葉は羽状に細裂し、裂片は1平面に配列し、捕虫袋をつける。花茎は太く、長さ10~30 cm、花弁は黄色。果実は球形、径4 mm。
- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、沖永良部島、与論島。
- 県内の分布 : 沖縄島、久米島、宮古島、石垣島。
- 生育環境 : 池や沼の淡水中に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では2ヶ所で確認されている。石垣島では1ヶ所で確認されているが、栽培品の逸出の可能性はある。他の島の現状は不明。
- 減少の要因 : 池や沼などの減少。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)*。**Utricularia australis* として評価。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

- 和名 : **ハマジンチョウ**
- 分類 : ハマジンチョウ科 (APG科名: ゴマノハグサ科)
- 学名 : *Myoporum bontioides* (Sieb. et Zucc.) A. Gray
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴** : 高さ1~2 mの常緑低木。茎は直立して柔らかく、よく分枝する。葉は互生し、多肉質で葉身は長楕円形~楕円形、長さ5~10 cm。花は漏斗形で淡紫色を帯び、内面に赤褐色の斑があり、葉腋に1~3個束生し、横向きに開く。
- 分布域(県外)** : 本州(三重県)、九州(西南部)、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国南部、インドシナ。
- 県内の分布** : 伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島、小浜島?。
- 生育環境** : 海岸の湿地に生える。
- 生育状況** : 伊是名島では1ヶ所の海岸の砂浜に数個体があるだけだが、急激に衰退している。沖縄島中~南部では数ヶ所に点々と産するが、現在確認できる自生地は南城市佐敷字富祖崎だけである。南城市佐敷字富祖崎のハマジンチョウ群落では、205株が記録(伊禮, 1989)されていたが、埋立により減少している。西表島船浦にも数個体あるが、海中道路の建設で砂が堆積し生育環境が悪化している。石垣島の現状は不明。今回の調査で小浜島の1ヶ所で少数個体が確認されたが、植栽品の恐れがある。
- 学術的価値** : 熱帯性の植物で、日本では希産種である。
- 減少の要因** : 自生地の埋立。もともと自生地が少ない。
- 備考** : 南城市佐敷字富祖崎のハマジンチョウ群落は、規模が大きく県指定天然記念物になっている。最近では海岸部の道路や公園の緑化のために植栽されている。沖縄県指定天然記念物(佐敷町富祖崎海岸のハマジンチョウ群落)(1959年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献** : 伊禮青勝, 1989. ハマジンチョウ・メヒルギ群落. “佐敷町史, 三自然”, 佐敷町史編集委員会(編), 佐敷町, 263-276.
小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
仲田栄二(編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会, 119pp.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
- 執筆者名** : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : **タイワンツクバネウツギ**

分類 : スイカズラ科 (APG科名: スイカズラ科)

学名 : *Abelia chinensis* R. Br. var. *ionandra* (Hayata) Masam.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) **環境省カテゴリー**: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 密に枝を分枝する高さ1~2 mの常緑低木。葉は対生し、卵形~楕円形で、長さ0.7~2 cm。花は枝先に多数つき、萼片は5個、花冠は白色でほぼ放射相称ラッパ形。瘦果は細長い紡錘形で萼片が残り、つくばね状になる。

分布域(県外) : 奄美大島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 山地の岩上に生える。

生育状況 : 石垣島では1ヶ所、沖縄島では1ヶ所に生育が知られるが、沖縄島では絶滅したとされ(Hatusima, 1974)、石垣島では2010年の調査で少数個体が確認された。奄美大島では園芸用の採集で絶滅寸前である。

学術的価値 : 県内では分布が限られ、台湾産とはやや花の形態が異なる。

減少の要因 : もともと生育地が限られている。園芸用の採集。

- 備 考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。
- 文 献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
- 執 筆 者 名 : 新城和治*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・比嘉清文(追補)

- 和 名 : ヒメスイカズラ
- 分 類 : スイカズラ科 (APG 科名: スイカズラ科)
- 学 名 : *Lonicera japonica* Thunb. var. *miyagusukiana* Makino
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形 態 の 特 徴 : 常緑または半落葉性の低木。茎はつる性で岩上を這い、小枝を分枝し長さ 1~2 m になる。葉は対生、常緑で革質、脈が目立ち、卵形~長楕円形で、全縁である。花は白色、茎頂近くの葉腋につき、花冠外面に下向きの伏毛が生え、これに腺点が混じる。
- 分 布 域 (県 外) : 徳之島、沖永良部島。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、伊江島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生 育 環 境 : 海崖または石灰岩地域の断崖などの風衝地に生える。
- 生 育 状 況 : 沖縄島では 3 ヶ所に少数個体が知られるが、個体数は少ない。1 ヶ所は開発で失われた可能性がある。伊江島では最近確認された(立石ら, 2004)。石垣島では 2 ヶ所に産するが、現状は不明。与那国島では数ヶ所に産し、個体数はやや多い。宮古島と西表島の現状は不明。
- 学 術 的 価 値 : 琉球列島の固有変種。スイカズラと異なり、四倍体であることが判っている (Denda *et al.*, 2007)。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。

- 文 献 : 新 敏夫・新納義馬, 1969. 与那国島の植物相. 鹿児島大学理科報告, (18) : 71-111.
池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 9 巻. 新星図書出版, 25.
立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.
Denda T., A. Kojya & M. Yokota, 2007. Chromosomal studies of insular endemic *Lonicera japonica* Thunb. var. *miyagusukiana* Makino (Caprifoliaceae) in the Ryukyu Archipelago of Japan. *Caryologia* 60(4): 331-337.

- 執 筆 者 名 : 新城和治*・宮城朝章*・山城 考*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : サイヨウシャジン
- 分 類 : キキョウ科 (APG 科名: キキョウ科)
- 学 名 : *Adenophora triphylla* (Thunb.) DC.
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 の 特 徴 : 全株無毛で高さ 20~60 cm になる多年草。根茎は太く白色。茎葉は普通 3~4 個ずつ輪生する。花は淡紫色、茎頂の円錐花序につく。花冠の先はややすぼまってつぼ形になり、花柱が長くとび出る。
- 分 布 域 (県 外) : 本州 (中国)、四国、九州、種子島、口之永良部島、奄美大島、徳之島、喜界島、沖永良部島、台湾、中国。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、久米島、粟国島、渡名喜島、慶良間諸島。
- 生 育 環 境 : 日当たりのよい低地の原野から山地の草地に生える。

生育状況 : 沖縄島北部、久米島、粟国島、渡名喜島、慶良間諸島の各地で確認されているが、個体数は少ない。
減少の要因 : もともと個体数が少ない。生育地の開発。遷移の進行。

文献 : 新城和治・宮城康一, 1988. 沖縄島国頭地域の植物相. “国頭郡天然記念物緊急調査”, 沖縄県教育委員会, 117-193.

執筆者名 : 新城和治*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名 : タチミゾカクシ (アブノメミゾカクシ)

分類 : キキョウ科 (APG 科名: キキョウ科)

学名 : *Lobelia alsinoides* Lam.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 一年草または越年草。茎は基部がやや匍匐し、上部は直立または斜上し、時に疎らに分枝して、長さ 10 ~ 30 cm になる。葉は互生し、広披針形~卵形、長さ 0.5~2 cm、葉腋に 1 花をつける。花は青紫色で、花冠は深く 5 裂し、長さ 5~8 mm。室果は長さ 3 mm、球状倒卵形で、長さ 2 cm の柄がある。

分布域 (県外) : 九州 (福岡県)、台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島。

生育環境 : 日当たりのよい小面積の湿地、林道のわだちの中、小川の湿った岩上、水田の畦などの明るい環境に生える。

生育状況 : 沖縄島ではかつては国頭村から那覇市までの広い範囲に自生地が点々と知られたが、現在は恩納村と金武町の数ヶ所に産するだけである。自生地の遷移が進んで衰退したり、自生地の開発が進んで、減少している。宮古島の現状は不明で、絶滅した可能性がある。

減少の要因 : 湿地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : マルバハタケムシロ

分類 : キキョウ科 (APG 科名: キキョウ科)

学名 : *Lobelia loochooensis* Koidz.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑多年草。茎は匍匐し、多数の葉を密に互生する。葉は円形~倒卵形、長さ 5~7 mm、光沢がある。花は腋生し、淡青紫色~白色、萼は長さ 3 mm、花冠は 5 裂し、長さ 8~9 mm。朔果は長さ 4 mm。

分布域 (県外) : 奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島南部 (那覇市小禄)、久米島。

生育環境 : 海岸近くの日当たりのよい湿地、湿った崖、水田の畦などに生える。奄美大島では、海岸近くのリュウキュウチク林の林床に生える場合がある。

生育状況 : 沖縄島では既に絶滅したと思われる。基準産地である久米島からは、1929 年に初めて報告され、基準標本には水田の畦に生えると記されている。その後は水田を中心に探索が続いたが、発見されな

いままの状態が続いた。2005年に3ヶ所に生育していることが確認され、さらに久米島の別の1ヶ所でも確認されている。

- 学 術 的 価 値 : 琉球列島の固有種で、近縁種はオーストラリアに分布し (Murata, 1992; Kokubugata *et al.*, 2012)、植物地理学上貴重である。
- 減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。
- 保 全 対 策 : 自生地は天然記念物などに指定して保全する必要がある。
- 備 考 : 奄美大島では数ヶ所に産するが、少ない。

- 文 献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.
- Murata, J., 1992. Morphology and chromosome number of *Lobelia loochoensis* Koidz. J. Jpn. Bot., 67: 282 - 285.
- Kokubugata, G., K. Nakamura, P. I. Forster, Y. Hirayama & M. Yokota, 2012. Verification of antitropical distribution of *Lobelia* species (Campanulaceae) between the Ryukyu Archipelago of Japan and Oceania based on molecular data. Australian Journal of Botany, 60: 417-428.
- 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・新城和治・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

- 和 名 : マルバミゾカクシ
- 分 類 : キキョウ科 (APG 科名: キキョウ科)
- 学 名 : *Lobelia zeylanica* L.
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、長さ 20~90 cm になり、先端部は斜上する。葉は卵形~広卵形、長さ 1~6 cm、心脚~切脚、下面に微毛がある。花は腋生し、淡青紫色、花冠は 5 裂し、長さ 5~9 mm。室果は長楕円状卵形、長さ 3~7 mm。
- 分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、ミクロネシア。
- 県 内 の 分 布 : 与那国島。
- 生 育 環 境 : 低地の自然林や二次林の湿った林床や水田の畦に生える。
- 生 育 状 況 : 4ヶ所に自生することが確認されているが、個体数は極めて少ない。自生地の近くまで開発が進んでいる。外来種との競合や遷移の進行で減少している生育地がある。
- 学 術 的 価 値 : 日本では唯一の産地で、分布域の北限である。
- 減 少 の 要 因 : 自生地の開発。水田の減少。遷移の進行。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文 献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・村松 稔(追補)

- 和 名 : ナガバハグマ
- 分 類 : キク科 (APG 科名: キク科)
- 学 名 : *Ainsliaea oblonga* Koidz.

- カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴：高さ 20~40 cm になる常緑の多年草。葉は長い柄があり、葉は 10 個程度が茎の中部からやや下方に集まってつき、葉身は長楕円状披針形で先は尖る。頭花は白色の 3 小花からなり、茎の先に総状につく。
- 県内の分布：沖縄島北部、西表島。
- 生育環境：山地溪岸に生える。
- 生育状況：国頭村、東村、大宜味村、名護市、宜野座村の限られた河川の中流域に生え、大部分の自生地はダム建設により消失している。西表島のものは、オキナワテイショウの葉がやや狭葉になったもので、沖縄島北部のナガバハグマとは異なる。
- 学術的価値：沖縄県の固有種。
- 減少の要因：ダムの建設。森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考：沖縄島北部のものと西表島のものは、形態的に大きく異なり、分類学的な再検討が必要である。変種のオオナガバハグマ *A. oblonga* var. *latifolia* は奄美大島に産する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献：沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成 7 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成 8 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
横田昌嗣・新城和治・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料 7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.
- 執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和名：ワタヨモギ
- 分類：キク科 (APG 科名: キク科)
- 学名：*Artemisia gilvescens* Miq.

カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

- 形態の特徴：常緑の多年草。茎は長さ 30 cm になり、密に綿毛をふく。葉は長さ 6~7 cm、幅 2.8~4.5 cm、3 中裂し、上面に白色の腺点がある。円錐花序は細長く、頭花筒状、長さ 4 mm、幅 2 mm、密に綿毛をふく。
- 分布域(県外)：本州、四国、中国。
- 県内の分布：渡名喜島。

- 生育環境 : 海岸に近い原野や集落周辺の草地に生える。
- 生育状況 : 数ヶ所に小規模な集団を形成する。
- 学術的価値 : 分布域の南限であり、著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。日本全体で減少しており、国内で本種が現存するのは、渡名喜島と徳島県だけである (小川, 2003) という。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。ギンネムの侵入による原野の消失。ニシヨモギとの交雑による遺伝的汚染。
- 保全対策 : 渡名喜島は沖縄県では数少ないギンネムが侵入していない島嶼であったが、ごく最近導入され、島内の各地にギンネム林が広がりつつある。海岸近くの原野などに生育する植物にとっては、ギンネムの侵入は生育地の消失につながる。ギンネムの分布域が拡大しない間に、駆除することが重要である。ニシヨモギとの交雑個体も見つかっており、ワタヨモギ自生地周辺のニシヨモギを除去する必要があるかも知れない。

文献 : 小川 誠, 2003. ワタヨモギ. “レッドデータプラント”, 矢原徹一 (監修), 山と溪谷社, 東京, 23.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ (粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : **イソノギク**

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Aster asa-grayi* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は分枝し、斜上または地上を這い、長さ 15~50 cm になる。花をつけない茎は短く、先にさじ形の根生葉をロゼット状につける。茎葉は互生し、へら形、やや多肉質で毛が散生する。頭花は白色、花茎の先端に単生または散房状につく。

分布域(県外) : 奄美大島、加計呂麻島、徳之島、沖永良部島。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 海岸の岩上、断崖上に生える。

生育状況 : 恩納村の2ヶ所のみ知られる。個体数は少ない。

学術的価値 : 琉球列島の固有種である。奄美諸島のものは、花が淡紫色を帯びる。

減少の要因 : 観光客による踏みつけ。園芸用の採集。もともと生育地が限られている。

備考 : 唯一の自生地は県指定の天然記念物である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オキナワギク**

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Aster miyagii* Koidz.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 匍枝を出して繁殖する常緑の多年草。匍枝は細く、地上を這い節部から根と共に根生葉を出す。根生葉はロゼット状につき、円形~倒卵形で両面に粗毛があり、花時にも残っている。頭花は径 2~2.5 cm、淡青紫色、茎または枝の先につく。

- 分布域（県外）：奄美大島、加計呂麻島、請島、徳之島。
県内の分布：沖縄島北部、藪地島。
生育環境：沖縄島北部の主に東海岸の海辺の岩上や崖に生える。
生育状況：1980年頃までは、国頭村から名護市の海岸岩上に群生しているのが見られたが、最近はめっきり減少している。最近、藪地島からも報告されている（佐藤ら，2017）
学術的価値：中琉球の固有種であり、沖縄島は分布域の南限である。
減少の要因：護岸・道路工事。園芸用の採集。
備考：IUCN カテゴリー：Vulnerable (VU)。

- 文献：新納義馬・島袋 曠，1974. 沖縄島北部（国頭村）東海岸の植生. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告，国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”，沖縄県，17-35.
佐藤寛之・立石庸一・齊藤由紀子・天野正晴・中村元紀・杉山巳次，2017. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実Ⅸ：うるま市藪地島の植物相. 琉球大学教育学部紀要，(91)：53-74.

執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：ヨナグニイソノギク
分類：キク科 (APG 科名：キク科)
学名：*Aster walkeri* Kitam.
カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：茎は下部から分枝して斜上、高さ 15 cm くらいになる常緑の多年草。根生葉はやや肉質でへら形、両面とも茎とともに軟毛を密につける。茎葉は長楕円形、茎上部になるほど小さくなる。頭花は淡紫色で、直径 3 cm 前後、枝先に単生する。
県内の分布：与那国島。
生育環境：海岸の断崖地に生える。
生育状況：与那国島の数ヶ所にわずかに見られる。台風による崖崩れで消失した自生地がある。2005年に最も個体数の多い集団が新たに発見された。
学術的価値：与那国島の固有種。
減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然災害による自生地の消失。

- 文献：初島住彦・金井弘夫，1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報，(7)：115-120.
与那国町教育委員会，1995. 与那国島の植物. 与那国町教育委員会，336pp.

執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：タウコギ
分類：キク科 (APG 科名：キク科)
学名：*Bidens tripartita* L.
カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：一年草。茎は直立、分枝し高さ 20~150 cm に達する。葉は対生で 3~5 裂し、裂片は鋸歯のある卵状披針形。黄色の頭花を茎頂や葉腋から出た花柄の先につけ、舌状花はない。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、奄美諸島、アジア、ヨーロッパ、北アメリカ、オーストラリア。
 県内の分布：沖縄島。
 生育環境：水田の畦や湿地に生える。
 生育状況：本部半島と名護市の水田の数ヶ所で確認されている。
 減少の要因：水田や湿地の減少。もともと自生地が少ない。除草剤の使用。
 備考：奄美大島では林道の湿ったわだちなどに普通に生えるが、沖縄島ではまれである。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。
 執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*

- 和名：タカサゴアザミ
 分類：キク科 (APG 科名: キク科)
 学名：*Cirsium japonicum* DC. var. *australe* Kitam.
 カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴：高さ 50~100 cm に達する多年草。根生葉は倒卵状狭長楕円形、葉縁は 5~6 対に羽状に分裂し、茎葉は長楕円形で、基部は茎を抱く。頭花は枝先につき、球形で紫色または紅色を帯びる。
 分布域（県外）：台湾、中国。
 県内の分布：魚釣島。
 生育環境：海岸に生える。
 生育状況：魚釣島の 1ヶ所から記録（新納ら, 1971；新納・新城, 1980）されているが、その後確認されていない。
 学術的価値：魚釣島に隔離分布し、中国大陸と魚釣島の植物相の共通性を示す植物である。日本で唯一の産地である。
 減少の要因：野生化したヤギによる食害。もともと自生地が限られている。
 保全対策：野生化ヤギの駆除が急務である。

- 文献：初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島県の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11) : 62-66.
 新納義馬・新城和治, 1980. 植物調査. “尖閣諸島調査報告書, 学術調査編”, 沖縄開発庁, 155-244.
 新納義馬・玉城松栄・新城和治・宮城康一, 1971. 尖閣列島の植物. “尖閣列島学術調査報告”, 琉球大学, 37-84.

- 執筆者名：新城和治*・宮城朝章*

- 和名：キクバイズハハコ
 分類：キク科 (APG 科名: キク科)
 学名：*Conyza aegyptiaca* (L.) Aiton
 カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴：一年草。全株に灰白色の粗毛を密につけ、茎は直立し上方で分枝して、高さ 20~60 cm になる。根生葉は長楕円状披針形だが花時には枯れ、茎葉は長楕円形で縁は羽状に裂ける。頭花は黄色で直径 1.5 cm 前後、枝先に数個集まってつく。
 分布域（県外）：台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア、アフリカ。

県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島、与那国島。
生育環境 : 日当たりのよい低地の草地に生える。
生育状況 : 与那国島で最近確認されているが、個体数は極めて少ない。他の島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 生育地の開発。もともと自生地が限られている。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 9 巻. 新星図書出版, 59.

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ネバリイズハハコ**
分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
学名 : *Conyza leucantha* (D. Don) Ludlow et Raven
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 30~80 cm に達する一~二年草。全株に白色粉状の腺毛を密生して粘り気がある。茎葉は長楕円状倒披針形で先は尖る。頭花は淡黄色、枝先に多数集まり、まばらな散房状につく。

分布域(県外) : 台湾、中国、ヒマラヤ、東南アジア、オーストラリア。

県内の分布 : 西表島、与那国島。
生育環境 : 日当たりのよい低地の草地に生える。
生育状況 : 与那国島で最近確認されているが、個体数は少ない。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 生育地の開発。もともと自生地が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 9 巻. 新星図書出版, 60.

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*

和名 : **ダイトウワダン**
分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
学名 : *Crepidiastrum lanceolatum* Nakai var. *daitoense* (Tawada) Hatusima
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は木質化し、大きなものは高さ 15~20 cm になり、葉腋から多数の枝を放射状に出す。葉は枝先に根生状につき、葉身は倒卵状披針形で表面には多少光沢がある。

県内の分布 : 北大東島、南大東島。

生育環境 : 日当たりのよい岩場に生える。
生育状況 : 南大東島では数ヶ所に、北大東島では 3ヶ所に産するが、個体数は少ない。
学術的価値 : 大東諸島の固有変種。
減少の要因 : もともと個体数が限られている。

備 考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。

文 献 : 横田昌嗣・宮城康一, 1992. 大東諸島の植物相. “ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”, 沖縄県教育委員会, 17-42.
城間盛男, 2011. 北大東島の植物図鑑. 北大東村教育委員会, 101pp.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **モクビャッコウ**

分 類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学 名 : *Crossostephium chinense* (L.) Makino

方 言 名 : イシヂク (沖縄)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 高さ 30~80 cm に達する常緑の小低木。全体に灰白色の短毛を密につけ白色を帯びる。茎はよく分枝し、傘状になる。頭花は直径約 5 mm、淡黄色で球形、茎頂や葉腋に総状または円錐状につく。

分布域 (県外) : 悪石島、奄美諸島、硫黄島、台湾、中国南部、フィリピン。

県 内 の 分 布 : 沖縄諸島、大東諸島、宮古諸島、八重山諸島。

生 育 環 境 : 海岸の波しぶきがかかる隆起石灰岩の上に生える。

生 育 状 況 : かつては小島嶼にも普通に見られたが、現在はいずれの産地でも個体数が急減している。西表島では極めてまれで、1ヶ所に少数個体を産するだけである。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。自生地の開発。

備 考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (モクビャッコウ) (2005 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

宮城康一, 1992. 沖大東島の植物相と現存植生. 沖縄生物学会誌, (30) : 65-70.

赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男, 2016. 鳩間島・新城 (上地・下地) 島・黒島の植物相 (Flora). “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”, 沖縄県立博物館・美術館, 13-68.

執 筆 者 名 : 新城和治*・宮城朝章*・洲鎌栄徳*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **サウヒヨドリ**

分 類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学 名 : *Eupatorium lindleyanum* DC.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 全体に粗毛を密につける多年草。茎は直立し、単一または上方で疎らに分枝し、高さ 30~100 cm に達する。葉は対生し、ほとんど柄がなく、披針形で 3 行脈が目立ち、あらい鋸歯がある。頭花は淡赤褐色、茎や枝の先に密な散房花序をつくる。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、奄美大島、種子島、屋久島、徳之島、沖永良部島、与論島、朝鮮、台湾、中国、ベトナム、マレーシア、タイ、インド。
- 県内の分布：伊平屋島、沖縄島北部、久米島。
- 生育環境：日当たりのよい湿地に生える。
- 生育状況：伊平屋島（新納・新城，1959）、伊平屋田名池のヒメガマーハイキビ群落中（玉城・島袋，1971）、今帰仁城跡、伊平屋島（仲田，1974）、国頭（新城・宮城，1988）で記録されているが、近年は確認されていない。絶滅した可能性がある。
- 減少の要因：生育地の土地利用による改変。外来種との競合。もともと自生地が限られている。
- 文献：仲田栄二，1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”，仲田清英（編），41-107.
新納義馬・新城和治，1959. 伊平屋・伊是名諸島の植物. 琉球大学文理学部紀要（理学編），（3）：81-105.
新城和治・宮城康一，1988. 沖縄島国頭地域の植物相. “国頭郡天然記念物緊急調査”，沖縄県教育委員会，117-193.
玉城松栄・島袋敬一，1971. 琉球列島の湿地植生. 沖縄生物学会誌，（7）：19-26.

執筆者名：横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

- 和名：ヤナギニガナ（アツバニガナ）
- 分類：キク科（APG科名：キク科）
- 学名：*Ixeris laevigata* (Blume) Sch. Bip. ex Maxim.
- カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

- 形態の特徴：常緑の多年草。根茎は短く、数枚の葉を根生する。葉は無毛で、披針形、羽状に浅裂し、微鋸歯が疎らにあり、長さ8～30 cm。花茎は15～30 cmになり、散房状に多数の頭状花序をつける。頭花は黄色で、10個程度の舌状花をつけ、花冠は長さ7 mm。果実は長さ4 mm、長さ3 mmの冠毛がある。
- 分布域（県外）：九州南部、口之永良部島、中国南部（海南島）、フィリピン、インドシナ、マレーシア。
- 県内の分布：沖縄島北部、西表島。
- 生育環境：主な生育地は溪流沿いの日当たりのよい湿った岩上であるが、沖縄島北部（国頭村、大宜味村）の2ヶ所では、例外的に二次林の明るい林床や路傍の草地に生えることがある。
- 生育状況：沖縄島北部では数河川の溪流沿いに自生地が知られるが、個体数は非常に少ない。西表島では1河川の2ヶ所で確認されているが、極めてまれである。
- 学術的価値：マレーシア系の植物で、日本では希産種である。
- 減少の要因：ダム建設による自生地の水没。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。

- 文献：沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ（陸域・海域）. 沖縄建設弘済会，3-14，117-135，277-286，349-373.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，5-13，151-168.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智，1997. 琉球列島植物分布資料15. 沖縄生物学会誌，（35）：55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*

和名 : コケセンボンギク

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Lagenophora lanata* A. Cunn.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 小形の多年草。根生葉はロゼット状で平開し、倒卵形～広へら形、葉縁には波状のきょ歯があり、軟毛を布す。頭花は白色で小形、花茎の先に1個ずつつく。

分布域(県外) : 本州(広島県)、九州西南部、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島、嘉弥真島。

生育環境 : 低地から山地の草原や林縁に生える。

生育状況 : 久米島で1957年に記録されているが、2005年の調査では確認されなかった。沖縄島北部では、1948年に茶畑で、1951年に山地で採集された記録があるが、2004年の調査では確認することはできなかった。石垣島では1972年と1974年に記録されているが、再発見できなかった。西表島の現状は不明。2013年に嘉弥真島の1ヶ所でごく少数個体が発見された。

学術的価値 : コケタンポポと共にオーストラリア系の種で(Nakamura *et al.*, 2012)、植物地理学上重要である。

減少の要因 : 生育地の土地利用による改変。もともと自生地が少ない。競合する帰化植物の繁茂。

備考 : 奄美大島ではかつては数ヶ所で記録されているが、最近では1ヶ所に少数個体を産するだけである。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会編, 沖縄県, 11-39.

Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, P. Forster, G. Wilson, C.I Peng & M. Yokota, 2012. Molecular phylogeography reveals an antitropical distribution and local diversification of *Solenogyne* (Asteraceae) in the Ryukyu Archipelago of Japan and Australia. *Biol. J. Linn. Soc.*, 105(1): 197-217.

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : サワオグルマ

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Senecio pierotii* Miq.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全株白色の綿毛を密布する多年草。茎は軟く、中空で直立し、高さ30~80 cmになる。葉はへら状披針形、肉質で厚い。頭花は黄色、茎の先に散房状または仮傘形状につく。

分布域(県外) : 本州、四国、九州。

県内の分布 : 伊平屋島。

生育環境 : 湿地、原野に生える。

生育状況 : 伊平屋島で1974年に確認されている。今回の調査でも探索が試みられたが、確認することができず、現状は不明。絶滅した恐れがある。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 低地の開発。外来種との競合。もともと自生地が少ない。

文献 : 仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英 (編), 41-107.

執筆者名 : 立石庸一*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : コケタンポポ

分類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学名 : *Solenogyne mikadoi* Koidz.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑多年草。根茎は短く、多数の葉を根生する。葉は倒披針状楔形、羽状に裂け、両面に微毛がある。頭状花序は花茎に1個つき、径1.5 mm、白色～淡黄色で、数個の管状花をつける。果実は長さ1.5 mmで、無毛。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 典型的な溪流植物で、洪水時に容易に水没するような河川の中流域の日当たりのよい湿った岩上に生える。

生育状況 : 沖縄島北部では5河川、西表島では1河川に自生が確認されているが、各地とも自生地は狭い範囲に限られ、個体数は少ない。自生地の1ヶ所(国頭村タナガームイ)は国の天然記念物に指定されているが、上流側にあるダムによる水量調節で生育地が乾燥化し、観光客による踏みつけの影響もあり、個体数が激減している。西表島の自生地上流側には、取水施設が作られ、取水が始まっていることから、水量の減少で自生地が乾燥して衰退しつつある。取水の規模が大きくなると、洪水の頻度の減少が起こって、非溪流生の植物が溪流帯に侵入して、コケタンポポなどの溪流植物の生育環境が奪われる恐れがある。

学術的価値 : 琉球列島の固有種である。コケタンポポ属は世界に数種知られるが、他のすべての種はオーストラリア東部に産し、7000 km以上離れた著しい隔離分布を示す。分子系統地理学的な研究から、コケタンポポはオーストラリアの祖先種から238万年前に分化し、西表島から奄美大島へと琉球列島を北上し、コケタンポポの島嶼間隔離は33万年前に起こったことが推定されている(Nakamura *et al.*, 2012)。

減少の要因 : ダム建設による自生地の水没と乾燥化。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : IUCNカテゴリー: Vulnerable (VU)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.

横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

横田昌嗣・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.

Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, P. Forster, G. Wilson, C.I Peng & M. Yokota, 2012. Molecular phylogeography reveals an antitropical distribution and local diversification of *Solenogyne* (Asteraceae) in the Ryukyu Archipelago of Japan and Australia. *Biol. J. Linn. Soc.*, 105(1): 197-217.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : アオヤギソウ (アオヤギバナ)
 分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
 学名 : *Solidago yokusaiana* Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。茎は高さ 20~50 cm になり、多数の葉をつける。根生葉は披針形、長さ 4~7 cm、花時には消失する。茎葉は互生し、線状披針形。頭状花序は茎の先に集まってつき、黄色で、径 1.5 cm、舌状花と管状花からなる。舌状花の花冠は長さ 5~6 mm。瘦果は長さ 3.5 mm、冠毛は長さ 4~5 mm。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島。

県内の分布 : 沖縄島北部 (国頭村、東村、大宜味村)。

生育環境 : 典型的な溪流植物で、洪水時に容易に水没するような河川の中流域の日当たりのよい岩上や崖に生える。

生育状況 : 自生地は 6 河川が知られるが、3 河川 (辺野喜川、大保川) では既にダム建設により絶滅し、残る 4 河川ともごく狭い範囲にごく少数の個体が残るだけであり、2 河川では外来種のアメリカハマグルマが自生地に侵入し、生育環境が脅かされている。

学術的価値 : 分布域の南限であり、琉球列島では唯一の産地である。

減少の要因 : ダム建設による自生地の水没。外来種との競合。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 比嘉清文, 1983 . 琉球植物分布メモ. 沖縄生物学会誌, (21) : 79-80.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995 . 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995 . 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997 . 琉球列島植物分布資料 15 . 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウリカワ
 分類 : オモダカ科 (APG 科名: オモダカ科)
 学名 : *Sagittaria pygmaea* Miq.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。葉はすべて根生し、沈水性、線形で上部は基部よりも少し広がるためへら形になり、長さ 10 ~15 cm。花は白色、水面より上に伸びた花茎の上部に雄花が 3 個ずつ 1~2 段に輪生し、下方に雌花が 1~2 個つく。

分布域 (県外) : 北海道西南部、本州、四国、九州、奄美諸島、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布 : 沖縄島、西表島、与那国島。

生育環境 : 水田、湿地に生える。

生育状況 : 2005 年に沖縄島中部で確認されているが、他の島については現状不明。

減少の要因 : 沼地、水田の減少。外来種との競合。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 立石庸一*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : マルミスブタ (オオスブタ)

分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)

学名 : *Blyxa aubertii* L. C. Richard

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 一年生の沈水植物。茎はほとんど伸びず、葉は根生して株をつくり、線形、長さ 10~30 cm。時に植物体全体が紫紅色を帯びる個体がある。花は白色で葉腋の花柄につくが、萼筒が細長くのびて水面に達し、3 個の花弁を開く。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、朝鮮、中国、台湾、インド、マダガスカル、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。

生育環境 : 池、水田や流れの少ない川床などの浅い淡水中に生える。

生育状況 : 沖縄島では北~中部の数ヶ所で、与那国島では 1 ヶ所で、石垣島では数ヶ所で確認されている。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 池沼、水田の減少。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : コスブタ (スブタ)

分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)

学名 : *Blyxa echinosperma* (Clarke) Hook. f.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 一年生の沈水植物。茎はほとんど伸長せず、葉は根生して株をつくる。葉は線形で長さ 10~30 cm。花は葉腋に出た花柄につく。萼筒が水深に応じて細長く伸び、3 個の白色の花弁を水面に開く。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国、インド、東南アジア。

県内の分布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。

生育環境 : 沼や水田の浅い淡水中に生える。

生育状況 : 個体数は少なく、水田や水路などに散在する。

減少の要因 : 池沼、水田の減少。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤナギスブタ

- 分 類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)
- 学 名 : *Blyxa japonica* (Miq.) Maxim. ex Asch. et Gurke
- カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 沈水性の一年草。茎は水中に伸長して分枝し、長さ 30 cm になる。葉は互生し、長さ 3~5 cm、紫褐色を帯び、縁に細かい鋸歯がある。花は葉腋の柄のない苞鞘につつまれ、萼筒が水面まで伸びて 3 個の白色の花弁をひろげる。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、朝鮮、台湾、インド、東南アジア。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 水田や水路の水中に生える。
- 生育状況 : 沖縄島中部の 1 ヶ所で確認されているが、2004 年の調査では確認されなかった。この自生地は、ゴルフ場建設で失われた。他の島の現状は不明。
- 減少の要因 : 池沼、水田の減少。除草剤や肥料の流入による環境悪化。
- 備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : ウミシヨウブ
- 分 類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)
- 学 名 : *Enhalus acoroides* (L. f.) Royle
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 浅海に生える常緑の沈水植物。根茎は横走して分枝し、腐った葉の長い繊維で密におおわれ、葉を束生する。葉はひも状、長さ 60~90 cm、幅 1.2~1.8 cm、細歯縁。雌雄同株で、萼片と花弁は広卵形、3 個、雄花の雄蕊は 3 個、雌花の子房は卵円形。
- 分布域 (県外) : インドシナ、フィリピン、インドネシア、マレーシア、ミクロネシア、ニューギニア、オーストラリア北部、アフリカ東部、紅海。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 砂地の浅海に群生する。
- 生育状況 : 西表島では大規模な群落が発達するが、海岸の開発、海水の汚染などにより今後減少する恐れがある。西表島の一部の自生地では、生育面積が減少しているが、アオウミガメの食害による減少が指摘されている (竹山ら, 2014)。石垣島は、自生地に隣接する陸域部分にゴルフ場やリゾート施設が建設されており、陸域の開発の影響を受けている可能性がある。与那国島の現状は不明。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、琉球列島の植物相を特徴づける植物の一つである。
- 減少の要因 : 浅海の開発。海水の汚染。アオウミガメによる食害。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文 献 : 当真 武, 1999. 琉球列島の海草 - I 種類と分布. 沖縄生物学会誌, (37) : 75-92.
 Tsuda, R. T. & S. Kamura, 1990. Comparative review on the floristics, phytogeography, seasonal aspect and assemblage patterns of the seagrass flora in Micronesia and the Ryukyu Islands. *Galaxea*, 9: 79-93.
 竹山佳奈・河野裕美・蔵持登士江・岩崎彩加・村上智一・木村賢史・鶴飼亮行・中瀬浩太, 2014. 西表島北西部における熱帯性海草ウミシヨウブの広域分布および生育環境条件について. 土木学会論文集, B3 (海洋開発), 70(2): I_1068-I_1073.
 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : トゲウミヒルモ(旧和名:ヒメウミヒルモ)

分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)

学名 : *Halophila decipiens* Ostenf.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から根を出す。葉は卵状楕円形で薄く、長さ 1 cm 前後、細長い柄があり、葉縁に突起がある。雌雄異株またはまれに同株。雄花は 1~2 cm の花柄があり、花被片は 3 個あって透明。雌花は柄がなく、萼筒が少し伸びて先が 3 裂する。ウミヒルモ *H. ovalis* に似るが、葉が細長く、葉縁に突起があることで異なる。

分布域(県外) : 台湾、香港、フィリピン、タイ、マレーシア、マリアナ諸島、インド、アフリカ、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 浅海(水深 17~30 m くらいまで)の砂地に生える。

生育状況 : 瀬底島と金武湾から記録されているが、生育地は少ない。生育地の状況は Tsuda & Kamura (1990) に示されている。

学術的価値 : 長崎県大村湾からも記録されたので(中西ら, 2008)、分布域の北限ではなくなったが、隔離分布をするので植物地理学上貴重である。減少の要因: 自生地の開発。もともと自生地が限られる。海水の汚濁。浚渫。海砂の採取。

備考 : *H. ovata* Gaudich. と同定する意見(島袋, 1990)があるが、誤同定と考えられる。ヒメウミヒルモの和名は、*H. minor* (Zoll.) Hartog に用いられることがあり、混乱する恐れがある。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 島袋敬一, 1990. 琉球列島維管束植物集覧. ひるぎ社, 那覇, 794pp.

当真 武, 1997. 海草の新記録情報と図鑑等に関するコメント. 沖縄生物学会誌, (35) : 71-74.

当真 武, 1999. 琉球列島の海草—I 種類と分布. 沖縄生物学会誌, (37) : 75-92.

Tsuda, R. T. & S. Kamura, 1990. Comparative review on the floristics, phytogeography, seasonal aspect and assemblage patterns of the seagrass flora in Micronesia and the Ryukyu Islands. *Galaxea*, 9: 79-93.

中西弘樹・吉岡一也・小林 業, 2008. 長崎県大村湾におけるウミヒルモ属 *Halophila* 植物(トチカガミ科)の分布. 植物地理・分類研究, 56: 17-19.

大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : オオウミヒルモ

分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)

学名 : *Halophila major* (Zoll.) Miq.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から根を出す。葉身は広楕円形~卵状楕円形、長さ 15~25mm、幅 9~11mm、全縁、側脈は 18~22 対、葉縁の透明細胞は 1 列、葉柄は長さ 15~30mm、紅色を帯びる。雌雄異株。雄花は 5~6mm の苞鞘があり、花被片は 3 個、長さ 3~4mm、雌花の子房は長さ 1.5~2mm。ウミヒルモ *H. ovalis* に似るが、葉は広楕円形、側脈は 18~22 対、葉柄は強く紅色を帯びる点で、葉が楕円形、側脈が 12~16 対で、葉柄は紅色をほとんど帯びないウミヒルモと

区別することができる。

- 分布域（県外）： 本州（千葉県、和歌山県）、四国、九州、種子島、トカラ列島、奄美大島、西太平洋地域に広く分布。
- 県内の分布： 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境： 潮間帯下部から浅海（水深2mより深いところ）の砂泥地に生える。
- 生育状況： 沖縄島、石垣島、西表島のそれぞれ数ヶ所から記録されているが、生育地は少ない。生育地の状況は Kuo *et al.* (2006) と大場・宮田 (2006) に示されている。
- 減少の要因： 自生地の開発。もともと自生地が限られる。海水の汚濁。浚渫。海砂の採取。
- 備考： これまで国内に産する葉が全縁のウミヒルモ類はすべてウミヒルモ *H. ovalis* とされていたが、複数の隠蔽種が含まれていることが判り、細分された。竹富町希少野生動植物種(ウミヒルモ) (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文献： Kuo, J., Z. Kanamoto, H. Iizumi & H. Mukai, 2006. Seagrasses of the genus *Halophila* Thouars (Hydrocharitaceae) from Japan. *Acta Phytotax. Geobot.*, 57(2): 129-154.
大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名： 横田昌嗣

- 和名： ヒメウミヒルモ
- 分類： トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)
- 学名: *Halophila minor* (Zoll.) den Hartog
- カテゴリー： 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴： 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から根を出す。葉身は狭倒卵形～倒卵形、長さ5～13mm、幅4～5.5mm、全縁、側脈は5～12対、葉縁の透明細胞は1列、葉柄は長さ7～25mm。雌雄異株。雄花は2.5～4mmの苞鞘があり、花被片は3個。2.5～3.5mm、雌花の子房は長さ1～1.5mm。ウミヒルモ *H. ovalis* に似るが、葉が倒卵形で、側脈が5～12対である点で、葉が楕円形で、側脈が12～16対あるウミヒルモと区別できる。
- 分布域（県外）： 奄美大島、台湾、フィリピン、東南アジア、ミクロネシア、アフリカ、オーストラリア。
- 県内の分布： 沖縄島、屋我地島、西表島。
- 生育環境： 潮間帯下部から浅海（水深2～11m）の砂泥地に生える。
- 生育状況： 沖縄島周辺と西表島から記録されているが、生育地は限られている。生育地の状況は Kuo *et al.* (2006) と大場・宮田 (2006) に示されているが、分布情報は十分には集積されておらず、今後増える可能性がある。
- 学術的価値： 現在のところ国内では奄美大島と沖縄県だけから記録されており、希少である。
- 減少の要因： 自生地の開発。もともと自生地が限られる。海水の汚濁。浚渫。海砂の採取。
- 備考： これまで国内に産する葉が全縁のウミヒルモ類はすべてウミヒルモ *H. ovalis* とされていたが、複数の隠蔽種が含まれていることが判り、細分された。ヒメウミヒルモの和名は *H. decipiens* Ostenf. に対して用いられることがあり、沖縄県版レッドデータブックの旧版でもこの取扱に従ってきたが、今回の改訂でヒメウミヒルモの和名は *H. minor* に用いることとし、*H. decipiens* はトゲウミヒルモと呼ぶことに改める。竹富町希少野生動植物種(ウミヒルモ) (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文献： Kuo, J., Z. Kanamoto, H. Iizumi & H. Mukai, 2006. Seagrasses of the genus *Halophila* Thouars (Hydrocharitaceae) from Japan. *Acta Phytotax. Geobot.*, 57(2): 129-154.
大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ホソウミヒルモ

分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)

学名 : *Halophila okinawensis* J.Kuo

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から根を出す。葉身は線形～へら形、長さ 12～16mm、幅 1.5～4.5mm、全縁、側脈は 4～7 対、葉縁の透明細胞は 2 列、葉柄は長さ 5～15mm。雌雄異株。雄花は 3～5.5mm の苞鞘があり、花被片は 3 個、長さ 2.5～3mm、雌花の子房は長さ 1.5mm。ウミヒルモ *H. ovalis* に似るが、葉が細長く、葉縁の透明細胞が 2 列で、側脈は 4～7 対である点で、葉が卵形～楕円形で、葉縁の透明細胞が 1 列で、側脈が 12～16 対あるウミヒルモと区別することができる。

分布域 (県外) : ハワイ。

県内の分布 : 沖縄島、瀬底島。

生育環境 : 浅海 (水深 4m より深いところ) の砂泥地に生える。

生育状況 : 沖縄島の 2 ヶ所と瀬底島から記録されているが、生育地はごく少ない。生育地の状況は Kuo *et al.* (2006) と大場・宮田 (2006) に示されている。

学術的価値 : 金武湾が基準産地で、現在のところ国内では沖縄県だけから記録されている。ハワイに隔離分布し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地に限られる。海水の汚濁。浚渫。海砂の採取。

備考 : これまで国内に産する葉が全縁のウミヒルモ類はすべてウミヒルモ *H. ovalis* とされていたが、複数の隠蔽種が含まれていることが判り、細分された。竹富町希少野生動植物種 (ウミヒルモ) (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : Kuo, J., Z. Kanamoto, H. Iizumi & H. Mukai, 2006. Seagrasses of the genus *Halophila* Thouras (Hydrocharitaceae) from Japan. *Acta Phytotax. Geobot.*, 57(2): 129-154.

大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : トチカガミ

分類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)

学名 : *Hydrocharis dubia* (Blume) Backer

カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 沈水性の多年草。茎は水面を横に這う。葉は長い柄があり、葉身は円心形で径 4～7 cm、裏面の中央に気泡があり、水面に浮かぶ。雄花は長い柄がある苞鞘の中に約 5 個ずつつき、花柄が伸びて 1 花ずつ水面で開く。雌花は柄のない苞鞘に 1 個だけつき、花柄が伸びて水面に開花する。両方とも花弁は 3 個で白色。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、台湾、東南アジア、オーストラリア。

県内の分布 : 宮古島。

生育環境 : 沼、池、水田などの淡水中に生える。

生育状況 : 1980 年代まで生育していたが、近年はまったく確認されていない。2016 年にかつて知られた自生地を丹念に調査したが、見つけることはできなかった。

- 学 術 的 価 値 : 隔離分布し、県内では唯一の産地である。
- 減 少 の 要 因 : 池沼、水田の減少。もともと自生地に限られる。河川の改修。水質の悪化。帰化植物との競合。
- 備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文 献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告 (宮古群島)”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 31-70.
- 執 筆 者 名 : 新城和治*・洲鎌栄徳*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和 名 : **オオミズオオバコ (ミズオオバコ)**
- 分 類 : トチカガミ科 (APG 科名: トチカガミ科)
- 学 名 : *Ottelia alismoides* (L.) Pers.
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形 態 の 特 徴 : 沈水生の一年草。葉はオオバコの葉に似てすべて根生し、葉柄があり、葉身は楕円形～広卵形で縁に波状のしわがある。しかし葉の形や大きさは水深によって大きく変化し、長さ 10～30 cm、西表島では 50 cm にもなるものがある。花は白色の両性花で長い柄のある苞鞘の中に 1 個ずつつき、水面上で開花し、雄蕊は 6 個。
- 分 布 域 (県 外) : 本州、四国、九州、種子島、奄美大島、沖永良部島、台湾、マレーシア、北アフリカ、インド、オーストラリア。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。
- 生 育 環 境 : 水田や流れの緩やかな水路などの浅い水中に生える。
- 生 育 状 況 : 各地に点々と産するが、埋立により生育地が減少している。
- 減 少 の 要 因 : 池沼、水田の減少。除草剤の使用。もともと自生地に限られる。
- 備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文 献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : **マツバウミジグサ**
- 分 類 : アマモ科 (APG 科名: ベニアマモ科)
- 学 名 : *Halodule pinifolia* (Miki) den Hartog
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形 態 の 特 徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から 1 本の直立茎と 2～4 本の根を出す。葉身は長線形、長さ 5～17cm、幅 0.5～2mm、3 脈があり、先端は楕円状、不規則な短い鋸歯がある。葉鞘は扁平で、長さ 1.5～3cm。雌雄異株、花は葉の基部から出る花梗に単生する。
- 分 布 域 (県 外) : フィリピン、ベトナム、インド、タイ、インドネシア、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ミクロネシア、ポリネシア、北アメリカ太平洋沿岸。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
- 生 育 環 境 : 潮下帯上部から深いところに生え、ホソバウミジグサより深い場所に生える。
- 生 育 状 況 : 沖縄県では浅海の埋立が進んでおり、本種の分布情報が十分には得られないまま、自生地が消失し

ている。

学 術 的 価 値 : 沖縄島は基準産地であり、分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : **ホソバウミジグサ**

分 類 : アマモ科 (APG 科名: ベニアマモ科)

学 名 : *Halodule tridentata* (Steinh.) Unger

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から1本の直立茎と2~4本の根を出す。葉身は長線形、長さ3.5~8cm、幅0.5~1mm、3脈があり、先端は中央部と両縁が突出して3尖頭となり、不規則な短い鋸歯がある。葉鞘は扁平で、長さ1~2cm。雌雄異株、花は葉の基部から出る花梗に2個着く。

分布域 (県外) : インド洋、太平洋の熱帯域に広く分布する。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 潮間帯上部に生え、干潮時には空中に露出する。

生 育 状 況 : 沖縄県では浅海の埋立が進んでおり、本種の分布情報が十分には得られないまま、自生地が消失している。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。

備 考 : ホソバウミジグサは、これまでウミジグサ (ニラウミジグサ) の葉が細い型として認識されていたが、最近独立種として取り扱われることが多くなった。ニラウミジグサとの雑種は、ホソニラウミジグサ *H. x linearifolia* Ohba et Miyata と呼ばれ、沖縄島が基準産地とされるが、裸名のままである。

文 献 : 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : **ウミジグサ (ニラウミジグサ)**

分 類 : アマモ科 (APG 科名: ベニアマモ科)

学 名 : *Halodule uninervis* (Forssk.) Asch.

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から1本の直立茎と2~4本の根を出す。葉は線形、長さ5~12cm、幅2.2~3mm、鎌状に曲がるが多く、3脈があり、先端は中央部と両縁が突出して3尖頭となり、不規則な短い鋸歯がある。葉鞘は扁平で、長さ1~4cm。雌雄異株、花は葉の基部から出る花梗に2個つく。

分布域 (県外) : インド洋、太平洋の熱帯域に広く分布。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 潮下帯上部に生え、大潮の干潮時にも干上がることはない。
 生育状況 : 沖縄県では浅海の埋立が進んでおり、本種の分布情報が十分には得られないまま、自生地が消失している。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : 自生地の開発。
 備考 : ニラウミジグサとの雑種は、ホソニラウミジグサ *H. x linearifolia* Ohba et Miyata と呼ばれ、沖縄島が基準産地とされるが、裸名のままである。マツバウミジグサとの雑種は、マツニラウミジグサ *H. x serratifolia* Ohba et Miyata と呼ばれ、石垣島が基準産地とされるが、裸名のままである。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : シオニラ (ボウバアマモ)
 分類 : アマモ科 (APG 科名: ベニアマモ科)
 学名 : *Syringodium isoetifolium* (Asch.) Dandy
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 海底の砂泥地に生える多年草。根茎は分枝し、各節から 1 本の直立茎と 1~数本の根を出す。葉は直立茎に 2~4 枚が互生する。葉身は円筒形、長さ 10~30cm、幅 2mm 程度、先端は平頭または小突頭。葉鞘は円筒形。雌雄異花、集散花序は直立茎の端部につき、2 列に包葉と花を着ける。雌花には 2 枚の心皮があり、雄花には 2 個の葯がある。
 分布域 (県外) : 奄美大島以南、インド洋、太平洋中部~西部の熱帯域に広く分布。
 県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 潮下帯上部に生える。
 生育状況 : 局所的には個体数は多いが、埋立などにより多くの自生地が失われている。
 減少の要因 : 自生地の開発。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 大場達之・宮田昌彦, 2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会, 114pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ミズヒキモ
 分類 : ヒルムシロ科 (APG 科名: ヒルムシロ科)
 学名 : *Potamogeton octandrus* Poir. var. *miduhikimo* (Makino) Hara
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 沈水性の多年草。茎は細長く、よく分枝する。葉は 2 形で、浮葉は長楕円形、沈水葉は糸状。流水中では沈水葉だけのことが多いが、花時には必ず浮葉を出す。花は花被がなく、水上に伸び出した穂状花序に集まってつく。果実には短い花柱が残り、背面の稜にはごく小さな突起があるだけで、とさか状とはならない。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、馬毛島、奄美大島、朝鮮、中国、インド。
県内の分布：沖縄島、西表島、与那国島。
生育環境：水田や水路などの淡水中に生える。
生育状況：与那国島では数ヶ所に産することが2004年に確認されているが、個体数は少ない。西表島でも1ヶ所で確認されているが（比嘉，1983）、現状不明。沖縄島では確認することができず、現状不明。
減少の要因：池沼、水田の減少。除草剤の使用。
備考：竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)*。*種 *Potamogeton octandrus* として評価。

文献：比嘉清文，1983. 琉球植物分布メモ I. 沖縄生物学会誌，(21)：79-80。

執筆者名：横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：リュウノヒゲモ
分類：ヒルムシロ科 (APG 科名：ヒルムシロ科)
学名：*Potamogeton pectinatus* L.
カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴：沈水性の多年草。茎は細く、多く分枝する。葉はすべて沈水葉で、狭線形、長さ5~10 cm、基部は托葉と合着して葉鞘となり、茎を抱く。花は長い柄のある穂状花序に疎らにつく。花が終わると柄はらせんに巻いて果実を水中に引き込む。
分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、喜界島、沖永良部島、世界の温帯~熱帯。
県内の分布：沖縄島、久米島、南大東島、与那国島。
生育環境：淡水~汽水域の水中に生える。
生育状況：与那国島では田原川の水源地の小川に生えているのが1959年に発見された。一時、水路の改修のために1973年までには全滅した（初島・金井，1974）とされていたが、近年他の場所で再確認された。沖縄島では1987年に観察されている（池原，1989）が、まれである。南大東島では大池にやや豊産することが、2000年に確認されている。
減少の要因：河川の改修。もともと自生地が少ない。
備考：IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)。

文献：初島住彦・金井弘夫，1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報，(7)：115-120。
池原直樹，1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第9巻. 新星図書出版，101。

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：イトモ
分類：ヒルムシロ科 (APG 科名：ヒルムシロ科)
学名：*Potamogeton pusillus* L.
カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴：小形の多年草。茎も葉も非常に細い。葉はすべて沈水葉で狭線形、長さ2~6 cm。花は小さく、水上に伸び出した長い柄の先にかたまっつき、短い穂状花序をつくる。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、世界の温帯～暖帯。
 県内の分布：沖縄島、渡名喜島、宮古島、石垣島。
 生育環境：池や流水中に生える。
 生育状況：沖縄島と石垣島では各1ヶ所で記録があるが、現状は不明。他の島では近年は全く見つかって折らず、現状は不明。
 減少の要因：自生地の埋立。もともと自生地が少ない。
 備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern（LC）。
 執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名：カワツルモ
 分類：ヒルムシロ科（APG科名：カワツルモ科）
 学名：*Ruppia maritima* L.
 カテゴリー：絶滅危惧ⅠB類（EN） 環境省カテゴリー：準絶滅危惧（NT）

- 形態の特徴：沈水性の繊細な多年草。茎も葉もきわめて細い。葉は狭線形、長さ5～10 cm。葉腋から伸びた細い花柄の先に、小形の花を2個だけつける。
 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、世界中に広く分布。
 県内の分布：沖縄島北～中部、石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境：河口部の汽水域に生える。
 生育状況：沖縄島では国頭村、本部半島、中城湾の各1ヶ所に産することが知られているが、現在も生育が確認されるのは本部半島と中城湾だけである。石垣島では1ヶ所で確認されているが、河川の開発と水質の悪化で減少している。与那国島では1ヶ所で確認されている。西表島の現状は不明。
 減少の要因：水質の悪化。河川の開発。
 備考：本種には、果実が斜形になる var. *japonica* と、斜形にならない var. *maritima* が区別されており（角野，1994）、本部半島のもは var. *japonica* であることが確認されている。本部半島の自生地は、沖縄県指定の天然記念物として保護されている。竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern（LC）。

- 文献：角野康郎，1994. 日本水草図鑑. 文一総合出版，48.
 香村真徳・久場安次，1976. 天然記念物「塩川」の植物. “塩川動態調査報告”，沖縄県教育委員会，38-67.
 大場達之・宮田昌彦，2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会，114pp.

- 執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

- 和名：イトクズモ
 分類：ヒルムシロ科（APG科名：ヒルムシロ科）
 学名：*Zannichellia palustris* L.
 カテゴリー：絶滅危惧ⅠA類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

- 形態の特徴：沈水性の多年草。茎や葉はきわめて細い。葉は2～3個ずつ輪生状につき、狭線形で長さ5 cm、糸くずのようである。雌雄同株で、雄花と雌花が1個ずつ同じ葉腋にならんでつく。受粉は水中でおこる。雌蕊の花柱の先はラッパ状に広がっていて、水中に落ちてくる花粉を受け止める。果実は長

さ約 2 mm で三日月形、背面に波形の稜がある。

- 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、朝鮮。
県内の分布：沖縄島、西表島、与那国島。
生育環境：淡水または汽水中に生える。
生育状況：近年は確認されておらず、現状は不明。
減少の要因：自生地の埋立。水質の悪化。もともと自生地が限られている。
備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。
文献：大場達之・宮田昌彦，2007. 日本海草図譜. 北海道大学出版会，114pp.

執筆者名：横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：コアマモ
分類：ヒルムシロ科 (APG 科名：アマモ科)
学名：*Zostera japonica* Asch. et Graebn.
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：浅海に生える沈水植物。根茎は横走して分岐し、葉を2列に互生し、節間は1~3 cm。葉は狭線形、長さ4~30 cm、幅1~1.5 mm、全縁、3脈があり、鈍頭、基部にある葉鞘は長さ1.2~6 cm、辺縁は内曲する。肉穂花序は鞘状苞に包まれ、雌雄同株で、花は2列に互生し、雄花は花序の先端につき、葯は1個、雌花は花序の中央につき、子房は1個。種子は長楕円形、長さ2 cm。
分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、サハリン、カムチャッカ、中国南部、ベトナム、北アメリカ西岸。
県内の分布：沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
生育環境：砂地の浅海に生え、汽水域にも生えることがある。
生育状況：自生地は沖縄島で十数ヶ所知られるが、その大半はごく小規模な群落で、50 m 四方以上の群落は数ヶ所しか確認されていない。宮古島1ヶ所、石垣島1ヶ所知られるが、量は少ない。西表島の現状は不明。浅海の埋立、海水の汚染により急激に減少している。
学術的価値：琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。
減少の要因：浅海の埋立。海水の汚染。
備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

- 文献：環境省，2003. 平成14年度ジュゴンと藻場の広域的調査報告書. 環境省，308pp.
環境省，2004. 平成15年度ジュゴンと藻場の広域的調査報告書. 環境省，255pp.
当真 武，1999. 琉球列島の海草—I 種類と分布. 沖縄生物学会誌，(37)：75-92.
Tsuda, R. T. & S. Kamura, 1990. Comparative review on the floristics, phytogeography, seasonal aspect and assemblage patterns of the seagrass flora in Micronesia and the Ryukyu Islands. *Galaxea*, 9: 79-93.

執筆者名：横田昌嗣

-
- 和名：イトトリゲモ
分類：イバラモ科 (APG 科名：トチカガミ科)
学名：*Najas japonica* Nakai

- カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)
- 形態の特徴： 繊細な沈水植物。茎は分枝し、葉は5輪生し、長さ1.5 cm、幅0.2 mm、葉縁に小さい歯牙があり、葉鞘は長さ1.5 mm、円形で歯牙がある。雌雄同株で、雄花に苞鞘があるが、雌花にはない。果実は披針形で、長さ2 mm、幅0.5 mm、表面の細胞は長線形。
- 分布域(県外)： 本州、四国、九州、中国東北部。
- 県内の分布： 石垣島、西表島、与那国島、小浜島。
- 生育環境： 低地の池や水田の水中に生える。
- 生育状況： イバラモ属の他種(ホッスモ、トリゲモ、サガミトリゲモなど)と混生し、形態が類似しているの
で混同されていたが、最近になって自生が確認された(内山, 1992)。自生地となる池や水田は埋立
が進んでおり、イバラモ属の他種を含め、急激に減少している。西表島の水田で2017年に発見され
ている。
- 学術的価値： 分布域の南限である。
- 減少の要因： 溜池や水田の埋立。もともと自生地が少ない。農薬の散布。
- 備考： IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)*。**Najas gracillima*として評価。
- 文献： 内山 寛, 1992. 沖縄・八重山諸島のイバラモ属植物. 水草研究会会報, 48: 6-8.
赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島).
“事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.
- 執筆者名： 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名： **イバラモ**
- 分類： イバラモ科 (APG科名: トチカガミ科)
- 学名： *Najas marina* L.
- カテゴリー： 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー： 該当なし
- 形態の特徴： 沈水植物。茎は棘を散生するかまたは平滑、太く、扁平で、よく分岐する。葉は硬く、対生または
輪生し、長さ2~4 cm、幅2~3 mm、各側9~11個の刺歯があり、葉鞘は広円形、全縁。雌雄異株。
果実は楕円形~長楕円形、長さ4~6 mm、種子の表面には凹点がある。
- 分布域(県外)： 北海道、本州、四国、九州、種子島、喜界島、台湾、全世界。
- 県内の分布： 南大東島、池間島。
- 生育環境： やや気水性の池沼の水中に生える。
- 生育状況： 南大東島では、大池を中心に水路でつながった幾つかの池に産する。池間島では近年新たに報告さ
れた(佐々木, 2000)。南大東島の大池は国指定の天然記念物に指定されており、個体数はやや多い
が、他の池沼の多くは埋立が進み、生活排水の流入で全般的に生育環境が悪化している。池間島の
池は、埋立が進み、周辺の湿地と共に面積が減少している。
- 減少の要因： もともと自生地が限られる。池の埋立。水質悪化。農薬散布。
- 備考： IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文献： 佐々木健志, 2000. 池間島から採集されたイバラモ *Najas marina* L. (Najadaceae)の記録. 沖縄生
物学会誌, (38): 69-71.
- 執筆者名： 横田昌嗣

和名 : トリゲモ
分類 : イバラモ科 (APG 科名: トチカガミ科)
学名 : *Najas minor* All.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 繊細な沈水植物。茎は細く、よく分岐する。葉は3輪生し、長さ1~2 cm、幅0.5 mm、葉縁に小さい歯牙があり、葉鞘は長さ1.5 mm、半円形~切形で、縁に小歯牙がある。雌雄同株で、雄花に苞鞘があるが、雌花に無く、雄花の葯は1室。果実は披針形で、長さ3 mm、幅0.7 mm、表面の細胞は横長の長楕円形。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美諸島、世界の温帯~熱帯。

県内の分布 : 沖縄島、座間味島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地のため池、水田、水路などの水中に生える。

生育状況 : 本種はかつてはやや普通に見られたが、近年は水田の減少とともに急減している。八重山諸島ではやや多いが、水田の開発や農薬散布などにより減少が著しい。石垣島と与那国島ではそれぞれ数ヶ所で記録されている。沖縄島ではまれである。座間味島と西表島では、2017年にそれぞれ1ヶ所で確認されている。

減少の要因 : 池の埋立。水田の開発。農薬散布。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ホンゴウソウ
分類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名: ホンゴウソウ科)
学名 : *Sciaphila japonica* Makino
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 多年生のごく小形の腐生植物。全体に紫褐色である。地上茎は極めて細く、高さ3~13 cm。葉は鱗片状で、長さ1.5 mm前後。茎頂や枝先に各々4~15個の花を総状につける。雌花は花序の下部に、雄花は上部につく。雄蕊の葯隔には針状の突起がある。

分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、種子島、屋久島。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地林内の落ち葉の間に生える。

生育状況 : 生育地が限られ、個体数も少ない。沖縄島、石垣島、西表島では近年もそれぞれ少数ヶ所で確認されているが、久米島と魚釣島の現状は不明。魚釣島では、野生化ヤギの影響で森林生態系が大きく変わっている可能性が高く、存続が危惧される。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が少ない。野生化ヤギの増殖による環境変化と踏みつけ。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **イシガキソウ**

分類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名 : ホンゴウソウ科)

学名 : *Sciaphila multiflora* Giesen

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 多年生のごく小形の腐生植物。茎は高さ 5~8cm、分枝しないか、まれに分枝し、全体に赤紫色を帯び、葉はなく、10~15 花をつける。雌雄異花で、雄花は雌花と雌花の間につき、径 1mm、花被片は 6 個で、3 個は長く、3 個は短く、雄蕊は 3 個、短い花糸がある。雌花の花被片は雄花と同様で、心皮は 15~18 個。

分布域(県外) : フィリピン、ニューギニア、ミクロネシア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸の常緑樹林の林床に生える。

生育状況 : 1ヶ所の自生地が知られており、2010 年に約 100 個体の生育が確認されている。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の自生地である。マレーシア系の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

文献 : Ohashi, H., H. Kato, S. Kobayashi & J. Murata, 2008. A revision of Triuridaceae of Japan. J. Jpn. Bot. 83: 20-35.

執筆者名 : 横田昌嗣・仲宗根忠樹

和名 : **オモトソウ**

分類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名 : ホンゴウソウ科)

学名 : *Sciaphila sugimotoi* Suetsugu et T.Nishioka

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 多年生のごく小型の腐生植物。茎は高さ 5~10cm、分枝しないか、時に基部で分枝し、全体に赤紫色を帯びる。葉は鱗片状で、長さ 1.5mm。茎上部に 5~7cm の花序をつけ、10~35 個の小さな花をつける。雄花は花序の上部に、雌花を下部につける。花は径 2mm、雄花の花被片は 6 個で等長、雄蕊は 3 個で、葯は 4 裂し、花糸はない。雌花の心皮は多数。

分布域(県外) : なし。

県内の分布 : 石垣島(固有)。

生育環境 : 低地の常緑樹林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 2ヶ所の自生地が知られているが、2017 年の調査では 1ヶ所で数個体が確認されただけで、他の 1ヶ所では確認することができなかった。

学術的価値 : 2017 年に記載された新種で (Suetsugu & Nishioka, 2017)、石垣島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : Suetsugu, K. & T. Nishioka, 2016. *Sciaphila sugimotoi* (Triuridaceae), a new mycoheterotrophic plant from Ishigaki Island, Japan. Phytotaxa, 314(2): 279-284.

執筆者名 : 横田昌嗣・阿部篤志

和 名 : タカクマソウ

分 類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名: ホンゴウソウ科)

学 名 : *Sciaphila takakumensis* Ohwi

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 多年生のごく小形の腐生植物。茎の高さ 5~10 cm、全体に赤紫色を帯びる。葉は鱗片状となり、卵形で長さ 1~2 mm。茎上部に長さ 2~5 cm ほどの総状花序を出し、4~10 個の小さな花をつける。この花序の上部には雄花が、下部には両性花がつく。

分 布 域 (県 外) : 九州 (鹿児島県)。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部。

生 育 環 境 : 山地林内の落ち葉の間に生える。

生 育 状 況 : 自生地は 3 ヶ所知られるが、その内の 1 ヶ所では近年は確認されない。現在生育が確認される他の 1 ヶ所は私有地で、開発される恐れがある。他の 1 ヶ所は登山道として整備され、踏みつけられる恐れがある。いずれの自生地も個体数はきわめて少ない。

学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。

保 全 対 策 : 生育地は天然記念物として指定し、保存する必要がある。

備 考 : 自生地の一つは国指定の天然記念物である。

文 献 : 島袋 曠・新島義龍・新城和治・宮城康一・宮城朝章・真志喜文子・日越国昭・天願敏男・新納義馬, 1988. 田港御願の植物群落. “国頭郡天然記念物緊急調査”, 沖縄県教育委員会, 25-58.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・仲間正和(追補)

和 名 : ウエマツソウ

分 類 : ホンゴウソウ科 (APG 科名: ホンゴウソウ科)

学 名 : *Sciaphila tosaensis* Makino

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 多年生の小さな腐生植物。全体に赤紫色をおびる。茎の高さは 6~10 cm、葉は鱗片状で長さ約 3 mm。茎上部の総状花序に小さな 3~6 花をつけるが、このうち上部のものは雄花、下部のものは雌花である。

分 布 域 (県 外) : 本州 (中部以西)、四国、九州、屋久島。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、儀志布島、久米島、西表島。

生 育 環 境 : 林床の落ち葉の間に生える。

生 育 状 況 : 自生地は少なく、個体数もきわめて少ない。

減 少 の 要 因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 石川 敦・石田 仁, 1988. 琉球列島植物分布資料 5. 沖縄生物学会誌, (26) : 31-34.

小林史郎, 1999. 八重山諸島新産のウエマツソウとシナヤブコウジ. 植物分類・地理, 50: 248-250.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*

和名 : コショウジョウバカマ (ヒメショウジョウバカマ、シマショウジョウバカマ)

分類 : ユリ科 (APG 科名: シュロソウ科)

学名 : *Heloniopsis kawanoi* (Koidz.) Honda

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎は短く、8~25枚の葉をロゼット状に根生する。根生葉は長さ1.5~6cm、狭いへら形。花茎は長さ4~15cmで、先端に白色の花を2~4個つける。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の川沿いのやや湿った崖面に生える。

生育状況 : 生育場所が限られており、個体数も少ない。石垣島と西表島では比較的多いが、沖縄島では極めてまれで、国頭村と東村の4河川の5ヶ所にそれぞれ数個体確認されているだけである。

学術的価値 : 琉球列島の固有種。ショウジョウバカマ属は東アジアの温帯系の植物で、琉球列島の植物相の成立を考える上で貴重である。

減少の要因 : 森林の伐採。ダム建設による水没。園芸用の採集(最近採集品が販売されている)。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-188.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : オオシロショウジョウバカマ

分類 : ユリ科 (APG 科名: シュロソウ科)

学名 : *Heloniopsis leucantha* (Koidz.) Honda

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は太く、8~17枚の葉をロゼット状に根生する。根生葉はへら状倒披針形で長さ10~25cm。花茎は長さ7~27cm、先に7~20個の花を総状につける。花は白色で大きく、花被片は長さ15~20mmになる。

分布域(県外) : 徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島

生育環境 : 川沿いの湿った崖面に生える。

生育状況 : 沖縄島では恩納村以北(本部半島を除く)の十数ヶ所で確認されている。石垣島と西表島では、それぞれ数ヶ所で確認されているが、生育地は限られ、個体数は少ない。

学術的価値 : 琉球列島の固有種。

減少の要因 : 森林の伐採。ダム建設による水没。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.

- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-113.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成7年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成8年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
- 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
- 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
- 横田昌嗣・宮城康一, 1988. 琉球列島植物分布資料 6. 沖縄生物学会誌, (26) : 35-37.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : キバナノヒメユリ (キバナスゲユリ)

分類 : ユリ科 (APG 科名: ユリ科)

学名 : *Lilium callosum* Sieb. et Zucc. var. *flaviflorum* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。茎は高さ 40~100 cm。葉は線形で柄がない。茎の上部に黄色~橙黄色の花を 2~9 個つける。花は横向きまたは斜め下向きに開き、花被片は長さ 3~4 cm で平開し、先が反りかえる。

分布域(県外) : 九州(長崎県)。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、渡名喜島。

生育環境 : 低地の原野、日当たりの良い草地にはえる。

生育状況 : 沖縄島では北部で 2004 年に、南部 2 ヶ所で最近も確認されているが、個体数はきわめて少ない。以前確認された場所の幾つかは、遷移が進み森林になったため消失している。那覇市の 1 ヶ所では、保護活動が行われており、十数個体が維持されている。渡名喜島では 2004 年に 2 ヶ所で確認されているが、遷移の進行で衰退しつつある。久米島では 3 ヶ所で確認されていたが、その内の 2 ヶ所では現在は確認されない。他の 1 ヶ所では 2005 年に 50 個体以上が確認されたが、やはり遷移の進行で激減している。

減少の要因 : 土地開発。園芸用の採集。遷移の進行。公園の草刈り。もともと自生地が少ない。

保全対策 : 本種にとって最も深刻な減少の要因は、遷移の進行で、かつては茅場として利用されていた場所が刈り取りされなくなり、遷移が進行して減少している。本種の個体群を維持するためには、草原を維持するために適切な草刈りが必要である。人工増殖も検討する必要がある。

備考 : 基本変種ノヒメユリは花が赤橙色で、四国、九州、台湾、中国、朝鮮、アムールに分布する。日本産ユリ属の中で花のもっとも小さな種である。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. “佐敷町史, 三自然”, 佐敷町史編集委員会(編), 佐敷町, 93-196.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヒメヤブラン

分類 : ユリ科 (APG 科名: クサスギカズラ科)

学名 : *Liriope minor* (Maxim.) Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草で、根茎は太短く、長い匍枝を出す。葉は根生し、長さ 10~20 cm、幅 2~3 mm。花茎は長いものは高さ 20 cm に達し、先に淡紅紫色の花を疎らにつける。果皮が成長の途中で萎縮してしまうため、種子は露出して熟し、球形で黒紫色になる。

分布域(県外) : 北海道西南部、本州、四国、九州、トカラ列島、奄美諸島、台湾、朝鮮、中国、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島、粟国島、渡名喜島、久米島。

生育環境 : 海岸の草地や林縁に生える。

生育状況 : 沖縄島では名護市と金武町で 4 ヶ所の自生地が知られるが、大半は米軍演習地で、開発される可能性がある。渡名喜島では 2005 年に 1 ヶ所に少数が確認されている。久米島の現状は不明。粟国島では 2015 年に確認されている。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 天野鉄夫, 1981. 粟国島植物目録. 粟国村教育委員会, 39pp.

天野鉄夫・新納義馬, 1980. 億首川の紅樹林及びその周辺の植物. “沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告, 伊是名城跡・大浦川のマングローブ林・億首川のマングローブ林”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 79-100.

宮脇 昭・仲田栄二, 2001. 外来植生の在来植生に対する影響と対策の検討. “渡名喜島伝統集落周辺域における自然的歴史的景観の保存活用調査”, (財)日本ナショナルトラスト, 東京, 37-46, 77-93.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : コヤブランモドキ

分類 : ユリ科 (APG 科名: クサスギカズラ科)

学名 : *Liriope muscari* (Decne.) L. H. Bailey var. *stolonifera* Hatusima

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生し、しばしば地中に長い匍匐枝をだし、マット状の大きな群落を作る。葉は線形、長さ 60 cm になる。花茎は葉とほぼ同長で、花穂は長さ 20 cm になり、花を数個ずつ束生する。花は淡紫色、花被片は 6 個、楕円形、長さ 4 mm。果実は球形、黒熟する。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸の風衝草原、海崖、海岸林の林床に生える。

生育状況 : 数ヶ所に自生することが確認されており、個体数は多いので、今すぐ絶滅する恐れはないが、自生地の一部はビーチとして利用され改変が進んでいる。他の自生地も開発の恐れがある。

- 学 術 的 価 値 : 石垣島の固有変種である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。
- 保 全 対 策 : 自生地の一部は観光地となっているが、公園や景勝地として利用する際に自生地の保全を配慮する必要がある。
- 備 考 : 初島・天野 (1994) によって認識されたが、未記載である。基本変種のヤブランは、本州、四国、九州、琉球列島の他の島嶼、台湾、中国、フィリピンに分布するが、形態的な変異が大きく、本変種や、竹富町の小島嶼に産するコヤブランを含めて分類学的な再検討が必要である。
- 文 献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 305.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

-
- 和 名 : **ヨナグニノシラン**
- 分 類 : ユリ科 (APG 科名: クサスギカズラ科)
- 学 名 : *Ophiopogon reversus* C. C. Huang
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草で、根茎は太短く、葉を束生する。葉は長さ 40~55 cm、幅 7~12 mm。花茎は長さ 15~30 cm で、先端部約 5 cm に白色の花を疎らにつけ、花茎の上部はノシランのように白色を帯びない。小花梗は長さ 2~4 mm、苞葉は長さ 4~11 mm、幅 1 mm。花被片はほぼ同形、長さ 6~7 mm、幅 1.5~2.5 mm、筒状部は長さ 1~1.5 mm でノシランより短く、葯は長さ 3 mm、黄色であり、淡緑色~黄緑色のノシランとは異なる。
- 分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部 (海南島)。
- 県 内 の 分 布 : 与那国島。
- 生 育 環 境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。
- 生 育 状 況 : 2ヶ所で確認されているが、自生地はごく狭い範囲に限られる。類似する生育環境にはヤブランがより多く生育している。
- 学 術 的 価 値 : 日本で唯一の産地であり、分布の北限である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。
- 保 全 対 策 : 自生地が限られるので、開発されないように保全する必要がある。また盗掘の恐れがあるので、自生地の詳細の公表は避けるべきである。
- 文 献 : Tanaka, N., 2001. Taxonomic notes on *Ophiopogon* (Convallariaceae) of East Asia (II). J. Jpn. Bot., 76: 151-165.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・村松稔(追補)

-
- 和 名 : **アラガタオオサンキライ (アラガタサンキライ)**
- 分 類 : ユリ科 (APG 科名: シオデ科)
- 学 名 : *Smilax bracteata* Presl var. *verruculosa* (Merr.) T. Koyama
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形 態 の 特 徴 : 常緑のつる性低木。茎には太い棘が散生する。葉は卵状長楕円形~卵円形、長さとは幅は 13 cm になり、葉柄は長さ 1~2.5 cm、托葉の先は巻ひげとなる。複散形花序は腋生し、雄花と雌花をつける。

液果は球形、径 5 mm。基本変種のサツマサンキライと比べて、小枝に粒状突起を密布し、粗澁となることで異なる。

- 分布域（県外）：奄美大島、台湾、フィリピン、インドシナ、マレーシア。
 県内の分布：沖縄島北部。
 生育環境：山地の常緑樹林に生え、谷間の陰湿な林内や、やや海拔が高い地域の自然林で見られる。
 生育状況：国頭村の 10 ヶ所以上で確認されているが、個体数は少ない。サツマサンキライと混生し、中間的な形態を示す個体もある。台湾では、やや海拔の高いところに生える (Koyama, 1978)。最近、鹿児島県奄美大島の 2 ヶ所でも確認することができた。
 学術的価値：国内では中琉球の奄美大島と沖縄島に分布が限られ、南琉球に分布せず、植物地理学上重要である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。
 備考：基本変種のサツマサンキライとよく似ているため、見過ごされている可能性がある。

文献：Koyama, T., 1978. Flora of Taiwan, Vol. 5. Epoch Publishing Co., Taipei, 113-114.

執筆者名：横田昌嗣*・山城 考*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・比嘉清文(追補)

和名：台湾ホトトギス

分類：ユリ科 (APG 科名: ユリ科)

学名：*Tricyrtis formosana* Baker

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴：常緑の多年草。茎は高さ 30 cm になり、数枚の葉をつける。葉は倒披針形、長さ 10~20 cm、上面に光沢があり、斑点が入る。しばしば葉腋に無性芽をつける。総状花序は頂生し、数花を疎らにつける。花は淡紫色で、斑点が散生し、萼片と花弁は長さ 2 cm。

- 分布域（県外）：台湾。
 県内の分布：沖縄島北部、西表島。
 生育環境：沖縄島では、山地上部の沢筋の明るい斜面や、集落周辺の水田の畦に生える。西表島では、山地の自然林内の滝の崖面に生える。
 生育状況：沖縄島の自生地は 1 ヶ所のみ知られ、これまで知られた自生地は集落に近い水田の畦に生えていたことから栽培品が逸出した可能性が考えられたが、今回の調査で同じ集水域の山地上部にかなり広範囲にわたって生育することが判ったため、自生である可能性が高まった。西表島ではこれまでに 5 ヶ所で発見されている。西表島の自生地は国立公園内にあり開発の恐れはないが、非常に特殊な環境に限って生え、個体数もごく少ないので、採集により絶滅する可能性がある。
 学術的価値：分布域の北限であり、西表島では数少ない東アジアの温帯系の種で、植物地理学上貴重である。西表島のものは、台湾に産する典型的な台湾ホトトギスとは形態が異なり、沖縄島のものも含めて詳しい調査が必要である。

減少の要因：園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考：竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献：Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 907.

執筆者名：横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **ルゾンヤマノイモ**
分類 : ヤマノイモ科 (APG 科名: ヤマノイモ科)
学名 : *Dioscorea luzonensis* Schauer
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑のつる性多年草。地中に長さ 20 cm になる塊茎がある。茎は無刺で、幼个体では葉を互生するが、成熟个体では葉を対生する。葉は狭心形、5~7 脈があり、長さ 6~15 cm、無毛。雌雄異花で、花序は腋生し、多数の花をつける。室果は長さ 2 mm、翼がある。

分布域 (県外) : フィリピン。

県内の分布 : 北大東島、南大東島。

生育環境 : 石灰岩地の自然林内に生える。

生育状況 : かつてはかなりの个体数があったようであるが、地下茎を食用にするために乱獲され、現在は小形个体が残されるだけである。北大東島では 3 ヶ所、南大東島では 2 ヶ所の自生地が知られるだけである。

学術的価値 : 日本で唯一の産地であり、著しい隔離分布を示す。花や果実が確認されておらず、むかごで繁殖しているようで、分類学的な再調査が必要である。

減少の要因 : 自然林の開発。食用の採集。もともと自生地と个体数が少ない。

備考 : 北大東島の自生地は、国指定の天然記念物として保護されているが、自生地の近隣までサトウキビ畑の開墾が進み、生育環境は悪化している。

文献 : 初島住彦, 1973. 大東島の植物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 9-42.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・城間盛男(追補)

和名 : **アケビドコロ**
分類 : ヤマノイモ科 (APG 科名: ヤマノイモ科)
学名 : *Dioscorea pentaphylla* L.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : つる性の多年草。茎は稜があり、刺が少しあり、黄褐色の毛を密生し、しばしばむかごをつける。葉は 5 または 3 個の小葉からなる掌状複葉。花は沖縄島では 11 月上旬に咲き、小形で黄緑色、葉腋に出た総状花序にやや密につく。雄花序は枝の先の方につき、それより下方の葉腋に雌花序がつく。冬に葉腋に球形のむかごをつける。

分布域 (県外) : インドネシア、フィリピン、マレーシア、インド。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 低地の林縁に生える。

生育状況 : 2017 年に本部半島の 2 ヶ所で開花が確認されている。2 ヶ所とも雌花のみが確認されており、今までのところ雄花や果実は確認されていない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヒナノシャクジョウ
 分類 : ヒナノシャクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシャクジョウ科)
 学名 : *Burmannia championii* Thwaites
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 白色小形の腐生の多年草。茎は高さ 3~15 cm になる。根茎は球状にふくれ、多数のひげ根がある。葉はすべて鱗片状で疎らに互生し、長さ 2~4 mm。花は白色で柄がなく、数個が茎の先に頭状に集まる。

分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、屋久島、奄美大島、台湾、中国南部、マレーシア、インド、スリランカ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地林内の落ち葉の間に生える。

生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。西表島では、近年 2ヶ所で確認されている。

減少の要因 : 森林伐採。もともと自生地が少ない。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.

執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*・加島幹男*

和名 : ミドリシャクジョウ
 分類 : ヒナノシャクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシャクジョウ科)
 学名 : *Burmannia coelestris* D. Don
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 高さ 10~30 cm に達する一年草。葉は柄がなく、披針形、長さ 1.5~2.5 cm。花は枝の先に 1 ないし 3 個つき、淡青色で長さ 6~12 mm くらい、花筒の外側にやや幅の広い 3 個の翼がある。

分布域(県外) : 中国南部、インドシナ、マレーシア、インド。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 水田の畦や陽当たりの良い湿地に生える。

生育状況 : 1940 年に採集された標本が鹿児島大学の標本室 (KAG) に所蔵されており、この 1ヶ所で記録されているだけで、近年はまったく確認されていない。発見地周辺で探索が行われているが、水田に除草剤が使われており、畦道にアメリカハマグルマが侵入し、発見は困難な状況になっており、絶滅した可能性が高い。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。腐生植物が多いヒナノシャクジョウ科の中で、このミドリシャクジョウは緑葉を持ち、光合成を行う数少ない種の一つである。

減少の要因 : もともと生育地が限られている。水田の減少。農薬の散布。帰化植物との競合。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*・横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)

和名 : シロシャクジョウ
 分類 : ヒナノシャクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシャクジョウ科)

学 名 : *Burmattia cryptopetala* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 白色の腐生多年草。茎は長さ 6~15 cm、単立し、数花を密につける。花は乳白色で、花筒の外側に 3 個の翼がある。

分布域 (県外) : 本州 (近畿)、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国南部 (海南島)。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、久米島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地林内の落ち葉の間に生える。

生育状況 : 沖縄島と西表島では近年も確認されているが、久米島と石垣島の現状は不明。自生地はもともと少ない。梅雨時に限って出現するので発見が難しい。

減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地が限られている。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.

執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*

和 名 : ルリシャクジョウ

分類 : ヒナノシャクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシャクジョウ科)

学 名 : *Burmattia itoana* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 青紫色の腐生の多年草。茎は高さ 6~12 cm で直立し、先に 1~2 花をつける。花は青紫色で長さ 6~12 mm、花筒の外側に 3 個の翼がある。

分布域 (県外) : 九州 (鹿児島県)、屋久島、奄美大島、中国南部 (海南島)。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の林内の落ち葉の間、特に高地の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では 1 ヶ所、西表島では数ヶ所で確認されているが、自生地は限られ、個体数が少ない。

減少の要因 : 自然林の開発。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.

執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ホシザキシクジョウ

分類 : ヒナノシャクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシャクジョウ科)

学 名 : *Oxygyne shinzatoi* (Hatusima) C. Abe et Akasawa (= *Saionia shinzatoi* Hatusima)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 小形の地中生の腐生植物。根茎は長さ 2~3 cm、茎は単一または少し分枝し、長さ 1~1.5 cm、径 1 mm、鱗片を散生し、先端に 1~5 花をつける。花は青色、花被は 6 深裂し、長さ 5 mm、雄蕊は 3 個。

- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地中腹のリュウキュウマツ、イジュ、ナカハラクロキなどが混生する二次林のやや乾いた林床に、樹木の根元に落ち葉に隠れるようにして生える。
- 生育状況 : 国頭村与那の琉球大学農学部演習林内の1ヶ所に、数個体の生育が知られているだけで、1970年代に2度採集された以降は確認されていなかったが、2004年9月に再発見された。自生地の植生遷移が進行して、最初に見つかった場所では確認できなかったが、隣接する別の場所で2個体が確認された。
- 学術的価値 : 単型属で沖縄島の固有種とされたが、近年はヒナノボンボリ属 *Oxygyne* に含まれる (Abe & Akasawa, 1989)。ヒナノボンボリ属は西アフリカのカメルーンと日本 (本州、四国) に隔離分布しており、植物地理学上興味深い。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が極めて少ない。
- 備考 : IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。
- 文献 : Hatusima, S., 1976. Two new species of Burmanniaceae from Japan. *J. Geobot.*, 24(1): 2-10.
 新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設 40 周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.
 Abe, C. & Y. Akasawa, 1989. A new species of *Oxygyne* (Burmanniaceae) found in Shikoku, Japan. *J. Jpn. Bot.* 64(6): 161-164.
- 執筆者名 : 新里孝和*・比嘉清文*・横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : タヌキアヤメ
- 分類 : タヌキアヤメ科 (APG 科名: タヌキアヤメ科)
- 学名 : *Philydrum lanuginosum* Banks et Sol. ex J.Gaertn.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 軟質の短命な多年草。葉は剣状で2列に互生し、長さ 60 cm になる。穂状花序は長さ 1 m に達し、単一で時に分枝し、綿毛をふき、上部に包葉を2列に互生し、包葉の葉腋に1~2花をつける。花は黄色、2唇形、長さ 1.5 cm。室果は長楕円形、3裂する。
- 分布域(県外) : 九州南部、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、熱帯アジア、オーストラリア。
- 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、小浜島、嘉弥真島。
- 生育環境 : 低地の湿地や放棄水田に生える。
- 生育状況 : かつては各地でやや普通に見られたが、水田の減少や遷移の進行で急減している。沖縄島、西表島、小浜島、嘉弥真島では今回の調査で生育が確認されたが、その他の島では1970年代前半までは確認されているが、その後は確認されておらず、現状不明。
- 減少の要因 : 水田の消失。遷移の進行。湿地の開発。
- 保全対策 : 自生地の保全。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

- 文献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

- 執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : イグサ (イ、トウシンソウ)

分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)
学名 : *Juncus effusus* L. var. *decipiens* Buchenau
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年生草本。根茎は短く横走する。茎は円柱状、高さ 60 cm、幅 2 mm になり、茎の下部に鱗片状の葉を少数つける。集散花序は偽側生し、多数の花をつける。花は単生、長さ 2 mm、雄蕊は 3 個。室果は 3 室、卵形、長さ 2 mm、種子は長さ 0.5 mm。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、喜界島、台湾、ウスリー、中国東北部、朝鮮、北アメリカ。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島北～中部。

生育環境 : 低地の湿地や、高地の山間の湿地に生える。

生育状況 : 伊平屋島の現状は不明であるが、湿地や水田の埋立が進んでおり、生育環境は確実に減少している。伊是名島では 1974 年に採集された標本があるが、2005 年の調査では発見できなかった。沖縄島では数ヶ所で採集の記録はあるが、現在は 1 ヶ所で少数個体が確認されているだけで、多くの自生地の現状は不明。

減少の要因 : 湿地の埋立。森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 大宜味村や恩納村などでは、畳表用に栽培されていたが、その水田も転作によりほとんどが消失している。基本変種は、ヨーロッパ、西シベリア、北アメリカに分布する。形態変異が大きく、幾つかの種内分類群が記載されている。イグサに比べて茎と花梗が細く、花被片が線状披針形となるものはオキナワイ f. *filiformis* (Satake) Hatusima として区別されることがあり、沖縄島北部の 2 ヶ所で記録されている。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : タチコウガイゼキショウ

分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)

学名 : *Juncus krameri* Franch. et Sav.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草で、根茎は短く横走する。茎は円筒状で直立し、高さ 30~60 cm になる。茎葉は 2~3 個、茎よりずっと短く、円筒形で単管質、隔膜は明瞭。花は 3~10 花が集まって頭花をつくり、これが茎の頂に集散状に多数つく。

分布域(県外) : 千島、北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国北部。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、西表島。

生育環境 : 水田、低地と山地の湿地に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に産するが、他の島の現状は不明。生育地と個体数は限られている。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 水田の埋立。湿地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : コウガイゼキショウ (ヒラコウガイゼキショウ、ヒロハノコモチゼキショウ)

分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)

学名 : *Juncus leschenaultii* J. Gay ex Laharpe

- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く横走り、茎を束生する。茎は高さ 40 cm になり、扁平、翼がある。葉は長さ 20 cm、幅 3 mm になり、扁平、剣状。集散花序は頂生し、多数の頭状花序をつける。頭状花序には数花をつける。花は長さ 4~5 mm、花被片は狭披針形、雄蕊は 3 個。室果は長さ 4~5 mm、披針形、3 稜がある。種子は倒卵形、長さ 0.6 mm。
- 分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、台湾、カムチャッカ、中国、朝鮮、インド。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、久米島、石垣島、魚釣島。
- 生育環境 : 水田や湿地に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では数ヶ所で採集されている。久米島では 1953 年採集の標本があるが、現状は不明。石垣島では 1973 年に採集された標本があるが、現状不明。魚釣島では 1975 年に採集された標本があるが、野生化ヤギによる食害や生育環境の悪化により絶滅した可能性がある。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。水田の埋立。湿地の開発。野生化ヤギによる食害と植生破壊 (魚釣島)。
- 保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。
- 備考 : 近縁なアオコウガイゼキショウ *J. papillosus* Franch. et Sav.、タチコウガイゼキショウ *J. krameri* Franch. et Sav.、ハリコウガイゼキショウ *J. wallichianus* Laharpe などを含め、いずれの種についても分布情報は少ないため現状の評価は正確とは言えない。花などの状態の良い標本を用いて、今後再検討する必要がある。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

- 和名 : スズメノヤリ
- 分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)
- 学名 : *Luzula capitata* (Miq.) Miq. ex Kom.
- カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は密に束生し、花茎は高さ 10~30 cm。根生する葉は線形、長さ 7~15 cm、幅 2~3 mm。頭状花序は単生し、花は長さ 3 mm、花被片は広披針形、雄蕊は長さ 2 mm。室果は卵形、3 稜があり、長さ 3 mm。種子は長さ 1.2 mm。
- 分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島 (帰化)、カムチャッカ、サハリン、東シベリア、中国、朝鮮。
- 県内の分布 : 沖縄島中部。
- 生育環境 : 湿地に生える。
- 生育状況 : 沖縄島中部で 1926 年に採集された標本 (高江洲宇盛採集、金城鉄郎 No. 1554) が琉球大学理学部標本室 (RYU) に所蔵されている (Walker, 1976) が、近年は全く採集されていない。
- 減少の要因 : 湿地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 303.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ツユクサ

分類 : ツユクサ科 (APG 科名: ツユクサ科)

学名 : *Commelina communis* L. var. *communis*

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎の下部は匍伏して分枝し、上方は斜上して高さ 20~50 cm になる。葉腋から長さ 2~3 cm の花柄がでて、その先に総苞がつく。総苞は広心形で長さ 2~3 cm、中肋に沿って二つに折れ、外側は無毛または疎らに毛があり、内側に数個の蕾を包む。花は 1 個ずつ早朝に総苞の外に出て開き、1 日ではぼむ。花弁は 3 個で、上方の 2 個が青色で大きくよく目立ち、下方の 1 個は白色でごく小さい。雄蕊は 6 本で、2 本だけが完全で黄色、花柱とともに突出し、他の 4 本は仮雄蕊になる。

分布域(県外) : ウスリー、樺太、北海道、本州、四国、九州、奄美大島、与論島、朝鮮、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 日本列島ではいたるところの日のよく当たる原野や湿地、荒地に普通に生える雑草であるが、沖縄島北部では山麓の山道沿いの林縁の日当たりのあまりよくない湿ったところに限られる。また、沖縄島では 4~5 月に開花・結実し、6 月に入り気温が高くなると枯死して姿が見えなくなるなど、夏に開花する本土のものとは比べ、生活史も異なることは興味深い。

生育状況 : 自生地は少なく、与那覇岳や嘉津宇岳の山麓の数ヶ所に限られる。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られる。

備考 : 法面の種子吹き付けや植栽などにもなって、他府県由来の個体群の侵入が見られ、これとの交雑による沖縄島の在来個体群への遺伝的汚染が憂慮される。

執筆者名 : 立石庸一*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ホソバツユクサ**

分類 : ツユクサ科 (APG 科名: ツユクサ科)

学名 : *Commelina communis* L. var. *ludens* (Miq.) C. B. Clarke

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。基本変種のツユクサに比べ、葉の下面、総苞、葉鞘に毛が多い。

分布域(県外) : 奄美大島、与論島、朝鮮。

県内の分布 : 沖縄島、伊江島、座間味島、渡名喜島。

生育環境 : 低地の林縁に生える。

生育状況 : 沖縄島北部と伊江島で、最近、生育が確認されている。

減少の要因 : 低地の開発。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 立石庸一*・山城 考*

和名 : **ザルゾコミョウガ**

分類 : ツユクサ科 (APG 科名: ツユクサ科)

学名 : *Pollia secundiflora* (Blume) Bakh. f.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は地中を横走する。茎は斜上し、高さ 55~110 cm、数葉を互生し、集散円錐花序を頂生する。葉は広楕円形、長さ 10~26 cm、幅 2.3~6 cm、鋭頭、やや無柄、両面に疎毛がある。花序は有毛、下部の苞は葉状、披針形、長さ 6.5~11 cm、小花梗は長さ 3.8 mm、萼片は 3 個、長さ

3.4~3.6 mm、幅 2.5~3.4 mm、花弁は 3 個、倒卵形、長さ 4~5.6 mm、幅 3.8~4.5 mm、稔性のある雄蕊は 3 個、葯は長さ 1.3 mm、白色、花糸は 4~6.8 mm、仮雄蕊は 3 個、不稔の葯は長さ 0.6 mm、黄色、子房は楕円球状、長さ 1.5 mm、花柱は長さ 7 mm。果実は球形、径 6 mm、青熟する。

- 分布域（県外）：台湾、中国南部、インド、ミャンマー、タイ、インドシナ、フィリピン、マレーシア。
- 県内の分布：石垣島。
- 生育環境：低地の常緑樹林の湿った林床に生える。
- 生育状況：自生地は数ヶ所知られ、群生する場合があるが、自生地は開発される可能性があるところが多い。
- 学術的価値：分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
- 減少の要因：もともと自生地が限られている。自生地の開発。コヤブミョウガとの雑種形成。
- 備考：石垣島からは、ザルゾコミョウガに類似するナンゴクヤブミョウガ *P. hasskarlii* Rolla Rao が記録されている（初島, 1975）。これは稔性のある雄蕊を 6 個持つことで前者と区別される。ところが、これまでナンゴクヤブミョウガと同定されていた石垣島産の標本の雄蕊数を調べたところ、3 個であることがわかった。石垣島産の植物はザルゾコミョウガと見なすべきと考えられる。石垣島では、コヤブミョウガ *P. miranda* (Lev.) Hara と混生する場合があり、両種の雑種と思われるものが見つかっている。

文献：初島住彦, 1975. 琉球植物誌（追加・訂正）. 沖縄生物教育研究会, 那覇, 768.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和名：アマノホシクサ

分類：ホシクサ科（APG 科名：ホシクサ科）

学名：*Eriocaulon amanoanum* T. Koyama

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類（CR）

形態の特徴：一年草。葉は多数がロゼット状に根生し、線形で軟質、長さ 2~5 cm、幅 1~3.5 mm。花茎は多数、長さ 15~19 cm、5 肋を有しねじれる。頭花は球形または半球形、白毛を密布する。種子は楕円形、表面に方眼網紋がある。

分布域（県外）：九州（宮崎県、鹿児島県）、奄美大島、徳之島。

県内の分布：沖縄島。

生育環境：水田に生える。

生育状況：近年は全く確認されておらず、現状は不明。既に絶滅した可能性がある。

学術的価値：沖縄島が分布域の南限で、基準産地である。

減少の要因：水田、湿地、池沼、河川の開発、埋立。もともと自生地が少ない。

執筆者名：立石庸一*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名：オオホシクサ

分類：ホシクサ科（APG 科名：ホシクサ科）

学名：*Eriocaulon buergerianum* Korn.

カテゴリー：絶滅危惧 I A 類（CR） 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：一年草。葉は線状披針形、長さ 8~20 cm、幅 5~8 mm。花茎は高さ 15~30 cm、鞘は 4~5 cm。頭花は半球形、初め微毛を密生するが後やや無毛となる。種子は楕円形で長さ 1.3 mm 内外。

分布域（県外）： 本州（中部以南西南）、四国、九州、種子島、奄美大島、徳之島、与論島、台湾、中国。
県内の分布： 沖縄島。
生育環境： 湿地や浅い池沼に生える。
生育状況： 近年は全く確認されておらず、現状は不明。既に絶滅した可能性がある。
減少の要因： 水田、湿地、池沼、河川の開発、埋立。もともと自生地が少ない。

執筆者名： 立石庸一*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名： **ホシクサ**
分類： ホシクサ科（APG科名： ホシクサ科）
学名： *Eriocaulon cinereum* R.Br.
カテゴリ： 絶滅危惧 I B類（EN） 環境省カテゴリ： 該当なし

形態の特徴： 柔らかい一年草、茎は短く、狭線形の葉を束生し、葉は長さ2.5~8cm、幅1~2mm。花茎は細く長さ4~15cm、頭花は卵円形、長さ3~4mm、幅4mm、帯黄灰色または帯褐灰白色、総苞片は長楕円形~倒卵状長楕円形、長さ1.5~2mm、雄花は長さ1.5~2mm、萼片はゆ合し、3個、雄蕊は6個、葯は白色、雌花は長さ1.5~2mm、萼片は離生し、2個、線形、長さ1mm、花弁を欠く。
分布域（県外）： 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、朝鮮、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。
県内の分布： 伊平屋島、沖縄島、石垣島、西表島。
生育環境： 日当たりの良い湿地や水田に生える。
生育状況： 沖縄島と西表島では、各1ヶ所の水田で現在も確認されているが、伊平屋島と石垣島では、過去の記録はあるものの、現状は不明。
減少の要因： 水田や湿地の開発。農薬の使用。もともと自生地と個体数が限られる。

執筆者名： 横田昌嗣

和名： **オキナワホシクサ**
分類： ホシクサ科（APG科名： ホシクサ科）
学名： *Eriocaulon miquelianum* Korn. var. *lutchuense* (Koidz.) T. Koyama
カテゴリ： 絶滅危惧 I A類（CR） 環境省カテゴリ： 絶滅危惧 I B類（EN）

形態の特徴： 一年草。葉は線状針先形、長さ17~20 cm、幅5~8 mm、9~11脈がある。花茎は長さ10~30 cm、5肋を有し多少ねじれる。種子は楕円形、帯緑黄色、上面に鉤状乳房突起を密生する。
分布域（県外）： 奄美大島、沖永良部島。
県内の分布： 沖縄島、久米島、石垣島。
生育環境： 湿地や水田に生える。
生育状況： 近年は全く確認されておらず、現状は不明。既に絶滅した可能性がある。
学術的価値： 琉球列島の固有変種。
減少の要因： 水田、湿地、池沼、河川の開発、埋立。もともと自生地が少ない。

執筆者名： 立石庸一*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : スイシャホシクサ
 分類 : ホシクサ科 (APG 科名: ホシクサ科)
 学名 : *Eriocaulon nigrum* Lecomte var. *suishaense* (Hayata) Hatusima et T. Koyama
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 一年草。葉は線形～線状披針形、長さ 2～7 cm、幅 3～5 mm、7～9 脈がある。花茎は多数、長さ 3～15 cm。頭花は扁球形、長さ 4 mm 内外。種子は広楕円形、淡褐色、長さ 0.5 mm 内外、縦線がある。

分布域(県外) : 徳之島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 湿地や水田の畦に生える。

生育状況 : 沖縄島では国頭村から恩納村にかけて点々と産するが、かつて知られた多くの自生地は開発により消失している。現存する自生地は沖縄島、石垣島、西表島の合計数ヶ所である。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 湿地・水田・池沼・河川の開発・埋立。

備考 : 基本変種は中国南部、インドシナに分布する。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Eriocaulon truncatum* として評価。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヤマヌカボ
 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
 学名 : *Agrostis clavata* Trin. ex Spreng.
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 30～70 cm になる繊細な多年草。根茎はほとんど発達せず、茎基部に翌年の新苗をつける。葉は扁平で柔らかく、長さ 10 cm、幅 3 mm ほど。円錐花序は長さ 12～20 cm になり、枝は細かくざらつき、花時には開出しているが花後は直立する。小穂は長さ約 2 mm、淡緑色で光沢があり、花序の枝先だけに疎らにつく。第一苞穎と第二苞穎はほとんど同長で、小花は第一苞穎の 3/4 ほど。護穎は苞穎より少し短い。内穎はごく小さく、長さ 0.5 mm 以下で、護穎の 1/4 以下。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、ユーラシアの温帯。

県内の分布 : 硫黄島、沖縄島。

生育環境 : 山地の林内に生える。

生育状況 : 沖縄島からは、最近は全く見られていないが、1997 年の硫黄島における総合調査により、同島のグスク岳斜面の低木林内で初めて発見された (立石ら, 2001a, b, 2002)。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 生育地の開発。

備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001a. 沖縄県硫黄島の植物相とその構成種の散布様式. 沖縄生物学会誌, (39) : 49-76.
 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001b. 沖縄県硫黄島で見出された分類学

的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物。沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄鳥島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄鳥島”, 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : オオマツバシバ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Aristida takeoi* Ohwi

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉は密に束生し、糸状、長さ 15~20cm、葉舌にひげ毛がある。稈は糸状、長さ 30cm 程度。円錐花序は頂生し、長さ 20cm 程度、枝は 1~2 個、長さ 5~8cm、包穎は針状披針形、第 1 穎は長さ 8mm、3 脈、第 2 穎は長さ 1.2mm、1 脈、護穎はやや針形、長さ 8mm、先端は長さ 13mm のねじれた柄となる。

分布域 (県外) : 奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島、伊平屋島、伊是名島、渡嘉敷島、座間味島、久米島、小浜島。

生育環境 : リュウキュウマツの低木林の林床や貧栄養の乾いた原野に生える。

生育状況 : 局所的に群生する場合があるが、自生地の多くは開発で消失している。

学術的価値 : 琉球列島の固有種で、これまで中琉球だけから報告されていたが、今回の調査で南琉球の小浜島からも見つかった。近縁種は小笠原のマツバシバ *A. boninensis* と台湾のタイワンマツバシバ *Aristida chinensis* で、琉球列島と周辺地域の植物相の関連を調べる上で貴重である。沖縄島や伊是名島では、オオマツバシバ群落は、イトスナヅルやナガバアリノトウグサなどの希少種の生育地となっている。

減少の要因 : 自生地の開発。一部の自生地では、外来種のアメリカハマグルマが侵入している。

執筆者名 : 横田昌嗣・阿部篤志

和名 : ビロードキビ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Brachiaria villosa* (Lam.) A. Camus var. *villosa*

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 高さ 15~25 cm の一年草。全体に開出する短い軟毛があり、稈は叢生して立ち、基部でよく分枝する。葉は披針形、長さ 3~5 cm、幅 5~8 mm ほどで先は短く尖り、縁には軟毛に混ざって小刺針が並ぶ。花序は長さ 2~5 cm、斜上する長さ 2~3 cm の枝 (総) を 5~10 個つける。総に 2 列に圧着する小穂は楕円形、長さ 2.5~2.7 mm、第一苞穎があり、基部が広くて小穂の基部をとり巻き、長さは小穂の 2/5~1/2。

分布域 (県外) : 本州 (紀伊半島)、四国、九州、中国中南部、台湾、インドネシア、インド。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 海岸付近の原野に生える。

生育状況 : 石垣島からは 1920 年代から 1950 年代まで、西表島では 1923 年に採集されているが、苞穎の無毛形 (ラシャキビ) とともに最近では記録がない。

減少の要因 : 生育地の開発。

備 考 : 苞穎に毛のない形がラジャキビで、石垣島からビロードキビの変種 var. *glabrigluma* Ohwi として記載された (Ohwi, 1936)。しかし、これは有毛の基本形としばしば混生するので、区別する必要はないと考えられる。強いてするなら、無毛の一形ということで、品種 f. *glabrigluma* (Ohwi) Ohwi が適切であろう (Ohwi, 1942) という。

文 献 : Ohwi, J., 1936. Symbolae ad florum Asiae Orientalis 10. Acta Phytotax. Geobot., 5: 51.
Ohwi, J., 1942. Gramina Japonica, III. Act. Phytotax. Geobot., 11: 27-56.

執 筆 者 名 : 立石庸一*

和 名 : **イリオモテガヤ**

分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学 名 : *Chikusichloa brachyanthera* Ohwi

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。稈は直立して高さ 60~100 cm になる。葉は線形、長さ 30~40 cm、幅 4~5 mm、鞘はやや扁平し、無毛。円錐花序は長さ 20~30 cm で、小穂を疎らにつける。小穂は 1 小花からなり、長さ 3 mm、包穎はなく、護穎は卵形で 5 脈がある。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 河川の中流域から下流域の河床やサガリバナ林の林床に生える。

生育状況 : 数河川の流域に産するが、自生地と個体数は少ない。

学術的価値 : 西表島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 茨木 靖, 2000. 西表島固有イネ科水生植物イリオモテガヤ (*Chikusichloa brachyanthera* Ohwi) の生育環境. 水草研究会会報, 70: 20-21.
小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39): 99-102.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **ビロードメヒシバ**

分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学 名 : *Digitaria mollicoma* (Kunth) Henrard

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。稈は下部が倒伏、上部が斜上して、高さ 20~30 cm になる。葉は 3 cm 内外、線状披針形、波状縁で両面に絹毛を密生し、葉舌は膜質、鈍頭。稈の先に長さ 6 cm 内外の穂状花序をは 2~3 個つける。小穂は楕円形で長さ 1.5~2 mm、密に銀白毛がある。

分布域(県外) : 台湾、マレーシア。

県内の分布 : 久米島。

生育環境 : 海岸付近の原野や海岸林の林床に生える。

生育状況 : 初島・天野 (1974) によって報告された唯一の生育地は、ホテル建設により消失した。2005 年に生育地の近隣を調査したが発見されず、現状は不明で、既に絶滅した可能性が高い。

- 学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、国内では唯一の自生地である。マレーシア系の植物として植物地理学上貴重である。
減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
備 考 : 初島住彦により 1967 年に久米島で採集された標本の一部は、国立科学博物館 (TNS) にある。

文 献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄自然研究会編, 沖縄県, 1-39.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)

-
- 和 名 : ヒトタバメヒシバ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Digitaria pruriens* (Fisch.) Buse
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 多年草。稈の下部は匍匐するが、上部は直立または斜上し、高さ 15~60 cm になる。葉は狭披針形で長さ 8~20 cm、幅 5~12 mm、葉鞘に長い開出毛がある。稈の先に 6~12 個の総状花序をつける。小穂は 3 mm 内外、前面辺縁のみ有毛。

分布域 (県外) : 小笠原、ミクロネシア、ポリネシア、メラネシア、マレーシア。

県 内 の 分 布 : 北大東島、南大東島。

生 育 環 境 : 海に近い原野に生える。

生 育 状 況 : 近年は全く確認されておらず、現状不明。

学 術 的 価 値 : ポリネシア系の種で、隔離分布する。植物地理学上の貴重種で、県内では唯一の産地である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。

備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Digitaria junghuhniana* として評価。

文 献 : 西銘盛光・横田昌嗣, 1996. 南大東島海岸植物群落内における観察所建設の影響調査報告書. 沖縄県教育庁文化課紀要, (12) : 47-62.
西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

-
- 和 名 : イゼナガヤ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Eriachne armitti* F. Muell.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 多年草。稈は密に束生して高さ 25 cm になり、節に白色の粗毛を密生する。葉舌には長い毛がある。円錐花序はやや密で長楕円状、長さ 3~4 cm、枝は短く、5~6 個、長さ 5 mm 以下で、1~2 花をつけ、花軸とともに白色の粗毛をつける。

分布域 (県外) : ニューギニア、オーストラリア。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、伊是名島、渡嘉敷島、座間味島、沖縄島。

生 育 環 境 : 乾いた原野やリュウキュウマツ疎林の林床に生える。

- 生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。伊是名島、渡嘉敷島、座間味島では今回の調査でも確認された。沖縄島からは、ごく最近発見されたが、米軍基地の開発により自生地の大半は失われた。伊平屋島では近年は確認されておらず、現状不明。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。オーストラリア系の植物で、著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。伊是名島のものはオーストラリアのものと同形態が異なり、固有種 *E. tawadae* とする意見がある。
- 減少の要因 : 草地・草原の開発。もともと自生地が少ない。遷移の進行。外来種との競合。

- 文献 : 仲田栄二 (編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会, 119pp.
阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **アオシバ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Garnotia acutigluma* (Steud.) Ohwi
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根はマット状になり、強く岩に付着する。茎は高さ 30~40 cm になり、数枚の葉をつける。葉は線状披針形、短毛があり、長さ 20~35 cm。円錐花序は細く、長さ 20 cm になり、多数の花をつける。小穂は長さ 3 mm、線状披針形、基部に短い毛束がある。
- 分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、中国南部、インド、マレーシア、ニューギニア、ハワイ。
- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 典型的な溪流植物で、洪水時には容易に水没するような河川の中流域の岩上に限って生える。
- 生育状況 : 自生地は 2ヶ所知られているが、その内の 1ヶ所 (クイラ川) では本種は全く確認されないことから誤りである可能性が高い。確実に自生する 1ヶ所 (後良川) では現状では、自生地の面積は狭い範囲に限られるが、局所的には個体数はやや多い。後良川にはダム建設の計画があり、建設されれば自生地の大半は水没することになっていたが、計画は回避され、後良川の流域は国立公園の特別保護地域に指定されたので、絶滅する可能性は少なくなった。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。本種の分布域は広いが、著しい隔離分布を示し、いずれの地域でも希産種とされる。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

- 文献 : 横田昌嗣・宮城康一, 1988. 琉球列島植物分布資料 6. 沖縄生物学会誌, (26) : 35-37.
横田昌嗣・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料 7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ヤエガヤ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Hackelochloa granularis* (L.) O. Ktze.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 高さ 20~60 cm の一年草。全体に多少ざらつき、茎は細く、基部で多少分枝する。葉は線状披針形、長さ 10 cm に達し、幅 3~12 mm ほどで剛毛が生える。穂状花序は細く、長さ 1~2 cm、小穂は 2 形で、柄のないものと有柄のものが対になってつく。柄のない小穂は円形で直径 1 mm ほど、稔性があり、第一苞穎は球形で外面は小穴が散在する。有柄の小穂は長さ 2 mm に達し、卵形、雄性で柄は花序の軸に癒合する。
- 分布域(県外) : トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、および台湾以南の旧世界の熱帯に広く分布。
- 県内の分布 : 沖縄諸島、八重山諸島。
- 生育環境 : 畑地周辺の草地に生える。
- 生育状況 : 1930 年代までは各島でよく記録されていたが、近年は見るのがまれになり、今回の調査では全く確認することができなかった。
- 減少の要因 : 耕地整理。外来種との競合。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **アカヒゲガヤ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Heteropogon contortus* (L.) P. Beauv. ex Romer et Schult.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴 : 束生する多年草。稈は斜上し高さ 30~100 cm になる。葉は下方に束生、披針形、長さ 3~8 cm、幅 4 mm 内外、無毛。総状花序は単一で頂生、第 4 穎は長さ 5~8 cm の太い芒をもつ。
- 分布域(県外) : 九州(天草)、台湾、全世界の熱帯地方。
- 県内の分布 : 沖縄島(北部~南部)。
- 生育環境 : 原野や人里近くに生え、特に墓地の琉球石灰岩の岩隙に生えることが多い。
- 生育状況 : 自生地は沖縄島北部から南部まで点々と数ヶ所知られるが、現在も確認されるのは恩納村と那覇市の 4ヶ所だけである。
- 減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。外来種との競合。

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **ケナシハイチゴザサ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Isachne lutchuensis* Hatusima et T. Koyama
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴 : 一~二年草。稈は細く、基部は膝曲して匍匐し、節部から下根する。葉は長さ 1~1.3 mm、口部の白毛をのぞき無毛。葉は辺縁は小さく上下に波打ってざらつく。円錐花序は疎らで長さ 2~5 cm、枝は 3~5 個、軸とともに無毛。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
- 生育環境 : 山地の湿地に生える。
- 生育状況 : 沖縄島北部では、2017 年 1ヶ所だけで少数個体が確認されている。西表島では 2018 年に確認されている。

学 術 的 価 値 : 沖縄県の固有種である。
 減 少 の 要 因 : 自然林の伐採による湿地の減少。もともと自生地が限られている。
 備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ハイチゴザサ
 分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
 学 名 : *Isachne nipponensis* Ohwi
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 小形の一年草。稈の基部は長く匍匐して、節から根を出し、上部は立ち上がり、高さ 5~10 cm になる。葉は披針形~披針状長楕円形、長さ 1.5~3 cm、幅 4~10 mm、上面はまれに長毛を 1~2 本散生する他は無毛、鞘は 7~17 mm、縁に長い毛がある。円錐花序は長さ 3~8 cm、疎らに小穂を生じ、広卵形、小穂は長さ 1.5 mm、広楕円形~やや球形。
 分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、朝鮮、台湾、中国。
 県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、西表島。
 生 育 環 境 : 山地の湿地に生える。
 生 育 状 況 : 沖縄島北部では 2ヶ所で確認されているが、西表島の現状は不明。
 減 少 の 要 因 : 自然林の伐採による湿地の減少。もともと自生地が限られている。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒメカモノハシ
 分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
 学 名 : *Ischaemum indicum* (Houtt.) Merr.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 多年草。稈は下部が湾曲して基部付近は地を這い、上部は斜上し、節に長毛が密生し、葉鞘にも毛がある。総状花序はふつう 2 個で、長さ 3~5 cm、茎の先に直立する。小穂は柄のないものとあるものが 2 個ずつ対になって花軸の節につき、柄には長い毛があり、小花には長い芒がある。
 分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、インド。
 県 内 の 分 布 : 石垣島。
 生 育 環 境 : 海岸の琉球石灰岩の岩上や崖に生える。
 生 育 状 況 : 1ヶ所のごく狭い範囲に生育し、個体数は極めて少ない。近年は台風時の潮害で植物体が痛んでいることを目にする事が多い。
 減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。
 備 考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*Polytrias indica* として評価。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和 名 : コハナカモノハシ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Ischaemum setaceum* Honda
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小形の多年草。稈の下部は這い、節から根を出し、上部は直立して高さ 15~25 cm になり、節は有毛、葉鞘は無毛。葉は線状披針形、長さ 3~6 cm、幅 5 mm 内外。総状花序は 3~4 cm、節は太く、稜上に黄金色の長毛を密生する。

分布域(県外) : 台湾、フィリピン。

県内の分布 : 魚釣島。

生育環境 : 海岸の岩場に生える。

生育状況 : 魚釣島では野生化ヤギの増加で被害が進んでいることが考えられ、現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限で、日本では唯一の産地である。

減少の要因 : 野生化ヤギによる被害。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : アシカキ
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Leersia japonica* Makino
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。稈は長い匍匐茎をのばして多数分枝し、上部は斜上して高さ 30~50 cm なり、節には下向きの剛毛を密生し、葉鞘にも硬い刺状の短毛があるので全体にざらつく。葉は長さ 5~15 cm、幅 4~8 mm。円錐花序は直立、長さ 5~10 cm、護穎の側脈は無毛で平滑、雄蕊は 6 本。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、中国。

県内の分布 : 沖縄島南部。

生育環境 : 水辺に生える。

生育状況 : 近年は全く確認することができず、現状は不明。

減少の要因 : 湿地・池沼・河川の開発・埋立。外来種との競合。

執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミヤマササガヤ
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Microstegium nudum* (Trin.) A. Camus
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 20~90 cm の多年草。稈の基部は地表を這って発根し、節は微細な毛に覆われる。葉は披針形で長さ 4~10 cm、幅 7~10 mm。花序は稈の先について 4~7 個の総からなり、総は細くて長さ 4~8 cm、淡緑色の小穂が中軸に圧着し、中軸の節間は長さ 6~7 mm で、小穂の柄のほぼ 2 倍の長さがある。小穂は長さ 3 mm ほどの柄をもつものと、ほとんど柄のないものが対になってつき、それぞれの柄の上端に短毛の環がある。小穂は長さ 4 mm、苞穎はともに小穂と同長。第二小花は両性で、2

裂した護穎の先から長さ 15~20 mm の芒が出る。

- 分布域（県外）： 本州（中部以西）、四国、九州、屋久島、台湾、中国、インドシナ、タイ、インド。
 県内の分布： 沖縄島。
 生育環境： 山地の林内に生える。
 生育状況： 1970年代までは沖縄島の中・北部で散発的に見られたが、最近はほとんど見られなくなった。
 減少の要因： 生育地の開発。外来種との競合。

執筆者名： 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

- 和名： トキワススキ
 分類： イネ科（APG科名：イネ科）
 学名： *Miscanthus floridulus* (Labill.) Warb. ex K. Schum. et Lauterb.
 カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴： 大型の多年草。太くて短い根茎があり、稈は束生して大きな株となり、直立、高さ 1.5~3.5 m。葉は平で長さ 30~80 cm、幅 15~35 mm、縁はひどくざらつき、中央脈は白色で目立ち、上面の基部近くに短毛が生える。花序は長さ 30~50 cm で幅の 2 倍以上になり、上部の総は下部のものより遥かに短い。総は多数で花序の中軸に散らばってつき、長さ 8~20 cm、これに柄の長い小穂と柄の短い小穂とが対になってつく。小穂は長さ 3~3.5 mm、基部には白色の長毛を束生する。

- 分布域（県外）： 本州（関東南部以西）、四国、九州、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、台湾、中国南部、インドシナ、マレーシア、ポリネシア。
 県内の分布： 沖縄諸島、八重山諸島。
 生育環境： 平地や丘陵地に生える。
 生育状況： かつては飼料または屋根葺き用として栽培されることが多かった。野生らしい個体群はあまり見られない。
 減少の要因： 耕地整理。開発。
 備考： 竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名： 立石庸一*

- 和名： チャボチヂミザサ
 分類： イネ科（APG科名：イネ科）
 学名： *Oplismenus undulatifolius* (Ard.) P. Beauv. var. *microphyllus* (Honda) Ohwi
 カテゴリー： 準絶滅危惧（NT） 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴： 小形の多年草。葉は長さ 1~3 cm。花序は稈の先についてほとんど枝を分けず、花軸の節に 1~3 個ずつ柄のない小穂がついて穂状花序状となる。

- 分布域（県外）： 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、フィリピン、マレーシア、インド、ネパール。
 県内の分布： 沖縄島北部。
 生育環境： 山地溪岸に生える溪流植物である。
 生育状況： 限られた河川の中流域に生え、多くの自生地はダム建設により失われている。
 減少の要因： ダム建設による水没。自然林の伐採。外来種との競合。

備考 : 基本変種のチヂミザサは日本および琉球を含め、地中海沿岸から中央アジア、インド北部、さらに東アジアの広い地域に分布する。チャボチヂミザサはこの基本変種に比べ全体に毛が少なく、とくに花序の中軸は、節以外はほとんど無毛である点で区別できる。しかし両者の関係は今後検討を要する。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成7年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ(陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成8年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : **イネガヤ**

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Oryzopsis obtusa* O. Stapf

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 密に束生する多年草。稈は高さ 60~100 cm。葉は扁平で狭線形、やや光沢があり、辺縁はざらつく。円錐花序は狭総状、長さ 10~15 cm、穎果は長さ 4 mm くらい、両端はとがり黒褐色で光沢がある。

分布域(県外) : 台湾、中国南部。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 石灰岩地の林内に生え、自生地はごく接近した2ヶ所のみが知られる。

生育状況 : ごく狭い範囲に生え、個体数は少ない。自生地は国立公園に指定されているが、自生地の1ヶ所には遊歩道が建設され、個体数は減少している。他の1ヶ所も登山道沿いにあり、小規模な開発でも絶滅の恐れがある。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。人による踏みつけ。違法な森林伐採。

執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オオヌカキビ**

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Panicum paludosum* Roxb.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 水生の多年草。稈は上向き高さ 1 m になり、下部は水上に浮かぶか泥中に下根する。葉はざらついて長さ 15~25 cm。円錐花序は鞘からわずかに抽出する。花枝は互生、時として輪生する。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、池間島。

生育環境 : 水田の畦や水辺に生える。

生育状況 : 池間島では 1 ヶ所で少数個体が生育することが知られていたが、自生地はサトウキビ畑となり、現在は確認できず絶滅した恐れがある。沖縄島ではごく最近記録されているが、自生地は水田で、開発される恐れがある。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 湿地、池沼、水田の開発と埋立。もともと自生地が限られている。

備考 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。

文献 : 初島住彦, 1971. 琉球植物誌, 沖縄生物教育研究会, 那覇, 683.
水野 拓・高山正裕・阿部篤志, 2017. 沖縄島における絶滅危惧種オオヌカキビ (イネ科) の新記録. 沖縄生物学会誌, (55): 39-41.

執筆者名 : 横田昌嗣*・池原直樹*・川上 勲*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : アイアシ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Phacelurus latifolius* (Steud.) Ohwi

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ 80 cm 内外の硬い多年草。稈は群生し、根はかたくて太く横に這う。葉は長さ 20~40 cm、幅 1~4 cm。花序は掌状に並んだ 5~10 個の穂状花序からなる。穂状花序は長さ 10~25 cm、粉白色または汚紫色を帯びる。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、奄美大島、沖永良部島、朝鮮、中国。

県内の分布 : 鳩間島。

生育環境 : 海岸の砂浜に群生する。

生育状況 : 鳩間島の海岸の 1 ヶ所にハマオモト群落やモンパノキ群落、アダン群落に隣接して群生していた。2017 年にかつて採集された場所を中心に島内を広く調査したが、発見することはできなかった。自生地の海岸植生はヤギの食害により荒廃が進み、外来種が侵入していることから、既に絶滅した可能性が高い。

学術的価値 : 分布域の南限であり、沖縄県で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。海岸の開発。外来種との競合。野生化ヤギによる食害。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Shinjo, K., 1977. Flora of Hatoma Island, the Yaeyama Islands. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 3: 29-40.

執筆者名 : 新城和治*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : オキナワミゾイチゴツナギ

分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Poa acroleuca* Steud. var. *ryukyuensis* Koba et Tateoka
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 一年草または短命な多年草。茎は 30~50 cm、葉は長さ 10~15 cm、幅 2~5 mm、小舌は長さ 0.6~1.2 mm、有毛。円錐花序は 10~15 cm、小穂は 2~3 花をつけ、長さ 2~3 mm。外花穎は無毛または微毛がある。葯は長さ 0.5~0.7 mm。沖縄島にも分布するミゾイチゴツナギに似るが、護穎の側面の脈間に毛が多ければミゾイチゴツナギ、ほぼ無毛ならばオキナワミゾイチゴツナギである。

県内の分布 : 沖縄島 (固有)。

生育環境 : 公園など的人為的な影響の強い草地に生える。

生育状況 : 名護市嘉津宇岳、中城村中城城跡、浦添市浦添城跡、那覇市首里城、南城市佐敷などで採集されているが、名護市嘉津宇岳と浦添市浦添城跡以外では近年は確認されていない。類似の生育環境には、近年ミゾイチゴツナギモドキ *Poa* sp. (池原, 1989) が帰化して旺盛に繁茂しており、生育環境の競合による本種の減少が危惧される。

学術的価値 : 沖縄島の固有変種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。生育地の開発。帰化種との競合。除草剤の使用。過度の除草。遷移の進行。

保全対策 : 自生地はいずれも人的な影響の強いところである。遷移が進行して森林となると本種の生育環境が失われる可能性がある。生育環境の維持のためには定期的な除草が必要であるが、除草剤の使用は避ける必要がある。一方、自生地の一部は、世界文化遺産に指定されており、敷地内の管理のため過度の草刈りが行われており、かつて確認されていた自生地では最近確認できない事例が確認されている。

文 献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第9巻. 新星図書出版, 123.
Koba, H. & T. Tateoka, 1992. A new variety of *Poa acroleuca* (Poaceae) from Okinawa. *J. Jpn. Bot.*, 67: 201-206.

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : コモロコシガヤ

分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学 名 : *Sorghum nitidum* (Vahl) Pers.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 大形の多年草。稈はやや単生、高さ 90~120 cm になる。根茎は横走せず、節に密毛がある。葉は狭線形で長さ 10~15 cm、刺毛状鋭先頭、鞘の下部は円く、上部は有稜、喉部に長い絹毛を密生する。円錐花序は長さ 10~30 cm。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、東南アジア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 海岸近くの原野に生える。

生育状況 : 石垣島の数ヶ所で採集された記録があるが、2017 年に確認されている自生地は 1ヶ所だけである。自生地にはアメリカハマグルマや外来のイネ科が侵入しており、本種の生育環境が失われつつあり、危機的な現状である。

学術的価値 : 国内唯一の自生地で、分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。帰化種との競合。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメネズミノオ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Sporobolus hancei* Rendle

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。根茎は短く、匍匐茎がなく、稈は根元から束になって出て、細くて直立し、高さ 15~30 cm、僅かに 1~3 節があるだけで、しかも稈の下部にあるため、葉は全て根元にかたまっている。葉身は長さ 3~8 cm、内側に巻いて糸状になり、幅 1~2 mm、葉鞘の上部に数本の毛がまばらに生えるほかは無毛、葉舌は発達しない。円錐花序は稈の先につき、幅の狭い円柱形で基部から先端まで小穂を密生し、しばしば穂状花序と見間違える。小穂は長さ 1.7~2 mm で 1 個の小花からなる。

分布域(県外) : 九州南部(鹿児島県南部)、奄美大島、加計呂麻島、徳之島、台湾、中国南部、フィリピン。

県内の分布 : 硫黄島、伊平屋島、伊是名島、久米島、渡嘉敷島、沖縄島、粟国島。

生育環境 : 海岸の砂地に生える。

生育状況 : 硫黄島の風衝の溶岩台地上の風衝地に生えているのが、1997 年の調査で確認された。沖縄島の現況は不明。伊平屋島では 2008 年から 2016 年にかけて 2 ヶ所で確認されている。粟国島では 2015 年に 1 ヶ所で確認されている(阿部ら, 2016)。今回の調査で、伊是名島では 1 ヶ所、久米島では 2 ヶ所、渡嘉敷島では 2 ヶ所で確認されている。

減少の要因 : 生育地の開発。

文献 : 天野鉄夫, 1981. 粟国島植物目録. 粟国村教育委員会, 39pp.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄島”, 沖縄県文化振興会(編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査(伊是名島・久米島). “事業年報(平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51) : 80-85.

執筆者名 : 立石庸一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : オニシバ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Zoysia macrostachya* Franch. et Sav.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草で硬くて長い根茎が地中深く這うが、地表に匍匐茎はなく、根茎の節から稈を出し砂上に直立させる。稈は高さ 15~40 cm、よく分枝する。葉は長さ 3~8 cm、幅 2~5 mm、乾くと内側に巻いて筒状になり、先端は褐色の硬い刺になって、さわると痛い。葉鞘の口部に長い毛を密生し、葉舌も長毛の列になる。花序は長さ 6~8 mm、幅 5~7 mm の穂状で、柄のある小穂がすき間なく重なり、下部は最上部の葉鞘に包まれている。小穂は長さ 6~8 mm、幅 2~4 mm、1 小花からなる。

分布域(県外) : 北海道(西南部)、本州、四国、九州、奄美大島、沖永良部島、与論島、朝鮮半島南部。

県内の分布 : 伊平屋島、野甫島、沖縄島。

- 生育環境 : 海岸の砂地に生える。
生育状況 : 伊平屋島、野甫島、沖縄島北部～中部の海岸で最近も確認されているが、自生地は少ない。
学術的価値 : 分布の南限である。
減少の要因 : 護岸工事。砂浜の開発。

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

-
- 和名 : コオニシバ
分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学名 : *Zoysia sinica* Hance var. *sinica*
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 高さ 10～20 cm の多年草で、根茎は地中を深く横に這い、節ごとに細くて硬い稈を地表に直立させる。葉身は平ら、または内側に巻き、長さ 3～8 cm、幅 1～3 mm、葉先は硬くなって刺状になるが、オニシバのようにはさわっても痛くない。総状花序は長さ 3～5 cm、柄は長く、最上部の葉鞘からぬけ出している。小穂は長さ 4～5 mm、1 小花からなる。
分布域(県外) : 九州(薩摩半島)、屋久島、種子島、トカラ列島(宝島)、奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島、台湾、中国東南部。
県内の分布 : 伊平屋島、野甫島、沖縄島、伊江島、渡名喜島、久米島、西表島。
生育環境 : 海岸砂浜に生える。
生育状況 : 沖縄島では 1930 年代までは確認されているが、最近では 1ヶ所でわずかに見られるだけである。久米島では 1970 年代初め以降の記録がない。伊江島では海岸で生育の良好な個体群が確認されている。伊平屋島と野甫島では、現在も自生が確認されている。
減少の要因 : 護岸工事。
備考 : この変種ナガミノオニシバ var. *nipponica* Ohwi は本州(関東以西)、四国、九州、薩南諸島、トカラ列島および朝鮮、中国に分布し、小穂が大型で長さ 5～8 mm であることにより区別される。オニシバによく似るが、葉も稈も花序も細く、花序が明らかな柄によって最上部の葉鞘から僅かながら抜け出ていることなどで区別できる。

執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : ニツパヤシ
分類 : ヤシ科 (APG 科名: ヤシ科)
学名 : *Nypa fruticans* Wurmb
カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の小高木。根茎はマングローブ湿地の泥中を這い、径 50～70 cm、二叉分枝し、先端に数枚の葉を束生する。葉は羽状複葉で、長さ 5～7 m になり、直立する。花序は雌花序と雄花序の部分があり、葉束から出て長さ 80～100 cm になり、7～9 個の包葉があり、雌花序は球状の頭状花序で、花序の先端につき、雄花序は尾状花序、雌花序の下に 1～5 個つき、多数の花をつける。花被片は 6 個、線形、雄性花の雄蕊は 3 個、雌性花の心皮は 3 個。果実は集合果で、球状、径 15～30 cm、種子は卵形、長さ 4.5 cm。
分布域(県外) : インド、マレーシア、ミクロネシア。
県内の分布 : 西表島、内離島。

- 生育環境 : マングローブ湿地に生える。
- 生育状況 : 定着した自生地は2ヶ所が知られ、それぞれ個体数について詳しい調査がなされている。内離島の自生地の現状は1978年の状況(西平, 1980)と大きな変化はなく、結実個体も見られ生育状態は良好である。西表島船浦のヤシ川の自生地は国指定の天然記念物として保護されているが、上流側で大規模な森林伐採と農地開拓が行われており、流出した土砂が堆積して、大半の個体の根茎が埋まって生育状態は極めて悪い。1996年と1983年の状況(新島ら, 1983)と比べると、枯死個体が目立ち、個体数は半減している。一部は掘り採られたような跡があり、盗掘されている恐れがある。内離島の個体群では結実が見られるが、ヤシ川では開花するものの結実しないようである。西表島の2ヶ所の個体群の遺伝的変異性を調べた研究では(Sugai *et al.*, 2016)、個体群内では遺伝的変異がないことが判っており、漂着した種子由来の植物が栄養繁殖したものと考えられている。これらの2ヶ所の自生地の他、漂着した種子が発芽して生長している幼植物は、1ヶ所で確認されている。
- 学術的価値 : 唯一のヤシ科のマングローブ植物で、東南アジアの代表的なマングローブ植物の一つである。分布域の北限であり、マレーシア系の種で植物地理学上貴重である。茎が二叉分枝をする数少ない種子植物の一つで、植物学上貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。土砂の堆積による生育環境の悪化。園芸用の採集。
- 保全対策 : 不稔に関する研究が必要である。ヤシ川の砂の堆積を防ぐ必要がある。
- 備考 : 国指定天然記念物(船浦のニッパヤシ群落)(1972年)。竹富町特別希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文献 : 仲里長浩・花城良廣・後藤勝実, 1996. 沖縄に自生するニッパヤシ *Nypa fruticans* Wurmb. I. 生育の現状. 九州東海大学紀要, 15: 49-54.
 新島義龍・新城和治・宮城康一・前津栄信・日越国昭・新納義馬, 1983. 西表島船浦のニッパヤシ群落. “西表島天然記念物緊急調査報告”, 沖縄県教育委員会, 41-49.
 西平守孝, 1978. 西表の潮間帯—1978. 沖縄県自然保護課, 158pp.
 Sugai, K., S. Watanabe, T. Kuishi, S. Imura, K. Ishigaki, M. Yokota, S. Yanagawa & Y. Suyama, 2016. Genetic consequences at the northern margin of the distribution of *Nypa fruticans* (Arecaceae) on Iriomote Island, Japan. *Conservation Genetics*, 17: 221-228.

執筆者名 : 新里孝和*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ヤエヤマヤシ
- 分類 : ヤシ科 (APG 科名: ヤシ科)
- 学名 : *Satakentia liukuensis* (Hatusima) H. E. Moore
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 樹高 25 m に達する常緑の高木。茎は円柱形で、径 30~40 cm、先端に数葉を束生し、基部から多数の不定根を出す。葉は羽状複葉で、長さ 5 m になり、葉鞘は赤色を帯び、筒状となり茎を包む。花序は肉穂状で、葉束の下部から出て長さ 1 m になり、掌状に分枝し、多数の花をつける。花は単性で、花序軸の下部に雌性花が、中部から上部に雄性花がつく。雌性花の萼片と花弁はそれぞれ 3 個で、長さ 4 mm、子房は長さ 2 mm、雄性花の萼片と花弁は雌性花のものより小さく、雄蕊は 6 個。果実は長楕円形、長さ 13 mm。

- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 低地から山地の自然林に生え、純林を作る。
- 生育状況 : 石垣島に1ヶ所(米原)、西表島に2ヶ所(星立、ウブンドル)の自生地が知られ、自生地はいずれも国指定の天然記念物になっており、今すぐ絶滅する恐れはないが、近年大形の成熟個体の枯死が目立ち、個体数は減少している。

- 学 術 的 価 値 : 八重山諸島の固有属で、単型属である。近縁な属は小笠原やマイクロネシア、ニューギニアのノヤシ属 *Gulubia* で、これは台湾やフィリピンに分布しておらず、琉球列島の植物相の成立を知る上で貴重である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用・食用・建築資材用の採集。台風や害虫の被害による枯死。
- 備 考 : 国指定天然記念物（ウブンドルのヤエヤマヤシ群落 1972 年、米原のヤエヤマヤシ群落）（1972 年）。竹富町希少野生動植物種（2017 年）。IUCN カテゴリー: Data Deficient (DD)。
- 保 全 対 策 : 成熟個体の枯死原因、個体群動態、病害虫防除などの調査研究が必要である。
- 文 献 : Hatusima, S., 1964. A new palm from the Ryukyus. Mem. Fac. Agr. Kagoshima Univ., 5: 39-42.
宮城康一・新城和治・新島義龍・前津栄信・日越国昭・新納義馬, 1983. 西表島星立天然保護区域のヤエヤマヤシ林の群落構造. “西表島天然記念物緊急調査報告”, 沖縄県教育委員会, 51-74.
新城和治・宮城康一・新島義龍・日越国昭・新納義馬, 1983. 西表島ウブンドルのヤエヤマヤシ群落. “西表島天然記念物緊急調査報告”, 沖縄県教育委員会, 11-40.
- 執 筆 者 名 : 新里孝和*・加島幹男*

-
- 和 名 : ヤマコンニャク
- 分 類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)
- 学 名 : *Amorphophallus hirtus* N. E. Brown var. *kiusianus* (Makino) M. Hotta
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形 態 の 特 徴 : 球茎は扁球形で径 3~5 cm。葉柄と花茎は高さ 30~80 cm、葉身は 3 全裂し、さらにそれぞれ 2 裂して、最終裂片は披針形~長楕円状披針形、先は尾状鋭尖頭、長さ 3~20 cm、幅 1.5~4.5 cm。仏炎苞は帯緑色、無毛、長卵形で鋭尖頭、長さは 13~20 cm、花序は長さ 13~17 mm、付属体は仏炎苞とほぼ同調。液果は球形、径約 5 mm、はじめは緑色でのち帯紫色となり碧色に熟す。
- 分 布 域 (県 外) : 四国 (高知県)、九州南部、種子島、屋久島、中之島、奄美大島、沖永良部島、台湾。
- 県 内 の 分 布 : 栗国島。
- 生 育 環 境 : 海岸近くの岩場のソテツ群落内や原野に生える。
- 生 育 状 況 : 1ヶ所に数十個体があることが 2015 年の調査でも確認されている (阿部ら, 2016)。最近の原野火災で個体数が減少したように思われる。自生地の近隣に道路建設計画があり、建設されると自生地の環境悪化が懸念される。
- 学 術 的 価 値 : 県内では栗国島だけに分布し、四国や九州産のものと染色体数や液果の形、大きさを異にするという見解があり、今後の研究が必要である。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。自生地の火災による被害。園芸用の採集。
- 保 全 対 策 : 自生地の保全。

- 文 献 : 天野鉄夫, 1981. 栗国島植物目録. 栗国村教育委員会, 39pp.
初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 759, 906.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (栗国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

- 執 筆 者 名 : 新城和治*・新里孝和*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

-
- 和 名 : オキナワテンナンショウ

- 分 類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)
- 学 名 : *Arisaema heterocephalum* Koidz. subsp. *okinawense* Ohashi et J. Murata
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 高さ約 70 cm に達する夏緑性の多年草。小葉は花をつけた個体で 11~19 枚あって鳥足状につき、小葉の葉身は披針形から楕円形で、長さ 10~20 cm、幅 2~4.5 cm である。雌雄異株。花序は雄株では花柄が長いので葉より高くつき、雌株では花柄が 1~3 cm と短いので、葉より低くつく。仏炎苞の舷部は筒部よりも長いほぼ同長で、内面は濃紫色を呈している。基本亜種のアマミテンナンショウは奄美大島と徳之島に分布し、オキナワテンナンショウより全体に小形で、小葉の数が多く、仏炎苞の舷部は内面が緑白色で、筒部よりやや短いほぼ同長である。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 古生層石灰岩地の林床に生える。
- 生育状況 : 確認されている自生地は 3 ヶ所のごく狭い地域に限られ、個体数は極めて少ない。
- 学術的価値 : 沖縄島の固有亜種である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。
- 備 考 : 従来、アマミテンナンショウとして扱われてきたが、1980 年になってその亜種として区別された (Ohashi & Murata, 1980)。特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Endangered (EN)。
- 文 献 : Ohashi, H. & J. Murata, 1980. Taxonomy of the Japanese *Arisaema* (Araceae). J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. III, 12: 281-336.
- 執筆者名 : 新城和治*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

- 和 名 : **オオハンゲ**
- 分 類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)
- 学 名 : *Pinellia tripartita* (Blume) Schott
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 夏緑性の多年草。地下に径 3 cm 程度の球茎があり、1~2 枚の葉をつける。葉身は 3 深裂~3 全裂、裂片は広卵形~狭卵形、長さ 8~20 cm、幅 2.5~12 cm、葉柄は長さ 30 cm になる。花茎は高さ 20~50 cm、仏炎苞は長さ 5~11 cm、肉穂花序の下部に雌花が、上部に雄花があり、中軸の先端は長く伸び、糸状となり、長さ 15~25 cm。
- 分布域(県外) : 本州(東海以西)、四国、九州、喜界島、奄美大島、徳之島、沖永良部島。
- 県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、久米島、宮古島、伊良部島。
- 生育環境 : 海岸や山地の岩隙に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では 2005 年に大宜味村の 1 ヶ所で少数個体が確認されている。伊平屋島と伊良部島では各 1 ヶ所で少数個体の存在が記録されている。宮古島では、2 ヶ所で新たに確認された。久米島では、2017 年に 1 ヶ所で少数個体が確認された。
- 学術的価値 : 分布域の南限である。沖縄県では隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子, 2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物。宮古島市総合博物館紀要, (29): 121-128.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : ユズノハカズラ

分類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)

学名 : *Pothos chinensis* (Rafin.) Merr.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑のつる性多年草。茎は疎らに分岐し、葉を2列に互生する。葉は概形はミカン属の葉に似ており、卵状披針形～長楕円形、長さ5～10 cm、葉柄は長さ1～3 cm、幅2～7 mm、扁平。肉穂花序は腋生し、楕円形、長さ8 mm、基部に数枚の包葉がある。液果は広楕円形で、長さ9 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国南部。

県内の分布 : 北大東島、南大東島。

生育環境 : 自然林および二次林の樹幹や岩上に這い上がる。

生育状況 : 北大東島と南大東島の各々に2ヶ所の自生地が知られる。北大東島の1ヶ所は国の天然記念物に指定されているが、個体数は極めて少ない。他の1ヶ所は開発により消失する恐れがある。南大東島の1ヶ所は採取により絶滅し、他の1ヶ所でも今回の調査では生育が確認できなかった。

学術的価値 : 大東諸島が日本では唯一の産地で、分布域の北限である。著しい隔離分布を示し植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 国内希少野生動物植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動物植物 (2016年)。

文献 : 初島住彦, 1973. 大東島の植物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 9-42.

西浜良修, 2004. 隆起環礁の島—南大東島の植物—. 南大東村教育委員会, 77pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・城間盛男(追補)

和名 : サキシマハブカズラ

分類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)

学名 : *Rhaphidophora kortharthii* Scott

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑のつる性草本。茎は無毛で、葉を互生する。葉は革質、上面に光沢があり、長さ50 cm、幅20 cm、葉柄は長さ30 cmになり、羽状に深裂し、裂片は菱形、葉身の長さが数 cm以下の幼葉は、成葉と形態が著しく異なり、円形、鈍頭、心脚、ほぼ無柄で、葉身は基物に付着するように接する。

分布域(県外) : 中国南部(海南島)、フィリピン、マレーシア、ジャワ、ボルネオ。

県内の分布 : 西表島、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林に生え、陰湿な岩上や樹上に這い上がる。

生育状況 : 自生地は西表島では5ヶ所知られるが、ごく狭い範囲に少数個体を産するだけである。石垣島では1ヶ所でごく少数個体が確認されている。自生地の一部は、エコツアーの散策路になっており、利用客による踏みつけが危惧される。

学術的価値 : マレーシア系の種で、分布域の北限であり、著しい隔離分布を示し植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。踏みつけ。
 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 横田昌嗣・島袋敬一, 1986. 琉球列島植物分布資料 2. 沖縄生物学会誌, (24) : 71-72.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ヒメハブカズラ

分類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)

学名 : *Rhaphidophora liukuensis* Hatusima

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 岩や樹幹に付着して生える常緑のつる植物。葉身は長楕円形～披針形、長さ 17～30 cm、幅 5～11 cm。仏炎包は多肉質で長楕円形、淡黄白色。肉穂花序は円筒状で、長さ 8～9 cm、径約 1 cm。

分布域(県外) : 台湾(蘭嶼)、フィリピン。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の溪谷やマングローブ林内に生える。

生育状況 : 自生地は石垣島に 1ヶ所、西表島に 1ヶ所知られるだけで、自生地は狭い範囲に限られており、個体数は少ない。西表島では開花・結実が見られるが、石垣島では観察されていない。

学術的価値 : 分布域の北限で、基準産地である。マレーシア要素の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 自生地と個体数が限られている。森林伐採。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 初島住彦, 1962. 琉球列島産天南星科の一新種. 植物分類・地理, 20: 56-57.

執筆者名 : 新里孝和*・池原直樹*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメツルアダン

分類 : タコノキ科 (APG 科名: タコノキ科)

学名 : *Freycinetia williamsii* Merr.

方言名 : ガシヤンダヌ

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 長さ約 10 m に達する常緑のつる性低木。小枝は径約 5～10 mm。葉は長さ 10～20 cm、幅 8～12 mm。花は白色、集合果は楕円形、長さ 2.5～3.5 cm。

分布域(県外) : 台湾(蘭嶼)、フィリピン。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 低地の森林の樹木や岩上に着生し、下垂する。

生育状況 : 4 河川の流域に産するが、自生地は狭い範囲に限られ、個体数は少ない。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 森林伐採。園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

備 考 : 竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : ヒメミクリ

分 類 : ミクリ科 (APG 科名: ガマ科)

学 名 : *Sparganium stenophyllum* Maxim. ex Meensch.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年生の抽水～湿生植物。茎は高さ 50～70 cm、根茎は短く、匍匐枝を出す。葉は単一またはまれに分枝し、2～数葉をつける。葉は線形、鈍頭、背面に稜があり、茎より長く、幅 2～5 mm。花序は単一または分枝し、花序は筒状花序で、雌雄の区別があり、雄花序は数個が花茎の上部につき、雌花序は 1～4 個が花茎の下部につき、包葉がある。果序は径 1～1.5 cm、果実は倒卵状梨形、長さ 3.5～5 mm。

分布域 (県外) : ウスリー、中国東北部、北海道、本州、四国、九州、インド、オーストラリア、ニュージーランド。

県 内 の 分 布 : 沖縄島中部。

生 育 環 境 : 日当たりのよい池の縁の水中に生える。

生 育 状 況 : 戦前に 1 度沖縄市で採集された記録があるが、現在は米軍基地内のため確認ができない。基地内の開発により絶滅した可能性が高い。

学 術 的 価 値 : 琉球列島で唯一の産地である。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。池や湿地の埋立。

備 考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Sparganium subglobosum* として評価。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和 名 : シラスゲ

分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学 名 : *Carex alopecuroides* D. Don

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。葉を密に束生し、細長い匍枝をだす。稈は長さ 50～70 cm、中央部に 1 葉をつける。葉は淡緑色、下面は粉白色を帯び、幅 5～10 mm。小穂は 4～6 個束生し、頂小穂は雄性、線状円筒形、長さ 3～6 cm、他は雌性、円筒形、長さ 3～7 cm。雌花の鱗片は卵状長楕円形、柱頭は 3 個、果胞は卵状長楕円形、長さ 3 mm、先は短いくちばし状となる。瘦果は卵状三角形。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、台湾、朝鮮、中国。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島。

生 育 環 境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。奄美大島ではやや高地に生える。

生 育 状 況 : 沖縄島北部の 1 ヶ所に生育することが 2014 年に確認された。自生地は林道沿いに限られており、拡幅工事が行われると消失する恐れがある。伊平屋島と石垣島は、現状不明。

減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : アリサントマツリスゲ

分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学 名 : *Carex arisanensis* Hayata

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は束生し、高さ 30~50 cm。葉は幅 4~6 mm。穂状花序は 3~4 個、上部のものは接近し、下部のものは 1~2 個著しく離生し、雄花は頂生し、長さ 4~7 mm、その他は雌花で、卵状球形、長さ 6~10 mm、苞は長い鞘を持ち短葉があり、果胞は長さ 5.5~6.5 mm、先は長いくちばし状となる。瘦果は広卵形、長さ 3 mm。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の林内に生える。

生育状況 : 自生地は沖縄島北部に 2 ヶ所、石垣島に 2 ヶ所、西表島に 1 ヶ所知られているだけで、いずれもごく狭い範囲に生え、個体数は少ない。沖縄島の 1 ヶ所は、林道のわだちの中にあり、道路が改修されると消失する。西表島の自生地は、2005 年に新たに発見された。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 森林伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

備 考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和 名 : リュウキュウヒエスゲ

分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学 名 : *Carex collifera* Ohwi

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は束生し、高さ 15~20 cm。葉は淡緑色、幅 2~3 mm、基部の葉鞘は褐色。小穂は 3~5 個で、接近または離れて生じ、頂生の雄花は長さ 3~7 cm、線形、他は雌花で長楕円形~卵形、果胞は苞の 2 倍長、先は長いくちばし状で 2 裂する。瘦果は卵状三角形、長さ 4 mm。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 高地の常緑樹樹林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では 3 ヶ所の狭い範囲にごくわずかに産するだけである。

学術的価値 : 沖縄県の固有種である。

減少の要因 : 森林伐採。もともと自生地と自生地が限られている。

備 考 : 石垣島にも産するとされてきた(初島, 1975; 初島・天野, 1994) が、石垣島のものは琉球大学理学部の標本室 (RYU) ではタツタカスゲ *C. tatsutakensis* Hayata と同定する見解が記された標本が所蔵されていた。ごく最近石垣島のものはタイホクスゲ *C. taihokuensis* Hayata であるとの見解(堀内, 2005a, b) が発表された。局所的には豊産するという。石垣島のものを区別すると、リュウキュウヒエスゲは沖縄島固有ということになる。沖縄島産の個体を用いて染色体数が算定されている (Ohkawa & Yokota, 1998)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。IUCN カテゴリー: Critically

Endangered (CR)。

- 文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 721-722.
初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 261.
堀内 洋, 2005a. 日本及び中国大陸新産のカヤツリグサ科植物タイホクスゲ. 植物研究雑誌, 80(3): 187-189.
堀内 洋, 2005b. 石垣島のリュウキュウヒエスゲ (カヤツリグサ科) の記録について. 植物研究雑誌, 80(3): 190.
Ohkawa, T. & M. Yokota, 1998. Chromosome numbers and their variation patterns of *Carex* in the Ryukyu Islands. *Cytologia*, 63: 447-457.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : **タイワンカンスゲ**
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex longistipes* Hayata
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、束生し、匍枝を出さない。花茎は長さ 20~30 cm、3 稜形。葉は扁平で、長さ 20~30 cm、幅 2~3 mm。小穂は 4~5 個が接してつき、雄花序は頂生し、線形、長さ 2~4 cm、雌花序は側生し、円筒形、長さ 1~3 cm、多数の花をやや疎らにつけ、最下部の包は端部に刺毛がある。雌花の鱗片は線状長楕円形、果胞は披針形、長さ 4~6 mm。瘦果は長楕円形、長さ 1.5 cm。
分布域(県外) : 台湾。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 山地の滝の崖面や溪流沿いの岩上に生える。
生育状況 : 4 河川の流域に産することが知られるが、自生地は狭い範囲に限られ、個体数はごく少ない。
学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : これまで西表島産のチャイロスゲ *Carex fulvo-rubescens* Hayata と呼ばれていたものは、タイワンカンスゲ *C. longistipes* Hayata であることが指摘されている (勝山, 2005)。自生地の大半は、国立公園の特別保護地区に指定されているので、開発の恐れは少ない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 勝山輝男, 2005. 日本のスゲ. 文一総合出版, 東京, 375pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ハウザンスゲ**
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex hoozanensis* Hayata
カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、束生し、匍枝はない。稈は長さ 5~20 cm、3 稜形。葉は稈よりずっと長く、幅 5~15 mm、オキナワスゲ *C. breviscapa* C. B. Clarke にやや似る。小穂は 2~3 個、長さ

1.5~3 cm、頂生する1個は雌性、線形、他は雄性、長楕円形。雌花の鱗片は卵形~長楕円形、長さ3 mm、柱頭は3個、果胞は倒卵形~楕円形、長さ7~8 mm、くちばしは短い。瘦果は倒卵形、長さ4~5 mm、鈍3稜形。

- 分布域（県外）：台湾。
 県内の分布：石垣島。
 生育環境：山地の常緑樹林の林床に生える。
 生育状況：自生地は1ヶ所で、ごく狭い範囲に限られ、個体数は少ない。
 学術的価値：国内で唯一の自生地であり、琉球列島の植物相を特徴づける植物地理学上の貴重種である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られる。
 保全対策：自生地は水源涵養保安林として保護されており、現在のところ開発の計画はないが、登山道沿いに生育しているので、登山道の改修や踏みつけの影響を受ける可能性がある。

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名：リュウキュウタチスゲ
 分類：カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名： *Carex maculata* Boott var. *tetsuoi* (Ohwi) T. Koyama
 カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：常緑の多年草。茎は束生し、高さ20~60 cm。葉はやや軟質、幅3~5 mm。小穂は3~4個、頂生のものは雄性、長さ1~3 cm、その他は雌性、最下の苞は1~2個、果胞は著しく抽出し、扁三角形、無毛、長さ2.5 mm、広楕円形。瘦果は倒卵形、長さ1.5 mm。
 県内の分布：沖縄島北部。
 生育環境：山地林内に生える。
 生育状況：自生地は1ヶ所が知られるだけで、個体数は少ない。
 学術的価値：沖縄島の固有変種。
 減少の要因：森林伐採。自生地が限られている。
 備考：基本変種のタチスゲは沖縄島に産し、本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国、インドに広く分布する。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

執筆者名：横田昌嗣*・仲田栄二*

- 和名：アオゴウソ
 分類：カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名： *Carex phacota* Spreng.
 カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：密に束生する常緑の多年草。高さ20~60 cm。葉は全体粉緑色で幅2~6 mm。小穂は3~5個、頂生の小穂は雄性、側小穂は雌性、円柱形で長さ2~6 cm、雌鱗片はさび色。果胞は楕円形で長さ3 mm 前後、細かい突起を密生し、灰褐色~暗褐色。
 分布域（県外）：北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、中之島、宝島、奄美大島、朝鮮、台湾、中国、マレーシア、インド。

- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 常緑広葉樹林の谷間のやや暗い湿地に生える。
- 生育状況 : 名護市で山地谷部の湿地に株をつくり生育しているのが、1996年に確認された。その後、大宜味村と東村の各1ヶ所で確認され、名護市の別の1ヶ所でも確認されている。2004年には恩納村の1ヶ所でも確認されているが、恩納村の自生地はゴルフ場に隣接し、開発の恐れがある。沖縄市でも自生地が発見されたが、自生地はゴルフ場として開発され、アオゴウソが生える湿地そのものは残されたが、地形の改変による湿地環境の変化、ツルヒヨドリやアメリカハマグルマなどの外来植物の侵入、農薬・肥料の流入などで、元の個体群の数分の1にまで急減している。
- 学術的価値 : 沖縄県の唯一の産地である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。外来種との競合。農薬の影響。
- 備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文献 : 横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : コウボウシバ
- 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
- 学名 : *Carex pumila* Thunb.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長い匍枝を出し、茎は高さ 10~20 cm、基部の葉鞘は暗紫褐色で少し糸網がある。葉は硬く、幅 2~4 mm。小穂は 4~6 個つき、上方の (1~) 2~3 個は雄性で線形、長さ 2~3 cm、汚血赤色。下方の 2~3 個は雌性で、長楕円形~円柱形、長さ 1.5~2 cm、ほぼ直立し、雌鱗片は一部血赤色を帯びる。果胞は卵状円錐形で 3 稜があり、長さ 6~8 mm で木質。
- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、屋久島、平島、宝島、奄美大島、東アジア、オーストラリア、ニュージーランド、チリ。
- 県内の分布 : 沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。
- 生育環境 : 海岸砂地に生える。
- 生育状況 : 自生地は限られており、個体数は少ない。
- 減少の要因 : 海岸の開発。砂の採取。もともと自生地が限られている。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*

-
- 和名 : トックリスゲ
- 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
- 学名 : *Carex rhynchachaenium* C.B. Clarke ex Merr.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。葉は束生し、長さ 10~25 cm、幅 1.5~3.5 mm。花茎は束生する葉の中心からでて、長さ 4~10 cm、オキナワスゲのように葉の間に埋もれてつき、総状花序は 3~4 個の小穂をつける。頂小穂は雄性、線形、長さ 1~2 cm、側小穂は各節に単生し、雌性または雌雄性、細円柱形、長さ 1~2 cm、苞は短い鞘があり、下方のものは葉状となる。果胞は細いトックリ形で、長さ 5.5~6.5 mm、

幅 1.5mm、先は長さ 0.7~1mm の円柱状の嘴となる。瘦果は 3 稜のある披針状菱形、長さ 4~5mm。

- 分布域（県外）：台湾、フィリピン、ベトナム。
 県内の分布：沖縄島北部。
 生育環境：山地の常緑広葉樹林の林床に生える。
 生育状況：自生地は 1ヶ所のみ知られ、個体数は 30 個体程度（勝山，2006）という。
 学術的価値：分布域の北限で、国内で唯一の自生地である。沖縄島からベトナムにかけて隔離分布する種で、植物地理学上貴重である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。

文献：勝山輝男，2006. 沖縄本島でトックリスゲ *Carex rhynchaenium* を見出す. 植物地理・分類研究, 54(2): 154-156.

執筆者名：横田昌嗣

- 和名：オキナワヒメナキリ
 分類：カヤツリグサ科（APG 科名：カヤツリグサ科）
 学名：*Carex sacrosancta* Honda var. *tamakii* (T. Koyama) T. Koyama
 カテゴリー：準絶滅危惧（NT） 環境省カテゴリー：準絶滅危惧（NT）

形態の特徴：常緑の多年草。根茎は短く匍匐し、多数の葉を束生し、茎は細く、高さ 40~60 cm、上方はざらつき、下部の包 1~2 個は短い葉状。葉は線形、硬質、長さ 35~50 cm、幅 2 mm、基部の鞘は濃褐色の繊維状となる。小穂は単一で、長楕円状円柱形、長さ 10~20 mm、径 2 mm で、3~4 個が疎らにつく。雌性鱗片は楕円形~卵形、長さ 20~22 mm、果胞は楕円状披針形、長さ 2.8~3.2 mm。瘦果は卵形、長さ 1.5 mm。

- 県内の分布：沖縄島北~中部、石垣島、西表島。
 生育環境：山地の自然林の溪流沿いの岩上に生える。
 生育状況：読谷村以北の地域（本部半島を除く）の限られた河川の中流域付近に産する。もともとはやや普通の種であるが、多くの河川に建設されたダムにより自生地が消失している。石垣島では 2 河川、西表島では 2 河川の流域に産するが、個体数は少ない。
 学術的価値：沖縄島の固有変種である。
 減少の要因：もともと自生地が限られている。ダム建設による自生地の水没。自然林の伐採。
 備考：石垣島と西表島の個体については、分類学的な検討が必要である。基本変種のジングウスゲは本州、四国、九州、台湾、中国に分布する。

文献：沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，3-12, 103-113.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997. 平成 7 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-7.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ（陸域・海域）. 沖縄建設弘済会，3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 平成 8 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.
玉城松栄, 1964. 琉球産カヤツリグサ科の検索 [I]. 沖縄生物学会誌, 1 (1) : 14-21.
横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : サコスゲ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex sakonis* T. Koyama
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 束生して大きな株をつくる多年草。葉は深緑色で硬く、長さ 70~90 cm、幅 3.5~7 mm、基部の鞘部は帯紫褐色で繊維に分解する。花茎は高さ約 70 cm、三角柱形、2~5 個が小穂をつける。小穂は多く雌雄で線状円錐形、長さ 4~8 cm、雌花部は雄花部より短いかまたは同長、雄花部は線形。果胞は倒披針状長楕円形、長さ 5.5~6.3 mm。

分布域(県外) : 宝島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、久米島、来間島。

生育環境 : 海岸近くの岩場や低木林内に生える。

生育状況 : 沖縄島北部では3ヶ所に産するが、道路工事の影響をうけ、個体数が減少しているように思われる。久米島では2005年に1ヶ所で確認されている。伊平屋島では2ヶ所で確認されているが、1ヶ所はダム建設でほぼ消失した。来間島では全く確認することができず、現状は不明である。

学術的価値 : 琉球列島の固有種で、分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

文献 : 玉城松栄, 1958. 琉球新産スゲ属三種に就いて. 琉球大学生物クラブ誌, 2 (1) : 2-6.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : シオクゲ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex scabrifolia* Steud.
カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は匍枝を出し、茎は束生し、高さ 30~50 cm、3稜形、基部の葉鞘は暗赤紫色、網状。葉は極めて長く、幅 1.5~2.5 mm、やや溝がある。小穂は3~4個、上方の2~4個は雄性、線形、長さ2~4 cm、帯赤色、下方の1~2個は雌性、長楕円形~卵形、長さ1~2 cm。包は葉状、茎より長く、雌穂の鱗片は卵状三角形。果胞は長楕円形、長さ7~8 mm、短いくちばしがある。

分布域(県外) : ウスリー、北海道、本州、四国、九州、奄美大島、台湾、中国、朝鮮。

県内の分布 : 伊是名島、久米島、沖縄島、西表島、与那国島。

- 生育環境 : 水田、海岸の湿地または海水中に生える。
 生育状況 : 伊是名島と西表島ではそれぞれ1ヶ所の自生地が知られているが、まれである。沖縄島北部では2005年に1ヶ所で少数個体が確認されている。与那国島では2004年に1ヶ所で確認されている。他の島の現状は不明。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の埋立。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・北原 孝*

- 和名 : **チャガヤツリ**
 分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Cyperus amuricus* Maxim.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 一年草。稈は束生し、長さ20~60 cm、3角柱形。葉は稈より短く、扁平、幅2~5 mm。複生する花序は長さ5~10 cm、苞は3~4個、枝は5~10個、穂状花序は卵形~長楕円形、長さ2~4 cm、幅10~15 mm、多数の小穂を密につけ、小穂は線形、長さ7~12 mm、10~16花をつけ、赤褐色、鱗片は広倒卵形、長さ1.5 mm。瘦果は長さ1 mm、倒卵状3稜形。
 分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、台湾、ウスリー、アムール、中国東北部、朝鮮。
 県内の分布 : 沖縄島北部。
 生育環境 : 水田や湿地に生える。
 生育状況 : 1938年に上地文一により沖縄島東村有銘で採集された標本が琉球大学理学部の標本室(RYU)に保存されており、Walker(1976)により引用されているが、その後発見されていない。
 減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 260-261.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : **オオホウキガヤツリ**
 分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Cyperus digitatus* Roxb.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 夏緑性の多年草。根茎は短く、球茎状。稈は歪んだ3角柱形、長さ60~150 cm、下部に葉がある。葉は扁平、幅5~15 mm、下面は有稜。複散形花序は長さ15~22 cm、小花序は4~9個、苞は2~3枚、枝は約7個、小穂は1~5個、密につき、線形、長さ6~8 mm、幅1~1.5 mm、鱗片は長楕円状楕円形、雄蕊は3個、柱頭は3個。瘦果は長楕円状楕円形。
 分布域(県外) : 台湾、インド、世界の熱帯と亜熱帯。
 県内の分布 : 沖縄島北部、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境 : 低地の湿地や水田に生える。
 生育状況 : 沖縄島は1ヶ所、石垣島は2ヶ所、西表島は1ヶ所の自生地が知られているが、湿地の開発や水田の減少により急減している。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。
備 考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和 名 : **オニクグ**
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Cyperus javanicus* Houtt.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、木質。稈は高さ 50~100 cm、幅 3~5 mm、鈍 3 角柱形。葉は革質、線形、幅 8~12 mm、多少灰緑色を帯びる。複散形花序は幅 7~15 cm、苞は 3~5 個、枝は長さ 7 cm、3~5 個の穂状花序を密生する。小穂は長楕円状卵形~広披針形、やや扁平、長さ 6~8 mm、幅 2~2.5 mm、鱗片は広卵形、長さ 2.5~3 mm、柱頭は 3 個。瘦果は長さ 1.5 mm、倒卵形~広倒卵形、3 稜形。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア、ミクロネシア、ハワイ、アフリカ。
県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、座間味島、宮古島、石垣島、西表島、鳩間島、由布島、平西島、黒島、嘉弥真島、小浜島、与那国島、尖閣諸島 (魚釣島、久場島)。

生 育 環 境 : 海岸近くの湿地に生える。
生 育 状 況 : 沖縄島では 2005 年に 1 ヶ所で新たに確認された。座間味島では 2 ヶ所で確認されているがまれである。宮古島では 2 ヶ所、石垣島では 3 ヶ所、与那国島では 3 ヶ所で採集された記録がある。今回の調査で小浜島では 1 ヶ所、西表島では数ヶ所で確認された。鳩間島では、2017 年に 1 ヶ所で数個体が確認された。自生地は集落や海岸近くにあるため、護岸工事や埋立などで自生地が急速に失われている。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
減 少 の 要 因 : 湿地の埋立。護岸工事。もともと自生地と個体数が限られている。
備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 知念美香, 1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : **ヒメホウキガヤツリ**
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Cyperus nutans* Vahl var. *subprolixus* (Kuk.) T. Koyama
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 夏緑性の多年草。根茎は短く、球茎状。稈は高さ 50~100 cm、3 角柱形。葉は稈より短く、幅 5~10 mm。複散形花序は長さ 10~20 cm、苞は 2~4 枚、花序より長く、枝は 5~10 個、長さ 15 cm になり、小花序は円筒状、長さ 2~3 cm、幅 5~10 mm、小穂は幅 2~2.5 mm、扁平、10~16 花をやや疎につけ、鱗片は長楕円状卵形、長さ 2 mm、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は長さ 2 mm、狭長楕円形、やや扁平状 3 稜形。

- 分布域（県外）：台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア、オーストラリア、アフリカ。
- 県内の分布：阿嘉島、宮古島、石垣島、西表島、内離島、波照間島、与那国島。
- 生育環境：低地の湿地や水田に生える。
- 生育状況：阿嘉島では1ヶ所、宮古島では2ヶ所、石垣島では数ヶ所、西表島では数ヶ所、内離島と波照間島では各1ヶ所の自生地が知られているが、オオホウキガヤツリ *C. digitatus* Roxb. と同様に湿地の開発や水田の減少により急減している。
- 学術的価値：分布域の北限である。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。
- 備考：石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。
- 文献：宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物. “沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告書, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄自然研究会（編）, 沖縄県, 143-168.
- 執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*

- 和名：コウシュンスゲ
- 分類：カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
- 学名：*Cyperus pedunculatus* (R. Br.) Kern
- カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴：小形の常緑の多年草。根茎は長く匍匐し、葉鞘は褐色、茎は長さ3~10 cm、三角形、6~10 cmの間隔で生ずる。葉はやや束生し、長さ7~12 cm、幅4~5 mm。花序は頭状花序で、包は3~5個、長さ2~7 cm、幅2~3 mm、穂状花序は卵円形~卵状球形、密な多数の小穂からなり、長さ8~15 mm、小穂は卵形、長さ4~5 mm、鱗片は4個、広卵形。瘦果は卵状披針形。
- 分布域（県外）：台湾、熱帯アジア、オーストラリア北部。
- 県内の分布：石垣島。
- 生育環境：海岸の砂地の草原に生える。
- 生育状況：距離的に接近した3ヶ所の自生地が知られるだけで、自生地はごく狭い範囲に限られる。今回の調査では全く確認することができず、現状不明。既に絶滅した可能性がある。
- 学術的価値：分布域の北限で、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。砂の採集。
- 備考：石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。
- 執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名：スナハマスゲ
- 分類：カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
- 学名：*Cyperus stolonifer* Retz.
- カテゴリー：絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし
- 形態の特徴：常緑の多年草。根茎は長く横走し先端に塊根がある。稈は高さ10~30 cm。葉は稈より長いまたは同長、幅2~3 mm、鞘は褐色。
- 分布域（県外）：台湾、中国南部、熱帯アジア、オーストラリア、アフリカ。

- 県内の分布 : 宮古島、石垣島、西表島、外離島、内離島、小浜島。
生育環境 : 海岸の砂浜に生える。
生育状況 : 西表島ではやや多く、いまずぐ絶滅する恐れはないが、宮古島と石垣島では自生地は少なく、開発により消失する恐れがある。
学術的価値 : 分布域の北限である。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
減少の要因 : 海岸の開発。海岸の砂の採取。自生地が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

-
- 和名 : カガシラ (ヒメシンジュガヤ)
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Diplacrum caricinum* R. Br.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 小形の一年草。茎は単一または基部で分枝し、長さ 5~20 cm、3 稜形、多数の葉を互生する。葉は線形、扁平、長さ 15~25 mm、幅 2~3 mm、鞘は長さ 3~10 mm。花序は数~十数個が腋生し、頭状、径 5 mm 以下、淡緑色、雌小穂は長さ 3~4 mm、短梗があり、鱗片は長楕円形、5~8 肋がある。瘦果は球形、径 1 mm、粗い網状模様がある。
分布域 (県外) : 本州、四国、九州、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。
県内の分布 : 沖縄島、屋我地島、石垣島、西表島。
生育環境 : 低地の湿地や湿った裸地に生える。
生育状況 : 沖縄島 (名護市) と屋我地島では各 1 ヶ所で 50 年以上前に採集されているが、現状は不明。2005 年に恩納村の 2 ヶ所で新たに発見された。石垣島と西表島の現状は不明。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。湿地の埋立。自生地の開発。農薬の使用。帰化種との競合。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : オオハリイ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Eleocharis congesta* D. Don var. *congesta*
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 一年草または多年草。根茎は発達せず、匍枝も欠く。稈は多数が束生し、円く糸状、高さ 8~25 cm、幅 0.8 mm、普通は少し外側に曲る。小穂は頂生し、密に多花をつけ、卵状長楕円形、長さ 6~8 mm、幅 2.5~2.8 mm、鱗片は卵形、長さ 2~2.5 mm、花柱基部は瘦果の幅の約 1.5 倍。瘦果は倒卵形、3 稜形、長さ 1.2 mm、刺針は 6 個、瘦果の 2 倍の長さになる。
分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、与論島、中国、インドシナ、ヒマラヤ。
県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、与那国島。
生育環境 : 湿地や水田に生える。
生育状況 : 久米島、石垣島、与那国島ではそれぞれ 1 ヶ所で 1970 年代に採集された標本があり、沖縄島では数ヶ所で採集されているが、自生地は湿地の開発で減少している。

減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Eleocharis congesta* として評価。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ハリイ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Eleocharis congesta* D. Don var. *japonica* (Miq.) T. Koyama
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。オオハリイに似るが、稈は細く、幅 0.2~0.4 mm、真直にのび、高さ 6~20 cm になる。小穂は卵形~狭卵形、長さ 4~6 mm、幅 1.5~2 mm、鱗片は長さ 1~1.5 mm。瘦果は長さ 1 mm。
 分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、宝島、奄美大島、徳之島、台湾、朝鮮、中国、インドシナ、インド、マレーシア。
 県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 基本変種のオオハリイ var. *congesta* や変種ヤリハリイ var. *subvivipara* (Bock.) T. Koyama と同様に、自生地は湿地の開発で減少している。
 生育状況 : 沖縄島では数ヶ所で採集された記録があるが、その自生地のほとんどは開発が進んでおり、消失している可能性が高い。
 減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。
 備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Eleocharis congesta* として評価。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : ミスミイ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Eleocharis fistulosa* (Poir.) Link
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、長い匍枝をだす。稈は束生し、鋭3稜形、高さ 40~80 cm、幅 2.5~4 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、円柱形、長さ 2~3 cm、幅 3~4 mm、鱗片は広卵形、長さ 4~5 mm、柱頭は3個。瘦果は広倒卵形、長さ 1.5~2 mm、刺針は6個、柱基よりやや長い。
 分布域 (県外) : 本州 (愛知県以西)、四国、九州、徳之島、沖永良部島、与論島、台湾、中国南部、インド、マレーシア、オーストラリア、熱帯アメリカ。
 県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、宮古島、池間島、石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境 : 湿地や水田に生える。
 生育状況 : 伊是名島では1ヶ所、沖縄島では4ヶ所、石垣島では2ヶ所、西表島では1ヶ所の自生地が知られているが、自生地は開発が進んでいる。他の島の現状は不明。
 減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。除草剤の使用。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : タマハリイ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Eleocharis geniculata* (L.) Romer et Schult.

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草または短命な多年草。根茎は発達せず、匍枝も欠く。稈は多数が束生し、円く糸状、高さ 7～40 cm、幅 0.2～0.4 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、卵状球形～卵形、長さ 3～7 mm、幅 3～4 mm、鱗片は広楕円形、長さ 2 mm、雄蕊は 2 個、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 1 mm、刺針は 6～7 個、瘦果よりやや長く、表面に小刺がある。

分布域 (県外) : 台湾、熱帯。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、屋我地島、慶良間諸島 (座間味島、外地島)、久米島、南大東島、宮古島、石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 海岸に近い湿地や水田に生える。

生育状況 : 沖縄島では北部から南部まで数ヶ所で記録されており、他の島嶼でもそれぞれ 1～2 ヶ所の自生地が知られている。湿地の開発、水田の埋立、除草剤の使用などで減少している。

減少の要因 : 湿地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : トクサイ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Eleocharis ochrostachys* Steud.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、長い匍枝をだす。稈は束生し、円柱形、高さ 50～80 cm、幅 2～3 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、円柱形、長さ 1～2.5 cm、幅 3～4 mm、鱗片は長楕円状円形、長さ 4～5 mm、雄蕊は 2 個、柱頭は 3 個。瘦果は広倒卵形、長さ 1.5～2 mm、刺針は 6～7 個、瘦果より長く、表面に小刺がある。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、マダガスカル。

県内の分布 : 沖縄島北部、屋我地島、大東諸島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地や廃田に生える。

生育状況 : 沖縄島は 3 ヶ所、屋我地島は 1 ヶ所、石垣島は 2 ヶ所、西表島は 2 ヶ所の自生地が知られているが、自生地は開発が進んでいる。他の島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。除草剤の使用。外来種との競合。

備考 : 西表島の自生地の一つは、国指定の天然保護区域として保護されているが、外来種のアメリカハマグルマが侵入している。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : カヤツリマツバイ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Eleocharis retroflexa* (Poir.) Urban subsp. *chaetaria* (Romer et Schult.) T. Koyama
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は発達せず、匍枝も欠く。稈は多数が束生し、円く糸状、高さ 2.5~20 cm、幅 0.2~0.3 mm。小穂は頂生し、小形、長さ 3~5 mm、幅 1.5~2 mm、2~3 対の花をつけ、鱗片は卵形、長さ 2~2.5 mm、竜骨があり、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形、鈍 3 稜形、長さ 1.2 mm、刺針は 6 個、瘦果と同長、表面に小刺がある。

分布域(県外) : インドシナ、インド、ネパール、スリランカ、マレーシア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 山地の湿地に生える。

生育状況 : 石垣島の 1ヶ所で 1951 年(多和田眞淳採集、天野鉄夫 No. 6849) と 1958 年(新納義馬 No. 2060) の 2 回採集されており、その標本が琉球大学理学部の標本室(RYU)に所蔵されているが、近年は野外調査で見つかっておらず、現状は不明。既に絶滅した恐れがある。

学術的価値 : 分布域の北限であり、インド・マレーシア系の植物として植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : マシカクイ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Eleocharis tetraquetra* Nees
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、時に匍枝をだす。稈は多数が束生し、鋭 4 稜形、高さ 40~60 cm、幅 1~2 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、狭卵形~広披針形、長さ 8~17 mm、幅 3~5 mm、鱗片は長楕円形、鈍頭、長さ 3~4 mm、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形、扁 3 稜形、長さ 1.5~2 mm、刺針は 6 個、柱基とほぼ同長、逆向する小刺針がつく。

分布域(県外) : 本州(中国地方)、四国、九州、屋久島、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 名護市の 2ヶ所で 1937 年と 1951 年に採集された他は記録がなかったが、2005 年に恩納村の 1ヶ所で発見された。その自生地は道路建設で消失した。

学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。湿地の埋立。

備考 : 恩納村の自生地は道路工事で消失したが、隣接した環境に生えるマネキンシジューガヤやヒメホタルイとともに近隣の類似の環境に移植が試みられている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメヒラテンツキ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Fimbristylis autumnalis* (L.) Romer et Schult.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。根茎を欠く。稈は束生し、高さ 30~40 cm、軟らかく、扁平。葉は稈より短く、軟弱、幅 1.5 ~2.5 mm、鞘は 2 列に互生する。花序は 2~3 回分岐し、多数の小穂を疎らにつけ、長さ 3~7 cm、苞は 2~3 個、線形、小穂は披針形~線状披針形、長さ 3~6 mm、幅 1.5 mm、7~16 花をつけ、鱗片は狭卵形~卵状長楕円形、長さ 1.5~2 mm、雄蕊は 1~2 個、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形、長さ 0.7 mm。
分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、徳之島、中国、朝鮮、北アメリカ。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 湿地や水田の畦に生える。
生育状況 : 西表島の 4 ヶ所で採集された標本があり、その内の 1 ヶ所では 2005 年に生育が確認されている。自生地にはアメリカハマグルマが侵入しており、競合が危惧される。石垣島の現状は不明。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。湿地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。外来種との競合。
備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : オオアゼテンツキ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Fimbristylis bisumbellata* (Forssk.) Bubani
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、高さ 7~20 cm、幅 0.3~0.5 mm。葉は稈より短く、狭線形、長さ 3~11 cm、幅 0.5~1.5 mm。花序は 2~3 回分岐し、枝は 5~10 個、多数の小穂を疎らにつけ、苞は 2~3 個、線形、小穂は長楕円状卵形~狭長楕円形、長さ 3~5 mm、幅 1.5 mm、多数の花を密につけ、鱗片は広卵形、長さ 1.5~2 mm、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 0.8~1 mm。類似の環境に生えるヒデリコ *F. miliacea* (L.) Vahl subsp. *miliacea* に似るが、小穂が細長いので容易に識別できる。
分布域 (県外) : 台湾、インド、マレーシア、アフリカ。
県内の分布 : 伊是名島、沖縄島 (北部~南部)、宮古島。
生育環境 : 湿地や水田に生える。
生育状況 : 伊是名島では 1 ヶ所で、沖縄島では 6 ヶ所で採集されているが、沖縄島の自生地の多くは南部にあり、開発が進んでいることから減少が危惧される。宮古島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。湿地の開発。水田の減少。除草剤の使用。
備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

和名 : ツクシテンツキ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学 名 : *Fimbristylis dichotoma* (L.) Vahl subsp. *podocarpa* (Nees et Meyen) T. Koyama
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。基本亜種のテンツキに似て、根茎は発達せず、茎は密に束生し、高さ 25~60 cm。葉は扁平、茎と同長、幅 1~2 mm、有毛。小穂は卵形、長さ 8~15 mm、側小穂は長さ 2~7 cm の有毛の長梗があり、最下の包は線形、有毛、花序よりも長い。鱗片は長楕円形、長さ 4 mm。瘦果は倒卵状三角形。

分布域(県外) : 九州、インド、マレーシア、太平洋諸島。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 低地の日当たりのよい草地に生える。

生育状況 : 沖縄島では 3ヶ所、石垣島では 1ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。

備考 : IUCN カテゴリ: Least Concern (LC)*。*種 *Fimbristylis dichotoma* として評価。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 251.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*

和 名 : トモエバテンツキ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学 名 : *Fimbristylis fimbristylodes* (F. Muell.) Druce

カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 一年草。根茎を欠く。稈は束生し、高さ 7~12 cm、基部に葉をつける。葉は孤状に曲がり、開出し、長さ 2.5~4 cm、幅 1~2 mm。複生する花序は 3~10 個の小穂をつけ、長さ 1.5~4 cm、苞は 2~3 個、長さ 7~15 mm、小穂は披針形、扁平、長さ 5~10 mm、幅 1.5~2 mm、7~10 花をつけ、鱗片は卵形、長さ 3 mm、背面に小刺があり、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形~広倒卵形、長さ 0.6~0.8 mm、幅 0.5~0.8 mm。

分布域(県外) : 朝鮮、ミャンマー、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 近海の原野や牧場に生え、時にシオカゼテンツキと混生する。

生育状況 : 京都大学の植物標本庫 (KYO) に沖縄島と西表島で採集された標本が所蔵されている (Walker, 1976)。2017 年に石垣島の 3ヶ所で生育が確認された。沖縄島と西表島の現状は不明。

学術的価値 : 著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動物植物種 (2017 年)。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 253.

執筆者名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和 名 : ハナシテンツキ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Fimbristylis globulosa* (Retz.) Kunth
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、高さ 20~40 cm、扁 3 稜形。葉は葉鞘のみで葉身を欠き、葉鞘は 2~3 個、長さ 5 cm。花序は単一または分岐し、少数の小穂を疎らにつけ、苞は 2~3 個、小穂は球状楕円形~長楕円状卵形、長さ 4~8 mm、幅 3~4 mm、密に花をつけ、鱗片は長楕円形、長さ 2~2.5 mm、雄蕊は 2~3 個、柱頭は 2~3 個。瘦果は扁平、3 稜形、長さ 0.7 mm。

分布域(県外) : インドシナ、マレーシア、インド、スリランカ、ミクロネシア。

県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地や廃田に生える。

生育状況 : 石垣島では 3ヶ所に産するが、個体数は極めて少ない。西表島では数ヶ所に産するが、外来種のアメリハマグルマが侵入し、湿地の開発や水田の除草剤の使用で減少している。与那国島の現状は不明。

学術的価値 : インド・マレーシア系の植物で、八重山諸島の植物相を特徴づける貴重種である。本種はテンツキ属ではあるが、葉は退化しており、ハリイ属に似た特徴を示している。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。湿地の開発。除草剤の使用。外来種との競争。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

和名 : **チャイロテンツキ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Fimbristylis leptoclada* Benth. var. *takamineana* (Ohwi) T. Koyama

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎はなく、茎は密に束生し、高さ 20~30 cm、わずかに稜があり、下部にやや無葉の 1 個の鞘がある。葉は扁平、長さ 10~20 cm、幅 1.5 mm、無毛、葉鞘は帯褐色で短い。花序は複生し、5~10 個の小穂からなり、包は長さ 2~3 cm、小包は鱗片状、枝は 2~4 個、長さ 2 cm 以下、小花序は 2~3 個の小穂からなり、小穂は長楕円形、長さ 4~6 mm、鱗片は楕円形、長さ 2 mm。瘦果は広倒卵形、長さ 0.7 mm。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 低地の湿地に生える。

生育状況 : 1938 年に 1 度だけ発見されているが、その後確認されていない。絶滅した可能性が極めて高い。

学術的価値 : 石垣島の固有変種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。湿地や水田の開発。

備考 : 基本変種はフィリピン、マレー半島、マレーシアに分布する。

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : **タイワンヒデリコ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Fimbristylis miliacea* (L.) Vahl subsp. *koidzumiana* (Ohwi) T. Koyama

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 一年草または多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、扁4稜形、高さ10~60 cm。葉は2列に互生し、幅1.5~2.5 mm。花序は数回分岐し、多数の小穂をつけ、苞は2~4個、小穂は卵円形、長さ3~5 mm、鱗片は卵形、長さ1 mm、雄蕊は1~2個、柱頭は3個。瘦果は倒卵形、長さ0.6 mm。基本亜種のヒデリコと比べ、小穂は大きく、長さ3~5 mmに達することで区別される。
- 分布域(県外)** : 本州、口之島、徳之島、沖永良部島、台湾、インドシナ、グアム。
- 県内の分布** : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境** : 水田に生える。
- 生育状況** : 沖縄島では北部の1ヶ所で記録されているだけで、まれである。石垣島と西表島では数ヶ所に産するが、水田の転用と除草剤の使用により、自生地数は減少している。
- 減少の要因** : 水田の減少。除草剤の使用。外来種との競合。
- 備考** : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

- 和名** : **ウナズキテンツキ**
- 分類** : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
- 学名** : *Fimbristylis nutans* (Retz.) Vahl
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、高さ15~40 cm、幅0.5~1.5 mm、3~4稜形。葉は葉身を欠き、鱗片状または筒状、長さ3~5 cm。花序は1個の小穂からなり、苞は1個、卵形、長さ2~3 mm、小穂は卵形~長楕円状卵形、點頭して直角に折れ曲がり、長さ6~10 mm、幅2.5~3.5 mm、密に多花をつけ、鱗片は広卵形、長さ1.2 mm、雄蕊は1~2個、柱頭は3個。瘦果は倒卵形、長さ1.2 mm。
- 分布域(県外)** : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、ミクロネシア、オーストラリア。
- 県内の分布** : 石垣島、西表島。
- 生育環境** : 低地の湿地に生える。
- 生育状況** : 石垣島では1938年に1ヶ所で、西表島では1970年代に2ヶ所で採集された記録があるが、いずれも野外調査で確認することができない。西表島で1970年代に採集された場所は、水田か廃田と思われるが、現在は遷移が進んでアダン林やマングローブになっており、確認できない。石垣島では水田の開発が進んでいる。絶滅した恐れがある。
- 学術的価値** : 分布域の北限である。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の減少。遷移の進行。
- 備考** : IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名** : **イシガキイトテンツキ (ハリテンツキ)**
- 分類** : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
- 学名** : *Fimbristylis pauciflora* R. Br.
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。根茎を欠く。稈は密に束生し、高さ5~20 cm、糸管状。葉は通常葉身を欠き、時に

針状の葉身があり、葉鞘は少数、長さ1~3 cm。花序は1個の小穂を頂生し、苞は狭披針形、小穂は長楕円状楕円形~披針状長楕円形、長さ4~6 mm、幅1~1.2 mm、3~4花をつけ、鱗片は披針状長楕円形、前縁、鈍頭、らせん状につき、少数、長さ2.8~3 mm、幅1~1.2 mm、柱頭は3個。瘦果は倒卵形、長さ0.7~0.8 mm、幅0.5 mm、表面に小じわがある。

- 分布域（県外）：マレーシア、ミクロネシア、オーストラリア北部。
県内の分布：石垣島。
生育環境：山地の湿地に生える。
生育状況：石垣島の1ヶ所で採集された記録があり（玉城，1964）、その標本は鹿児島大学の標本室（KAG）に所蔵されている（Walker，1976）。その後自生地では見つかっておらず、現状不明。絶滅した可能性が高い。
学術的価値：分布域の北限で、国内で唯一の産地である。マレーシア系の植物として、植物地理学上貴重である。
減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。

- 文献：玉城松栄，1964. 琉球産カヤツリグサ科の検索 [I]. 沖縄生物学会誌，1 (2) : 66-71.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 252-253.

執筆者名：横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名：カギテンツキ
分類：カヤツリグサ科 (APG 科名：カヤツリグサ科)
学名：*Fimbristylis schoenoides* (Retz.) Vahl
カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：常緑の多年草。根茎は短い。稈は束生し、高さ5~40cm、幅0.3~0.5mm、扁平で溝がある。葉は少数で、根生し、線状、長さ2~16cm、幅0.5~1mm。花序は1~4個の小穂からなり、頂生する小穂は1個で、側生する小穂は1~3個、卵形~楕円形、長さ5~14mm、幅3~5mm、多数の花をつけ、苞は1~2個、目立たない。鱗片は卵形~円形、長さ3mm、雄蕊は3個、柱頭は2個。瘦果は倒卵形~円形、長さ1.2~1.5mm、幅1~1.1mm。
分布域（県外）：台湾、インド、中国南部、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。
県内の分布：石垣島。
生育環境：低地の日当たりの良い湿地に生える。
生育状況：1ヶ所でごく少数個体が確認されているだけである。自生地周辺に外来種のアメリカハマグルマやヒマワリヒヨドリが侵入している。かつて湿地であった場所が、遷移の進行でアダン林に変わりつつある。2017年の調査では、確認することができなかった。
学術的価値：分布域の北限で、日本では唯一の自生地である。
減少の要因：もともと自生地と個体数が限られている。外来種との競合。遷移の進行。
備考：IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

執筆者名：横田昌嗣・北原孝

-
- 和名：クロタマガヤツリ
分類：カヤツリグサ科 (APG 科名：カヤツリグサ科)
学名：*Fuirena ciliaris* (L.) Roxb.

- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 一年草。根茎を欠く。稈は高さ 10~40 cm、鈍 3 稜形。葉は線形、扁平、軟質、有毛、長さ 5~15 cm、幅 3~7 mm。円錐花序は小穂の集団 1~3 個からなり、3~10 個の小穂が密につき、小穂は卵形~長楕円形、長さ 4~7 mm、幅 3 mm、密に多花をつけ、鱗片は楕円形、長さ 1.5 mm、有毛。瘦果は倒卵円形、鋭 3 稜形、長さ 0.7 mm、6 個の鱗片を持つ。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、平島、宝島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、台湾、朝鮮、中国、インド、インドシナ、マレーシア。
- 県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 低地の湿地や水田に生える。
- 生育状況 : 伊是名島 1ヶ所、沖縄島 3ヶ所、石垣島 2ヶ所、西表島 2ヶ所、与那国島 1ヶ所で確認されているが、1970 年代前半以前の記録が多く、現在も自生が確認できるのは沖縄島や西表島などのごくわずかである。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の減少。除草剤の散布。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
- 文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : アンペラ
- 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
- 学名 : *Lepironia articulata* (Retz.) Domin
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は木質、匍匐する。稈は接してつき、長さ 40~150 cm、幅 2~7 mm、イヌクログワイ *Eleocharis dulcis* (Burm. f.) Trin. のように稈に隔壁があり、隔壁の間隔は 5~10 mm。葉は退化し、葉身はなく、葉鞘のみとなる。穂状花序は 1 個の小穂からなり、稈に続く苞は棒状、長さ 2~6 cm、小穂は偽束生し、卵円形~長楕円状楕円形、長さ 1~4 cm、幅 5~15 mm、雌花と雄花を含み、小穂の苞は広倒卵形~円形、長さ 4~6 mm、花被片は線状披針形、雄花の雄蕊は 1 個、雌花の柱頭は 2~3 個。瘦果は倒卵形~円形、長さ 3~4 mm、幅 2.5~3 mm。
- 分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インド、インドネシア、マレーシア、マダガスカル、オーストラリア、ポリネシア。
- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 湿地に生える。
- 生育状況 : 西表島東部の 2ヶ所で採集された記録があるが、最近では確認されていない。1970 年代の採集当時には、湿地に群生すると標本のラベルに書かれている。2017 年に西表島西部の 1ヶ所で本種と思われるものが採取された。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。
- 備考 : 台湾では、畳表の材料として古い時代に東南アジアから導入された可能性がある (Koyama *et al.*, 2000) というが、西表島では野生状態で生育していた (初島, 1975) という。
- 文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 904.
Koyama, T., C.-S. Kuoh & W.-C. Leong, 2000. Cyperaceae. "Flora of Taiwan, ed. 2, Vol. 5", Editorial Committee of the Flora of Taiwan, National Taiwan University, Taipei, 191-317.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ヒンジガヤツリ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Lipocarpa microcephala* (R. Br.) Kunth

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。稈は密に束生し、高さ 5~30 cm、幅 1 mm、鈍 3 稜形、基部に少数の葉がある。葉は線形~やや糸状、幅 1~2 mm。頭状花序は 1 個が頂生し、幅 5~8 mm、やや 3 角形、1~4 個の小穂からなり、葉状の苞は 2~3 個、小穂は卵円形、長さ 3~5 mm、鱗片は広倒披針形、長さ 1~1.3 mm、雄蕊は 1~2 個、柱頭は 2~3 個。瘦果は披針形、鈍 3 稜形、長さ 1 mm、小鱗片 2 個に包まれる。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、久米島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 名護市で 1937 年に採集された標本 (金城鉄郎 No. 106) が琉球大学理学部の標本室 (RYU) に所蔵されているが、採集の記録はこれだけであった。2016 年に久米島で新たに発見されたが、自生地と個体数はごく限られている。

学術的価値 : 琉球列島では極めて限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の埋立。

文献 : Abe, A., T. Nakasone & G. Kokubugata, 2016. Noteworthy collection records of *Lipocarpa microcephala* (Cyperaceae) and *Polygala chinensis* (Polygalaceae) from Kume Island of the Ryukyus, Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B, 42(2): 73-76.

執筆者名 : 横田昌嗣*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : アンペライ (ネビキグサ)

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Machaerina rubiginosa* (Spreng.) T. Koyama

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く匍匐し、稈を密につける。稈は鈍 3 稜形、高さ 60~90 cm、中央部に 1 葉をつけ、下部に数葉を束生する。葉は線形、円筒形~やや扁平、幅 2~3 mm、やや粉白色を帯び、しばしば葉身を欠き鞘状となり、稈の葉は長さ 10~15 cm。複生する円錐花序はやや球形、稈の上部につき、長さ 6~10 mm、小花序は 3~5 個、小穂は長楕円状卵形、長さ 5~6 mm、6~7 花をつけ、鱗片は長楕円状卵形、雄蕊は 3 個。瘦果は長楕円形、鈍 3 稜形、長さ 3 mm、くちばしがある。

分布域 (県外) : 本州 (東海道以西)、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島。

県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、久米島、南大東島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 伊是名島 1 ヶ所、沖縄島 4 ヶ所、南大東島 1 ヶ所の標本があり、南大東島では 2014 年に確認されているが、他の島では現在は確認されない。沖縄島の自生地はすべて開発により失われた可能性が高い。他の島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : **トラノハナヒゲ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Rhynchospora brownii* Romer et Schult.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。稈は束生し、匍枝はない。稈は細く、高さ 60~90 cm、下部に多数の葉をつける。葉は幅 1.5~2.5 mm、狭線形、古くなった葉には、琥珀斑(豹紋)が現れるので、花が無い時でも識別できる。散房花序は 2~3 個、多数の小穂をやや密につけ、枝は長さ 4 cm、小穂は狭卵形、長さ 3~4.5 mm、少数花をつけ、鱗片は広卵形。瘦果は広倒卵形、長さ 2 mm、くちばしがあり、刺針は 6~7 個。

分布域(県外) : 本州(近畿以西)、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、台湾、中国南部、インド、マレーシア、アフリカ。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、石垣島。

生育環境 : 山地の湿地や原野に生える。

生育状況 : 伊是名島では 1ヶ所で確認されている。沖縄島では名護市から沖縄市にかけての数ヶ所で確認されているが、まれである。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : **ミクリガヤ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Rhynchospora malasica* C. B. Clarke

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は伸長し、短い匍枝をだす。稈は高さ 40~100 cm、3稜形、中央部に多数の葉をつける。葉は線形、扁平、幅 5~8 mm。頭状花序は頂生および腋生し、2~5 個、球形、径 1.5 cm、苞は葉状、長さ 7~15 mm、小穂は卵状披針形、扁平、長さ 6~7 mm、1 花をつけ、鱗片は長楕円状卵形~長楕円状広卵形、雄蕊は 2~3 個、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 2 mm、くちばしは線形、刺針は 6 個、長さ 4 mm。

分布域(県外) : 本州(東海道以西)、四国、九州、台湾、インドシナ、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島中部、石垣島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 沖縄島で採集された標本が京都大学の標本庫 (KYO) にある (Walker, 1976) が、この自生地は開発が進んでおり、既に絶滅した可能性が高い。石垣島では 1 河川の流域でのみ確認されており、2004 年までは確認されていたが、現在は遷移が進行し湿地が森林に変化したため確認することができなくなった。

学術的価値 : 琉球列島では極めて限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。遷移の進行。

保全対策 : 自生地を文化財として指定し、保全することが必要である。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 265-266.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : イヌノハナヒゲ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Rhynchospora rugosa* (Vahl) Gale

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。稈は束生し、匍枝はない。稈は細く、高さ 30~50 cm、全体に疎らに少数の葉を、稈の基部に束生状に多数の葉をつける。葉は幅 2~3.5 mm、狭線形。散房花序は 3~5 個が疎らにつき、小穂は広披針形、長さ 7~8 mm、2~4 花をつけ、鱗片は 4~5 個、長楕円状卵形、雄蕊は 2~3 個、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 2~2.2 mm、瘦果より短いくちばしがあり、刺針は 6~7 個、長さ 4~5.5 mm。

分布域(県外) : 本州(中部以西)、四国、九州、屋久島、種子島、台湾、朝鮮、中国、インド、マレーシア。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島。

生育環境 : 山地の湿地や原野に生える。

生育状況 : 伊是名島の 1ヶ所で自生が確認されているが、極めてまれである。伊平屋島 1ヶ所と沖縄島 1ヶ所で採集された標本が京都大学の標本庫(KYO)にある(Walker, 1976)が、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。

備考 : IUCN カテゴリー: Endangered (EN)*。**Rhynchospora modesti-lucennoi* として評価。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 265.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査(伊是名島・久米島)。“事業年報(平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ノグサ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Schoenus apogon* Romer et Schult.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。全体無毛で、茎は直立し、高さ 10~25 cm、1~2 葉がつく。根出葉は細く、幅 0.5 mm ほど、葉鞘は一部赤味を帯びる。分花序は 2~3 個あって、10 個以下の小穂を散状または頭状につける。小穂は長さ 4~6 mm、ときに赤色を帯びる。果実は球形、白色で長さ約 1 mm、長さ 2 mm 位の刺針が 6 本ある。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、種子島、口永良部島、奄美大島、徳之島、インドネシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、伊平屋島、久米島、粟国島、座間味島。

生育環境 : 原野や海崖の上の風当たりの強い草地に生える。

生育状況 : 粟国島では海崖の上の草地に小面積ではあるが群生しているのが確認された。久米島では2ヶ所で、
 沖縄島では1ヶ所で確認された。その他の島の現況は不明。
 減少の要因 : 生育地の開発。もともと自生地と個体数が限られる。

文献 : 天野鉄夫, 1981. 粟国島植物目録. 粟国村教育委員会, 39pp.
 阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ (粟国島・
 渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執筆者名 : 新城和治*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : **イヘヤヒゲクサ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Schoenus calostachyus* (R. Br.) Poir.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は束生し匍枝を出さない。葉鞘は帯黒赤色で光沢があり、2列生に密に配列する。
 稈は高さ60~80 cm、硬く、無毛、円形で、中程に1~2枚の葉をつける。葉は短く、硬く、葉舌はない。
 花序は総状、小穂は5~10個、各節に単立または2~3個ずつつき、長さ2~2.5 cm、線状披針形、9~12個の鱗片を2列につける。

分布域(県外) : マレーシア、ミクロネシア、オーストラリア。

県内の分布 : 伊平屋島?、伊是名島。

生育環境 : 山地(台地と丘陵)の乾燥した貧栄養の場所の矮性化したリュウキュウマツの疎林の草本層に出現し、
 オオマツバシバ、イゼナガヤ、クロガヤなどと混生する。

生育状況 : 伊是名島では2004年に生育が確認されたが、自生地は1ヶ所の狭い範囲に限られ、個体数は少ない。
 伊平屋島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。

減少の要因 : 道路工事(林道、観光道路などの工事、リュウキュウマツの盗掘などの環境圧がある)。もともと自
 生地が限られている。

備考 : 伊是名島の自生地の一部は、県指定の天然記念物である。

文献 : 仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英(編), 54.

仲田栄二, 1989. 伊是名諸島の植物. “伊是名村史(下巻)”, 伊是名村史編集委員会, 597.

阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査(伊是名島・久米島). “事業年報(平成26年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・仲田栄二*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ホタルイ**

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Scirpus juncooides* Roxb. var. *hotarui* (Ohwi) Ohwi

カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎はほとんどなく、匍枝はださない。稈は束生し、高さ15~60 cm、幅1.5 mm以下、
 3~4個の葉身のない葉鞘で包まれる。頭状花序は偽側生し、2~7個の小穂からなり、苞は長さ

5~15 cm、小穂は卵円形~狭卵形、長さ5~6 mm、鱗片は卵円形、長さ3~4 mm、柱頭は3個。瘦果は広倒卵形、長さ2 mm、刺針は5~6個、横しわがある。基本変種のイヌホタルイに似るが、稈は太さ1.5 mm以下で表面は平滑、小穂は卵円形、柱頭は3個であることで異なる。

- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、黒島、朝鮮、中国東北部、ハワイ(帰化)。
県内の分布 : 沖縄島(北部~中部)。
生育環境 : 山地の湿地に生える。
生育状況 : 確実に本種と同定される標本は、2ヶ所(Walker, 1976)で確認されているだけである。同様の環境には基本変種のイヌホタルイも生育しており、標本に基づく情報の集積が必要である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。近縁種との競合。
備考 : イヌホタルイは、伊是名島、伊平屋島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島の水田などにやや普通に産する。ホタルイは野生種であるが、イヌホタルイは移入種の可能性が指摘されている(Walker, 1976)。ホタルイとイヌホタルイの雑種が最近記録されており、不稔であることが知られている(Yashiro, 2004)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 246.
Yashiro, K., 2004. *Schoenoplectus × juncohotarui* Yashiro (Cyperaceae), a new hybrid from Chiba Prefecture, Central Japan. J. Jpn. Bot., 79: 96-100.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

-
- 和名 : ヒメホタルイ
分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Scirpus lineolatus* Franch. et Sav.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 夏緑性の多年草。根茎は細く、匍匐する。稈は稈の節から単生し、高さ7~30 cm、幅0.8~1.2 mm。葉は1~2個、葉身を欠き、葉鞘となり、稈の基部を包み、長さ5 cm。小穂は1個が偽束生し、長楕円状披針形~狭楕円形、長さ7~10 mm、幅2.5~3.5 mm、多花を密生し、苞は1個、円形、長さ1~4 cm、鱗片は長楕円形~楕円形、長さ3.8~4.5 mm、幅1.8~2 mm。瘦果は広倒卵形~楕円形、長さ1.7~2.2 mm、幅1.2~1.8 mm、柱頭は2個、刺針は4~5個、瘦果の2倍の長さになる。
分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、台湾。
県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島。
生育環境 : 湿地に生える。
生育状況 : 沖縄島の3ヶ所で確認されているが、そのうち1ヶ所は道路建設で2005年に失われた。宮古島では1ヶ所で確認されているが、現状は不明。石垣島の現状は不明。
学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。
備考 : 沖縄島の唯一知られる自生地は2005年に開発により消失したため、隣接した環境に生えるマネキンジュガヤやマシカクイとともに近隣の類似の環境に移植が試みられている。
文献 : 玉城松栄, 1965. 琉球産カヤツリグサ科の検索 [I]. 沖縄生物学会誌, 2(3): 19-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : イヌフトイ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Scirpus litoralis* Schrader
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、横走する。稈は疎らに束生し、円柱形、高さ 60~100 cm、幅 5~8 mm、基部は葉身のない葉鞘で包まれる。散形花序は偽側生、枝は 3~7 個、長さ 2~8 cm、1~3 個の小穂をつけ、稈に続く苞は 1 個、花序と同長、小穂は長楕円状卵形~楕円状卵形、長さ 7~12 mm、幅 3~4 mm、鱗片は長楕円状卵形~楕円形、長さ 3~4 mm、雄蕊は 2~3 個、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、長さ 2 mm、幅 1.5~1.7 mm、刺針は 3~4 個、広線形、瘦果よりやや長い。

分布域(県外) : インド、マレーシア、ミクロネシア、オーストラリア、アフリカ、ヨーロッパ。

県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、南大東島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地や池沼に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島と西表島では各 2ヶ所、その他の島嶼では各 1ヶ所で確認されているが、自生地の多くは開発で失われた可能性がある。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : サンカクイ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Scirpus triqueter* L.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は細長く、横走する。稈はやや接して生じ、高さ 50~100 cm、基部の幅 2~7 mm、鋭 3 稜形、無葉または長さ 1~5 cm の葉をつける。花序は偽側生、4~5 個の小穂からなり、稈に続く苞は 1 個、3 稜形、長さ 2~5 cm、小穂は長楕円形~卵形、1~3 個ずつ集合し、長さ 7~12 mm、幅 5~7 mm、鱗片は長楕円形、長さ 4 mm、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、刺針は 3~5 個、長さ 2~2.5 mm。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、沖永良部島、与論島、ウスリー、中国、朝鮮、インド、マレーシア、南ヨーロッパ。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地の湿地や水田に生える。

生育状況 : 沖縄島 2ヶ所 (Walker, 1976) と、1938 年に石垣島で採集された標本 (高嶺英言 195) があるが、いずれも 40 年以上前の記録であり、自生地は既に失われた可能性が高い。他の島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。水田の埋立。除草剤の使用。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 245.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*

和名 : ナガボフトイ (ナンゴクフトイ)
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Scirpus validus* Vahl
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は細長く、横走する。稈は接して生じ、高さ 70~200 cm、基部の幅 5~8 mm、円柱形、基部は葉身のない 3~5 個の葉鞘で包まれる。長側枝集散花序は偽側生、長さ 4~8 cm、枝は 3~8 個、長さ 1~6 cm、3~7 個の小穂をつけ、稈に続く苞は 1 個、円柱形、長さ 1~3 cm、小穂は卵形~卵状楕円形、2~3 個ずつ集合し、長さ 6~15 mm、幅 3~4 mm、密に多花をつけ、鱗片は卵形~楕円形、長さ 2.5~3.2 mm、柱頭は 2 個。瘦果は広倒卵形、刺針は 2~5 個、長さ 1.8~2.5 mm。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、中之島、悪石島、奄美大島、台湾、千島、朝鮮、中国、マレーシア、太平洋諸島、オーストラリア、北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパ。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の湿地や池沼に生える。

生育状況 : 石垣島では 1 ヶ所で確認されている。他の島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。

備考 : フトイ *S. tabernaemontani* J.F. Gmelin と同種とする見解があり、分類の再検討と標本に基づく分布情報の確認が必要である。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホソバシソウ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Scleria biflora* Roxb.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 繊細な一年草。根茎はなく、茎は単立し、長さ 30~50 cm、細い 3 稜形、無毛、多くは他の植物によりかかって生える。葉は線形、長さ 5~15 cm、幅 1.5~2.5 mm、微毛縁。円錐花序の分花序は 2~3 個、長さ 1.5~2.5 cm、幅 1 cm、小穂を疎らにつけ、小穂は長さ 3~4 mm、雌花鱗片は広卵形、竜骨は緑色。瘦果は球形、白色、光沢があり、径 1.5 mm、方眼格子模様があり、微毛が生える。

分布域 (県外) : 奄美大島、台湾、中国南部、インド、マレー半島。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、石垣島、西表島、小浜島。

生育環境 : 海岸近くの湿地や原野、水田の畦に生える。

生育状況 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島の現状は不明。石垣島では 1 ヶ所、西表島では数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。小浜島の 1 ヶ所で少数個体が 2014 年に確認されている。

学術的価値 : 琉球列島は分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。除草剤使用。水田の放棄や埋立。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 (伊是名島・久米島). “事業年報 (平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ケシンジュガヤ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Scleria rugosa* R. Br. var. *rugosa*
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。根茎はなく、茎は単立または束生し、長さ 10~30 cm、湾曲し、3 稜形、平滑。葉は扁平、淡緑色、長さ 5~15 cm、幅 2~3 mm、有毛、鞘は無翼。円錐花序の分花序は 3~5 個、やや少数の小穂を生じ、長さ 7~15 mm、小胞は刺状、小穂は長さ 2~4 mm、多数の鱗片からなり、雌花鱗片は卵形。瘦果は球形、白色、光沢があり、径 1.5 mm、方眼格子模様があり、微毛が生える。

分布域(県外) : 本州(近畿以西)、四国、九州、屋久島、種子島、馬毛島、台湾、中国、スリランカ、マレーシア、オーストラリア、ニュージーランド。

県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の湿地に生える。

生育状況 : 伊是名島では 1 ヶ所、石垣島では 1 ヶ所、西表島では 2 ヶ所で発見されているが、個体数は極めて少ない。石垣島では 2005 年の農薬散布により、絶滅した可能性がある。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。除草剤使用。水田の開発。

備考 : 茎や葉が無毛の変種のマネキシンジュガヤ var. *glabrescens* (Koidz.) Ohwi et T. Koyama は、最近沖縄島と石垣島で確認されているが、ケシンジュガヤと共に産地が限られており、絶滅寸前である。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 阿部篤志・仲宗根忠樹, 2015. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査(伊是名島・久米島). “事業年報(平成 26 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 27-34.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*・横田昌嗣(追補)

和名 : マネキシンジュガヤ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Scleria rugosa* R. Br. var. *glabrescens* (Koidz.) Ohwi et T. Koyama
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全株無毛またはほとんど無毛の一年草。茎は単立または束生し、高さ 10~30 cm、2~3 節がある。葉は長さ 5~15 cm、幅 2~3 mm、花序は各稈に 2~3 個つき、やや少数の花をつける。小穂は雄花と雌花に分かれる。瘦果は広楕円形~球形、径 1.5~2 mm、灰白色、表面に格子紋がある。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、朝鮮。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 日当たりの良い湿地、原野、水田の畦に生える。

生育状況 : 沖縄島、石垣島とも自生地はそれぞれ 1 ヶ所知られるだけである。沖縄島の自生地は道路建設により消失した。石垣島では、2005 年に除草剤の散布によってほぼ壊滅状態となった。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。除草剤の散布。

備考 : 沖縄島の唯一知られる自生地は 2005 年に開発により消失したため、隣接した環境に生えるマシカクイやヒメホタルイとともに近隣の類似の環境に移植が試みられている。植物体に白色毛をふく基本変種のケシンジュガヤも同様な環境に生え、石垣島には両者が混生する自生地がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : クロミノシンジュガヤ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Scleria sumatrensis* Retz.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 大形の常緑の多年草。根茎は短く這い、茎は直立し、3稜形、高さ1~2 mになり、多数の葉をやや輪生状につける。葉は長さ20~40 cm、幅10~13 mm、上縁はざらつき、鞘の下部には3翼がある。円錐花序は頂生し、分花序は5~8個、多数の小穂を密につけ、長さ4~5 cm、小包は短く針状、小穂は赤褐色、長さ5~6 mm、少数の鱗片が2列に並ぶ。雌花の鱗片は卵形~広卵形、竜骨は緑色。瘦果は偏球形、帯青褐色、径2 mm、表面に網状の模様があり、微毛が生える。

分布域(県外) : 台湾、インド、マレーシア、ミクロネシア。

県内の分布 : 北大東島、南大東島。

生育環境 : 低地の日当たりのよい湿地に生える。

生育状況 : 島中央部の湿地に生えるが、湿地の埋立が進み、生育地が激減している。

学術的価値 : 分布域の北限で、著しい隔離分布を示し、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。湿地の埋立。

文献 : 新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章, 1997. 北大東島の池・湿地帯の植生. “特殊鳥類等生息環境調査, 伊平屋島・久米島・南大東島・北大東島湿地編”, 沖縄県環境保健部自然保護課, 153-161. 横田昌嗣・宮城康一, 1992. 大東諸島の植物相. “ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”, 沖縄県教育委員会, 17-42.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*

和名 : イリオモテクマタケラン
分類 : ショウガ科 (APG 科名: ショウガ科)
学名 : *Alpinia flabellata* Ridley
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は高さ1~3 mになり、数枚の葉をつける。葉は長楕円状披針形、長さ30~40 cm、幅4~8 cm、無毛。円錐花序は頂生、しばしば分枝し、多数の花をつける。花は小形で、花弁は長さ14 mm、淡黄色、唇弁は長さ4 mm。果実は球形で、径5 mm、赤色~橙色に熟する。

分布域(県外) : 台湾(蘭嶼、緑島)、フィリピン。

県内の分布 : 石垣島、西表島、内離島。

生育環境 : 低地の自然林内に生える。

生育状況 : 西表島には各地に自生するが、石垣島では証拠標本は確認されておらず、現状不明。西表島ではすぐに絶滅する恐れはないが、自生地は人里に近い低地に限られ、開発により急激に減少する可能性がある。内離島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限で、マレーシア系の植物であり、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 低地林の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)

和名 : エンレイショウキラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Acanthephippium pictum* Fukuyama
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。台湾シショウキラン *A. sylhetense* に似るが、葉に 5 脈があり、花は外面は黄色～黄緑色で、内面は濃赤色で光沢があり、萼片と花弁の先は反り返り、唇弁は淡黄色で、唇弁の中央裂片は長楕円形で、やや反り返ることなどで異なる。

分布域(県外) : トカラ列島?、奄美大島?、徳之島?、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部?、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 石垣島では 3 ヶ所、西表島では数ヶ所で確認されているが、盗掘による減少が続いている。与那国島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 鹿児島県の島嶼で記録されているものは、花による確認はなされていない。花が確認された個体は、これまでのところ沖縄島以北ではすべて台湾シショウキランであり、エンレイショウキランの確実な分布域は八重山諸島に限られている。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : タイワンアオイラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Acanthephippium striatum* Lindl.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は直立し、数個が接して並び、棍棒状で、長さ 5~15 cm、先に 1 葉をつける。葉は長楕円形、長さ 20~30 cm、幅 7~10 cm、5 脈がある。総状花序は側生し、3~5 花をつけ、下部は数枚の包葉で包まれる。花は白色で、淡紫色の細い線が入り、萼片と花弁は約半分癒合し筒状となり、長さ 3~4 cm、先は平開し、唇弁は白色で先端は紅紫色、長さ 3 cm、矢形で、先は浅く 3 裂する。蕊柱の基部は下方に長く伸びて、側花弁と癒合する。

分布域(県外) : 屋久島、台湾、インド、タイ、インドシナ、ジャワ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : かつて 1 ヶ所に十数個体が発見されたが、今回の調査で発見者と共に自生地の踏査を行ったが、全く生育が確認されなかった。既に絶滅した可能性が高い。

学術的価値 : 沖縄県で唯一の産地であり、隔離分布を示し植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 屋久島でも盗掘により絶滅したようである。

文献 : 豊見山元・播磨保治, 1992. 琉球列島植物分布資料 8. 沖縄生物学会誌, (30) : 75-77.

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : タイワンショウキラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Acanthephippium sylhetense* Lindl.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は直立し、数個が接して並び、卵状円柱形で、長さ 10 cm、先に 2~3 葉をつける。葉は楕円形、長さ 20~30 cm、幅 7~10 cm、9 脈がある。総状花序は側生し、3~5 花をつけ、下部は数枚の包葉で包まれる。花は外面は淡黄色で、内面は赤紫色、萼片と花弁は基部で癒合し、先は平開し、長さ 4~4.5 cm、唇弁は白色で先端は黄色、長さ 4 cm、3 裂し、中央裂片は倒匙形、上面に 3 裂の板状突起があり、側裂片は広腎形、直立する。蕊柱の基部は下方に長く伸びて、側花弁と癒合する。

分布域 (県外) : 屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。沖縄島では主に石灰岩地に生えるが、非石灰岩地でも見られる。西表島では低地の非石灰岩地に生える。

生育状況 : 自生地は沖縄島では数ヶ所知られるだけで、個体数は極めて少ない。西表島では 1ヶ所に数個体が確認されていたが、自生地は盗掘とリュウキュウイノシシによる食害で消失し、現在は確認することができない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。リュウキュウイノシシによる食害。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 開花する個体の割合が低く、開花期も短いため、生きた花の観察に基づく自生地の確認は十分ではない。これまでエンレイショウキランと混同されていたため、比較的最近になって (橋本, 1985) 琉球列島に産することが知られた種である。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 橋本 保, 1985. ラン科植物分類雑記 (1). 筑波実験植物園研究報告, 3: 9-12.

横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32): 61-65.

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・比嘉清文*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

和 名 : オキナワチドリ

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Amitostigma lepidum* (Rchb. f.) Schltr.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 小形の冬緑性の多年草。地中に長さ 1 cm 程度の楕円球状の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 10 cm になり、基部に 2~3 葉を束生する。葉は長楕円形、長さ 4~6 cm。総状花序は頂生し、2~9 花をつける。花は淡紅紫色、萼片と花弁は長さ 5 mm、狭卵形、唇弁は長さ 10~13 mm、倒卵状円形、3 深裂し、中央裂片は先でさらに 2 浅裂し、上面に濃厚紫色の斑点が入る。

分布域 (県外) : 九州 (鹿児島県)、甌島、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、喜界島、沖永良部島。

県内の分布 : 硫黄島、伊平屋島、野甫島、伊是名島、沖縄島、藪地島、久米島、渡名喜島。

生育環境 : 海岸から山地までの日当たりのよい草地や岩隙に生える。

生育状況 : かつてはやや普通に見られたが、近年は個体数が激減している。

学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。本種が属するヒナラン属は東アジアの温帯系の植物であり、琉球列島の植物相の成立を知る上で貴重である。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。自生地の開発。ダム建設による水没。外来種との競合。もともと自生地が限られている。

文 献 : 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄島”, 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

佐藤寛之・立石庸一・齊藤由紀子・天野正晴・中村元紀・杉山已次, 2017. 沖縄県の離島・へき地における自然教育のための基礎資料の充実IX : うるま市藪地島の植物相. 琉球大学教育学部紀要, (91) : 53-74.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : キバナシュスラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Anoectochilus formosanus* Hayata

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 20 cm になり、3~4 葉を互生する。葉は広卵形、長さ 3.5~4.5 cm、上面は帯紫暗緑色で、通常脈上に白色または淡黄色の網目模様が入り、下面は帯赤紫色。総状花序は頂生し、3~5 花を疎らにつける。萼片は赤褐色、背萼片は長さ 6~7 mm、側萼片は長さ 8~10 mm、花弁は白色、長さ 8 mm、唇弁は長さ 18 mm、白色、先端は 2 裂して Y 字形となり、基部から中央にかけて櫛の歯状に 5~7 対の黄色の糸状突起があり、基部は短い距となる。

分布域 (県外) : 台湾。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 高地の自然林の林床に生える。

生 育 状 況 : 石垣島は 2 ヶ所、西表島は 2 ヶ所の自生地が知られるが、自生地は狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。石垣島ではかつてはかなりの個体数が見られたが、近年は乱獲により激減している。自生地の一つは、無線の中継施設の建設で、周辺は改変が進んでいる。沖縄島では 2004 年に 1 ヶ所でごく少数個体が、2013 年に別の 1 ヶ所で数十個体が新たに確認されたが、これらはその後盗掘によりすべて消失した。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。自然林の開発 (石垣島)。

備 考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2016 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・新城和治*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)・仲間正和(追補)

和 名 : オオギミラン (イナバラ)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Anoectochilus inabai* Hayata

カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴：小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 20 cm になる。葉は一様な緑色で、卵状長楕円形、長さ 4~5 cm。総状花序は頂生し、5 花程度を疎らにつける。萼片と花弁は長さ 6 mm、帯紫緑色で白色の網目状の斑紋が入り、唇弁は長さ 23 mm、白色、先端は 2 裂して Y 字形となり、基部から中央にかけて櫛の歯状に 5~9 対の糸状突起がある。

分布域 (県外)：屋久島、台湾。

県内の分布：沖縄島北部、西表島。

生育環境：山地の自然林の林床に生える。

生育状況：沖縄島では 3 ヶ所、西表島では 2 ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。沖縄島では盗掘により絶滅寸前である。

減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考：特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2017 年)。

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲間正和(追補)

和名：コウシュンシュスラン

分類：ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名：*Anoectochilus koshunensis* Hayata

カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴：小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 20 cm になり、3~4 葉を互生する。葉は広卵形、長さ 3.5~4.5 cm、上面は帯紫暗緑色で、通常脈上に白色または淡黄色の網目模様が入り、下面は帯赤紫色。総状花序は頂生し、3~5 花を疎らにつける。萼片は淡赤褐色、背萼片は長さ 6 mm、側萼片は長さ 8 mm、花弁は白色、長さ 6 mm、唇弁は長さ 12 mm、白色、先端は 2 裂して Y 字形となり、中央に 1 対の狭三角形の突起があり、基部に長さ 7 mm の 2 浅裂する距がある。

分布域 (県外)：屋久島、台湾。

県内の分布：沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境：高地の自然林の林床に生える。

生育状況：沖縄島は 2 ヶ所、石垣島は 1 ヶ所、西表島は 3 ヶ所の自生地が知られるが、いずれも個体数は極めて少ない。沖縄島では絶滅した可能性が指摘されていたが、1 ヶ所で 2016 年に少数個体が確認されている。

学術的価値：沖縄島には花が倒生する型と倒生しない型が知られ、他の産地のものとやや形態が異なる。

減少の要因：園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採 (沖縄島)。

備考：国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー：Data Deficient (DD)。

文献：播磨保治, 1986. コウシュンシュスランを沖縄島で発見. 沖縄生物学会誌, (24) : 59-61.

豊見山元・播磨保治, 1992. 琉球列島植物分布資料 8. 沖縄生物学会誌, (30) : 75-77.

執筆者名：横田昌嗣*・橋爪雅彦*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名：タネガシマムヨウラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学 名 : *Aphyllorchis montana* Rchb. f.
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は花序を含めて長さ 45~70 cm。総状花序は頂生し、10~20 花をつける。花は淡黄色で、外面に淡紫色の小点が入り、萼片と花弁は長さ 1~1.2 cm、長楕円形、唇弁は長さ 1 cm、幅 6 mm、中央に関節があり、関節より基部側は三角形、関節より先端側は卵形で、3 浅裂する。
 分布域 (県外) : 九州 (鹿児島県)、屋久島、種子島、トカラ列島、請島、徳之島、台湾、中国南部、インド、スリランカ、タイ、フィリピン、ボルネオ。
 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
 生育環境 : 自然林の林床に生える。
 生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に点々と自生することが知られるが、個体数は少ない。石垣島と西表島では極めてまれで、石垣島では 1ヶ所で少数個体が確認されており、西表島では 1958 年と 1967 年の 2 回採集されているが、その後は確認されておらず、現状不明。
 減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。
 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ジンヤクラン
 分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学 名 : *Arachnis labrosa* (Lindl. et Paxton) Rchb. f.
 カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は長さ 30~50 cm、葉を 2 列に互生する。葉は革質で、広線形、長さ 20 cm、先は 2 裂する。総状花序は腋生し、長さ 30~150 cm になり、時に分枝し、数~多花をつける。花は径 3 cm、黄緑色で、紅紫色の斑紋が入り、萼片と花弁は長さ 1.5~1.9 cm、線状倒披針形、唇弁は長さ 7~9 mm、舌状で、3 裂し、淡黄色で、上面に赤褐色の斑紋が入り、上面に 2 列の隆起があり、基部に円柱形の距がある。
 分布域 (県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、タイ、ベトナム。
 県内の分布 : 石垣島。
 生育環境 : 山地の自然林内の樹幹に着生する。
 生育状況 : かつて 1 度記録されただけで、近年は全く確認されていない。2016 年にかつて記録された自生地でもかなり綿密に踏査を行ったが、再発見することはできなかった。
 学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。
 備考 : 石垣島で採集された個体の花序と葉の標本は、鹿児島大学 (KAG) の標本庫に収蔵されている。

文 献 : 初島住彦, 1975 . 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 861.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和 名 : ナリヤラン
 分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Arundina graminifolia* (D. Don) Hochr.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は硬く、長さ 50~130 cm、15~25 葉を 2 列に互生し、基部は球状の偽球茎となる。葉は線状披針形、長さ 10~20 cm。総状花序は頂生し、単一または分枝し、5~8 花を順につける。花は淡紅紫色で、径 4 cm、萼片と花弁は長さ 3 cm、披針形、唇弁は長さ 3 cm、やや卵形、3 浅裂し、中央裂片は 2 浅裂し、側裂片は蕊柱を包み、唇弁の先端は紅紫色で、中央に黄色の細長い板状突起がある。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、スリランカ、インド、タイ、マレーシア、タヒチ。

県内の分布 : 西表島、石垣島。

生育環境 : 低地の日当たりのよい草地に生える。放棄されたパイン畑、伐採跡地、山火事跡地など的人為的な環境にも多く見られるが、遷移が進んで森林になると消失する。

生育状況 : 石垣島では 1 ヶ所に産するだけであったが、自生地は開発され、現在は確認できない。西表島では島内に点々と産するが、採集と遷移の進行で個体数は減少している。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。もともと自生地が限られている。

備考 : 本来は種子により旺盛に繁殖する。ハワイやフィジー諸島では栽培品が逸出している。沖縄島中部でも、近年野生化した個体が観察されている。西表島における本種の訪花昆虫については、Sugiura (2014) の報告がある。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Sugiura, N., 2014. Pollination and floral ecology of *Arundina graminifolia* (Orchidaceae) at the northern border of the species' natural distribution. J. Pl. Res., 127: 131-139.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : クスクスラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Bulbophyllum affine* Lindl.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎は匍匐し、長さ 3~7 cm 間隔で偽球茎をつける。偽球茎は円柱形、長さ 2~4 cm、先に 1 葉をつける。葉は革質、線状長楕円形、長さ 10~18 cm、基部は葉柄状となる。花序は偽球茎の基部から出て、長さ 1.5 cm、1 花をつける。花は淡黄色~黄褐色で、紫色の数本の条線が入り、平開しない。萼片は長さ 1.7~2 cm、花弁は長さ 1.3~1.6 cm、唇弁は長さ 8~10 mm、卵形~三角状卵形、朱紅色、基部に関節がある。蕊柱の基部は下方に長く伸び、側萼片や唇弁と癒合する。

分布域(県外) : 奄美大島、台湾、中国南部、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い自然林の樹幹に着生し、しばしば群生する。

生育状況 : 西表島では 4 ヶ所で記録があり、その内の 2 ヶ所は 2010 年以降に確認されている。石垣島では 1 ヶ所の狭い範囲に産し、もともと個体数は少なかったが、近年盗掘により著しく減少している。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : マメツタラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Bulbophyllum drymoglossum* Maxim. ex Makino
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : ごく小形の常緑の多年草。根茎は糸状で、長く匍匐し、1~1.5 cm 間隔で1葉をつける。葉は楕円形~倒卵形、長さ7~10 mm、ほぼ無柄。総状花序は根茎から出て、1花をつけ、長さ1~1.5 cm。花は淡黄色、萼片は長さ6 mm、披針形、花弁は長さ3.5 mm、長楕円形、唇弁は長さ6 mm、卵状披針形、紅紫色の斑点が入り、基部に関節がある。蕊柱の基部は下方に伸び、唇弁と癒合する。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林の樹幹や岩上に着生する。

生育状況 : 国頭村、東村、大宜味村の数ヶ所で自生が確認されているが、個体数は少ない。石垣島の1ヶ所で2007年に確認された。

学術的価値 : 沖縄県では唯一の産地である。沖縄島の個体の唇弁は、他の産地のものと形態がやや異なっている。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。ダム建設による水没(沖縄島)。もともと自生地が限られている。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)・松島昭司(追補)

和名 : シコウラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Bulbophyllum macraei* (Lindl.) Rchb. f.
 カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎は匍匐し、数 cm 間隔で偽球茎をつける。偽球茎は卵形、長さ1.5~2 cm、先に1葉をつける。葉は革質、長楕円形、長さ8~15 cm。散形花序は偽球茎の基部から生じ、長さ10~20 cm、2~6花をつける。花は淡黄色で、しばしば赤色を帯び、背萼片は長さ1.5~1.8 cm、側萼片は長さ3~5 cm、花弁は長さ6~7 mm、唇弁は長さ6~7 mm、披針形、下方に反り返り、基部に関節がある。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、スリランカ、インド。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、西表島では数ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。盗掘で現在もなお減少している。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : タマザキエビネ (ササバキエビネ)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Calanthe densiflora* Lindl.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は 10 cm 程度匍匐し、先は偽球茎となり、数葉を束生する。葉は狭長楕円形、長さ 40~50 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 10~30 cm、多数の花を密につける。花は脱落する長い包葉で包まれ、黄色、半開し、萼片と花弁は長さ 1.5 cm、倒披針形、唇弁は 3 裂し、側裂片はやや三角形、中央裂片は四角形。

分布域 (県外) : 徳之島、台湾、中国南部、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 西表島では近年は全く確認されておらず、現状は不明。沖縄島では花をつけていない数個体が確認されているが、偽球茎が離れてつき、葉に関節があることから本種と同定されている (横田ら, 1997)。台湾では、匍匐する根茎で増殖してマット状の群落を作ることがあるが、沖縄島では 1 個体ずつが独立して、小型の数個体が点々と生育していた。この自生地を最近になって踏査したが、個体を確認することはできなかった。

学術的価値 : 県内で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

備考 : タマザキエビネの報告の中には、近縁なタイワンエビネが誤認されて含まれている可能性があり、標本に基づく再確認が必要である。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.

横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : カツウダケエビネ

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Calanthe discolor* Lindl. f. *kanashiroi* (Fukuyama) Nakajima

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT) (エビネ *Calanthe discolor* Lindl.として)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、2~5 葉を束生する。葉は倒披針形~長楕円形、長さ 18~25 cm。花茎は長さ 30~40 cm で、十数花をつける。花は径 3~4 cm、芳香があり、花弁と萼片は紫褐色~淡黄緑色で、唇弁は白色で 3 裂し、長さ 8~10 mm の距がある。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の石灰岩地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 2ヶ所の自生地が知られる。1980 年代前半までは林床に足の踏み場もないほど群生した所があったが、近年は乱獲により激減し、ほとんど見ることはなくなった。

学術的価値 : 沖縄島の固有品種。基本品種のエビネは本州、四国、九州に分布し、沖縄島はエビネの分布域の南限に位置する。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地が限られている。

文献 : 阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告), 事業年報 (平成 25 年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : タイワンエビネ

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Calanthe formosana* Rolfe

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は数 cm 匍匐し、先は長卵形の偽球茎となり、3~6 葉を束生する。葉は倒披針形、上面にやや光沢があり、長さ 35~50 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 35~45 cm、多数の花を密につける。花は脱落する長い包葉で包まれ、黄色、平開し、萼片と花弁は長さ 1.2 cm、楕円形、唇弁は長さ 8 mm、3 裂し、側裂片は四角形、中央裂片は四角形、基部上面に 2 個の突起があり、基部に長さ 9 mm の円柱形の距がある。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島北部では 3 ヶ所で確認されているが、乱獲により絶滅寸前である。西表島では数ヶ所に産するが、個体数は年々減少している。石垣島では 2003 年に花をつけていない少数個体が発見されたが、偽球茎の形態から本種と判断される。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採(沖縄島)。

備考 : 竹富町特別希少野生動植物種(2017 年)。

文献 : 横田昌嗣・島袋憲一, 1992. 琉球列島植物分布資料 10. 沖縄生物学会誌, (30) : 81-83.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)

和名 : レンギョウエビネ

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Calanthe lyroglossa* Rchb. f.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は数 cm 匍匐し、先は長卵形の偽球茎となり、3~6 葉を束生する。葉は線状長楕円形、上面に光沢はなく、黄緑色、長さ 30~40 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 30~40 cm、多数の花を密につける。花は脱落する長い包葉で包まれ、黄色、半開し、萼片と花弁は長さ 8 mm、広卵形~楕円形、唇弁は長さ 5 mm、3 裂し、側裂片は小さく、鈍頭、中央裂片は腎形、基部に先端が膨らんだ長さ 4~5 mm の距がある。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、フィリピン、タイ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生え、特に苔むした倒木上に着生することが多い。

生育状況 : 以前はやや普通に見られる種であったが、近年は乱獲により減少し、現存する個体数は少ない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと個体数が少ない。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015 年)。竹富町希少野生動植物種(2017 年)。

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和 名 : オナガエビネ (オキナワエビネ、リュウキュウエビネ)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Calanthe masuca* (D. Don) Lindl.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、3~5 葉を束生する。葉は長楕円形、長さ 40~55 cm。花茎は長さ 50~70 cm で、多数の花をつける。花は淡紫色~紅紫色、まれに白色で、萼片は長さ 1.5~2 cm、長楕円形、花弁は長さ 1.3~1.5 cm、倒卵形、唇弁は長さ 1.2~1.5 cm、3 裂し、側裂片は長楕円形、長さ 4 mm、中央裂片は広扇形、基部に長さ 2.5 cm の線状の距がある。

分布域 (県外) : 甌島、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インド、タイ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では 1ヶ所、西表島では 2ヶ所で記録されている。かつては自生地には多数の個体が見られたが、現在は乱獲により激減し、個体数は非常に少なくなった。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地が限られている。ツルランとの交雑による遺伝的汚染。

備考 : ごく近縁な種は南アフリカやマダガスカルにも分布する。近縁種も含めて地理的分布が広く、地理的変異が大きく、学名については様々な見解がある。琉球列島と台湾産はオナガエビネ *Cal. textori* として区別されることがある。花序が細長く、花は赤紫色で、唇弁の裂片は細い型はオキナワエビネ (リュウキュウエビネ) *Cal. okinawensis* としてさらに細分されることがある。オナガエビネはツルランとしばしば混生し、両種間の雑種はユウヅルエビネ *Cal. dominii* と呼ばれる。花の色や形が変異に富み、個体ごとに異なるほどで、雑種個体群を含めて鑑賞目的に大量に盗掘されている。

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ツルラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Calanthe triplicata* (Willemet) Ames

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、3~6 葉を束生する。葉は卵状長楕円形、長さ 40~50 cm。花茎は長さ 50~80 cm で、密に多数の花をつける。花は白色で、萼片は長さ 1.2~1.5 cm、倒卵形~楕円形、花弁は長さ 1.2 cm、倒卵形、唇弁は長さ 1.2 cm、基部上面に 3 個の黄色または赤色の隆起があり、3 裂し、側裂片は長楕円形、長さ 4 mm、中央裂片は 2 深裂し、基部に長さ 1.5~2 cm の線状の距がある。

分布域 (県外) : 屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、小笠原、台湾、インド、中国南部、フィリピン、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、グアム、ニューカレドニア、フィジー諸島、マダガスカル。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、阿嘉島、石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : かつては極めて普通に見られる種であったが、近年は乱獲により激減し、限られた地域以外ではほとんど見られなくなった。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。野生化ヤギの増殖による食害と森林破壊 (魚釣島)。

備 考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和 名 : アカバシユスラン (タネガシマカイロラン、リュウキュウカイロラン)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Cheirostylis liukuensis* Masam.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎はやや肥厚して匍匐し、先は直立して、花序を含めて長さ 10~15 cm、5~7 葉を互生する。葉は卵形、長さ 1.5~3 cm、赤紫色を帯びる。総状花序は頂生し、2~8 花をつける。萼片と花弁は淡赤褐色、萼片は中央まで癒合し筒状となり、長さ 3~3.5 mm、花弁は披針形、長さ 3~3.5 mm、唇弁は白色で、基部に淡緑色~橙黄色の 1 対の斑点があり、長さ 5 mm、先は 2 裂して Y 字形になる。

分布域(県外) : 甌島、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、加計呂麻島、沖永良部島。

県内の分布 : 沖縄島北部、久米島。

生育環境 : 山地の自然林のやや明るい林床に生える。

生育状況 : 沖縄島北部(本部半島を含む)では数ヶ所で自生が確認されているが、いずれの場所でも個体数は少ない。久米島では近年確認されていない。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : アリサンムヨウラン (アノマラン、ヨシヒサラン)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Cheirostylis takeoi* (Hayata) Schltr.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎はやや肥厚して匍匐し、先は直立して、花序を含めて長さ 10~20 cm、2~5 葉を互生する。葉は卵形、長さ 2~4.5 cm、淡緑色。総状花序は頂生し、3~5 花をつける。花は平開せず、白色で、時にわずかに淡紅色を帯び、萼片は中央まで癒合し筒状となり、長さ 5~6 mm、花弁は長楕円状倒披針形、長さ 5~6 mm、唇弁は長さ 5~6 mm、舌状、全縁。

分布域(県外) : 奄美大島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、久米島。

生育環境 : 奄美大島では非石灰岩地に生えるが、沖縄島では山地の石灰岩地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では 3ヶ所に自生が知られるが、個体数は極めて少ない。久米島の現状は不明。

学術的価値 : 中琉球と台湾の固有種である。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

文 献 : 阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査(最終報告). 事業年報(平成 25 年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **バイケイラン (チクセツラン)**

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Corymborkis veratrifolia* (Reinw.) Blume

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 大型の常緑の多年草。茎は束生し、長さ 0.4~2 m になり、数~十数葉を互生する。葉は楕円形、暗緑色で、上面にやや光沢があり、長さ 20~35 cm。円錐花序は腋生し、多数の花をつける。花は白色、萼片と花弁は線状倒披針形、長さ 3.5~4 cm、唇弁は長さ 4 cm、基部は細長く、先端は楕円状円形。蕊柱は長さ 3 cm。

分布域(県外) : 台湾、小笠原、フィリピン、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア北部、フィジー諸島、サモア諸島。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の自然林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 石垣島では数ヶ所で自生が確認されているが、自生地は開発により減少している。西表島では3ヶ所の自生地があるが、個体数は非常に少ない。

学術的価値 : 小笠原諸島と共に分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。ダム建設による水没(石垣島)。

備考 : 小笠原諸島のものはチクセツラン *C. subdensa* と呼んで区別されることがある。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **オオスズムシラン**

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Cryptostylis arachnites* (Blume) Hassk.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎はごく短く、1~2葉をつけ、根はやや肥厚する。葉は卵形~卵状楕円形、長さ 15 cm、上面はほぼ一様な緑色で、長さ 10 cm の葉柄がある。総状花序は頂生し、長さ 50 cm になり、10~18花をつける。萼片と花弁は黄緑色、線形、萼片は長さ 1.3~1.7 cm、花弁は長さ 1.1 cm、唇弁は長さ 1.5~2 cm、狭卵形、橙色で、先端に赤褐色の細点が入る。

分布域(県外) : 台湾北部、中国南部、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア北部、ニューカレドニア、フィジー諸島。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 石垣島では1ヶ所、西表島では1ヶ所で確認されているが、いずれも現在は確認されない。

学術的価値 : 分布域の北限である。本属の種は、花がある種の雌のジガバチに擬態し、雄が花を雌と間違えて交尾しようとする際に花粉が媒介される疑似交尾現象を示すことが知られているが、日本産の種については確認されていない。昆虫と植物の共進化を探る上で生物学上貴重な存在である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発(石垣島)。野生化したウシによる踏みつけと食害(西表島)。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2016年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文 献 : 嘉数清信, 1984. 沖縄の野生ラン7, オオスズムシラン. 月刊おきなわ緑と生活, 40: 58-59.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35): 49-54.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **タカオオオスズムシラン**

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Cryptostylis taiwaniana* Masam.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。茎はごく短く、1~2 葉をつけ、根はやや肥厚する。葉は卵形~卵状楕円形、長さ 15 cm、上面に暗緑色の斑点があり、長さ 10 cm の葉柄がある。総状花序は頂生し、長さ 45 cm になり、約 20 花をつける。花は径 4 cm、萼片と花弁は線形、帯紫緑色、萼片は長さ 1.8 cm、花弁は長さ 1.1 cm、唇弁は長さ 2.5 cm、楕円状菱形、橙色で、全面に赤褐色の細点が入る。

分 布 域 (県 外) : 台湾南部、フィリピン。

県 内 の 分 布 : 西表島。

生 育 環 境 : 山地の自然林の陰湿な林床に生える。

生 育 状 況 : 自生地は 1ヶ所知られるだけで、狭い範囲に約 20 個体を産するだけであつたが、2015 年には 1 個体が観察されるだけになり、国内希少野生動植物種に指定された後の 2016 年にはその個体も見つけることができなくなった。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備 考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2015 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 横田昌嗣, 1993. 西表島新産のオオスズムシラン属 (ラン科) の 1 種について. 沖縄島嶼研究, (11): 33-41.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : **アキザキナギラン (オトメナギラン)**

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Cymbidium javanicum* Blume var. *aspidistrifolium* (Fukuyama) F. Maek.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。茎は直立し、高さ 30~55 cm になり、数枚の葉を互生する。葉は長楕円状披針形、長さ 5~20 cm、薄い革質。総状花序は偽球茎の下部から出て、3~20 花をつける。花は黄緑色で、萼片と花弁は長さ 2~2.5 cm、唇弁は長さ 2 cm、長楕円形、白色で上面に紅紫色の斑点が入り、下方に折れ曲がる。

分 布 域 (県 外) : 本州 (和歌山県)、四国 (高知県)、九州 (長崎県、宮崎県、鹿児島県)、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、インド、マレーシア。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、石垣島。

生 育 環 境 : 山地の自然林の林床に生える。

- 生育状況 : 沖縄島北部では、自生地は3ヶ所しかなく、個体数は極めて少ない。石垣島では1ヶ所にごく少数個体が確認されるだけで、花はまだ観察されていないが、植物体の形状から本種と同定される。
- 学術的価値 : 琉球列島では隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。沖縄島と徳之島の個体は国内の他の産地と比べて特に大形で、やや形態が異なり、分類学的な再検討が必要である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : カンラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Cymbidium kanran* Makino
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は小さく、数枚の葉をつける。葉は線形、長さ 40~60 cm。総状花序は葉より長く、数個の花をつける。花は径 5~7 cm、芳香があり、淡紫褐色~淡黄緑色で、萼片は長さ 3~4 cm、花弁は長さ 2~3 cm、唇弁は長さ 1.5~2 cm、3裂し、白色で紅紫色の斑点が入り、下方に折れ曲がる。
- 分布域(県外) : 本州(東海道以西)、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : かつては沖縄島北部の各地に点々と産したようであるが、乱獲により現在はほとんど見られない。現在も個体が確認されるのは、2ヶ所程度である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・比嘉清文(追補)

-
- 和名 : ナギラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Cymbidium lancifolium* Hook. f.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は細長く、長さ約 10 cm になり、2~3 枚の葉をつける。葉は長さ約 10 cm で、長い葉柄があり、革質。総状花序は腋生し 2~4 花をつける。花は黄白色で、径 4 cm、萼片は長さ 2.5~3 cm、花弁は 2 cm、唇弁は長さ 1.3 cm、白色で上面に紅紫色の斑点が入り、下方に折れ曲がる。
- 分布域(県外) : 本州南部、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 現在5ヶ所の自生地が知られるが、いずれの場所でも個体数は極めて少ない。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホウサイラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Cymbidium sinense* (Andrews) Willd.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接してならび、卵状円錐形、長さ 5 cm、3~5 葉をつける。葉は線状倒披針形、長さ 30~50 cm、幅 2~3 cm。総状花序は直立し、10 花程度を疎らにつけ、長さ 60 cm になる。花は芳香があり、径 5~6 cm、紫褐色、萼片は長さ 3.5 cm、花弁は長さ 2.5 cm、唇弁は白色で上面に紅紫色の斑紋が入り、長さ 2 cm、浅く 3 裂し、先は下方に折れ曲がり、上面に 2 列の板状隆起がある。

分布域(県外) : 屋久島、台湾、中国南部。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 石垣島と西表島のそれぞれ 1 ヶ所で確認されているが、いずれも現在は自生地で確認されない。

減少の要因 : もともと自生地で個体数が少ない。園芸用の採集。

文献 : 比嘉清文, 1983. 琉球植物分布メモ. 沖縄生物学会誌, (21) : 79-80.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*

和名 : オキナワセッコク
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Dendrobium okinawense* Hatusima et Ida
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は束生し、細長く垂れ下がり、長さ 70 cm になる。葉は互生し、長さ 10~12 cm。総状花序は各節から出て、普通 2 花をつける。花は白色または淡紅色で、半開し、径 5~6 cm。萼片と花弁は長さ 4 cm、唇弁は長さ 3 cm で、上面に 2 本の板状突起があり、その上に軟毛を密生する。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林内のイタジイやオキナワウラジロガシの大木の樹幹に着生する。

生育状況 : かつては沖縄島北部の高地にやや普通に見られたが、現在は国頭村、東村、大宜味村のごく限られた場所にわずかの個体が残るだけである。大宜味村では、絶滅した可能性がある。

学術的価値 : 沖縄島の固有種である。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。ダム建設による自生地の水没。もともと自生地で個体数が限られている。

備考 : セッコク *Den. moniliforme* と同種とする意見があるが、セッコクと比べて植物体と花が大形で、唇弁の形が異なる。最近台湾に産することが報告されているが (Chung & Lu, 2007)、唇弁の形態などが異なることから、オキナワセッコクであるかどうかは、詳細な比較研究が必要である。特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2008 年)。

文献 : Hatusima, S. & R. Ida, 1970. A new *Dendrobium* from Isl. Okinawa. J. Geobot., 18(3-4): 77-79.

Chung, S.-W. & S.-Y. Lu, 2007. *Dendrobium okinawense* Hatusima & Ida (Orchidaceae): A newly recorded species in Taiwan. *Taiwania*, 52(1): 106-112, 2007

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : キバナノセッコク

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Dendrobium tosaense* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は束生し、細長く垂れ下がり、長さ 25~100 cm。葉は互生し、披針形、長さ 2~7 cm。総状花序は偽球茎の先の数節から出て、3~8 花をつける。花は淡黄緑色で、径 3 cm。萼片は長さ 12 ~15 mm、花弁は長さ 10~12 mm、唇弁は長さ 12~15 mm で、卵形、上面中央に紫褐色の斑紋がある。

分布域(県外) : 四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、台湾。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。

生育状況 : 奄美大島では点々と産するが、石垣島では近年は全く確認されておらず、現状不明。

学術的価値 : 沖縄県で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 中国南部に産する *Den. stricklandianum* と同種とする見解がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : コカゲラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Didymoplexiella siamensis* (Rolfe ex Downie) Seidenf.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 葉を欠く小形の腐生の多年草。根は肥厚して塊根になる。茎は花序を含めて花時に長さ 10~30cm になり、淡褐色。総状花序は頂生し、20 個程度の花をつけ、1 個ずつ開花させる。背萼片と花弁と側萼片は半分程度が癒合して釣り鐘状となり、外面は赤褐色を帯び、内面は紫色を帯びた白色、長さ 5~8mm、唇弁は楔状さじ形、紫色、長さ 5~6mm、幅 2~3mm、基部上面に短い 2 個の隆起と中央部に棒状のディスクがある。薬柱は長さ 4mm、腹面に長さ 2mm の突起があり目立つ。花梗子房は長さ 0.4~1.4cm。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国南部(海南島、香港)、タイ、ベトナム。

県内の分布 : 久米島。

生育環境 : 山地の常緑広葉樹林の林床に生える。

生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみで、個体数は 2017 年には 3 個体確認されただけである。

学術的価値 : 沖縄県では唯一の記録で、隔離分布を示す本種の分布域をつなぐもので、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 国内では屋久島で初めて見つか(前川、1977)、その後種子島で発見され、奄美大島からも 2017 年に初めて記録された。

文献 : Hu, A.-Q., S.W. Gale, P. Kumar, G. Fischer & K.S. Pang, 2014, Taxonomic notes on *Didymoplexiella siamensis* and *Gastrodia peichatieniana*, two fully mycoheterotrophic orchids new to the flora of Hong Kong. *Ann. Bot. Fennici*, 51(1-2): 177-184.
前川文夫, 1977. コカゲラン (新称) の日本への分布. 植物研究雑誌, 52(2): 63-64.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ユウレイラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Didymoplexis pallens* Griff.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 葉を欠く小形の腐生の多年草。根は肥厚して塊根になる。茎は花序を含めて花時に長さ 5~6 cm になる。総状花序は頂生し、数花をつける。花は白色で、背萼片と花弁は基部で癒合し、側萼片は互いに癒合し、萼片は楕円状長楕円形、長さ 1 cm、花弁はやや短く、唇弁は広楔状三角形、長さ 5 mm、幅 6 mm、先は切形、牙齒縁で、上面の中央に 3 個の黄色の乳頭状突起がある。蕊柱の先には短い翼がある。

分布域 (県外) : トカラ列島、奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所に点々と産し、石垣島では 1ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。西表島と魚釣島の現状は不明。魚釣島では、増殖した野生化ヤギによる食害と森林生態系の破壊により絶滅した可能性がある。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。野生化ヤギによる食害(西表島)。

備考 : 植物体は小形で、梅雨時の短い開花期にのみ出現するので発見が難しく、分布に関する情報は少ない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ジョウロウラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Disperis siamensis* Rolfe ex Downie

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 夏緑性のごく小形の多年草。地中に長楕円形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 6~17 cm、1~2 葉をつける。葉は卵形、長さ 1 cm。総状花序は頂生し、1~3 花をつける。花は藤色、背萼片は披針形、長さ 6 mm、側萼片は癒合し Y 字状になり、側萼片に短い距があり、花弁は長楕円状披針形、背萼片と花弁は癒合して胃状になり、唇弁は長さ 3 mm、黄色で、3 裂し、先端に付属物がある。

分布域 (県外) : 台湾 (蘭嶼)、フィリピン、タイ。

県内の分布 : 石垣島、西表島

生育環境 : 山地の自然林の暗い林床に生える。

生育状況 : 石垣島では 3ヶ所に産するが、その内の 1ヶ所では近年全く確認されていない。他の 2ヶ所でも個体数は極めて少ない。西表島では 1ヶ所から報告されている (前川, 1974) が、現状は不明。

学術的価値 : ジョウロウラン属の分布の中心はアフリカにあり、種および属の分布域の北限であり、植物地理学上貴重である。

- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 植物体は小形で、夏の短い開花期にのみ出現するので発見が難しく、分布に関する情報は少ない。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献 : 前川文夫, 1974. 西表島のジョウロウラン. 植物研究雑誌, 49: 307-308.
横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32): 61-65.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : カキラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Epipactis thunbergii* A. Gray
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 湿地や湿った原野に生える夏緑性の多年生草本。茎は高さ 30~50 cm、7~8 個の葉を 2 列に互生する。葉は卵状披針形、長さ 5~10 cm、茎の上部の葉は徐々に小さくなり苞状となる。頂生する総状花序は 10 花程度をつけ、萼は橙褐色、狭長卵形、長さ 12~15 mm、花弁は白色、卵形、長さ 12~15 mm、唇弁は白色で上面に紅紫色の細点があり、3 裂し、長さ 12~15 mm。室果は狭長楕円形、長さ 2 cm。
- 分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、徳之島、ウスリー、中国東北部、朝鮮。
- 県内の分布 : 硫黄鳥島。
- 生育環境 : やや乾いた日当たりの良い草原または低木林の明るい林床に生える。
- 生育状況 : 自生地は 1 ヶ所知られるだけで、個体数はきわめて少ない。花や果実をつけた植物体は見つかっていない。硫黄鳥島は無人島であり、開発の可能性はないが、今回は調査を行うことができなかった。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 鹿児島県本土の一部、種子島、奄美大島、徳之島に産するものは、これまで花が確認されたものについてはすべて、唇弁が花弁化したペロリア型のイソマカキラン *E. thunbergii* f. *subconformis* Sakata であることから、硫黄鳥島のものはイソマカキランの可能性がある。奄美大島、徳之島、硫黄鳥島では、日本本土のカキランとやや異なり、やや乾いた原野に生える。
- 文献 : 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄鳥島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.
立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄鳥島の植物相. “沖縄県史資料編 13 硫黄鳥島”, 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

- 執筆者名 : 横田昌嗣*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : タシロラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Epipogium roseum* (D. Don) Lindl.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に長楕円形の球茎がある。茎は花序を含めて長さ 20~40 cm、乳白色。総状花序は頂生し、伸長中は點頭し、数~25 花をつける。花は乳白色で、淡紫色の細点がわずかに

入り、萼片と花弁は長さ7~12 mm、披針形、唇弁は長さ9~1.3 mm、卵形、基部に長さ4 mmの距がある。

分布域(県外) : 本州(関東以西南)、四国、九州、台湾、東南アジア、オーストラリア、ニューカレドニア、アフリカ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。石灰岩地でも非石灰岩地でも発生する。

生育状況 : 沖縄島では5ヶ所の自生地が知られるが、個体数は非常に少ない。その内、2ヶ所は開発される恐れがある。西表島では1938年に発見(Fukuyama, 1942)された以後永らく確認されていなかったが、2003年に2ヶ所で確認されている。石垣島でも最近確認されている。

学術的価値 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採(沖縄島)。

備考 : 近年分布域が拡大して北上しており、本州の各地で新産地が見つかっている。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : Fukuyama, N., 1942. Orchidaceae liukiensis novae vel minus cognitae. I. Trans. Nat. Hist. Soc. Formos., 32: 241-244.

阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査(最終報告). 事業年報(平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : オオオサラン(ホザキオサラン)

分類 : ラン科(APG科名: ラン科)

学名 : *Eria corneri* Rchb. f.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B類(EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類(EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。根茎は匍匐し、偽球茎を5 mm程度の間隔でつける。偽球茎は長さ3~6 cm、角張った卵形、先に2葉をつける。葉は長楕円状倒披針形、長さ20~25 cm。総状花序は頂生し、長さ8~25 cm、5~16花をつける。花は淡黄白色、萼片は長さ8~11 mm、長楕円状披針形、花弁は長さ8~9 mm、線状長楕円形、唇弁は長さ1 cm、3裂し、側裂片は短く、中央裂片は三角形、上面に3~7本の板状の突起があり、先端は時に赤色を帯びる。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林の樹幹や岩上に着生する。沖縄島では主に石灰岩地に、石垣島では非石灰岩地に産する。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では3ヶ所で確認されているが、個体数は非常に少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・豊見山元(追補)・松島昭司(追補)

和名 : リュウキュウセッコク

分類 : ラン科(APG科名: ラン科)

学名 : *Eria ovata* Lindl.

カテゴリー : 絶滅危惧 II類(VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類(EN)

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。偽球茎は束生し、長さ10~23 cm、円柱形、上部に4~7葉を互生する。葉は長さ12~17 cm、長楕円形。総状花序は腋生し、褐色の短毛が生え、長さ10~15 cm、花柄の短い多数の花をつける。花は淡黄白色、萼片と花弁は長さ10~12 mm、披針形、唇弁は長さ4 mm、卵形、基部上面に2本の赤色の隆起がある。
- 分布域(県外)** : 台湾、フィリピン。
- 県内の分布** : 西表島、魚釣島。
- 生育環境** : 山地の自然林の樹幹に着生し、しばしばマット状の群落を作る。
- 生育状況** : 西表島では点々と自生するが、乱獲により個体数は年々減少している。魚釣島では高地の岩上や地上に生え、野生化ヤギによる食害されている恐れが高い。
- 学術的価値** : 分布域の北限である。
- 減少の要因** : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。西表島では、着生している樹木が倒壊している事例がかなり確認されている。野生化ヤギによる食害と森林生態系の破壊(魚釣島)。
- 保全対策** : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である
- 備考** : 奄美大島に産するとの報告があるが、疑問視されている。葉先が尖り、花序が無毛の型はフシナシオサラン *E. ovata* var. *retroflexa* と呼んで区別されることがあり、魚釣島と西表島に産する(Garay & Sweet, 1974)。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献** : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. Orchids of Southern Ryukyu Islands. Harvard University, 113-114.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)

-
- 和名** : オサラン
- 分類** : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名** : *Eria reptans* (Franch. et Sav.) Makino
- カテゴリー** : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴** : ごく小形の夏緑性の多年草。偽球茎は接して数個並び、長楕円形、長さ1~2.5 cm、先に2葉をつける。葉は長楕円形、長さ3~8 cm。総状花序は頂生し、1~3花をつける。花は乳白色、萼片と花弁は長さ7~8 cm、広披針形、唇弁は黄色で、赤色を帯び、長さ9 mm、3裂し、側裂片は三角状卵形、中央裂片は円形、上面に2~3列の隆起がある。
- 分布域(県外)** : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、台湾。
- 県内の分布** : 沖縄島北部。
- 生育環境** : 高地の樹上または岩上に着生する。奄美大島では山地の自然林の樹枝や岩上に着生し、しばしば群生する。
- 生育状況** : 1974年に前川文夫博士によって採集された標本が国立科学博物館(TNS)に収蔵することが確認された。花も果実もないうえ葉もなく、6個の偽球茎が連結しただけの不十分な標本であるが、他に類似した種がないことから本種と同定される。近年は全く確認されておらず、現状不明。
- 学術的価値** : 沖縄県で唯一の産地である。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
- 文献** : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. Orchids of Southern Ryukyu Islands. Harvard University, 111-113.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : **ホソフデラン**
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Erythroides formosana* Schltr.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、先端は直立し、長さ 30~60 cm、3~4 枚の葉を互生し、先端に総状花序をつける。葉は斜楕円形、長さ 5~10 cm、3 脈が目立つ。総状花序は長さ 20~40 cm、多花を密につける。花は赤褐色、萼片と花弁は長さ 5~6 mm、唇弁は 3 浅裂し、長さ 7 mm、白色で、基部は長さ 3 mm の距となり、距は先端が 2 浅裂し、内部には突起がない。

分布域 (県外) : 台湾。
 県内の分布 : 石垣島。
 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
 生育状況 : 1 ヶ所で少数個体が観察されただけである。その後、自生地は通信施設の建設で開発されたため、現在は見られない。
 学術的価値 : 分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が極めて少ない。自然林の伐採。
 備考 : 近年、携帯電話などの中継塔や通信施設が各地に建設されているが、雲霧帯や風衝地などの特殊で脆弱で局所的な環境に建設する際は、十分な環境影響評価が必要である。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Erythroides blumei* として評価。

文献 : 横田昌嗣, 1996. ミヤマウズラ. 週刊朝日百科, 植物の世界, 104: 244.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : **エダウチャガラ**
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Eulophia graminea* Lindl.
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 冬緑性の多年草。偽球茎は球形で、長さ幅とも 4 cm になり、数葉をつけるが、花時は無葉。葉は線状披針形、長さ 30 cm。総状花序は腋生し、単一または分枝し、長さ 40 cm になり、疎らに多数の花をつける。花は紫褐色を帯びた黄緑色、萼片と花弁は長さ 1.2 cm、線状長楕円形、唇弁は白色で、淡赤色を帯び、長さ 1.2 cm、倒卵形、3 裂し側裂片は小さく、中央裂片は倒卵形、上面に糸状突起が密生し、基部に長さ 3 mm の 2 浅裂する距がある。

分布域 (県外) : 徳之島、台湾、中国南部、インドシナ、タイ、マレーシア、ヒマラヤ、インド、スリランカ。
 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、渡嘉敷島、阿嘉島、久米島、宮古島、石垣島、西表島。
 生育環境 : 日当たりのよい草地や原野に生える。芝生や路傍などの人為的な環境にも多く見られるが、遷移が進んで日当たりが悪くなると消失する。
 生育状況 : 沖縄島では北部から南部まで点々と産するが、その他の島ではまれである。今回の調査で伊平屋島と伊是名島では、各 1 ヶ所で少数個体が観察された。
 学術的価値 : 分布域のほぼ北限にあたる。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。

文 献 : 宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 143-168.
新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.
立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・仲宗根忠樹(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : タカサゴヤガラ

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Eulophia taiwanensis* Hayata

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 冬緑性の多年草。偽球茎は卵形～球形、長さ 1.5～3 cm。葉は線形、長さ 30～50 cm。総状花序は数～15 花をつける。花は半開し、紫色を帯びた淡黄緑色、径 1.5 cm、萼片と花弁は長さ 11 mm、唇弁は長さ 1 cm、白色、3 浅裂し、上面に 3 列の長い板状突起と多数の糸状突起があり、距は長さ 4～5 mm。

分布域 (県外) : 台湾。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部。

生 育 環 境 : 日当たりのよい湿った草地や明るい林床に生える。

生 育 状 況 : 4 ヶ所の自生地が知られるが、生育は狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。その内 2 ヶ所では絶滅した恐れがある。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。ゴルフ場建設。軍事基地の建設。

備 考 : エダウチヤガラ *E. graminea* に酷似しており混同されていたが、最近 (横田・治井, 1993) になってから自生が確認された種である。IUCN カテゴリー: Endangered (EN)。

文 献 : 横田昌嗣・治井正一, 1993. 日本新産のタカサゴヤガラ (ラン科) について. 沖縄生物学会誌, (31) : 47-51.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : イモネヤガラ

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Eulophia zollingeri* (Rchb. f.) J. J. Smith

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 無葉の多年草。偽球茎は楕円形、やや扁平で、長さ 10 cm になる。総状花序は長さ 40 cm になり、20～30 花をつける。花は紫褐色、萼片と花弁は長さ 17～20 mm、長楕円状卵形、唇弁は広楔状三角形、長さ 17 mm、3 裂し、側裂片は円形、中央裂片は三角形、上面に 2 個の隆起と短毛があり、基部に短い距がある。

分布域 (県外) : 九州 (宮崎県、鹿児島県)、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、台湾、フィリピン、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、久米島、阿嘉島、石垣島。

- 生育環境 : 低地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では北部から南部までの各地で、石垣島では2ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。伊平屋島では2ヶ所で、阿嘉島では1ヶ所で、久米島では1ヶ所で確認されているが、久米島では自生地の開発で絶滅した可能性がある。伊是名島の現状は不明。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 花と植物体に褐色の着色を欠き、全体が緑色を呈するものはミドリイモネヤガラ *E. zollingeri* f. *viride* と呼ばれ (Yokota, 1998)、沖縄島中部を基準産地として記載されているが、その自生地はゴルフ場建設で開発され、絶滅した可能性が高い。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。
- 文献 : 宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告書, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 143-168.
新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.
Yokota, M., 1998. A new form of *Eulophia zollingeri* (Orchidaceae) from the Ryukyus. J. Phytogeogr. Taxon., 46: 183-185.
横田昌嗣・島袋憲一, 1992. 琉球列島植物分布資料 10. 沖縄生物学会誌, (30) : 81-83.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : タカツラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Galeola altissima* (Blume) Rchb. f.
- カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 無葉のつる性多年草。茎は紫色を帯びた黄色で、分枝し、長さ20mに達し、放射状に分枝するやや扁平な根で基物に付着する。円錐花序は腋生し、長さ15~30cm、分枝して多数の花をつける。花は橙黄色、萼片と花弁は長さ1.2cm、線状長楕円形、唇弁は長さ1cm、広倒卵形、上面中央に2個の有毛の突起がある。
- 分布域(県外) : 屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、フィリピン、インド、インドシナ、ジャワ。
- 県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生え、イタジイなどの樹幹に這い上がる。
- 生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では2ヶ所、西表島では2ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。与那国島では1971年に確認された後、見つかっていない。伊平屋島では、2012年に1ヶ所で確認されている。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)*。**Erythrorchis altissima* として評価。
- 文献 : 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.
横田昌嗣・宮城康一, 1988. 琉球列島植物分布資料 6. 沖縄生物学会誌, (26) : 35-37.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・仲間正和(追補)

和名 : カシノキラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Gastrochilus japonicus* (Makino) Schltr.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長さ 2~10 cm、葉を 2 列に互生する。葉は革質で、線状長楕円形、長さ 3~9 cm。散房状花序は腋生し、長さ 1~3 cm、4~10 花をつける。花は淡黄緑色で、萼片と花弁は長さ 4 mm、長楕円形、唇弁は長さ 4 mm、基部は嚢状となり、先端は広三角形、白色で、基部に淡赤色の斑紋があり、先端に黄色の丸い斑紋がある。

分布域 (県外) : 本州 (関東以西南)、四国、九州、屋久島、奄美大島、請島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。

生育状況 : かつてはやや普通に見られたものと思われるが、現在は沖縄島の数ヶ所、石垣島の 3 ヶ所、西表島の数ヶ所に自生が確認されるだけで、個体数は少ない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採 (沖縄島)。もともと自生地が少ない。ダム建設による自生地の水没 (沖縄島)。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・國府方吾郎(追補)

和 名 : ツボミヤツシロラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Gastrodia clausa* T.-C. Hsu, S.-W. Chung & C.-M. Kuo

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は花時長さ 2~4cm、花後伸長して長さ 14~43cm になる。総状花序は頂生し、1~6 花をつける。花は帯紫褐色、平開せず、萼片と花弁と唇弁は大部分癒合して筒状になり、萼片は長さ 9~13mm、花弁は斜卵形、唇弁は黄褐色で、長さ 3.5~4.5mm、卵状三角形、基部に 1 対の球形の突起がある。果実は円柱形、長さ 2~3.3cm。

分布域 (県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部~中部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島の数ヶ所に自生地が知られるだけである。

学術的価値 : 分布域の北限であり、沖縄県と台湾の植物相の高い類似性を示すものである。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。軍事演習。

備考 : 最近になって台湾から記載された種 (Hsu *et al.*, 2012) で、国内からは 2013 年に報告された (Suetsugu *et al.*, 2013)。花期が短く、花時には植物体が目立たず発見が難しい。果実期には植物体は伸長するのでやや見つけやすくなるが、正確な種の同定が困難であり、分布に関する正確な情報が少ない。

文 献 : Hsu, T.-C., S.-W. Chung & C.-M. Kuo. 2012. Supplements to the Orchid Flora of Taiwan (VI). 2012. *Taiwania*, 57(3): 271-277.

Suetsugu, K., M. Nakama, T. Watanabe, H. Watanabe, T. Yamamoto & M. Yokota. 2013. First record of the mycoheterotrophic plant *Gastrodia clausa* (Orchidaceae) from Okinawa Island, Ryukyu Islands, Japan. *Acta Phytotax. Geobot.* 64(3): 155-158.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : コンジキヤガラ
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Gastrodia javanica* (Blume) Lindl.
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に楕円形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 35~60 cm。総状花序は頂生し、4~18 花を疎らにつける。花は黄色、萼片と花弁は半分以上癒合して筒状になり、長さ 1 cm、花弁は円形で、長さ 2.5 mm、唇弁は長さ 8 mm、菱形状匙形。
- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン、マレーシア。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 石垣島と西表島ではいずれも数ヶ所に産するが、個体数は少ない。与那国島の現状は不明。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。マレーシア系の植物で、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 本種の植物体と花が緑青色を呈するものは、ヒスイヤガラ *G. javanica* f. *thalassina* Yokota と呼ばれ (Yokota, 1998)、石垣島固有である。石垣島の 1ヶ所に基本品種と共に産したが、公園整備のための森林伐採で絶滅した。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : Yokota, M., 1998. A new form of *Gastrodia javanica* (Orchidaceae) from the Ryukyus. *Acta Phytotax. Geobot.*, 49(2): 147-150.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ハルザキヤツシロラン (ヤンバルヤツシロランを含む)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Gastrodia nipponica* (Honda) Tuyama
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は花時長さ 3.5~4 cm、花後伸長して長さ 20~ 30 cm になる。総状花序は頂生し、1~3 花をつける。花は帯紫褐色、萼片と花弁は大部分癒合して筒状になり、長さ 2.3 cm、唇弁は黄色で、長さ 9 mm、三角状広卵形、基部に 1 対の球形の突起がある。
- 分布域(県外) : 本州 (和歌山県)、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、喜界島。
- 県内の分布 : 沖縄島北~中部、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 山地の自然林や二次林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島と西表島ではいずれも数ヶ所に点々と自生地が知られるが、個体数は少ない。与那国島では 1ヶ所に少数個体を産する。ハルザキヤツシロランに酷似するヤンバルヤツシロラン *G. nipponicoides* Suetsugu がごく最近新種記載された (Suetsugu, 2017)。ハルザキヤツシロランに似るが、花冠がやや短く、唇弁上面の板状隆起が 2 列と少なく、小嘴体を欠き、柱頭が薬柱の上部にある点で区別できると言うが、花を解剖しないと同定が難しいため、ハルザキヤツシロランとヤンバルヤツシロランの正確な分布情報はごく限られている。今のところ、ヤンバルヤツシロランの確実な自生地は、沖縄島北部に限られている。
- 学術的価値 : 分布域の南限である (ヤンバルヤツシロランは、沖縄島の固有種である)。

- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。ダム建設による水没（沖縄島）。
- 備考 : 花期が短く、花時には植物体が目立たず発見が難しい。果実期には植物体は伸長するのでやや見つけやすくなるが、正確な種の同定が困難であり、分布に関する正確な情報が少ない。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動物植物種（2017年）。
- 文献 : 横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.
Suetsugu, K., 2017. Two new species of *Gastrodia* (Gastrodieae, Epidendroideae, Orchidaceae) from Okinawa Island, Ryukyu Islands, Japan. *Phytotaxa*, 302(3): 251-258.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣（追補）

和名 : ツツガタヤツシロラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Gastrodia okinawensis* Suetsugu
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は花時長さ 10~17cm、花後もほとんど伸長しない。総状花序は頂生し、1~4 花をつける。花は帯紫褐色、萼片と花弁は大部分癒合して筒状になり、長さ 18~21mm、唇弁は淡緑色で、長さ 10mm、菱形状楕円形、基部に 1 対の球形の突起がある。薬柱は長さ 7~8mm。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島の基準産地 1ヶ所と他に 1ヶ所の自生地が知られるだけである。
学術的価値 : ごく最近になって記載された (Suetsugu, 2017) 沖縄県の固有種であり、沖縄島北部の生物多様性の高さを示すものとして貴重である。
- 学術的価値 : ごく最近になって記載された (Suetsugu, 2017) 沖縄県の固有種であり、沖縄島北部の生物多様性の高さを示すものとして貴重である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。軍事演習。
- 備考 : 花期が短く、花時には植物体が目立たず発見が難しい。果実期には正確な種の同定が困難であり、分布に関する正確な情報が少ない。
- 文献 : Suetsugu, K. 2017. Two new species of *Gastrodia* (Gastrodieae, Epidendroideae, Orchidaceae) from Okinawa Island, Ryukyu Islands, Japan. *Phytotaxa*, 302(3): 251-258.
- 執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ナンゴクヤツシロラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Gastrodia shimizuana* Tuyama
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴 : 葉を欠くごく小形の腐生の多年草。根茎はやや肥厚し、長さ 4~9 cm、幅 6~10 mm、三角形の葉鞘で包まれる。茎は直立し、花序を含めて長さ 4~8 cm、短い筒状の苞がある。総状花序は頂生し、1~6 花をつける。花は黄褐色、萼片と花弁は半分以上にわたって癒合し鐘形となり、先端は広く開き、径 13~14 mm、背萼片の遊離部は長さ 8.5~10 mm、広卵形、側萼片の遊離部は長さ 10.5~12.6

mm、幅 6.5~10 mm、広卵形、花弁の遊離部は円形~広卵形、長さ 3.3~4.6 mm、幅 3.5~5.1 mm。唇弁は 3 裂し、長さ 4.4~5.3 mm、中央裂片に 2 個の板状隆起があり、側裂片は半円状三角形、縁毛があり、上面はやや有毛、基部に 2 個の球形の隆起がある。蕊柱は長さ 4.2~4.5 mm、幅 4.1~4.5 mm。果実は長さ 25~34 mm、小果柄はハルザキヤツシロラン *G. nipponica* と同様、花後に伸長し、長さ 15~35 cm。種子は紡錘形、長さ 2.5~3 mm。

- 分布域 (県外) : 台湾。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
- 生育環境 : 西表島では、山地の川沿いのオキナワウラジロガシなどの自然林の林床に生える。沖縄島では石灰岩地に生える。
- 生育状況 : 西表島で 1 度記録された (Tuyama, 1982) だけであったが、2001 年に 2 ヶ所で再発見された (Kobayashi & Yukawa, 2001)。その 2 ヶ所では数年にわたって開花が確認されたが、最近では確認されていない。沖縄島では古生層石灰岩地の 2 ヶ所で発見されたが (Suetsugu *et al.*, 2012)、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 沖縄県と台湾の固有種で、両地域の植物相の類似性を示している。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が極めて少ない。
- 備考 : ハルザキヤツシロランと同様に開花期には発見が難しい。台湾にも産することが報告されている (Chung & Hsu, 2006)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : Chung, S.-W. & T.-C. Hsu, 2006. *Gastrodia shimizuana*, a newly recorded of *Gastrodia* (Orchidaceae) in Taiwan. *Taiwania*, 51(1): 50-52.
 Kobayashi, S. & T. Yukawa, 2001. Rediscovery of *Gastrodia shimizuana* Tuyama (Orchidaceae) on Iriomote Island, Japan. *Acta Phytotax. Geobot.*, 52: 49-55.
 Suetsugu, K., M. Nakama, T. Watanabe, H. Watanabe & M. Yokota, 2012. The northernmost locality of *Gastrodia shimizuana* (Orchidaceae). *J. Jpn. Bot.*, 87(1): 67-69.
 Tuyama, T., 1982. A new *Gastrodia* from the Ryukyus. *Acta Phytotax. Geobot.*, 33: 380-382.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・仲間正和(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : トサカメオトラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Geodorum densiflorum* (Lam.) Schltr.
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は偏球形、長さ 4~5 cm、2~3 葉を束生する。葉は線状長楕円形、長さ 20~50 cm。総状花序は腋生し、花時點頭して、密に多数の花をつけ、果実期には直立する。花は白色またはまれに淡紫色、萼片と花弁は長さ 1~1.1 cm、長楕円形、唇弁は長さ 1.1 cm、船形、上面に紫条があり、基部中央に黄色の突起がある。
- 分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、ポリネシア、オーストラリア、ニューカレドニア、フィジー諸島。
- 県内の分布 : 沖縄島、阿嘉島、宮古島、伊良部島、下地島、多良間島、石垣島、西表島、鳩間島、小浜島、与那国島。
- 生育環境 : 山地の明るい林縁や草地に生える。遷移が進行して森林になると消失する。
- 生育状況 : 沖縄島、石垣島、西表島では以前はやや普通に見られたが、近年個体数は急激に減少している。阿嘉島では少数個体が確認されている (石川・石田, 1988)。宮古島では近年確認されていない。下地島と多良間島では少数個体が 2013 年に確認されている。小浜島では 2014 年に 1 ヶ所で数個体が確認されている。与那国島の現状は不明。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : もともと自生地が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。

備 考 : 花は白色が普通であるが、県内には極めてまれに紫色を帯びる個体がある。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文 献 : Shinjo, K., 1977. Flora of Hatoma Island, the Yaeyama Islands. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 3: 29-40.
石川 敦・石田 仁, 1988. 琉球列島植物分布資料 5. 沖縄生物学会誌, (26) : 31-34.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・佐藤宣子(追補)

和 名 : ツユクサシユスラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Goodyera foliosa* (Lindl.) Benth. ex Hook. f.

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長く匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ10~30 cmになり、やや疎らに4~6葉を互生する。葉は卵状楕円形~卵形、長さ4~7 cm。総状花序は頂生し、短毛が多く、6~7花をつけ、花より短い数個の包葉がある。花は半開し、紅色を帯びた淡緑褐色、萼片は長さ7~9 mm、長楕円形~狭卵形、花弁は菱形状倒披針形、長さ8~9 mm、唇弁は狭卵状嚢形、長さ7~8 mm、基部は嚢状で上面に多数の短毛が生える。

分布域(県外) : 九州(五島列島、鹿児島県)、屋久島、トカラ列島。

県内の分布 : 沖縄島北部?、石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の自然林の林床に生え、しばしば群生する。

生育状況 : 石垣島は1ヶ所、西表島は2ヶ所の自生地が確認されており、いずれも群生するのですぐに絶滅する恐れはないが、個体数は年々減少している。

学術的価値 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集(沖縄島)。自生地の開発(石垣島)。放牧されたウシによる踏みつけ(西表島)。

備 考 : 植物体はクニガミシユスラン *G. sonoharae* とよく似ており、花がないと区別できない。沖縄島北部の個体はすべてクニガミシユスランである可能性がある。個体が多い割には開花する個体が少なく、分布に関する正確な情報は乏しい。クニガミシユスランとの関係は、分類学的に再調査する必要がある。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : ヤブミョウガラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Goodyera fumata* Thwaites

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ70 cmになり、4~6葉を互生する。葉は広披針形、長さ20 cm。総状花序は頂生し、多数の花をつけ、数個ずつ順次咲かせる。花は赤褐色、唇弁は淡黄褐色で先端は白色、萼片は長さ7~8 mm、長楕円形~卵状長楕円形、花弁は長さ7~8 mm、線状倒披針形、唇弁は長さ7~8 mm、卵形で、先は尖り下方に反り返り、基部はやや嚢状になり、上面に短毛が生える。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、フィリピン、スリランカ、インド、タイ、ジャワ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

- 生育環境 : 山地の石灰岩地の林床に生える。
- 生育状況 : 自生地は3ヶ所が知られるだけで、個体数は極めて少ない。その内1ヶ所では現在は全く発見されない。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。自生地の開発。採石。
- 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017年)。
- 文献 : 横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : ナンバンキンギンソウ
- 分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
- 学名 : *Goodyera grandis* (Blume) Blume
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 50 cm になり、数葉を互生する。葉は長さ 13~15 cm、斜卵状長楕円形~楕円形、葉脈の部分はやや濃緑色で、葉に網目状の淡い斑紋が入る。総状花序は頂生し、7~8月に多数の花を密につけ、花茎には3個程度の鱗状葉をつける。花は淡赤褐色で、唇弁は淡黄色、萼片は長さ7~9 mm、長楕円形、花弁は長さ7~8 mm、匙形、唇弁は長さ6~7 mm、卵状嚢形、先は尖り下方に反り返り、基部上面に短毛がある。
- 分布域(県外) : 徳之島、台湾、フィリピン、タイ、マレーシア、オーストラリア北部、サモア諸島。
- 県内の分布 : 沖縄島(北部~南部)、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。徳之島と沖縄島では石灰岩地に、石垣島と西表島では非石灰岩地に産する。
- 生育状況 : 沖縄島では4ヶ所、石垣島では数ヶ所、西表島では2ヶ所の自生地が確認されている。沖縄島ではときに群生する場合があるが、他の島嶼では個体数は少ない。個体数が多い場合でも、開花結実する個体は限定される。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。採石。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
- 文献 : 阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : カゴメラン
- 分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
- 学名 : *Goodyera hachijoensis* Yatabe var. *matsumurana* (Schltr.) Ohwi
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 15~30 cm になり、4~8 葉を互生する。葉は斜卵状楕円形~狭卵形、長さ 3~8 cm、脈に沿って網目状の白斑が入る。総状花序は頂生し、密に多数の花をつける。花は淡紅白色、萼片は長さ 3~4 mm、卵形~長楕円状卵形、花弁は長さ 3~4 mm、倒披針形、唇弁は長さ 3~4 mm、広卵形、基部は囊状で、上面に毛が生え、黄色。
- 分布域 (県外)** : 伊豆諸島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。
- 県内の分布** : 伊平屋島、沖縄島北部、阿嘉島、久米島、石垣島、西表島、内離島、魚釣島。
- 生育環境** : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況** : かつては普通に見られたが、最近では極めてまれな種になった。
- 学術的価値** : 葉の中央に帯状の白斑が入る基本変種はハチジョウシユスラン (ヤクシマシユスラン) と呼ばれ、伊豆諸島の他に沖縄県内にも点々と産し、カゴメランと混生するが、個体数はより少ない。花の形、葉の形と斑紋などに地理的変異が多く、分類学的な再検討が必要である。
- 減少の要因** : 園芸用の採集。自然林の伐採。野生化ヤギによる食害 (魚釣島)。
- 備考** : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 保全対策** : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和名** : ヒゲナガキンギンソウ
- 分類** : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名** : *Goodyera longibracteata* Hayata
- カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。植物体も花もナンバンキンギンソウ *G. grandis* に非常によく似ている。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 50 cm になる。葉は 6~8 枚つき、長さ 7~14 cm、斜卵状長楕円形~楕円形、ナンバンキンギンソウと異なりほぼ一様な緑色を呈する。総状花序は頂生し、2~4 月に多数の花を密につけ、花茎には 6 個程度の鱗状葉をつける。花は赤褐色で、唇弁は黄色、萼片は長楕円形、長さ 7~8 mm、萼片は線状匙形、長さ 7 mm、唇弁は卵状囊形、長さ 6 mm、先は尖り下方に反り返り、基部上面に短毛がある。
- 分布域 (県外)** : 台湾、フィリピン (バタン島)。
- 県内の分布** : 石垣島、西表島。
- 生育環境** : 山地の自然林の林床に生え、ナンバンキンギンソウと側所的に生えることがあるが、混生はしない。
- 生育状況** : 石垣島では 5 ヶ所に産することが確認されているが、個体数は少ない。最も個体数の多い 1 ヶ所は開発される恐れがある。石垣島の 1 ヶ所では、おそらく薬用の採集により、群生していた集団がほぼ消失した。西表島では 2 ヶ所に産し、個体数は極めて少ない。
- 学術的価値** : 分布域の北限である。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用・薬用の採集。自然林の伐採 (石垣島)。
- 備考** : ナンバンキンギンソウに極めて似ており、近年になって県内に産することが認識された種 (橋本ら, 1991) である。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 橋本 保・神田 淳・村川博実, 1991. カラー版野生ラン. 家の光協会, 295pp.
横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32) : 61-65.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和名 : クニガミシュスラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Goodyera sonoharae* Fukuyama
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長く匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 10~15 cm になり、やや疎らに 5~8 葉を互生する。葉は卵形~卵状長楕円形、長さ 2~3 cm。総状花序は頂生し、短毛が多く、数花をつけ、花より長い数個の包葉がある。花はやや平開し、緑褐色を帯びた淡紅白色、萼片は長さ 6~7 mm、長楕円形~卵状長楕円形、花弁はやや菱形、長さ 6 mm、唇弁は狭卵状嚢形、長さ 4~5 mm、基部は嚢状で上面に多数の毛が生える。

分布域 (県外) : 徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 原記載では 2ヶ所の産地が記録されている (Fukuyama, 1942)。本種と確認された個体群は、国頭村の 2ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。

学術的価値 : 沖縄島と徳之島の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自然林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 琉球列島に広く産するツククサシュスラン *G. foliosa* との関係が十分には理解されておらず、分類学的な再検討が必要である。

文献 : Fukuyama, N., 1942. Orchidaceae liukiensis novae vel minus cognitae. III. Trans. Nat. Hist. Soc. Formos., 32: 297-299.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : シュスラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Goodyera velutina* Maxim. ex Regel
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長く匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 10~15 cm になり、数葉を互生する。葉は長楕円状卵形~卵形、長さ 2~4 cm、濃緑色で普通紫色を帯び、中肋に沿って白条が入る。総状花序は頂生し、短毛が多く、4~15 花をつけ、花より短い包葉がある。花は半開し、赤褐色を帯びた白色、萼片は長さ 7~8 mm、狭卵形、花弁は広倒披針形、長さ 7~8 mm、唇弁は舌状嚢形、長さ 7~8 mm、基部は嚢状で上面に多数の毛が生える。

分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、朝鮮、台湾、中国中部。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 自生地は 1ヶ所が知られるだけで、ごく狭い範囲に産し、個体数は少ない。

学術的価値 : 琉球列島で唯一の産地である。開花する成熟個体は少なく、花の詳細な観察はなされていない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

文献 : 比嘉清文, 1983. 琉球植物分布メモ. 沖縄生物学会誌, (21) : 79-80.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・比嘉清文*

和名 : シマシユスラン (オオシユスラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Goodyera viridiflora* (Blume) Blume

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎はやや匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 8~20 cm になり、3~5 葉を互生する。葉は斜卵形~狭卵形、長さ 2~4 cm。総状花序は頂生し、1~5 花をつける。花は赤色を帯びた緑褐色、萼片と花弁は長さ 9~11 mm、萼片は長楕円形、花弁は倒披針状菱形、唇弁は長さ 9~11 mm、卵形、先端は尖り下方に反り返り、基部は囊状で、上面に短毛が密生する。

分布域 (県外) : 九州 (鹿児島県)、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、ヒマラヤ、タイ、フィリピン、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ソロモン諸島、ニューカレドニア。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : かつてはやや普通に見られたが、近年は乱獲により急激に個体数が減少している。特に沖縄島では極めてまれで、ほとんど見かけない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*

和名 : ダイサギソウ

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Habenaria dentata* (Sw.) Schltr.

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。地中に楕円形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 30~60 cm、4~7 葉を互生する。葉は長楕円状披針形、長さ 7~10 cm、葉縁は白色。総状花序は頂生し、5~15 花を密につける。花は白色、萼片は長さ 1~1.2 cm、卵形、花弁は長さ 8~9 mm、披針形、唇弁は長さ 1.5 cm、扇形、3 裂し、側裂片は倒卵形で縁は細裂し、中央裂片は舌状、基部に長さ 3 cm の距がある。

分布域 (県外) : 本州 (千葉県)、四国、九州、種子島、中之島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、フィリピン、インド、タイ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島、西表島。

生育環境 : 低地の日当たりのよい草地や原野に生える。遷移が進行して森林になると衰退する。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では数ヶ所、以前と比べると個体数は非常に減っている。沖縄島ではゴルフ場造成で消滅した自生地がある。西表島では 2 ヶ所で確認されているが、近年は確認されていない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。遷移の進行。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 新里孝和・比嘉 寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14) : 99-110.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : タカサゴサギソウ

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Habenaria formosana* Schltr.

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 冬緑性または夏緑性の多年草。地中に楕円形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 20~30 cm、基部に 4~6 葉をロゼット状につける。葉は楕円形~長楕円状披針形、長さ 6~7 cm。総状花序は頂生し、多数の花を密につける。花は淡黄緑色、萼片は長楕円形、長さ 3~4 mm、花弁は長さ 4 mm、楕円形、唇弁は 3 裂し十字形となり、側裂片は長さ 5~8 mm、中央裂片は長さ 1.5~2 mm、基部に長さ 1~2 mm の距がある。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 低地から山地の自然林や二次林の明るいやや乾いた林床や林縁に生える。

生育状況 : 沖縄島では各地に産し、石垣島では 1 ヶ所、西表島では 3 ヶ所、与那国島では 1 ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。西表島では、かつて自生していたリュウキュウマツ林の遷移の進行で、個体数が減少している。与那国島では、今回の調査で初めて自生が確認された。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。遷移の進行。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究 (与那国島・石垣島). “事業年報 (平成 27 年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : リュウキュウサギソウ (ナメラサギソウ)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Habenaria longidenticulata* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根は肥厚し、やや塊根状になる。茎は直立し、花序を含めて長さ 30~60 cm、茎の中央部付近に 5~7 葉を束生する。葉は倒卵状長楕円形、長さ 10~17 cm、黄緑色で、光沢はない。総状花序は頂生し、多数の花を密につける。花は淡緑色、萼片は卵状長楕円形、長さ 1.5 cm、花弁は糸状線形、基部で深く 2 裂し、長さ 3 cm、唇弁は長さ 3 cm、3 裂し、裂片は糸状線形、基部に長さ 1.5 cm の線形の距がある。

分布域(県外) : 宝島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の自然林や二次林の湿った林床に生える。

生育状況 : 本来はやや普通に見られる種であるが、近年は自生地の数が減少している。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 本種は東南アジアに広く産するイトヒキサギソウ *H. polytricha* に近縁で、同種と見なす意見もあるが、両者は明らかに別種である。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : テツオサギソウ (ナガバサギソウ)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Habenaria stenopetala* Lindl.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。地中に楕円形の塊根がある。茎は直立し、花序を含めて長さ 45~60 cm、茎の中央部付近に 5~8 葉を束生する。葉は狭長楕円形、長さ 12~15 cm、緑色で、やや光沢がある。総状花序は頂生し、20~25 花を密につける。花は淡緑白色、萼片は長楕円形~卵形、長さ 8~10 mm、花弁は線形、基部は耳状となり、長さ 8~10 mm、唇弁は長さ 1 cm、基部で 3 裂し、裂片は線形、基部に長さ 1.5~1.7 cm の線形の距がある。

分布域(県外) : 台湾、フィリピン、ヒマラヤ、タイ、ベトナム。

県内の分布 : 沖縄島北部?、石垣島、与那国島。

生育環境 : 低地から山地の自然林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 石垣島では数ヶ所、与那国島では 3ヶ所に産するが、個体数は少ない。石垣島では、県営公園が造成された際、大きな個体群が開発により消失した。沖縄島での現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 前津栄信・松島昭司, 1999. 安良の植物. “石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”, 石垣市総務部市史編集室(編), 石垣市, 129-226.
豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25) : 59-61.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : ニオイラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Haraella retrocalla* (Hayata) Kudo (= *Gastrochilus retrocallus* Hayata)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : カシノキランに似た小形の常緑の多年草。茎は長さ 1~2cm、葉を 2 列に互生する。葉は革質で、鎌状長楕円形、長さ 3~7cm。総状花序は腋生し、長さ 3~6cm、1~4 花を順次開花させる。花は淡黄緑色で、萼片と花弁は長さ 8mm、倒卵形、唇弁は長さ 12~14mm、長方形状長楕円形、3 裂し、距を欠き、基部上面に基部に向いた三角形のカルスがあり、黄緑色で、中央部に淡赤褐色の斑紋があり、縁は細裂し、上面に軟毛がある。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 常緑樹林の樹幹に着生する。

生育状況 : 1980 年頃に少数個体が発見されているが、その後は確認されていない。

学術的価値 : ニオイラン属はカシノキラン属に含める意見もあるが、これまで台湾固有の単型属とされていた。西表島は、国内では唯一の産地である。ニオイランは、昆虫の雌に擬態し、雄が交尾行動を行おう

とする際に受粉される疑似交尾 pseudocopulation 現象が見られることが示唆されている種で (Endress, 1994; Christenhusz *et al.*, 2017)、植物が示す擬態の例として学術上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。園芸用の採集。

文献 : Endress, P.K., 1994. Diversity and evolutionary biology of tropical flowers. Cambridge Univ. Press, Cambridge, 511 pp.
Chase, M., M. Christenhusz & T. Mirinda, 2017. The Book of Orchids: A life-size guide to six hundred species from around the world. Ivy Press, London. 656 pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : オオカゲロウラン (テリハカゲロウラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Hetaeria oblongifolia* (Blume) Blume

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎はやや匍匐し、先は直立し、長さ 20~25 cm、6~7 葉を互生する。葉は卵状披針形、長さ 5~9 cm、上面に光沢がある。頂生する総状花序は長さ 25 cm になり、密に 30~40 花をつける。花は平開せず、白色で、外面は淡緑褐色を帯び、萼片と花弁は長さ 4 mm、唇弁は長さ 3 mm、卵形、子房はねじれず、唇弁は花序の先端側に位置する。

分布域 (県外) : タイ、フィリピン、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ニューカレドニア、フィジー諸島、サモア諸島。

県内の分布 : 石垣島、与那国島。

生育環境 : 自然林の林床に生える。

生育状況 : 石垣島では数ヶ所に、与那国島では 1ヶ所に産することが知られるが、いずれの自生地でも極めてまれで、個体数は少ない。

学術的価値 : 台湾に分布しておらず、分布域の北限である。マレーシア系の植物で、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自然林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

文献 : 豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25) : 59-61.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ヤクシマアカシユスラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Hetaeria yakusimensis* (Masam.) Masam.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎はやや匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 10~30 cm、4~7 葉を互生する。葉は卵状楕円形~卵状披針形、長さ 3~8 cm、深緑色で、葉柄は赤色を帯びる。総状花序は頂生し、3~20 花をつける。萼片は赤褐色、長さ 3~4 mm、広卵形~長楕円形、花弁は白色、長さ 3~4 mm、卵形、唇弁は白色、長さ 3~4 mm、卵形で、基部は嚢状となり、基部上面に 1 対の突起がある。

分布域 (県外) : 本州 (静岡県、和歌山県)、伊豆諸島、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之

島、台湾。

- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。
生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
生育状況 : 沖縄島ではかつてはやや普通に見られたが、近年はごく限られた場所でたまに見る程度にまで減少してしまった。石垣島では極めて少ない。
減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。
備考 : 最近、本種の分布域が拡大し、北上している。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **サキシマスケロクラン**
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Lecanorchis flavicans* Fukuyama var. *flavicans*
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は単一または基部で分枝し、長さ 20~30 cm、先端に数花を同時に咲かせる。萼片と花弁は長さ 13 mm、淡黄褐色、唇弁は長さ 14 mm、白色、3 裂し、縁は細裂し、中央裂片はほぼ円形で、上面全体に長毛が密生し、側裂片は三角形。変種のシラヒゲムヨウラン *L. flavicans* var. *acutiloba* に似るが、唇弁の基部と蕊柱との癒合が約 6 分の 1 と少ない点で異なるとされる。

- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 低地の自然林の林床に生える。
生育状況 : 西表島の仲良川で採集された標本を元に Fukuyama (1942) によって記載された種で、基準産地である西表島の 1ヶ所以外には、確実な自生地は知られていなかったが、2017 年になって石垣島と西表島の各 1ヶ所で生育が確認された。

- 学術的価値 : 八重山諸島の固有種である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
備考 : 変種のシラヒゲムヨウランは、屋久島、奄美大島、沖縄島北部の山地に産し、沖縄島では 1ヶ所で少数個体が確認されている。なお、サキシマスケロクランをオキナワムヨウラン *L. triloba* の異名とし、シラヒゲムヨウランを *L. vietnamica* とする意見がある (Suetsugu *et al.*, 2017) が、サキシマスケロクランはオキナワムヨウランそのものではないように思われ、生植物を用いた詳細な検討が必要と考えられる。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

- 文献 : Fukuyama, N., 1942. Orchidaceae liukiuienses novae vel minus cognitae. I. Trans. Nat. Hist. Soc. Formos. 32(225): 241-244.
Hashimoto, T., 1990. A taxonomic review of the Japanese *Lecanorchis* (Orchidaceae). Ann. Tsukuba Bot. Gard., 9: 1-40.
Suetsugu, K., T.-C. Hsu & H. Fukunaga, 2017. The identity of *Lecanorchis flavicans* and *L. flavicans* var. *acutiloba* (Vanilloideae, Vanilloideae, Orchidaceae). Phytotaxa, 306(3): 217-222.

- 執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

-
- 和名 : **ヤエヤマスケロクラン**
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

- 学 名 : *Lecanorchis japonica* Blume var. *tubiformis* Hashimoto
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は長さ 20~40 cm、先端に数花を同時に咲かせる。萼片と花弁は長さ 16~17 mm、赤褐色、唇弁は長さ 15 mm、白色、3 裂し、中央裂片は横長四角形で、縁は細裂し、上面の中央に黄色の長毛が密生し、側裂片はほぼ鈍頭、唇弁の基部は約半分にわたって蕊柱と癒合する。キイムヨウラン *L. japonica* var. *kiiensis* に最も近いが、中央裂片と側裂片が短く、蕊柱の翼は半円形で歯牙がある点で異なるとされる。
- 県内の分布 : 西表島。
 生育環境 : 自然林の林床に生える。
 生育状況 : 基準産地とされる 1 ヶ所は国立公園であり、開発の恐れはないが、現状は不明である。他の産地は知られていない。
 学術的価値 : 西表島の固有変種である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
 備考 : 基本変種のムヨウランは地理的変異が大きく、本州、四国、九州に産し、屋久島以南には分布していない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : Hashimoto, T., 1990. A taxonomic review of the Japanese *Lecanorchis* (Orchidaceae). *Ann. Tsukuba Bot. Gard.*, 9: 1-40.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*

- 和 名 : クロムヨウラン (ムラサキムヨウラン)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学 名 : *Lecanorchis nigricans* Honda
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)
- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は単一または基部で分枝し、長さ 15~30 cm、黒色、先端に数花を同時に咲かせる。萼片と花弁は長さ 17 mm、淡黄褐色、唇弁は長さ 13~15 mm、白色で先端は紫色を帯び、3 裂せず、ほぼ円形で、上面の先端に紫色の短毛がわずかに生え、唇弁は約半分にわたって蕊柱と癒合する。
- 分布域(県外) : 本州(紀伊半島)、四国、九州、屋久島、黒島、奄美大島、台湾。
 県内の分布 : 沖縄島、西表島。
 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
 生育状況 : 沖縄島では少なくとも 1 ヶ所で現存していることが確認されている。西表島では 1938 年に採集された記録があるが、現状は不明である。
 学術的価値 : 分布域のほぼ南限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自然林の伐採。
 備考 : これまでクロムヨウランと呼ばれていたものは、トサノクロムヨウラン *L. nigricans* Honda var. *patipetala* Y. Sawa であるとする見解が発表されている (Suetsugu *et al.*, 2018)。また、沖縄島北部のクロムヨウランをムロトムヨウラン *L. amethystea* Y. Sawa, H. Fukunaga *et* S. Sawa とする意見がある (福永ら, 2011)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 福永裕一・阿部篤志・澤進一郎, 2011. ムロトムヨウラン (ラン科) を沖縄に記録する. *分類*, 11(2): 151-154.
 Hashimoto, T., 1990. A taxonomic review of the Japanese *Lecanorchis* (Orchidaceae). *Ann. Tsukuba Bot.*

Gard., 9: 1-40.

Suetsugu, K., C. Shimaoka, H. Fukunaga & S. Sawa, 2018. The taxonomic identity of three varieties of *Lecanorchis nigricans* (Vanilleae, Vanilloideae, Orchidaceae) in Japan. *PhytoKeys*, 92: 17-35.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

和名 : オキナワムヨウラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Lecanorchis triloba* J. J. Smith

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。茎は単一または分枝し、長さ 15~40 cm。茎の先に数花をつけ、1 花ずつ順に開花する。萼片と花弁は長さ 9 mm、暗紫褐色、唇弁は長さ 11 mm、白色、3 裂し、中央裂片はほぼ円形で、上面のほぼ全体に長毛が密生し、縁は細裂し、側裂片は鈍頭、唇弁の基部は蕊柱と癒合し、上面内部に短毛の生えた 1 対の隆起がある。

分布域(県外) : タイ、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、ニューギニア。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : この属の種では最も多く産するが、自生地は点在し、個体数は少ない。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地が限られている。

備考 : 植物体が目立たないため発見が難しいうえ、花がないと正確な同定ができないので、ムヨウラン属の他の種を含め生育状況に関する確実な情報が少ない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 橋本 保, 1989. ラン科植物分類雑記 (4). 筑波実験植物園研究報告, 8: 1-9.

Hashimoto, T., 1990. A taxonomic review of the Japanese *Lecanorchis* (Orchidaceae). *Ann. Tsukuba Bot. Gard.*, 9: 1-40.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*

和名 : チケイラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Liparis bootanensis* Griff.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。偽球茎は卵形、長さ 1.5~3 cm、先に 1 葉をつける。葉は狭長楕円形、長さ 10~18 cm。総状花序は頂生し、長さ 15~25 cm、10~15 花をつける。花は淡黄緑色、萼片は線状長楕円形、長さ 6~7 mm、花弁は線形、長さ 6~7 mm、唇弁は長さ 5 mm、楔状倒卵形、下方に折れ曲がり、基部上面に 1 対の小い突起がある。蕊柱の上部には 1 対の翼がある。

分布域(県外) : 四国、九州南部、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、フィリピン、中国南部、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 自然林の陰湿な岩上や樹上に生える。

生育状況 : かつてはかなり普通に見られたが、近年は個体数が激減している。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。
備 考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*

和 名 : **コクラン**
分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Liparis nervosa* (Thunb.) Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は円柱形で、長さ 5~10 cm、数個が接して並ぶ。葉は茎の上部に 2~3 個つき、斜卵形~斜楕円形、長さ 5~12 cm。総状花序は頂生し、長さ 10~20 cm、5~10 花をつける。花は紫褐色~淡緑色、萼片は狭長楕円形、長さ 5 mm、花弁は倒披針状線形、長さ 5 mm、唇弁は長さ 5 mm、楔状倒卵形、微凹頭、下方に折れ曲がり、基部上面に 1 対の尖った突起がある。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 高地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 自生地は数ヶ所しかなく、個体数は少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自然林の伐採。園芸用の採集。

備 考 : 琉球列島に広く産するユウコクランは、形態的な変異が大きく、本種との区別が難しい場合があり、分類の再検討が必要である。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*

和 名 : **ササバラ**
分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Liparis paradoxa* (Lindl.) Rchb. f.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の夏緑性の多年草。偽球茎は卵球形、径 2 cm、新旧 2 個が接して並ぶ。葉は 2~3 枚が茎の先端につき、広披針形~披針状長楕円形、長さ 8~16 cm、縦しわがある。総状花序は頂生し、長さ 20~30 cm、10~20 花をつける。花は赤色を帯びた黄緑色、萼片は披針形~狭長楕円形、長さ 6 mm、花弁は線形、長さ 7 mm、唇弁は倒卵状楔形、下方に折れ曲がり、長さ 6 mm、基部上面に 1 対の突起がある。

分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、グアム。

県内の分布 : 沖縄島北部、魚釣島。

生育環境 : 日当たりのよい草地に生える。遷移が進んで森林になると衰退する。

生育状況 : 沖縄島では 3ヶ所で確認されているが、極めてまれであり、現在も生育が確認されるのは 1ヶ所だけである。魚釣島の現状は不明で、増殖した野生化ヤギによる食害が危惧される。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。自生地の開発 (沖縄島)。遷移の進行。野生化したヤギによる食害と植生の破壊 (魚釣島)。

保全対策 : 魚釣島では、野生化ヤギの駆除が急務である。

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : コバナチケイラン
分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Liparis* sp. aff. *elegans* Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は斜卵形、長さ 2~3.5cm、幅 1~2cm、2~4 節があり、2 葉をつける。葉は線状倒披針形、長さ 5~10cm、幅 2~2.5cm。総状花序は頂生し、長さ 10~30cm、10~20 花をつける。花は黄緑色、萼片は線形、長さ 3.5mm、側花弁は披針形、長さ 4mm、唇弁は四角形、中央で折れ曲がり、先端は切形、基部に 1 対の球形のカルスがある。薬柱は長さ 2.5mm、翼はない。チケイランに似るが、花がずっと小型で、葉が 2 個であることで異なる。台湾のナカハララン *Liparis nakaharai* Hayata にも似るが、花ははるかに小さい。

分布域(県外) : なし(今のところ、西表島のみ)。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 山地の常緑樹林の岩上や樹上に着生する。
生育状況 : 自生地は 1 ヶ所のみ確認されている。1990 年代初めに存在が知られるようになったが、その当時と比べると採集により個体数は激減している。
学術的価値 : 日本や台湾には近縁種は知られておらず、国内では唯一の自生地である。固有種の可能性もある。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

執筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : ボウラン (タカサゴボウランを含む)
分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Luisia teres* (Thunb.) Blume
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は堅い円柱形で、しばしば分枝して束生し、長さ 15~30 cm になり、数~十数葉を互生する。葉は円柱形、径 3~4 mm、長さ 5~12 cm。総状花序は腋生し、長さ 0.5~1.5 cm、1~10 花をつける。花は黄緑色で、萼片と花弁には紫褐色の斑紋がわずかに入り、唇弁は大部分が紫褐色となり、萼片は楕円形、長さ 8~10 mm、花弁は長楕円形、長さ 10~13 mm、唇弁は長さ 10~13 mm、基部で 3 裂し、側裂片は小さく、中央裂片は長楕円形で、先は 2 浅裂する。

分布域(県外) : 本州(三重県、和歌山県)、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。
県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、座間味島、伊江島、久米島、渡名喜島、石垣島、与那国島。
生育環境 : 海岸から低地の日当たりのよい樹幹や岩壁に着生し、しばしばリュウキュウマツの樹幹上に生える。
生育状況 : 沖縄島では北部から中部にかけてかつては普通に見られたが、近年は個体数が激減している。今回の調査で伊平屋島、伊是名島、座間味島、伊江島、久米島、渡名喜島で現存が確認されている。石垣島では 2 ヶ所に希産する。
学術的価値 : 分布域の南限である。
減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。
備 考 : 台湾には唇弁の先端の裂片が短く、唇弁が小さい変種のタカサゴボウラン *L. teres* (Thunb.) Blume var. *botanensis* (Fukuyama) T. P. Lin を産し、石垣島のものはタカサゴボウランに相当する。

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・松村俊一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : ナンバンカゴメラン (ナンバンカモメラン)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Macodes petola* (Blume) Lindl.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、3~6 葉を互生し、花序を含めて長さ 20~30 cm になる。葉は卵形、深緑色で、上面に銀白色の網目模様が入り、下面は緑白色、長さ 5~6.5 cm。総状花序は頂生し、15~40 花をつける。花は左右非対称で、淡黄緑色で、赤褐色を帯び、花被片の先は白色、萼片は長さ 5~6 mm、卵形、花弁は長さ 5 mm、三日月形、唇弁は長さ 6 mm、3 裂し、ねじれ、子房はねじれず、唇弁は花序の先端側に位置する。蕊柱はややねじれる。

分 布 域 (県 外) : フィリピン、インドシナ、マレー半島、スマトラ、ジャワ、ボルネオ。

県 内 の 分 布 : 西表島。

生 育 環 境 : 低地の自然林の林床に生える。

生 育 状 況 : 4 ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。最も個体数が多い 1 ヶ所は開発される恐れがある。他の 3 ヶ所では数個体が確認されているだけで、その内の 1 ヶ所では 2017 年の調査で個体が確認できなかった。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限であり、国内唯一の産地である。マレーシア系の種で、中国大陸や台湾に分布しておらず、植物地理学上貴重である。海外産のものとは異なり、西表島産のものは植物体や花に紫褐色の着色がなく、葉は深緑色、花は淡黄緑色であるため、容易に区別することができる。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備 考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2016 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 横田昌嗣・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料 7. 沖縄生物学会誌, (27) : 53-55.

執筆 者 名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : カンダヒメラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Malaxis kandae* Hashimoto

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形 態 の 特 徴 : 夏緑性の多年草。偽球茎は円柱形、長さ 5~8 cm、5~6 葉を互生する。葉は楕円形、長さ 6~14 cm。総状花序は頂生し、長さ 9~15 cm、やや疎らに 17~40 花をつけ、包葉は長さ 3~5 mm で蕾より長い。花は帯紫緑色~濁紫色、萼片と花弁は長さ 4 mm、萼片は広楕円形、花弁は線形、唇弁は長さ 6 mm、三角状心臟形、先は 2 裂し、基部は耳状になり蕊柱を包む。

分 布 域 (県 外) : 台湾。

県 内 の 分 布 : 沖縄島 (北部~中部)、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 山地のサガリバナ林などの湿った林床や湿地に生える。

生 育 状 況 : 沖縄島では数ヶ所に自生が知られるが、個体数は少ない。石垣島では絶滅した恐れがある。西表島では 2004 年と 2017 年に発見されたが、2 ヶ所に産するだけで、極めてまれである。

学 術 的 価 値 : 沖縄県の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。遷移の進行。
備考 : 台湾のマツダヒメラン *M. matsudae* (Yamamoto) Hatusima に近縁で、近縁なオキナワヒメラン *M. purpurea* (Lindl.) O. Ktze. とともにマツダヒメランに含まれることがある。近年になってカンダヒメランやオキナワヒメランが認識されたため (Hashimoto, 1992)、分布に関する情報は十分でない。

文献 : Hashimoto, T., 1992. Novelties of the genus *Malaxis* to Japan. Ann. Tsukuba Bot. Gard., 11: 1-8.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **ホザキヒメラン**

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Malaxis latifolia* J. E. Smith

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。偽球茎は円柱形、長さ 10 cm になり、4~5 葉を互生する。葉は楕円形、長さ 12~20 cm。総状花序は頂生し、長さ 20 cm になり、密に多数の花をつけ、包葉は長さ 4 mm。花は淡黄緑色で、赤紫色を帯び、径 5 mm、萼片と花弁は長さ 3 mm、萼片は長楕円形、花弁は線形、唇弁は長さ 2 mm、卵形、先は浅く 3 裂する。

分布域(県外) : 台湾、フィリピン、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 山地の溪流沿いの岩上や林縁の湿った地上に生える。

生育状況 : 沖縄島では 1ヶ所、石垣島では 2ヶ所、西表島では数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少ない。与那国島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **オキナワヒメラン**

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Malaxis purpurea* (Lindl.) O. Ktze.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 小形の夏緑性の多年草。偽球茎は円柱形、長さ 5~8 cm、3~4 葉を互生する。葉は卵状披針形、長さ 7~11 cm。総状花序は頂生し、長さ 10~25 cm になり、やや疎らに 20 花程度をつけ、包葉は蕾より短い。花は紫褐色、径 5 mm、萼片と花弁は長さ 4~5 mm、萼片は長楕円形、花弁は線形、唇弁は長さ 7 mm、狭卵形、先は 2 裂し、基部は耳状になり蕊柱を包む。

分布域(県外) : フィリピン、スリランカ、ヒマラヤ、中国南部、タイ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の明るい林床や草地に生える。遷移が進行して森林になると衰退する。

生育状況 : 数ヶ所で確認されているが、個体数は極めて少ない。最も個体数が多かった自生地の 1ヶ所はゴルフ場造成のため破壊された。近年は全く確認されておらず、絶滅した可能性がある。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。
 備 考 : 近年になって沖縄県に産することが認識された (Hashimoto, 1992) もので、分布に関する情報は十分でない。

文 献 : Hashimoto, T., 1992. Novelities of the genus *Malaxis* to Japan. Ann. Tsukuba Bot. Gard., 11: 1-8.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : フウラン

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Neofinetia falcata* (Thunb.) H. H. Hu (= *Vanda falcata* (Thunb.) Beer)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 小形の常緑の多年草。茎は長さ 5~15 cm、しばしば分枝し、多数の葉を 2 列に互生する。葉は革質、広線形、長さ 6~12 cm。総状花序は腋生し、長さ 5~7 cm、2~5 花をつける。花は白色で、琉球列島産では時に淡紅色を帯び、萼片と花弁は長さ 1 cm、倒披針状長楕円形、唇弁は長さ 7~9 mm、3 裂し、側裂片は半円形、中央裂片は狭卵形、基部に長さ 4~5 cm の湾曲する線形の距があり、夕方に芳香を発する。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国南部。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、伊江島、北大東島。

生 育 環 境 : 低地の樹幹や岩上に生え、しばしば群生する。

生 育 状 況 : 伊平屋島と伊是名島では各 1 ヶ所にごく少数個体を産する。沖縄島では北部から南部まで点々と数ヶ所に産したが、現在は絶滅寸前である。北大東島では乱獲によりおそらく絶滅したものと思われる。

学 術 的 価 値 : 北大東島に本種が自生することは、最も近い沖縄島から約 400 km の海を隔てていてもラン科の微小な種子が風により散布されることを示しており、植物の分散能力を知る上で貴重である。本種をヒスイラン属 *Vanda* に移す見解は 1854 年に提唱されているが、これまで顧みられてこなかった。最近ヒスイラン属の種としての取り扱いが再度提唱されている (Gardiner, 2012)。ヒスイラン属としては、最も北にまで分布する種になる。

減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。自生地の開発。もともと自生地と個体数が少ない。

文 献 : 仲田栄二 (編), 1995. ふるさとの草木, 伊是名諸島の植物図鑑. 伊是名村教育委員会, 119pp.
 Gardiner, L. M., 2012. New combinations in the genus *Vanda* (Orchidaceae). Phytotaxa, 61: 47-54.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヤエヤマヒトツボクロ (アオイボクロ、ヤエヤマクマガイソウ)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Nervilia aragoana* Gaudich.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 冬緑性の多年草。地中に径 1~2 cm の球状の球茎があり、細長い根茎を伸ばし、先に球茎を作る。葉は 1 枚つき、花後に生じ、偏円心形、心脚、幅 10~20 cm、長さ 10~18 cm の葉柄がある。総状

花序は長さ25~40 cm、5~13花を疎らにつける。花は半開し、萼片と花弁は淡緑色、線状披針形、長さ1.5~2.5 cm、唇弁は白色で上面に紫色の条が入り、長さ1.5~2.5 cm、中央部付近で3裂し、側裂片は三角形、中央裂片は卵形、中央部に毛が生える。

- 分布域（県外）：台湾、フィリピン、中国南部、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、グアム、ニューギニア、オーストラリア、ニューカレドニア、サモア諸島、フィジー諸島。
- 県内の分布：沖縄島北部、北大東島、宮古島、伊良部島、下地島、多良間島、水納島、石垣島、西表島、小浜島、竹富島、黒島、新城島（上地島）、波照間島、与那国島。
- 生育環境：低地の海岸林や石灰岩地の林床に生える。
- 生育状況：沖縄島では1ヶ所に産するだけで、絶滅寸前である。北大東島では、3ヶ所に少数個体を産する。宮古諸島と八重山諸島では各地にやや普通に産し、しばしば群生するが、自生地のある海岸林や石灰岩地は森林伐採やゴルフ場建設等で開発が進んでいる。今回の調査で、宮古島、下地島、水納島、竹富島、新城島にも産することが判った。
- 学術的価値：分布域の北限である。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。
- 備考：石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。
- 文献：知念美香，1993. 石西礁湖小島嶼の植物相. 沖縄島嶼研究, (11) : 75-105.
山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男，2016. 鳩間島・新城（上地・下地）島・黒島の植物相（Flora）. “鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書”，沖縄県立博物館・美術館, 13-68.
- 執筆者名：横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・佐藤宣子(追補)

-
- 和名：ムカゴサイシン（ムカゴサイシンモドキを含む）
- 分類：ラン科（APG科名：ラン科）
- 学名：*Nervilia nipponica* Makino
- カテゴリー：絶滅危惧 I B類（EN） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I B類（EN）

- 形態の特徴：ごく小形の夏緑性の多年草。地中に径5~10 mmの球状の球茎があり、細長い根茎を伸ばし、先に球茎を作る。葉は花後に生じ、1枚だけつき、五~七角状円心形、心脚、幅3.5~4.5 cm、長さ2~5 cmの葉柄がある。花序は長さ10~12 cm、1花をつける。花は半開し、萼片と花弁は紫褐色、線状披針形、長さ1~1.2 cm、唇弁は白色で上面に紫色の毛の生えた細点があり、長さ1 cm、中央部付近で3裂し、側裂片は小さく、中央裂片は倒卵形。
- 分布域（県外）：本州（関東以西）、伊豆諸島、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾。
- 県内の分布：沖縄島北部、石垣島。
- 生育環境：山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況：沖縄島では自生地は5ヶ所が知られ、その内2ヶ所ではやや多産するが、林道建設で森林が乾燥し、個体数は減少している。1ヶ所では個体数は極めて少なく、近年は確認されていない。石垣島では1ヶ所のごく狭い範囲に少数個体を産するだけである。
- 学術的価値：隔離分布する植物地理学上の貴重種で、全国的にも希産種である。最近、ムカゴサイシンは形態的にほとんど区別がつかないが、遺伝的には大きく異なる隠蔽種を含むことが明らかになり（Gale *et al.*, 2010）、従来のムカゴサイシンと新種のムカゴサイシンモドキ *N. futago* S. W. Gale et T. Yukawa が区別されている（Gale *et al.*, 2015）。沖縄島北部の1ヶ所で、Gale 博士がDNA採取のためごく接近した場所に生えていた2個体を採取したところ、1個体が従来のムカゴサイシンで、もう1個体がムカゴサイシンモドキで、両者は完全に混生する場合があることが判っている。また石垣島の1ヶ所のものは、従来のムカゴサイシンであることが判っている。その他の自生地については、遺

伝子や形態（特に唇弁の形態）の観察がなされていないので、どちらの種であるのかは不明である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

備考 : 近縁種の *N. punctata* (Blume) Makino はジャワに産する。

文献 : 中島邦雄, 1971. 台湾, 琉球, 小笠原および日本南部のラン科植物の分類学的研究 (予報). 沖縄生物学会誌, (8) : 72-84.

阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

Gale, S. W., A. Maeda, C.-I. Chen & T. Yukawa, 2010. Inter-specific relationships and hierarchical spatial genetic structuring in *Nervilia nipponica*, an endangered orchid in Japan. *Journal of Plant Research*, 123: 625-637.

Gale, S.W., J. Li, A. Kinoshita & T. Yukawa, 2015. Studies in Asian *Nervilia* (Orchidaceae) V: *Nervilia futago*, a cryptic new species from Southwest Japan confirmed by morphological, cytological, and molecular analyses. *Systematic Botany*, 40(2): 413-425.

執筆者名 : 横田昌嗣*・新城和治*・立石庸一*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウズラバムカゴサイシン (新称)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Nervilia* sp.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : ごく小形の夏緑性の多年草。地中に径 5~10mm の球状の球茎があり、細長い根茎を伸ばし、先に球茎を作る。葉は花と共に生じ、1 枚だけつき、五~七角状円心形、心脚、幅 2.5~3.5cm、上面に淡緑色の斑紋があり、下面は紫色を帯び、長さ 2~5cm の葉柄がある。花序は長さ 5cm、1 花をつける。花は平開し、萼片と花弁は淡緑色、線状披針形、長さ 8~9mm、唇弁は白色で上面に紫色の条が入り、長さ 1cm、三角形、基部は円脚、端部は鋭形、3 裂しない。薬柱は長さ 4mm。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。

生育状況 : 自生地は 1ヶ所のみ知られ、数集団が確認されているが、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 日本や台湾の周辺には、形態的に類似した種はなく、沖縄島北部の固有種と思われる。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : クスクスヨウラクラン (アリスンヨウラクラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Oberonia arisanensis* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : ごく小形の常緑の多年草。茎は下垂し、長さ 2.5~3.5 cm、葉を 2 列に接してつける。葉は線状半披針形、やや多肉質、長さ 2~4 cm。穂状花序は頂生し、糸状、長さ 10 cm、多数の花をつけ、包葉は三角状披針形、長さ 1.5 mm。花は淡赤褐色、萼片と花弁は長さ 0.8~1 mm、背萼片は倒卵状長楕円形、側萼片は三角状長楕円形、花弁は倒卵状長楕円形、唇弁は長さ 1.5 mm、3 裂し、側裂片は半卵形で外側の縁は細裂し、中央裂片は長楕円状倒卵形、先は 2 浅裂する。

分布域 (県外) : 徳之島、台湾。

- 県内の分布 : 沖縄島北部、西表島、魚釣島。
生育環境 : 空中湿度の高い自然林内の樹幹に着生する。
生育状況 : 沖縄島北部では数ヶ所に自生が知られるが、群生することはない、個体数は極めて少ない。魚釣島では山頂部にやや多いが、個体数は限られている。西表島では極めてまれである。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
備考 : ヨウラクラン *O. japonica* との区別が微妙であり、分類学的な再調査が必要である。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
文献 : 横田昌嗣・豊見山元, 1994. 琉球列島植物分布資料 12. 沖縄生物学会誌, (32) : 57-59.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・豊見山元*

-
- 和名 : コカゲトンボ (新称)
分類 : ラン科 (APG 科名 : ラン科)
学名 : *Peristylus elegans* Bl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 小型の冬緑性の多年草。地中に楕円形の塊根があり、植物体は高さ 10~15cm、茎の中ほどに 3~5 個の葉を接近してつける。葉は線状披針形、長さ 4~10cm。総状花序は頂生し、3~10 花をつける。花は淡緑色で、背萼片と側花弁は青状に集まり、卵形、長さ 2~2.5mm、側萼片は平開し、長さ 2.5~3mm、唇弁は 3 裂し、基部に長さ 5~8mm の距があり、中央裂片は三角状披針形、長さ 2~3mm、側裂片は平開し、線状披針形、長さ 4~5mm、薬柱は長さ 1.2mm。
分布域 (県外) : 台湾 (蘭嶼)、インド、インドシナ、スマトラ、ジャワ、ボルネオ。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 低地の陰湿な自然林の林床に生える。
生育状況 : 石垣島で 1ヶ所、西表島で 2ヶ所で確認されているが、個体数は極めて少ない。
学術的価値 : 分布域の北限であり、国内で唯一の自生地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

文献 : Hsu, T.-C., C.S. Leou, C.-L. Yeh, C.R. Yeh & S.-W. Chung, 2009. Supplements to the orchid flora of Taiwan (III): A newly recorded species, *Peristylus gracilis*. *Taiwania*, 54(4): 381-384.

執筆者名 : 横田昌嗣・豊見山元

-
- 和名 : ガンゼキラン
分類 : ラン科 (APG 科名 : ラン科)
学名 : *Phaius flavus* (Blume) Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は卵状狭円錐形、長さ 3~5 cm、数個が接して並ぶ。葉は 3~5 枚が茎の先につき、狭楕円形~広倒披針形、長さ 20~40 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 40~60 cm、5~18 花をつける。花は黄色、唇弁の先端は赤褐色、萼片と花弁は長さ 3~3.5 cm、狭長楕円形、唇弁は長さ 2.5 cm、楔状倒卵形、先端は 3 浅裂し、側裂片は半円形、中央裂片は円形、上面に数列の

板状隆起があり、基部に長さ7~8 mmの距がある。

- 分布域(県外) : 本州(伊豆諸島、紀伊半島)、四国、九州、屋久島、奄美大島、台湾、中国南部、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、フィリピン、マレーシア、ニューギニア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 確実な自生地は3ヶ所が知られるが、いずれも乱獲により絶滅または絶滅寸前であり、現在も生育が確認されているのは1ヶ所だけである。
- 学術的価値 : 沖縄県で唯一の産地である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 日本や台湾産の個体は唇弁内に毛があるが、東南アジア産の個体は無毛であり、やや異なる。
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : ヒメカクラン
- 分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)
- 学名 : *Phaius mishmensis* (Lindl.) Rchb. f.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は束生し、棒状で、長さ40~60 cm、数葉を疎らに互生する。葉は倒卵状長楕円形、上面にやや光沢があり、長さ20~30 cm。総状花序は偽球茎の途中から生じ、長さ8~30 cm、疎らに8花程度をつける。花は淡紅紫色、唇弁の上面には紅紫色の細点が多数入り、萼片と花弁は長さ3~3.5 cm、萼片は長楕円形、花弁は線状倒披針形、唇弁は長さ2.5~2.8 cm、先端は3浅裂し、側裂片は半卵形、中央裂片はやや四角形、小凹頭、中央に毛の生えた4列の板状突起があり、基部に長さ1 cmの距がある。

- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、タイ、フィリピン。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では3ヶ所の自生地が知られ、そのうちの1ヶ所では1980年代前半まで少数個体が見られたが、乱獲により絶滅した。その他の1ヶ所は絶滅、他の1ヶ所は現状不明。石垣島では1ヶ所、西表島では2ヶ所の自生地が知られるが、いずれも個体数は極めて少ない。石垣島では近年個体数が急減している。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。
- 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2016年)。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

- 文献 : Hatusima, S., 1974. New or noteworthy plants from the Ryukyus. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 1: 37-45.
 横田昌嗣・島袋憲一, 1992. 琉球列島植物分布資料10. 沖縄生物学会誌, (30) : 81-83.
 横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料13. 沖縄生物学会誌, (32) : 61-65.

- 執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・豊見山元*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : カクチョウラン (カクラン)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学 名 : *Phaius tankervilleae* (Banks ex L'Her.) Blume
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は卵状円錐形、長さ 3~5 cm、数個が接して並ぶ。葉は 4~6 枚が茎の先につき、上面にやや光沢があり、長楕円状披針形、長さ 40~80 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 60 ~120 cm、4~10 花をつける。花は外面は白色、内面は赤褐色、唇弁の先は紅紫色、基部は白色、萼片と花弁は長さ 4~6 cm、長楕円状披針形、唇弁は長さ 4~5 cm、菱形状広倒卵形、基部上面に 2 列の板状隆起があり、基部に 2 浅裂する長さ 6~10 mm の距がある。

分布域 (県外) : 屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、フィリピン、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ニューカレドニア、サモア諸島、フィジー諸島。

県内の分布 : 沖縄島 (北部~中部)、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の草地や自然林の明るい林床に生える。遷移が進んで森林になると衰退する。

生育状況 : かつては普通に見られる種であったが、近年は乱獲により激減しており、残された個体数はごく少ない。

減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和 名 : クニガミトンボソウ (ソノハラトンボ)

分 類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学 名 : *Platanthera sonoharai* Masam.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 小形の夏緑性の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は高さ 15~25 cm になり、数枚の葉をつける。葉は茎下部の 1~2 枚は線状披針形で、長さ 8~13 cm、茎上部の葉は長さ 1.5 cm 程度。総状花序は頂生し、6~20 花をつける。花は径 7~8 mm、黄緑色。萼片と花弁は長さ 3~4 mm、唇弁は長さ 4~5 mm で、浅く 3 裂し、基部に長さ 4~10 mm の距がある。

分布域 (県外) : 台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部 (国頭村、東村、大宜味村)、西表島。

生育環境 : 典型的な溪流植物で、洪水時には水没するような河川の中流域の湿った岩上に生える。

生育状況 : 沖縄島では 6 河川に自生が知られているが、いずれの地域でも生育地は狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。今回の調査では、以前に確認されていた 1 河川での生育が確認できなかった。他の 2 河川 (辺野喜川、大保川) ではダム建設で絶滅した。西表島では、1 河川で確認されており、1984 年に採集された花をつけた標本が国立科学博物館 (TNS) に収蔵されていることが判った。

学術的価値 : 沖縄島は分布域の北限である。東アジアの温帯系の種であり、琉球列島の植物相の成立を知る上で貴重である。沖縄島の固有種と考えられてきたが、最近台湾からも発見されている (鐘, 2008)。

減少の要因 : ダム建設による自生地の水没。自然林の伐採。もともと自生地が限られている。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2002 年)。

文 献 : 鐘詩文, 2008. 台湾野生蘭 下冊. 行政院農業委員會林務局, 台北, 222pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **イリオモテトンボソウ**

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Platanthera stenoglossa* Hayata subsp. *iriomotensis* (Masam.) K. Inoue

カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。地中に紡錘形の塊根がある。茎は花序を含めて長さ 20 cm になり、基部に 2~4 葉をつける。葉は卵形、長さ 3~7 cm。頂生する総状花序は、疎らに 5~10 花をつける。花は淡緑色、萼片と花弁は長さ 4~6 mm、唇弁は長さ 5~7 mm、基部に長さ 11 mm の距がある。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の河川中流域の川沿いの湿った崖や岩上、河川源流部の水がしたたり落ちる滝の崖面、またはまれに波しぶきをかぶる海岸の湿った崖に生える。

生育状況 : 3 河川の中流域、この河川とは水系が異なる 1 河川の源流部、1 ヶ所の海崖に産することが今回の調査でも確認されたが、個体数は少ない。

学術的価値 : 西表島の固有亜種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

備考 : タイトントンボソウが小浜島に産するとの記述もあるため (初島, 1975)、2014 年に該当する場所の探索を行ったが、発見することはできなかった。基本亜種のタイトントンボソウは台湾に、別亜種のソハヤキトンボソウ *P. stenoglossa* Hayata subsp. *hottae* K. Inoue は本州 (紀伊半島) と九州 (宮崎県) に分布する。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Inoue, K., 1981. Notes on infraspecific taxa of *Platanthera stenoglossa* Hayata from Taiwan and Japan. *J. Jpn. Bot.*, 56: 120-127.

初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 837.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **ナゴラン**

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Sedirea japonica* (Linden et Rchb. f.) Garay et Sweet (= *Phalaenopsis japonica* (Linden et Rchb. f.) Kocyan & Schuiteman)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は短く、2~6 葉を 2 列に接してつける。葉は革質、長楕円形、長さ 4~15 cm。総状花序は腋生し、長さ 6~12 cm、4~10 花をつける。花は乳白色で、側萼片の内面に数本の紫褐色の横縞が、唇弁の上面に紅紫色の斑点が入り、芳香があり、萼片と花弁は長さ 12 mm、長楕円形、唇弁は長さ 12 mm、倒卵形、3 浅裂し、側裂片は小さく、中央裂片はへら形、基部に円錐形の距がある。蕊柱は長さ 12 mm、基部は下方に伸長して脚部となり、側萼片と癒合する。

分布域 (県外) : 本州 (静岡県以西)、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、朝鮮。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島北部、久米島。

生育環境 : 自然林の樹幹や岩上に着生する。

生育状況 : 伊平屋島では絶滅寸前で、沖縄島では近年全く確認されていない。久米島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の南限である。ナゴラン属 *Sedirea* はナゴランをもとに 1974 年に設立され (Garay & Sweet,

1974)、日本とその周辺の固有属とされてきたが、1984年に2番目の種である *S. subparishii* が中国南部から記録された。最も近縁な属は東南アジアの *Aerides* 属で、ナゴラン属はこれらの近縁属の中で最も北にまで分布する。最近本種をコチョウラン属 *Phalaenopsis* に移す見解が発表されている (Kocyan & Schuiteman, 2014) が、コチョウラン属としても属の分布域の北限となる。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 沖縄島では人工増殖した株を自生地に植え戻すことが試みられているが、由来のはっきりしない個体を安易に植え戻すことは遺伝的変異性を攪乱する恐れがあり、止めるべきである。

文献 : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. *Orchids of Southern Ryukyu Islands*. Harvard University, 149-150.
Kocyan, A. & A. Schuiteman, 2014. New combinations in *Aeridinae* (Orchidaceae). *Phytotaxa*, 161(1): 61-85.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : コウトウシラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Spathoglottis plicata* Blume

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は円錐形、長さ 2~7 cm、数個が接して並ぶ。葉は数枚が束生し、線状披針形、長さ 30~60 cm、縦しわがある。総状花序は偽球茎の下部から出て、長さ 50~75 cm、密に多数の花をつけ、数個ずつ順次咲かせる。花は紅紫色、萼片と花弁は長さ 1.7 cm、卵形~卵状長楕円形、唇弁は長さ 1.2 cm、基部で3裂し、側裂片は長楕円形、中央裂片はイチョウ形、小凹頭、中央部に1対の黄色の突起がある。

分布域(県外) : 台湾、フィリピン、スリランカ、インド、タイ、インドシナ、マレーシア、ニューギニア、オーストラリア、ソロモン諸島、ニューカレドニア、サモア諸島。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 日当たりのよい草地や川沿いの岩上に生える。林道の法面や伐採で生じた二次林の林縁部などの人為的な環境にしばしば群生するが、遷移が進行して森林になると消失する。

生育状況 : もともとは普通に見られたが、近年は個体数が減少している。石垣島では見ることは少なくなってきた。沖縄島北部では近年、道路の法面などに散発的に確認されているが、栽培品の逸出と考えられる。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 園芸用の採集。自生地の開発。遷移の進行。

備考 : 本来は種子により旺盛に繁殖する。沖縄島北部でも最近確認されているが、これは栽培品からの逸出と思われる。ハワイや熱帯アメリカにも広く野生化していることが知られる。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

和名 : イリオモテムヨウラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Stereosandra javanica* Blume

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴 : 葉を欠く腐生の多年草。地中に長楕円形の球茎がある。茎は長さ 15~30 cm。総状花序は球茎の先から生じ、10~15 花を疎らにつける。花は淡黄色で、萼片と花弁の先は紫色、萼片と花弁は大部分で接合して筒状になり、端部のみ半開し、長さ 6~7 mm、披針形、唇弁は長さ 7 mm、広披針形、基部上面に 1 対の小突起がある。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、スリランカ、インド、インドシナ、マレーシア。
- 県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島では極めてまれで、近年は生育が確認されない。石垣島と西表島ではそれぞれ数ヶ所に点々と産するが、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。イリオモテラン属は単型属であるが、この属の染色体数は石垣島産の個体を用いて $2n=116$ という高い数であることが初めて明らかにされた (Aoyama & Yokota, 2012)。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 備考 : 梅雨時の短い開花期にだけ出現するので、発見が難しく、分布に関する情報は十分ではない。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : Aoyama, M. & M. Yokota, 2012. Cytological studies on *Stereosandra javanica*, a myco-heterotrophic orchid. *Acta Phytotax. Geobot.*, 62(2-3): 99-102.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : クモラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Taeniophyllum aphyllum* Makino
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : ごく小形の無葉の多年草。茎はごく短く、放射状に多数の根をつける。根はやや扁平で、緑白色、長さ 2~5 cm。総状花序は側生し、長さ 5~10 mm、1~5 花をつける。花は淡黄緑色、萼片と花弁は半分以上癒合して筒状になり、長さ 2 mm、遊離した部分は卵形、唇弁は長さ 1.5 mm、卵状船形、基部は短い距となる。
- 分布域(県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、種子島、奄美大島、台湾、朝鮮。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。
- 生育状況 : 植物体が小形で発見しにくいので、分布に関する情報は少ないが、現在も自生が確認されているのは沖縄島北部でもごく限られた 2 河川の流域だけで、その地域の森林は大半が伐採されている。
- 学術的価値 : 沖縄県産の個体は本州から九州に産する個体と比べて大形で、根がより扁平になるなどの相違点があり、分類学的な再調査が必要である。
- 減少の要因 : 自然林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 本種を東南アジアに分布する *T. glandulosum* Blume とする見解がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)・仲間正和(追補)

- 和名 : ヒメトケンラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Tainia laxiflora* Makino

カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴：小形の常緑の多年草。偽球茎はやや離れて数個並び、円錐形、長さ 1~1.5 cm、先に 1 葉をつける。葉は狭長楕円形~披針形長楕円形、深緑色で、上面に淡緑白色の斑紋が入り、長さ 7~12 cm。総状花序は偽球茎の基部から生じ、長さ 20~30 cm、疎らに 2~5 花をつける。萼片と花弁は黄褐色、唇弁は黄色、萼片と花弁は長さ 12~15 mm、長楕円状披針形、唇弁は長さ 8~10 mm、広楕円状倒卵形、先端で 3 浅裂し、側裂片は卵形、中央裂片は横長楕円形、小凹頭、上面中央に 3 列の板状突起がある。

分布域(県外)：伊豆諸島、四国、九州、対馬、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、徳之島。

県内の分布：沖縄島北部。

生育環境：自然林や遷移の進んだ二次林の明るい湿った林床に生える。

生育状況：かつてはやや普通に見られたが、現在は乱獲により個体数は非常に減っている。

学術的価値：日本の固有種で、分布域の南限である。本種は、 $2n=36$ 個の常染色体に加えて、個体により 0~9 個の付加染色体をもち、種内で著しい染色体数の変異を示すまれな植物として知られている (Tanaka & Matsuda, 1972)。

減少の要因：園芸用の採集。自然林の伐採。

備考：台湾のルリダマアオイラン *T. piyananensis* Fukuyama を同種とする意見がある。

文献：Tanaka, R. & T. Matsuda, 1972. A high occurrence of accessory chromosomal type in *Tainia laxiflora*, Orchidaceae. Bot. Mag. Tokyo, 85(1): 43-49.

執筆者名：横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名：ハガクレナガミラン

分類：ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名：*Thrixspermum fantasticum* L. O. Williams

カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴：小形の常緑の多年草。茎は長さ 1~4 cm、葉を 2 列に接して互生する。葉は革質、長楕円形、長さ 2~5 cm。総状花序は腋生し、長さ 4~7 cm、数花を密につけ、1 個ずつ順次咲かせる。花は白色、唇弁には黄褐色の斑点が入り、萼片と花弁は長さ 4 mm、広楕円形、唇弁は長さ 3 mm、基部で 3 裂し、側裂片は斜楕円形、直立して蕊柱を包み、中央裂片は半円形、基部上面に毛の生えた 1 対の突起がある。

分布域(県外)：台湾、フィリピン。

県内の分布：西表島。

生育環境：空中湿度の高い山地の自然林の樹枝上に着生する。

生育状況：3 河川の流域に産するが、個体数は非常に少ない。

学術的価値：分布域の北限であり、国内唯一の産地である。

減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自生地の開発。

備考：国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献：豊見山元・播磨保治, 1992. 琉球列島植物分布資料 8. 沖縄生物学会誌, (30) : 75-77.

執筆者名：横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : イリオモテラン (ニューメンラン)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Trichoglottis ionosma* (Lindl.) J. J. Smith
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は堅く、直立し、しばしば分枝し、長さ 20~70 cm、多数の葉を 2 列に互生する。葉は厚い革質、線状長楕円形、凹頭、長さ 10~18 cm。総状花序は腋生し、単一または分枝し、長さ 20~30 cm、疎らに 7~20 花をつける。花は淡黄色で、内面に紫褐色の斑点が入り、唇弁は白色で、上面に紅紫色の小点が入り、萼片と花弁は長さ 1.7 cm、背萼片は卵状菱形、側萼片は倒卵形、花弁はへら形、唇弁は長さ 1.6 cm、基部で 3 浅裂し、側裂片は三角形、小さく直立し、中央裂片は菱形状船形、上面に毛が生え、先端は尖り、基部に短い距がある。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン。

県内の分布 : 石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。

生育状況 : 石垣島と西表島ではかつては点々と見られたようであるが、古くから観賞用に乱獲され、現在は絶滅寸前である。魚釣島では高地にやや普通に見られるが、野生化したヤギにより森林生態系が悪影響を受けており、将来絶滅する恐れがある。西表島では人工増殖した株を自生地に植え戻すことが試みられているが、由来のはっきりしない個体を安易に植え戻すことは遺伝的変異性を攪乱する恐れがあり、止めるべきである。

学術的価値 : 分布域の北限である。フィリピン産のものとは唇弁の形がやや異なり、琉球列島と台湾産のものを *T. luchuensis* とする意見がある。花被片の斑紋の量や形には個体変異があり、石垣島産の花被片に紫褐色の斑紋が大きくはいる型は、クロバナニューメンランと呼んで変種として区別する意見がある。

減少の要因 : 園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採 (石垣島)。野生化ヤギによる食害と森林生態系の破壊 (魚釣島)。

保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

備考 : ニューメンランの和名は、入面蘭 (イリオモテラン) を音読みしたことに因む。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣 (追補)・阿部篤志 (追補)

和名 : アコウネッタイラン
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Tropidia calcarata* Ames
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は細くて硬く、1~3 本が束生し、単一または分枝し、花序を含めて長さ 15~30 cm、2~5 葉をやや接して互生する。葉は長楕円状心形~披針形、洋紙質、暗緑色、長さ 7~12 cm、7 主脈があり、縦しわがある。総状花序は頂生し、8~15 花をやや密につけ、包葉は長さ 6~7 mm で子房と同長か長い。花は白色、唇弁の先端は濃黄色、萼片と花弁は長さ 6 mm、背萼片と花弁は披針形、側萼片は 2 個が癒合し船形、先は 2 浅裂し、唇弁は長さ 6 mm、卵状披針形、先端は折れ曲がり、基部は明瞭な距となる。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島 (北部~南部)、石垣島、西表島。

- 生育環境 : 低地の自然林の林床に生え、石灰岩地を好む。
生育状況 : 沖縄島と石垣島ではそれぞれ数ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。西表島では近年は確認されておらず、現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)

-
- 和名 : ヤクシマネツタイラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Tropidia nipponica* Masam.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は細くて硬く、1~2 本が束生し、単一または分枝し、花序を含めて長さ 10~30 cm、1~4 葉を疎らに互生する。葉は卵状長楕円形~長楕円状披針形、洋紙質、暗緑色、長さ 6~10 cm、5 主脈があり、縦しわがある。総状花序は頂生し、6~10 花を密につけ、やや散形状で、包葉は長さ 1~3 mm で子房より短い。花は白色、唇弁の先端は濃黄色、萼片は長さ 6~8 mm、背萼片は倒卵形~倒卵状披針形、側萼片は 2 個が癒合し、倒卵状船形、花弁は長さ 6.5 mm、披針形、唇弁は長さ 5 mm、卵状披針形、先端は折れ曲がり、基部は囊状で距はほとんど目立たない。

分布域(県外) : 本州(伊豆諸島)、四国(高知県)、九州(対馬、壱岐、甕島)、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 沖縄島は 2 ヶ所、石垣島は 1 ヶ所、西表島は 1 ヶ所の自生地が確認されているが、各地とも個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 伊豆諸島のものは、ハチジョウネツタイラン *T. nipponica* Masam. var. *hachijoensis* F. Maek. として区別されている。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25) : 59-61.

横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32) : 61-65.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

-
- 和名 : コウトウヒスイラン
分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
学名 : *Vanda lamellata* Lindl.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は長さ 20~40 cm、多数の葉を 2 列に互生する。葉は線状長楕円形、先は 2 裂し、

長さ 13~27 cm。総状花序は長さ 15~30 cm、8~15 花をつける。花は淡黄色、径 3~3.5 cm、萼片と花弁は長さ 15 mm、唇弁は長さ 8 mm、3 裂し、上面に 2~3 本の板状の隆起があり、中央裂片は長楕円形で先は 2 裂する。

- 分布域 (県外) : 台湾 (蘭嶼)、フィリピン、マリアナ諸島、ボルネオ。
- 県内の分布 : 魚釣島。
- 生育環境 : 山地の自然林の樹幹に着生する。
- 生育状況 : 近年は全く確認されておらず、現状は不明であったが、最近神奈川県立生命の星・地球博物館 (KPM) に収蔵されている正宗巖敬博士関係の標本の中に、Y. Nakasone 採集 (1920 年代に宮古島などで活動した仲宗根善守氏?) の花序の標本があることが判った (勝山輝男氏, 私信)。この標本の唇弁の形態は、魚釣島に多く産するイリオモテランとは異なり、コウトウヒスイランの特徴を示していることから、本種と判断される。1920 年代には確実に自生していたと思われる。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。野生化ヤギの増殖による生育環境の悪化。
- 保全対策 : この種ばかりでなく、多くの希少種が見られる (横畑ら, 2009) 魚釣島の多様性と生態系を守るためには、野生化ヤギの駆除が喫緊の課題である。
- 備考 : 琉球列島からヒスイラン属を報告したのは初島・天野 (1958) が最初で、Masamune (1964) はその記録を踏襲し、現在は *Vanda lamellata* の異名とされる *V. yamiensis* Masamune et Segawa を尖閣列島から記録している。台北帝国大学で研究を行った正宗博士の基準標本を含む貴重な標本の一部は、神奈川県立生命の星・地球博物館 (KPM) にあることが判っている (Inoue *et al.*, 1998)。コウトウヒスイランの上記の標本は、正宗博士が台北帝国大学から持ち帰ったものと思われる。
- 文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録, 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192 pp.
Inoue, K., T. Katsuyama, H. Takahashi & M. Akiyama, 1998. Recently rediscovered type materials of orchids described by Dr. Fukuyama and Dr. Masamune. *J. Jpn. Bot.* 73: 199-230.
Masamune, G., 1964. Enumeratio tracheophytorum Ryukyus insularum (X). *Sci. Rep. Kanazawa Univ.*, 9(9): 119-154.
横畑泰志・横田昌嗣・太田英利, 2009. 尖閣諸島魚釣島の生物相と野生化ヤギ問題. “IPSHU 研究報告シリーズ研究報告 No. 42 (松尾雅嗣教授退職記念論文集)”, 広島大学平和科学研究センター, 広島市, 307-326.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : ヤクシマヒメアリドオシラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Vexillabium yakushimense* (Yamamoto) F. Maek.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : ごく小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、しばしば分枝し、先は直立し、花序を含めて長さ 5~10 cm、2~5 葉を互生する。葉は広卵形~卵円形、深緑色で、通常暗紫色を帯び、長さ 7~20 mm。総状花序は頂生し、1~3 花をつける。萼片と花弁は淡黄緑色で、赤褐色を帯び、唇弁は白色で、時に淡紅色を帯び、萼片は長さ 4~5 mm、背萼片は菱形状卵形、側萼片は下半部が癒合し鐘状になり、長楕円状披針形、花弁は長さ 4~5 mm、斜披針形、唇弁は長さ 7~8 mm、T 字形で、先端は横長四角形、凹頭、上面基部に 1 対の突起があり、基部に長さ 1.5 mm の距がある。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、加計呂麻島、徳之島、朝鮮、台湾、フィリピン。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の自然林の陰湿な林床や川沿いの岩上に生える。

生育状況 : 数ヶ所に点々と産するが、個体数は少ない。
減少の要因 : 自然林の伐採。園芸用の採集。ダム建設による自生地の水没。
備考 : 本種については、分子系統地理学的な研究の試みがある (Saeki *et al.*, 2014)。

文献 : Saeki, I., A. Kitazawa, A. Abe, K. Minemoto & F. Koike, 2014. Phylogeography of a rare orchid, *Vexillabium yakushimense*: comparison of populations in central Honshu and the Nansei Island chain, Japan. *Pl. Syst. Evol.* 300: 1-12.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ミソボシラン (トミヤマフタオラン)

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Vrydagzynea nuda* Blume

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 15~20 cm、3~11 葉を疎らに互生する。葉は卵状楕円形、長さ 25~50 mm。総状花序は頂生し、6~12 花をつける。花はほとんど開かず、黄緑色、わずかに褐色を帯び、萼片の先端は白色、萼片は長さ 6 mm、背萼片は長楕円状卵形、側萼片は広披針形、花弁は長さ 4.5 mm、長卵形、唇弁は長さ 3.5 cm、倒卵状半円形、基部に長さ 4.5 mm の距があり、距の中に柄がある球形の突起が 1 対ある。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、ジャワ。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の自然林の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 石垣島では自生地は 1ヶ所が知られるだけで、個体数は少ない。自生地の一部は森林伐採や通信施設の建設により消失した。西表島では 1ヶ所に少数個体を産することが確認されているが、2016 年の探索では発見することができなかった。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

備考 : 本種を *V. albida* (Blume) Blume あるいは *V. formosana* Hayata と同定する意見がある。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物種 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : アオジクキヌラン

分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)

学名 : *Zeuxine affinis* (Lindl.) Benth. ex Hook. f.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 小形の冬緑性の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 20~35 cm になり、4~8 葉を互生する。葉は広披針形~卵状披針形、長さ 2~4 cm。総状花序は頂生し、6~10 花をつけ、子房とともに白色の長毛が多い。花は白色、背萼片は長さ 4~5 mm、卵形、側萼片は斜卵形、長さ 4 mm、花弁は斜長楕円形、長さ 4~5 mm、唇弁は長さ 5 mm、幅 6 mm、Y 字形、上面に微小な乳頭状突起が密生し、先端の裂片は倒卵形、基部は嚢状となり、上面基部に 1 対の突起がある。

- 分布域（県外）：台湾、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。
 県内の分布：沖縄島（北部～中部）、石垣島。
 生育環境：山地の自然林の林床に生え、適湿の斜面から過湿の林床まで幅広い環境で見られる。
 生育状況：沖縄島では数ヶ所に点々と自生するが、個体数は少ない。石垣島では2ヶ所で少数個体が確認されている。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。ダム建設による水没（沖縄島）。園芸用の採集。
 備考：ヤンバルキシヌラン *Z. parvifolia* (Ridley) Seidenfaden に酷似し、近年になって（橋本，1986）分布が確認された種で、分布に関する情報は十分ではない。ヤンバルキシヌランより開花期は1ヶ月程度遅い。
 文献：橋本 保，1986. ラン科植物分類雑記（2）. 筑波実験植物園研究報告，（5）：17-30.

執筆者名：横田昌嗣*・治井正一*・豊見山元*・横田昌嗣（追補）・阿部篤志（追補）

- 和名：カゲロウラン
 分類：ラン科（APG科名：ラン科）
 学名：*Zeuxine agyokuana* Fukuyama
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：準絶滅危惧（NT）

- 形態の特徴：小形の常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ10～20 cm、4～5葉を互生する。葉は卵状披針形、濃緑色でビロード状、上面に光沢があり、長さ3～4.5 cm。総状花序は頂生し、10花前後をつける。萼片は赤色を帯びた黄褐色、花弁と唇弁は白色、唇弁はやや黄色を帯び、萼片と花弁は長さ4 mm、背萼片は卵状披針形、側萼片は線状披針形、花弁は線状倒披針形、唇弁は長さ3 mm、囊状卵形、上面基部に1対のかぎ形突起がある。
 分布域（県外）：本州（千葉県、静岡県、和歌山県）、四国、九州、屋久島、中之島、奄美大島、台湾。
 県内の分布：沖縄島北部、石垣島、西表島。
 生育環境：山地の自然林のやや乾いた林床に生える。
 生育状況：沖縄島では数ヶ所、石垣島では1ヶ所の自生地が知られるが、群生することはない。西表島では極めてまれで、現状は不明。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
 備考：本種は最近分布域を拡大させており、北上している。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名：横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣（追補）

- 和名：イシガキキシヌラン
 分類：ラン科（APG科名：ラン科）
 学名：*Zeuxine flava* (Wall. ex Lindl.) Benth. ex Hook. f.
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

- 形態の特徴：小形の冬緑性の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ20～25 cmになり、3～4葉を互生する。葉は卵形～楕円形、長さ2～4 cm。総状花序は頂生し、密に10花前後をつける。萼片は

黄緑色で、やや赤褐色を帯び、唇弁は黄色、背萼片は長さ 4 mm、卵形、側萼片は斜卵形、長さ 3～3.5 mm、花弁は斜長楕円形、長さ 4 mm、唇弁は長さ 5 mm、Y 字形、先端の裂片は円形、基部は囊状となり、上面基部に 1 対の突起がある。

- 分布域（県外）：屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、台湾、スリランカ、ヒマラヤ、タイ、ボルネオ。
県内の分布：沖縄島北部、石垣島、西表島。
生育環境：山地の自然林や二次林の湿った林床に生える。
生育状況：沖縄島では数ヶ所、石垣島では数ヶ所、西表島では 3ヶ所の自生地が知られるが、個体数は多くはない。
減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
備考：竹富町希少野生動植物種（2017 年）。

執筆者名：横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名：オオキヌラン（センカクキヌラン）
分類：ラン科（APG 科名：ラン科）
学名：*Zeuxine nervosa* (Wall. ex Lindl.) Benth. ex Clark (= *Heterozeuxine nervosa* (Wall. ex Lindl.) T. Hashimoto)
カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴：常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 30 cm になり、4～5 葉を互生する。葉は卵状披針形、長さ 7 cm になり、しばしば中肋に白色の条が入る。頂生する総状花序は、やや疎らに 6～10 花をつける。花は半開し、淡黄緑色で、やや赤褐色を帯び、唇弁は白色、萼片と花弁は長さ 5 mm、背萼片は卵形、側萼片は長楕円形、花弁は斜卵形、唇弁は長さ 7 mm、Y 字形、先端の裂片は円形、基部は囊状となり、基部上面に 3～4 対の突起がある。

- 分布域（県外）：台湾、フィリピン、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。
県内の分布：石垣島、魚釣島。
生育環境：自然林の湿った林床に生える。
生育状況：魚釣島ではごく狭い範囲に少数個体が生えるが、野生化したヤギによる食害の影響が心配される。石垣島では数ヶ所に産することが知られるが、いずれの自生地でも極めてまれで、ほとんどの自生地では近年は確認されていない。石垣島の 1ヶ所からは、タイトウキヌラン（豊見山, 1987）として報告されている。
学術的価値：分布域の北限である。
減少の要因：園芸用の採集。自生地の開発。野生化ヤギによる食害（魚釣島）。
保全対策：魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。
備考：タイトウキヌラン *Z. fluvida* Fukuyama は、本種と区別されることがあるが、台湾ではタイトウキヌランとオオキヌランが混生している自生地があることから、同一種の種内変異と考えるのが適切と思われる。オオキヌランとジャコウキヌランをジャコウキヌラン属 *Heterozeuxine* としてキヌラン属（ホソバラン属）*Zeuxine* から独立させる意見がある（橋本, 1986）。石垣市自然環境保全条例保全種（2015 年）。

文献：橋本 保, 1986. ラン科植物分類雑記(2). 筑波実験植物園研究報告, (5): 17-30.
豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25): 59-61.

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : ジャコウキヌラン (ジャコウシュスラン)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Zeuxine odorata* Fukuyama (= *Heterozeuxine odorata* (Fukuyama) T. Hashimoto)
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、先は直立し、花序を含めて長さ 30~50 cm、5~6 葉を互生する。葉は斜楕円形、長さ 5~10 cm。総状花序は頂生し、10~20 花をやや密につける。花は淡緑白色、半開し、萼片は卵状長楕円形、長さ 6~7 mm、花弁は広半月形~斜鎌状楕円形、長さ 7 mm、唇弁は長さ 9 mm、Y 字状で、先端の裂片は円形、基部はやや囊状になる。

分布域 (県外) : 台湾 (蘭嶼)、フィリピン (バタン島)。

県内の分布 : 沖縄島中部、石垣島、与那国島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では 2 ヶ所、石垣島では数ヶ所、与那国島では 2 ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。沖縄島ではおそらく絶滅したものと思われる。

学術的価値 : 分布域の北限である。オオキヌランとジャコウキヌランをジャコウキヌラン属 *Heterozeuxine* としてキヌラン属 (ホソバラ属) *Zeuxine* から独立させる意見がある (橋本, 1986)。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。

文献 : 橋本 保, 1986. ラン科植物分類雑記 (2). 筑波実験植物園研究報告, (5): 17-30.
 前津栄信・松島昭司, 1999. 安良の植物. “石垣島古郷安良の原風景—その歴史と自然—”, 石垣市総務部市史編集室 (編), 石垣市, 129-226.
 豊見山元, 1987. 琉球列島植物分布資料 4. 沖縄生物学会誌, (25): 59-61.

執筆者名 : 横田昌嗣*・橋爪雅彦*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : キヌラン (ホソバラ) (狭義)
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Zeuxine strateumatica* (L.) Schltr. var. *strateumatica*
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉性の多年生草本。茎は花序と共に長さ 5~15cm、葉は数個つき、線形、長さ 2~5.5cm、幅 3~5mm。穂状花序は長さ 2~4cm、密に多花をつける。花は乳白色、半開またはやや平開し、背萼片は卵状長楕円形、長さ 5mm、側萼片はやや短い。側花弁は卵状長楕円形でやや斜形、長さ 5mm、唇弁は長さ 5mm、基部はやや囊状になり、先端はさじ形、上面に短毛が生え、濃黄色。室果は狭楕円形、長さ 5~6mm。

分布域 (県外) : 九州、奄美大島、アフガニスタン、インド、スリランカ、中国、台湾、フィリピン、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 日当たりの良い草地や道路の法面に生える。

生育状況 : 石垣島では 2 ヶ所、西表島では 3 ヶ所で生育が確認されているが、かつての自生地は遷移が進行して樹林や高茎草原となり、最近は見つかっていない。沖縄島の現状は不明。

減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られる。遷移の進行。

備考 : 基本変種の基準産地はアフガニスタンで、八重山諸島のものは、写真から判断するとアフガニスタンのものと区別できない。本種は芝生と共に持ち込まれ、北アメリカに帰化している。沖縄県と台湾の固有変種チクシキヌラン var. *rupicola* (Fukuyama) S. S. Ying は、唇弁が三角形で上面が無毛である点で異なり、沖縄県では普通に見られる。チクシキヌランは、比較的最近になって再認識さ

れたもので(橋本, 1986)、キヌランと呼ばれていた期間が長く、キヌラン(狭義)と混同されている場合がある。キヌランは、インドでは形態的に極めて多様で、二倍体から十倍体までの倍数性複合体と様々な異数体からなることが知られている(Mehra & Vij, 1972)が、日本産のキヌラン(狭義)とチクシキヌランについては、十分には調べられていない。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文 献 : Mehra, P.N. & S.P. Vij. 1972. Cytological Studies in the East Himalayan Orchidaceae - 1: Neottieae. *Caryologia*, 25(3): 237-251.
橋本保, 1986. ラン科植物分類雑記(2). 筑波実験植物園研究報告, 5: 17-30.

執筆者名 : 横田昌嗣

〈情報不足 (DD)〉

和 名 : **ホソバノキミズ (オオキミズ)**
分 類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
学 名 : *Elatostema lineolatum* Wight var. *majus* Wedd.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の多年草。植物体全体に短毛を密生する。茎は直立し、上部で分枝して高さ 60 cm 程度になる。葉は互生し、長さ 6~13 cm、倒披針形で、先端は尾状に伸び、葉縁の先端に近い部分に数個の粗い鋸歯があり、葉柄は長さ 1 mm で短い。雌雄異株で、球状の花序を葉腋につける。花は径 1~2 mm、小花柄は長さ 1~2 mm、包葉は 3~4 枚つき、花被片は 4 枚、雄花の雄蕊は 4 個。

分布域(県外) : 奄美大島、台湾、中国中部~南部、ヒマラヤ、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の陰湿な林床に生える。沖縄島では石灰岩地に産する。

生育状況 : 沖縄島の 1ヶ所で 1887 年に採集された標本があることが報告(山崎, 1995)されているが、現状は不明である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。

備考 : 分布域の北限である奄美大島では、戦前に 2ヶ所で発見されているが、戦後は発見されていない。

文 献 : 山崎 敬, 1995. ホソバノキミズ琉球に分布. 植物研究雑誌, 70: 176.

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : **オトギリマオ**
分 類 : イラクサ科 (APG 科名: イラクサ科)
学 名 : *Gonostegia pentandra* (Roxb.) Miq. var. *hypericifolia* (Blume) Masam.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 常緑の多年生草本。茎は長さ 50 cm になり、粗毛を密布する。葉は茎の下部では対生で、茎の上部では互生し、線状披針形~狭卵形、3 行脈があり、長さ 5~15 mm、幅 2~4 mm、全縁、鈍頭またはやや鋭頭、円脚~浅心脚、葉柄は長さ 1 cm 以下、托葉は広三角形、長さ 1 mm 位。雌雄異花で、花は腋生し、雄花は葉腋に 1~2 個がつき、やや無柄、花被片は 4~5 個、長楕円形、長さ 1 mm、雄蕊は 4~5 個、雌花は筒状。瘦果は楕円形~卵形、長さ 1 mm。

- 分布域（県外）：台湾、中国南部、インドネシア。
 県内の分布：与那国島。
 生育環境：低地に生える。
 生育状況：島田（1917）、佐々木（1930）、Masamune（1954）では、島田彌市が与那国島で採集した標本（島田 No. 8398）をもとに報告されているが、これまで野外調査で確認されていない。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：もともと自生地と個体数が限られる。
 備考：島田の標本は、台湾総督府中央研究所林業部の標本室に所蔵されているというが、この標本室の後継機関の台湾林業試験所植物標本館（TAIF）では、この標本を見つけることはできなかった。
 文献：Masamune, G., 1954. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (IV). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 2: 59-117.
 佐々木舜一, 1930. 林業部腊葉館目録. 台湾総督府中央研究所林業部報告, (9) : 1-592, 台湾総督府中央研究所, 台北.
 島田彌市, 1917. 与那国島採集植物（予報）. 台湾博物学会会報, 7: 1-21.

執筆者名：横田昌嗣

- 和名：コウトウウラジロマオ
 分類：イラクサ科（APG 科名：イラクサ科）
 学名：*Maoutia setosa* Wedd.
 カテゴリー：情報不足（DD） 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴：高さ2~4mになる常緑の低木、植物体全体に銀白色の密毛がある。葉は互生し、卵状披針形~長楕円状披針形、長さ10~20 cm、幅5~6 cm、鋭尖頭、浅心脚~広楔脚、微鋸齒縁、3行脈、下面は白短毛を密布し、葉柄は長さ1~4.5 cm。集散花序は腋生し、雌雄異花、花は2~5個ずつ集り、径1 mm、雄花の花被片は5個、卵形、雄蕊は5個、雌花の花被片は微小、子房は有毛。瘦果は卵状楕円形。
 分布域（県外）：台湾（緑島、蘭嶼）、フィリピン。
 県内の分布：石垣島。
 生育環境：溪流近くの常緑樹林内に生える。
 生育状況：高嶺（1952）により石垣島に産するとされたが、初島（1975）や初島・天野（1994）では石垣島に産することは疑問視されている。標本の裏付けはなく、野外調査でも確認はされておらず、現状は不明。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：もともと自生地が限られている。自生地の開発。

- 文献：初島住彦, 1975. 琉球植物誌（追加・訂正）. 沖縄生物教育研究会, 那覇, 235-236.
 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 38.
 高嶺英言, 1952. 琉球林業試験場集報 No. 1, 八重山群島植物誌. 琉球林業試験場, 26.

執筆者名：横田昌嗣

- 和名：イワガネ
 分類：イラクサ科（APG 科名：イラクサ科）

学 名 : *Oreocnide frutescens* (Thunb.) Miq.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 高さ 4~5 m になる落葉低木。葉は長楕円形~卵形、長さ 6~12 cm、幅 2.5~5 cm、鋭鋸歯があり、鋭尖頭、葉脚は楔形、下面に白綿毛があり、葉柄は長さ 0.5~5 cm。雌雄異株、雌花と雄花の団集花序はともに無梗、小苞はやや鋭頭、雄花の花被は 4 裂、雄蕊は 4 個、雌花の花被は筒状。瘦果は卵形、長さ 1.5 mm。

分布域 (県外) : 四国、九州、屋久島、種子島、中国、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 山地の常緑樹林に生える。

生育状況 : Masamune (1954) には沖縄島、宮古島、石垣島、西表島に産すると書かれていおり、Walker (1976) では沖縄島に産することが名護市源河山の標本 (Wilson No. 8103) を引用して報告されているが、現在は生育が確認できない。国内および台湾の主要な標本室にも標本が見つからないため、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

文 献 : Masamune, G., 1954. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (IV). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 2: 59-117.

Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 416.

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : **タイワンヤマモガシ**

分 類 : ヤマモガシ科 (APG 科名 : ヤマモガシ科)

学 名 : *Helicia formosana* Hemsl.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 低木または高さ 10 m ほどになる常緑高木。樹皮は紅褐色、若枝には褐色毛がある。葉は長楕円形~長倒卵形、長さ 15~25 cm、幅 5 cm 以上。葉腋から細い総状花序を伸ばし、多数の花をつける。果実は球形、径 1.5~2 cm、茶褐色。

分布域 (県外) : 台湾、中国、ベトナム。

県内の分布 : 与那国島。

生育環境 : 与那国島での生育環境は不明。台湾では、低海拔地の常緑樹林内に生える。

生育状況 : 与那国島での採集記録 (佐々木, 1930) があるが、これ以外の記録は全くなく、現状は不明である。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

備 考 : 島田彌市の 1917 年 10 月の与那国島調査により採集された植物の目録 (島田, 1917) では、学名は *H. formosana* だが、和名はヤマモガシとされている。タイワンヤマモガシとヤマモガシとを混同している可能性も考えられる。しかし、佐々木 (1930) では両者は明確に分けられ、島田の標本 (Shimada No. 8601, TAIF) はタイワンヤマモガシとして引用されている。Walker (1976) でもタイワンヤマモガシとして引用されている。それで今回はこれらの意見に従っておくが、標本の同定の再検討は今後必要であろう。

文 献 : 佐々木舜一, 1930. 林業部腊葉館目録. 台湾総督府中央研究所林業部報告, (9) : 1-592, 台湾総督府中央研究所, 台北。

島田彌市, 1917. 与那国島採集植物 (予報). 台湾博物学会会報, 7: 1-21.

Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 新城和治*・立石庸一*

和名 : **アオモジ**

分類 : クスノキ科 (APG 科名: クスノキ科)

学名 : *Litsea cubeba* (Lour.) Pers.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 高さ5mくらいの落葉小高木。樹皮は灰色で、やや平滑、浅い縦すじが入る。若枝は暗緑色、無毛、2~3年で皮目ができる。葉は互生、長さ7~12mmの柄がある。葉身は長楕円状披針形~長楕円形、鋭尖頭、基部はくさび形、全縁、長さ7~12cm、洋紙質、上面は緑色、下面は粉白色、初め上面中肋に微毛があるが、のち無毛。雌雄異株。葉腋から出る短枝に2~4個の散形花序をつける。花序の柄は長さ5~12mm。漿果は球形、直径6mm、黒熟する。

分布域(県外) : 本州(岡山県、山口県)、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、マレーシア、インド。

県内の分布 : 屋我地島?

生育環境 : 不明。

生育状況 : 九州や奄美諸島ではまれなものではないが、沖永良部以南では全く採集記録がない。初島・天野(1958)の目録で「屋我地島(正宗氏による)」と記され、以後の目録や植物誌類でこの記述が踏襲されているが、これはMasamune(1954)の分布記録「Yakusima; Nakanosima; Amami-osima, Yagati, (leg. Ipse!) Asato」を屋我地島と読んだことによるものと考えられる。しかし、1970年代に屋我地島を詳しく調査したが見つからなかった。「Asato」は名瀬市朝戸で、「Yagati」は屋我地島ではなく、「Yag-gati」の誤記で、奄美大島の役勝(ヤクガチ)とも考えられる。Masamune(1954)に引用されたYagatiで正宗自身が採集した標本が今のところ見つからないが、これを検することができれば、いずれかはっきりするだろう。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192pp.

Masamune, G., 1954. Enumeratio tracheophytorum Ryukyu insularum (IV). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 2(2): 1-59.

執筆者名 : 新里孝和*・立石庸一*

和名 : **コバノボタンヅル**

分類 : キンポウゲ科 (APG 科名: キンポウゲ科)

学名 : *Clematis pierotii* Miq.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。葉は通常2回3出複葉、小葉は卵形~卵状楕円形、通常3裂、長さ1.5~5cm。散房花序は腋生し、通常1~3花をつける。花は白色で径3~4cm。

分布域(県外) : 四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 山地の自然林の林縁部に生える。

生育状況 : 沖縄島、石垣島とも近年は全く確認されておらず、現状不明。

学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。
減 少 の 要 因 : 自生地の開発。もともと個体数が少ない。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : **ハウライツツラフジ**
分 類 : ツツラフジ科 (APG 科名: ツツラフジ科)
学 名 : *Pericampylus formosanus* Diels
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : つる性の多年草。葉身は広三角状卵形でやや全縁、長さ 5~7.5 cm で上面はやや無毛で光沢があり、
下面は微毛があり 5 つの掌状脈が下面に突出する。
分布域 (県外) : 台湾、中国南部。
県 内 の 分 布 : 宮古島。
生 育 環 境 : 海岸の岩場にまれに見られる。
生 育 状 況 : 現状不明。
学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

文 献 : 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一, 1975. 宮古群島の植物. “沖縄県立自然公園候補地学術調査報告
(宮古群島)”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 31-70.

執 筆 者 名 : 新城和治*・川上 勲*

和 名 : **ヨツバリマツモ**
分 類 : マツモ科 (APG 科名: マツモ科)
学 名 : *Ceratophyllum demersum* L. var. *quadrispinum* Makino
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 水中に生える多年草。葉は茎節上に輪生し、マツモとは楕円形の果実の基部に 2 個、上部に 2 個の
刺針がある点で区別される。
分布域 (県外) : 本州、朝鮮、中国。
県 内 の 分 布 : 沖縄島 (那覇市識名園)。
生 育 環 境 : 沼や池の水中に生える。
生 育 状 況 : これまで自生地は 1 ヶ所のみ知られているが、現在は生育が確認できない。
学 術 的 価 値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地が限られている。
備 考 : 基本変種のマツモは各地に産したが、近年は急減しており、ヨツバリマツモとともにほとんど見ら
れなくなりつつある。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Ceratophyllum demersum* として
評価。

執 筆 者 名 : 新城和治*・新島義龍*

和名 : イシモチソウ
 分類 : モウセンゴケ科 (APG 科名: モウセンゴケ科)
 学名 : *Drosera peltata* Smith var. *nipponica* (Masam.) Ohwi
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 小形の多年生の食虫植物。茎は直立し、数葉をまばらに互生し、葉は三角で葉縁と上面に腺毛が密生する。夏頃に径 1 cm の白花を総状につける。
 分布域 (県外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、台湾、朝鮮、中国。
 県内の分布 : 内離島。
 生育環境 : 日当りのよい湿地に生える。遷移が進んで森林になると衰退する。
 生育状況 : 自生地は 1ヶ所が知られているだけで、1996 年に行なわれた調査ではまったく確認することができず、現状不明。自生地と思われる場所は、遷移が進んで森林になっており、本種の生育には適さなくなっている。
 学術的価値 : 県内で唯一の産地である。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Drosera peltata* として評価。

執筆者名 : 新城和治*・新島義龍*・横田昌嗣(追補)

和名 : スナジマメ
 分類 : マメ科 (APG 科名: マメ科)
 学名 : *Zornia cantoniensis* Mohlenbr.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。茎は細く、束生し、地を這って四方に広がり、長さ 5~30 cm。葉は 2 個の小葉からなり、各小葉は長楕円形で両端は尖り、長さ 1~1.5 cm、幅 2~4 mm、裏面に腺点が疎らにある。托葉は大きく長さ 4~6 mm、著しく楕着し、披針形。花は黄色の蝶形花で長さ 8~10 mm、旗弁に淡紫色の脈が目立つ。豆果は長さ 1~2 cm、4~5 種子を含む節果で、種子ごとにくびれて小節果をつくり、小節果は楕円形で扁平、刺状の毛が密生する。
 分布域 (県外) : 四国 (高知県)、台湾、中国、東南アジア。
 県内の分布 : 石垣島?。
 生育環境 : 原野や道路端など比較的幅広い環境に生育するが、北限の四国では海岸の砂地に限られる。石垣島での生育環境は不明である。
 生育状況 : 松村 (1912) や牧野・根本 (1931)、根本 (1936) による日本産植物の名彙類ではスナジマメの分布地として琉球が挙げられているが、その典拠は不明である。Walker (1976) では唯一琉球産標本が引用され、そこではただ 1 点の標本「ISHIGAKI: Ishigaki City (Masamune, without date-TAI)」が引用されている。これ以降、石垣島が琉球唯一の産地とされるようになった。しかし、この標本の採集者による琉球の維管束植物誌 (Masamune, 1955) では、琉球の分布地として Amami-oshima と Okinawa があげられているだけで、Ishigaki はあげられていない。この標本が所蔵されているのは TAI (台湾大学植物学系) で調査したが、この標本を確認することができなかった。また、日本国内の主要標本室でも、石垣島産はおろか奄美大島や沖縄島産の標本も所蔵されていない。
 学術的価値 : もし石垣に分布することが確実なら、台湾南部から石垣島から高知県と跳び跳びに分布していることになり、植物地理学的に興味深い種である。

- 文 献 : 牧野富太郎・根本莞爾, 1931. 訂正増補, 日本植物総覧. 春陽堂, 東京, XIX+1936pp.
Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (V). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 3(1): 101-182.
松村任三, 1912. 帝国植物名鑑下巻頭花部後編. 丸善, 東京, 767pp.
根本莞爾, 1936. 日本植物総覧補遺. 春陽堂, 東京, X+1436pp.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執 筆 者 名 : 立石庸一*

和 名 : フユザンショウ
分 類 : ミカン科 (APG 科名: ミカン科)
学 名 : *Zanthoxylum armatum* DC. var. *subtrifoliolatum* (Franch.) Kitam.
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 高さ 1~4 m に達する常緑低木。葉は 3~7 枚の小葉からなり、葉軸には翼がある。葉柄の基部に 1 対の長さ 1.2~2 cm の刺がある。雌雄異株で、花は帯黄色。
分 布 域 (県 外) : 本州 (関東以西)、四国、九州、朝鮮南部、台湾、中国。
県 内 の 分 布 : 沖縄島、久米島。
生 育 環 境 : 低地林内に生える。
生 育 状 況 : 近年全く確認されておらず、現状は不明。証拠標本も見つけることはできなかった。
減 少 の 要 因 : 低地林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

執 筆 者 名 : 新里孝和*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ホザキサルノオ (ウスバサルノオ)
分 類 : キントラノオ科 (APG 科名: キントラノオ科)
学 名 : *Hiptage benghalensis* (L.) Kurz
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑のつる性木本。葉は対生、卵形~卵状楕円形、長さ 8 cm、幅 4 cm になり、下面は有毛、葉柄は長さ 5 mm、有毛。総状花序は腋生または頂生し、花は白色、萼片は 5 個、長さ 4 mm、花弁は 5 個、長さ 13 mm、幅 9 mm、円状長楕円形、基部に長さ 2 mm の距があり、雄蕊は 10 個、花柱は 1 個。果実には 3 翼がある。
分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア。
県 内 の 分 布 : 沖縄島北部。
生 育 環 境 : 低地の常緑樹林に生え、高木に這い上がる。
生 育 状 況 : 近年は全く確認されておらず、現状は不明。
学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。
備 考 : 本種は国際自然保護連合 (2000) により、世界の侵略的外来種ワースト 100 の 1 種に指定されている。

文 献 : IUCN, 2000. 100 of the World's Worst Invasive Alien Species. IUCN ISSG, New Zealand, 11pp.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : タイワンフシノキ (タイワンヌルデ)

分 類 : ウルシ科 (APG 科名: ウルシ科)

学 名 : *Rhus javanica* L. var. *javanica*

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 高さ 4~8 m の落葉小高木。葉は奇数羽状腹葉で 9~13 個の小葉からなり、長さ 20~40 cm、葉柄には軟毛が密生する。小葉は楕円形で先は鋭く尖り、長さ 5~10 cm、縁に多数の鋸歯があり、裏面には軟毛が密生して黄褐色になる。雌雄異株で、花は小さく、枝先の大きな円錐花序に多数つき、黄白色で、花弁は 5 枚。果実は球形、橙赤色、径 5~6 mm。

分布域 (県外) : 台湾、中国、ヒマラヤ。

県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 低地の明るい林内や林縁にまれに生える。

生 育 状 況 : 石垣島ではごく少数の個体が確認されているだけであり、西表島での現状は不明である。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 自生地の開発と伐採。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 立石庸一*・伊波善勇*

和 名 : イヌソヨゴ

分 類 : モチノキ科 (APG 科名: モチノキ科)

学 名 : *Ilex kusanoi* Hayata

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 落葉高木で全株無毛。枝は長枝と短枝があり、長枝は皮目が著しく、短枝は 1~4 葉、3~13 花をつける。葉は洋紙質、卵形、長さ 4~10 cm、幅 2.5~5 cm、鈍頭か短広鋭尖頭、鋭脚、鈍鋸歯縁、葉柄は長さ 5~8 mm。花序は短枝か長枝の基部に束生する。雄花は単生か 3 個の集散花序、花冠は径 4 mm。雌花は各束に 3 個。果実は球形、径 3 mm、赤熟する。

分布域 (県外) : 台湾 (蘭嶼、緑島)、フィリピン (バタン島)。

県 内 の 分 布 : 与那国島。

生 育 環 境 : 近年は全く確認されておらず、現状不明。

生 育 状 況 : 与那国島で 1917 年 10 月に島田彌市により採集された (島田, 1917; 佐々木, 1930)。また Masamune (1955) は与那国島のほか沖縄島にも産するとしているが、沖縄島産は未確認である。また、与那国からも島田 (1917) 以後まったく記録がない。

学 術 的 価 値 : 与那国島は標本による裏付けのある沖縄県唯一の産地となっている。フィリピン、台湾 (蘭嶼)、与那国島という特異な分布様式は、琉球列島の植物相の成立を論じるうえで重要である (初島・金井, 1974)。

備 考 : 島田 (1917) では *Ilex taiwaniana* Hayata タイワンイヌツゲとして収録されているが、この名は現在 *I. kusanoi* イヌソヨゴのシノニムとするのが定説である。佐々木 (1930) でも、イヌソヨゴとして島田の標本が引用されている。Hu (1953) は奄美大島のヒロハタマミズキ *I. poenantha* Koidz.

をイヌソヨゴのシノニムとした。それに従えば、奄美大島にもイヌソヨゴが分布することになる。しかし、Hatusima (1987) はヒロハタマミズキを中国の *I. macrocarpa* Oliver に合一した。山崎 (1989) や島袋 (1990 ; 1997) 、Ohba & Akiyama (1999) もこの意見に従っている。ヒロハタマミズキ *I. macrocarpa* は果実が直径 10 mm 前後と大きく、黒熟するなど、イヌソヨゴとは全くの別種である (Hatusima, 1987) 。島田の標本 (No. 15303, TAIF, 佐々木 (1930) による) を TAIF で確かめたところ、ヒロハタマミズキではないことが判ったので、ここでは従来の扱いに従っておく。

- 文 献 : Hatusima, S., 1987. New or noteworthy plants from Japan. *J. Phytogeogr. Taxon.*, 35(2): 63-68.
初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新発見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
Hu, S. Y., 1953. *Ilex* in Taiwan and the Liukiu Islands. *J. Arnold Arbor.*, 34: 138-162.
Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (V). *Sci. Rep. Kanazawa Univ.*, 3(1): 101-182.
Ohba, H. & S. Akiyama, 1999. Aquifoliaceae. “Flora of Japan, Vol. IIC”, K. Iwatsuki *et al.* (eds.), Kodansha, Tokyo, 82-92.
佐々木舜一, 1930. 林業部腊葉館目録. 台湾総督府中央研究所林業部報告, (9) : 1-592, 台湾総督府中央研究所, 台北.
島袋敬一, 1990. 琉球列島維管束植物集覧. ひるぎ社, 那覇, 794pp.
島袋敬一, 1997. 琉球列島維管束植物集覧 [改訂版]. 九州大学出版会, 福岡, 855pp.
島田彌市, 1917. 与那国島採集植物 (予報). 台湾博物学会会報, 7: 1-21.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.
山崎 敬, 1989. モチノキ科. “日本の野生植物木本”, 佐竹義輔他 (編), 平凡社, 東京, 26-32.

執 筆 者 名 : 新里孝和*・立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ハマナツメ

分 類 : クロウメモドキ科 (APG 科名: クロウメモドキ科)

学 名 : *Paliurus ramosissimus* (Lour.) Poir.

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 高さ 5 m くらいに達する落葉低木。幼木は托葉の変化した刺がある。幼枝および花序に褐色の柔毛がある。葉は互生し、卵形または楕円形、長さ 5 cm くらい、3 行脈がある。花は腋生の短い集散花序につき、淡緑色で径約 5 mm。果実は倒円錐形の核果で、径 1~1.6 mm、白茶色の繊毛でおおわれ、上部の周縁に歯牙のある広い翼が発達し、中に 1 個の核を有する。

分 布 域 (県 外) : 本州 (静岡県以西)、四国、九州、奄美大島、徳之島、朝鮮 (済州島)、台湾、中国南部、インドシナ。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 海岸林内に生える。

生 育 状 況 : 近年は全く確認されておらず、現状は不明。ヤエヤマハマナツメが本種と誤認された可能性がある。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ノブドウ

分 類 : ブドウ科 (APG 科名: ブドウ科)
 学 名 : *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. var. *heterophylla* (Thunb.) Hara
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 半木性の落葉つる植物。茎は長く伸長し、大きなものでは径 4 cm くらいになり、節で曲がり、ジグザグ状になる。葉は互生しほぼ円形、3~5 裂し、縁に鋸歯がある。巻きひげは葉と対生し、二又に分かれ、ブドウ属と違って節毎にでる。集散花序を葉と対生の位置にだし、帯緑黄色の小さな花を多数つける。液果には昆虫が入って虫えいになり、不規則な球形で白色から淡紫色を経て熟して淡青色になる。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国。

県内の分布 : 魚釣島。

生育環境 : 山地の自然林に生える。

生育状況 : 上陸して調査が行われた最後の調査 (1991 年) では、確認されていない。自生地では野生化したヤギが殖えており、食害が進んでいるものと思われる。

学術的価値 : 南九州まで分布し、琉球列島では魚釣島だけに分布し、植物地理学上重要である。

減少の要因 : 野生化ヤギによる食害。もともと自生地が限られている。

保全対策 : 野生化ヤギの駆除が急務である。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 初島住彦, 1991. 魚釣島の植物地理. 鹿児島島の植物 (鹿児島植物同好会誌), (11): 62-66.
 多和田眞淳, 1954. 尖閣列島の植物相について. 琉球大学農学部学術報告, 1: 75-89.

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **アカミノヤブガラシ**
 分 類 : ブドウ科 (APG 科名: ブドウ科)
 学 名 : *Cayratia yoshimurai* (Makino) Honda
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年生のつる植物。茎は細く、巻きひげは葉と対生し、葉はとり足状の複葉で 5 個の小葉からなる。小葉は卵状披針形、長さ 4~9 cm、頂小葉の柄は長さ 1.5~4 cm、腋生の集散花序は長梗 (4~6 cm) を有し、多花をつける。液果はやや球形、紫赤色から黒色に熟し、径 7~12 mm、背面に溝がある。

分布域 (県外) : 九州、中之島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地、丘陵地の林内に生える。

生育状況 : 奄美諸島では山地にやや普通に生えるが、沖縄県では自生地、個体数とも極めて少ない。近年は全く確認されていない。

減少の要因 : 自生地の伐採。ダム建設による自生地の水没。もともと自生地が限られている。

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **サンカクヅル**
 分 類 : ブドウ科 (APG 科名: ブドウ科)

学 名 : *Vitis flexuosa* Thunb.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 落葉性のつる性木本。茎は細く線条があり、巻きひげは葉と対生し、2 岐する。葉は卵状三角形、浅心脚、長さ 4~10 cm。雌雄異株で、円錐花序は葉と対生し、長さ 4~7 cm、花序は赤褐色の綿くずのようなクモ毛で薄くおおわれる。花は小形で淡黄緑色。液果は球形、黒褐色に熟し、径 7 mm。
分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、朝鮮、中国、台湾 (蘭嶼)。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 山地に生える。
生育状況 : 近年は全く確認されておらず、現状不明。
学術的価値 : 奄美大島から西表島、さらに台湾 (蘭嶼) と跳び跳びの分布をしており、植物地理学上興味深い。
減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 新城和治*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : フウセンアカメガシワ
分類 : アオギリ科 (APG 科名: アオイ科)
学 名 : *Kleinhovia hospita* L.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 高さ 8~15 m に達する小高木。樹皮は平滑。葉は広卵形、長さ 10~20 cm、鋭尖頭、基部は心形、5~7 脈があり、葉柄は長さ 3~6 cm。円錐花序は疎らに花をつけ、長さ 20~40 cm。花は紅色、萼片は花弁より長い。果実は洋梨形で長さ 2~2.5 cm。
分布域 (県外) : 台湾、熱帯アジア、東部アフリカ。
県内の分布 : 宮古島?、石垣島?、西表島?、小浜島?、与那国島?
生育環境 : 低地林内に生える。
生育状況 : Masamune (1955) により記録されているが、琉球列島産の証拠標本は全く確認されていない。標本調査と野外調査でまったく確認されず、現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : 木材として利用のための伐採。自生地の開発。もともと個体数が少ない。

文 献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VI). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 3(2): 253-338.

執筆者名 : 横田昌嗣*・伊波善勇*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ミズマツバ
分類 : ミソハギ科 (APG 科名: ミソハギ科)
学 名 : *Rotala pusilla* Tulasne
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 3~10 cm の無毛の一年草。茎は赤色をおび、基部はふつう地を這い、分枝し、上部は斜めに立

ち上がる。葉は3~4個が輪生し、線形~長披針形、長さ6~10 mm、やや無柄。花は葉腋に1個ずつつき無柄、長さ1 mm、萼裂片は三角形、淡紅色で花弁はない。室果は球形、径1 mm。

- 分布域(県外) : 本州(中南部)、四国、九州、種子島、奄美大島、徳之島、朝鮮、台湾、中国、フィリピン、インド、アフリカ。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 水田や湿地に生える。
- 生育状況 : 現状は不明。
- 減少の要因 : もともと個体数が少ない。自生地の開発。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。**Rotala mexicana*として評価。
- 執筆者名 : 立石庸一*・豊見山元*

和名 : **ホザキキカシグサ(マルバキカシグサ)**

分類 : ミソハギ科 (APG 科名: ミソハギ科)

学名 : *Rotala rotundifolia* (Roxb.) Koehne

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 全株無毛の多年草。根茎は細く地面を這い、茎はほぼ直立して高さ10~30 cm になり、紫色を帯びる。葉は対生、楕円形~円形、長さ5~8 cm、全縁。花は茎の先に頂生する長さ3~6 cm の穂状花序につく。萼は広鐘型で、先は4片に切れ込む。花弁は倒卵形、淡紫色、長さ1.5~2 mm。果は楕円形、長さ2 mm ほど。

分布域(県外) : 九州、台湾、中国南部、マレーシア、ヒマラヤ、インド。

県内の分布 : 沖縄島北~中部、石垣島?、西表島?。

生育環境 : 水田や湿地に生える。

生育状況 : 国頭、中頭から記録され(坂口, 1924)、以後、沖縄県の植物誌・目録類に所載され、さらに Masamune (1955) では石垣島や西表島までも分布域に挙げられているが、これらの記録を証拠づける標本は全く見出されていない。

備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VI). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 3(2): 253-338.

坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : **ミヤマハシカンボク**

分類 : ノボタン科 (APG 科名: ノボタン科)

学名 : *Blastus cochinchinensis* Lour.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑低木で高さ2 m になる。小枝は細く円形で、黄色をおびた腺毛がある。葉は対生し膜質、葉身は披針形~楕円状卵形、長さ8~15 cm、幅2~5 cm、鋭尖頭、鋭脚、全縁、3~5 行脈、上面は無毛、下面には黄色を帯びた腺毛がある。花序は葉腋に束生し、小数の花をつける。花は白色、径7~8 mm。

果実は、果、小形でつぼ状球形。

- 分布域（県外）： 屋久島、奄美大島、徳之島？、中国南部、インドシナ。
県内の分布： 沖縄島北部、石垣島？、西表島。
生育環境： 山地林内に生える。
生育状況： 沖縄島からは、田代安定が1887年に採集した国頭産の標本に基づいて報告された（松村, 1898; Ito & Matsumura, 1899）。Masamune (1955) は沖縄島の他、石垣島および西表島も分布域に挙げ、Walker (1976) は1927年に採られた国頭の標本と1940年に西表島で正宗により採られた標本とを引用している。しかし戦後は確認されておらず、現状は不明である。
学術的価値： 大陸要素の一つで、沖縄島での分布は遺存的なものと考えられる。沖縄の植物相の成立史を考察する上で重要な種である。
減少の要因： もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。
- 文献： Ito, T. & J. Matsumura, 1899. Tentamen Florae Lutchuensis. Sectio prima. Plantae Dicotyledoneae polypetalae. J. Coll. Sci. Univ. Tokyo, 12: 263-541.
Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VI). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 3(2): 253-338.
松村任三, 1898. 台湾植物雑記. 東洋学芸雑誌, (196): 1-3.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.
- 執筆者名： 新城和治*・立石庸一*

-
- 和名： オオバチドメ
分類： セリ科 (APG 科名: セリ科)
学名： *Hydrocotyle nepalensis* Hook. f.
カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴： 常緑の多年草。茎は匍匐し、先は斜上し、高さ5~25 cm、数葉を互生する。葉は円状腎形、径3~6 cm、両面とも有毛、5~9浅裂し、葉縁に重鋸歯があり、葉柄は5~15 mm。散形花序は茎の上部に1~数個が束生し、長さ2.5 cm。果実は15~40個。
分布域（県外）： 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国、インド、インドシナ、ネパール、インドネシア、ハワイ、アフリカ東部、オーストラリア。
県内の分布： 沖縄島。
生育環境： 山地の常緑樹林の陰湿な林床に生える。奄美諸島では雲霧帯に生える。
生育状況： 初島・天野 (1994) では沖縄島に産することが記されているが、現状は不明。
減少の要因： もともと自生地と個体数が限られる。

- 文献： 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 159.
- 執筆者名： 横田昌嗣

-
- 和名： ホウライアオカズラ
分類： ガガイモ科 (APG 科名: キョウチクトウ科)
学名： *Gymnema sylvestre* (Retz.) Schult.

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 情報不足 (DD)

形態の特徴： 常緑の藤本。小枝は褐色で、はじめは圧毛が密布しているが、後に無毛に近くなり、皮目が目立つ。葉は倒卵状長楕円形、長さ3~6 cm。葉腋につく集散花序に10花ほどをつける。花冠は径約3 mm、5深裂する。

分布域(県外)： 台湾、中国南部、インドシナ。

県内の分布： 石垣島、与那国島。

生育環境： 低地林や海岸林内に生える。台湾では海岸近くの低木林の樹上や岩上に這うようにして生育する様子が確認されているが、沖縄県での生育環境は不明。

生育状況： 現地調査では、確認することはできなかった。標本調査でも、確実な野生と思われる沖縄県産の標本は確認されていない。

減少の要因： 海岸林や低地林の開発。もともと自生地と個体数が少ない。薬用の採集。

執筆者名： 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名： タイワンキジョラン (イリオモテキジョラン)

分類： ガガイモ科 (APG科名: キョウチクトウ科)

学名： *Marsdenia formosana* Masam.

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 情報不足 (DD)

形態の特徴： つる性の低木。小枝は淡灰色で無毛。葉は対生、多肉質にならず、卵形、長さ6~7 cm。腋生の集散花序には長さ3 cm程の柄がある。花冠はやや鐘状、5深裂、長さ径とも約5 mm、花筒は短く喉部は無毛。

分布域(県外)： 台湾。

県内の分布： 西表島、与那国島？。

生育環境： 山地林内に生える。

生育状況： 西表島では、近年はまったく確認されておらず、現状は不明。おそらく本種と思われるものが、最近与那国島で確認されており、今後の研究が必要である。

学術的価値： 分布域の北限で、国内では唯一の産地である。

減少の要因： もともと自生地と個体数が少ない。

備考： 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名： 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)

和名： シソノミグサ

分類： アカネ科 (APG科名: アカネ科)

学名： *Knoxia corymbosa* Willd.

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴： 一年草。茎は直立して細く、高さ1 mくらいに達し、全体に細毛がある。葉は対生し、線状披針形~卵状長楕円形で、長さ7~12 cm、幅1~3 cm、毛がある。花は葉腋の集散花序につき、白色、花冠は長さ2.5~4 mm、花筒の内面には毛がある。

分布域(県外)： 台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布： 石垣島。

- 生育環境 : おそらく二次林の明るい林床か、日当たりのよい草地に生える。
生育状況 : 石垣島で1962年に採集された標本が東北大学理学部標本庫 (TUS) に所蔵されているが、近年はまったく確認されていない。
学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。

執筆者名 : 横田昌嗣*・澤岨安喜*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : ハリザクロ (ハリクチナシ)
分類 : アカネ科 (APG 科名: アカネ科)
学名 : *Randia spinosa* (Thunb.) Poir.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 高さ8mに達する落葉性の小高木。若枝には長さ5~10mmの1対の刺があり、小枝は有毛。葉は対生、楕円形~狭倒卵形、薄い革質、長さ2.5~6cm、幅1.5~3cm、鋭尖頭、鋭脚、全縁、側脈は4~5対、葉柄は長さ3~5mm、托葉は卵形。花は葉腋に単生し、白色または後に緑黄色を帯び、萼は5個、卵形、長さ6~9mm、有毛、花冠は径1.2~1.8cm、有毛、5裂し、裂片は卵形~長楕円形。液果は球形~卵円形、長さ2~4cm、黄熟し、外果皮は厚い。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、アフリカ東部。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 低地の常緑樹林に生える。

生育状況 : Matsumura (1901) は、*R. dumetorum* Lam. の学名で八重山産の標本(田代安定採集)と石垣島産の標本(S. Tanaka No. 285)を引用して、琉球から本種を記録している。しかし、形態の記載では、萼は長さ12mmでやや有毛、花冠は長さ5~6mmと書かれており、必ずしも本種の特徴と一致しない。その後の野外調査では見つかっていないことから、現状は不明。石垣島に産するヒジハリノキ(シナミサオノキ)を誤認している可能性も考えられる。

学術的価値 : 分布域の北限。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : Masamune (1955) には、産地は不明であるが、本種の詳細な線画が掲載されている。

文献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.

Matsumura, J., 1901. Notulae ad plantas asiaticas orientales. Bot. Mag. Tokyo, 15: 2-4.

執筆者名 : 横田昌嗣

-
- 和名 : カワリバアサガオ
分類 : ヒルガオ科 (APG 科名: ヒルガオ科)
学名 : *Ipomoea polymorpha* Romer et Schult.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全株粗毛をもつ一年草。茎は直立し高さ10~45cmで分枝する。葉は卵状長楕円形、長さ2.5~3cm、鋸歯縁または羽状または掌状に3~7浅~深裂するなど変化が多い。花は葉腋に単生、花冠は鐘形で紅紫色。

分布域（県外）：台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア、オーストラリア。
 県内の分布：宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境：低地の日当りのよい草地に生える。
 生育状況：現状は不明。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：低地の開発。もともと個体数が少ない。
 備考：竹富町希少野生動植物種（2017年）。

執筆者名：立石庸一*・新納義馬*・横田昌嗣(追補)

和名：マルバノホロシ
 分類：ナス科（APG科名：ナス科）
 学名：*Solanum maximowiczii* Koidz.
 カテゴリー：情報不足（DD） 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：多年草。茎はつる状で全株無毛。葉は披針状長楕円形、長さ5～13 cm、幅1.5～4 cm。集散花序は茎の節間または葉の反対側につき、疎らに花をつける。花冠は深く5裂し淡紫色、径1 cm程、裂片は反り返る。果実は球形の液果で径7～10 mm、赤く熟す。
 分布域（県外）：本州（関東以西）、四国、九州、奄美大島、朝鮮、中国。
 県内の分布：沖縄島北部。
 生育環境：山地の林縁部に生える。
 生育状況：自生地はごく限られており、個体数は少ない。
 減少の要因：森林伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

執筆者名：立石庸一*・山城 考*

和名：コフジウツギ（ウラジロフジウツギ）
 分類：フジウツギ科（APG科名：ゴマノハグサ科）
 学名：*Buddleja curviflora* Hook. et Arn.
 カテゴリー：情報不足（DD） 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：半常緑の低木。茎は高さ1～2 mになり、断面は円形で稜を欠く。葉は卵形～卵状披針形、長さ5～14 cm、幅1.5～6 cm、下面は灰白色、綿毛があり、灰緑色、葉柄は長さ1 cm。穂状花序は頂生し、長さ10～30 cm、花冠は4裂し、長さ1.5 cm、花冠は4裂し、裂片は長さ2.5 mm、萼は長さ3 mm、外面に細密毛をふく。室果は楕円形、長さ5 mm。
 分布域（県外）：四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島。
 県内の分布：沖縄島。
 生育環境：沖縄島では市街地や墓地に生える（山崎，1965）。奄美大島では海岸近くの原野や林縁に生える。
 生育状況：琉球大学理学部の植物標本室（RYU）には、沖縄島的那覇市首里崎山町で採集された標本が2枚（多和田眞淳 RYU No. 28126, Aug. 1936, fl. ; 初島住彦 No. 33998, Oct. 1, 1972, st.）ある。多和田 RYU No. 28126 のラベルには「原野に産する」と書かれているが、初島 No. 33998 のラベルには「多和田氏の家のすぐ近くに1本だけ野生し、絶滅の恐れあり」と書かれている。自生地の現状は確認されていないが、那覇市の市街地にあることから開発により既に失われた可能性が高い。人家の近

くであり、栽培品が逸出した可能性も指摘されている（初島・天野，1958；山崎，1965）。現状は不明。

減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。

備考：若枝に灰白色の密毛をふくものをウラジロフジウツギ f. *nerenifera* (Makino) Yamazaki として区別する意見があり、鹿児島県本土から奄美大島までのものはウラジロフジウツギ型であるが、沖縄島の標本は四国や九州に分布する基本品種のコフジウツギ型である（山崎，1965）という。奄美大島でも少なく、絶滅寸前である。

文献：初島住彦・天野鉄夫，1958. 沖縄植物目録，琉球大学研究普及部，那覇市，83.
山崎 敬，1965. コフジウツギの学名. 植物研究雑誌，40: 159-160.

執筆者名：横田昌嗣

和名：ヒメクチバシグサ

分類：ゴマノハグサ科 (APG 科名: アゼナ科)

学名：*Lindernia tenuifolia* (Colsm.) Alston

カテゴリー：情報不足 (DD) 環境省カテゴリー：情報不足 (DD)

形態の特徴：一年草。茎は細く、斜上して長さ7～15 cmになる。葉は対生して柄がなく、線形～線状披針形、長さ5～17 mm、幅1～2 mm、基部はやや茎を抱く。花は茎上部の葉腋に単生、小花柄は長さ2～5 mmで、花時には直立するが、果時には開出さらには下向する。萼は鐘形、深く5裂、花冠は2唇形、紫色、長さ3～4 mm、雄蕊は2本、仮雄蕊も2本。蒴果は細長い円筒形で先はとがり、長さ4～6 mm、直径0.7～1 mm、残存している萼より際立って長い。

分布域(県外)：台湾、中国南部、ベトナム、カンボジア、マレーシア、インド、スリランカ。

県内の分布：宮古島、石垣島、西表島。

生育環境：湿地や水田に生える。

生育状況：初島・天野（1958）が石垣島・西表島を分布域として掲げたのが、琉球におけるヒメクチバシグサの分布に関する報告の最初と思われる。しかしその根拠となる標本・資料はなく、両島からはその後の記録は全くない。ところが宮古島では既に1920年代に採集された標本のあることがわかった。ただし、この島でもその後は全く確認されていない。

学術的価値：分布域の北限である。

備考：上の分布報告の著者ら自身が、後の植物目録で「疑問品」としている（初島・天野，1994）が、上述のように宮古島からの採品があるので、琉球での分布は確実のようである。この標本は坂口總一郎により、1922年に採集された2点である。ところがその頃はヒメクチバシグサと同定できなかったのか、坂口（1924）には収録されていない。竹富町希少野生動植物種（2017年）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

文献：初島住彦・天野鉄夫，1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部，那覇市，192pp.
初島住彦・天野鉄夫，1994. “増補訂正琉球植物目録”，沖縄生物学会，西原町，198.
坂口總一郎，1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店，首里，152pp.

執筆者名：立石庸一*

和名：ケウリクサ

分類：ゴマノハグサ科 (APG 科名: アゼナ科)

学 名 : *Lindernia viscosa* (Hornem.) Bold.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。茎は長さ 5~13 cm で斜上して密に毛が生え、断面は 4 角形。葉は対生して 1~4 mm の柄があり、卵形で長さ 1~2.5 cm、幅 0.6~1.5 cm、両面無毛。花序は茎の先に頂生し、長さ 1~2 cm、4~8 花をつける。萼は鐘形で 5 片に深く切れ込み、小花柄とともに腺毛がある。花冠は 2 唇形、淡紫色、長さ約 5 mm。雄蕊は 4 本あり、全て稔性がある。朔果は楕円状球形、長さ 2~2.5 mm で、残存する萼とほぼ同長かやや長い。種子は楕円形、長さ約 0.3 mm、褐色に熟し、小穴が散在する。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、中国南部、ベトナム、カンボジア、マレーシア、タイ、ミャンマー、インド、インドネシア、ニューギニア。

県内の分布 : 与那国島?。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : Masamune (1955) による与那国島での分布の記録は、佐々木 (1930) による台湾総督府林業部腊葉館目録に引用された島田彌市採集の標本に基づいている。この標本はその後確認されておらず、またそれ以外の標本も与那国島から採られていない (Walker, 1976)。

備考 : 琉球の植物誌や目録類は Masamune (1955) に基づいて、「島田氏による」という注とともに与那国島を分布域に挙げている。しかし、Walker (1976) はこの植物を沖縄県のプロラからはずし、初島・天野 (1994) も、琉球植物目録の増補訂正版からこの種を除外している。最終的な判断は島田の標本の再検討に待たねばならないが、与那国島での分布には疑問がある。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 393pp.

Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.

佐々木舜一, 1930. 林業部腊葉館目録. 台湾総督府中央研究所林業部報告, (9) : 1-592, 台湾総督府中央研究所, 台北.

Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 立石庸一*

和 名 : **オオナンバンギセル**

分類 : ハマウツボ科 (APG 科名: ハマウツボ科)

学 名 : *Aeginetia sinensis* G. Beck

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。無葉緑の寄生植物。茎は短く、少数の鱗片をつけ、総状に数花をつける。小花梗は長さ 20~40 cm、花を単生し、萼は長さ 3~5 cm、鈍頭、淡紅紫色、花冠は長さ 4~6 cm、紅紫色、やや 2 唇形、5 裂し、花冠裂片の辺縁には細歯がある。室果は球形、長さ 8~10 mm。ナンバンギセルに似るが、萼はより長く、花冠裂片の縁に細歯牙がある点で区別できる。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、喜界島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 草原や林縁に生えるイネ科植物などの根に寄生する。

生育状況 : Masamune (1955) により沖縄島に産すると書かれているが、標本は引用されておらず、野外調査でも確認されていない。現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文 献 : Masamune, G., 1955. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣

和 名 : ヤブタバコ

分 類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学 名 : *Carpesium abrotanoides* L.

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : やや大型の一年草。茎は高さ 50~100 cm、太くて丸く、上部は数本の長い枝を開出し、それぞれの枝は更に枝を分けて、その葉腋に頭花をつける。下部の葉は広楕円形で長さ 20~28 cm、幅 8.5~15 cm、基部は広い翼のある柄となり、質は薄く両面に短毛があり、下面に腺点がある。頭花は柄がなく、葉腋に 1 個ずつ下向きにつき、総苞は鐘球形、片は 3 列で互重ね状にならび、外片は短く円頭。瘦果は長さ 3.5 mm、先はくちばし状となって粘液を出し、臭気がある。

分 布 域 (県 外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島 (宝島)、奄美大島、徳之島、沖永良部島、朝鮮、中国、ヒマラヤ。ヨーロッパおよび西アジアに帰化。

県 内 の 分 布 : 沖縄島南部、久米島、与那国島。

生 育 環 境 : 山野や家の近くの藪に生える。

生 育 状 況 : 1938 年に那覇市久米付近で記録されて以来、確認されていない (初島・天野, 1958; Walker, 1976)。一時的な帰化による生育の可能性も考えられる。1967 年に久米島で採集された標本があるが花も実もついていないので同定に若干の疑問が残る。与那国島の目録にも挙げられているが (新・新納, 1969; 藤本, 1972)、全く確認されていない。

学 術 的 価 値 : 分布域のほぼ南限である。

備 考 : 久米島の標本は鹿児島大学 (KAG) にあるが、ロゼットだけなので同定が難しい。

文 献 : 新 敏夫・新納義馬, 1969. 与那国島の植物相. 鹿児島大学理科報告, (18): 71-111.
藤本義昭, 1972. 与那国島の生物 (1). 甲南出版, 神戸, 108pp.
初島住彦・天野鉄夫, 1958. 沖縄植物目録. 琉球大学研究普及部, 那覇市, 192pp.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執 筆 者 名 : 立石庸一*

和 名 : ヤマヒヨドリバナ (ヤマヒヨドリ)

分 類 : キク科 (APG 科名: キク科)

学 名 : *Eupatorium variabile* Makino

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 多年草。茎は疎らに分枝し、高さ 30~100 cm に達する。葉は対生し、卵形~長楕円形で基部は切形またはやや心形になり、長い葉柄に続く。頭花は枝の先に集まって頂生の散房花序をつくる。

分 布 域 (県 外) : 四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、喜界島。

県 内 の 分 布 : 久米島。

生育環境 : 近海地の草地や道路の法面に生える。
 生育状況 : 久米島の現状は不明。生育地は限られ、個体数は少ないものと思われる。
 学術的価値 : 分布域の南限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。低地部の開発。
 備考 : 奄美諸島ではやや普通に生える。

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*

和名 : **オグルマ**
 分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
 学名 : *Inula britannica* L. subsp. *japonica* (Thunb.) Kitam.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草。茎は高さ 20~60 cm に達し、上方で疎らに分枝する。葉は互生し、広披針形~長楕円形、基部は無柄または半ば茎を抱く。頭花は黄色で直径 3~4 cm、枝先に 1 個ずつつく。
 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国。
 県内の分布 : 伊平屋島、伊江島、沖縄島。
 生育環境 : 日当たりのよい原野や水田の畦などの湿った所に生える。
 生育状況 : 沖縄島では 1947 年に採集されているが、近年はまったく確認されていない。伊平屋島と伊江島の現状は不明。既に絶滅した可能性が高い。
 学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。

文献 : 池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑 第 9 巻. 新星図書出版, 75.
 仲田栄二, 1974. 伊平屋・伊是名諸島の植物. “伊平屋列島文化誌”, 仲田清英 (編), 41-107.

執筆者名 : 立石庸一*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名 : **タカサゴソウ**
 分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
 学名 : *Ixeris chinensis* (Thunb. ex Murray) Nakai subsp. *strigosa* (Lev. et Vaniot) Kitam.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 高さ 20~40 cm になる多年草。根生葉はへら状披針形で、羽状に裂けることが多い。頭花は枝の先につき、白色で淡紫色のふちどりがあがる。
 分布域(県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国。
 県内の分布 : 沖縄島。
 生育環境 : 日当たりのよい原野に生える。
 生育状況 : 現状は不明。
 減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*

-
- 和名 : ヨメナ
分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
学名 : *Kalimeris yomena* Kitam.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし
分布域 (県外) : 朝鮮 (済州島)、本州 (東海以西)、四国、九州、奄美大島、沖永良部島。
県内の分布 : 伊平屋島?、沖縄島北部?、石垣島。
生育環境 : 草地に生える。
生育状況 : 石垣島で1920年代に採られた標本があるだけで、それ以外は3島とも全く確認されておらず、現状は分からない。現在普通に見られるのは、外来種のインドヨメナ *K. indica* (L.) Sch.-Bip. である。
減少の要因 : もともと自生地が限られている。外来種との競合。
備考 : 坂口 (1924) が沖縄島国頭と伊平屋島を挙げて沖縄植物総目録に掲載したのが、沖縄県からの初めての報告と思われる。このうち伊平屋島ではその後全く追認されていないが、新納・新城 (1959) に採録されたため、その後のこの島や琉球の植物誌・目録類で分布地として挙げられてきた。一方、国頭の方はその後全く採り上げられておらず、もちろん確認もされていない。その後、Kitamura (1937) は *Compositae Japonicae* で、石垣島産の標本 (T. Iwasaki, 30 Dec. 1922, KYO) を引用したが、これが標本によって分布が確認される沖縄県の唯一の記録である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
文献 : Kitamura, S., 1937. *Compositae Japonicae, pars prima*. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imper. Univ., ser. B, 13: 1-421.
新納義馬・新城和治, 1959. 伊平屋・伊是名諸島の植物. 琉球大学文理学部紀要 (理学編), (3): 81-105.
坂口總一郎, 1924. 沖縄植物総目録. 石塚書店, 首里, 152pp.
執筆者名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)
-

- 和名 : コメナモミ
分類 : キク科 (APG 科名: キク科)
学名 : *Siegesbeckia orientalis* L. subsp. *glabrescens* (Makino) Kitam.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし
分布域 (県外) : 朝鮮、北海道、本州、四国、九州、奄美大島、台湾、中国。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地。
生育状況 : 沖縄島北部で採られた標本を基に琉球での分布が報告されているが (Kitamura, 1942)、以後全く確認されていない。また、Masamune (1955) は沖縄、宮古、石垣、西表の各島を挙げているが、上記以外は全く確認されていない。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
学術的価値 : 大陸系の植物で琉球列島に点々と遺存しているものの一つと考えられる。
文献 : Kitamura, S., 1942. *Compositae Japonicae, pars tertia*. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imper. Univ., ser. B, 16(3): 155-292.
Masamune, G., 1955. *Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VII)*. Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(1): 45-134.

執筆 者 名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **カンサイタンポポ**
 分 類 : キク科 (APG 科名: キク科)
 学 名 : *Taraxacum japonicum* H. Koidz. (= *T. liukiense* H. Koidz. ; *T. okinawense* H. Koidz. ; *T. okinawense* var. *ecorniculatum* H. Koidz.)

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

分布域 (県外) : 本州 (長野県以西)、四国、九州、トカラ列島 (宝島)。
 県 内 の 分 布 : 沖縄島、久米島。
 生 育 環 境 : 低地の草原に生える。
 生 育 状 況 : 1930 年代に沖縄島や久米島で採集されているが、以後は生育を確認するために十分な情報は得られていない。セイヨウタンポポ *T. officinale* Weber、シロバナタンポポ *T. albidum* Dahlst.、アカミタンポポ *T. laevigatum* DC. のような帰化植物に席捲されてしまった可能性がある。
 学 術 的 価 値 : 分布の南限に当たる。
 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。帰化種との競合・交雑・繁殖干渉。
 備 考 : 久米島産の標本に基づいてリュウキュウタンポポ *T. liukiense* H. Koidz. (Koidzumi, 1933) が、沖縄島からオキナワタンポポ *T. okinawense* H. Koidz. (Koidzumi, 1936) とその変種ツノナシオキナワタンポポ var. *ecorniculatum* H. Koidz. (Koidzumi, 1936) が記載されたが、これらは現在すべてカンサイタンポポのシノニムとされている (Kitamura, 1957)。

文 献 : Kitamura, S., 1957. Compositae Japonicae 6. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imper. Univ., ser. B, 24(3): 42.
 Koidzumi, H., 1933. *Taraxacum novum Japonicum* (I). J. Jpn. Bot., 9(6): 350.
 Koidzumi, H., 1936. *Taraxacum novum Japonicum* (IV). J. Jpn. Bot., 12(9): 627.
 Morita, T., S. P. J. Menken & A. A. Sterk, 1990. Hybridization between European and Asian dandelions (*Taraxacum* section *Ruderalia* and section *Mongolica*). New Phytol. 114: 519-529.
 Takakura, K.-I., T. Nishida, T. Matsumoto & S. Nishida, 2009. Alien dandelion reduces the seed set of a native congener through frequency-dependent and one-sided effects. Biological Invasions, 11: 973-981.

執筆 者 名 : 立石庸一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **コバノヒルムシロ (トゲミズヒキモ)**
 分 類 : ヒルムシロ科 (APG 科名: ヒルムシロ科)
 学 名 : *Potamogeton cristatus* Regel et Maack

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 淡水性の多年草。水中茎は細く、多数分枝する。水中の葉と水面に浮く葉とは形が異なり、沈水葉は狭線形で長さ 4~6 cm、浮葉の葉身は長楕円形で長さ 2~2.5 cm。水面上に長さ 1 cm 近い穂状花序を出し、花被のない黄色を帯びた小さな花を多数つける。
 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、朝鮮、台湾、中国。
 県 内 の 分 布 : 伊平屋島、与那国島。
 生 育 環 境 : 淡水中に生える。
 生 育 状 況 : 現状は不明。ミズヒキモ *P. octandrus* Poir. var. *miduhikimo* (Makino) Hara を誤認した可能性がある。

減少の要因 : 沼、池、水田の減少。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : オオハマオモト

分類 : ヒガンバナ科 (APG 科名: ヒガンバナ科)

学名 : *Crinum asiaticum* L. var. *asiaticum*

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は長さ 60 cm になり、葉を束生する。葉は披針形、鋭尖頭、長さ 60~180 cm、幅 12~15 cm。散形花序は腋生し、数個出て、長さ 90~120 cm、多花を生じ、仏炎苞で包まれる。花は白色、花筒は長さ 7.5~15 cm、花冠裂片は線状、長さ 9 cm。雄蕊は深紅色、花柱は暗赤色。

分布域(県外) : インド、インドシナ、マレーシア、インドネシア、太平洋諸島。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 海岸の砂浜に生える。

生育状況 : 初島・天野 (1994) によって西表島に産することが記されているが、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 広義のハマオモトは熱帯アジアに広く分布し、インドから太平洋諸島にかけて分布する基本変種のオオハマオモト var. *asiaticum*、琉球列島、台湾、中国南部に分布し、葉縁が波状となり、花被片が基本変種より長いタイワンハマオモト var. *sinicum* Baker、日本本土の暖地に分布し、葉幅が狭く、花被片が小さいハマオモト var. *japonicum* Bakerなどを区別する見解 (Baker, 1888) がある一方、これらを区別しない見解もある。ハマオモトは、気候条件や土壌条件で生育状態が大きく変化し、植物体や花の各部分の大きさは同一地域であっても変異が大きい。沖縄県で最も気候が温暖な南琉球の特には有機物が多く漂着した海岸では、大きく生長することがある。これらの種内分類群が遺伝的な違いに基づくものであるかどうかは、今後再検討する必要がある。竹富町希少野生動物種 (2017 年)。

文献 : Baker, J. G., 1888. Handbook of the Amaryllideae including the Alstroemerieae and Agaveae. George Bell & Sons, London, 216pp.

初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 316.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : キリシマシャクジョウ

分類 : ヒナノシャクジョウ科 (APG 科名: ヒナノシャクジョウ科)

学名 : *Burmanna liukuensis* Hayata

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 腐生の一年草。茎は単一まれに 1 分枝し白色で細く、高さ 5~14 cm、小さな三角形の鱗片葉を数個散生する。まばらな 2 枝集散花序は頂生し、花は 3~8 (まれに 1) 個つき、帯白色、卵状円筒形、長さ 3~4 mm、3 個の狭い翼があり、3~5 mm の細い柄がある。萼裂片は広三角形、長さ 0.5 mm、鈍頭、花弁は円形でごく小さい。葯隔の基部に下垂する距がある。果実は球形、径約 3 mm。

分布域(県外) : 四国、九州南部、種子島、奄美大島?。

県内の分布 : 沖縄島北部。

- 生育環境 : 山地の腐植質の溜まった林床に生育する。
 生育状況 : 種子島から記載され (Hayata, 1915)、沖縄県では国頭に産するとされている (坂口, 1924) が、
 標本や生育地は確認されておらず、現状不明。
 学術的価値 : 分布域の南限である。

- 文献 : Hayata, B., 1915. *Icones Plantarum Formosanarum*, Vol. 5. 358pp.
 坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 新里孝和*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **アオコウガイゼキショウ**
 分類 : イグサ科 (APG 科名: イグサ科)
 学名 : *Juncus papillosus* Franch. et Sav.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 多年草。茎は円筒状で直立し、高さ 20~30 cm、2~3 個の葉をつける。葉は全て単管状で茎葉で茎より短い。頭花は 2~3 花からなり、これが茎頂に多数集まる。
 分布域(県外) : シベリア東部、北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国。
 県内の分布 : 沖縄島北部
 生育環境 : 水田や湿地に生える。
 生育状況 : 名護市(名護町寄合原)で 1938 年に採集され、大井次郎によって本種と同定された標本(金城鉄郎 No. 508)が琉球大学理学部の標本室(RYU)に所蔵されている。これは Walker によりハリコウガイゼキショウ *J. wallichianus* Laharpe と同定され、Walker (1976) で引用されている。またこの標本をタチコウガイゼキショウ *J. krameri* Franch. et Sav. と同定する見解もある。本種とその近縁種は、形態変異が著しいうえ、雄蕊の数などの特徴で識別するため、状態の良い標本が得られないと判断は難しい。
 学術的価値 : 分布域の南限である。
 減少の要因 : もともと自生地が限られている。湿地・水田の埋立。自生地の開発。

- 文献 : Walker, E. H., 1976. *Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands*. Smithsonian Institution Press, Washington, 302.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : **クロホシクサ**
 分類 : ホシクサ科 (APG 科名: ホシクサ科)
 学名 : *Eriocaulon parvum* Koern.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 和名 : **ヌカボ**
 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
 学名 : *Agrostis exarata* Trin. subsp. *nukabo* (Ohwi) T. Koyama
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 繊細な多年草で、根茎は発達しない。稈は細く高さ 30~70 cm になる。葉は長さ 7~15 cm、幅 1.5~5 mm。花序の枝は稈に圧着するため細く見えて先は傾く。小穂は長さ 2 mm くらい、緑色で光沢がある。
- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、トカラ列島、奄美大島、喜界島、沖永良部島、朝鮮、台湾、中国、フィリピン。
- 県内の分布 : 沖縄島、魚釣島。
- 生育環境 : 平地および丘陵地に生える。
- 生育状況 : 現状は不明。
- 減少の要因 : もともと自生地が少ない。自生地の開発。野生化ヤギによる食害(魚釣島)。
- 保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*

-
- 和名 : **タイワンイヌビエ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Echinochloa glabrescens* Munro ex Hook. f.
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

-
- 和名 : **ヒメスズメガヤ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Eragrostis pilosissima* Link
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

-
- 和名 : **ウンヌケモドキ**
- 分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
- 学名 : *Eulalia quadrinervis* (Hackel) O. Ktze.
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 帰化種のウンヌケ *Eulalia speciosa* (Debeaux) O. Ktze. に似ているが、茎の基部は赤褐色を帯び、黄褐色の毛を密生する葉鞘がない。
- 分布域(県外) : 本州(東海以西)、四国、九州。
- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 原野に生える。
- 生育状況 : 1887 年に田代安定により採集され、西表島から 1923 年に記録されたが、以後確認されていない (Walker, 1976)。
- 学術的価値 : 分布の南限。
- 減少の要因 : 原野の開発。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press,

Washington, 1159pp.

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : コバノウシノシッペイ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Hemarthria compressa* (L. f.) R. Br.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 多年草で根茎は匍匐する。稈は平滑無毛で、斜上または傾伏、上方は直立して、高さ 70~100 cm になる。葉は線形、7~15 cm、辺縁を除き無毛、鞘の口部は有毛。穂状花序は単立または束生して、長さ 5~8 cm、花軸は太くてところどころ凹み、小穂とその柄は花軸の凹みにはまり込み、花序は全体として太い鞭状の花序となる。

分布域 (県外) : 九州南部、種子島、屋久島、台湾、中国南部、インドシナ、インド。

県内の分布 : 沖縄島南部、西表島、小浜島。

生育環境 : 低地原野に生える。

生育状況 : 沖縄島では、1974 年に南城市 (当時佐敷村) で採集された標本があるが、現在は見つからない。他の島の現状は不明。

減少の要因 : 草原の開発および道路工事。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 平田義浩, 1989. 佐敷町産種子植物. “佐敷町史, 三自然”, 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町, 93-196.

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*

和名 : コツブチゴザサ

分類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)

学名 : *Isachne globosa* (Thunb.) O. Ktze. var. *brevispicula* Ohwi

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形態の特徴 : 多年草。稈は多少束生し、直立または下部が多少湾曲し、高さ 30~80 cm になる。葉は線状長楕円形、長さ 4~8 cm、幅 3~7 mm、表面はざらつく。円錐花序は長さ 3~13 cm、疎に分枝し、枝は細く、斜開して多少屈曲し、上半に小穂を疎につける。小穂は短くて円く、長さ 1.5 mm 内外。

分布域 (県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島。

備考 : 基本変種のチゴザサは北海道、本州、四国、九州、琉球および台湾、東南アジア、オーストラリアに分布し、小穂は広倒卵形または倒卵状球形でやや大きく、長さ 2.2 mm 程。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Isachne globosa* として評価。

執筆者名 : 立石庸一*

和名 : ウスギキンエノコロ

分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Setaria cinerea* T. Koyama
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

和 名 : コササキビ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Setaria plicata* (Lam.) T. Cooke
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 大形の多年草。稈は束生し高さ 80~130 cm になり、疎らに葉をつける。葉は長さ 15~30 cm、幅 1~3 cm、葉脈にそって深いしわがある。小穂は緑色ときに紫色を帯び、第 2 小花の横しわが目立つ。
分布域(県外) : 九州、口永良部島、奄美大島、台湾、中国南部、インドシナ、ネパール、マレーシア、インド。
県内の分布 : 沖縄島南部。
生育環境 : 山地の林内に生える。
生育状況 : 1951 年に那覇市(当時首里市)で採集された標本があるが、現状は不明。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
備考 : ササキビの小型のものとの区別が微妙で、沖縄県に真のコササキビが自生するののかについては、今後詳しい研究が必要である。

執筆者名 : 新城和治*・池原直樹*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒメウシノシッペイ
分 類 : イネ科 (APG 科名: イネ科)
学 名 : *Thaumastochloa cochinchinensis* (Lour.) C. B. Hubbard
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 多年草。稈はやや硬質、基部で分枝してゆるく束生、斜上して高さ 20~40 cm、無毛。葉は線形、長さ 15 cm 内外、葉鞘は無毛で葉身より長い。穂状花序は単立、細長い円柱状、長さ 5~10 cm。
分布域(県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、フィリピン、ミクロネシア。
県内の分布 : 沖縄島、西表島。
生育環境 : 低地原野に生える。
生育状況 : 現状は不明。
減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 立石庸一*・池原直樹*

和 名 : ヤエヤマクワズイモ
分 類 : サトイモ科 (APG 科名: サトイモ科)
学 名 : *Alocasia atropurpurea* Engler
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 全体の高さが3.5~6 mになる常緑の多年草。茎は長さ2~5 m。葉身は広卵形で楕形とならず、鈍頭から鋭頭、基部は深い心形、側脈は7~10対。花茎は10~20 cm。仏炎苞の筒部は4~5 cm、舷部は10~12 cm。

分布域(県外) : フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島中部、西表島。

生育環境 : 不明。

生育状況 : 沖縄島中部(Walker, 1976)と西表島(多和田, 1964)で採集されているが、現状は不明である。

学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 本来の自生種かどうかは疑問である。竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Critically Endangered (CR)。

文献 : 大橋広好, 1982. 日本の野生植物草本. 単子葉類. 平凡社, 東京, 137.
多和田真淳, 1964. 琉球植物見聞録. 沖縄生物学会誌, 1(2): 76-79.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 1159pp.

執筆者名 : 新城和治*・立石庸一*

和名 : イトハナビテンツキ

分類 : カヤツリグサ科 (APG科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Bulbostylis densa* (Wall. ex Roxb.) Hand.-Mazz.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 一年草。稈は多数束生し、糸状、長さ5~40 cm。葉は稈の基部に束生し、短く、糸状。花序は頂生し、少数の小穂を疎らにつけ、長さ2~5 cm、小穂と鱗片は栗褐色、鱗片は前縁、長さ2 mm、卵形。瘦果は倒卵円形、長さ0.8 mm、表面にしわと細点がある。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、台湾、朝鮮、中国、インド。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 日当たりの良い原野や畑地の湿った土壤に生える。

生育状況 : 標本調査や野外調査で確認することができず、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。

備考 : 変種のイトテンツキ(クロハタガヤ) var. *capitata* (Miq.) Ohwi は、花序が短縮して頭状となるもので、本州、四国、九州に分布し、石垣島と西表島(Masamune, 1956; Walker, 1976)に産する。竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.
Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 253-254.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : アゼナルコスゲ(アゼナルコ)

分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Carex dimorpholepis* Steud.
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は高さ 40~80 cm、葉を密に束生し、匍枝はない。葉は扁平、幅 4~10 mm。小穂は 4~6 個、円筒形、長さ 3~6 cm、上方の 2~4 個は雌性、他は雄性。雌花の鱗片は狭倒卵形、先には芒があり、柱頭は 2 個、果胞は広卵形、多数の乳房状突起があり、長さ 2.5~3 mm、くちばしは短く、急に狭くなる。瘦果は広倒卵形、長さ 1.5 mm。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島?

生育環境 : 不明。

生育状況 : 沖縄県産の標本は確認されず、野外調査でも確認されないため、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 本種の記録を疑問視する意見 (初島, 1975) がある。

文 献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 717.
坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和 名 : コウボウムギ
分 類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学 名 : *Carex kobomugi* Ohwi
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く匍匐し、稈は硬く、鈍 3 稜形、長さ 10~20 cm。葉は革質、幅 4~6 mm、微鋸歯がある。雌雄異株または小穂は雄雌性があり、雌性の小穂は卵形、長さ 15 mm、雌花の鱗片は狭卵形、先端は芒となって突出し、柱頭は 3 個、果胞は革質、長さ 10 mm、くちばしは長い。堅果は 3 稜形。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、宝島、奄美大島、台湾、ウスリー、中国東北部、朝鮮、北アメリカ (帰化)。

県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 海岸の砂浜に生える。

生育状況 : Sonohara *et al.* (1956) や Masamune (1956) で沖縄県に産することが記されているが、標本による確認はできず、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.
Sonohara, S., S. Tawada, T. Amano & E. H. Walker, 1952. Flora of Okinawa. US Civil Administration of the Ryukyu Islands, Naha, 237pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : タイワンヒエスゲ
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Carex manca* Boott subsp. *takasagoana* (Akiyama) T. Koyama
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。稈は長さ 30~60 cm、3 稜形。葉は数個つき、幅 3~5 mm。小穂は 3~5 個、やや離れてつき、頂生する 1 個は雌性、線形、長さ 1~3 cm、他の小穂は雄性、円柱形、長さ 2~5 cm、幅 5~6 mm、雌花の鱗片は卵形~楕円形、長さ 5 mm、柱頭は 3 個、果胞は紡錘形、長さ 7~8 mm、疎らに毛があり、くちばしはやや長い。瘦果は倒卵形~楕円形、長さ 4 mm。

分布域 (県外) : 台湾。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 常緑樹林の林床に生える。台湾では海拔の高い所に生える (Koyama, 1978) という。

生育状況 : 初島・天野 (1994) で石垣島に産することが報告されたが、詳細は不明。標本は確認されておらず、野外調査でも見つからない。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 261.
 Koyama, T., 1978. Flora of Taiwan, Vol. 5. Epoch Publishing Co., Taipei, 328.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : フサスゲ (シラホスゲ)
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Carex metallica* Lev.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉を密に束生する。稈は長さ 30~60 cm。葉は幅 3~6 mm。小穂は 5~10 個、頂生する小穂は雌雄性または雄性、円柱形~広線形、他の小穂は雌性 (上部の小穂は基部に多少の雄性部を持つ)、円柱形、長さ 2~5 cm、有梗、雌花の鱗片は狭卵形、柱頭は 3 個、果胞は狭卵形、長さ 7 mm、くちばしはやや長い。

分布域 (県外) : 本州 (山口県)、四国、九州、台湾、朝鮮。

県内の分布 : 沖縄島?

生育環境 : 山地の常緑樹林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄県産の標本は確認されず、野外調査でも確認されないため、現状不明。

備考 : 本種の記録を疑問視する意見 (初島, 1975) がある。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 717, 722-723.
 坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ゴウソ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Carex pruinosa* Boott subsp. *maximowiczii* (Miq.) Kuk.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉を束生し、短い匍枝がある。稈は長さ 40~70 cm。葉は幅 4~6 mm。小穂は 2~4 個、頂生する 1 個は雄性、線形、他の小穂は雌性、太い円柱形、長さ 2~3.5 cm、幅 10~14 mm、雌花の鱗片は卵形、柱頭は 2 個、果胞は広卵楕円形、長さ 3.5~4.5 mm、表面に小突起が密生し、くちばしは短い。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、南千島、中国、朝鮮。

県内の分布 : 沖縄島?。

生育環境 : 山間の湿地に生える。

生育状況 : 沖縄県産の標本は確認されず、野外調査でも確認されないため、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 本種の記録を疑問視する意見 (初島, 1975) がある。

文献 : 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会, 那覇, 717.
坂口總一郎, 1924. 沖縄植物總目録. 石塚書店, 首里, 152pp.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ビトウクグ
分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
学名 : *Cyperus compactus* Retz.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎はしばしば球茎状となる。稈は硬く、3 稜形、高さ 50~100 cm、幅 3~6 mm。葉は少数つき、線形、幅 5~9 mm、小隔膜がある。複散形花序は長さ 6~18 cm、苞は 3~5 個、枝は 3~8 個、小花序は 3~7 個、穂状花序は球形、幅 1~2 cm、密生した多数の小穂からなり、小穂はやや針形、長さ 5~8 mm、3~7 花からなり、鱗片は長楕円状披針形、柱頭は 3 個。瘦果は線状長楕円形、長さ 1.5 mm、3 稜形。

分布域 (県外) : 小笠原、台湾、中国南部、インド、ヒマラヤ、ネパール、マレーシア、マダガスカル。

県内の分布 : 南大東島。

生育環境 : 湿地や池沼に生える。

生育状況 : Masamune (1956) や初島・天野 (1994) で報告されているが、標本や野外調査で確認はされておらず、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 263.
Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : オオガヤツリ (オオハナビガヤツリ)

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Cyperus imbricatus* Retz.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は木質。稈は太く、高さ 80~120 cm、3 角柱形。葉は稈の基部に生じ、広線形、稈より短く、幅 5~15 mm。複散形花序は長さ 10~12 cm、苞は 3~5 個、小花序は 2~7 個、穂状花序は円筒形、長さ 2~3 cm、幅 6~10mm、小穂は長さ 4~6 mm、鱗片は倒卵形、密に瓦列し、長さ 1.7 mm、雄蕊は 3 個、柱頭は 3 個。瘦果は長さ 0.8 mm、扁 3 稜形、楕円形。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インド、マレーシア、世界の熱帯。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : Masamune (1956) と初島・天野 (1994) に記録があるが、標本調査と野外調査では確認することができず、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 263.

Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyus insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : タイトウクグ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Cyperus sesquiflorus* (Torrey) Marrfeld et Kuk. var. *subtriceps* (Nees) T. Koyama

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、木質。稈は束生し、高さ 10~30 cm、鈍 3 角柱形、基部に 2~3 個の葉がある。葉は稈より短く、狭線形、幅 2~3 mm。穂状花序は 1~3 個つき、苞 3~5 個、頂端の花序は長楕円状円筒形~長楕円形、長さ 10~15 mm、幅 5 mm、多数の小穂を密につけ、小穂は長さ 2 mm、扁平、卵形、1~2 花をつけ、鱗片は広卵形、雄蕊は 2 個、柱頭は 2 個。瘦果は楕円形、長さ 1.5 mm。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、ヒマラヤ、マレーシア、アフリカ。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育状況 : Masamune (1956) や初島・天野 (1994) で記録されているが、標本調査と野外調査では確認することができず、現状不明。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 264.

Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : タカオガヤツリ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Cyperus tuberosus* Rottb.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。類似の環境に生えるハマスゲ *C. rotundus* L. に似るが、より強壯で、長い匍匐茎を出し、先端に塊根をつける。稈は塊根から生じ、長さ 25~60 cm、基部に数葉をつける。葉は線形、稈より短く、幅 3~6 mm。散房花序は単一または分枝し、2 枚の葉状の苞があり、枝は 2~6 個、長さ 2~8 cm、2~11 個の小穂をつけ、小穂は長さ 8~20 mm、幅 1.5~3.5 mm、長楕円形~狭披針形、8~20 花をつける。瘦果は長楕円形、3 稜形。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、インド、ヨーロッパ、オーストラリア北部。

県内の分布 : 小浜島。

生育環境 : 海岸の砂浜に生える。

生育状況 : 多和田眞淳により 1958 年に採集された標本が知られている (Walker, 1976) が、現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。砂の採取。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

文献 : Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 259.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : セイタカハリイ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Eleocharis attenuata* (Franch. et Sav.) Palla

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は発達せず、匍枝も欠く。稈は多数が束生し、円く糸状、高さ 25~55 cm、幅 1 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、卵形~広卵形、長さ 7~10 mm、幅 3 mm、鱗片は広卵形、長さ 2.5 mm、花柱基部は瘦果とほぼ同幅。瘦果は倒卵形、鈍 3 稜形、長さ 1.2 mm、刺針は 6 個、瘦果よりわずかに長い。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、中之島、宝島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 標本調査と野外調査では確認することはできず、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。湿地の開発。

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : ヤリハリイ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Eleocharis congesta* D. Don var. *subvivipara* (Bock.) T. Koyama

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。基本変種のオオハリイに似るが、小穂は線形、長さ7~17 mm、幅1.5~2.5 mm、鱗片は鈍頭、柱基は卵状3角形、幅は瘦果の1/2~3/4であることで区別される。

分布域(県外) : 本州、九州、台湾、インド、ミクロネシア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 湿地や水田に生える。

生育状況 : 標本調査と野外調査では確認することができず、現状不明。

学術的価値 : 琉球列島で唯一の産地である。

減少の要因 : 湿地の開発。水田の減少。

備考 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Eleocharis congesta* として評価。

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : シカクイ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Eleocharis wichurai* Bock. var. *wichurai*

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、時に匍枝をだす。稈は多数が束生し、4稜形、高さ30~50 cm、幅0.5~1.5 mm。小穂は頂生し、密に多花をつけ、披針形~卵状長楕円形、長さ10~15 mm、幅3~5 mm、鱗片は楕円形~長楕円形、円頭~鈍頭、長さ4~6 mm、花柱基部は瘦果の幅の約倍、雄蕊は3個、柱頭は3個。瘦果は広倒卵形、長さ1.2~2.2 mm、刺針は6個、羽毛状、柱基と同長。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、中之島、奄美大島、徳之島、ウスリー、中国東北部、朝鮮。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島。

生育環境 : 湿地に生える。

生育状況 : 標本調査と野外調査で確認されなかったため、現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。湿地の開発。

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : オキナワイヌシカクイ (リュウキュウハリイ)

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Eleocharis wichurai* Bock. var. *liukuensis* (Makino) Ohwi

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。基本変種のシカクイに比べ、稈が丸いことで区別される。
- 県内の分布 : 沖縄島。
- 生育環境 : 湿地に生える。
- 生育状況 : 田代安定により沖縄島で採集された標本に基づいて記載された (Makino, 1904) が、その後分布に関する情報は得られておらず、現状不明。
- 学術的価値 : 沖縄島の固有変種。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。湿地の開発。水田の埋立。

文献 : Makino, T., 1904, Observations on the flora of Japan. Bot. Mag. Tokyo, 18: 97-115.

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : チクシテンツキ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Fimbristylis dichotoma* (L.) Vahl var. *tikushiensis* (Hayata) T. Koyama

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。基本変種のテンツキに似るが、葉に長軟毛があり、瘦果が粗面で幅広い点で区別される (Hayata, 1915)。
- 分布域 (県外) : 台湾。
- 県内の分布 : 大東諸島、八重山諸島。
- 生育環境 : 湿地や原野に生える。
- 生育状況 : 初島・天野 (1994) に記録があるが、標本調査と野外調査で確認することができず、現状不明。
- 減少の要因 : もともと自生地が限られている。
- 備考 : 果実の形態は確認されていないので、同定に疑問が残るが、葉に長軟毛があるテンツキは、沖縄島北部の2ヶ所、石垣島の1ヶ所で確認されている。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)*。*種 *Fimbristylis dichotoma* として評価。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 266.
Hayata, B., 1915. Icones Plantarum Formosanarum, Vol. 6. 168pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・尾川原正司*

和名 : ビロードテンツキ

分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)

学名 : *Fimbristylis sericea* (Poir.) R. Br.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、分枝する。稈は密に束生し、長伏毛があり、高さ10~30 cm、扁3稜形。葉は長さ7~20 cm、幅1.5~2 mm、線形、扁平、絹毛がある。花序は単一、枝は少数、苞は1~2個、小穂は3~10個、やや頭状に生じ、狭卵形、長さ6~10 mm、幅4 mm、鱗片は広卵形、長さ4 mm、雄蕊は2~3個、柱頭は2個。瘦果は広倒卵形、長さ1.5 mm。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、屋久島、種子島、台湾、中国、インド、マレーシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島?、西表島?。
 生育環境 : 海岸の砂浜に生える。
 生育状況 : Sonohara *et al.* (1952) や Masamune (1956) に記録があるが、標本調査と野外調査で確認することができず、現状不明。
 学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。海岸の開発。砂の採取。

文献 : Masamune, G., 1956. Enumeratio tracheophytarum Ryukyu insularum (VIII). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 4(2): 201-280.
 Sonohara, S., S. Tawada, T. Amano & E. H. Walker, 1952. Flora of Okinawa. US Civil Administration of the Ryukyu Islands, Naha, 237pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : **オニテンツキ**
 分類 : カヤツリグサ科 (APG 科名: カヤツリグサ科)
 学名 : *Fimbristylis thomsonii* Bock.
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、木化する。稈は単生し、高さ 20~70 cm、幅 1.2~1.5 mm、扁平。葉は稈より短く、線形、幅 2~5 mm、扁平。複散形花序は長さ 5~12 cm、枝は 2~5 個、葉状の苞は 2~3 個、小穂は単生し、卵状長楕円形~長楕円形、密に 6~17 花をつけ、長さ 2.5~4 mm、幅 1.8~3 mm、鱗片は卵形、長さ 2.2~3.7 mm、柱頭は 3 個。瘦果は倒卵形、長さ 1.7~2 mm、幅 1 mm。オオヒラテンツキ *F. complanata* (Retz.) Link に似るが、植物体がより強壯で、花序の鱗片は栗色で、葉鞘の竜骨状隆起が明瞭でない点で異なる (Walker, 1976)。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、インド、インドシナ、マレーシア。
 県内の分布 : 沖縄島中部。
 生育環境 : 山地の湿地や原野に生える。
 生育状況 : 初島・天野 (1994) に記録があり、具志川市 (現うるま市) 栄野比で採集された標本が引用 (Walker, 1976) されているが、現状は不明。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。
 備考 : 沖縄島の各地から記録されているオオヒラテンツキの標本中に、本種が混在している可能性があり、今後詳しく調査する必要がある。

文献 : 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 増補訂正琉球植物目録. 沖縄生物学会, 西原町, 267.
 Walker, E. H., 1976. Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands. Smithsonian Institution Press, Washington, 249-250.

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : **ヒロハノカラン (ダルマエビネ)**
 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
 学名 : *Calanthe alismaefolia* Lindl.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、2~3葉を束生する。葉は長さ13~20 cm、幅5.5~10 cm、楕円形~卵形、長さ7~10 cmのはっきりとした葉柄がある。総状花序は、長さ30~40 cm、10花程度をつける。花は平開し、萼片は広倒卵形、淡緑色、長さ8~10 mm、花弁は菱形状円形、白色、長さ6~8 mm、唇弁は半円形、長さ15 mm、白色で、基部に淡紫色の着色があり、基部で深く3裂し、中央裂片は倒卵形~広倒卵形で、先はさらに2裂し、上面中央に3~5個の黄色の隆起があり、側裂片は線形、基部に長さ8 mmの距がある。

分布域(県外) : 九州南部、屋久島、種子島、トカラ列島、台湾、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 近年は全く確認されておらず、現状は不明である。

学術的価値 : 沖縄県で唯一の産地である。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. Orchids of Southern Ryukyu Islands. Harvard University, 122.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・横田昌嗣(追補)

和名 : キエビネ

分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)

学名 : *Calanthe striata* Decne.

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。偽球茎は数個接して並び、2~3葉を束生する。葉は広長楕円形、長さ45~60 cm。花茎は長さ40~50 cmで、十数花をつける。花は黄色、萼片は長さ2.7~3 cm、長楕円形~狭卵形、花弁は長さ2.4 cm、狭楕円形、唇弁は3深裂し、側裂片は広楔形、中央裂片は楔形~長楕円形、上面に3~5本の板状隆起があり、基部に長さ5 mmの距がある。

分布域(県外) : 本州(東海道以西)、四国、九州、甌島、屋久島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 1ヶ所から記録されているが、標本に基づく報告はされていない。近年は全く確認されておらず、現状は不明である。

学術的価値 : 琉球列島で唯一の産地である。

減少の要因 : 園芸用の採集。自然林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : Garay, L. A. & H. R. Sweet, 1974. Orchids of Southern Ryukyu Islands. Harvard University, 118-119.

執筆者名 : 横田昌嗣*

和名 : タコガタサギソウ (ヒュウガトンボ、ヒメトンボ)

分類 : ラン科 (APG科名: ラン科)

学名 : *Habenaria sumatrana* (Schltr.) Schltr. var. *triangularis* (F. Maek.) Hashimoto

- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 小形の常緑の多年草。地中に楕円形の塊根があり、2~4枚の葉を根生する。葉は長さ2.5~8 cm、広披針形。総状花序は頂生し、長さ30 cmになり、10~20個の花をつける。花は白色で、平開せず、径3 mm、距は緑色、長さ1.5 mm、萼片と花弁は長さ4 mm、唇弁は3浅裂し、唇弁の側裂片は中央裂片と同じ長さで、近縁種のタカサゴサギソウ *H. formosana* のように糸状に長く伸びることはない。
- 分布域(県外) : 九州(長崎県、宮崎県)、台湾。
- 県内の分布 : 伊平屋島。
- 生育環境 : 日当たりのよい湿った草原、自然林あるいは二次林の明るい林床に生えると思われる。
- 生育状況 : 伊平屋島で数回にわたって探索を試みたが、確認することができず、現状は不明。
- 学術的価値 : 琉球列島で唯一の産地である。
- 減少の要因 : 自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 本種の学名については様々な見解があり、混乱している。上記の学名の基本変種はスマトラに産する。
- 文献 : 前川文夫, 1971. 原色日本のラン, 誠文堂新光社, 東京, 495pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・治井正一*・橋爪雅彦*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ヨウラクラン
- 分類 : ラン科 (APG 科名: ラン科)
- 学名 : *Oberonia japonica* (Maxim.) Makino
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : ごく小形の常緑の多年草。茎は下垂し、長さ1~4 cm、葉を2列に接してつける。葉は披針形、やや多肉質、長さ1~3 cm。穂状花序は頂生し、糸状、長さ2~8 cm、多数の花をつけ、包葉は3角状披針形、長さ1 mm。花は橙黄色、萼片と花弁は長さ0.7 mm、背萼片は卵形、側萼片は広卵形、花弁は卵形、唇弁は長さ0.8 mm、3裂し、側裂片は3角状長楕円形、中央裂片は長楕円形、先は2浅裂する。
- 分布域(県外) : 本州(関東以西)、四国、九州、屋久島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、台湾。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 減少の要因 : もともと自生地が限られている。森林伐採。
- 備考 : 植物体や花の大きさは環境によって変異が大きく、クスクスヨウラクラン *O. arisanensis* と区別が難しい場合がある。今後詳細な観察が必要である。

執筆者名 : 横田昌嗣*

2) シダ植物

- 和名 : ナンカクラン
- 分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG 科名: ヒカゲノカズラ科)
- 学名 : *Lycopodium hamiltonii* Spring
- カテゴリー : 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は下垂し、2~3回叉状に分岐し、長さ40 cm以上になる。葉は密生し、長さ10~15 mm。孢子嚢穂は頂生し、長さ5~15 cm。
- 分布域(県外) : 本州(伊豆半島、伊豆諸島、紀伊半島)、四国、九州、奄美大島、請島、徳之島、台湾、中国、フィリピン、インドシナ、ヒマラヤ、タイ、インド。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 空中湿度の高い森林内の樹上や岩上に着生する。
- 生育状況 : かつては自然林にやや普通に見られたが、現在は森林伐採と盗掘により自生地・個体数とも非常に少なくなっている。
- 減少の要因 : 森林伐採。園芸用の採集。ダム建設による自生地の水没。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : **ボウカズラ**
- 分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG科名: ヒカゲノカズラ科)
- 学名 : *Lycopodium laxum* Presl
- 方言名 : ヒムラン(石垣島)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は下垂し、長さ20~80 cm。葉は密生し、長さ7 mm、茎に密着する。孢子嚢穂は頂生し、長さ10~15 cm。
- 分布域(県外) : 台湾、中国、東南アジア、ポリネシア。
- 県内の分布 : 石垣島、魚釣島。
- 生育環境 : 山地の樹幹に着生する。
- 生育状況 : 魚釣島ではやや個体数が多かったが、増殖した野生化ヤギが森林生態系を悪化させている可能性がある。石垣島では4ヶ所で確認されているが、極めてまれで、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : 森林伐採。園芸用の採集。もともと個体数が少ない。野生化ヤギによる森林生態系悪化(魚釣島)。
- 保全対策 : 魚釣島では野生化ヤギの駆除が急務である。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

-
- 和名 : **ヨウラクヒバ**
- 分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG科名: ヒカゲノカズラ科)
- 学名 : *Lycopodium phlegmaria* L.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は下垂し、分岐する。葉は卵状披針形で、長さ 10~15 mm、円脚。孢子嚢穂は頂生し、長さ 6~10 cm、分岐し、ひも状で径 1.5~2.5 mm。
- 分布域(県外) : 九州南部(佐多岬)、屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国、東南アジア、ポリネシア、オーストラリア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の陰湿な林内の樹幹に着生する。
- 生育状況 : 沖縄島では極めてまれで、4ヶ所に産するだけである。沖縄島北部の1ヶ所はダム建設で消失した。石垣島では1ヶ所で2001年にごく少数個体が確認されている。西表島では数ヶ所に点々と産し、自生地の大半は国立公園内にあり、開発の恐れはないが、個体数は少ない。
- 減少の要因 : もともと個体数が少ない。園芸用の採集。森林の伐採。ダム建設。
- 備考 : 竹富町特別希少野生動植物種(2017年)。

- 文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
横田昌嗣・豊見山元, 1993. 琉球列島植物分布資料 11. 沖縄生物学会誌, (31): 67-69.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ヒメヨウラクヒバ
- 分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG科名: ヒカゲノカズラ科)
- 学名 : *Lycopodium salvinoides* (Herter) Tagawa
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は下垂し、長さ 20~50 cm、2~3 回分岐する。葉は三角状卵形で、ヨウラクヒバより質が薄く、長さ 10~15 mm、円脚。孢子嚢穂は頂生し、長さ 6~10 cm、2~3 回分岐し、ひも状で、長さ 1.5~2.5 mm。
- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン、ボルネオ?。
- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 空中湿度の高い山地林内の樹幹に着生する。
- 生育状況 : 1 河川の流域からこれまでに数回散発的に発見されているが、極めてまれである。2016~2017 年に 3ヶ所で数個体が新たに確認された。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。マレーシア系の植物で、植物地理学上貴重である。
- 減少の要因 : 採集。もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2015 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

- 文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

- 和名 : オニトウゲシバ
- 分類 : ヒカゲノカズラ科 (PPG科名: ヒカゲノカズラ科)
- 学名 : *Lycopodium serratum* Thunb. var. *longipetiolatum* Spring
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。茎は直立し、基部でわずかに分枝し、高さ 10~20 cm。葉は長楕円形~卵状長楕円形、長さ 20~30 mm、幅 3~5 mm、明らかな葉柄がある。孢子葉は栄養葉より短く、長さ 3~5 mm、孢子嚢は葉腋に単生し、腎形、径 1.5 mm。
- 分布域(県外)** : 本州(伊豆諸島、近畿、中国)、四国、九州、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国、ヒマラヤ、マレーシア。
- 県内の分布** : 沖縄島北~中部、久米島、石垣島、西表島。
- 生育環境** : 山地の常緑樹林の林床に生える。
- 生育状況** : 沖縄島では数ヶ所に産することが知られているが、個体数は少ない。沖縄島中部の自生地では戦後確認されておらず、絶滅した可能性が高い。久米島の現状は不明。石垣島では 1ヶ所に産するが、極めてまれである。西表島では数ヶ所に点々と産するが、個体数は少ない。
- 減少の要因** : 山地林の伐採。園芸用の採集。もともと個体数が少ない。
- 備考** : 基本変種の特ウゲシバは、形態的な変異が大きく、多くの種内分類群が認められているが、それらの分類学的な取り扱いについては、様々な見解がある。オニトウゲシバを区別せず、トウゲシバに含める見解(Serizawa, 1975; 倉田・中池, 1990)もあるが、沖縄県に産するものは、すべてオニトウゲシバ型である。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献** : 倉田 悟・中池敏之, 1990. 日本のシダ植物図鑑 第6巻. 東京大学出版会, 94-121.
Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
Tagawa, M., 1939. Spicilegium pteridographiae asiaeorientalis, 20. Acta Phytotax. Geobot., 8: 229-236.

執筆者名 : 横田昌嗣

-
- 和名** : リュウキュウヒモラン
- 分類** : ヒカゲノカズラ科 (PPG 科名: ヒカゲノカズラ科)
- 学名** : *Lycopodium sieboldii* Miq. var. *christensenianum* (Christ et Herter) Tagawa
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。茎はひも状で束生し、3~4回分岐し、長さ 20~50 cm。葉は鱗片状で密生し、茎に圧着し、長さ 2~5 mm。孢子嚢穂は頂生し、ひも状で、長さ 5~15 mm。
- 分布域(県外)** : 九州(熊本県以南)、屋久島、奄美大島、徳之島、中国。
- 県内の分布** : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
- 生育環境** : 山地の樹幹・岩上に着生する。
- 生育状況** : 沖縄島北部では自生地は限られ、個体数は極めて少ない。石垣島と西表島の標本は確認することができず、現状は不明。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が限られている。山地林の伐採。園芸用の採集。
- 備考** : 基本種のヒモランとの区別が微妙で、区別しない意見もある。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献** : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ツルカタヒバ

分 類 : イワヒバ科 (PPG 科名: イワヒバ科)
 学 名 : *Selaginella biformis* A. Braun ex Kuhn
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐して分岐し、長さ 30 cm になり、毛がある。葉は 2 型があり、4 列にならび、腹葉は長さ 2.5 mm、縁に微鋸歯がある。孢子嚢穂は頂生し、長さ 3 mm。

分布域 (県外) : 中国、東南アジア、インド、ニューギニア。

県内の分布 : 沖縄島北部 (本部半島を除く)。

生育環境 : 山地の崖や岩上に生える。

生育状況 : 恩納村と金武町以北の限られた河川沿いに生える。自生地は点々とあり、今すぐ絶滅の恐れはないが、自生地の多くはダム建設により水没し、自生地の数は減少している。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 山地林の伐採。ダム建設による水没。自生地の開発。

文 献 : 仲松綾乃・傳田哲郎・横田昌嗣, 2004. ミタニクラマゴケ (イワヒバ科) は沖縄島に産するのか?. 沖縄生物学会誌, (42): 39-45.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 5 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 羽地大川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 103-113.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1995. 平成 6 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 平成 7 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-7.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 平成 8 年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 1-6.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-9, 99-112.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 億首川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 3-12, 99-110.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.
 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.
 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **コケカタヒバ**
 分 類 : イワヒバ科 (PPG 科名: イワヒバ科)
 学 名 : *Selaginella leptophylla* Baker
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は匍匐し、まばらに分岐し葉を 4 列につけ、長さ 10 cm になる。葉は 2 型があり、腹葉は長楕円形、鋸歯があり、先端は鋭く尖る。

分布域 (県外) : 台湾、中国南部、フィリピン。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島、与那国島。
生育環境 : 山地の陰湿な崖に生える。
生育状況 : 沖縄島北部では、今回の調査で新たに2ヶ所で確認された。西表島では数ヶ所の自生地が知られるが、個体数は少なくまれである。与那国島の現状は不明。
学術的価値 : 分布域の北限である。
減少の要因 : もともと自生地が少ない。自生地の開発。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **イヌカタヒバ**
分類 : イワヒバ科 (PPG科名: イワヒバ科)
学名 : *Selaginella moellendorffii* Hieron.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。茎は直立し、長さ15~30 cm、3~4回羽状分岐する。葉は2型があり、4列にならび、腹葉は長さ2 mm。胞子嚢穂は頂生し、長さ5 mm。カタヒバに似ているが葉の縁が白くなり、毛があることで異なる。

分布域(県外) : 台湾、中国、フィリピン、インドシナ。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 溪流沿いや高地の日当たりの良い岩上や樹幹に着生する。

生育状況 : 西表島は1ヶ所、石垣島では3ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 本州や九州では栽培品の逸出が報告されているが、八重山諸島のものは自生である。本種は、全ゲノムが解読された最初のシダ植物として知られるが (Banks *et al.*, 2011)、遺伝子解読に用いられたのは沖縄県産の個体である。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Banks, J. A., T. Nisiyama, M. Hasebe *et al.*, 2011. The *Selaginella* genome identifies genetic changes associated with the evolution of vascular plants. *Science*, 332(6032): 960-963.
小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

執筆者名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和名 : **イワヒバ**
分類 : イワヒバ科 (PPG科名: イワヒバ科)
学名 : *Selaginella tamariscina* (P. Beauv.) Spring

- 方 言 名 : クキ (沖縄島: 首里)
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。仮茎は直立し、長さ 25 cm になり、仮茎の先に多数の枝を束生する。枝は葉を密につけ、多数分岐し、長さ 20 cm になる。葉は 2 型があり、長さ 1.5~2 mm。孢子囊穂は頂生し、長さ 5~15 mm。
- 分布域 (県外) : ロシア東部、北海道~九州、奄美大島、小笠原、朝鮮、台湾、東南アジア、インド。
- 県 内 の 分 布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、久米島、渡嘉敷島、座間味島、慶留間島、石垣島、西表島、魚釣島。
- 生 育 環 境 : 岩壁に生える。
- 生 育 状 況 : いずれの島でも各 1 ヶ所の自生地が知られているだけで、個体数はわずかである。魚釣島では、増殖した野生化ヤギによる食害により絶滅している恐れがある。
- 減 少 の 要 因 : 園芸用の採集。もともと個体数が少ない。
- 備 考 : 伊是名島の自生地は県の天然記念物に指定されている。沖縄県指定天然記念物 (伊是名城跡のイワヒバ群落) (1958 年)。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 小林史郎・横田昌嗣, 2001. 琉球列島植物分布資料 16. 沖縄生物学会誌, (39) : 99-102.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
豊見山元, 1994. 久米島のシダ植物. “久米島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築—”, 沖縄県立博物館 (編), 沖縄県立博物館, 12-25.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・小林史郎*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : イヌドクサ
- 分 類 : トクサ科 (PPG 科名: トクサ科)
- 学 名 : *Equisetum ramosissimum* Desf.
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。地下茎は地中を匍匐し、地上茎は直立し、長さ 60~100 cm、節があり中空で分岐する。輪生する葉は長さ 3~5 mm。孢子囊穂は直立し、長さ 1~2 cm。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、種子島、奄美大島、喜界島、台湾、中国、ヨーロッパ南部、アフリカ。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島 (北部~南部)。
- 生 育 環 境 : 日当たりのよい湿地に生える。
- 生 育 状 況 : 北部 (数ヶ所)、中部 (3ヶ所)、南部 (数ヶ所) に産するが、少ない。特に沖縄島南部では自生地が開発により失われている。
- 減 少 の 要 因 : 生育地の開発。もともと個体数が少ない。
- 備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.
横田昌嗣・豊見山元, 1993. 琉球列島植物分布資料 11. 沖縄生物学会誌, (31) : 67-69.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : フユノハナワラビ
分類 : ハナヤスリ科 (PPG 科名: ハナヤスリ科)
学名 : *Botrychium ternatum* (Thunb.) Sw.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 九州以北では冬緑性、琉球列島では常緑性の多年草。葉は九州以北では長さ 50 cm になるが、琉球列島では長さ 10 cm 程度。葉は 2 型となり、栄養葉と孢子葉には長い葉柄があり、共通柄は短く、栄養葉は 3~4 回羽状に深裂し、5 角形、小羽片には浅い鈍鋸歯がある。孢子葉は 3 回羽状に分枝し、孢子葉群は球状。孢子の表面は平滑。

分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、種子島、奄美大島、台湾、朝鮮、中国、ネパール、インド。

県内の分布 : 硫黄島。

生育環境 : 火山の噴火口周辺の日当たりの良い草原に生える。

生育状況 : 個体数はきわめて少ない。孢子葉をつけた個体は確認されていない。

学術的価値 : 日本における分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2001. 沖縄県硫黄島で見出された分類学的あるいは植物地理学的に注目される維管束植物. 沖縄生物学会誌, (39) : 77-92.

立石庸一・横田昌嗣・新城和治・平岩 篤・新納義馬, 2002. 硫黄島の植物相. 沖縄県文化振興会 (編), 沖縄県史資料編 13 硫黄島, 沖縄県教育委員会, 那覇, 57-104.

執筆者名 : 横田昌嗣*・立石庸一*・平岩 篤*

和名 : ミヤコジマハナワラビ
分類 : ハナヤスリ科 (PPG 科名: ハナヤスリ科)
学名 : *Helminthostachys zeylanica* (L.) Hook.
方言名 : ウザストマズィギー (宮古島)、ムカヂグサ (久米島)
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這い、地上茎は直立し、長さ 20~40 cm。葉は 2 型があり、栄養葉は 3 羽片からなり、各羽片はさらに 3~4 裂し、裂片は長さ 6~18 cm。孢子葉は円柱形、長さ 4~20 cm。

分布域 (県外) : 沖永良部島、台湾、中国南部、東南アジア、ニューギニア、ポリネシア、ニューカレドニア。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、小浜島、西表島。

生育環境 : 疎林内のやや湿地に生える。

生育状況 : 西表島では数ヶ所に生えるが、個体数は少ない。石垣島では、2ヶ所で確認されているが、1ヶ所は空港建設で自生地が消失した。沖縄島では1ヶ所から報告されていたが、現在は確認できない。宮古島では2ヶ所で確認されており、1ヶ所では個体数はやや多い。久米島と小浜島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域のほぼ北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の開発。ハブの解毒剤としての薬用の乱獲。

備考 : 宮古島市指定天然記念物 (ミヤコジマハナワラビ) (2012 年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

立石庸一・新城和治, 1999. 斎場御嶽の植物. “国指定史跡斎場御嶽整備事業報告書 (発掘調査・資料編)”, 知念村教育委員会 (編), 知念村教育委員会, 43-84.

執筆者名 : 横田昌嗣*・川上 勲*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・佐藤宣子(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : コブラン

分類 : ハナヤスリ科 (PPG 科名: ハナヤスリ科)

学名 : *Ophioglossum pendulum* L.

方言名 : クーブラン (沖縄島)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 根茎は短く、数枚の葉を束生する。葉は帯状で、下垂し、栄養葉は長さ 30~100 cm、1~3 回分岐し、胞子葉は栄養葉の途中から出て、長さ 10~30 cm。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、小笠原、朝鮮、中国、台湾、旧熱帯。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 林内の樹幹に着生する。

生育状況 : 各地とも極めてまれである。西表島ではかつてはやや普通に見られたが、現在はほとんど見られない。

減少の要因 : 森林の開発。園芸用の採集。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

横田昌嗣・豊見山元, 1993. 琉球列島植物分布資料 11. 沖縄生物学会誌, (31): 67-69.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・北原 孝*

和名 : ホウライハナワラビ

分類 : ハナヤスリ科 (PPG 科名: ハナヤスリ科)

学名 : *Sceptridium formosanum* (Tagawa) Holub

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長さ 4 cm になり、1~2 葉をつける。葉は 2 型があり、栄養葉は五角形、2 回羽状複生、長さ 20~40 cm。胞子葉は 2~3 回羽状複葉で、栄養葉と同長。

分布域(県外) : 九州(鹿児島県)、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国南部、ヒマラヤ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の自然林の林床に生える。

生育状況 : 西表島では自生地は 2 ヶ所に限られ、個体数は極めて少ない。沖縄島と石垣島では近年確認されていない。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと個体数が少ない。園芸用の採集。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 38: 131-168.

横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦, 1994. 琉球列島植物分布資料 13. 沖縄生物学会誌, (32): 61-65.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ゼンマイ**

分類 : ゼンマイ科 (PPG 科名: ゼンマイ科)

学名 : *Osmunda japonica* Thunb.

カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 夏緑性の多年草。根茎は這い、数葉を束生する。葉は2型があり、栄養葉は2回羽状複生、長さ60～100 cm、羽片は3～6対。孢子葉は長さ20～30 cm、羽片は3～5対。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、奄美大島、東アジア、フィリピン、インドシナ、ヒマラヤ。

県内の分布 : 久米島。

生育環境 : 低地から山地の林内に生える。

生育状況 : 自生地は1ヶ所のみが知られていたが、近年は確認されていない。今回の調査でかつて生育したところを探索したが、発見することはできなかった。絶滅したものと思われる。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。園芸用の採集。

備考 : 奄美大島では高地に生え、自生地は限られるが、道路の拡幅工事で消失した自生地がある。

文献 : 玉木 拓, 1958. ゼンマイ久米島に産す. 琉球大学生物クラブ誌, 2(1): 27-28.

初島住彦・天野鉄夫, 1974. 久米島の植物. “久米島県立自然公園候補地学術調査報告”, 沖縄県, 1-39.

島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, (39): 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : **タカサゴキジノオ**

分類 : キジノオシダ科 (PPG 科名: キジノオシダ科)

学名 : *Plagiogyria adnata* (Blume) Bedd.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉は2型となり、栄養葉は1回羽状、長さ30～50 cm、羽片は10～23対で、頂羽片は不明瞭。孢子葉は栄養葉より長く伸びる。

分布域(県外) : 本州(伊豆半島、伊豆諸島以西)、四国、九州、屋久島、種子島、黒島、奄美大島、台湾、中国南部、東南アジア、インド。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 高地の林床や崖に生える。

生育状況 : それぞれの島では自生地は限られ、個体数は非常に少ない。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : リュウキュウキジノオ
 分類 : キジノオシダ科 (PPG 科名: キジノオシダ科)
 学名 : *Plagiogyria koidzumii* Tagawa
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は斜上し、先端に葉を束生する。葉は2型となり、栄養葉の葉柄は長さ10~40 cm、葉身は長さ20~45 cm、1回羽状、羽片は10~20対で有柄、微鋸歯がある。孢子葉は栄養葉の2/3程の長さ。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地林内のやや明るい岩壁や崖に生える。

生育状況 : 自生地は点在し、個体数は少ないが、局所的に群生する場合がある。2015~2016年の調査で、新たな自生地が数ヶ所見つけた。

学術的価値 : 基準産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 国内希少野生動植物(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

和名 : カンザシワラビ
 分類 : フサシダ科 (PPG 科名: フサシダ科)
 学名 : *Schizaea dichotoma* (L.) Smith
 カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く匍匐し、1葉をつける。葉は直立し、叉状に2~3回分岐し、長さ12~30 cm、先に長さ2~4 mmの孢子嚢をつける。

分布域(県外) : 沖永良部島、台湾、東南アジア、ミクロネシア。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、西表島。

生育環境 : やや乾燥した山地林内に生える。

生育状況 : 沖縄島では宜野座村、恩納村以北の数ヶ所で確認されている。久米島は1ヶ所のみ知られるが、現状不明。西表島では数ヶ所に産するが、いずれの自生地でも個体数は極めて少ない。

減少の要因 : もともと個体数が少ない。森林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.
 新里孝和・比嘉寿, 1976. 北明治山の植物. 沖縄生物学会誌, (14): 99-110.
 横田昌嗣・島袋憲一, 1992. 琉球列島植物分布資料10. 沖縄生物学会誌, (30): 81-83.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)・比嘉清文(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **フサシダ**
分類 : フサシダ科 (PPG 科名: フサシダ科)
学名 : *Schizaea digitata* (L.) Sw.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。2cm 位の根茎から 15~30 枚以上の葉を束生する。葉は単葉、全縁、紙質、線形で長さ 30~40cm、幅 5mm 以下、基部は細く、黒褐色を帯び、三角柱状、裏面は中肋が板状に隆起し、中肋と縁の間に白い線が 2 条ある。葉の先端に、初めは緑色で、後に褐色になる 1.5~2.5cm の線形、紐状のソーラスを十数本房のようにつけ、それぞれには 4 列に球形の孢子嚢が並ぶ。

分布域 (県外) : 小笠原、インド、熱帯アジア、ニューギニア、ミクロネシア、マダガスカル。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 低地の常緑樹林の明るく、やや乾いた林床や林縁に生える。

生育状況 : 1986 年に中藤成実氏によって西表島で採集された標本が国立科学博物館に収蔵されていたが、長い間存在を見落とされていた。海老原 (2016) によって西表島産の標本があることが示され、再発見が期待されていた。2017 年に 1 ヶ所にごく少数個体が生育することが再確認された。1986 年の発見時には明るい草原であった自生地が、2017 年には遷移の進行で森林になっており、本種の個体数はかなり減少しているほか、全体として個体も小さくなり衰退傾向にあるようである。自生地のすぐそばまでアメリカハマグルマが侵入している。

学術的価値 : 琉球列島では唯一の自生地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。外来種 (アメリカハマグルマ) との競合。遷移の進行。

文献 : 海老原淳, 2016. 日本産シダ植物標本図鑑 I. 学研, 475pp.

執筆者名 : 横田昌嗣・阿部篤志・仲宗根忠樹

和名 : **キクモバホラゴケ**
分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
学名 : *Cephalomanes apiifolium* (Presl) K. Iwats.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く直立し、葉を束生する。葉身は卵形~卵状楕円形、長さ 11~22 cm、幅 8~17 cm、4 回羽状、裂片の幅は広く、葉柄は長さ 8~11 cm、直径 1~1.8 mm、長さ 3~5 mm の褐色の毛がある。孢子嚢群は裂片の先につき、コップ状の包膜で包まれ、口辺は時にやや広がる。

分布域 (県外) : 屋久島、台湾、東南アジア。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 高地の川沿いの岩上や崖に着生する。

生育状況 : 自生地は限られ、個体数は少ない。芹沢 (1972) によると、「西表島の山地にはそれほど少ないものではない。標高 200~400 m の沢沿いの岩上や崖状地に、イヌタマシダなどに混じって点在しているが、低地には見られない。」とあるものの、今回の調査では確認することができなかった。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 西表島の自生地は、国立公園に指定されており、開発される恐れはない。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 芹沢俊介, 1972. 琉球のシダ植物雑記 (一). 北陸の植物, 20: 5-9.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **サキシマホラゴケ**
分 類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
学 名 : *Cephalomanes atrovirens* Presl
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 根茎は短く、ほぼ直立し、葉を束生する。葉身は1回羽状、長さ4~8 cm、ソテツホラゴケに似るが、胞子囊群は葉身の先端部にのみつく。
分 布 域 (県 外) : 東南アジア、ミクロネシア、ポリネシア、オーストラリア北部。
県 内 の 分 布 : 石垣島、西表島。
生 育 環 境 : 山地林内の陰湿な地上に生える。
生 育 状 況 : 確実な自生地は西表島の1ヶ所だけとする意見(岩槻, 1992)があるが、本種と考えられるものが西表島では数ヶ所、石垣島では1ヶ所で確認されている。
減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。
備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : 岩槻邦男, 1992. 日本の野生植物, シダ. 平凡社, 東京, 311pp.
島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

和 名 : **ナンバンホラゴケ (シャムオニホラゴケ)**
分 類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
学 名 : *Cephalomanes obscurum* (Blume) K. Iwats. var. *siamense* (Christ) K. Iwats.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、数葉を束生する。葉は2回羽状。オニホラゴケに似るが、小形で、葉軸に翼があり、包膜の唇部は多少反転して開く点で異なる。
分 布 域 (県 外) : 中国南部、インドシナ、タイ。
県 内 の 分 布 : 西表島。
生 育 環 境 : 高地林内の岩陰の湿った所に生える。
生 育 状 況 : 自生地は数ヶ所知られるが、個体数は少ない。
学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。
減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が少ない。
備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.
鎧 禮子, 1985. 西表島産オニホラゴケ属2種についての観察. 聖徳学園短期大学研究紀要, (18): 99-107.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・加島幹男(追補)

和名 : ヒメホラゴケ

分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)

学名 : *Crepidomanes humilis* (Forster) v.d. Bosch

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這い、葉をまばらにつける。葉身は2回羽状、長さ2~5 cm、葉軸に翼があり、葉縁の細胞1~2列が細長くなる。包膜はコップ状で、先端部は開き、孢子嚢床は包膜から長くのびる。

分布域(県外) : 台湾、東南アジア、ミクロネシア、ポリネシア。

県内の分布 : 石垣島、西表島、内離島、与那国島。

生育環境 : 陰湿な林内の岩上に生える。

生育状況 : 西表島ではやや普通であるが、石垣島と与那国島では自生地は限られ、個体数は少ない。内離島の現状は不明。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林の開発。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : マメホラゴケ

分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)

学名 : *Crepidomanes kurzii* (Bedd.) Tagawa et K. Iwats.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑のごく小形の多年草。根茎は細く這う。葉身は1回羽状、長さ5~8 mm、羽片は3~4対、偽脈があり、偽脈の外に1列の辺縁細胞がある。包膜はコップ状で先はやや開く。

分布域(県外) : 台湾、中国南部、ヒマラヤ、東南アジア、インド、サモア、オーストラリア北部。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 陰湿な森林内の岩上に生える。

生育状況 : 石垣島・西表島とも自生地は少数ヶ所が知られるだけである。微小な植物で発見が難しいため、分布情報は限られる。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : マツバコケシダ
 分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
 学名 : *Crepidomanes latemarginale* (Eaton) Copel.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)
 形態の特徴 : 常緑のごく小形の多年草。根茎は細く這う。葉は掌状に3~6裂し、長さ6~20 mm、偽脈があり、偽脈の外に2列の辺縁細胞がある。包膜はコップ状で、孢子嚢床は包膜から長くのびる。
 分布域(県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、アンダマン諸島。
 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 陰湿な森林内の岩上に生える。
 生育状況 : 自生地はごく少ない。微小な植物であるため、発見が困難で、分布情報は限られる。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
 文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : コケハイホラゴケ (ニセアミホラゴケ)
 分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
 学名 : *Crepidomanes subclathratum* (K. Iwats.) K. Iwats.
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這い、間隔をおいて葉を出す。葉身は2~3回羽状、長さ1.5~5 cm、葉身の細胞は格子状に透き通って見え、葉柄には翼がある。包膜は三角形。
 分布域(県外) : 九州(鹿児島県)、奄美大島。
 県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
 生育環境 : 陰湿な林内の岩上に生える。
 生育状況 : 西表島ではやや普通であるが、石垣島では少ない。沖縄島では自生地はごく限られ、一部はダム建設で失われている。
 学術的価値 : 琉球列島の固有種である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。ダム建設による水没。
 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。
 文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメチデレコケシノブ
 分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)

学 名 : *Hymenophyllum denticulatum* Sw.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這う。葉は長さ 3~8 cm、3 回羽状、葉柄と葉軸にはちぢれた歯状の翼がある。孢子嚢群は葉の上半部の中肋近くに生じ、包膜は 2 唇形、孢子嚢床は長くのびる。

分布域(県外) : 台湾、中国、インドシナ、タイ、インド、スリランカ、ポリネシア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 陰湿な林内の岩上に生える。

生育状況 : 於茂登岳周辺の限られた地域にのみ産する。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の一部は登山道となっており、踏みつけや採集により減少している。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **ホソバコケシノブ**

分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)

学 名 : *Hymenophyllum polyanthos* (Sw.) Sw.

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這う。葉身は長さ 3~17 cm、2~3 回羽状、葉軸に狭い翼があり、羽片の幅は 0.7 mm、葉柄は翼を欠く。包膜は 2 唇形で、長さ 1 mm。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、黒島、奄美大島、徳之島、朝鮮、台湾、中国、ヒマラヤ、フィリピン、インドシナ、マレーシア、アメリカ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島。

生育環境 : 樹幹上や岩上に生え、沖縄島では特に滝壺周辺の空中湿度が高い場所で見られる。石垣島の現状は不明。

生育状況 : 沖縄県では極めてまれである。

減少の要因 : 森林伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・安田恵子*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **リュウキュウコケシノブ**

分類 : コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)

学 名 : *Hymenophyllum riukiense* Christ

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這い、まばらに分岐する。葉身は 3 回羽状、長さ 3~15 cm、裂片は幅 1 mm、葉柄は長さ 2~3 cm、ちぢれた広い翼がある。包膜は 2 唇形で先端には鋸歯がある。

分布域（県外）： 本州（和歌山県）、四国、九州南部、中国南部（海南島）、タイ。
 県内の分布： 沖縄島北部。
 生育環境： 自然林内の河川沿いの岩上に生える。
 生育状況： 自生地は限られる。群生することもあるが、個体数は少ない。
 減少の要因： 森林伐採。ダム建設。

文献： 島袋敬一，1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要，39：101-169.

執筆者名： 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名： **マルバコケシダ**
 分類： コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
 学名： *Trichomanes bimarginatum* v. d. Bosch
 カテゴリー： 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴： 常緑のごく小形の多年草。根茎は細く長く這う。葉は長さ 1.5～2 cm、単葉、楕円形、多数の偽脈があり、葉縁に辺縁細胞はない。孢子嚢群は葉の先端に数個つき、包膜はコップ状。
 分布域（県外）： 台湾、東南アジア、インド、ミクロネシア、ポリネシア。
 県内の分布： 魚釣島。
 生育環境： 高地の雲霧帯の巨岩上に生える。
 生育状況： 極めて狭い範囲に産し、個体数は少ない。1991年に生育が確認されているが、それ以降は上陸調査が行われていない。
 学術的価値： 分布域の北限である。
 減少の要因： もともと自生地と個体数が限られている。野生化ヤギの食害による森林環境の悪化。
 保全対策： 野生化ヤギの駆除が急務である。

文献： 島袋敬一，1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要，39：101-169.
 横田昌嗣・島袋憲一，1992. 琉球列島植物分布資料 10. 沖縄生物学会誌，(30)：81-83.

執筆者名： 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名： **マメゴケシダ**
 分類： コケシノブ科 (PPG 科名: コケシノブ科)
 学名： *Trichomanes motleyi* v. d. Bosch
 カテゴリー： 絶滅危惧 II類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

形態の特徴： 常緑のごく小形の多年草。根茎は細く長く這い、接して葉を出す。葉は単葉で先は浅裂し、卵形～長楕円形で、長さ 3～5 mm、多数の偽脈があり、葉縁に 1 列の辺縁細胞がある。孢子嚢群は葉の先端に 1 個つき、包膜はコップ状。
 分布域（県外）： 台湾、東南アジア、スリランカ、ミクロネシア。
 県内の分布： 石垣島、西表島。
 生育環境： 陰湿な林内の岩上または樹幹上に生える。

- 生育状況 : 自生地は石垣島と西表島でそれぞれ少数ヶ所知られるだけである。ごく微小な植物であるので、発見が難しく、分布情報は限られている。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : セイタカイワヒメワラビ (シマイワヒメワラビ)

分類 : コバノイシカグマ科 (PPG 科名: コバノイシカグマ科)

学名 : *Hypolepis alpina* (Blume) Hook.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の大形の多年草。根茎は長く這う。葉は長さ 1.5 m になり、5 回羽状、粘毛が多く生時にはねばつく。孢子嚢群は葉縁につき、裂片の一部でおおわれる。

分布域(県外) : 本州(静岡県)、四国、九州、奄美大島、小笠原、台湾、マレーシア、ニュージーランド、ポリネシア。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 向陽地の斜面や林縁に生える。遷移が進行すると衰退する。

生育状況 : 自生地は数ヶ所知られるが、個体数は極めて少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。遷移の進行。

文献 : 中村 直・島袋守成, 1971. 沖縄諸島のシダ植物についての所見. 沖縄生物学会誌, 7 (9) : 41-49.
Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : オオイワヒメワラビ

分類 : コバノイシカグマ科 (PPG 科名: コバノイシカグマ科)

学名 : *Hypolepis tenuifolia* (Forster) Bernhardt

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の大形の多年草。根茎は横に這う。葉身は長さ 1.5 m、5 回羽状、あらい歯牙があり、脈上は有毛で、葉柄は長さ 50 cm になる。孢子嚢群は葉縁につき、裂片の一部でおおわれる。

分布域(県外) : 台湾、オーストラリア、ニュージーランド、ポリネシア。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の明るい林床や林縁に生える。遷移が進行すると衰退する。

生育状況 : 国頭村の数ヶ所で採集された記録があるが、1980 年以降は確認されていない。今後、攪乱された環境に散発的に出現する可能性がある。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。採集。遷移の進行。

文 献 : Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.
 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヤンバルフモトシダ

分 類 : コバノイシカグマ科 (PPG 科名: コバノイシカグマ科)

学 名 : *Microlepia hookeriana* (Wall. ex Hook.) Presl

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、葉をやや間隔をおいて生じる。葉身は1回羽状、長さ40~70 cm、毛が多く、羽片は20~30対、頂羽片があり、浅い鋸歯がある。孢子嚢群は羽片の縁近くにつく。

分 布 域 (県 外) : 台湾、中国、インドシナ、マレーシア、タイ、インド。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部。

生 育 環 境 : 高地の林床に生える。

生 育 状 況 : 自生地は北部3村の脊梁山地に数ヶ所知られるだけで、個体数は少ない。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限である。

減 少 の 要 因 : 森林の伐採。もともと自生地が少ない。

文 献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.
 新里孝和, 1974. 与那演習林の植物. “羊歯植物目録”, 琉球大学農学部学術報告, 21: 633-653.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : コウシュンシダ

分 類 : コバノイシカグマ科 (PPG 科名: コバノイシカグマ科)

学 名 : *Microlepia obtusiloba* Hayata

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。根茎は短く這う。葉身は2回羽状、長さ30~80 cm、脈上に長い毛があり、羽片はまばらにつく。孢子嚢群は葉縁から少し内側につく。

分 布 域 (県 外) : 九州 (大隅半島)、屋久島、台湾。

県 内 の 分 布 : 沖縄島北部、宮古島、西表島。

生 育 環 境 : 山地の湿った林床に生える。

生 育 状 況 : 各島とも自生地は限られ、個体数は少ない。

減 少 の 要 因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備 考 : 屋久島と沖縄島の葉身が細長くなるものを変種のホソバコウシュンシダ var. *angustata* Serizawa として区別する意見がある。ホソバコウシュンシダは、国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文 献 : 島袋敬一, 1984. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 39: 101-169.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ウスバイシカグマ**

分類 : コバノイシカグマ科 (PPG 科名: コバノイシカグマ科)

学名 : *Microlepia substrigosa* Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這う。葉は長さ 1~1.5 m、幅 50 cm、葉柄は 70 cm になり、3 回羽状複生、薄い草質、葉脈上に長い毛があり、胞子嚢群は小羽片の縁からやや内側につく。

分布域(県外) : 四国(高知県)、九州(宮崎県、鹿児島県)、屋久島、種子島、黒島、奄美大島、沖永良部島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の常緑広葉樹林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島北部の 4ヶ所と西表島の 1ヶ所で記録があるが、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 琉球列島では限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : 山地林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 自生地の一つは国指定の天然保護区域として保護されている。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1979. 日本のシダ植物図鑑 第 1 巻. 東京大学出版会, 180-183.
Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

執筆者名 : 横田昌嗣*・高良拓夫*

和名 : **ヒメホングウシダ (コバノエダウチホングウシダ)**

分類 : ホングウシダ科 (PPG 科名: ホングウシダ科)

学名 : *Lindsaea cambodgensis* Christ

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は細く長く伸び、葉を 5~10 mm 間隔で生じる。葉身は 2~3 回羽状長さ 5~13 cm、小羽片は長さ 3~5 mm、斜菱形。胞子嚢群は葉縁につき、1~3 個。

分布域(県外) : 屋久島、奄美大島、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 陰湿な自然林の林床や河川の源流部の水辺に生える。

生育状況 : 4ヶ所の自生地が知られるが、極めてまれである。

減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **イヌイノモトソウ**

分 類 : ホングウシダ科 (PPG 科名: ホングウシダ科)
 学 名 : *Lindsaea ensifolia* Sw.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走し、葉を接してつける。葉はやや 2 型となり、葉身は 1 回羽状複生、長さ 8~17cm、羽片は 3~8 対、線形~3 角状披針形、長さ 8~17cm、幅は栄養葉では 10~30cm、孢子葉では長さ 5~20cm、孢子嚢群は葉縁につき、包膜は線形。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島、台湾、熱帯アジア、ミクロネシア、ポリネシア、オーストラリア北部。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島、小浜島、与那国島。

生育環境 : リュウキュウマツの低木林の林床や乾いた原野などの日当たりが良い酸性土壌に生える。

生育状況 : リュウキュウマツを里山として利用していた時代には各地に見られたが、近年は遷移が進行して常緑広葉樹林となり、林床が暗くなったため衰退したり、消失している。開発により自生地も消失している。沖縄島では少数ヶ所、西表島では数ヶ所、小浜島では 1 ヶ所に少数個体が残されているだけである。最も個体数が多い西表島では、自生地に外来種のアメリカハマグルマが侵入しており、絶滅が危惧される。石垣島と与那国島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。自生地の開発。遷移の進行。外来種との競合。

備考 : 奄美大島では、自生地の開発により絶滅したものと思われる。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣・阿部篤志・豊見山元・加島幹男

和 名 : アイノコホラシノブ
 分 類 : ホングウシダ科 (PPG 科名: ホングウシダ科)
 学 名 : *Sphenomeris intermedia* Lin, Kato et K. Iwats.
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : ホラシノブ *S. chinensis* とハマホラシノブ *S. biflora* との雑種起源の複二倍体で中間型を示す。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 海岸からやや離れた路傍に生える。

学術的価値 : 沖縄県の固有種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : ホラシノブとハマホラシノブの中間的なものは観察されることがあるが、単純な雑種か複二倍体かを区別することが難しい。

文 献 : Lin, S. J., M. Kato & K. Iwatsuki, 1994. A taxonomic study of the fern genus *Sphenomeris* (Lindsaeaceae) in Japan. *Jpn. Bot.*, 69: 127-141.

執筆者名 : 横田昌嗣*・島袋敬一*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ワラビツナギ
 分 類 : ツルシダ科 (PPG 科名: ナナバケシダ科)
 学 名 : *Arthropteris palisotii* (Desv.) Alston
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。根茎は長く這い、間隔をおいて葉をつける。葉身は1回羽状、長さ16~47 cm、下面には毛があり、浅い波状の鋸歯がある。孢子嚢群は葉縁よりにつき、円腎形の包膜でおおわれる。
- 分布域(県外)** : 奄美大島、徳之島、台湾、中国、東南アジア、ニューギニア、オーストラリア、ポリネシア、アメリカ。
- 県内の分布** : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
- 生育環境** : 山林内の樹幹や岩上に生える。沖縄島では主に石灰岩地で見られるが、他の島嶼では非石灰岩地に生育している。
- 生育状況** : 沖縄島では5ヶ所の自生地があるが、個体数は少ない。一部は道路工事で消失した。石垣島では1ヶ所で少数個体が確認されている。2017年に西表島の1ヶ所で新たに確認された。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。園芸用の採集。
- 備考** : 沖縄島の自生地のうち、1ヶ所は沖縄県指定の天然保護区域、1ヶ所は国指定の天然記念物として保護されている。天然保護区域として保護されている自生地で、最近歩道建設が無秩序に進んでおり、歩道周辺を中心に採集や生育環境の悪化が進む恐れがある。現在でも盗掘されており、着生している岩ごと割り取られている事例が確認されている。石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。
- 文献** : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.
高良美代子・高良拓夫, 2003. 沖縄県シダ植物分布ノート(2). 日本シダの会会報, 3(33): 858-859.
阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査(最終報告). 事業年報(平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.
- 執筆者名** : 横田昌嗣*・豊見山元*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・比嘉清文(追補)・加島幹男(追補)

和名 : スキヤクジャク

分類 : ホウライシダ科 (PPG科名: イノモトソウ科)

学名 : *Adiantum diaphanum* Blume

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。根茎は短く、ほぼ直立し、葉を束生する。葉身は単羽状または下部で2回羽状、両面にまばらに毛があり、小羽片は長楕円形かゆがんだ菱形で、上縁には7~8個の鋸歯がある。孢子嚢群は鋸歯の切れ込んだところにつき、包膜は倒心形。
- 分布域(県外)** : 九州(壱岐島、平戸島)、屋久島、小笠原、台湾、中国、フィリピン、東南アジア、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランド、ニューカレドニア、フィジー。
- 県内の分布** : 沖縄島北部。
- 生育環境** : 河川中流部の溪流沿いに生える。
- 生育状況** : 沖縄島北部で1974年に少数個体が1回発見・採集されただけ(島袋, 1985)で、以後は全く確認されていない。発見者と共に実施した2004年の調査では発見することはできなかった。
- 学術的価値** : 沖縄島から屋久島、長崎県の島嶼と、日本国内では跳び跳びの特異な分布をしている。
- 減少の要因** : もともと自生地と個体数が少ない。
- 保全対策** : 自生地は国立公園として保護されているので、開発の恐れは少ない。
- 文献** : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.
新里孝和, 1994. 与那演習林の樹木. “琉球大学農学部附属演習林創設40周年記念誌”, 琉球大学農学部附属演習林, 125-139.
- 執筆者名** : 新里孝和*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメウラジロ
 分類 : ホウライシダ科 (PPG 科名: イノモトソウ科)
 学名 : *Cheilanthes argentea* (S. G. Gmelin) Kunze
 カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉身は長さ 3~7 cm、上部は 1 回羽状、最下羽片のみ 2 回羽状、裏面は粉白で白色。孢子嚢群は葉縁に生じ、連続する包膜でおおわれる。
 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、種子島?、ロシア東部、朝鮮、台湾、中国、フィリピン、インド。
 県内の分布 : 沖縄島、渡嘉敷島。
 生育環境 : 陽当たりの良い山地の岩上や路傍の石垣の隙間に生える。
 生育状況 : 沖縄島、渡嘉敷島 (宮城, 1974) とも近年はまったく確認されていない。2016 年に渡嘉敷島のかつて観察されている場所で丹念に探索したが、見つけることはできなかった。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。

文献 : 宮城康一, 1974. 慶良間列島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告書, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄自然研究会 (編), 沖縄県, 143-168.
 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : イワガネソウ
 分類 : ホウライシダ科 (PPG 科名: イノモトソウ科)
 学名 : *Coniogramme japonica* (Thunb.) Diels
 カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く匍匐する。葉身は 1~2 回羽状、長さ 40~50 cm、羽片は 3~5 対、羽片は線状楕円形。孢子嚢群は脈上につき、包膜はない。
 分布域 (県外) : 北海道南部、本州、四国、九州、屋久島、種子島、朝鮮、中国、台湾、インドシナ。
 県内の分布 : 沖縄島北部。
 生育環境 : 山地の石灰岩地の林床に生える。
 生育状況 : 自生地はごく接近した 2ヶ所に限られ、個体数は極めて少ない。自生地の近くまで通信施設の建設が進んでいる。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。

文献 : Shimabuku, K., 1977. New or noteworthy ferns from Mt. Katsuu-dake, Okinawa Island. “Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.”, Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 3: 19-21.
 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : シマタキミシダ
 分類 : シシラン科 (PPG 科名: イノモトソウ科)

学 名 : *Antrophyum formosanum* Hieron.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、匍匐または斜上する。葉身は倒披針形、単葉、長さ 15~20 cm、全縁。孢子嚢群は脈上に連続してつく。

分布域 (県外) : 奄美大島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い自然林内の岩上に生える。

生育状況 : 西表島には 3ヶ所の自生地があるが、個体数は著しく減少している。沖縄島では 2007 年に 1ヶ所で少数個体が確認されている。石垣島では 3ヶ所の自生地のうち、1ヶ所はダム建設で自生地の一部が水没した。

減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。

備考 : 奄美大島では採石により絶滅したと見なされていたが、2011 年に別の場所で再発見されている。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒメシシラン

分類 : シシラン科 (PPG 科名: イノモトソウ科)

学 名 : *Vittaria anguste-elongata* Hayata

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉をやや密につける。葉は線状、長さ 5~25 cm、幅 3~4 mm。孢子嚢群は葉縁の外側に出る溝の中につく。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン。

県内の分布 : 石垣島、西表島、魚釣島。

生育環境 : 山地の樹幹や岩上に生える。

生育状況 : 西表島と魚釣島では数ヶ所に産するが、個体数は少ない。石垣島では 2012 年に 1ヶ所で確認されている。魚釣島では野生化ヤギによる森林破壊が続いており、絶滅が危惧される。

減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。野生化ヤギによる森林破壊 (魚釣島)。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・松島昭司(追補)

和 名 : シシラン

分類 : シシラン科 (PPG 科名: イノモトソウ科)

学 名 : *Vittaria flexuosa* Fee

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く匍匐し、鱗片を密生し、葉を密につける。鱗片は線形、褐色～黒褐色、長さ3 mm。葉は線形、長さ20～50 cm、幅4～7 mm、中肋は裏面に隆起し、孢子嚢群は裏面の葉縁の溝の中につく。
- 分布域(県外) : 本州(茨城県以南西南)、四国、九州、屋久島、中之島、奄美大島、徳之島、台湾、朝鮮、中国、インド、タイ、ミャンマー、インドシナ、マレーシア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 常緑樹林の樹上や岩上に着生する。
- 生育状況 : 生育地は主に高地に限られ、数ヶ所に産することが知られるが、個体数は少ない。
- 減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が限られている。

- 文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1987. 日本のシダ植物図鑑 第5巻. 東京大学出版会, 752-760.
Serizawa, S., 1978. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (3). Sci. Rep. Takao Mus., 9: 1-24.
島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

執筆者名 : 横田昌嗣

- 和名 : ミミモチシダ
- 分類 : イノモトソウ科 (PPG 科名: イノモトソウ科)
- 学名 : *Acrostichum aureum* L.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は太く、横走し、葉を束生し、根はかなり肥厚する。葉身は長さ60～200 cmになり、1回羽状、硬い革質で、上部数対の羽片に密に孢子嚢群をつける。
- 分布域(県外) : 台湾、中国南部、フィリピン、東南アジア、ミクロネシア、ポリネシア、熱帯アメリカ、アフリカ。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 日当たりのよいマングローブ湿地に生える。
- 生育状況 : 自生地は石垣島に1ヶ所、西表島に3ヶ所、与那国島に1ヶ所知られるが、個体数は少ない。西表島の1ヶ所では、一部で湿地の開発と乾燥化が進み、個体数が減少している。西表島の1ヶ所は国指定の天然保護区域であるが、外来種のアメリカハマグルマが侵入しており、本種の生育環境が失われつつある。石垣島の自生地の一部は、開発により消失する恐れがある。与那国島の1ヶ所は与那国町の天然記念物として保護されているが、最近の道路工事で一部が破壊されて個体数が減少している。
- 学術的価値 : 分布域の北限であり、ミミモチシダ属はマングローブ域に生える唯一のシダ植物である。西表島の個体群は、他の島嶼のものとは遺伝的に異なっているとの報告があり、現在詳細な比較研究が進められている。
- 減少の要因 : もともと自生地が少ない。自生地の開発。帰化植物との競合。
- 保全対策 : 石垣島の自生地は天然記念物として保護すべきである。西表島の自生地では、アメリカハマグルマを早急に駆除する必要がある。
- 備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

- 文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35): 49-54.
赤井賢成, 2015. 沖縄県の里地・里山に生育する希少植物の保全生物学的研究(与那国島・石垣島). “事業年報(平成27年度)”, 沖縄美ら島財団総合研究センター, 39-44.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : **アシガタシダ**

分類 : イノモトソウ科 (PPG 科名: イノモトソウ科)

学名 : *Pteris grevilleana* Wall. ex Agardh

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上する。葉身は2回羽状深裂、卵形からほぼ円形、長さ8~20 cm、脈間に偽脈があり、1個の頂羽片と1~2対の側羽片があり、下の羽片はさらに2小羽片に分かれる。

分布域(県外) : 屋久島、徳之島、台湾、中国、インドシナ、タイ、インド、フィリピン、ボルネオ。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では2ヶ所の自生地があるが、個体数は極めて少なく、以前確認されている場所で探索を行ったが、今回の調査では発見することができなかった。そのうちの1ヶ所では採集により絶滅した可能性がある。石垣島と西表島では近年確認されておらず、現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

島袋敬一・豊見山元, 1985. 琉球列島植物分布資料1. 沖縄生物学会誌, (23): 43.

横田昌嗣・新城和治・島袋敬一, 1990. 琉球列島植物分布資料7. 沖縄生物学会誌, (27): 53-55.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和名 : **マツザカシダ**

分類 : イノモトソウ科 (PPG 科名: イノモトソウ科)

学名 : *Pteris nipponica* Shieh

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く匍匐し葉を束生する。葉は2型となり、長さ70~100 cm、1回羽状、1個の頂羽片と1~2対の側羽片があり、下の羽片は2岐し、通常葉の中肋に沿って白斑が入る。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島。

県内の分布 : 沖縄島(北部~南部)。

生育環境 : 沖縄島では点々と数ヶ所に産し、低地の主に石灰岩地の林床に生える。

生育状況 : 中部~南部の自生地は、開発により消失しつつある。沖縄島北部では、自生地が開発される恐れがある。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。

文献 : 島袋敬一, 1985. 琉球列島シダ植物分布図集. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.

横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料14. 沖縄生物学会誌, (35): 49-54.

阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査 (最終報告). 事業年報 (平成 25 年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和 名 : オオタニワタリ

分 類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学 名 : *Asplenium antiquum* Makino

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、多数の葉を放射状に出す。葉は単葉、長さ 1 m、幅 15 cm に達する。胞子嚢群は中肋から葉縁の 2/3 より葉縁側に達する。

分布域(県外) : 伊豆諸島、紀伊半島、四国、九州、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 国頭村から名護市にかけて高地の樹上や岩上に生える。沖縄島ではシマオオタニワタリと混生するところがあるが、オオタニワタリがより高地に生える傾向がある。

生育状況 : 自生地は限られ、乱獲により個体数は激減している。一部の自生地は、通信施設建設で失われた。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和 名 : タイワンホウビシダ

分 類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学 名 : *Asplenium apogamum* Murakami et Hatanaka

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 常緑の多年草。葉は 1 回羽状、長さ 12~30 cm。胞子嚢群は線形、円形の包膜がある。ナンゴクホウビシダ *A. cataractarum* に似ており、根茎は横走するが、それほど長くならず、葉を 2~3 cm 間隔でやや接してつける。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国南部、タイ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 陰湿な山地林内の岩上や地上に生える。石灰岩地にも非石灰岩地にも生える。

生育状況 : 近年になって確認された種で、ナンゴクホウビシダと混同されていたため分布に関する情報が少ないが、ナンゴクホウビシダよりは自生地は少ない。沖縄島では 2014 年に 2 ヶ所で、石垣島では 2017 年に 1 ヶ所で確認されている。沖縄島の 1 ヶ所は、ダム建設により水没する可能性がある。西表島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。ダム建設による水没。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : Murakami, N. & S. Hatanaka, 1988. A revised taxonomy of the *Asplenium unilaterale* complex in Japan and Taiwan. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. III, 14: 183-199.

Murakami, N. & S. Hatanaka, 1988. Chemotaxonomic studies of *Asplenium* sect. *Hymenasplenium* (Aspleniaceae). Bot. Mag. Tokyo, 101: 353-372.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ヒメタニワタリ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium cardiophyllum* (Hance) Baker

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く這い、細い柄の先に長さ 3~12 cm の葉をつける。葉は単葉、卵状披針形、心脚、全縁。孢子嚢群は線形で、中肋と葉縁の間に位置する。

分布域(県外) : 小笠原(母島)、中国南部(海南島)。

県内の分布 : 北大東島。

生育環境 : 低地の石灰岩の崖に生える。

生育状況 : 1ヶ所にごく少数の個体が生育しているだけである。自生地は国の天然記念物に指定されているが、自生地の周辺までサトウキビ畑の開墾が進み、乾燥化が進み、林内が明るくなって生育環境が悪化している。従来知られていた小集団は、著しく衰退し、個体が小さくなり、個体数も減少しているが、これまで知られていなかった小集団が 2014 年に発見された。

学術的価値 : 著しい隔離分布を示し、植物地理学上貴重である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の乾燥化による生育環境の悪化。園芸用の採集。

保全対策 : 人工増殖を検討する必要がある。現在保全されている自生地だけでは個体数の維持は難しいと考えられる。周辺環境を幅広く保護区に指定するなど、対策を検討する必要がある。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2008年)保護増殖事業計画(2009年)。

文献 : 山崎 敬, 1972. 高等植物分布資料(78), ヒメタニワタリ. 植物研究雑誌, 47: 352.

山崎 敬, 1973. 大東島における貴重な植物. “大東島天然記念物特別調査報告”, 文化庁, 43-51.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ウスバクジャク

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium cheilosorum* Kunze ex Mett.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走し、径 2.5~4 mm、葉を接してつける。葉身は 1 回羽状、長さ 20~40 cm、幅 4~5 cm、羽片は 25~35 対、羽片の上側は羽状に浅裂する。孢子嚢群は羽片の鋸歯の中につき、長さ 2 mm。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国、インド、熱帯アジア。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 山地の沢筋の陰湿な斜面に生える。

生育状況 : 沖縄島では 2005 年と 2007 年に 1ヶ所で確認されている。西表島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。森林伐採。園芸用の採集。

備考 : 沖縄島の自生地は、国指定の天然保護区域であるが、採集により個体数が減少している。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和名 : ラハオシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium excisum* Presl

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走するがあまり長くは這わない。葉身は1回羽状、長さ30~40 cm、幅7~18 mm、羽片は15~27対。孢子嚢群は中肋の両側につく。

分布域(県外) : 小笠原、奄美大島、台湾、中国、熱帯アジア、アフリカ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 陰湿な自然林の林床に生える。石灰岩地にも非石灰岩地にも生える。

生育状況 : 沖縄島で数ヶ所、石垣島で数ヶ所、西表島で1ヶ所の自生地が知られているが、個体数は少ない。沖縄島の一部の自生地は、ダム建設で水没した。石垣島の1ヶ所は、公園整備により生育環境が悪化し、個体数が激減している。西表島では、おそらく採集の要因で、個体が確認できなくなってしまった。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。ダム建設による水没。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

文献 : Murakami, N. & S. Hatanaka, 1988. Chemotaxonomic studies of *Asplenium* sect. *Hymenasplenium* (Aspleniaceae). Bot. Mag. Tokyo, 101: 353-372.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ(陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.

新里孝和, 1974. 与那演習林の植物. “羊歯植物目録”, 琉球大学農学部学術報告, 21: 633-653.

阿部篤志, 2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査(最終報告). 事業年報(平成25年度), 沖縄美ら島財団総合研究センター, 34-49.

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : トラノオシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium incisum* Thunb.

カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉はやや2型となり、葉身は2~3回羽状、長さ10~50 cm。孢子嚢群は短い線形で羽軸よりにつく。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、黒島、奄美大島、ロシア、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布 : 沖縄島中部、宮古島。

生育環境 : 低地の明るい林床、岩上、石垣の隙間に生える。

生育状況 : 近年はまったく確認されていない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

備考 : 沖縄島の自生地は城跡公園であり、公園整備や除草の際、本種に留意する必要がある。

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : マキノシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium loriceum* Christ ex C. Chr.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は1回羽状、長さ15~40 cm になり、1個の頂羽片と2~5対の側羽片を持ち、羽片は長さ10~15 cm。孢子嚢群は線形で、長さ7 mm。

分布域(県外) : 台湾、中国、インドシナ。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 山地の川沿いの岩上に生える。

生育状況 : 4ヶ所の自生地が知られるが、個体数は極めて少ない。その内2ヶ所は、自生地周辺まで開発が進んでいる。

学術的価値 : 国内唯一の産地で、分布域の北限である。

減少の要因 : 森林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地が少ない。

保全対策 : 本種の自生地には、他の貴重種も多く産することから、自生地全体を文化財として指定し、保全する必要がある。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016年)。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

和名 : カミガモシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium oligophlebium* Baker var. *oligophlebium*

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉身は1回羽状、長さ7~25 cm、羽片の前側基部に耳片が発達し、葉縁はやや深く切れこみ、葉軸の先に不定芽をつける。孢子嚢群は葉縁と主脈の間につく。

分布域(県外) : 本州(近畿以西)、四国、九州、屋久島、奄美大島、徳之島。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の地上や岩上に生える。

生育状況 : 1887年に田代安定により採集されたが、以後は全く確認されておらず、現状不明。

学術的価値 : 分布域の南限である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。園芸用の採集。森林伐採。

備考 : 変種のイエジマチャセンシダ var. *iezimense* (Tagawa) Tagawa が伊江島に産する。

文献 : 立石庸一・松村俊一・山城 考・新城和治, 2004. 琉球列島植物分布資料 17. 沖縄生物学会誌, (42) : 61-67.

執筆者名 : 立石庸一*・松村俊一*

和名 : **イエジマチャセンシダ**

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium oligophlebium* Baker var. *iezimense* (Tagawa) Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。基本変種のカミガモシダに似るが、羽片は長三角形で、基部は広くさび形になる点で区別される。

県内の分布 : 伊江島。

生育環境 : 岩壁や崖面に生える。

生育状況 : 生育場所が1ヶ所のごく狭い範囲に限られ、個体数も極めて少ない。

学術的価値 : 伊江島の固有変種。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017年)。

文献 : 初島住彦・宮城康一, 1974. 伊江島の植物. “沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島”, 沖縄県, 57-76.

島袋守成・中村直, 1976. 伊江島のシダ植物について. 沖縄生物学会誌, (14) : 71-77.

新里孝和・髙原建二, 2002. “伊江島の植物図鑑”, 伊江村教育委員会, 201pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **トキワトラノオ**

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium pekinense* Hance

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉身は2~3回羽状、長さ10~20 cm、小羽片の先は尖る。葉柄の鱗片は褐色で、基部に毛がある。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島?、ロシア東部、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布 : 沖縄島中~南部。

生育環境 : 低地の石灰岩の石垣に生える。

生育状況 : 近年までまったく確認されていなかったが、1998年に沖縄島南部で、1999年に沖縄島中部でそれぞれ少数個体が再確認されている。いずれの自生地も世界文化遺産に指定されている城跡や墓地で、公園管理のため石垣の除草が頻繁に行われており、沖縄島中部の自生地では除草により絶滅した可能性がある。沖縄島南部では、除草の際に配慮がなされており、現状では個体数は安定している。

減少の要因 : もともと個体数がきわめて少ない。草刈り。

文献 : 島袋敬一, 1973. 琉球列島におけるシダ植物の分布 (1). 沖縄生物学会誌, 10 (12) : 37-42.

島袋守成, 1986. 座喜味城跡の植物. “国指定史跡座喜味城跡整備環境事業報告書”, 読谷村教育委員会, 74-81.

執筆者名 : 横田昌嗣*・宮城朝章*・横田昌嗣(追補)

和名 : コウザキシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium ritoense* Hayata

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、斜上または直立し、葉を束生する。葉身は2~4回羽状、長さ10~20 cm、三角状披針形。孢子嚢群は線形で、裂片に1個ずつつく。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、小笠原、朝鮮、中国、台湾。

県内の分布 : 沖縄島北部、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 山地の岩壁に生える。

生育状況 : 石垣島では自生地の数はやや多いが、他の島では自生地は限られ、個体数は少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。

備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウスイロホウビシダ

分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)

学名 : *Asplenium subnormale* Copel.

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く横走する、葉身は1回羽状で、ふつう長さ10~25 cm、幅7 cm前後。タイワンホウビシダ *A. apogamum* とラハオシダ *A. excisum* の中間のような形で、小さい。

分布域(県外) : 沖永良部島?、フィリピン、マレーシア。

県内の分布 : 沖縄島南部?、与那国島。

生育環境 : 石灰岩の岩上や地上に生える。

生育状況 : 与那国島では古くから知られていた1ヶ所では確認できなくなっていたが、2005年に別の2ヶ所で確認され、その後別の1ヶ所でも見つかった。いずれの自生地でも個体数は極めて少ない。沖縄島の現状は不明で、絶滅した可能性がある。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

備考 : 真のウスイロホウビシダは与那国島だけに産し(海老原, 2016)、沖永良部島と沖縄島のものは別種(タイワンホウビシダ *A. apogamum*) であるとする意見がある。国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2017年)。

文献 : 初島住彦・金井弘夫, 1974. 与那国島植物新知見. 国立科学博物館専報, (7) : 115-120.

海老原淳, 2016. 日本産シダ植物標本図鑑 I. 学研, 475pp.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : オトメシダ
 分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)
 学名 : *Asplenium tenerum* Forster
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く横走する。葉身は1回羽状、側羽片は20対程度あり、長さ25~40 cm、幅4~8 cmになり、鋸歯があり、葉柄は長さ10~20 cm。胞子嚢群は中肋から葉縁に達する。

分布域(県外) : 小笠原、台湾、東南アジア、ニューギニア、ミクロネシア、ポリネシア。

県内の分布 : 石垣島。

生育環境 : 山地の岩上に生える。

生育状況 : 自生地はごく狭い範囲に1ヶ所が知られるだけである。第一発見者と共に2015~2017年にかけて3回にわたって最初に発見された自生地周辺を探索したが、再発見することはできなかった。自生地周辺は史跡・名勝に指定されており、開発の恐れはないので、調査を続ければ再発見される可能性はある。

学術的価値 : 分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2018年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・豊見山元(追補)・松島昭司(追補)

和名 : アオガネシダ
 分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)
 学名 : *Asplenium wilfordii* Mett. ex Kuhn
 カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、斜上から直立する。葉身は2~4回羽状、長さ10~35 cm、幅5~12 cm。胞子嚢群は線形で、裂片に1個ずつつく。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、徳之島、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 川沿いの崖や樹上に生える。

生育状況 : 沖縄県では国頭村に1ヶ所の自生地が知られるだけである。近年確認されておらず、現状は不明。沖縄島北部から記録されたオオアオガネシダ *Asplenium austrochinense* Ching は、アオガネシダであるという見解が公表されている(海老原, 2016)。この記録を含めても、アオガネシダの沖縄島からの記録は2回だけになる。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。森林伐採。ダム建設による自生地の水没。

備考 : 奄美諸島では山地にやや普通に生える。

文献 : 海老原淳, 2016. 日本産シダ植物標本図鑑 I. 学研, 475pp.
 島袋敬一, 1976. 琉球列島におけるシダ植物の分布 (3). 沖縄生物学会誌, (14) : 89-97.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **クルマシダ**
分類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)
学名 : *Asplenium wrightii* Eaton ex Hook.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く直立し、葉を束生する。葉身は 1 回羽状、長さ 30~80 cm、幅 15~30 cm。羽片は 10 数対で、線状披針形、尾状鋭尖頭。孢子嚢群は少し曲がった線形。
分布域 (県外) : 本州、四国、九州、奄美大島、徳之島、朝鮮、中国、台湾、インドシナ、フィリピン。
県内の分布 : 沖縄島北部。
生育環境 : 山地の陰湿な岩上や崖に生える。
生育状況 : 自生地は狭い範囲に数ヶ所知られるだけで、個体数は極めて少ない。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。
備考 : 自生地の多くは、国の天然保護区域に指定され、保護されている。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オオギミシダ**
分類 : シシガシラ科 (PPG 科名: シシガシラ科)
学名 : *Woodwardia harlandii* Hook.
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は細く、長く横走し、葉をまばらにつける。葉はやや 2 型、栄養葉は単葉か 1 対か 2 対の側羽片のある 1 回羽状、長さ 20~40 cm になり、孢子葉は 1 回羽状、大きな頂羽片と 2~3 対の側羽片があり、栄養葉より大きくなる。孢子嚢群は線形で、羽軸の両側に接してならぶ。
分布域 (県外) : 屋久島、台湾、中国南部、インドシナ。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
生育環境 : 高地の林床に生えるが、東村では低地でも確認されている。
生育状況 : 沖縄島では 5ヶ所に分布し、うち 1ヶ所は群生するが、他の 4ヶ所では個体数は少ない。石垣島では 1ヶ所、西表島では 1ヶ所に産することが知られるが、いずれも個体数は少ない。
減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地が限られている。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **オキナワアツイタ**
分類 : ツルキジノオ科 (PPG 科名: オシダ科)
学名 : *Elaphoglossum callifolium* (Blume) Moore
カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く這い、褐色の鱗片を密生する。葉は接近して出て、単葉、2 型となり、栄養葉の葉身は長さ 18~24 cm、幅 4~5 cm、厚い革質、葉柄は長さ 5~11 cm、孢子葉は栄養葉と

同長でやや細く、下面一面に孢子囊をつける。

- 分布域（県外）：台湾、フィリピン、マレーシア。
 県内の分布：沖縄島北部。
 生育環境：山地の樹上に生える。
 生育状況：1ヶ所のみに自生し、個体数は極めて少ない。近年は全く確認されていない。
 学術的価値：分布域の北限である。
 減少の要因：森林伐採。もともと自生地が限られている。

文献：豊見山元，1991. オキナワアツイタ（新称）*Elaphoglossum callifolium* (Blume) Moore 沖縄に産す. 沖縄生物学会誌，(29)：45-47.

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名：ツルキジノオ

分類：ツルキジノオ科 (PPG 科名：ツルキジノオ科)

学名：*Lomariopsis spectabilis* (Kunze) Mett.

カテゴリー：絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴：常緑の多年草。根茎は非常に長くのびる。葉は2型となり、1回羽状、葉身は長さ25～50 cm、1個の頂羽片と3～10対の側羽片があり、羽片は狭線形、長さ6～9 cm。孢子囊群は孢子葉の裏に一面につく。

分布域（県外）：小笠原、台湾、フィリピン、中国南部（海南島）、ベトナム、ボルネオ、ジャワ、スマトラ。

県内の分布：石垣島、西表島、与那国島。

生育環境：山地の樹幹や岩上に着生する。

生育状況：石垣島は4ヶ所、西表島は4ヶ所、与那国島は2ヶ所で確認されているが、いずれの地域でも極めてまれである。県内では小型の個体が多く、孢子葉をつけることは少ないが、与那国島の自生地で孢子葉をつけた個体が確認されている。

学術的価値：分布域の北限である。

減少の要因：もともと自生地が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。

備考：小笠原諸島のものは、オガサワラツルキジノオ *L. boninensis* Nakai として区別する意見もある。石垣市自然環境保全条例保全種（2015年）。竹富町特別希少野生動植物種（2017年）。

文献：倉田 悟・中池敏之，1985. 日本のシダ植物図鑑 第4巻. 東京大学出版会，700-703.
 Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・加島幹男(追補)・阿部篤志(追補)

和名：コミダケシダ

分類：オシダ科 (PPG 科名：オシダ科)

学名：*Ctenitis eatoni* (Bak.) Ching var. *iriomotensis* H.Ito

カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴：常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉は1～2回羽状、最下の羽片はやや大きく切れ

こむ。孢子囊群は円腎形で、有毛の包膜で包まれる。基本変種のホラカグマに似るが小形で、葉身は細長い三角形となり、長さ10~12 cm、幅5 cm、羽片は小さく短い。

- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 西表島の各地に広く産し、山地の湿った非石灰岩の岩肌に着生する。
- 生育状況 : 崖面に群生し、自生地は数ヶ所確認されている。自生地はすべて国立公園内にあり、開発される恐れは少ないが、基準産地は登山道沿いにあり、踏みつけと採集によって個体数が激減している。
- 学術的価値 : 西表島の固有変種。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
- 備考 : 基本変種のホラカグマに似ており、移行形が知られる。ホラカグマは主に石灰岩上に生えるが、本変種は砂岩上に生える。竹富町希少野生動物植物種 (2017年)。
- 文献 : 中村 直・島袋守成, 1971. 沖縄諸島のシダ植物についての所見. 沖縄生物学会誌, 7 (9) : 41-49.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35) : 49-54.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・加島幹男*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : リュウキュウシダ
- 分類 : オシダ科 (PPG科名: オシダ科)
- 学名 : *Dryopteris hasseltii* (Blume) C. Chr.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く斜上し、葉を束生する。葉は長さ50~70 cm、3回羽状、小羽片は深く切れ込む。孢子囊群は小羽片に1~4個つく。ナガバノイタチシダ *D. sparsa* に似るが、包膜を欠き、羽片基部の小羽片が内先に出る点でオシダ属の他種と異なり、カナワラビ属に似る。
- 分布域(県外) : 屋久島、台湾、東南アジア、ヒマラヤ、ニューギニア。
- 県内の分布 : 沖縄島北部、伊江島。
- 生育環境 : 沖縄島では高地のやや湿った林床に生える。伊江島では洞の壁に生育していたというが、現在は見られない。
- 生育状況 : 沖縄島からは1923年の記録では中頭からも報告されているが、現在確実な産地としては北部の1ヶ所だけである。伊江島については現状不明。
- 学術的価値 : 希産種であり、オシダ属とカナワラビ属をつなぐ種として注目されている。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。自然林の伐採。園芸用の採集。
- 備考 : IUCNカテゴリー: Endangered (EN)

- 文献 : Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

- 執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : タヌキシダ
- 分類 : オシダ科 (PPG科名: オシダ科)
- 学名 : *Dryopteris labordei* (Christ) C. Chr.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は長さ 60 cm になり、三角状広卵形、2 回羽状、葉柄は淡褐色。孢子嚢群は辺縁よりにつき、包膜は円腎形。同地域に分布するホコザキベニシダ *D. erythrosora* var. *koidzumiana* によく似るが、本種は羽片数が少なく、鱗片は濃色で硬い。
- 分布域(県外) : 台湾、中国。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 高地の自然林の林床に生える。
- 生育状況 : 自生地はごく狭い範囲の 1 ヶ所に限られ、個体数は少ない。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、日本で唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
- 備考 : 自生地は国の天然保護区域に指定されており、開発の恐れはない。

文献 : Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : ムラサキベニシダ
- 分類 : オシダ科 (PPG 科名 : オシダ科)
- 学名 : *Dryopteris purpurella* Tagawa
- カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、数葉を束生する。葉は芽立ちの時期は鮮紅紫色を呈し、葉身は長さ 30 ~45 cm、幅 20~35 cm、卵状三角形、葉身上部は急に細くなってホコ状となり、2 回羽状複生、葉柄と葉軸は紅紫色を帯び、葉柄は長さ 20~30 cm、小羽片は羽軸に直角に近い角度でつき、鱗片は黒褐色~黒色。孢子嚢群は中肋と辺縁の中間につき、包膜は円腎形、径 1.2 mm で小さい。
- 分布域(県外) : 本州(和歌山県、広島県)、四国(愛媛県、高知県)、九州、屋久島、朝鮮、中国。
- 県内の分布 : 石垣島。
- 生育環境 : 高地の常緑広葉樹林の林床に生える。
- 生育状況 : 自生地は 1 ヶ所知られるだけであり、ごく狭い範囲に生育し、個体数は極めて少ない。
- 学術的価値 : 琉球列島では極めて限られた分布を示し、植物地理学上貴重である。日本本土のムラサキベニシダとは形態的に異なることが指摘されており、詳細な研究が必要である。
- 減少の要因 : 森林の伐採。もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
- 保全対策 : 自生地は名勝および水源涵養林として保護されているが、本種の自生地周辺には、近年通信施設が数多く建設されており、生育環境が減少・悪化している。本種をはじめ数多くの貴重種が集中する雲霧帯などの山頂部の開発は、避けるべきである。本種の生育地は、天然記念物に指定するなどして保護すべきである。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。
- 文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1985. 日本のシダ植物図鑑 第 4 巻. 東京大学出版会, 540-543.
Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執筆者名 : 横田昌嗣*・高良拓夫*・横田昌嗣(追補)

和名 : ウスバシダモドキ

分類 : オシダ科 (PPG 科名 : ナナバケシダ科)
学名 : *Tectaria dissecta* (G. Forst.) Lellinger
カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー : 絶滅 (EX)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、直立し、葉を束生する。葉は2回羽状深裂、両面に毛が多く、葉身は長さ45~60 cm、三角状長卵形、最下羽片の下側の小羽片は最も大きくなり、深裂し、葉柄は長さ20~40 cm、褐色の鱗片がつく。孢子嚢群は円形、包膜は円腎形。ウスバシダによく似ており、葉全体に毛を密生するが、葉質はウスバシダ *T. devexa* よりやや厚い。

分布域 (県外) : 台湾、フィリピン、マレーシア、インド、ポリネシア、オーストラリア。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 湿った林床に生える。

生育状況 : 沖縄からは1度の採集記録しかなく、現在は発見されていない。

学術的価値 : 国内唯一の産地で、分布域の北限である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の公園化に伴う下草刈り。

保全対策 : 自生地は国指定史跡の城趾公園であり、公園整備や除草をする際、本種のような貴重種には配慮が必要である。

文献 : Serizawa, S., 1978. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (3). Sci. Rep. Takao Mus., 9: 1-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : コモチナナバケシダ

分類 : オシダ科 (PPG 科名 : ナナバケシダ科)

学名 : *Tectaria fauriei* Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は1回羽状、長さ50 cmになり、頂羽片と1~3対の側羽片がある。頂羽片の基部に無性芽をつけ、中軸に広い翼があり、最下羽片は2裂する。孢子嚢群は円形で、包膜は盾形。カワリウスバシダの質感で、形はナナバケシダやハルランシダに似るが、羽片付け根中肋より無性芽を生じる。

分布域 (県外) : 徳之島、沖永良部島、台湾、インドシナ、タイ。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 奄美諸島や台湾では石灰岩地の林床に生えるが、沖縄島では非石灰岩地に生える。

生育状況 : 自生地は1ヶ所のみ知られるが、自生地は米軍の射爆場となっており、立ち入ることができないため現状不明。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。軍事演習による自生地の破壊。園芸用の採集。

備考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や無許可の譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2016年)。

文献 : 中村 直, 1958. 琉球新産シダについて. 琉球大学生物クラブ誌, 2 (2) : 18-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : ナガバウスバシダ (サキミウスバシダ)

- 分 類 : オシダ科 (PPG 科名 : ナナバケシダ科)
- 学 名 : *Tectaria kusukusensis* (Hayata) Lellinger
- カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は長さ 40~100 cm、2 回羽状、長楕円形、最下羽片は最も大きく、深く切れこみ、葉脈は遊離する。孢子嚢群は円形で、包膜は円腎形。この仲間では羽片がこまかく切れ込み、一見すると大きなケホシダのように見える。
- 分布域 (県外) : 台湾、中国南部 (海南島)、インドシナ。
- 県内の分布 : 石垣島。
- 生育環境 : 低地から高地の陰湿な林床や崖面に生える。
- 生育状況 : 自生地は 3 ヶ所知られるだけで、個体数は極めて少ない。自生地の 1 ヶ所は開発の恐れはないが、他の 2 ヶ所は開発により消失する恐れがある。
- 学術的価値 : 分布域の北限で、国内では唯一の産地である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。森林伐採。ダム建設による自生地の水没。
- 備考 : 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物 (2016 年)。石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。
- 文 献 : Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和 名 : カレンコウアミシダ
- 分 類 : オシダ科 (PPG 科名 : ナナバケシダ科)
- 学 名 : *Tectaria simonsii* (Bedd.) Ching
- カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は長さ 1 m に達し、1 回羽状で、頂羽片は明瞭、側羽片は 2~3 対、最下羽片はさらに切れ込み、葉柄と葉軸は黒褐色。孢子嚢群は羽片中に不規則に散在し、無毛で円腎形の包膜に包まれる。
- 分布域 (県外) : 沖永良部島、台湾、中国、インドシナ、タイ、インド、スリランカ。
- 県内の分布 : 伊平屋島、粟国島、沖縄島北部、南大東島、伊良部島、西表島、波照間島。
- 生育環境 : 主として石灰岩地の常緑広葉樹林の林床に生える。
- 生育状況 : 伊平屋島の現状は不明。粟国島では 2010 年に 1 ヶ所で数個体が、波照間島では 2015 年に 1 ヶ所で数個体が確認された。沖縄島では数ヶ所に自生するが、個体数は少ない。南大東島では 1 ヶ所に少数個体を産する。今回の調査で新たに、伊良部島では 2 ヶ所で少数個体が、西表島では 2 ヶ所で少数個体が確認された。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られる。自生地の開発。園芸用の採集。
- 保全対策 : 本種が自生する低地の石灰岩地の森林は、開発されることが多いため、市町村や県の天然記念物に指定するなどして保全する必要がある。
- 備考 : 沖縄島の自生地のうち、1 ヶ所は沖縄県指定の天然保護区域、1 ヶ所は国指定の天然記念物として保護されている。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文 献 : 豊見山元, 1994. 久米島のシダ植物. “久米島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築—”, 沖縄県立博物館 (編), 沖縄県立博物館, 12-25.
 豊見山元, 1998. 波照間島のシダ植物相. 波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美

術工芸一，沖縄県立博物館，25-31.

阿部篤志，2015. 大宜味村中央部石灰岩山地における希少植物調査（最終報告）. 事業年報（平成25年度），沖縄美ら島財団総合研究センター，34-49.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣，2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ（栗国島・渡名喜島）. 日本植物園協会誌，(51)：80-85.

横田昌嗣・阿部篤志・佐藤宣子，2016. 宮古諸島から新たに見つかった維管束植物. 宮古島市総合博物館紀要，(29)：121-128.

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)・加島幹男(追補)・佐藤宣子(追補)

和名：ヒメミゾシダ
分類：ヒメシダ科 (PPG 科名：ヒメシダ科)
学名：*Stegnogramma gymnocarpa* (Copel.) K. Iwats. subsp. *amabilis* (Tagawa) K. Iwats.
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴：常緑の小形の多年草。根茎は短く這う。葉は1回羽状複生、狭披針形、長さ6~13 cm、脈上に毛が多い。孢子嚢群は線状楕円形、黒色。類似の環境に生えるコシケシダに似るが包膜を欠き、大きさはかなり変化に富む。

分布域(県外)：本州(中国)、四国(愛媛県、高知県)、九州、屋久島、奄美大島、徳之島。

県内の分布：沖縄島北部。

生育環境：山地溪流沿いの岩上や崖に生える。

生育状況：名護市から国頭村にかけての数ヶ所に自生が知られるが、個体数は少ない。自生地の幾つかは、ダム建設により水没して消失した。

学術的価値：分布域の南限で、基準産地である。

減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。ダム建設による水没。森林伐採。

備考：竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文献：沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成5年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1995. 平成6年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1997. 平成7年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-7.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 平成8年度沖縄本島北部地域生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，1-6.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 奥間川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，3-9, 99-112.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会，5-13, 151-168.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所，3-10, 101-117.
沖縄総合事務局北部ダム事務所，1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所，3-8, 87-95.

執筆者名：横田昌嗣*・平岩篤*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名：ミゾシダ
分類：ヒメシダ科 (PPG 科名：ヒメシダ科)

学 名 : *Stegnogramma pozoi* (Lagasca) K. Iwats. subsp. *mollissima* (Fisch. ex Kunze) K. Iwats.

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草、根茎は長く這う。葉身は長さ 35~50 cm、1 回羽状複生、毛が多く、葉柄は長さ 25~40 cm。ケホシダに似るが、孢子嚢群はややソーセージ状で包膜を欠く。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、沖永良部島、朝鮮、台湾、中国、インド、スリランカ。

県内の分布 : 沖縄島北部、久米島、石垣島。

生育環境 : 沖縄県では、溪流近くや高地の陰湿な林床に生える。

生育状況 : 沖縄島では数ヶ所、石垣島では数ヶ所で確認されているが、いずれもごく狭い範囲に限られ、個体数は極めて少ない。久米島の現状は不明。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採。園芸用の採集。

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **アミシダ**

分 類 : ヒメシダ科 (PPG 科名 : ヒメシダ科)

学 名 : *Stegnogramma wilfordii* (Moore) Serizawa

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走し、葉を束生する。葉身は長さ 20~50 cm、三角状長楕円形、羽状に浅~深裂し葉身下部は深く切れ込むが、沖縄産は裂片が独立する場合が多く、有毛、葉脈は網状。孢子嚢群は脈上に網状につき、包膜はない。

分布域(県外) : 本州(紀伊半島)、四国、九州、屋久島、奄美大島、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 高地の陰湿な林内の崖に生える。

生育状況 : 沖縄島では 1ヶ所、西表島では 2ヶ所に産する。自生地はごく狭い範囲に限られ、個体数は非常に少ない。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採と林道建設(沖縄島)。園芸用の採集。

備 考 : 沖縄島の自生地は、国指定の天然保護区域である。竹富町希少野生動植物種(2017年)。

文 献 : Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和 名 : **タイワンハシゴシダ**

分 類 : ヒメシダ科 (PPG 科名 : ヒメシダ科)

学 名 : *Thelypteris castanea* (Tagawa) Ching

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎はほぼ直立し、葉を束生する。葉身は長さ 20~30 cm、幅 10~15 cm、1 回羽状深裂~2 回羽状、長楕円状三角形、有毛、裏に腺点が多い。孢子嚢群は円形、包膜は腎形で有毛。ケホシダが繊細になり小形化したような形態をとる。

分布域(県外) : 台湾。

- 県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 常緑広葉樹林内の崖や溪流近くの岩上、時に林道沿いの崖に生える。
生育状況 : 高地から比較的低海拔地まで島内の数ヶ所に点々と産するが、自生地数は限られる。群生する場合もあるが、個体数は限られる。
学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。
備考 : 西表島産は台湾産に比べて小形である。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣 (追補)

-
- 和名 : **ゲジゲジシダ**
分類 : ヒメシダ科 (PPG 科名 : ヒメシダ科)
学名 : *Thelypteris decursive-pinnata* (van Hall) Ching
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 日本本土では夏緑性、沖縄県では常緑性の多年生草本。根茎は短く、斜上し、数枚の葉を束生する。葉は有毛、1 回羽状深裂~2 回羽状深裂、長さ 30~60 cm であるが、沖縄県では小型で切れ込みの回数が少ないものが多い。日本本土では、側裂片基部は耳状に広がって葉軸に合着し、上下に連なってジグザグ状を呈するが、奄美大島と沖縄県のものとはジグザグ状を呈しない。葉身下部の側裂片は短くなる。孢子嚢群は裂片の辺縁近くにつき、円形、包膜は有毛。
分布域 (県外) : 北海道、本州、四国、九州、屋久島、種子島、黒島、奄美大島、朝鮮、台湾、中国、インドシナ、インド。
県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。
生育環境 : 九州以北では、林床や人家の石垣など至る所に普通に見られるが、西表島では、水のしたたり落ちる滝の崖面などにマツムラソウやオオクサアジサイなどと共に生える。奄美大島では、人家周辺の歩道の法面に生えることがある。
生育状況 : 沖縄島では 2 ヶ所で採集されているが、現状は不明。西表島では 1 河川の流域の数ヶ所で採集された記録があるが、極めてまれである。2004 年に新たに西表島の 1 ヶ所で生育が確認されたが、沖縄県で現在残された確実な自生地はここだけだけである。自生地は国立公園内にあり、容易に到達できない奥地にあるので、開発や採集の恐れはない。
減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。森林伐採 (沖縄島)。
備考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1983. 日本のシダ植物図鑑 第 3 巻. 東京大学出版会, 296-317.
中村 直, 1958. 琉球新産シダについて. 琉球大学生物クラブ誌, 2 (2) : 18-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣 (追補)

-
- 和名 : **クシノハシダ**
分類 : ヒメシダ科 (PPG 科名 : ヒメシダ科)
学名 : *Thelypteris jaculosa* (C. Chr.) Panigr.
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。根茎は這い、葉をやや疎らにつける。葉身は1回羽状、長さ60~120 cm、幅20~30 cm、頂羽片は明瞭で、側羽片は12~20対、葉身下部の羽片は急に短くなり、耳状となる。孢子嚢群は中肋と葉縁の中間に位置し、有毛の円腎形の包膜で覆われる。
- 分布域(県外)** : 九州南部、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、熱帯アジア。
- 県内の分布** : 沖縄島北部、石垣島、西表島。
- 生育環境** : 低地や山地の水辺に近いやや湿った林床に生える。沖縄島では主に石灰岩地に生えるが、石垣島では非石灰岩地に生える。
- 生育状況** : 沖縄島では数ヶ所に、石垣島では数ヶ所に産することが知られる。しばしば群生するが、生育地は限られる。沖縄島の自生地の一つは、現在建設中のダムが完成すると水没する恐れがある。西表島の現状は不明。
- 減少の要因** : 自生地の開発。森林伐採。
- 文献** : 豊見山元, 1986. 恩納岳と周辺地域のシダ植物. 沖生教研会誌(沖縄生物教育研究会), (19) : 31-33.
- 執筆者名** : 横田昌嗣*・平岩 篤*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名** : ミミガタシダ
- 分類** : ヒメシダ科 (PPG科名: ヒメシダ科)
- 学名** : *Thelypteris subaurita* (Tagawa) Ching
- カテゴリー** : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。根茎は短く直立し、葉を束生する。葉は長さ50~120 cmになり、2回羽状、羽片はほぼ対生し、狭三角形。下部に近い羽片の下向き第1小羽片は著しく突出する。孢子嚢群は円形で包膜を欠く。
- 分布域(県外)** : 屋久島、奄美大島、徳之島、台湾。
- 県内の分布** : 沖縄島北部。
- 生育環境** : 道路沿いの湿った土手、明るい林内の斜面、がけ崩れ跡地などやや不安定な環境に生える。
- 生育状況** : 数ヶ所に産するが、自生地は不安定な環境であり、遷移が進行すると消滅する。いずれの自生地でも個体数は少ない。
- 減少の要因** : 自生地と個体数がもともと少ない。遷移の進行。
- 文献** : Serizawa, S., 1975. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (1). Sci. Rep. Takao Mus., 7: 1-53.

- 執筆者名** : 横田昌嗣*・比嘉清文*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)

- 和名** : イブダケキノポリシダ (ノコギリキノポリシダ)
- 分類** : メシダ科 (PPG科名: メシダ科)
- 学名** : *Diplazium crassiusculum* Ching
- カテゴリー** : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴** : 常緑の多年草。根茎は短く這い、葉を束生する。葉は長さ20~45 cm、革質、1回羽状、1個の頂羽片と1~2対の側羽片を持ち、葉柄の鱗片は辺縁に小突起があり、黒褐色。孢子嚢群は線形で、中肋よりにつく。キノポリシダ *D. donianum* によく似るが、羽片の鋸歯が粗く、葉質もやや薄く硬く、

羽片数も少なくなる傾向があり、単葉となることもある。

分布域（県外）：九州南部、中国、インドシナ。

県内の分布：沖縄島北部、西表島。

生育環境：山地の陰湿な崖に生える。

生育状況：キノボリシダのように多くはなく、自生地も個体数も少ない。西表島の現状は不明。

減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採。ダム建設による水没（沖縄島）。

備考：和名は、沖縄島北部の伊部岳に因む。キノボリシダに外見は似ているが、分子系統学的な研究ではミヤマノコギリシダやヒロハミヤマノコギリシダに最も近縁であることが判っている (Wei *et al.*, 2014)。ホソバミヤマノコギリシダは、本種とミヤマノコギリシダ（ホソバノコギリシダ）の雑種と考えられている（高宮，2006）。竹富町希少野生動植物種（2017年）。

文献：高宮正之，2006. 高宮正之：鳥瞰だけではなく地域情報を活かした虫瞰の植物分類学—ノコギリシダ属を例として—。分類，6(1)：1-24。
Wei, R., H. Schneider & X.-C. Zhang, 2013. Toward a new circumscription of the twinosorus-fern genus *Diplazium* (Athyriaceae): A molecular phylogeny with morphological implications and infrageneric taxonomy. Taxon, 62(3): 441-457.

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣（追補）

和名：クワレシダ

分類：メシダ科 (PPG科名：メシダ科)

学名：*Diplazium esculentum* (Retz.) Sw.

カテゴリー：絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：九州では夏緑性、沖縄以南では常緑性の多年草。根茎は直立し、葉を束生する。葉身は2回羽状、長さは1~2 mになり広卵形、小羽片は線状三角形。孢子嚢群は線形。ヒロハノコギリシダ *D. dilatatum* に似る大形のシダ。根茎は1 m近くまで立ち上がり、葉脈が網状脈となる点で同属の他種と区別できる。

分布域（県外）：九州、東南アジア。

県内の分布：沖縄島中部。

生育環境：明るい湿地に生える。

生育状況：北中城村の放棄水田の湿地にイネ科植物とともに約200株の群落を形成していたが、その自生地は開発により消失した。最近、沖縄市の池の周囲に少数個体が生育していることが確認されている。

減少の要因：自生地の開発。もともと自生地と個体数が限られている。

備考：東南アジアでは食用にするが、沖縄島で食用にするという情報は得られていない。IUCNカテゴリー：Least Concern (LC)。

文献：豊見山元・新城兵一，1992. 琉球列島植物分布資料9. 沖縄生物学会誌，(30)：79-80.

執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣（追補）

和名：ヒロハミヤマノコギリシダ（タカサゴノコギリシダ）

分類：メシダ科 (PPG科名：メシダ科)

学名：*Diplazium petri* Tardieu-Blot

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は這い、葉をやや密につける。葉身は1回羽状、深裂～全裂、長さ15～35 cm、羽片は披針状長楕円形。孢子嚢群は線形で、中肋に近くならぶ。ミヤマノコギリシダ *D. mettenianum* に似るが、葉身は三角状で羽片は深裂または全裂し、1.5 cm以上の長い葉柄をもち、根茎は短い。
- 分布域(県外) : 本州(三重県、広島県)、九州(鹿児島県)、屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、中国、インドシナ、タイ、フィリピン。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の湿った林床下に生える。
- 生育状況 : 石垣島では2ヶ所で確認されているが、個体数は少ない。沖縄島と西表島の現状は不明。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ハンコクシダ**

分類 : メシダ科 (PPG科名: メシダ科)

学名 : *Diplazium pullingeri* (Baker) J. Smith

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は斜上する。葉は1回羽状で、葉柄は長さ10～25 cm、葉身は長さ25～40 cm、葉全体に毛を密生する。側羽片は鎌状に曲り、柄はなく、基部は耳状にとがり、頂羽片はない。孢子嚢群は中肋に接してつき、線形。
- 分布域(県外) : 屋久島、奄美大島、徳之島、台湾、中国、ベトナム。
- 県内の分布 : 沖縄島、久米島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 高地の常緑広葉樹林の陰湿な林床に生える。
- 生育状況 : 沖縄島、石垣島、西表島では自生地はごく狭い範囲に限られ、個体数も少ない。久米島の現状は不明。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採。
- 備考 : 孢子嚢の配列のしかたから、この1種のみからなる単型属 *Monomelangium* として独立させることもある。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : **ニセシロヤマシダ**

分類 : メシダ科 (PPG科名: メシダ科)

学名 : *Diplazium taiwanense* Tagawa

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の大形の多年草。根茎は直立し、葉を束生する。葉は1.5 m以上に達し、卵状三角形、2回羽状、小羽片ははっきりした柄をもつ。孢子嚢群は中間生で、長楕円形。
- 分布域(県外) : 九州、奄美大島、徳之島、台湾、インドシナ、タイ。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の湿った林床や、水の流れのあるような場所に生える。
- 生育状況 : 自生地は点在し、ごく狭い範囲に限られ、個体数も少なくまれである。

減少の要因 : 個体数はもともと少ない。森林伐採。

文献 : 芹沢俊介, 1972. 琉球のシダ植物雑記 (一). 北陸の植物, 20: 5-9.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : オキナワコクモウクジャク

分類 : メシダ科 (PPG 科名 : メシダ科)

学名 : *Diplazium virescens* Kunze var. *okinawense* (Tagawa) Kurata

カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎はやや長く這う。葉は2回羽状複生、葉は長さ1mになり、葉身は卵状三角形、小羽片には短い柄があり、基部は浅い心形、葉柄基部の鱗片は黒褐色、披針形。基本変種のコクモウクジャクと異なり、孢子嚢群は中肋よりに位置する。

分布域(県外) : 本州(三重県、和歌山県)、四国(愛媛県、高知県)、九州(宮崎県、鹿児島県)、屋久島、種子島、悪石島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、台湾、中国南部。

県内の分布 : 沖縄島北部、西表島。

生育環境 : 山地の常緑広葉樹林の林床に生える。

生育状況 : 沖縄島北部の2ヶ所と西表島1ヶ所で採集された記録があるが、個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 国頭村は、本変種の基準産地である。

減少の要因 : 山地林の伐採。園芸用の採集。もともと自生地と個体数が少ない。

備考 : 自生地の一つは国指定の天然保護区域として保護されている。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1983. 日本のシダ植物図鑑, 第3巻. 東京大学出版会, 220-223.

Serizawa, S., 1977. Pteridophytes of the Ryukyu Islands (2). Sci. Rep. Takao Mus., 8: 1-30.

執筆者名 : 横田昌嗣*・高良拓夫*

和名 : ノコギリシダ

分類 : メシダ科 (PPG 科名 : メシダ科)

学名 : *Diplazium wichurae* (Mett.) Diels

カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、葉をまばらにつける。葉身は1回羽状、長さ20~40 cm、革質、羽片は鎌状で柄があり、基部は耳状にとがる。孢子嚢群は羽軸近くにつき、線形。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、小笠原、屋久島、種子島、トカラ列島、喜界島、沖永良部島、朝鮮、台湾、中国。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 山地の常緑広葉樹林下の斜面や壁面に生える。沖縄島では主に石灰岩地帯の林床に生えるが、東村の溪流沿いの非石灰岩の湿った崖でも観察されている。

生育状況 : 自生地は古生層石灰岩地では3ヶ所、非石灰岩地では1ヶ所知られているが、ごく狭い地域に限られ、個体数は少ない。

減少の要因 : 石灰岩地の開発。森林の伐採。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : ホコザキノコギリシダ

分類 : メシダ科 (PPG 科名 : メシダ科)

学名 : *Diplazium yaoshanense* (Wu) Tardieu-Blot

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く横走する。葉身は1回羽状、長さ50 cmに達し、葉柄は葉身と同長かやや長い。孢子嚢群は線状弓形で、長さ1 cm。ミヤマノコギリシダ *D. mettenianum* に似るが、葉身上部の側羽片は急激に小さくなり、はっきりした頂羽片状となる。

分布域(県外) : 中国、インドシナ。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 高地の湿った林床や溪流沿いの斜面に生える。

生育状況 : 国頭村から名護市にかけて3ヶ所の自生地が知られるが、個体数はごく少ない。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。森林伐採。

備考 : 自生地の一つは、国の天然保護区域に指定されている。本種はミヤマノコギリシダ(ホソバノコギリシダ)とイブダケキノボリシダの雑種だと考えられている(高宮, 2006)。

文献 : 高宮正之, 2006. 鳥瞰だけではなく地域情報を活かした虫瞰の植物分類学—ノコギリシダ属を例として—. 分類, 6(1): 1-24.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和名 : リュウキュウキンモウワラビ

分類 : メシダ科 (PPG 科名 : キンモウワラビ科)

学名 : *Hypodematum fordii* (Baker) Ching

カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は短く這い、黄金色の柔らかい鱗片で覆われる。葉は接近してでて、長さ5~20 cm、五角状卵形、3回羽状深裂、下面に短腺毛がある。孢子嚢群は円形で、包膜にはまばらに腺毛がある。

分布域(県外) : 中国(広東省)。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 石灰岩地の切り立った崖の岩の窪みに生える。

生育状況 : 極めて限定された1ヶ所のみで生育し、個体数は極めて少ない。自生地は国立公園であるが、自生地の近くまで開発されており、生育環境の悪化が危惧される。

学術的価値 : 分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の開発。園芸用の採集。

備考 : 国内希少野生動植物(2018年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

-
- 和名 : カザリシダ
分類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)
学名 : *Aglanomorpha coronans* (Wall. ex Mett.) Copel.
カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A類 (CR)
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は太く直径 5 cm くらいで、赤褐色の鱗片を密布する。葉は硬く 1 回羽状、長さ 60~100 cm、基部は幅広く心臟形となる。孢子嚢群は卵形で、包膜はない。
- 分布域 (県外) : 台湾、中国、ヒマラヤ、タイ、インドシナ。
- 県内の分布 : 沖縄島、南大東島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 明るい林内の樹上または岩上に着生する。
- 生育状況 : 沖縄島では 1930 年代には宜野湾市や浦添市で採集された記録があるが、現在は絶滅。石垣島と西表島でも極めてまれで、近年では西表島 1 ヶ所、石垣島 3 ヶ所の自生地が確認されているが、いずれも乱獲によりほぼ絶滅状態である。かつて群落が見られた石垣島の 1 ヶ所で 2016 年に丹念に探索を行ったが、発見することはできなかった。南大東島では確認することができず、おそらく絶滅。今後散発的な生育が確認される可能性は残されているが、現状では県内から絶滅した可能性が高い。
- 学術的価値 : 分布域の北限である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が少ない。園芸用の採集。自然林の伐採。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種 (2015 年)。竹富町特別希少野生動植物種 (2017 年)。
- 文献 : 芹沢俊介, 1972. 琉球のシダ植物雑記 (一). 北陸の植物, 20: 5-9.
横田昌嗣・新城和治・比嘉清文, 1997. 琉球列島植物分布資料 14. 沖縄生物学会誌, (35): 49-54.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・豊見山元(追補)・松島昭司(追補)

-
- 和名 : イワヒトデ
分類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)
学名 : *Colysis elliptica* (Thunb.) Ching (= *Leptochilus ellipticus* (Thunb.) Noot.)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、まばらに葉をつける。葉はやや 2 型となり、1 回羽状、側裂片は 3~5 対、栄養葉は長さ 15~20 cm、孢子葉は栄養葉より大きい。孢子嚢群は線形で、包膜はない。オオイワヒトデ *C. pothifolia* によく似るが、植物体全体が小型で、根茎は細く、葉の表面は光沢があり、葉脈は見えないなどの点で異なる。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、請島、朝鮮、台湾、中国、インドシナ。
- 県内の分布 : 沖縄島北部。
- 生育環境 : 山地の溪流近くの岩上に生える。
- 生育状況 : 特定の河川の限られた場所에만分布し、個体数は少ない。
- 減少の要因 : もともと自生地が少ない。森林伐採。ダム建設による水没。
- 備考 : しばしばヤリノホクリハランと混生し、雑種ヒトツバイワヒトデ *C. simplicifrons* (Christ) Tagawa を形成することがある。
- 文献 : 沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1997. 大保ダム建設発生土の処分候補地に係る生物環境調査データ (陸域・海域). 沖縄建設弘済会, 3-14, 117-135, 277-286, 349-373.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 大保川生物環境調査データ. 沖縄建設弘済会, 5-13, 151-168.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 与那川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-10, 101-117.

沖縄総合事務局北部ダム事務所, 1998. 座津武川生物環境調査データ. 北部ダム事務所, 3-8, 87-95.

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

和名 : **タイワンクリハラシ**

分類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)

学名 : *Colysis hemionitidea* C. Presl (= *Leptochilus hemionitideus* (C. Presl) Noot.)

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、葉をやや疎らにつける。葉は単葉で、披針形、長さ 20~50 cm、幅 4~8 cm になり、葉柄は長さ 5~20 cm、鱗片は披針形、基部に突起がある。孢子嚢群は長楕円形。

分布域(県外) : 屋久島、種子島、奄美大島、台湾、中国、フィリピン、インドシナ、タイ、インド、ネパール。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い常緑広葉樹林の溪流近くの岩上や地上に生える。

生育状況 : 1972 年に採集された記録(倉田・中池, 1981)があるが、それ以後確実な確認はされていない。その生育地は国立公園内にあるが、近年数多くの観光客が立ち入り、遊歩道が建設されており、環境の悪化、踏みつけ、採集が懸念される。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。

備考 : 1972 年に西表島で採集された標本が国立科学博物館(TNS)に所蔵されている。奄美大島では、それほど珍しいものではない。竹富町特別希少野生動植物種(2017年)。

文献 : 倉田 悟・中池敏之, 1981. 日本のシダ植物図鑑, 第2巻. 東京大学出版会, 280-283.

執筆者名 : 横田昌嗣

和名 : **ハカマウラボシ**

分類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)

学名 : *Drynaria fortunei* (Kunze) J. Smith

カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形態の特徴 : 冬緑性の多年草。根茎は太く径 2 cm くらいで、長く這い、鱗片を密布する。葉は極端な 2 型葉で、落葉溜めの泥除葉と光合成と生殖のための普通葉の区別がある。泥除葉は卵形で、長さ 4~11 cm、心脚、展開後すぐに褐変する。普通葉は 1 回羽状、長さ 20~35 cm、幅 10~17 cm、葉柄は長さ 5~10 cm。孢子嚢群は普通葉の下面につき、卵形、包膜はない。

分布域(県外) : 台湾、中国、ベトナム、タイ、ラオス。

県内の分布 : 沖縄島北部。

生育環境 : 明るい林内の樹上または岩上に着生する。

生育状況 : 極めて限定された 1 地域に小コロニーを形成するだけである。自生地は国立公園であるが、すぐ近くまで開発が進んでおり生育地が改変される恐れがある。

学術的価値 : 種としても属としても分布域の北限で、国内で唯一の産地である。

減少の要因 : 自生地の開発。園芸用の採集。

備 考 : 特定国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。特定国内希少野生動植物 (2018 年)。

文 献 : 津嘉山弘・仲宗根忠之・仲本朝彦・山内正一・山内盛吉・普久原朝助・外間元栄・島袋守成・豊見山元, 1991. 沖縄島よりハカマウラボシ *Drynaria fortunei* (Kunze) J. Sm. を報告する. 沖縄生物学会誌, (29) : 49-51.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : コウラボシ

分 類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)

学 名 : *Lepisorus uchiyamae* (Makino) H. Ito

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 の 特 徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は短く這い、葉をやや接近してつける。葉は単葉、長さ 3~13 cm、線状披針形、孢子囊群は円形、葉身の上半部に中肋をはさんで 5~13 対つき、包膜はない。ノキシノブ *L. thunbergianus* に似るが小形で、根茎は長く這い、葉はやや薄く疎に出る。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州、奄美大島、徳之島。

県 内 の 分 布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島北部、渡嘉敷島、屋嘉比島、座間味島、久米島、渡名喜島、栗国島。

生 育 環 境 : 海岸近くの岩の割れ目や窪みに生える。

生 育 状 況 : 各島ともごく限られた地域に産し、個体数は少ない。渡嘉敷島では 2015 年に 1 ヶ所で確認された。

学 術 的 価 値 : 分布域の南限である。

減 少 の 要 因 : 個体数はもともと少ない。自生地の開発。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 島袋敬一, 1975. 琉球列島におけるシダ植物の分布 (2) . 沖縄生物学会誌, (13) : 18-23.

豊見山元, 1994. 久米島のシダ植物. “久米島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築—”, 沖縄県立博物館 (編), 沖縄県立博物館, 12-25.

横田昌嗣・平岩 篤・兼本 正・米須清智, 1997. 琉球列島植物分布資料 15. 沖縄生物学会誌, (35) : 55-64.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査 II (栗国島・渡名喜島) . 日本植物園協会誌, (51) : 80-85.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)・仲宗根忠樹(追補)

和 名 : シナノキシノブ (オオクリハラン)

分 類 : ウラボシ科 (PPG 科名 : ウラボシ科)

学 名 : *Microsorium fortunei* (Moore) Ching (= *Neochiropteris fortunei* (T. Moore) Bosman ex Nakaike et A. Yamam.)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。根茎は這い、径 3~4 mm。葉は単葉で長さ 40~70 cm、葉柄は長さ 10~25 cm。孢子囊群は中肋の両側に 1 列に並び、円形、包膜はない。

分布域 (県外) : 小笠原 (父島、母島)、インドシナ、インド。

- 県内の分布 : 石垣島。
 生育環境 : 岩上に着生する。
 生育状況 : 1947年に採集された標本が京都大学の標本庫 (KYO) に所蔵されているが、近年はまったく確認されておらず、現状不明。
 学術的価値 : 小笠原諸島と共に分布域の北限である。国内では分布が限定されている。
 減少の要因 : もともと個体数が少ない。自生地の開発。園芸用の採集。

執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ミツデヘラシダ**
 分類 : ウラボシ科 (PPG科名: ウラボシ科)
 学名 : *Microsorium pteropus* (Blume) Copel. (= *Leptochilus pteropus* (Blume) Fraser-Jenk.)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這う。葉は長さ15~20 cm、単葉または3出葉。孢子嚢群はほぼ円形で、包膜はない。
 分布域(県外) : 台湾、中国南部、インドシナ、インド。
 県内の分布 : 石垣島、西表島。
 生育環境 : 山地の常緑樹林内の溪流沿いの陰湿な岩上に生育し、西表島では時として水深0.5 m程度の水中の岩上に生えることがある。
 生育状況 : 石垣島では3河川の流域に産するが、個体数は少ない。西表島では数河川の流域に産し、群生する場合もあるが、自生地の数は少ない。
 学術的価値 : 分布域の北限である。
 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。
 備考 : 外国産がミクロソリウムの名前で水草として熱帯魚店で販売されている。西表島の自生地の大半は、国立公園であり開発の恐れはない。竹富町希少野生動植物種 (2017年)。

執筆者名 : 横田昌嗣*・北原 孝*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **タカウラボシ (ミズカザリシダ)**
 分類 : ウラボシ科 (PPG科名: ウラボシ科)
 学名 : *Microsorium rubidum* (Kunze) Copel.
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這い、葉を疎らにつける。葉は長さ1.5mになり、長楕円形、1回羽状深裂、側裂片は12~16対、葉柄は茶褐色、長さ10~15 cm、葉柄基部に長卵形の鱗片がある。孢子嚢群は中肋と葉縁の間に1列に並び、楕円形、孢子嚢群がつく場所の葉肉は窪み、包膜を欠く。
 分布域(県外) : 奄美大島、台湾、中国、フィリピン、東南アジア、ミクロネシア。
 県内の分布 : 伊平屋島、沖縄島、久米島、石垣島、西表島、与那国島。
 生育環境 : サガリバナ林の林床や放棄水田などの湿地に生える。
 生育状況 : 沖縄島では宜野座村、恩納村、沖縄市などに点々と産するが、自生地は開発により急激に失われている。西表島では5ヶ所に群生するが、自生地は限られている。石垣島では、2017年に1ヶ所で確認されている。他の島の現状は不明。
 減少の要因 : 自生地の開発。

備 考 : 竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 倉田 悟・中池敏之, 1981. 日本のシダ植物図鑑 第2巻. 東京大学出版会, 510-513.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・平岩 篤*・安田恵子*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : クリハラシ

分 類 : ウラボシ科 (PPG 科名: ウラボシ科)

学 名 : *Neochheiropteris ensata* (Thunb.) Ching

カ テ ゴ リ ー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は長く這う。葉は単葉で、葉身は長さ 20~40 cm、卵状長楕円形、葉柄は長さ 10~30 cm。孢子嚢群は葉身中に散在し、円形、包膜はない。外見はヤリノホクリハラシ *Colysis wrightii* に似るが、より大形で頑強で、孢子嚢群は円形である。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、中国。

県内の分布 : 沖縄島中部。

生育環境 : 岩上に着生する。

生育状況 : 自生地は1ヶ所のみ知られ、現在はまったく発見されない。故多和田真淳氏によると県外から持ち込まれた石碑用の石に着生していたという。沖縄のものはヒロハクリハラシ型であり、ヒロハクリハラシ f. *platyphylla* Tagawa の paratype で、京都大学の標本庫 (KYO) に収蔵されている。

減少の要因 : もともと自生地が限られている。自生地の公園化による除草。園芸用の採集。

保全対策 : 自生地は国指定の史跡で、城趾公園となっているが、公園整備や除草の際、本種などの貴重種には配慮する必要がある。

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : タイワンアオネカズラ (シマアオネカズラ)

分 類 : ウラボシ科 (PPG 科名: ウラボシ科)

学 名 : *Polypodium formosanum* Baker (= *Goniophlebium formosanum* (Baker) Rodl.-Linder)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴 : 冬緑性の多年草。根茎は径 5 mm くらい、灰白色を帯びた緑色で、長く伸びる。葉は1回羽状、長楕円状披針形、葉身は長さ 40 cm になり、葉柄は長さ 9~20 cm、柔らかい草質で軟毛を密布する。孢子嚢群は円形で、中肋よりに1列にならび、包膜はない。

分布域(県外) : 屋久島、台湾、中国南部。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 高地の自然林内の樹幹に着生する。

生育状況 : 西表島では1度記録されたのみで、その後は確認されていない。現状は不明。

学術的価値 : 分布が極めて限定された希産種である。

減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。

備 考 : 自生地は、現在は国立公園内にあり、開発の恐れはない。本種は台湾では、雲霧帯に普通に産する。竹富町希少野生動植物種 (2017 年)。

文 献 : 芹沢俊介, 1972. 琉球のシダ植物雑記 (一). 北陸の植物, 20: 5-9.

執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

和 名 : ヒトツバマメツタ

分 類 : ウラボシ科 (PPG 科名: ウラボシ科)

学 名 : *Pyrrosia adnascens* (Sw.) Ching

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 小形の常緑多年草。根茎は長く這い、まばらに葉をつける。葉は革質、2型となり、栄養葉は長さ4~10 cm、倒長卵形、孢子葉は栄養葉より細長くなり、孢子囊群は円形で、葉の上半分に密生する。ヒトツバに似ているが、葉は明瞭な2型となり、小型で、多肉質である。

分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部、インド、東南アジア、ポリネシア。

県 内 の 分 布 : 沖縄島南部、渡名喜島。

生 育 環 境 : 明るく乾燥した森林の岩上または樹上に着生する。台湾や東南アジアでは、低地の日当たりが良い樹林や街路樹に普通に生育する。

生 育 状 況 : 極めて限定された地域に分布する (Shimabuku, 1976)。沖縄島では採集により激減したが、わずかに残された個体が最近確認されており (立石・新城, 1999)、別の新たな自生地が沖縄島南部1ヶ所で見つかったが、2016年の調査では、これら2ヶ所とも確認することができなかった。そのうちの1ヶ所は周辺の森林の遷移の進行で、環境が暗くなったことが原因である可能性がある。もう1ヶ所は国指定の史跡であるが、過度の除草と採集で絶滅した可能性がある。渡名喜島では、かつて採集された場所を中心に探索が試みられたが、発見することはできず、現状は不明 (阿部ら, 2016)。発見当時は里山として利用され明るかった環境が、近年は利用されなくなって遷移が進行し、暗い樹林になったため、本種の生育に適さなくなった可能性がある。

学 術 的 価 値 : 分布域の北限で、国内では沖縄県にのみ分布する。

減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。園芸用の採集。遷移の進行。過度の草刈り。

文 献 : Shimabuku, K., 1976. Rare species of the ferns from Shimajiri, the southern part of Okinawa Island. "Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls.", Ikehara, S. (ed.), Univ. Ryukyus, 2: 53-58.

玉木 拓, 1965. 渡名喜島のシダ. 沖縄生物学会誌, (2): 9-12.

玉木 拓, 1966. 琉球産シダ植物の分類, 生態の研究 (1). 沖縄生物学会誌, 3(5): 22-26.

立石庸一・新城和治, 1999. 斎場御嶽の植物. "国指定史跡斎場御嶽整備事業報告書 (発掘調査・資料編)", 知念村教育委員会 (編), 知念村教育委員会, 43-84.

阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣, 2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査II (粟国島・渡名喜島). 日本植物園協会誌, (51): 80-85.

執 筆 者 名 : 立石庸一*・山城 考*・横田昌嗣(追補)・阿部篤志(追補)

和 名 : タイワンビロードシダ

分 類 : ウラボシ科 (PPG 科名: ウラボシ科)

学 名 : *Pyrrosia linearifolia* (Hook.) Ching var. *heterolepis* Tagawa

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I A 類 (CR)

形 態 の 特 徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は長く這い、赤褐色の長い鱗片を密布する。葉は長さ5~15 cm、幅3~5 cm、単葉、線状披針形、両面に星状鱗片をビロード状に密布する。孢子囊群は円形で、中肋の両側

に2列にならび、包膜はない。基本変種のピロードシダに比べ鱗片が幅広い点で区別されている。

- 分布域（県外）：台湾。
- 県内の分布：沖縄島北部、渡名喜島。
- 生育環境：明るく風の良く当たる岩上にマット状に生える。
- 生育状況：極めて限定された地域に分布し、個体数も少ない。沖縄島北部の自生地は国立公園であるが、無秩序な開発により多数の個体と自生地が消失しており、極めて深刻な状態にある。渡名喜島では、ごく最近も生育が確認されている（阿部ら，2016）。
- 学術的価値：分布域の北限で、国内では県内にのみ分布する。
- 減少の要因：園芸用の採集。森林の伐採と開発。もともと自生地が限られている。
- 文献：島袋守成，1975. シダ植物の生育環境：辺戸岳におけるタイワンピロードシダ（1）. 沖生教研会誌，（8）：25-26.
玉木 拓，1966. 琉球産シダ植物の分類，生態の研究（1）. 沖縄生物学会誌，3（5）：22-26.
阿部篤志・仲宗根忠樹・横田昌嗣，2016. 沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況調査Ⅱ（栗国島・渡名喜島）. 日本植物園協会誌，（51）：80-85.
- 執筆者名：横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣（追補）・阿部篤志（追補）・仲宗根忠樹（追補）

-
- 和名：ヒメウラボシ
- 分類：ヒメウラボシ科（PPG科名：ウラボシ科）
- 学名：*Grammitis dorsipila* (Christ) C. Chr. et Tardieu-Blot
- カテゴリー：絶滅危惧 I B 類（EN） 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I B 類（EN）

- 形態の特徴：常緑の小形の多年草。根茎はごく短く、葉を束生する。葉は単葉で、線形、長さ2~8 cm、幅2~4 mm、赤褐色の毛が多い。孢子嚢群は円形で、中肋の両側に2列にならび、包膜はない。ノキシノブ *Lepisorus thunbergianus* をかなり小形にしたようなシダで、葉が薄く荒い毛が密生する。
- 分布域（県外）：九州南部、屋久島、奄美大島、徳之島。
- 県内の分布：沖縄島、石垣島。
- 生育環境：高地の湿度の高い林内の樹幹や岩上、または溪流沿いのやや日当たりの良い岩上に着生する。
- 生育状況：自生地は沖縄島では1ヶ所、石垣島では3ヶ所しか知られておらず、極めてまれである。石垣島では、しばしばシمامカデシダと混生し、シمامカデシダの幼植物と紛らわしい場合があるが、孢子嚢の有無で区別できる。
- 減少の要因：もともと自生地と個体数が少ない。森林の伐採。園芸用の採集。

- 文献：横田昌嗣・豊見山元・比嘉清文・橋爪雅彦，1994. 琉球列島植物分布資料13. 沖縄生物学会誌，（32）：61-65.
- 執筆者名：横田昌嗣*・比嘉清文*・北原 孝*・横田昌嗣（追補）・阿部篤志（追補）・加島幹男（追補）

-
- 和名：シمامカデシダ
- 分類：ヒメウラボシ科（PPG科名：ウラボシ科）
- 学名：*Prosaptia kanashiroi* (Hayata) Nakai ex Yamamoto
- カテゴリー：絶滅危惧 II 類（VU） 環境省カテゴリー：該当なし

- 形態の特徴 : 常緑の小形の多年草。根茎は短く這い、葉を束生する。葉は単葉で、羽状に切れこみ、長さ10~30 cm、幅1.5~3 cm。両面に茶褐色の毛がある。孢子嚢群は裂片の先端の縁につき、包膜はポケット状。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 常緑樹林内の岩上に着生する。
- 生育状況 : 石垣島の山地ではまれではないが、自生地と個体数は限られている。西表島では極めてまれで(島袋, 1973)、これまで2回しか採集されておらず、現状は不明。
- 学術的価値 : 八重山諸島の固有種である。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林伐採(石垣島)。ダム建設による水没。園芸用の採集。
- 備考 : 石垣市自然環境保全条例保全種(2015年)。竹富町希少野生動植物種(2017年)。
- 文献 : 島袋敬一, 1973. 琉球列島におけるシダ植物の分布(1). 沖縄生物学会誌, 10(12): 37-42.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・豊見山元*・横田昌嗣(追補)

〈情報不足 (DD)〉

- 和名 : **アツイタ**
- 分類 : ツルキジノオ科 (PPG科名: オシダ科)
- 学名 : *Elaphoglossum yoshinagae* (Yatabe) Makino
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴 : 常緑の多年草。根茎は横走し、葉を密につける。葉はやや2型となり、葉身は単葉で、長さ10~30 cm、幅2~4.5 cm、葉柄は長さ2~8 cm、鱗片は長卵形。孢子嚢群は孢子葉の裏に一面につく。
- 分布域(県外) : 本州(八丈島、紀伊半島)、四国(高知県)、九州(鹿児島県)、奄美大島、徳之島、台湾、中国南部、インドシナ。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島。
- 生育環境 : 山林中のやや陰湿な樹上か岩上に生える。
- 生育状況 : 近年はまったく確認されておらず、国内の標本庫でも証拠標本を確認することができなかった。
- 減少の要因 : もともと自生地と個体数が限られている。森林の伐採。園芸用の採集。
- 備考 : 奄美諸島では雲霧帯に生える。沖縄島ものは、オキナワアツイタ *E. callifolium* と混同されていた可能性がある。倉田・中池(1979)や海老原(2017)でも沖縄県からアツイタの標本は引用されていない。石垣島のものも含めて、標本に基づいて検討する必要がある。
- 文献 : 海老原淳, 2017. 日本産シダ植物標本図鑑Ⅱ. 学研, 507pp.
倉田 悟・中池敏之, 1979. 日本のシダ植物図鑑 第1巻. 東京大学出版会, 538-541.
- 執筆者名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

- 和名 : **ホソバシケチシダ**
- 分類 : メシダ科 (PPG科名: メシダ科)
- 学名 : *Cornopteris banajaoensis* (C. Chr.) K. Iwats. et Price

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I B 類 (EN)

形態の特徴： 常緑の多年草。根茎は斜上し、数枚の葉を叢生する。葉は3回羽状、草質、広楕円形～三角状卵形、長さ60 cmになり、羽軸と小羽軸は無毛。孢子嚢群は中肋近くにつき、円形、包膜を欠く。

分布域(県外)： 屋久島、種子島、小笠原(南硫黄島)、台湾、フィリピン、ニューギニア。

県内の分布： 沖縄島北部。

生育環境： 山地の林床に生える。

生育状況： 初島・天野(1994)により、沖縄県から初めて報告されたが、報告された自生地周辺はほとんど米軍演習地であり、調査ができない状況にある。倉田・中池(1990)では沖縄県の標本は引用されていない。現状は不明。

減少の要因： もともと自生地と個体数が限られている。

備考： 国内希少野生動植物種に指定されており、採集や譲渡などは法律で禁じられている。国内希少野生動植物(2016年)。

文献： 初島住彦・天野鉄夫, 1994. “増補訂正琉球植物目録”, 沖縄生物学会, 西原町, 12.
倉田 悟・中池敏之, 1990. 日本のシダ植物図鑑, 第6巻. 東京大学出版会, 680-683.

執筆者名： 横田昌嗣

和名： デンジソウ

分類： デンジソウ科 (PPG科名： デンジソウ科)

学名： *Marsilea quadrifolia* L.

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴： 夏緑性の水生植物。根茎は泥の中を長く這い、疎らに葉をつける。葉は2型となり、栄養葉の葉柄は長さ20 cmになり、羽片は4個、長さ幅は1~2 cm、倒卵状扇形で、四つ葉のクローバー状を呈し、孢子嚢果は卵形、2~3個ずつ集まり、共通の果柄は葉柄の基部から1 cm程度上方からでる。孢子嚢果の中には、大孢子嚢と小孢子嚢をつける。

分布域(県外)： 北海道、本州、四国、九州、トカラ列島、奄美大島、朝鮮、中国、ロシア、インドシナ、ヨーロッパ、アメリカ。

県内の分布： 伊是名島、西表島。

生育環境： 水田やため池の水中に生える。

生育状況： 国内の主要な標本庫に納められている標本では、孢子嚢果をつけた明らかに本種と同定される標本は得られなかったため、現状不明。倉田・中池(1987)でも沖縄県産の標本は引用されていない。デンジソウと同定された1800年代末以降の多くの標本は、実際に検討したところ、本種に近縁なナンゴクデンジソウ *M. crenata* Presl と考えられるため、ナンゴクデンジソウが本種と誤認されている可能性が高い。

減少の要因： もともと自生地が限られている。湿地・池沼・水田の開発。

備考： ナンゴクデンジソウは、鹿児島県と沖縄県、東南アジアに広く分布し、本種とは果柄のつく位置が葉柄基部である点で区別される。竹富町希少野生動植物種(2017年)。IUCNカテゴリー： Least Concern (LC)。

文献： 倉田 悟・中池敏之, 1987. 日本のシダ植物図鑑, 第5巻. 東京大学出版会, 778-782.

執筆者名： 横田昌嗣

〈除 外〉

- 和 名 : オオアオガネシダ
- 分 類 : チャセンシダ科 (PPG 科名: チャセンシダ科)
- 学 名 : *Asplenium austrochinense* Ching
- カ テ ゴ リ ー : 除外 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形 態 の 特 徴 : 常緑の多年草。根茎は短く、葉を束生する。葉は長さ 30~50 cm。アオガネシダ *A. wilfordii* に似るが、葉は 2 回羽状複葉で、葉質が厚く、最終裂片は幅広く、数脈がある。
- 分 布 域 (県 外) : 台湾、中国南部。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島北部。
- 生 育 環 境 : 山地の岩上や樹上に生える。
- 生 育 状 況 : かつて 1 度記録されただけで、近年はまったく確認されていない。
- 減 少 の 要 因 : もともと自生地と個体数が限られている。
- 備 考 : 沖縄島北部で採集された標本は、アオガネシダの範囲内であったという見解が公表されたので (海老原, 2016)、除外する。
- 文 献 : 海老原淳, 2016. 日本産シダ植物標本図鑑 I. 学研, 475pp.
- 執 筆 者 名 : 横田昌嗣*・比嘉清文*・横田昌嗣(追補)

3. 5 蘚苔類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

カテゴリー 分類群	絶滅	野生 絶滅	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II類	準絶滅 危惧	絶滅のおそれ ある地域個体群	情報 不足	合 計	
			I A類	I B類						
初版 1996	0		0		0	54	—	15	69	
改訂第2版 2006	0	0	35	—	—	32	0	—	13	80
改訂第3版 2018	0		32		28	5	0	14	79	

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧 I 類、危急種は絶滅危惧 II 類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー一名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

蘚苔類のレッドデータカテゴリーの判定については、概ね環境省（2015）の基準に従った。国内では沖縄県のみにも分布する種については、環境省（2015）のカテゴリーに合わせているが、沖縄県以外にも分布する種については県内の生育状況から判断しており、環境省（2015）とは異なるカテゴリーとした種もある。

蘚苔類掲載種の解説では、各カテゴリーごとに、蘚類、苔類、ツノゴケ類別に Frey & Stech（2009）の分類体系に従って種を掲載した。蘚類の学名と和名は主に Suzuki（2016）に従った。苔類・ツノゴケ類については、学名は主に Söderström et al.（2016）に、和名は片桐・古木（2012）に従った。

(2) 本改訂で明らかになったこと

前回の 2006 年版と比較すると、アミバハウオウゴケ、イワノコギリゴケ、オオカタシロゴケ、クジャクゴケ、シナクジャクゴケ、タカサゴイチイゴケモドキ、チャイロハウオウゴケモドキ、ハセガワカタシロゴケ、ヒモヨウジョウゴケ、ホコバカタシロゴケ、ホソバハシボソゴケ、ミナミハウオウゴケの 12 種を 2018 年版では削除した。これらの種は、近年の調査で比較的高頻度で確認されたために除外したものである。

一方、2018 年版では新たに 11 種を追加した。これらのうち、絶滅危惧 I 類として追加した種は、クロコゴケ、ヤクシマアミバゴケ、フチドリコゴケ、タカサゴハイヒモゴケ、サガリヤスデゴケ、キララヨウジョウゴケの 6 種である。また、絶滅危惧 II 類としては、サケバキハネゴケ、アマカワヒメゴヘイゴケ、オオシマヨウジョウゴケ、ヤマトケクサリゴケ、ツメクサリゴケの 5 種を追加した。その他、2006 年版からカテゴリーを変更している種は 17 種あるが、そのうち 13 種については現地調査の結果からランクを下げたものである。

(引用文献)

- Frey, W. & Stech, M. 2009. Marchantiophyta, Bryophyta, Anthocerotophyta. In Frey, W. (ed.), Syllabus of Plant Families, 13th ed. Part 3, Bryophytes and seedless Vascular plants: 9-263. Gebrüder Borntraeger, Berlin.
- 環境省（編）. 2015. レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9, 植物 II. 580 pp. ぎょうせい, 東京, 27.
- 片桐知之・古木達郎. 2012. 日本産タイ類ツノゴケ類チェックリスト, 2012. 蘚苔類研究 10(7): 193-210.
- Söderström, L., Hagborg, A. & von Konrat, M. (eds.) 2016. World Checklist of Hornworts and Liverworts. PhytoKeys 59(1): 1-414, 59(2): 415-828.
- Suzuki, T. 2016. A revised new catalog of the mosses of Japan. Hattoria 7: 9-223.

執筆者 山口富美夫（広島大学・教授）

(3) 掲載種の解説

1) 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 和名 : コバノイクビゴケ
 分類 : キセルゴケ科 (蘚類)
 学名 : *Diphyscium perminutum* Takaki
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形態の特徴 : 茎は非常に短く葉を密につけ乾くと巻縮する。通常葉は線形で長さ 1.7~3.3 mm。雌包葉は小さく葉縁部は糸状に細裂する。孢子体は配偶体に比べると大きく卵形で柄がほとんどない。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、徳之島。
- 県内の分布 : 石垣島。
- 生育環境 : 林内の溪流沿いの湿岩上に生育する。
- 生育状況 : 山口 (1985) が石垣島から報告して以来、他の県内産地の報告はない。2003 年および 2016 年の現地調査で、山口 (1985) が報告した産地と同じ水系の谷部で本種を確認したが、個体群および個体数とも少なかった。
- 学術的価値 : 本種は日本の固有種であり、これまでに愛知県 (2ヶ所)、熊本県、高知県、徳之島、石垣島の計 6ヶ所でしか報告されておらず極めて希な種である。
- 減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。
- 文献 : 樋口正信, 2015. コバノイクビゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 27.
 Takaki, N., 1950. Notes on Japanese moss flora, 3. J. Jpn. Bot., 25: 185-192.
 山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコピア, 9: 243-264.
- 執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : クロコゴケ
 分類 : センボンウリゴケ科 (蘚類)
 学名 : *Luisierella barbula* (Schwägr.) Steere
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形態の特徴 : 植物体は小形、茎は直立し高さ 1~1.5 mm。葉は舌形で先は鈍頭、中肋は太いが葉先に届かず、乾くと強く巻縮する。
- 分布域 (県外) : 本州、四国、九州、中国、インドネシア、北~南米に広く分布。
- 県内の分布 : 沖縄島。
- 生育環境 : 石灰岩の岸壁上などに生育する。
- 生育状況 : 沖縄県内では首里城の城壁のみで確認されている。生育が確認された城壁は表面が黒っぽく変色した古い城壁で、フガゴケとともに群落を形成している。一方、近年修復された新しい城壁上では生育が確認されていない。
- 学術的価値 : 熱帯を中心に分布し日本を北限とする種であり、日本国内の生育地は少なく、琉球列島では沖縄島が唯一の生育地である。

減少の要因 : 人為的な影響を受けるとともに、自生地、個体数が限られている。

文献 : 樋口正信, 2015. クロコゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—
9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 58.
木口博史・藤田明嗣, 2007. 沖縄本島にもクロコゴケは産する. 蘚苔類研究, 9(5): 152.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ジャバシラガゴケ

分類 : シラガゴケ科 (蘚類)

学名 : *Leucobryum javense* (Brid.) Mitt.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形態の特徴 : 植物体は大形で乾くと白っぽくなる。葉は線形で長さ 18 mm に達し葉先の表面に小さな刺がある。

分布域(県外) : 奄美大島、台湾、中国、フィリピン、ヒマラヤ、インド、その他の熱帯アジアに分布。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い林内の林床の腐植土上に生育する。

生育状況 : 沖縄島、西表島の山頂域の林内、あるいは溪流沿いの斜面にクッション状の群落を形成している。
ただし生育地はごく限られ、個体数も少ない。

学術的価値 : 熱帯産の種であり琉球列島が分布の北限となっている。

減少の要因 : 森林伐採。

文献 : Iwatsuki, Z., 1977. Bryological miscellanies, XXIII-XXIV. J. Hattori Bot. Lab., 43: 357-364.

Yamaguchi, T., 1993. A revision of the genus *Leucobryum* (Musci) in Asia. J. Hattori Bot. Lab., 73: 1-123.

山口富美夫, 2015. ジャバシラガゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—
9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 53.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : フトスジカタシロゴケ

分類 : カタシロゴケ科 (蘚類)

学名 : *Calymperes crassinerve* (Mitt.) A. Jaeger

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 通常葉は舌形で長さは約 2 mm ほどになり乾くと強く巻縮し葉肩部付近は波をうつ。葉鞘部は透明になり透明細胞と他の葉身細胞との境界は明瞭ではぼ一直線。葉縁部にはテニオラが発達。無性芽をつける葉は極端に分化し無性芽形成部は腕状になる。

分布域(県外) : フィリピン、その他の熱帯アジア、メラネシア、ポリネシア、オーストラリア北部に広く分布。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 西表島ではマングローブ林内のヤエヤマヒルギの樹幹に着生。

生育状況 : 西表島のヒドリ川と仲間川のマングローブ林でのみ確認されているがいずれも個体数は少ない。

学術的価値 : 本種は熱帯域に広く分布する種であり台湾を越えて西表島がその北限となっている。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文 献 : 山口富美夫・中越信和・根平邦人・岩月善之助, 1990. 日本におけるマングローブ林内の着生蘚苔類フロラ. ヒコビア, 10: 403-407.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : ヤクシマアミゴケ

分 類 : カタシロゴケ科 (蘚類)

学 名 : *Syrrhopodon yakushimensis* Takaki & Z. Iwats.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 茎は直立し、長さ 1.2~2.0 mm。葉は狭披針形で、長さ 2.5~3.3 mm、縁は内側に巻き、葉身細胞には先が 2~4 個に分かれたパピラがある。

分 布 域 (県 外) : 屋久島。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、西表島。

生 育 環 境 : 林内の樹幹上に生育する。

生 育 状 況 : 2016 年に西表島で確認されたが、生育量は少ない。

学 術 的 価 値 : 日本の固有種で、屋久島、沖縄島および西表島のみ分布する。

減 少 の 要 因 : 自生地、個体数が限られている。

文 献 : 樋口正信, 2015. ヤクシマアミゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 90.
木口博史・藤田明嗣, 2006. 沖縄島と屋久島のヤクシマアミゴケ. 蘚苔類研究, 9(2): 64-65.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : フチドリコゴケ

分 類 : センボンゴケ科 (蘚類)

学 名 : *Pachyneuropsis miyagii* T. Yamag.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 茎は長さ 1~2 cm。葉は乾くと強く巻縮し、線状披針形で長さ 5~7 mm、縁は 2~3 細胞層となり、葉鞘部の大形で薄壁の細胞が縁に沿ってせり上がり、葉身細胞との境界が V 字形になる。

県 内 の 分 布 : 沖縄島。

生 育 環 境 : 明るい場所にある石灰岩の露頭に、小さくて密な塊状の群落を形成する。

生 育 状 況 : 沖縄島の 2 カ所で生育。1 カ所は遊歩道の近くで人為的な影響が危惧される。

学 術 的 価 値 : フチドリコゴケ属は世界に 2 種しかなく、本種は沖縄島の固有種であり、他の 1 種はフィリピンの固有種である。

減 少 の 要 因 : 人為的な影響を受けるとともに、自生地、個体数が限られている。

文 献 : Yamaguchi, T., 2006. *Pachyneuropsis miyagii* T. Yamag. (Pottiaceae), a new species from Okinawa Island, Japan. J. Hattori Bot. Lab. 100: 577-580.
山口富美夫, 2015. フチドリコゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 72.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : マルバツガゴケ

分類 : ホソバツガゴケ科 (蘚類)

学名 : *Distichophyllum obtusifolium* Thér.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 茎は長さ約 3 cm になり偏平に葉をつけ葉を含め幅約 4 mm。側葉は倒卵形あるいは楕円状舌形で長さ約 2.5 mm、葉の全周が 1~2 列の線形の細胞で縁取られる。

分布域(県外) : 九州、奄美大島、徳之島、沖永良部島。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 山頂部あるいは溪流沿いの空中湿度の高い林内の湿岩あるいは朽木上に生育する。

生育状況 : 沖縄島からは Shin (1962) が、西表島からは高木・成田 (1969) が報告しているがそれ以後記録はない。生育地も限られ個体数も少ないものと推定される。

学術的価値 : 九州南部から琉球列島に固有の種であり西表島が南限となる。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : 樋口正信, 2015. マルバツガゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 30.

Shin, T., 1962. Mosses of the Ryukyu Islands, II. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 11: 93-107, pls. 1, 2.

高木典雄・成田 務, 1969. 西表島蘚類植物短報. “はてるま森 (第二次八重山諸島自然科学調査団採集録)”, 愛知教育大学八重山諸島自然科学調査団, 40-43.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : タカサゴハイヒモゴケ

分類 : ハイヒモゴケ科 (蘚類)

学名 : *Meteoriopsis reclinata* (Müll. Hal.) M. Fleisch. var. *subreclinata* M. Fleisch.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 茎は這い不規則に分枝する。枝は葉をまるくつけて、ひも状となる。葉は長さ 2.0~2.5 mm、卵形の基部から糸状に漸尖し、葉の中部から先は乾湿いずれのときも強く背側に反り返るのが特徴である。葉縁には細かい歯があり、葉身細胞中央に 1 個の乳頭状突起がある。

分布域(県外) : 九州 (熊本県)、アジアの熱帯~亜熱帯。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 日当たりの良い石灰岩の露頭に生育する。

生育状況 : 沖縄島の 1 か所でのみ生育しているが、個体数は少ない。

学術的価値 : 国内での生育地は少なく、沖縄島は琉球列島で唯一の生育地である。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : Noguchi, A., 1976. A taxonomic revision of the family Meteoriaceae of Asia. J. Hattori Bot. Lab., 41: 231-357.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : イボミスジャバネゴケ

分類 : コモチイトゴケ科 (蘚類)

学名 : *Clastobryum cuculligerum* (Sande Lac.) Tixier

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 茎は這い不規則に羽状に分枝する。枝は長さ約 8 mm でゆるく葉をつけ、しばしば枝先に微少な突起をもつ糸状の無性芽をつける。葉は卵形の基部からしだいに細くなって皮針形、長さ約 1.2 mm、葉縁上部に鋭い鋸歯があり翼部には褐色の大形の細胞が 4~5 個並ぶ。葉身細胞中央に 1 個の乳頭状突起がある。

分布域(県外) : フィリピン、ベトナム、マレー半島、スリランカ、スマトラ、ジャワ、ニューギニア、ニューヘブリデス、フィジー。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い林内の樹幹上に着生する。

生育状況 : Iwatsuki (1978) による与那覇岳からの報告の他には、西表島の数か所で確認されただけである。産地、個体数とも少ない。

学術的価値 : 沖縄島が分布の北限である。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : Iwatsuki, Z., 1978. Bryological Miscellanies, XXV. Some interesting species of mosses from the Ryukyu Archipelago. J. Hattori Bot. Lab., 44: 555-561. (*Clastobryella cuculligera* として)

山口富美夫, 2015. イボミスジャバネゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 20.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ランヨウイボゴケ

分類 : コモチイトゴケ科 (蘚類)

学名 : *Taxithelium kerianum* (Broth.) Broth.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 茎は這い長さ 5 mm ほどの枝を密につける。葉は卵状皮針形で先は尖り、縁は平滑で内側に巻く。葉身細胞には 3~4 個の乳頭状突起が 1 列につくが目立たないこともある。

分布域(県外) : フィリピン、マレー半島、ジャワ、ニューギニア、オーストラリア。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い林内の樹幹や樹枝上に着生する。

生育状況 : 山頂部や溪流沿いの林内などに生育しているが個体数は極めて少ない。

学術的価値 : 西表島が分布の北限であり日本で唯一の産地である。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : 野口 彰, 1981. セン類落葉籠, 7. 蘚苔地衣雑報, 9: 66-67.

Noguchi, A., 1994. Illustrated Moss Flora of Japan 5. Hattori Bot. Lab., Nichinan, 1013-1253.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ヒメハシボソゴケ

分類 : ナガハシゴケ科 (蘚類)

学名 : *Taxithelium lindbergii* (A. Jaeger) Renaud & Cardot [syn. *Taxithelium parvulum* (Broth. & Paris) Broth.]

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 葉は卵状皮針形で先はしだいに細くなり先端は尖る。葉縁部に小さな鋸歯がある。葉身細胞には 3~5 個の乳頭状突起が 1 列に並ぶがときに目立たない。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 林内の湿った岩や朽木あるいは樹幹上に生育する。

生育状況 : 沢沿いの林内の所々に生育しているが個体数は少ない。

学術的価値 : 台湾および八重山諸島のみ分布する種である。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

備考 : 本種のタイプロカリティーは四国の剣山とされているが、Seki (1968) によれば台湾の産地の誤記載の可能性が大きい。

文献 : Noguchi, A., 1994. Illustrated Moss Flora of Japan 5. Hattori Bot. Lab., Nichinan, 1013-1253. (*Taxithelium parvulum* として)

Seki, T., 1968. A revision of the family Sematophyllaceae of Japan with special references to a statistical demarcation of the family. J. Sci. Hiroshima Univ. ser. b, div. 2, 12: 1-80. (*Taxithelium parvulum* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : シマフデノホゴケ

分類 : ナガハシゴケ科 (蘚類)

学名 : *Acroporium secundum* (Reinw. & Hornsch.) M. Fleisch.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類(VU)

形態の特徴 : 小形でほふくする茎から 5~10 mm の枝を上方に出す。葉は内曲し翼細胞が分化し大形の方形~矩形の細胞が並ぶ。蒴柄の上部がざらつく。

分布域(県外) : 屋久島、奄美大島、徳之島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 山頂部の湿度の高い林内で樹皮または朽木上に生育する。

生育状況 : これまでに沖縄島の 2 ヲ所から数点の標本が採取された記録がある。しかし、ここ 25 年以内では確認されていない。分布域に限られ個体数もごく少ないものと推定される。

学術的価値 : 本種が属する *Acroporium* (フデノホゴケ属) は南方系のもので日本では本種のみが知られている。

減少の要因 : 森林伐採および林道工事。

文献 : 有川智己, 2015. シマフデノホゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 149.

Seki, T., 1968. A revision of the family Sematophyllaceae of Japan with special references to a statistical demarcation of the family. J. Sci. Hiroshima Univ. ser. b, div. 2, 12: 1-80. (*Acroporium suzukii* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : マムシゴケ

分類 : ナガハシゴケ科 (藓類)

学名 : *Meiothecium microcarpum* (Hook.) Mitt.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 茎は這いまばらに枝をつける。枝は長さ約 6 mm で偏平に葉をつける。葉は狭卵形で縁はほとんど全辺、中肋を欠く。葉身細胞は菱形で平滑、翼部の細胞は長方形で明瞭に分化する。胞子体は内さく歯を欠く。

分布域(県外) : 本州、九州、台湾、フィリピン、その他の熱帯アジア、太平洋諸島に分布する。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 山地の樹幹上あるいは樹枝上に着生する。

生育状況 : 沖縄島では 1 ヶ所のみから知られ他の記録はない。

学術的価値 : アジアの熱帯を中心に分布する種であり日本の南部に希に産し沖縄島が琉球列島内では唯一の産地である。

減少の要因 : 森林伐採。

文献 : 土永浩史・山本誠二, 2013. 紀伊半島のマムシゴケ. 藓苔類研究, 10(10): 355-356.

樋口正信, 2015. マムシゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 61.

山口富美夫, 1983. マムシゴケ沖縄島でも見つかる. 日本藓苔類学会会報, 3: 122-123.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : リュウキュウカギホソエゴケ

分類 : ナガハシゴケ科 (藓類)

学名 : *Radulina borbonica* (Bél.) W. R. Buck [syn. *Radulina elegantissima* (M. Fleisch.) W. R. Buck & B. C. Tan]

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 茎は這い枝は長さ 3~5 mm。葉は卵状皮針形から皮針形で長さ約 1 mm、縁に小さな鋸歯がある。葉身細胞は線状菱形から歪線形で 3~5 個の明瞭な乳頭状突起が 1 列に並んでつく。葉の翼細胞は分化し大形。

分布域(県外) : フィリピン、スマトラ、ジャワ、ミクロネシア。

県内の分布 : 石垣島、西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い林内の朽木上あるいは樹幹上に着生する。

生育状況 : 石垣島、西表島の林内を流れる溪流沿いに希に生育する。

学術的価値 : 八重山諸島が分布の北限であり、日本で唯一の産地である。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : 樋口正信, 2015. リュウキュウカギホソエゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 80. (*Radulina elegantissima*

として)

Seki, T., 1968. A revision of the family Sematophyllaceae of Japan with special references to a statistical demarcation of the family. J. Sci. Hiroshima Univ. ser. b, div. 2, 12: 1-80. (*Trichosteleum elegantissimum* として)

山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264. (*Trichosteleum elegantissimum* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ミミヒラゴケ

分類 : ヒムロゴケ科 (蘚類)

学名 : *Calypothecium recurvulum* (Broth.) Broth.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態の特徴 : 二次茎は長さ 30 cm に達し、やや羽状に長さ 3 cm ほどの枝をつける。葉は楕円状卵形で長さ 3~3.5 cm、先は急に尖り基部は耳状になる。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島、台湾、フィリピン、ジャワ、ニューギニア、ポリネシア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 空中湿度の高い山頂部の林内の樹幹上あるいは岩上に生育する。

生育状況 : 沖縄島では 1930 年代に嘉津宇岳で採取された記録があるがその後確認されていなかった。その後の調査で名護市 (1989) と大宜味村 (1996) のいずれも石灰岩地で確認された。本種の沖縄県内での生育地は限られ、個体数も極めて少ないものと考えられる。

学術的価値 : 熱帯系の種であり琉球列島を分布の北限とする。

減少の要因 : 森林伐採、石灰岩の採掘。

文献 : 有川智己, 2015. ミミヒラゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 156.

Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands, I. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 10: 47-64. (*Calypothecium japonicum* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ハネエビスゴケ

分類 : ヒラゴケ科 (蘚類)

学名 : *Himantocladium plumula* (Nees) M. Fleisch.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : エビスゴケに似るが本種は雌雄同株 (synoicous) である。二次茎は強く基物に対して垂直になり高さ約 5 cm、規則的に枝を出し全体として偏平な樹状となる。葉は茎に偏平につき舌形で長さ 2.0~2.2 mm、ときに弱い横しわを生じる。枝先の葉は 4 列に扁平につく傾向が大きいこと、葉基部の葉身細胞に孔がないことでもエビスゴケと異なる。

分布域(県外) : 中国、フィリピン、その他熱帯アジア、ポリネシア、オーストラリア北部に分布。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い林内の樹幹上に生育する。

- 生育状況 : 沖縄島と西表島の山地の溪流沿いおよび山頂域で数カ所の記録があるが個体数は極めて少ないものと推定される。
- 学術的価値 : 沖縄島が分布の北限となる。
- 減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : Noguchi, A., 1950. A review of the Leucodontineae and Neckerineae of Japan, Loo Choo and of Formosa, III. J. Hattori Bot. Lab., 4: 1-48.
 山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264.
 Enroth, J., 1992. Notes on the Neckeraceae (Musci), 13. Taxonomy of the genus *Himantocladium*. Ann. Bot. Fennici, 29: 79-88.

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : セイナンヒラゴケ
- 分類 : ヒラゴケ科 (蘚類)
- 学名 : *Neckeropsis calcicola* Nog.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 茎は長く伸び、ときに 20 cm 以上に達する。分枝は少なく茎や枝は葉を 4 列に極めて偏平につけ葉を含め幅 5~6 mm。葉は舌形で葉先は切頭、著しい横しわがある。
- 分布域(県外) : 本州、四国、九州、徳之島。
- 県内の分布 : 沖縄島、与那国島。
- 生育環境 : 低地から山地の石灰岩上、まれに樹幹上に生育する。
- 生育状況 : 沖縄島では御嶽林内の石灰岩の岩壁あるいは石垣上で見られることが多い。与那国島では 1 ヶ所のみから報告されている。
- 学術的価値 : 日本固有であり好石灰岩性の特殊な種である。
- 減少の要因 : 森林伐採やその他の開発行為。

- 文献 : Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands, I. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 10: 47-64. (*Neckeropsis lepinea* として)

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : エビスゴケ
- 分類 : ヒラゴケ科 (蘚類)
- 学名 : *Neckeropsis cyclophylla* (Müll. Hal.) S. Olsson, Enroth & D. Quandt [syn. *Himantocladium cyclophyllum* (Müll. Hal.) M. Fleisch.]
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 形態の特徴 : 雌雄異株。二次茎は長さ約 8 cm に達し、ときにさらに大形となり基物に接するかまたは懸垂する。不規則かつまばらに水平に枝を出す。枝先はしばしば鞭状になる。葉は茎に偏平につき舌形で長さ約 2.4 mm、しわが顕著に見られときに規則的な横しわを生じる。葉基部の細胞には明瞭な孔がある。
- 分布域(県外) : 台湾、中国、フィリピン、その他熱帯アジア、メラネシア、ポリネシア、オーストラリア北部、セイシェル諸島に分布。

県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 空中湿度の高い林内を流れる溪流沿いの樹幹上に生育する。
生育状況 : 西表島の数カ所から記録があるが個体数は極めて少ないものと推定される。
学術的価値 : 西表島が本種の分布の北限であり日本で唯一の産地である。
減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : Horikawa, Y., 1934. *Symbolae florae bryophytae orientali-asiae*, III. Bot. Mag. Tokyo, 48: 708-719, 761-764. (*Himantocladium loriforme* として)
Enroth, J., 1992. Notes on the Neckeraceae (Musci), 13. Taxonomy of the genus *Himantocladium*. Ann. Bot. Fennici, 29: 79-88.
山口富美夫, 2015. エビスゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 44. (*Himantocladium cyclophyllum* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : マメハネゴケ (ヒメハネゴケ)

分類 : ヒラゴケ科 (蘚類)

学名 : *Pinnatella ambigua* (Bosch. & Sande Lac.) M. Fleisch.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 植物体は小形で二次茎は高さ約 1~2 cm、成熟した個体ではわずかに中心束が発達する。下部の 5 mm ほどは柄となり上部はよく分枝する。枝は長さ約 5 mm で葉を扁平につける。葉は乾くとわずかにしわがより中肋は強く葉の先端付近まで達する。葉細胞の角に小さなパピラが見られることもある。

分布域(県外) : 台湾、中国、ブータン、ミャンマー、タイ、ベトナム、フィリピン、マレーシア、インドネシア。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 熱帯域では樹幹上に生育するが、沖縄島では石灰岩上に生育する。

生育状況 : 本種は最初に Iwatsuki (1978) によって首里末吉から報告された。その後 1989 年に宮城によって同じく首里末吉で再確認され、また 1996、2004 年に大宜味村の石灰岩地でも筆者によって確認された。これまでのところ、この 2 か所以外では見つかっていない。

学術的価値 : 分布の北限にあたり、世界的に見ても極めて希な種である。

減少の要因 : 森林伐採やその他の開発行為。

文献 : Enroth, J., 1994. A taxonomic monograph of the genus *Pinnatella* (Neckeraceae, Bryopsida). Acta Bot. Fenn., 151: 1-90.

Iwatsuki, Z., 1978. Bryological miscellanies, XXV. J. Hattori Bot. Lab., 44: 555-561. (*Pinnatella pusilla* として)

山口富美夫, 2015. マメハネゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 74.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : モミノキゴケ

分類 : スズゴケ科 (蘚類)

学名 : *Taiwanobryum anacamptolepis* (Müll. Hal.) S. Olsson, Enroth & D. Quandt [syn. *Pinnatella anacamptolepis* (Müll. Hal.) Broth.]

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態の特徴 : 二次茎は直立し高さ 25~30 mm、上部はやや平面的に分枝し下部は枝をつけずに柄のようになる。枝には小形の葉を密につけ植物体全体としてきれいな樹状になる。中肋は葉の中部付近で消失する。
- 分布域(県外) : 九州、四国、台湾、フィリピン、スリランカ、ジャワ、スマトラ、ニューギニア。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島。
- 生育環境 : 林内の溪流沿いの樹幹上あるいは岩上に生育する。
- 生育状況 : 沖縄島、石垣島の数カ所で確認されているが個体数は少ない。
- 学術的価値 : 熱帯産の種で九州と四国の南部にまで分布するがいずれも極めて希であり、日本での分布の中心は琉球列島と考えられる。
- 減少の要因 : 森林の伐採。

- 文献 : 有川智己, 2015. モミノキゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 192. (*Pinnatella anacamptolepis* として)
- Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands, I. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 10: 47-64. (*Porotrichum gracilescens* として)
- 山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264. (*Porotrichum gracilescens* として)

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : ウキゴケ (カズノゴケ)
- 分類 : ウキゴケ科 (苔類)
- 学名 : *Riccia fluitans* L.
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 植物体は幅の狭い葉状で白緑色。長さ 1~5 cm、幅 0.5~1.0 mm で二又状に分枝する。
- 分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、奄美大島、徳之島、世界各地。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島。
- 生育環境 : 水田、小川、溜め池などのきれいな水の水中、あるいは水辺の土上に生育する。
- 生育状況 : Shin (1970) による沖縄島国頭村、石垣島野底の報告以来、県内からの報告はない。水質汚濁などにより、全国的に生育適地が少なくなっている。
- 減少の要因 : 水質汚濁、農薬散布、水路の改修。

- 文献 : Shin, T., 1970. Flora of Hepaticae in the Ryukyu Archipelago II. Rep. Sci. Kagoshima Univ., 19: 29-50.

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : イチヨウウキゴケ (イチヨウウキクサ、イチヨウモ)
- 分類 : ウキゴケ科 (苔類)
- 学名 : *Ricciocarpos natans* (L.) Corda
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 二又状に分枝し、イチヨウの葉の形に似た葉状体となる。葉状体は緑色でときに赤みを帯び、長さ 1~1.5 cm、幅 4~8 mm。腹鱗片は紫色でリボン状。

分布域(県外) : 北海道、本州、四国、九州、奄美大島、世界各地。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
生育環境 : 水田、小川、溜め池などのきれいな水に浮いて生育し、水がなくなると土上に生育する。
生育状況 : ウキゴケの場合と同様に生育に適する水田や溜め池が減少し、全国的に激減している。沖縄県内でも残された生育地はごくわずかである。
減少の要因 : 水質汚濁、農薬散布。

文献 : 古木達郎, 2015. イチョウウキゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 252.
山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : **イリオモテウロコゼニゴケ**

分類 : ウロコゼニゴケ科 (苔類)

学名 : *Fossombronia myrioides* Inoue

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 植物体は長さ 5~9 mm、幅 3.5~4.2 mm、ほとんど分枝せずかたまって小さなマットを形成する。葉は正方形から長方形、長さ 2.0~2.4 mm、波をうつ。雌雄同株で生殖器官は茎の背面に散在する。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 溪流沿いの岩上に生育する。

生育状況 : 西表島のタイプロカリティーでは数か所で小さな群落が見られるが、それ以外からの報告はない。

学術的価値 : 西表島の固有種である。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : 古木達郎, 2015. イリオモテウロコゼニゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 114.
Inoue, H., 1973. The genus *Fossombronia* Raddi in Japan. *J. Hattori Bot. Lab.*, 37: 293-297.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : **ヤエヤマスギバゴケ**

分類 : ムチゴケ科 (苔類)

学名 : *Neolepidozia mamillosa* (Schiffn.) E. D. Cooper (syn. *Lepidozia mamillosa* Schiffn.)

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 植物体は小形で茎は葉を含め幅約 0.7 mm。葉は茎からほぼ水平に広がり先は 4 裂する。葉細胞は丸みをおび縁部の細胞が不規則に突き出る。

分布域(県外) : ニューギニア。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : マングローブ林内の土上にうすいカーペット状の群落を形成する。

生育状況 : 西表島のマングローブ林の陸側林縁部に生育しているが個体数は少ない。

学 術 的 価 値 : マングローブ林に特有な種と考えられ世界的にも記録は少なく西表島は分布の北限となっている。
 減 少 の 要 因 : 自生地、個体数が限られている。

文 献 : 古木達郎, 2015. ヤエヤマスギバゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 124. (*Lepidozia mamillosa* として)
 山口富美夫・中越信和・根平邦人, 1987. マングローブ林内の土上藓苔類. 日本藓苔類学会会報, 4: 137-140.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : テララゴケ

分 類 : ムチゴケ科 (苔類)

学 名 : *Telaranea neesii* (Lindenb.) Fulford [syn. *Telaranea iriomotensis* T. Yamag. & Mizut.]

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 植物体は小形で茎は長さ 1~2 cm、密に 2~3 回羽状に分枝し柔らかいクッション状の群落を形成する。葉は長さ 0.4~0.6 mm、基部近くまで 4~6 裂し裂片は 1 細胞列。

分 布 域 (県 外) : 中国、東南アジア。

県 内 の 分 布 : 西表島。

生 育 環 境 : 山地を流れる溪流沿いの湿岩上に生育する。

生 育 状 況 : 生育地は限られ個体数も少ない。

学 術 的 価 値 : テララゴケ属は熱帯を中心に分布する苔類で、本種は西表島の固有種とされてきたが、現在は熱帯アジアに分布する種の同物異名とされている。

減 少 の 要 因 : 自生地、個体数が限られている。

文 献 : Enge, J. J. & Merrill, L. S., 2004. Austral Hepaticae. 35. A taxonomical and phylogenetic study of *Telaranea* (Lepidoziaceae), with a monograph of the genus in temperate Australasia and commentary on extra-Australasian taxa. *Fieldiana Bot.*, 44: 1-261.

古木達郎, 2015. テララゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 146.

Yamaguchi, T., 1983. *Telaranea iriomotensis* Yamaguchi et Mizutani (Hepaticae), a new species from Japan. *Misc. Bryol. Lichenol.*, 9: 161-163.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : アマノウロコゴケ

分 類 : ウロコゴケ科 (苔類)

学 名 : *Heteroscyphus aselliformis* (Reinw., Blume & Nees) Schiffn.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類(VU)

形 態 の 特 徴 : 茎は這い、長さ 2~3 cm、葉を含めて幅 2~3 mm、分枝は少ない。葉は瓦状に重なって基物から立ち上がるように広がり、半円形で先が 2 裂し刺状の 2 歯となる。

分 布 域 (県 外) : 奄美大島、徳之島、東南アジア、ニューギニア、オセアニア。

県 内 の 分 布 : 沖縄島。

生 育 環 境 : 空中湿度の高い常緑樹林内の樹幹上に生育する。

生育状況 : 沖縄島では溪流沿いで自然度の高いシイ林内に生育しているが、極めて少ない。
減少の要因 : 森林伐採。

文献 : 古木達郎, 2015. アマノウロコゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 230.
井上 浩, 1976. 続・日本産苔類図鑑. 築地書館, 東京, 193pp.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : トゲバウロコゴケ

分類 : ウロコゴケ科 (苔類)

学名 : *Heteroscyphus wettsteinii* (Schiffn.) Schiffn.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 植物体は長さ 1~2.5 cm、幅 2~4 mm。葉は長三角形で重なってつき先端に 3~6 細胞からなる長い刺状の歯を 3 本もつ。

分布域(県外) : ジャワ、ニューギニア。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 山地の溪流沿いの湿岩上に他の蘚苔類と混生して生育する。

生育状況 : 西表島の 2 ヶ所から報告されているが他の生育地は知られておらず個体数も少ない。

学術的価値 : 西表島が分布の北限であり世界的にみても分布が限られている希産種である。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : 古木達郎, 1987. 西表島産苔類数種について. ヒコビア, 10: 73-75.

古木達郎, 2015. トゲバウロコゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 119.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : サガリヤスデゴケ

分類 : ヤスデゴケ科 (苔類)

学名 : *Frullania trichodes* Mitt.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 植物体は黄緑~赤褐色で、樹幹や枝から垂れ下がって生育する。茎は長さ 8 cm に達し、まばらに分枝する。葉の背片の基部に 5~10 個の眼点細胞が集まり、腹片は棍棒状。

分布域(県外) : 高知県、宮崎県、熱帯アジア~太平洋諸島に広く分布。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 本土では常緑広葉樹林内の渓谷中で、樹幹や枝から垂れ下がるように生育する。

生育状況 : 県内では、西表島の数か所のマングローブ林内の樹幹上で確認されている。

学術的価値 : 琉球列島内では西表島でのみ確認されている。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文 献 : 長谷川次郎, 2015. サガリヤスデゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 116.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : キララヨウジョウゴケ

分 類 : クサリゴケ科 (苔類)

学 名 : *Cololejeunea ceratilobula* (P. C. Chen) R. M. Schust.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 植物体は長さ 8 mm ほどになり、生葉上に密着する。葉は円頭で、背片の縁は波上に曲がった透明細胞に縁取られる。腹片は小さくて三角状、第 1 歯が毛状に伸び、第 2 歯を欠く。

分 布 域 (県 外) : 九州 (宮崎県, 屋久島)、奄美大島、台湾～熱帯アジアに広く分布。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 林内の溪流沿いの樹木やシダの生葉上に着生する。

生 育 状 況 : これまでに県内の 3 島で確認されているが、生育地は限られている。

学 術 的 価 値 : 宮崎県を分布の南限とする種で、葉縁細胞の形態がヒメクサリゴケ属の中で特異的である。

減 少 の 要 因 : 森林伐採。

文 献 : 長谷川次郎, 2015. キララヨウジョウゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 107.

Zhu, R.-L. & So, M. L., 2001. Epiphyllous liverworts of China. *Nova Hedwigia Beiheft*, 121: 1-418.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : マルバサンカクゴケ

分 類 : クサリゴケ科 (苔類)

学 名 : *Drepanolejeunea obtusifolia* T. Yamag.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 茎は長さ 3~5 mm、幅は葉を含め 0.4~0.6 mm。葉は卵形から卵状三角形、長さ 0.2~0.3 mm、葉先はほぼ鈍頭。腹葉はくさび形で 1/2~2/3 まで 2 裂する。雌包葉の先は円頭。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島。

生 育 環 境 : 山地林内の樹幹あるいは朽木上に生育する。

生 育 状 況 : 石垣島と沖縄島の 2 カ所のみで知られている。

学 術 的 価 値 : 石垣島と沖縄島のみで生育する沖縄県の固有種である。

減 少 の 要 因 : 自生地、個体数が限られている。

文 献 : 古木達郎, 2015. マルバサンカクゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 112.

古木達郎・藤田明嗣, 2006. マルバサンカクゴケ沖縄島で新たに見つかる. *藓苔類研究*, 9(3): 95-96.

Yamaguchi, T., 1984. *Drepanolejeunea obtusifolia* sp. nov. and *Euosmolejeunea fuscobrunnea* Horik. from the Yaeyama Islands, Japan. *J. Jpn. Bot.*, 59: 332-336.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ゴマダラクサリゴケ

分類 : クサリゴケ科 (苔類)

学名 : *Stictolejeunea iwatsukii* Mizut.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 茎は長さ 10~15 mm、幅は葉を含め 1.1~1.5 mm。葉は卵形で開出し長さ 0.5~0.75 mm。腹葉はほぼ円形で先は裂けない。側葉および腹葉に油細胞が散在する。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 林内の岩上に生育する。

生育状況 : Mizutani (1978) に西表島から新種記載された。1997 年に筆者らがそのタイプロカリティーで再確認したが、それ以外からの報告はない。

学術的価値 : 西表島の固有種である。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : 古木達郎, 2015. ゴマダラクサリゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 145.

Mizutani, M., 1978. Lejeuneaceae from Ishigaki and Iriomote Islands of Ryukyu Archipelago. J. Hattori Bot. Lab., 44: 121-136.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : オガサワラキブリツノゴケ

分類 : キノボリツノゴケ科 (ツノゴケ類)

学名 : *Dendroceros tubercularis* S. Hatt.

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 植物体は葉状で長さ 2~3 cm、中央部には中肋が明瞭に分化する。分枝が多く枝の翼部は内側に巻き波状に縮れる。胞子体はつもの状で、長さ約 1.2 cm、さく壁細胞は長方形。

分布域(県外) : 小笠原諸島 (母島)、台湾。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 空中湿度の高い林内の樹幹上または岩上に生育する。

生育状況 : 各島の数カ所の溪谷で確認されているが生育地は限られている。

学術的価値 : 台湾、琉球列島および小笠原諸島のみ分布する種である。

減少の要因 : ダム建設および森林伐採。

文献 : Hasegawa, J., 1980. Taxonomical studies on Asian Anthocerotae, II. Some Asian species of *Dendroceros*. J. Hattori Bot. Lab., 47: 287-309.

長谷川二郎, 2015. オガサワラキブリツノゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物 II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 148.

執筆者名 : 山口富美夫

2) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 和名 : シラガゴケモドキ
 分類 : カタシロゴケ科 (藓類)
 学名 : *Exostratum blumii* (Nees ex Hampe) L. T. Ellis
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)
- 形態の特徴 : 植物体は白緑色、葉は線形で固く乾いてもほとんど縮れず長さ約 3.5 mm、表面に小さな刺状の突起がある。
- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン、インドネシア、太平洋諸島。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 空中湿度の高い林内の樹幹上に生育する。
- 生育状況 : 西表島では林内を流れる溪流沿いの所々で見られるが個体群数、個体数ともに少なく石垣島では山頂付近にわずかに見られる程度である。
- 学術的価値 : 本種が属するシラガゴケモドキ属は熱帯系のもので日本では本種のみが分布し、八重山諸島が本属の分布の北限となっている。
- 減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。
- 文献 : 有川智己, 2015. シラガゴケモドキ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 171.
 Horikawa, Y., 1935. *Symbolae florae bryophytae orientali-asiae*, IV. Bot. Mag. Tokyo, 49: 49-59, 96-98. (*Exodictyon blumii* として)
- 執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : ニセハブタエゴケ
 分類 : カタシロゴケ科 (藓類)
 学名 : *Leucophanes angustifolium* Renaud & Cardot
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)
- 形態の特徴 : 植物体は乾くと白くなりシラガゴケ属の藓類と似ているが葉はまっすぐで中肋があり葉の先端に無性芽をつける。
- 分布域(県外) : 小笠原諸島、台湾、フィリピン、その他の熱帯アジア、太平洋諸島、オーストラリア。
- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : 山地の溪流沿いの樹幹上に生育する。
- 生育状況 : シラガゴケモドキと同様な環境に生育し、西表島では島内の所々で認められるが個体数は少ない。
- 学術的価値 : 本種が属するシラガゴケモドキ属は熱帯系のもので日本では本種のみが小笠原諸島(父島)と西表島に分布する。
- 減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : 有川智己, 2015. ニセハブタエゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—. 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 182.
岩月善之助・木口博史, 1976. *Leucophanes octoblepharioides* Brid. は日本にも産する. 蘚苔地衣雑報, 7: 91-93. (*Leucophanes octoblepharioides* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : **イサワゴケ**

分類 : カタシロゴケ科 (蘚類)

学名 : *Syrrhopodon tosaensis* Cardot

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 植物体は白っぽい灰緑色で高さは 6~10 mm。葉は皮針形で 2~3 細胞列の透明な舷で縁どられ、葉基部は大形で透明な細胞からなり、葉先には大きな刺がある。

分布域(県外) : 本州、四国、九州、中国。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の樹幹上に生育する。

生育状況 : 自然度の高いシイ林内でわずかに見られ、個体群数、個体数ともに少ない。

学術的価値 : 日本列島での分布の南限にあたる。

減少の要因 : 森林伐採。

文献 : 有川智己, 2015. イサワゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—. 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 200.
Iwatsuki, Z., 1956. Bryological miscellanies, IV-VI. J. Hattori Bot. Lab., 17: 59-63.
山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : **ジャバハウオウゴケ**

分類 : ホウオウゴケ科 (蘚類)

学名 : *Fissidens javanicus* Dozy & Molke

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 植物体は葉を含め長さ 4.5~19.0 mm、葉腋節が明瞭に発達する。葉の縁は 2~3 細胞層となる。

分布域(県外) : 奄美大島、台湾、フィリピン、インド、ネパール、タイ、ミャンマー、ボルネオ、ジャワ、スマトラ。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地の溪流沿いの岩上あるいは土上に生育する。

生育状況 : 西表島では島内に広く見られるが石垣島、沖縄島では分布が限られている。

学術的価値 : 琉球列島 (奄美大島) が分布の北限となっている。

減少の要因 : 森林伐採。

文献 : Iwatsuki, Z. & T. Suzuki, 1977. *Fissidens* in the Ryukyu Islands, Japan. J. Hattori Bot. Lab., 43: 379-408.

Iwatsuki, Z. & T. Suzuki, 1982. A taxonomic revision of the Japanese species of *Fissidens* (Musci). J. Hattori Bot. Lab., 51: 329-508.

山口富美夫, 2015. ジャバホウオウゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 173.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : コイボホウオウゴケ

分類 : ホウオウゴケ科 (蘚類)

学名 : *Fissidens schwabei* Nog.

カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 植物体は葉を含め長さ 1.6~2.5 mm で葉腋節がやや発達する。葉は広皮針形、3~5 対で密につき葉身細胞は薄壁で大きく中央に 1 個の乳頭状突起がある。

分布域(県外) : 台湾。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 日陰の湿土上に生育する。

生育状況 : Iwatsuki & Suzuki (1977) によって西表島の 1 ヶ所からの報告があるがそれ以後確認されていない。

学術的価値 : 台湾および西表島のみで生育する希な種である。

減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : Iwatsuki, Z. & T. Suzuki, 1977. *Fissidens* in the Ryukyu Islands, Japan. J. Hattori Bot. Lab., 43: 379-408.

Iwatsuki, Z. & T. Suzuki, 1982. A taxonomic revision of the Japanese species of *Fissidens* (Musci). J. Hattori Bot. Lab., 51: 329-508.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : フガゴケ

分類 : センボンゴケ科 (蘚類)

学名 : *Gymnostomiella longinervis* Broth.

カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU)

形態の特徴 : 石灰岩上に生育する小形の蘚類。茎は高さ 2~6 mm、葉は倒卵形で長さ 0.8~1 mm、葉先は円く、中肋は葉頂にわずかに届かない。葉細胞にはまばらに乳頭状の突起がある。茎の頂端に楕円形の無性芽をつける。

分布域(県外) : 本州、九州、台湾、フィリピン、ミャンマー。

県内の分布 : 沖縄島。

生育環境 : 雨水が直接あたらないような石灰岩の岸壁あるいは石垣上に生育する。

生育状況 : 沖縄島では琉球石灰岩あるいはそれらで作られた石垣上に見られるが、雨水が直接あたらないような構造になっていること(オーバーハンクあるいはアーチ状)、適度な湿度があることなどの条件が整わないと生育できない。これまでに数カ所で確認されているが個体数は少ない。

学術的価値 : 石灰岩上に特有な蘚類であり生態学的にも興味深い種である。日本での産地はごく限られている。

減少の要因 : 自生地としては公園、墓地内の人工構造物も含まれており、それらの再開発によって減少、消滅する可能性がある。

- 文 献 : 有川智己, 2015. フガゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—
9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 179.
Iwatsuki, Z., 1978. Bryological miscellanies, XXV. Some interesting species of mosses from the Ryukyu
Archipelago. J. Hattori. Bot. Lab., 44: 555-561.
関 太郎・宮城朝章, 1980. フガゴケ(マルダイゴケ科, 蘚類)の沖縄における生態. ヒコビア, 8:
416-423.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : **キダチゴケ**
分 類 : キダチゴケ科 (蘚類)
学 名 : *Hypnodendron vitiense* Mitt.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

- 形 態 の 特 徴 : 茎は立ち上部に枝をやや密につけ、柄と葉を密につけた枝の部分が明瞭に分かれ全体として樹状となる。葉は長卵形で長さ約2.5 mm、中肋は1本で細く葉身細胞は線形。
分 布 域 (県 外) : 台湾、フィリピン、その他の熱帯アジア、メラネシア、ポリネシアに分布する。
県 内 の 分 布 : 沖縄島、西表島。
生 育 環 境 : 林内を流れる溪流沿いの湿岩上に生育する。
生 育 状 況 : 沖縄島では山頂付近の空中湿度が高い林内の沢沿い、自然林内の溪流沿いに見られるが生育地は限られている。西表島では浦内川水系の所々で生育しているが個体数は少ない。
学 術 的 価 値 : 本種が属するキダチゴケ科は熱帯アジアを中心に分布するものであり、日本では本種のみが知られ沖縄島が分布の北限となっている。
減 少 の 要 因 : ダム建設および森林伐採。

- 文 献 : 有川智己, 2015. キダチゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—
9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 181.
Shin, T., 1962. Mosses of the Ryukyu Islands, II. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 11: 93-107, pls. 1, 2.
(*Hypnodendron formosicum* として)
山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : **カクレゴケ**
分 類 : スジイタチゴケ科 (蘚類)
学 名 : *Garovaglia elegans* (Dozy & Molke.) Hampe ex Bosch & Sande Lac.
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

- 形 態 の 特 徴 : 植物体は美しい緑色で光沢がある。一次茎は短く二次茎は直立して長さ3~6 cm、ほとんど枝を出さず束状になる。葉は卵形で深くくぼみ縦しわが目立つ。胞子体は小さくて葉の間にかくれる。
分 布 域 (県 外) : 九州、奄美大島、徳之島、台湾、フィリピン、その他の熱帯アジアに分布。
県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
生 育 環 境 : 空中湿度の高い林内の樹幹上に着生する。

- 生育状況 : 西表島では山中の溪流沿いの所々で生育しているが沖縄島、石垣島ではおもに山頂部に限られ個体数も少ない。
- 学術的価値 : 熱帯系の種で九州南部を北限としている。本種が生育している環境では他の着生維管束植物も多く見られ空中湿度の高さの指標ともなる。
- 減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : 有川智己, 2015. カクレゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 177.
- Horikawa, Y., 1935. Symbolae florae bryophytae orientali-asiae, V. Bot. Mag. Tokyo, 49: 211-221, 260-263. (*Endotrichella fauriei* として)
- During, H. J., 1977. A taxonomical revision of the Garovaglioideae (Pterobryaceae, Musci). Bryophytorum Bibliotheca, 12: 1-244.

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : **キジノオゴケ**
- 分類 : クジャクゴケ科 (蘚類)
- 学名 : *Cyathophorum adiantum* (Griff.) Mitt.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧(NT)

- 形態の特徴 : 二次茎は長さ 4~5 cm、幅は葉を含め約 1 cm、まばらに極めて偏平に葉をつけ乾くと曲がる。側葉は狭卵形で先はしだいに細くなって尖り乾くと縮む。しばしば茎の先部の葉が小形になって細くなり糸状の無性芽を多量につける。
- 分布域(県外) : 本州、四国、九州、奄美大島、中国、台湾、東南アジアに広く分布。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山頂部や溪流沿いなどの空中湿度の高い林内の樹幹あるいは岩上に生育する。
- 生育状況 : 生育環境が限られ個体数は少ない。
- 学術的価値 : 熱帯に広く分布する種であるが日本での産地は限られている。
- 減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : 樋口正信, 2015. キジノオゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 252.
- Kruijer, H., 2002. Hypopterygiaceae of the world. Blumea, suppl., 13: 1-388.
- Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands, I. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 10: 47-64. (*Cyathophorella tonkinensis* として)

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : **フチナシツガゴケ**
- 分類 : ホソバツガゴケ科 (蘚類)
- 学名 : *Distichophyllum osterwaldii* M. Fleisch.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 形態の特徴 : マルバツガゴケに外見は似るがさらに大きく、茎は葉を含め幅 8 mm に達する。側葉は長い舌形。葉

縁部の線形の細胞は下部で4~5列となるが、葉の上部にいくにしたがって狭くなり中央部付近から上では消失する。

- 分布域(県外) : 台湾、フィリピン、ボルネオ、ジャワ。
県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 林内の溪流沿いの湿岩あるいは湿土上に生育する。
生育状況 : 西表島では所々で見られるが石垣島では個体数は少ない。
学術的価値 : 熱帯産の種であり石垣島が分布の北限となる。
減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : 有川智己, 2015. フチナシツガゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 166.
Shin, T., 1962. Mosses of the Ryukyu Islands, II. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 11: 93-107, pls. 1, 2.
山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264.

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : **サオヒメゴケ**
分類 : カサイボゴケ科 (蘚類)
学名 : *Callicostella papillata* (Mont.) Mitt.
カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU)

- 形態の特徴 : 茎は這い、やや羽状に分枝する。葉は舌形で葉先は広く尖り、葉縁に不規則に鋸歯が並ぶ。中肋は2本で強く、葉身細胞には大形で刺状の突起が1つある。
分布域(県外) : 台湾、フィリピン、その他の熱帯アジア、太平洋諸島に広く分布。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。
生育環境 : 林内を流れる溪流の転石上に生育する。
生育状況 : 自然林内を流れ、流量も安定した溪流に生育が限られるため、西表島では比較的多くの個体群を見出せるが、その他の島では非常に少ない。
学術的価値 : 本種が属するサオヒメゴケ属は熱帯系のもので、日本では本種のみが知られ沖縄島が分布の北限となっている。
減少の要因 : ダム建設および森林伐採。

- 文献 : 有川智己, 2015. サオヒメゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 154.
Horikawa, Y., 1934. Symbolae florae bryophytae orientali-asiae, III. Bot. Mag. Tokyo, 48: 708-719, 761-764.
Noguchi, A., 1991. Illustrated Moss Flora of Japan 4. Hattori Bot. Lab., Nichinan, 743-1012.

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : **トサノタスキゴケ**
分類 : ハイヒモゴケ科 (蘚類)
学名 : *Aerobryidium laosiense* (Broth. & Paris) S. H. Lin (syn. *Pseudobarbella laosiensis* (Broth. & Paris) Nog.)
カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU)

- 形態の特徴 : 二次茎は長さ 20 cm 以上になり着生基物から懸垂する。枝先はしばしば鞭枝状になる。二次茎の葉の基部は卵形で先は細長く尖る。葉身細胞は線形で中央に 1 個の乳頭状突起をもつ。
- 分布域(県外) : 本州、四国、九州、奄美大島、中国、ラオス、ボルネオ。
- 県内の分布 : 沖縄島。
- 生育環境 : 空中湿度の高い林内を流れる溪流沿いの樹幹や樹枝から懸垂して生育する。
- 生育状況 : 沖縄島では山頂部の空中湿度の高い林内に見られるが生育地は限られている。
- 学術的価値 : 日本では近畿地方以西に分布しているが希産種である。
- 減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : 有川智己, 2015. トサノタスキゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 196. (*Aerobryidium laosiense* として)
Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands, I. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 10: 47-64. (*Pseudobarbella mollissima* として)
Noguchi, A., 1976. A taxonomic revision of the family Meteoriaceae of Asia. J. Hattori Bot. Lab., 41: 231-357.

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : ヒカゲノカズラモドキ
- 分類 : ハイヒモゴケ科 (蘚類)
- 学名 : *Aerobryopsis parisii* (Cardot) Broth.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 形態の特徴 : 植物体は紐状で樹幹や樹枝に着生し基物から懸垂して生育する。二次茎の長さは約 20 cm に達する。葉は長卵形で刃先は細く尖り波をうつ。枝葉はやや偏平につき枝は葉を含め約 3 mm 幅となる。
- 分布域(県外) : 四国、奄美大島、台湾、フィリピン。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 空中湿度の高い林内を流れる溪流沿いの樹幹や樹枝から懸垂して生育する。
- 生育状況 : 西表島では浦内川水系沿いに点々と見られるが条件は限られている。石垣島、沖縄島では自然林の減少によって生育地がごく限られており個体数も少ない。
- 学術的価値 : 四国の横倉山から過去に一度報告があるがそれ以後確認されていない。現在確認されている分布域の中では奄美大島が北限となる。
- 減少の要因 : ダム建設および森林伐採。

- 文献 : 有川智己, 2015. ヒカゲノカズラモドキ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 150.
Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands, I. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 10: 47-64.
Noguchi, A., 1976. A taxonomic revision of the family Meteoriaceae of Asia. J. Hattori Bot. Lab., 41: 231-357.

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : リュウキュウイボゴケ
- 分類 : コモチイトゴケ科 (蘚類)
- 学名 : *Taxithelium liukuense* Sakurai

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 葉は楕円形で先部は広く尖るかあるいは鈍頭。葉身細胞には5~8個の顕著ないぼ状突起が1列に並ぶ。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。
生育環境 : 林内の湿った岩や朽木上に生育する。
生育状況 : 西表島では比較的多くの場所で生育しているが他の島々では生育地が限られ個体数も少ない。
学術的価値 : 琉球列島の固有種である。
減少の要因 : 森林伐採。

文献 : Iwatsuki, Z., 1978. Bryological Miscellanies, XXV. Some interesting species of mosses from the Ryukyu Archipelago. J. Hattori Bot. Lab., 44: 555-561.
Noguchi, A., 1994. Illustrated Moss Flora of Japan 5. Hattori Bot. Lab., Nichinan, 1013-1253.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : カタナワゴケ

分類 : ナワゴケ科 (蘚類)

学名 : *Oedycladium fragile* Cardot

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴 : 一次茎は基物上を這い、二次茎は立ち上がって、長さ8~25mmになってまばらに分枝する。葉は皮針形で長さ4~7mm、葉先はしだいに狭くなって尖る。葉先は折れやすい。葉細胞は狭い菱形で細胞壁は厚く、所々でくびれる。
分布域(県外) : 九州(屋久島)、中国、台湾、フィリピン、ベトナム。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
生育環境 : 林内溪流沿いの樹幹上または岩上に生育する。
生育状況 : 県内のいずれの生育地においても、個体群、個体数とも少ない。
学術的価値 : 日本国内では屋久島と沖縄県のみに分布する。
減少の要因 : 森林伐採。

文献 : 有川智己, 2015. カタナワゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 187.
Iwatsuki, Z., 1979. Re-examination of *Myurium* and its related genera from Japan and its adjacent areas. J. Hattori Bot. Lab., 46: 257-283.
山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ヤワラゼニゴケ

分類 : ヤワラゼニゴケ科 (苔類)

学名 : *Monosolenium tenerum* Griff.

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 形態の特徴 : 植物体は葉状でみずみずしい緑色、長さ2~4 cm、幅5~8 mm、二叉状に分枝する。表皮細胞には油細胞が点在する。雌器床は円盤状。
- 分布域(県外) : 本州、四国、九州、奄美大島、台湾、中国、アッサム、インド、ジャワ、ハワイ。
- 県内の分布 : 沖縄島。
- 生育環境 : 湿土上に生育し、ときに人家周辺や耕作地にも出現する。
- 生育状況 : 沖縄島中・南部の数カ所に生育しているが個体数は少ない。
- 学術的価値 : 本種の1種のみでヤワラゼニゴケ科を構成し、さらにはヤワラゼニゴケ亜目として他のゼニゴケ目の種から分けられるなど分類学的に極めて興味深い種であり、世界的にみても生育地は限られている。
- 減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

- 文献 : 古木達郎, 2015. ヤワラゼニゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 237.
井上 浩, 1976. 続日本産苔類図鑑. 築地書館, 東京, 193 pp.

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : タガワヤバネゴケ
- 分類 : コヤバネゴケ科 (苔類)
- 学名 : *Cylindrocolea tagawae* (N. Kitag.) R. M. Schust.
- カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU)

- 形態の特徴 : 植物体は濃緑色で細く硬い感じがする。茎は匍匐し長さ約3 mm、幅0.20~0.25 mm、分枝が多い。葉は枝に対して斜めにつき長卵形、先は浅く2裂する。腹葉を欠く。葉細胞の表面がざらつく。
- 分布域(県外) : タイ (ペナン島)。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 林内の湿岩上に生育する。
- 生育状況 : 各島の数カ所で生育しているが個体数は少ない。
- 学術的価値 : 八重山諸島が分布の北限であり世界的にみても分布地が限られている。
- 減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

- 文献 : 古木達郎, 2015. タガワヤバネゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 224.
山口富美夫・関 太郎, 1983. *Cylindrocolea tagawae* は日本にも産する. 日本藓苔類学会会報, 3: 103.

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : ミジンコゴケ
- 分類 : ムチゴケ科 (苔類)
- 学名 : *Zoopsis liukuensis* Horik.
- カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU)

- 形態の特徴 : 植物体は極めて小形で肉眼ではほとんど見分けられないほどである。茎は長さ3~5 mm、幅は0.3 mmほど。葉は著しく小さく2個の大形細胞とそれぞれの細胞に各1個の小形細胞からなる。
- 分布域(県外) : 九州、奄美大島、台湾、マレーシア、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、ニューギニア。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 空中湿度の高い林内の木性シダの幹、湿った朽木あるいは腐植土上に生育する。
- 生育状況 : 植物体が小形なため十分な調査はなされていないが、生育地は溪流沿いか山頂部の林内に限られており個体数も少ないものと推定される。
- 学術的価値 : 極めて小形で配偶体が極端に退化した特殊な種である。九州の南部を北限としている。
- 減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : 長谷川二郎, 2015. ミジンコゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 250.
井上 浩, 1976. 続日本産苔類図鑑. 築地書館, 東京, 193 pp.

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : **サケバキハネゴケ**
- 分類 : ハネゴケ科 (苔類)
- 学名 : *Plagiochila fordiana* Steph.
- カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU)

- 形態の特徴 : 植物体は長さ1.5~4.0 cm、茎は葉を含めて幅2.5~4.0 mm。葉は長方形で折れやすく、葉先に大きな2歯、背縁に1~2個の鋸歯がある。腹葉は痕跡的。
- 分布域(県外) : 四国、九州、奄美大島、徳之島、小笠原諸島、中国、タイ、ベトナム、インド。
- 県内の分布 : 沖縄島、西表島。
- 生育環境 : 山地林内の樹幹や枝上に着生する。
- 生育状況 : 沖縄島と西表島の数カ所で確認されているが、生育地は限られている。
- 学術的価値 : 胞子体は知られておらず、早落性の葉による栄養繁殖が考えられている。
- 減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : 古木達郎, 2015. サケバキハネゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 241.
So, M. L., 2001. *Plagiochila* (Hepaticae, Plagiochilaceae) in China. *Systematic Botany Monographs*, 60: 1-214.

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : **キヤスデゴケ**
- 分類 : ヤスデゴケ科 (苔類)
- 学名 : *Frullania gaudichaudii* (Nees & Mont.) Nees & Mont.
- カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU)

- 形態の特徴 : 植物体は大きく茎は長さ約 10 cm に達し、1~2 回羽状に分枝し着生基物から懸垂する。茎葉は卵形で長さ約 1.3 mm、葉先は鈍頭。葉下片は小さくて茎と平行に接する。
- 分布域(県外) : 奄美大島、台湾、フィリピン、その他アフリカをのぞく世界の熱帯・亜熱帯に広く分布。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山頂部や溪流沿いの空中湿度の高い林内の樹幹あるいは岩上に生育する。
- 生育状況 : 西表島では林内の溪流沿いの所々で生育しているが、沖縄島や石垣島では生育地が限られ個体数も少ない。
- 学術的価値 : 熱帯地域に広く分布する種であり琉球列島が北限となる。
- 減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : 古木達郎, 2015. キヤスデゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—. 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 226.
Shin, T., 1970. Flora of Hepaticae in the Ryukyu Archipelago, II. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 19: 29-50.

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : **イリオモテヤスデゴケ**
- 分類 : ヤスデゴケ科 (苔類)
- 学名 : *Frullania iriomotensis* S. Hatt.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 形態の特徴 : 植物体は小形で茎は長さ約 1 cm、幅 0.08~0.1 mm。茎葉は背面側がアーチ状になり葉先は刺状あるいは狭く尖り内側に巻く。腹葉は細長く、全体の 2/3 まで 2 裂する。
- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
- 生育環境 : 山地の樹幹上に生育。
- 生育状況 : これまでに確認されている生育地は数カ所で個体数も少ない。
- 学術的価値 : 特異な形態を示す八重山諸島の固有種である。
- 減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

- 文献 : 古木達郎, 2015. イリオモテヤスデゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—. 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 227.
Hattori, S., 1980. Notes on *Frullania* species of Iriomote and Ishigaki Islands, the Ryukyu Archipelago. J. Jpn. Bot., 55: 132-135.

執筆者名 : 山口富美夫

- 和名 : **アマカワヒメゴヘイゴケ**
- 分類 : クサリゴケ科 (苔類)
- 学名 : *Archilejeunea amakawana* Inoue
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 形態の特徴 : 茎は長さ 5~10 mm。葉は広く開出し、背片は円頭、全縁で、鎌状に曲がり、折れやすく、腹片は背片の 1/2 長。腹葉は丸みを帯びた長方形で全縁。
- 分布域(県外) : 九州 (熊本県、宮崎県、屋久島)。

- 県内の分布 : 石垣島、西表島。
生育環境 : 林内の樹幹上や朽木上に生育する。
生育状況 : 石垣島と西表島で確認されているが、生育地は数カ所で個体数も少ない。
学術的価値 : 石垣島産の標本を元に記載された種で、その後九州本土でも確認された日本の固有種である。
減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

- 文献 : Amakawa, T., 1964. Notes on Japanese Hepaticae (13). J. Jpn. Bot., 39(5): 135-139. (*Archilejeunea falcata* として)
長谷川二郎, 2015. アマカワヒメゴヘイゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 209.

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : リュウキュウシゲリゴケ
分類 : クサリゴケ科 (苔類)
学名 : *Cheilolejeunea ryukyuensis* Mizut.
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

- 形態の特徴 : 茎は長さ0.5~1 cm、幅は葉を含め1~1.3 mm。葉は楕円形で開出しほとんど平坦、長さ0.45~0.6 mm、先は丸くなる。葉下片は小さく葉の1/4~1/3の長さ。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
生育環境 : 低地の林内の樹皮上に生育する。
生育状況 : 各島の数カ所のマングローブ林内で生育が確認されている。
学術的価値 : 琉球列島の固有種である。
減少の要因 : 河川の開発・埋め立て。

- 文献 : 古木達郎, 2015. リュウキュウシゲリゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 215.
Mizutani, M., 1982. Notes on the Lejeuneaceae, 6. Japanese species of the genus *Cheilolejeunea*. J. Hattori Bot. Lab., 51: 151-173.
山口富美夫・中越信和・根平邦人・岩月善之助, 1990. 日本におけるマングローブ林内の着生蘚苔類フロラ. ヒコビア, 10: 403-407.

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : オオシマヨウジョウゴケ
分類 : クサリゴケ科 (苔類)
学名 : *Cololejeunea inflata* Steph.
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

- 形態の特徴 : 茎は長さ5 mmほどで、葉とともに基物に圧着して生育する。葉の背片は広卵形で、円頭、背縁には2~3列の透明細胞、基部には3~4列に眼点細胞が並び、葉細胞の背面に乳頭状の突起がある。
分布域(県外) : 本州(三重県)、九州(宮崎県)、奄美大島、台湾、東南アジアに広く分布。
県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 林内の灌木やシダの生葉上、まれに樹幹上に生育する。
 生育状況 : 沖縄島、石垣島、西表島の溪流沿いの林内で確認されているが、生育地は限られている。
 学術的価値 : 東南アジアの熱帯に広く分布し、国内では琉球列島が分布の中心になっている。
 減少の要因 : 森林伐採。

文献 : 長谷川二郎, 2015. オオシマヨウジョウゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 217.
 Zhu, R.-L. & M. L. So, 2001. Epiphyllous liverworts of China. Nova Hedwgia Beiheft, 121: 1-418.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ヤマトケクサリゴケ

分類 : クサリゴケ科 (苔類)

学名 : *Cololejeunea schmidtii* Steph.

カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU)

形態の特徴 : 茎は長さ 2~5 mm、葉とともに基物に強く圧着する。葉の背片は卵形、縁の中部~基部に不規則で粗い針状の鋸歯が目立ち、葉細胞の背面に大きな球状の突起がある。

分布域(県外) : 九州(宮崎県、屋久島)、奄美大島、中国、台湾、東南アジア~パプアニューギニアに広く分布。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山地林内の樹木やシダの生葉上に生育する。

生育状況 : 沖縄島、石垣島、西表島の溪流沿いの林内で確認されているが、生育地は限られている。

学術的価値 : アジアの熱帯に広く分布し、国内では琉球列島を中心に分布する種である。

減少の要因 : 森林伐採。

文献 : 長谷川二郎, 2015. ヤマトケクサリゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 218.
 Zhu, R.-L. & So, M. L., 2001. Epiphyllous liverworts of China. Nova Hedwgia Beiheft, 121: 1-418.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : イヌイムシトリゴケ

分類 : クサリゴケ科 (苔類)

学名 : *Colura inuii* Horik.

カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類(VU)

形態の特徴 : 植物体は黄緑色で長さ 3~8 mm、幅約 2 mm。茎は基物に圧着する。葉は基物から離れて立ち上がり広卵形~卵状三角形。腹縁は葉下片が筒状に巻き先端は囊状になる。

分布域(県外) : 奄美大島、徳之島、台湾。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境 : 山頂部や溪流沿いの空中湿度の高い林内の樹枝あるいは生葉上に生育する。

生育状況 : 各島の山頂付近や比較的大きな溪谷で見られるが、極めて湿潤な環境条件に限って生育し個体数も少ない。

学 術 的 価 値 : 台湾から琉球列島にかけて分布する種である。

減 少 の 要 因 : 森林伐採。

文 献 : 長谷川二郎, 2015. イヌイムシトリゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 221.
井上 浩, 1974. 日本産苔類図鑑. 築地書館, 東京, 189 pp.
Mizutani, M., 1978. Lejeuneaceae from Ishigaki and Iriomote Islands of Ryukyu Archipelago. J. Hattori Bot. Lab., 44: 121-136.
Zhu, R.-L. & So, M. L., 2001. Epiphyllous liverworts of China. Nova Hedwigia Beiheft, 121: 1-418.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : ツメクサリゴケ

分 類 : クサリゴケ科 (苔類)

学 名 : *Stenolejeunea apiculata* (Sande Lac.) R. M. Schust.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形 態 の 特 徴 : 植物体は長さ約5 mm、幅約0.5 mm。葉の背片は丸味のある三角形で、先端が急に尖る。腹片の第1歯は1細胞からなり、第2歯は不明瞭。腹葉は深く2裂し、裂片は細く尖る。

分 布 域 (県 外) : 小笠原諸島(父島、母島)、中国、台湾、スリランカ、東南アジア～オセアニアに広く分布。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : 山地林内の湿った岩や樹幹上に生育する。

生 育 状 況 : 生育地が限られ生育量も少ない。

学 術 的 価 値 : ツメクサリゴケ属としては日本産唯一の種であり、個体数も少なく希少な種である。

減 少 の 要 因 : 自生地、個体数が限られている。。

文 献 : Amakawa, T., 1961. Notes on Japanese Hepaticae (12). J. Jpn. Bot., 36(12): 401-404. (*Prionolejeunea unguolata* として)
古木達郎, 2015. ツメクサリゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 247.
Zhu, R.-L. & So, M. L., 2001. Epiphyllous liverworts of China. Nova Hedwigia Beiheft, 121: 1-418.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : ケミドリゼニゴケ

分 類 : スジゴケ科 (苔類)

学 名 : *Aneura hirsuta* Furuki

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形 態 の 特 徴 : 植物体は葉状で背面には数細胞からなる短毛が散生し長さ1~1.5 cm、幅2~5 mm。

県 内 の 分 布 : 西表島。

生 育 環 境 : 沢沿いの湿土上に生育する。

生 育 状 況 : タイプロカリティーのみに知られている。

学 術 的 価 値 : 西表島の固有種である。
 減 少 の 要 因 : 自生地、個体数が限られている。

文 献 : Furuki, T., 1991. A taxonomical revision of the Aneuraceae (Hepaticae) of Japan. J. Hattori Bot. Lab., 70: 293-397.
 古木達郎, 2015. ケミドリゼニゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 208.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

3) 準絶滅危惧 (NT)

和 名 : ヒメハミズゴケ
 分 類 : スギゴケ科 (蘚類)
 学 名 : *Pogonatum camusii* (Thér.) Touw
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 の 特 徴 : 茎と葉はほとんど発達せず長さ約 2 cm の孢子体ばかりが目立つ。蒴柄には明瞭な乳頭状突起をもつ。
 分 布 域 (県 外) : 奄美大島、台湾、フィリピン、ベトナム、タイ、スマトラ、フローレス。
 県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
 生 育 環 境 : 林内の陰湿な林床の岩上 (主に砂岩) や粘土質の土上にまばらに生育する。
 生 育 状 況 : 各島の山地に散見し各個体群は少数の個体からなり個体群数も少ない。
 学 術 的 価 値 : 日本各地に普通に見られるニワスギゴケの仲間であるが、本種は配偶体が極端に退化した特殊なグループ (sect. *Racelopus*) に属し、このグループとしては琉球列島が北限となる。
 減 少 の 要 因 : 森林伐採。

文 献 : 樋口正信, 2015. ヒメハミズゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 252.
 山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコピア, 9: 243-264. (*Racelopodopsis camusii* として)
 Touw, A., 1986. A revision of *Pogonatum* sect. *Racelopus*, sect. nov., including *Racelopus* Dozy & Molk., *Pseudoracelopus* Broth., and *Racelopodopsis* Thér. J. Hattori Bot. Lab., 60: 1-33.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : ヒメハゴロモゴケ
 分 類 : ヒラゴケ科 (蘚類)
 学 名 : *Circulifolium exiguum* (Bosch & Sande Lac.) S. Olsson, Enroth & D. Quandt [syn. *Homaliodendron exiguum* (Bosch & Sande Lac.) M. Fleisch.]
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴 : 一次茎は基物上を這い、二次茎は立ち上がって長さ2~4 cm、幅1.5~2 mm。葉は舌形で著しく扁平につき、長さ1~1.2 mm、葉先は円頭。
- 分布域(県外) : 本州、四国、九州、小笠原、奄美大島、アジア、オセアニア、アフリカの亜熱帯~熱帯。
- 県内の分布 : 沖縄島、伊平屋島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 林内の岩上(石灰岩を含む)や樹幹上にまばらに生育する。
- 生育状況 : 県内の分布域内において点々と見られるが、個体群数、個体数とも少ない。
- 学術的価値 : 葉を扁平につけるキダチヒラゴケ属の中では最少の種であり、国内、県内の産地が限られている。
- 減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : 樋口正信, 2015. ヒメハゴロモゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 252. (*Homaliodendron exiguum* として)
- Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands, I. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 10: 47-64.
- 山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264.

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : **ホウライハゴロモゴケ**
- 分類 : ヒラゴケ科(蘚類)
- 学名 : *Circulifolium microdendron* (Mont.) S. Olsson, Enroth & D. Quandt [syn. *Homaliodendron microdendron* (Mont.) M. Fleisch.]
- カテゴリー : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧(NT)

- 形態の特徴 : 一次茎は基物上を這い、二次茎は長さ約7 cmに達し2回羽状に分枝する。枝および茎は葉を極めて扁平につけてリボン状になり強い光沢がある。
- 分布域(県外) : 台湾、中国、フィリピン、その他の熱帯アジアに分布する。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 空中湿度の高い林内の岩上、ときに樹幹上に着生する。
- 生育状況 : 低地から山頂部にかけて生育し沢沿いの岸壁上で大きな群落を形成することもあるが生育地は限られている。沖縄島北部、西表島では個体数は比較的多い。
- 学術的価値 : 熱帯産の種であり沖縄島が北限となる。
- 減少の要因 : 森林伐採。

- 文献 : 樋口正信, 2015. ホウライハゴロモゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 252. (*Homaliodendron microdendron* として)
- Noguchi, A., 1950. A review of the Leucodontineae and Neckerineae of Japan, Loo Choo and of Formosa, III. J. Hattori Bot. Lab., 4: 1-48.
- Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands, I. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 10: 47-64.

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : **トサヒラゴケ**
- 分類 : ヒラゴケ科(蘚類)
- 学名 : *Neckeropsis obtusata* (Mont.) M. Fleisch.

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴： 一次茎は基物上を這い、二次茎は長い扁平なひも状で、ときに長さ 20 cm に達し、幅は葉を含めて約 6 mm。葉は舌形で葉先は円頭、明瞭な横しわがある。セイナンヒラゴケに似るが、セイナンヒラゴケでは葉先が切頭状になる。

分布域 (県外)： 本州、四国、九州、奄美大島、徳之島、中国、ベトナム。

県内の分布： 沖縄島、久米島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境： 空中湿度の高い常緑樹林内の樹幹または岩上に生育する。

生育状況： 県内では、自然度の高いシイ林内で見られるが、個体群、個体数とも少ない。

減少の要因： 森林伐採。

文献： 樋口正信, 2015. トサヒラゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 252.

Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands, I. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 10: 47-64. (*Neckera tosaensis* として)

山口富美夫, 1985. 八重山群島の藓苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264.

執筆者名 山口富美夫

和名： オキナワサイハイゴケ

分類： ジンガサゴケ科 (苔類)

学名： *Asterella wallichiana* (Lehm. & Lindenb.) Grolle [syn. *Asterella liukiensis* (Horik.) Horik.]

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴： 植物体は葉状で黄緑～緑色、長さ 1.5～2.5 cm、幅 3～4 mm、ドクダミのような臭気をもつ。雌器床の柄は短く 2～4 個の偽花被をもち、胞子体が成熟すると開いて采配状になる。

分布域 (県外)： 奄美大島。

県内の分布： 沖縄島、石垣島、西表島。

生育環境： 石灰岩地の林内の岩上、沢沿いの湿岩上に生育する。

生育状況： 西表島では沢沿いの転石上にしばしば大きな群落を形成している。沖縄島や石垣島では個体数はそれほど多くはないが各所で見られる。

学術的価値： 琉球列島の固有種である。

減少の要因： 森林伐採や河川の開発。

文献： 長谷川二郎, 2015. オキナワサイハイゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 252.

井上 浩, 1976. 続日本産苔類図鑑. 築地書館, 東京, 193 pp.

執筆者名： 山口富美夫

4) 情報不足 (DD)

和名 : ヘビゴケ
分類 : シッポゴケ科 (蘚類)
学名 : *Campylopodium medium* (Duby) Giese & J.-P. Frahm
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

形態の特徴 : 茎は高さ 5~15 mm。葉は長さ 2~4 mm で広い基部から急に針状にのびる。孢子体の蒴柄が曲がりくねる。
分布域(県外) : 伊豆七島、鹿児島(桜島、硫黄島)、台湾、フィリピン、その他熱帯アジア、ポリネシア、オーストラリア、ニュージーランド、東アフリカに分布。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 開けた場所の土上あるいは岩上に生育する。
生育状況 : Shin (1970) が西表島の 1ヶ所から報告し、その後再確認されていない。
学術的価値 : 熱帯産の蘚類で特に島嶼環境に適した種であるとされている。日本での産地は極めて少ない。
減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : 岩月善之助・木口博史, 1979. 伊豆七島新産のヘビゴケについて. 蘚苔地衣雑報, 8: 121-124. (*Campylopodium euphorocladum* として)
Shin, T., 1970. Mosses of the Ryukyu Islands, V. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 19: 51-65. (*Campylopodium euphorocladum* として)
山口富美夫, 2015. ヘビゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 157.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : イボイボカタシロゴケ
分類 : カタシロゴケ科 (蘚類)
学名 : *Calymperes strictifolium* (Mitt.) Roth.
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

形態の特徴 : 葉は線形で長さ 4~5 mm、乾いてもほとんど縮れない。葉の中肋と縁部はこぶ状にもりあがった細胞塊で覆われる。
分布域(県外) : 台湾、フィリピン、その他の熱帯アジア、ポリネシアに分布。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 山地の溪流沿いの樹幹に着生。
生育状況 : 山口(1985) が西表島の 1ヶ所から報告しているがその後確認されていない。
学術的価値 : 西表島が本種の分布の北限であり日本での唯一の産地である。また世界的にみても希な種である。
減少の要因 : 自生地、個体数が限られている。

文献 : 山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264. (*Calymperes tuberculosum* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : トゲバイバラゴケ
 分類 : アブラゴケ科 (蘚類)
 学名 : *Calypstrochaeta parviretis* (M. Fleisch.) Z. Iwats., B. C. Tan & Touw
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 茎は長さ 2 cm ほどでほとんど分枝しない。葉は卵形で長さ約 3 mm、葉縁部は 2 列の線形の細胞によって縁取られ上半部にはすどい鋸歯がある。
 分布域(県外) : 奄美大島、徳之島、フィリピン、ジャワ、ボルネオ。
 県内の分布 : 石垣島。
 生育環境 : 空中湿度の高い山頂部の林内の湿岩上あるいは樹木の根元に生育する。
 生育状況 : Shin (1962) が石垣島から報告しているのみでそれ以後他の生育地は確認されていない。
 学術的価値 : 熱帯産の種で琉球列島を北限とし個体数も少ない。
 減少の要因 : 森林伐採やその他の開発行為。

文献 : Shin, T., 1962. Mosses of the Ryukyu Islands, II. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 11: 93-107, pls. 1, 2. (*Eriopus parviretis* var. *minor* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ミナミツガゴケ
 分類 : アブラゴケ科 (蘚類)
 学名 : *Distichophyllum montagneanum* (Müll. Hal.) Bosch & Sande Lac.
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : クロジクツガゴケに似るが、葉は楕円形で葉先はしだいに尖る。
 分布域(県外) : ベトナム、インドネシア。
 県内の分布 : 沖縄島、西表島。
 生育環境 : 林内の樹幹上に生育する。
 生育状況 : Horikawa (1935) が沖縄島と西表島から各 1 点の標本を報告しているが、それ以来確認されておらず、報告の元になった標本も見つかっていない。
 学術的価値 : 琉球列島が分布の北限となる。
 減少の要因 : 不明。

文献 : Horikawa, Y., 1935. Symbolae florae bryophytae orientali-asiae V. Bot. Mag. Tokyo, 49: 211-221, 260-263.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : クロジクツガゴケ
 分類 : アブラゴケ科 (蘚類)
 学名 : *Distichophyllum nigricaulum* Mitt. ex Bosch & Sande Lac.
 カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

- 形態の特徴 : ツガゴケ属の種としては小形で、茎は褐色～黒みを帯びる。葉は卵形～舌形で、長さ約 3 mm、葉先は急に短く尖る。
- 分布域(県外) : フィリピン、インドネシア。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 溪流沿いに生育する。
- 生育状況 : Horikawa (1935) が沖縄、石垣、西表の各島から数点の標本を報告しているが、それ以来確認されておらず、報告の元になった標本も見つかっていない。
- 学術的価値 : 琉球列島が分布の北限となる。
- 減少の要因 : 不明。

- 文献 : 樋口正信, 2015. クロジクツガゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 253.
Horikawa, Y., 1935. Symbolae florae bryophytae orientali-asiae V. Bot. Mag. Tokyo, 49: 211-221, 260-263.

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : **イボエシノブゴケ**
- 分類 : シノブゴケ科 (蘚類)
- 学名 : *Thuidium plumulosum* (Dozy & Molke.) Bosch & Sande Lac.
- カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : シノブゴケ属の蘚類としては小形で、雌雄同株。茎は長さ 2～3.5 cm、規則的に 2 回羽状に分枝する。茎葉は 0.45～0.55 mm、葉細胞には 1 個のパピラがある。蒴柄には密にパピラがあり、雌苞葉の肩の部分はシリア状に切れ込まない。
- 分布域(県外) : 奄美大島、フィリピン、ネパール、ミャンマー、スリランカ、インドネシア、ニューギニア、ミクロネシア。
- 県内の分布 : 沖縄島、久米島、宮古島。
- 生育環境 : 林内の岩上、腐植土上、樹幹上に生育する。
- 生育状況 : Watanabe (1972) が沖縄、久米、宮古の各島から報告して以来、その生育は確認されていない。
- 学術的価値 : 琉球列島が分布の北限となる。
- 減少の要因 : 不明。

- 文献 : Watanabe, R., 1972. Thuidiaceae in Japan and adjacent areas. J. Hattori Bot. Lab., 36: 171-320. (*Thuidium meyenianum* として)

執筆者名 : 山口富美夫

-
- 和名 : **タイワンケゴケ**
- 分類 : アオギヌゴケ科 (蘚類)
- 学名 : *Helicodontium formosicum* (Cardot) W. R. Buck
- カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 植物体は小形で茎は這い長さ 2～3 cm、羽状に分枝する。枝は長さ 1～2 cm。茎葉は卵状皮針形で長さ約 0.8 mm、中肋は 1 本で葉の中部より少し上まで達する。葉の翼部の細胞が分化する。

分布域（県外）：九州、台湾。
 県内の分布：沖縄島。
 生育環境：岩上あるいは樹幹上に生育する。
 生育状況：Shin (1970) と Iwatsuki (1978) が沖縄島南部の2ヶ所から報告して以来、他の生育地は確認されていない。
 学術的価値：九州の南部から台湾にかけての狭い範囲に分布し生育地の報告もわずかである。
 減少の要因：自生地、個体数が限られている。

文献：Shin, T., 1970. Mosses of the Ryukyu Islands, V. Sci. Rep. Kagoshima Univ., 19: 51-65. (*Schwetschkea formosica* として)
 Iwatsuki, Z., 1978. Bryological Miscellanies, XXV. Some interesting species of mosses from the Ryukyu Archipelago. J. Hattori Bot. Lab., 44: 555-561. (*Schwetschkea formosica* として)

執筆者名：山口富美夫

和名：(なし)
 分類：ハイヒモゴケ科 (蘚類)
 学名：*Aerobryopsis leptosigmata* (Müll. Hal. ex Geh.) M. Fleisch.
 カテゴリー：情報不足(DD) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：植物体は細い紐状で樹幹や樹枝に着生し基物から懸垂して生育する。二次茎の長さは約 10 cm になる。葉は長く先端は糸状になり茎に対して丸くつき偏平にならない。
 分布域（県外）：フィリピン、ベトナム、マレー半島、スマトラ、ジャワ、ニューギニア。
 県内の分布：西表島。
 生育環境：空中湿度の高い林内を流れる溪流沿いの樹幹や樹枝から懸垂して生育する。
 生育状況：これまでに西表島の2地点からの記録があるが(山口, 1985) その後確認されていない。
 学術的価値：本種は熱帯アジアを中心に分布し日本では西表島のみに産し分布の北限となっている。
 減少の要因：自生地、個体数が限られている。

文献：山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコビア, 9: 243-264.
 Noguchi, A., 1976. A taxonomic revision of the family Meteoriaceae of Asia. J. Hattori Bot. Lab., 41: 231-357.

執筆者名：山口富美夫

和名：**アブラハイゴケ**
 分類：アブラゴケ科 (蘚類)
 学名：*Chaetomitrium papillifolium* Bosch & Sande Lac.
 カテゴリー：情報不足(DD) 環境省カテゴリー：該当なし

形態の特徴：茎は這い密に分枝する。葉は楕円状皮針形で先は急に尖り葉縁に鋸歯がある。中肋は2本で短く葉身細胞には乳頭状突起がある。
 分布域（県外）：フィリピン、ベトナム、ジャワ、ボルネオ、スリランカ。
 県内の分布：西表島。

- 生育環境 : 山地の樹枝上に着生する。
生育状況 : 山口 (1985) が西表島の 1ヶ所から報告して以来他の生育地は確認されていない。
学術的価値 : 本種が属する *Chaetomitrium* は熱帯系のものであり日本では本種のみが知られ西表島が唯一の産地である。
減少の要因 : 不明。

文献 : 山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. ヒコピア, 9: 243-264.

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : **ムカシヤバネゴケ**
分類 : コヤバネゴケ科 (苔類)
学名 : *Cephaloziella crispata* N. Kitag. (syn. *Cephaloziopsis exigua* (Inoue) R. M. Schust. & Inoue)
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

- 形態の特徴 : 植物体は極めて小さく長さ約 2.5 mm。茎は這いこれから雌の生殖器官をつける枝が立ち上がる。葉は離れてつき長方形～長卵形、半分以上まで 2 裂する。
県内の分布 : 西表島。
生育環境 : 溪流沿いの湿岩上に生育する。
生育状況 : タイプロカリティーのみで知られている。
学術的価値 : 西表島の固有種であり分類学・地理学的に興味深い種である。
減少の要因 : 不明。

文献 : 古木達郎, 2015. ムカシヤバネゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物Ⅱ”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 253.
井上 浩, 1976. 続日本産苔類図鑑. 築地書館, 東京, 193 pp. (*Cephaloziopsis exigua* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : **トガリバクラマゴケモドキ**
分類 : クラマゴケモドキ科 (苔類)
学名 : *Porella acutifolia* (Lehm. & Lindenb.) Trevis. var. *acutifolia*
カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

- 形態の特徴 : 植物体は大形で、茎は長さ約 10 cm に達し、羽状に分枝する。葉は背片と腹片とに分裂し、背片と腹片は腹片の幅の 1/5 以上で合着する。背片は長卵形で先は尖り、腹片は背片より著しく小さく、腹縁基部は茎に長く流下する。変種のトサクラマゴケモドキに比べて葉の背片が長く、先がより尖り、先部縁の鋸歯が少ない。
分布域(県外) : フィリピン～インド南部の熱帯アジア、ハワイ諸島。
県内の分布 : 沖縄島。
生育環境 : 常緑樹林内の樹幹または岩上に生育する。
生育状況 : Hattori (1976) によって、1939 年に与那覇岳から採取された標本 1 点が報告されたが、それ以外の報告はない。

学 術 的 価 値 : 沖縄島が分布の北限である。

減 少 の 要 因 : 不明。

文 献 : 長谷川二郎, 2015. トガリバクラマゴケモドキ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 253.

Hattori, S., 1976. Studies on the Asiatic species of the genus *Porella* (Hepaticae), VI. J. Hattori Bot. Lab., 40: 121-138.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : **オキナワヤスデゴケ**

分 類 : ヤスデゴケ科 (苔類)

学 名 : *Frullania okinawensis* Kamim.

カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

形 態 の 特 徴 : 茎は長さ2~2.5 cm、幅は葉を含めて1.3~1.5 mm。側葉や腹葉はカラヤスデゴケに似るが、雌包葉は広卵形で先が円くなる。

県 内 の 分 布 : 沖縄島。

生 育 環 境 : 山地の樹幹上に生育。

生 育 状 況 : タイプロカリティーの記録のみでそれ以外の報告はない。

学 術 的 価 値 : 沖縄島の固有種である。

減 少 の 要 因 : 不明。

文 献 : 古木達郎, 2015. オキナワヤスデゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 253.

Kamimura, N., 1982. Some addenda to the *Frullania* of Japan and neighboring areas, III. Misc. Bryol. Lichenol., 9: 87-93.

執 筆 者 名 : 山口富美夫

和 名 : **ユーレンキララゴケ**

分 類 : クサリゴケ科 (苔類)

学 名 : *Cololejeunea aequabilis* (Sande Lac.) Schiffn.

カ テ ゴ リ ー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

形 態 の 特 徴 : 植物体は小形で、茎は長さ4~9 mm、葉を含めて幅は1.1~1.5 mm。葉は卵形で長さ0.5~0.75 mm、葉細胞には1個の乳頭がある。沖縄県内でやや普通に見られるヨウジョウゴケに似るが、スチルスが1細胞からなり、花被の先が耳上に張り出すことでヨウジョウゴケから区別される。

分 布 域 (県 外) : 中国、熱帯アジア、パプアニューギニア、カロリン諸島、サモア。

県 内 の 分 布 : 西表島。

生 育 環 境 : 溪流沿いの林内に生育するシダなどの生葉上に生育する。

生 育 状 況 : Zhu 他 (1999) によって、西表島から1点の標本 (1993年採取) が報告されたが、それ以外の報告は無い。

学 術 的 価 値 : 西表島が分布の北限である。

減少の要因 : 不明。

文献 : 古木達郎, 2015. ユーレンキララゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 253.
Zhu, R.-L., Long, D. G & Yamaguchi, T., 1999. *Cololejeunea yulensis* (Steph.) Benedix and *Rhaphidolejeunea spicata* (Steph.) Grolle new to Japan, with taxonomic notes on *Cololejeunea obliqua* (Nees & Mont.) Schiffn. J. Bryol., 21: 293-297. (*Cololejeunea yulensis* として)

執筆者名 : 山口富美夫

和名 : ヤエヤマサンカクゴケ

分類 : クサリゴケ科 (苔類)

学名 : *Drepanolejeunea spicata* (Steph.) Grolle & R. L. Zhu

カテゴリー : 情報不足(DD) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

形態の特徴 : 植物体は小形で、茎は長さ 5~20 mm、葉を含めて幅は 0.6~0.8 mm。葉は卵形で長さ 0.32~0.42 mm、葉の基部に縦に 2 つ並んだ油細胞がある。腹葉は 2 裂し、裂片は 6~10 細胞長あり、ほぼ水平に広がる。本州紀伊半島~沖縄に分布するヨウジョウクサリゴケに似るが、ヨウジョウクサリゴケの葉の油細胞は 1 細胞のみである。

分布域 (県外) : 中国、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、インド北部、スマトラ、ボルネオ。

県内の分布 : 西表島。

生育環境 : 溪流沿い林内のシダや照葉樹の葉上に生育する。

生育状況 : Zhu 他 (1999) によって、西表島産の 2 点の標本 (1993 年採取) が報告されたが、それ以外の報告はない。

学術的価値 : 西表島が分布の北限である。

減少の要因 : 不明。

文献 : 古木達郎, 2015. ヤエヤマサンカクゴケ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9, 植物II”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 253.
Zhu, R.-L., Long, D. G & Yamaguchi, T., 1999. *Cololejeunea yulensis* (Steph.) Benedix and *Rhaphidolejeunea spicata* (Steph.) Grolle new to Japan, with taxonomic notes on *Cololejeunea obliqua* (Nees & Mont.) Schiffn. J. Bryol., 21: 293-297. (*Rhaphidolejeunea spicata* として)
Grolle, R. & Zhu, R.-L., 2000. A study of *Drepanolejeunea* subg. *Rhaphidolejeunea* (Herzog) Grolle & R. L. Zhu, stat. nov. (Hepaticae, Lejeuneaceae) in China with notes on its species elsewhere. Nova Hedwigia, 70: 373-396.

執筆者名 : 山口富美夫

3. 6 藻類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

カテゴリー 分類群	絶滅	野生 絶滅	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II 類	準絶滅 危惧	絶滅のおそれ ある地域個体群	情報 不足	合 計
			IA 類	IB 類					
初版 1996	1		4		2	5	0	0	12
改訂第2版 2006	0		10		14	31	0	26	81
改訂第3版 2018	0		30		30	47	0	36	143

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧 I 類、危急種は絶滅危惧 II 類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

藻類は形態的・生態的にきわめて多様性に富んだグループである。このことから、陸水域・汽水域・海域における可視的な藻類を対象に、「レッドデータおきなわ」に貴重な藻類が掲載されてきた。初版（1996）では、淡水藻類が主な対象とされており、掲載種は淡水産が8種、海・汽水産が4種と、僅か12種であった。改訂第2版（2006）では、陸水域はもとより、さんご礁海域においても藻類の生育環境が厳しい状況下にあることを踏まえ、「情報不足(DD)」を含み、81種が掲載された。改訂第3版では、初版と改訂第2版で掲載されなかった、陸水域の車軸藻類と汽水域のマングローブに依存するマングローブ藻類（幹の基部や気根に着生する）について調査を実施し、そのカテゴリーを検討した。また、海域における調査では、改訂第2版で掲載された「情報不足(DD)」の数種について、論文、報告書、藻類分科会員個々の記録等を基に、カテゴリーを再検討した。

(2) 本改訂で明らかになったこと

改訂第3版では、淡水藻類を36種取り上げた。今回初めて掲載された車軸藻類は、シャジクモ属12種とフラスコモ属7種の計19種にのぼり、うち11種を絶滅危惧 I 類に指定した。また、淡水紅藻のインドオオイシソウは他県では早くから希少種として知られていたが、今回、県内で初めて両種が確認されたことから、絶滅危惧 I 類として掲載した。さらに、カワモズク類（カワモズク属、*Kumanoa* 属、*Sheathia* 属）を新たに5種（3種は絶滅危惧 I 類、2種は絶滅危惧 II 類）追加した。与那国島と石垣島から新種記載されていたアオノリ様の緑藻ウムトゥチュラノリを宮古島でも確認し、絶滅危惧 I 類として追加掲載した。

海藻類では、黄緑藻類の1種カマクビウミフシナシミドロ（新称）を絶滅危惧 I 類に新たに追加した。緑藻類では、これまで県内から新種・新産種報告されていたものの、観察される頻度が少なく、今後の生育調査や希少性の検討が課題とされる10種を、情報不足(DD)として追加掲載した。県内に産する褐藻類の中で、これまで南方系のホンダワラ属の同定は困難であったが、島袋（2012～2017）「日本産南方系ホンダワラ属、海洋と生物」の連載による分類学的研究を基に、新たに6種（絶滅危惧 II 類1種、準絶滅危惧5種）を追加した。改訂第3版に掲載した褐藻類の総数は17種で、そのうちホンダワラ属が11種を占めることとなった。ホンダワラ類によって構成されるガラモ場は、イノー（礁池）や干潟の潮下帯、水深15mの礁上等にも群生し、海草藻場と同様に、水産資源を支える重要な存在である。紅藻類においては、改訂第2版で27種（絶滅危惧 I 類1種、絶滅危惧 II 類1種、準絶滅危惧5種、情報不足20種）が掲載されていたものを、改訂第3版では上記のカテゴリー順に、1:11:14:13にカテゴリーの変更を行った。

改訂第3版で掲載された種類は、前回から62種の増加となり、情報不足(DD)を除けば、希少性の評価された種類は55種から107種へと約2倍となった。沿岸域の埋め立てや海岸構築物の建設は、直接的な海底面の消失はもとより、周辺域での潮流変化による砂礫等の移動や海底の泥質化によって、これまで多くのホンダワラ藻場（ガラモ場）や海草藻場の維持に影響を及ぼしてきた。逆に、砂礫に被覆されていた岩盤等が露出し、ガラモ場に変化した事例もある。陸域からの生活排水や赤土の流入は、海産生物全般へ大きな影響を与え、いまだ収まらない。紅藻のオゴノリ類やキリンサイ類の減少傾向は、自家消費時代を経て、健康志向型の食材（加工品を含む）として市販されることに伴い、過剰に採取されている可能性も考えられる。陸水域での淡水藻類の減少の要因は、水田の減少、都市化による水質の悪化に加え、除草剤によると考えられる水質汚染等がうかがえる。

執筆者 香村 眞徳（琉球大学・名誉教授）

(3) 掲載種の解説

〈淡水藻類〉

【緑藻類】

1) 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

- 和名 : ウムトウチュラノリ
- 分類 : アオサ目 アオサ科 (緑藻類)
- 学名 : *Ulva limnetica* Ichihara et Shimada
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態の特徴 : 藻体は管状で、シワがあり脆い。色は淡緑色から黄緑色で、長さ 80 cm、幅 2 cm に達し、分枝は 2 次分枝まで。藻体基部で仮根状細胞の仮根系が細胞層の外側に伸びる。細胞は表面観で多角形または四角形で不規則に配列し、藻体の中央部や上部では大きさ 16.5-26.6×11.5-19.3 μm。横断面で細胞は角の丸い長方形または四角形で、藻体の中央部や上部では厚さ 18.8-24.4 μm。葉緑体は細胞全面をほぼ覆い、1-3 個のピレノイドを持つ。有性生殖は知られておらず、遊走子により無性的に増殖する。季節的消長は不明であるが、福井県のものでは 8 月-11 月に藻体が発生した記録がある。
- 分布域(県外) : 福井県。
- 県内の分布 : 宮古島、石垣島、与那国島。
- 生育環境 : 清澄な河川の流水中の石やコンクリート、染み出した湧水がつたい流れる壁面や湧水が流れる水路内のコンクリート。
- 学術的価値 : アオサ属の種はほとんどが海産や汽水産であることから、淡水産の本種は貴重な存在であり、宮古島、石垣島、与那国島の成立過程や、藻類の海から淡水への適応過程を考えるうえでも重要な存在である。
- 生育状況 : 宮古島、石垣島、与那国島に 1 カ所ずつ生育が確認されているが、石垣島の生育地では 5 年以上も発生が見られていない。それ以外の生育地では生育が確認できているが、畑や道路に近いことや生育範囲が狭いことから人間活動の影響を受けやすい状況にある。
- 減少の要因 : 開発、水質汚濁、雑草の被覆による生育阻害、過度な清掃。
- 備考 : Ichihara et al. (2009) は遺伝子塩基配列の変異の蓄積速度を利用して、本種と海産のアナアオサの系統が約 2500 万年前に共通の祖先種から分岐したと推定している。
- 文献 : Ichihara, K., S. Arai, M. Uchimura, E. J. Fay, H. Ebata, M. Hiraoka and S. Shimada, 2009. New species of freshwater *Ulva*, *Ulva limnetica* (Ulvales, Ulvophyceae) from the Ryukyu Islands, Japan. *Phycological Research*, 57: 94-103.
Ogawa, T., K. Ohki, and M. Kamiya, 2013. Differences of spatial distribution and seasonal succession among *Ulva* species (Ulvophyceae) across salinity gradients. *Phycologia*, 52: 637-651.
- 執筆者名 : 比嘉 敦
-

2) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 和名 : エビヤドリモ

- 分 類 : シオグサ目 シオグサ科 (緑藻類)
- 学 名 : *Cladogonium ogishimae* Hirose et Akiyama
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形 態 の 特 徴 : 淡水産のエビに寄生する。藻体は高さ 1-2 mm の糸状体で、円柱形の細胞が密に分枝する。細胞は直径 16-35 μm、長さ 40-180 μm で、葉緑体を欠く。仮根細胞は直径 6-16 μm、長さ 26-150 μm で、糸状に分枝しエビの筋肉組織中に広がる。遊走子嚢は葉緑体を含み長楕円形で長さ 440-790 μm、直径 130-210 μm、糸状体の頂端に形成される。遊走子は卵形で 4 本の鞭毛をもち、緑色素を含み、でんぷんを形成するが、発芽すると無色の糸状体となる。
- 分 布 域 (県 外) : 埼玉県、愛媛県、佐賀県、宮崎県、鹿児島県。
- 県 内 の 分 布 : 沖縄島。
- 生 育 環 境 : 河川の淡水エビに寄生。
- 学 術 的 価 値 : 日本固有種で、直立する糸状体は葉緑体を欠き、遊走子嚢は葉緑体をもつことから、菌類と藻類の中間的な特異な性質を持つ。エビと藻の寄生関係や生態的な情報は乏しく、両者の関係を調査研究する上で貴重な材料である。
- 生 育 状 況 : 本種が寄生しているエビは極めて少ないようである。
- 減 少 の 要 因 : 水質汚濁や乱獲などによって淡水エビが減少した場合、種の存続が維持できなくなることが考えられる。
- 備 考 : Boedeker et al. (2012) により、淡水産や汽水産のシオグサ科藻類の一部はアオミソウ科に移されているが、エビヤドリモ属については触れられていないため、ここではシオグサ科として扱った。
- 文 献 : 秋山 優・廣瀬弘幸・山岸高旺・平野 實, 1977. *Cladogonium ogishimae* Hirose et Akiyama. “日本淡水藻図鑑”, 廣瀬弘幸・山岸高旺編, 内田老鶴圃, 東京, 333.
 秋山 優・大谷修司, 1994. *Cladogonium ogishimae* Hirose et Akiyama. “藻類の生活史集成 第1巻 緑色藻類”, 堀 輝三編, 内田老鶴圃, 東京, 214-215.
 Boedeker C., C. J. O’Kelly, W. Star and F. Leliaert, 2012. Molecular phylogeny and taxonomy of the *Aegagropila* clade (Cladophorales, Ulvophyceae), including the description of *Aegagropilopsis* gen. nov. and *Pseudocladophora* gen. nov. *Journal of Phycology*, 48: 808-825.
 Hirose, H. and M. Akiyama, 1971. A colorless filamentous chlorophyceous alga, *Cladogonium ogishimae* gen. et sp. nov., parasitic on fresh-water shrimps. *Bot. Mag. Tokyo*, 84: 137-140.
 今井 正・大貫貴清・芹澤 (松山) 和世・芹澤如比古, 2017. 緑藻エビヤドリモ属藻類が外部寄生したミナミテナガエビ (十脚目, テナガエビ科) の種子島, 島間川からの再発見. 鹿児島県自然環境保全協会, 43 : 305-310.
 香村真徳, 2006. エビヤドリモ (新称). “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”, 沖縄県, 402.
 芹澤 (松山) 和世・今井 正・中曾雅之・芹澤如比古, 2014. 淡水産のエビに外部寄生するエビヤドリモ属 *Cladogonium* (緑藻, シオグサ科) の再確認. 藻類, 62 : 1-6.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

- 和 名 : チョウチンミドロ
- 分 類 : ハネモ目 チョウチンミドロ科 (緑藻類)
- 学 名 : *Dichotomosiphon tuberosus* (A. Braun ex Kützinger) A. Ernst
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態の特徴** : 藻体は管状の糸状体で通常二叉状に分枝（稀に三叉分枝）。体は密に交錯する無色の糸状付着根と、付着根から乱立する鮮緑色から濃緑色の直立糸からなる。直立糸の直径は40-110 μm。分枝部には明瞭なくびれがある。雌雄同株。生殖器官は直立糸の先端に生じ、直径290-350 μmの球形の生卵器と、長さ120-170 μm、直径30-50 μmの2-3個の円筒形の造精器からなる。卵は濃緑色で直径250-280 μm。
- 分布域（県外）** : 沖縄県以外の都道府県ではまだ知られていない。
- 県内の分布** : 沖縄島、宮古島、与那国島。
- 生育環境** : 水田や小川、湧水地、マングローブ帯の湿地。石灰岩地域の湧水と深くかかわりがあると考えられており（香村, 1998）、生育地には絶え間なく供給される清水と流れがあり、日当たりの良い場所または半日陰の環境下に生育する。
- 学術的価値** : 地質時代に浅海域に生育していたものが地殻変動によって陸封されたものと考えられており（新崎, 1953）、色素の性質の上からも本種の陸封化は支持されているため（横浜, 1982）、系統と進化を探る上に極めて貴重な種である。
- 生育状況** : 生育地の水田や湿地、小川が都市開発によって減少している。
- 減少の要因** : 開発、水位減少、水質悪化、雑草の被覆による生育障害、過度な清掃。
- 備考** : 国外では欧州や北米に分布する。
- 文献** : 秋山 優・廣瀬弘幸・山岸高旺・平野 實, 1977. *Dichotomosiphon tuberosus* (Brebisson) Ernst チョウチンミドロ. “日本淡水藻図鑑”, 廣瀬弘幸・山岸高旺編, 内田老鶴圃, 東京, 335.
 新崎盛敏, 1953. 提灯ミドロの地理的分布と種の生成時代についての考察. 科学, 23 : 530-531.
 Ernst, A., 1902. Siphoneen-Studien. Beihefte Bot. Centralb., 13: 115-148, Taf. 6-10.
 香村真徳, 1998. 湧井戸（カー）に依存する貴重藻類2種とその保護について. (財) 沖縄県環境科学センター報, 2 : 58-74.
 香村真徳, 2006. チョウチンミドロ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”, 沖縄県, 405-406.
 岸本和雄・藤田喜久・香村真徳, 2017. チョウチンミドロ *Dichotomosiphon tuberosus* (A. Braun ex Kützing) A. Ernst の宮古島からの新産地報告. 沖縄生物学会誌, 55 : 27-37.
 横浜康継, 1982. 海藻の謎 - 緑への道. 三省堂, 東京, 235 pp.
 吉田忠生, 2015. チョウチンミドロ. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 381.

執筆者名 : 比嘉 敦

【紅藻類】

1) 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 和名** : オオイシソウモドキ
- 分類** : オオイシソウ目 オオイシソウ科 (紅藻類)
- 学名** : *Compsopogonopsis japonica* Chihara
- カテゴリ** : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 藻体は青緑色～暗緑色で、よく分枝する直立糸状体と小さな付着器からなる。主軸の太さは0.2-1 mm、長いものでは40 cmにも達する。成熟した主軸は、1-2層の細胞からなる皮層と中

軸細胞によって構成される。皮層は中軸細胞からのびた仮根状の突起が中軸細胞を覆うように発達する特徴をもつ。有性生殖は知られておらず、皮層細胞の不等分裂によって単孢子嚢が形成され、そこから放出される単孢子により無性的に増殖する。また、関東と沖縄県では繁茂する時期が異なるとされる。

- 分布域（県外）： 福島県、群馬県、埼玉県、鹿児島県。
- 県内の分布： 沖縄島、屋我地島、石垣島。
- 生育環境： 湧水地や山間から流れる清澄な小川の中。
- 学術的価値： オオイシソウモドキ属には世界で3種が知られ、いずれも淡水産の希少種である。オオイシソウモドキは日本固有種である。石垣島は国内で第二番目に発見された産地であり、今のところ本種の分布の南限にあたる。
- 生育状況： 瀬戸（1982）により、石垣島のある湧水井戸では水面から約20 cmの深さまでの壁面一面に生育していることが報告されたが、1995年以降、同井戸の水質は悪化し本種の生育がみられず、オオカナダモが繁茂している状態にある。
沖縄島および石垣島のいずれにおいても、生育地が少ないうえに生育範囲が狭く、生育が不安定である。
- 減少の要因： 河川開発や水質の悪化。
- 備考： Necchi et al. (2013) は、本種をオオイシソウ *Compsopogon caeruleus* (Balbis) Montagne のシノニムとしている。しかし、ここでは歴史的な分類群を尊重して、オオイシソウモドキとして扱った。
- 文献： Chihara, M. 1976. *Compsopogonopsis japonica*, a new species of fresh water red alga. *Journal Japanese Botany*, 51: 289-294.
北山太樹・吉田忠生, 2015. オオイシソウモドキ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 274.
熊野 茂, 2000. *Compsopogonopsis japonica*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 21.
熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007年度版(植物 II・藻類・淡水産紅藻)について. *藻類*, 55: 207-217.
中村 武, 1993. *Compsopogonopsis japonica* Chihara (オオイシソウモドキ). “藻類の生活史集成 第2巻 褐藻・紅藻類”, 堀 輝三(編), 内田老鶴圃, 東京, 174-175.
中村 武, 1996. 絶滅の恐れのある植物群の生育状況と保全について. *南教育センター研究報告紀要*, 9: 20-23.
Necchi, O. Jr., A. S. G. Fo, E. D. Salomaki, J. A. West, M. Aboal and M. L. Vis, 2013. Global sampling reveals low genetic diversity within *Compsopogon* (Compsopogonales, Rhodophyta). *European Journal of Phycology*, 48: 152-162.
瀬戸良三, 1982. 沖縄産のオオイシソウ科の藻類について. *藻類*, 30: 57-62.
- 執筆者名： 比嘉 敦

和名： **イバラオオイシソウ**

分類： オオイシソウ目 オオイシソウ科 (紅藻類)

学名： *Compsopogon aeruginosus* (J. Agardh) Kützing

カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴：藻体は暗緑色で、円盤型の仮根がよく発達し、1-数本の直立糸状体が出る。直立糸状体は 25-50 cm で分枝は多い。成熟した枝に多くの刺状小枝を持つこと、単胞子が小さいこと (10-15 μm) で近似種と区別される。

分布域 (県外)：滋賀県、島根県、愛媛県、鹿児島県。

県内の分布：かつては沖縄県内に分布していたとされるが、詳細な生育地は不明。

生育環境：県内の生育環境は不明であるが、島根県では湖岸の浅い水中の小石や杭などに着生していることが報告されている。また、愛媛県では塩田跡地の調整池に生育していることが報告されている。

学術的価値：国内では採集例が少なく、生態的な知見が乏しい。また、分類学的にも混乱しており、様々な議論が交わされている。

生育状況：沖縄県内における生育状況は不明。

減少の要因：不明。

備考：Necchi et al. (2013) は、本種をオオイシソウ *Compsopogon caeruleus* (Balbis) Montagne のシノニムとしている。しかし、ここでは歴史的な分類群を尊重して、イバラオオイシソウとして扱った。国外ではキューバ、欧州、東アジア、フィリピン、インドネシア、インド、北米、中米、南米に分布する。

文献：北山太樹・大谷修司・吉田忠生, 2015. イバラオオイシソウ. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 270.

小林真吾, 2012. 愛媛県におけるイバラオオイシソウ *Compsopogon aeruginosus* (J. Agardh) Kützinger の分布記録. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 17: 25-27.

熊野 茂, 2000. *Compsopogon aeruginosus*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 24-26.

熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版 (植物 II・藻類・淡水産紅藻) について. 藻類, 55: 207-217.

熊野 茂・香村真徳・新井章吾・佐藤裕一・飯間雅文・洲澤 譲・洲澤多美子・羽生田岳昭・三谷 進, 2002. 1995 年以降に確認された日本産淡水紅藻の産地について. 藻類, 50: 29-36.

中村 武・千原光雄, 1983. 淡水産紅藻オオイシソウ属の日本新産 2 種について. 藻類, 58: 54-61.

Necchi, O. Jr., A. S. G. Fo, E. D. Salomaki, J. A. West, M. Aboal and M. L. Vis, 2013. Global sampling reveals low genetic diversity within *Compsopogon* (Compsopogonales, Rhodophyta). *European Journal of Phycology*, 48: 152-162.

吉田忠生, 2000. イバラオオイシソウ. “改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック. 植物 II (維管束植物以外) 蘚苔類・藻類・地衣類・菌類”, 環境庁 (編), 自然環境研究センター, 東京, 252.

執筆者名：比嘉 敦

和名：インドオオイシソウ

- 分 類 : オオイシソウ目 オオイシソウ科 (紅藻類)
- 学 名 : *Compsopogon hookeri* Montagne
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形 態 の 特 徴 : 藻体は暗緑色で、まばらに分枝する直立糸状体と小さな付着器からなる。主軸は太さ約 0.5-2 mm、長さは 50 cm に達する。成熟した主軸は、1-2 層の細胞からなる皮層と中軸細胞によって構成される。成熟すると直径 13-19 μm の単孢子嚢と直径 8-12 μm の小孢子嚢の 2 種類の孢子嚢を形成する。さらに小孢子嚢は囊塊もつくる。
- 分 布 域 (県 外) : 千葉県、静岡県、福井県、島根県、鹿児島県。
- 県 内 の 分 布 : 宮古島、西表島。
- 生 育 環 境 : 池沼内の石や木片、植物等、また染み出した湧水がつたい流れる壁面や湧水が流れる水路内のコンクリートや他の大型藻類などに着生。
- 学 術 的 価 値 : 単孢子により無性的に増殖することが知られているが、小孢子がどのような役割を担っているのか分かっていない。また、分類学的にも混乱しており、様々な議論が交わされている。
- 生 育 状 況 : 宮古島と西表島に 1 カ所ずつ生育が確認されている。いずれの生育地も規模が小さく、生育範囲が狭い。
- 減 少 の 要 因 : 県内では近年に生育が確認されたため、今後の動態を注視する必要がある。
- 備 考 : Necchi et al. (2013) は、本種をオオイシソウ *Compsopogon caeruleus* (Balbis) Montagne のシノニムとしている。しかし、ここでは歴史的な分類群を尊重して、インドオオイシソウとして扱った。国外ではフランス、インド、東アジアに分布する。
- 文 献 : 北山太樹・大谷修司・吉田忠生, 2015. インドオオイシソウ. “レッドデータブック 2014 – 日本の絶滅のおそれのある野生生物–9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 272.
熊野 茂, 2000. *Compsopogon hookeri*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 31.
熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版 (植物 II・藻類・淡水産紅藻) について. 藻類, 55: 207-217.
中村 武, 1993. *Compsopogon hookeri* Montagne (インドオオイシソウ). “藻類の生活史集成第 2 巻 褐藻・紅藻類”, 堀 輝三 (編), 内田老鶴圃, 東京, 172-173.
中村 武・千原光雄, 1983. 淡水産紅藻オオイシソウ属の日本新産 2 種について. 藻類, 58: 54-61.
Necchi, O. Jr., A. S. G. Fo, E. D. Salomaki, J. A. West, M. Aboal and M. L. Vis, 2013. Global sampling reveals low genetic diversity within *Compsopogon* (Compsopogonales, Rhodophyta). *European Journal of Phycology*, 48: 152-162.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

- 和 名 : ミナミホソカワモズク
- 分 類 : カワモズク目 カワモズク科 (紅藻類)
- 学 名 : *Batrachospermum periplocum* (Skuja) Necchi
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 形態の特徴** : 配偶体の藻体は雌雄同株で、青緑色～暗緑色、粘性は中庸。長さ 2.5-9.5 cm、太さ 400-1300 μm、まばらに偽二叉分枝し、輪生枝叢は倒円錐形、樽形で密集する。皮層細胞糸がよく発達し、中軸から遊離する。造果器をつける枝はまっすぐで、5-11 個の円盤形あるいは樽形細胞からなり、長さ 20-75 μm、周心細胞まれに輪生枝、あるいは皮層細胞糸の基部近くの細胞から出る。無柄で棍棒形の受精毛を伴った造果器は、基部の太さ 4.5-7 μm、頂部の太さ 7-12 μm、長さ 40-60 μm。果孢子体には、放射状に 3-5 回分枝して有限成長をする造胞糸と、皮層上を這い無限成長をする造胞糸の 2 種類の造胞糸がみられる。果孢子嚢は楕円形あるいは倒卵形で、太さ 9-13 μm、長さ 12-16 μm。精子嚢は卵形あるいは球形で太さ 5-9 μm、2 次輪生枝まれに 1 次輪生枝の先端、または先端近くにつく。季節的消長は不明であるが、秋季から春季に可視的な配偶体が出現し、夏季は微視的な孢子体（シャントランシア期）で過ごすのが一般的と考えられている。
- 分布域（県外）** : 沖縄県以外の都道府県ではまだ知られていない。
- 県内の分布** : 沖縄島。
- 生育環境** : 周年水位変動が少ない浅い池。
- 学術的価値** : 本種はこれまでに沖縄島とブラジルにしか生育が知られておらず、植物地理学上きわめて貴重な存在である。また、生活史などの生態学的な知見が乏しい。
- 生育状況** : 県内における分布は、今のところ 1 か所しか確認されていない。
- 減少の要因** : 開発、水質汚濁、埋没、乾燥など。
- 備考** : 国外ではブラジルに分布する。

- 文献** : 熊野 茂, 2000. *Batrachospermum periplocum*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 140-143.
- 熊野 茂, 2015. ミナミホソカワモズク. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 284.
- 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版 (植物 II・藻類・淡水産紅藻) について. 藻類, 55: 207-217.
- Necchii, O. Jr., 1990. Geographic distribution of the genus *Batrachospermum* (Rhodophyta, Batrachospermales) in Brazil. *Revista Brasil, Biol.*, 49: 663-669.

執筆者名 : 比嘉 敦

- 和名** : ヤエヤマカワモズク
- 分類** : カワモズク目 カワモズク科 (紅藻類)
- 学名** : *Batrachospermum tortuosum* Kumano var. *majus* Kumano
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 形態の特徴** : 配偶体の藻体は雌雄同株で、粘性があり、鮮緑色～暗緑色。長さ 4-7 cm、太さ 330-600 μm、密に不規則に分枝する。造果器をつける枝はやや湾曲し、2-4 個の円盤形または樽形細胞からなり、周心細胞から出る。被覆枝は多数で短い。造果器は基部で太さ 8-9 μm、頂部で太さ 6-9 μm、長さ 33-60 μm、受精毛は根棒形、不明瞭な柄があり、しばしば基部で曲がる。果孢子体は中軸部に 1 個形成され、球形または半球形、太さ 220-300 μm、長さ 170-280 μm。果孢子嚢は球形または卵形、太さ 10-16 μm、長さ 14-19 μm。精子嚢は球形で太さ 5-7 μm、輪生枝の先端

につく。季節的消長は不明であるが、秋季から春季に可視的な配偶体が出現し、夏季は微視的な孢子体（シヤントランシア期）で過ごすのが一般的と考えられている。

- 分布域（県外）： 沖縄県以外の都道府県ではまだ知られていない。
- 県内の分布： 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生育環境： 湧水地や山間を流れる清澄な小川中の礫上等に生育。
- 学術的価値： 今のところ沖縄島、石垣島、西表島にのみ産する沖縄固有種である。生活史など生態的な知見が乏しい。
- 生育状況： 県内における分布状況は不明なところが多いが、沖縄島、石垣島、西表島に分布が知られている。いずれの生育地についてもその生育範囲は非常に狭い。生育地によっては、水域の上流に畜舎が所在するため水質の悪化が懸念されるところや、年によって配偶体の発生を確認できない場合もある。
- 減少の要因： 開発、水質汚濁、埋没、乾燥など。
- 備考： かつてカワモズク属のヒブリダ節とコントルタ節に属していた種は、Entwisle et al. (2009) により *Kumanoa* 属に編入させることが提案された。しかし、本種についてはまだ分子系統解析が行われていないことから、*Kumanoa* 属へ編入するために今後補足する必要がある。
- 文献： Entwisle, T. J., M. L. Vis, W. B. Chiasson, O. Necchi Jr. and A. R. Sherwood, 2009. Systematics of the Batrachospermales (Rhodophyta) — A synthesis. *Journal of Phycology*, 45: 704-715.
 香村真徳, 2006. ヤエヤマカワモズク. “改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（菌類編・植物編）-レッドデータおきなわ-”, 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 沖縄県, 409.
 Kumano, S., 1982. Two taxa of the Section Contorta of the genus *Batrachospermum* (Rhodophyta, Nemalionales) from Iriomote Jima and Ishigaki Jima, subtropical Japan. *Japanese Journal of Phycology*, 30: 181-187.
 熊野 茂. 2000. *Batrachospermum tortuosum* Kumano var. *majus*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 184-185.
 熊野 茂, 2015. ヤエヤマカワモズク. “レッドデータブック 2014 —日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）”, 環境省（編）, ぎょうせい, 東京, 287.
 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版（植物 II・藻類・淡水産紅藻）について. *藻類*, 55: 207-217.

執筆者名： 比嘉 敦

- 和名： ミナミイトカワモズク
- 分類： カワモズク目 カワモズク科（紅藻類）
- 学名： *Kumanoa gracillima* (W. West & G. S. West) Entwisle et al.
- カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形態の特徴： 配偶体の藻体は雌雄同株まれに異株、粘性は中庸、長さ 2.5-12.5 cm、太さ 200-450 μm、密に不規則に分枝し、灰色がかった緑色。造果器をつける枝は螺旋状に捻れ、5-8 個の円盤形、あるいは樽形細胞からなり、周細胞から出る。造果器は基部で太さ 4-7 μm、頂部で太さ 6-10 μm、長さ 35-85 μm、受精毛は円柱形、棍棒形、無柄あるいは有柄。果孢子体は 1 個で密に集合

し、半球形、太さ 110-230 μm、長さ 200-470 μm。果孢子嚢は倒卵形で太さ 8-12 μm、長さ 12-17 μm。精子嚢は球形で太さ 5-7 μm、2 次輸生枝まれに 1 次輸生枝の先端につく。詳細な季節的消長は不明だが、秋季から春季に可視的な配偶体が出現し、夏季は微視的な孢子体（シャントランシア期）で過ごすのが一般的と考えられている。

- 分布域（県外）： 沖縄県以外の都道府県ではまだ知られていない。
- 県内の分布： 沖縄島。
- 生育環境： 湧水地や山間を流れる清澄な小川中の礫上等に生育。
- 学術的価値： 本種の分布域は地理的に離れており、植物地理学的に貴重である。また、生活史など生態的な知見が乏しい。
- 生育状況： 県内における分布は不明なところが多いが、沖縄島の数カ所で生育が確認されている。しかし、いずれの生育地においても生育範囲が非常に狭い。また、年によって配偶体の発生を確認できない生育地もある。
- 減少の要因： 開発、水質汚濁、埋没、乾燥など。
- 備考： Entwisle et al. (2009) により分類学的再検証が行われ、*Batrachospermum gracillimum* West & G. S. West から現学名へ変更された。国外ではアンゴラ、ブラジルに分布する。
- 文献： Entwisle, T. J., M. L. Vis, W. B. Chiasson, O. Necchi Jr. and A. R. Sherwood, 2009. Systematics of the Batrachospermales (Rhodophyta) – A synthesis. *Journal of Phycology*, 45: 704-715.
熊野 茂, 2000. *Batrachospermum gracillimum*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 214-217.
熊野 茂, 2015. ミナミイトカワモズク. “レッドデータブック 2014 –日本の絶滅のおそれのある野生生物–9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 288.
熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版(植物 II・藻類・淡水産紅藻)について. 藻類, 55: 207-217.
- 執筆者名： 比嘉 敦

- 和名： **イリオモテカワモズク**
- 分類： カワモズク目 カワモズク科 (紅藻類)
- 学名： *Kumanoa iriomotensis* (Kumano) M. L. Vis, Necchi, W. B. Chiasson et Entwisle
- カテゴリ： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 形態の特徴： 配偶体の藻体は赤褐色で粘性があり、長さ 4-5 cm、太さ 150-240 μm、やや密に不規則に分枝する。雌雄同株。造果器をつける枝はかなりねじれ、長く、8-12 個の円盤形、あるいは樽形細胞からなり、周心細胞から出る。造果器は基部で太さ 5 μm、頂部で太さ 6-8 μm、長さ 26-40 μm、受精毛は根棒形、不明瞭な柄があり、しばしば基部で曲る。果孢子体は 1 個で半球形、太さ 100-220 μm、長さ 70-130 μm。果孢子嚢は楕円形から卵形、太さ 12-14 μm、長さ 16-19 μm。精子嚢は球形で太さ 3-7 μm、輸生枝に頂生あるいは側生する。季節的消長は不明であるが、秋季から春季に可視的な配偶体が出現し、夏季は微視的な孢子体で過ごすのが一般的と考えられている。
- 分布域（県外）： 沖縄県以外の都道府県ではまだ知られていない。
- 県内の分布： 沖縄島、西表島。

- 生育環境 : 山間の溪流中などで、樹冠が開き陽が当たるギャップに生育している。
- 学術的価値 : 本種の分布域は距離的に離れており、植物地理学上きわめて貴重な存在である。また、生活史などの生態学的な知見が乏しい。
- 生育状況 : 県内における分布状況は不明なところが多いが、沖縄島では数カ所、西表島では1カ所のみ生育地がある。しかし、タイプ産地である西表島で2015年に行われた調査では生育が確認されていない。沖縄島では、年によって配偶体の発生を確認できない生育地もある。
- 減少の要因 : 開発、水質汚濁、埋没、乾燥など。
- 備考 : Vis et al. (2012) により分類学的再検証が行われ、*Batrachospermum iriomotense* Kumano から現学名へ変更された。国外ではマレーシアや南アフリカに分布。
- 文献 : 香村真徳. 2006. イリオモテカワモズク. “改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (菌類編・植物編) -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県, 420.
- Kumano, S., 1982. Two taxa of the Section Contorta of the genus *Batrachospermum* (Rhodophyta, Nematinales) from Iriomote Jima and Ishigaki Jima, subtropical Japan. *Japanese Journal of Phycology*, 30: 181-187.
- 熊野 茂, 2000. *Batrachospermum iriomotense*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 196.
- 熊野 茂. 2015. イリオモテカワモズク. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 281.
- 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007年度版(植物 II・藻類・淡水産紅藻)について. *藻類*, 55: 207-217.
- Vis, M. L., O. Necchi Jr., W. B. Chiasson and T. J. Entwisle, 2012. Molecular phylogeny of the genus *Kumanoa* (Batrachospermales, Rhodophyta). *Journal of Phycology*, 48: 750-758.

執筆者名 : 比嘉 敦

和名 : ミナミクロカワモズク

分類 : カワモズク目 カワモズク科 (紅藻類)

学名 : *Kumanoa mahlacensis* (Kumano & Bowden-Kerby) M. L. Vis, Necchi, W. B. Chiasson et Entwisle

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 配偶体の藻体は雌雄同株、粘性は中庸、長さ約 6 cm、太さ 250-400 μm、密に不規則に分枝し、灰色がかった緑色を呈す。造果器をつける枝は強く捻れ、5-15 個の樽形細胞からなり、周心細胞から出る。造果器は基部で太さ 4-5 μm、頂部で太さ 7-8 μm、長さ 25-40 μm、受精毛は楕円形、壺形、やや明瞭な柄あり。果孢子体は中軸部に 1-2 個形成され、球形または半球形、太さ 140-170 μm、長さ 80-160 μm。果孢子嚢は倒卵形で太さ 7-12 μm、長さ 12-14 μm。精子嚢は球形で太さ 4-6 μm、輪生枝に頂生または側生する。詳細な季節的消長は不明であるが、生育地の様子から配偶体が見られるのは主に秋季から春季。夏季は微視的な孢子体 (シャントランシア期) で過ごすのが一般的と考えられている。

分布域 (県外) : 沖縄県以外の都道府県ではまだ知られていない。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島。

- 生育環境 : 山間や湿地内を流れる小川の中や、湧水地および湧水が流れ出る水路。
- 学術的価値 : 沖縄島の産地が熱帯性の本種の北限の生育地と考えられている。生活史など生態的な知見が乏しい。
- 生育状況 : 県内における分布は不明なところが多いが、沖縄島では数カ所、宮古島では1カ所のみで生育が確認されている。いずれの生育地においても生育範囲は非常に狭い。
- 減少の要因 : 開発、水質汚濁、埋没、乾燥など。
- 備考 : Vis et al. (2012) により分類学的再検証が行われ、*Batrachospermum mahlacense* Kumano & Bowden-Kerby から現学名へ変更された。国外ではアメリカ、グアム、パラオ、タイに分布する。
- 文献 : 熊野 茂, 2000. *Batrachospermum mahlacense*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 212.
 熊野 茂, 2015. ミナミクロカワモズク. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 283.
 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版 (植物 II・藻類・淡水産紅藻) について. 藻類, 55: 207-217.
 Vis, M. L., O. Necchi Jr., W. B. Chiasson and T. J. Entwisle, 2012. Molecular phylogeny of the genus *Kumanoa* (Batrachospermales, Rhodophyta). *Journal of Phycology*, 48: 750-758.
- 執筆者名 : 比嘉 敦

- 和名 : シマチスジノリ
- 分類 : チスジノリ目 チスジノリ科 (紅藻類)
- 学名 : *Thorea gaudichaudii* C. Agardh
- 方言名 : すぬい (那覇市繁多川、首里金城町)、かーすぬい (西原町太田)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 形態の特徴 : 配偶体の藻体は紐状で暗紅紫色、体長は 60 cm ほどになり、基部から数回不規則に分枝する。皮層にある同化糸は長さ 300-800 μm になる。雌雄同株。単孢子嚢は同化糸の基部に作られる。稀に有性生殖器官が見られる場合もあるが、ほとんどが単孢子などで無性的に増殖しているようである。藻体は周年観察されるが、夏季には少なくなる傾向が見られる。
- 分布域 (県外) : 鹿児島県。
- 県内の分布 : 沖縄島、宮城島、宮古島、波照間島。
- 生育環境 : 清澄な湧水の井戸で見られ、半日陰の壁面や底の礫などに生育する。
- 学術的価値 : 天然記念物に指定されている淡水域の希少な藻類である。グアムをタイプ産地とし、フィリピンと沖縄県、鹿児島県に分布域を持つため、地理的分布の上で重要である。タイプ産地であるグアム島での生育が河川中であるのに対し、沖縄県や鹿児島県では湧水井戸や湧水中である点で、きわめて特異である。
- 生育状況 : 沖縄島と宮城島からはこれまでに約 30 カ所で生育の記録や確認があったが、ほとんどが消失し、近年で生育がみられるのは 10 カ所程度になっている。宮古島、波照間島ではそれぞれ 1 カ所のみで生育が確認されている。生育地によっては配偶体の発生が長年見られなかったが、何らかのきっかけで再発生したところもある。

- 減少の要因 : 湧井戸の消失や封印、生育地周辺の樹木の繁茂や伐採による光条件の変化、水質汚濁、水量減少、過度な清掃。
- 備考 : 波照間島のはチスジノリ属の一種として報告されており、シマチスジノリとしての正式な報告はない。宮古島のは沖縄島や鹿児島県のものとは形態的に異なる部分も指摘されており、宮古島産のものを変種とするか、沖縄島や鹿児島県産をその変種とするかという議論もある。様々な今後の課題はあるが、ここではこれらをすべてシマチスジノリとして扱った。国外ではグアム島、セブ島、ヤップ島に分布する。
- 文献 : 香村真徳, 1998. 湧井戸 (カー) に依存する貴重藻類 2 種とその保護について. 財団法人 沖縄環境科学センター報, 2 : 58-74.
 香村真徳, 2006. シマチスジノリ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”, 沖縄県, 399-400.
 熊野 茂, 2000. *Thorea gaudichaudii*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 291.
 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版 (植物 II・藻類・淡水産紅藻) について. 藻類, 55: 207-217.
 右田清治・当真 武, 1990. 紅藻シマチスジノリの室内培養. 長崎大学水産学部研究報告, 68: 7-12.
 須田彰一郎・比嘉 敦, 2015. シマチスジノリ (チスジノリ目, 紅藻綱) ~沖縄の新産地, 系統, 形態について~. 沖縄生物学会誌, 53 : 61-64.
 洲澤多美枝・洲澤 譲・中島 淳・竹 盛隆・熊野 茂, 2010. 鹿児島県与論島初記録のシマチスジノリ *Thorea gaudichaudii* C. Agardh. 藻類, 58 : 141-143.
 寺田竜太, 2015. シマチスジノリ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 295.

執筆者名 : 比嘉 敦

和名 : オキチモズク
 分類 : チスジノリ目 チスジノリ科 (紅藻類)
 学名 : *Nemalionopsis tortuosa* Yoneda & Yagi
 方言名 : かーすぬい (国頭村辺野喜)
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 可視的な直立糸状体はひも状で基部から 2~3 回分枝する。太さは主軸で 0.5~0.8 mm、長さ 30 cm に達する。体色は暗紅紫色。体は細胞列が縦に走り密に錯綜する髓層と、髓の細胞列から発出する多数の同化糸により形成される皮層からなる。同化糸の先端に単胞子が作られる。Yoshizaki (2004) により有性生殖器官も確認されている。季節的消長が知られており、秋季から春季に直立糸状体が発生し、夏季は微視的な匍匐盤状体で過ごす。
 シマチスジノリと似ているが、同化糸の分枝の仕方と単胞子嚢の形成される位置が異なる。オキチモズクでは同化糸が先端付近で密に分枝、単胞子嚢は同化糸の先端に作られる。それに対し、シマチスジノリでは同化糸の分枝が疎らで、単胞子嚢は同化糸の基部に形成される。

分布域 (県外) : 東京都、愛媛県、福岡県、熊本県、長崎県、鹿児島県。

- 県内の分布 : 沖縄島、西表島。
- 生育環境 : 清澄な河川の上流域から中流域で、緩く流れる浅い河床の礫上やコンクリート護岸等に着生。樹木などで光が弱められる半日陰の場所に局所的に生育する。
- 学術的価値 : 本種の分布域は地理的に離れており、植物地理学的に貴重である。また、オキチモズク属には、これまでフィリピンをタイプ産地とする *N. shawi* Skuja とオキチモズクの2種が知られる。須田ら (2008) は沖縄産のものが、形態的に両種の間隔的な形態形質を示すことを報告し、オキチモズク属の種分類の再検討が必要であることを指摘している。
- 生育状況 : 沖縄島内では数河川で本種の生育が確認されていたが、ダム建設後ダム湖に水没したところや、年によって配偶体の発生を確認できないところもあり、生育状況は安定していない。ある集落では、本種を食用にしていたとされていることから、生育地によってはかつて豊富に生育していたようである。
- 減少の要因 : ダム湖に水没、干ばつや植物の被覆による生育阻害、河川開発、水質汚濁。
- 備考 : タイプ産地である愛媛県では絶滅したとされている。国外ではアメリカに分布する。
- 文献 : 林 直也・田中次郎, 2015. 絶滅危惧種の淡水藻類オキチモズク (チスジノリ科, 紅藻) を東京都で初確認. 植物研究雑誌, 90 : 134-136.
- 飯間雅文, 2006. 雲仙岳の藻類～絶滅危惧種淡水紅藻オキチモズクの生育現況について. “雲仙岳の生物”, 長崎県生物学会 (編), 長崎新聞社, 13-16.
- 飯間雅文・吉田忠生, 2015. オキチモズク. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 294.
- 香村真徳, 2006. オキチモズク. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”, 沖縄県, 398-399.
- 熊野 茂, 2000. *Nemalionopsis tortuosa*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 292-293.
- 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」 (RL) 2007 年度版 (植物 II・藻類・淡水産紅藻) について. 藻類, 55: 207-217.
- Shimada S., K. Ichihara, Y. Masakiyo, M. Iima, T. Yoshida and S. Kumano, 2012. Threatened species *Nemalionopsis tortuosa* (Thoreales, Rhodophyta) in Japan, new locality and current condition of its all reported habitats. Algal Resources, 5: 9-15.
- 須田彰一郎・比嘉清文・久場安次・横田昌嗣・香村真徳・熊野 茂, 2008. 沖縄県に生息する絶滅危惧藻類オキチモズク (チスジノリ目, 紅藻綱) について. 沖縄生物学会誌, 46: 23-32.
- 八木繁一・米田勇一, 1940. 淡水紅藻の一新種オキチモズクについて. 植物分類地理, 19 : 82-86.
- Yoshizaki, M., 2004. Thallus structure and reproductive organs of *Nemalionopsis tortuosa* (Rhodophyta). Bulletin of the National Science Museum Series B (Botany), 30: 55-62.
- 執筆者名 : 比嘉 敦

2) 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 和名 : オオイシソウ
- 分類 : オオイシソウ目 オオイシソウ科 (紅藻類)

学 名 : *Compsopogon caeruleus* (Balbis) Mont.
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 藻体は青緑色から暗青緑色で、小さな円盤状の付着器と直立糸状体からなる。直立糸状体は不規則に枝分かかれし、太さ 1-3 mm、長さは 30 cm 以下のものが多いが、時には 1 m を超えることもある。成熟すると中軸細胞と 1-2 (稀に 3) 層の皮層細胞を分化させ、皮層細胞の不等分裂により単孢子嚢が形成される。有性生殖は知られておらず、単孢子により無性的に繁殖する。

分布域 (県外) : 国内に広く分布する。

県内の分布 : 伊是名島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 主に小河川や水路などの流水中の石やコンクリート、水生植物などに着生するが、池沼などの止水環境でも水生植物などに着生していることがある。河口などの感潮域にも生育する。

学術的価値 : 分類学的にも混乱しており、様々な議論が交わされている。

生育状況 : いずれの生育地でも生育範囲が狭いため、開発などで埋立や埋没等の影響を受けやすい。

減少の要因 : 開発、水質汚濁、埋没、乾燥など。

備考 : 国外では熱帯から温帯に広く分布する。

文献 : 秋山 優, 1959. 汽水系宍道湖に見られるオオイシソウの生態. 藻類, 7: 71-74.
 比嘉 敦・岩永洋志登・岩橋浩輔・山本広美・香村真徳, 2015. 国指定天然記念物「塩川」(スガ)における植物の生育状況. 沖縄生物学会誌, 53: 65-76.
 香村真徳, 2006. オオイシソウ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”, 沖縄県, 408. 山本広美・
 北山太樹, 2015. オオイシソウ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 363.
 熊野 茂, 2000. *Compsopogon caeruleus*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 33-34.
 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版 (植物Ⅱ・藻類・淡水産紅藻) について. 藻類, 55: 207-217.
 熊野 茂・廣瀬弘幸, 1977. *Compsopogon oishii* Okamura オオイシソウ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺 (編), 内田老鶴圃, 東京, 163.
 Necchi, O. Jr., A. S. G. Fo, E. D. Salomaki, J. A. West, M. Aboal and M. L. Vis, 2013. Global sampling reveals low genetic diversity within *Compsopogon* (Compsopogonales, Rhodophyta). *European Journal of Phycology*, 48: 152-162.

執筆者名 : 比嘉 敦

和 名 : アオカワモズク
 分 類 : カワモズク目 カワモズク科 (紅藻類)
 学 名 : *Batrachospermum helminthosum* Bory
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態の特徴 : 配偶体の藻体は十数 cm で不規則に分枝し、単列性の中軸と輪生枝からなり、ビーズが連なったような外観を呈する。雌雄同株または異株で、粘性があり青緑色～暗緑色。造果器をつける

枝はまっすぐで、1-5細胞からなり、周心細胞または輪生枝の下部細胞から出る。造果器は有柄で、長さ40.2-79.0 μm、太さ4.8-13.7 μmの円柱形から棍棒形の受精毛を持つ。果孢子体は中軸につき、長さ102-420 μm、太さ120-415 μm。果孢子嚢は倒卵形で、長さ9.8-27.6 μm、太さ5.3-16.9 μm。季節的消長が知られており、秋季から春季に可視的な配偶体が出現し、夏季はほとんどの配偶体は消失し微視的な孢子体（シャントランシア期）で過ごす。

- 分布域（県外）：日本国内に広く分布。
- 県内の分布：沖縄島、石垣島。
- 生育環境：山間を流れる清澄な小川の中や、清澄な河川。
- 学術的価値：熊野ら（2002）は、本種について沖縄島内でも形態的に異なる2つのタイプの存在を示しており、分類学的な再検討の必要性を報告している。またHanyuda et al.（2004）により、沖縄島産の本種には、他府県産のものとは異なるハプロタイプも存在することが示されている。加えて、淡水産大型紅藻類の分布拡大に関わる分散様式も不明であるため、分類学的、生物地理学的、生態学的にも貴重である。
- 生育状況：県内における分布は不明なところが多いが、沖縄島では複数カ所の生育地が確認されており、石垣島でも生育が確認されている。いずれの生育地においてもその生育範囲は非常に狭い。
- 減少の要因：開発、水質汚濁、埋没、乾燥など。
- 備考：国外ではフランス、ベルギー、ドイツ、イタリア、ポーランド、ポルトガル、スウェーデン、インド、中国、韓国、オーストラリア、カナダ、アメリカ、ブラジルに分布する。
- 文献：Hanyuda, T., Y. Suzawa, T. Suzawa, S. Arai, H. Sato, K. Ueda & S. Kumano, 2004. Biogeography and taxonomy of *Batrachospermum helminthosum* (Batrachospermales, Rhodophyta) in Japan inferred from rbcL gene sequences. *Journal of Phycology*, 40: 581-588.
- 熊野 茂, 2000. *Batrachospermum helminthosum*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 155-157.
- 熊野 茂, 2015. アオカワモズク. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 384.
- 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007年度版(植物 II・藻類・淡水産紅藻)について. *藻類*, 55: 207-217.
- 熊野 茂・香村真徳・新井章吾・佐藤裕一・飯間雅文・洲澤 譲・洲澤多美子・羽生田岳昭・三谷 進, 2002. 1995年以降に確認された日本産淡水紅藻の産地について. *藻類*, 50: 29-36.
- 執筆者名：比嘉 敦

- 和名：チャイロカワモズク
- 分類：カワモズク目 カワモズク科 (紅藻類)
- 学名：*Sheathia arcuata* (Kyllin) Salomaki et M. L. Vis
- カテゴリー：絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

- 形態の特徴：配偶体の藻体は十数 cm で粘性をもち不規則に分枝し、単列性の中軸と輪生枝からなり、ビーズが連なったような外観を呈する。雌雄異株で、鮮褐色から暗褐色。中軸には皮層があり円筒形の細胞のみからなる。造果器をつける枝は分化せず、長さ5-9細胞で、造果器は長さ28-39 μm、太さ6-12 μmの棍棒形の受精毛を持つ。果孢子体は輪生枝叢の縁に1-3個形成され、球形で太さ92-129 μm。果孢子嚢は倒卵形で、長さ10-15 μm、太さ7-12 μm。季節的消長が知られ

ており、秋季から春季に可視的な配偶体が出現し、夏季はほとんどの配偶体は消失し微視的な胞子体（シャントランシア期）で過ごす。

- 分布域（県外）：日本国内に広く分布。
- 県内の分布：沖縄島、石垣島。
- 生育環境：山間を流れる清澄な小川の中や、清澄な河川の上流～中流域。
- 生育状況：県内における分布状況は不明なところが多く、沖縄島と石垣島で確認されているが、各生育地での生育範囲は非常に狭く、年によっては配偶体が発生しないこともある。
- 学術的価値：Vis et al. (2010) により、本種は地域間で形態的変異があるが、その形態的特徴と分子系統学的な解析結果が一致しないことから、本種が潜在的に隠蔽種をもつ可能性が示唆されている。また、淡水産大型紅藻類の分布拡大に関わる分散様式も不明であるため、分類学的にも生態学的にも貴重である。
- 減少の要因：開発、乾燥、埋没、水質汚濁など。
- 備考：Salomaki et al. (2014) により、*Batrachospermum arcuatum* Kylin から現学名へ変更された。スウェーデン、ベルギー、クリミア、ポーランド、ポルトガル、東アジア、オーストラリア、アメリカ、メキシコまで分布する。
- 文献：熊野 茂, 2000. *Batrachospermum arcuatum*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 95-96.
- 熊野 茂. 2015. チャイロカワモズク. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 384.
- 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信, 2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版 (植物 II・藻類・淡水産紅藻) について. 藻類, 55: 207-217.
- 熊野 茂・香村真徳・新井章吾・佐藤裕一・飯間雅文・洲澤 譲・洲澤多美子・羽生田岳昭・三谷 進, 2002. 1995 年以降に確認された日本産淡水紅藻の産地について. 藻類, 50: 29-36.
- Salomaki, E. D., J. Kwadrans, P. Eloranta and M. L. Vis, 2014. Molecular and morphological evidence for *Sheathia* gen. nov. (Batrachospermales, Rhodophyta) and three new species. *Journal of Phycology*, 50: 526-542.
- Vis, M. L., J. Feng, W. B. Chiasson, S. L. Xie, R. Stancheva, T. J. Entwisle, J. Y. Chou and W. L. Wang, 2010. Investigation of the molecular and morphological variability in *Batrachospermum arcuatum* (Batrachospermales, Rhodophyta) from geographically distant locations. *Phycologia*, 49: 545-553.
- 執筆者名：比嘉 敦

3) 準絶滅危惧 (NT)

- 和名：タンスイベニマダラ
- 分類：ベニマダラ目 ベニマダラ科 (紅藻類)
- 学名：*Hildenbrandia rivularis* (Liebmann) J. Agardh
- カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

藻体は紅色で、小さな円形から岩肌を覆いつくすほどに強固に基質に密着する。藻体の厚さは 50-100 μm で、基部と直立糸状部からなる。基部は放射状に並んだやや長い細胞列からなる。

直立糸状部は密集し無分枝または稀に二叉分枝し、ほとんど同径（太さ 4-12 μm）の 7-15 細胞からなる。増殖は無性的で、ストロン、無性芽、直立部の不定切断などによって行われる。世界に広く分布し、日本では本州以南に広く分布する。県内では伊平屋島、沖繩島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島で確認されている。陰性的な性質が強く、日中のほとんどが日陰になる所で、河川清水中や飛沫域に生育する。湧水域の礫にも着生する。河川水や湧水の赤土汚染や明るさの程度を知る指標種となり得るものと考えられるが、近年では開発、乾燥、埋没、水質汚濁などにより、生育地の消失や個体群の減少が進行している。

文献：香村真徳，2006. タンスイベニマダラ，“改訂・沖繩県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”，沖繩県，421.
 熊野 茂，2000. *Hildenbrandia rivularis*. “世界の淡水産紅藻”，内田老鶴圃，東京，294-296.
 熊野 茂・新井省吾・大谷修司・香村真徳・笠井文絵・佐藤裕司・洲澤 譲・田中次郎・千原光雄・中村 武・長谷井稔・比嘉 敦・吉崎 誠・吉田忠生・渡邊 信，2007. 環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」（RL）2007 年度版（植物 II・藻類・淡水産紅藻）について. 藻類，55: 207-217.
 熊野 茂・廣瀬弘幸，1977. *Hildenbrandia rivularis*. “日本淡水藻類図鑑”，廣瀬弘幸・山岸高旺編，内田老鶴圃，東京，173.
 熊野 茂・香村真徳・新井章吾・佐藤裕一・飯間雅文・洲澤 譲・洲澤多美子・羽生田岳昭・三谷進，2002. 1995 年以降に確認された日本産淡水紅藻の産地について. 藻類，50: 29-36.
 瀬戸良三，1993. *Hildenbrandia rivularis* (Liebmann) J. Agardh (ベニマダラ). “藻類の生活史集成 第 2 巻 褐藻・紅藻類”，堀 輝三編. 内田老鶴圃，東京，270-271.

執筆 者 名：比嘉 敦

【車軸藻類】

1) 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

和 名：オウシャジクモ
 分 類：シャジクモ目 シャジクモ科（車軸藻類）
 学 名：*Chara corallina* Klein ex Willd. var. *corallina*
 カ テ ゴ リ：絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴：雌雄同株で藻体は 50 cm 程度まで生長する。外見はシャジクモに似るが、雌雄両性器が小枝の節のほか小枝基部にも群生することや、小枝末端が普通 1 細胞であることで異なる。主軸の太さは 1 mm ほどで、皮層や棘細胞を生じない。托葉冠や苞はやや退化し小型である。輪生枝は 6 本で各小枝は 4-5 節からなり、各節部でややくびれる。

分布域（県外）：青森県以南。

県内の分布：沖繩島、宮古島、石垣島、与那国島。

生育環境：比較的透明度の高い湖沼やため池、湧水地に生育。

学術的価値：車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。

生育状況：沖繩島では数カ所、宮古島に 1 カ所の生育地があるが、石垣島と与那国島の生育地については、新（1963）の採集記録以降、本種に関する記録はない。

減少の要因：開発、富栄養化、水位減少、水質汚濁、雑草の被覆による生育阻害など。

備考：国外ではアジア、アフリカ、オーストラリアに分布する。

- 文 献 : 半田信司・加藤 将, 2015. オウシヤジクモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 306.
- 今堀宏三, 1954. *Chara corallina* オホシヤジクモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 150-152.
- Imahori, K., 1955. Phytogeographical survey on Charophyta-flora in the Ryukyu Islands. The Science Reports of The Kanazawa University, 3: 93-99.
- 今堀宏三・加崎英男, 1977. *Chara corallina* Willdenow var. *corallina* オウシヤジクモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺 (編), 内田老鶴圃, 東京, 771.
- 新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : **イトシヤジクモ**

分 類 : シヤジクモ目 シヤジクモ科 (車軸藻類)

学 名 : *Chara fibrosa* C. Agardh ex Bruzelius subsp. *gymnopitys* (A. Braun) Zaneveld

カ テ ゴ リ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 雌雄同株。藻体は 40 cm に達する。主軸は細く、節間部は小枝の長さの 1-3 倍あり、二列性の皮層を持つ。皮層にある棘細胞が主軸の太さよりも長くなることは稀。托葉冠は 1 段で数が小枝の数の 2 倍ほどある。小枝は皮層を欠き、雌雄両性器は小枝の節部に生じる。卵胞子は成熟すると黒色になる。

分 布 域 (県 外) : 本州、四国、九州。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、屋我地島、宮古島。

生 育 環 境 : 湿地や水田、ため池。明るい環境を好む傾向があり、水深の浅い部分に生育することが多いとされる。場所によっては、地表水がなくても地面が常に湿っているところに出現することもある。

学 術 的 価 値 : 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。また、イトシヤジクモの仲間は形態的な違いから様々な亜種や変種に分類されているが、これらの形態とそれぞれの種の対応は必ずしも明確ではないという指摘もあり (笠井・石本, 2011)、分類学的にも重要な種である。

生 育 状 況 : 沖縄県内で確認できた生育地では生育範囲が狭く、田畑の近くにも生育するため、開発などの影響を受けやすい状況にある。

減 少 の 要 因 : 開発、乾燥、農薬の使用、水質汚濁、雑草の被覆による生育阻害など。

備 考 : Imahori (1955) が宮古島産の本種の標本等を用いて植物地理を論じているが、宮古島の生育地の状況は不明。国外ではアジア、アフリカ、オーストラリアに分布する。

- 文 献 : 半田信司・坂山英俊, 2015. イトシヤジクモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 307.

今堀宏三, 1954. *Chara gymnopitys* イトシヤジクモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 155-156.

今堀宏三, 1954. 東亜輪藻類雑記 (5). 植物研究雑誌, 29 : 153-159.

Imahori, K., 1955. Phytogeographical survey on Charophyta-flora in the Ryukyu Islands. The Science Reports of The Kanazawa University, 3: 93-99.

今堀宏三・加崎英男, 1977. *Chara fibrosa* subsp. *gymnopitys* Zaneveld イトシャジクモ.
 “日本淡水藻図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺(編), 内田老鶴圃, 東京, 775.
 笠井文絵・石本美和, 2011. イトシャジクモ. “しゃじくもフィールドガイド”, 独立行政法人国立環境研究所, 茨城, 4.
 新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : ケナガシャジクモ
 分 類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
 学 名 : *Chara fibrosa* C. Agardh ex Bruzelius subsp. *benthamii* (A. Braun) Zaneveld
 カ テ ゴ リ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 雌雄同株で藻体は 50 cm に達する。主軸は細く、節間部は小枝の長さの 1-3 倍あり、二列性の皮層を持つ。1 次列と 2 次列はほぼ同様に発達し、主軸の太さよりも長めの棘細胞を生じる。托葉冠は 1 段でその数は小枝の数とほぼ等しい。小枝は皮層を持たず、苞は小枝の節間部の長さとはほぼ同じ。小苞は苞と形、大きさともに差が見られない。卵胞子は成熟すると暗褐色ないし黒色に近くなる。

分 布 域 (県 外) : 北海道、本州、四国、九州。

県 内 の 分 布 : 沖縄島。

生 育 環 境 : 湖沼、ため池、水田に生育する。

学 術 的 価 値 : 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。イトシャジクモの仲間は形態的な違いから様々な亜種や変種に分類されているが、これらの形態とそれぞれの種の対応は必ずしも明確ではないという指摘もあり(笠井・石本, 2011)、分類学的にも重要な種である。

生 育 状 況 : 沖縄県内における生育状況は不明。

減 少 の 要 因 : 開発、乾燥、農薬の使用、水質汚濁、雑草の被覆による生育阻害など。

備 考 : Imahori (1955) が本種の標本等を用いて植物地理を論じているが、生育地の状況は不明。国外ではアジア、オーストラリア、アフリカに分布する。

文 献 : 今堀宏三, 1953. 東亜輪藻類雑記 (3). 植物研究雑誌, 28 : 11-16.
 今堀宏三, 1954. *Chara Benthamii* ケナガシャジクモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 152-155.
 Imahori, K, 1955. Phytogeographical survey on Charophyta-flora in the Ryukyu Islands. The Science Reports of The Kanazawa University, 3: 93-99.
 今堀宏三・加崎英男, 1977. *Chara fibrosa* subsp. *benthamii* Zaneveld ケナガシャジクモ. “日本淡水藻図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺(編), 内田老鶴圃, 東京, 775.
 笠井文絵・石本美和, 2011. イトシャジクモ. “しゃじくもフィールドガイド”, 独立行政法人国立環境研究所, 茨城, 4.
 坂山英俊, 2015. ケナガシャジクモ. “レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 308.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

- 和名 : コイトシャジクモ
- 分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
- 学名 : *Chara fibrosa* C. Agardh ex Bruzelius subsp. *flaccida* (A. Braun) Zaneveld
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形態の特徴 : 雌雄同株で体長は 40 cm まで、主軸は細く二列性の皮層を持ち、1 次列が 2 次列よりもよく発達している。托葉冠は 1 段で輪生枝の 2 倍数まで。小枝は皮層を欠き、雌雄両性器は小枝の節部に生じる。卵胞子は赤褐色で、成熟しても黒くならない。
- 分布域 (県外) : 北海道以外に分布。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島。
- 生育環境 : 水田や用水路。場所によっては、地表水がなくても地面が常に湿っているところに出現することもある。本州などでは主にため池に生育することが知られている。
- 学術的価値 : 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。また、イトシャジクモの仲間は形態的な違いから様々な亜種や変種に分類されているが、これらの形態とそれぞれの種の対応は必ずしも明確ではないという指摘もあり (笠井・石本, 2011)、分類学的にも重要な種である。
- 生育状況 : 沖縄県内における分布はよくわかっていない。今のところ沖縄島と石垣島に 1 か所ずつ生育地が確認されているが、生育範囲が狭く、畑の近くに生育するため、開発などの影響を受けやすい状況にある。
- 減少の要因 : 開発、乾燥、農薬の使用、水質汚濁、雑草の被覆による生育阻害など。
- 備考 : 国外ではアフリカ、北米、アジアに分布する。
- 文献 : 今堀宏三, 1954. var. *flaccida* コイトシャジクモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 158-159.
 今堀宏三・加崎英男, 1977. *Chara fibrosa* subsp. *gimnopitys* var. *flaccida* Imahori コイトシャジクモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺 (編), 内田老鶴圃, 東京, 775.
 笠井文絵・石本美和, 2011. イトシャジクモ. “しゃじくもフィールドガイド”, 独立行政法人国立環境研究所, 茨城, 4.
 坂山英俊, 2015. コイトシャジクモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 309.
- 執筆者名 : 比嘉 敦

- 和名 : アメリカシャジクモ
- 分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
- 学名 : *Chara sejuncta* A. Braun
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形態の特徴 : 藻体は 50 cm 程度まで生長する。主軸と小枝の両方が皮層に覆われており、小枝の末端部と基部は皮層を欠く。主軸の皮層は三列性でよく発達した棘細胞を持つ一次列の間に 2 本の二次列

がある。托葉冠は2段で、両方とも棘状によく発達する。苞は円錐形で小さく、生卵器を取り巻く苞は生卵器と同等の長さになる。雌雄同株だが、雌器と雄器は小枝下部の別々の節に形成される。

分布域（県外）： 群馬県、長野県、京都府、香川県、福岡県。

県内の分布： 下地島、南大東島。

生育環境： 湖沼やため池に生育。

学術的価値： 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。

生育状況： Imahori (1953) が下地島産の本種の標本の観察結果を報告しているが、下地島の生育地の状況は不明。

減少の要因： 開発、水質汚濁、水位減少、水質汚濁、雑草の繁茂による生育阻害など。

備考： 国外では北米、中米、南米に分布する。

文献： 今堀宏三, 1953. 東亜輪藻類雑記 (3). 植物研究雑誌, 28: 11-16.

今堀宏三, 1954. *Chara sejuncta* アメリカシヤジクモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 166-168.

Imahori, K., 1955. Phytogeographical survey on Charophyta-flora in the Ryukyu Islands. The Science Reports of The Kanazawa University, 3: 93-99.

今堀宏三・加崎英男, 1977. *Chara sejuncta Braun* アメリカシヤジクモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺 (編), 内田老鶴圃, 東京, 769.

笠井文絵, 2015. アメリカシヤジクモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 312.

笠井文絵・石本美和, 2011. アメリカシヤジクモ. “しゃじくもフィールドガイド”, 独立行政法人国立環境研究所, 茨城, 5.

執筆者名： 比嘉 敦

和名： ハダシシヤジクモ

分類： シヤジクモ目 シヤジクモ科 (車軸藻類)

学名： *Chara zeylanica* Klein ex Willdenow

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴： 雌雄同株。藻体は長さ 40cm まで生長し、主軸は径 500-700 μm。三列性の皮層で被われる。棘細胞は単生で数多く、よく発達している。托葉冠は小枝の2倍数のものが2段に並び、その上段の細胞は小枝の最下節よりやや長い。輪生枝は約 10 本あり、各小枝は 11-13 節からなる。小枝の最下節と上端部 1-3 節は皮層を欠く。苞は 4-7 本が輪生し、小苞は雌器の 2 倍の長さには達する。雌雄両性器は小枝下部の同じ節に形成される。

分布域（県外）： 青森県以南。

県内の分布： 宮古島、与那国島、南大東島。

生育環境： 池や湖沼、水田などに生育。

学術的価値： 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。

生育状況： 宮古島と与那国島では、新 (1963) の採集記録以降、詳細は不明。

- 減少の要因 : 水質汚濁、農薬の使用など。
- 備考 : 国立研究開発法人 国立環境研究所 微生物系統保存施設に南大東島産の培養株が保存されている。国外ではアジア、オセアニア、アフリカ、北米、中米、南米に分布する。
- 文献 : 今堀宏三, 1954. *Chara zeylanica* ハダシシヤジクモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 168-170.
 Imahori, K., 1955. Phytogeographical survey on Charophyta-flora in the Ryukyu Islands. The Science Reports of The Kanazawa University, 3: 93-99.
 今堀宏三・加崎英男, 1977. *Chara zeylanica* Willdenow ハダシシヤジクモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺(編), 内田老鶴圃, 東京, 769.
 笠井文絵・石本美和, 2011. ハダシシヤジクモ. “しゃじくもフィールドガイド”, 独立行政法人国立環境研究所, 茨城, 5.
 坂山英俊, 2015. ハダシシヤジクモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 314.
 新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

執筆者名 : 比嘉 敦

和名 : **チャボフラスコモ**
 分類 : シヤジクモ目 シヤジクモ科 (車軸藻類)
 学名 : *Nitella acuminata* A. Braun ex Wallman var. *capitulifera* (Allen) Imahori
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 雌雄同株で体長は 70 cm にも達し、皮層は無く、結実枝と不結実枝は分化する。小枝は 1 回分枝、最終枝は 1 細胞性で伸長し、先端部はゆるやかに細くなる。普通、結実枝は短縮し塊状になり枝の基部につく。雌雄両性器は小枝の節部に生じ、卵胞子は赤褐色または暗褐色で、楕円体、螺旋縁は 6-7 本。卵胞子膜は平滑。

分布域(県外) : 本州、四国、九州。

県内の分布 : 沖縄島、久米島、西表島。

生育環境 : 水田や水路、湿地に生育。

学術的価値 : 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。

生育状況 : 県内のいずれの生育地においても生育範囲は狭く、開発等の影響を受けやすい状況にある。

減少の要因 : 開発、水質汚濁、農薬の使用など。

備考 : 国外では東アジアに分布。

- 文献 : 今堀宏三, 1954. var. *capitulifera* チャボフラスコモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 60-61.
 今堀宏三・加崎英男, 1977. *Nitella acuminata* Braun var. *capitulifera* Imahori チャボフラスコモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺(編), 内田老鶴圃, 東京, 785.
 笠井文絵・石本美和, 2011. チャボフラスコモ. “しゃじくもフィールドガイド”, 独立行政法人国立環境研究所, 茨城, 9.

坂山英俊, 2015. チャボフラスコモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 316.

執筆者名 : 比嘉 敦

和名 : トガリフラスコモ
分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
学名 : *Nitella acuminata* A. Braun ex Wallman var. *subglomerata* (A. Braun) Allen
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴 : 雌雄同株で体長は 15-30 cm、皮層は無く、結実枝と不結実枝は同形。輸生枝は 1 回分枝。最終枝は 1 細胞性で伸長し、先端部は鋭く尖る。結実部分が球状になり枝の基部につくことがある。雌雄両性器は輸生枝の節部に生じる。卵胞子は褐色または暗褐色で、楕円体、螺旋縁は 6-7 本。卵胞子膜は微細な突起を持つ。

分布域 (県外) : 本州、四国、九州。

県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。

生育環境 : 水田や水路、湿地に生育。

学術的価値 : 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。

生育状況 : 県内の生育地はどの島も数カ所しかなく、いずれの生育地においても生育範囲は狭く、開発等の影響を受けやすい状況にある。

減少の要因 : 開発、水環境の悪化、農薬など。

備考 : 国外ではアジア、北米、中米、南米に分布する。

文献 : 今堀宏三, 1954. var. *subglomerata* トガリフラスコモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 58-60.
今堀宏三・加崎英男, 1977. *Nitella acuminata* Braun var. *subglomerata* Braun トガリフラスコモ. “日本淡水藻図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺 (編), 内田老鶴圃, 東京, 785.
坂山英俊, 2015. トガリフラスコモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 317.
新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

執筆者名 : 比嘉 敦

和名 : ミルフラスコモ
分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
学名 : *Nitella axilliformis* Imahori
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 形態の特徴** : 雌雄同株、体長 15-30 cm、皮層は無く、不結実枝と結実枝は分化する。不結実枝は1-2回分枝。最終枝は2細胞性で短縮し、終端細胞は鋭く尖る。結実枝は短く1-2回分枝する。結実枝は間隔が狭くなった節部に輪生するため塊状に見え、不結実枝の基部につく。雌雄両性器は小枝の節部に生じる。卵胞子は黄褐色から明褐色で、楕円体、螺旋縁は6-7本。卵胞子表面に網目模様を持つ。
- 分布域（県外）** : 北海道以外に広く分布する。
- 県内の分布** : 沖縄島、宮古島。
- 生育環境** : 水田、水路に生育。
- 学術的価値** : 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。
- 生育状況** : Imahori (1955) が宮古島産の本種の標本等を用いて植物地理を論じているが、宮古島を含め県内の生育地の状況は不明。
- 減少の要因** : 開発、水質汚濁、農薬の使用など。
- 備考** : 国外ではアジア、オセアニアに分布する。

- 文献** : 今堀宏三, 1954. *Nitella axilliformis* ミルフラスコモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 100-101.
今堀宏三, 1954. 東亜輪藻類雑記 (5). 植物研究雑誌, 29 : 153-159.
Imahori, K., 1955. Phytogeographical survey on Charophyta-flora in the Ryukyu Islands. The Science Reports of The Kanazawa University, 3: 93-99.
今堀宏三・加崎英男, 1977. *Nitella axilliformis* Imahori ミルフラスコモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺 (編), 内田老鶴圃, 東京, 807.
笠井文絵・石本美和, 2011. ミルフラスコモ. “しゃじくもフィールドガイド”, 独立行政法人国立環境研究所, 茨城, 11.
坂山英俊, 2015. ミルフラスコモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 320.

執筆者名 : 比嘉 敦

- 和名** : **ジュズフサフラスコモ**
- 分類** : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
- 学名** : *Nitella comptonii* J. Groves
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 形態の特徴** : 雌雄同株で体長は 20 cm 程度に成長し、皮層は無く、結実枝と不結実枝は分化する。不結実枝は2-3回分枝。最終枝は2細胞性で伸長し、終端細胞は円錐形で鋭く尖る。結実枝は枝が短く寒天質で覆われ、主軸の先端または不結実枝の基部につく。球状になった結実枝は連なり、数珠状に見える。雌雄両性器は小枝の節部に生じる。卵胞子は暗褐色で、楕円体、螺旋縁は6-8本。卵胞子表面に顆粒状の模様を持つ。
- 分布域（県外）** : 香川県。
- 県内の分布** : 沖縄島、久米島。
- 生育環境** : ため池や沼地の水深が浅い環境に生育する。

学 術 的 価 値 : 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。
生 育 状 況 : 沖縄島には2カ所の生育地が知られているが、1カ所は土地造成により消滅した。
減 少 の 要 因 : 開発、水質汚濁など。
備 考 : 国外ではニューカレドニア、オーストラリアに分布。

文 献 : 笠井文絵・石本美和, 2011. ジュズフサフラスコモ. “しゃじくもフィールドガイド”, 独立行政法人国立環境研究所, 茨城, 15.
坂山英俊, 2015. ジュズフサフラスコモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 322.
Sakayama, H., S. Arai, H. Nozaki, F. Kasai and M. Watanabe, 2006. Morphology, molecular phylogeny and taxonomy of *Nitella comptonii* (Charales, Characeae). *Phycologia*, 45: 417-421.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : チリフラスコモ
分 類 : シヤジクモ目 シヤジクモ科 (車軸藻類)
学 名 : *Nitella microcarpa* A. Braun var. *microcarpa*
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形 態 の 特 徴 : 雌雄同株で体長は30 cm程度まで生長し、主軸は太く、直径1 mmに達する。結実枝と不結実枝の分化は無く、皮層も無い。小枝は2-4回分枝し、第1分射枝は小枝全長の約1/2、第2分射枝は4-6本。第3分射枝は3-5本。第4分射枝と第5分射枝は2-3本からなる。最終枝は2-3細胞からなる。生殖器は小枝の1-3節につく。雌器は普通2-4個ずつ群生し、卵胞子は淡褐色から赤褐色で、卵胞子表面に網目模様を持つ。

分 布 域 (県 外) : 北海道から九州にかけて広く分布。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、西表島、与那国島。

生 育 環 境 : 湿地や水路、池などに生育し、特に泥状の水底を好むとされる。

学 術 的 価 値 : 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。

生 育 状 況 : 西表島、与那国島での生育については、新 (1963) の採集記録以降、詳細が不明である。

減 少 の 要 因 : 開発、水質汚濁、農薬の使用など。

備 考 : 国外ではアジア、アフリカ、北米、南米に分布する。

文 献 : 今堀宏三, 1954. *Nitella microcarpa* チリフラスコモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 133-134.
今堀宏三・加崎英男, 1977. *Nitella microcarpa* Braun チリフラスコモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺 (編), 内田老鶴圃, 東京, 821.
大森雄治・佐野郷美, 2015. チリフラスコモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 340.
新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12: 78-80.

執筆者名 : 比嘉 敦

2) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 和名 : シャジクモ
- 分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
- 学名 : *Chara braunii* C. C. Gmel.
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 雌雄同株で皮層は無く、雌雄両性器は小枝の節部につき、小枝基部には生じない。小枝基部には互生する托葉冠を1段持ち、形状は乳頭突起状から1 mm程に尖った形にまで変異が見られる。小枝の末端は苞細胞が集まり冠状となる。
- 分布域(県外) : 国内に広く分布する。
- 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、屋我地島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 湿地、水田、湖沼、ため池、湧水地、河川や用水路で流れが緩やかな場所などで、日当たりが良く透明度が高い水環境に生育する。
車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。
- 学術的価値 : る。また、Kato et al. (2008) により、湖沼などの深い環境に生育するものと水田などの浅い環境のものとの間には、遺伝的な隔りがあることが確認されている。
- 生育状況 : 沖縄県内では主に水田で確認できるが、高密度で生育しているところは多くはなく、水田などの湿地的環境の減少に伴い生育地も少なくなっている。
- 減少の要因 : 開発、農薬の使用、雑草の被覆による生育阻害など。
- 備考 : 世界各地に分布する。
- 文献 : 今堀宏三, 1954. *Chara Braunii* シャジクモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 145-150.
今堀宏三・加崎英男, 1977. *Chara braunii* Gmelin シャジクモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺(編), 内田老鶴圃, 東京, 771.
加藤 将, 2015. シャジクモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 383.
Kato, S., H. Sakayama, S. Sano, F. Kasai, M. M. Watanabe, J. Tanaka and H. Nozaki, 2008. Morphological variation and intraspecific phylogeny of the ubiquitous species *Chara braunii* (Charales, Charophyceae) in Japan. *Phycologia*, 47: 191-202.
新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

執筆者名 : 比嘉 敦

- 和名 : クサシャジクモ
- 分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
- 学名 : *Chara vulgaris* L. var. *vulgaris*
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

- 形態の特徴 : 体長は10-30 cm程度で、主軸と小枝に皮層があり、小枝末端の1-数節のみ皮層を欠く。主軸の皮層は二列性で小球状の棘細胞を持つ一次列とその間の1本の二次列からなる。托葉冠は2段で両方が卵型に比較的良好に発達する。苞は生殖器を付ける側のみ長く、反対側は痕跡的である。雌雄同株で各節に雌雄両性器をつける。
- 分布域(県外) : 千葉県。
- 県内の分布 : 伊平屋島、伊是名島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 水田、湖沼、ため池、湧水地、河川や用水路で流れが緩やかな場所などで、日当たりが良く透明度が高い水環境に生育する。
- 学術的価値 : 車軸藻類は陸上植物への進化や、湖沼の生態系および水環境を考える上でも重要な存在である。
- 生育状況 : シャジクモと同様に沖縄県内では主に水田で確認できるが、高密度で生育しているところは多くはなく、水田などの湿地的環境の減少に伴い生育地も少なくなっている。
- 減少の要因 : 開発、乾燥、水質汚濁、水位減少、雑草の繁茂による生育阻害など。
- 文献 : 笠井文絵・石本美和, 2011. クサシャジクモ. “しゃじくもフィールドガイド”, 独立行政法人国立環境研究所, 茨城, 7.
宮田昌彦・菊池則雄・佐野郷美・鈴木雅大・河地正伸, 2017. 藻類. “千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドリスト 植物・菌類編<2017年改訂版>”, 千葉県環境生活部自然保護課, 22.
坂山英俊, 2015. クサシャジクモ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 東京, 387.
- 執筆者名 : 比嘉 敦

3) 情報不足 (DD)

- 和名 : **フシナシシャジクモ**
- 分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
- 学名 : *Chara coralline* Willdenow var. *kyusyensis* Imahori
- カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

雌雄同株で体長は30 cmに達する。皮層を持たず、托葉冠は退化して痕跡的であり、ときには全く欠いている。苞と小苞も退化しており、ときには全く欠くこともある。雌雄両性器は輪生する小枝基部に群生するか、または小枝下節に単生が双生している。日本国内では石川県、福岡県、大分県、熊本県に分布し、池、湖の比較的浅い水域に生育する。沖縄県内では与那国島の水田から採集された記録がある(新, 1963)。しかし、新(1963)の採集記録以降、沖縄県内で本種に関する記録がなく、生育状況は不明である。

- 文献 : 今堀宏三, 1954. var. *kyusyensis* フシナシシャジクモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 152.
今堀宏三・加崎英男, 1977. *Chara coralline* Willdenow var. *kyusyensis* Imahori フシナシシャジクモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺(編), 内田老鶴圃, 東京, 773.
新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

- 執筆者名 : 比嘉 敦

和名 : **ゲンカイトシャジクモ**
 分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
 学名 : *Chara fibrosa* var. *microstephana* Imahori
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

雌雄同株。イトシャジクモに比べると托葉冠や棘細胞が退化的であるが、苞はよく発達している。皮層は二列性で一次列は二次列よりよく発達している。苞、小苞ともに小枝の節間部とほぼ等長である。卵胞子は成熟すると黒色を呈す。日本国内では山口県、福岡県に分布し、沖縄県内では西表島、与那国島の水田で採集記録がある(新, 1963)。しかし、新(1963)の採集記録以降、沖縄県内で本種に関する記録がなく、生育状況は不明である。

文献 : 今堀宏三, 1954. var. *microstephana* ゲンカイトシャジクモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 159-161.
 今堀宏三・加崎英男, 1977. *Chara fibrosa* var. *microstephana* Imahori ゲンカイトシャジクモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺(編), 内田老鶴圃, 東京, 775.
 新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

執筆者名 : 比嘉 敦

和名 : **セツカイシャジクモ**
 分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
 学名 : *Chara vulgaris* subsp. *eu-vulgaris* J. S. Zaneveld
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

クサシャジクモに似ているが、小枝の基部まで全く皮層がないような小枝が見当たらないことで区別される。非常に厚い石灰の殻で被われているのが普通で、和名はこの特長による(今堀, 1954)。沖縄県内では沖縄島と与那国島の水田から採集記録がある。しかし、新(1963)の採集記録以降、沖縄県内で本種に関する記録がなく、生育状況は不明である。

文献 : 今堀宏三, 1954. 東亜輪藻類雑記(5). 植物研究雑誌, 29 : 153-159.
 Imahori, K, 1955. Phytogeographical survey on Charophyta-flora in the Ryukyu Islands. The Science Reports of The Kanazawa University, 3: 93-99.
 新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

執筆者名 : 比嘉 敦

和名 : **チンバシャジクモ**
 分類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
 学名 : *Chara vulgaris* subsp. *squamosa* (Desfontaines) F. Hy
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

クサシャジクモに似ているが、小枝にほとんど皮層がないことで異なる。日本国内では鹿児島県に分布が知られている。沖縄県内では沖縄島で採集記録がある。しかし、Imahori (1955) が沖縄島産の本種の標本等を用いて植物地理を論じているが、生育状況は不明である。

文 献 : 今堀宏三, 1953. 東亜輪藻類雑記 (3). 植物研究雑誌, 28 : 11-16.
Imahori, K., 1955. Phytogeographical survey on Charophyta-flora in the Ryukyu Islands. The Science Reports of The Kanazawa University, 3: 93-99.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : コフラスコモ
分 類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
学 名 : *Nitella confervacea* Braun
カ テ ゴ リ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

雌雄同株。藻体は小さく 10 cm を超えることはない。主軸の節間細胞は小枝の 2-3 倍の長さで、結実枝と不結実枝の分化はない。小枝は 1-3 回分枝し、第 1 分枝は小枝全長の 1/3-1/2 の長さである。第 2 分枝は 4-6 本、第 3 分枝は 3-5 本、第 4 分枝は 2-5 本からなる。最終枝は常に 2 細胞で長くのびている。生殖器は小枝第 1、2 節につき、普通は寒天質に包まれている。日本国内では本州、九州に分布し、沖縄県内では沖縄島、与那国島の水田で採集記録がある (新, 1963)。しかし、新 (1963) の採集以降、沖縄県内で本種に関する記録がなく、生育状況は不明である。国外ではアジア、欧州、北米、オーストラリアに分布する。

文 献 : 今堀宏三, 1954. *Nitella confervacea* コフラスコモ. “日本産輪藻類総説”, 金沢大学理学部植物学研究室, 石川, 75-77 新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12: 78-80.
今堀宏三・加崎英男, 1977. *Nitella confervacea* Braun コフラスコモ. “日本淡水藻類図鑑”, 広瀬弘幸・山岸高旺 (編), 内田老鶴圃, 東京, 799.
新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : アミダネフラスコモ (新称)
分 類 : シャジクモ目 シャジクモ科 (車軸藻類)
学 名 : *Nitella dictyosperma* H. Groves & J. Groves
カ テ ゴ リ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

サキボソフラスコモやミゾフラスコモに似ているとされるが、最終枝は常に 2 細胞で、短縮した最終枝が無いことで区別される。県内では石垣島の水田から採集記録がある (新, 1963)。しかし、新 (1963) の採集記録以降、沖縄県内で本種に関する記録がなく、生育状況は不明である。和名は、種小名がギリシャ語で「dictyon (網) + sperma (種子)」であること、維管束植物のヤシ科の *Dictyosperma* 属がアミダネヤシ属であることに由来する。

文 献 : 新 敏夫, 1963. 沖縄の輪藻類. 北陸の植物, 12 : 78-80.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

〈汽水藻類〉

【緑藻類】

1) 準絶滅危惧 (NT)

和 名 : モツレチョウチン
 分 類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
 学 名 : *Boodleopsis pusilla* (Collins) Taylor, Joly et Bernatowicz
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は糸状で0.5~3 cm長く、若い糸状体で通常4~5回二又に分枝する。糸状体には膨らんだり軽くくびれたりする部分がみられ、その直径は中央で30~52 μm、先端に進むにつれて少し細くなる。孢子嚢は卵形で長さ180~360 μm、直径120~240 μmで、細い柄の上にある。マングローブ林内のやや明るく干出する場所で、細砂混じりの泥の上にマット状に広がる。またマングローブの根元や気根上にも生育する。国内では奄美大島を北限とし、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島で確認されている。国外ではフィリピン、ベトナム、クイーンズランド、イスラエル、パキスタン、スリランカ、東アフリカ、西大西洋岸に分布する。確認された島々のすべてのマングローブ域で観察されるものではなく、生育していたとしても生育場所は局所的で、まれに観察される程度である。生育面積も1か所でおおよそ50 cm²以下と狭く、表土の安定度と光条件などに左右されるようである。与那国島ではわずかに観察される。石垣島や西表島の生育状況は不明である。マングローブ域という特異な環境下に生育する種であり、また地理的分布の上で非常に貴重な存在である。赤土の堆積や開発行為によるマングローブ域の縮小が進んだ場合、生育域の減少の要因となる。

文 献 : Tanaka, J., 1987. Taxonomic studies of Japanese mangrove macroalgae III. Two taxa from the Amami Islands. Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo, ser. B. (Bot.) 13: 17-23.
 Taylor, W. R., A. B. Joly & A. J. Bernatowicz, 1953. The relation of *Dichotomosiphon pusillus* to the algal genus *Boodleopsis*. Pap. Michigan Acad. Sci. Arts Lett., 38: 97-108.
 吉田忠生, 1998. もつれちょうちん. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 111-112.

執 筆 者 名 : 香村眞徳

【紅藻類】

1) 準絶滅危惧 (NT)

和 名 : ヒロハアヤギヌ
 分 類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)
 学 名 : *Caloglossa adhaerens* R. J. King & Puttock
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体藻体は基質上をへばりつくように広がり、最盛期には重なり合う。二又状か互生的に分枝。主枝はジグザクな外形を呈し、節部にくびれが無く、小枝は角ばった外見をしている。暗紫色で体長は2 cmほど、枝の幅は1.5-2.5 mm。付着根は藻体の腹側の全面に散在し、マングローブ域の潮間帯上部から下部にあたる樹木の幹や気根、倒木や岩、硬めの泥などの上に着生する。国内において本種は、奄美大島を北限とし、熱帯海域のフィリピン、ベトナム、

パプアニューギニア、インドネシア、オーストラリアなどに分布。県内では、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島に分布が知られている。マングローブ藻類 (mangrove algae) の重要な一員であること、地理的分布の上からも貴重な種である。河川開発や土地造成により、生育条件が悪化している。

文 献 : 神谷充伸, 2015. ヒロハアヤギヌ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 384.

香村眞徳, 2006. ヒロハアヤギヌ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”, 沖縄県, 425.

田中次郎, 1999. 汽水性多細胞藻類の分類と形態 (12) 紅藻アヤギヌ類の分類 3 ヒロハアヤギヌ *Caloglossa adhaerens*. 海洋と生物, 124 : 412-414.

Tanaka J., and M. Chihara, 1985. Taxonomic studies of Japanese mangrove macroalgae. II Two taxa of *Caloglossa* (Ceramiales, Rhodophyceae). Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo Ser. B., 11: 41-50.

吉田忠生, 1998. ひろはあやぎぬ. “新日本海藻誌”, , 内田老鶴圃, 東京, 966. 966

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : **アヤギヌ**

分 類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)

学 名 : *Caloglossa continua* (Okamura) R. J. King & Puttock

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は二叉に分枝し、基質上に広がり、互いに重なり合いながらパッチ状群落を形成することが多い。葉状部の長さは1.3-3 mm、幅1-2 mm。節部はくびれないか、僅かにくびれ、付着根は節部の直上部の主軸や側軸からできる周心細胞や付近の細胞から発出し、それぞれが分離しており、集まって柄とならない。国外では朝鮮半島、中国、インドネシア、オーストラリアなどに分布する。国内では東北地方から南西諸島にかけて広く分布する。河口の汽水域にてマングローブ林の根元、水草の茎上や杭、岸壁などの基質上、波の静かな所では泥上にへばりついて生育する。県内では沖縄島、石垣島、西表島、与那国島に分布が知られている。護岸整備や河床の整備などの河川開発により、生育条件の悪化や個体数の減少が危惧される。

文 献 : 神谷充伸, 2015. アヤギヌ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 384.

Kamiya, K., J. Tanaka, J. R. King, A. J. West, C. G. Zuccarello and H. Kawai, 1999. Reproductive and genetic distinction between broad and narrow entities of *Caloglossa continua* (Delesseriaceae, Rhodophyta). Phycologia, 38: 356-367.

熊野 茂, 2000. *Caloglossa continua*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 311-312.

田中次郎, 1999. 汽水性多細胞藻類の分類と形態 (12) 紅藻アヤギヌ類の分類④アヤギヌ. 海洋と生物, 125 : 538-542.

吉田忠生, 1998. あやぎぬ. “新日本海藻誌”, , 内田老鶴圃, 東京, 966. 966

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : **セイヨウアヤギヌ**

分 類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)

学 名 : *Caloglossa leprieurii* (Mont.) J. Agardh
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は長さ0.5-2.0 cm、赤褐色～褐色。岩や倒木上に密生したマットを形成し、線形～披針形の葉状部とくびれた節部からなり、二叉分枝、疑似二叉分枝もしくは互生分枝をする。葉状部は長さ約1-5 mm、幅約0.6-2 mm、主軸第1中軸細胞から周辺に向かって2-6層の細胞列がある。付着根は節部の周心細胞や側軸第1中軸細胞から生じ、お互いに絡まりあって柄となる。亜熱帯を中心に世界各地のマングローブ、塩生湿地、海岸の岩礁に広く分布する。オーストラリアやプエルトリコでは、感潮域を越えた淡水域に分布するものも知られている。国内では南西諸島に分布し、県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島から知られている。河川開発や土地造成により、生育条件が悪化している。

文 献 : 神谷充伸, 2015. セイヨウアヤギヌ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 384.
 Kamiya, M., C. G. Zuccarello and A. J. West, 2003. Evolutionary relationships of the genus *Caloglossa* (Delesseriaceae, Rhodophyta) inferred from large-subunit ribosomal RNA gene sequences, morphological evidence and reproductive compatibility, with description of a new species from Guatemala. *Phycologia*, 42: 478-497.
 熊野 茂, 2000. *Caloglossa leprieurii*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 308-311.
 田中次郎, 1999. 汽水性多細胞藻類の分類と形態 (11) 紅藻アヤギヌ類の分類②アヤギヌ属の種の検索. *海洋と生物*, 123 : 355-358.
 田中次郎, 2000. 汽水性多細胞藻類の分類と形態 (14) 紅藻アヤギヌ類の分類⑤ササバアヤギヌ. *海洋と生物*, 126 : 78-82.
 吉田忠生, 1998. ささばあやぎぬ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 966-967. 967

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : **ホソアヤギヌ**
 分 類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)
 学 名 : *Caloglossa ogasawaraensis* Okamura
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体藻体は柔らかく濃紫色、線状で扁平、基質上を平面的に広がり互いに重なり合い錯綜する。体長は3 cmほどで、節部はゆるやかにくびれ、二～四又分枝する。枝の幅は350 μm以下で、翼細胞は中軸から周辺に向かって2-8細胞が並ぶ。付着根は藻体の基部にあり、分枝が進み、長くなった藻体では節部にも形成される。国内では、東北地方～九州、小笠原島 (タイプ産地)、奄美大島、さらに県内では伊是名島、沖縄島、久米島、石垣島、西表島、与那国島に分布。国外では、アフリカ、東南アジア、インド、オーストラリアなど世界の温帯から亜熱帯に分布する。生育環境は河川の上流の流水中から下流の淡水の影響がある限界まで (ほぼ河口から一部沿岸域まで)。沿岸域の場合は潮間帯中部から下部にかけて生育する。淡水域から汽水域にかけて生育する珍しい紅藻である。なお、汽水性の「塩川 (スガー)」（本部町塩川集落内を流れる塩分を含む小川、国指定天然記念物)の流水中の川縁の壁面などにも着生。ダム湖により生育地の一部が水没し、消滅した所もある (例：国頭村辺野喜川、名護市羽地大川)。

文 献 : 比嘉 敦・岩永洋志登・岩橋浩輔・山本広美・香村眞徳, 2015. 国指定天然記念物「塩川」(スガー)における植物の生育状況. *沖縄生物学会誌*, 53 : 65-76.
 香村眞徳, 2006. ホソアヤギヌ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”, 沖縄県, 424-425.

香村真徳・久場安次, 1976. 天然記念物「塩川」の植物. “塩川動態調査報告II”, 沖縄県天然記念物調査シリーズ第6集, 沖縄県教育委員会編, 38-67.

熊野 茂, 2000. *Caloglossa ogasawaraensis*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 305.

田中次郎, 1999. 汽水性多細胞藻類の分類と形態 (11) 紅藻アヤギヌ類の分類②アヤギヌ属の種の検索. 海洋と生物, 123 : 355-358.

田中次郎, 2000. 汽水性多細胞藻類の分類と形態 (15) 紅藻アヤギヌ類の分類⑥ホソアヤギヌ. 海洋と生物, 127 : 186-190.

吉田忠生, 1998. ほそあやぎぬ. “新日本海藻誌”, , 内田老鶴圃, 東京, 967. 967

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : ヒメアヤギヌ

分 類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)

学 名 : *Caloglossa postiae* Kamiya et R. J. King

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は二叉に分枝し、葉状部の長さは0.3-2.2 mm、幅0.1-0.5 mm。節部はくびれないか、僅かにくびれる。付着根は節部の直上部の主軸や側軸からできる周心細胞や付近の細胞から発出し、それぞれが分離しており、集まって柄とならない。アヤギヌによく似ているが、葉状部が細いことで異なる。亜熱帯から温帯域の河口などに生育し、しばしばマングローブ林の幹や根元に着生する。国外ではオーストラリアに分布し、県内では石垣島、西表島、与那国島から知られている。マングローブ藻類 (mangrove algae) の重要な一員であること、地理的分布の上からも貴重な種である。河川開発や土地造成により、生育条件が悪化している。

文 献 : Kamiya, M., C. G. Zuccarello and A. J. West, 2003. Evolutionary relationships of the genus *Caloglossa* (Delesseriaceae, Rhodophyta) inferred from large-subunit ribosomal RNA gene sequences, morphological evidence and reproductive compatibility, with description of a new species from Guatemala. *Phycologia*, 42: 478-497.

Kamiya, K., J. Tanaka, J. R. King, A. J. West, C. G. Zuccarello and H. Kawai, 1999. Reproductive and genetic distinction between broad and narrow entities of *Caloglossa continua* (Delesseriaceae, Rhodophyta). *Phycologia*, 38: 356-367.

田中次郎, 1997. 汽水産多細胞藻類の分類と形態 (1) 日本のマングローブ林内汽水域の藻類の種組成と垂直分布. 海洋と生物, 112 : 452-457.

田中次郎, 1999. 汽水性多細胞藻類の分類と形態 (12) 紅藻アヤギヌ類の分類④アヤギヌ. 海洋と生物, 125 : 538-542.

吉田忠生, 1998. あやぎぬ. “新日本海藻誌”, , 内田老鶴圃, 東京, 966. 966

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : ササバアヤギヌ

分 類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)

学 名 : *Caloglossa vieillardii* (Kützting) Setchell

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は長さ約2.0 cm、赤褐色～褐色。岩や倒木上に密生したマットを形成し、線形～披針形の葉状部とくびれた節部からなり、二叉分枝、疑似二叉分枝もしくは互生分枝をする。葉状部は長さ約1-5 mm、幅約0.6-2 mm、セイヨウアヤギヌによく似ているが、主軸第1中軸細胞から周辺に向う細胞列が1層であることで異なる。付着根は節部の周心細胞や側軸第1中軸細胞から生じ、お互いに絡まりあって柄となる。東南アジア、メラネシア、ポリネシア、オーストラリアなどに分布。国内では南西諸島に分布し、県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島から知られている。河川開発や土地造成により、生育条件が悪化している。

- 文 献 : Kamiya, M., C. G. Zuccarello and A. J. West, 2003. Evolutionary relationships of the genus *Caloglossa* (Delesseriaceae, Rhodophyta) inferred from large-subunit ribosomal RNA gene sequences, morphological evidence and reproductive compatibility, with description of a new species from Guatemala. *Phycologia*, 42: 478-497.
- 熊野 茂, 2000. *Caloglossa leprieurii*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 308-311.
- 田中次郎, 1999. 汽水性多細胞藻類の分類と形態 (11) 紅藻アヤギヌ類の分類②アヤギヌ属の種の検索. *海洋と生物*, 123 : 355-358.
- 田中次郎, 2000. 汽水性多細胞藻類の分類と形態 (14) 紅藻アヤギヌ類の分類⑤ササバアヤギヌ. *海洋と生物*, 126 : 78-82.
- 吉田忠生, 1998. ささばあやぎぬ. “新日本海藻誌”, , 内田老鶴圃, 東京, 966-967. 966

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和 名 : タニコケモドキ
 分 類 : イギス目 フジマツモ科 (紅藻類)
 学 名 : *Bostrychia simpliciuscula* Harv. ex J. Agardh
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体藻体は紫色～明るい赤紫色で、錯綜する糸状体。枝は不規則に二叉、偽二叉分枝であり時に互生分枝のように見えることもある。主枝は基部付近の太さが100～180 μmで、先端にいくにしたがい徐々に細くなり、最末小枝は単列細胞系または多列細胞系からなる。周心細胞は縦に分裂し、中軸細胞1個あたり縦に2個並ぶ。付着器はひげ根状で、糸状体の外層の細胞から出る。河川に局所的に生育するが、上流域から中流域の清流の岩盤上にマット状に着生、また汽水域の流れのある水辺にある植物の気根などにも付着する。分布域は広く、国外からはインド洋、東アジア、東南アジア、インドネシア、ミクロネシア、ポリネシアなどの汽水域や淡水域、国内では宮城県、福島県、千葉県、三重県、京都府、岡山県、山口県、宮崎県、熊本県、大分県、鹿児島県の汽水域に分布する。県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島の汽水域や淡水域から知られている。本種が国内で最初に報告されたのは、国頭郡大宜味村デ(ダ)イクマタの山中の河川中から、*Bostrychia andoi* Okamura (1907) として発表された経緯がある。沖縄島の汽水性の「塩川(スガー)」(本部町塩川集落内を流れる塩分を含む小川、国指定の天然記念物)にも生育する。河川上流から汽水域にかけて広く分布する特異な性質をもつ種で、学術的に貴重な種である。生育阻害の要因として、赤土流入による岩肌などへの赤土付着(例:天然記念物指定の「塩川スガー」)やダム湖による生育地の一部水没(国頭村辺野喜)がある。宜野湾市では市の天然記念物(大謝名メヌカー淡水紅藻)に指定されている。

- 文 献 : 宜野湾市教育委員会, 2007. 大謝名メヌカー淡水紅藻. “ぎのわんの文化財 [第七版]”, 宜野湾市文化財保護資料第67集, 宜野湾市教育委員会, 72-73.
- 比嘉 敦・岩永洋志登・岩橋浩輔・山本広美・香村眞徳, 2015. 国指定天然記念物「塩川」(スガー)における植物の生育状況. *沖縄生物学会誌*, 53 : 65-76.
- Kamiya, M., J. West and Y. Hara, 1994. Reproductive structures of *Bostrychia simpliciuscula*, (Ceramiaceae, Rhodophyceae) in the field in culture. *Japanese Journal of Phycology*, 42: 165-174.

香村真徳, 2006. タニコケモドキ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”, 沖縄県, 426.

香村真徳・久場安次, 1976. 天然記念物「塩川」の植物. “塩川動態調査報告 II”, 沖縄県天然記念物調査シリーズ第6集, 沖縄県教育委員会編, 38-67.

熊野 茂, 2000. *Bostrychia simpliciuscula*. “世界の淡水産紅藻”, 内田老鶴圃, 東京, 317-320.

熊野 茂・香村真徳・新井章吾・佐藤裕一・飯間雅文・洲澤 譲・洲澤多美子・羽生田岳昭・三谷 進, 2002. 1995年以降に確認された日本産淡水紅藻の産地について. 藻類, 50: 29-36.

山本広美・田中次郎, 1998. 汽水産多細胞藻類の分類と観察, (7) 紅藻タニコケモドキ属の分類タニコケモドキ. 海洋と生物, 118: 412-416.

吉田忠生, 1998. たにこけもどき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 1012. 1012

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

〈海藻類〉

【黄緑藻類】

1) 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

和 名 : ウミフシナシミドロ

分 類 : フシナシミドロ目 フシナシミドロ科 (黄緑藻類)

学 名 : *Vaucheria longicaulis* Hoppough

カ テ ゴ リ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 藻体はアオミドロに似て柔らかく、錯そうする。藻体は管状の糸状体で、不規則に疎に分枝する。糸状体は太さ 60~80 μm。雌雄異株。生卵器は糸状体の側方に伸びた柄の上に生ずる。生卵器の形は太い棍棒状、長さ 250~300 μm、太さは基部で 60~80 μm、先端の肥大部で 120~180 μm、その中に 1 個の、球形の卵 (直径 130~150 μm) が作られる。造精器は柄と短い支持細胞、その上部に細長い円筒部からなる。円筒部の長さは約 780 μm、直径 60 μm、円筒部の側方に小さな三角錐状の放出口が数個見られる。

分 布 域 (県 外) : 宮城県、福島県、静岡県、兵庫県、島根県、愛媛県、福岡県 (博多湾)、鹿児島県。(国外) カリフォルニア (タイプ産地)、イラク。

県 内 の 分 布 : 沖縄島。

生 育 環 境 : 広くて平坦なさんご礁の、岸寄りの砂泥底上、また潮溜まりの砂泥底上にマット状に群生。沖縄島金武湾で泥混じりの砂れき干潟に生育しているのを確認。また、水深約 5 m 砂礫海底に生育していることが分かった。

生 育 状 況 : さんご礁の埋め立てに伴う生育地の消滅 (那覇市波の上、宜野湾市伊佐浜)。糸満市名城は現状不明。これまで沖縄島の 3 箇所では本種の生育を確認。

学 術 的 価 値 : カリフォルニアをタイプ産地とする種が、太平洋西側に分布、また熱帯海域の沖縄島にも産する等、地理的分布の上で貴重な種である。

減 少 の 要 因 : 埋め立てによる生育地の消滅 (那覇市波の上、宜野湾市伊佐浜)、沖縄島産の種は絶滅したものと考えていたが、最近になって沖縄島 3 箇所では本種の生育が確認された。

文 献 : 瀬川宗吉, 1956. 原色日本海藻図鑑. 保育社, 大阪, 21, pl. 12, no. 107.

瀬川宗吉・太田国光, 1954. 博多湾の海藻についての二三知見. 九大農学部学藝雑誌, 13: 282-285.

菊地則雄・平野弥生・大越健嗣, 2018. 東北地方太平洋沿岸産黄緑藻綱フシナシミドロ属藻類についての続報. 藻類, 66: 78.

Hoppough, K. W., 1930. A taxonomical study of the genus *Vaucheria* collected in California. Amer. Jour. Bot., 17: 329-347, pl. 24-27.

山岸高旺, 1959. 日本産フシナシミドロ属. 植物研究雑誌, 34: 72-85.

山岸高旺, 1964. 二三の沖縄産管状藻類について. 植物研究雑誌, 39: 82-90.

山岸高旺・秋山 優, 1977. 黄緑色藻綱. “日本淡水藻図鑑”, 廣瀬弘幸・山岸高旺(編), 内田老鶴圃, 東京, 197-217.

執 筆 者 名 : 香村眞徳

和 名 : カマクビウミフシナシミドロ (新称)

分 類 : フシナシミドロ目 フシナシミドロ科 (黄緑藻類)

学 名 : *Vaucheria vipera* Blum

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 の 特 徴 : 藻体は管状の糸状体 (経 40~85 μ m) は複雑に錯そうする。雌雄同株、生殖器官は側方に伸びた枝に生卵器 (洋ナシ形・卵形で経 115~180 μ m) と造精器 (やや湾曲した柄の上に円錐形の長さ 90~100 μ m) が向かい合って生ずる。

分 布 域 : 福島県、岡山県 (塩田)。国外では北米。

県 内 の 分 布 : 沖縄島。

近 縁 種 と の 違 い : 前記のウミフシナシミドロと外観は似ているが、生殖器官 (生卵器と造精器) の形態が異なる。

生 育 環 境 : 裾礁海岸において陸側に近い砂礫域に泥が存在する部分に叢生、また湾内の泥混じる砂礫干潟に群生する。

生 育 状 況 : 那覇と宜野湾市大山海岸で採集された材料で山岸 (1959) によって本種が報告されたが、さんご礁が埋め立てられ生育地が消滅した。近年沖縄島北部東海岸の湾内の干潟で、ウミフシナシミドロと混生しているのが確認された (香村)。

減 少 の 要 因 : 埋め立てによる生育地の消滅 (宜野湾市大山)。

学 術 的 価 値 : 北米をタイプ産地とする種で、熱帯海域の沖縄島にも産する等、地理的分布の上で貴重な種である。

文 献 : 菊地則雄・平野弥生・大越健嗣, 2018. 東北地方太平洋沿岸産黄緑藻綱フシナシミドロ属藻類についての続報. 藻類, 66: 78.

山岸高旺, 1964. 二三の沖縄産管状藻類について. 植物研究雑誌, 39: 82-90.

山岸高旺, 秋山 優, 1977. 黄緑色藻綱. “日本淡水藻図鑑”, 廣瀬弘幸・山岸高旺(編), 内田老鶴圃, 東京, 197-217.

執 筆 者 名 : 香村眞徳

2) 絶滅危惧 II 類 (VU)

和 名 : クビレミドロ

分 類 : フシナシミドロ目 フシナシミドロ科 (黄緑藻類)

学 名 : *Pseudodichotomosiphon constrictus* (Yamada) Yamada (*Vaucheria constricta* Yamada)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

形態の特徴：藻体（多核性糸状体）は濃緑色、高さ1～2 cmのドーム状の直立部と砂中の仮根部からなる。単独に点在。時に複数の直立部が集合、またマット状にもなる。地上部を構成する細胞糸は、直径240～300 μm、単条または1～2回分枝、所々でくびれる。仮根部は泥・砂を取り込んでいる。雌雄同株。球形の生卵器（径240 μm）と卵形の造精器（長径170～190 μm）を別々の細胞糸あるいは同一の細胞糸に側生。受精卵は茶褐色を呈する。藻体は12月中～下旬ごろに出現し、5月ごろには消失する。水深5 mほどの海底に生育する藻体では、地上部はドーム状にはならず、糸状体は錯そうしマット状に広がる。

近縁種との違い：本種はフシナシミドロ属 (*Vaucheria*) に所属させるべきだとするの意見もあるが、フシナシミドロ属の種類とは ①糸状体の細胞壁が厚く、手触りが硬い②くびれがある等の点で違いがあることから、ここでは本種をクビレミドロ属として取り扱った。

中国の海南島から変種 (*P. constrictus* var. *minor* Tseng, 1936) が記載されていたが、山岸 (1964) は本変種をフシナシミドロ属の一種 *Vaucheria thuretii* に当てるのが適当であるとされた。

県内の分布：沖縄島。

生育環境：生育地は比較的静穏な湾内や礁池内で、潮間帯下部の安定した泥混じりの細砂底に生育する。生育地、またその周辺には、海草のマツバウミジグサやウミヒルモ、コアモモが生育する。最近になって水深約5 mほどの砂泥底でも確認された。

生育状況：那覇市若狭町あたりがタイプ産地と判断される生育地で、それ以外かつて沖縄島から12か所で生育が確認されていたが、現在、5箇所（沖縄島の西岸側1箇所と東岸4箇所）に激減。ただし沖縄島東岸の2か所の生育地では、個体群が増え生育範囲も広がっている。

学術的価値：沖縄島固有種。1属1種からなる種。多核単細胞体であり、同様な性質は緑藻類の中にもみられることから、学術的に重要な種である。また、植物地理学上極めて貴重な存在である。クビレミドロのタイプ産地である那覇市の干潟から消滅したことは、学術上大きな損失である。

減少の要因：沿岸の埋め立てによる生育地の消滅（那覇市若狭、安謝、宜野湾市大山）、海岸域の構築物（漁港、護岸、栈橋等）の影響による泥、砂、砂礫の移動による底質環境の変化に起因する生育地の攪乱・消滅（糸満市名城、豊見城市高安、屋我地島内海側、中城村北浜）。沖縄島西海岸1箇所（恩納村山田）では生育地の一部に赤土の堆積がみられ、また人の踏みつけによる個体数の減少等で衰退することが危惧される。

備考：放出された卵の動態については、澤らの調査報告（2010）を参照。

文献：小澤宏之・長井 隆・玉城重則・香村眞徳・国場幸恒・照屋雅彦，2010. 沖縄県屋慶名干潟における希少藻類クビレミドロの初期発生活史. 沖縄環境科学センター報, NO.10, 71-74.

香村眞徳，1997, クビレミドロ. “日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (IV)” (財) 日本水産資源保護協会, 440-449, VI. 水生植物 図版-1.

(財) 日本水産資源保護協会編，1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック.

(財) 日本水産資源保護協会，437pp.

高原隆明，1993. クビレミドロ. “藻類の生活史集成 第3巻 単細胞性・鞭毛藻類”，堀 輝三編，田老鶴圃，東京，226-227.

Tseng, C. K., 1936. Studies on the marine Chlorophyceae from Hainan. Chinese Mar. Biol. Bull., 1: 129-200.

Yamada, Y., 1932. Notes on some Japanese algae III. Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.) 1: 109-123, pls. 21-25.

Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.), 3: 33-88.

山岸高旺，1964. 二三の沖縄産管状藻類について. 植物研究雑誌, 39: 82-90.

吉田忠生，2015. クビレミドロ. “レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”，環境省 (編)，ぎょうせい，東京，300.

執筆者名 : 香村眞徳

【緑藻類】

1) 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 和名 : ケイワズタ
 分類 : イワズタ目 イワズタ科 (緑藻類)
 学名 : *Caulerpa fastigiata* Montagne
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形態の特徴 : 藻体はほぼ円柱形で管状の直立枝 (長さ約 2 cm、直径 100~260 μ m) と、錯綜する仮根状の根部からなり、マット状に叢生する。直立枝には、叉状、互生、対生に小枝を生じる。
- 分布域 (県外) : 国内では沖縄県内でのみ確認されている。国外では中国、東南アジア、南太平洋、オーストラリア、ニュージーランド、インド洋、アラビア海、東アフリカ、バミューダ諸島、カナリー諸島、フロリダからブラジルまでの西太平洋岸に分布する。
- 県内の分布 : 沖縄島、瀬底島、宮古島、石垣島。
- 生育環境 : さんご礁ノッチのテラス部や岩礁の溝の壁面、湾奥の岩礁上など、潮間帯中部から下部に生育する。
- 生育状況 : 沖縄諸島では生育地の消滅した那覇市泊以外、瀬底島に局所的に生育する。宮古島では湾奥の潮間帯下部の岩盤上や階段護岸に、小規模な範囲に泥を被った状態でマット状に生育する。石垣島 (岡村, 1916) における生育状況は不明。
- 学術的価値 : 沖縄島を北限とする。本種はイワズタ属海藻の中で毛状の体制をとる最も単純な管状藻で、地理的分布の上で貴重な種である。
- 減少の要因 : 沿岸の埋立てによる生育地の消滅 (那覇市泊、宮古島トゥリパー)。栈橋工事後、砂礫の移動による藻体の摩耗が原因で消滅 (瀬底島の一部の生育地)。藻体への砂泥の被覆による生育阻害 (宮古島湾内)。
- 文献 : Coppejans, E. & Beekman, T., 1990. *Caulerpa* (Chlorophyta, Caulerpales) from the Kenyan coast. *Nova Hedwigia*, 50:111-125.
 香村眞徳, 1962. 琉球列島産海藻知見 (I). 藻類, 10: 17-23.
 香村眞徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, 15: 25-34.
 岡村金太郎, 1916. けいわづた. “日本海藻図譜 第4巻第1集”, 東京, 14-16, pl. 154, f. 9-13.
 山田幸男, 1940. 南洋産イワズタ属 (*Caulerpa*) の種類. 科学南洋, 3: 95-107.
 吉田忠生, 1998. けいわづた. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 98.
 吉田忠生, 2015. ケイワズタ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 303.

執筆者名 : 香村眞徳

- 和名 : ケブカフデモ
 分類 : カサノリ目 ダジクラズス科 (緑藻類)
 学名 : *Dasycladus vermicularis* (Scopoli) Krasser (*D. clavaeformis* (Roth) C. Agardh)

カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴：藻体はこん棒状で多少湾曲し、高さ 1~1.5 cm、直径 1.5~3.5 mm で、石灰質を持たない。基質に穿孔する仮根部から立つ管状の中軸は、多数の輪生枝に囲まれる。輪生枝は 3~4 回分枝する。それぞれの輪生枝の第一次節間部頂上に、球形をした 1 個の配偶子嚢 (直径 400~500 μm) を形成する。

分布域 (県外)：国内では沖縄県内でのみ確認されている。国外ではフィリピン、フロリダからブラジルまでの西太平洋岸、地中海に分布する。

県内の分布：伊是名島 (西方沖)、沖縄島、慶良間諸島、池間島。

生育環境：礁斜面基底から砂礫帯への移行部の礫や転石上に叢生する (新井, 私信)。砂で覆われることがある。水深 15~25 m。中城湾では、潮間帯中部からやや上部のサンゴ礫や岩盤上に、他のカサノリ目類と混生する (新崎, 1950)。

生育状況：もともと生育地と量が少なく、沖縄島では 2、3 か所で観察される程度である (新井, 私信)。中城湾 (新崎, 1950) での生育状況は不明。最近、沖縄島北部の礁湖内 (水深約 3~4 m) に本種が豊富に生育しているのを確認 (岩永・香村、未発表)。また、池間島では腹足綱のトウカムリ (生貝) の殻に着生しているのを確認 (岩永・香村、未発表)。それ以外に、大葉・板木 (2010) は伊是名島西方沖水深 89 m の海底から本種を採集、報告している。

学術的価値：大西洋、地中海の種が沖縄諸島に産することは、極めて不思議なことであり、地理的分布の上で重要な種である。

減少の要因：沿岸の埋立てや海岸構造物の建設等による生育の攪乱により、減少の可能性はある。

文献：新崎盛敏, 1950. 緑藻 *Dasycladus* の新産地とその地理的分布についての一考察. 科学, 20: 377-378.

大葉英雄, 1991. 沖縄県慶良間諸島産 *Dasycladus* (緑藻カサノリ目) について. 藻類, 39: 99.

大葉英雄, 1992. 慶良間諸島阿嘉島周辺の海藻植生. みどりいし, 3: 24-29.

大葉英雄・板木拓也, 2010. XXIV. 沖縄島西方沖から採集された海藻. 荒井晃作編「沖縄周辺海域の海洋地質学的研究」平成 21 年度研究概要報告書—沖縄島北西方沖海一. 産業技術総合研究所地質調査総合センター速報, 51: 159-167.

大葉英雄, 2015. ケブカフデモ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 304.

Valet, G., 1968. Contribution a l'etude des Dasycladales. Nova Hedwigia, 17(1/2): 21-82.

吉田忠生, 1998. *Dasycladus vermicularis*. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 150-152.

執筆者名：香村真徳・岩永洋志登

和名：ホソエガサ

分類：カサノリ目 カサノリ科 (緑藻類)

学名：*Acetabularia caliculus* Lamouroux

英名：Mermead wineglass

カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴：藻体は直立する細い柄 (長さ 5~6 cm) と、その先端の茶わん状のカサ (成熟体で直径 2.6~7 mm) からなる。カサは細長い袋状をした 18~38 個 (通常 23~28 個) の孢子枝で構成される。孢子枝の先端は凹形で、成熟すると孢子枝内に球形のシストが、通常 50~100 個 (直径は通常 110~130 μm) 作られる。

- 近縁種との違い : 本種は、カサ形成初期の若いカサノリの外観が本種によく似るものの、カサノリは孢子枝の先端が鈍円である点で区別される。カサが未発達の場合は、脱落性の輪生枝が、ホソエガサではやや濃い緑色か茶褐色を呈するが、カサノリでは無色に近い基部の部分が薄緑をしている。リュウキュウガサは柄が短く、カサが白味をおび、孢子枝の縁が尖っているため、本種との区別は容易である。
- 分布域（県外） : 国内では日本海側（北限地：富山湾）、本州太平洋側（北限地：伊勢湾）、瀬戸内海、四国（愛媛県）、九州（五島、熊本県、福岡県）で確認されている。国外では中国、海南島、フィリピン、ミャンマー、ベトナム、フィジー、西オーストラリア、アラビア海、ブラジル、カナリア諸島、フロリダ、メキシコ、スペインに分布する。
- 県内の分布 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。
- 生育環境 : 湾内や礁池の静穏な海岸で、砂礫地や礫混じりの砂地に生育する。浅い潮溜まりや干出時でも湿り気のある小礫や貝殻上に群生する。秋から翌年の初夏にかけて出現率が高い。
- 生育状況 : 沖縄島では10数か所で、宮古島では2か所での生育が確認されているが、生育地は局地的である。西表島における生育状況は不明である。
- 学術的価値 : 本種はカサノリ属植物の中でも、熱帯のさんご礁海域から温帯海域にかけて広く分布する。沖縄は、南方から日本温帯海域にかけて分布する経路に当たり、地理的分布の上で貴重な種である。また、生理学・遺伝学的実験研究の好材料として用いられている。
- 減少の要因 : 沿岸の埋立て（例：うるま市与那城平安座）、生育地における泥や砂の堆積（例：屋我地内海の一部）、海岸構築物の建設による砂や砂礫の移動に伴う生育地の攪乱（糸満市名城）。
- 文献 : 石川依久子, 1996. ホソエガサ. “日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（Ⅲ）”, (財)日本水産資源保護協会, 377-381, VI. 水生植物 図版5.
 石川依久子, 1998. ホソエガサ. “日本の希少な野生水生生物に関するデータブック”, (財)日本水産資源保護協会, 348-349.
 香村眞徳, 2004. カサノリとはどのような海藻か. (財)沖縄県環境科学センター報, (5): 10-24.
 岡村金太郎, 1912. ほそえがさ. 日本海藻図譜 第2巻第10集, 東京, 177, pl. 99, f. 1-8.
 Shihira-Ishikawa, I., Yano, D. M. Y. & Imahori K., 1982. An interspecific graft between two Japanese species of *Acetabularia*. *Jpn. J. Phycol.*, 30: 1-7.
 Valet, G., 1968. Contribution à l'étude des Dasycladales 1. Morphogenèse. *Nova Hedwigia*, 17(1/2): 21-82, pls. 4-26.
 吉田忠生, 1998. ほそえがさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 154-155.
 吉田忠生, 2015. ホソエガサ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省(編), ぎょうせい, 305.
- 執筆者名 : 香村眞徳

2) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 和名 : ヒメフカミドリシオグサ
- 分類 : シオグサ目 シオグサ科 (緑藻類)
- 学名 : *Pseudocladophora horii* (van den Hock et Chihara) Boedeker et Leliaert
 (*Cladophora horii* van den Hock et Chihara)
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 藻体は暗緑色で、分枝する糸状細胞で構成され、高さ 1 cm 以下の小さな団子状をなす。仮根状の付着器から多数の短い柄（長さ 85~130 μm ）が直立し、頂端細胞は円柱状で直径 65~90 μm である。
- 分布域（県外） : 国内では沖縄県内でのみ確認されている。国外では中国、南アフリカに分布する。
- 県内の分布 : 沖縄島、瀬底島（タイプ産地）、石垣島。
- 生育環境 : 地下水や河川の影響を受ける潮間帯のアオサ帯付近に生育する。アオサに被覆され、砂を取り込んでいる。特異な生育環境を好む性質がある（新井, 私信）。
- 生育状況 : 瀬底島では、局所的に生育する。石垣島での生育状況は不明。
- 学術的価値 : 本種は Hanyuda & Ueda (2002) によってマリモ（阿寒湖のものは特別天然記念物、環境省：絶滅危惧Ⅰ類）と近縁であることが分子レベルで明らかにされた。
- 減少の要因 : 県内での生育地がごく限られることから、その周辺で開発行為が行われた場合、種の存続に影響を及ぼす可能性が高い。

- 文献 : Boedeker, C., O'Kelly, C.J., Star, W. & Leliaert, F., 2012. Molecular phylogeny and taxonomy of the Aegagropila clade (Cladophorales, Ulvophyceae), including the description of *Aegagropilopsis* gen. nov. and *Pseudocladophora* gen. nov. J. Phycol., 48: 808-825.
- Hanyuda, T. & Ueda, K., 2002. New views of phylogenetic relationship between Marimo (*Aegagropila linnaei*) and some speceis of Cldophorales. A Joint Conference of the 26 Annual Congress of the Japanese Society of Phycology (JSP), the 50th Anniversary and the 3rd Asian Pacific Phycological Forum (APPF).
- Leliaert, F. & Coppejans, E., 2003. The marine species of *Cladophora* (Chlorophyta) from the South African east coast. Nova Hedwigia, 76: 45-82.
- van den Hock, C. & Chihara, M., 2000. A taxonomic revision of the marine species of *Cladophora* (Chlorophyta) along the coasts of Japanese and the Rusian Far-east. Nat. Sci. Mus., Tokyo. Mong. No.19, 242pp.
- Yoshii, Y., Hanyuda, T., Wakana, I., Miyaji, K., Arai, S., Ueda, K. & Inouye, I., 2004. Carotenoid compositions of *Cladophora* balls (*Aegagropila linnaei*) and some members of the Cladophorales (Ulvophyceae, Chlorophyta): their taxonomic and evolutionary implication. J. Phycol., 40: 1170-1177.

執筆者名 : 香村眞徳

-
- 和名 : ヒナイワズタ
- 分類 : イワズタ目 イワズタ科（緑藻類）
- 学名 : *Caulerpa brachypus* f. *parvifolia* (Harvey) Cribb (*C. parvifolia* Harvey)
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 藻体は、繊弱で糸状の匍匐茎（直径 300 μm ）と、線状~舌状の直立する葉状部（高さ 5~20 mm、幅 2~3.5 mm）からなる。葉状部は通常全縁であるが、那覇の種では両縁に小さな棘がある（Yamada, 1934）。
- 分布域（県外） : 国内では本州太平洋沿岸中・南部、八丈島で確認されている。国外では中国、台湾、フィリピン、インドネシア、フィジー、オーストラリア、ケニア、南アフリカ、西インド諸島に分布する。
- 県内の分布 : 硫黄島島、沖縄島、宮古島、魚釣島。
- 生育環境 : 潮間帯中部から礁縁部に生育する他の海藻と混生する。
- 生育状況 : もともと少ない。
- 学術的価値 : 地理的分布の上で重要な種であると同時に、ヘライワズタ (*C. brachypus*) の一品種 (Cribb, 1958 ; Coppejans & Beechman, 1990 ; N'Yeurt & South, 1996) とする考えもある。このことから、分類学的な検討を必要とする種でもある。
- 減少の要因 : 沿岸の埋立てによる生育地の消滅（例：那覇市波の上）。

- 文 献 : Coppejans, E. & Beeckman, T., 1990. *Caulerpa* (Chlorophyta, Caulerpaceae) from the Kenyan coast. *Nova Hedwigia*, 50: 111-125.
- Cribb, A. B., 1958. Records of marine algae from South-eastern Queensland. IV. *Caulerpa*. *Univ. Queensland Pap. Dept. Bot.*, 3: 209-220.
- 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, 15: 25-34.
- 香村真徳, 2002. 硫黄島島の海藻. “沖縄県史 資料編 13 硫黄島島”, 沖縄県教育委員会 (編), 219-228.
- 香村真徳・当真 武・狩俣亜生, 1982. 尖閣列島魚釣島の海藻類とその生育状況. “尖閣列島漁場調査報告書”, 沖縄県農林水産部 (編), 75-88.
- N'Yeurt, A. D. R. & G. B. South, 1996. A revised checklist of the benthic marine algae of the Fiji Islands, south Pacific (including the island of Rotuma). *Micronesia*, 29: 49-98.
- 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ヒナイワズタ. 琉球列島海藻目録. 琉球大学普及叢書, 17号, 14.
- Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. *Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.)*, 3: 33-88.
- 吉田忠生, 1998. ひないわずた. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 100-101.
- 吉田忠生, 2015. ヒナイワズタ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). 環境省 (編)”, ぎょうせい, 376.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : キザミズタ

分 類 : イワズタ目 イワズタ科 (緑藻類)

学 名 : *Caulerpa subserrata* Okamura

カ テ ゴ リ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 の 特 徴 : 藻体は円柱状の匍匐茎 (下方に分枝する糸状の付着器が出る) と、扁平で線状または楕円状～長楕円状の、直立する葉状部 (長さ1～2.5 cm、幅1～2.5 mm) からなる。葉状部の両縁は鋸波状に切れ込んでいる。葉状部は2枚向き合うことがある。

分 布 域 (県 外) : 国内では小笠原諸島 (タイプ産地) と奄美大島で確認されている。国外ではフィリピン、インドネシア、パラオに分布する。

県 内 の 分 布 : 沖縄島、石垣島、西表島。

生 育 環 境 : さんご礁潮間帯下部の礁上や潮溜まり、礁縁部、さらに潮下帯数 m の砂礫上に生育する。また、水深 40 m の海底にも生育することが知られている (Yokohama et al., 1992)。

生 育 状 況 : もともと少ない。

学 術 的 価 値 : 深場に適應することを可能にしている色素を備えており注目に値すること、また地理的分布の上からも貴重な種である。

減 少 の 要 因 : 沿岸の埋立てによる生育地の消滅 (例: 那覇市波の上)。

文 献 : 岡村金太郎, 1914. きざみづた. 日本藻類図譜 第3巻第5集, 東京, 97-98, pl. 125, f. 9-10.

瀬川宗吉・香村真徳, 1960. キザミズタ. 琉球列島海藻目録, 琉球大学普及叢書, 17号, 14.

Silva, P. C., Meñez, E. G. & Moe, R. L., 1987. Catalog of the benthic marine algae of the Philippine. *Smithsonian Contr. Marine Science*, 27, 179pp.

Verheij, E. & van Reine Prud'Homme, W. F., 1993. Seaweeds of the Spermonde Archipelago, Sw Sulawesi, Indonesia. *Blumea*, 37: 385-510.

Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.), 3: 33-88.

Yokohama, Y., Hirata, T., Misonou, T., Tanaka, J. & Yokochi, H., 1992. Distribution of green light-harvesting pigments, siphonoxanthin and siphonoin, and their precursors in marine green algae. Jpn. J. Phycol., 40: 25-31.

吉田忠生, 1998. きざみずた. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 103-105.

吉田忠生, 2015. キザミズタ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 377.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : イチイズタ

分類 : イワズタ目 イワズタ科 (緑藻類)

学名 : *Caulerpa taxifolia* (Vahl) C. Agardh

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 藻体は円柱状の匍匐茎の背面に、ある間隔で葉状部 (高さ通常 2~3 cm、幅 5~8 mm) が直立する。葉状部は扁平で、両縁から対生する鎌状の小枝を羽状に出す。

分布域 (県外) : 国内では徳之島、奄美大島、与論島で確認されている。国外では台湾、フィリピン、インドネシア、海南島、ミクロネシア、ハワイ、フィジー、アラビア海、東アフリカ、西インド諸島、カナリア諸島、地中海、西大西洋に分布する。

県内の分布 : 沖縄島、宮古島、与那国島。

生育状況 : 潮間帯下部から潮下帯の水深数 m までの砂礫上、または岩盤上に匍匐する。

生育状況 : もともと少なく、生育密度も低い。

学術的価値 : さんご礁海域を代表する管状藻類の一員であるイワズタ属の一種で、地理的分布の上で貴重な種である。

減少の要因 : 沿岸の埋立てによる生育地の消滅 (例: 那覇市波の上)。

備考 : 1980 年代初め、地中海で、変異したイチイズタが無性的に大繁殖して海底面を覆うことで他種を排除してしまう問題が発生し、キラールジーと称された。その後、「世界の侵略的外来種ワースト 100 (IUCN)」に掲載されたことで有名である。

文献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. イチイズタ. 琉球列島海藻目録. 琉球大学普及叢書, 17 号, 15.

新村 巖, 1990. 鹿児島県産海藻目録. 鹿児島県水産試験場紀要 第 13 集, 鹿児島県水産試験場, 112pp.

田中 剛・糸野 洋, 1968. 奄美本島の海藻. 奄美群島自然公園予定地基本調査書, 海中公園センター調査報告 第 1 号: 191-201, 図版 I-IV.

田中 剛・糸野 洋, 1968. 与論島の海藻. 奄美群島自然公園予定地基本調査書, 海中公園センター調査報告 第 1 号: 317-325, 図版 I-V.

Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.), 3: 33-88.

山田幸男, 1940. 南洋産イワズタ属 (*Caulerpa*) の種類. 科学南洋, 3: 95-107.

吉田忠生, 1998. いちいずた. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 104.

吉田忠生, 2015. イチイズタ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 378.

執筆者名 : 香村真徳

-
- 和名 : テングノハウチワ
 分類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
 学名 : *Avrainvillea riukiensis* Yamada
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 藻体は錯綜する管状の糸状体 (太さ 11~18 μm) からなり、ほぼ円柱状の柄 (長さ 5 cm になる) に、横に長いじん臓形 (基部は心臓形) で扁圧な葉状部 (高さ約 10 cm、幅 15 cm) をつける。糸状体には多少くびれがあり、分枝部の上で強くくびれる。
- 分布域 (県外) : 国内では沖縄県内でのみ確認されている。国外では台湾、モーリシャス、アラビア海、パラオに分布する。
- 県内の分布 : 沖縄島 (那覇がタイプ産地)、石垣島 (北海道大学理学部標本)。
- 生育環境 : 深い潮溜まりの壁面に着生。
- 生育状況 : Yamada (1932) によって那覇から報告されて以来、沖縄島において、本種の生育確認情報を得ていない。非常にまれな種である。
- 学術的価値 : 那覇がタイプ産地であることから、生育地の消滅は学術上、大きな損失である。
- 減少の要因 : 沿岸の埋立てによる生育地の消滅 (例 : 那覇市波の上)。
- 文献 : Yamada, Y., 1932. Notes on Japanese algae IV. Jour. Fac. Sci., Hokkaido Univ., ser. V. (Bot.), 2: 267-276, 7pls.
 吉田忠生, 1998. てんぐのはうちわ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 111.
 吉田忠生, 2015. テングノハウチワ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 379.
- 執筆者名 : 香村眞徳

-
- 和名 : オオハゴロモ
 分類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
 学名 : *Udotea argentea* Zanardini
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態の特徴 : 藻体は 3~5 cm の高さで、短い茎に腎臓形~卵形の葉状部をつける。さらに葉状部の縁辺から葉片を副出する。石灰質を沈着するため、藻体は灰緑色となる。葉状部は管状の糸状体 (太さ 40~60 μm) が平行に走り多層となる。糸状体の分枝部の上部には、不規則なくくびれがある。仮根部は砂礫を取り込んでいる。
- 分布域 (県外) : 国内では沖縄県内でのみ確認されている。国外では中国、台湾、東南アジア、ミクロネシア、ソロモン諸島、オーストラリア、カリブ海に分布する。
- 県内の分布 : 沖縄島、与那国島。
- 生育環境 : 水深約 9 m の砂礫底、または、礁池内の水深約 2~3 m の砂礫底や岩盤上に生育する。
- 生育状況 : 与那国では、礁池内の深さ 2~3 m にある岩場周辺の砂礫底に生育する。沖縄島では、Yamada (1934) の報告以来、本種の生育に関する学術的な報告はない。
- 学術的価値 : 沖縄島を北限とする。さんご礁海域の代表的なハゴロモ属の一種で、地理的分布の上で貴重な種である。

減少の要因 : 沿岸の埋立てによる生育地の消滅 (例: 本種が国内から初めて報告された生育地、糸満)。離岸堤整備後のシルト堆積増加による生育環境の悪化 (例: 与那国島)

文献 : 岸本和雄, 1998. 琉球列島産ミル科緑藻の分類学的研究. 琉球大学理学部修士論文, 70pp.
Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. Jour. Fac. Sci., Hokkaido Univ. ser. V. (Bot.), 3: 33-88.
Yamada, Y. & T. Tanaka, 1938. The marine algae from the island of Yonakuni. Sci. Pap. Inst. Algal. Res., Fac. Sci. Hokkaido Univ., 2: 53-86.
吉田忠生, 1998. おおはごろも. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 124.
吉田忠生, 2015. オオハゴロモ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 380.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : ウスガサネ
分類 : カサノリ目 ダジクラズス科 (緑藻類)
学名 : *Cymopolia vanbosseae* Solms-Laubach
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形態の特徴 : 藻体は単条で、ダンゴの串刺しか、小さな臼 (球状部) を重ねたような外形をしている。球状部は石灰質を強く沈着する。高さは2.5 cmに達するが、通常1.1~1.6 cm、頂端付近の球状部の直径は約1.5 mm。中軸には石灰化した球状部が通常9~15個連なり、先端の球状部を除いて沈着する石灰質のため白味を帯びる。先端の若い球状部の先には早落性の白っぽい毛が密生する。配偶子嚢は球状部内の輪生枝の第一次関節の頂上にそれぞれ1個作られる。配偶子嚢は卵形で通常長径190~240 μm、短径150~200 μm。

分布域 (県外) : 国内では沖縄県内でのみ確認されている。国外では台湾、フィリピン、インドネシア、パプアニューギニアに分布する。

分布域 (県内) : 硫黄島、沖縄島、宮古島。

生育環境 : 内湾性の干潟や礁池 (イノー) 内の潮間帯中部から低潮線付近の干出する礫や岩盤上に生育する。

生育状況 : 沖縄島において、内湾干潟の潮間帯中部から低潮線付近の岩盤・巨礫・礫などの上や側面に群生する。礁池の陸側の岩盤・岩塊上に生育するが、干潟に比べ観察される頻度は低い。岡村 (1936) により、宮古島から記録されているが、その後の情報や記録はなく、同島における本種の生育については確認する必要がある。八重山諸島からの生育に関する確認情報は無い。

学術的価値 : ウスガサネ属には2種が世界に産する。その1種は分枝しないウスガサネで、沖縄・フィリピン・インドネシアに分布域を持つ。他の1種は分枝する *C. barbata* (L.) Lam. で、大西洋の熱帯から亜熱帯域に分布域を持つ。カサノリ目植物の中でも石灰質を強く沈着する性質があり、地理的分布や石灰化機構などの解明にも必要な材料である。

減少の要因 : 沿岸の埋立てによる生育地の消滅 (例: 那覇市波の上)。海岸構造物の建設による底質攪乱。陸域からの流入土砂が生育基質に被覆することによる生育地の攪乱。

文献 : Coppejans, E. & W. F. Prud'Homme van Reine, 1989. Seaweeds of the Senellii-II Expedition, Chlorophyta: Dasycladales. Netherlands Jour. Sea Res., 23: 123-129.
Gilbert, W. J. & M. S. Doty, 1969. Some additional records of Philippine marine Chlorophyta. Micronesia, 5: 121-130.
香村眞徳, 2002. 硫黄島の海藻. “沖縄県史 資料編 13 硫黄島”, 沖縄県教育委員会編, 219-228.

岡村金太郎, 1936. うすがさね. 日本海藻誌. 内田老鶴圃, 東京, 79-80.

Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.), 3: 33-88.

吉田忠生, 1998. うすがさね. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 150-151.

吉田忠生, 2015. ウスガサネ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 382.

執筆者名 : 香村真徳

3) 準絶滅危惧 (NT)

和名 : オオネダシグサ

分類 : シオグサ目 シオグサ科 (緑藻類)

学名 : *Rhizoclonium grande* Boergesen

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は匍匐する糸状体で、細胞の直径は通常 300~350 μm 、長さは直径の 1~3 倍、細胞膜は 60~70 μm と厚く数層からなる。細胞から下落する根様小枝は、1~2 mm 長く、1 個の細胞からなり、先端にかけて細く、しばしば分枝し基質に付着する。潮間帯中・下部の浅い潮だまりや礁面上に生育し、他の海藻に覆われることがある。局所的に生育し、生育密度は低い。本種はネダシグサ属 (*Rhizoclonium*) の仲間では大型で、清澄な場所に生育する種としては異質な存在である。また、地理的分布の上からも貴重な種である。国内では硫黄島を北限とし、沖縄島、魚釣島に産する。国外では中国、東南アジア、熱帯南太平洋、ボンベイ (タイプ産地)、モーリシャスに分布する。沿岸の埋立てによる生育地の消滅 (例: 那覇市波の上) が懸念される。

文献 : Boergesen, F., 1935. A list of marine algae from Bombay. Kongelige Danske Videnskabernes Selskab, Biologiske Meddelelser, 12(2): 1-64, 25 figs, 10 plates.

Egerod, L., 1975. Mariine algae of the Andaman Sea coast of Thailand: Chlorophyceae. Bot. Mar., 18: 41-66.

香村真徳, 1962, 琉球列島産海藻知見 (I). 藻類, 10: 17-23.

Tseng, C. K., 1936. Studies on the marine Chlorophyceae from Hainan. Chinese Mar. Biol. Bull., 1: 129-200.

吉田忠生, 1998. おおねだしぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 71-72.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : ヒメミドリゲ

分類 : ミドリゲ目 マガタマモ科 (緑藻類)

学名 : *Cladophoropsis fasciculata* (Kjellman) Wille (*C. sundanensis* Reinbold)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は薄い緑色で、手触りは柔らかくドーム状に近い塊 (幅約 5~6 cm、高さ約 1 cm) となる。藻体は分枝する糸状細胞からなり錯綜する。主要な細胞の直径は 80~100 μm 、小枝では細く約 60 μm 。国外では中国、台湾、東南アジア、オーストラリア、熱帯太平洋、インド洋、カリフォルニア、西大西洋に分布する。国内では沖縄島と宮古島でのみ確認されており、岩礁の潮間帯中部に叢生する。また他のミドリゲ類の藻体上にも着生する。特に夏場に

見られる。局所的に生育し、もともと生育量は少ない。沖縄島が北限に当たり、地理的分布の上で貴重な種である。本邦から那覇市（波の上？）の材料で報告されたが、その後、那覇市から本種の生育は確認されていない。沿岸の埋立てによる生育地の消失（例：那覇市、宮古島トゥリバー）が懸念される。

文 献 : Boergesen, F., 1935. A list of marine algae from Bombay. Kgt. Danske Vidensk. Selsk., Biol. Medd., 12(2): 1-64, 9pls.
 Egerod, L., 1974. Report of the marine algae collected on the Fifth Thai-Danish Expedition of 1966: Chlorophyceae and Phaeophyceae. Bot. Mar., 17: 130-157.
 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, 15: 25-34.
 大村徹雄, 1976. 中城湾の海産植物. 琉球大学理工学部生物学科卒業論文, 77pp.
 Yamada, Y., 1944. Notes on some Japanese algae X. Sci. Pap. Inst. Algol. Res., Fac. Sci., Hokkaido Univ., 3: 12-25.
 吉田忠生, 1998. ひめみどりげ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 87.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : タンポヤリ

分 類 : クダネダシグサ目 アオモグサ科 (緑藻類)

学 名 : *Struvea okamurae* Leliaert (*Chamaedoris orientalis* Okamura et Higashi)

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は仮根部から直立する円柱状の細長い柄（直径 1~1.5 mm）と、その先端に小枝が集合してできた球形~楕円形の頭状部からなる。藻体全体の長さは 17 cm に達する。頭状部は長さ 2.6~10 cm、直径 2~4 cm ある。柄には明瞭な環状のくびれがある。本種の生育は局所的で、主に礁池内や潮間帯下部の浅い潮溜まりで見られる他、潮下帯の 3~4 m の礁上にも群生する。奄美大島では水深約 15 m まで生育していることが確認されている（榎本, 1994）。国内の分布域は奄美以南の南西諸島で、県内では沖縄諸島、宮古島、与那国島で確認されている。国外では、台湾（紅頭嶼：タイプ産地）、フィリピン、ミクロネシア、ニューカレドニア、グアムに分布する。地理的分布の上で貴重な種である。海岸構造物の建設（例：宮古島市）による生育地の攪乱が生育の阻害要因となる。

文 献 : 榎本幸人, 1994. タンポヤリ. “藻類の生活史集成 第1巻 緑色藻類”, 堀 輝三編, 内田老鶴圃, 東京, 242-243.
 Itono, H. & R. T. Tsuda, 1980. New algal genera and species records from Micronesia: *Chamaedoris orientalis* (Chlorophyta) and *Rhodopeltis gracilis* (Rhodophyta). Micronesica, 16: 21-28.
 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, 15: 25-34.
 Okamura, K., 1931. On the marine algae from Kotosho (Botel Tobago). Bull. Biogeogr. Sci. Jap., 2: 95-122.
 大城 肇. 1961. 沖縄伊計島のタンポヤリについて. 藻類, 9: 53-56.
 田中次郎・中村庸夫, 2004. 日本の海藻. 平凡社, 東京, 243pp.
 Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.), 3: 33-88.
 吉田忠生, 1998. たんぽやり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 85-86.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : マガタマモ

分 類 : ミドリゲ目 マガタマモ科 (緑藻類)
 学 名 : *Boergesenia forbesii* (Harvey) Feldmann (*Valonia forbesii* Harvey)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は曲玉状をした薄緑色の嚢状体で、大小様々な嚢状体が多数集まった状態で生育する。嚢状体は高さ 5 cm に達し、基部で細く先端にかけて太くなり、幅は 1 cm ほどになる。基部にはリング状のくびれが何段か見られる。清澄なさんご礁礁原の浅い潮溜まり内に生育する。局所的に生育する。国内では小笠原諸島の他、南西諸島においては馬毛島、奄美大島に、また県内では硫黄島、伊平屋島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島で確認されている。国外では中国、台湾、東南アジア、東オーストラリア、南太平洋、インド、スリランカ、東アフリカ、プエルトリコ、西大西洋に分布する。“琉球”がタイプ産地である。本種は細胞膜の構造研究や生理実験の材料に利用される。物理的的刺激を与えるだけで、原形質は無数の球状の娘原形質に変成しクローン繁殖をとるなど、学術的価値が高い。沿岸の埋立てによる生育地の消失 (例：那覇市) が懸念される。

文 献 : 榎本幸人, 1994. マガタマモ. “藻類の生活史集成 第 1 巻 緑色藻類”, 堀 輝三編, 内田老鶴圃, 東京, 240-241.
 Enomoto, S. & Hirose, H., 1972. Culture studies on artificial induced aplanospores and their development in marine alga, *Boergesenia forbesii* (Harvey) Feldmann (Chlorophyceae, Siphonocladales). *Phycologia*, 11: 119-122.
 Feldmann, J., 1938. Sur la classification de L'ordre des Siphonocladales. *Rev. gen. Bot.*, 50: 371-597.
 Harvey, W. H., 1859. Characters of new algae, chiefly from Japan and adjacent regions collected by Charles Wright in the North Pacific Exploring Expedition under Capt. John Rodgers. *Proc. Amer. Acad. Arts and Science*, 4: 327-334.
 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, 15: 25-34.
 香村真徳, 1986. 海藻. “沖縄のサンゴ礁”, 西平守孝編, 琉球大学放送公開講座, 129-148. (図 7 を参照)
 Kida, W., 1964. Results of Amami Expediton 4. *Algae. Rep. Fac. Fish. Pref. Univ. Mie*, 581: 219-215.
 Mizuta, S., 1991. Ultra-fine structures of ferminal complexes in *Boergesenia forbesii*. *Mem. Fac. Sci. Kochi Univ., Ser. D. (Biol.)*: 41-47.
 Mizuta, S. & Harada, T., 1991. Formation of cellulose microfibriles on an isolated plasma membrane of the coenocystic green alga *Boergesenia forbesii*. *Bot. Mar.*, 34: 411-416.
 田中次郎・中村庸夫, 2004. 日本の海藻. 平凡社, 東京, 243pp.
 Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. *Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.)*, 3: 33-88.
 吉田忠生, 1998. まがたまも. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 85.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : ホソバロニア
 分 類 : シオグサ目 ウキオリソウ科 (緑藻類)
 学 名 : *Valoniopsis pachynema* (Martens) Boergesen
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は黄緑色を呈し、細長い円柱状の多核性細胞が繰り返し分枝して、数 cm の大きさの塊となる。細胞の直径は 2 ~ 3 mm、長さは直径の数倍にもなり変化に富む。さんご礁潮間帯の中・下部の礁面上や潮溜まりの縁部分に生育する。もともと量的に少なく局所的に生育する。県内においては、沖縄島、宮古島、西表島、与那国島、魚釣島に産する。国内では本州太平洋岸南部に、国外では台湾、東南アジア、インド、東アフリカ、バミューダ島、メキシ

コ、カリブ海に分布する。1属2種からなり、地理的分布の上で貴重な種である。沿岸の埋立て等により、生育地の攪乱や、あるいは直接的に消滅する可能性がある。

- 文 献 : Egerod, L., 1974. Report of the marine algae collected on the Fifth Thai-Danish Expedition of 1966: Chlorophyceae and Phaeophyceae. Bot. Mar., 17: 130-157.
香村真徳・当真 武・狩俣亜生, 1982. 尖閣列島魚釣島の海藻類とその生育状況. “尖閣列島漁場調査報告書”, 沖縄県農林水産部(編), 75-88.
田中次郎・中村庸夫, 2004. 日本の海藻. 平凡社, 東京, 243pp.
瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ホソバロニア. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 7.
吉田忠生, 1998. ほそばろにあ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 51-52.

執 筆 者 名 : 香村真徳

- 和 名 : アマミノクロキズタ
分 類 : イワズタ目 イワズタ科 (緑藻類)
学 名 : *Caulerpa scalpelliformis* (R. Brown ex Turner) C. Agardh var. *denticulata* (Decaisne) Weber-van Bosse
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) (クロキズタ var. *scalpelliformis*)

藻体は匍匐茎(太さ通常 1.5~2 mm)と、短い柄を着けた広い披針状の直立葉状部(長さ 6 cm、中央で幅 0.5 cm)からなる。葉状部は紙のように薄く、互生的に裂けた羽状片があり鋸歯状を呈する。羽状片の外縁には細かな棘が並ぶ。国外ではタイ、ソロモン諸島、インド洋、紅海、ブラジルに分布する。本変種は喜界島から新産地報告され(Tanaka, 1965)、沖縄島では深場の砂地に生育し、生育密度は低い(環境省, 2004)。本変種は、クロキズタ(var. *scalpelliformis*)と同様、天然記念物に指定すべきである。地理的分布の上で貴重な種である。国内の温帯域のクロキズタは、岡村(1916)によって var. *denticulata* が当てられていたが、Tanaka(1965)はクロキズタを var. *intermedia* に変更し、喜界島産の標本に var. *denticulata* (アマミノクロキズタ)を当てた。その後、吉田(1998)は国内の温帯域のクロキズタの学名を var. *scalpelliformis* に変更した。生育の阻害要因として、砂利採取(砂利採取船)による海底の攪乱や赤土の堆積などが挙げられる。クロキズタは国指定の天然記念物。

- 文 献 : Joly, A. B., Cordeiro-Marino, M., Yamaguishi-Tomita, N., Ugadim, Y., de Oliveira Filho, E., & Ferrira, M. M., 1966. Additions to the marine flora of Brazil V. Arq. Ast. Biol. Mar. Univ. Ceara, 5: 65-78.
環境省, 2004. 平成 15 年度ジュゴンと藻場の広域調査報告書. 255pp, + 付属資料.
大野正夫, 1998. クロキズタ. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. 水産庁(編), (財)日本水産資源保護協会, 344-345.
Tanaka, T., 1965. Studies on some marine algae from southern Japan - VI. Mem. Fac. Fish., Kagoshima Univ., 14: 52-71.
吉田忠生, 1998. あまみのくろきずた. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 102.

執 筆 者 名 : 香村真徳

- 和 名 : フササボテングサ
分 類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
学 名 : *Halimeda borneensis* Taylor (*H. simulans* Howe)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は直立、高さ 8.5 cm、石灰質を強く沈着する。短い柄から数個のくさび状に近い節間部が出て、重なるように節間部が配列する。外形は球状に近い塊となる場合が多い。節間部は様々な形をしている。体の上半部の関節部は通常くさび形に近く、または腎臓形で、幅 13 mm、長さ 9 mm に達する。藻体は薄い緑色で内側は白っぽい。砂中の付着器（長さ数 cm）は円筒状で砂や礫を抱え込んでいる。国内では徳之島を北限とし、県内では伊是名島、沖縄島、瀬底島、久米島、宮古島、竹富島、西表島で確認されている。国外では中国、フィリピン、インドネシア、南太平洋、東オーストラリア、インド、タンザニア、カリブ海、フロリダ、メキシコ、ベリーズ、パナマに分布する。礁池内や湾内干潟の低潮線付近や、水深 2 m の砂礫地に生育する。海草帯の空き地に局所的に群生する。生育環境として、底質が安定した場所であることが必要である。さんご礁海域における緑藻類の代表的な属の仲間、地理的分布の上で貴重な存在である。沿岸の埋立てや海岸構造物の建設による底質の変化は種の生存の脅威となり、生育地の消滅（例：糸満）が懸念される。

文 献 : Tsuda, R. T. & Kamura, S., 1991. Floristics and geographic distribution of *Halimeda* (Chlorophyta) in the Ryukyus. Jpn. J. Phycol., 39: 57-76.
吉田忠生, 1998. ふささぼてんぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 119.

執 筆 者 名 : 香村眞徳

和 名 : ソリハサボテングサ
分 類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
学 名 : *Halimeda distorta* (Yamada) Hillis-Colinvaux (*H. incrassata* f. *distorta* Yamada)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は節間部が平面的に広がり、長さ 23 cm にも達する。繰り返し叉状にまた掌状に分枝する。節間部は厚く強く石灰質を沈着するため、藻体は薄緑色を呈する。節間部は波打つように反り返る。節間部は、長さ 10 mm、幅 14 mm になる。節間部の縁から根様糸を出し基質に付着する。国内では沖縄島が北限であり、瀬底島、竹富島で確認されている。国外ではフィリピン、インドネシア、南太平洋、オーストラリア、インド、ケニア、タンザニア、メキシコに分布する。さんご礁縁の低潮線付近から深さ 2 m 付近の枝サンゴや死サンゴの隙間などに生育する。さんご礁縁に局所的に生育する性質が強く、もともと生育密度は低い。熱帯系のさんご礁藻類の代表的な属の仲間、地理的分布の上で貴重な種である。さんご礁縁部の破壊（航路建設）、また枝サンゴ類の減少が生育の阻害要因となる。

文 献 : Tsuda, R. T. & Kamura, S., 1991. Floristics and geographic distribution of *Halimeda* (Chlorophyta) in the Ryukyus. Jpn. J. Phycol., 39: 57-76.
山田幸男, 1941. 南洋産サボテングサ属 (*Halimeda*) の種類. 科学南洋, 4: 108-121.
吉田忠生, 1998. そりはさぼてんぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 115-116.

執 筆 者 名 : 香村眞徳

和 名 : ヒロハサボテングサ
分 類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
学 名 : *Halimeda macroloba* Decaisne
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は大型で、高さは25 cmにもなり、石灰質を比較的多く沈着するため灰緑色を呈する。付着部は砂中にあり、円筒～円すい状で、砂粒を絡めた細胞糸からなる。この付着部から関節部が連なり叉状、三叉状に分枝する。葉部は平面的に直立する。関節部は基部で短く、扁平であるが先端になるにつれて扁平となる。関節部は長さ2.2 cm、幅3.7 cmに達する。群生する。フササボテングサと混同されることがある。県外では奄美大島、加計呂間島、与論島に産し、国外においては中国、台湾、東南アジア、南太平洋、オーストラリア、クイーンズランド、インド洋、東アフリカに分布する。県内では久米島、宮古島、石垣島、小浜島、西表島、与那国島で確認されており、比較的静穏な湾内の低潮線から水深2、3 mの砂礫あるいは砂泥底に生育する。水深65 mの海底からもドレッジによって採集されている（田中，1957）。先島諸島を中心に分布域を持つ種で、熱帯域のさんご礁海域の緑藻類の中では砂礫底に生育する種として代表的な存在であり、また地理的分布の上からも貴重な存在である。沿岸の埋立てによる生育地の消滅（例：宮古島トゥリパー）が懸念される。

- 文 献 : 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, 15: 25-34.
 香村真徳・飯田勇次, 1981. 久米島の礁湖内さんご礁上の海産植物の分布. “琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革Ⅱ”, 琉球大学, 263-279. <*H. incrassata* f. *lamourouxii*として>
 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ヒロハサボテングサ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 19.
 田中 剛, 1957. 奄美群島、与論島の堡礁上の海藻相（予報）. 鹿児島大学南方産業科学研究所, 2: 27-29.
 Tsuda, R. T. & Kamura, S., 1991. Floristics and geographic distribution of *Halimeda* (Chlorophyta) in the Ryukyus. Jpn. J. Phycol., 39: 57-76.
 山田幸男, 1941. 南洋産サボテングサ属 (*Halimeda*) の種類. 科学南洋, 4: 108-121.
 吉田忠生, 1998. ひろはさぼてんぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 118.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : コバノサボテングサ
 分 類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
 学 名 : *Halimeda micronesica* Yamada
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は高さ13 cmに達し、くさび形の基部の節関節部から一平面的に扇形に広がる。節関節部から枝が通常三叉状に分枝する。節間部は円盤状で幅7 mm、長さ10 mmに達する。本種は中国、東南アジア、南太平洋、パプアニューギニア、東オーストラリア、インド洋、東アフリカに分布する。県内では沖縄島、竹富島、波照間島に産する。水深約3 m（糸満沖、Yamada, 1934）、また礁縁部のスズカケモの体上に着生することもある（Itono, 1973）。さんご礁礁縁水路壁面（水深約4 m）などに群生する。Yamada (1934) によって糸満から *H. incrassata* f. *ovata* として記録された後は、下地島、八重干瀬、竹富島、波照間島で確認されたのみである。県内では本種の生育地はきわめて局所的であるものと判断される。沖縄島が北限であり、熱帯域のさんご礁海域の緑藻類の代表的な属の仲間、地理的分布の上で貴重な種である。現在、糸満沖（Yamada, 1934）では確認されておらず、埋立てにより生育地が消滅した可能性がある。

- 文 献 : Itono, H., 1973. Notes on marine algae from Hateruma Island, Ryukyu. Bot. Mag. Tokyo, 86: 155-168.
 熊田美里・渡辺剛・大葉英雄, 2009. 沖縄県宮古諸島の海藻植生. みどりいし, 20: 24-33.
 大葉英雄・有賀祐勝, 1982. 八重山群島石垣島周辺の海藻. 藻類, 30: 325-331.
 Tsuda, R. T. & Kamura, S., 1991. Floristics and geographic distribution of *Halimeda* (Chlorophyta) in the Ryukyus. Jpn. J. Phycol., 39: 57-76.

Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.), 3: 33-88.

山田幸男, 1941. 南洋産サボテングサ属 (*Halimeda*) の種類. 科学南洋, 4: 108-121.

吉田忠生, 1998. こばのさぼてんぐさ. 新日本海藻誌, 内田老鶴圃, 東京, 118.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : コテングノハウチワ

分類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)

学名 : *Avrainvillea erecta* (Berkeley) A. et E. S. Gepp

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体 (葉状部) は濃緑色し、高さは通常 5 cm 内外である。腎臓形から扇形をした葉状部は一般的に一枚からなるが、複数枚が交差して融合したような複雑な形状の場合もある。藻体には石灰質を沈着しないことから柔らかい。砂中にある根様部は円柱状で長さ約 10 cm にもなり、砂を抱え込んでいる。藻体は錯綜する糸状体 (太さ 30~60 μ m) からなる。幼体は付着部の先端が団子の形をしているので、クビレミドロに酷似する。干潟の砂地や砂礫地に疎に散在する。国内では奄美諸島以内に分布し、県内では沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島で確認されている。国外では中国、台湾、フィリピン (タイプ産地) ほか東南アジア、ミクロネシア、インド洋、東アフリカに分布する。さんご礁海域の砂地に生育する代表的な種類の一種で、地理的分布の上からも貴重な種である。ハウチワ属の種は、ハゴロモ科海藻の中で、藻体に石灰を沈着させない種類として特異的な存在である。海岸構築物の建設などによる砂質の攪乱は、生育の維持を困難にする。沿岸の埋立てによる生育地の消滅 (例: 糸満市) が懸念される。

文献 : 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, 15: 25-34.

香村真徳・飯田勇次, 1981. 久米島の礁湖内さんご礁上の海産植物の分布. “琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革Ⅱ”, 琉球大学, 263-279.

岸本和雄, 1998. 琉球列島産ミル科緑藻の分類学的研究. 琉球大学理学部修士論文, 70pp.

瀬川宗吉・香村真徳, 1960. コテングノハウチワ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 17.

Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.), 3: 33-88.

Yamazato, K., Kamura, S., Nakasone, Y., Aramoto, Y. & Nishihira, M., 1976. Ecological distribution of the reef associated organisms in the Bise-Shinzato coast of Okinawa. Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls., 2: 6-30.

吉田忠生, 1998. こてんぐのはうちわ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 110.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : イトゲノマユハキ

分類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)

学名 : *Chlorodesmis caespitosa* J. Agardh (*C. formosana* Yamada)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は髪の毛様で濃緑色を呈し、多核性の管状の糸状体で、高さ 10 cm ほどにもなる。糸状体の直径は 152~265 μ m、基部で太く 203~398 μ m、叉状に分枝し、分枝点から同じ高さの位置にくびれがある。国内では八丈島、本州

太平洋中・南部、奄美諸島に、国外では中国、台湾、フィリピン、南太平洋、パプアニューギニア、クイーンズランド、インド洋に分布する。県内では、伊是名島、沖縄島（北部）、神山島、久米島、与那国で確認されている。さんご礁低潮線付近の潮溜まりや礁斜面に至る水路の壁、礁面のくぼみにパッチ状に叢生する。久米島を除いて、もともと少ない。特に外洋に面した清澄な場所に生育する。マユハキモ属の中でも大型の種で熱帯性海藻としては特異な存在であり、地理的分布の上からも貴重な種である。沿岸の埋立てによる生育地の消滅（例：久米島）が懸念される。

- 文 献 : Ducker, S. C., 1967. The genus *Chlorodesmis* (Chlorophyta) in the Indo-Pacific region. *Nova Hedwigia*, 13: 145-182, pls. 25-43.
 岸本和雄, 1998. 琉球列島産ミル科緑藻の分類学的研究. 琉球大学理学部修士論文, 70pp.
 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. イトゲノマユハキ“琉球列島海藻目録”. 琉球大学普及叢書, 17号, 17.
 Yamada, Y., 1925. Studien ueber die Meeresalgen von der Insel Formosa. 1. Chlorophyceae. *Bot. Mag. Tokyo*, 39: 77-95.
 吉田忠生, 1998. いとげのまゆはき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 112.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : ヒナマユハキモ
 分 類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
 学 名 : *Chlorodesmis haterumana* Tanaka et Itono
 カ テ ゴ リ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は緑色を呈し、多核性の管状の糸状体で、高さ2.7 cmに達する。仮根部から管状の細胞が交錯して束状になった柄を形成し、その上に直立糸が密に出て玉房様となる。直立糸は疎に分枝、分枝点の上のくびれは段違いである。直立糸は全体が数珠状にくびれる。糸の太さは60 μmにまでなる。先島諸島固有種（宮古島、石垣島、波照間島〈タイプ産地〉）。宮古島及び石垣島では、潮間帯下部付近の平坦な岩礁上に局所的に生育する。波照間島で本種の調査を試みたが、生育を確認することは出来なかった。本種はマユハキモ (*C. fastigiata*) の変種になる可能性もあり、分類学的な再検討の必要がある（岸本, 1998）。世界のさんご礁海域に産するマユハキモ属11種の中、3種が沖縄県に産し、本種が先島諸島の固有種であることなど、生物地理学の上で貴重な種である。確認されている生育地が極めて少なく、沿岸の埋立てや海岸構築物の建設により、生育地の消滅が懸念される。

- 文 献 : Ducker, S. C., 1967. The genus *Chlorodesmis* (Chlorophyta) in the Indo-Pacific region. *Nova Hedwigia*, 13: 145-182, 18pls.
 Itono, H., 1973. Notes on marine algae from Hateruma Island, Ryukyu. *Bot. Mag. Tokyo*, 86: 155-168.
 岸本和雄, 1998. 琉球列島産ミル科緑藻の分類学的研究. 琉球大学理学部修士論文, 70pp.
 吉田忠生, 1998. ひなまゆはきも. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 113.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : スズカケモ
 分 類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
 学 名 : *Tydemania expeditionis* Weber-van Bosse (syn. *Rudicularia penicillata* Heydrich)
 カ テ ゴ リ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

藻体は通常分枝した軸（直径 400～450 μm ）と、それに沿ってほぼ団子状の球状部（直径 1 cm 前後）が連なることとなる。球状部は分枝する輪生枝によって構成される。藻体の高さは 15 cm ほどで、薄く石灰質を沈着しているため灰緑色を呈する。藻体の中央から基部の部分は白っぽく、分枝して互いに絡み合っている。基部付近には 1 層の糸からなる扇形の枝をもつ。本種は中国、台湾、フィリピン、インドネシア、ベトナム、南太平洋、パプアニューギニア、クイーンズランド、インド、エジプト、タンザニアに分布し、国内では奄美大島以南に産し、県内では沖縄島、瀬底島、慶良間島、久米島、石垣島、西表島、波照間島で確認されている。本種は慶良間諸島のさんご礁から採集された標本によって、新属新種 *Rudicularia penicillata* Heydrich (1903) として発表された経緯がある。1 属 1 種である。さんご礁礁縁から礁斜面のくぼみなどに叢生する。生育地は極めて局所的で、各所で確認できる個体数も少ない。水深 40 m の海底からも採集されており (Yokohama et al., 1992)、さんご礁海域に分布域をもつ珍奇な種で、特異な色素を持つことで深場への適応を可能にしている生理的特性がある点からみて貴重な存在である。

- 文 献 : Gepp, A. & E. S., 1911. Codiaceae of the Soboga Expedition. “Brokhandel en Drukkervij”, E. J. Brill, Leiden, 150, pls. 1-22.
 Heydrich, F., 1903. *Rudicularia*, neues Genus der Valoniaceae. *Flora*, 92: 97-101.
 田中 剛, 1956. 奄美大島の海藻とその資源. 南方産業研究所研究報告, 1: 13-22.
 Yokohama, Y., Hirata, T., Misonou, T., Tanaka, J. & Yokochi, H., 1992. Distribution of green light-harvesting pigments, siphonoxanthin and siphonein, and their precursors in marine green algae. *Jpn. J. Phycol.*, 40: 25-31.
 吉田忠生, 1998. すずかけも. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 123.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : ハネモモドキ
 分 類 : ハネモ目 ハネモ科 (緑藻類)
 学 名 : *Pseudobryopsis hainanensis* Tseng (*Trichosolen hainanensis* (Tseng) Taylor)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

藻体は管状の藻で、体は根元から数本、高さ 1～4 cm の主軸が直立、叢生する。主軸の基部は、幅 0.6～1 mm、先端にかけて少し細くなる。主軸は基部付近を除いて、頂端にかけ毛状の、無数の短い小枝（長さ 1.2～2 mm、幅は太いところで 40～50 μm ）を各方面に出す。小枝の基部に卵形～球形の配偶子嚢が、1～3 個方軸側に並んで生ずる。大きさは長さ 33～105 μm 、幅 35～75 μm 。タイプ産地は中国海南島で、ベトナム、オーストラリア、ミナミアフリカ、レユニオン、メキシコに分布する。南西諸島では宝島や奄美大島に産し、県内においては沖縄島と与那国島に分布する。さんご礁礁原の潮溜まりの壁面や他の海藻に着生する。世界的にも稀な種であり、また地理的分布の上からも貴重な種である。もともと生育密度が低いようであることから、先島諸島を含め今後の情報を必要とする。

- 文 献 : 榎本幸人, 1994. ハネモモドキ. “藻類の生活史集成 第 1 巻 緑色藻類”, 堀 輝三編, 内田老鶴圃, 東京, 268-269.
 Ogata, E., 1956. Noteworthy algae from Takarazima Island. *Publ. Seto Mar. Biol. Lab.*, 5: 283-289.
 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ハネモモドキ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17 号, 13.
 Tanaka, T. & Itono, H., 1972. The marine algae from island of Yonakuni-II. *Mem. Fac. Fish., Kagoshima Univ.*, 21: 1-14.
 Tseng, C. K., 1936. Studies on the marine Chlorophyceae from Hainan. *Chinesse Mar. Biol. Bull.*, 1: 129-200.

吉田忠生, 1998. はねももどき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 142.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : ナガミズタマ

分類 : カサノリ目 ダジクラズス科 (緑藻類)

学名 : *Bornetella nitida* Sonder

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体はこん棒状で少し曲がるか、強く湾曲する。藻体の長さは通常 1.5~2 cm、直径は先端に近い太い部分で通常 3.0~4.5 mm である。体の表層を構成する細胞の形は、表面観で 5~6 角形で、細胞膜の一部が肥厚したリング状の膜の厚さは通常 16~21 μm であり、そのためカタミズタマに比べ手触りは柔らかい。体の内部の輪生枝には、1~2 個の球状の孢子嚢 (通常、直径 240~300 μm) が側生的に作られ、その中に通常 10~21 個 (例外的に 67 個) の卵形~楕円形のシスト (通常、長径 80~100 μm 、短径 60~80 μm) が作られる。国外では中国、台湾、東南アジア、太平洋熱帯海域、クイーンズランド、ノーフォーク島、インド、モーリシャス、ソマリア、ミナミアフリカに分布する。県内では沖縄島、石垣島で確認されている。上記のカタミズタマと同所的で、さんご礁の潮溜まり内の岩上に、また、干潟の礫上に群生する。沖縄島では中城湾や金武湾沿岸で見られる。石垣島から Yamada (1938) によって報告されているが、その後の情報はない。先島諸島では生育していたとしても極めて稀なものと考えられる。沖縄島を北限とする。地理的分布の上で熱帯海域を代表する重要種。沿岸の埋立てや海岸構造物 (例: エビ養殖池) 建設による生育地の消失事例がある。海岸構築物 (漁港など) の建設に起因する底質攪乱による生育環境の劣化が危惧される。

文献 : Coppejans, E. & Prud'Homme van Reine, W. 1989. Seaweeds of the Senelliu-II Expedition, Chlorophyta: Dasycladales. Netherlands Jour. Sea Res., 23: 123-129.

香村眞徳, 2004. カサノリとはどのような海藻か. (財) 沖縄県環境科学センター報, (5): 10-23.

Solms-Laubach, H., 1892. Ueber die Algengenera *Cymopolia*, *Neomeris* und *Bornetella*. Ann. du Jardin Bot. d'Buitenzorg, 9: 61-97.

Yamada, Y., 1938. Notes on some Japanese species Sci. Pap. Inst. Algol. Res., Fac. Sce., Hokkaido Imp. Univ., 2: 119-136.

吉田忠生, 1998. ながみずたま. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 148-149.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : カタミズタマ

分類 : カサノリ目 ダジクラズス科 (緑藻類)

学名 : *Bornetella oligospora* Solms-Laubach

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体はこん棒状で少し曲がるか、強く湾曲する。藻体の長さは通常 1.5~2.5 cm、幅は先端に近い太い部分で通常 3.5~4.5 mm である。体の表層を構成する細胞の形は、表面観で 5~6 角形で、細胞膜の一部が肥厚したリング状の膜の厚さは通常 20~30 μm であり、そのためナガミズタマに比べ手触りは硬い。体の内部の輪生枝には、通常 4~8 個の球状の孢子嚢 (直径、通常 160~200 μm) が側生する。その中に通常 4~8 個の球形~卵形のシスト (通常、長径 70~100 μm 、短径 70~90 μm) が作られる。国外では中国、東南アジア、ミクロネシア、フィジー、アリアナ諸島、ニューカレドニア、パプアニューギニア、オーストラリア、マダガスカル、タンザニアに分布し、沖縄島を

北限とする。さんご礁潮間帯下部の浅い水路、潮溜まり内や、干潟の岩の側面・礫上に着生する。ナガミズタマと同所的で、特に中城湾と金武湾沿岸に見られる。ミズタマ属の海藻（世界に6種）は、さんご礁海域において特異な存在で、熱帯海域の貴重な種である。沿岸の埋立てや海岸構造物（例：エビ養殖池）建設による生育地の消失事例がある。海岸構造物（漁港など）の建設に起因する近傍の底質攪乱による生育環境の劣化が、生育阻害の要因となる。

ナガミズタマとの外見的に区別は困難であるが、カタミズタマは①表層を構成する細胞の肥厚部が厚い、②内部の輪生枝に側生する孢子囊の数が少なく、その中に作られるシスト数が少ない、などの点で区別が可能である。

- 文 献 : Coppejans, E. & Prud'Homme van Reine, W. F., 1989. Seaweeds of the Senelliu-II Expedition, Chlorophyta: Dasycladales. Netherlands Jour. Sea Res., 23: 123-129.
 香村眞徳, 2004. カサノリとはどのような海藻か. (財) 沖縄県環境科学センター報, (5): 10-23.
 Solms-Laubach, H., 1892. Ueber die Algengenera *Cymopolia*, *Neomeris* und *Bornetella*. Ann. du Jardin Bot. d'Buitenzorg, 9: 61-97.
 吉田忠生, 1998. かたみずたま. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 149.

執 筆 者 名 : 香村眞徳

和 名 : カサノリ (別名: オトヒメガサ、牧野, 1942)
 分 類 : カサノリ目 カサノリ科 (緑藻類)
 学 名 : *Acetabularia ryukyuensis* Okamura et Yamada
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

藻体は直立する長さ通常5~6 cmほどの細い柄と、その先端に直径9.5~14.2 mmの皿状のカサからなる。カサは細長いう状をした通常49~62個の孢子枝によって構成される。孢子枝の先端は鈍円。成熟すると孢子枝内にはほぼ球形のシスト（直径通常110~140 μm）が、孢子枝あたり通常200~400個作られる。近縁種との区別点については、前記のホソエガサを参照。奄美諸島にも産する。国外には変種 (*A. ryukyuensis* var. *philippinensis* (Gilbert) Valet = *A. philippinensis* Gilbert) がフィリピンやインドネシアに分布する。県内では伊是名島、伊江島、沖縄島、久米島、石垣島、小浜島、西表島で確認されている。湾内の静穏な海岸や礁池で、砂混じりの礫上や岩塊表面に群生する。また、死んだ貝殻や人工物（靴、メガネ、タイヤ等）の上にも着生する。低潮線下3 mほどの深さの所にも生育する。外海から遮蔽されたさんご礁の人工プール内に群生する（八重瀬町）。沖縄島東海岸（金武湾など）には群生地が点在するものの、その他の海域では生育密度は低い。宮古島からは本種の生育は確認されていない。八重山諸島では局所的に生育する。南西諸島を中心に分布する種で、地理的分布の上で貴重な種である。また、生理学・遺伝学的実験研究の好材料として用いられている。沿岸の埋立てにより生育地の大半、または全体が消滅（例：糸満市沿岸域、那覇市など）した事例がある。

- 文 献 : Coppejans, E. & Prud'Homme van Reine, W. F., 1989. Seaweeds of the Senelliu-II Expedition, Chlorophyta: Dasycladales. Netherlands Jour. Sea Res., 23: 123-129.
 Gilbert, W. C., 1942. Studies on Philippine Chlorophyceae. 1. The Dasycladaceae. Pap. Mich. Acad. Sci. Arts and Letters, 28: 15-35.
 石川依久子, 1997. カサノリ. “日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (IV)”, (財) 日本水産資源保護協会, 468-472, VI. 水生植物 図版-7.
 香村眞徳, 2004. カサノリとはどのような海藻か. (財) 沖縄県環境科学センター報, (5): 10-23.
 Kida, W., 1964. Results of Amami Expedition 4. Algae. Rep. Fac. Fish., Pref. Univ. Mie, 5: 217-235.
 牧野富太郎, 1942. 乙姫傘. 採集と飼育, 4: 156.
 岡村金太郎, 1932. かさのり. 日本藻類図譜 第6巻第7集. 東京, 71-72, pl. 285, f. 5-12.

- 沖縄生物教育研究会編, 2004. フィールドガイド・沖縄の生きものたち, 新星図書, 那覇, 24.
- 瀬川宗吉, 1956. 原色日本海藻図鑑. 保育社, 大阪, 18, pl. 7, no. 60.
- Shihira-Ishikawa, I., Yano, D. M. Y. & Imahori, K., 1982. An interspecific graft between two Japanese species of *Acetabularia*. Jpn. J. Phycol., 30: 1-7.
- 堤 敏郎・香村眞徳, 2005. カサノリ (*Acetabularia ryukyuensis*) の沖縄本島における生育分布と生態について. 藻類, 53: 101.
- Valet, G., 1968. Contribution a l'etude des Dasycladales. Nova Hedwigia, 17(1/2): 21-82, pls. 4-26.
- Yamada, Y., 1934. The marine Chlorophyceae from Ryukyu, especially from the vicinity of Nawa. Jour. Fac. Sci., Hokkaido. Univ. ser. V. (Bot.), 3: 33-88.
- 吉田忠生, 1998. かさのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 156-157.

執 筆 者 名 : 香村眞徳

4) 情報不足 (DD)

和 名 : ウスバアオノリ
分 類 : アオサ目 アオサ科 (緑藻類)
学 名 : *Ulva linza* Linnaeus
カ テ ゴ リ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は葉状で倒披針形から線形、分枝せず、幅 15 cm、長さ 50 cm に達する。体は 2 層の細胞からなるが、縁辺部は中空で 1 層となり、また基部近くも同様に中空で、細く管状となる。潮間帯上部から下部で、岩や他の藻類に付着して生育する。韓国では食用とされている。本種は日本各地、朝鮮半島、太平洋、インド洋、大西洋に広く分布するものの、県内では沖縄本島北部等のごく限られた場所からの確認しかなく、生育状況は不明である。沿岸の埋立てや海岸構造物の建設により、生育地の攪乱を受ける可能性がある。

文 献 : Abbott, I.A. & Huisman, J.M., 2004. Marine green and brown algae of the Hawaiian Islands. Bishop Museum Press, Honolulu, 259pp.
Kraft, G. T., 2007. Algae of Australia. Marine Benthic Algae of Lord Howe Island and the Southern Great Barrier Reef, 1. Green Algae. Australian Biological Resources Study, Canberra & CSIRO Publishing, Melbourne, 347pp.
大野正夫編著, 2004. 有用海藻誌. 内田老鶴圃, 東京, 575pp.
吉田忠生, 1998. うすばあおのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 36.

執 筆 者 名 : 岸本和雄

和 名 : ヤブレグサ
分 類 : アオサ目 アオサ科 (緑藻類)
学 名 : *Umbraulva japonica* (Holmes) Bae et Lee
カ テ ゴ リ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は青みがかった濃緑色を呈し、膜質で硬く、放射状に様々に裂ける。高さ 20 cm に達する。漸深帯や潮間帯下部の岩陰などに生育する。体の色は、深所において緑色光を効率的に利用するための色素であるシフオナキサンチ

ンを含むことによる。本種は日本、韓国及び台湾に分布する。県内では沖縄本島北部に限られた場所で確認されている以外、ドレッジ調査などで偶然採集される程度であり、生育状況は不明である。

- 文 献 : Bae, E. H. & Lee, I. K., 2001. Umbraulva, a New Genus Based on *Ulva japonica* (Holmes) Papenfuss (Ulvaceae, Chlorophyta). *Algae*, 16: 217-231.
 Holmes E.M., 1895. Marine algae from Japan. *J. Linn. Soc., Bot.*, 31: 248-260.
 Papenfuss G.F., 1960. On the genera of the Ulvales and the status of the order. *J. Linn. Soc., Bot.*, 56: 303-318.
 吉田忠生, 1998. やぶれぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 40.

執 筆 者 名 : 岸本和雄

- 和 名 : ミナミシオグサ
 分 類 : シオグサ目 シオグサ科 (緑藻類)
 学 名 : *Cladophora dotyana* Gilbert
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

藻体は黄緑色から灰緑色を呈し、分枝する糸状細胞が直立して、高さ 5 cm 程の半球状の房となる。主枝の直径は 450-750 μm 、小枝は偏生し、直径 210-380 μm で単独に出る。国外の生育地は、台湾、ハワイ、インド洋 (レユニオン島) と、分布域が限られている。県内では与那国島で確認されている以外、生育状況は不明である。

- 文 献 : Sakai, Y., 1964. The Species of *Cladophora* from Japan and its Vicinity. *Sci. Inst. Algal. Res., Fac. Sci., Hokkaido Univ.*, 5: 1-104. 17pls.
 吉田忠生, 1998. みなみしおぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 64.

執 筆 者 名 : 岸本和雄

- 和 名 : ダンツウシオグサ
 分 類 : シオグサ目 シオグサ科 (緑藻類)
 学 名 : *Cladophora enomotoi* van den Hoek et Chihara
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

藻体は暗灰緑色を呈し、高さは 2-4 mm で、泥で覆われた岩の上にマット状に叢生する。糸状細胞は、上部に向かって扇状の輪郭をなすように枝分かかれする。扇状をなす部分の主軸の細胞は、直径 60-120 μm 、先端の細胞は先細りし、直径は 38-53 μm である。本種は沖縄県沖縄市泡瀬の標本を用いて新種記載されたもので、その後、他地域からの報告はない。沖縄島の固有種である。

- 文 献 : van den Hoek, C. & Chihara, M., 2000. A taxonomic revision of the marine species of *Cladophora* (Chlorophyta) along the coasts of Japanese and the Russian Far-east. *Nat. Sci. Mus., Tokyo. Mong. No. 19*, 242pp.

執 筆 者 名 : 岸本和雄

和名 : クダネダシグサ
分類 : クダネダシグサ目 マガタマモ科 (緑藻類)
学名 : *Siphonocladus tropicus* (Crouan frat.) J. Agardh
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は管状で直立し、高さ 5 cm、幅 3 mm になり、単独または多数叢生する。基部に輪状のくびれを持つ。体の上部では多数のプロトプラストが形成され、そこから側生的に不規則に、管状の突起を放射状に出す。潮間帯下部の岩盤上に生育する。本種の分布域は、国内では南西諸島と小笠原諸島、国外では台湾、南太平洋、オーストラリア、インド洋、東アフリカ、カリブ海、メキシコ、パナマ、西太平洋、ブラジル、ベネズエラ、スペインに分布する。県内ではほとんど観察事例がない。

文献 : Abbott, I.A. & Huisman, J.M., 2004. Marine green and brown algae of the Hawaiian Islands. Bishop Museum Press, Honolulu. 259pp.
瀬川宗吉, 1956. クダネだしぐさ. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 7, pl. 4, no. 26.
吉田忠生, 1998. クダネだしぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 88.

執筆者名 : 岸本和雄

和名 : リュウキュウズタ
分類 : イワズタ目 イワズタ科 (緑藻類)
学名 : *Caulerpa* sp.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は円柱状の匍匐茎 (太さ約 0.7 mm) とその背面からの直立部、腹面からでる仮根からなる。直立部は薄く、無分枝で、高さ 20~27 mm、幅 5 mm、長さ 10 mm の扁平な柄をつける。羽枝は長さ約 4 mm、幅 1.3 mm で、7~9 対を両縁から互生またはやや対生に平面的に出す。湾内や水路部の水深 8~20 m の安定した砂泥底に生育する。生育地の海水は清澄で、地形的に静穏な場所を好む傾向が強いようである。

学名 (小種名) はまだ与えられていないため、今後の種名の決定を待ちたい。県内に産する多くのイワズタ属は、一般に浅場の砂・砂礫質底や礁原の潮溜まり内に生育するが、本種のように深場に生育する性質は生理生態学的研究のための好材料となるものと考えられる。また、沖縄県の固有種であることが決定されれば、地理的分布上で貴重な存在となる。深場に生育するため、砂利採取 (砂利採取船) による海底の攪乱が生育阻害の要因になるものと考えられる。

文献 : 新井章吾・内村真之・羽生田岳昭, 2003. 沖縄本島で発見されたイワズタ属の 1 新種について. 藻類, 51: 89.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : ツナサボテングサ
分類 : イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
学名 : *Halimeda cuneate* Hering (*H. tuna* (Ellis et Solender) Lamouroux)

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 情報不足 (DD)

藻体は高さ 7 cm に達し、付着基部から扁平な関節部が連なった枝が数本平面的に出る。節間部はくさび形～腎臓形で、長さ 1 cm、幅 1.3 cm ほどである。本種は本邦温帯域にかけて分布し、静岡県、三重県、八丈島、硫黄島から知られている。国外においては、東南アジア、インド洋、地中海、大西洋と広く分布する。沖縄島や瀬底島の潮下帯の水深 7 m の岩上に生育していることが知られているが、県内ではもともと生育密度は低いものと思われる。本種は、南西諸島において普通に見られ外形的によく似ているウチワサボテングサ (*H. discoidea*) と混同されている可能性が高いため、分布状況や生育密度を含む調査・検討を行う必要がある。両者の区別点は、内部の第 2 層目の小囊にある。ツナサボテングサでは 90 μm 以下であるのに対し、ウチワサボテングサは著しく膨らみ 90 μm 以上である。地理的分布の上で重要な種である。生育状況は不明である。

文献： Hillis, L. W., 1959. A revision of the genus *Halimeda*. Mar. Sci., 6: 321-404.
Tsuda, R. T. & Kamura, S., 1991. Floristics and geographic distribution of *Halimeda* (Chlorophyta) in the Ryukyus. Jpn. J. Phycol., 39: 57-76.
吉田忠生, 1998. つなさぼてんぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 119-120.

執筆者名： 香村眞徳

和名： モロサボテングサ
分類： イワズタ目 サボテングサ科 (緑藻類)
学名： *Halimeda fragilis* Taylor
カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

藻体は高さ 3.5 cm で、強く石灰を沈着し、付着部は小さく、ほとんど砂を取り込まない。枝は 1 個の節間部から 4 個まで形成される。節間部はくさび形～腎臓形で、下部の縁は斜切状、上部は全縁であり、長さ 4.5 mm、幅 6 mm である。小囊は、直径 30 μm と小さい。国外においては、南シナ海、インドネシア、フィリピン、シンガポール、熱帯南太平洋、パプアニューギニア、クイーンズランド、マダガスカル、タンザニアに分布する。本種は波照間島の潮間帯で採集されたが、その後、同島を含め、生育は確認されていない。

文献： Itono, H., 1973. Notes on marine algae from Hateruma island, Ryukyu. Bot. Mag. Tokyo, 86: 155-168.
Tsuda, R. T. & Kamura, S., 1991. Floristics and geographic distribution of *Halimeda* (Chlorophyta) in the Ryukyus. Jpn. J. Phycol., 39: 57-76.
吉田忠生, 1998. もろさぼてんぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 115.

執筆者名： 岸本和雄

和名： ニセハウチワ
分類： イワズタ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
学名： *Rhipilia orientalis* A. et E.S. Gepp
カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

藻体は茶色美がかった緑色からやや暗緑色で、通常、高さは 3~4 cm であり、大きいものは 10 cm に達する。扇状や漏斗状の葉状部を持ち、群生する。柄は短く、複数本の糸状体が錯綜して形成される。本属の特徴は、葉状部の糸状体同士が tenaculum と呼ばれる、指状をした付着細胞で部分的に接着する点にある。マレー諸島で初めて確認さ

れ、インドネシア、フィリピン、パラオ、オーストラリア、ニュージーランド、タンザニア、セーシェル諸島、ブラジルなど、広く熱帯海域に分布する。生育水深も、0.5 m (パラオ) から 50 m (ブラジル) と幅広い。宮古諸島の大神島 (Itono, 1986) で初めて確認され、近年、熊田ら (2009) により下地島からも報告された。現在のところ、国内の生育地は、宮古諸島のみに限られている。

- 文 献 : Coppejans, E. & Prud'Homme van Reine, W.F., 1989. Seaweeds of the Snellius-II Expedition. Chlorophyta: Caulerpales (except *Caulerpa* and *Halimeda*). *Blumea*, 34: 119-142.
- Gepp, A. & Gepp, E.S., 1911. The Codiaceae of the Siboga Expedition including a monograph of *Flabellarieae* and *Udoteae* Siboga-Expedition Monographie LXII. E. J. Brill, Leiden. 150pp. 22pls.
- Itono, H., 1986. New records of marine algae from southern parts of Japan. *Jap. J. Phycol.*, 34: 74-82.
- Millar, A.J.K. & Kraft, G.T., 2001. Monograph of the green macroalgal genus *Rhipilia* (Udoteaceae, Halimadales), with a description of *R. crassa* sp. nov. from Australia and the Philippines. *Phycologia*, 40: 21-34.
- Ohba, H., Victor, S., Golbuu, Y & Yukihara, H., 2007. Tropical marine plants of Palau. Palau International Coral Reef Center, Japan International Cooperation Agency, 53pp.
- 吉田忠生, 1998. にせはうちわ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 121.

執 筆 者 名 : 岸本和雄

和 名 : ニセヒメイチョウ

分 類 : ハネモ目 ハゴロモ科 (緑藻類)

学 名 : *Rhipiliopsis echinocaulos* (Cribb) Farghaly

カ テ ゴ リ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

藻体は淡緑色で、高さ 3-16 mm に達し、扇形から杯形の葉状部を持つ。葉状部は、幅は 2-10 mm、1-2 層の糸状体から成る。柄は単管で、先太りする円筒形であり、直径は 68-140 μm、側面に分枝する乳頭状突起を多数持つ。時に柄が葉状部に沿って伸長し、上部に新たな葉状部を形成する。葉状部の糸状体は滑らかな円筒形で叉状分枝し、分枝部は強くくびれる。葉状部の糸状体は側生的に接着するが、その接着部は *Rhipilia* 属のように指状に分かれることはない。細胞の直径は、基部付近で 34-46 μm、先端付近で 20-40 μm。管状細胞同士の接着は任意におこる。国外では中国、ベトナム、西オーストラリア、クイーンズランド (タイプ産地) に分布する。国内では馬毛島、沖縄本島及び宮古諸島で確認されているが、生育場所は局所的である。

- 文 献 : Cribb, A. B., 1960. Records of marine algae from South-Eastern Queensland V. *Univ. Queensland paps. Univ. Dept. Bot.*, 4: 1-31.
- Kraft G. T., 1986. The green algal genera *Rhipiliopsis* A. & E.S. Gepp and *Rhipiliella* gen. nov. (Udoteaceae, Bryopsidales) in Australia and the Philippines. *Phycologia*, 25: 47-72.
- Tanaka, T. & Itono, H., 1977. On two new species chlorophyta from southern parts of Japan. *Bull. Jap. Soc. Phycol.*, 25, Suppl.: 347-352.
- 吉田忠生, 1998. にせひめいちょう. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 122.

執 筆 者 名 : 岸本和雄

和 名 : ヒメイチョウモドキ

分 類 : ハネモ目 ハゴロモ科 (緑藻類)

学 名 : *Rhipiliopsis yaeyamensis* (Tanaka) Kraft

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

藻体は淡緑色で、高さ 2 mm に達し、杯状の葉状部を持つ。柄は単管で、滑らかな円筒形であり、直径は 150 μm。葉状部は幅 0.5-2 mm で一層の糸状体でなり、糸状体の直径は 20 μm、分枝部下で 45 μm である。本種は西表島固有種で、水深 20 m の海底からドレッジ採集された。記載時以降の学術的な報告はない。

文献： Kraft G. T., 1986. The green algal genera *Rhipiliopsis* A. & E.S. Gepp and *Rhipiliella* gen. nov. (Udoteaceae, Bryopsidales) in Australia and the Philippines. *Phycologia*, 25: 47-72.
Tanaka, T., 1963. Studies on some marine algae from Southern Japan-V. *Mem. Fac. Fish. Kagoshima Univ.*, 12: 75-91.
吉田忠生, 1998. ひめいちょうもどき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 122-123.

執筆者名： 岸本和雄

和名： ウスバハゴロモ
分類： ハネモ目 ハゴロモ科 (緑藻類)
学名： *Udotea yamadae* Tanaka et Itono
カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

藻体は緑色で、高さ 5 cm に達する。柄は長さ 3-5 mm、直径 1 mm ほどの円筒形である。円状から腎臓状の葉状部は薄く、裂片を作ることもある。藻体への石灰の沈着は比較的少ない。葉状部の糸状体は直径 33-39 μm で、側生的に皮層を作るための付属体を生じる。本種は波照間島固有種で、潮間帯で採集された。記載時以降の学術的な報告はない。

文献： Tanaka, T. & Itono, H., 1977. On two new species chlorophyta from southern parts of Japan. *Bull. Jap. Soc. Phycol.*, 25, Suppl.: 347-352.
吉田忠生, 1998. うすばはごろも. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 125.

執筆者名： 岸本和雄

【褐藻類】

1) 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

和名： ウミボツス
分類： ケヤリモ目 ケヤリモ科 (褐藻類)
学名： *Nereia intricata* Yamada
カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態の特徴： 藻体は扁圧 (基部で幅 1~2 mm) して互生あるいは二叉状に分枝し、高さ 15cm になる。藻体の表面には長さ約 2~4 mm、太さ約 20 μm の毛がある。藻体は柔らかく絡み合い、各所が基質に付着する。

分布域 (県外)： 与論島。 (国外) ハワイ諸島。

県内の分布： 沖縄島、宮古島 (タイプ産地)。

- 生育環境 : さんご礁域の潮下帯から漸深帯に生育。
- 生育状況 : 本種が Yamada (1936) によって発表されて以来、タイプ産地である宮古島からの生育の確認情報はない。沖縄島では 1950 年代の採集標本 1 点 (琉大理学部植物標本室) があるだけであったが、2000 年代に入り確認された。県内において本種は極めて稀な種であると考えられる。
- 学術的価値 : 南西諸島固有種と考えられてきたが 2003 年にハワイ諸島でも確認されたことから地理的分布の上でも貴重な種である。形態的にもまだ解明されていない点 (例えば、生殖器官) がある。ケヤリモ科の海藻は温帯以北の要素であり、熱帯海域においては珍しい存在である。
- 減少の要因 : 海岸域の開発。
- 文献 : Yamada, Y., 1936. Notes on Japanese algae VII. Sci. Pap. Inst. Algal. Res., Fac. Sci. Hokkaido Univ., 1: 135-140, pls.31-33.
瀬川宗吉, 1956. うみぼっす “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, p1. 19, no. 157. 34.
瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ウミボツス. “琉球列島海藻目録 琉球大学普及叢書 17 号”, 琉球大学, 28.
田中 剛, 1960. 奄美諸島、与論島の堡礁上の海藻相. 鹿児島大学南方産業研究所報告, 3: 5-9.
吉田忠生, 1998. うみぼっす. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 321-323.
Abbott, A. I. & J.M. Huisman, 2003. New species, observations, and a list of new records of brown algae (Phaeophyceae) from the Hawaiian Islands. Pycological Reserch, 53: 173-185.
吉田忠生, 2015. ウミボツス. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, ぎょうせい, 299.
ダイビングチームすなっくスナフキン編, 2015. ウミボツス. “大浦湾の生きものたち—琉球弧・生物多様性の重要地点 沖縄島大浦湾”, 南方新社, 鹿児島, 86.
- 執筆者名 : 香村真徳・岩永洋志登

和名 : ウミトラノオ

分類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)

学名 : *Sargassum thunbergii* (Mertens ex Roth) Kuntze

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 藻体は黒褐色、高さ 10~30 cm に達する。平たい付着器から 1 cm 以下の茎が立ち、数本の主枝が出る。主枝は 2、3 cm ほどの短い側枝を密につける。側枝は枝の先端で短くなる。葉と気胞は小さく、らせん状に密につく。
- 分布域 (県外) : 北海道から本州、四国、九州を経て奄美諸島にかけ分布。(国外) 中国、朝鮮半島、ロシア沿岸。
- 県内の分布 : 沖縄島、屋我地島、瀬底島。
- 生育環境 : サンゴ礁の潮間帯下部から低潮線付近に、局所的に疎生あるいは群生する。
- 生育状況 : 沖縄では夏季を除く 11 月ごろから 6 月ごろまで見られ、春季に藻長が最大となる。生育地は数えられるほどに局所的で、裾礁や礁池を備えた海岸の岸寄りの岩礁に生育する。
- 学術的価値 : 本種は亜寒帯から温帯域に広く分布し、沖縄島を南限とする種で、県外のものとは出現・出芽など繁殖の方法や体長が短いなどの点で異なる。将来、異常潮位や温暖化などの影響で、県内に産するものは衰退し、南限が後退する可能性がある。ヒジキの場合と同様、温暖化の影響を知る上で指標種に指定することも必要であろう。また、温帯性種が過酷な条件下で適応してきた過程を解明する上で好材料となり得る種と考えられる。

- 減少の要因** : 埋め立てによる生育地の消失、護岸整備等で砂浜形状が変化し生育地が埋没。乾燥化の影響と考えられる衰退（瀬底島）。また、本種は分布の南限種でもあるため温暖化による気温や海水温の上昇によって絶滅のおそれと考えられる。
- 文献** : Umezaki, I., 1974. Ecological studies of *Sargassum thunbergii* (Martens) O. Kuntze in Mai-zuru Bay, Japan Sea. Bot. Mag. Tokyo, 87: 285-292.
- 瀬川宗吉, 1956. うみとらのお. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 51, pl. 30, no. 225. 51.
- 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ウミトラノオ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 32.
- 香村真徳, 1984. 琉球列島のホンダワラ科藻類について—ウミトラノオとヒジキの生態—. 東京大学海洋研究所大槌臨海研究センター報告, 10: 82-83.
- 当真 武・本村浩司・大城 謙, 1984. 沖縄産ヒジキの増殖に関する研究. ”昭和57年度沖縄水試場事業報告書”, 163-173.
- 吉田忠生, 1998. うみとらのお. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 408-409.
- 田中次郎, 2004. ウミトラノオ. “日本の海藻 基本284”, 平凡社, 東京, 131.
- 島袋寛盛・野呂忠秀, 2007. 沖縄本島に生育する雌雄同株のウミトラノオ (褐藻綱・ヒバマタ目). 藻類, 55: 103-107.
- 当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻250種). Mugen, 那覇市, 433pp.
- 安延尚文, 2012. ウミトラノオ. “ネイチャーウオッチングガイドブック 海藻”. 誠文堂新光社, 東京, 118-119.
- 島袋寛盛, 2016. 日本産南方系ホンダワラ属 24回目 亜熱帯域に分布するウミトラノオ. 海洋と生物 226, vol. 38, no. 5, 東京, 564-569.
- 島袋寛盛, 2017. 日本産温帯性ホンダワラ属 3回目 ウミトラノオ. 海洋と生物 231, vol. 39, no. 4, 東京, 380-385.
- 岩永洋志登・宮本奈保・島袋寛盛・香村真徳, 2018. 沖縄島産ウミトラノオの消長と生育地. 藻類, 66: 83.

執筆者名 : 香村真徳・岩永洋志登

2) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 和名** : トゲミモク
- 分類** : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)
- 学名** : *Sargassum denticarpum* Ajisaka
- カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー** : 該当なし

形態の特徴 : 藻体は長さ50 cmまでになり、盤状の直径0.5 mm~1 cmの盤状をした付着器の上に高さ1 cmほどの茎が伸長し、茎の頂端かららせん状に主枝が複数生じる。主枝と側枝は円柱形からやや偏圧した円柱形になり、表面は滑らかで幅2~3 mm。側枝は主枝から1~10 cm間隔で互生的に生じ、長さは5 cmまでになる。葉は披針形で短い柄をもち、葉の下部は左右不相称である。長さ3~5 cm、幅1~1.5 cm、縁辺は細かい鋸歯が並ぶ。先端は鈍円だがまれに尖る。毛巣が散在し、表面はザラザラとした触感となる。中肋は葉に内在し先端付近まで伸びるが頂端部でうっすらと消える。気胞は球形から楕円形で、直径3~8 mm。柄は偏圧し気胞の長径よりも短く、表面には棘や翼状の突起が生じている。毛巣は気胞の表面に散在する

分布域(県外) : なし。(国外) ベトナム、タイ。

- 県内の分布 : 西表島。
- 生育環境 : さんご礁域の岩盤や転石上に生育する。
- 生育状況 : 春季から夏季に伸長し、晩夏に成熟し、冬季には枯死流出する。
- 学術的価値 : 熱帯性のベトナム固有種であったが2012年にタイと西表島で分布が確認された。ベトナムから飛び地的に西表島に分布するのか、または連続して分布しているかは不明である。西表島が分布の北限にあたるが、今後の地球規模の環境変動を把握するための指標種ともなりえる。
- 減少の要因 : 国内で唯一確認されている西表島の群落は規模が小さく、海岸域が改変されると生育地が消滅する可能性が高い。
- 文献 : Ajisaka, T., Huynh, Q.N. & Nguyen, H.D., 1994. *Sargassum denticarpum* Ajisaka sp. nov. and *S. longifructum* Tseng et Lu; two zygoecarpic species of *Sargassum* (Phaeophyta) from Vietnam. *The Japanese Journal of Phycology*, 42: 393-400.
- Shimabukuro, H., Kawane, M. & Hamaguchi, M., 2012. New record of *Sargassum denticarpum* Ajisaka (Fucales, Phaeophyceae) from Iriomote Island (Ryukyu Archipelago, Japan). *Botanica Marina*, 55: 209-215.
- 島袋寛盛, 2013. 日本産南方系ホンダワラ属 5 回目 ナガミモクとトゲミモク. *海洋と生物* 207, vol. 35, no. 4, 東京, 407-413.
- 執筆者名 : 岩永洋志登

-
- 和名 : ヒジキ
- 分類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)
- 学名 : *Sargassum fusiforme* (Harvey) Setchell
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態の特徴 : 藻体は高さ30~90 cmほどになり、4月ごろには、長さ1 mを超えることがある。繊維状の付着器から1~数本の主枝が立つ。主枝は長さ数 cmほどの側枝を羽状に互生する。葉は膜状を呈し長卵形からへら形、被針形で先がとがる場合もあり、両縁に粗い鋸歯を持つ(温帯域の本土産のものは紡錘形)。気胞は両端が細くなる紡錘形。
- 分布域(県外) : 北海道から本州(太平洋沿岸、日本海沿岸中・南部)、四国、九州に広く分布。(国外)朝鮮半島、中国南部。南西諸島では奄美諸島を飛び越し沖縄島に分布、南限となっている。
- 県内の分布 : 沖縄島。
- 生育環境 : さんご礁潮間帯下部から低潮線間に帯状に分布する(沖縄生物教育研究会編, 2004)。いずれの生育地も北に面した場所にあり、沖縄におけるヒジキ漁場となっている。
- 生育状況 : 冬季12月初旬に発芽し、2月ごろから急速に伸長し、春季4月に最も繁茂する。その後6月にかけて急激に減少する。5月頃には付着器から新芽が出るが夏季8月には付着根ごと消失する。
- 学術的価値 : 分子系統地理学的解析の結果、沖縄産のヒジキは本州産のものと遺伝的に大きく分化していること、それにも関わらず沖縄集団内の遺伝的多様性は比較的低いことが指摘された。九州以北においてごく普通の種であることを考えると、沖縄島産のヒジキは温暖化の影響によって、将来衰退する可能性を秘めている。このことから本種はその影響を知る指標的な存在である。
- 減少の要因 : 埋め立て、護岸整備、港湾整備、エビ養殖池建設等の海岸域の開発。分布の南限でもあるため温暖化による気温や海水温の上昇によって絶滅のおそれが考えられる。
- 備考 : 本種は沖縄でも漁獲対象種となっており、ヒジキ漁場においては地元漁業者によって適切に管理されているため生育量は比較的豊富である。今後とも漁業従事者には種の保存と持続的な利用のためにも生産管理に十分に配慮することが望まれる。遺伝子保存の観点から、他府県のヒジキを養殖株として導入することは避けるべきである。

- 文献 : Setchell, W. A., 1933. Hong Kong seaweeds, III. Sargassaceae. Hong Kong Naturalist, Suppl. 2:33-49, pls. 5-20.
- 瀬川宗吉, 1956. ひじき, “原色日本海藻図鑑”. 保育社, 大阪, p1. 27, no. 212. 46.
- 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ヒジキ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 30.
- 大村徹雄, 1976. 中城湾の海産植物. 琉球大学理工学部生物学科卒業論文, 77pp.
- 香村真徳, 1981. 沖縄島産ヒジキの生態学的研究. “藻場 (ガラモ場) の生態の総合的研究 昭和 55 年度文部省科学研究費成果報告書”, 梅崎勇編, 48-50.
- 香村真徳, 1984. 琉球列島のホンダワラ科藻類について—ウミトラノオとヒジキの生態—. 東京大学海洋研究所大槌臨海研究センター報告, 10: 82-83.
- 当真 武・本村浩司・大城 譲, 1984. 沖縄産ヒジキの増殖に関する研究. “昭和 57 年度沖縄水試場事業報告書”, 163-173.
- 大葉英雄, 1995. 沖縄県慶良間諸島阿嘉島周辺の海藻目録. みどりいし, 第 6 号: 23-28.
- Lee, Y.-P. & Kamura, S., 1997. Morphological variation of *Hizikia fusiformis* (Harvey) Okamura (Sargassaceae, Phaeophyta) from the eastern coast of the North Pacific. *Algae*, 12: 57-72.
- 吉田忠生, 1998. ひじき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 367-368.
- 吉田忠生, 2001. ヒジキの学名について. 藻類, 49: 38-39.
- 当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇, 433pp.
- 島袋寛盛, 2016. 日本産南方系ホンダワラ属 23 回目 南日本沿岸域に分布するヒジキ. 海洋と生物 225, vol. 38, no. 4, 東京, 444-449.
- 堀内はるな・小林穂ノ佳・岩崎貴也・寫田智, 2017. 日本沿岸における褐藻ヒジキの系統地理学的解析. 藻類 vol. 65 no. 3. , 東京, 135-148.

執筆者名 : 香村真徳・岩永洋志登

和名 : カラクサモク

分類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)

学名 : *Sargassum pinnatifidum* Harvey

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態の特徴 : 藻体は高さ 50 cm ほどになる。盤状から小さな円錐形の付着器より茎を生じ、茎の頂端から数本の主枝がらせん状に伸びる。主枝の断面は平たい 2 稜形で表面は滑らかであるが稜の縁辺には小さな棘が生じる。本種は側枝をあまり生じさせない。葉と枝の区別が難しく、主枝から生じる葉の柄がいわゆる側枝にあたる。藻体下部の葉は細長い被針形で上部へいくほど細くなりさらに叉状に分枝することもある。本種の葉は変化に富み、複数回分枝するなど複雑な形態を有している。気胞は卵形から楕円形で頂端から葉と同様の冠葉が生じる。

分布域 (県外) : 奄美大島。愛媛県からは記録のみ。(国外) 中国南部、韓国。

県内の分布 : 沖縄島、西表島。

生育環境 : 内湾や礁池 (イノー) の水深 0.5~1 m ほどの岩礁域。

生育状況 : 春から葉や主枝が伸長しはじめ、夏から冬の比較的長い期間に成熟個体が確認される。本種では成熟後に主枝の枯死流失がみられるが、春には藻体下部の茎からあらたな葉や主枝が伸長する多年生である。群落を形成し藻場 (ガラモ場) として機能している。

学術的価値 : 本種は Loo Choo Islands (おそらく琉球列島) 産の標本をもとに Harvey により記載された。Harvey はペリーらによる黒船来航時に採集された海藻標本の多くを受け取っており、本種は

1853年にペリーらが沖縄島に來航した際に採集されたものと考えられている。遠藤（1907）は沖縄で採集された標本と自身が愛媛県三崎町で採集したものに基づいてHarvey（1859）の記載を訂正したがHarveyのものと同じかどうか明らかでない。愛媛県では上記の記録があるだけで標本は存在せず、生育情報も確認されていない。本種はヤツマタモク（*Sargassum patens*）と形態的に類似する点が多く、沖縄の個体群についてもさらなる知見が必要である。本種は中国および日本の南西諸島海域に固有的な種であると考えられている。

減少の要因：埋め立て、護岸整備、港湾整備等の海岸域の開発。

文献：瀬川宗吉・香村真徳，1960. カラクサモク. “琉球列島海藻目録”，琉球大学普及叢書，17号，31.
吉田忠生，1998. からくさもく. “新日本海藻誌”，内田老鶴圃，東京，399-400.
当真 武，2012. 沖縄の海藻と海草（自然環境・養殖・海藻250種）. Mugen, 那覇，433pp.
小林真吾，2014. カラクサモク. “愛媛県レッドデータブック2014—愛媛県の絶滅の恐れのある野生生物—”，愛媛県レッドデータブック改訂委員会，愛媛，547.
寺田竜太，2015. カラクサモク. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）”. ぎょうせい，372.
島袋寛盛，2015. 日本産南方系ホンダワラ属 18回目 日本産カラクサモク. 海洋と生物 220 vol. 37, no. 5, 東京，526-531.
寺田竜太，2016. カラクサモク. “改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動物—鹿児島県レッドデータブック—2016（植物編）”，鹿児島県環境技術協会，鹿児島，417.

執筆者名：香村真徳・岩永洋志登

和名：コバモク
分類：ヒバマタ目 ホンダワラ科（褐藻類）
学名：*Sargassum polycystum* C. Agardh
カテゴリー：絶滅危惧II類（VU） 環境省カテゴリー：絶滅危惧II類（VU）

形態の特徴：藻体は長さ50 cm～3 m、場所によっては6 mほどにもなる。小さな盤状の付着器の上に高さ1 cmほどの茎が生じ、そこから直立する主枝（1～5本）とツル状の匍匐枝（3～7本）が出る。主枝には多数の突起状の棘があり、互生的に短い小枝が出ている。主枝の葉は長さ2.5 cm、幅3～5 mm、気胞はとても小さく球形で直径2～3 mm、幼体では少ないが成体では多く、側枝から伸びる小枝に互生的につく。匍匐枝は細い円柱状で、互生羽状に分枝し岩上を這うことで藻体を支えている。

分布域（県外）：小笠原諸島、徳之島（過去に採集記録あり）。（国外）台湾、太平洋熱帯域、ベトナム、インド洋。

県内の分布：沖縄島、宮古島、石垣島、竹富島、黒島、西表島。

生育環境：湾内の干潟や礁池内、低潮線付近から深さ3 mまでの岩盤や礫上に生育。

生育状況：3月ごろから出現しはじめ、秋季に急速に伸長し、11月から1月の晩秋から冬季に成熟する。内湾の干潟や礁池（イノー）内の海水流動の緩やかな場所に生育し、岩盤や礫上に点在的に着生する傾向が強い。

学術的価値：熱帯性の種で、南西諸島沿いには沖縄島が北限に当たるが（徳之島で過去に採集記録があるが近年は観察されていないようだ）、黒潮の影響下に当たる小笠原諸島にまで北上。本邦産では、匍匐する枝をもつホンダワラ属は本種のみであり珍しい種である。

減少の要因：水路建設や埋め立て等の海岸域の開発。

- 文献 : 山田幸男, 1942. 南日本産ほんだわら属ノ種類ニ就テ (其一). 植物研究雑誌, 18 : 369-381.
- 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. コバモク. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 33.
- Ajisaka, T., Noro, T., & Yoshida, T., 1995. Zygo carpic *Sargassum* species (subgenus *Sargassum*) from Japan. “Taxonomy of Economic Seaweeds”, Abbott, I. A. (ed.), 5: 11-44.
- 吉田忠生, 1998. こばもく “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 400.
- 島袋寛盛・新井章吾・野呂忠秀, 2007. 沖縄島以南の琉球列島に生育する絶滅危惧藻類コバモク *Sargassum polycystum* (ヒバマタ目, 褐藻綱) の形態と分布について. 沖縄生物学会誌, 45: 49-56.
- 当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇市, 433pp.
- 島袋寛盛, 2013. 日本産南方系ホンダワラ属 3 回目 コバモクとヒメハモク. 海洋と生物 205, vol. 35, no. 2, 東京, 168-175.
- 寺田竜太, 2015. コバモク. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, ぎょうせい, 373.
- 寺田竜太, 2016. コバモク. “改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動物—鹿児島県レッドデータブック—2016 (植物編)”, 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島, 417pp.

執筆者名 : 香村真徳・岩永洋志登

3) 準絶滅危惧 (NT)

- 和名 : ヤバネモク
- 分類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)
- 学名 : *Hormophysa cuneiformis* (Gmelin) Silva
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は秋から春の成長期に 30 cm 以上になる。付着器は小さな盤状で、上部から複数の茎が生じる。茎はそのまま伸長し主枝となり、所々から各方面に枝を出す。枝は矢羽のような翼状片を断続してつける。翼状片は幅 1 cm 前後、上の方に行くにつれて小さくなる。縁辺には尖った鋸歯がある。気胞は枝の上部のところどころに、三方向に翼状片をつけ膨らんでいる。

国外では、フィリピン、太平洋熱帯域、ベトナム、インド洋に産し、県外では奄美諸島に分布。県内では沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島に生育。さんご礁潮間帯の潮だまり、礁池 (イノー) や湾内の深さ 2、3 m の海底の岩盤や礫上に点在的に着生、または疎生する。奄美群島が北限。

褐藻類の系統と進化を探る上で学術上きわめて貴重な種である。紀伊半島に漂着することがあるが、自生には至っていないようである。温暖海域に漂着することは、温暖化の影響でその域でも定着する可能性があることから、指標的な海藻になりうるものと考えられる。

生育の阻害要因として沿岸域の改変があげられる。埋め立てによる生育地の消滅。

- 文献 : 香村真徳・飯田勇次, 1981. 久米島の礁湖内さんご礁上の海産植物の分布. “琉球列島における島嶼生態系とその人為的変異Ⅱ”, 琉球大学, 263-279.
- 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ヤバネモク. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書 17号, 30.
- Silva, P. C., Menez, E. G., & Moe, R.T., 1987. Catalog of the benthic marine algae of the Philippine. Smithsonian Contr. Marine Science, 27: iv+179pp.

田中 剛・糸野 洋, 1968. 与論島の海藻. 海中公園センター調査報告書, 1号 317-325, 図版 1-5.

山本虎夫・パシエンテ A. コルデロ, Jr., 1974. 紀伊半島に漂着した熱帯性褐藻類 3 種. 南紀生物, 16(2): 33-36.

Yamazato, K., Kamura, S., Nakasone, Y., Aramoto, Y. & Nishihira, M., 1976. Ecological distribution of the reef associated organisms in the Bise-Shinzato coast of Okinawa. Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isls., 2: 6-30.

吉田忠生, 1998. やばねもく. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 362-364.

当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇市, 433pp.

寺田竜太, 2015. ヤバネモク. “レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”. ぎょうせい, 384.

寺田竜太, 2016. ヤバネモク. “改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動物-鹿児島県レッドデータブック-2016 (植物編)”, 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島, 417.

島袋寛盛, 2017. 日本産南方系ホンダワラ属 26 回目 日本沿岸域に分布するヤバネモク. 海洋と生物 228, vol. 39, no. 1, 東京, 83-88.

執筆者名 : 香村真徳・岩永洋志登

和名 : ツクシモク

分類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)

学名 : *Sargassum assimile* Harvey

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は春から夏にかけて伸長し、夏から秋の繁茂期には 30~50 cm になり、穏やかな海域ではまれに 1m 近くになる場合がある。体は盤状の付着器の中央から茎が生じ、主枝は茎の頂端かららせん状に生じる。主枝は円柱形からやや角張った形をしている。側枝は主枝から 1~3 cm 間隔で互生的に生じ、表面には棘が生じる。葉は被針形で縁辺は強く波打ち、小さな鋸歯が並んでいる。葉の表面には毛巣が散在する。葉の先は尖り中肋は葉の内部に埋入し上部まで達する。葉の下部の形態は左右不相称である。気胞は球形で頂端は丸く表面は滑らか。

国外からは中国南部、シンガポール、ベトナムから知られるが、中国については現況で生育しているとの報告はない。県外では和歌山県、九州以南から報告がある。県内からは伊是名島からのみ知られる。水深 2~5 m ほどの岩上や大きな転石上に生育している。

分布域が狭く発見例が少なく、生態的にも未解明な部分が多く残っている種である。

生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅など沿岸域の改変があげられる。

文献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ツクシモク. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 32.

吉田忠生, 1998. つくしもく. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 376-377.

島袋寛盛, 2014. 日本産南方系ホンダワラ属 10 回目 ツクシモク. 海洋と生物 212, vol. 36, no. 3, 東京, 335-339.

執筆者名 : 岩永洋志登

和名 : マジリモク
 分類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)
 学名 : *Sargassum carpophyllum* J.Agardh
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

藻体は30~80 cmほどになり、水深10 m以上の深所に生育するものは1 m以上に伸長し、7mに達する事例も確認されている。小さな盤状の付着器の中央から茎が直立する。茎の頂端から数本の円柱形の主枝がらせん状に生じる。側枝は主枝の両側から1~20 cmの間隔で互生的に生じる。表面は滑らか。葉はとても薄い膜質で、形は線形から被針形になる。葉はまれに分枝するがほとんど分枝せず先は尖る。葉の縁辺は細かい鋸歯が並ぶ。毛巣が散在し、触るとややざらざらとした触感。幅が広い被針形の葉では縁辺が波打つ場合があるが、多くは波立たない。葉の下部から柄にかけての形は左右不相称である。気胞は表面が滑らかな球形で、稀に頂端から小さな棘状の突起が生じることがある。沖縄では初夏が繁茂期である。藻体の質は柔らかくて弱いため、採集後に長時間外気に触れたりホルマリンなどで固定したりすると藻体が緑色に変色し、気胞は取れてしまう。

国外ではインド洋、中国南部、東南アジア、オーストラリア、オセアニアなど熱帯・亜熱帯太平洋に分布。日本では伊豆半島、瀬戸内海西部、九州に分布。県内では沖縄島、伊是名島から知られる。

内湾の潮下帯上部から水深15 mほどの比較的深所に生育する。九州では潮下帯上部の波のあたる場所では岩上に小規模な群落を形成しているが、沖縄では水深10 m以深で砂や泥のかかった岩上や礫に低い密度で点在している。沖縄では初夏の繁茂期になると気胞の浮力や光合成などによって葉などに付着した気体が浮力を与え、基質ごと藻体が中性浮力で浮き上がっていることがある。

生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅や港湾整備による潮流の変化に伴う底質の変化など沿岸域の改変があげられる。

文献 : 吉田忠生, 1998. まじリモク. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 380.
 当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇, 433pp.
 島袋寛盛, 2013. 日本産南方系ホンダワラ属 7 回目 マジリモクとシマウラモク, タマエダモクの関係. 海洋と生物 209, vol. 35, no. 6, 東京, 633-639.
 Fujii, T., Watanabe K., Nishihara, C., Obuchi, M. & Ohba H. (2015) The giant brown alga *Sargassum carpophyllum* on a nearshore coral reef in Okinawa Island, Japan. Marine Biodiversity 45: 603-604.

執筆者名 : 岩永洋志登

和名 : ナガミモク
 分類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)
 学名 : *Sargassum longifructum* Tseng et Lu
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

藻体は夏にかけて急速に伸長し、秋の繁茂期には30~50 cm以上になる。藻体は盤状から仮盤状の付着器の中央から茎が直立する。主枝は円柱形からやや扁平し、下部に棘が多いが上部はやや滑らか。側枝は主枝から1~2 cm間隔で互生的に生じる。葉は被針形で先が尖っており分枝はない。縁辺には細かい鋸歯が並び、長さは4 cm、幅1 cmまでになる。毛巣は表面に散在し、触るとザラザラとした感触がある。中肋は葉に内在し、先端までうっすらと伸びている。なお、幼

体時の葉は特徴的で、弓なりに湾曲した葉が多く生じ、成体時にも藻体下部には同様の葉が残っていることがある。

国外では中国南部やベトナムに産し、東アジア固有種とされている。日本では沖縄島のみから知られる。波の穏やかな礁池（イノー）内のやや砂に覆われた岩盤上や礫上に生育する。

一部の海域では本種による大規模な群落（ガラモ場）が報告されているが、ほかのホンダワラ属の種に比べて生育量が少ないことが指摘されており、生育状況についての詳しい情報の収集が必要である。

生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅など沿岸域の改変があげられる。

- 文 献 : 吉田忠生, 1998. ながみもく. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 389.
 当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草（自然環境・養殖・海藻 250 種）. Mugen, 那覇, 433pp.
 島袋寛盛, 2013. 日本産南方系ホンダワラ属 5 回目 ナガミモクとトゲミモク. 海洋と生物 207, vol. 35, no. 4, 東京, 407-413.

執 筆 者 名 : 岩永洋志登

- 和 名 : **チュラシマモク**
 分 類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)
 学 名 : *Sargassum ryukyuense* Shimabukuro et Yoshida
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は夏にかけて急速に伸長し、夏から秋の繁茂期には 50~80 cm になる。藻体は盤状から高さが低い円錐形の付着器の中央から茎が生じ、主枝は茎の頂端かららせん状に複数生じる。主枝はとて平たく扁圧し、縁辺は滑らか。側枝は主枝から 1~4 cm 間隔で互生的に生じ、長さは 25 cm までになる。葉は先端の尖った被針形で縁辺には鋭い鋸歯が並んでいる。主枝上の葉は早落性で生長とともに脱落し、成熟期にはほとんど残っていない。中肋は内在し、葉の先端付近でうっすらと消える。毛巢は葉の表面に散在するが、細長い葉では中肋の両側に縦に並んで生じることもある。気胞は楕円形から卵形で、断面は球形ではなくやや扁圧しているものが多い。藻体上部の気胞ほど頂端から細長い冠葉が生じる傾向がある。

国外からは報告がなく、日本固有種である。県外では九州南部産の標本が確認されているが、分布の現況は奄美諸島以南と考えられている。県内からは沖縄島と伊計島（タイプ産地）など沖縄島周辺からのみ知られる。波の穏やかな礁池（イノー）内の潮下帯上部の岩上やさんご礁上に生育する。沖縄島では本種による大規模な群落（ガラモ場）が夏から秋にみられる。

生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅など沿岸域の改変があげられる。

本種は 2008 年に新種として記載されたホンダワラ類であり、その和名がチュラシマモク（ちゅら：美しい、清らか）と名付けられた理由は「固有種として琉球列島の島々に分布する本種がいつまでも生育できる美しい自然が残っていてほしいという願いを込めたもの」とのことである。

- 文 献 : Shimabukuro, H., Terada, R., Noro, T. and Yoshida, T., 2008. Taxonomic study of two *Sargassum* species (Fucales, Phaeophyceae) from the Ryukyu Islands, southern Japan: *Sargassum ryukyuense* sp. nov. and *Sargassum pinnatifidum* Harvey. *Botanica Marina*, 51: 26-33.
 当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草（自然環境・養殖・海藻 250 種）. Mugen, 那覇, 433pp.
 島袋寛盛, 2013. 日本産南方系ホンダワラ属 4 回目 キシュウモクとチュラシマモク. 海洋と生物 206, vol. 35, no. 3, 東京, 249-257.

執筆者名 : 岩永洋志登

和名 : キシュウモク

分類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)

学名 : *Sargassum siliquosum* J.Agardh

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は夏にかけて急速に伸長し、夏から秋の繁茂期には 40~70 cm になる。藻体は仮盤状の付着器の中央から茎が直立する。主枝は円柱形で滑らか。側枝は主枝から 1~1.5 cm 間隔で互生的に生じ、長さは 20 cm までになる。葉は生育する海域で特徴に差があるだけでなく、同一群落内や同一の個体でも多くの形態的な変異を有している。また葉は早落性で、成体になると主枝から生じる葉はほとんど残っていない。

国外では赤道を中心とした熱帯海域に分布し、東南アジアでは比較的ふつうにみられる。日本では沖縄島を北限とする南西諸島に分布しており、県内では沖縄島と宮古島に分布する。和名の由来となった紀州半島には生育していない(紀州半島での採集個体は南西諸島からの流れ藻であった可能性が指摘されている)。波の穏やかな礁池(イノー)内の潮間帯下部から潮下帯上部の岩上やさんご礁上に生育する。

生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅など沿岸域の改変があげられる。

文献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. キシュウモク. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 32.

吉田忠生, 1998. きしゅうもく. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 407.

当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草(自然環境・養殖・海藻 250種). Mugen, 那覇, 433pp.

島袋寛盛, 2013. 日本産南方系ホンダワラ属 4 回目 キシュウモクとチュラシマモク. 海洋と生物 206 vol. 35 no. 3, 東京, 249-257.

執筆者名 : 岩永洋志登

4) 情報不足 (DD)

和名 : ヒメヤハズ

分類 : アミジグサ目 アミジグサ科 (褐藻類)

学名 : *Dictyopteris repens* (Okamura) Borgesen

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

藻体は扁平で中肋があり、不規則に分枝し、高さ 1~7 cm。裏面の中肋や縁辺から糸状根を出してホンダワラ属やサボテングサ属などの他の海藻上や岩盤上を匍匐する。藻体は緑色を帯びた褐色で、質は薄い膜質である。一見、匍匐性の小型のアミジグサ属が剥離したようにみえる。

国外では、台湾、中国、フィリピン、太平洋熱帯域に産し、県外では奄美諸島、伊豆諸島の八丈島に分布。県内からは沖縄島、慶良間諸島の阿嘉島、与那国島から報告がある。

観察される頻度が低く、絶滅危惧類のカテゴリーに属するものと考えられるが、生育状況についての詳しい情報の収集が必要である。

文献 : 岡村金太郎, 1936. ひめやはづ. “日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 173-174.
 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ヒメヤハズ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書 17 号. 琉球大学, 25.
 大葉英雄, 1995. 沖縄県慶良間諸島阿嘉島周辺の海藻目録. みどりいし, (6): 23-28.
 吉田忠生, 1998. ひめやはづ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 210-211.
 新崎盛敏, 2002. ひめやはづ. “原色新海藻検索図鑑”, 北隆館, 東京, 40.
 大葉英雄, 2015. ヒメヤハズ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, ぎょうせい, 386.
 寺田竜太, 2016. ヒメヤハズ. “改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動物—鹿児島県レッドデータブック—2016 (植物編)”, 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島, 416.
 Titlyanov, E.A., Titlyanov, T.V., Kalita, T. L. & Tokeshi, M., 2016. Decadal changes in the algal assemblages of tropical-subtropical Yonaguni Island in the western Pacific. Coastal Ecosystems, 3: 16-37.

執筆者名 : 岩永洋志登

和名 : リュウキュウウミウチワ
 分類 : アミジグサ目 アミジグサ科 (褐藻類)
 学名 : *Padina ryukyuana* Y. P. Lee & Kamura
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は小型で薄い板状の扇状であり、高さ 1.5 cm、幅 1~4 cm。内側はやや強く石灰化し、外側の石灰化はやや弱い。色は灰褐色。基部に明瞭な柄部はなく、体下部から生じる仮根糸の束で付着する。全体に 3 層細胞であるが、生長端の巻き込んだ部分では 2 層、老成部分では 4 層になるところもある。

国外では、台湾、中国。県内からは沖縄島、西表島から報告されている。さんご礁海域の礁池（イノー）に生育する。

観察される頻度が低く、絶滅危惧類のカテゴリーに属するものと考えられるが、生育状況についての詳しい情報の収集が必要である。

文献 : Lee, Y. P., Kamura, S., 1991. *Padina ryukyuana* Lee, Y.P. et Kamura, a new marine brown alga from southern Japan. Korean Journal of Phycology, 6(2): 91-96.
 吉田忠生, 1998. *Padina ryukyuana*. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 228.
 Ni-Ni-Win, Hanyuda, T., Arai, S., Uchimura, M., Prathep, A., Draisma, S.G.A., Soe-Htun & Kawai, H., 2010. Four new species of *Padina* (Dictyotales, Phaeophyceae) from the western Pacific Ocean, and reinstatement of *Padina japonica*. Phycologia, 49: 136-153.

執筆者名 : 岩永洋志登

和名 : モズク

分 類 : ナガマツモ目 モズク科 (褐藻類)
 学 名 : *Nemacystus decipiens* (Suringar) Kuckuck
 方 言 名 : すぬい (モズク類全般)、いともずく、ほそもずく
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

藻体は高さ 10~30 cm になり、糸状で粘質に富み (オキナワモズクよりも粘液物質が多い)、滑らかである。藻体は多軸構造のオキナワモズクとは異なり単軸構造であるが、主軸は不規則に分枝し、そこからさらに枝を出すので、主軸と枝の区別が難しい。枝は直径 1 mm ほどの円柱状で、先端に向かって細くなる。色は淡褐色~褐色。

九州以北のものはホンダワラ類 (特にヤツマタモク、マメタワラ、エンドウモク) に着生するが、南西諸島ではホンダワラ類に着生せず、礁池 (イノー) 内のサンゴ礫や海草の露出した地下茎などから生える。水深 3~4 m の浅海域に多い。

食用として養殖もおこなわれているが、一般に流通する「もずく」はほとんどオキナワモズク (*Cladosiphon okamuranus*) である。

分布は、国外では、中国北部、朝鮮半島、国内では本州、九州、南西諸島から報告がある。県内では沖縄島と久米島からのみ報告されている。なお、宮古島や八重山諸島は天然の生育地ではないが養殖活動が行われている。

沖縄県に分布するモズクは、その形態的特徴において、九州以北のモズクと同一種として扱われているが、着生基質の嗜好性が異なることなど遺伝子的な多様性が示唆されている。そのため南西諸島産モズクの遺伝子保存の観点から、他海域のモズクを養殖株として導入する場合には、天然株と交配することのないよう細心の注意が望まれる。

文 献 : 瀬川宗吉, 1956. もずく. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 34, pl. 19, no. 157. 33.
 四井敏雄, 1993. *Nemacystus decipiens* (Suringar) Kuckuck (モズク), “藻類の生活史集成 第2巻 褐藻・紅藻類”, 内田老鶴圃, 東京, 36-37.
 吉田忠生, 1998. もずく. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 275.
 四井敏雄, 2004. 7 モズク類とマツモ, “有用海藻誌 海藻の資源開発と利用に向けて”. 内田老鶴圃, 東京, 86-110.
 当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇, 433pp.

執 筆 者 名 : 岩永洋志登

和 名 : カヤモノリ
 分 類 : カヤモノリ目 カヤモノリ科 (褐藻類)
 学 名 : *Scytosiphon lomentaria* (Lyngbye) Link
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

冬季~春季の藻体は配偶体であり、円柱状か扁平で中空、ところどころくびれて関節のようになる。県外産のものと比べると沖縄島のは体長 15 cm 以下、幅 5 mm 以下のものが多く、くびれも少ない。晩春~秋季の藻体は孢子体であり、直径 1~3 mm のかさぶた状で岩盤に張り付いている。潮間帯中位の岩盤に生育する。

国外では、台湾、中国、太平洋、大西洋、国内では日本各地から報告があるが、県内からは沖縄島から報告があるのみ。

生育の阻害要因として沿岸域の改変があげられる。埋め立てによる生育地の消滅。

- 文 献 : 瀬川宗吉, 1956. かやものり. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, p1. 21, no. 168. 37.
瀬川宗吉・香村真徳, 1960. カヤモノリ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書 17 号. 琉球大学, 29.
吉田忠生, 1998. かやものり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 314-315.
当真 武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇, 433pp.

執 筆 者 名 : 岩永洋志登

和 名 : ヤツマタモク
分 類 : ヒバマタ目 ホンダワラ科 (褐藻類)
学 名 : *Sargassum patens* C. Agardh
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は高さ 30~100 cm ほどで、なかには 150 cm を超えるものもあり、瀬戸内海などでは 2~3m に達する。盤状の付着器から茎が生じ、茎の頂端から数本の主枝がらせん状に生じる。主枝ははじめ葉のような膜状で生長するにつれ枝と葉の区別がつくようになる。主枝の断面は平たい 2 稜形で藻体の上部ほど細くなる。側枝は扁圧する主枝の縁辺から互生羽状に 5 mm~3 cm 間隔で平面的に生じる。藻体下部の葉は細長い被針形で先端は尖り複数回又状に分枝する。気胞は卵形から倒卵形で頂端から被針形の冠葉が生じる。

県外では、本州以南。国外では、中国、韓国、フィリピンから報告がある。県内からは沖縄島、宮古島から報告されている。ただし南西諸島には形態的によく似たカラクサモク (*Sargassum pinnatifidum*) が分布しており、日本での図鑑や調査報告書などで沖縄県下においてヤツマタモクとして報告されているものはカラクサモクである可能性が高い。現時点では本種は南西諸島に分布していないと考えられている。遺伝的な情報も含めた両種の分類学的な検討が必要である。

- 文 献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ヤツマタモク. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17 号, 琉球大学, 31.
大城 肇, 1964. 沖縄諸島の海藻 沖縄国際大学紀要 2 巻 2 号別冊. 沖縄国際大学, 53pp.
吉田忠生, 1998. やつまたもく. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 398.
島袋寛盛, 2015. 日本産南方系ホンダワラ属 18 回目 日本産カラクサモク. 海洋と生物 220, vol. 37, no. 5, 東京, 526-531.
島袋寛盛, 2016. 日本産南方系ホンダワラ属 20 回目 南日本産ヤツマタモク. 海洋と生物 222, vol. 38, no. 1, 東京, 89-93.

執 筆 者 名 : 香村真徳・岩永洋志登

【紅藻類】

1) 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

和 名 : ハナヤナギ
分 類 : イギス目 フジマツモ科 (紅藻類)

- 学 名 : *Chondria armata* (Kutzing) Okamura
 方 言 名 : どうもい (徳之島)
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)
- 形態の特徴 : 藻体は樹枝状、高さ 5~8cm。殻状の付着器から数本の円柱状の主枝が立ち、主枝は不規則に分枝する。枝はさらに細かく短い小枝を密生する。
- 分布域 (県外) : 本州太平洋南部、九州南部、種子島、屋久島、徳之島、与論島。(国外) フィリピン、インドネシア、マレーシア、ポリネシア、メラネシア、インド洋。
- 県内の分布 : 沖縄島。
- 生育環境 : さんご礁の潮間帯中部付近の潮溜に生育。
- 学術的価値 : 熱帯海域から本邦温帯海域に至る分布域の中間に位置する沖縄島に生育することは、地理的分布の上で重要な意味を持つ。本種が持つ生理活性物質 (ドオモイ酸) は生理学や薬理学の研究試薬として高価なものようである (比嘉, 2000)。
- 生育状況 : これまで沖縄島南部と伊奈武ビシ (埋め立てで生育地消滅) の 2 カ所 (1950 年代) において生育地を確認しただけで、沖縄では極めて稀な種であると考えられる。
- 減少の要因 : もともと生育地が少ない。埋め立てによる生育地の消滅 (伊奈武ビシ)。
- 文 献 : 瀬川宗吉, 1956. はなやなぎ. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 114, pl. 68, no. 550.
 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ハナヤナギ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17 号, 60.
 千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 159.
 田中 剛, 1960. 奄美諸島、与論島の堡礁上の海藻相. 鹿児島大学南方産業研究所, 3: 5-9.
 竹内常松・醍醐皓二, 1959. ハナヤナギの駆虫成分. 藻類, 7: 91-93.
 比嘉辰雄, 2000. 新宝島. (財) 沖縄県環境科学センター報, 3: 90-92.
 吉田忠生, 1998. はなやなぎ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 1014.
- 執筆者名 : 香村真徳

2) 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 和 名 : ケコナハダ
 分 類 : ウミゾウメン目 コナハダ科 (紅藻類)
 学 名 : *Gononema farinosum* (Lamouroux) Fan et Wang (*Liagora farinosa* Lamouroux)
 カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)
- 形態の特徴 : 藻体は赤褐色で、他のコナハダ属 (*Liagora*) とは色合いが異なる。高さは 20cm ほどにもなり、不規則に分枝する。先端では通常叉状に枝分かれする。体の基部では 1~2mm、上部になるにつれて細くなる。
- 分布域 (県外) : 本州太平洋沿岸南部、四国、鹿児島県 (馬毛島)、奄美諸島。(国外) フィリピン、太平洋熱帯域、インド洋、大西洋。
- 県内の分布 : 沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : 内湾や礁池内の潮間帯中下部の岩上に着生、また潮溜まりの縁に生育する。
- 学術的価値 : 熱帯さんご礁海域から沖縄諸島を経て本州太平洋岸にかけて生育する種である。

生育状況 : 局所的に生育する性質が強く、個体数は少ない。

減少の要因 : 埋め立て、や護岸工事による生育地の縮小。

- 文献 : Abbott, I. A., 1984. The new species of *Liagora* (Nemaliales, Rhodophyta) and notes on *Liagora farinosa* Lamouroux. Amer. J. Bot., 71: 1015-1022.
- 梅崎 勇, 1961. 紅藻類ケコナハダの生殖器官の発達に関する研究. 植物研究雑誌, 36: 234-239.
- 大葉英雄・有賀祐勝, 1982. 八重山群島石垣島周辺の海藻. 藻類, 30: 325-331.
- 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, (15): 25-34.
- 香村真徳・飯田勇次, 1981. 久米島の礁湖内さんご礁上の海産植物の分布. “琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革Ⅱ”, 琉球大学, 263-279.
- 千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 95.
- 吉崎 誠, 1993. ケコナハダ. “藻類の生活史集成 第2巻 褐藻・紅藻類”, 堀 輝三編, 内田老鶴圃, 東京, 246-247
- Yamada, Y., 1938. The species of *Liagora* from Japan. Sci. Pap. Inst. Algal. Res., Fac. Sci. Hok-kaido Univ., 2: 1-34, pls. 1-15.
- 吉田忠生, 1998. けこなはだ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 511.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : ベニモズク

分類 : ウミゾウメン目 コナハダ科 (紅藻類)

学名 : *Helminthocladia australis* Harvey (*H. macrocephala* Yamada シマベニモズク)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態の特徴 : 藻体は軟らかく薄ピンク色、高さ 30cm にもなる。。小さくて細い茎から円柱状の枝が直立 1~2 回分枝する。枝には細くて短い小枝がある。

分布域(県外) : 奄美大島、本州、四国、九州。(国外) フィリピン、中部太平洋海域(ヤップ、パラオ)、インドネシア、中国、オーストラリア(タイプ産地)。

県内の分布 : 沖縄島、伊平屋島(岩永氏 私信)。

生育環境 : 礁池内や潮間帯下部付近から水深 1m の礫や岩上に着生する。

学術的価値 : 温帯系の種で、沖縄島が日本列島の南限にあたる。

生育状況 : 沖縄島北部に 2~3 月ごろ局所的に観察される。

減少の要因 : 埋め立てによる生育の消滅。赤土の流入による生育を阻害。高水温(温暖化)による影響。

備考 : 沖縄島で本種はシマベニモズク(那覇がタイプ産地)として記載された(Yamada, 1941)が、その後、温帯性のベニモズクと同じ種であるとされた。伊平屋島では自家消費されているとのことである(岩永, 私信)

文献 : 梅崎 勇, 1960. 日本産ベニモズク属 2 種の生殖器官の発達について. 植物分類・地理, 18: 169-177.

瀬川宗吉, 1956. ベにもずく. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 58, pl. 33, no. 254.

瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ベニモズク. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17 号, 35.

千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 93.

Yamada, Y., 1941. Notes on some Japanese algae IX. Sci. Pap. Inst. Algol. Res., Hokkaido Univ.,2: 195-215, 9pls.

吉田忠生, 1998. べにもずく. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 512.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : アケボノモズク

分類 : ウミゾウメン目 コナハダ科 (紅藻類)

学名 : *Trichogloea requienii* (Montagne) Kützing

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

形態の特徴 : 藻体は柔らかくぬるぬるする。円柱状で高さは20cmにもなる。不規則ではあるものの、復羽状に分枝する。藻体は鮮紅色であるが、体内に石灰質を薄く沈着しているため、内部が白っぽく見える。

分布域(県外) : 太平洋沿岸南部、八丈島、大隅諸島、奄美大島。(国外) 熱帯海域(フィリピン、マレーシア、インド洋、紅海)。

県内の分布 : 沖縄島、与那国島。

生育環境 : 低潮線付近から深さ2mのところの岩上に生育する。

学術的価値 : 沖縄県は分布経路の重要な位置にある。

生育状況 : もともと少ない。

減少の要因 : もともと少ない上に、さんご礁の埋め立てによる生育地の消滅(例: 宜野湾市のさんご礁)。

文献 : 瀬川宗吉, 1956. あけぼのもずく. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 57, pl. 33, no. 254.

瀬川宗吉・香村真徳, 1960. アケボノモズク. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 35.

千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 93.

吉田忠生, 1998. あけぼのもずく. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 523.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : ヌルハダ

分類 : ウミゾウメン目 ウミゾウメン科 (紅藻類)

学名 : *Trichogloeopsis mucosissima* (Yamada) Abbott et Doty (*Liagora mucosissima* Yamada)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

形態の特徴 : 藻体灰色で高さ20cmほどに達する。石灰質の沈着は少なく柔らかくて粘りがある。直径1mmの主軸から不規則に配列する長ささまざまな枝が出る。雌雄異株。

分布域(県外) : 八丈島。(国外) 西沙諸島(中国)。

- 県内の分布 : 伊是名島、宮古島（タイプ産地）。
- 生育環境 : さんご礁の潮溜まりや水路の岩上に生育する。
- 学術的価値 : 1属2種からなる貴重な種で、その1種が伊是名島と宮古島（タイプ産地）に産する。
- 生育状況 : もともと少なく生育地が限られている。その後、県内からの生育確認情報はなく、本種の生育が危惧される。
- 減少の要因 : 生育を阻害する要因については不明。

- 文献 : Abbott, I. A. & M. S. Doty, 1960. Studies in the Helmintholadiaceae II. Trichogloeopsis. Amer. J. Bot. 47:632-640.
- 千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 95pp.
- 知念久美子, 1962. 琉球産コナハダ属及び Trichogloeopsis の有性生殖器官の発達について. (未発表) 琉球大学卒業研究 14pp, pls. 1-8.
- Fan, K. S., Y. C. Wang, W. H. Li, & K. Y. Fan, 1957. Studies on the marine algae of the Hisisha Islands. II. New species and new records of the family Nemalionaceae (Rhodophyta). Acta Phytotaxonomica Sinica, 13: 71-75, 2pls.
- Yamada, Y., 1938. The species of *Liagora* from Japan. Sci. Pap. Inst. Algal. Res., Fac.Sci. Hokkaido Univ., 2: 1-34, pls. 1-15.
- 吉田忠生, 1998. むるはだ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 524.

執筆者名 : 香村眞徳

-
- 和名 : トゲキリンサイ
- 分類 : スギノリ目 ミリン科 (紅藻類)
- 学名 : *Eucheuma serra* (J. Agardh) J. Agardh
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

- 形態の特徴 : 藻体は扁円または扁圧で、粗に分枝する。枝（太さ1~4mm）の両縁から棘状の小枝を羽状にほぼ直角に出す。体の高さは5-10cmほどで、匍匐するように生える。
- 分布域（県外） : 伊豆諸島、太平洋沿岸中南部、九州、馬毛島、奄美諸島。（国外）台湾、フィリピン、インドネシア、インド洋、モーリシャス。
- 県内の分布 : 沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。
- 生育環境 : さんご礁の潮間帯低潮線付近から深さ2~4mの潮下帯の礁上に生育する。
- 学術的価値 : 熱帯海域の海藻でキリンサイと同様、太平洋側沿岸に北上している種である。
- 生育状況 : もともと少ない。
- 減少の要因 : さんご礁の埋め立て。

- 文献 : 瀬川宗吉, 1956. とげきりんさい. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 84, pl. 51, no. 398.
- 千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 95pp.
- Verheij, E. & Prud'Homme van Reine (1993). Seaweeds of the Sparmonde Archipelago, SW Sulawesi, Indonesia. Blumea, 37(2):385-511
- Yamada, Y., 1936. The species of *Eucheuma* from Ryukyu and Formosa. Sci. Pap. Inst. Algal. Res. Hokkaido Univ., 1: 119-134, 9pls.

吉田忠生, 1998. とげきりんさい. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 802.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : ベニゴウシ

分類 : イギス目 ランゲリア科 (紅藻類)

学名 : *Haloplegma duperreyi* Montagne

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

形態の特徴 : 藻体は葉状で高さ2~4cmほど、不規則に裂け上部は丸みを帯びる。顕微鏡的な網目に細胞糸が配列しているので格子状に見える (和名の由来)。

分布域 (県外) : 奄美大島 (北限)、与論島。(国外) 台湾、マレー諸島、オーストラリア、インド洋、東アフリカ沿岸、カリブ海、ブラジル。

県内の分布 : 沖縄島、阿嘉島(慶良間)、宮古島、石垣島、与那国島。

生育環境 : さんご礁潮間帯の溝や潮溜まり、水路などの薄暗い壁面に着生。

学術的価値 : 熱帯海域性種で、北限は奄美大島であり、いまだに北進していないこと。

生育状況 : 局所的で生育密度は低い。

減少の要因 : 埋め立てやエビ養殖池の造成。

文献 : Itono, H., 1977. Studies on the Ceramiaceous algae (Rhodophyta) from southern parts of Japan. Bibl. Phycol., 35: 1-499.

糸野 洋, 1981. 紅藻イギス科藻類の分類と分布 IX 各論 6. 海洋と生物, 3: 306-309.

大葉英雄(1992). 慶良間諸島阿嘉島周辺の海藻植生. みどりいし No. 3:24-29

香村眞徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, (15): 25-34

Yamada, Y., 1936. Notes on some Japanese algae VII. Sci. Pap. Inst. Algal. Res., Fac. Sci. Hokkaido Univ., 1: 135-140, pls. 31-33.

Yamada, Y. & T. Tanaka, 1938. The marine algae from the island of Yonakuni. Sci. Pap. Inst. Algal. Res., Fac. Sci. Hokkaido Univ., 2: 53-86.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : エツキアヤニシキ

分類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)

学名 : *Neomartensia flabelliformis* (Harvey ex J. Agardh) Yoshida et Mikami (*Martensia flabelliformis* Harvey ex J. Agardh)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

形態の特徴 : 藻体は円柱の細い柄 (長さ4-5cm) と傘を開いたような葉状部からなる。葉上部はきれいな網目構造をしている。

分布域 (県外) : 神奈川県、伊豆大島、三重県、愛媛県、福岡県、五島、熊本県、馬毛島、沖永良部島、与論島。(国外) 台湾 (火烧島)、フィリピン、ソロモン諸島、パプアニューギニア。

- 県内の分布 : 沖縄島、宮古島。
生育環境 : さんご礁潮間帯の潮溜まりや水路に着生する。
学術的価値 : 熱帯海域から温帯海域に分布する珍奇な種である。
生育状況 : もともと少ない。
減少の要因 : さんご礁の改変や埋め立て。

- 文献 : Coppejans, E & Millar A. J. K., 2000. Marine red algae from the North Coast of Papua New Guinea. *Botanica Marina* 43: 315-346.
瀬川宗吉, 1956. 原色日本海藻図鑑. 保育社, 大阪, 110, pl. 66, no. 532.
瀬川宗吉・香村真徳, 1960. エツキアヤニシキ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 58.
千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 129.
Yamada, Y., 1936. Notes on some Japanese algae VII. *Sci. Pap. Inst. Algal. Res., Fac. Sci. Hokkaido Univ.*, 1: 135-140, pls. 31-33.
吉田忠生, 1998. えつきあやにしき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 987-988.
Yoshida, T. & H. Mikami, 1996. Observations on Japanese species of the genus *Martensia* (Delesseriaceae, Rhodophyta), with the description of *Neomartensia* gen. nov. *Phycol. Res.*, 44: 104-106.

執筆者名 : 香村真徳

-
- 和名 : カラゴロモ
分類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)
学名 : *Vanvoorstia coccinea* Harvey ex J. Agardh
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 該当なし
形態の特徴 : 藻体は黄褐色、多くの裂片に分かれた網状の葉状体で、成長すると高さ、幅ともに 30cm に達する。裂片は湾曲した形状で、葉片には中肋を除いて皮層が発達する。
近縁種との違い : 本種は葉片の中肋を除いて皮層が発達しているのに対し、後記の種ヒメカラゴロモは中肋を除いて一層である。
分布域(県外) : 八丈島・本州太平洋中南部、九州西岸、奄美諸島。(国外) フィリピン、フィジー、インド洋。
県内の分布 : 沖縄島、宮古島。
生育環境 : 礁池(イノー)内や深い潮溜まり内の岩上に生育する。
学術的価値 : 熱帯海域から温帯域(本太平洋南部)にまで分布する特徴がある。
生育状況 : 観察できる機会が少ない。
減少の要因 : 長期的・断続的な赤土汚染、埋め立て。

- 文献 : Coppejans, E & Millar A. J. K., 2000. Marine red algae from the North Coast of Papua New Guinea. *Botanica Marina* 43: 315-346.
瀬川宗吉, 1956. からごろも. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 110, pl. 66, no. 532.
千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 129.
田中次郎・中村庸夫(2014)日本の海藻. 245pp. 平凡社.
田中 剛・糸野 洋, 1968. 与論島の海藻, 海中公園センター報告. 1号: 317-325, 図版 1-5.

N'Yeurt, A.D.R. & South, G.R. (1996). A revised checklist of the benthic marine algae of the Fiji Islands, south Pacific (including the island of Rotuma. *Micronesica*, 39(1): 49-98.

吉田忠生, 1998. からごろも. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 998-999.

Yoshida, T. & H. Mikami, 1994. Observations on *Vanvoorstia spectabilis* Harvey and *V. coccinea* Harvey (Delesseriaceae, Rhodophyta) from southern Japan. *Jpn. J. Phycol.*, 42: 11-20.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : ヒメカラゴロモ

分類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)

学名 : *Vanvoorstia pectabilis* Harvey (*Implicaria reticulata* Heydrich)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

形態の特徴 : 藻体は網状をした葉状体で大きさは10cm以下、いくつかの列片に分かれる。網目を作っている葉片は中肋部細胞を除いて1層で、皮層が発達しない。

分布域(県外) : (国外) フィリピン、インドネシア、オーストラリア、インド。

県内の分布 : 沖縄島、慶良間諸島、宮古島、石垣島、黒島、魚釣島。

生育環境 : 澄んだ礁池(イノー)内の岩盤上に着生。稀に観察される。

学術的価値 : 熱帯域の海藻で、沖縄島を北限とする。

生育状況 : もともと少ない。

備考 : かつて、本種は慶良間の標本を基準に Heydrich (1902) によって新属 *Implicaria* 属として創設された経緯がある。国内の種は長い間、上記のカラゴロモと同種として取り扱われていたが、Yoshida & Mikami (1994) によって別種のものであることが明らかにされた。

文献 : Heydrich, F., 1902. *Implicaria*, eine neue Genus der Delesseriaceae. *Ber. deut. bot. Ges.*, 20: 497-483.

Heydrich, F., 1907. Eine Algen von Loocho order Riu-Kiu Insel (Japan). *Ber. Deu. Bot. Gesell.* XXV, 102-108, Taf. II.

吉田忠生, 1998. ひめからごろも. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 999.

Yoshida, T. & H. Mikami, 1994. Observations on *Vanvoorstia spectabilis* Harvey and *V. coccinea* Harvey (Delesseriaceae, Rhodophyta) from southern Japan. *Jpn. J. Phycol.*, 42: 11-20.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : フクレソゾ

分類 : イギス目 フジマツモ科 (紅藻類)

学名 : *Laurencia marianensis* Yamada

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

形態の特徴 : 淡紅色のきれいな紅藻で、藻体は円柱状で柔らかく、複総状に分枝、高さは5cmほどになる。末端の小枝は円柱状～こん棒状。

分布域(県外) : (国外) 熱帯海域(フィリピン、中国南部、カロリン諸島、マーシャル諸島、ソロモン諸島、インドネシア、オーストラリア、ハワイ)。

県内の分布 : 与那国島、宮古島、沖縄島。

- 生育環境 : 干潟や内湾の低潮線付近から水深2mにかけて、海草藻場の海草や礫などに着生する。
- 学術的価値 : 本種は沖縄島が北限である。今後、海水温の異常が続けば本種が北上する可能性もあることから本種をその指標種としておきたい。
- 生育状況 : 生育場所は局所的であり、稀であること、生育状況に関する報告が少ない。
- 減少の要因 : 埋め立てによる干潟や海草藻場の消失。

- 文献 : 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, (15): 25-34.
- Saito, Y.(1969). The algal genus *Laurencia* from the Hawaiian Islands, Philippine Islands and adjacent areas. Pac. Sci. 23: 148-160.
- Saito, Y. & Womersley, H.B.S. (1974).The southern Australian specie of *Laurencia* (Cerami-ales Rhodophyta). Aust. J. Bot. 22:815-874.
- Masuda, M., Kogame, K. & Kamura, S., 1998. Taxonomical notes on *Laurencia mariannensis* (Rhodopmelaceae, Rhodophyta). Phycol. Res., 46: 86-90.
- Verheij, E. & van Reine Prud'Homme, W. F., 1993. Seaweeds of the Spermonde Archipelago, Sw Sulawesi, Indonesia. Blumea, 37: 385-510.
- Yamada, Y., 1931. Notes on *Laurencia*, with special reference to the Japanese species. Univ. Calif. Publ. Bot., 16: 185-310, 30pls.
- Yamada, Y. & T. Tanaka, 1938. The marine algae from the island of Yonakuni. Sci. Pap. Inst. Alg-ol. Res., Fac. Sci. Hokkaido Univ., 2: 53-86.
- 吉田忠生, 1998. ふくれそぞ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 1036.

執筆者名 : 香村真徳

- 和名 : **タカサゴソゾ**
- 分類 : イギス目 フジマツモ科 (紅藻類)
- 学名 : *Palisada robusta* Nam [*Laurencia palisada* Yamada]
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)
- 形態の特徴 : 藻体は暗赤色で、盤状の付着器から多数の直立・叢生する主枝が出る。高さ15cmにもなる。体は硬い軟骨様。主枝は基部から中央にかけて扁平し(幅2.2~4mm)、先端にかけて円柱状となり細くなる(幅1.0~1.2mm)。扁平の部分からは2列互生に、円柱状の部分からはらせん状に枝が出る。
- 分布域(県外) : 伊豆諸島。(国外) 台湾(紅頭嶼: タイプ産地)、フィリピン。
- 県内の分布 : 久米島。
- 生育環境 : 本種は、平坦な岩礁性海岸で低潮線付近の礁面に散在的に着生する。生育する範囲は狭い。
- 学術的価値 : 琉球列島において、久米島以外から本種の生育に関する情報はなく、久米島(島尻湾)の一角に産する貴重な種である。
- 生育状況 : 本種の生育をその後確認していないが、生育地は人里から離れる海岸であるため生育環境が維持されているものと考えている。ただし、今後の調査を必要とする。
- 減少の要因 : 本種の生育するさんご礁の背後には、道路を挟み山が迫っており、また人里離れているので、生育地が攪乱されることはないと考えられるが、豪雨や道路の改変・再整備時の豪雨で赤土の海域へ流入した場合、本種の生育が脅かされることが危惧される。
- 文献 : Masuda, M., Kogame, K., Abe, Y. & Kamura, S., 1998. A morphological study of *Laurencia palisada* (Rhodomelaceae, Rhodophyta). Bot. Mar. 41:133-140.

Nam, K.W. (2007). Validation of the generic name *Palisada* (Rhodomelaceae, Rhodophyta). *Algae* 22:53-55.

Yamada, Y., 1931. Notes on *Laurencia*, with special reference to the Japanese species. *Univ. Calif. Publ. Bot.*, 16: 185-310, 30pls.

執筆者名 : 香村眞徳

3) 準絶滅危惧 (NT)

和名 : カモガシラノリ

分類 : ウミゾウメン目 カサマツ科 (紅藻類)

学名 : *Dermonema pulvinatum* (Grunow) Fan [*Nemalion pulvinatum* Grunow]

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体はオリーブ色に近く、高さ 1~3cm の半球状の塊からなる。枝は円柱状で太さ 1mm 以下と細く、不規則に叉状に分枝する。体は粘りのある軟骨質。

県外では太平洋沿岸中・南部、四国、九州、大隅諸島、奄美諸島。国外からは台湾北西岸、紅頭嶼から知られる。県内の分布は沖縄島 (国頭郡沿岸) から知られる。岩礁性潮間帯・コンクリート階段の潮間帯上・中部付近に着生する。

生育の阻害要因として岸側の岩礁域の改変、大量の砂によるビーチロック・岩等の埋没 (イノー内の護岸整備による影響)。県内では沖縄島北部に限定的に生育している海藻で、しかも、琉球列島沿いにみると沖縄島が南限にあたる。生育密度は低い

文献 : 瀬川宗吉, 1956. かもがしらのり. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 57-58, pl. 33, no. 252.

瀬川宗吉・香村眞徳, 1960. カモガシラノリ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17 号, 35.

千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 93.

Lewin, S. T. & J. N. Norris, 1987. A history and annotated account of the benthic marine algae of Taiwan. *Smithsonian Contributions to the Marine Sciences*, No. 29: iv + 33pp.

吉田忠生, 1998. かもがしらのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 487-488.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : ジュズフサノリ

分類 : ウミゾウメン目 フサノリ科 (紅藻類)

学名 : *Scinaia moniliformis* J. Agardh

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体 (配偶体) は高さ 6~12cm、二又分枝する枝は規則的に強くくびれる。節間部は長楕円形または長い卵形で長さ 5~10mm、直径 3~4mm。枝の内部には粘液質が多く含まれるのでやわらかいが、表面はヌルヌルしない。本種と似たスジコノリ (*Chamaebotrys boergesenii*) とは、高さ 3~5cm と小さく、節間部が球状で、枝先が癒着して網状になる点で区別される。

県外では伊豆諸島、四国、九州、奄美大島から知られ、国外ではフィリピン、オーストラリア、インド洋に分布する。県内では沖縄島と慶良間諸島で確認されており、漸深帯の岩盤上に生育する。

生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅など沿岸域の改変がある。また、本種は食用ともなるほか、レッドグレーププランツという名称で鑑賞用としても人気があるため、乱獲による減少が懸念される。

- 文 献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ジュズフサノリ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 37.
 大葉英雄, 1995. 沖縄県慶良間諸島阿嘉島周辺の海藻目録. みどりいし, (6): 23-28.
 吉田忠生, 1998. じゅずふさのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 506.

執 筆 者 名 : 岩永洋志登

和 名 : ハイコナハダ
 分 類 : ウミゾウメン目 ハイコナハダ科 (紅藻類)
 学 名 : *Yamadaella caenomyce* (Decaisne) Abbott (*Liagora caenomyce* Decaisne)
 カ テ ゴ リ : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧(NT)

藻体は直径7~8cmまでの低い団塊となり、円柱状で叉状に分枝する枝が錯綜する。枝の太さは1~1.5 mm。石灰質を強く沈着しているため、外側は白っぽいが、内側の枝は多少赤味を帯びる。

県外では小笠原諸島、大隅諸島、奄美諸島から知られ、国外では台湾、フィリピン、ミクロネシア、インド洋、大西洋に分布する。県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島及び与那国島で確認されている。さんご礁外側礁原の少しレベルが高く干出する位置や岸辺の岩盤上にへばりつくように着生し、特徴的な小群落をつくることがある。長年1属1種として知られてきたが、近年、西大西洋から同属種の新種記載がなされた (Popolizio et al. 2015)。

生育の阻害要因としてさんご礁の埋め立てや護岸整備等による生育地の減少 (例; 宜野湾市)。

- 文 献 : Abbott, I. A., 1970. *Yamadaella*, a new genus in the Nemaiales (Rhodophyta). *Phycologia*, 9: 115-123.
 千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 93.
 仲宗根幸男・山里 清・西平守孝・香村真徳・新本洋允, 1974. 瀬底島のサンゴ礁生物の生態分布 (予報). 琉球列島の自然とその保護に関する基礎的研究 (琉球大学), 1: 213-236.
 Popolizio, T.R., Schneider, C.W. & Lane, C.E., 2015. A molecular evaluation of the Liagoraceae sensu lato (Nemaliales, Rhodophyta) in Bermuda including *Liagora nesophila* sp. nov. and *Yamadaella grassyi* sp. nov. *Journal of Phycology*, 51: 637-658.
 山里 清・西平守孝・仲宗根幸男・香村真徳・新本洋允, 1974. 瀬底島さんご礁の生物地形学的考察. 琉球列島の自然とその保護に関する基礎的研究 (琉球大学), 1: 201-212. <図中に *Liagora* と表示>
 Yamazato, K., Kamura, S., Nakasone, Y., Aramoto, Y. & Nishihira, M., 1976. Ecological distribution of the reef associated organisms in the Bise-Shinzato coast of Okinawa. *Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl.*, 2: 6-30.
 吉田忠生, 1998. はいこなはだ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 490.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : ピリヒバ
 分 類 : サンゴモ目 サンゴモ科 (紅藻類)
 学 名 : *Corallina pilulifera* Postels et Ruprecht
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

藻体は高さ 4cm になり、枝は密に羽状分枝する。藻体は平面的で、節間部は平たい。節間部の形態変異が大きくサンゴモ (*Corallina officinalis*) と区別が難しいが、本種は藻体が小さく、節間部が 0.6~1.2 mm とサンゴモの半分ほどである。

国外ではカムチャッカ半島、朝鮮半島、中国、台湾、ベトナムのほか、オーストラリア大陸、アフリカ大陸、南アメリカ大陸などの暖海域に分布する。県外では北海道南部から九州、奄美大島から知られ、県内では沖縄島で確認されている。潮間帯中・下部、漸深帯上部の岩上に生育する。

県内では観察される頻度が低い。生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅など沿岸域の改変があげられる。

文 献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ピリヒバ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17 号, 44.
 馬場将輔, 2000. ピリヒバ. “日本産サンゴモ類の種類と形態”, 海洋生物環境研究所研究報告, 第 1 号, 50.
 吉田忠生, 1998. ぴりひば. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 554-555.

執 筆 者 名 : 岩永洋志登

和 名 : イソモッカ
 分 類 : スギノリ目イソモッカ科 (紅藻類)
 学 名 : *Catenella caespitosa* (Withering) L. M. Irvine
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

藻体は匍匐する枝が錯綜して団塊となり、高さは 1-3cm。体色は暗紫色。枝は円柱状~扁圧、幅は 1mm 前後で、不規則な間隔で強くくびれる。付着器は仮根糸が集まったもので、ふつう枝が分枝する位置に生ずる。タイプ産地のウェールズを含むヨーロッパ大陸の大西洋沿岸や内湾域、カリブ海、中央アメリカ太平洋沿岸、東南アジア、オセアニア、アフリカのインド洋沿岸など世界に広く分布する。日本では南西諸島の奄美大島を北限とし、県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島に生育する。宮古島ではごく普通で、ノッチやキノコ岩の満潮線付近にあるコケモドキ帯に、小パッチ状に混生する。また、マングローブ林の幹 (潮間帯上部付近) に着生する。沖縄島でもマングローブ林の根元やノッチのコケモドキと共に見いだされることがあるが、非常に稀である。沖縄島の自生種は、地域個体群として、また地理的分布の上からも貴重な存在である。埋め立てにより生育地が消滅したところもある (例: 宮古島トゥリバー海岸)。

文 献 : 香村真徳, 2006. イソモッカ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”. 沖縄県, 424.
 田中次郎, 2000. 汽水産多細胞藻類の分類と形態 (16) 紅藻イソモッカ類①イソモッカの分類. 海洋と生物, 130 : 476-480.
 寺田竜太, 2015. イソモッカ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 384.
 吉田忠生, 1998. いそもッカ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 656.

執 筆 者 名 : 比嘉 敦

和名 : シオカワモッカ
 分類 : スギノリ目イソモッカ科 (紅藻類)
 学名 : *Catenella impudica* (Mont.) J. Agardh
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は濃紫色、高さ約 2-3cm、クッション状の塊で、下部は糸状で匍匐し基質に付着する。枝の幅は 1.5mm ほどで、円柱状または扁圧、鎖状に関節し、関節部で強くくびれ、そこから枝を出す。枝のいくつかの先端は盤状の付着器となる。タイプ産地は南アメリカのフランス領ギアナで、熱帯から温帯のマングローブ域に産し、沖縄島を北限とする。日本では本部町塩川集落内を流れる国指定の天然記念物「塩川 (スガー)」にのみ生育。塩分濃度は低く、0.45-5.3‰、水温は 21-22 度と年間を通しほぼ一定である。半日陰の河床の礫上や川縁の岩壁面に密生する。「塩川」と言う特異な環境下に適応、その過程を解明するための材料として重要な種である。「塩川」は、ここ 30 年来、大雨のたびに流入する赤土で濁り、藻体は他の種類を含め赤土が付着するなど、生育環境は悪化しており、生育の阻害が危惧される。

文献 : 香村真徳, 2006. シオカワモッカ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編・植物編 レッドデータおきなわ”. 沖縄県, 423-424.
 香村真徳・久場安次, 1976. 天然記念物「塩川」の植物. “塩川動態調査報告”, 沖縄県天然記念物調査シリーズ第 6 集, 沖縄県教育委員会編, 38-67.
 比嘉 敦・岩永洋志登・岩橋浩輔・香村真徳, 2015. 国指定天然記念物「塩川」(スガー)における植物の生育状況. 沖縄生物学会誌, 53 : 65-76.
 田中次郎, 2000. 汽水産多細胞藻類の分類と形態 (16) 紅藻イソモッカ類①イソモッカの分類. 海洋と生物, 130 : 476-480.
 寺田竜太, 2015. シオカワモッカ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物-9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, 環境省 (編), ぎょうせい, 東京, 384.
 渡口慈啓, 1957. 本部町塩川の植物相について. 琉大生物クラブ誌, 1 : 36-47. 〈*C. opuntia* として〉
 吉田忠生, 1998. しおかわもっか. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 656.

執筆者名 : 比嘉 敦

和名 : フクロフノリ
 分類 : スギノリ目 フノリ科 (紅藻類)
 学名 : *Gloiopeltis furcata* (Postels et Ruprecht) J. Agardh
 カテゴリー : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は円柱状で中空。高さ 5cm ほどに達するが、通常 3cm 内外、太いところで径は 2.5mm 不規則に叉状に分枝、枝の先端になるにつれて細くなる。

日本各地に分布し、県外では北海道南部から九州、奄美大島から知られる。国外では千島列島、朝鮮半島、中国に分布する。県内では伊是名島、沖縄島で確認されており、岩礁潮間帯上部に生育。同属のハナフノリ (方言名 : ふぬい) と局所的に混生する。

沖縄島北部が南限となることから、地理的分布の上で貴重な存在である。生育の阻害要因として赤土の流入や岸側の改変 (埋め立て) がある。なお、本種は温暖化の影響による生育地の後退を検証する指標種としてあげられる。

- 文 献 : 香村真徳, 1963. 琉球列島産海藻知見(Ⅱ). 藻類, 11: 103-107.
 瀬川宗吉, 1956. ふくろふのり. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 80, pl. 47, no. 374.
 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. フクロフノリ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 47.
 千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 93.
 当真 武・本村浩司・大城 譲, 1984. 沖縄産ヒジキの増殖に関する研究. 昭和57年度沖縄水試場事業報告書, 163-173.
 吉田忠生, 1998. ふくろふのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 678.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : **フィリグサ**
 分 類 : スギノリ目 ムカデノリ科 (紅藻類)
 学 名 : *Halymenia dilatata* Zanardini
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

藻体は膜質で、不規則に(円形から長楕円形)広がった葉状体は、幅は20cm、高さ30cmほどにもなる。体の表面には波打ったような皺と細かい斑点模様がある。

県外では伊豆諸島、本州太平洋岸中南部、九州西岸、瀬戸内海、大隅諸島、奄美諸島、国外ではフィリピン、インドネシア、ソロモン諸島、インド洋から知られ、県内では沖縄島、宮古島、黒島で確認されている。低潮線から潮下帯にかけて岩上に生育する

熱帯海域から本邦温帯域にかけて広く分布するが観察は稀。減少要因は不明。

- 文 献 : 大葉英雄・有賀祐勝, 1982. 八重山群島石垣島周辺の海藻. 藻類, 30: 325-331.
 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, (15): 25-34.
 瀬川宗吉, 1956. ふいりぐさ. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 80, pl. 47, no. 374.
 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. フィリグサ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 45.
 千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 93.
 Verheij, E. & van Reine Prud'Homme, W. F., 1993. Seaweeds of the Spermonde Archipelago, Sw Sulawesi, Indonesia. Blumea, 37: 385-510.
 吉田忠生, 1998. ふいりぐさ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 721-722.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : **カタメンキリンサイ**
 分 類 : スギノリ目 ミリン科 (紅藻類)
 学 名 : *Betaphycus gelatinus* (Esper) Doty ex Silva (*Eucheuma gelatinum* (Esper) J. Agardh)
 方 言 名 : ちぬまた、つのまた、りゅうきゅうつのまた
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー: 情報不足(DD)

藻体は多肉軟骨様で扁圧、さんご礁上を斜め方向に分枝し匍匐するので全体が塊状となる。枝は不規則に又状また羽状に分枝し、体の表面には多数の刺状の突起（幅3-5mm、厚さ1~2mm）がある。

国外からは台湾、フィリピン、中国南部、インド洋、県外では東太平洋沿岸南部、種子島、奄美諸島から知られ、県内では沖縄島、宮古島、石垣島、竹富島、外離島（西表）与那国島で確認されている。浅い礁池内に生育し、さんご礁の潮溜まりや水路の岩上、に着生。

西表島（外離島）では高い生育密度を保つこともある（香村，1986）が、沖縄島では先島諸島に比べると少ない。減少要因は不明。Yamada（1936）によると、那覇近傍のさんご礁上では普通に観察されたようであるが、沿岸の改変された状況の中で再生は期待できそうもない。本種はカラギーナン原藻として重要な海藻資源である。また、先島地方では採取され乾燥製品として市販・利用されるなど重要な水産資源である。キリンサイの仲間は宮古島では「うる豆腐」、石垣島など八重山地方では「つのまた豆腐」として、土産物店でも加工品が市販されている。持続的な利用のためにも、乱獲を避け資源管理を十分に行うことが必要である。

- 文 献 : 香村真徳，1986. 海藻. “沖縄のサンゴ礁”，西平守孝編，琉球大学放送公開講座，129-148.
千原光雄監修，1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社，東京，129.
Silva, P. C., Menez, E. G. & Moe, R. L., 1987. Catalog of the benthic marine algae of the Philippine. Smithsonian Contr. Marine Science, 27: iv+179pp.
Doty, M.S. & Norris, J.N. (1985). *Euचेuma species* (Solieriaceae, Rhodophyta) that are major sources of carrageenan. In: Abbott, I.A. & Norris, J.N., eds. Taxonomy of economic seaweeds: With reference to some Pacific and Caribbean species. pp.47-61. California Sea Grant College Program, LaJolla, Calif.
Yamada, Y., 1936. The species of *Euचेuma* from Ryukyu and Formosa. Sci. Pap. Inst. Algal. Res. Hokkaido Univ., 1: 119-134, 9pls.
吉田忠生，1998. かためんきりんさい. “新日本海藻誌”，内田老鶴圃，東京，799-800.

執 筆 者 名 : 香村真徳

和 名 : **ビヤクシンキリンサイ**
分 類 : スギノリ目 ミリン科 (紅藻類)
学 名 : *Euचेuma arnoldii* Weber-van Bosse (*Euचेuma cupressoideum* Weber-van Bosse)
方 言 名 : うる (宮古島)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー : 情報不足(DD)

藻体は軟骨質で、円柱状、高さは17cmほどにもなり、枝は入り組み塊状、小型の枝状サンゴの塊を感じさせるほどに外形がよく似ているので、見落とすことがある。直立する軸は、輪生する小枝を配列（和名の由来）、または不規則に小枝をつける。体色は紫紅色または淡褐紅色。

国外からは台湾、フィリピン、東南アジア海域、県外では奄美諸島から知られ、県内では沖縄島、宮古島に生育する。さんご礁潮間帯の低潮線付近から深さ約3mまでの岩盤や礫上に着生する。

熱帯性の海藻であり、水産資源として重要である。減少要因は埋め立て、乱獲。キリンサイの仲間は宮古島では「うる豆腐」として、土産物店でも加工品が市販されている。持続的な利用のためにも、乱獲を避け資源管理を十分に行うことが必要である

- 文 献 : 瀬川宗吉・香村真徳，1960. ビヤクシンキリンサイ. “琉球列島海藻目録”，琉球大学普及叢書，17号，48.
Yamada, Y., 1936. The species of *Euचेuma* from Ryukyu and Formosa. Sci. Pap. Inst. Algal. Res. Hokkaido Univ., 1: 119-134, 9pls.
吉田忠生，1998. びやくしんきりんさい. “新日本海藻誌”，内田老鶴圃，東京，801.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : キリンサイ

分類 : スギノリ目 ミリン科 (紅藻類)

学名 : *Eucheuma denticulatum* (Burman) Collins et Harvey (*Eucheuma muricatum* (Gmelin) Weber-van Bosse)

方言名 : うる (宮古島)

カテゴリー : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧(NT)

藻体は円柱状で軟骨様、不規則に分枝し高さ 25cm にもなり、太さ 2~3mm。吸盤状の付着器のほか繊維状の付着枝根がある。体の表面には棘状、またはいぼ状の突起が対生、または輪生することがある。さんご礁の潮間帯低潮線付近から深さ 2、3m 岩盤上に着生する。樹枝状の生サンゴや死サンゴの枝間に生育するものでは、サンゴと見間違えるほどに酷似する。枝の先端部分に魚類によると思われるかじり痕のあることが多い。

国外からは熱帯海域 (台湾、フィリピン、ニューカレドニア、インドネシア、マレーシア、オーストラリア、ハワイ諸島、インド洋、モーリシャス島)、県外では伊豆諸島 (北限)、四国、九州、馬毛島から知られ、県内では伊是名島、沖縄島、宮古島に生育する。さんご礁礁原の潮溜や枝サンゴの隙間、礁池内の岩盤上に生育する。熱帯性の海藻であり、水産資源として重要である。減少要因は埋め立て、乱獲。枝サンゴの隙間に生えているものを採取するため、サンゴを壊しているところを目撃したことがある。キリンサイの仲間は宮古島では「うる豆腐」として、土産物店でも加工品が市販されている。持続的な利用のためにも、乱獲を避け資源管理を十分に行うことが必要である。なおフィリピンでは養殖が行われており、沖縄でも養殖が可能か検討する必要がある。

- 文献 : 瀬川宗吉, 1956. きりんさい. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 84, pl. 51, no. 399.
 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. キリンサイ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17 号, 48.
 千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 129.
 Yamada, Y., 1936. The species of *Eucheuma* from Ryukyu and Formosa. Sci. Pap. Inst. Algal. Res. Hokkaido Univ., 1: 119-134, 9pls.
 Verheij, E. & van Reine Prud'Homme, W. F., 1993. Seaweeds of the Spermonde Archipelago, Sw Sulawesi, Indonesia. Blumea, 37: 385-510.
 吉田忠生, 1998. きりんさい. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 801-802.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : モサオゴノリ

分類 : オゴノリ目 オゴノリ科 (紅藻類)

学名 : *Gracilaria coronopifolia* J. Agardh

方言名 : すーな (オゴノリ類全般)、もーい (イバラノリ類含む)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は赤紫色で、軟骨質、叢生する。円柱形又は体の中、上部でしばしば扁圧する枝が、叉状か時に偏生して分枝し、ゆるく絡み合った塊をつくる。分枝の腋は広く、基部はくびれず、枝の先端は尖る。

国外からは中国、台湾、フィリピン、ミクロネシア、ポリネシアに分布する。県外では奄美大島から知られ、県内では沖縄島、古宇利島、屋我地島、石垣島 (岩永ほか未発表) で確認されている。潮間帯中・下部、漸深帯上部の岩上に生育する。

県内では観察される頻度が低い。生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅など沿岸域の改変があげられる。

ほかのオゴノリ属藻類と同様に食用とされる。

なお、沖縄を含むアジア海域でモサオゴノリとされている種はタイプ産地（ハワイ）のものとは異なることが指摘されており、今後、分類が見直される可能性がある。

- 文 献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. モサオゴノリ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 52.
当真武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250種). Mugen, 那覇, 433pp.
吉田忠生, 1998. もさおごのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 817.

執 筆 者 名 : 岩永洋志登

- 和 名 : リュウキュウオゴノリ
分 類 : オゴノリ目 オゴノリ科 (紅藻類)
学 名 : *Gracilaria eucheumatoides* Harvey (*Hydroopuntia eucheumatoides* (Harvey) Grugel et Predelercq)
方 言 名 : びさうる (宮古島)
カ テ ゴ リ : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧(NT)

藻体は扁平で肉厚、不規則に分枝、体色は光の当たる部分では緑っぽく、陰になる所では赤紫色に近い。体は平たく這い重なり団塊状となる。枝の幅は1cm前後、小枝を羽状に出す傾向がある。腹面から小さな付着器を出し岩礁面や枝同士が付着する。

国外では太平洋熱帯域に分布する。県外では奄美大島から知られ、県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島に生育する。波浪から守られたさんご礁の低潮線付近や礁原の潮溜まりの岩盤上、深さ3mまでの岩盤上に着生する。沖縄島では生育地に限られ、量的にも少ないが、宮古島では数地点観察され(香村, 1977)、石垣島では場所によっては普通に生育する。減少要因は埋め立て。

本種はオゴノリ属海藻の中でも特異な形態を備えてること、また地理的分布の上からも貴重な種である。

なお、本種はGurgel & Fredericq (2004) によりリュウキュウオゴノリ属 (*Hydroopuntia*) に移されたが、Lyra et al. (2015) はリュウキュウオゴノリ属をオゴノリ属 (*Gracilaria*) に含めた。

- 文 献 : Abbott, I.A., 1985. *Gracilaria* from the Philippines: Key, list and distribution of the species. In: Abbott, I.A. & Norris, J.N., (eds.), *Taxonomy of Economic Seaweeds: With reference to some Pacific and Caribbean species*. pp. 85-87. California Sea Grant College Program, LaJolla, Calif.
香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, (15): 25-34.
水産庁編, 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. (財) 日本水産資源保護協会, 437pp.
Harvey, W. H., 1859. Characters of new algae, chiefly from Japan and adjacent regions collected by Charles Wright in the North Pacific Exploring Expedition under Capt. John Rodgers. *Proc. Amer. Acad. Arts and Science*, 4: 327-334.
Yamamoto, H., 1978. Systematic and anatomical study of the genus *Gracilaria* in Japan. *Mem. Fac. Fish., Hokkaido Univ.*, 25: 97-152, pls. 1-49.
山本弘敏, 1993. リュウキュウオゴノリ. “藻類の生活史集成 第2巻 褐藻・紅藻類”, 堀輝三編, 内田老鶴圃, 東京, 278-279.
山本弘敏, 1995. リュウキュウオゴノリ. “日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (II)”, (財) 日本水産資源保護協会, 598-600, VI. 水生植物図版-8.
吉田忠生, 1998. りゅうきゅうおごのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 818-820.

吉田忠生・吉永一男, 2010. 日本産海藻目録 (2010年改訂版). 藻類, 58: 69-122.

吉田忠生・鈴木雅大・吉永一男, 2015. 日本産海藻目録 (2015年改訂版). 藻類, 63: 129-189

執筆者名 : 香村真徳

和名 : ツクシホウズキ

分類 : イギス目 フジマツモ科 (紅藻類)

学名 : *Acrocystis nana* Zanardini

カテゴリー : 準絶滅危惧(NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧(NT)

藻体は1cm内外の高さで、分枝した短い円柱状の茎(太さ1mm)と、頂生する卵円形～球形の囊状部(幅2.5～4mmほど)からなり、叢生する。色は濃紫色～褐色。囊上部は柔らかく、つぶすと粘り気がある。

国外では台湾、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タンザニア、県外では九州西岸(野母崎天草)、和歌山県、大隅諸島、奄美大島から知られ、県内では沖縄島、瀬底島、西表島、与那国島に生育する。岩礁性ノッチの潮間帯上・中部くぼみに群生。生育地によってはミドリゲ帯に点在する。

終日日陰となるようなノッチの条件を満たす環境は少ない。減少要因は岩礁性潮間帯ノッチの改変(護岸)、埋め立て。

文献 : 瀬川宗吉, 1956. つくしほうずき. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 115, pl. 69, no. 558.

瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ツクシホウズキ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 61.

千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 159.

右田清治・四井敏雄, 1977. 紅藻ツクシホウズキの四分胞子発生. 藻類, 25(増補): 137-142.

Yamazato, K., Kamura, S., Nakasone, Y., Aramoto, Y. & Nishihira, M., 1976. Ecological distribution of the reef associated organisms in the Bise-Shinzato coast of Okinawa. Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl., 2: 6-30.

山本虎夫, 1973. 和歌山県産海藻分布試料II. 南紀生物, 15(2): 35-36.

吉田忠生, 1998. つくしほうずき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 1007.

執筆者名 : 香村真徳

4) 情報不足 (DD)

和名 : コナハダモドキ

分類 : ウミゾウメン目 コナハダ科 (紅藻類)

学名 : *Akalaphycus liagoroides* (Yamada) Huisman, Abbott et Sherwood (*Rhodopeltis liagoroides* Yamada)

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

藻体は付着器から繰り返し叉状に分枝し束状となる。高さは約5-7cm。下部での小枝の長さは平たく、幅1-2mm。枝は先端になるにつれて先細り円柱状となる。最終の小枝は尖っている。体は個体によって多少石灰によって覆われる。国内では九州南部(鹿児島県甕島<タイプ産地>、宇治群島、馬毛島)に、国外では台湾(火烧島)、ハワイ、ニューカレドニア、東オーストラリア、モーリシャス諸島に産する。

県内においては沖縄島から知られている。観察される例は非常に少ない。生育は局所的で礁池や潮溜まりなどの礫や岩礁上に生育する。先島諸島を含め生育状況を調査する必要がある。

備考：Nozawa, Y. (1970) はコナハダモドキ、ホソバガラガラモドキ、ナンバンガラガラモドキ 3種の基準とした、枝の先端近くに帯状の配列 (zonate, annular striation) の有無を挙げているが、Itono and Tsuda (1980) はコナハダモドキには帯状のものがある個体とない個体があることから、枝の先端近くの帯状のものの有無は種の違を認めるための基準として有効なものではないとした。

文 献 : Huisman, J.M., Abbott, I.A. & Sherwood, A.R., 2004. Large subunit rDNA gene sequences and reproductive morphology reveal *Stenopeltis* to be a member of the Liagoraceae (Nemaliales, Rhodophyta), with a description of *Akalaphycus* gen. nov. *European Journal of Phycology* 39: 257-272.

Itono, H. & M. Yoshizaki, 1992. Female reproductive morphology and taxonomy of *Rhodopeltis* Harvey (Polyidaceae, Rhodophyta). I, II. *Rep. Fac. Sci. Kagoshima Univ. (Earth Sci. & Biol.)* 25: 125-147.

瀬川宗吉・香村真徳, 1960. コナハダモドキ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 43.

Nozawa, Y., 1970. Systematic anatomy of the red algal genus *Rhodopeltis*. *Pac. Sci.*, 24: 99-133.

Yamada, Y., 1935. Note on some Japanese algae VI. *Sci. Pap. Inst. Algol. Res., Hokkaido Univ.*, 1: 27-35, 6 pls.

吉田忠生, 1998. こなはだもどき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 784-785.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : ナンバンガラガラモドキ

分類 : ウミゾウメン目 コナハダ科 (紅藻類)

学名 : *Akalaphycus setchelliae* (Yamada) Huisman, Abbott et Sherwood (*Rhodopeltis setchellii* Yamada)

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

藻体は高さ 5~10cm、5~10mm 間隔で密に叉状分枝し、束状となる。体の幅は約 2mm で、体の最外層の細胞 (1~2 層) を除いて体内には石灰質が沈着する。体の低い所にある枝は扁平 (1.8~2mm 広く)、幅 1.8~2mm。分岐部では 3~4mm と広い、枝は先端になるにつれて円柱状となる、最終の小枝は長さ 2~3mm 長く、尖る (狭い Y 字形、或いは三叉状)。

本種はトカラ列島 (宝島、中之島) や与論島に分布し、国外からは台湾 (タイプ産地: 火烧島) に産する。県内では沖縄島から知られている。さんご礁の潮溜まりや水路の岩上に着生する。もともと少なく観察されることは稀。埋め立てや護岸整備による影響が生育阻害要因となる。先島諸島を含め生育状況を調査する必要がある。

文 献 : Huisman, J.M., Abbott, I.A. & Sherwood, A.R., 2004. Large subunit rDNA gene sequences and reproductive morphology reveal *Stenopeltis* to be a member of the Liagoraceae (Nemaliales, Rhodophyta), with a description of *Akalaphycus* gen. nov. *European Journal of Phycology* 39: 257-272.

Itono, H. & M. Yoshizaki, 1992. Female reproductive morphology and taxonomy of *Rhodopeltis* Harvey (Polyidaceae, Rhodophyta). I, II. *Rep. Fac. Sci. Kagoshima Univ. (Earth Sci. & Biol.)* 25: 125-147.

瀬川宗吉・香村真徳, 1960. ナンバンガラガラモドキ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 43.

Nozawa, Y., 1970. Systematic anatomy of the red algal genus *Rhodopeltis*. *Pac. Sci.*, 24: 99-135.

田中 剛, 1957. 奄美群島、与論島の堡礁上の海藻相 (予報). 鹿児島大学南方産業研究所. 2: 27-29.

Yamada, Y., 1935. Note on some Japanese algae VI. *Sci. Pap. Inst. Algol. Res., Hokkaido Univ.*, 1: 27-35, 6 pls.

吉田忠生, 1998. なんばんがらがらもどき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 785.

執筆者名：香村眞徳

和名：ホソバノガラガラモドキ

分類：ウミズウメン目 コナハダ科（紅藻類）

学名：*Stenopeltis gracilis* (Yamada et Tanaka) Itono et Yoshizaki (*Rhodopeltis gracilis* Yamada et Tanaka)

カテゴリー：情報不足 (DD) 環境省カテゴリー：情報不足 (DD)

藻体の高さは5~10cm、小さな盤状の付着器から、節間の連なる枝が密に叉状に分枝、束状となる。下部の枝は平たいか円柱状。幅は0.8-1mmと近縁種2種（コナハダモドキとナンバンガラガラモドキ幅1.8-2mm）に比べ細い、また、先端の小枝は角度の広いY字形である（コナハダモドキとナンバンガラガラモドキでは尖っている）。体表の最外層の細胞を含め不規則に石灰が沈着。

国内での分布は、小笠原諸島（父島）、馬毛島、奄美諸島に、国外らは、台湾（紅頭嶼）、フィリピン、グアムから知られている。沖縄県内の島々では分布の空白海域となっていることから、沖縄県に産することが期待できるものと考え、ここに掲載することにした。

文献：Huisman, J.M., Abbott, I.A. & Sherwood, A.R., 2004. Large subunit rDNA gene sequences and reproductive morphology reveal *Stenopeltis* to be a member of the Liagoraceae (Nemaliales, Rhodophyta), with a description of *Akalaphycus* gen. nov. *European Journal of Phycology* 39: 257-272.
 Itono, H. & M. Yoshizaki, 1992. Female reproductive morphology and taxonomy of *Rhodopeltis* Harvey (Polyidaceae, Rhodophyta). 1, II. Rep. Fac. Sci. Kagoshima Univ. (EarthSci. & Biol.) 25: 125-147.
 Itono, H. & R. T. Tsuda, 1980. New algal genera and species records from Micronesia: *Chamaedoris orientalis* (Chlorophyta) and *Rhodopeltis gracilis* (Rhodophyta). *Micronesica*, 16: 21-28.
 Nozawa, Y., 1970. Systematic anatomy of the red algal genus *Rhodopeltis*. *Pac. Sci.*, 24: 99-135.
 吉田忠生, 1998. ほそばのがらがらもどき. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 784.

執筆者名：香村眞徳

和名：エツキヒビロード

分類：スギノリ目 リュウモンソウ科（紅藻類）

学名：*Gibsmithia hawaiiensis* Doty

カテゴリー：情報不足 (DD) 環境省カテゴリー：該当なし

藻体は木のように硬い柄に、ゼラチン様の柔らかい葉状部をつける。葉状部は複数の丸く先太り（幅1cm）したヘラ状に分かれ、高さ2~5cmまでになる。色は薄くやや半透明で、表面に赤い毛が密生しているように見える。柄は直径約0.3~1cmの円柱状で、連続的な環状の縞模様があり、分枝することもある。

県外からは奄美大島から知られ、国外ではタイプ産地のハワイ諸島のほか、熱帯太平洋海域、インド洋に分布する。県内からは沖縄島、瀬底島（岩永未発表）、慶良間諸島で確認されている。水深5~15mの岩盤や大きな転石の垂直面に着生する。奄美大島やハワイでは水深40mでも確認されている。

観察される頻度が低く、生態的にも未解明な部分が多く残っている種である。

生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅など沿岸域の改変があげられる。

文献：大葉英雄, 1995. 沖縄県慶良間諸島阿嘉島周辺の海藻目録. みどりいし, (6): 23-28.
 糸野洋, 1971. エツキヒビロード（新称）奄美に産す. 藻類, 19: 94-96.

当真武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇, 433pp
Doty, M.S., 1963. *Gibsmithia hawaiiensis* gen. n. et sp. n.. Pacific Science 17: 458-465.
吉田忠生, 1998. えつきひびろうど. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 670.

執筆者名 : 香村真徳・岩永洋志登

和名 : ヨナグニソウ
分類 : スギノリ目 ムカデノリ科 (紅藻類)
学名 : *Yonagunia tenuifolia* Kawaguchi et Masuda
カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

藻体は紫紅色を呈し、軟骨質。盤状の付着器から短い茎状部を出し、葉状部は扁平で、繰り返し不規則に叉状分枝し、高さ 5~10cm に達する。枝は大きな角度で出て、やや扇状に広がる。
2004 年に新属新種として記載された。これまで与那国島から報告されているのみであり、生育状況についての詳しい情報の収集が必要である。

文献 : Kawaguchi, S., Shimada, H., Wang, H. W. and Masuda, M., 2004. The new genus *Yonagunia* kawaguchi et Masuda (Halymeniaceae, Rhodophyta), based on *Y. tenuifolia* Kawaguchi et Masuda sp. nov. from southern Japan and including *Y. formosana* (Okamura) Kawaguchi et Masuda comb. nov. from Southeast Asia. Journal of Phycology 40: 180-192.

執筆者名 : 岩永洋志登

和名 : アツバノリ
分類 : スギノリ目 アツバノリ科 (紅藻類)
学名 : *Sarcodia ceylanica* Harvey ex Kutzing
カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 情報不足 (DD)

藻体は厚い膜質で、吸盤状の付着器から立ち、叉状または不規則に何回か分枝し扇状に広がる。国内では太平洋沿岸、八丈島、父島、馬毛島、奄美諸島に、国外においては台湾、熱帯海域に位置するインドネシア、ポリネシア、インド洋などに分布。県内では宮古島と与那国から報告されている。潮下帯に生育することが一般的である。沖縄島周辺が空白地域となっていることから、この地域での本種の存在の有無を明らかにする必要がある。さんご礁の低潮線付近の潮溜りから潮下帯の保全が重要であり、沿岸域の埋め立ての影響が懸念される。

文献 : 香村真徳, 1977. 宮古島の海藻. 沖縄生物学会誌, (15): 25-34.
瀬川宗吉, 1956. あつばのり. “原色日本海藻図鑑”, 保育社, 大阪, 88, pl. 53, no. 415.
千原光雄監修, 1975. 海藻-中高校生図鑑. 学習研究社, 東京, 133.
Yamada, Y. & T. Tanaka, 1938. The marine algae from the island of Yonakuni. Sci. Pap. Inst. Alg-ol. Res., Fac. Sci. Hokkaido Univ., 2: 53-86.

執筆者名 : 香村真徳

和名 : オカムラキリンサイ
 分類 : スギノリ目 ミリン科 (紅藻類)
 学名 : *Eucheuma okamurae* Yamada
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

藻体は匍匐、枝は重なり互いに接着し、直径 20~30cm の塊にもなる。枝の基部は円柱状であるが、すぐに上方に向かって扁圧~扁平となる。枝の太さは 1~1.5cm、不規則に二叉状~三叉状に分枝。体の表面には、乳頭状の突起が多数ある。宮古島を北限とし台湾 (紅頭嶼) に分布。潮下帯の水深 2~3m の礁上に生育する。キリンサイ類の海藻は、うる豆腐の材料として乱獲された可能性についても聞き取り調査を行う必要がある。

吉田 (1998) は、オカムラキリンサイが kappa 型のカラギーナンを有することを基準で創設されたオオキリンサイ属 (*Kappaphycus*) の一種 *K. cottonii* (Weber-van Bosse) Doty ex Silva に形態的に近いとする意見があることから、分類学的な検討と成分分析を行うことの必要性を述べている。

文献 : Yamada, Y., 1936. The species of *Eucheuma* from Ryukyu and Formosa. Sci. Pap. Inst. Algal. Res. Hokkaido Univ., 1: 119-134, 9pls.
 吉田忠生, 1998. おかむらきりんさい. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 802.
 吉田忠生・鈴木雅大・吉永一男, 2015. 日本産海藻目録 (2015 年改訂版) 藻類 63 : 129.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : オオキリンサイ
 分類 : スギノリ目 ミリン科 (紅藻類)
 学名 : *Kappaphycus striatus* (Schmitz) Doty ex Silva (syn. *Eucheuma striatum* Schmitz)
 カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

藻体は円柱状の枝からなり、不規則に分枝する。特に枝の上部は扁圧することがある。枝の表面にはこぶ状の突起がある。低潮線から深さ 2~4m の潮下帯のさんご礁上に生育。生育状況に関する情報収集が必要である。沖縄島を北限とし石垣島に産する。国外の熱帯海域 (フィリピン、マレーシア、インド洋) に分布。Yamada (1936) は那覇のさんご礁水深 2~3m の礁上から採集した標本を用いて記録しているが、港湾整備などでかなり改変され静穏化が進み、現存しているかどうか不明である。なお、他の海域の生育状況を調査する必要がある。乱獲やさんご礁の埋め立てが種の存続を脅かす。

文献 : Ohba, H., Victor, S., Golbuu, Y. & Yukihiro, H., 2007. Tropical Marine Plants of Palau. Palau International Coral Reef Center and Japan International Cooperation Agency. 153pp.
 Yamada, Y., 1936. Notes on some Japanese algae VII. Sci. Pap. Inst. Algal. Res., Fac. Sci. Hokkaido Univ., 1: 135-140, pls. 31-33.
 吉田忠生, 1998. おおきりんさい. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 803.

執筆者名 : 香村眞徳

和名 : トサカノリ

分 類 : スギノリ目 ミリン科 (紅藻類)
学 名 : *Meristotheca papulosa* (Montagne) J. Agardh
方 言 名 : あかもー
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

藻体は鮮紅色を呈し、膜質で不規則に叉状分枝して鶏冠状をなす (和名の由来)。体の縁辺から副枝を生じ、表面には突起が見られる。高さ 10~30cm、幅 1~5cm。

県外では本州中南部太平洋岸以南、四国、九州、薩南諸島、国外では太平洋、インド洋、紅海に分布する。県内からは沖縄島から知られる。低潮線以深の水深 5~30m の岩盤や転石上に生育する。

九州産のものは刺身のつまや海藻サラダによく利用され、需要が高い。べにとさか (塩蔵)、あおとさか (湯通し後)、しろとさか (湯通し後に水にさらしたもの、または天日干し)。

県内では観察される頻度が低く、生態的にも未解明な部分が多く残っている種である。

なお、ツヅレグサ (*Halymenia durvillaei*) と誤同定されやすいことが指摘されている。

文 献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. トサカノリ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書 17 号. 琉球大学, 48.
寺田竜太, 2016. トサカノリ. “改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動物—鹿児島県レッドデータブック—2016 (植物編)”, 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島, 426.
当真武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇, 433pp.
吉田忠生, 1998. とさかのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 804.
吉田忠生, 2015. トサカノリ “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”. ぎょうせい, 384.

執 筆 者 名 : 岩永洋志登

和 名 : カタオゴノリ
分 類 : オゴノリ目 オゴノリ科 (紅藻類)
学 名 : *Gracilaria edulis* (Gmelin)
方 言 名 : すーな (オゴノリ類全般)、もーい (イバラノリ類含む)
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

藻体は淡い褐色~緑色で、硬い軟骨質 (和名の由来)、付着器から直立し、高さは 5~15cm。円柱状でときに多少扁平し、直径は 1mm。主枝の基部は細く、先端は尖る。枝は叉状、あるいは不規則に出る。枝、小枝の基部は細くならず、ときに軽くくびれる。

県外では九州南部、奄美大島から知られ、国外ではタイ産地の東インドのほか、熱帯太平洋海域、インド洋に分布する。県内からは沖縄島、石垣島で確認されている。潮間帯下部から水深 2~3m の岩盤や死サンゴ礁に着生する。海草藻場周辺で見られることが多い。

県内では湯がいて食される。

生育の阻害要因として沿岸域の改変があげられる。埋め立てによる生育地の消滅。

なお、本種は Gurgel & Fredericq (2004) によりリュウキュウオゴノリ属 (*Hydropuntia*) に移されたが、Lyra et al. (2015) はリュウキュウオゴノリ属をオゴノリ属 (*Gracilaria*) に含めた。

文 献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. カタオゴノリ, “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書 17 号. 琉球大学, 52.
当真武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇, 433pp.
吉田忠生, 1998. かたおごのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 818.
吉田忠生・吉永一男, 2010. 日本産海藻目録 (2010 年改訂版). 藻類, 58: 69-122.

吉田忠生・鈴木雅大・吉永一男, 2015. 日本産海藻目録 (2015年改訂版). 藻類, 63: 129-189.

執筆者名 : 岩永洋志登

和名 : ナンカイオゴノリ
 分類 : オゴノリ目 オゴノリ科 (紅藻類)
 学名 : *Gracilaria firma* Chang et Xia
 方言名 : すーな (オゴノリ類全般)、もーい (イバラノリ類含む)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 情報不足 (DD)

藻体は緑褐色から黄褐色で軟骨質、付着器から直立して高さ12cmまでになる。枝は円柱状で、直径2mm、互生、あるいは不規則に分枝し、枝と小枝の基部はくびれる。クビレオゴノリ (*Gracilaria blodgettii*) に似るが、ナンカイオゴノリの枝のくびれはクビレオゴノリほど著しくなく、通常薄緑色で、雄性生殖器官が深い壺型となることで区別される。

県外からは中国南部、ベトナム、マレーシア、タイなど、東南アジア海域 (熱帯) でよくみられる (和名の由来)。国内では沖縄島のみから知られ、沖縄島は本種の分布域の北限と考えられている (寺田ほか, 2000)。潮間帯下部の小石、礫、貝殻などに生育する。

クビレオゴノリと同様に、食用とされているものと思われる。

生育の阻害要因として沿岸域の改変があげられる。埋め立てによる生育地の消滅。

文献 : 寺田竜太・馬場将輔・山本弘敏, 2000. 日本新産オゴノリ属藻類 *Gracilaria firma* Chang et Xia (ナンカイオゴノリ, 新称) の形態と分類. 藻類, 48: 98.
 寺田竜太, 2015. ナンカイオゴノリ “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)”, ぎょうせい, 386.
 Terada, R., Baba, M. and Yamamoto, H., 2000. New record of *Gracilaria firma* Chang et Xia (Rhodophyta) from Okinawa, Japan. Phycological Research, 48: 291-294.
 当真武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇, 433pp.
 山本弘敏・寺田竜太, 2004. 12 オゴノリ類 “有用海藻誌”. 内田老鶴圃, 東京, 226-254.

執筆者名 : 岩永洋志登

和名 : オゴノリ
 分類 : オゴノリ目 オゴノリ科 (紅藻類)
 学名 : *Gracilaria vermiculophylla* (Ohmi) Papenfuss
 方言名 : すーな (オゴノリ類全般)、もーい (イバラノリ類含む)、かわな (大宜味村)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

藻体は褐色から暗褐色で、軟骨質、付着器から直立し、高さは5~15cm。枝は円柱状で、直径1~2mm。枝と小枝は不規則な互生、偏生、叉状に出る。枝の基部はくびれ、先端に行くほど細くなる。

県外では北海道から九州、奄美大島、国外では朝鮮半島、台湾から知られる。県内からは沖縄島で確認され (比嘉・岩永未発表)、マングローブ域の泥上の直径5mm以下の小石に着生していることが多い。

観察される頻度が低く、生育状況についての詳しい情報の収集が必要である。

文 献 : 瀬川宗吉・香村真徳, 1960. オゴノリ. “琉球列島海藻目録”, 琉球大学普及叢書, 17号, 51-52.
吉田忠生, 1998. おごのり. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 825.

執 筆 者 名 : 岩永洋志登

和 名 : ベニハウチワ

分 類 : イギス目 コノハノリ科 (紅藻類)

学 名 : *Zellera tawallina* Martens

カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

藻体は鮮紅色で、高さ 5~7cm。直径 1mm ほどの円柱状の茎が数本叢生し、上部は葉状で中肋があり、側脈はない。中肋から片側に多数の枝を出し、さらにその背軸側に同様な枝を出す。最終の枝は先端で前の順位の枝と接着して網状の構造となるが網目は不完全。

国外では台湾、中国、フィリピン、インドネシア、オーストラリアに分布する。国内では沖縄県にのみ産し、慶良間諸島、与那国島、沖縄島から知られる。漸深帯のサンゴ礁や岩盤上に生育する。

観察される頻度が低く、生育状況についての詳しい情報の収集が必要である。

生育の阻害要因として埋め立てによる生育地の消滅など沿岸域の改変がある。

文 献 : 大葉英雄, 1995. 沖縄県慶良間諸島阿嘉島周辺の海藻目録. みどりいし, (6): 23-28.
Titlyanov, E.A., Titlyanov, T.V., Kalita, T.L. & Tokeshi, M. 2016. Decadal changes in the algal assemblages of tropical-subtropical Yonaguni Island in the western Pacific. *Coastal Ecosystems* 3: 16-37.
当真武, 2012. 沖縄の海藻と海草 (自然環境・養殖・海藻 250 種). Mugen, 那覇, 433pp.
吉田忠生, 1998. ベにはうちわ. “新日本海藻誌”, 内田老鶴圃, 東京, 1001.

執 筆 者 名 : 岩永洋志登

4. 初版－改訂第3版・カテゴリ－対照表

初版－改訂第3版・カテゴリ－対照表は、本書のカテゴリ及び沖縄県初版からのカテゴリとの比較をおこなっています。また、参考として、環境省レッドリストのカテゴリを付記しました。

初版以降に追加あるいは削除されている種がありますが、これはその後の見直しによる情報の整理や新たな知見が得られたことによります。これらの情報の整理や新たな知見には、対象とする地域等の拡大、新種の発見、分類の変更及び沖縄県における未定着の判明等が含まれており、必ずしもカテゴリへの新掲載や削除等がその種あるいは個体群の状況の悪化及び好転を表しているものではありません。

〈カテゴリ－対照表のみかた〉

- ※1 沖縄県改訂第2版、第3版の絶滅のおそれのある地域個体群のカテゴリは地域個体群に略して示しています。
- ※2 環境省とは、「環境省レッドリスト2017の公表について（2017年3月31日報道発表資料、環境省）」を指します。なお、絶滅のおそれのある地域個体群のカテゴリは地域個体群に略して示しています。
- ※3 備考については、以下の略で示しています。
 国天・・・国指定天然記念物、特天・・・国指定特別天然記念物、県天・・・沖縄県指定天然記念物
 市/町/村天・・・市町村指定天然記念物
 国内・・・国内希少野生動植物種、特定国内・・・特定国内希少野生動植物種
 宮古・・・宮古島市自然環境保全条例における保全種（2005年）
 石垣・・・石垣市自然環境保全条例における保全種（2015年）
 竹富・・・竹富町自然環境保護条例における希少野生動植物種（2017年）
 竹富（特）・・・竹富町自然環境保護条例における特別希少野生動植物種（2017年）
 IUCN（国際自然保護連合）レッドリストについては、以下の略で示しています。
 IUCN レッドリストは基本的に種を単位としてカテゴリを評価し、すべての亜種が同じ評価となります。本県改訂では、このうち特定の亜種の現状を指して選定した種が多く含まれており留意が必要です。
 Date Assessed:2017-3 を最新の評価とする。カテゴリ基準は2001 Categories & Criteria (version 3.1) に準じる（一部種を除く）。一部、1994 Categories & Criteria (version 2.3)による Lower Risk/near threatened および Lower Risk/least concern の各カテゴリによる種は、それぞれNT、LCに置き換えて示したものを含む。
 IUCN(EX)・・・絶滅、IUCN(EW)・・・野生絶滅、IUCN(CR)・・・絶滅危惧ⅠA類、IUCN(EN)・・・絶滅危惧ⅠB類、IUCN(VU)・・・絶滅危惧Ⅱ類、IUCN(NT)・・・準絶滅危惧、IUCN(LC)・・・軽度懸念、IUCN(DD)・・・情報不足
- ※4 — は該当しないことを示します。

(1) 菌類

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
イリオモテクモタケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	
ハエヤドリトガリツバタケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ヒメハルゼミタケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
エダウチタンポタケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
アカエノツトノミタケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
サキシマヤドリバエタケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
シロアリタケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
イリオモテツバハリタケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
ウスキタンポセミタケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
イリオモテセミタケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
イリオモテトルビエラクモタケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
イリオモテコモクモタケ(イリオモテツバクモタケ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
ウスベニコップタケ	情報不足	準絶滅危惧	—	—	
アラゲウスベニコップタケ	情報不足	準絶滅危惧	—	—	
エダウチホコリタケモドキ	情報不足	絶滅危惧Ⅰ類	未決定種	情報不足	
アミガサタケ	情報不足	準絶滅危惧	—	—	
ニクアツベニサラタケ	情報不足	準絶滅危惧	—	—	
マユハキタケ	情報不足	絶滅危惧Ⅰ類	未決定種	—	

(1) 菌類 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
ヒジリタケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
キアミズキンタケ	絶滅危惧Ⅰ類	情報不足	—	絶滅危惧Ⅰ類	
アラゲカワウソタケ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ナンバンオオカワウソタケ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ヤエヤマキコブタケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ダイダイサルノコシカケ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	
オオミダレアミタケ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	
スッポンタケ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	
サンコタケ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	
モミジタケ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	未決定種	—	
コンルリキュウバンタケ	地域個体群(沖縄島)	—	—	—	
オオシロアリタケ(シロアリシメジ(新称))	地域個体群(沖縄島)	地域個体群(沖縄島)	地域個体群(沖縄島)	—	
タマゴタケ	情報不足	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
カブラテングタケ	情報不足	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
テングタケ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
コテングタケ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	
フチドリタマゴタケ	情報不足	情報不足	—	—	
チャタマゴタケ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
ヘビキノコモドキ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
シロオニタケ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	
ヌメリアシナガイグチ(アキノアシナガイグチ)	情報不足	準絶滅危惧	—	情報不足	アキノアシナガイグチ(環境省)
ナガエノウラベニイグチ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
アワタケ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
ヒメウグイスイグチ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
クロニクイロアナタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
キアブラシメジ	情報不足	—	未決定種	—	
ムニンヒメチャヒラタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
アケボノホウロクタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ナンバンウチワタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
トゲオシロイタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
キイボカサタケ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
コンイロイッポンシメジ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	
アミヒカリタケ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	
オオスルメタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
シママンネンタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
コゲイロカイガラタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
オウギタケ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	
ムニンキヤマタケ	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅	
ムジナタケ	情報不足	準絶滅危惧	—	—	
カラハツモドキ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
オガサワラハツタケ	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅	
ツチカブリ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	
ケガワタケ	情報不足	準絶滅危惧	—	—	
カエンオチバタケ	情報不足	情報不足	—	—	
ヒロヒダタケ	情報不足	準絶滅危惧	—	—	
ウスムラサキヒラタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
コガネハナガサタケ	情報不足	情報不足	—	—	
ネットアイヌメリタケ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
カワキタケ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
ヒメヒガサヒトヨタケ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
アナタケモドキ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
オガサワライタチタケ	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅	
ホオベニシロアシイグチ	情報不足	—	—	—	
サケバタケ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	

(1) 菌類 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
キアミアシイグチ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	
ウスムラサキハツ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
クロハツ	情報不足	—	未決定種	—	
ヤマブキハツ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
イロガワリベニタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
オキナクサハツ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
ニセクロハツ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	
アイタケ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
ニワタケ	情報不足	準絶滅危惧	希少種	—	
ヒメサジタケ	情報不足	情報不足	—	—	
スミレニガイグチ	情報不足	情報不足	—	—	
フクロタケ	情報不足	準絶滅危惧	未決定種	—	
ヒメアワタケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	

初版、改訂第2版掲載種のうち、改訂第3版で除外された種は表示していない。

(2) 維管束植物

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
オキナワハイネズ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	IUCN (NT)
ウバメガシ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	県天(アガ御嶽のウバメガシ及びリュウキュウマツ等の植物群落)、名護市天(許田のウバメガシ)
ウラジロガシ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
ムクノキ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	
サキシマエノキ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	宮古
ムクイヌビワ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	竹富
ニオウヤブマオ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	—	—	
ヤエヤマラセイタソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	竹富
ランダイミズ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
クニガミサンショウヅル	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	準絶滅危惧	
ヨナクニトキホコリ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内
ケイオミズ(アリサンショウソウ)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	竹富
サンショウソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
オオサンショウソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	竹富
ミヤマミズ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
ニンドウバノヤドリギ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	竹富
リュウキュウツチトリモチ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	宮古、竹富
キイレツチトリモチ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	竹富
ミズヒキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ナツノウナギツカミ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	竹富、IUCN (LC)
ホソバノウナギツカミ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	竹富
ダイトウサクラタデ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	絶滅危惧ⅠA類	国内
アラゲタデ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	国内、IUCN (LC)
オキナワマツバボタン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ヒメハマナデシコ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
カワラナデシコ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	久米島町天
ハマツメクサ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	希少種	—	竹富
オカヒジキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
インドヒモカズラ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富(特)
クロボウモドキ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	竹富(特)
ケスナヅル	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
イトスナヅル	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
マルパニックイ(コウチニックイ)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	準絶滅危惧	

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
オキナワマコウバン (オキナワコウバン)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	絶滅危惧II類	竹富
ダイトウシロダモ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	絶滅危惧IB類	
テングノハナ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	危急種	絶滅危惧IA類	石垣
リュウキュウヒキノカサ	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	危急種	絶滅危惧IA類	
ウマノアシガタ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	—	
アキカラマツ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	危急種	—	
オオツツラフジ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	
ジュンサイ	絶滅	絶滅	絶滅種	—	
ハンゲショウ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	宮古、竹富
ケナシサダソウ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	—	ナシサダソウ(第2版)
コウシュンウマノズクサ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧II類	宮古
オモロカンアオイ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	準絶滅危惧	
エウボサイシン (エウボカンアオイ)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	竹富
オナガサイシン (カツウダケカンアオイ)	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	特定国内(オナガサイシン)
モノドラカンアオイ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	特定国内、竹富、IUCN (CR)
ヒナカンアオイ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	特定国内、IUCN (CR)
センカクカンアオイ (センカクアオイ)	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	
ヤエヤマカンアオイ	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧種	絶滅危惧IB類	特定国内、竹富
サキシマヒサカキ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	竹富
クニガミヒサカキ	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	危急種	絶滅危惧IA類	IUCN (CR)
センカクオトギリ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	
ジャニンジン	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	未決定種	—	
リュウキュウベンケイ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	野生絶滅	宮古
オオクサアジサイ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧II類	竹富
オキナワヒメウツギ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	国内、南城市天(オキナワヒメウツギ群落)
ヤエヤマヒメウツギ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧IB類	国内、竹富、IUCN (EN)
トカラアジサイ	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	希少種	—	カラアジサイ(トカラアジサイ)(第2版)、竹富
キンミズヒキ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	危急種	—	
テンノウメ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧II類	宮古、石垣、竹富
リンボク	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	危急種	—	
アリサンバライチゴ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	
タイワンウラジロイチゴ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧IB類	
オキナワウラジロイチゴ (ホザキイチゴ)	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	—	
ヤエヤマネムノキ	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	危急種	絶滅危惧IB類	竹富
ガンビネムチャ (リュウキュウカラツメ)	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	危急種	絶滅危惧IB類	竹富、IUCN (LC)
ガクタヌキマメ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	危急種	絶滅危惧IA類	石垣、竹富
ヤエヤマタヌキマメ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	—	絶滅危惧IA類	石垣、竹富、IUCN (LC)
エダウチタヌキマメ (ダエンタヌキマメ)	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	未決定種	絶滅危惧IA類	IUCN (LC)
ナハキハギ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	—	今帰仁村天(仲宗根垣畑原のナハキハギ群落)、竹富
ヌスピトハギ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	危急種	—	
ノアズキ (ヒメクズ)	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	未決定種	—	
コウシュンモダマ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	準絶滅危惧	
リュウキュウミヤマトビ (タイワンミヤマトビ)	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	危急種	絶滅危惧IA類	竹富(特)
ソロハギ	絶滅	絶滅	危急種	—	竹富
ミヤコジマツルマメ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	竹富
ホソバツルマメ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	—	—	
ボウコツルマメ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧IA類	IUCN (LC)
タシロメ (タイハイヨウツバク、シロメ)	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	危急種	絶滅危惧IA類	石垣、竹富、IUCN (VU)
ハマエンドウ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	危急種	—	
ワニグチモダマ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	準絶滅危惧	竹富
ウチワツナギ	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	危急種	絶滅危惧IB類	IUCN (LC)
ヤエヤマシタン	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	国天(平久保のヤエヤマシタン)、石垣市天(野底のヤエヤマシタン自生地)
タデハギ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	危急種	絶滅危惧IA類	石垣、IUCN (LC)
ホソバフジボグサ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	危急種	絶滅危惧IA類	国内、宮古、石垣、竹富、IUCN (LC)

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
コチョウインゲン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
サクヤアカササゲ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内
エノキフジ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	絶滅危惧ⅠA類	宮古、石垣、竹富
リュウキュウダイゲキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	宮古
ボロジノニシキソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	国内
ダイトウセイシボク	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ヤマアイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
アカハダコバンノキ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
ハナコミカンボク	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
ドナンコバンノキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	—	絶滅危惧ⅠA類	
シラキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	竹富
タチバナ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	準絶滅危惧	竹富
ハナシンボウギ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	宮古、竹富
ヒレザンショウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	宮古、竹富
シマイヌザンショウ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	準絶滅危惧	
ササキカズラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧ⅠA類	国内、宮古、竹富
コウシュンカズラ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	準絶滅危惧	宮古、竹富
シンチクヒメハギ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
リュウキュウヒメハギ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	希少種	絶滅危惧ⅠA類	国内
ヌルデ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	希少種	—	
リュウキュウツルマサキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
オキナワツゲ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
タイワンアサマツゲ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
クサミズキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富(特)
ヤエヤマハマナツメ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧ⅠB類	宮古、竹富
クニガミクロウメモドキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ヒメクロウメモドキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内
ハマヤブガラシ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
ツタ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ナガバコバンモチ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
アツバウオトリギ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	国内(ヒハ'ウトリギ'(アツバ'ウトリギ'))
ラセンソウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	
ハテルマカズラ (コンペイトウツルを含む)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	宮古、竹富
センカクトロロアオイ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
コショウノキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
アキグミ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	竹富
クスドイゲ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	
アマミスミレ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	絶滅危惧ⅠA類	IUCN (GR)
ヤクシマスミレ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
シマジリスミレ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
オリヅルスミレ	野生絶滅	野生絶滅	絶滅危惧種	野生絶滅	
イシガキスミレ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣
オキナワスミレ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	IUCN (GR)
シマバラソウ (ヤンバルミゾハコベ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	—	
コウトウシュウカイドウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
イシガキカラスウリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
ヒメミソハギ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	IUCN (LC)
ミズガンピ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	宮古島市天(水納島 ⁴ 判のミズ'ガンピ')、宮古、石垣、竹富、IUCN (LC)
ミズキカシグサ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富、IUCN (LC)
マヤブシキ (ハマザクロ)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	準絶滅危惧	マヤ'ブシキ'(環境省)、竹富、IUCN (LC)
ゴバンノアシ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富、IUCN (LC)
コバノミヤマノボタン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ヒメノボタン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ヒルギモドキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧ⅠA類	宮古、竹富、IUCN (LC)

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{*1}			環境省 ^{*2}	備考 ^{*3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
テリハモモタマナ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	竹富、IUCN (VU)
ケミズキンバイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
ウスゲチョウジタデ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	準絶滅危惧	竹富
ナガハリノウグサ (ホソハリノウグサ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
ホザキノフサモ (キンギョモ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	希少種	—	ホザキノフサモ(第2版)、竹富、IUCN (LC)
ミツバウコギ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
アオキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
ヤエヤマヤマボウシ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
ムニンハマウド	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
モミジドメ (タカサゴノチドメ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	モミジドメ(第2版)、竹富
ウミノミツバ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	—	
ヒメウミノミツバ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	竹富
シマイクサ (シマイクサガミ、ランダイクサ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	準絶滅危惧	竹富
リュウキュウアセビ	野生絶滅	野生絶滅	絶滅種	絶滅危惧ⅠA類	
サキシマツツジ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	石垣、竹富
クメジマツツジ	野生絶滅	野生絶滅	—	—	
セイシカ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	石垣、竹富
ケラマツツジ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
タイワンヤマツツジ (シナヤマツツジ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	石垣、竹富
センカクツツジ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
シマソウ (シマソウ、シマソウ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
カラタチバナ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	
ヤブコウジ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
イズセンリョウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ツルマンリョウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	準絶滅危惧	
ホザキザクラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
センカクハマサジ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
タイワンハマサジ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
イソマツ (種内分類群を含む)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	宮古、竹富
コバノアカテツ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ヤワラケガキ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
コニシハイノキ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
トゲイボタ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
ヤエマヒライギ (イリオモテヒライギ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	竹富
ナタオレノキ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	竹富
ヤナギバモクセイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
リュウキュウホウライカズラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
タイワンチトセカズラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
ミヤココケリンドウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	—	絶滅危惧ⅠA類	
シマアケボノソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ヒメシロアサザ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ゴムカズラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
シマソケイ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
マメツタカズラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
キジョラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
ケナシツルモウリンカ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	宮古
スズサイコ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	準絶滅危惧	
ヨナクニカモメヅル	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	ヨナクニカモメヅル(環境省)
ヤエヤマハシカグサ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
オオソナレムグラ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	
ヒロハケニオイグサ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ニコゲルリミノキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	竹富
ヤエヤマアオキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ハシカグサ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	竹富

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
ヒジハリノキ (シナミサオノキ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
ヘツカニガキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
ナガバアサガオ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	IUCN (LC)
ハマネナシカズラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
マルバアサガオグラクサ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
アツバアサガオ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	竹富
オオバケアサガオ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
オオバハマアサガオ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	竹富
トゲミノイヌチシャ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
カキバチシャノキ	絶滅危惧ⅠB類	—	—	—	
シマナビキソウ (タイワンルリソウ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
リュウキュウチシャノキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	県天(宮島御嶽のリュウキュウチシャノキ)、同(小浜御嶽のリュウキュウチシャノキ)、竹富(特)
ナンバンルリソウ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	—	竹富
ヒルギダマシ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	宮古、竹富、IUCN (LC)
ホウライムラサキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
オキナワヤブムラサキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ホソバムラサキ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
ハマクサギ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	竹富
ルゾンハマクサギ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	竹富
ヤエヤマハマゴウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	県天(船浮のヤエヤマハマゴウ)、竹富
オオニンジンボク	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
アワゴケ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	希少種	—	
ミズハコベ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	—	竹富、IUCN (LC)
キランソウ (テリハキランソウ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	希少種	—	
ヤエヤマジュウヒトエ (ヤエヤマキランソウ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	ヤエヤマジュウヒトエ(第2版)、竹富
ヤマトウバナ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ケサヤバナ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
ヒメキセワタ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
イヌコウジュ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	希少種	—	竹富
クラルオドリコソウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	
ユキミソウ (ミゾコウジュ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	竹富
コナミキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ケナンヌゴマ (リュウキュウヌゴマ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	
ヤエヤマスズコウジュ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
アツバクコ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	
オキナワヒトリソウ (ムササビヒトリソウ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	ヒトリソウ(第2版)
イラブナスビ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	宮古島市天(イラブナスビ)
ゴマクサ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
エナシソクサ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
ヒメサギゴケ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
スズメノハコベ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	スズメノハコベ(環境省)、竹富、IUCN (LC)
カントラノオ (ハマトラノオ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ヒキヨモギ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	竹富
ツルウリクサ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	
リュウキュウスズカケ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
ミヤコジマソウ (ヒロハサギゴケ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	宮古島市天(ミヤコジマソウ)
オギノツメ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	竹富、IUCN (LC)
ナガミカズラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内、竹富
ミズビソウ (ヤエヤマイトバコ)	絶滅危惧ⅠB類	—	—	—	竹富
ツノギリソウ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	—	
タイワンシシラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
マツムラソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
ハマウツボ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
ホザキミミカキグサ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ミカワタヌキモ (イトタヌキモ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富、IUCN (LC)
イヌタヌキモ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	準絶滅危惧	IUCN (LC)
ハマジンチョウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	県天(佐敷町富祖崎海岸のハマジンチョウ群落)、竹富
台湾ツクバネウツギ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	石垣
ヒメスイカズラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
サイヨウシャジン	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	
タチミソカシ (アブノミソカシ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
マルバハタケムシロ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	
マルバミゾカクシ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	IUCN (LC)
ナガバハグマ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ワタヨモギ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	—	絶滅危惧ⅠB類	
イソノギク	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
オキナワギク	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	IUCN (VU)
ヨナグニソノギク	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
タウコギ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	IUCN (LC)
タカサゴアザミ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
ククバイズハハコ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
ネバリイズハハコ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
ダイトウワダン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内
モクビヤッコウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	モクビヤッコウ(環境省)、宮古(モクビヤッコウ)、竹富
サウヒヨドリ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ヤナギナガ (アツバニガナ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
コケセンボンギク	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
サウオグルマ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
コケタンポポ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	IUCN (VU)
アオヤギソウ (アオヤギバナ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	—	
ウリカワ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	竹富、IUCN (LC)
マルミスブタ (オオミスブタ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富、IUCN (LC)
コスブタ (ミスブタ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ヤナギスブタ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	IUCN (LC)
ウミシヨウブ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	竹富、IUCN (LC)
トゲウミヒルモ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	ヒメウミヒルモ(トゲウミヒルモ) (第2版)、IUCN (LC)
オオウミヒルモ	絶滅危惧ⅠB類	—	—	—	竹富(ウミヒルモ)、IUCN (LC)
ヒメウミヒルモ	絶滅危惧ⅠB類	—	—	—	竹富(ウミヒルモ)、IUCN (LC)
ホソウミヒルモ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	竹富(ウミヒルモ)、IUCN (LC)
トチカガミ	絶滅	絶滅	絶滅種	準絶滅危惧	IUCN (LC)
オオミズオオバコ (ミズオオバコ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	オオミズオオバコ(第2版)、IUCN (LC)
マツバウミジグサ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	準絶滅危惧	竹富、IUCN (LC)
ホソバウミジグサ	準絶滅危惧	—	—	—	
ウミジグサ (ニラウミジグサ)	準絶滅危惧	—	—	準絶滅危惧	竹富、IUCN (LC)
シオニラ (ボウバアマモ)	準絶滅危惧	—	—	準絶滅危惧	竹富、IUCN (LC)
ミズヒキモ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	竹富、IUCN (LC)
リュウノヒゲモ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種	準絶滅危惧	IUCN (LC)
イトモ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	準絶滅危惧	竹富、IUCN (LC)
カワツルモ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	準絶滅危惧	竹富、IUCN (LC)
イトクズモ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富、IUCN (LC)
コアマモ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	竹富、IUCN (LC)
イトトリゲモ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	準絶滅危惧	IUCN (LC)
イバラモ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	—	—	IUCN (LC)
トリゲモ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	宮古、竹富、IUCN (LC)
ホンゴウソウ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
イシガキソウ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	絶滅危惧ⅠA類	

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
オモトソウ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
タカクマソウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
ウエマツソウ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠI類	竹富
コショウジョウバカマ (ヒメショウジョウバカマ、シマショウジョウバカマ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠI類	コショウ ⁺ ヨウバ ⁺ カマ(ヒメショウ ⁺ ヨウバ ⁺ カマ) (第2版)、竹富
オオシロショウジョウバカマ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠI類	竹富
キバナヒメユリ (キバナスゲユリ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
ヒメヤブラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	竹富
コヤブランモドキ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	未決定種	—	
ヨナグニノシラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	—	絶滅危惧ⅠA類	
アラガトオオサンキライ (アラガトサンキライ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	絶滅危惧ⅠB類	
タイワンホトトギス	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
ルゾンヤマノイモ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
アケビドコロ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ヒナノシャクジョウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ミドリシャクジョウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅	竹富
シロシャクジョウ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	石垣、竹富
ルリシャクジョウ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	石垣、竹富
ホシザキシヤクジョウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	IUCN (CR)
タヌキアヤメ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	竹富
イグサ (イ、トウシンソウ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	—	IUCN (LC)
タチコウガイゼキショウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
コウガイゼキショウ (ヒロコウガイゼキショウ、ヒロハノコモチゼキショウ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	
スズメノヤリ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	
ツユクサ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
ホソバツユクサ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	
ザルゾコミヨウガ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	ザルゾ ⁺ コミヨウガ ⁺ (環境省)
アマノホシクサ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
オオホシクサ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ホシクサ	絶滅危惧ⅠB類	—	—	—	
オキナワホシクサ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
スイシャホシクサ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、IUCN (LC)
ヤマヌカボ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	IUCN (LC)
オオマツバシバ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧ⅠB類	
ビロードキビ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	絶滅危惧ⅠB類	
イリオモテガヤ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠI類	竹富
ビロードメヒシバ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
ヒトタバメヒシバ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	IUCN (LC)
イゼナガヤ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
アオシバ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠI類	竹富
ヤエガヤ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	竹富
アカヒゲガヤ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
ケナシハイチゴザサ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
ハイチゴザサ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
ヒメカモノハシ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、IUCN (LC)
コハナカモノハシ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
アシカキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	
ミヤマササガヤ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	
トキワススキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	竹富
チャボチヂミザサ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	—	
イネガヤ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
オオヌカキビ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	宮古
アイアシ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	竹富

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
オキナワミゾイチゴツナギ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
コモロコシガヤ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
ヒメネズミノオ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	絶滅危惧ⅠA類	
オニシバ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	
コオニシバ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	
ニッパヤシ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国天(船浦のニッパヤシ群落)、竹富(特)、IUCN(LC)
ヤエヤマヤシ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	準絶滅危惧	国天(カゴドールのヤエヤマヤシ群落、米原のヤエヤマヤシ群落)、竹富、IUCN(DD)
ヤマコンニャク	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	
オキナワテンナンショウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	特定国内、IUCN(EN)
オオハング	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	—	—	竹富
ユズノハカズラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内
サキシマハブカズラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内、竹富
ヒメハブカズラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内、石垣、竹富
ヒメツルアダン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富(特)
ヒメミクリ	絶滅	絶滅	絶滅種	絶滅危惧Ⅱ類	IUCN(LC)
シラスゲ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	未決定種	—	竹富
アリサンタマツリスゲ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
リュウキュウヒエスゲ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、IUCN(OR)
タイワンカンスゲ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	チャイロスゲ(第2版)、竹富
ホウザンスゲ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	絶滅危惧ⅠA類	
リュウキュウタチスゲ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	IUCN(LC)
アオゴウソ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種	—	IUCN(LC)
コウボウシバ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	竹富
トックリスゲ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	絶滅危惧ⅠA類	
オキナワヒメナキリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	準絶滅危惧	
サコスゲ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	
シオクグ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	竹富
チャガヤツリ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	
オオホウキガヤツリ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	—	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富、IUCN(LC)
オニクグ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	竹富
ヒメホウキガヤツリ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富、IUCN(LC)
コウシュンスゲ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣
スナハマスゲ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	竹富
カガシラ(ヒメシジユガヤ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富、IUCN(LC)
オオハリイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	竹富、IUCN(LC)
ハリイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	IUCN(LC)
ミスミイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧ⅠB類	竹富
タマハリイ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	未決定種	—	竹富、IUCN(LC)
トクサイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	竹富、IUCN(LC)
カヤツリマツバイ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、IUCN(LC)
マシカクイ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	
ヒメヒラテンツキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	IUCN(LC)
オオアゼテンツキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	IUCN(LC)
ツクシテンツキ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	IUCN(LC)
トモエバテンツキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
ハナシテンツキ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
チャイロテンツキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅	
タイワンヒデリコ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	未決定種	—	竹富
ウナズキテンツキ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	ウナズキテンツキ(環境省)、IUCN(LC)
イシガキイトテンツキ(ハリテンツキ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	絶滅	
カギテンツキ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	IUCN(LC)
クロタマガヤツリ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	—	竹富、IUCN(LC)
アンペラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	
ヒンジガヤツリ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
アンペライ (ネビキグサ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	竹富
トラノハナヒゲ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	
ミクリガヤ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	絶滅危惧ⅠB類	
イヌノハナヒゲ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	未決定種	—	IUCN (EN)
ノグサ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	—	
イヘヤヒゲクサ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
ホタルイ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	—	竹富
ヒメホタルイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	未決定種	—	
イヌフトイ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	絶滅危惧Ⅱ類	
サンカクイ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	—	竹富、IUCN (LC)
ナガボフトイ (ナンゴクフトイ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	—	竹富
ホソバシンジュガヤ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	絶滅危惧ⅠB類	竹富、IUCN (LC)
ケシンジュガヤ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	—	竹富
マネキシシンジュガヤ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	—	—	
クロミノシンジュガヤ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
イリオモテクマタケラン	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	竹富
エンレイショウキラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富(特)
台湾ンアオイラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅	
台湾ンショウキラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富(特)
オキナワチドリ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
キバナシュスラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	特定国内、石垣、竹富
オオギミラン (イナバラン)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	特定国内
コウシュンシュスラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内、竹富、IUCN (DD)
タネガシマムヨウラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧ⅠB類	石垣、竹富
ジンヤクラン	絶滅	絶滅	絶滅種	絶滅	
ナリヤラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	石垣、竹富
クスクスラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
マメヅタラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	準絶滅危惧	石垣、竹富
シコウラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	石垣、竹富
タマザキエビネ (ササバキエビネ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
カツウダケエビネ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	—	
台湾ンエビネ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富(特)
レンギョウエビネ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
オナエビネ (オキナワエビネ、リュウキュウエビネ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ツルラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
アカバシスラン (タネガシマカイロラン、リュウキュウカイロラン)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
アリサムヨウラン (アノマラン、ヨシヒラン)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
バイケイラン (チクセツラン)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
オオスズムシラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内、竹富
タカオオスズムシラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内、石垣、竹富
アキザキナギラン (オトメナギラン)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	
カンラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	
ナギラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ハウサイラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
オキナワセッコク	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	特定国内
キバナノセッコク	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	
コカゲラン	絶滅危惧ⅠA類	—	—	絶滅危惧ⅠA類	
ユウレイラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	準絶滅危惧	竹富
ジョウロウラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
カキラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	—	—	
タシロラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	竹富
オオオサラン (ホザキオサラン)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
リュウキュウセッコク	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	石垣、竹富

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
オサラ	絶滅危惧ⅠA類	情報不足	未決定種	絶滅危惧Ⅱ類	
ホソフデラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	IUCN (LC)
エダウチヤガラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
タカサゴヤガラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	IUCN (EN)
イモネヤガラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣
タカツルラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富、IUCN (LC)
カシノキラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
ツボミヤツシロラン	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	—	
コンジキヤガラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
ハルザキヤツシロラン (ヤバルヤツシロランを含む)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	ハルザキヤツシロラン (フザキヤツシロラン) (第2版)、石垣、竹富
ツツガタヤツシロラン	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
ナンゴクヤツシロラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
トサカメオトラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
ツユクサシスラン	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	竹富
ヤブミョウガラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内
ナンバンキンギンソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
カゴメラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	石垣、竹富
ヒゲナガキンギンソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	竹富
クニガミシスラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
シスラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	—	
シマシスラン (オオシスラン)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
ダイサギソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
タカサゴサギソウ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	竹富
リュウキュウサギソウ (ナメサギソウ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富(特)
テツオサギソウ (ナガバサギソウ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	国内、石垣、竹富
ニオイラン	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
オオカゲロウラン (テリハカゲロウラン)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内、石垣
ヤクシマアカシスラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
サキシマスケロクラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
ヤエヤマスケロクラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
クロムヨウラン (ムラサキムヨウラン)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	情報不足	竹富
オキナワムヨウラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	竹富
チケイラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
コクラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
ササバ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
コバナチケイラン	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
ボウラン (タカサゴボウランを含む)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	準絶滅危惧	
ナンバンカゴメラン (ナンバンカゴメ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	特定国内、竹富
カンダヒメラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ホザキヒメラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
オキナワヒメラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
フウラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	
ヤエヤマヒトツボクロ (アオイボクロ、ヤエヤマクマガイソウ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
ムカゴサイシン (ムカゴサイシンモドキを含む)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	ムカゴサイシン(第2版)
ウズラバムカゴサイシン (新種)	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
クスクスヨウラン (アリスンヨウラン)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
コカゲトンボ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
ガンゼキラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	
ヒメカクラ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内、石垣、竹富
カクチョウラン (カクラ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
クニガミトンボソウ (ソノハラトンボ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内
イリオモテトンボソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	国内、竹富
ナゴラン	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
コウトウシラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
イリオモテムヨウラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	石垣、竹富
クモラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種	—	
ヒメトケンラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
ハガクレナガミラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内、竹富
イリオモテラン(ニューメラン)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	石垣、竹富
アコウネツタイラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	石垣
ヤクシマネツタイラン	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	石垣、竹富
コウトウヒスイラン	絶滅危惧ⅠA類	情報不足	未決定種	—	
ヤクシマヒメアリドオシラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	準絶滅危惧	
ミソシラン(トミヤマフタオラン)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	国内、竹富
アオジクキヌラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	
カゲロウラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	準絶滅危惧	石垣、竹富
イシガキキヌラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
オオキヌラン(センカクキヌラン)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣
ジャコウキヌラン(ジャコウキヌラン)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	ジャコウキヌラン(第2版)
キヌラン(ホソバラン)(狭義)	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	竹富(キヌ)、IUCN(LC)
ホソバノキミズ(オオキミズ)	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅	
オトギリマオ	情報不足	情報不足	未決定種	情報不足	
コウトウウラジロマオ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
イワガネ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
タイワンヤマモガシ	情報不足	情報不足	未決定種	情報不足	
アオモジ	情報不足	情報不足	—	—	
コバノボタンヅル	情報不足	情報不足	危急種	—	
ハウライツツラフジ	情報不足	情報不足	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
ヨツバリマツモ	情報不足	情報不足	絶滅種	—	IUCN(LC)
イシモチソウ	情報不足	情報不足	危急種	準絶滅危惧	竹富、IUCN(LC)
スナジマメ	情報不足	情報不足	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
フユザンショウ	情報不足	情報不足	絶滅危惧種	—	
ホザキサルノオ(ウスバサルノオ)	情報不足	情報不足	未決定種	—	
タイワンフシノキ(タイワンヌルデ)	情報不足	情報不足	危急種	絶滅危惧ⅠA類	タイワンフシノキ(第2版)、竹富
イヌソヨゴ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ハマナツメ	情報不足	情報不足	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ノブドウ	情報不足	情報不足	危急種	—	竹富
アカミノヤブガラシ	情報不足	情報不足	危急種	—	
サンカクヅル	情報不足	情報不足	危急種	—	竹富
フウセンアカメガシワ	情報不足	情報不足	危急種	情報不足	
ミズマツバ	情報不足	情報不足	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富、IUCN(LC)
ホザキカシガサ(マルバキカシガサ)	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅危惧ⅠB類	IUCN(LC)
ミヤマハシカンボク	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅危惧Ⅱ類	
オオバチドメ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ハウライアオカズラ	情報不足	絶滅危惧ⅠA類	危急種	情報不足	
タイワンキジョラン(イリオモテキジョラン)	情報不足	情報不足	危急種	情報不足	竹富
シソノミグサ	情報不足	情報不足	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
ハリザクロ(ハリクチナシ)	情報不足	情報不足	未決定種	情報不足	
カワリバアサガオ	情報不足	情報不足	希少種	—	竹富
マルバノホロシ	情報不足	情報不足	危急種	—	
コフジツギ(ウラジロフジツギ)	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ヒメクチバシグサ	情報不足	情報不足	未決定種	情報不足	竹富、IUCN(LC)
ケウリクサ	情報不足	情報不足	未決定種	—	IUCN(LC)
オオナンバンギセル	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ヤブタバコ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ヤマヒヨドリバナ(ヤマヒヨドリ)	情報不足	情報不足	危急種	—	
オグルマ	情報不足	情報不足	危急種	—	

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
タカサゴソウ	情報不足	情報不足	希少種	絶滅危惧II類	
ヨメナ	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富
コメナモミ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
カンサイタンポポ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
コバノヒルムシロ(トゲミズヒキモ)	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅危惧II類	
オオハマオモト	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富
キリシマシャクジョウ	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅危惧II類	
アオコウガイゼキショウ	情報不足	情報不足	希少種	—	
クロホシクサ	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅危惧II類	
ヌカボ	情報不足	情報不足	危急種	—	
タイワンイヌビエ	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富
ヒメスズメガヤ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ウンヌケモドキ	情報不足	情報不足	未決定種	準絶滅危惧	竹富
コバノウシノシッペイ	情報不足	情報不足	危急種	—	竹富、IUCN(LC)
コツブチゴザサ	情報不足	情報不足	未決定種	情報不足	竹富、IUCN(LC)
ウスギキンエノコロ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
コササキビ	情報不足	絶滅危惧IB類	危急種	—	
ヒメウシノシッペイ	情報不足	情報不足	危急種	絶滅危惧IA類	竹富
ヤエヤマクワズイモ	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富、IUCN(GR)
イトハナビテンツキ	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富、IUCN(LC)
アゼナルコスゲ(アゼナルコ)	情報不足	情報不足	未決定種	—	
コウボウムギ	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富
タイワンヒエスゲ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
フサスゲ(シラホスゲ)	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ゴウソ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ビトウクグ	情報不足	情報不足	未決定種	—	IUCN(LC)
オオガヤツリ(オオハナビガヤツリ)	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富、IUCN(LC)
タイトウクグ	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富
タカオガヤツリ	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富、IUCN(LC)
セイタカハリイ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ヤリハリイ	情報不足	情報不足	未決定種	—	IUCN(LC)
シカクイ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
オキナフイヌシカクイ(リュウキュウハリイ)	情報不足	情報不足	未決定種	—	
チクシテンツキ	情報不足	情報不足	未決定種	—	竹富、IUCN(LC)
ビロードテンツキ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
オニテンツキ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ヒロハノカラン(ダルマエビネ)	情報不足	情報不足	絶滅危惧種	絶滅危惧II類	
キエビネ	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅危惧IB類	
タコガサギソウ(ヒユウガトソ、ヒメトソ)	情報不足	情報不足	危急種	絶滅危惧IA類	
ヨウラクラン	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ナンカクラン	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	—	竹富
ボウカズラ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	石垣、竹富
ヨウラクヒバ	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	危急種	絶滅危惧IB類	竹富(特)
ヒメヨウラクヒバ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	国内、竹富
オニトウゲシバ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	—	—	竹富
リュウキュウヒモラン	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IA類	竹富
ツルカタヒバ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	準絶滅危惧	
コケカタヒバ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧II類	竹富
イヌカタヒバ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	危急種	絶滅危惧II類	竹富
イワヒバ	絶滅危惧IB類	絶滅危惧IB類	危急種	—	県天(伊是名城跡のイワヒバ群落)、竹富
イヌドクサ	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	希少種	—	竹富
フユノハナワラビ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	—	—	
ミヤコジマハナワラビ	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IB類	宮古島市天(ミヤコジマワラビ)、宮古、竹富(特)
コブラン	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IA類	絶滅危惧種	絶滅危惧IB類	竹富

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県 ^{*1}			環境省 ^{*2}	備考 ^{*3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
ホウライハナワラビ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	準絶滅危惧	竹富
ゼンマイ	絶滅	絶滅	絶滅種	—	
タカサゴキジノオ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	—	竹富
リュウキュウキジノオ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	絶滅危惧ⅠB類	国内、竹富
カンザシワラビ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
フサシダ	絶滅危惧ⅠA類	—	—	—	
キクモバホラゴケ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
サキシマホラゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧ⅠA類	竹富
ナンバンホラゴケ (シャムオニホラゴケ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	竹富
ヒメホラゴケ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	竹富
マメホラゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
マツバコケシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	竹富
コケハイホラゴケ (ニセアミホラゴケ)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	竹富
ヒメチヂレコケシノブ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	
ホソバコケシノブ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
リュウキュウコケシノブ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	
マルバコケシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	
マメゴケシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
セイトカイワヒメワラビ (シマイワヒメワラビ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	—	
オオイワヒメワラビ	絶滅危惧ⅠA類	情報不足	絶滅危惧種	絶滅	
ヤンバルフモトシダ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	危急種	準絶滅危惧	
コウシュンシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ウスバイシカグマ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	—	準絶滅危惧	
ヒメホウケツダ (コバエツダヒメホウケツダ)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	
イヌイノモトソウ	絶滅危惧ⅠB類	—	—	絶滅危惧ⅠA類	竹富
アイノコホラシノブ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	希少種	—	
ワラビツナギ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	石垣
スキヤクジャク	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	準絶滅危惧	
ヒメウラジロ	絶滅	絶滅	絶滅種	絶滅危惧Ⅱ類	
イワガネソウ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	希少種	—	
シマタキミシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富(特)
ヒメシシラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
シシラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
ミミモチシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富、IUCN (LC)
アシガタシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富
マツザカシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
オオタニワタリ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
タイワンホウビシダ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	準絶滅危惧	竹富
ヒメタニワタリ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内、保護増殖事業計画
ウスバクジャク	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	—	竹富
ラハオシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
トラノオシダ	絶滅	絶滅	絶滅種	—	
マキノシダ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠB類	国内、竹富
カミガモシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	—	
イエジマチャセンシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	国内
トキワトラノオ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅種	—	
コウザキシダ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	竹富
ウスイロホウビシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内
オトメシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	国内
アオガネシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	—	
クルマシダ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	竹富
オオギミシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
オキナワアツイタ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
ツルキジノオ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富(特)

(2) 維管束植物 (続き)

和名	沖縄県※1			環境省※2	備考※3
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
コミダケシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
リュウキュウシダ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	希少種	—	IUCN (EN)
タヌキシダ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	
ムラサキベニシダ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	—	絶滅危惧ⅠA類	石垣
ウスバシダモドキ	絶滅	絶滅	絶滅種	絶滅	
コモチナナバケシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	特定国内
ナガバウスバシダ (サキウスバシダ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	危急種	絶滅危惧ⅠA類	国内、石垣
カレンコウアミシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	竹富
ヒメミゾシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	竹富
ミゾシダ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	危急種	—	
アミシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	竹富
タイワンハシゴシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富
ゲジゲジシダ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	未決定種	—	竹富
クシノハシダ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	
ミミガタシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
イダケキノホリシダ (ノギリキノホリシダ)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	準絶滅危惧	竹富
クワレシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅種	—	IUCN (LC)
ヒロハヤマコギリシダ (タサゴコギリシダ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
ハンコクシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	準絶滅危惧	竹富
ニセシロヤマシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
オキナワコクモウクジャク	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	—	準絶滅危惧	
ノコギリシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
ホコザキノコギリシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	
リュウキュウキンモウワラビ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	国内
カザリシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	石垣、竹富 (特)
イワヒトデ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	
タイワンクリハラシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	—	絶滅危惧Ⅱ類	竹富 (特)
ハカマウラボシ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	特定国内
コウラボシ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	竹富
シノキシノブ (オオクリハラシダ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅種	絶滅危惧Ⅱ類	
ミツデヘラシダ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	希少種	—	竹富
タカウラボシ (ミズカザリシダ)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧ⅠB類	竹富
クリハラシダ	絶滅	絶滅	絶滅種	—	
タイワンオネカズラ (シマオネカズラ)	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	竹富
ヒトツバマメツタ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
タイワンビロードシダ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	
ヒメウラボシ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	
シマムカデシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	危急種	—	石垣、竹富
アツイタ	情報不足	情報不足	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	
ホソバシケチシダ	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅危惧ⅠB類	国内
デンジソウ	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅危惧Ⅱ類	竹富、IUCN (LC)

初版、改訂第2版掲載種のうち、改訂第3版で除外された種は表示していない。

本県のオオアオガネシダ(初版、第2版)は、再検討の結果、アオガネシダと同定されたことから除外した。

(3) 蘚苔類

和名	沖縄県※1			環境省※2	備考※3
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
コバノイクビゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
クロコゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ジャバシラガゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
フトスジカタシロゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	—	
ヤクシマアミゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	

(3) 蘚苔類 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
フチドリコゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
マルバツガゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
タカサゴハイヒモゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	—	
イボミスジャバナゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
ランヨウイボゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	—	
ヒメハシボソゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	—	
シマフデノホゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	
マムシゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
リュウキュウカギホソエゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
ミミヒラゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	未決定種	絶滅危惧Ⅱ類	
ハネエビスゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	—	
セイナンヒラゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	—	
エビスゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
マメハネゴケ(ヒメハネゴケ)	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	未決定種	絶滅危惧Ⅰ類	マメハネゴケ(環境省)
モミノキゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
ウキゴケ(カズノゴケ)	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	
イヨウキゴケ(イヨウキカサ、イヨウモ)	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	準絶滅危惧	イヨウキゴケ(環境省)
イリオモテウロコゼニゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	未決定種	絶滅危惧Ⅰ類	
ヤエヤマスギバゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
テララゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
アマノウロコゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
トゲパウロコゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
サガリヤスデゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
キララヨウジョウゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
マルバサンカクゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	情報不足	未決定種	絶滅危惧Ⅰ類	
ゴマダラクサリゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
オガサワラキブリツノゴケ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅰ類	
シラガゴケモドキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
ニセハブタエゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
イサワゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ジャバホウオウゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
コイボホウオウゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
フガゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
キダチゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
カクレゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
キジノオゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	準絶滅危惧	
フチナシツガゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
サオヒメゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
トサノタスキゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
ヒカゲノカズラモドキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
リュウキュウイボゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	—	
カタナワゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ヤワラゼニゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
タガワヤバナゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
ミジンコゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
サケバキハネゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	サケバキハネゴケ(ムシハネゴケ)(環境省)
キヤスデゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
イリオモテヤスデゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
アマカワヒメゴヘイゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	
リュウキュウシゲリゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
オオシマヨウジョウゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ヤマトケクサリゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	
イヌイムシトリゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ツメクサリゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	

(3) 蘚苔類 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
ケミドリゼニゴケ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	絶滅危惧Ⅱ類	
ヒメハミズゴケ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	準絶滅危惧	
ヒメハゴロモゴケ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	—	準絶滅危惧	
ホウライハゴロモゴケ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	準絶滅危惧	
トサヒラゴケ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	—	準絶滅危惧	
オキナワサイハイゴケ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	準絶滅危惧	
ヘビゴケ	情報不足	情報不足	未決定種	絶滅危惧Ⅱ類	
イボイボカタシロゴケ	情報不足	絶滅危惧Ⅰ類	未決定種	絶滅危惧Ⅰ類	
トゲバイバラゴケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ミナミツガゴケ	情報不足	—	—	—	
クロジクツガゴケ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
イボエシノブゴケ	情報不足	情報不足	—	—	
タイワンケゴケ	情報不足	絶滅危惧Ⅰ類	希少種	—	
(和名無し) <i>Aerobryopsis leptosigmata</i>	情報不足	情報不足	未決定種	—	
アブラハイゴケ	情報不足	情報不足	未決定種	—	
ムカシヤバネゴケ	情報不足	情報不足	未決定種	情報不足	
トガリバクラマゴケモドキ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
オキナワヤスデゴケ	情報不足	情報不足	未決定種	情報不足	
ユーレンキララゴケ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
ヤエヤマサンカクゴケ	情報不足	情報不足	—	情報不足	

初版、改訂第2版掲載種のうち、改訂第3版で除外された種は表示していない。

(4) 藻類

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
ウムトウチュラノリ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	—	
エビヤドリモ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	—	
チョウチンミドロ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	
オオイシソウモドキ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類	
イバラオオイシソウ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
インドオオイシソウ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ミナミホソカワモズク	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ヤエヤマカワモズク	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類	
ミナミイトカワモズク	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
イリオモテカワモズク	絶滅危惧Ⅰ類	準絶滅危惧	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅰ類	
ミナミクロカワモズク	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
シマチスジノリ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類	国天(識名園のシマチスジノリ発生地 1972年)、県天(天底のシマチスジノリ 1955年)
オキチモズク	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類	
オオイシソウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	宜野湾市天(大謝名メーサー-淡水紅藻 1991年)
アオカワモズク	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	準絶滅危惧	
チャイロカワモズク	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	準絶滅危惧	
タンスイベニマダラ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
オウシャジクモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
イトシャジクモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ケナガシャジクモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
コイトシャジクモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
アメリカシャジクモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ハダシシャジクモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
チャボフラスコモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
トガリフラスコモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ミルフラスコモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ジュズフサフラスコモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	

(4) 藻類 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
チリフラスコモ	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	絶滅危惧Ⅰ類	
シヤジクモ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	絶滅危惧Ⅱ類	
クサシヤジクモ	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	情報不足	
フシナシヤジクモ	情報不足	—	—	—	
ゲンカイトシヤジクモ	情報不足	—	—	—	
セッカイシヤジクモ	情報不足	—	—	—	
チンバシヤジクモ	情報不足	—	—	—	
コフラスコモ	情報不足	—	—	—	
アマダネフラスコモ (新称)	情報不足	—	—	—	
モツレチヨウチン	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ヒロハアヤギヌ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
アヤギヌ	準絶滅危惧	—	—	準絶滅危惧	
セイヨウアヤギヌ	準絶滅危惧	—	—	準絶滅危惧	
ホソアヤギヌ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ヒメアヤギヌ	準絶滅危惧	—	—	—	
ササバアヤギヌ	準絶滅危惧	—	—	—	
タニコケモドキ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	宜野湾市天(大謝名メ-カ-淡水紅藻 1991年)
ウミフシナシミドロ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	
カマクビウミフシナシミドロ (新称)	絶滅危惧Ⅰ類	—	—	—	
クビレミドロ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅰ類	
ケイワズタ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ケブカフデモ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ホソエガサ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅰ類	
ヒメフカミドリシオグサ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
ヒナイワズタ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
キザミズタ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
イチイズタ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
テングノハウチワ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
オオハゴロモ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ウスガサネ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
オオネダシグサ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ヒメミドリゲ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
タンポヤリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
マガタマモ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ホソバロニア	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
アマミノクロキズタ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	カサタ(環境省、国天)
フササボテングサ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ソリハサボテングサ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ヒロハサボテングサ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
コバノサボテングサ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	
コテングノハウチワ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
イトゲノマユハキ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ヒナマユハキモ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
スズカケモ	準絶滅危惧	情報不足	—	情報不足	
ハネモモドキ	準絶滅危惧	情報不足	—	情報不足	
ナガミズタマ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
カタミズタマ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
カサノリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ウスバアオノリ	情報不足	—	—	—	
ヤブレグサ	情報不足	—	—	—	
ミナミシオグサ	情報不足	—	—	情報不足	
ダンツウシオグサ	情報不足	—	—	—	
クダネダシグサ	情報不足	—	—	—	
リュウキュウズタ	情報不足	情報不足	—	—	

(4) 藻類 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
ツナサボテングサ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
モロサボテングサ	情報不足	—	—	—	
ニセハウチワ	情報不足	—	—	—	
ニセヒメイチョウ	情報不足	—	—	—	
ヒメイチョウモドキ	情報不足	—	—	—	
ウスバハゴロモ	情報不足	—	—	—	
ウミボツス	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅰ類	
ウミトラノオ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	
トゲミモク	絶滅危惧Ⅱ類	—	—	—	
ヒジキ	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	—	—	
カラクサモク	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	絶滅危惧Ⅱ類	
コバモク	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ヤバネモク	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ツクシモク	準絶滅危惧	—	—	—	
マジリモク	準絶滅危惧	—	—	—	
ナガミモク	準絶滅危惧	—	—	—	
チュラシマモク	準絶滅危惧	—	—	—	
キシウモク	準絶滅危惧	—	—	—	
ヒメヤハズ	情報不足	—	—	情報不足	
リュウキュウウミウチワ	情報不足	—	—	—	
モズク	情報不足	—	—	—	自然個体は沖縄島・久米島のみ報告
カヤモノリ	情報不足	—	—	—	
ヤツマタモク	情報不足	情報不足	—	—	
ハナヤナギ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ケコナハダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	—	絶滅危惧Ⅱ類	
ベニモズク	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	—	—	
アケボノモズク	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	情報不足	
ヌルハダ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	情報不足	
トゲキリンサイ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	情報不足	
ベニゴウシ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	情報不足	
エツキアヤニシキ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	情報不足	
カラゴロモ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	—	
ヒメカラゴロモ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	情報不足	
フクレソゾ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	情報不足	
タカサゴソゾ	絶滅危惧Ⅱ類	情報不足	—	情報不足	
カモガシラノリ	準絶滅危惧	情報不足	—	—	
ジュズフサノリ	準絶滅危惧	—	—	—	
ハイコナハダ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ピリヒバ	準絶滅危惧	—	—	—	
イソモツカ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
シオカワモツカ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	
フクロフノリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	—	
フィリグサ	準絶滅危惧	情報不足	—	—	
カタメンキリンサイ	準絶滅危惧	情報不足	—	情報不足	
ビャクシンキリンサイ	準絶滅危惧	情報不足	—	情報不足	
キリンサイ	準絶滅危惧	情報不足	—	準絶滅危惧	
モサオゴノリ	準絶滅危惧	—	—	—	
リュウキュウオゴノリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
ツクシホウズキ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	—	準絶滅危惧	
コナハダモドキ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
ナンバンガラガラモドキ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
ホソパノガラガラモドキ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
エツキヒビロード	情報不足	—	—	—	
ヨナグニソウ	情報不足	—	—	—	

(4) 藻類 (続き)

和名	沖縄県 ^{※1}			環境省 ^{※2}	備考 ^{※3}
	改訂第3版 2018	改訂第2版 2006	初版 1996		
アツバノリ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
オカムラキリンサイ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
オオキリンサイ	情報不足	情報不足	—	情報不足	
トサカノリ	情報不足	—	—	準絶滅危惧	
カタオゴノリ	情報不足	—	—	—	
ナンカイオゴノリ	情報不足	—	—	情報不足	
オゴノリ	情報不足	—	—	—	
ベニハウチワ	情報不足	—	—	—	

5. 本書の作成に協力いただいた方々

本書を作成するにあたり、生育情報の収集や調査の実施、また掲載写真の収集にあたり多くの方々のご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。ご協力頂いた方々は以下に示すとおりです。

(敬称略、50音順)

◆ 生育情報の提供・調査の実施等

〈維管束植物〉

赤井 賢成	天野 正晴	和泉 章司	茨木 靖	海老原 淳
大川 智史	大宜味 浩	小原 祐二	勝山 輝男	北原 孝
木場 英久	熊井 健	黒沢 高秀	齊藤 由紀子	佐藤 文保
島袋 ときわ	島袋 徳正	新里 孝和	新城 和治	末次 健司
芹沢 俊介	高宮 正之	高山 正祐	立石 庸一	多和田 匠
傳田 哲郎	戸部 海堂	中藤 成実	中村 剛	西山 桂一
林 将之	深石 隆司	藤井 伸二	前泊 集	松島 昭司
水野 拓	宮良 祐次	山崎 仁也	渡邊 敬太	渡邊 タヅ子
渡邊 宏満	慶良間自然保護官事務所	竹富町教育委員会		

〈藻類〉

小林 真吾	菊地 則雄	島袋 寛盛	須藤 裕介	田中 厚子
寺田 竜太	西垣 孝治	西原 千尋	宮本 奈保	

◆ 掲載写真の提供 *分科会委員を含む

〈菌類〉

小松 知普	種山 裕一	寺嶋 芳江	盛口 満
-------	-------	-------	------

〈維管束植物〉

阿部 篤志	末吉 孝太郎	横田 昌嗣
-------	--------	-------

〈蘚苔類〉

山口 富美夫

〈藻類〉

岩永 洋志登	太田 格	香村 眞徳	菊地 則雄	岸本 和雄
島袋 寛盛	須藤 裕介	西垣 孝治	西原 千尋	比嘉 敦

〈このほか〉

(表紙)

エンレイショウキラン 横田 昌嗣

(とびら)

オオシロアリタケ 寺嶋 芳江

(裏表紙)

アミヒカリタケ 小松 知普

マツムラソウ 横田 昌嗣

フチドリコゴケ 山口 富美夫

エツキヒビロード 岩永 洋志登

(発刊にあたって)

沖縄島北部やんばるの溪流環境 西山 桂一

(p1, 2)

ミヤココケリンドウ 横田 昌嗣

ミヤコジマハナワラビ 横田 昌嗣

ミナミクロカワモズク 比嘉 敦

イトシャジクモ 比嘉 敦

センカクオトギリ 横田 昌嗣

テングタケ 小松 知普

(p1, 2 続き)

アラゲウスベニコップタケ 種山 裕一

タチミゾカクシ 横田 昌嗣

ヒメキセワタ 横田 昌嗣

オキナワテンナンショウ 横田 昌嗣

オキナワセッコク 末吉 孝太郎

フガゴケ 山口 富美夫

オキチモズク 比嘉 敦

ヤバネモク 岩永 洋志登

イリオモテセミタケ 盛口 満

ヒメツルアダン 横田 昌嗣

マツムラソウ 横田 昌嗣

タイワンエビネ 横田 昌嗣

イリオモテウロコゼニゴケ 山口 富美夫

チャイロカワモズク 比嘉 敦

ヒメタニワタリ 末吉 孝太郎

ダイトウワダン 横田 昌嗣

沖縄島のマングローブ 八木 洋史

(p3, 4)

河川・沢(沖縄島北部)、湿地(南大東島)、湧水(沖縄島)、地下:
(南大東島)、干潟(沖縄島)、マングローブ(西表島)、藻場(沖縄島)
サンゴ礁(沖縄島) 以上、(株)沖縄環境保全研究所
沖縄北部の山地森林、湿潤な森林の着生植物(オキナワセッコ:
沖縄島北部) 西山 桂一、八重山諸島の山地森林(西表島)、石灰
岩地の森林(石垣島) 以上、沖縄県八重山土木事務所河川都市
港湾班、沖縄島北部やんばる地域の森林 西山 桂一

6. 掲載種索引

—学名索引—

<菌類>

<i>Amanita caesareoides</i>	6,113	<i>Morchella esculenta</i> var. <i>esculenta</i>	5, 103
<i>Amanita gymnopus</i>	114	<i>Mycena auricoma</i>	129
<i>Amanita pantherina</i>	2,7,115	<i>Mycena lazulina</i>	6, 112
<i>Amanita porphyria</i>	115	<i>Oudemansiella canarii</i>	9, 129
<i>Amanita rubromarginata</i>	7,116	<i>Panus conchatus</i>	129
<i>Amanita similis</i>	7,117	<i>Parasola plicatilis</i>	9, 130
<i>Amanita spissacea</i>	7,117	<i>Phallus impudicus</i>	6, 110
<i>Amanita virgineoides</i>	7,118	<i>Phillipsia domingensis</i>	104
<i>Aureoboletus viscosus</i>	7,119	<i>Porogramma calceum</i>	131
<i>Boletus quercinus</i>	7,119	<i>Psathyrella boninense</i>	131
<i>Boletus subtomentosus</i>	7,120	<i>Pseudoaustroboletus valens</i>	9, 131
<i>Boletus viridis</i>	8,120	<i>Pseudocolus schellenbergiae</i>	6, 110
<i>Chaetoporus hypobrunneus</i>	120	<i>Pseudomerulius curtisii</i>	9, 132
<i>Cookeina sulcipes</i>	5,101	<i>Pyrofomes albomarginatus</i>	108
<i>Cookeina tricholoma</i>	2,5,102	<i>Retiboletus ornatipes</i>	9, 132
<i>Cordyceps cylindrica</i>	93	<i>Russula lilacea</i>	133
<i>Cordyceps fasciculatostromata</i>	98	<i>Russula nigricans</i>	133
<i>Cordyceps iriomotiana</i>	93	<i>Russula ochroleuca</i>	134
<i>Cordyceps pleuricapitata</i>	5,98	<i>Russula rubescens</i>	134
<i>Cordyceps polycephala</i>	94	<i>Russula senecis</i>	134
<i>Cordyceps pseudolongissima</i>	2,5,99	<i>Russula subnigricans</i>	135
<i>Cordyceps ramosistipitata</i>	95	<i>Russula virescens</i>	135
<i>Cordyceps rubiginosostipitata</i>	96	<i>Simblum periphragmoides</i>	106
<i>Cordyceps sakishimensis</i>	96	<i>Tapinella atrotomentosa</i>	9, 136
<i>Cordyceps termitophila</i>	97	<i>Termitomyces eurrhizus</i>	6, 112
<i>Cortinarius vibratilis</i>	121	<i>Thelephora palmata</i>	111
<i>Crepidotus uber</i>	121	<i>Torrubiella minuta</i>	100
<i>Daedalea aurora</i>	121	<i>Torrubiella ryukyensis</i>	100
<i>Daedaliopsis scopulosa</i>	121	<i>Trichocoma paradoxa</i>	6, 104
<i>Dendrosphaera eberhardtii</i>	5,102	<i>Trogia stereoides</i>	137
<i>Echinoporia hydnophora</i>	121	<i>Tylopilus obscureviolaceus</i>	137
<i>Entoloma murrayi</i>	8,121	<i>Volvariella volvacea</i> var. <i>volvacea</i>	137
<i>Entoloma subnitidum</i>	8,122	<i>Xerocomus parvulus</i>	9, 138
<i>Favolaschia manipularis</i>	8,123		
<i>Fomitella rhodaphaea</i>	124	<維管束植物>	
<i>Ganoderma boninense</i>	124	<i>Abelia chinensis</i> var. <i>ionandra</i>	23, 283
<i>Gloeophyllum abietinum</i>	124	<i>Abelmoschus moschatus</i> var. <i>betulifolius</i>	212
<i>Gomphidius roseus</i>	8,124	<i>Acanthephippium pictum</i>	31, 374
<i>Hygrocybe miniatostrata</i>	125	<i>Acanthephippium striatum</i>	374
<i>Inonotus cuticularis</i>	107	<i>Acanthephippium sylhetense</i>	31, 375
<i>Inonotus pachyphloeus</i>	108	<i>Acrostichum aureum</i>	494
<i>Inonotus patouillardii</i>	107	<i>Adenophora triphylla</i>	284
<i>Lacrymaria lacrymabunda</i>	125	<i>Adiantum diaphanum</i>	491
<i>Lactarius insulsus</i>	126	<i>Aeginetia sinensis</i>	450
<i>Lactarius ogasawarashimensis</i>	126	<i>Aeschynanthus acuminatus</i>	278
<i>Lactarius piperatus</i>	126	<i>Aglanomorpha coronans</i>	517
<i>Lentinus squarrosulus</i>	8,127	<i>Agrimonia pilosa</i>	175
<i>Lenzites vespacea</i>	6,109	<i>Agrostis clavata</i>	326
<i>Lignosus rhinocerotis</i>	6,105	<i>Agrostis exarata</i> subsp. <i>nukabo</i>	456
<i>Marasmius opulentus</i>	128	<i>Ainsliaea oblonga</i>	286
<i>Megacollybia clitocyboidea</i>	8,128	<i>Ajuga decumbens</i>	265
<i>Melanotus eccentricus</i>	128	<i>Ajuga taiwanensis</i>	265
		<i>Albizia retusa</i>	13, 178

<i>Alocasia atropurpurea</i>	459	<i>Blastus cochinchinensis</i>	444
<i>Alpinia flabellata</i>	30, 373	<i>Blyxa aubertii</i>	297
<i>Amitostigma lepidum</i>	375	<i>Blyxa echinosperma</i>	297
<i>Ammannia multiflora</i>	219	<i>Blyxa japonica</i>	297
<i>Amorphophallus hirtus</i> var. <i>kiusianus</i>	27, 341	<i>Boehmeria gigantea</i>	145
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> var. <i>heterophylla</i>	441	<i>Boehmeria yaeyamensis</i>	10, 145
<i>Angelica japonica</i> var. <i>boninensis</i>	228	<i>Botrychium ternatum</i>	477
<i>Aniseia martinicensis</i>	254	<i>Brachiaria villosa</i> var. <i>villosa</i>	327
<i>Anoectochilus formosanus</i>	31, 376	<i>Brasenia schreberii</i>	165
<i>Anoectochilus inabai</i>	31, 376	<i>Bredia okinawensis</i>	16, 222
<i>Anoectochilus koshunensis</i>	31, 377	<i>Buddleja curviflora</i>	448
<i>Antenoron filiforme</i>	10, 153	<i>Bulbophyllum affine</i>	379
<i>Antrophyum formosanum</i>	40, 492	<i>Bulbophyllum drymoglossum</i>	380
<i>Aphananthe aspera</i>	143	<i>Bulbophyllum macraei</i>	31, 380
<i>Aphyllorchis montana</i>	377	<i>Bulbostylis densa</i>	460
<i>Arachnis labrosa</i>	378	<i>Burmannia championii</i>	318
<i>Ardisia chinensis</i>	17, 234	<i>Burmannia coelestris</i>	318
<i>Ardisia crispa</i>	235	<i>Burmannia cryptopetala</i>	318
<i>Ardisia japonica</i>	235	<i>Burmannia itoana</i>	319
<i>Arisaema heterocephalum</i> subsp. <i>okinawense</i>	2, 28, 341	<i>Burmannia liukuensis</i>	455
<i>Aristida takeoi</i>	327	<i>Buxus liukuensis</i>	204
<i>Aristolochia tubiflora</i>	12, 167	<i>Buxus microphylla</i> subsp. <i>sinica</i>	205
<i>Artemisia gilvescens</i>	23, 287	<i>Calanthe alismaefolia</i>	468
<i>Arthropteris palisotii</i>	39, 490	<i>Calanthe densiflora</i>	380
<i>Arundina graminifolia</i>	31, 378	<i>Calanthe discolor</i> f. <i>kanashiroi</i>	381
<i>Asarum dissitum</i>	167	<i>Calanthe formosana</i>	2, 32, 382
<i>Asarum gelasinum</i>	168	<i>Calanthe lyroglossa</i>	382
<i>Asarum leptophyllum</i>	12, 168	<i>Calanthe masuca</i>	383
<i>Asarum monodoriflorum</i>	169	<i>Calanthe striata</i>	469
<i>Asarum okinawensis</i>	12, 169	<i>Calanthe triplicata</i>	383
<i>Asarum senkakuinsulare</i>	170	<i>Callicarpa formosana</i>	20, 260
<i>Asarum yaeyamensis</i>	12, 170	<i>Callicarpa oshimensis</i> var. <i>okinawensis</i>	260
<i>Asplenium antiquum</i>	496	<i>Callicarpa pilosissima</i>	20, 261
<i>Asplenium apogamum</i>	40, 496	<i>Callitriche japonica</i>	263
<i>Asplenium cardiophyllum</i>	2, 40, 497	<i>Callitriche palustris</i>	264
<i>Asplenium cheilosorum</i>	40, 497	<i>Cardamine impatiens</i>	172
<i>Asplenium excisum</i>	498	<i>Cardiandra alternifolia</i> subsp. <i>mollendorffii</i>	13, 173
<i>Asplenium incisum</i>	498	<i>Carex alopecuroides</i>	345
<i>Asplenium loriceum</i>	40, 499	<i>Carex arisanensis</i>	28, 346
<i>Asplenium oligophlebium</i> var. <i>iezimense</i>	500	<i>Carex collifera</i>	29, 346
<i>Asplenium oligophlebium</i> var. <i>oligophlebium</i>	499	<i>Carex dimorpholepis</i>	460
<i>Asplenium pekinense</i>	40, 500	<i>Carex hoozanensis</i>	29, 347
<i>Asplenium ritoense</i>	501	<i>Carex kobomugi</i>	461
<i>Asplenium subnormale</i>	501	<i>Carex longistipes</i>	347
<i>Asplenium tenerum</i>	502	<i>Carex maculata</i> var. <i>tetsuoi</i>	348
<i>Asplenium wilfordii</i>	502	<i>Carex manca</i> subsp. <i>takasagoana</i>	462
<i>Asplenium wrightii</i>	503	<i>Carex metallica</i>	462
<i>Aster asa-grayi</i>	23, 288	<i>Carex phacota</i>	348
<i>Aster miyagii</i>	288	<i>Carex pruinosa</i> subsp. <i>maximowiczii</i>	463
<i>Aster walkeri</i>	24, 289	<i>Carex pumila</i>	349
<i>Aucuba japonica</i>	227	<i>Carex rhynchaenium</i>	29, 349
<i>Avicennia marina</i>	259	<i>Carex sacrosancta</i> var. <i>tamakii</i>	350
<i>Balanophora fungosa</i>	10, 150	<i>Carex sakonis</i>	351
<i>Balanophora wrightii</i>	152	<i>Carex scabrifolia</i>	351
<i>Barringtonia asiatica</i>	16, 221	<i>Carpesium abrotanoides</i>	451
<i>Begonia fenicis</i>	218	<i>Cassytha filiformis</i> var. <i>duipraticola</i>	159
<i>Bergia serrata</i>	16, 217	<i>Cassytha pergracilis</i>	11, 160
<i>Bidens tripartita</i>	289	<i>Cayratia maritima</i>	15, 208

<i>Cayratia yoshimurai</i>	442	<i>Cyperus stolonifer</i>	354
<i>Celtis biondii</i> var. <i>insularis</i>	143	<i>Cyperus tuberosus</i>	465
<i>Centranthera chevalieri</i>	273	<i>Cyrtandra yaeyamae</i>	22, 278
<i>Cephalomanes apiifolium</i>	481	<i>Daphne kiusiana</i>	15, 212
<i>Cephalomanes atrovirens</i>	482	<i>Deeringia polysperma</i>	11, 158
<i>Cephalomanes obscurum</i> var. <i>siamense</i>	482	<i>Dendrobium okinawense</i>	2, 32, 388
<i>Ceratophyllum demersum</i> var. <i>quadrispinum</i>	437	<i>Dendrobium tosaense</i>	389
<i>Chamaechaerista garambiensis</i>	13, 179	<i>Dendrolobium umbellatum</i>	181
<i>Cheilanthes argentea</i>	492	<i>Desmodium podocarpum</i> subsp. <i>oxyphyllum</i>	182
<i>Cheirostylis liukuensis</i>	384	<i>Deutzia naseana</i> var. <i>amanoi</i>	174
<i>Cheirostylis takeoi</i>	32, 384	<i>Deutzia yaeyamensis</i>	13, 174
<i>Chikusichloa brachyanthera</i>	26, 328	<i>Dianthus kiusianus</i>	156
<i>Cinnamomum daphnoides</i>	161	<i>Dianthus superbus</i> var. <i>longicalycinus</i>	11, 156
<i>Cirsium japonicum</i> var. <i>australe</i>	290	<i>Didymoplexiella siamensis</i>	33, 389
<i>Citrus tachibana</i>	199	<i>Didymoplexis pallens</i>	33, 390
<i>Clematis pierotii</i>	436	<i>Digitaria mollicoma</i>	328
<i>Clinopodium multicaule</i>	265	<i>Digitaria pruriens</i>	329
<i>Coleus scutellarioides</i> var. <i>crispipilus</i>	20, 266	<i>Dioscorea luzonensis</i>	25, 317
<i>Colubrina asiatica</i>	15, 206	<i>Dioscorea pentaphylla</i>	25, 317
<i>Colysis elliptica</i>	517	<i>Diospyros eriantha</i>	17, 240
<i>Colysis hemionitidea</i>	518	<i>Diplacrum caricinum</i>	29, 355
<i>Commelina communis</i> var. <i>communis</i>	322	<i>Diplazium crassiusculum</i>	41, 512
<i>Commelina communis</i> var. <i>ludens</i>	323	<i>Diplazium esculentum</i>	513
<i>Coniogramme japonica</i>	39, 492	<i>Diplazium petri</i>	513
<i>Conyza aegyptiaca</i>	290	<i>Diplazium pullingeri</i>	514
<i>Conyza leucantha</i>	291	<i>Diplazium taiwanense</i>	514
<i>Cordia cumingiana</i>	19, 256	<i>Diplazium virescens</i> var. <i>okinawense</i>	515
<i>Cordia dichotoma</i>	257	<i>Diplazium wichurae</i>	515
<i>Cornopteris banajaoensis</i>	524	<i>Diplazium yaoshanense</i>	516
<i>Cornus hongkongensis</i>	227	<i>Dischidia formosana</i>	247
<i>Corymborkis veratrifolia</i>	32, 385	<i>Discocleidion ulmifolium</i>	194
<i>Crepidiastrum lanceolatum</i> var. <i>daitoense</i>	2, 24, 291	<i>Disperis siamensis</i>	33, 390
<i>Crepidomanes humilis</i>	483	<i>Drosera peltata</i> var. <i>nipponica</i>	438
<i>Crepidomanes kurzii</i>	483	<i>Drynaria fortunei</i>	42, 518
<i>Crepidomanes latemarginale</i>	484	<i>Dryopteris hasseltii</i>	41, 505
<i>Crepidomanes subclathratum</i>	484	<i>Dryopteris labordei</i>	505
<i>Crinum asiaticum</i> var. <i>asiaticum</i>	455	<i>Dryopteris purpurella</i>	506
<i>Crossostephium chinense</i>	292	<i>Dunbaria villosa</i>	183
<i>Crotalaria calycina</i>	180	<i>Ecdysanthera utilis</i>	18, 246
<i>Crotalaria montana</i>	180	<i>Echinochloa glabrescens</i>	457
<i>Crotalaria uncinella</i> subsp. <i>elliptica</i>	13, 181	<i>Ehretia dichotoma</i>	20, 258
<i>Cryptostylis arachnites</i>	385	<i>Elaeagnus umbellata</i>	213
<i>Cryptostylis taiwaniana</i>	386	<i>Elaeocarpus multiflorus</i>	209
<i>Ctenitis eatoni</i> var. <i>iriomotensis</i>	504	<i>Elaphoglossum callifolium</i>	503
<i>Cuscuta chinensis</i>	254	<i>Elaphoglossum yoshinagae</i>	524
<i>Cymbidium javanicum</i> var. <i>aspidistریفolium</i>	32, 386	<i>Elatostema lineolatum</i> var. <i>majus</i>	433
<i>Cymbidium kanran</i>	32, 387	<i>Elatostema platyphyllum</i>	10, 146
<i>Cymbidium lancifolium</i>	387	<i>Elatostema suzukii</i>	146
<i>Cymbidium sinense</i>	388	<i>Elatostema yonakuniense</i>	147
<i>Cynoglossum lanceolatum</i> var. <i>formosanum</i>	257	<i>Eleocharis attenuata</i>	465
<i>Cyperus amuricus</i>	352	<i>Eleocharis congesta</i> var. <i>congesta</i>	355
<i>Cyperus compactus</i>	463	<i>Eleocharis congesta</i> var. <i>japonica</i>	356
<i>Cyperus digitatus</i>	352	<i>Eleocharis congesta</i> var. <i>subvivipara</i>	466
<i>Cyperus imbricatus</i>	464	<i>Eleocharis fistulosa</i>	356
<i>Cyperus javanicus</i>	29, 353	<i>Eleocharis geniculata</i>	357
<i>Cyperus nutans</i> var. <i>subprolixus</i>	353	<i>Eleocharis ochrostachys</i>	357
<i>Cyperus pedunculatus</i>	354	<i>Eleocharis retroflexa</i> subsp. <i>chaetaria</i>	358
<i>Cyperus sesquiflorus</i> var. <i>subtriceps</i>	464	<i>Eleocharis tetraquetra</i>	358

<i>Eleocharis wichurai</i> var. <i>liukuensis</i>	466	<i>Gastrodia nipponica</i>	398
<i>Eleocharis wichurai</i> var. <i>wichurai</i>	466	<i>Gastrodia okinawensis</i>	399
<i>Eleutherococcus trifoliatus</i>	17, 226	<i>Gastrodia shimizuana</i>	33, 399
<i>Enhalus acoroides</i>	298	<i>Gentiana takushii</i>	1, 18, 244
<i>Entada phaseoloides</i>	183	<i>Geodorum densiflorum</i>	400
<i>Epipactis thunbergii</i>	391	<i>Glycine koidzumii</i>	185
<i>Epipogium roseum</i>	391	<i>Glycine max</i> subsp. <i>formosana</i>	186
<i>Equisetum ramosissimum</i>	38, 476	<i>Glycine tabacina</i>	13, 187
<i>Eragrostis pilosissima</i>	457	<i>Glycosmis citrifolia</i>	200
<i>Eria corneri</i>	392	<i>Gonostegia pentandra</i> var. <i>hypericifolia</i>	433
<i>Eria ovata</i>	392	<i>Goodyera foliosa</i>	401
<i>Eria reptans</i>	393	<i>Goodyera fumata</i>	34, 401
<i>Eriachne armiti</i>	26, 329	<i>Goodyera grandis</i>	402
<i>Eriocaulon amanoanum</i>	324	<i>Goodyera hachijoensis</i> var. <i>matsumurana</i>	402
<i>Eriocaulon buergerianum</i>	324	<i>Goodyera longibracteata</i>	403
<i>Eriocaulon cinereum</i>	26, 325	<i>Goodyera sonoharae</i>	404
<i>Eriocaulon miquelianum</i> var. <i>lutchuense</i>	325	<i>Goodyera velutina</i>	404
<i>Eriocaulon nigrum</i> var. <i>suishaense</i>	26, 326	<i>Goodyera viridiflora</i>	405
<i>Eriocaulon parvum</i>	456	<i>Grammitis dorsipila</i>	42, 523
<i>Erythrodes formosana</i>	33, 394	<i>Grewia biloba</i>	15, 210
<i>Euchresta formosana</i>	13, 184	<i>Gymnema sylvestre</i>	445
<i>Eulalia quadrinervis</i>	457	<i>Habenaria dentata</i>	34, 405
<i>Eulophia graminea</i>	394	<i>Habenaria formosana</i>	406
<i>Eulophia taiwanensis</i>	33, 395	<i>Habenaria longidenticulata</i>	406
<i>Eulophia zollingeri</i>	395	<i>Habenaria stenopetala</i>	34, 407
<i>Euonymus fortunei</i> var. <i>austroliukuensis</i>	204	<i>Habenaria sumatrana</i> var. <i>triangularis</i>	469
<i>Eupatorium lindleyanum</i>	292	<i>Hackelochloa granularis</i>	330
<i>Eupatorium variabile</i>	451	<i>Halodule pinifolia</i>	302
<i>Euphorbia liukuensis</i>	195	<i>Halodule tridentata</i>	303
<i>Euphorbia sparrmanni</i>	14, 195	<i>Halodule uninervis</i>	303
<i>Eurya sakishimensis</i>	171	<i>Halophila decipiens</i>	299
<i>Eurya zigzag</i>	13, 171	<i>Halophila major</i>	299
<i>Evolvulus alsinoides</i>	254	<i>Halophila minor</i>	300
<i>Excoecaria formosana</i> var. <i>daitoinsularis</i>	196	<i>Halophila okinawensis</i>	301
<i>Ficus irisana</i>	144	<i>Haloragis chinensis</i>	16, 225
<i>Fimbristylis autumnalis</i>	359	<i>Haraella retrocalla</i>	37, 407
<i>Fimbristylis bisumbellata</i>	359	<i>Hedyotis auricularia</i>	249
<i>Fimbristylis dichotoma</i> subsp. <i>podocarpa</i>	359	<i>Hedyotis strigulosa</i> var. <i>luxurians</i>	19, 250
<i>Fimbristylis dichotoma</i> var. <i>tikushiensis</i>	467	<i>Helicia formosana</i>	435
<i>Fimbristylis fimbristylis</i>	29, 360	<i>Heliotropium indicum</i>	259
<i>Fimbristylis globulosa</i>	29, 360	<i>Helminthostachys zeylanica</i>	1, 38, 477
<i>Fimbristylis leptoclada</i> var. <i>takamineana</i>	361	<i>Heloniopsis kawanoi</i>	25, 312
<i>Fimbristylis miliacea</i> subsp. <i>koidzumiana</i>	361	<i>Heloniopsis leucantha</i>	25, 312
<i>Fimbristylis nutans</i>	362	<i>Hemarthria compressa</i>	458
<i>Fimbristylis pauciflora</i>	362	<i>Hemiboea bicornuta</i>	22, 279
<i>Fimbristylis schoenoides</i>	363	<i>Hemigraphis reptans</i>	22, 277
<i>Fimbristylis sericea</i>	467	<i>Hetaeria oblongifolia</i>	34, 408
<i>Fimbristylis thomsonii</i>	468	<i>Hetaeria yakusimensis</i>	408
<i>Flemingia strobilifera</i>	185	<i>Heteropogon contortus</i>	26, 331
<i>Freycinetia williamsii</i>	2, 28, 344	<i>Hiptage benghalensis</i>	439
<i>Fuirena ciliaris</i>	363	<i>Hydiotis verticillata</i>	19, 250
<i>Galeola altissima</i>	396	<i>Hydrangea kawagoeana</i>	175
<i>Gardneria liukuensis</i>	243	<i>Hydrocharis dubia</i>	301
<i>Gardneria shimadae</i>	243	<i>Hydrocotyle batrachium</i>	229
<i>Garnotia acutigluma</i>	330	<i>Hydrocotyle nepalensis</i>	445
<i>Gastrochilus japonicus</i>	396	<i>Hygrophila salicifolia</i>	277
<i>Gastrodia clausa</i>	397	<i>Hymenophyllum denticulatum</i>	39, 484
<i>Gastrodia javanica</i>	398	<i>Hymenophyllum polyanthos</i>	485

<i>Hymenophyllum riukiense</i>	485	<i>Lobelia alsinoides</i>	2, 23, 285
<i>Hypericum senkakuinsulare</i>	1, 172	<i>Lobelia loochooensis</i>	23, 285
<i>Hypodematium fordii</i>	516	<i>Lobelia zeylanica</i>	23, 286
<i>Hypolepis alpina</i>	487	<i>Lomariopsis spectabilis</i>	41, 504
<i>Hypolepis tenuifolia</i>	487	<i>Lonicera japonica</i> var. <i>miyagusukiana</i>	23, 284
<i>Ilex kusanoi</i>	440	<i>Ludwigia adscendens</i>	224
<i>Illigera luzonensis</i>	12, 162	<i>Ludwigia epilobioides</i> subsp. <i>greatrextii</i>	225
<i>Intsia bijuga</i>	14, 188	<i>Luisia teres</i>	413
<i>Inula britannica</i> subsp. <i>japonica</i>	452	<i>Lumnitzera racemosa</i>	16, 223
<i>Ipomoea polymorpha</i>	447	<i>Luzula capitata</i>	322
<i>Ipomoea stolonifera</i>	19, 255	<i>Lycium sandwicense</i>	21, 271
<i>Isachne globosa</i> var. <i>brevispicula</i>	458	<i>Lycopodium hamiltonii</i>	470
<i>Isachne lutchuensis</i>	331	<i>Lycopodium laxum</i>	38, 471
<i>Isachne nipponensis</i>	332	<i>Lycopodium phlegmaria</i>	471
<i>Ischaemum indicum</i>	27, 332	<i>Lycopodium salvinoides</i>	38, 472
<i>Ischaemum setaceum</i>	332	<i>Lycopodium serratum</i> var. <i>longipetiolatum</i>	472
<i>Ixeris chinensis</i> subsp. <i>strigosa</i>	452	<i>Lycopodium sieboldii</i> var. <i>christensenianum</i>	473
<i>Ixeris laevigata</i>	293	<i>Lysionotus apicidens</i>	22, 279
<i>Juncus effusus</i> var. <i>decipiens</i>	320	<i>Machaerina rubiginosa</i>	365
<i>Juncus krameri</i>	321	<i>Macodes petola</i>	35, 414
<i>Juncus leschenaultii</i>	321	<i>Maesa japonica</i>	236
<i>Juncus papillosus</i>	456	<i>Malaxis kandae</i>	35, 414
<i>Juniperus taxifolia</i> var. <i>lutchuensis</i>	141	<i>Malaxis latifolia</i>	415
<i>Kalanchoe integra</i>	173	<i>Malaxis purpurea</i>	415
<i>Kalimeris yomena</i>	453	<i>Maoutia setosa</i>	434
<i>Kleinhovia hospita</i>	443	<i>Margaritaria indica</i>	14, 197
<i>Knoxia corymbosa</i>	446	<i>Marsdenia formosana</i>	446
<i>Lagenophora lanata</i>	24, 294	<i>Marsdenia tomentosa</i>	247
<i>Lamium chinense</i> var. <i>tuberiferum</i>	2, 21, 266	<i>Marsilea quadrifolia</i>	525
<i>Lasianthus bunzanensis</i>	19, 251	<i>Mazus goodenifolius</i>	22, 274
<i>Lathyrus japonicus</i>	14, 189	<i>Mercurialis leiocarpa</i>	196
<i>Lecanorchis flavicans</i> var. <i>flavicans</i>	34, 409	<i>Microcarpaea minima</i>	274
<i>Lecanorchis japonica</i> var. <i>tubiformis</i>	409	<i>Microlepia hookeriana</i>	488
<i>Lecanorchis nigricans</i>	410	<i>Microlepia obtusiloba</i>	488
<i>Lecanorchis triloba</i>	411	<i>Microlepia substrigosa</i>	489
<i>Leersia japonica</i>	333	<i>Microsorium fortunei</i>	519
<i>Lepironia articulata</i>	364	<i>Microsorium pteropus</i>	42, 520
<i>Lepisorus uchiyamae</i>	519	<i>Microsorium rubidum</i>	520
<i>Lepistemon binectariferum</i> var. <i>trichocarpum</i>	255	<i>Microstegium nudum</i>	333
<i>Ligustrum tamakii</i>	18, 241	<i>Miscanthus floridulus</i>	334
<i>Lilium callosum</i> var. <i>flaviflorum</i>	25, 313	<i>Morinda citrifolia</i>	251
<i>Limnophila fragrans</i>	21, 273	<i>Mosla punctulata</i>	267
<i>Limonium senkakuense</i>	237	<i>Mucuna gigantea</i>	189
<i>Limonium sinense</i>	238	<i>Myoporum bontiooides</i>	22, 282
<i>Limonium wrightii</i>	238	<i>Myriophyllum spicatum</i>	226
<i>Lindera communis</i> var. <i>okinawensis</i>	11, 161	<i>Myrsine stolonifera</i>	236
<i>Lindernia tenuifolia</i>	449	<i>Najas japonica</i>	24, 307
<i>Lindernia viscosa</i>	449	<i>Najas marina</i>	308
<i>Lindsaea cambodgensis</i>	39, 489	<i>Najas minor</i>	309
<i>Lindsaea ensifolia</i>	489	<i>Neanotis hirsuta</i>	252
<i>Liparis bootanensis</i>	34, 411	<i>Neocheiropteris ensata</i>	521
<i>Liparis nervosa</i>	412	<i>Neofinetia falcata</i>	35, 416
<i>Liparis paradoxa</i>	35, 412	<i>Neolitsea sericea</i> var. <i>argentea</i>	12, 162
<i>Liparis</i> sp. aff. <i>elegans</i>	37, 413	<i>Nervilia aragoana</i>	416
<i>Lipocarpha microcephala</i>	30, 365	<i>Nervilia nipponica</i>	417
<i>Liriope minor</i>	314	<i>Nervilia</i> sp.	35, 418
<i>Liriope muscari</i> var. <i>stolonifera</i>	314	<i>Nothapodytes foetida</i>	206
<i>Litsea cubeba</i>	436	<i>Nymphoides coreana</i>	18, 245

<i>Nypa fruticans</i>	27, 339	<i>Potamogeton pectinatus</i>	305
<i>Oberonia arisanensis</i>	418	<i>Potamogeton pusillus</i>	305
<i>Oberonia japonica</i>	470	<i>Pothos chinensis</i>	28, 343
<i>Ochrosia oppositifolia</i>	19, 246	<i>Premna microphylla</i>	261
<i>Ophioglossum pendulum</i>	478	<i>Premna nauseosa</i>	20, 262
<i>Ophiopogon reversus</i>	315	<i>Prosaptia kanashiroi</i>	42, 523
<i>Oplismenus undulatifolius</i> var. <i>microphyllus</i>	334	<i>Prunus spinulosa</i>	176
<i>Oreocnide frutescens</i>	434	<i>Pseudolysimachion sieboldianum</i>	275
<i>Orobanche coerulescens</i>	22, 281	<i>Pteris grevilleana</i>	495
<i>Oryzopsis obtusa</i>	27, 335	<i>Pteris nipponica</i>	495
<i>Osbeckia chinensis</i>	222	<i>Pterocarpus indicus</i> f. <i>echinatus</i>	191
<i>Osmanthus heterophyllus</i> var. <i>iriomotensis</i>	18, 241	<i>Pyrrosia adnascens</i>	522
<i>Osmanthus insularis</i>	242	<i>Pyrrosia linearifolia</i> var. <i>heterolepis</i>	42, 522
<i>Osmanthus okinawensis</i>	242	<i>Quercus phillyraeoides</i>	141
<i>Osmunda japonica</i>	479	<i>Quercus salicina</i>	10, 142
<i>Osteomeles anthyllidifolia</i>	176	<i>Randia sinensis</i>	19, 252
<i>Ottelia alismoides</i>	24, 302	<i>Randia spinosa</i>	447
<i>Oxygyne shinzatoi</i>	26, 319	<i>Ranunculus extorris</i> var. <i>lutchuensis</i>	12, 163
<i>Paliurus ramosissimus</i>	441	<i>Ranunculus japonicus</i>	164
<i>Panicum paludosum</i>	335	<i>Rhamnus calcicola</i>	207
<i>Paraphlomis javanica</i>	268	<i>Rhamnus kanagusukii</i>	15, 207
<i>Parthenocissus tricuspidata</i>	209	<i>Rhaphidophora kortharthii</i>	28, 343
<i>Pellionia keitaoensis</i>	148	<i>Rhaphidophora liukiensis</i>	28, 344
<i>Pellionia minima</i>	148	<i>Rhododendron amanoi</i> var. <i>amanoi</i>	231
<i>Pellionia radicans</i>	10, 149	<i>Rhododendron amanoi</i> var. <i>glandulistylum</i>	232
<i>Pemphis acidula</i>	219	<i>Rhododendron latoucheae</i>	17, 232
<i>Peperomia japonica</i> f. <i>okinawensis</i>	166	<i>Rhododendron scabrum</i>	233
<i>Pericampylus formosanus</i>	437	<i>Rhododendron simsii</i> var. <i>simsii</i>	17, 233
<i>Peristylus elegans</i>	35, 419	<i>Rhododendron simsii</i> var. <i>tawadae</i>	234
<i>Persicaria dichotoma</i>	153	<i>Rhus javanica</i> var. <i>javanica</i>	440
<i>Persicaria hastato-auriculata</i>	154	<i>Rhus javanica</i> var. <i>roxburghii</i>	203
<i>Persicaria japonica</i> var. <i>taitoinsularis</i>	10, 154	<i>Rhynchospora brownii</i>	366
<i>Persicaria tomentosa</i>	11, 155	<i>Rhynchospora malasica</i>	366
<i>Phacelurus latifolius</i>	336	<i>Rhynchospora rugosa</i>	367
<i>Phaius flavus</i>	36, 419	<i>Rotala leptopetala</i> var. <i>littorea</i>	220
<i>Phaius mishmensis</i>	36, 420	<i>Rotala pusilla</i>	443
<i>Phaius tankervilliae</i>	420	<i>Rotala rotundifolia</i>	444
<i>Philydrum lanuginosum</i>	26, 320	<i>Rubus rosaefolius</i> var. <i>formosanus</i>	177
<i>Phyllanthus leptoclados</i>	197	<i>Rubus swinhoei</i>	177
<i>Phyllanthus oligospermus</i> subsp. <i>donanensis</i>	198	<i>Rubus utchinensis</i>	178
<i>Phyllodium pulchellum</i>	190	<i>Ruppia maritima</i>	24, 306
<i>Pieris koidzumiana</i>	231	<i>Ryssopterys timoriensis</i>	14, 201
<i>Pilea petiolaris</i>	149	<i>Sagina maxima</i>	157
<i>Pinellia tripartita</i>	28, 342	<i>Sagittaria pygmaea</i>	296
<i>Plagiogyria adnata</i>	479	<i>Salsola komarovii</i>	157
<i>Plagiogyria koidzumii</i>	39, 480	<i>Salvia plebeia</i>	268
<i>Planchonella obovata</i> var. <i>dubia</i>	239	<i>Sanicula chinensis</i>	229
<i>Platanthera sonoharai</i>	36, 421	<i>Sanicula lamelligera</i>	230
<i>Platanthera stenoglossa</i> subsp. <i>iriomotensis</i>	36, 422	<i>Sapium japonicum</i>	198
<i>Poa acroleuca</i> var. <i>ryukyuenis</i>	336	<i>Satakentia liukiensis</i>	27, 340
<i>Pollia secundiflora</i>	26, 323	<i>Saururus chinensis</i>	166
<i>Polyalthia liukiensis</i>	11, 158	<i>Sceptridium formosanum</i>	38, 478
<i>Polygala chinensis</i>	202	<i>Schizaea dichotoma</i>	39, 480
<i>Polygala longifolia</i>	15, 203	<i>Schizaea digitata</i>	42, 481
<i>Polypodium formosanum</i>	521	<i>Schoenus apogon</i>	30, 367
<i>Portulaca okinawensis</i> var. <i>okinawensis</i>	11, 155	<i>Schoenus calostachyus</i>	30, 368
<i>Potamogeton cristatus</i>	454	<i>Sciaphila japonica</i>	309
<i>Potamogeton octandrus</i> var. <i>miduhikimo</i>	304	<i>Sciaphila multiflora</i>	24, 310

<i>Sciaphila sugimotoi</i>	25, 310	<i>Terminalia nitens</i>	224
<i>Sciaphila takakumensis</i>	311	<i>Thalictrum mimus</i> var. <i>hypoleucum</i>	164
<i>Sciaphila tosaensis</i>	311	<i>Thaumasochloa cochinchinensis</i>	459
<i>Scirpus juncooides</i> var. <i>hotarui</i>	368	<i>Thelypteris castanea</i>	41, 510
<i>Scirpus lineolatus</i>	369	<i>Thelypteris decursive-pinnata</i>	511
<i>Scirpus litoralis</i>	370	<i>Thelypteris jaculosa</i>	511
<i>Scirpus triqueter</i>	370	<i>Thelypteris subaurita</i>	512
<i>Scirpus validus</i>	371	<i>Thrixspermum fantasticum</i>	425
<i>Scleria biflora</i>	30, 371	<i>Titanotrichum oldhami</i>	2, 22, 280
<i>Scleria rugosa</i> var. <i>glabrescens</i>	30, 372	<i>Torenia concolor</i> var. <i>formosana</i>	276
<i>Scleria rugosa</i> var. <i>rugosa</i>	372	<i>Trichoglottis ionosma</i>	36, 426
<i>Scleria sumatrensis</i>	30, 373	<i>Trichomanes bimarginatum</i>	486
<i>Scurrula longicerifolius</i>	10, 150	<i>Trichomanes motleyi</i>	486
<i>Scutellaria guilielmi</i>	21, 269	<i>Trichosanthes ishigakiensis</i>	16, 218
<i>Sedirea japonica</i>	36, 422	<i>Tricyrtis formosana</i>	25, 316
<i>Selaginella biformis</i>	38, 473	<i>Tristellateia australasiae</i>	14, 202
<i>Selaginella leptophylla</i>	474	<i>Triumfetta japonica</i>	210
<i>Selaginella moellendorffii</i>	475	<i>Triumfetta procumbens</i>	15, 211
<i>Selaginella tamariscina</i>	475	<i>Tropidia calcarata</i>	36, 426
<i>Senecio pierotii</i>	294	<i>Tropidia nipponica</i>	427
<i>Setaria cinerea</i>	458	<i>Tylophora tanakae</i> var. <i>glabrescens</i>	248
<i>Setaria plicata</i>	459	<i>Uraria picta</i>	14, 192
<i>Shortia rotundifolia</i>	17, 230	<i>Utricularia caerulea</i>	281
<i>Siegesbeckia orientalis</i> subsp. <i>glabrescens</i>	453	<i>Utricularia exoleta</i>	281
<i>Sinoadina racemosa</i>	253	<i>Utricularia tenuicaulis</i>	282
<i>Sinomenium acutum</i>	165	<i>Vanda lamellata</i>	427
<i>Siphonostegia chinensis</i>	275	<i>Veronicastrum liukiense</i>	276
<i>Smilax bracteata</i> var. <i>verruculosa</i>	25, 315	<i>Vexillabium yakushimense</i>	428
<i>Solanum kayamae</i>	21, 271	<i>Vigna adenantha</i>	193
<i>Solanum maximowiczii</i>	448	<i>Vigna vexillata</i>	193
<i>Solanum miyakojimense</i>	21, 272	<i>Vincetoxicum pycnostelma</i>	248
<i>Solenogyne mikadoi</i>	24, 295	<i>Vincetoxicum yonakumiense</i>	19, 249
<i>Solidago yokusaiana</i>	296	<i>Viola amamiana</i>	214
<i>Sonneratia alba</i>	220	<i>Viola iwagawai</i>	214
<i>Sorghum nitidum</i>	27, 337	<i>Viola okinawensis</i>	16, 215
<i>Sparganium stenophyllum</i>	345	<i>Viola stoloniflora</i>	216
<i>Spathoglottis plicata</i>	423	<i>Viola tashiroi</i> var. <i>tairae</i>	216
<i>Sphenomeris intermedia</i>	490	<i>Viola utchinensis</i>	217
<i>Sporobolus hancei</i>	338	<i>Vitex bicolor</i>	20, 262
<i>Stachys riederi</i> var. <i>japonica</i>	21, 269	<i>Vitex quinata</i>	20, 263
<i>Stegnogramma gymnocarpa</i> subsp. <i>amabilis</i>	509	<i>Vitis flexuosa</i>	442
<i>Stegnogramma pozoi</i> subsp. <i>mollissima</i>	41, 509	<i>Vittaria anguste-elongata</i>	40, 493
<i>Stegnogramma wilfordii</i>	510	<i>Vittaria flexuosa</i>	493
<i>Stereosandra javanica</i>	423	<i>Vrydagzynea nuda</i>	37, 429
<i>Stictocardia tiliifolia</i>	256	<i>Woodwardia harlandii</i>	40, 503
<i>Stimpsonia chamaedrioides</i>	17, 237	<i>Xylosma congestum</i>	213
<i>Suzukia luchuensis</i>	21, 270	<i>Zannichellia palustris</i>	306
<i>Swertia makinoana</i>	18, 244	<i>Zanthoxylum armatum</i> var. <i>subtrifoliolatum</i>	439
<i>Symplocos cochinchinensis</i> subsp. <i>laurina</i>	18, 240	<i>Zanthoxylum beecheyanum</i>	200
<i>Syringodium isoetifolium</i>	304	<i>Zanthoxylum schinifolium</i> var. <i>okinawense</i>	201
<i>Tadehagi triquetrum</i>	192	<i>Zeuxine affinis</i>	429
<i>Taeniophyllum aphyllum</i>	424	<i>Zeuxine agyokuana</i>	430
<i>Tainia laxiflora</i>	424	<i>Zeuxine flava</i>	430
<i>Taraxacum japonicum</i>	454	<i>Zeuxine nervosa</i>	37, 431
<i>Tectaria dissecta</i>	506	<i>Zeuxine odorata</i>	37, 432
<i>Tectaria fauriei</i>	507	<i>Zeuxine strateumatica</i> var. <i>strateumatica</i>	37, 432
<i>Tectaria kusukusensis</i>	41, 507	<i>Zornia cantoniensis</i>	438
<i>Tectaria simonsii</i>	41, 508	<i>Zostera japonica</i>	307

- | | | | |
|---|------------|---|---------|
| <i>Zoysia macrostachya</i> | 338 | <i>Meteoriopsis reclinata</i> var. <i>subreclinata</i> | 531 |
| <i>Zoysia sinica</i> var. <i>sinica</i> | 339 | <i>Monosolenium tenerum</i> | 45, 551 |
| 〈蘚苔類〉 | | | |
| <i>Acroporium secundum</i> | 533 | <i>Neckeropsis calcicola</i> | 536 |
| <i>Aerobryidium laosense</i> | 549 | <i>Neckeropsis cyclophylla</i> | 536 |
| <i>Aerobryopsis leptosigmata</i> | 564 | <i>Neckeropsis obtusata</i> | 44, 559 |
| <i>Aerobryopsis parisii</i> | 44, 550 | <i>Neolepidozia mamillata</i> | 45, 539 |
| <i>Aneura hirsuta</i> | 557 | <i>Oedicladium fragile</i> | 44, 551 |
| <i>Archilejeunea amakawana</i> | 554 | <i>Pachyneuroopsis miyagii</i> | 530 |
| <i>Asterella wallichiana</i> | 45, 560 | <i>Pinnatella ambigua</i> | 537 |
| <i>Callicostella papillata</i> | 44, 549 | <i>Plagiochila fordiana</i> | 553 |
| <i>Calymperes crassinerve</i> | 529 | <i>Pogonatum camusii</i> | 44, 558 |
| <i>Calymperes strictifolium</i> | 561 | <i>Porella acutifolia</i> var. <i>acutifolia</i> | 565 |
| <i>Calypothecium recurvulum</i> | 535 | <i>Radulina borbonica</i> | 534 |
| <i>Calypstrochaeta parviretis</i> | 562 | <i>Riccia fluitans</i> | 538 |
| <i>Campylopodium medium</i> | 561 | <i>Ricciocarpos natans</i> | 538 |
| <i>Cephaloziella crispata</i> | 565 | <i>Stenolejeunea apiculata</i> | 557 |
| <i>Chaetomitrium papillifolium</i> | 564 | <i>Stictolejeunea iwatsukii</i> | 543 |
| <i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i> | 555 | <i>Syrrhopodon tosaensis</i> | 545 |
| <i>Circulifolium exiguum</i> | 44, 558 | <i>Syrrhopodon yakushimensis</i> | 530 |
| <i>Circulifolium microdendron</i> | 44, 559 | <i>Taiwanobryum anacamptolepis</i> | 537 |
| <i>Clastobryum cuculligerum</i> | 532 | <i>Taxithelium kerianum</i> | 532 |
| <i>Cololejeunea ceratilobula</i> | 542 | <i>Taxithelium lindbergii</i> | 533 |
| <i>Cololejeunea inflata</i> | 555 | <i>Taxithelium liukuense</i> | 550 |
| <i>Cololejeunea schmidtii</i> | 556 | <i>Telaranea neesii</i> | 45, 540 |
| <i>Cololejeunea yulensis</i> | 566 | <i>Thuidium plumulosum</i> | 563 |
| <i>Colura inuii</i> | 45, 556 | <i>Zoopsis liukuensis</i> | 45, 552 |
| <i>Cyathophorum adiantum</i> | 548 | 〈藻類〉 | |
| <i>Cylindrocolea tagawae</i> | 552 | <i>Acetabularia caliculus</i> | 48, 607 |
| <i>Dendroceros tubercularis</i> | 45, 543 | <i>Acetabularia ryukyuensis</i> | 50, 624 |
| <i>Diphyscium perminutum</i> | 528 | <i>Acrocystis nana</i> | 53, 660 |
| <i>Distichophyllum montaganum</i> | 562 | <i>Akalaphycus liagoroides</i> | 660 |
| <i>Distichophyllum nigricaulis</i> | 562 | <i>Akalaphycus setchelliae</i> | 661 |
| <i>Distichophyllum obtusifolium</i> | 531 | <i>Avrainvillea erecta</i> | 49, 620 |
| <i>Distichophyllum osterwaldii</i> | 44, 548 | <i>Avrainvillea riukuensis</i> | 612 |
| <i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> | 542 | <i>Batrachospermum helminthosum</i> | 46, 582 |
| <i>Drepanolejeunea spicata</i> | 567 | <i>Batrachospermum periplocum</i> | 574 |
| <i>Exostratum blumii</i> | 544 | <i>Batrachospermum tortuosum</i> var. <i>majus</i> | 46, 575 |
| <i>Fissidens javanicus</i> | 545 | <i>Betaphycus gelatinus</i> | 53, 656 |
| <i>Fissidens schwabei</i> | 546 | <i>Boergesenia forbesii</i> | 49, 615 |
| <i>Fossombronia myrioides</i> | 2, 45, 539 | <i>Boodleopsis pusilla</i> | 47, 598 |
| <i>Frullania gaudichaudii</i> | 45, 553 | <i>Bornetella nitida</i> | 623 |
| <i>Frullania iriomotensis</i> | 554 | <i>Bornetella oligospora</i> | 623 |
| <i>Frullania okinawensis</i> | 566 | <i>Bostrychia simpliciuscula</i> | 48, 602 |
| <i>Frullania trichodes</i> | 541 | <i>Caloglossa adhaerens</i> | 48, 598 |
| <i>Garovaglia elegans</i> | 44, 547 | <i>Caloglossa continua</i> | 48, 599 |
| <i>Gymnostomiella longinervis</i> | 2, 44, 546 | <i>Caloglossa leprieurii</i> | 48, 599 |
| <i>Helicodontium formosicum</i> | 563 | <i>Caloglossa ogasawaraensis</i> | 48, 600 |
| <i>Heteroscyphus aselliformis</i> | 540 | <i>Caloglossa postiae</i> | 601 |
| <i>Heteroscyphus wettsteinii</i> | 541 | <i>Caloglossa vieillardii</i> | 601 |
| <i>Himantocladium plumula</i> | 535 | <i>Catenella caespitosa</i> | 52, 654 |
| <i>Hypnodendron vitiense</i> | 547 | <i>Catenella impudica</i> | 53, 655 |
| <i>Leucobryum javense</i> | 529 | <i>Caulerpa brachypus</i> f. <i>parvifolia</i> | 609 |
| <i>Leucophanes angustifolium</i> | 544 | <i>Caulerpa fastigiata</i> | 48, 606 |
| <i>Luisierella barbula</i> | 528 | <i>Caulerpa scalpelliformis</i> var. <i>denticulata</i> | 617 |
| <i>Meiothecium microcarpum</i> | 534 | <i>Caulerpa</i> sp. | 50, 627 |
| | | <i>Caulerpa subserrata</i> | 49, 610 |

<i>Caulerpa taxifolia</i>	49, 611	<i>Meristotheca papulosa</i>	664
<i>Chara braunii</i>	47, 594	<i>Nemacystus decipiens</i>	52, 641
<i>Chara corallina</i>	47, 585	<i>Nemalionopsis tortuosa</i>	2, 46, 580
<i>Chara corallina</i> var. <i>kyusyensis</i>	595	<i>Neomartensia flabelliformis</i>	648
<i>Chara fibrosa</i>	1, 47, 586	<i>Nereia intricata</i>	50, 630
<i>Chara fibrosa</i> subsp. <i>benthamii</i>	587	<i>Nitella acuminata</i> var. <i>capitulifera</i>	590
<i>Chara fibrosa</i> subsp. <i>flaccida</i>	588	<i>Nitella acuminata</i> var. <i>subglomerata</i>	47, 591
<i>Chara fibrosa</i> var. <i>microstephana</i>	596	<i>Nitella axilliformis</i>	591
<i>Chara sejuncta</i>	47, 588	<i>Nitella comptonii</i>	592
<i>Chara vulgaris</i> subsp. <i>eu-vulgaris</i>	596	<i>Nitella confervacea</i>	597
<i>Chara vulgaris</i> subsp. <i>squamosa</i>	596	<i>Nitella dictyosperma</i>	597
<i>Chara vulgaris</i> var. <i>vulgaris</i>	47, 594	<i>Nitella microcarpa</i>	47, 593
<i>Chara zeylanica</i>	589	<i>Padina ryukyuana</i>	641
<i>Chlorodesmis caespitosa</i>	50, 620	<i>Palisada robusta</i>	651
<i>Chlorodesmis haterumana</i>	50, 621	<i>Pseudobryopsis hainanensis</i>	622
<i>Chondria armata</i>	643	<i>Pseudocladophora horii</i>	49, 608
<i>Cladogonium ogishimae</i>	569	<i>Pseudodichotomosiphon constrictus</i>	48, 604
<i>Cladophora dotyana</i>	626	<i>Rhipilia orientalis</i>	50, 628
<i>Cladophora enomotoi</i>	626	<i>Rhipiliopsis echinocaulos</i>	629
<i>Cladophoropsis fasciculata</i>	614	<i>Rhipiliopsis yaeyamensis</i>	629
<i>Compsopogon aeruginosus</i>	572	<i>Rhizoclonium grande</i>	614
<i>Compsopogon caeruleus</i>	46, 581	<i>Sarcodia ceylanica</i>	663
<i>Compsopogon hookeri</i>	46, 573	<i>Sargassum assimile</i>	637
<i>Compsopogonopsis japonica</i>	46, 571	<i>Sargassum carpophyllum</i>	51, 638
<i>Corallina pilulifera</i>	52, 654	<i>Sargassum denticarpum</i>	51, 632
<i>Cymopolia vanbosseae</i>	49, 613	<i>Sargassum fusiforme</i>	51, 633
<i>Dasycladus vermicularis</i>	48, 606	<i>Sargassum longifructum</i>	51, 638
<i>Dermonema pulvinatum</i>	52, 652	<i>Sargassum patens</i>	643
<i>Dichotomosiphon tuberosus</i>	46, 570	<i>Sargassum pinnatifidum</i>	51, 634
<i>Dictyopteris repens</i>	52, 640	<i>Sargassum polycystum</i>	51, 635
<i>Eucheuma arnoldii</i>	657	<i>Sargassum ryukyuense</i>	51, 639
<i>Eucheuma denticulatum</i>	53, 658	<i>Sargassum siliquosum</i>	51, 640
<i>Eucheuma okamurae</i>	664	<i>Sargassum thunbergii</i>	51, 631
<i>Eucheuma serra</i>	647	<i>Scinaia moniliformis</i>	52, 652
<i>Ganonema farinosum</i>	644	<i>Scytosiphon lomentaria</i>	642
<i>Gibsmithia hawaiiensis</i>	53, 662	<i>Sheathia arcuata</i>	2, 47, 583
<i>Gloiopeltis furcata</i>	53, 655	<i>Siphonocladus tropicus</i>	50, 627
<i>Gracilaria coronopifolia</i>	53, 658	<i>Stenopeltis gracilis</i>	662
<i>Gracilaria edulis</i>	665	<i>Struvea okamurae</i>	49, 615
<i>Gracilaria eucheumatoides</i>	53, 659	<i>Thorea gaudichaudii</i>	46, 579
<i>Gracilaria firma</i>	666	<i>Trichogloea requienii</i>	52, 646
<i>Gracilaria vermiculophylla</i>	53, 666	<i>Trichogloeopsis mucosissima</i>	646
<i>Halimeda borneensis</i>	49, 617	<i>Tydemanina expeditionis</i>	50, 621
<i>Halimeda cuneata</i>	627	<i>Udotea argentea</i>	49, 612
<i>Halimeda distorta</i>	618	<i>Udotea yamadae</i>	630
<i>Halimeda fragilis</i>	628	<i>Ulva limnetica</i>	46, 569
<i>Halimeda macroloba</i>	49, 618	<i>Ulva linza</i>	50, 625
<i>Halimeda micronesica</i>	619	<i>Umbraulva japonica</i>	50, 625
<i>Haloplegma duperreyi</i>	52, 648	<i>Valoniopsis pachynema</i>	616
<i>Halymenia dilatata</i>	656	<i>Vanvoorstia coccinea</i>	52, 649
<i>Helminthocladia australis</i>	52, 645	<i>Vanvoorstia pectabilis</i>	650
<i>Hildenbrandia rivularis</i>	47, 584	<i>Vaucheria longicaulis</i>	48, 603
<i>Hormophysa cuneiformis</i>	2, 51, 636	<i>Vaucheria vipera</i>	48, 604
<i>Kappaphycus striatus</i>	664	<i>Yamadaella caenomyce</i>	653
<i>Kumanoa gracillima</i>	576	<i>Yonagunia tenuifolia</i>	663
<i>Kumanoa iriomotensis</i>	577	<i>Zellera tawallina</i>	53, 667
<i>Kumanoa mahlacensis</i>	1, 46, 578		
<i>Laurencia marianensis</i>	650		

一和名索引一

<菌 類>

アイトケ	135	チャタマゴタケ	7, 117
アカエノツトノミタケ	96	ツチカブリ	126
アケボノホウロクタケ	121	テングタケ	2, 7, 115
アナタケモドキ	131	トゲオシロイタケ	121
アミガサタケ	5, 103	ナガエノウラベニイグチ	7, 119
アミヒカリタケ	8, 123	ナンバンウチワタケ	121
アラゲウスベニコップタケ	2, 5, 102	ナンバンオオカワウソタケ	107
アラゲカワウソタケ	107	ニクアツベニサラタケ	104
アワタケ	7, 120	ニセクロハツ	135
イリオモテクモタケ	93	ニワタケ	9, 136
イリオモテコロモクモタケ(イリオモテツブクモタケ)	100	ヌメリアシナガイグチ(アキノアシナガイグチ)	7, 119
イリオモテセミタケ	2, 5, 99	ネットタイヌメリタケ	9, 129
イリオモテツブハリタケ	98	ハエヤドリトガリツブタケ	93
イリオモテトルビエラクモタケ	100	ヒジリタケ	6, 105
イロガワリベニタケ	134	ヒメアワタケ	9, 138
ウスキタンポセミタケ	5, 98	ヒメウグイスイグチ	8, 120
ウスベニコップタケ	5, 101	ヒメサジタケ	137
ウスムラサキハツ	133	ヒメハルゼミタケ	94
ウスムラサキヒラタケ	128	ヒメヒガサヒトヨタケ	9, 130
エダウチタンポタケ	95	ヒロヒダタケ	8, 128
エダウチホコリタケモドキ	5, 102	フクロタケ	137
オウギタケ	8, 124	フチドリタマゴタケ	7, 116
オオシロアリタケ(シロアリシメジ(新称))	6, 112	ヘビキノコモドキ	7, 117
オオスルメタケ	124	ホオベニシロアシイグチ	9, 131
オオミダレアミタケ	6, 109	マユハキタケ	6, 104
オガサワライタチタケ	131	ムジナタケ	125
オガサワラハツタケ	126	ムニンキヤマタケ	125
オキナクサハツ	134	ムニンヒメチャヒラタケ	121
カエンオチバタケ	128	モミジタケ	111
カブラテングタケ	114	ヤエヤマキノコブタケ	108
カラハツモドキ	126	ヤマブキハツ	134
カワキタケ	129		
キアブラシメジ	121	<維管束植物>	
キアミアシイグチ	9, 132	アイアシ	336
キアミズキンタケ	106	アイノコホラシノブ	490
キイボカサタケ	8, 121	アオガネシダ	502
クロニクイロアナタケ	120	アオキ	227
クロハツ	133	アオコウガイゼキショウ	456
ケガワタケ	8, 127	アオゴウソ	348
コガネハナガサタケ	129	アオジクキヌラン	429
コゲイロカイガラタケ	124	アオシバ	330
コテングタケ	115	アオモジ	436
コンイロイッポンシメジ	8, 122	アオヤギソウ(アオヤギバナ)	296
コンルリキュウバンタケ	6, 112	アカバシスラン(タネガシマカイロラン、リュウキュウカイロラン)	384
サキシマヤドリバエタケ	96	アカハダコバンノキ	14, 197
サケバタケ	9, 132	アカヒゲガヤ	26, 331
サンコタケ	6, 110	アカミノヤブガラシ	442
シママンネンタケ	124	アキカラマツ	164
シロアリタケ	97	アキグミ	213
シロオニタケ	7, 118	アキザキナギラン(オトメナギラン)	32, 386
スッポンタケ	6, 110	アケビドコロ	25, 317
スマレニガイグチ	137	アコウネツタイラン	36, 426
ダイダイサルノコシカケ	108	アシカキ	333
タマゴタケ	6, 113	アシガタシダ	495
		アゼナルコスゲ(アゼナルコ)	460

アツイタ	524	ウスギキンエノコロ	458
アツバアサガオ	19, 255	ウスゲチョウジタデ	225
アツバウオトリギ	15, 210	ウスバイシカグマ	489
アツバクコ	21, 271	ウスバクジャク	40, 497
アマノホシクサ	324	ウスバシダモドキ	506
アマミスミレ	214	ウズラバムカゴサイシン(新称)	35, 418
アミシダ	510	ウチワツナギ	190
アラガタオオサンキライ(アラガタサンキライ)	25, 315	ウナズキテンツキ	362
アラゲタデ	11, 155	ウバメガシ	141
アリサンタマツリスゲ	28, 346	ウマノアシガタ	164
アリサンバライチゴ	177	ウマノミツバ	229
アリサンムヨウラン(アノマラン、ヨシヒサラン)	32, 384	ウミジグサ(ニラウミジグサ)	303
アワゴケ	263	ウミショウブ	298
アンペラ	364	ウラジロガシ	10, 142
アンペライ(ネビキグサ)	365	ウリカワ	296
イエジマチャセンシダ	500	ウンスケモドキ	457
イグサ(イ、トウシンソウ)	320	エクボサイシン(エクボカンアオイ)	168
イシガキイトテンツキ(ハリテンツキ)	362	エダウチタヌキマメ(ダエンタヌキマメ)	13, 181
イシガキカラスウリ	16, 218	エダウチヤガラ	394
イシガキキヌラン	430	エナシシソクサ	21, 273
イシガキスミレ	216	エノキフジ	194
イシガキソウ	24, 310	エンレイショウキラン	31, 374
イシモチソウ	438	オオアゼテンツキ	359
イズセンリョウ	236	オオイワヒメワラビ	487
イゼナガヤ	26, 329	オオウミヒルモ	299
イソノギク	23, 288	オオオサラン(ホザキオサラン)	392
イソマツ(種内分類群を含む)	238	オオカゲロウラン(テリハカゲロウラン)	34, 408
イトクズモ	306	オオガヤツリ(オオハナビガヤツリ)	464
イトスナヅル	11, 160	オオキヌラン(センカクキヌラン)	37, 431
イトトリゲモ	24, 307	オオギミシダ	40, 503
イトハナビテンツキ	460	オオギミラン(イナバラ)	31, 376
イトモ	305	オオクサアジサイ	13, 173
イヌイノモトソウ	489	オオサンショウソウ	10, 149
イヌカタヒバ	475	オオシロショウジョウバカマ	25, 312
イヌコウジュ	267	オオスズムシラン	385
イヌソヨゴ	440	オオソナレムグラ	19, 250
イヌタヌキモ	282	オオタニワタリ	496
イヌドクサ	38, 476	オオツヅラフジ	165
イヌノハナヒゲ	367	オオナンバンギセル	450
イヌフトイ	370	オオニンジンボク	20, 263
イネガヤ	27, 335	オオヌカキビ	335
イバラモ	308	オオバケアサガオ	255
イブダケキノボリシダ(ノコギリキノボリシダ)	41, 512	オオバチドメ	445
イハヤヒゲクサ	30, 368	オオバハマアサガオ	256
イモネヤガラ	395	オオハマオモト	455
イラブナスビ	21, 272	オオハリイ	355
イリオモテガヤ	26, 328	オオハンゲ	28, 342
イリオモテクマタケラン	30, 373	オオホウキガヤツリ	352
イリオモテトンボソウ	36, 422	オオホシクサ	324
イリオモテムヨウラン	423	オオマツバシバ	327
イリオモテラン(ニューメンラン)	36, 426	オオミズオオバコ(ミズオオバコ)	24, 302
イワガネ	434	オカヒジキ	157
イワガネソウ	39, 492	オキナワアツイタ	503
イワヒトデ	517	オキナワイヌシカクイ(リュウキュウハリイ)	466
イワヒバ	475	オキナワウラジロイチゴ(ホザキイチゴ)	178
インドヒモカズラ	11, 158	オキナワギク	288
ウエマツソウ	311	オキナワコクモウクジャク	515
ウスイロホウビシダ	501	オキナワスミレ	217

オキナワセッコク	2, 32, 388	キジョラン	247
オキナワチドリ	375	キヌラン(ホソバラン)(狭義)	37, 432
オキナワツゲ	204	キバナシスラン	31, 376
オキナワテンナンショウ	2, 28, 341	キバナノセッコク	389
オキナワハイネズ	141	キバナノヒメユリ(キバナスゲユリ)	25, 313
オキナワヒメウツギ	174	キランソウ(テリハキランソウ)	265
オキナワヒメナキリ	350	キリシマジャクジョウ	455
オキナワヒメラン	415	キンミズヒキ	175
オキナワヒヨドリジョウゴ(ムラサキヒヨドリジョウゴ)	21, 271	クサミズキ	206
オキナワホシクサ	325	クシノハシダ	511
オキナワマツバボタン	11, 155	クスクスヨウラクラン(アリサンヨウラクラン)	418
オキナワミゾイチゴツナギ	336	クスクスラン	379
オキナワムヨウラン	411	クスドイゲ	213
オキナワヤブムラサキ	260	クニガミクロウメモドキ	207
オキナワヤマコウバシ(オキナワコウバシ)	11, 161	クニガミサンショウヅル	146
オギノツメ	277	クニガミシスラン	404
オグルマ	452	クニガミトンボソウ(ソノハラトンボ)	36, 421
オサラン	393	クニガミヒサカキ	13, 171
オトギリマオ	433	クメジマツツジ	232
オトメシダ	502	クモラン	424
オナガエビネ(オキナワエビネ、リュウキュウエビネ)	383	クラルオドリコソウ	268
オナガサイシン(カツウダケカンアオイ)	12, 168	クリハラ	521
オニクグ	29, 353	クルマシダ	503
オニシバ	338	クロタマガヤツリ	363
オニテンツキ	468	クロボウモドキ	11, 158
オニトウゲシバ	472	クロホシクサ	456
オモトソウ	25, 310	クロミノシンジュガヤ	30, 373
オモロカンアオイ	167	クロムヨウラン(ムラサキムヨウラン)	410
オリヅルスミレ	216	クワレシダ	513
カガシラ(ヒメシンジュガヤ)	29, 355	ケイタオミズ(アリサンサンショウソウ)	148
カギテンツキ	363	ケウリクサ	449
カキバチシャノキ	257	ケサヤバナ	20, 266
カキラン	391	ゲジゲジシダ	511
ガクタヌキマメ	180	ケシンジュガヤ	372
カクチョウラン(カクラン)	420	ケスナヅル	159
カゲロウラン	430	ケナシイヌゴマ(リュウキュウイヌゴマ)	21, 269
カゴメラン	402	ケナシサダソウ	166
カザリシダ	517	ケナシツルモウリンカ	248
カシノキラン	396	ケナシハイチゴザサ	331
カツウダケエビネ	381	ケミズキンバイ	224
カミガモシダ	499	ケラマツツジ	233
カヤツリマツバイ	358	コアマモ	307
カラタチバナ	235	コウガイゼキショウ(ヒラコウガイゼキショウ、ヒロハノコモチゼキショウ)	321
ガランピネムチャ(リュウキュウカワラケツメイ)	13, 179	コウザキシダ	501
カレンコウアミシダ	41, 508	コウシュンウマノズクサ	12, 167
カワツルモ	24, 306	コウシュンカズラ	14, 202
カワラナデシコ	11, 156	コウシュンシダ	488
カワリバアサガオ	447	コウシュンシスラン	31, 377
カンサイタンポポ	454	コウシュンスゲ	354
カンザシワラビ	39, 480	コウシュンモダマ	183
ガンゼキラン	36, 419	ゴウソ	463
カンダヒメラン	35, 414	コウトウウラジロマオ	434
カントラノオ(ハマトラノオ)	275	コウトウシュウカイドウ	218
カンラン	32, 387	コウトウシラン	423
キイレツチトリモチ	152	コウトウヒスイラン	427
キエビネ	469	コウボウシバ	349
キクバイズハハコ	290	コウボウムギ	461
キクモバホラゴケ	481	コウラボシ	519

コオニシバ	339	シナマンリョウ(シナヤブコウジ、シナタチバナ)	17, 234
コカゲトンボ(新称)	35, 419	シマアケボノソウ	18, 244
コカゲラン	33, 389	シマイヌザンショウ	201
コクラン	412	シマイワウチワ(シマイワカガミ、ランダイイワウメ)	17, 230
コケカタヒバ	474	シマシュスラン(オオシュスラン)	405
コケセンボンギク	24, 294	シマジリスミレ	16, 215
コケタンポポ	24, 295	シマスナビキソウ(タイワンルリソウ)	257
コケハイホラゴケ(ニセアミホラゴケ)	484	シマソケイ	19, 246
コササキビ	459	シマタキミシダ	40, 492
コショウジョウバカマ(ヒメショウジョウバカマ、シマショウジョウバカマ)	25, 312	シマバラソウ(ヤンバルミヅハコベ)	16, 217
コショウノキ	15, 212	シナムカデシダ	42, 523
コスブタ(スブタ)	297	ジャコウキヌラン(ジャコウシュスラン)	37, 432
コチョウインゲン	193	ジャニンジン	172
コツブチゴザサ	458	シュスラン	404
コナミキ	21, 269	ジュンサイ	165
コニシハイノキ	18, 240	ジョウロウラン	33, 390
コハナカモノハシ	332	シラキ	198
コバナチケイラン	37, 413	シラスゲ	345
コバノアカテツ	239	シロシャクジョウ	318
コバノウシノシッペイ	458	シンチクヒメハギ	202
コバノヒルムシロ(トゲミズヒキモ)	454	ジンヤクラン	378
コバノボタンヅル	436	スイシャホシクサ	26, 326
コバノミヤマノボタン	16, 222	スキヤクジャク	491
ゴバンノアシ	16, 221	スズサイコ	248
コフジウツギ(ウラジロフジウツギ)	448	スズメノハコベ	274
コブラン	478	スズメノヤリ	322
ゴマクサ	273	スナジマメ	438
コミダケシダ	504	スナハマスゲ	354
ゴムカズラ	18, 246	セイシカ	17, 232
コメナモミ	453	セイトカイワヒメワラビ(シマイワヒメワラビ)	487
コモチナナバケシダ	507	セイトカハリイ	465
コモロコシガヤ	27, 337	センカクオトギリ	1, 172
コヤブランモドキ	314	センカクカンアオイ(センカクアオイ)	170
コンジキヤガラ	398	センカクツツジ	234
サイヨウシャジン	284	センカクトロロアオイ	212
サキシマエノキ	143	センカクハマサジ	237
サキシマスケロクラン	34, 409	ゼンマイ	479
サキシマツツジ	231	ソロハギ	185
サキシマハブカズラ	28, 343	ダイサギソウ	34, 405
サキシマヒサカキ	171	タイトウクグ	464
サキシマホラゴケ	482	ダイトウサクラタデ	10, 154
サクヤアカササゲ	193	ダイトウシロダモ	12, 162
サコスゲ	351	ダイトウセイシボク	196
ササキカズラ	14, 201	ダイトウワダン	2, 24, 291
ササバラン	35, 412	タイワンアオイラン	374
ザルゾコミョウガ	26, 323	タイワンアオネカズラ(シマアオネカズラ)	521
サワオグルマ	294	タイワンアサマツゲ	205
サワヒヨドリ	292	タイワンイヌビエ	457
サンカクイ	370	タイワンウラジロイチゴ	177
サンカクヅル	442	タイワンエビネ	2, 32, 382
サンショウソウ	148	タイワンカンスゲ	347
シオクグ	351	タイワンキジョラン(イリオモテキジョラン)	446
シオニラ(ボウバアマモ)	304	タイワンクリハラン	518
シカクイ	466	タイワンシシラン	22, 279
シコウラン	31, 380	タイワンショウキラン	31, 375
シシラン	493	タイワンチトセカズラ	243
シソノミグサ	446	タイワンツクバネウツギ	23, 283
シナノキンブ(オオクリハラン)	519	タイワンハシゴシダ	41, 510

タイワンハマサジ	238	トゲイボタ	18, 241
タイワンヒエスゲ	462	トゲウミヒルモ	299
タイワンヒデリコ	361	トゲミノイヌチシャ	19, 256
タイワンビロードシダ	42, 522	トサカメオトラン	400
タイワンフシノキ(タイワンヌルデ)	440	トチカガミ	301
タイワンホウビシダ	40, 496	トックリスゲ	29, 349
タイワンホトギス	25, 316	ドナンコバンノキ	198
タイワンヤマツツジ(シナヤマツツジ)	17, 233	トモエバテンツキ	29, 360
タイワンヤマモガシ	435	トラノオシダ	498
タウコギ	289	トラノハナヒゲ	366
タカウラボシ(ミズカザリシダ)	520	トリゲモ	309
タカオオオスズムシラン	386	ナガバアサガオ	254
タカオガヤツリ	465	ナガバアリノトウグサ(ホソバアリノトウグサ)	16, 225
タカクマソウ	311	ナガバウスバシダ(サキミウスバシダ)	41, 507
タカサゴアザミ	290	ナガバコバンモチ	209
タカサゴキジノオ	479	ナガバハグマ	286
タカサゴサギソウ	406	ナガボフトイ(ナンゴクフトイ)	371
タカサゴソウ	452	ナガミカズラ	278
タカサゴヤガラ	33, 395	ナギラン	387
タカツラン	396	ナゴラン	36, 422
タコガタサギソウ(ヒュウガトンボ、ヒメトンボ)	469	ナタオレノキ	242
タシロマメ(タイハイヨウテツボク、シロヨナ)	14, 188	ナツノウナギツカミ	153
タシロラン	391	ナハキハギ	181
タチコウガイゼキショウ	321	ナリヤラン	31, 378
タチバナ	199	ナンカクラン	470
タチミゾカクシ(アブノメミゾカクシ)	2, 23, 285	ナンゴクヤツシロラン	33, 399
タデハギ	192	ナンバンカゴメラン(ナンバンカモメラン)	35, 414
タヌキアヤメ	26, 320	ナンバンキンギンソウ	402
タヌキシダ	505	ナンバンホラゴケ(シヤムオニホラゴケ)	482
タネガシマムヨウラン	377	ナンバンリソウ	259
タマザキエビネ(ササバキエビネ)	380	ニオイラン	37, 407
タマハリイ	357	ニオウヤブマオ	145
チクシテンツキ	467	ニコゲルリミノキ	19, 251
チケイラン	34, 411	ニセシロヤマシダ	514
チャイロテンツキ	361	ニツパヤシ	27, 339
チャガヤツリ	352	ニンドウバノヤドリギ	10, 150
チャボチチミザサ	334	ヌカボ	456
ツクシテンツキ	359	ヌスピトハギ	182
ツタ	209	ヌルデ	203
ツツガタヤツシロラン	399	ネバライズハハコ	291
ツノギリソウ	22, 279	ノアズキ(ヒメクズ)	183
ツボミヤツシロラン	397	ノグサ	30, 367
ツユクサ	322	ノコギリシダ	515
ツユクサシュスラン	401	ノブドウ	441
ツルウリクサ	276	バイケイラン(チクセツラン)	32, 385
ツルカタヒバ	38, 473	ハイチゴザサ	332
ツルキジノオ	41, 504	ハガクレナガミラン	425
ツルマンリョウ	236	ハカマウラボシ	42, 518
ツルラン	383	ハシカグサ	252
テツオサギソウ(ナガバサギソウ)	34, 407	ハテルマカズラ(コンペイトウヅルを含む)	15, 211
テリハモモタマナ	224	ハナコミカンボク	197
テングノハナ	12, 162	ハナシテンツキ	29, 360
デンジソウ	525	ハナシンボウギ	200
テンノウメ	176	ハマウツボ	22, 281
トカラアジサイ	175	ハマエンドウ	14, 189
トキワススキ	334	ハマクサギ	261
トキワトラノオ	40, 500	ハマジンチョウ	22, 282
トクサイ	357	ハマツメクサ	157

ハマナツメ	441	ヒンジガヤツリ	30, 365
ハマネナシカズラ	254	フウセンアカメガシワ	443
ハマヤブガラシ	15, 208	フウラン	35, 416
ハリイ	356	フサシダ	42, 481
ハリザクロ(ハリクチナシ)	447	フサスゲ(シラホスゲ)	462
ハルザキヤツシロラン(ヤンバルヤツシロランを含む)	398	フユザンショウ	439
ハンゲショウ	166	フユノハナワラビ	477
ハンコクシダ	514	ヘツカニガキ	253
ヒキヨモギ	275	ポウカズラ	38, 471
ヒゲナガキンギンソウ	403	ポウコツルマメ	13, 187
ヒジハリノキ(シナミサオノキ)	19, 252	ホウサイラン	388
ビトウクグ	463	ホウザンスゲ	29, 347
ヒトタバメヒシバ	329	ホウライアオカズラ	445
ヒトツバマメヅタ	522	ホウライイツツラフジ	437
ヒナカンアオイ	12, 169	ホウライハナワラビ	38, 478
ヒナノシヤクジョウ	318	ホウライムラサキ	20, 260
ヒメウシノシッペイ	459	ポウラン(タカサゴポウランを含む)	413
ヒメウマノミツバ	230	ホコザキノコギリシダ	516
ヒメウミヒルモ	300	ホザキカシグサ(マルバキカシグサ)	444
ヒメウラジロ	492	ホザキザクラ	17, 237
ヒメウラボシ	42, 523	ホザキサルノオ(ウスバサルノオ)	439
ヒメカクラン	36, 420	ホザキノフサモ(キンギョモ)	226
ヒメカモノハシ	27, 332	ホザキヒメラン	415
ヒメキセワタ	2, 21, 266	ホザキミミカキグサ	281
ヒメクチバシグサ	449	ホシクサ	26, 325
ヒメクロウメモドキ	15, 207	ホシザキシヤクジョウ	26, 319
ヒメサギゴケ	22, 274	ホソウミヒルモ	301
ヒメシシラン	40, 493	ホソバウミジグサ	303
ヒメシロアサザ	18, 245	ホソバコケシノブ	485
ヒメスイカズラ	23, 284	ホソバシケチシダ	524
ヒメスズメガヤ	457	ホソバシンジュガヤ	30, 371
ヒメタニワタリ	2, 40, 497	ホソバツユクサ	323
ヒメチヂレコケシノブ	39, 484	ホソバツルマメ	186
ヒメツルアダン	2, 28, 344	ホソバノウナギツカミ	154
ヒメトケンラン	424	ホソバノキミズ(オオキミズ)	433
ヒメネズミノオ	338	ホソバフジボグサ	14, 192
ヒメノボタン	222	ホソバムラサキ	20, 261
ヒメハブカズラ	28, 344	ホソフデラン	33, 394
ヒメハマナデシコ	156	ホタルイ	368
ヒメヒラテンツキ	359	ポロジノニシキソウ	14, 195
ヒメホウキガヤツリ	353	ホンゴウソウ	309
ヒメホタルイ	369	マキノシダ	40, 499
ヒメホラゴケ	483	マシカクイ	358
ヒメホングウシダ(コバノエダウチホングウシダ)	39, 489	マツザカシダ	495
ヒメミクリ	345	マツバウミジグサ	302
ヒメミゾシダ	509	マツバコケシダ	484
ヒメミソハギ	219	マツムラソウ	2, 22, 280
ヒメヤブラン	314	マネキシンジュガヤ	30, 372
ヒメヨウラクヒバ	38, 472	マメゴケシダ	486
ヒルギダマシ	259	マメヅタカズラ	247
ヒルギモドキ	16, 223	マメヅタラン	380
ヒレザンショウ	200	マメホラゴケ	483
ビロードキビ	327	マヤブシキ(ハマザクロ)	220
ビロードテンツキ	467	マルバアサガオガラクサ	254
ビロードメヒシバ	328	マルバコケシダ	486
ヒロハケニオイグサ	19, 250	マルバニツケイ(コウチニツケイ)	161
ヒロハノカラン(ダルマエビネ)	468	マルバノホロシ	448
ヒロハミヤマノコギリシダ(タカサゴノコギリシダ)	513	マルバハタケムシロ	23, 285

マルバミゾカクシ	23, 286	ヤナギニガナ(アツバニガナ)	293
マルミスブタ(オオスブタ)	297	ヤナギバモクセイ	242
ミカワタヌキモ(イトタヌキモ)	281	ヤブコウジ	235
ミクリガヤ	366	ヤブタバコ	451
ミズガンピ	219	ヤブミョウガラン	34, 401
ミズキカシグサ	220	ヤマアイ	196
ミズハコベ	264	ヤマコンニャク	27, 341
ミズヒキ	10, 153	ヤマトウバナ	265
ミズヒキモ	304	ヤマヌカボ	326
ミズビワソウ(ヤエヤマイワタバコ)	22, 278	ヤマヒヨドリバナ(ヤマヒヨドリ)	451
ミズマツバ	443	ヤリハリイ	466
ミスミイ	356	ヤワラケガキ	17, 240
ミゾシダ	41, 509	ヤンバルフモトシダ	488
ミソボシラン(トミヤマフタオラン)	37, 429	ユウレイラン	33, 390
ミツデヘラシダ	42, 520	ユキミソウ(ミゾコウジュ)	268
ミツバウコギ	17, 226	ユズノハカズラ	28, 343
ミドリシヤクジョウ	318	ヨウラクヒバ	471
ミミガタシダ	512	ヨウラクラン	470
ミミモチシダ	494	ヨツバリマツモ	437
ミヤココケリンドウ	1, 18, 244	ヨナグニイソノギク	24, 289
ミヤコジマソウ(ヒロハサギゴケ)	22, 277	ヨナクニカモメヅル	19, 249
ミヤコジマツルマメ	185	ヨナクニトキホコリ	147
ミヤコジマハナワラビ	1, 38, 477	ヨナグニシラン	315
ミヤマササガヤ	333	ヨメナ	453
ミヤマハシカンボク	444	ラセンソウ	210
ミヤマミズ	149	ラハオシダ	498
ムカゴサイシン(ムカゴサイシンモドキを含む)	417	ランダイミズ	10, 146
ムクイヌビワ	144	リュウキュウアセビ	231
ムクノキ	143	リュウキュウキジノオ	39, 480
ムニンハマウド	228	リュウキュウキンモウワラビ	516
ムラサキベニシダ	506	リュウキュウコケシノブ	485
モクビャッコウ	292	リュウキュウサギソウ(ナメラサギソウ)	406
モンドラカンアオイ	169	リュウキュウシダ	41, 505
モミジチドメ(タカサゴノチドメ)	229	リュウキュウスズカケ	276
ヤエガヤ	330	リュウキュウセッコク	392
ヤエヤマアオキ	251	リュウキュウダイゲキ	195
ヤエヤマカンアオイ	12, 170	リュウキュウタチスゲ	348
ヤエヤマクワズイモ	459	リュウキュウチシャノキ	20, 258
ヤエヤマシタン	191	リュウキュウツチトリモチ	10, 150
ヤエヤマジュウニヒトエ(ヤエヤマキランソウ)	265	リュウキュウツルマサキ	204
ヤエヤマスケロクラン	409	リュウキュウヒエスゲ	29, 346
ヤエヤマズコウジュ	21, 270	リュウキュウヒキノカサ	12, 163
ヤエヤマタヌキマメ	180	リュウキュウヒメハギ	15, 203
ヤエヤマネムノキ	13, 178	リュウキュウヒモラン	473
ヤエヤマハシカグサ	249	リュウキュウベンケイ	173
ヤエヤマハマゴウ	20, 262	リュウキュウホウライカズラ	243
ヤエヤマハマナツメ	15, 206	リュウキュウミヤマトベラ(台湾ミヤマトベラ)	13, 184
ヤエヤマヒイラギ(イリオモテヒイラギ)	18, 241	リュウノヒゲモ	305
ヤエヤマヒトツボクロ(アオイボクロ、ヤエヤマクマガイソウ)	416	リンボク	176
ヤエヤマヒメウツギ	13, 174	ルゾンハマクサギ	20, 262
ヤエヤマヤシ	27, 340	ルゾンヤマノイモ	25, 317
ヤエヤマヤマボウシ	227	ルリシヤクジョウ	319
ヤエヤマラセイタソウ	10, 145	レンギョウエビネ	382
ヤクシマアカシユスラン	408	ワタヨモギ	23, 287
ヤクシマスミレ	214	ワニグチモダマ	189
ヤクシマネツタイラン	427	ワラビツナギ	39, 490
ヤクシマヒメアリドオシラン	428		
ヤナギスブタ	297	< 藓 苔 類 >	

アブラハイゴケ	564	ヘビゴケ	561
アマカワヒメゴヘイゴケ	554	ホウライハゴロモゴケ	44, 559
アマノウロコゴケ	540	マムシゴケ	534
イサワゴケ	545	マメハネゴケ(ヒメハネゴケ)	537
イチョウウキゴケ(イチョウウキクサ、イチョウモ)	538	マルバサンカクゴケ	542
イヌイムシトリゴケ	45, 556	マルバツガゴケ	531
イボイボカタシロゴケ	561	ミジンコゴケ	45, 552
イボエシノブゴケ	563	ミナミツガゴケ	562
イボミスジヤバネゴケ	532	ミミヒラゴケ	535
イリオモテウロコゼニゴケ	2, 45, 539	ムカシヤバネゴケ	565
イリオモテヤスデゴケ	554	モミノキゴケ	537
ウキゴケ(カズノゴケ)	538	ヤエヤマサンカクゴケ	567
エビスゴケ	536	ヤエヤマスギバゴケ	45, 539
オオシマヨウジョウゴケ	555	ヤクシマアミゴケ	530
オガサワラキブリツノゴケ	45, 543	ヤマトケクサリゴケ	556
オキナワサイハイゴケ	45, 560	ヤワラゼニゴケ	45, 551
オキナワヤスデゴケ	566	ユーレンキララゴケ	566
カクレゴケ	44, 547	ランヨウイボゴケ	532
カタナワゴケ	44, 551	リュウキュウイボゴケ	550
キジノオゴケ	548	リュウキュウカギホソエゴケ	534
キダチゴケ	547	リュウキュウシゲリゴケ	555
キヤスデゴケ	45, 553	(和名無し)	564
キララヨウジョウゴケ	542	<藻 類>	
クロコゴケ	528	アオカワモズク	46, 582
クロジクツガゴケ	562	アケボノモズク	52, 646
ケミドリゼニゴケ	557	アツパノリ	663
コイボホウオウゴケ	546	アマミノクロキズタ	617
コバナイクビゴケ	528	アミダネフラスコモ(新称)	597
ゴマダラクサリゴケ	543	アメリカシャジクモ	47, 588
サオヒメゴケ	44, 549	アヤギヌ	48, 599
サガリヤスデゴケ	541	イソモッカ	52, 654
サケバキハネゴケ	553	イチイズタ	49, 611
シマフデノホゴケ	533	イトゲノマユハキ	50, 620
ジャバシラガゴケ	529	イトシャジクモ	1, 47, 586
ジャバホウオウゴケ	545	イバラオオイシソウ	572
シラガゴケモドキ	544	イリオモテカワモズク	577
セイナンヒラゴケ	536	インドオオイシソウ	46, 573
タイワンケゴケ	563	ウスガサネ	49, 613
タカサゴハイヒモゴケ	531	ウスバアオノリ	50, 625
タガワヤバネゴケ	552	ウスバハゴロモ	630
ツメクサリゴケ	557	ウミトラノオ	51, 631
テララゴケ	45, 540	ウミフシナシミドロ	48, 603
トガリバクラマゴケモドキ	565	ウミボッス	50, 630
トゲバイバラゴケ	562	ウムトウチュラノリ	46, 569
トゲバウロコゴケ	541	エツキアヤニシキ	648
トサノタスキゴケ	549	エツキヒビロード	53, 662
トサヒラゴケ	44, 559	エビヤドリモ	569
ニセハブタエゴケ	544	オウシャジクモ	47, 585
ハネエビスゴケ	535	オオイシソウ	46, 581
ヒカゲノカズラモドキ	44, 550	オオイシソウモドキ	46, 571
ヒメハゴロモゴケ	44, 558	オオキリンサイ	664
ヒメハシボソゴケ	533	オオネダシグサ	614
ヒメハミズゴケ	44, 558	オオハゴロモ	49, 612
フガゴケ	2, 44, 546	オカムラキリンサイ	664
フチドリコゴケ	530	オキチモズク	2, 46, 580
フチナシツガゴケ	44, 548	オゴノリ	53, 666
フトスジカタシロゴケ	529		

カサノリ	50, 624	ナンバンガラガラモドキ	661
カタオゴノリ	665	ニセハウチワ	50, 628
カタミズタマ	623	ニセヒメイチヨウ	629
カタメンキリンサイ	53, 656	ヌルハダ	646
カマクビウミフシナシミドロ(新称)	48, 604	ハイコナハダ	653
カモガシラノリ	52, 652	ハダシジャジクモ	589
カヤモノリ	642	ハナヤナギ	643
カラクサモク	51, 634	ハネモモドキ	622
カラゴロモ	52, 649	ヒジキ	51, 633
キザミズタ	49, 610	ヒナイワズタ	609
キシウモク	51, 640	ヒナマユハキモ	50, 621
キリンサイ	53, 658	ヒメアヤギヌ	601
クサジャジクモ	47, 594	ヒメイチヨウモドキ	629
クダネダシグサ	50, 627	ヒメカラゴロモ	650
クビレミドロ	48, 604	ヒメフカミドリシオグサ	49, 608
ケイワズタ	48, 606	ヒメミドリゲ	614
ケコナハダ	644	ヒメヤハズ	52, 640
ケナガシジャジクモ	587	ビャクシンキリンサイ	657
ケブカフデモ	48, 606	ピリヒバ	52, 654
ゲンカイイトジャジクモ	596	ヒロハアヤギヌ	48, 598
コイトジャジクモ	588	ヒロハサボテングサ	49, 618
コテングノハウチワ	49, 620	フイリグサ	656
コナハダモドキ	660	フクレソゾ	650
コバノサボテングサ	619	フクロフノリ	53, 655
コバモク	51, 635	フササボテングサ	49, 617
コフラスコモ	597	フシナシジャジクモ	595
ササバアヤギヌ	601	ベニゴウシ	52, 648
シオカワモッカ	53, 655	ベニハウチワ	53, 667
シマチスジノリ	46, 579	ベニモズク	52, 645
シジャジクモ	47, 594	ホソアヤギヌ	48, 600
ジュズフサノリ	52, 652	ホソエガサ	48, 607
ジュズフサフラスコモ	592	ホソバノガラガラモドキ	662
スズカケモ	50, 621	ホソバロニア	616
セイヨウアヤギヌ	48, 599	マガタマモ	49, 615
セツカイシジャジクモ	596	マジリモク	51, 638
ソリハサボテングサ	618	ミナイトカワモズク	576
タカサゴソゾ	651	ミナミクロカワモズク	1, 46, 578
タニコケモドキ	48, 602	ミナミシオグサ	626
タンスイベニマダラ	47, 584	ミナミホソカワモズク	574
ダンツウシオグサ	626	ミルフラスコモ	591
タンポヤリ	49, 615	モサオゴノリ	53, 658
チャイロカワモズク	2, 47, 583	モズク	52, 641
チャボフラスコモ	590	モツレチヨウチン	47, 598
チュラシマモク	51, 639	モロサボテングサ	628
チヨウチンミドロ	46, 570	ヤエヤマカワモズク	46, 575
チリフラスコモ	47, 593	ヤツマタモク	643
チンバシジャジクモ	596	ヤバネモク	2, 51, 636
ツクシホウズキ	53, 660	ヤブレグサ	50, 625
ツクシモク	637	ヨナグニソウ	663
ツナサボテングサ	627	リュウキュウウミウチワ	641
テングノハウチワ	612	リュウキュウオゴノリ	53, 659
トガリフラスコモ	47, 591	リュウキュウズタ	50, 627
トゲキリンサイ	647		
トゲミモク	51, 632		
トサカノリ	664		
ナガミズタマ	623		
ナガミモク	51, 638		
ナンカイオゴノリ	666		

改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版
(菌類編・植物編)

— レッドデータおきなわ —

2018年3月

編集・発行 沖縄県環境部自然保護課
郵便番号 〒900-8570
住 所 沖縄県那覇市泉崎1丁目2番2号
電話番号 098-866-2243

Threatened Wildlife in Okinawa, Third Edition (Fungi and Plants)

— Red Data Okinawa —

March, 2018

Edited and Published by Nature Conservation Division
Department of Environmental Affairs
Okinawa Prefectural Government
1-2-2 Izumizaki, Naha City, Okinawa
900-8570, Japan
TEL No. 098-866-2243

作成事務局(業務請負) 株式会社 沖縄環境保全研究所
〒904-2234 沖縄県うるま市字州崎7-11 (中城湾港トロピカルテクノパーク内) TEL098-934-7020
印刷・製本 文進印刷株式会社
〒901-0416 沖縄県島尻郡八重瀬町字宜次706-4 TEL098-996-3356

この冊子はエコマーク認定の再生紙を使用しています。

RED DATA OKINAWA

